

日本美術年鑑

昭和十五年版

美術研究所

序

未曾有の世界變動の時期に際會し、わが國も世界史的な使命をおびてたつた。國家の總力をあげて、新世界建設の雄大な理想のためにたゞ、かひつゝある現狀は、まことに感奮を禁じえぬところであり、文化的活動の部門にたづさはるもの責務また、すこぶる重大なものであることをおもふのである。

この非常の世局にあたり、わが日本が、かつてない大規模な戰爭を長期にわたつて繼續しながら、國民生活の上には當然なある程度の制限が加へられるとはいへ、一般の文化的活動はいさゝかの澁滯も停頓もなく、美術界の活動また、いよゝゝ旺盛のさまを示してゐることは、何を意味するものであらうか。——何よりも吾人はこのうちに、ゆるがぬわが國力の偉大さを知るのであるが、その動向を觀察してまた、今日のわが國がもはや過去の島國日本ではなく、世界的な大國家として、民族的自覺のもとに、いよゝゝ興隆發展をとげようとしつゝあるすがたを見いだして、無限の愉快さを感じるのである。

由來美術は、高尚な精神的文化の所産として、重んぜられてはきたが、一面においては、實生活とは縁のうすい奢侈的性質をおびるものと見られ、ややもすれば、有閑者の玩弄物視される傾きがないとはいへなかつた。少くとも國家非常時に際しては、まづ休止しても差支のない不急事項の中に分類されてゐたともいへるであらう。事變開始當初に示された美術界の一抹の不安は、そのことを語つてゐる。しかしその後の經驗は、事實がこれに反することを證明しつゝある。戰時に入つて、美術は一層活動の範圍をひろくされた。不滅の戰功を記録すべき戰爭畫の製作に、國民的記念碑の建設に、雄渾な民族的藝術の創造がもとめられてゐる。一層卑近な美術の用途乃至は社會一般の美術の要求は一々あげてかぞへがたい實情である。すべてのものが國家の大目的にそつて、積極的、飛躍的發展を要望されつゝある時代に、美術ひとりだけがこれに洩れてならぬことはいふまでもなく、今こそわが日本の美術が、新日本の藝術としてふさはしい創造と躍進とをとぐべき、時運に際會してゐるといはねばならぬ。

藝術に抑壓は不可能である。奨励もまた、方法宜しきかなはぬならばなさざるにしかぬ。わが美術を健全な發達にむかはしめようと希ふならば、作家の努力はもとより、爲政者も社會も、注意してそのよきものが育つべき環境をつくり、これによき糧をあたへなければならぬ。吾人のいさゝかの努力は、常にこの點に幾分の寄與をなすことを念願としてゐるのである。

美術研究所は、美術に關する調査研究を使命としてゐる。しかしそれはもとより、調査のための調査であつてはならない。古美術の調査研究も現代美術についてのそれも、すべてはわが國の文化をたかめ、藝術を進展させ、もつて國運の興隆に貢獻せんがためにほかならぬのである。本所はその意圖のもとに、前述のごとき觀點から、現代美術の動向に深甚の注意をおこたらず、たえず資料の蒐集と詳細な調査につとめてゐる。その結果を年ごとに記録輯成したものが日本美術年鑑で、これを世におくることによつて、幾分でも如上の目的に役だつことを希ふものである。

本年鑑は昭和十一年以降發行をつゞけ、こゝに上梓するものをもつて第五冊をかぞへることとなつた。その編纂は實は容易ではなく、これをもつて完全なものとは決して考へてゐないが、年鑑の使命として、あたふかぎり正確、公平な記録たらしめることを期した。もとより主觀的な價值判斷を除外しえない藝術作品をとり扱ふのであるから、ある程度執筆者の意見が加はつてゐることは諒とされたい。編纂及び執筆の擔當者としては、主として本所員和田新及び助手倉田平吉をしてこれに従事せしめ、また現代建築の項については囑託山田智三郎に分擔せしめたことを記しておく。

本年鑑の編纂にあたり、諸官廳、博物館美術館、學校、團體などをはじめ、作家、學者、その他公私諸方面から貴重な記録、資料などの供與をあふぎ幾多の援助をかたじけなくしたことは、感謝にたへぬところである。特に記すべきことは、古美術保存の項について、その行政當局である文部省宗教局が懇切な協力をあたへられたことである。保存行政に關する彙報、國寶修理に關する記録及び解説、並にそれらに關する寫真など、すべて本年鑑のために同局において執筆供與せられたものであり、他にえられぬ貴重な資料として本年鑑に光彩をそへるものである。こゝに記して深甚の謝意を表する次第である。

昭和十六年三月

美術研究所長 矢代幸雄

凡例

一、本年鑑はその内容を「本欄」、「挿圖」及び「附録」の三部に大別する。本欄は我が國美術界の全般につき、昭和十四年度、即ち同年一月から十二月に至る一年間に現はれた主なる出来事、製作又は發表された注意すべき作品、發表された文獻等を記録し、挿圖は右に添ふ作品の寫眞を主として掲げ、附録は便覧として例年掲載するものうち美術家團體一覽、定期刊行物一覽、美術商一覽、美術家及美術關係者名簿のほかは本年度はこれを省略して、たゞ行政、教育、觀覽等に關する官公施設の重要なもののみを便宜上輯録した。記事中「本年」とあるは昭和十四年を指すもの、月日のみを擧げて年を記さぬ場合亦同様である。

一、美術として本年鑑が取扱ふ範圍は、從來一般に行はれる狹義の解釋に従ひ、繪畫、彫刻、工藝及び建築に限ることとした。繪畫のうちで「日本畫」及び「洋畫」の區別は、嚴密には困難の場合もあり、又その稱呼も字義として好ましいものとは言へないが、便宜のため姑く一般の慣習に倣ふこととした。建築は用途に従つて種類も多く、殊に近年の傾向に在つては之を美術として取扱ふことに問題も多いが、茲では吾人の見地から注意をひくものの範圍に止めた。

一、人名を記す場合に敬稱は一切之を省いた。

一、本欄、現代美術の中美術展覽會の項には、明治、大正以後活動した作家の遺作展覧、回顧的展覽會、及び外國美術展覽會等に關しても、便宜上此に含めて取扱ふこ

ととした。

一、同、展覽會以外の作品については、その範圍を擴げるならば際限なきため、茲には多少とも公共的性質を有するもの、或は記念碑的意義を有するものに限ることとし、主なる作品少數のみを選んだ。

一、同、美術教育の欄に於ては、之に關する彙報的な記事若干を輯録するに止めた。普通教育における圖畫教育は、美術とは關係が深く、屢々美術教育とも呼ばれて混同されてゐるが、本年鑑では特殊な場合の外は之を取扱はず、専門の美術教育の範圍に止めることとした。

一、挿圖として掲載した作品の寫眞は、年度内に製作、若くは新作として發表されたものに限つた。その撰擇は、大體各分野における製作活動を代表せしむるを旨とし、必しも傑作のみを選出した譯ではない。古美術に關しては、年度内における修理、新發見の資料等に限る、その注意すべきものを輯めた。

一、附録は、昭和十四年十二月末日現在の記録たることを原則とするが、使用の便を図り、その後の消息をも例外的に記載、若くは之によつて訂正した部分もある。

一、本欄中、美術文獻目錄、並に附録中、美術家及美術關係者名簿については、夫々その項の初に凡例を記した。

目次

序 一

凡例 三

目次 四

挿圖目次 七

本欄

昭和十四年度美術界概観 一二

美術展覽會(月日順) 二三

一月 二三

新自然派展—漢口攻略從軍スケッチ展—商工省工藝指導所巡回展—柏舟社展—從軍畫家スケッチ展—伊藤笛堂新戰場畫展—天地會展—吉田博、佐々貴義雄從軍展—朱弦會展—栗原忠二遺作展—日本陶彫協會展—堂本印象近作展—長谷川春子個展—朱玄會展—五姓田芳柳水彩畫展—等

二月 二四

畫寶展—三越新進作家日本畫展—紙育萬博展示會—日本民藝館畫類展觀—白日會展—春台展—高木勇次個展—商工省工藝展—綵尚會展—紙育萬博展示會—伊藤慶之助個展—光風會展—海軍從軍畫展—井井會展—旺玄社展—等

三月 二八

青柳喜兵衛遺作展—今尾景年遺墨展—青丘會展—瀧澤邦行個展—水田竹園個展—大阪美術展—創工社展—聖戰從軍畫展—正宗得三郎個展—栗田九品庵展—小林孝行遺作展—東陶會展—太平洋畫會展—熊谷守一中川紀元二人展—名古屋美術聯盟展—新美術家協會展—獨立展—石井光楓從軍展—東郷青兒個展—青山義雄個展—春虹會展—産業美術展—佐伯祐三遺作展—瀧谷國四郎遺作展—徹青會展—京都工藝院展—東海四縣聯合輸出工藝展—院展同人展—主線

四月 三七

美術協會展—里見勝藏個展—上社會展—歷程試作展—鴉牛居新作展—蓮袖會展—青甲社展—詩歌題贊小品展—戊辰會展—等

五月 四八

東丘社展—昭和工藝美術展—煥土社展—東海美術展—全關西展—同人會展—國展—新興美術院展—東光會展—挿繪展—春の青龍社展—白朝會展—眞野紀太郎個展—倉田白羊遺作展—高間惣七個展—田邊至個展—紀元二千六百年奉讀展—フアシスト伊太利展—美之國社展—院友展—日本美術協會展—日本木彫會展—石井柏亭水墨展—山口蓬春個展—松坂屋日本畫展—落合朋風遺作展—奈知安太郎個展—朱葉會展—赤松鱗作還曆展—日本畫院展—春陽會展—北川民次個展—等

六月 五八

佐野八郎戰跡畫展—日本漆藝院展—構造社展—京都市美術展—大河内夜江人個展—大阪工藝振興展—現代美術展—日本壁畫會展—清水正太郎個展—大輪畫院春季展—福井謙三遺作展—松島畫坊展—九室會展—日本民藝館東北民藝展—六湖會展—九阜會展—從軍畫家作品展—水彩畫會展—新制作派展—春季二科展—中澤弘光、森脇忠油繪展—東京會日本畫展—内田巖個展—實在工藝展—讀畫會展—大阪高島屋日本畫展—古川北華個展—高島屋新作展—靜岡縣美術展—第一美術展—自由美術家展—綜合クロッキー展—繰卷會展—山川秀峯個展—海洋美術展—工人社展—ラゲ—ザ玉遺作展—八木岡春山個展—貿易局輸出工藝圖案展—造型版畫展—留加會展—等

七月 五八

燦木社展—珺々會展—新美術人協會展—早苗會展—伊藤慶個展—日本彫刻家協會展—日本陶藝展—朝鮮美術展—大日美術院展—二見利節個展—東郷青兒個展—兒玉畫藝展—濱田庄司個展—葦林社展—田崎早雲遺作展—三春會展—山本芳翠遺作展—中村大三郎畫藝展—森芳雄個展—文展第三部作家協會展—瀧野川彫塑研究所展—清光會展—白御會展—青松會展—石井柏亭個展—多聞洞展—和田英作個展—大阪女流畫家展—渡邊進個展—美術往來社日本畫展—

七 月
 一水會春季展—古城江關個展—小磯良平個展—正宗得三郎個展—田中佐一郎
 從軍展—宮尾光峯從軍展—河井寬次郎個展—東邦彫塑院展—南畫聯盟展—等
 六四

八 月
 中西利雄個展—上紋會展—大庭エツチングラス展—青樹社物故作家展—栗
 原忠二遺作展—尙美堂展—聖戰美術展—法隆寺上宮王院本尊厨子建立奉贊展
 —根津香猷個展—歷程美術展—獨立會員小品展—日本山岳畫協會展—柴田恕
 夫個展—花園萬舟戰線報告展—木下五郎從軍小品展—手島實油繪展—辻永個
 展—白閃社展—商工省工藝指導所試作展—蒼穹會展—等
 六八

九 月
 獨逸寄贈日本畫展—島津製作所マネキン展—日本醫家美術協會展—關東府縣
 聯合工藝展—白耳美國際人形展示會—大阪工藝振興展—等
 六九

十 月
 貿易局蒐集見本展示會—副峯畫藝展—聖戰從軍素描展—第三部會展—青龍社
 展—日本民藝館アイリツピン土俗工藝展—院展—二科會展—清水鍊徳個展—
 小松義雄個展—九夏會展—長井雲坪遺作展—明朗美術展—小川原脩個展—中
 谷泰、高木勇次二人展—近畿聯合工藝展—島雄健滿蒙寫生展—正宗得三郎個
 展—北海道美術展—北信輸出工藝品展—乾坤社展—大輪畫院展—岸浪百脚居
 個展—石川欽一郎水彩畫展—林俊衛個展—山口長男個展—朝倉彫塑藝展—都
 筑眞琴個展—坂井範一個展—黒門會展—齋藤長三個展—等
 七九

十一 月
 朱葉會展—互陽會展—中部日本陶器展—代用品工業振興展—石井柏亭個展—
 鈴木信太郎個展—棟方志功版畫展—乾坤社展—日本美術協會展—田邊至個展
 —梶田半古遺作展—京都市主催圖案展—貿易局工藝品輸出振興展—河合卯之
 助陶器展—船田、丸木個展—文展—福田惠一個展—セクシヨンドール展—太
 田三郎個展—三橋武顯中支戰跡展—橋本關雪聖戰記念畫展—小川芋鏡遺作カ
 ヲバ展—吉田白嶺彫刻展—白日莊新作展—獨立美術秋季展—臺灣美術展—泰
 西名畫展—等
 九〇

新日本洋畫協會展—山田樂全遺作展—兒玉希望個展—霜林會展—橫濱美術展
 —如月會展—全國商業美術教育協會展—東京會日本畫展—中村岳陵個展—同

目次

救國展—昭華會展—脇田和個展—石山太柏個展—丸山曉霞個展—松坂屋新作
 展—白聖會展—植松包美遺作展—奧村土牛、金島桂華新作展—梶宗樹北中支
 歷戰畫展—內野猛個展—山下新太郎個展—堂本印象宗教美術展—日本人形藝
 術作家協會展—日本人形社展—七絃會展—田口省吾個展—名古屋美術展—三
 宅克己個展—稻香畫藝展—若山爲三個展—佐伯祐三遺作展—中川一政扇面展
 —大潮會展—新制作派展—一水會展—畫室社日本畫展—川端龍子個展—新興
 美術協會展—青木繁遺作展—近藤浩一路個展—等
 九八

展覽會以外の作品
 十二月
 石川確治個展—新燈社展—日本彫金會展—小川芋鏡遺作展—文展京都陳列會
 —根本霞外個展—流球新作工藝展—和光會展—松島畫舫展—日本版畫協會展
 —新古典派展—特異兒童作品展—戸張孤雁遺作展—山村耕花個展—新興美術
 家協會展—岡田謙三個展—高島屋新作展—新構造社展—尙美堂展—中澤弘光
 個展—八爽會展—牧野克次個展—中山蘊個展—小島善太郎個展—等
 一〇五

美術界彙報(月日順)
 一〇九

物故作家及美術關係者
 一一八

美術行政
 一二四

美術教育
 一二五

美術講演・講義
 一二七

講演—各大學美學美術史講座
 一二七

古美術展覽會・展觀(月日順)
 一三二

一月
 室町時代江戸初期繪卷陳列—竹內四郎攝影山西雲巖・河南龍門石窟寫真展
 一三二

二月
 大同石佛拓本展觀—澁江清收藏歐人浮世繪研究文獻展—大阪市立美術館陳列
 特別陳列—讀賣新聞社豐太閣展—等
 一三五

三	月	山中商會東洋古美術展觀一等	一三七
四	月	後鳥羽天皇七百年記念拜展—螺鈿を中心とする髹漆展覽會—支那美術展—佐々木昌興蒐藏彰城百川作品展觀一等	一四〇
五	月	白鶴美術館春季展—大雅堂書本陳列—第四十四回考古學會總會展觀—長崎派寫生南宗畫展—浮世繪同好會主催慶長寛永風俗畫展一等	一四四
七	月	伯林日本古美術展記念展觀—京都帝國大學國史研究室創立三十五周年記念史料展—鎌倉江ノ島浮世繪名作展一等	一五二
十	月	海北友松展—瀬戸陶器特別陳列—日本美術協會第百九回展參考品展—大阪市立美術館第四回名寶展—日本諸學振興第一回藝術學會參考展觀—東京美術學校秋季特別展觀一等	一五七
十一	月	第五回朝鮮古美術展—高野山靈寶館秋季特別展觀—白鶴美術館秋期展—能衣裳展—阿部孝次郎所藏支那繪畫展觀一等	一六三
十二	月	陽明文庫創設記念展觀一等	一六七
		古美術關係彙報(月日順)	一七〇
		博物館・美術館新收品	一七五
		古美術保存	一七七
		保存關係彙報	一七七
		昭和十四年度國寶指定 附同所在變更 同所有者變更	一八〇
		國寶修理補助金交付額	一八五
		國寶建造物維持修理實施狀況	一八七
		重要美術品認定 附同資格消滅	一九二
		史蹟指定	二〇一
		朝鮮寶物及古蹟指定	二〇五

美術市場

東京、名古屋、京都、大阪各美術俱樂部賣立

昭和十四年度美術文獻目錄

凡例・目次	一二四
現代美術關係文獻	一二六
定期刊行物	一二六
單行圖書	二四八
古美術關係文獻	二五〇
定期刊行物	二五〇
單行圖書	二六四

挿圖

日本畫	一
洋畫	三〇
版畫・その他	六三
彫刻	六五
工藝	七九
建築	八七
古美術資料	九四
物語作家及美術關係者	一〇〇

附錄

國寶保存會—重要美術品等調査委員會—帝室技藝員—帝國藝術院—美術振興調査會—文部省美術展覽會—輸出工藝振興委員會—貿易局工藝品輸出振興展覽會—貿易局輸出工藝圖案展覽會—美術研究所—東京美術學校—東京高等工藝學校—京都高等工藝學校—京都市立繪畫專門學校—京都市立美術工藝學校—工藝指導所—陶磁器試驗所—附瀬戸試驗所—東京帝室博物館—恩賜京都博物館—大禮記念京都美術館—大阪市立美術館—奈良帝室博物館—朝鮮總督府博物館—李王家美術館	一
美術家團體一覽(五十音順)—定期刊行物一覽—美術商一覽	一八
美術家及美術關係者名簿(五十音順)	六七

挿圖目次

日本畫

朱弦會展(一、二).....一

紅梅(安田歌彦) 時雨(川船水樺)

紐育萬博出品畫展示會(三一五).....一

夕月(樺山大觀) 雪(小林古徑) 舞踊鏡獅子(鏡木清方)

三越新進作家展(六) 京風(勝田哲).....一

春虹會展(七、八).....二

陽春(福田平八郎) 春深(菊池契月)

日本美術院同人展(九一一).....二

聖觀音(荒井寛方) 臘夜(山村耕花) 春光(奥村土牛)

戊辰會展(二一一七).....三

就後の春(川合玉堂) 河東節(高田那美) 漁村晴日(兒玉希望) 淺春展望(松本姿水) 秋の裡(村雲大様子) 荊刺(兒玉希望)

東丘社展(一八一〇).....四

雪に遊ぶ(妹背平三) 松風和鶴(堂本印象) 形霞(三輪晃勢)

煌土社展(一一) 臺北の美姐(野田九浦).....五

新興美術院展(二二二五).....五

伊吹山(茨木杉風) 江南の卷(田中案山子) 猿芝居(芝垣興生) 觀艦(森山麥笑)

春の青龍社展(二六一三).....六

霜朝(三好光志) 鶉の恩(時田直善) 長春花(川端龍子) 春到る(加納三樂) 三枝圖(山崎豊) 鬨(坂口一草)

個展(三二) 泰山水(山口蓬春).....八

日本畫院展(三三三六).....八

冬日(東山魁夷) 近雷(淺野正俊) 牛若と辨慶(岩田正巳) 破月六趣(飛田周山)

六湖會展(三七) 深間(中村岳俊).....九

九阜會展(三八一四).....九

松(福田豊四郎) 黒矮鶏(杉山寧) 秋日(森白甫) 月(吉岡堅二)

讀書會展(四二四六).....一〇

白梅(永田春水) 駒ヶ岳の遠望(荒木十畝) 關日(中島晃華) 庭の一隅(岩間武平) 雁(西澤雷歌)

新美術人協會展(四七一五).....一一

松(福田豊四郎) 馬(吉岡堅二) どんと燒の日(三須白風) 氷上ホッケー(藤田隆治) 空(大石哲路)

珊々會展(五二一五四).....一二

うき大盡(鍋木清方) 春風馬堤曲(小杉放庵) 采碗(西山翠峰)

大日美術院展(五五九五).....一二

芽と實(常岡文龜) 麥(川崎小虎) 嶺明(西山英雄) 櫻さく國(結城素明) 晩夏(加藤榮三)

中村大三郎畫藝展(六〇、六一).....一三

岩蔭(加藤美代三) 羅法師(中村大三郎)

清光會展(六二) 人形(小林古徑).....一四

多聞洞展(六三) 川之幸(前田青邨).....一四

白御會展(六四、六五).....一四

雪舟林泉(中島菜刀) 風景(今井紫梵)

聖戰美術展(六六、六八).....一四

燦擊用意(吉岡堅二) 江上雨來る(橋本關雪)

歷程美術展(六七、六九、七〇).....一五

樹幹(岩橋英遠) 樺椽樹(船田玉樹) 白の轉調(馬場和夫)

朗峯畫藝展(七一、七二).....一五

初年兵(立石春美) 爽涼(伊東深水)

青龍社展(七三一一八〇).....一六

浪田(須藤尙義) 奔流(坂口一草) 天草(山崎豊) 明惠傳(福岡青嵐) 群冠圖(時田直善) 香爐峰(川端龍子) 珊瑚礁(谷野敬一郎) 星祭(加納三樂)

院展(八一一九五).....一八

觀音摩利耶(荒井寛方) 浴後(小倉遊龜) 流紋(中村岳俊) 千里壯心(堅山南風) 朝鮮(前田青邨) 天鈿女命と瓊田彦神(安田歌彦) 夏趣二題(中村貞以) 水郷の一日(酒井三良) 玉蜀黍(小林古徑) 玉蟲(長野草風) 臘日(橫山大觀) 牛と村人(和高節二) 大佛勸進(新井勝利) 機女(冬木大丙) 晴日(奥村土牛)

明朗展(九六一九九).....二一

日本武尊(狩野晃行) 東北の人(鹽田好乃) 海鳴り(松本晃登) 牡丹圖(小野竹牛)

大輪畫院展(一〇一、一〇二).....二二
待春(大野皓司) 彌榮(小林彦三郎).....二三
文展(一〇三一一三〇).....二三
高瀨(徳岡神泉) 鬪鶏(松林桂月) 馬(西山翠峰) 山路(矢野橋村) 浴後(大野道夫) 松轡羣鸞(水田竹園) 清秋(伊東深水) 信濃の秋(川村曼舟) 蒙疆(福田豊四郎) 月影(小泉勝爾) 秋影(山口蓬春) 寒汀宿雁(宇田萩郎) 月の暈(三谷十糸子) 皇化洽(池上秀畝) 濤(吉岡堅二) 明鏡止水(小室翠雲) 月夜(上村松篁) たにまの朝(森守明) 月夜(加藤榮三) 慈光(東山魁夷) 怒濤(荒木十

畝)村道(山本丘人)葉煙草(畠山錦成)孫(森田沙夷)朝長(石崎光瑤)關山牧牛(村島西一)運(廣島吳甫)鳥糞煙深(橋尾翠田)

個展(二二一)軍馬二題(橋本關雪)……………二二七
 個展(二二二)玉簪水鏡(兒玉希望)……………二二八
 昭華會展(一三三)殘雪(川合玉堂)……………二二八
 個展(二三四)晚鐘(石山太柏)……………二二八
 七絃會展(一三五—一三八)……………二二八

お夏清十郎物語(橋本清方)忠度(菊池契月)豊公(前田青郎)菊蕙堂(安田叙彦)

個展(二三九)金山江天寺(川端龍子)……………二二九
 展覽會以外の作品(二四〇、一四一)……………二二九

明治天皇記念館壁畫「明治十年大阪軍事病院臨幸之圖」(樋口富麻呂)讀賣新聞社講堂壁畫「富士」(横山大觀)

洋 畫

個展(二)朝の前進部隊(橋本敏郎)……………三三〇
 朱文會展(二)箱根山(田村孝之介)……………三三〇
 紐育萬博出品畫展示會(三、四)……………三三〇

東海旭光(藤島武二)河口湖畔(岡田三郎助)白日會展(五)リラとつじ(香田勝太)……………三三〇
 春豪展(六、七)……………三三〇

河口湖鷓ノ島(岡田三郎助)熱河喇嘛廟(伊原宇三郎)……………三三〇
 個展(八)北窓遠望(高木勇次)……………三三一
 光風會展(九—一四)……………三三一

遊園地の朝(小絲源太郎)鳥ト小供(井手坊也)春(伊藤四郎)焚火(高宮一榮)靜物(辻永)海(南鸞造)

旺玄社展(二五—一七)……………三三二
 柿(牧野虎雄)兄の應召(小林智治郎)磯(橘作)

治郎

聖戰從軍畫展(二八、一九)……………三三二
 入城當日の徐州市街(大橋城)珠江を廻る部隊(中村研一)……………三三二

太平洋畫會展(二〇—二二)……………三三三
 北京中海公園(永地秀太)夏の花園(多々羅義雄)進軍(等々力巳吉)……………三三三

獨立展(二二—二四)……………三三三
 夜雪(高島達四郎)室戸崎風景(林武)秋山(小林和作)柿ナル里(小島善太郎)北海の柳(松島一郎)靜物(菅野圭介)門(中山巖)南支風景(田中佐一郎)河原(須田國太郎)たそがれ(齋藤長三)集團(海老原喜之助)東風(兒島善三郎)闘ひの譜(鈴木亞夫)東北の人々(野口彌太郎)野牛(菊地精二)二婦(川口軌外)江南戰場俯瞰(清水登之)洪水圖(福澤一郎)農人(鈴木保徳)……………三三七

新美術家協會展(四二—四六)……………三三七
 マーガレット イン コスチューム(寺田竹雄)蘭(松本弘二)魚の靜物(新海覺雄)森(伊藤久三郎)小孩(酒井亮吉)……………三三八

個展(四七)夕映の港(青山義雄)……………三三八
 主線美術協會展(四八、四九)……………三三八
 鯛生の間耕地(橋本八百二)朝(高間惣七)……………三三八

上杜會展(五〇、五一)……………三三八
 ヴィナスの誕生(藤岡一)春(牛島憲之)……………三三九

國畫會展(五二—五八)……………三三九
 南隣風景(梅原龍三郎)春の伊太利亞(長谷川春子)風景(土田文雄)花と少女(青山義雄)松と紅葉(椿貞雄)椿と巖石(庫田葵)娘時代(河野通勢)……………三三九

東光會展(五九—六三)……………三四〇
 辨天島の朝(齋藤興里)日蔭(佐藤一章)連雲港南方陣地(熊岡美彦)猫の居る庭(江藤哲)靜物(渡邊浩三)……………三四〇

白朝會展(六四)瑠璃島(大久保作次郎)……………四一
 春陽會(六五—七八)……………四一

樞臥讀書(小林德三郎)窓外山川(中川一政)商談(石井鶴三)ある日(田中善之助)三人の女(二見利節)蘇州風景(島海青兒)兵士の話(新沼杏一)機(加山四郎)花A(小穴隆一)椿(木村莊八)雪空(小栗哲郎)相撲(水谷清)初夏山海(今關啓司)大同石佛一(足立源一郎)……………四三

京都市展(七九)吉野山(太田喜二郎)……………四三
 六潮會展(八〇—八二)……………四四
 海景曇天(中川紀元)菜の花(牧野虎雄)夜椿(木村莊八)……………四四

日本水彩畫會展(八三—八六)……………四四
 白根遠望(石井柏亭)風景(中西利雄)風景(春日部たすく)荒鷲の陣營(鶴田吾郎)……………四五

新制作派三周年展(八七)少女像(内田巖)……………四五
 春季二科展(八八)港(鍋井克之)……………四五
 自由美術家協會展(八九—九二)……………四五

新緑(矢橋六郎)C. C. I. (村井正誠)蛸壺(山口薫)……………四六
 海洋美術展(九二、九三)……………四六
 大西水道(中村研一)寄する波(石井柏亭)……………四六

遺作展(九四)初霖(故ラギーザ玉)……………四六
 個展(九五)金鷄山(伊藤慶)……………四六
 個展(九六)靜物(鈴木千久馬)……………四六

個展(九七)黄色いリボン(二見利節)……………四六
 三春會展(九八)小舟造り(大澤昌介)……………四七
 清光會展(九九—一〇一)……………四七

薔薇(梅原龍三郎)白樺と燒岳(安井曾太郎)擊馬(坂本繁二郎)……………四七
 個展(一〇二)富士(和田英作)……………四七

一水會春季小品展(一〇三、一〇四)……………四八
 ピアノに倚る少女(木下孝則)神苑(山下新太郎)……………四八

個展 (一〇五) 裁縫する女 (小磯良平) 四八
聖戰美術展 (二〇六—二二一) 四八

南京中華門の戦闘 (小磯良平) 山岳難行軍 (井上幸) 光華門丁字路 (中村研一) 楊家宅望樓上の松井最高指揮官 (朝井閣右衛門) 吳淞敵前上陸 (長坂春雄) 壓倒 (伊原宇三郎) 無錫追撃戦 (南政善) 南京攻略戦 (鈴木榮二郎) 突撃路 (高澤圭一) 愛馬と渡河 (清水登之) 蘇州河激戦の跡 (藤島武二) 白壁の家の突撃 (柏原覺太郎) 新木橋の激闘 (向井潤吉) 蘇州河敵前渡河戦 (江藤純平) 叢中忘已 (高光一也) 吳淞鎮 (脇田和)

二科會展 (二二—一三四) 五一
家 (高岡徳太郎) 時計屋のある街角 (鍋井克之) 群峯響雪 (黒田重太郎) 栢榴 (鈴木信太郎) 高原 (岡田謙三) 竹 (島崎鶴二) 紫菀 (正宗得三郎) 黄昏の上海 (峰岸義一) ゆあみ (北川民次) 看護婦の散歩 (野間仁根) 農家 (吉井淳二) 作品B (山口長男) 誕生 (向井潤吉)

水邊彩屋 (南鷺造) 漁村 (青山義雄) 迷彩する商船 (石川滋彦) 瀧 (鈴木千久馬) 老婆 (大貫松三) 散歩する松本先生 (小糸源太郎) 丘の小供達 (井手坊也) 鳥 (高間徳七) 朝顔 (木村莊八) きつ、き (川合修二) 長江遡帆 (石川寅治) 秋日 (中谷泰) 樹の下の子供 (中川一政) 餘閑 (阿以田治修) 赤いちよつき (南政善) 讀書する男 (須田剋太) 初秋 (中村研一) 阿武隈の溪 (佐竹徳次郎) 湖上雲影 (田邊至) 松 (庫田菱) 海の母子 (大久保作次郎) 姉妹 (安宅安五郎) 老曹長 (伊藤悌三) 京城仁王山 (福藤種男)

霜林會展 (二五九—一六一) 五八
佛畫 (里見勝藏) 春 (林重義) 岩礁 (會宮一念)

新制作派展 (一六二—一七〇) 五九
きもの (鈴木誠) 工房 (三田康) 室内 (三岸節子) 窓邊 (脇田和) 彫刻と女 (中西利雄) 兵馬 (小磯

良平) 冬 (伊勢正義) 構想 (内田巖) 椅子に寄る人物 (佐藤敬) 六〇
一水會展 (二七一—二八〇) 六〇

臺灣的庭園 (有島生馬) 海景 (中村善策) 肖像 (安井曾太郎) 松嶺 (小山敬三) 長椅子による女 (木下義謙) 張鼓峰 (石井柏亭) 白い手袋 (近藤光紀) 白芍薬 (高野三三男) 北窗 (山下新太郎) 少女像 (木下孝則)

展覽會以外の作品 (二八一—一八三) 六二
日海軍協同作戦圖 (荒井陸男) 高知縣城東中學校講堂壁畫 (橋田庫次) 南昌飛行場焼打ちの圖 (藤田嗣治)

版畫其他

國畫會展 (二—四) 六三
繪殿深淵 (平塚運一) 菩提器觀音經版畫曼荼羅屏風 (一雙ノ内 (棟方志功) ぎんれい花 (野島康三) 巖の内 (恩地孝四郎)

彫刻

挿繪展 (五、六) 六三
宮本武藏 (石井鶴三) たけくらべ (小村雪岱) 春陽會展 (七、八) 六四
農園と雲 (長谷川潔) 室内 (野崎新右衛門) 自由美術家協會展 (九) 郷土誌 障子 (長谷川三郎) 六四
文展 (一〇—一二) 六四
綠園 (川西英) 新緑 (前川千帆) 花二題秋冬 (勝平得之)

習作 (小室達) 兎 (三澤寛) 少女 (松田尚之) 國畫會展 (七一—一〇) 六六
男の顔 (本郷新) 乳くばり (明田川孝) 南昌制覇 (清水多嘉示) 哀愁の地 (山内社夫)

構造社展 (一一—一六) 六六
母 (齋藤素巖) 愛撫 (山畑阿利一) 庭園裝飾コンポーション (安永良徳) 吉村先生像 (河村龍興) 女兒座像 (後藤清一) 犬と女 (宮地寅彦)

自由美術家協會展 (二七) 作品 (植木茂) 六七
日本彫刻家協會展 (二八—三二) 六七
マドモアゼルZ (早川鏡一郎) 習作 (中村七十) 女立像 (武井直也) 裸婦 (林是) 學藝會の少年 (歐村直久)

東邦彫塑院展 (三三—三六) 六八
恩師の顔 (建昌大夢) 毘沙門天 (關野聖雲) 更生 (藤野舜生) タバコ (松浦良)

聖戰美術展 (三七—三〇) 六九
瑞昌の人柱 (梁川剛一) 建設班 (中村直人) 皇軍來 (宮嶋久七) 慰問袋 (日名子實三)

火(水野欣三郎) 文展(五四—七四) 初夏(圓錐勝二)母(橋江嘉純) 鐵護(赤塚信平) 相撲(石井鶴三)胸像(安藤照) 桂翁(長谷川榮作) 夢(建島大夢) 大陸の土(古川順三) 立像(泉谷喜一郎) 眞畫(西田明史) 大陸ニ播ク(吉開伊喜藏) 庵の小春日(山崎朝雲) 試作(堀江越) 裸女(倉持芳) 岬の男(古賀忠雄) 陸軍(從軍記者) (一色五郎) 潮音(高橋英吉) 立像(河内山賢祐) 或る男(木村珪二) 鐵夫(吉田敏示) 七生報國の南郷少佐(長谷川義起)

瓜紋皿(土肥刀泉) 耳付一輪生(小倉雅道) 個展(二) 鐵繪番茶碗(濱田庄司) 文展(二二—四五) 木刀作儿兄(野呂天潤) 硝子花瓶(各務鎮三) 鑄銅月に兎釣香爐(香取秀眞) 銀鏡からたち文箱(増田三男) 柘榴圖陶花瓶(近藤悠三) 盛殿(飯塚珉珩齋) 鑄金鷲の圖二曲屏風(介川芳秀) 蒔繪屏風(巖) (山崎覺太郎) 夕顔蒔繪手宮(本間舜華) 銀竹葉文筥(鹿島一谷) 染壁掛「山湖の圖」(山形駒太郎) 野草文銀果器(織田寅一) 蒔繪提盤(松田權六) 染三曲衛立屏風(吉田源十郎) 鑄銅花器(原直樹) 歌繪蒔繪手宮(平宿西) 拓器盆子(安原喜明) 和染二曲屏風「飛躍」(川崎武雄) 風雷神童子(山本壽) 染付三友扁壺(楠部彌弋) 鑄銀瑞鳥置物(佐々木象堂) 鑄銅花瓶(豊田勝秋) 竹編風爐先屏風(飯塚小珩齋) 油紙湯文壺(宮之原謙)

玉置商店(平松義彦設計) 正面(一一) 九〇
平野屋(店主設計) 正面(一二) 九〇
京都の茶寮(池田總一郎設計)(二二—二五) 九一
一階平面圖、階下喫茶室、同階上
東京・M・O邸(吉田五十八設計)(二六—二八) 九一
庭面外觀、應接間、居間兼食堂
東京・石本邸(石本喜久治建築事務所設計) 九一
南面外觀(二九) 九一
熱海・O邸(竹中工務店設計)(三〇) 九二
南東側外觀
三鷹村・N邸(大倉土木株式會社設計)(三一) 九二
庭面外觀
あるぜんちな丸(三菱・長崎造船所施工) 九二
全貌、一等社交室、一等食堂(三三—三四) 九二
日本電力瀨戸第二發電所西村堰堤(日本電力株式會社土木部及山口牧象設計)(三五) 九三
堰堤と調整門

工 藝

新制作派展(七五—七八) 演技者(吉田芳夫) 荒野(アイヌ民族への長恨碑)(山内壯夫) 少年(舟越保武) 母(柳原義遠)

商工省工藝展(一一—一五)

葡萄圖花瓶(宮坂房衛) 小判形梅模様一圓張手文庫(三輪經行) 梅模様丸形鑄銅水盤(會田富康) 銀華文様飾棚(野崎余詩呂、牧野義孝合作) 瑞穂圖手織錦振袖(山鹿清華)

國畫會展(六) 染附角皿(松) (富本憲吉)

日本漆藝院展(七、八) 衛立鍾子瑞花文(六角頼雄) 彫漆菓子盆(堆朱楊成)

大阪工藝振興展(九、一〇)

草木染織類「麥」パネル(日比野近三) 古矢竹盛器(阪口宗壽齋)

實在工藝展(一一—一八)

御所人形小倉と小供(野口光彦) 風呂先屏風(木村和一) 鎌倉彫珠光手箱(三橋鎌三) 染付花瓶(河村喜太郎) 器局(佐藤陽雲) 合作新聞盆(村山久) 青銅壺(高村豊周) アルマイト花盛器(山崎登太郎)

日本陶藝展(一九、二〇)

建 築

日本赤十字社廣島支部(佐藤功一建築事務所設計)

正面(一) 八七
生駒山青年道場(石川純一郎設計)(二—六) 八七
南面外觀、一階平面圖、大ホール、寢臺、二階平面圖

上宮中學校(宇賀一郎設計)(七、八)

全景、入口 八八
東星學園(守屋哲之助設計)(九—一一) 八八
西面、南面、一階平面圖

都ホテル(村野建築事務所設計)(一二、一三)

宴會場入口、大宴會場 八九
松島・ニューパークホテル(吉田五十八設計)(一四—一七) 八九
正面、喫煙室、中央ロビー外觀、内部

糖業會館(渡邊節設計)(一八—二〇)

正面、地階一般食堂、地階休憩室 九〇

紐育萬國博カバードスペース日本邸(山脇巖設計)

内部、正出入口、内部壁面、平面圖(三六—三八、四〇) 九三
紐育萬國博日本特設館(岸田日出刀原案)(三九) 九三
全景

桑港・金門博日本特設館(内田祥三設計)(四一)

全景 九三

古美術資料

修理竣工國寶建造物(一一—二〇)

西明寺本堂、同三重塔、宗像神社、姫路城本丸北腰曲輪、同上へノ渡櫓内部、相國寺本堂玄關、高倉神社本殿、定光寺本堂、神明宮、法隆寺東院夢殿、同上回廊、大傳法院多寶塔、興福寺東金堂、同上、妙成寺經堂、普門院本堂、同上内部、天滿神社樓門、弘前城丑寅櫓、同上追手門

維持修理續行中國寶建造物(二一—三〇)

唐招提寺禮堂修理前、同上工事中發見遺溝の一部 九七

同上石白竝に丸瓦による排水溝の發掘狀態、同上
 平面圖、教王護國寺金堂修理中の狀況、同上、法
 隆寺東院傳法堂(修理解体中の構架)、同上外陣、
 同上正側面全影、金剛寺塔婆(修理前)……………九八

二條城二之九御殿、同上二之九庭園、同上二之九
 車寄及遠侍、同上本丸御殿、東大手門と東南隅櫓
 醍醐寺經藏正面、同上側面、同上内部、法隆寺新
 寶藏南倉、同上平面圖、藤原宮發見建築址見取圖

物故美術家及美術關係者

(一一一)……………一〇〇

彰城貞徳、佐崎霞村、野田英夫、加藤英舟、萩島
 安二、伊東紅雲、ラグーザ玉、北村耕造、小野玄
 妙、岡田三郎助、村上華岳

昭和十四年度美術界概観

總記

昭和十四年は内外ともに多事多難、わが國は深刻な試煉を體驗しつつ、大きな歴史的の歩みをすすめた一年であつた。支那事變開始後第三年、戦ひは長期建設の段階に入り、わが不動の國策はさだまつて、事變の完遂、東亞新秩序の建設といふ大理想にむかつて國家の總力をつくすことになつた。九月には歐洲に戦争が勃發し、世界の動亂は逆睹しがたい形勢にある。内閣は年内に二度更迭し、國內における總動員體勢はいよゝゝ強化された。國民生活の上にも必然的な革新が要望され、精動中央聯盟の改組などとともに、消費節約、華美享樂の抑制、衣食住の簡易化などが強調された。思想的には、國民精神の昂揚、日本精神への復歸が基調とされる。

かゝる國家的非常時にあたり、國內百般の事象が、すべてこの大きな力にうごかされるのは當然で、美術ももとよりその例をもれるものではなかつた。物質上の消極的な方面では、物資の制限からうける影響が直接で、部門によつてその程度はことなるが、建築はその影響最も大きく、その他についても、銅その他の金屬、金箔、金泥、漆などの制限、あるひは繪具、カンヴァスの不足など、作家に種々の不自由を感じしめたことは事實である。しかし全般的にみて、それは藝術上の活

動を阻害するほどのものでは決してなく、社會一般が戦時にうける影響ないし犠牲にかんがみればその程度はむしろ甚だ輕微であつたといへるであらう。

他方、積極的な影響の面をみれば、時局は、外形上にも内容的にも、美術に對して意外とするほどの鼓舞激勵をあたへ、強力な動因をつくつてゐるのである。前年度すでに顯著であつたごとく、社會は一般に美術の効用をみとめ、作家はまたおちつきと自信とをえた。美術は時局にともなつて活潑なうごきをみせた。文化の一面を擔當する美術が、戦時にあつて、いかに重要な任務をもつかが實證されつゝある。

本年度の美術界の旺盛な活動は、形の上では展覽會の激増となつてあらはれた。同時に内容の上でも、思想的に、藝術的に、時代の精神を反映して、反省と、發奮と、工夫のさまざまの徴候を示し、時代の大きな歴史的轉回が、美術の上にも鋭敏にはたらきつゝあることを見のがしえないのである。かゝる現象は、今日のわが國が幾多の困難に面しつゝあるとはいへ、それは決して萎縮や退嬰を意味するものではなく、未曾有の國運發展の途上、當然の行路難にほかならぬことを示すものであり、藝術の隆昌は國家興隆の一象徴ともみられて、欣快の念を禁じえぬものがある。

この美術隆昌には種々の要因をふくんでゐて、

一つには特殊な方面の好況にともなふ鑑賞者の激増といふことも指摘されるであらう。それは特に日本畫の場合にいちじるしく、事變以來にはかに増した需要のために、市場における新畫はおどろくべき値上りをきたした。畫商はきそつて諸大家流行新進作家などの展觀を催し、それらはむしろ氾濫のさまを呈した。

同時にまた、社會一般が、美術に對して多くの關心をもつやうになつたことも事實である。昨年来、畫家の従軍と、戦争畫その他事變に關聯する作品とが、美術界における顯著な流行として興つたが、それらは作家が、藝術至上主義的な立場をはなれて、國民的感情を一般社會とともに呼吸することの具體的な一つのあらはれであり、全國民共通の關心事である主題を通じて、社會と美術とのむすびつきの縁由ともなつてゐる。そのほかにも美術家の奉公の熱意が、傷痍軍人慰問のための獻畫運動や、ポスター、ゑはがきの製作、獻納など、美術の社會的な直接の用途への奉仕となり、また各展覽會の軍人や遺家族に對する優待、白衣勇士の慰安招待などの、美しい心づかひともなつてあらはれたことなどを、あはせ考へうるであらう。もとより、さらに普遍的な理由として、主題に關しない美術自體の、風景畫にせよ、花鳥畫にせよ藝術品としての鑑賞が、現實生活のなやみを一瞬わすれさせる人心への慰安となつて、世人の生活の必需品の中に入りつゝある事實を見のがすことはできない。

美術界の主流をなす各主要團體の展覽會は、例

年のごとくひらかれた。大小さまざまの團體の公募展、同人展、百貨店や畫商の展覧、多くの作家の個人展など、かぞへきれぬまでに催され、また昨年以來流行の従軍スケッチ展は、本年も數多くおこなはれた。特殊なものとして、七月、陸軍美術協會と朝日新聞社の共同主催でひらかれた聖戰美術展覧會は、今日の戰爭美術の一集成として注意をひくものであつた。團體の解散、結成、旗あげ展などもいくつかは行はれて、美術界の常とする流動を示してゐる。

文部省美術展覧會は、昨年戰時中の開催を斷行したが、本年もその例にならつて第三回をひらいた。しかしその機構には、たとへば無鑑査問題が未解決のまゝのこされてゐること、各派を包含すべく意圖されながらはたされずにあること、あるひは帝國藝術院をはじめ、一時的鑑査を依頼する以外作家を關與させぬことなどの、種々の懸案がかさなつてゐて、有力な作家たちの積極的な協力をえがたく、最も重要視される展覧會であるだけに、本年はことに内容の不成績が目だつた。そのために文展の再検討がとなへられ、世上その廢止論や、一時休止論などがまた行はれるありさまであつた。

美術行政に關しては、二月、衆議院の豫算委員會で川崎克委員の質問がなされたこともあり、展覧會のみならず、美術奨励、美術教育その他の諸問題につき、全面的な方針確立の必要がみとめられるところ、文部當局もかねてからそのための審議機關設置を考究中であつたが、本年中にはそ

の實現をみるにいたらなかつた。帝國藝術院は、創設以來なんらの活動をも示してをらぬ。

なほ文部省では、日本諸學振興委員會に新に藝術學部を設け、十月第一回藝術學會をひらいた。その趣旨は「國體、日本精神の本義に基き藝術、藝術に關する諸學の内容、方法並に教授の實際を研究討議して之が創造發展に資せんとす」るもので、藝術關係の學者教育者らの研究發表、公開講演などがおこなはれた。

わが美術海外紹介の事業として本年特記さるべきものは、三月ベルリンにひらかれた伯林日本古美術展覧會であつた。一昨年來慎重な準備をすゝめ、多數の國寶重要美術品等をふくむ名品百二十六點をおくつた空前の盛舉で、その効果は少くなくかつたものと思はれる。なほ本年はニューヨークとサンフランシスコとにそれ／＼萬國博覽會が催され、わが國も積極的に参加出品して相當の効をおさめた模様であつた。工藝品のほかに現代繪畫古美術品なども出陳されたが、それらの選定については必しも十分であつたとはいへない。ことにニューヨークにおくられた現代繪畫二十點は、國內展示會ですこぶる不評であつた。個々の作品の價値の問題ではなく、現代の日本美術を代表せしむべき計畫の不備がみられたからである。その他個人的にはあるが、現代日本畫六十餘點のドイツ政府へ寄贈のことがおこなはれた。この場合にも作品の選擇がまつたく無計畫になされたことを惜しまずにはあらぬ。

本年注意をひいたもの一つに、寫眞の進出が

ある。寫眞はその技術の發達とともに、あらゆる方面に利用され、ニューヨーク萬國博覽會の出品にも、いくつかの巨大な寫眞壁畫がみられた。藝術寫眞の歴史はふるく、美術展覧會の一部門としてその部が設けられてゐる例はすでにみるところであるが、本年は國畫會に新しく寫眞部が加へられた。また近年前衛繪畫の運動にとまひ、繪畫以外にも種々の表現手段が工夫されてゐる中に、寫眞があらためて有力な一技法として利用されるやうになつたことも注意されるところである。

本年物故した人々に、日本畫家では伊東紅雲、猪飼嘯谷、岡村葵園、村上華岳、石島良則、加藤英舟の諸家があり、洋畫家では野田英夫、岡田三郎助、大沼かねよ、彭城貞徳、ラグーザ玉の諸作家、彫刻家に佐崎霞村、荻島安二、建築家に北村耕造、學者に關衛、内藤藤一郎、文學博士小野玄妙、その他ポストン美術館東洋部に多年勤務中であつた平野千恵子、法隆寺再建論の代表者として知名な文學博士喜田貞吉、また美術の蒐集家、愛護者として知られ、みづからも畫筆をとつた原富太郎などの諸名家があつたことは痛惜にたへぬ次第である。

故人追憶のくはだても色々あつた。葛谷龍岬の筆塚、小堀鞆音の供養塔、平福百穂の記念碑、ラグーザ玉の追憶碑が建設され、淺井忠の三十三回忌、山元春舉の七回忌などが營まれ、菱田春草の生地において春草記念公園が計畫されたことなどがそれである。

日本畫

畫壇の盛況は、作家に濫作をしひ、またや、もすれば世業に迎合せんとする藝術上の危険をかもさぬとはいへぬ。その一つとしては、新進作家らの流行畫風への無反省な追隨といふことも考へられる。しかし全體としてみれば、活氣にみちた環境からはおのづから好調の作品も生まれるわけで本年の畫壇は相當にうるとうころの多い進展をつけたといふことができるであらう。

昨年あたり、日本主義的反省の時潮にともなつて、復古的ともみられる傾向が一般にあらはれたが、新時代の藝術創造にむかはうとする勢ひは、過去への反省といふことではおさへきれぬ力づよさを示し、進取的なさまざまの研究をみせる作品が多くあらはれてきてゐることは、興味ふかい現象である。

日本畫壇にも、時局を反映する氣運がうまれつつあることは注意される。橋本關雪、川端龍子をはじめ、吉岡堅二、福田豊四郎らの従軍もあり、また伊東深水その他數名の渡支のこともあり、もとより應召の作家もあつて、従軍畫展などもひらかれた。しかし一般に戰爭畫の製作は、ほとんどその任を油繪にゆづつた形である。聖戰美術展はそのことを明らかに示してゐた。

日本畫が、現實感を強調する寫實的製作に不當であることも、一つの理由であらう。しかし戰爭畫あるひは時局に主題をとる作品が、その意味の寫實的表現をとらねばならぬわけはなく、一般

には従來の日本畫または作家の慣習によるものと思はれるが、本年その慣習をやぶつて、最も注意すべき活動を示したものに、異常な熱意と精進とをもつて聖戰記念畫の大作數點を完成し、それらを宮内省、帝室博物館その他に獻納した橋本關雪があつた。「戰塵」「江上雨來る」「河霧」など、いづれも既成の技法にしたがひ、寫實的にとり扱はれた作品で、ことに六曲一雙の「軍馬二題」は堂々たる風格をそなへて、この大家の記念畫たるにふさはしいのであつた。

川端龍子がかねてから時局に主題をとらへて、畫壇に類をみぬ製作活動を示すことは、すこぶる顯著であるが、連作の「大陸策」の第三として本年完成した「香爐峰」(青龍社展)は、大畫面一杯に飛行機を描き、その奇想天外な表現に批評家を困惑させた。既成日本畫を鑑賞する尺度にはあてはまらぬものがあるからである。

現地に取材したこれらの作品に對して、川合玉堂は平和な漁村の一情景を、二曲一雙の「銃後の春」(戊辰會展)に描いた。この作者らしい溫雅な心境のうちに、一種國民的感情ともいふべきものが強く脈うちつて、記念すべき佳作となつてゐる。その他にも、銃後の生活を描いた結城素明の「櫻さく國」(大日美術院展)などもあるが、一般に時局についての關心は、やはり歴史畫に主題をかりあるひは花鳥、動物畫などに寓意的表現をもとめる類のものが多くみられた。一方大陸との交渉が密接となつたため、その風物が畫材の範圍をひろめたことも種々の作例に示されてゐる。

しかし畫壇の大部分は、例のごとく、風俗、花鳥、風景など、平時とかはりのない畫材の製作にいそがしく、作家の苦心は、むしろ表現の技法に重點がおかれる觀があり、その點で美術は、戦時下といへども、主題の問題とは別に、やはり独自の任務をもつことが明らかにされてゐるのも、興味ある現象である。

建國神話をとり扱つた安田鞞彦の「天鈿女命と猿田彦神」(院展)は、小品ながら、今日の日本畫壇における一つの高い水準を示す作品として、注意されるものであつた。この劇的な物がたりの場面が單なる挿繪または卑近な美しさにとゞまることなく、少し窺竄さを感じさせるまでに、嚴肅な美しさをもつて繪畫的に純化されてゐるからである。歴史上の人物畫として、菊池契月の「忠度」(七絃會展)もまた、最も高く評價されるべき本年の一優作であつた。これは技術的に洗練された精品といふばかりでなく、えがたい品格をそなへてゐるものである。同じ作者はまた風俗畫においても「春深」(春虹會展)の佳品をつくつた。人物畫にはなほ前田青邨の「豊公」(七絃會展)を逸することができぬ。作者獨特の構想と、畫面を樂しんだ工藝的技法の味とは、すこぶる光彩にとむ表現をえてゐる。

文學に取材して挿繪風にとり扱つたものに、楠木清方の「お夏清十郎物語」六圖(七絃會展)があつた。清方にはなほ、ニューヨーク萬國博出品の「舞踊鏡獅子」その他があるが、それよりもこの小品連作は、作者の長所が最もよく發揮されたも

のである。これと全く境地を異にするが、同様な連作として蕪村を挿繪した、小杉放庵の「春風馬堤曲」九圖(珊々會展)またすこぶる興趣にとむ收穫であつた。

同人のこらず出品を申合せて努力した院展は、本年甚だ見ごたへのある成績を示した。横山大觀には小品ながら三點の出品があり、「麗日」のごとき興味ある作を生んでゐる。前述の鞆彦のほか、小林古徑の「玉蜀黍」は、珍しく没骨のおほどかな畫態になり、このもしいできであつた。その他同人それへの勉強を示す中に、奥村土牛や小倉遊龜のごとき、小さなまとまりの成否に關せず、あへて難きにつく眞摯な探求の態度をみいだすことは愉快である。小川芋錢のあとをつぐ酒井三良の「水郷の一日」もすてがたく、近時注目される作家の一人新井勝利の「大佛勸進」も勉強ぶりを示すよい成績であつた。

文展には、日本美術院同人の出品は一點もなく例年みられる大家の作品も偶然にそろはず、西山翠嶂の「馬」をあげる程度で、甚だ寂寥の觀があつた。むしろ中堅、新人らの努力にみるべきものがある。徳岡神泉の「菖蒲」、山口蓬春の「秋影」などが、最もよき收穫のうちにかぞへられるであらう。いづれも裝飾風にとり扱はれた植物畫で、鋭敏な新時代の感覺と技法的洗練をそなへてゐる點で、目だつた作であつた。中村大三郎の「三井寺」は、その塾展に出した「弱法師」とともに、作者の一進展を示すものとして注意される。

在野性と、主宰者川端龍子の指導性とを明確に

する青龍社は、例年のごとく春秋の展覽會をひらいて、鞏固な結束と活動とを示した。この會に共通の畫風も次第に熟成されてきて、新日本畫の一派として重要な位置をしめつゝあることは興味がある。龍子の「五鱗圖」は、前記「香爐峰」とは對比的な作者の一面をあらはし、すぐれた技術をみせる佳品であつた。

公募展ではないが、戊辰會の充實した成績は本年注目されるものであつた。川合玉堂は前記のほか「富士」を出し、兒玉希望は、一進境をみせる「荊軻」その他を描いた。希望にはなほ文展出品の「鶴」や個展の富士十點があり、その勉強ぶりは注意をひいてゐる。

新日本畫の創造につとめつゝある人々の努力には、また興味ふかい種々の成績がみられた。中村岳陵の「流紋」(院展)は、年々作者の示してきた水の研究の一つで、福田平八郎の竹を描いた「陽春」(春虹會展)とともに、日本畫における影の問題を解かうとしてゐるところに、おもしろい成果をあげてゐる。文展にも既述のほかに、新人のさまざまな努力がみられた。月光の雰圍氣を描かうとして偶然の近似をみせた、加藤榮三の「月夜」や上村松篁の「月夜」などがあり、裸體をとり扱つたものに廣田多津の「モデル」その他がある。吉岡堅二と福田豊四郎とは、新美術人協會によつて新日本畫の一つの運動を代表するものであるがその展覽會に前者は「馬」を、後者は「松」を描いた。堅二にはなほ「爆撃用意」(聖戰美術展)や「濤」(文展)があり、豊四郎には駱駝を描いた「蒙

疆」(文展)などの作がある。

團體のうごきとしては、本年結成されたものに革丙會所屬作家による朱弦會、矢野橋村を中心とする南畫團體乾坤社、京都における南畫家の南湖社、故土田麥僊門下による山南會、伊東深水、山川秀峰を中心とする青衿會などがあり、畫商の主催するものに新人をあつめた綵尙會などがあつた。また戊辰會は本年第十回展を終つて解散し、東臺邦畫會は東京美術學校同窓會の中に入つて名義を解消した。

大小團體の公募展、同人展、あるひは塾展の類は多く、また個人展もすこぶる盛であつた。個展のうち、堂本印象の宗教美術及寺院襖繪展は、作者が本年完成した四天王寺五重塔四佛淨土壁畫をはじめ、過去における東寺、醍醐三寶院などの襖繪その他宗教畫をあつめた異彩にとむものであつた。四天王寺五重塔壁畫、柱繪などは明年同塔の落慶供養までにすべて完成されるはずである。

百貨店や畫商の展觀のうち、特定の作家を會員として例年催すものは、注意をひくところであるが、本年ひらかれたものに、井井會、青丘會、春虹會、六潮會、九臯會、珊々會、清光會、七絃會その他があり、中で作品は少いが、質の上で最も光彩をはなつたのは七絃會であつた。前述のごとき作品がそろひ、その他に安田鞆彦の「菊慈童」なども出て、この會の目ざす畫壇最高水準を示す意圖は、相當に達せられたものといつてよい。

なほ本年遺作展の催された物語作家に、小川芋錢、落合朗風、梶田半古、今尾景年があつた。

洋 畫

昨年最も流行をきはめた畫家の從軍、戰爭畫の製作、その他戰時的な畫壇の活動は、事變が一段階を劃し、大陸の事情も建設期に入るにおよんでや、平靜に復した觀がある。しかしなほ本年も、從軍畫家らの活動、從軍畫展の數多い開催、聖戰美術展その他の催しなどあり、主要團體の展覽會などにも、事變に關聯する幾多の作品があらはれて注意をひいた。

聖戰美術展は、戰爭畫の課題に對する美術界の一解答であつた。出品の大多數は洋畫で、知名な畫家の作品も相當にあつめられたが、それらを概観して、今日の戰爭畫はほとんど説明的な記録にとゞまり、藝術的な解釋による内容や表現をもつ作品にとゞましいこと、また現代の洋畫の技法が、一般に即興的なスケッチに適し、永久性を必要とする記念碑的製作に不向きであることなどが觀察された。この會で最も注目され、本年完成された戰爭畫のおもな作品の中に記さるべきものは、上海軍の依頼によつて製作された各二百號十點の作品であつた。それは、向井潤吉の「新木橋の激戰」中村研一の「光華門丁字路」、脇田和の「吳淞鎮敵前上陸」、柏原覺太郎の「白壁の家の突撃」、朝井閑右衛門の「揚家宅望樓上の松井最高指揮官」、江藤純平の「蘇州河敵前渡河戰」、南政善の「無錫追擊戰」、小磯良平の「南京中華門の戰鬪」、鈴木榮二郎の「南京攻略戰」、長坂春雄の「吳淞敵前上陸」であるが、前述のことはこれらの多くにもあ

てはまり、平常の達筆、味や感覺を主とする表現のみでは、この種作品の畫面構成と仕上げには困難をきたすことを示してゐた。

事變に關する製作に、注意すべき努力とそれぞれにある成功を示した作家として、小磯良平、向井潤吉、清水登之らをあげうるであらう。小磯はその古典にまなぶ練達の技術を駆使して、右にあげた作品のほか、なほ「兵馬」(新制作派展)の力作を描いた。この作品は、西洋近代畫の影響を多くうけすぎてゐるわが國の畫壇に珍しい、油繪本來の一つの作畫法を示し、戰爭畫としてのみならず、本年洋畫壇における最もすぐれた收穫の一つとして推すべきものである。向井は前記の作品のほか、昨年の「突撃」と聯作をなす「難行」「甦民」(二科展)の二作を完成した。この作者獨特の北歐的な寫實主義は、またこれらの戰爭畫に適切な表現をあたへて、その技術には侮りがたいものを見せてゐる。清水は聖戰美術展に「愛馬と渡河」を、獨立展に「江南戰場俯觀」などを描いたが、特色ある様式化と、場合により抽象的な表現を用ひて興味ある効果を見せた。それらのほかになほ、藤田嗣治の海軍省依頼による「南昌新飛行場爆撃ノ圖」の記録的作品があつたことも、記しておく必要があらう。

時局に關する主題をとり扱つた作品を別として一般の製作にあらはれた傾向としては、遊惰淫逸な風俗畫や、無意味な習作的構圖のための大作、裸體畫などが目だつて減り、主題あるひは表現意圖についての反省がみられること、前衛的作品に

しても、病的な不快感をあたへる種類のものが減少し、概して健康的な、繪畫の本質追求への努力がみられることなどが注意されるところであつた。風景や靜物などのほかに、質實な日本的性情、生活などを描かうとする氣風も見うけられる。今日の眞剣な國民的感情が、おのづから繪畫に反映してゐることを知るのである。

文展は、昨年と同様、大きさを五十號に制限した故もあつてか、熱意のある力作をみるのが少かつた。また洋畫壇には、依然として在野的活動をつづける二科會、獨立美術協會、一水會、新制作派協會などの有力な團體があるとともに、昨年来春陽會、國畫會などの、みづからの展覽會をもつ團體が参加するやうになつたため、從來のいはゆる官展系作家が所屬團體を重視する必要を認め、文展に對する熱意をうしなつてきたことも、否定しがたい現象である。文展の特選その他の結果をみて、一定の審査方針を知ることが困難で各團體の勢力均衡といふやうな形が看取されたことなど、官展としておもしろからぬ傾向といはねばならぬ。

内容の上では、大家の指導的作品、本年度の代表的收穫としてあぐべき作品をみず、アカデミツクな技術的に堅牢な作品もなく、味や表面的技巧にとゞまるもの、多いことは、甚だ心ほそい状態であつた。技術的にも、思想的乃至意欲的にも、文展に見られぬすぐれた作品を多く在野團體の中に見いだすことは、官展として考慮すべき問題の多いことを思はせる。なほ本年文展における新進

の仕事では、石川滋彦、南政善、伊藤悌三、大貫松三、庫田發、二見利節などの作品が目だつものであつた。

團體の活動は相かはらず活潑である。獨立美術協會は近年多少の動搖があり、前衛派の勃興が一時期を示したが、本年展覽會後、その指導的作家とみられてゐる福澤一郎の脱退により、ある安定を得た観がある。それとともに、新興運動としての尖鋭さもうすれたことは自然であらう。本年の展覽會も、會員それ／＼の道に習熟をくはへ、一種の落つきを示した觀があつた。鈴木亞夫の「團ひの譜」、中山巍の「朝鮮記念」、須田國太郎の「河原」、福澤一郎の「洪水圖」、海老原喜之助の「集團」、兒島善三郎の「東風」など種々の意味で注目される作品である。

國畫會、春陽會など例年と大差なく、それ／＼の特色を示す展覽會をひらいた。前者には梅原龍三郎が「霧島」、「南陸風景」に指導的立場を示しまた青山義雄がその色彩本位の作品をもつて、會の一主流を代表する。後者は會員らがある共通の特色の中に、各人の仕事をみせた。本年は、異色あるものとして長谷川潔の版畫諸作が注意をひきまた昨年物故した倉田白羊の遺作が特別陳列された。

二科會は藝術的方向においても、技術上の水準においても、甚だ雜然としてその特質をとらへるのに困難である。しかし作家の数が多く、作品も多様で、今日の洋畫壇の種々相を縮圖してゐる觀があるのは興味をひくものがある。事變に關聯し

た作品も種々あらはれたが、前記のほかとりたて、あげるものにとぼしい中に、野間仁根の「看護婦の散歩」その他は、全く作者の感覺の世界のものとしてゐる點で注目された。

一水會は穩和な寫生的作品を、新制作派協會は強烈な近代主義的作品を、主としてあつめ、同時に展覽會をひらいて一層その對照を顯著にした。前者では、安井會太郎が一人きはだつた異彩を示し、後者では、前記小磯良平の仕事が他と性格的に異なるものを示した。なほ本年から舊國畫會彫刻部が合體して、この會に新たな特色をくはへたと、及び本年物故した野田英夫の遺作を陳列してそのすぐれた質を示し、早世を惜しませたこと、を記録する必要がある。

その他既成諸團體の活動は常とかはらず、公募展、同人展などおびた／＼しくひらかれ、個人展もまた盛であつた。なほ團體のうごきとして、福澤一郎らは新に美術文化協會を結成し、大久保作次郎を中心とする鬼面社、神津港人を中心とする縁巷會、青年作家らの前衛運動たる新浪漫派協會などの結成があり、また主線美術協會繪畫部解散のことなどがあつた。昨年結成された二科系の前衛團體九室會は第一回展をひらき、また石原求龍堂の主催で、伊藤廉、林重義、會宮一念、里見勝藏を會員とする霜林會ができて、第一回展をひらいたことなども記録される。

遺作展の催された作家には、既述のほか、栗原忠二、佐伯祐三、青木繁、ラギーザ玉などがあつた。

彫刻

時局は彫刻によい影響をおよぼしてゐる。繪畫にくらべて表現の範圍のせまい、したがつて題材の貧困がしば／＼なげかれる彫刻に、少くとも主題の上で、國民の關心にうつたへ、共感をよびおこすべき豊富な作因をあたへた。本年、作家たちの取材は、戦ひ、いこひ、あるひは病舎に靜養する兵士たち、大陸の建設にはげむ戦士、銃後をまもる勤勞者たちの描寫から、興國の理想、國民の意氣の象徴化にいたるまで、さまざまに探求された。それらの成績の中には、記憶さるべき佳作もいくつかあげることができ。しかし一般には、それらの事變的作品は多く眞摯な努力が費されてゐるにもか、はらず、未だ十分の功をむくいられたと見ることは困難であつた。それは彫刻性の發揮がしば／＼わすれられて、表面的な寫實にとらはれ、單なる説明的描寫にとまるか、あるひは内容のとぼしい誇張にをはる傾きが多かつたからである。

時世は彫刻に、裸女像や置物以外に、悠久性をもつ民族的記念物を要求してゐる。本年すでに一二の例をみるごとく、あるひは八紘一字を表象するあるひは烈々の武動をつたふべき大建造物に、彫刻家の活動をもとめた。忠靈塔の大陸をもふくむ全國的な建設計畫など、當然この方面にも彫刻の協力を必要とする氣運がみえる。わが國の彫刻が習作的寫實の域から、一段と躍進をとぐべき時運に際會してゐるといはねばならぬ。近年モニユメ

ンタル藝術を主唱し、その創造にはげむ作家たちの努力も、その意味から注意されるところであるが、本年その種の收穫に目ぼしいものをかぞへ得なかつたことは残念であつた。

時局に關聯する題材をとつて、注目される製作活動を示した人々に、中村直人、日名子實三、齋藤素巖、その他文展出品の幾人かの少壯作家たちがあつた。中村は「工兵（戦争三部作の一）建設班」（聖戰美術展）と「征徒（防人ニヨル）」（院展）の二作に、相ことなる方向の努力をみせた。前者は誇張なき寫實的とり扱ひによく彫刻的效果をとらへ、後者は理想的表現に力つよい一つの成功を示してゐる。日名子には「慰問袋」（聖戰美術展）、「第一線」（第三部會展）その他の作があり、寫實的にすぐれた技術を示したがこの作者にあつては、その巧みな描寫力が作品を即興的な寫生にとゞめてゐた。

齋藤素巖の兵士の夢をとり扱つた「母」（構造社展）はすこぶる興味ある作品であつた。作者の謹嚴な寫實性が、この種の題材のしばし陥りやすい安價な浪漫的感傷から、この作品をすくつてゐるし、その表現は劇的誇張をさけて、あくまで靜かに清純である。その故にまたモニユメンタルな性質をそなへるものであつた。文展の作品中では吉開伊喜藏の「大陸ニ播ク」、吉田叙示の「鑛夫」、岡本金一郎の「野戦兵」などが良質の仕事として注意された。

浮彫は表現の範圍もひろく、事變的主题などにもおもしろい適用がみられさうなものであるが、

一般に甚だ閑却されてゐる觀がある。上田曉（二科展）、山内壯夫（國展）、永原廣（白日會展）その他若干の研究をみせるものがあるとはいへ、わづかに一色五郎が、例年の連作の一つとして「陸軍（從軍記者）」（文展）に様式的な一成功を示したほか、記すべき成績をみいださない。

本年、團體のうごきの中で注目されたのは、國畫會彫刻部の全員が脱退して、そのうち清水多嘉示をのぞき、洋畫團體新制作派協會に合流したことであつた。この作家たちは本年二回の展覽會をもつた。彼らの若々しい藝術意欲とその在野性とは將來に期待をもたせるものがあるが、今日では未だ表面的な形式化が先だつて、構成の薄弱さをまぬがれてゐない。

彫塑團體として比較的興味ある活動を示したのは構造社であつた。この會にはさまざまな性格や傾向が混在して、團體としての色彩が一つでないところに特色があるともいへる。新潮流を代表する安永良徳は例のごとく旺盛な創作力を示し、多分の誇張をふくんではあるが、彼にあつては不自然ならぬ自家の様式をつくつてゐる。宮地寅彦や野村公雄の新鋭な試みも一應注意をひくが、まだ十分消化されてゐない。それらの要素をふくむこの會が、依然としてうごかぬ落つきをもつのは、やはり齋藤素巖の健實な寫實主義が全體をひきしめてゐるからである。なほ本年物故した荻島安二と昨年戦歿した後藤泰彦の遺作が、特別陳列されたことも記さねばならぬ。

第三部會、東邦彫塑院、日本彫刻家協會、主線

美術協會、日本美術協會などの公募展、日本木彫會などの同人展その他いくつかの團體がそれら活動をみせたが、特記すべき成績を示さず、院展及び二科展の彫塑部は、各々特色の對比に興味をもたせるが、後者は作家も少く、二三の作品が注意されるほか期待される進展をみせなかつた。

院展は、木彫と塑造とにそれら有力な同人たちをもつて、興味ある成績を示した。たゞこゝでは、例のごとく味の仕事はげまれ、とかく置物になりやすい傾きがある。平柳田中の「試作鏡獅子」は昨年の裸體試作の次の階程を示し、技術的完成とともにこの大家の精進を感嘆させるものであつた。新海竹藏の「朝鮮にて（砧）」も好ましい收穫にあげられる。なほ新進の中に辻晉堂、柏木康兵などの、よい素質を示す作家のゐることはよろこばしい。

文展には多くの作品があつめられ、量的にはすこぶる盛況をつげたが、概して表面的な技術にとどまり、内容と彫刻性の上から注目すべき作品にとぼしかつた。前述のほか時局的作品もかなりあらはれたが、旺な意氣を示さうとするものは空虚ないやみに陥るなど、あまり成功せず、また記念碑的な仕事への關心はほとんどみられなかつた。大家の不振は目だつところであるが、たゞ「夢」の作者建畠大夢の、若々しい熱のこもつた努力は注目されるところである。この作者はまた「恩師の顔」（東邦彫塑院展）の佳品を作つた。

なほ本年、主線美術協會の繪畫部解散にともなひ、その彫塑部が獨立して以前の塊人社にかへつ

たこと、所屬團體をもたぬ作家による文展第三部作家協會の結成などがあつた。

その他珍しい事件として世人の注意をひいたものに、朝倉文夫、北村西望、佐藤朝山の三名による和氣清麿公銅像製作問題があつた。

工 藝

昨年にひきつゞいて、本年の工藝界は、輸出工藝の振興にいよく全力を傾けた。産業工藝の部門が主としてではあるが、その方面の指導を擔當する商工省では、積極的な種々の施設、方策を講じた。多年工藝界の重要な行事として功績も多かつた商工展は、昨年度のものとして今春ひらいた第二十五回展を最後に廢止され、輸出工藝展と合體して、新に貿易局工藝品輸出振興展覽會が開設された。また別に貿易局輸出工藝圖案展を設けてその第一回がひらかれた。審議機關として官制による輸出工藝振興委員會の設置、あるひは外國人意匠家の招聘、工藝指導所の關西支所設置のこともあつた。對外的には、ニューヨーク、サンフランシスコ兩萬國博覽會出品のことはじめ、ニューヨークには工藝品のための出張所が設けられ、また本年度工藝品海外展示會が南米ブエノスアイレスでひらかれた。

大阪における大阪工藝振興展の開設、工藝美術輸出報國會の結成、各地方の中心地における輸出工藝獎勵展の開催など、一般に工藝界は、輸出振興の國策のため總動員された形である。それらの全般的な成績については、にはかに判断をゆるさ

ないが、各指導機關の代用品その他の材料研究や技術的研究の進捗とともに、さまざまな工夫がみられ、また日本固有の材料技法などに對する反省の徴候があらはれたことも注意される。たゞ輸出工藝を通じて、從來から缺陷とされる藝術的意匠の貧困は、なほまぬがれがたい状態にあることがみえる。その改善のために設けられた圖案展の豫想外の不成績も、種々の理由はあつたと推察されるが、一つには、今日その方面に有力な指導的頭腦を缺くことが痛感されるところである。

この時世にあつてなほ、材料制限の困難とた、かひつ、必しも輸出工藝を直接の目的としなない藝術的製作に、多くの作家が精進しつゝ、あることは心づよい次第である。いふまでもなく一品工藝の創作は、藝術的技術的に工藝の水準を高め、その源の涵養なくしては、産業工藝も輸出工藝も發達をのぞみえないからである。

本年の文展を概観して、かつて帝展工藝の非難された技術誇示の豪華趣味や、生硬な近代的惡趣味の傾向は、今日いちじるしく減少し、一般に落つきと品位をくはへ、傳統的な美に對する反省とともに、また清新な表現に成功を示すものなどが注意されたことは、よろこばしい現象であつた。鑄金に佳作多く、無文の美しさに對する關心がみられることなどは愉快である。概して金工は質の上でよい成績を示した。介川芳秀の「彫金鸞の圖二曲屏風」や増田三男の「銀鍍からたち文箱」などは、新人の新鮮な仕事として好ましい收穫である。漆器で本間莖華や松田權六の古典的な作風と

ならんで、山崎覺太郎が「蒔繪屏風(猿)」に示した近代趣味の一成功も興味をひかれた。新人のうちで磯谷阿伎良の「蒔繪文庫(花うつき)」は、作者のすぐれた素質を示して注目させるものである。陶磁、ガラスなどにもそれなく見るべきものがあるが、染織は少數をのぞいて、このみのよくないものが多かつた。

團體の活動は例年のとほり盛であつた。實在工藝美術會も、外見華々しくはないが、それだけ落ついた研究態度を示した。會員らもよく努力し、また本年は、アルミニウムなどの代用材料に種々の研究がみられた。大陸土俗工藝品の特別陳列を行つたことも附記される。國展の工藝部も特色ある活動を示して興味をひくものである。この會は藝術的な趣味性がかつて、工藝を技巧本位のお道具からすくつてゐる。

その他日本美術協會、京都工藝院、特殊なものでは日本漆藝院、工人社などから、少數の同人展にいたるまで、種々の展覽會がひらかれた。洋畫團體の春臺展や光風會も工藝部をおくが、未だ小規模のものにすぎぬ。東陶會は本年第十一回展をひらいた後解散したが、そのあとに日本陶藝研究會が結成されて第一回展をひらいた。また一部の作家によつて皐陶會が結成された。工藝と彫刻とをむすぶ日本陶彫協會が第一回展をひらいたことも記すべきであらう。大阪の創工社は展覽會をひらいた後解散し、その後形象工藝美術會が生れた。個展も種々催されたが、それらは多く陶磁、ガラスの類が多く、特殊なもので、大庭一晃のエツチ

ンググラス展、岩城硝子會社作品展などが注意された。

建築

前年來の、資材使用上の法規による種々なる制限、及び實際上の價格騰貴と、需給關係の非常な逼迫から、物質的には甚しい制限下にあつた本年度のわが建築界は、目だつ大建築こそ極く少數ではあつたが、小なりといへども、そのプランにおいて、意匠において、多くの優秀な作品を生んでそのたのもしい進展ぶりを示した。

諸種の建築に關する制限令公布以前から着手されたものには、本年度竣工したものでも相當の大建築があるが、それらの中では、すぐれた感覺で機能上の近代的諸要求をあくまでも合理的にそして明朗にまとめあげた、大阪中央郵便局（逓信省營繕課設計）を第一に、やはり合理主義ながら、細部には相當こつた構成をしめす上宮中學校（宇賀一郎設計）、合理性とモニュメンタリテイとを、まづ無難な方法で調和させてゐる日本赤十字社廣島支部（佐藤功一設計）、アメリカの新しい豪華様式を採用して、相當の成功を示した（地下室食堂におけるテラゾー壁の使用は、音響上の失敗であるが）糖業會館などが、特にあくべきものであらう。しかしながら、第一例をのぞいては、いづれも本年度の傑作とすべきものではない。

資材の窮窶さと諸規則による制限から、貸事務所をもつ大ビルディングに代つて、建築主自體の使用のための小さな鐵筋コンクリート建築、

あるひはそれと木造との結合による、小事務室建築の多數の出現は、本年度のいちじるしい現象であるが、多く合理主義を基準として、それに少しく裝飾をくはへたものである。玉置商店、柏原商店、森戸商店、竹中工務店などその代表的諸例である。

本年度は、特殊用途の建築にすぐれた仕事があるはれた。まづ第一にあくべきものは、生駒山青年道場（石川純一郎設計）である。丸太とその土地産出の石材を粗仕上げで使用した構造及び意匠、南から東へと曲線を描くプラン、寢臺をならべた二階と吹抜けのホールとの巧みな關係など、珍しい傑作といへる。ニューヨーク及びサンフランシスコの萬國博覽會における日本館も、とかくの評判があつたが、まづ推賞すべきものであらう。前者にあつては、日本館（内田祥三設計）及び國際館日本部の内部裝飾（山脇巖設計）が、後者においては日本館（岸田日出刀設計）が、日本の手によつてなされたが、日本館二つは、神社建築及び寢殿造りを近代化して歐米の環境に適合せしめ、同時に陳列場としての機能をも、よく發揮せしめてゐた。日本部の内部裝飾も、限られた空間をよく利用し日本のほこる竹を活用し、その他材料及びアイデアにおいて日本の要素をもちひながら、アメリカ人のよろこびさうな近代的効果をえた。クツペルハイムや託兒所にすぐれた建築のあらはれたのは、ひとり建築界のためのみならず、社會福利のためにもよろこばしい。すなはちクツペルハイムとしては、平凡ながら、よくその目的に

適した諸施設を完備した東星學園（守屋哲三郎設計）があり、託兒所には、日光のとりいれ方、地面の利用に非常にたくみなプランをもち、しかも安材料をもちひながら感じのよい外觀をもつ戸越保育所（岡師嘉彦設計）がある。

さらに特殊なものに、あるぜんちな丸一等船客室の室内裝飾（中村順平、村野藤吾、長谷部・竹腰事務所設計）がある。客船の室内裝飾を、歐洲の裝飾業者にまかせたり、室内裝飾には不得手な造船技師にさせたりして、内部設計がおとつてゐたのは在來の日本造船の缺點であつたが、本年はじめてすぐれた専門建築家に依頼して、成功したのがあるぜんちな丸であつた。

鐵その他諸金屬の使用制限と相まつて、次第に強まつてきた日本固有のものへの反省から、日本建築の徹底的近代化への努力が、住宅建築のみならず、商店建築（料理店、喫茶店をもふくめて）にもいちじるしくなつたのは、本年の注目すべき現象である。近代的な商店建築の諸條件（たとへば陳列窓）を、日本風に美しく解決した平野屋、抹茶を街頭に進出せしむるための工夫を、プランにも意匠にもみせた京都の一茶寮などが、そのすぐれた例である。

をはりに住宅についてのべる前に、ぜひ言及しなければならぬのは二つのホテル建築である。松島ホテル（吉田五十八設計）及び都ホテルの大宴會場別館（村野藤吾設計）で、ともに日本の建築要素を、立禮のホテル建築に近代的に驅使して成功してゐるが、ことに前者にあつては日本風を基調に

してゐる。

古來の日本の傳統を基調に、立禮の建築としてよりよく成功したものは、同じ吉田五十八のMO邸である。様式あるひは材料の上にも、精神の上にも、日本的なものを近代的立場から復活しようといふ努力は、住宅建築においては本年特にいちじるしく、坐禮の日本風建築にも、現代の高い生活文化と進歩した建築技術から、改良をほどこしたものによいものが相當多くみられた。

古美術その他

古美術保存に關する記録としては、本年度における國寶指定数は、繪畫二十四、彫刻十七、文書典籍書蹟九十三、刀劍十六、工藝二十、建造物三件、合計百七十三件、重要美術品等に認定されたものは、繪畫三十九、文書典籍書蹟百五十七、刀劍百四十、工藝品及考古學資料四十九、建造物十九件、合計四百四件であつた。また年度内に修理の完成した國寶建造物のおもなものに、法隆寺東院夢殿、同廻廊、興福寺東金堂などがあり、修理續行または着手したおもなものには、唐招提寺禮堂、教王護國寺金堂、法隆寺東院舍利殿及繪殿、同傳法堂などがある。政府の國寶修理補助金交付額は、建造物十八件に對して二十八萬五千七百七十二圓、寶物類二十三件に對して二萬五千四百九十九圓であつた。

舊二條離宮が京都市に下賜せられ、國寶、史蹟及び名勝として指定されたこと、天竺様遺構の貴重な一例とされる上醍醐の經藏が焼失したことな

ど、本年記憶さるべきことであつた。

法隆寺保存事業の進捗にともなひ、同寺金堂の壁畫保存問題の解決が急務となつたため、本年文部省内に法隆寺壁畫保存調査會が設置せられ、自然科學者をふくむ各方面の専門家をあつめて慎重な研究をとげることとなつたのは、すこぶる重要視されることである。また調査會では、とりあへず同壁畫十二面の原寸大の能ふかぎり完全な模寫を作ることを必要とみとめ、人選の結果、荒井寛方、橋本明治、中村岳陵、入江波光の四名の日本畫家にその執筆を依頼することとなつた。この模寫作製は明年着手されるはずで、美術界空前の壯舉としてその成果が期待されてゐる。

發掘、調査事業として記録されるものに、滋賀縣當局による大津京址の調査、樞原神宮御造營にともなふ考古學調査、日本古文化研究所により繼續中の藤原宮址の發掘、石田茂作による法隆寺若草伽藍址の發掘などがあり、朝鮮では石田茂作を主査とする扶餘の發掘、滿洲國では同國政府の事業として、羽田亨博士を主査とするワリーマンハ陵の調査並に杉本哲郎による摸寫、北支では原田淑人博士を主査とする大同附近北魏平城址の調査などが行はれ、それゝ貴重な成果をあげた。

その他の研究事業として、瀧精一博士らによる當麻曼茶羅の原寸大寫眞撮影が行はれ、科學的な實物研究が三年計畫で着手されたことも特記さるべきであらう。

多年落着をみない法隆寺建立年代に關する論争が、また新たな觀點から行はれて本年の學界をにぎ

はした。足立康博士の法隆寺新非再建論は從來の諸説に新説をくはへたもので、これをめぐつて種々の論説が行はれ、喜田貞吉博士が足立博士立會のもとにこれに論評をくはへるなど、すこぶる活氣を呈した。なほ多年失はれてゐた若草伽藍の塔心礎が、所有者野村徳七の義舉によつて原位置に返戻されたことは、學界のためにもすこぶる喜ばしいことであつた。

帝室博物館はじめ、諸博物館、美術館などいづれも常のごとく活動をつゞけ、常設または陳列がへによる展覧を行つたほか、古美術その他に關する幾多の特別展覧會などを催した。古美術については、東京帝室博物館の伯林日本古美術展覧會記念展覧會、奈良帝室博物館の螺鈿を中心とする髹漆工藝展覧會、恩賜京都博物館の 後鳥羽天皇七百年記念拜展、長崎派寫生南宋畫展覧會、海北友松展覧會、能衣裳展覧會、大阪市立美術館の支那美術大展覧會、第四回名寶展、白鶴美術館の五月及び十月の展覧などがあり、外國美術については大阪市立美術館の泰西名畫第二回展があり、また特殊なもので、日本民藝館が度々特別展覧を行つて活動したことも注意された。

本年特記すべきものに陽明文庫創設記念展覧があつた。近衛公爵家につたへられた什寶を保存する、財團法人陽明文庫が設立されたのを機會としてそれらの秘寶をはじめて公開されたもので、學界を益するところすこぶる多大であつた。

現代美術館の建設は、かねてから美術界一致の要望であるが、現在では李王家美術館が最も活動

を示し、その他には大禮記念京都美術館、帝室博物館の表慶館などが幾分その機能をはたらかせてゐるにすぎず、ことに中央における缺陷が痛感されるところである。本年芝田東京美術學校長、正木直彦、その他代表的な作家數名の連署をもつて東京市の紀元二千六百年記念事業の一として現代美術館を建設されたいとの建議が、市長あてに提出されたことは、すこぶる時宜に適したものであり、その實現は衷心切望されることである。

なほ朝鮮總督府では、始政二十五周年記念事業として綜合的な大博物館建設計畫中のところ、時局のため工事中止のやむなきにいたつたが、そのうち美術館だけは本年竣工して使用されることとなつた。もつとも美術展覽會場としてもちひられるものである。

明年、紀元二千六百年を迎へるにあたり、これを奉祝記念するさまざまの事業が、紀元二千六百年奉祝會をはじめ、全国各地で計畫あるひは着手された。それらのうち、日本文化大觀編修會、國史館造營委員會などの官制が制定され、それらの事業がすゝめられてゐる。美術については、明年は文展を休止し、紀元二千六百年奉祝會と文部省との共同主催によつて、紀元二千六百年奉祝美術展覽會をひらく計畫が成立した。明年早々その準備がすゝめられるはずである。

美術展覽會

一月

武藤完一油繪個展

一月一日—三十一日 大分・キムラヤギャラリー

新自然派協會第四回展(洋)

一月三日—七日 銀座・松坂屋

小城基の指導する同會はその第四回同人展を有馬農林大臣の後援を得て開催した。「土の美術特輯」と題し、滿洲、朝鮮、臺灣、内地等の農村生活に取材した作品七十餘點を發表した。

授賞 有馬農林大臣賞 三上亨、腰山實政、新自然派協會賞 田村鳳堂、陳巖

勝田寛一作品發表展(洋)

一月四日—八日 大阪・三角堂

京都昭和工藝協會作品展

一月四日—九日 大阪・三越

漢口攻略戰從軍スケッチ展(洋)

一月四日—十日 銀座・三越

橋本做郎、高井貞二兩名の素描、淡彩による從軍スケッチを陳列した。

商工省工藝指導所第二回東北北海道巡回工藝展

一月八日—九日 福島市・公會堂

商工省工藝指導所では同所の試験研究の普及並にその實地指導の徹底を期するため、一昨年、東北北海道地方に最初の巡回展を開いたが今回その第二回展を、福島市を振り出しに、順次、若松、酒田、秋田、青森、盛岡、札幌、旭川、仙臺の各都市に開催した。陳列種目は戦時代用品の各種試作品及び輸出工藝の参考資料—南米ブエノスアイレス向の同所の試作品及び海外蒐集品—等、計

五百點を算へた。尙展觀に併せて各地に講演會を開き、地方業者の啓發に努めた。

武藤雙菟集泰西版畫展

一月九日—十六日 大阪・松坂屋

柏舟社第一回日本畫展

一月十日—十四日 銀座・松坂屋

故土田麥德門下の林司馬、新見虚舟等六名が新に組織した同人展。

塚本茂濤歐作品展(洋)

一月十日—十四日 銀座・松坂屋

從軍畫家スケッチ展

一月十日—十四日 銀座・松坂屋

向井潤吉、大橋城、鈴木榮次郎、瀬野覺藏、麻生豊、太田三橋等の從軍スケッチを陳列した。

仲田菊代個展(洋)

一月十二日—十六日 大阪・美術新論社畫廊

中村直人從軍畫展(日)

一月十二日—十六日 名古屋・松坂屋

原生社第三回洋畫展

一月十三日—十五日 銀座・紀伊國屋

伊藤筈堂新戰場畫展(日)

一月十三日—十七日 日本橋・高島屋

高島屋主催。海軍々事普及部囑託として上海、南京、青島方面に從軍して得た寫生畫二十八點を展觀した。

現代女流美術展(洋)

一月十三日—十九日 新宿・月光莊

六雲會洋畫展

一月十三日—二十二日 大阪・阪急百貨店

北島淺一個展(洋)

一月十四日—十七日 數寄屋橋・日動畫廊

油繪小品約四十點を陳列した。

新制作派協會第三回展(洋)

一月十四日—二十九日 大阪市立美術館

川原隆夫近作個展(洋)

一月十五日—十九日 京城・三越

榜會小品畫展(日)

一月十六日—二十日 大阪・三越

福田眉仙日支事變戰蹟展(日)

一月十八日—二十二日 神戸元町・畫廊

羊和會彫金展

一月十九日—二十三日 日本橋・三越

天地會記念美術展(洋)

一月十九日—二十三日 銀座・三越

故子爵黒田清輝の十五周忌に際し舊奏橋洋畫研究所の末期出身者が集り、同人展を開いた。作品八十餘點及び黒田の遺作十餘點を陳列した。

吉田博、佐々貴義從軍寫生展(洋)

一月十九日—二十三日 上野・松坂屋

陸軍省囑託として中支方面に從軍した吉田博、佐々貴義兩名の前線スケッチ計百五十點を陳列した。

横堀木黃色紙小彩展(日)

一月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

高島屋主催。春陽會の會員、木黄横堀角次郎は花卉を主とした日本畫約五十點を陳列した。

朱弦會第一回展(日)

一月十九日—二十四日 日本橋・三越

故小堀鞘音門下の革丙會々員の一部分が新に組織した大和繪研究の會で作品二十一點を陳列した。

「小堀鞘音門の新人に對して安田敬彦、川崎小虎等が援助した最初の會、強い樹枝に芳香を聽かせてゐる取彦の「紅梅」は注意のよく行届いた畫技のうまさ語る作品、小虎の作品では素直な「兔」の手法と、「冬瓜」に示した趣味のや、失せた近業に先づ好意を寄せざるが、「海芋」は凡作、伊東紅雲の「曉霧」小

堀安雄の「名馬」森戸果香の「新羅三郎」はいづれも線描の弱さに難はあるが森戸のつきつめて行く作畫態度に好感を持つ、その他「村上義光」を描いた磯田長秋の努力も目にはつく(東朝一・二二)

栗原忠二遺作展(洋)

一月十九日—二十四日 日本橋・三越

昭和十一年に逝去した第一美術協會、英國王立美術協會々員、故栗原忠二の遺作六十餘點を展覧した。油繪、水彩畫、素描等、滯歐作品が多く、ターナーを慕ひ、ブランクンに師事した故人の特色ある畫風が示されてゐた。

「英國に長らく學んだこの作家の畫業の一端は、この六十餘點を以て先づ知ることが出来る。大作から小品に至るまで纏りの缺けた陳列には難はあるが、印象派風の「風景」や、端的に對象をつかんだ畫技等器用さは多分に認められ、小品「波浪」の迫真力もあるが、掘り下げて行くことが不足して、生前割合に不遇だった事は惜しい。(龍・東朝)

日本陶彫協會第一回展

一月十九日—二十四日 日本橋・三越

沼田一雅を中心に數名の陶彫家が組織した同會の第一回展で、同人の小品を陳列した。多くは彫刻としての本格的な製作に至らず、工藝的置物に留まるものであつたが、加藤顯清、小川雄平、沼田一雅等の出品が注意をひいた。

昭和美術會第十二回展(洋)

一月二十日—二十二日 銀座・資生堂

一星會第一回洋畫展

一月二十一日—二十五日 大阪・美交社

美交社主催

現代大家新作小品畫展(日)

一月二十一日—二十五日 大阪・三越

堂本印象近作展(日)

一月二十二日—二十四日 芝・東京美術俱樂部

「京都の美術商林新助氏が此數年來堂本印象氏に揮毫を要請して、夫々顧客の收藏する處となつた作品二十餘點を蒐めて一

月廿二日より廿四日迄芝の東京美術俱樂部に陳列美術愛好家の鑑賞に供したが此の陳列は素より印象氏が個展として世に問ふ意圖を以つて描かれたものではないのであつて、是を以つて最近の印象氏作畫の全傾向を示すといふ事は出来得ない。然しながら林氏が一旦所藏家の床の間に納まつたものを斯く一堂に蒐めて世に發表せる抱負などよりしても此の陳列作品が如何に印象氏の平常作として快心のものであるか窺はれる。(塔影一五ノ三記事抜萃)

三條會作陶展

一月二十二日—二十七日 大阪・三越

會員は伊東陶山、楠部彌次、道林俊正、宮永東山、宮永友雄の五名。陶器二百餘點を陳列した。

長谷川春子個展(洋)

一月二十四日—二十七日 銀座・資生堂

「ニムフ浴泉」「春夜興」「蘭とシヤム猫」等をはじめ近作の油繪十六點を發表した。色彩感覺に特徴を有し、一種手なれた巧みさが認められた。

陶彩會第一回陶器展

一月二十四日—三十一日 日本橋・三越

三越主催。大森光彦、伊藤翠壺、加藤華仙、柄本曉舟、松本佩山其他の出品を請ひ、各地方の陶技の特徴を比較鑑賞すべく試みたもの。

池五郎、橋本太久磨戦線スケツ子展(洋)

一月二十五日—二十九日 新宿・伊勢丹

銃後女性手工藝品展

一月二十五日—三十日 新宿・三越

鈴木千久馬繪畫研究所展潮會第一回洋畫展

一月二十五日—三十日 新宿・三越

東光會洋畫小品展

一月二十五日—三十日 日本橋・三越

會員、會友の小品七十餘點を陳列した。

西洋骨畫品展

一月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

朱玄會第二回展(洋)

一月二十五日—三十日 日本橋・三越

同人の宮本三郎は外遊中で出品せず、田村孝之介、栗原信の二名が油繪計三十餘點を出品した。ともに手なれた技術をみせたが、色彩が通俗に傾く懼れがあつた。

二世五姓田芳柳水彩畫展

一月二十五日—三十日 大阪・關西畫廊

關西畫廊の主催で、二世五姓田芳柳の水彩畫、概ね明治十六年より三十五年頃迄の舊作三十餘點を陳列した。

新美術家協會會員富士山展(洋)

一月二十五日—二月三日 銀座・銀座一畫廊

岡常次洋畫展

一月二十六日—二十九日 銀座・紀伊國屋

鮮展審查員日本畫展

一月二十七日—三十一日 京城・三越

ZAN圖案作家群展

一月二十八日—三十日 銀座・紀伊國屋

二月

原田直康個展(洋)

二月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

童寶美術院第九回展

附第六回大東京女學生製作お人形展

二月一日—七日 日本橋・三越

同院主催、文部省、東京府、東京市後援、童心を表はし得るやうな藝術の發達普及を目的とし例年開く公募展で、人形を主とし外に日本畫、洋畫、彫刻、玩具、工藝品等の入選作を陳列した。尙今回は京都の人形團體柳櫻會の参加出品があつた。

常盤會女流作家人形玩具繪展(日)

二月一日—七日 新宿・三越

西澤篤敏蒐集鮮滿支土俗玩具陳列

二月一日—七日 新宿・三越

新進作家日本畫展(日)

二月一日—七日 日本橋・三越

三越主催、鑑賞界の新進三十七名の作品八十三點を陳列した。吉岡堅二、福田豊四郎の諸作は様式化の故に會場効果を擧げ、その他山崎豊、加納三樂、勝田哲、林司馬、磯田又一郎、坂口一草等の出品が夫々の特色をみせた。

東京、京都の日本畫の新進を動員して各自尺三の整を標準に三點以内のものを描かせてならべた。

想像するに少し粒のよい邦畫展と云へば値が進んで何れも數百金、數千金をよび、特別な鑑賞家だけしか手が出せない。そこであちこちに不平や不満の嘆聲があがつて、その状態がなめらかでなくては、と今一つは、催主側から云つても今日相當な作品のものを揃へるといふ事は到底不可能であり、又いつ迄もその同じ状態を續けて居たのでは仕方がないといふやうな内外の兩因遂に三越をして此の企をやらせるに至つたものであらう。でこの話を受けた作家達は、盡く早天の慈雨好機の到來となしてそれ／＼に精一杯の勉強をして見せた。然し概してその平生においての掛物に對する經驗の不足とその心持の一時的過度の緊張とがそれ／＼に思ふやうな仕事をさせるに至らなかつた様である。(素心庵・中外商業)

靑島萬國博覽會出品畫展(日、洋)

二月一日—七日 日本橋・三越

ニューヨーク萬國博覽會日本館に出陳すべき現代畫については、商工省から帝國藝術院會員に依頼して作品を蒐め發送することとなつたが、それに先ち國內における展示會を開いた。陳列されたものは左記目錄の通り二十點。日本畫では橋本關雪、鏡木清方、横山大觀、松林桂月、小林古徑、洋畫では岡田三郎助、藤島武二、小杉放庵の諸作が新作で、他はいづれも發表されたことのある舊作である。作品の一本はそれ／＼の作家の特色を示す力作であり、名作として世人に記憶されるものもあるが蒐集に何等の計畫なく、漫然と集められたこれだけの作品が現代の日本繪畫を代表させるものとして、米國に送られることの如何に不適當であるかは、何人も痛感した

所であつた。

目錄

踏猿	橋本 關雪	河口湖群	岡田三郎助
雨餘	西山 翠峯	龍宮の婚約	中村 不折
鶴御ノ圖	川合 玉堂	北京萬壽樓	中澤 弘光
舞踊鏡獅子	鏡木 清方	霧島	梅原龍三郎
夕日	橋山 大觀	姉妹	山下新太郎
春宵花影	松林 桂月	十和田湖	安井曾太郎
雪	小林 古徑	東海旭光	藤島 武二
麥 掘	菊池 契月	俗	小杉 放庵
深 光	結城 素明	江南ノ春	有島 生馬
晚春行樂	石井 柏亭	子守歌	南 薰造

日本民藝館東北各地表類展觀

二月一日—二十六日 駒場・同館

蒐集の表類は青森、秋田、山形、岩手四縣にわたり、現在使用のもので、その他東北の民藝品を陳列した。

日本人形社主催新作人形展

二月二日—七日 銀座・松屋

白日會第十六回美術展(洋、彫)

二月二日—十二日 東京府美術館

會員會友を併せて七十餘名を擁する同會の公募展で、繪畫、彫刻を併せ四百七十餘點を陳列し、別に會員大久保喜一の油繪及び事變で戦死した灰野文一郎の戦線風物畫の特別陳列を行つた。油繪では中澤弘光、富田温一郎、香田勝太等は寫實的な畫風で變らず外に篠原薫、野口良一、青山龍水等の諸作が擧げられ、又水彩畫で小堀進が注意されたが、一般に粗製の作が多く、技術の低さを免れぬ憾みがあつた。彫刻部は永原廣、岩崎良平、吉田三郎等が主な會員であるが、繪畫部に比して更に不振の状態にあつた。

應募出品 洋畫二一一五點(八一七名)、彫塑一〇五點(三五名)

入選 洋畫二六一點(一九七名)、彫塑二一點(一〇名) 陳列總數 洋畫四三五點、彫塑四〇點

授賞 白日賞 結田信、白濱千秋、山内邦義、小田寛一、船岡賞以下略

春臺美術第十四回展(洋、工)

二月三日—二十日 東京府美術館

本郷繪畫研究所の恆例の藝展で、今回は洋畫のほか工藝部の陳列を行ひ、又特別陳列として今事變に従軍した小室孝雄、江藤純平、岩崎良平、中村研一、伊原宇三郎、瀬野覺藏、山崎坤象等八名の油繪、水彩のスケッチを一室に出品した。例年の如く辻永、中村研一、伊原宇三郎、有馬さとえ等先輩の出品があり、會長岡田三郎助は「河口湖鶴ノ鳥」を出品したが岩繪具を使用した格調の高い作品であつた。其他伊藤藤三、大森商二、高宮一榮、和田清等が擧げられる。工藝部は岩田藤七の硝子器が陳列の主要なものであつた。

陳列總數 洋畫二四九點、工藝五八點

春臺特賞 田村一男 春臺賞 西村愿定、秋元松子、漆田廣作、中野菊夫

伊川寛洋畫展

二月四日—六日 神戸・畫廊

高木勇次第一回個展(洋)

二月四日—八日 銀座・三味堂

春陽會の出品者として近年注目されてゐる作家で、最初の個展を開催、油繪二十點を發表した。色彩は明るく描寫に或る明敏さを示した。「切斷」「北窓遠望」が擧げられる。

白日會會員會友小品展

二月四日—十日 新宿・月光莊

第二十五回商工省工藝展

二月五日—十一日 丸之内・東京府商工獎勵館

昨春開かれる筈であつた商工省工藝展は都合により延期されて本年からは機構が改められ貿易局輸出工藝展と合體することになつたので、多年工藝界の重要な行

事の一として親しまれ、わが工藝發達の上に多大の功績をあげて來た商工展は今回を最終として以後廢止されることになつた。

出品受付數一四三五點(六五四名)、入選數六二二點(四〇四名)でその内譯は圖案二五、金工二〇、陶磁硝子一〇七、染織五八、木竹六九、漆器一六八、雜七五點である。その他に審査委員出品五、元審査委員出品四、無鑑査八、計十七點が併せ陳列された。授賞は左の通りで過去二十四回の中六回しかなかつた一等賞が七年振り今回授與されたことも特記される。

圖案	金工	陶磁硝子	染織	木竹	漆器	雜	合計
一等	三	一	一	一	一	一	八
二等	二	三	一	一	一	一	四七
三等	三	二	一	一	一	一	二二
褒狀	三	三	一	一	一	一	一七八
計	六	六	二	二	二	二	

一等賞「瑞穂岡手織錦振袖」京都山鹿清華
 商工大臣賞、並二等賞「葡萄圖花瓶」長野宮坂房衛、
 二等賞「志野袖草花文陶筒」愛知加藤華仙、「服飾の研究圖案」京都福永俊吉、「木象笹衝立」富山中島李堂、「小判一閑張手文庫」愛知三輪經行、「梅模様丸型鑄銅水盤」東京會田富康、「鑄銅花瓶」埼玉木村庄太郎、「銀華文様飾棚」富山野口余詩呂、牧野義孝

尙同展覧會は二月二十四日より三月二日まで京都、三月十四日より二十日まで名古屋で開催された。

新虹會日本畫第二回展

二月七日—十日 新宿・伊勢丹

大貫松三洋畫個展

二月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

加藤溪山第二回青磁百陶展

二月七日—十二日 日本橋・高島屋
 林重義紙本淡彩展
 二月八日—十一日 神戸・畫廊

巴人社第六回展(洋)

二月八日—十二日 銀座・紀伊國屋

彩交會第二回繪畫展(日)

二月九日—十一日 名古屋・松坂屋

名古屋に在住する京都繪畫專門學校の出身者が主になつて開く同人展。

小早川清風俗畫展(日)

二月九日—十二日 銀座・松坂屋

綵尚會第一回展(日)

二月九日—十二日 銀座・松坂屋

關尚美堂の肝入りで文展、院展の受賞級作家十二名を以て新たに組織した會。山本丘人、新井勝利、奥村厚一、橋本明治等の出品が挙げられるが、概して不振に終つてゐた。

紐育萬國博覽會本邦出品物展示會

二月九日—十二日 東京府美術館

ニューヨーク萬國博覽會へわが國からの出品物は、商工省及び紐育桑港萬國博覽會協會で銓衡蒐集中であつたが、工藝品についてはサンフランシスコ萬國博覽會出品と共に舊臘展示會を開いて既に發送を終り、現代繪畫は既述の如く本月初展展示會を開き、その他残りの物全部が揃つたので發送に先ち最終の展示會を開いた。

ホール出品物では日本漆工會の「漆蒔繪衝立」高さ一尺、幅二十三尺のもの、日本中央蠶糸會出品、三越製作の「絹刺繡額面(日本の四季)」方十七尺のもの四面、蠶糸部では山名文夫構成、オリエンタル寫眞工業株式會社製作の蠶糸業を示す寫眞壁畫、日米國交參考部では御木本幸吉出品の眞珠製「自由の鐘模型」、國際館(カヴァード・スペース)日本部では紐育桑港萬國博覽會觀光關係出品協會出品、六櫻社製作の寫眞壁畫「秀嶺日本」、同山

脇生天泉個人展(日)
 二月九日—十二日 銀座・松坂屋
 尾上柴舟の賛入作品を混ぜ、近作三十五點を發表した。

朝日洋畫會第一回展

二月九日—十三日 大阪・朝日會館

大阪朝日新聞社社會事業團主催。京阪地方在住の素人畫家の會で、出品者六十八名、陳列數百五十餘點。

林文塘繪畫展(日)

二月九日—十四日 大阪・三越

三越主催で近作三十點を陳列。人形たかね會展
 二月十日—十五日 新宿・伊勢丹

小品彫塑展

二月十日—十七日 大阪・阪急百貨店

棚橋慶心堂主催東西中京作家日本畫展
 二月十一日—十二日 名古屋・後藤版畫店

松聲會試作展(日)

二月十一日—十二日 大阪・松聲庵畫園

沙果會洋畫展

二月十一日—十七日 新宿・伊勢丹

新制作派中堅作家展(洋)

二月十一日—十七日 新宿・月光莊

從軍スケッチ展(日、洋)

二月十二日—十六日 京城・三越

水清公子個人展(洋)

二月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

岡藤園新作畫展(日)

二月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

二月十四日—十九日 大阪・大丸
備前焼名工作品第二回展

二月十四日—十九日 日本橋・高島屋
玉置鏡石作品展(日)

二月十五日—十七日 神戸・畫廊
斑丘社第三回展(工)

二月十五日—十九日 上野・神戸屋
東京美術學校工藝科昭和十年度卒業生を以て組織する
同會々員の作品展。

愛染會染色工藝展

二月十五日—二十一日 大阪・阪急百貨店
勝間田武夫第一回洋畫展

二月十六日—十七日 銀座・交詢社
大禮記念京都美術館春季展觀

二月十七日—三月三日 京都 大禮記念京都美術館
同館蒐藏の繪畫、彫塑、工藝品を陳列し、一般の參考
に資する爲右繪畫の草稿、下圖、寫生類をも出品した。

小品彫刻展

二月十七日 大阪・阪急百貨店
徳岡神泉、奥村土牛、太田聰雨三人展(日)

二月十八日 京都・梅軒畫廊
新道繁洋畫展

二月十八日—二十二日 大阪・美術新論社畫廊
郷土一流洋畫家展

二月十八日—二十二日 神戸・畫廊
石川欣一郎小品展(洋)

二月十八日—二十四日 大阪・關西畫廊
寺田蘆秋繪畫展(日)

二月十九日—二十二日 大阪・三越
伊藤慶之助洋畫展

二月十九日—二十二日 神戸・畫廊
神戸畫廊主催、北海道の旅行作品を主として油繪二十
點を陳列した。

美術展覽會(二月)

美光會油繪展

二月十九日—二十三日 大阪・松坂屋
光風會第二十六回展(洋、工)

二月十九日—三月五日 東京府美術館
舊帝展系の作家を擁する同會恆例の公募展で、洋畫の
外に工藝を陳列した。例年に比して新人達の徒らな大作
が減つたことは甚だ宜しく、その點或る充實した勉強振
りの認められるところがあつた。併しながら一方新進の
製作の多くが畫面の末梢的な效果本位に終り、多くの弱
點を伴ひつゝ、傾向として停滯の憂ひにあることを見逸し
難い。先輩では南薫造の「海」、辻永の「果物」、小林萬吾
の二點、小澤源太郎の「遊園地の朝」、中村研一の「よせ
くる波」、中澤弘光の二點等が夫々の畫風を見せ、新人で
は井手坊也、伊藤四郎、山崎坤象、石川滋彦、高宮一榮
木村八郎等が特徴のある仕事を見せて注意をひいた。工
藝部は山形駒太郎、長安右衛門をはじめ染織の出品が主
で、革工品、刺繡も見られ、外に杉浦非水が圖案繪額を
出品した。

搬入敷三八八八點、入選敷二六八點、陳列總敷繪畫三
七五點、工藝五七點

光風特賞 伊藤四郎、光風賞 池田快造、光風工藝賞
中橋悦子、遠藤虛籍、工藝賞 辻光典、高田正二郎、
F氏賞以下略

新會員 石川滋彦、井手坊也、伊藤悌三、川端實、岩
崎勝平

新會友 池田快造、藤彦右衛門、戸塚孝三郎、瀬戸千
代三、中上川蝶子

柏舟社繪畫展(日)

二月二十日—二十三日 名古屋・松坂屋
島津マネキン新作展

二月二十一日—二十二日 大阪・朝日會館
沈蘭留第八回展(彫)

二月二十一日—二十六日 日本橋・高島屋

白甲社第四回展(日、洋、版、染)

二月二十一日—二十六日 京都・大丸
小杉放庵新作展(日)

二月二十二日—二十五日 大阪・高島屋
「春苑」「秋溪」「野梅」等近作十餘點を陳列した。

吉田白嶺新作木彫展

二月二十二日—二十五日 大阪・高島屋
京都諸大家新作日本畫小品展

二月二十二日—二十七日 大阪・阪急百貨店
高間惣七洋畫展

二月二十三日—二十七日 大阪・美術新論社畫廊
淡友會第一回展(洋、彫)

二月二十三日—二十七日 福岡・福岡日日新聞社
海軍從軍畫第二回展(洋)

二月二十三日—二十七日 日本橋・高島屋
海軍協會主催、海軍省後援。南京陥落後に從軍した小
早川篤四郎、古島松之助、三國久、高橋亮、齋藤八十八
神津港人、佐藤克三、伊藤三壽、御厨純一、小嶺伸、清
水七太郎、服部正一郎、草光信成、山崎省三、小林茂、
與七朗、吉田三郎、横江嘉純、奥瀬英三、三上知治、鶴
田吾郎等の作家二十一名の作品百五十餘點を展覧した。

概ね中支那沿岸の上陸戰跡、海軍根據地、艦上風景等を
描いたスケッチの小品で、別に海軍省囑託畫家、石井柏
亭、田邊至、中村研一、藤田嗣治等の賛助出品があつ
た。

東京表裝師組合第十七回展

二月二十三日—三月五日 東京府美術館
東京表裝組合の第十七回展で、正木直彦を審査長に推
し、主査に香取重吉が當り、入選無鑑査を併せ三百四十
八點を陳列した。

表展賞 新井清吉、推薦 松谷定之助、根岸福太郎、
銀賞 伊藤寛、片岡壽三郎、銅賞十五名、褒狀三十名
角谷二葉堂主催第八回新作畫展(日)

二月二十一日—二十六日 日本橋・高島屋

二月二十一日—二十六日 日本橋・高島屋

二月二十一日—二十六日 日本橋・高島屋

二月二十一日—二十六日 日本橋・高島屋

二月二十四日—二十六日 芝・東京美術俱樂部
フォルム第七回展 (洋)

二月二十四日—二十七日 銀座・資生堂
同人・大橋城の從軍畫その他を陳列した。

香川縣立工藝學校生徒作品第六回展

二月二十四日—二十七日 大阪・三越

商工省第二十五回工藝展

二月二十四日—三月二日 京都・大禮記念京都美術館

井井會第二回新作發表會 (日)

二月二十五日—二十七日 日本橋・東美俱樂部

井南居宮崎政近の主催する新作展で、出品者は東京の廣島晃市、堅山南風、木村棲雲、奥村土牛、田中咄哉州及び京都の小野竹喬、山口華楊、金鳥桂華、宇田荻邨、徳岡神泉併せて十名である。二尺五寸横物で揃へ、晃市の「芍薬」、華楊の「叭々鳥」、南風の「惜春」等面白く見られたが、東京展では出品が揃はなかつた。

吉田博從軍寫生展 (洋)

二月二十五日—二十七日 大阪・松坂屋

旺玄社員會友小品展 (洋)

二月二十五日—三月一日 新宿・月光莊

旺玄社第七回展 (洋)

二月二十五日—三月六日 東京府美術館

牧野虎雄を中心とする同會の公募展で、油繪、水彩、版畫等三百三十七點を陳列、別に昨年蒙強に旅行した會員深澤省三の繪畫三十六點及びその蒐集になる綏遠銅器二百點、鼻煙壺五十八點を特別陳列した。

牧野虎雄の「柿」「松」「水仙」等は例の東洋的な風格を持つ面白い作。「牧野虎雄は最近點描で軽い筆へ味を盛つた風景畫などを描いてゐるが、今度の出品畫など非常にねばりのある明るい色彩を用ひ、空間を半透明色で克明にぬりつぶしてゐるし『水仙』は奥行のある作だ」(都評)その他會員では甲斐仁代、遠山陽子、塚本茂、

橋作次郎等の寫實的な製作を擧げ得る。

旺玄社賞 田中川鶴子

入選 一七〇點 (一一〇人)

八千草會第七回展 (日)

二月二十八日—三月五日 大阪・大丸

現代諸家小品畫展 (日)

二月二十八日—三月五日 大阪・大丸

澤田宗山作陶個展

二月二十八日—三月九日 京都・大丸

日本民藝館主催現代日本民窯及琉球古陶器展觀

二月二十八日—五月七日 駒場・同館

全國に於て目下產出されつゝある傳統的な陶器凡そ二百五十點を展觀した。窯数は四十二箇所に及び、中で薩摩苗代川、豊後の日田のものなどが異彩を放つてゐた。北方は概して生子薬を用ひ、南方は多彩的なのが特徴である。琉球の古陶器は同館蒐蔵のもので、手法の變化に富む琉球窯の特色を窺はしめた。

三月

新井謹也作陶陳列會

三月一日—四日 日本橋・三越

三越主催、新作百餘點を陳列した。

加藤靜兒新作展 (洋)

三月一日—四日 數寄屋橋・日動畫廊

京都作家小品畫展

三月一日—四日 大阪・三越

帝國藝術院會員油繪展

三月一日—五日 大阪御堂筋・青樹社

「東京銀座青樹社は今回大阪御堂筋ガスビル北に大阪支店を開店することになり、披露のため帝國藝術院會員の油繪展を開催中、陳列品には石井柏亭氏の『淺春』、岡田三郎助氏の『東伊豆』、中村不折氏の『雨後の渡』、中澤弘光氏の『海』、安井曾太郎氏の『秋の奥人瀬』、梅原龍三郎氏の『榮の尾』、山下新太郎氏の

「早春、藤島武二氏の『海』、有島生馬氏の『冬の富士』、南薫造氏の『犬吠岬』などあり、他に和田三造、和田英作、小杉放庵氏らも出品する」(大朝)

秋口保波洋畫個展

三月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

故青柳喜兵衛遺作展 (洋)

三月一日—五日 福岡・福岡日日新聞社講堂

昨年三十五歳を以て逝去した故青柳喜兵衛の遺作展が母校福岡商業學校同窓生の組織する遺作展後援會の主催で開かれた。陳列畫は油繪九十點、デッサン五點であつた。(福岡日日)

今尾景年遺墨展觀 (日)

三月一日—六日 大阪・十合

そこう美術部が主催で、今尾景年の指導のもとに故人の遺墨を展觀した。

「明治、大正年代四條派の習俗として帝室技藝員として日本畫壇に重きをなした故今尾景年畫伯の遺墨展、畫伯逝いて十五年いろいろの意味でその遺作の多くに接することのできるは嬉しい。今尾家所蔵の晩年の名作『狸々』をはじめとして出陳作品約百點、清雅著實の趣致をもつて聞えた同畫伯の高格な作風を遺憾なく偲ぶことができる」(大毎)

龜井藤兵衛日本畫展

三月一日—七日 京都市寺町・芸艸堂畫廊

田川勤次個展 (洋)

三月一日—七日 大阪・阪急百貨店

麗松會第三回漆藝展

三月一日—七日 大阪・松坂屋

松坂屋主催。出品者は東京、京都、大阪、香川、石川等の漆藝家四十餘名。

東京高師圖畫研究科卒業記念繪畫展

三月一日—十日 東京高師圖畫科教室

三驅會第一回洋畫小品展

三月二日—六日 新宿・月光莊

青丘會第四回新作日本畫展

三月三日—五日 日本橋・高島屋

高島屋の主催で、奥村土牛の「大原所見」、徳岡神泉の「春曉」、太田穂雨の「祇園富菊」、その他瀧上遊龜、山口華楊の作を陳列した。

兒玉希望近作展(日)

三月三日—五日 大阪・松坂屋

松林桂月個展(日)

三月三日—五日 大阪・高島屋

近作二十三點を陳列した。

早春社第二回展(日)

三月三日—五日 京都・大丸

菊池契月鑿繪畫展

三月三日—六日 名古屋・松坂屋

「契月門下の宇田萩郷、登内微笑、松元道夫、板倉星光、菊池隆志諸氏をはじめ山口玲燕、磯田又一郎、案本武雄、後藤貞之助氏ら新進四十餘氏は契月畫伯の優作を中心に三日から六日まで名古屋松坂屋に同展を開催した。」(大朝)

東京みつゑ會第十回記念展(洋)

三月三日—七日 新宿・三越

佐藤章第四回素描展(洋)

三月三日—七日 銀座・紀伊國屋

京都畫壇諸大家第三回春季日本畫展(洋)

三月四日—五日 京都・大丸

武者小路實篤個展

三月四日—八日 銀座・三味堂

鬼面社第一回洋畫展

三月四日—九日 銀座・三越

大久保作次郎を中心にその門下が組織した會の同人展瀧澤邦行「櫻花寫生圖」展(洋)

三月四日—六日 美術研究所

美術懇話會は三月の例會に於て瀧澤邦行筆の櫻花寫生圖を陳列し、併せて三上參次、三好學兩博士の櫻に關する講話を行つたが、引續き五、六の兩日之を一般に公開した。作者は多年全國各地の櫻花の生態に就て研究的な

水彩寫生圖を作製、今回初めて發表したものである。

水田竹園個人展(日)

三月五日—十日 日本橋・三越

南畫家水田竹園が近作の花鳥山水二十點を陳列、淡彩で、奇のない寫實に依るもの。「間題清供」「紫蝦黃柑」などが擧げられる。

「日本南畫院解散以來、殆んど瀟隱の形であつた京都の水田竹園氏が、久しぶりにその近相を個展に托して繪覽させた。氏の畫的態度は已に凝成の域に達してゐる、その理念といひ、その感性といひ、共に別に新しくは動いて居ない。従つてその全體としての表現も亦さまで變化を見せ様として居ない。そして爰に一考を要すべきは、舊態把持のその畫的態度である。獨りこの水田竹園氏に限らず、小室翠雲、松林桂月、矢野橋村氏等いはゆる南畫家と稱せらる、一群を通じて、常に不満を禁じ得ないのは、その態度の決定に對して何等の再動を要ともせず、極めて漫然と殘滓堆積の既往傳統を踏襲してゐるに過ぎない事である。」(素心庵、中商)

大阪美術第二十五回展(日)

三月六日—十日 大阪・三越

大阪三越が毎年開催する公募展で、今回は審査を川村曼舟、中村大三郎、宇田萩郷、山口華楊、北野恆富、菅橋彦に依頼し、應募數三百五十點、陳列總數九十點であつた。

推奨並市長賞 速水千枝、萩田美稚子、河原勇夫、横田豐子

福井市郎個展(洋)

三月六日—十三日 神戸・神戸繪畫館

創工社基準工藝第三回展 三月七日—十一日 大阪市東區平野町・生駒時計店

工藝の基準的な要素として「使用の目的を充分にすること」、「形態と用材の美を現はすこと」を探り上げ、この方向に研究の主力を置いた同人制作展で、陳列數約六十點、種目は金工、漆工、竹工、染色等に涉つてゐた。尙同會は翌月に解散された。

日本畫諸作家展

聖戰從軍畫展

三月七日—十二日 日本橋・高島屋

昨春結成された大日本陸軍從軍畫家協會の第二回展で陸軍省後援の下に開催、會員四十一名の小品、洋畫を主として日本畫、彫塑を少數加へ合計百點を出陳した。題材は北中南支の各地に及び、中で石井柏亭の「蒙疆平穩」中村研一の「珠江を溯る部隊」、川島理一郎の「廣東〇〇爆發の跡」其他中澤弘光、伊原宇三郎、向井潤吉、脇田和等の出品が經りを見せた。説明的な作としては吉田博鶴田吾郎、五味清吉、荒井陸男、瀬野覺藏、古城江親、等が擧げられるが、會場を通じて繪畫的には甚だ低調なるを否み難い。

正宗得三郎洋畫展

三月七日—十二日 福岡・岩田屋

川島梅關第二回新作畫幅展(日)

三月七日—十二日 大阪・阪急百貨店

栗田九品庵新作畫展(日)

三月八日—十一日 芝・東京美術俱樂部

栗田九品庵主催、新作十四點を陳列した。安田毅彦の「櫻びと」、上村松園の「春」、川合玉堂の「湖山夕照」筒木清方の「春の流れ」等が擧げられる。

小林孝行遺作展(洋)

三月八日—十日 銀座・紀伊國屋

本年二十五歳で眞鶴の海に投身した故小林孝行の遺作展が九室會、唯型同人等の發企で催され、油繪十九點が陳列された。數年前より二科展の第九室に超現實的内容の作品を發表してゐた畫家で、「滲透せる大氣」「出發・絶望の明晰から」「悼ましき並行線的事實」「聲なきモノローグ」等がある。

熊谷九壽洋畫個展

三月八日—十二日 銀座・養生堂

商業美術作品展

三月九日—十一日 名古屋・松坂屋
主催新愛知新聞社、名古屋、高岡兩高等商業學校。
岡本玉水作人形展
三月九日—十二日 大阪・三越

東陶會第十一回作品展 (陶)

三月九日—十三日 日本橋・三越
每春開催する同人の小品展で、顧問の板谷波山、宮川香山、沼田一雅をはじめ會員の諸作を陳列した。尙同會はこの展覽會を最終として即日解散した。

山崎雲代木彫展

三月九日—十三日 大阪・松坂屋
清水登之武漢攻略戦跡スケッチ展 (洋)

新興代用品展覽會

三月九日—十五日 大阪・十合
代用品協會、商工省、大阪府後援
奥瀬英三從軍作品展 (洋)

太平洋畫會第三十五回展 (洋、彫)

三月九日—二十六日 東京府美術館
恒例の洋畫及び彫塑の公募展。今回は特別の催しとして會員の事變從軍畫五十二點及び會員中村不折の舊作回顧陳列を行った。從軍畫出品者は石井柏亭、鶴田吾郎、吉田博、石川寅治、永地秀太、佐々貴義雄、三上知治、光安浩行、奥瀬英三、等々力巳吉の十名でいづれも軽い油繪小品、水彩、スケッチ等を陳列した。中村不折の舊作陳列はデッサン二十二點、初期の習作十五點の外左記に掲載の油繪其他二十八點、計六十五點で、ほゞ各時代を網羅し、畫壇の先輩である此の作家の風貌の特殊性を檢討するには十分であつた。通常の出品では石井柏亭の

「山本博士像」をはじめ丸山晚霞、桑重儀右衛門、池田永一治、多々羅義雄、小野田元興等の諸作が擧げられる。新進作家は概ね類型的な手法に泥んで低調さを脱して居らぬ。又彫塑部も依然不振であつた。不折の油繪舊作は左の通りである。

雪の庭 百萬塔 邯鄲
漁樵 桂の井 たそがれ
桃李和尙 藤蘭亭 廓然無聖
卓文君 補酒 朝陽
發掘 小雨の渡し 追憶
王羲之 清水 懸泉
海岸の三人娘 沈黙 習作
習作 若い男 蘆の湖
神田明神 自畫像 (明治二十四年廿六歳當時)

搬入數 (繪畫、彫塑合計) 一〇二九點、入選總數 一五三點

授賞 太平洋畫會賞 吉原甲藏 (以下省略)

新會員 能見三次、井口勇、相曾秀之助、水戸敬之助
新會友 久保進

熊谷守一、中川紀元、新作二人展
三月十日—十三日 數寄屋橋・日動畫廊

二科會の熊谷、中川の二人が何れも得意とする油彩小品十數點づゝを展觀した。

日大藝術科美術科作品展
三月十日—十三日 神田・東京堂ギャラリー

伊東紅雲、石川竹邨繪畫展 (日)

三月十日—十四日 名古屋・松坂屋
名古屋美術聯盟第一回會員作品展 (綜合)

三月十日—十四日 名古屋・鶴舞公園美術館
愛知縣出身並に在住の美術家を以て組織する同會の第一回展。陳列數日本畫三〇點、洋畫五四點、彫塑六點、工藝一〇點。

曉星會第一回洋畫展
三月十日—十四日 大阪・美交社

美交社主催。
菅野麗治作品展 (洋)

三月十日—十四日 新宿・月光莊
新美術家協會第十一回展 (洋)

三月十日—十九日 東京府美術館

從來は二科會の會友の同人展であつたが、現在では成行き上一水會の作家も含まれてゐる。總體に畫風も派手で色彩も効果的であるが、一面或る薄弱さを伴ふ所が認められる。田邊三重松、大澤昌助、栗原信、伊藤繼郎は夫々の手法を見せ、新海覺雄、近藤光紀は寫實的な畫風を持つ。中村三樹男、古家新の諸作には氣質的なものが強く表はれ、その他寺田竹雄のアメリカ風の手法、松本弘二の情緒的な色調と筆觸等が注意をひいてゐた。出品者二十四名。

獨立美術第九回展 (洋)

三月十日—三十日 東京府美術館
同會は前年に比して、會場に或る落着きを得たかの觀がある。會員の仕事は既に一應の技術的完成に到達してをり、特別變化は見受けられないが、一般の應募作に就て、所謂フオーヴ派が從來に比して其の作風の矯激さを改めたこと及び超現實派が今年は全體に溫和な制作を示したこと等により、壁面は例年より穩かなものになつてゐた。然し之は必ずしも内容の充實を伴つてのことではなく、會一般としては寧ろ藝術的な沈滞と解すべきものであつた。尙一面に同會の制作心理に及ぼした時局の影響といふ點へも想到し得られる。

超現實派は近年同會に勢力を占めてきたが、實際には福澤一郎獨りの仕事に獨創を示すに止まり、他には特に注意すべき佳作を見ない。會の面目を擔ふものは依然、中山嶺、鈴木亞夫、林武、鈴木保徳等の畫風であつた。尙本展終了後、福澤一郎除名の沙汰を生じた。(本欄一一頁参照)

第一室、鈴木亞夫の諸作が擧げられる。「闘ひの譚」は

作者の文學癖を強く表はしたものの、繪畫としての弱點を伴ひつゝも感覺及び教養に異彩を發揮して注目に値する製作であつた。風景の「虹」は構圖の明快な作、外に松島一郎、水野佳一が擧げられる。

第二室、野口彌太郎の「東北の人々」は爽快な筆觸で描かれ、例年の如く、軽い旨味を見せてゐた。小島善太郎は寫實主義に依つて意識的な製作を進めてゐるが、對象の扱ひが十分と言へず、大作の「柿ナル里」はその局部的効果にも拘らず、構成の不徹底さを免れなかつた。外に齋藤長三の超現實的な作品を擧げる。

第三室、高島達四郎の諸作は都市人的な趣好が勝つて重さを缺く。須田國太郎は独自の教養に基いて數年來變らぬ畫風をつゞけてゐる。「河原」は例の茶褐色を基調とし、明暗の効果に独自の遠近感を表出し、面白い作であるが、構圖の要約の緊密さに疑問を残すものであらう。

第四室、中山鐵の「朝鮮記念」と題する二作は、基調色を一方を暖色、他を寒色とし、明快な構想を、彼独自の省略を用ひて表現した。卓越した効果を見せてゐるが一面に甚だ大味であり、より鋭い藝術的陰翳への追求が希まれる。林武の「室戸岬風景」は構圖に優れ、色彩も效果を得て注意をひく出来であつた。

第五室、清水登之は「江南戰場俯瞰」にアラベスクな構成を行つた。勞作であり、戰爭畫製作に於ける珍らしい試みであるが、純粹な構圖の効果には達し得なかつた憾みがある。鈴木保徳の「農人」と題する諸作のうち(B)は海老原に似た手法が見られ、達者であつたが、感覺の充實さに乏しかつた。

第六室、田中佐一郎は横長の油繪「南支風景」及び従軍スケッチを出品したが出色のものでなく、川口軌外も不振の氣味であつた。

第七室、兒島善三郎の五點の中では「東風」が擧げられる。「富士清朗」は様式化手法の低調さが目立つた。菊地精二は「野牛」に努力を示した。

第八室、海老原喜之助の「集團」は獨特な主題の省略的説明を用ひ、構圖に運動的な大味な効果を見せた。第九室、小林和作は依然變らぬ筆觸を見せ、「秋山」は色味の美しいものであつた。

第十室、福澤一郎の大作の「洪水圖」二點は、會の超現實派を代表する作として一般の注目をひいた。卓抜な描寫力と横溢した才氣を以て、独自の文學的效果を展開し、且つ遠近感の表現に注目せしむるものがあつたが、一面に、或る俗臭の去らぬところはあつた。「新しい繪畫の陣頭」立つ福澤一郎氏は大幅な「洪水」を二點並べてゐる。題材は面白い内容を盛り得るし構成の大きさにも新しい精力が含まれ得るものだけれども、こゝに見える一見大規模な外觀は案外底が浅い。新しさの繪畫的表現にはこゝにいふ大がまへな裝飾をしなくてもつと直接に生きて來る方法がある筈である。……單純の中の複雑の方が、複雑の中の單純よりも數等優つてゐる。(富永惣一、美之國一五ノ四)

以上の外に、第十二室の菅野圭介、第十三室の清水鍊徳等の諸作が注意をひいた。尙同展は引き続き名古屋鶴前公園美術館及び大阪朝日會館に開催された。

搬入總數三二一七點(八四九名)、入選三三二名(内新入選七十七名)
會友推薦 富樫寅平、佐藤英男、中尾彰、池田金之助
授賞 協會賞 山道榮助、杉全直、佐川敏子、鳥井敏
青柳暢夫、竹中三郎

出品目録(○會員、△會友)

繪畫
烽火 △水野 佳一 双葉山取る △藤岡 一
漂泊 同 アトリエ 同
花と少女 森安 安子 夏 富樫 寅平
劍舞 金 晚 炯 水浴 同 同
鳥 大 口 登 木のある 吉井 忠
負け力士 △藤岡 一 萬壽山の石舫 ○松島 一郎

北海の柳 ○松島 一郎
頭目と子供 橋本 春光
ユリ花 富永 正次
横濱港望 同
裏街の花作り場 同
ビーチバラッソル ○鈴木 亞夫
雪晴 同
翻ひの譜 同
虹 同
手術臺C 松田 春雄
感情(悲み) 澤 健太郎
貝殼 田中 厚己
二階家 石 隠 滿
山の道 山田 貞實
トーチカ風景 齋田 武夫
戰線圖日 同
丘の上 同
風景 洪 俊 明
同 實本 仙
カオチャオヤン 秋山 新衛
(高脚靴) 高原 政孝
工場地帯 岡村 芳男
修繕工 同
雲と蠟 山道 榮助
百穴 同
作品A 故生島 豊
同 B 同

風景 大島 正
窓邊 秋野 健夫
ストーブの近く 飛田 文一
魚槽 大垣 泰治
漁り 宇根元 馨
森の中 同
思索する人 檜地 康行
行動する人 同
風景 兒玉 貞平
森 樋口 勝三
耕作地 江川 平三
月白 三水 公平

土俵 佐野 健治
樹海 佐川 敏子
山吹 同
椿C 四十塚 勤
庭 山口 芳江
早春 井上 寛信
樹間 菅原 俊
庭 松本文一郎
室内 直村のぶ子
東北の人々 ○野口彌太郎
エルベ河の結氷 藤崎 眞
風景 豊田 逸二
室戸岬鳥瞰 ○小島善太郎
柿ナル里 同
室戸岬風景 同
室戸岬朝陽 同
集 陳 翊
姉妹 同
海と人 同
たそがれ 同
机 同
赤城山風景 持田 徹
風景 早瀬 龍江
厨房 森 堯元
女達 小川マリ子
紙風船 同
風 櫻井 濱江
對話的風景 眞壁 重夫
壺 水沼 清
岩上 服部 勳
夜雪 同
ランプと女 同
花 同
岬 同
朝顔の徑 同
蟲 宮島佐一郎
木ノ葉ト運辯 高畑 正明
對比的ニ 吉加江 清
河原 ○須田國太郎

美術展覽會(三月)

生懸	高木 四郎	雪景	青木 撫美	魚商	○川口 軌外	高原	長 秀彦	庭	△樋口 加六	女	大塚 睦
女たち	安田 謙	月夜	淺田 欣三	群鳥	同	かんな(一)	舞田 文雄	雪山	同	鏡臺のある静物	小倉かね子
南京の初春	水原房二郎	霧	細野 尙志	二婦	同	美空室	佐佐木真佐子	同 B	同	菴	鈴木 昌枝
野毛山風景	佐藤 龍雄	風景(B)	荒井不可志	花商	同	島山	笠井 隆吉	湖畔新春	大貫 悌二	倉倉	鯨津 政男
風の風景	長谷川 宏	熱河	竹中 三郎	壺	同	春長閑	堀之内一誠	湖	久保 一雄	ざくろ	井澤 元一
千網	豊藤 勇	糸を繰る女達	同	ユリ	同	五月の庭	村田 東作	北ノ海	金乗 達郎	晴日	山下 武夫
淡水藻	同	並樹	同	狩る人	同	史と花	石原 眞一	作品四	△今西 中通	家	○小林 和作
朝	土井 俊夫	那須風景	松原 久明	多感ナ地上	同	兵と鳩	△熊谷登久平	同 一	同	海	同
作品	永井東三郎	風景	吉村 勇	作品D	同	冬	同	同 二	同	高原	同
室内	山内 邦義	林檎と水丞	中村 金作	きやうだい	同	樹木	同	同 三	同	秋晴	同
牡丹	志村 計介	丘	吉野 公脩	訣別	同	浮島 弘行	井上 孟	同 四	同	帽子と花束	同
朝顔と百合	同	春馬	若林 和夫	都會河畔	同	無題	同	同 五	同	松山白雲	同
山と畑	同	江南戰場俯瞰	新羅 笙介	圖書館の庭	同	印度人	同	同	同	カンナ	同
扉	菅野 大乗	始原鳥	古澤 登之	改築工事	同	△菊地 精二	同	同	同	風景	同
花束と女	今田三七男	月夜の部屋	古澤 岩美	月	同	野牛	同	同	同	初冬の磯(大海)	同
門(北京)	大河内省三	鳥と手ぶくろ	佐蔵九二男	旅	同	湖景	同	同	同	少女の磯	同
永原	宮城 四郎	鷗鷗2	長尾 完二	囁き	同	北海の海邊	同	同	同	少女ト人形	同
風景A	小川 信一	田圃A	中島 穰	仁王像	同	丘の風景	同	同	同	庭	同
門(朝鮮記念)	○中山 巍	農人D	○鈴木 保徳	静物	同	石屋川風景	同	同	同	寒霞溪	同
街の人々(朝鮮記念)	同	同 B	同	この三つのもの	同	静浦	同	同	同	塔	同
風景湖	楠本 俊治	同 C	同	工場B	同	昌	同	同	同	廣東風景A	同
給馬	同	同 A	同	呼ぶ	同	平泳	同	同	同	禁慾者の風景	同
浚渫船	中津瀬忠彦	同 A	同	坐する少女	同	熱帯の静物	同	同	同	果しなき對話	同
街の風景	神保 彌	同 A	同	同	同	赤い壁紙と女	同	同	同	風景	同
室内	永井 宏	同 A	同	同	同	人物	同	同	同	風景	同
殘塊	寺坂 正信	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景	同
室戸岬風景	○林 武	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景	同
同	同	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同
森(A)	林 豊	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同
路傍にて	玉 城 實	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同
カタクリスムの窓園田	岩岡 貞美	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同
風景	中山治郎藏	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同
椅子の對話	鎌田 知治	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同
村童	青柳 暢光	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同
月夜の岩	同	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同
海濱風景	川口美喜夫	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同
露店	同	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同
國旗を賣る店	同	同 A	同	同	同	風景	同	同	同	風景(A)	同

氣穴持つ生物 多賀谷伊徳 風景
 牛運作ノ三 渡部 光雄 切株
 (新シキ出發) 高橋竹三郎 風景
 建築物 李田たけを ハワイアン・トリ
 草花 佐藤 英男 人と静物
 妙義山 Y氏 青帽子
 伏虎城 和田傳太郎 沼
 ありそ 境野 一之 手を洗ふ女
 風景A 岡部 繁夫 七月
 山 赤堀 佐兵 五月
 山塊 同 二月
 洪水園 ○福澤 一郎 秋聲白日
 同 室田
 花と燈臺 明樂光三郎 冬眠
 丘の花東 木村 孝三 少女像
 落日に送る 渡邊 武 貝
 上昇 今井 憲一 ベルと影
 沖繩墓地風景 山本 衛 カルナツクの夜
 天主堂 小林 明 港
 冬の日 無羅多正健 プール
 波 宮崎 精一 運と砲煙
 厨の女 片山 公一 クウバク
 藝人 大久保實雄 生物の創造
 風景 小田 豊 發芽と馬
 世田谷風景 島 良一 作品五
 潮馬 門脇 耕 海近し
 多 島津 冬樹 木工所の一部I
 貝ト木 空野洲繪人 手の譜
 風景A 佐々木 毅 初秋
 高原 中尾 彰 静物
 猿野 同 池野 清 山脈
 龜裂 同 池野 清 岩のある流れ
 航旅 濱谷 次郎 火影
 裸婦A 西田藤次郎 芽
 長榮寺の庭 小島三郎一 同
 日曜日の午後 高松甚二郎 同
 小さな集會 同
 信州路 中島英砂緒 静物

中島英砂緒 薄暮
 緑川廣太郎 寂
 同 踊子
 同 森林
 同 風景
 同 植輪
 同 落葉2
 同 地隅
 同 風景B
 同 夜と木精
 同 部屋で
 同 頌歌
 同 鏡(映像)
 同 山
 同 女の座
 同 修道院
 同 風
 同 干網
 同 蕪川平原
 同 黒い船
 同 小春日
 同 形悲學の爲めに
 同 種の意欲
 同 黄昏
 同 入江の風景
 同 安治川
 同 風景
 同 白石村の春
 同 或る風景
 同 水邊の子供
 同 湖畔の雪B
 同 海邊ノ月ニ語ル
 同 亞熱帯植物A
 同 フローレンス
 同 清水 鍊徳
 同 飯田 實雄
 同 伊藤 和義
 同 関口 誠
 同 中村 良明
 同 野村 章三
 同 水邊の子供
 同 小魚
 同 下降
 同 群像一
 同 同二
 同 風景
 同 風流
 同 藤井 正俊

高山 泰子
 原田 潤
 鶴見 武長
 廣田 勝夫
 末永 風生
 染谷 舜一
 吉田 一夫
 廣板小源太
 原田 隆
 足達 襄
 西村健次郎
 杉 全直
 同 全直
 同 赤星 孝
 同 妹尾 正雄
 高橋 勉
 上田 耕作
 高橋 忠彌
 吉田 穂
 三好 正雄
 北脇 昇
 同 北脇 昇
 同 吉田 泰雄
 同 杉尾 利通
 同 正宗 律四
 同 中川 光延
 同 許斐 義隆
 同 篠原 邦夫
 同 野村 章三
 同 中村 良明
 同 関口 誠
 同 伊藤 和義
 同 飯田 實雄
 同 清水 鍊徳
 同 飯田 實雄
 同 伊藤 和義
 同 関口 誠
 同 中村 良明
 同 野村 章三
 同 水邊の子供
 同 小魚
 同 下降
 同 群像一
 同 同二
 同 風景
 同 風流
 同 藤井 正俊

樂園 清水 鍊徳
 冬のサンミツシ 同
 エル通り 同
 牝牛 同
 犬・猫・子供 同
 江ノ島 同
 記念 同
 黄昏の墓地(沖繩) 同
 庭園 同
 庭園 同
 並木 同
 郊外 同
 北面春流 同
 二人 同
 ベチユニヤと湖 同
 庭 同
 海邊 同
 雪原 同
 海邊 同
 黄衣 同
 男達 同
 草上 同
 バン喰ひ競争 同
 厨房 同
 少年 同
 風景B 同
 おそ夏の追憶 同
 小魚 同
 下降 同
 群像一 同
 同二 同
 風景 同
 風流 同
 藤井 正俊

石井光楓從軍スケツツ展(洋)
 三月十一日—十四日 上野・松坂屋
 三月十一日—十四日 大阪・三越
 作者は昨年の五月より十二月まで陸軍省囑託從軍畫家として上海、南京、九江、廬山、漢口等の戦蹟を歴訪した。水彩畫を主として九十餘點を出品した。
 東郷青兒第二回油繪小品展
 三月十一日—十五日 銀座・青樹社
 青樹社主催。新作の油繪三十一點を陳列。主に少女像を主題として獨特の裝飾的手法を繼續してゐる。
 青山義雄近作個展(洋)
 三月十一日—十五日 銀座・三味堂
 求龍堂石川龍一、兜屋西川武郎主催。
 「歸朝して幾年でもないのにカラリスト青山氏は物凄い精進振りから何時の間にか我畫壇に於ける一つの大きな存在となつてゐる。前回の國展などで青山イズムの氾濫は驚くべきもの、氏の藝術は香り高い色彩基調で築かれてゐる爲め或は畫面は官能的な甘さに墮す怖れはあるが、一面ゆとりのあるあそびを持つて居るので氣持がよい。
 今度の展覧では夕映の空を取扱つた風景が多く、殊に半透明色で淡く軽くパステルを包み「夕映の港」「櫻島」など溢い東洋調さへ加味されて居る。大體は梅原イズムの影響を強く感ぜられ場中特に傑れた作は人物「婦人」である(都・三月十三日)

楚人社第三回展
 三月十一日—十五日 銀座・紀伊國屋
 日本バステル畫會第十四回展
 三月十一日—十五日 銀座・三越
 春虹會第五回展(日)
 三月十一日—十六日 日本橋・三越

京都畫壇の代表的作家を集めた會で例年春の催しとして注目される所、本年から猪飼嘯谷、板倉星光、三宅風白、三木翠山を加へて二十名となつた。菊池契月の「春深」は花の下に立つ桃山風俗の美女を描いて濃艶の中に

美術展覽會(三月)
 備前燒現代名工新作品陳列會
 三月十一日—十三日 日本橋・高島屋

三月十一日—十五日 銀座・三越
 三月十一日—十五日 銀座・三越
 三月十一日—十六日 日本橋・三越

三月十一日—十五日 銀座・三越
 三月十一日—十五日 銀座・三越
 三月十一日—十六日 日本橋・三越

堂々たる風格を見せ、上村松園の「春鶯」また完璧の境地である。その他にも板倉星光、中村大三郎、三木翠山など美人畫が多かつた。竹を描き光を描いた福田平八郎の「陽春」は頗る注目に値する出来で、堂本印象の新たな工夫を見せた「怡春」また興味をひく作。その他いづれも周到な技術的習練を見せた。

出品目録

田村啓戦	猪飼 晴谷	春信	板倉 星光
遅日	石崎 光瑠	春到	西山 翠嶽
怡春	堂本 印象	麥	徳岡 神泉
奔瀟	小野 竹喬	麗陽	川村 曼舟
春の夕	中村大三郎	雉	金島 桂華
春鶯	上村 松園	宿雁	宇田 萩郎
春を聴く	案本 一洋	鶯	山口 華楊
花かげ	三宅 鳳白	陽春	福田平八郎
花の旅	三木 翠山	春深	菊池 契月

産業美術第八回展

三月十一日—十七日 上野・松坂屋

大阪毎日及び東京日日新聞社が懸賞募集した新聞廣告及び染織圖案作品の入選作を陳列、審査員は霜島之彦、杉浦非水其他で、入賞は一等賞佐藤鑑一、二等賞三名、三等二十五名。

山本發次郎藏佐伯祐三遺作展(洋)

三月十一日—二十九日 大阪市立美術館

大阪市立美術館主催。山本發次郎の所蔵にかゝる故佐伯祐三の遺作を陳列した。内容は一昨年春の東京に於ける遺作展とほゞ同じく美術學校時代一點、第一次巴里時代四十八點、目白時代十一點、第二次巴里時代五十八點の四期に分けて陳列、概ね油繪で、デッサンが數點あつた。

瀟谷國四郎遺作小品油繪展

三月十三日—十七日 日本橋・高島屋

高島屋美術部主催。故瀟谷國四郎の油繪遺作二十七點

三號大の小品を主として展覧した。

「故瀟谷國四郎の油彩小品廿七點すべて、十五郎の陽文方印が捺されてある。國四郎即ち九二四郎の九二四を合せてのそれであらう。近來はかうした畫展にも商工省の指圖で一々價格が明記されるやうになつたが、それは何れも三百圓内外である。風景にも人物にも、例によつて鈍重な筆繼の裡に逸乎として甘美な情感の漂ひ溢れてゐるものがある。あの白眉にして重顔常に不老の仙酒をでも喫して、この現實の人生そのものを一種の藐姑射の山にでも見てゐたやうな故人の風神がうかゞはれる。(中外・三月十六日)

吉田博一水墨畫展

三月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

催青會展(洋、彫)

三月十四日—十七日 銀座・資生堂

山本鼎を中心とする畫家、彫刻家の同人展で、山本の油繪靜物は技法に於て手堅く、山崎省三の風景も色彩に特色のあるもの、外に岡村進、渡邊進、石井了介、中西義雄、津谷鹿市等の出品があつた。

京都工藝院陶藝部展覽會

三月十四日—十九日 神戸・大丸

商工省第二十五回工藝展

三月十四日—二十日 名古屋・鶴舞公園美術館

高島千代子油繪個展

三月十五日—十七日 新宿・月光莊

新篁會同人新作畫展(日)

三月十五日—十七日 大阪・高島屋

橋本關雪門下の日本畫同人展

三月十五日—二十日 大阪・關西畫廊

各派綜合代表作家洋畫展

三月十五日—二十日 大阪・關西畫廊

京都工藝院第三回展

三月十六日—十九日 大禮記念京都美術館

京都市の各種工藝家を網羅する同院の第三回綜合展。今回は左記審査員の顔觸れの下に、出品作二百六十四點の中より、百五十九點を陳列した。授賞作は左の通りであつた。

授賞(知事賞)(副賞、長老賞) 山田豊、(市長賞)

奥村究果、(工藝院賞) 森野嘉光、(工藝獎勵賞) 八田泰造、中條昇、水内平一郎、小倉千尋、永峰秀作、龜山善博

審査員 清水六兵衛、山鹿清華、清水正太郎、岸本景泰、皆川月華、番浦省吾、伊東翠壺、米澤蘇峰、小合友之助、堂本漆軒、井上彦之助

東海四縣聯合輸出工藝試作品第五回展

三月十六日—二十日 名古屋・愛知縣商工館

静岡、愛知、三重、岐阜四縣における輸出振興を圖るため、各縣の工藝協會が東海工藝協會聯合會を組織し、毎年開催地を交替の上同展を開催してゐる。今回の出品數は、静岡縣百九點、愛知縣二百四十五點、三重縣百五點、岐阜縣二百七十七點、合計六百七十六點で、授賞作品は四十九點であつた。外に各縣の指導機關、商工省工藝指導所並に陶磁器試驗所、貿易局等より試作品、海外蒐集工藝品等多數の参考品の出品があり、又會期中、齋藤信治、丹波恆夫、飯野逸平の審査講評を行つた。

日本美術院同人第六回作品展(日、彫)

三月十六日—二十二日 上野・松坂屋

松坂屋の主催で例年開かれる展覽會である、繪畫、彫刻とも同人のほとんど全部が出品して數は多いが、あまり力の入つた作品は見られず、きはめて平凡、安穩の境を出でない。繪畫二十四點、彫刻十七點を陳列した。

「かうした展覧では比較的軽いものに佳品があるやうに思ふ。例へば酒井三良君の「春」、三題のやうにスケッチ程度を出ないものが却つてよく山村耕花君の「朧月」の如きは重い感じを與へた。荒井寛方君の「聴觀音」は秀作の一つである。長野草風君は「神呪」と題して一尾の犬がにを描いてゐるが、構圖に賦彩に難點をもつものと思ふ。筆谷等觀君の「殘日」は調子の寒いところが缺點だ。中村岳陵君の「春光」は光を扱つた畫であらうけれども無理な構圖がたつてゐると思ふ。彫刻の部では平橋田中君の「面壁」に吉田白嶺君の「春光」がよろしい。中村直人君には

「興亞の春」と「蒙古の春」の二作があるが共にさう悪くはない作品だと思ふ(東日)

小林白道子湖國風景洋畫展

三月十六日—二十三日 大阪・阪急百貨店

朝陽社己卯年度日本畫展

三月十七日—十八日 銀座・三味堂

井井會第二回新作發表會(日)

三月十七日—十九日 京都・大丸

綵尚會第一回京都展(日)

三月十七日—十九日 京都・大丸

東京高等工藝工藝彫刻部木材工藝科生徒作品展

三月十七日—二十一日 銀座・三越

三光會美術展

三月十七日—二十九日 日本橋・白木屋

二科西人社第五回展(洋、彫)

三月十八日—二十二日 福岡日々新聞社

福岡縣出身の二科會出品者を以て組織する洋畫、彫塑の同人展で、坂本繁二郎その他の二科會員の贊助出品があつた。

主線美術協會第三回展(洋、彫)

三月十八日—二十九日 東京府美術館

舊東光會員高間惣七、橋本八百二、堀田清治等は昭和十一年に彫塑團體塊人社と合同して同會を創立したが、今回の第三回公募展の開催を最後として、繪畫部は解散を見るに至つたので、彫塑部は爾後塊人社の舊稱に復してそのまゝ活動を續けることになつた。

陳列數は繪畫六十七點、彫塑三十五點で、繪畫部は堀田清治が出品せず、僅かに高間、橋本の諸作を注意し得たに過ぎない。高間の「窓ぎは」「蘭と錦靜鳥」等七點は常の畫風で裝飾的な効果を挙げ、橋本は「坑道」「製鐵場と靈峰」等十六點に努力を示した。

彫塑部は從來作家の步調が揃つてをり、且つ研究的な

美術展覽會(三月)

態度の認められる點で、現在の彫塑界に於ける主要團體たるを失はない。然し近年同會に共通の藝術的方向にはその特色である様式的な簡約手法にマンネリズムが見られ、その結果、散漫で鈍重な構成に終つてゐる制作が少くない。三澤寛の「胸像」「兎」等は比較的面白く、河内山賢祐の「裸婦習作」も無難に近い。その他松田尙之、村田勝四郎、荒井徳亮、長谷川樹藏等の諸作が注意をひいた。安藤照の小品の裸體は成功せず、堀江越、小室達藤澤古實等は概して不振であつた。

多摩帝國美術學校卒業成績品展

三月十九日—二十一日 世田谷・同校

赤松俊子モスコフスケツ子展(洋)

三月十九日—二十一日 銀座・紀伊國屋

早苗會小品畫展(日)

三月十九日—二十二日 大阪・三越

日本畫新人展

三月十九日—二十二日 大阪・松坂屋

津田青楓繪畫展(日)

三月十九日—二十三日 名古屋・松坂屋

歐亞古美術展

三月十九日—二十三日 日本橋・白木屋

松井虹橋近作展(日)

三月十九日—二十三日 京都・丸物

里見勝藏個展(洋)

三月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

里見勝藏の最近作二十一點、果物を主題とせる一聯の作品、「椿」「桃と無花果」「ざくら」「葡萄」等及び「幼兒」「顔」「少女像」などを陳列した。

關文會日本畫表裝展

三月十九日—二十四日 日本橋・白木屋

大野夢風個展(日)

三月二十日 丸ノ内・日本工業俱樂部

文化學院卒業制作展

三月二十日—二十一日 神田・同學院

瀧澤邦行水彩畫第一回櫻花百趣展

三月二十日—二十四日 日本橋・高島屋

高島屋美術部主催。過般發表の櫻花の生靈寫生畫に基き、新に約五十種を裝飾畫として製作、出陳した。(本欄二九頁參照)

東西中京諸大家新作繪畫展(日)

三月二十一日—二十二日 名古屋美術俱樂部

榎橋慶心堂主催

國土會第一回展(洋、彫)

三月二十一日—二十三日 銀座・三味堂

江藤信太郎個展(洋)

三月二十一日—二十五日 福岡・岩田屋

矢野橋村新作展(日)

三月二十一日—二十五日 大阪・阪急百貨店

東都大家新作日本畫展(日)

三月二十一日—二十六日 京都・大丸

大丸主催。畠山錦成、川合玉堂、吉岡堅二等計二十二名の新作を展觀した。

新作竹器陳列會

三月二十二日—二十六日 日本橋・三越

第十二回上社會展(洋)

三月二十二日—三十一日 東京府美術館

東京美術學校の同窓會展の一つで、會員が洋畫の分野に活躍しつゝあるため、小綜合展の觀がある。藤岡一の「ヴィナスの誕生」及び高橋弘二の諸作は獨立展を、加山四郎の「靜物」は春陽會を、中西利雄の水彩、小磯良平のアンゲル張りの「肩掛の女」等は新制作派をと、夫々に畫風を異にする。外に牛島憲之の點描風の異色ある作品、染木煦、島野重之、荻野映彦、橋口康雄等の出品が挙げられる。尙猪熊弦一郎、荻須高徳、高野三三男

は滞歐中で出品がなかつた。陳列數百六點。

巴會第三回日本畫展

三月二十三日—二十六日 新宿・伊勢丹

故寺崎廣業門下の有志を以て組織する同會は、野田九浦を代表者として第三回の新作同人展を開いた。

梶原實五油繪展

三月二十三日—二十六日 大阪・三越

近作の油繪約八十點を展觀した。

岡田行一、堀忠義二人展 (洋)

三月二十三日—二十八日 新宿・月光莊

第一回歷程試作展 (日)

三月二十四日—二十六日 神田・東京堂

前衛的な新進の日本畫家を以て組織する歷程美術協會同人の試作展。

碧牛居蒐集東西大家新作畫展 (日)

三月二十四日—二十六日 芝・東京美術俱樂部

本山幽篁堂の主催、東京京都の作家三十四人の新作を集めた。川合玉堂の横物「高原歸牧」は格調の高い作、安田鞆彦の「壬生忠孝」、菊池契月の「薰風」はともに小品で繊細な技巧を見せ、廣島晃甫の「臘春」、森白甫の「秋信」等は感覺の新しいで注意をひいた。その他小野竹喬の「湖邊首夏」、楠木清方の「垂水」、中村岳陵の「日溜り」、山口蓬春の「首夏」、案本一洋の「暮春」等が夫々の特色をみせ、畫商の展觀として見應へのあるものであつた。

東京美術學校卒業式特別展觀

三月二十四日—二十六日 同校

恆例の特別展觀で、同校保管の昭和六年以降の帝展及文展に於ける政府買上の洋畫及び工藝品を陳列した。

陳列目錄

廣の娘	安宅安五郎	昭和六	樹下	橋本はな	同七
椅子にね	矢島堅土	同七	風雨の聲	金山平三	同八
た女			日		
裁縫女	小磯良平	同七	霜の朝	野口謙藏	同九

畫室にて 緒方亮平 昭一一 花弁彩磁 板谷波山 同七

歌麿 耳野卯三郎 同一一 萬餘露花 同 同八

手傳ひ 草光信成 同一一 吹硝子花 岩田藤七 同一二

斜陽平日 吉村芳松 同一二 瓶 山鹿清華 同一二

戰爭を作 木村莊八 同二三 手織錦熱 河圖翠掛 同二三

敵地へ出 鶴田吾郎 同二三 薄雪揚文 吉田醇一郎 同二三

赤いコ 寺内萬治郎 同二三 征露青銅 山本安曇 同二三

連袖會第二回展 (洋)

三月二十四日—二十八日 銀座・青樹社

安井曾太郎門下の同人展。安井の出品はなく、金子博信の「遊ぶ子供」をはじめ中村琢二、高井誠、仲川菊代等の作品が陳列された。

三光會第一回美術展 (綜合)

三月二十四日—二十九日 日本橋・白木屋

椿貞雄油繪展

三月二十四日—四月三日 大阪・阪急百貨店

村上華岳作品展 (日)

三月二十五日—二十六日 京都美術俱樂部

中井宗太郎主催の下に村上華岳の作品鑑賞展が開催され、所藏家の出陳に係る九十餘點が展觀された。

青甲社第十二回展 (日)

三月二十五日—二十九日 大禮記念京都美術館

西山翠嶂の畫塾青甲社は恆例の作品展を開催、翠嶂の「飛魚」をはじめ、堂本印象、小川翠村、福田翠光、西山英雄、上村松篁、三谷十糸子等六十餘名の出品があり、外に應召中の宮尾光峰の戦線寫生畫帖を陳列した。陳列數日本畫六十餘點、素描五十餘點。

くろも會第六回油繪展

三月二十五日—二十九日 銀座・資生堂

本村義男洋畫展

三月二十五日—二十九日 大阪・美術新論社畫廊

岩佐古香能繪展 (日)

三月二十五日—二十九日 名古屋・松坂屋

松坂屋主催で、能樂畫、武者繪の近作を陳べた。

金重陶陽第二回伊部燒作陶展

三月二十六日—三十一日 大阪・阪急百貨店

第五回詩歌題贊東西大家小品畫展

三月二十六日—三十一日 日本橋・高島屋

藝苑社川路柳虹の主催。川合玉堂、中村岳陵、上村松園等の出品による日本畫の小品約二十點に高濱虚子、尾上柴舟及び川路柳虹題贊の色紙を添へて展觀した。

N・B・G展 (洋)

三月二十七日—二十九日 銀座・紀伊國屋

春虹會第五回展 (日)

三月二十七日—三十一日 大阪・三越

鍛金協會主催金屬美術工藝品陳列會

三月二十七日—三十一日 日本橋・三越

金澤三匠會新作工藝品展

三月二十八日—四月二日 大阪・大丸

高橋賢一郎洋畫個展

三月二十九日—三十日 京橋・月島第一小學校

小杉放庵近作個展 (日)

三月二十九日—四月二日 京城・三越

三越主催、近作十五點を陳列。

戊辰會第十回展 (日)

三月二十九日—四月二日 日本橋・三越

川合玉堂門下により玉堂を顧問とし兒玉希望を中心として結成される會で、一昨年組織を擴大強化してからの選による質の充實を圖り、官展その他に依存せぬ自主的の發表機關としての實を備へ、畫境に重視される會となつた。今回は第十回展として開き、會員の作を厳選して玉堂二點、希望三點の外八十點、合せて十五點を陳列いづれも力作が揃つて頗る見應へのある展觀であつた。

玉堂は「銃後の春」と「富士」の堂々たる二作を出品、前者は珍らしく二曲一雙の大作で、網を繕ふ二人物を構圖してよく題意を生かし、完成された技術と作者の氣質と相俟つて渾然たる作品となつた。希望の努力は目覺しく「荊軻」對幅は史上の劇的場面を描いた野心的な作として異彩を放ち、ある成功を収めたものとして注目をひいた。更に「漁村晴日」は日本畫の形式化と現實描寫とが巧みに融合され、卓越した手腕を示すものがあつた。松本麥水の「淺春展望」(一、二)は新鮮な思想が快く、村雲大樸子の「秋の徑」、磯部草丘の「春曉」、高田那美の「河東節」などそれづくに優れたものを見せて推すべき作である。

東西諸大家第二十八回新作畫展(日)

三月二十九日—四月二日 大阪・大丸

大丸美術部主催。陳列數四十餘點。

遠山清洋畫展

三月二十九日—四月二日 名古屋・丸善

京都柳櫻會主催新作京人形の會

三月二十九日—四月七日 大阪・三越

得應軒新作展(日)

三月三十一日—四月一日 大阪美術俱樂部

曉友會第二回洋畫展

三月三十一日—四月二日 銀座・紀伊國屋

日本美術學校圖案科展

三月三十一日—四月三日 上野・神戸屋

四月

堂本畫塾東丘社第二回展(日)

四月一日—三日 大禮記念京都美術館

堂本印象畫塾東丘社の作品展。印象は六曲一雙の「松風和鶴」を出品、その他三輪晃勢の「形霞」、池田洛中の

美術展覽會(四月)

「水禽屏風」、戸島光雄の「溪谷に棲む」等の屏風制作をはじめ、熟生の作品併せて四十七點を陳列した。

……總數四十七點を通過すると各自相當の努力が拂はれてをりかたにして新感覺を現はし、新たな主題を見出し、新たな裝飾的效果を捉へようとしてゐるか、いはゆる新人の極みは明瞭に感じられる。しかし……説明が曖昧であつたり、形態が崩れたり、徒らに騒々しかりたりするのは盤展としてはやむを得ないことであるかも知れない。一般に淡ぼけた回避調であること、感覺にはしつて氣力に乏しいこと、筆先きのきよように纏されて確乎たる内容をもたないことなどは今後反省すべきであらう。(大阪朝日)

授賞(東丘賞) 池田洛中、戸島光雄、中川眞次、澤野文臣、阪本音彦、(東丘次賞)妹背平三、堤利彦、山口芳史、松尾冬青、不二木阿古、古川雅司、安藤寛

八木博個人展(日)

四月一日—四日 銀座・鳩居堂

日本アンテナパンダン協會第三回美術展(洋)

四月一日—五日 神戸・元神戶生米取引所

公募無鑑査の制による同會の第三回洋畫展で、陳列數五十九點、外に名家の作品を少數特別出品した。

第六回昭和工藝美術展

四月一日—五日 日本橋・高島屋

高島屋美術部主催。會員は文展第四部の作家十五名で鑄金、彫金、陶器、硝子、漆藝等に涉り七十餘點を陳列した。

中村大三郎畫塾小品展(日)

四月一日—七日 大阪・松坂屋

燿土社第五回展(日)

四月一日—七日 上野・日本美術協會

野田九浦畫塾の恆例の制作展で、出品者は三十餘名、この畫塾にはさだまつた畫風はなく、新舊混淆の形であることは面白い。九浦の縦繪「臺北の美姐」は線描に特徴を見せた。北中支に従軍した吉岡堅二は「雲崗石佛」

「戦跡」等のスケッチのほかに半雙大の「駱駝」を出品した。之は灰色がかつた鈍い茶褐色を基調に駱駝群像を平面的に構圖し、裝飾的な效果を擧げたものであつた。外に徳永觀林、中上大史良等の傳統的な作品が擧げられ、又出征中の間宮正の戦線スケッチ十五點が出陳されてゐた。

東海美術協會第二十八回展(綜合)

四月一日—十日 名古屋・鶴前公園美術館並縣商工館

全關西第十三回洋畫展

四月一日—十二日 大阪市立美術館

關西に於ける二科系洋畫團體である同會の公募展で大阪朝日新聞社後援の下に開催された。陳列總數は約三百點、特別陳列として柏原仁兵衛所藏のフランス大家作品及び榎倉省吾の出征記念作を出品した。

搬入總數二〇三九點、入選二〇八點

新會員 榎倉省吾、池島勘次郎

新會友 藤井義晴、山本秀臣、雜賀文子、山口久一

授賞 全關西朝日獎勵賞 兒玉幸雄、高橋進、高須操

特選 渡邊信正、下高原龍己、細谷重雄、福井勇

同人會第十四回表裝美術展(日)

四月二日—十日 東京府美術館

同會が開催する恆例の表裝展で、授賞は左の通りであつた。

佳作賞 齋藤一夫、金村義郎、小出鑽次郎、獎勵賞

渡邊金三郎、坂倉傳太郎、中村善次郎、前野綱治、横田浩吉

新會友 宇田川孝太郎、客員 竹内常吉

國畫會第十四回展(洋、版、彫、工、寫)

四月二日—十六日 東京府美術館

從來の四部の外に本年から新に寫眞部を設け福原信三野島康三の二名を同人として寫眞印畫の出品を陳列し

た。このことは同會を愈々多彩ならしめてゐると共にその特色を一層明瞭にしたものとして興味深い。繪畫部は新人が現れつゝあり、昨年比して活氣が見られるとはいへ、依然として梅原龍三郎、青山義雄などを中心としそれらの外形に追随する作品が多く、風景などに鮮麗な色彩の表面的な効果を求めてゐる程度で、取材の範圍も狭く、骨格と技術上の習練とを具へた作家を見ることも少い。

第一室、庫田爰は若い同人として近年新進の畫風を注目されてゐる。或る感覺的な鋭さと、詩人的な感興の認められるものであるが、今回の「椿と礎石」「月」は多分に日本風の裝飾性を採り入れたもの、「月」は構圖により健康さを持つ。獨創的な點で會の少數作家の一人に挙げられる。外に長谷川春子の「春の伊太利亞」が例のヘレニズムを見せ、技巧に特色を認め得た。第二室、久本弘一、中村鐵、山崎隆夫、小林邦報らの諸作が挙げられるが、單なる色彩効果を出ない。第三室、梅原龍三郎の「南薩風景」及び「霧島」の二點は、「江の浦」風景の頃の豊醇な色調に比して、淡々と描かれてゐるが、その風格の重厚さには變りがない。この作者においては「色彩は本能的若しくは情緒的なものとして扱はれ」(荒城季夫、東朝)獨自の手柄は能く示されてゐる。第四室、大橋孝吉は細密の描寫に趣味的な境地を見せ、河野通勢の二點も特殊な嗜好を盛つて變りはない。楳真雄は「松と紅葉」に心境的なものを見せ、或る魅力を示して居た。宮坂勝は不振の氣味であつた。外に仰木ゲルトロードが挙げられる。第五室、辻愛造、土田文雄等の諸作は色彩効果のみに終り、山下品藏も變化を示さない。大森啓助の諸作には嚴しさが望まれる。外に眞垣武勝を挙げる。第六室、青山義雄の「櫻島夕景」其の他は色の扱ひに熟練が認められ、美しい効果を示して注目を惹いてゐた。しかし一面に工藝的な感覺が多分に認められるものであつた。外に柏木俊一が挙げられる。

版畫部は依然この會に特色を與へてゐる。平塚運一の黑白調の木版は獨自のスケールを有し、川西英の着色版畫も明快な美しさを持つ。棟方志功の屏風仕立の版畫も下手な面白さを生かして生彩があつた。ブノワの石版は特色を有し、恩地孝四郎の「殿の内」三點も興味をひいた。其他、川上澄生、前田政雄、野津佐吉の諸作を挙げる。彫刻部には全體として發展的氣運の認められるものがあり、ブルデル風の記念碑彫刻の影響が見えるが、技術の本格な修練の點で薄弱さを否み難い。本郷新の「赤十字記念像」は未だ缺陷が目立つてをり、山内壯夫の諸作も特色に乏しかつた。其他、峰孝、明川川孝には意欲はあるも、更に追求が望まれる。なほ吉川芳夫、西常雄、伊勢典稜等が挙げられる。工藝部は民藝趣味に特徴を有し、楽しんだ製作が多い。中で富本憲吉の「染附角鉢」「白磁大皿」が技術的な洗練を示す。外に福田力三郎、徳力孫三郎の陶器、野口道方の染色、山永光甫の漆工、飯塚薫石の竹工が注意された。

新設された寫眞部では總體に從來の印畫に見られる作の薄さや輕さは清算されてはゐないが、今後の變化に興味を緊ぎ得た。福原信三の作が注目をひいた。

「花」養田つや子

出品目録 (○同人)

繪畫	靜物	○中村 博	室内	中村 鐵
	靜物	同	植物と女	同
	犬	香月 泰男	千日紅	山崎 隆夫
	少年	石原 宏策	梅花	同
	千住風景	伊藏 十一	三輪車、提灯	同
	桑畑	三崎 六郎	庭	同
	カトレア	同	早春山籠	同
	蒼原	同	冠ヶ岳(箱根)	同
	冬山	宇治山哲平	親子	石田 道尙
	山版	同	柿	○村上 巖
	椿と礎石	○庫田 爰	武藏野	同
	月	同	Yの像	同
	緑の背景	團 勇二	淺間の雪	同
	初夏の庭(三石庵)	東 克己	あざみ	同
	花	南風原朝光	山鴨と蕪菁	黒田 繁成
	窓	黄 憲 永	松山	上田 清一
	髻	○久保 守	冬ノ砂山	同
	三つの切株	同	部屋	久本 弘一
	別離	同	春	同
	聖歌手	同	卓上	同
	群	内田 國三	風景	小林 邦報
	鳥へ踏るひと	福井 敬一	畫室の一隅	同
	飲	同	靜物	同
	池百合	○藤田 太郎	兄妹	同
	池水連	同	雪	同
	地球儀、鯨	澤野岩太郎	背面裸婦	同
	卓上夏果	同	花	同
	春の伊太利亞	○長谷川春子	靜物	同
	時計草	堀場兼太郎	黒い机	同
	春立つ頃	水谷榮之助	遊魚	同
	薔薇と少女	國松 登	海と雲	同
	黄昏	同	人日と雲	同
	早春	同	丘と雲	同
	淡水風景	中村 鐵	同教會堂	同
			齋藤 正夫	

繪畫	搬入數	入選數	同人出品	陳列數
繪畫部	一四三〇	八二	八三	一六五
版畫部	二四二	三五	一四	四九
彫刻部	一八八	二三	一一	三四
工藝部	二七〇	八一	七	八八
寫眞部	一七七	三六	三	三九
合計	二二〇七	二五六	一二四	三七五

新同人 (工藝部) 福田力三郎、北出塔次郎、内藤四郎、山永光甫

國畫獎學賞 (繪畫部) 養田つや子、山崎隆夫、中村鐵、久本弘一、小林邦報、香月泰男、(彫刻部) 吉田芳夫、(工藝部) 徳力孫三郎、(寫眞部) 中村岩太

(工藝部) 徳力孫三郎、(版畫部) 前田政雄、上野誠、(彫刻部) 佐藤忠良、舟越保武、矢部連兆、F夫人賞

茶座(一號)	又木 亨三	華紋壺	竹内 泉石
煙草入 卍合作	野澤 幸雨	筆架	天坊 武彦
沈金麥文様漆長	室瀬 春二	青貝竹輪式紙箱	高橋 得真
手盆	増田邦太郎	割貝櫻棗	同
木綿雜草模様の	増田邦太郎	割貝楓棗	同
れん	野口 道方	割漆銘々盆五客	高木 進
摺合A	同	南瓜圖大皿	徳力孫三郎
同 B	同	草ノ圖繪變り皿	同
同 C	同	賊ト草八角花瓶	同
同 D	同	鐵畫草文 花瓶	同
同 E	同	乾漆鉢	山永 光甫
型染草果文片側帯同	同	花扇	矢部 運兆
柳帶止金具	内藤 四郎	ふよう	同
陰刻白瓷 大鉢	新妻 晴夫	つばき	同
ハンドバック	○仰木ゲルト ルード	かあねえしよん	同
「生命の真相」	○奥村 博史	あかかぶ	同
装幀圖案	同	寫真	同
指環と帶留(圓をモチーフとするもの)A B C D E F G H	同	無題	高林 隆房
指輪	六月とわ子	たまのらの花(合作)	同
銀装手箱	織田 實一	秋の黒白	中島 幸次
葉元銀帶止	同	蛙の歌	北角 玄三
油滴天目茶盤	同	静かなる風景	松原 重三
色繪鉢	齋藤 三郎	コントラスト	同
陶窓繪額	鈴木 清	雪景	中村 貞世
染附あじさい角箱同	鈴木 清	溶雪	田頭 良助
比目魚の圖	鹽澤 源吾	秋日	中居 正躬
のれん、なた豆の圖	鈴木 至朗	怒る瀟	錦古里孝治
梅之圖	同	波木落葉	今井 卯八
染附角鉢、松	○富本 憲吉	エチユードA(合作)	中島長一郎
白磁、中壺	同	雲・雪・層(合作)	平井 康雄
白磁、大皿	同	牧場小景	井深 徹
同	同	花	齋木 幸子
同	同	無題	○福原 信三
色繪野山角鉢	徳田 魁星		山村 一平

無題	山村 一平	歌舞伎(六代目 木村伊兵衛の松王丸)	同
杉木立	紅谷吉之助	歌舞伎(六代目 和子ちやんとバ、佐藤田鶴江の花)	同
ボートレイト	工藤 正敏	命ナキモノ	中山 岩太
和子ちやんとバ、佐藤田鶴江の花	ハナヤ勲兵衛	肖像	同
S嬢	○野島 康三	草魚	岩田 一雄
ざんれい花	同	雪國の子供	杉林 忠
歌舞伎(六代目 娘道成寺)	安藤不二夫	湖畔の冬	佐藤 翠陽
池畔に遊ぶ	名倉 英二	風景	中島 幸次

新興美術院第二回展(日)

四月二日—十七日 東京府美術館
日本美術院を離脱した同院々友等が組織した團體で、昨春公募第一回展を開き本年その第二回を開いた。全體に新興團體らしく熱心な努力が見え、前回に比して格段の躍進ぶりである。中で茨木杉風の勉強が目立ち、その連作「琵琶湖十二景」は特色ある單純な手法によく自然の變化を捉へ會場第一に推すべき佳作であつた。芝垣興生の「猿芝居」も面白い出来で、田中案山子出征中の收穫になる「江南の卷」は流行の大陸スケッチ程度を超えた見應えのある力作である。その他小林巢居の「青嵐」を擧ぐべく、入選作では岡田魚降森の「大巖寺曼荼羅」、濱崎左斐子の「鯉」など注目される作であつた。

第一回挿繪展

四月三日—七日 銀座・三越
挿繪界の流行畫家を以て組織する挿繪俱樂部の第一回展で、同人三十餘名の作約七十點を陳列した。中で石井鶴三の「宮本武藏」、中川一政の「石田三成」、木村莊八の「石井源藏兄弟」等は既に新聞連載のもので、一般の挿畫家の仕事に比して格段の内容を持つもの、小村雪岱の「たけくらべ」も特質を見せた。岩田專太郎、小池巖、小川倩葭の諸作も注意されたが、他は概ね普通の通俗挿

二七二點、會員會友の作を加へ、總計三九四點を陳列した。一室を事變關係の作品に充て、熊岡美彦、小早川篤四郎、その他の出征又は從軍畫を出陳、その他特別陳列としてヴラマンク、マチス、ゴーギャン、ボンナールの作品計六點を並べた。

新會員

江藤哲、田代順七
新會友 河原修平、大和田富子、三田村築、小貫綾子
家永駢三郎、松本富太郎、松居均、松岡正直
水船三洋が「男子出生」の喜びを大畫面に描いたのはまだしもであるが、自己の生活感情を表現するにどれ位の大きさが必要とするかを知らないが如く、徒らに大ききみに走つてその内容の貧弱さを補はうとする作家の多い事は遺憾である。このことは幸ひに特別出陳されてゐるゴーギャンの小品、プルーニユの農婦によつて再認識するの要がある。又技巧の點では、暖色を用ひ乍らも濕ひの無いもの多く、しかも大きさを誇らんとするは觀者に嫌惡感と興へる、濕ひの不足と纏りを缺くものでは齋藤里の「風景」にも感受され、甘い觸感を傳へる。バラ、に比して遙かに低調である。又、臺灣の娘達も一種の趣味的なもので、従来よりも好感を持ち得ない、熊岡美彦の多くの風景も亦さして力を入れたものでなく、これ等に比して正田二郎の「雪庭」、その他に示した努力、石本秀雄がホワイトへの苦心、山下大五郎が描いた童話的な内容を盛つた特異性に興趣をそ、その他や、纏りを見せて来た渡邊浩三の「静物」、大和田富子の進境、平通武男、小早川篤四郎の從軍報告畫、新人松本富太郎、安達良雄への期待等もあるが、甘やかされてゐる會といふ感は深い(龍・東朝)

繪に止まるものであつた。なほ楠木清方の泉鏡花作「注文帳」の挿絵版畫が贊助出陳された。

井口東白子俳畫展

四月三日—七日 大阪・三越

春の青龍社第七回展(日)

四月三日—七日 日本橋・三越

秋の青龍社展入選者のみを出品資格者として五十二點の搬入作品中二十一點を入選、社人の作品九點を加へて合計三十點を陳列した。川端龍子には「長春花」(紅白對)と風景畫「鏡後春信」、坂口一草は「露」と「水溫む」、加納三樂は「春到る」と「秋捨る」、福岡青嵐は「宇治點雪・瀬川夕映」の六曲一双、山崎豊は「朝陽」と「三妓圖」を出品した。

青雲賞 「陽の恩(春・秋)」 時田直善、「啄音」 利谷双樹、「燈影」 松宮左京

「青龍社もすつかり成人した感だ。これから内容に深さを加へて行くことだらう。従來動もすると興味本位の塗り上げ仕事で會場を徒らに喧嘩にしてゐた嫌いがなくてもなかつたが今年あたりから畫面を作ることより對象を観ることに研究を進めてゐる。だから見た處は低調だがそれぞれが自己の世界を掘り下げて行かうとする眞實さが窺へて好感が持てる。これも亦主宰龍子自身の一進展であり新しい指導精神の現れと思はれる。龍子の「鏡後春信」などの佳さは全く寫實から來る自然の香ひにあるので、決して從來多く見られた觀賞態度—構想が先行した種類の作品と趣を異にして居る。又、入賞作の利谷双樹の「啄音」、時田直善の「陽の恩」、松宮左京の「燈影」など何れも單なる美しい視覺的な表情を現したものでなく何か生活の聲を描き出さうとしてゐる苦心がある。その他坂口一草の「露」、山崎豊の「朝陽」が傑れて居り、安西啓明の「ペンギン」が墨の勉強をしてゐるのも注目を惹いた。」(武・都)

白朝會第五回油繪展

四月三日—七日 銀座・青樹社

大久保作次郎、田邊至等六名を同人とする會の第五回展。

美術展覽會(四月)

間部時雄洋畫展

四月五日—九日 大阪・三角堂

福岡美術會改組第一回展(日、洋、彫)

四月五日—九日 福岡市記念館

福岡市博物館、福岡美術會聯合主催。出品者は日本畫十二人、洋畫十六人、彫刻四人。

加藤青磁鑑賞展

四月五日—十日 福岡日日新聞社講堂

同調會第二回日本畫展

四月六日—十日 銀座・紀伊國屋

昨年美術學校を出た岩崎録、池澤賢等が組織する會。新日本畫のいはば過渡期的勉強振りを見せてゐた。

眞野紀太郎「ばら」 百花水彩展

四月六日—十一日 日本橋・高島屋

薔薇の花、風景等の水彩畫五十點の外に日本畫風の試作を出品した。

倉田白羊追悼遺作展(洋)

四月七日—九日 上田・教育會館

白羊會の主催、油繪遺作約八十點を陳列、尙春陽會々眞の追悼講演を行つた。

高間惣七個展(洋)

四月七日—十一日 銀座・資生堂

近作の油繪十四點を陳列、獨自の裝飾的效果を持つ作品である。

宗光會日本畫第一回試作展

四月七日—十二日 日本橋・白木屋

妹背平三おもちや繪小品展(日)

四月八日—九日 日本橋・東美俱樂部

作者は堂本印象の門人で、郷土味豊かな種々の玩具を描いた小品を發表した。

淡光會第八回洋畫展

四月八日—十二日 京都・朝日會館

葡萄牙國文化資料展

四月八日—十六日 東京科學博物館

今右衛門作陶展

四月九日—十二日 日本橋・三越

三越主催、十一代今泉今右衛門の作品色繪鍋島と伊萬里焼二百點を陳列。

新作挿花器陳列

四月九日—十三日 日本橋・三越

東西大家繪畫展(日)

四月九日—十三日 名古屋・松坂屋

日本民藝協會同人民藝作家十氏展

四月九日—十七日 大阪・阪急百貨店

京都新銳作家繪畫展

四月十日—十四日 名古屋・松坂屋

田邊至油繪個展

四月十日—十五日 銀座・青樹社

青樹社主催、油繪二十點、裸婦、風景、靜物等過去數年の制作の一部を發表した。穩かな寫實的畫風によるものである。

木俣高峰歴史畫展(日)

四月十日—十六日 京都・大丸

東西諸大家各派綜合現代創作版畫展

四月十日—二十日 名古屋・後藤版畫店

又色洋畫第三回展

四月十一日—十三日 銀座・紀伊國屋

洛齋會陶藝品展

四月十一日—十六日 大阪・大丸

紀元二千六百年春讚展

四月十二日—二十七日 日本橋・高島屋

紀元二千六百年の昌辰を迎へんとするに當り、財團法人紀元二千六百年奉祝會では國民の肇國精神を昂揚すべく國史資料の展覧を行つたが、同展に日本畫家十一人の

合作になる「華國創業繪卷」が出品された。此の繪卷の制作分擔は左記の通りで、なかで「五瀬命御奮戦」の圖は當初伊東紅雲の分擔であつたが、下繪を終へ本圖着手の間際に急逝したので、長野草風が代つてその圖題を完成したものである。

主題 辻善之助、考證 關係之助、詞書 尾上柴舟、料紙製作 縣治朗、

畫題及執筆者

日輪 横山大觀、豐穰の國土 中村岳陵、國土奉獻 菊池契月、天孫降臨 安田靉彦、日向御進發 岩田正巳 五瀬命の御奮戦 長野草風、熊野御難航 前川青邨、布都御魂の劍 吉村忠夫、金鶏の瑞 服部有恆、饒速日命の歸順、中村岳陵、樞原宮御即位 吉村忠夫

フアシスト伊太利展覽會

四月十二日—五月十日 東京府美術館

主催伊太利大使館、日伊學會、東京日々新聞社。後援 外務省、文部省、伊太利國外務省、同民業文化省。フアシスト伊太利の歴史、産業、文化、軍備の各般に互る紹介が行はれたが、特別出陳として清原繁次郎所藏にかゝる故ラギーザ玉の晩年の油繪遺作十數點を陳列した。

美之國創立十五周年日本畫展

四月十三日—十七日 日本橋・三越

雜誌美之國創刊滿十五周年を記念して同社主催により東西日本畫家の作品を陳列した。出品作家三十四名、竹内栖鳳の「鯨」、伊東深水の「いでゆの春」、伊藤小坡の「青葉のかけ」、堂本印象の「夏の風」、川合玉堂の「山湖春信」、川端龍子の「月櫻」、小林古徑の「鮎」、島田墨仙の「泉山先生と吉田松陰」などがあり、充實した展覧として好評であつた。

翠紅會第十四回日本畫展

四月十三日—二十日 新宿・伊勢丹

半月會日本畫洋畫展

四月十四日—十七日 大阪・阪急百貨店
疎約會第一回春季日本畫展

四月十四日—十七日 大阪日本橋・松坂屋

菅橋彦、立松玉泉、瀧秋方、小松均等の同人十四名の新作を陳列した。

澤田宗山新作陶展

四月十四日—十七日 小倉市・井筒屋

志良由喜會人形及人形玩具繪展

四月十四日—十八日 銀座・三味堂

綾崩會彫金第八回展

四月十四日—十九日 日本橋・三越

院友第四回展(日、彫)

四月十四日—十九日 銀座・松坂屋

日本美術院系の院友俱樂部主催の繪畫彫刻展で、出品畫は横山大觀、安田靉彦の一覽を経て、繪畫六十九點、彫刻二十一點を陳列した。

日本美術協會第七回美術展(彫、工)

四月十四日—二十七日 日本美術協會

同協會の第七回展は彫刻及び工藝品を陳列。應募出品總數は五百二點(二百十九名)で、外に無鑑査四十四點(二十四名)、合計二百九十九點を陳列した。尙参考品として總裁高松宮御貸下品を始め帝室博物館及び長尾欽彌所藏に係る時代衣裳を展覧した。

授賞 (二等賞) (彫刻) 「飯」安西順一、「太平樂」金保正智、(工藝) 「蓬萊銀皿」飯川喜代鏡、「花瓶春の花」宮坂房衛、「鑄銅鐵鉢形花器」宮川鑑堂、「青銅虫文盤」丸谷端堂、「日ノ丸釜」根來實三、「硝子花瓶」各務鐵三

「水指」安原喜明、「陽光手筒」村田義忠、(寫眞) 「K氏像」吉川富三、「三等賞」(彫刻) 「神苑」福井庸賢、「春庭」野口甚吉、「白鹿」洞澤今朝夫、「鷺木菟」早川朝洋「ことり」佐藤助雄、「快走」翁朝盛、「建設の譜」三代比

左雄、「女」宮本朝濤、(工藝) 「シクラメン珊瑚帶」神山寬暢、「竹籠」中田風齋、「桑春日卓」須田桑月、「蝶々魚金具」三井義夫、「銀瑞桃文水瓶」片山藏造、「繭と蝶金具」府川一信、「銅打出額面かながしら」大森光波、「象嵌奩」小川友衛、「鑄銅花文壺形花瓶」小林知泉、「鑄銅花瓶」池田逸堂、「鑄銅兩耳花瓶」赤江橋兼雄、「梅花文釜」加藤忠三郎、「鑄銅草文花瓶」原直樹、「青銅花瓶」

濡髮知加志、「鑄銅耳付花瓶」山本能民、「窯變列線文花瓶」竹内蘭山、「花文花瓶」岡本爲治、「麥文耳付花瓶」加賀月華、「吹よせ蒔繪表」今泉成之、「漆器六角形盛器」伊藤得眞、「春秋硯宮」工藤喜代志、(寫眞) 「コスモス」澤村美峰、「北國風景」佐川唯夫、「蕙」福井寛次

一止道人個展(日、篆)

四月十五日—十七日 銀座・鳩居堂

氷炭會が主催して、篆刻家山田正平の日本畫二十餘點を展覧した。

諸作家油繪展

四月十五日—十九日 大阪・美術新論社畫廊

日本彫會第八回展

四月十五日—二十三日 東京府美術館

内藤伸、佐々木大樹、三木宗策、澤田晴廣等を中心とする木彫家の團體で、作品公募はせず會員の作品のみを陳列する恆例の展覽會である。殆ど唯一の木彫團體としてその活動は期待されるが、一般に旺盛な研究的態度を示さず手慣れた表面的技巧に安住してゐる觀があるのは遺憾である。澤田晴廣の「髮」、中野桂樹の「砧」、浮彫で三國慶一の「林檎樹」等が出品された。

石井柏亭水墨淡彩畫展

四月十七日—二十一日 銀座・養生堂

日佛畫堂主催。すべて現場直寫主義の作者が東洋畫の材料用具になる「那珂川」、「男體山麓」、「竹嶋」等の風景十八點を描いて發表した。

「石井君の生紙に描かれた風景を一見する機会を得た。元來、柏亭君は日本畫の家に於て出た人だけに、君の油繪でも水彩でも吾々日本畫家に親しみ易い特色があるのであるが、此度の試みは其特色が一層はつきりして居る。浸潤する生紙を巧みに使つて、日本畫風に自然の風景を直寫されたものであるが、さすがに多年水彩で鍛へてあるから、天は高く地は平らに、物の位置が樂々と描寫されて居る。就中雲など軽く描かれて實にうまいものである。そして描かれた山野湖沼等それぞれ平明な詩趣があつて飽かず眺め入つた。近來洋畫家の日本畫が次々と表はれるが、石井君によつて亦日本畫に一つの描法が殖えたやうに思ふ。(川合玉堂)

鳥羽宗雄第一回油繪個展

四月十七日—二十一日 銀座・青樹社

主に昨夏の北支及び滿洲旅行による作品、二十五點を陳列した。ハルビン、北京、熱河、天津あたりの風景畫等。

熊谷守一、中川紀元二人展(洋)

四月十八日—二十二日 神戸・畫廊

東郷青兒第二回油繪小品展

四月十八日—二十二日 大阪・青樹社大阪支店

青樹社主催、陳列數三十一點。

堂本畫塾第二回東丘社展(日)

四月十八日—二十三日 大阪・大丸

茗葉會新作畫展(日)

四月十八日—二十三日 大阪・大丸

山口蓬春個展(日)

四月十九日—二十二日 日本橋・三越

近作の花鳥畫十點を陳列、紙本横物が多く、適度の省略と様式化を以て落つきと洗練された感覺を見せた。「泰山木」、「甘果」、「春瓶」、「秋瓶」などに作者の特質が見られる。

海外美術工藝品展

四月十九日—二十三日 大阪・三越

美術展覽會(四月)

栢森義油繪展

四月十九日—二十三日 大阪・三越

近作の油繪大小約四十點を陳列、作者は光風會の新進會員。

東西大家日本畫展

四月十九日—二十三日 上野・松坂屋

松坂屋主催。主なる出品は中村貞以「螢」、堅山南風「運日」、安田靱彦「都波貴」、郷倉千靱「兔」、山村耕花「花の蓮」、酒井三良「採桑」、大智勝觀「山里の雨」、荒井寛方「魚籃觀音」、川崎小虎「陽春」、吉村忠夫「竹取り」、兒玉希聖「無花果」、結城素明「雨」、矢野橋村「溪山春霽」、川村曼舟「山村煙雨」、小野竹喬「水畔」、案本一洋「瀧津瀨」、石崎光瑤「薰園」、津田青楓「芽出し春蘭」、近藤浩一路「富岳」等。

田中寅三「海と船」洋畫展

四月十九日—二十四日 大阪・阪急百貨店

落合朗風遺作展(日)

四月十九日—三十日 東京府美術館

明朗美術聯盟の主宰であつた故落合朗風の三回忌に際し、故人の遺作展が川口春波、高瀬新篁堂其他門下一同の發企によつて開催された。陳列數九十四點、初期の院展出品畫「エバ」肥牛より帝展出品の「梅ヶ畑の麥秋」「漁村」「南房漁港」、青龍展出品の「華嚴佛」、明朗展の「常夏の國」「三人の音樂隊」「畫人の像」「かまくら」春夢」等の力作をはじめ、其他個展出品畫に至る迄、代表的な作品を殆んど網羅してゐた。大作「エバ」は二十四才の執筆であるが、特質を備へて既に一家格を見せた。後年の明朗展制作には「日本畫に新しい道を開拓すべく努力しながらある迷路に入つた(田軒・毎夕)かの點も見受けられぬではない。然しながら故人獨特の、其の浪漫的性格と色彩感覺の裝飾的な様式化の畫風は、高度の藝術性は見出し難かつたが、生來自然の幻想、情調を描

いて竟に一貫してをり、素朴な感覺世界を展開したものである。尙遺作展開催の爲の春の明朗展は今年開催しないことになつた。

出品目録

畫題	出品展	所藏者
肥牛	第八回院展	中山 蕃
島村餘情	第七回院展	小幡 鐵介
華嚴佛	第三回青龍社展(觀音開三)	山形 珍藏
墨玉姫	大正十年院展試作展	柳 澤 小松
室内靜物の内(B)	第五回青龍展	
道化	第二回明朗展	
三人の音樂隊	同	
常夏の國	同	
漁村	第九回帝展	
半裸	明朗美術試作展	
南房漁港	第十回帝展	
かまくら	第三回明朗展	
エバ	第六回院展	六曲一雙
初冬二題	第一回春の青龍展	小森 順三
佛桑華	第三回個展	
梅ヶ畑の麥秋	第八回帝展	
山湯	第二回個展	
地下鐵	第一回明朗展	
銀座	同	
御宿の海女	第四回個展出品	
漁家	同	
海邊風景	同	
春永	第十四文展	伊、臣 眞
キリスト誕生	慮女作	篠原 良雄
糸滿の女	同	雙幅
梅	明朗美術試作展	石崎 石三
月	三越美術展	田島 庄太郎
鴛鴦	第一回個展	小杉 榮雄
木綿の花	第五回個展出品	吉村 佐平
金柑	同	小幡 鐵介
黃農山	第一回個展	同
待春	第三回個展	高木 政二

美術展覽會(四月)

愛染明王	第三回個展	原島彦七
春夏秋冬の内(春)	第一回個展	阿部虎吉
鯉	第五回個展	森留藏
秋柿	助風追慕試作展	中山 蕃
樹と魚	三越美術展	石崎石三
竹林	第二回個展	阪本一郎
春日		木佐徳之助
白椿	絶筆	
畫人の像	第二回明助展	久田一郎
白椿	第一回個展	鷹野茂雄
大磯松林		小西孝二
蕪鮮風趣の内	第三回個展	吉村佐平
七夕	第四回個展	吉尾甚喜知
はまなす	明助美術試作展	
秋茄子	同	石崎石三
同		齋田素州
船正月	第四回個展	梶 鐵五郎
草魚		箕浦 清
冬桐	第三回個展	柳澤 小松
雪山風景	第二回個展	袴宇市之助
秋夕二圖の内	個展	中原 磨次郎
秋電	明助美術試作展	新聞五兵衛
如意輪觀音	第一回個展	原島彦七
紅蓮白蓮		石崎石三
桐の花	第五回個展	岩 淵七郎
柳鷺	第一回個展	金井紫雲
露瀉	同	吉村佐平
静物	明助美術試作展	高瀬清吉
飛泉		同 友 國
ふぐ		紅白双幅
浴室	第五回青箱展	
夜湖	明助美術試作展	小 轡 鐵 介
春夢	第三回明助美術聯盟展 四幅對	
彩霞	同	
秋垣	同	
雪餘	同	
茶齋二題	明助美術試作展	
猫	第五回個展	
三勇士	第一回個展	

雪晴れ 第一回個展

其他

椿、水里、金柑、竹の流、高原春到、若葉、壺花、船正月、雪山、熱國の花、初冬、栗、梨黄、夕雲、静物、すすき、熱國の花、漢江の月、雪路、松の温泉、八瀬

ジャツクリース・シュウル女史繪畫展(洋)
四月二十日—二十二日 駿河臺・日佛會館

男爵山川建、三谷隆信、男爵ギイ・ファン等の主催の下に、佛人ジャツクリース・シュウルの作品を陳列した。

高野眞美渡瀧記念洋畫個展
四月二十日—二十二日 銀座・三味堂

美術日本社日本畫展
四月二十日—二十二日 銀座・鳩居堂

相馬御風書茶掛並に東西名家新作日本畫表裝展
四月二十日—二十二日 日本橋・東美俱樂部

奈知安太郎第一回洋畫展
四月二十日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊

新歸朝の奈知安太郎の作品三十二點を陳列。アカデミ、シヨミエールのアトリエで描いた人物畫及びモンパルナツスの風景畫等である。

第二回三和會特選新作陶磁展
四月二十日—二十四日 日本橋・高島屋

高島屋美術部では奥田誠一を顧問として昨年同會を組織した。出品者は小川雄平、岡本爲治、加藤土師萌、河村喜太郎、北出塔次郎、岸園山の六名。

但馬出石燒永澤永信作陶展
四月二十日—二十五日 大阪・三越

六旺會日本畫展
四月二十一日—二十三日 新宿・伊勢丹

朱葉會第二十一回展(洋)
四月二十一日—二十五日 日本橋・白木屋

岡秀洋畫家を以て組織する同會の公募展で、今回は安

井曾太郎、辻永、有馬生馬、岡田三郎助、藤田嗣治に審査を依頼した。

搬入數二八五點、入選數一六四點
授賞(朱葉會賞)岡田節子、(獎勵賞)柳瀬彌生、三橋ふじ子、加治屋ふじゑ

新作日本畫展
四月二十一日—二十五日 日本橋・白木屋

尾崎三郎個展(洋)
四月二十一日—二十五日 大阪・美術新論社畫廊

丸山晚霞新作展(洋)
四月二十二日—二十五日 福岡・玉屋百貨店

赤松麟作還歴記念繪畫展(洋)
四月二十二日—三十日 大阪市立美術館

赤松洋畫研究所では赤松の還歴及び同所創立三十周年を迎へ、大阪朝日新聞社後援の下に赤松の舊作回顧展を行ふと共に、併せて門下の制作を陳列した。

日本畫院第一回展(日)
四月二十二日—五月七日 東京府美術館

昨春舊日本畫院同人等により結成された日本畫院が、作品を公募して第一回展を開いた。東京に於ける文展系中堅作家の團體で、展覽會は一黨一派に偏せざる公共的試作發表機關とし、後進の奨励を主な目的とするものと見られるが、藝術運動としての特色と活氣に乏しいことはその性質上やむをえぬとして、新團體として期待される熱意があまり見えぬことは物たりぬ觀があつた。同人では望月春江の「花と古玩」、穴山勝堂の「明るい海村」、矢澤弦月の「春月」、松本姿水の「菜園」、吉田秋光の「春宵」、野田九浦の「宵の秋」、川崎小虎の「ひこばえ」、吉村忠夫の「靈劍」、岩田正巳の「牛若と辨慶」、高木保之助の「大輪椿」、飛田周山の「皎月六趣」、畠山錦成の「雨後」等があつたが、半数の同人は出品せず、入選作も概して低調であつた。

入選數 五十八點、陳列數 七十三點。

授賞 日本畫院賞 「冬日」 東山魁夷、「泰樂」河村憲邦、「飼鳩」野島清一 N.A.W氏賞 「淺春」稻垣虎之助

四行會第八回洋畫展

四月二十三日—二十五日 銀座・資生堂

島崎鶴二、岡田謙三洋畫展

四月二十三日—二十五日 大阪・染工聯合會館

橙青社第一回繪畫と衣裳の會

四月二十三日—二十七日 名古屋・松坂屋

春陽會第十七回展(洋)

四月二十三日—五月十四日 東京府美術館

同會は數年前より嚴選の方針を持し、そのため入選畫の水準は向上を示して、壁面には緊張が感ぜられる。此の會特有の陰鬱な色譜と筆觸の美味な傾向は應募作品に於ては會場效果本位となる場合も少なからず見受けられる。會員の制作は夫々の特質を示し、全體として見應へのあるものであつた。今回は、滯佛中の長谷川潔が多數の版畫を出品し、又昨年逝去した故倉田白羊の遺作室が設けられて注意をひいた。尙伊藤慶之助、川端彌之助、加山四郎、森田勝の四名が今春會員に推舉された。

第一室、二見利節の「三人の女」は特徴ある色調を示し、構圖に苦心の認められるもの、高木勇次も「レビユ」其他に勉強を見せて、共に會の新人として注意された。新沼杏一の「アクロバット」は様式化に特徴があつた。

第二室、倉田三郎の「小屋内」は達者に筆を運んだ作。外に土屋義郎、楊佐三郎の諸作が挙げられ、大嶺政寛の「キビ知」も特色を持つ。滯佛作を示した高橋貞一郎は色感に難はあるが勉強してをり、又昨年逝去した故福井謙三の遺作九點には技術が認められ、其の早世を惜しませる。

第三室、中川一政の油繪三點は独自の境地を見せた。

「窗外山川」は豪奢な感じで、多分に文學的な感興を盛つたものである。横堀角次郎は色味に特色があり、若山爲三の人物畫は構圖に一應の研究を示すもの。小林徳三郎の小品は清楚な感覺を失はず、石井鶴三の油繪はスケッチ的な面白さを捉へた。外に眞田久吉の小品が愛すべき作。

第四室、足立源一郎は「谷川嶽カタスミ尾根」及び大同石佛の諸作に旺盛な勉強振りを示した。木村莊八の「椿姫」其他は技巧的な小品で、洒脱な感興を盛り、田中善之助の「洛北の村」は色譜に特色を持つ。今關啓司の「初夏山海」「春沼」等は詩人的な風格を示し、小穴隆一の「坤書館」其他は描寫に屈託が無く、題材に新しい試みを見せた。外に栗田雄、岩田榮之助が注意された。

第五室、國盛義篤の諸作は粗く盛り上げ「泊の海」が面白い出来であつた。加山四郎は依然色價の研究に様式的な手法を試みつゝあり、伊藤慶之助はアイヌを描いて、美味な筆觸に效果を示した。其他、小栗哲郎の風景、中谷泰の諸作が挙げられる。

第六室、鳥海青兒の諸作は独自の色調と粗い盛りあげで場中の異彩であり、或る感容覺内に有するが、表現の節度に於て考慮の餘地を残す。外に上野春香の「カルカッタの町」を挙げる。

第七室、水谷清は大作「相撲」に構圖の美味な效果を示し、元氣な制作力を注目せしめた。外に遠藤典太、津田正周、吉田達磨の諸作が特色を示した。

第八室、此の室は石井、中川、木村等の挿繪及び版畫を陳列した。長谷川潔のエッチング「竹取物語挿繪」をはじめ「農園と雲」「オレンヂと葡萄」「オーバーニュー風景」等潇洒な版畫技術を示して一般に好評であつた。前田藤四郎の着色版畫も出色のもの、又小穴隆一の「北京」が風格を示した。

第九室、倉田白羊の遺作は大正のものでは院展出品の

大作「冬」が群像構成を行つて醇朴な寫實を示してゐるが、昭和に入り、題材を信州の山村風景に探るに及んで主として立體の寫實的追究に克命な努力が向けられてゐる。轉じて昭和十年、大作「たき火」を劃期點として、爾後の制作には新氣が認められ、作品は構想的となつた。「井戸端」、「山居後園」、「初冬果園」等には廣闊な空間が表出され、晩年の優作に挙げられる。なほ最後の「風景」には簡約的な表現に於て新展開を豫想せしむるものがあつた。晩年の代表的大作「たそがれ行く」「たき火」「冬野」等の陳列を見なかつたことは遺憾であつた。

搬入總數 一八三五點、入選數 二〇〇點
春陽會賞 前田藤四郎、高木勇次、田中壽太郎
會友推薦 津田正周、吉田達磨、中谷泰、前田藤四郎
出品目錄 (○會員、△會友)

食堂の一隅	加賀孝一郎	エチュード(四)	南城	一夫
佛像と女	同	花(一)	同	山田 義夫
花	同	角瓶	同	同
勉強する兒	同	前庭	同	同
部屋(朝鮮)	南屋 晋彦	人梯	同	同
土人と仔豚	兒玉 彦三	風俗	同	同
憩ひ	同	うつぶせの女	同	二見 利節
笛	中村 萬平	三人の女	同	同
踊る	土屋 實	足を掛けた女	同	同
戸口	同	鏡を持つ女	同	同
綿摘み	同	庭	同	角南 松生
あやとり	同	孔雀仙人掌	同	三木朋太郎
兵士の話	同	後苑晚秋	同	同
△新沼 杏一	同	樹下古城への道	同	石黒平三郎
アクロバット	小野 忠弘	海の幸	同	大久保一郎
入江の海	同	砂場	同	同
岬	同	九番館	同	同
緑のコスチューム	鈴木 琢磨	街と自動車	同	高木 勇次
エチュード(三)	南城 一夫	本願寺	同	同
エチュード(二)	同	石切場小景	同	同
花(一)	同	レビユ	同	同
エチュード(一)	同	同	同	同

美術展覽會(四月)

車窓	高木 勇次	サンジヤルマン	高橋貞一郎	横臥讀書	同	花	△鬼塚 金華	機	○加山 四郎	蘇州風景(ヒト)	○鳥海 青兒
窓	同	風景	同	少女像	同	花圖	吉川 清	鏡	同	レスク	同
慶園新緑	小泉倫之助	メトロ・クルー	同	高圓山	同	ダンス	同	森	同	支那の家	同
ビル街春雪	同	サンジヤルマン	同	編む少女	同	冬の堤下	同	面	同	蘇州小景	同
春の街角	同	風景(A)	同	白子の富士	同	梅雨の晴間	○今關 啓司	小憩	同	あさがほ	同
街	三井 永一	カーニユ風景	同	N町	同	初夏山海	同	倉庫うら	同	作品(B)	同
寺院	同	パストウール附近	同	雪景色	同	富浦	同	静物	伊川 鷹治	作品(D)	同
水族館にて	多田 毅三	舵手	△和田 歳一	静物	同	鹽尻風景	同	静物	原田平治郎	煉瓦の家	同
琉球の墓地	大嶺 政寛	婦人像	故福井 謙三	卓上静物	同	春沼	同	庭(B)	同	收獲	同
首里風景	同	読書	同	朱盆と果物	同	鹽尻風景	關四郎五郎	庭(A)	同	厭	同
キビ畑	同	読書	同	商談	同	ギターを弾く男女山田	伊藤 敏博	玩具の静物	同	二人のアイヌ娘	同
八ッ岳	△土屋 義郎	婦人像	同	温泉	同	初夏の日比谷	石井彌一郎	秋の溪流	同	アイヌの男	同
庭園	同	婦人像	同	小園	同	パレットを持つ	故上野 太郎	二人のアイヌ娘	同	アイヌの男	同
樟	同	街	同	裸婦	同	てる白晝像	宮下貞之助	たそがれの白老	同	馬に乗るアイヌ	同
二人	野村 千春	街	同	谷川巖カタズ	同	靈の花	興善寺邦達	猫を抱くメノコ	同	猪を抱くメノコ	同
フアイバーの職工	同	黒い帽子	同	市の倉澤	同	木枯	○小穴 隆一	踊り子	長岡 一敏	踊り子	同
厨房	同	肉屋	同	三窟	同	花B	同	獣神闘争	同	獣神闘争	同
夏	△楊佐 三郎	春巻	○中川 一政	大同石佛(一)第	同	二鬼踏蹴	同	青年像	同	青年像	同
秋容ちやん	同	牧の郷	同	大同石佛(二)第	同	化粧	同	獣神闘争	同	獣神闘争	同
ひまわり	井上 八郎	窓外山川	同	大同石佛(三)第	同	花A	同	横向きの肖像	同	横向きの肖像	同
坑夫	洪 瑞麟	白菊	△大澤鉦一郎	大同石佛(四)第	同	静物	同	コンポジション	同	コンポジション	同
炭車押	同	浴衣少女	同	二十窟	同	魚村	○栗田 雄	アマリス	同	アマリス	同
卓上静物	秋口 保波	菊	同	大同石佛寺	同	梅咲く頃	原田 武男	宮	同	宮	同
朝の山	同	靈隠寺石佛	○川端彌之助	夏	同	立葵	同	花	同	花	同
休憩室の女	同	静物	同	大同石佛	同	海咲く頃	○國盛 美篤	森	同	森	同
對談	同	城南早春	同	紅椿	同	浪と岩	同	とんぼ	伊東 忠子	とんぼ	同
馬	同	讀書	同	畫橋戦争	同	泊の岩	同	骨甗風景	伊東 忠子	骨甗風景	同
北國夕景	森本 三郎	溫室内(二)	同	畫橋戦争	同	泊の岩	同	網ほし場	同	網ほし場	同
港	木下 公男	溫室内(一)	同	黃椿	同	三段峽	同	バスケットボール	同	バスケットボール	同
男	同	コロンヌ風景	張 万傳	ある日	同	深流(一)	同	町の寫眞屋	北野 萬平	町の寫眞屋	同
沐浴	同	池畔	○播磨角次郎	洛北の村	同	深流(二)	同	玩具と瓶	同	玩具と瓶	同
女	松本 茂	ブリムラ	同	静物	同	冬の風景	竹山 宜男	静物	同	静物	同
風景	○倉田 三郎	吳服橋にて	同	木立	同	海見ゆる公園	田邊 謙輔	蘇州風景	○鳥海 青兒	蘇州風景	同
窓	同	花	同	赤澤	同	丘	同	壱塚のある風景	同	壱塚のある風景	同
小女	同	風景	○小林徳三郎	伊豆風景	同	吾野静日	△小栗 哲郎	揚子江と漢陽の街	同	揚子江と漢陽の街	同
花(一)	同	窓邊讀書	同	對島村	同	雪空	同	同	同	同	同
附近	同	繪を描く子供	同	風景	△鬼塚 金華	扇	○加山 四郎	同	同	同	同
ルクサンブール	高橋貞一郎	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

兎 △津田 正周

風景 同

建物 同

ゆり子 同

燈臺と桐の花 同

犬のゐる静物 同

相撲 同

毛皮の婦人 同

名苑(舊大乘院) 同

戦況を讀む 同

流れ 同

海濱造像 同

橋たはる女 同

父子像 同

少女立像 同

鴛の群 同

石佛 同

静物 同

磯 同

殘雪の崖 同

曲馬 同

風景 同

野球を見る人達 同

牡丹 同

競馬 同

海女の焚火 同

静物 同

ベレー帽の男 同

拳闘 同

夜の肉店 同

サーカス 同

谷の木立 同

花 同

防波堤 同

樹間展望 同

静物 同

讀書 同

版畫(1-15) 同

石田城(1-6) ○中川 一政

北京(1-7) ○小穴 隆一

三番叟 ○木村 莊八

宮本武蔵(1-7) ○石井 鶴三

男の顔 同

室内 同

家の風景 同

風景(1) 同

夜の街 同

群像 同

婦人像 同

カミイさん 同

紅形(A) 同

手 同

翠 同

紅形(B) 同

那覇の街 同

龍舌蘭と墓 同

戰場スケッチ(1-10) 同

兵隊の肖像 同

竹取物語 同

故倉田白羊遺作室 同

素描 同

デッサン(畫稿)五點 同

父爾谷肖像(十八歳作) 同

小笠原島時代 同

畫題不詳 同

畫題不詳 同

房州時代 同

水門 同

風景 同

多 同

信州時代 同

冬の林檎畑 同

老樹と太郎山 同

多 同

樹蔭 同

○長谷川 潔

冬の崖

梨の若木と崖

曇り日

慈姑圖(色紙・絶筆)

風景

桑園初秋

紫草畑

琉球香爐

殘る雪

風景

冬の崖

雨後(水彩)

冬の崖

雨後

崖を負ふ家

小菊

冬の陽

雪景

ざくろ

眞夏の崖

昭和十年以降

崖下の家

初夏後園

夏の崖

崖と柿の木

静物

晩秋

初夏風景

風景

村の店

太郎山

ねぎ畑

大門川風景

朝の葡萄園

犬山附近

井戸端

山居後園

ぶどう

仁右衛門島一層

山居の秋

其ノ一

同

其ノ二

兜岩

博多煙の霞

初冬果園

桃

海に沿ふ道

博多灣小景

初夏

海村

夏の木下道

柿

けし島

博多灣風景

柚子と南蠻

上田公園にて

波太

風景(油繪絶筆、未完、昭和十二年十月作)

伊庭傳次郎洋畫展

四月二十五日—三十日 大阪・阪急百貨店

瑠湮會油繪小品展

四月二十五日—三十日 新宿・伊勢丹

戊辰會第十回展(日)

四月二十五日—三十日 大阪・三越

戊辰會の關西に於ける第三回展で、陳列數十五點。

江騎會染織皮革工藝展

四月二十五日—三十日 日本橋・三越

三越主催、河合研二、上野斌郎、熊谷義郎、熊谷重太郎の各種皮革工藝品を陳列した。

木谷千種新作日本畫展

四月二十五日—三十日 神戸・大丸

融紅響新作繪畫展(日)

四月二十五日—三十日 大阪・阪急百貨店

近藤浩一路個展(日)

四月二十六日—二十九日 大阪・高島屋

早川尚古齋竹籬展

四月二十六日—二十九日 大阪・高島屋

櫻谷徹藏バステル畫小品展

四月二十六日—三十日 大阪・三越

山尾薫明洋畫展

四月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

魯山人自選小品畫展(日)

四月二十七日—二十九日 銀座・三味堂

東西大家新作畫展(日)

四月二十七日—二十九日 京都・京都美術俱樂部

佐藤梅軒主催。

山田双年第二回個展(日)

四月二十七日—三十日 名古屋・十一屋

森田沙夷近作小品展(日)

四月二十七日—三十日 名古屋・丸善

美術展覽會(四月)

クワツキ一研究所第九回所員作品展

四月二十八日—三十日 銀座・紀伊國屋

關口隆嗣北支從軍畫展(洋)

四月二十八日—五月二日 京城・三越

獨立第九回美術展(洋)

四月二十八日—五月七日 大阪・朝日會館

島崎鶴二、岡田謙三洋畫展

四月三十日—五月二日 神戸・六甲ハウス

五月

五明會第二回展(洋、彫、工)

五月一日—三日 銀座・三味堂

須田國太郎近作展(洋)

五月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

第六回香川縣工藝美術綜合展

五月一日—九日 高松・三越

佐野八郎戰蹟畫展

五月一日—四日 銀座・青樹社

春陽會系の作家で、應召して中支鐵道の警備に就き、軍務の餘暇に描いた水彩スケッチ約三十點を出品した。

勝間田武夫油繪展

五月一日—四日 大阪・三越

第一回谷口富美枝個展(日)

五月一日—四日 銀座・紀伊國屋

「現代婦女十二ヶ月」を初め約十點の近作を陳列した。

森田光達漆繪鯉百態展

五月一日—五日 大阪・三越

太田聽雨大阪個展(日)

五月一日—六日 大阪・松坂屋

日本漆藝院第三回展

五月一日—四日 日本橋・三越

東京における有力な漆藝家を集めた團體で、同人二十六名の作品の外、公募無鑑査四名、同入選二十一名の作品を陳列した。今回は特に國策に沿ふて金を絶體に使はない事を心懸け、よし使つても少量にして効果的なものである事を標榜して作品を募つた。同人作では本間舜華の「巻苜蓿(蘭)」吉田醇一郎の「洋室菓子器」「卓」、都築幸哉の「香爐盆(姿羅)」などが注目された。

加藤靜兒油繪展(洋)

五月一日—四日 日本橋・三越

河合卯之助作陶展

五月一日—四日 大阪・三越

松島一郎北京風景畫展(洋)

五月一日—五日

油繪十五點、北京の「自然と人工の美しさ」を描いた。

構造社第十二回展(彫)

五月一日—二十日 東京府美術館

沈滯氣味な彫刻界にあつて、若々しさと多方面な研究的態度を示す會として興味をひくものがある。會員達もそれ／＼の立場にあつてよく努力を示した。齋藤素巖の「母」は作者自ら「彫刻家にあるまじき制作」と自嘲した文學的聯想をもつ作であるが、この懇切な手法は「豊穰」「工師像」などと共に、作者の街ひのない質實さと、穩健な技術的修練を示してゐる。この寫實的作風と共に安永良徳や宮地寅彦の近代的な誇張の多い作品と並ぶことは、一種の混亂を感じさせますが、そこにこの會の凝固せぬ特色があるとも見られるであらう。安永の様式化は一般の感覺からは偏してゐるが「作品(C)」の如きは一種の熟練と内容の纏りを見せ、「庭園裝飾」その他に相變らず多彩な才能と活動を示す、野村公雄の浮彫「奏樂する女」は手法粗雑に流れ面の取扱ひに計畫不十分の憾がある。河村龍興の肖像諸作、後藤清一の擬古的な「觀音」

その他、袖月芳の「火箭」その他、各人の境地を示して見るべきものをもつが後者は道具立や、繁褥に過ぎる觀製作の動機から注目をひいた。

尙本年三月逝去した會員荻島安二の遺作と昨年名譽の戦死をとげた同後藤泰彦の遺作とが特別陳列された。荻島の遺作は大正十年以後晩年迄のもの五十九點、外にクワツキ七點及びメダル三十七點で、一貫した甘美な感覺の中に天賦の才を示すものがあつた。後藤の遺作は昭和八年以後のもの十九點で肖像が多く、これらは概ね寫實的な作品であるが、「立像」「黎明」等に様式化の試みを見せてゐる。

搬入數二六七點、入選數五五點、陳列數(遺作陳列を別にして)一一〇點
構造賞「愛撫」山畑阿利一、研究賞 井手則雄、小口節三、木島五郎
會友推薦 山畑阿利一、森本清水、小口節三
出品目録

髪を持つ女	小口 節三	北澤先生像	瀬戸 園治
胸像	瀧川 美一	庭園裝飾コムボ	安永 良徳
突撃(コムボジ)	進藤 武松	作品(A)	原田新八郎
習作(二)	佐野 信雄	支那仙人掌	淺沼 俊雄
千人針	袖月 芳	豊穰	齋藤 素巖
裸婦	新井喜惣治	髮	宮地 寅彦
詩人B像	井手 則雄	童心座女	後藤 清一
Vイナスの發見	野村 公雄	綠蔭	袖月 芳
I氏像	齊藤 素巖	鏡	星野 健一
首(二)	小川 節三	M子の首	石谷 健一
追憶	川瀨 勝藏	長い首	石谷 百馬
ヒヨコ	石躰祐壽治	國光	國光
裸婦(C)	原田新八郎	牧野英一先生	河村 龍興
犬と兵隊	宮地 寅彦	牡牛	進藤 武松
作品(C)	安永 良徳	裸婦	二星 清光
觀音	後藤 清一	照代の顔	原田新八郎
少女の首	川瀨 勝藏	愛撫	山畑阿利一

首習作(A)	瀧生	茂夫	牛	進藤	武松	男の首	西川	亨	一色久代氏
花東	野村	公雄	首(1)	小口	節三	裸女習作	瀬戸	園治	照代さんの首
裸婦	宮地	寅彦	母猫	河村	龍興	首(A)	安永	良徳	マガレット・ユキ
I嬢の首	谷口	百馬	犬と女	宮地	寅彦	萩島安二遺作	マネキン習作		石橋さん
早慶水上麗技パ ンドバックル	清田	清也	S子夫人の首	川瀬	勝三	こころ			胸像(四)
石窟の護り	野村	公雄	Y氏像	石躍祐壽治		胸像(1)			お葉さん
投げん	瀧川	美一	母と子アルトメ	柚月	芳	花柳はるみ氏像			Kの像
聖戦	菅原	勝次	漁師の母子	堤	達男	稻垣夫人			夏
深井先生	齋藤	素巖	橋本中將像	河村	龍興	小林氏像			胸像(五)
母と子供達	柚月	芳	首習作(B)	阪部	工介	首(1)			首(八)
キヤビネット装飾安永	良徳		作品(B)	安永	良徳	首(1)			ロボット風のお葉さん
波に乗るエロス	静立		火箭	柚月	芳	砂田駒子氏			細田氏令嬢
奏樂する女	西川	宗舟	鐘魁	小口	節三	胸像(1)			胸像(六)
葡萄と女	野村	公雄	胸像	木島	五郎	ゆびわ習作			小さなエリダさん
習作(C)	青柳	利男	首習作(B)	瀧生	茂生	Kの像			首(九)
首(B)	谷口	百馬	作品(A)	安永	良徳	胸像(3)			ステッキ振り
双川富田幸次郎	安永	良徳	ゴム笛	河村	龍興	首(3)			首(十)
氏像	潮田	皓哉	無題	淺沼	俊雄	花柳さん			首(十一)
R子像	中野	五一	マドモアゼル	宮地	寅彦	首(四)			同(十二)
男と女	野村	公雄	女座像	小口	節三	波			同(十三)
習作(1)	木島	五郎	青年立像	井手	則雄	ルルさん			同(十四)
波乘	新井喜惣次		老人胸像	鈴木	雄	ダイトリツヒ			自刻像
老母	星野	健一	習作(2)	木島	五郎	女性			首(十五)
習作(1)	木島	五郎	キヤビネット装 飾(幼きパン)	安永	良徳	喜代三さん			ゆびわ
吉村勝治先生	河村	龍興	女	國光	興	董さん			クロツキー(七點)
胸像	安永	良徳	たきび	淺沼	俊雄	首(五)			メダ(三十七點)
青春	進藤	武松	立膝の女	瀧川	美一	大橋房子氏			後藤泰彦遺作
首習作(A)	阪部	工介	男の首	清水清太郎		お葉さん			夢
大陸の守護	野村	公雄	立女(A)	齋藤	吉郎	エリダさん			肖像
作品	森本	清水	女	齋藤	吉郎	商業用彫塑(1)			幼兒
亡友Wへの供華	井手	則雄	首	淺沼	俊雄	商業用彫塑(2)			かくれんぼう
熊	河村	龍興	牛	淺沼	重武	商業用彫塑(3)			パークレー博士像
秋場刀自像	中野	五一	母子像	小澤	重武	風			黎明
親陸(盟邦伊太 利へ送る)	和田垣良雄		被勞	瀬戸	園治	花柳はるみ氏			立像
薫染	後藤	清一	古稀之像	井手	則雄	裸體			或る感情による姿態
作品(D)	安永	良徳	憩ふ女	白石	正義	ネンの首			樂園
母	齋藤	素巖	カリアチード	中野	五一	首(七)			肖像

美術展覧會 (五月)

月潭所見 構想
肖像 婦
吉池氏像 永井柳太郎氏像
肖像 李氏騎馬像
同

第四回京都市美術展(総合)

五月一日—二十日 大禮記念京都美術館
京都市が美術奨励を目的として開催する総合公募展の
第四回で、今回の審査員及び鑑審査の成績は左の通りで
あつた。

審査委員 (日本畫) 石崎光瑤、西山翠嶂、堂本印象、
登内微笑、川村曼舟、金鳥桂華、中村大三郎、山口華楊
案本一洋、菊池契月 (洋畫) 大橋孝吉、太田喜二郎、鹿
子木孟郎、田中善之助、黒田重太郎、須田國太郎 (彫
塑) 沼田一雅、矢野判三、松田尙之、(工藝) 神坂雪
佳、山鹿清華、戸島光孚、小倉友之助、清水六兵衛、平
館倉、楠部彌次

日本畫	搬入數	入選數
洋畫	三三七	一八七
彫塑	三三三	一九九
工藝	五一	三五
合計	一八一	八四
	九〇二	五〇五

陳列點數は日本畫二〇一、洋畫二二五、彫塑四〇、美
術工藝一〇七、合計五七三點で、其の内同展委員の無鑑
査出品は日本畫一四、洋畫二六、彫塑五、美術工藝二十
三點であつた。

授賞 (日本畫) 「春霜」井上通世、「春」濱田親、「温
室」加藤美代三、「斜陽」谷野圭一、「春畫」中堂長陽、
「山陰風景」桑野博利、「漁婦」案本武雄、「林」冬木清、
「椿」齋藤紫山、「麗春」平間且陵、(洋畫) 「龍門の雪」
岩崎又二郎、「斜陽の丘」今井憲一、「あさがほ」沖嘉一
郎、「脱皮」田村一二、「櫻と魚具」津田周平、「葉櫻の

頃」松村綾子、「春雪」藤田輝世、「室内」水清公子、「春の嵐山」芥川弘吉、「彫塑」遠望「岡本庄三」、「少女」吉川常雄、「習作女立像」田中源三、「陽炎」清水豐四郎、「工藝」鷹手箱「井上金花」、「刺繡」長谷川文平、「鐵線飾箱」金江宗解、「青瓷香爐」清水祥次、「染付吹墨紋花入」新開邦太郎

五月五日—七日 銀座・紀伊國屋
大阪工藝振興展
五月五日—十四日 大阪市立美術館
國粹工藝美の完成と之に伴ふ工業品の美化及び輸出貨易の躍進を圖るため、今春より大阪府、大阪市、大阪商工會議所、堺市、大阪府工業懇話會、大阪府工藝協會聯合主催の綜合展が開催されることになった。今回の審査員及び鑑査の成績は左の通りであつた。

五月六日—八日 數寄屋橋・日動畫廊
橋口康雄、三木辰夫、染木煦三名の版畫約七十點を陳列した。

大野夢風作大日本魚類木版畫展
五月二日—三日 丸ノ内・永樂俱樂部
兒玉希望個展 (日)
五月二日—四日 大阪・高島屋

松田權六 岩田藤七、杉田禾堂、中島豐次、墨岩淡哉、山本笙園、島野三秋、安原祥窓、根筒忠祿
搬入數二六九點、入選數一一五點、陳列總數(無鑑査及特別出品、參考品共)一七四點
授賞 一等賞「古矢竹盛器」坂口宗雲齋、二等賞「銀つゆ空置物」平松宏春、「草木染縹麥パネル」日比野近三、「草木染婦人着物」祐成美代子、三等賞十名、褒狀二十名、特別賞四名

大河内夜江人新作畫展 (日)
五月二日—四日 芝・東京美術俱樂部

萩谷巖近作個展 (洋)
五月五日—十四日 日本橋・三越
少數の滯佛作及び近作の油繪四十餘點を陳列した。

青霞會の主催で、本山幽篁堂其の他を世話人、大谷稔由、根津嘉一郎等を賛成人として新作を展覧した。南畫風で東洋古畫に學んだものである。

第二回現代美術展
五月五日—十四日 東京府美術館
現代美術社主催の東洋畫及び油繪の公募展で、陳列點數は第一部東洋畫九十點、第二部西洋畫五十四點。
〔同展審査員〕(第一部)奥村土牛、金島桂華、中村岳陵、宇田萩郎、山口蓬春、福田平八郎 (第二部)金山平三、牧野虎雄、安井會太郎
〔授賞者〕(第一部)松井憲吾、海老名正夫、岡村青晃、濱倉清光、石塚青莖、大場豊、和高節二、岡田典正 (第二部)櫻田精一、倉橋英男、三好俊一、岩井彌一郎、西村憲定
版畫三八展

京都昭和工藝協會美術工藝品展
五月二日—六日 名古屋・松坂屋

第二回中部水彩畫展
五月六日—十日 名古屋美術館
清永正太郎新作陶磁展
五月六日—十一日 日本橋・高島屋

第五回壽山鈴木雪哉作畫展
五月二日—七日 新宿・伊勢丹

第一回大輪畫院春季展 (日)
五月六日—十一日 上野・松坂屋
小林彦三郎を主宰とする大輪畫院では社中の試作三十餘點を陳列、小林の「夢」、樋口英雄、楠奉白光、谷良治等の諸作が挙げられる。
如水遊心南畫展
五月六日—十一日 銀座・三越
古九谷名作展
五月六日—十一日 上野・松坂屋
岡田三郎助女子門下生展 (洋)
五月六日—十二日 新宿・月光莊

蘇園社春季洋畫展
五月三日—七日 堺・大濱商品陳列所
後援泉州日報社。

第二回中部水彩畫展
五月六日—十日 名古屋美術館
清永正太郎新作陶磁展
五月六日—十一日 日本橋・高島屋

瀧谷國四郎遺作小品油繪展
五月三日—七日 神戸・畫廊
神戸畫廊主催。
茨木猪之吉個展 (洋)
五月四日—七日 京城・三越

第三回五彩畫美術展 (綜合)
五月四日—六日 新橋・藏前工業會館
中尾白仲個展 (日)
五月四日—六日 神田・東京堂
麥陽會第四回洋畫展

第三回五彩畫美術展 (綜合)
五月四日—六日 新橋・藏前工業會館

岡田三郎助女子門下生展 (洋)
五月六日—十二日 新宿・月光莊

中尾白仲個展 (日)
五月四日—六日 神田・東京堂

麥陽會第四回洋畫展

麥陽會第四回洋畫展

麥陽會第四回洋畫展

福井謙三遺作小品展(洋)

五月七日—九日 銀座・三味堂

昨年逝去した春陽會系の作家故福井謙三の遺作油繪十六點、及びデッサン小品の類十一點を展覧した。「街」「鏡の前」「白い帽子」その他滞歐作に故人の技術が示されてゐたが、充分に素質を發揮し得ぬうちに長逝したことが惜まれる。

松島畫舫春季展(日)

五月八日—十日 日本橋・東美俱樂部

松島畫舫の主催。東京及び京都の作家四十餘名の新作を陳列。川合玉堂の「斷崖漁家」、小林古徑の「銀の猫」、中村岳陵の「溝畔餘情」等をはじめ瀟洒な小品が集められた。

貌第四回洋畫展

五月八日—十日 銀座・紀伊國屋

阿部春峰個展

五月八日—十一日 福岡市・岩田屋

山田皓齋油繪展

五月九日—十日 大阪ビル・清交社

橙青社大阪展

五月九日—十三日 大阪・松坂屋

細川幻華洞朝鮮風物個人展

五月九日—十四日 新宿・伊勢丹

國畫會神戸展

五月九日—十四日 神戸・大丸

本年國展出品の中繪畫六五、版畫一二、寫眞二〇點を陳列した。

五月會洋畫展

五月九日—十四日 大阪・大丸

九室會第一回展(洋)

五月九日—十五日 日本橋・白木屋

二科展第九室の出品者が昨年結成した會の第一回展で

會員三十九名及び顧問の藤田嗣治、東郷青児の出品を併せ、繪畫九十點を陳列した。超現實派若しくは抽象派の作品で、吉原治良、廣幡憲、山本敬輔、山口長男、浪江勘次郎、峰岸義一、難波架空像らの出品が注意された。

金澤工匠會第四回美術工藝展

五月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

谷口展山新作伊賀燒展

五月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

東北の民藝品並被衣展觀

五月九日—六月十五日 駒場・日本民藝館

日本民藝館では雪國協會と共同主催で、東北の就中庄内地方の民藝品を蒐めて陳列した。中でも荷物を背負ふ際に使用するバンドクを多数出陳した。被衣は往時羽後地方で葬祭に使用したもので、點數は二十點、同館所藏のものである。

早苗會繪畫展(日)

五月十日—十二日 名古屋・松坂屋

狩野晃行日本畫展

五月十日—十二日 銀座・鳩居堂

明朗美術聯盟後援で近作十餘點を陳列した。

六潮會第八回展(日、洋)

五月十日—十三日 日本橋・三越

山口蓬春の出品なく、中村岳陵は「溪間」を、福田平八郎は「竹」と「ひよどり」を、油繪では中川紀元が「花園」「海景雲霧」等四點、牧野虎雄が「夕陽」「菊畑」等四點、木村莊八が「夜櫻」「辨天小僧樂屋」等小品五點、外に日本畫三點を出品した。日本畫洋畫の別を意識せぬ所がこの會の一つの特色であるが、牧野や中川の文人畫的油繪が日本的とも云へず、日本畫と油繪にはやはり明らかな區別のあることを見せることも面白い。

尙特別陳列として同人所藏の「程氏墨苑二十二卷」「方千魯墨譜八卷」「曹氏墨林四卷」「鑑古齋墨數五卷」を出

陳した。

九皇會第五回展

五月十日—十三日 東京美術俱樂部

關尙美堂主催。畫境の中堅十數名の作を集めた。全體に裝飾的様式化が目立ち、感覺的效果を内容とする作が多い。吉岡堅二、寺島紫明、福田豊四郎、常岡文龜、森白甫、杉山寧、小倉遊龜等の出品が挙げられる。

從軍畫家作品展(洋)

五月十日—十三日 數寄屋橋・日動畫廊

出品者は清水登之、向井潤吉、鳥海青児、鶴田吾郎、伊原宇三郎、草光信成、田中佐一郎の七名。陳列數四十八點。そのうち鶴田のスケッチが二十七點を占め、外では鳥海青児の油繪「蘇州」が特異な畫風を見せた。

青山義雄新作展(洋)

五月十日—十四日 神戸・畫廊

神戸畫廊主催、油繪十餘點を陳列。

工精會第二回家具木工展

五月十日—十六日 日本橋・高島屋

基督教美術第五回展

五月十日—二十日 神田・東京基督教青年會

日本水彩畫會展

五月十日—二十八日 東京府美術館

無友省に不透明色を使用した感覺の粗い畫面は幾分改められたやうであるが、表面的な畫面效果本位の制作は依然大量を占める。主な出品としては石井柏亭の水墨淡彩畫、中西利雄の三點、石井鶴三の「浴人」其の他小山周次、望月省三、中田昇、春日部たすく、早川國彦等が注意された。陳列總數は四百二十五點で、別に「全支風景畫」と題する會員十七名の小品四十五點を特別陳列した。

「あれだけ多數の作品が展覧されて居ることだから、欲を言へばもつと變化が出来た方がい、様にも思はれる。たいして悪いのがなく、つばは揃つてゐるが、一方特に問題とする程の作品も

見當らないし、それに幾種類かの似た作風のものが多い。……作品の傾向としては、石井柏亭氏によつて代表される型、油繪と同じ様に繪具を厚く使つて大まかに對象をつかんだもの、輪廓線で形をつくり裝飾畫風に纏めてあるもの、其の他を見られた。……展覧會で大きい油繪が出品されるにつれて、水彩にもそれがふえて来た様だが、概して大きい繪は努力にまかせて粗雑になり勝ちである。……水彩でもつて油繪に負けぬ強さを求めるのは無理である。むしろその強くないところを研究して、水彩畫のよき、特長を見出してもらひたいと思つた。
(中川紀元、教育美術五ノ六)

搬入數 一八五八點、入選數二二三點(一七一人)會員出品 一五二點(九七人)
新會員 長澤昇、林義男、本多信彦、半田丈夫、寺居健一、萩原實、相澤光朗
授賞 日本水彩畫賞、萩原實、相澤光朗、第一賞以下略。

朝見香城、渡邊幾春作品展(日)

五月十一日—十三日 銀座・松坂屋

BAN展(洋)

五月十一日—十三日 銀座・紀伊國屋

五龍會第一回展(日、彫、陶)

五月十一日—十三日 大阪・清閑會

中谷ミユキ
平山昌洋畫展

五月十二日—十四日 銀座・資生堂

東臺會展(綜合)

五月十二日—十四日 奈良・奈良會館

彩桂會日本畫展

五月十二日—十四日 丸ノ内・工業俱樂部

土田夢遷遺作展(日)

五月十二日—十六日 大阪・十合

新制作派協會滿三年結成紀念展(洋)

五月十二日—十六日 銀座・三味堂

渡歐中の猪熊枝一郎を除き、會員の作約十點を陳列、脇田和の「卓子と女」、内田巖の「少女像」、中西利雄の水彩「風景」、小磯良平の「朝」、佐藤敬の「人物」等が舉げられる。

春季二科展(洋、彫)

五月十二日—十七日 銀座・青樹社

會員及會友の作、繪畫七十二點、彫刻三點を陳べた。正宗得三郎の「多々良の濱」、中川紀元の小品、高岡徳太郎の「薔薇」、鈴木信太郎の「伊豆の早春」、北川民次の水彩「荒川沿ひ」、東郷青兒の「少女」等が各々持味を示し、鍋井克之の「港」は構圖の優れたものであつた。會友の諸作は不振を免れぬ。

織田一磨水彩畫展

五月十三日—十四日 吉祥寺・アキモト

造形美術協會展

五月十三日—十五日 千葉市・阿書館

櫻庭彦治油繪展

五月十三日—十五日 名古屋市・商工館

三上知治海軍從軍畫展(洋)

五月十三日—十六日 京城・三越

四元莊洋畫展

五月十三日—十七日 銀座・三越

鈴木千久馬社中の同人展で、油繪四十四點を陳列した。

瀧友會第四回展

五月十三日—十七日 新宿・月光莊

山岸主計新作日本畫展

附世界百景創作木版畫陳列

五月十三日—十七日 大阪・三越

時代硝子器展

五月十三日—十七日 日本橋・高島屋

田口省吾日本畫展

五月十三日—十七日 福岡・岩田屋

北海道日本畫協會第二回春季展

五月十三日—十七日 札幌・三越

遠藤敬三、狩野光雅、長谷川路可第二回聯合個展(日)

五月十四日—十六日 銀座・松坂屋

素顔社第九回展(洋)

五月十四日—十七日 銀座・紀伊國屋

日本美術院院友展(日、彫)

五月十四日—十七日 名古屋・松坂屋

庭山耕園社中第十一回繪畫展(日)

五月十四日—十七日 大阪・三越

福田新生洋畫展

五月十四日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

中澤弘光、森脇忠油繪展

五月十四日—十七日 大阪・三越

大阪三越の主催で、中澤の近作油繪、「臺南風景」、「昆明湖十七孔橋」等二十八點及び昨夏海軍省の囑託として中南支方面に従軍した森脇忠の作品三十五點を陳列した。

岩佐古香個展(日)

五月十四日—十七日 大阪・松坂屋

新樹社作陶展

五月十四日—十七日 大阪・阪急百貨店

富本憲吉門下の同人展。

五月十四日—二十日 日本橋・白木屋

新興美術院同人小品展(日)

小林三季、田中案山子等同人九名の小品を陳列した。

日本畫新作展

五月十五日—十七日 芝・東京美術俱樂部

東京會主催。東西諸家の新作を集め畫商展の主要なもの、一つである。川合玉堂「梅雨晴」、結城素明「新緑」、前田青邨「小犬」、川端龍子「鹿」、その他酒井三郎、堂

本印象、廣島梟市等の出品があつた。

「殆んど全部が尺五絹本で揃へられてある。相かはらずといふ以上にあまりにも飛躍性を戒めすぎた無難な商賣意識の踏襲である。そして作品の大部分は無数の「御掛物」ねらひで、出来るだけ手をこめた多彩調への合奏である。その中で堅山南風の「潮騒」の一點は、二尺五寸の大構物、打ち込んだ心持もぐつとしっかりとあつて、つかみ方も大きかつた。……全點數十餘、いはゆる先物あせりの極度な流行は、その中の若い作家のものまでが、往年の如く數幅をまとめての「一山商ひを離れ」一幅々々その筋の達示による正札によつて處分されて行く。然しそれはまた目には依らぬので、主として耳から耳へのジャズ的觀賞からであるのは云ふ迄もない。(中商・五月十六日)

内田巖近作發表展(洋)

五月十五日—十八日 數寄屋橋・日動畫廊
日動畫廊主催。「春の光」「赤い服の女」「緑色の風景」等油繪約十五點を陳列、独自の思想、感覺を進めつつある點で注目されたが、概して表現が重く、技巧に就て今後の洗練に俟つべきものが多い。

辻愛造第二回個展(洋)

五月十五日—十九日 大阪・美交社

六色會工藝展

五月十五日—二十日 日本橋・三越
工藝界の中堅十六名を以て組織する會で、陶、漆、金工、硝子等各種を陳列した。

各務クリスタル硝子器陳列會

五月十五日—二十日 日本橋・三越

各務クリスタル製作所製品の第三回陳列會

五月十五日—二十日 東京美術俱樂部

昭和十四年度愛知縣出身獨立美術入選者展(洋)

五月十六日—二十日 名古屋・丸善

陶華會第一回作品展

五月十六日—二十一日 大阪・大丸

美術展覽會(五月)

實在工藝美術會第四回展

五月十六日—二十五日 東京府美術館

會員、會友、一般入選作品の外、商工省工藝指導所の贊助出品、並に今回特別陳列として滿鐵のコレクション大陸土俗工藝品二百餘點を展覧した。外見華々しくはないが眞摯な研究的態度を續けてゐることが見られる。殊に本年は戦時下に於ける工藝材料統制の中にあつて各種の代用材料の工夫が見られたことは注目された。アルミニウム或はその合金の利用がその主なもので松崎福三郎の「果物盛」、鹿取一男の「輕金花瓶」、牧野剛の「卓上電氣スタンド」、山崎覺太郎の「アルマイト花盛器」、芳武茂仁の「アルミニウム獨家付花器」等幾多の研究作が現れた。會員等の一般作品も夫々努力が見られ、高村豊周の「青銅壺」、「鑄銅花瓶」、豊田勝秋の「鑄銅口切花生」内藤春治の「花瓶(鯉)」、佐藤陽雲の「器局」、吉田源十郎の「木瓜手箱」、新井謙也の「八角面取吳須草花文水指」、「琉璃釉沈彫鉢」、河村喜太郎の「染付花瓶A」など力のこもつた作であつた。その他にも磯矢阿伎良の「菊文硯箱」、磯部陽の「染暖簾」、渡邊春男の「花々ノ帯」、中野菊夫の「絨毯」、増村益城の「蒔朱卓」などを佳作として挙げる。「會員合作十二月二曲屏風」は新時代の創意を缺いた振はぬものであつた。尙工藝指導所の出品數點は「サラゲセット(脱色漆)」の外はいづれも好みの惡さに苦言を呈したい。

實在工藝賞なし、實在工藝獎勵賞「小屏風」高橋節郎、「張抜レリレフ額」山本壽

會友推薦 山本壽、渡邊春男、會田裕宣、八井孝二、

出品目録(○會員、△會友)

- 眞鍮松文花瓶 水野 燐夫 果物盛器 新村 撰吉
- 器局 ○佐藤 陽雲 張抜レリレフ額 山本 壽
- 晚秋花瓶 德田 魁星 八角面取吳須 〇新井 謙也
- 果物盛 △松崎福三郎 草花文水指
- 花瓶(金魚) ○内藤 春治 輕金花瓶 鹿取 一男

方盤 高橋 由昌
電氣スタンド 金子徳次郎
青銅手附花生 連田脩五郎
木瓜手箱 ○吉田源十郎
水盤A ○河村喜太郎
方向指示板 野澤 幸雨
玉蜀黍手箱 高橋 靜堂
鑄銅花瓶 ○丸山 不忘
食籠 染付六方 中條 昇
重ネ型 ○廣川松五郎
獅子(皮染) 谷澤不二松
彫漆盛器 ○新井 謙也
吳須繪花瓶 杉田 禾堂
鑄銅鍍目花器 堀 柳女
人形 日蔭の辻 研齋
波文研出蒔繪盛器藤岡 存
水盤 大町
鑄銅口切花生 ○豊田 勝秋
(襟帯線と玉縁)を裝飾とせ

卓上電氣スタンド牧野 剛
花瓶(鯉) ○内藤 春治
空變水注 勝尾青龍洞
菊文硯箱 △磯矢阿伎良
角盆 ○新井 謙也
染色風呂先屏風 ○木村 和一
ぼけ

乾漆花入八方形 中川 哲哉
花把文七寶花瓶 會田 裕宣
人の眼を眼ふ鳥 酒井 光開
圖小篋 △森 耀一郎
走狐文壺 商工省工藝指導所
サービス盆(漆器) 指導所

シガレットボックス(漆器) 同
燗盤ノアル燗煙 同
具セット(青銅) 同
盛器(赤玉虫塗) 同
花瓶(同) 同

調味料セット(ス テンレス製) 商工省工藝指導所
サラゲセット(脱色漆) 同
鑄銅釣花挿 △中村 董一
夏栗果圖文具硯箱 山田 豊
花瓶 ○山崎覺太郎
書齋用電氣スタンド 調所 晃夫
貝敷文硝子花瓶△小畑 雅吉
出雲のお國 今村 繁子
琉璃釉沈彫鉢 ○新井 謙也
小屏風 高橋 節郎
鑄銅花挿 小泉 清一
御所人形 小倉 野口 光彦
と子供 ○高村 豊周
麥文様手篋 高瀬 直
額(野菜) 川崎 武雄
燗臺一對 辻 光典
皿 北村 一郎
麥片手附花生 小原 覺三
盛器 西川 友武
人形櫛まき 市川阿久理
洋銀花盛 廣瀬英五郎
染暖簾 磯部 陽
吳須繪水指 ○新井 謙也
サービス盆 小原 覺三
白椿硯箱 ○吉田源十郎
山鳥衝立 小原 覺三
彫漆手箱 ○佐藤 陽雲
染付花瓶A ○河村喜太郎
四方盆 久保 金平
臘額額鳥 熊谷重太郎
アルミニウム花器松下新三郎
まわりをつく良寛 岡 二郎
花盛器 ○山崎覺太郎
人形 葡萄賣 五味 文郎
二枚折屏風 長安右衛門
人形 口笛 太田 通

漆花器	大原 彰三	梅花帶止金具△	深瀬 嘉臣	白泥描良セツト○	新井 謹也	アツブリケ風	高畑 侃子
鑄銅花盛器	△中村 董一	七寶手卸	會田 裕宣	盛器	金子德次郎	爐先屏風	下 暢
會員合作十二ヶ	實在工藝美	梅花帶止金具	△深瀬 嘉臣	四方線文花瓶	鈴木 泰	壁面裝飾	中山 正人
月二曲屏風	衛會會員	鑄銅帶止(蟹)	△中村 董一	クツシヨ	岩田タツヱ	經合シルミ	畑 正夫
鑄銅八方盤	○丸森 耀一郎	堆朱帶止花文	○佐藤 陽雲	牡丹のれん	○木村 和一	ノ照明	
猿(燒物)	○丸山 不忘	堆朱帶止	同	種彩花瓶	大江 文象	金鶏島衝立	横山 幸作
鑄銅花瓶	○高村 豊周	工藝資料としての櫛川	武	鑄銅猿	○丸山 不忘	丸帶	雲出 雪枝
牛香爐	立體圖案長谷川 昇	擴大植物の形態美	櫛川	染付花瓶B	○河村喜太郎	名古屋帶	般若 侑弘
松(染掛軸)	○廣川松五郎	二口志保子	茂セ	ハンドバツグ	小林重太郎	刺繡名古屋帶	駒井 宗一
刺繡テールルセ	野島 綾子	鑄銅花瓶	中島 豊次	帶止(麥穗)	保井 勇造	御簾代り	中村 妙子
ンター	野島 綾子	掛鏡	相原 正夫	ハンドバツグ	小林重太郎	片側帶	△鈴木 福富
牡丹文飾櫛	溢川 米水	鏡	△小畑 雅吉	煙草器	矢島 米洲	同	同
朝顔浮紋 テー	井上 清一	筭一對	△清水 巖	ハンドバツグ	細濤 芳夫	テールセンター二口	善雄
ブルセンター	有坂安太郎	吳須繪四方口花	○新井 謹也	バックル	川見スマシ	花筒	伊坂四郎人
カツコ草文鐵瓶	○廣川松五郎	深の花器	佐藤 園哉	ハンドバツグ	杉岡 辰男	花筒	高橋 節郎
三曲衝立	山岸 堅二	幾何模様鉢	彼谷 芳水	井模様タバコ箱	奥村 究泉	果物盛器	同
島女壁掛	秋山 光喬	河馬	△小畑 雅吉	ハンドバツグ木製丹羽	一郎	水盤	田中 利一
體圖案(立)	三橋 鎌山	壁面狀差	辻 光典	竹間道織ハンド	山本 孝甫	同	同
鎌倉彫手箱	安部 郁二	彫刻硝子鶴模様	大庭 一見	魚文バンド飾	彼谷 芳水	ベッドルーム用	道子
蓑人神代摺	渡邊 春男	乾漆菊花形盆	中川 哲哉	髮飾	論閣 正一	敷物又はボーチ△	山脇 道子
花々ノ帯	高見 九藏	張技人形	山本 壽	同	同	皮染色ハンドバ	安藝 邦子
彫漆花瓶	○新井 謹也	からたちの花紋	増田 三男	同	同	影漆蝶帶止	増田 敬象
長方角皿	高木 茂	衝立	小口 正二	アルミニウム	芳武 茂介	ハンドバツグ	金井 勇男
硝子花瓶	劍持 勇	手付サービス盆	中島 義夫	燭台付花器	燭台 陸二	エマイユ黒色	日根野作三
果物盛器	松本外茂次	鑄銅花瓶	相原 雅夫	描更紗帶	久松 昌子	七寶帶止	會田 裕宣
花器アルミニ	長濱重太郎	掛鏡	川見スマシ	存星丸盆	増田 敬象	エマイユ朱色	日根野作三
イムと眞鍮	○新井 謹也	蠶草帶止	露草帶止	盃	井上 芳則	眞人	中山 憲一
小屏風	露草帶止	HANDバツグ	HANDバツグ	吳須白泥描	○新井 謹也	庭園の水盤と果物染川鐵之助	増村 益城
琉璃袖花壺	△大坪 重周	HANDバツグ	漆皮アザミ文小	水盤B	○河村喜太郎	衝立	辻 光典
燭台	漆皮アザミ文小	HANDバツグ	HANDバツグ	菓子棚	雲出 雪枝	航空港サロン室	田中 芳郎
新開盆	同	同	同	ざぶとん	壁飾	型態「飛行」	中島 豊次
アルミニウム	同	同	同	壁飾	伊坂四郎人	雙鷲置物	小森 五郎
花瓶	同	同	同	壁飾	伊坂四郎人	輪馬衝立	特別陳列
線文花瓶	同	同	同	壁飾	伊坂四郎人	八陸土俗工藝品(滿鐵コレクシ	新光會第一回展(日)
置物	同	同	同	壁飾	伊坂四郎人	八陸土俗工藝品(滿鐵コレクシ	新光會第一回展(日)
食堂用のれん	同	同	同	壁飾	伊坂四郎人	八陸土俗工藝品(滿鐵コレクシ	新光會第一回展(日)
クツシヨ	同	同	同	壁飾	伊坂四郎人	八陸土俗工藝品(滿鐵コレクシ	新光會第一回展(日)
胡蝶帶止金具	同	同	同	壁飾	伊坂四郎人	八陸土俗工藝品(滿鐵コレクシ	新光會第一回展(日)
月帶止金具	同	同	同	壁飾	伊坂四郎人	八陸土俗工藝品(滿鐵コレクシ	新光會第一回展(日)

成蹊美術會第三回展

五月十七日—二十二日 日本橋・白木屋

讀畫會第三十二回展(日)

五月十七日—二十九日 東京府美術館

荒木社中の恆例の熟展、荒木十畝の「駄ヶ嶽よりの遠望」池上秀畝の「春早し」、西澤笛畝の「雁」、永田春水の「白梅」、森白甫の「松」、等を先輩の出陳とし、其他堀田秀叢、酒井白澄、龜割隆志、松久休光、新山草羊、中島晃華、米田完爾等が勉強を見せた。全體として傳統に忠實な態度が見られる。陳列數六十九點。

授賞 讀畫賞「閑日」中島晃華 獎勵賞「春開く」新山草羊、「庭の一陽」岩間武平

第五回汎美術展

五月十七日—二十九日 東京府美術館

大阪高島屋統合記念日本畫展

五月十八日—三十一日 大阪・高島屋

長堀高島屋美術部が南海高島屋へ移轉した記念の催しで、竹内栖鳳、福田平八郎、橋本關雪、西山翠嶂、川合玉堂、前田青邨、其他の新作を展覧した。

昭和工藝美術展

五月十八日—三十一日 大阪・高島屋

藤田嗣治日本畫展

五月十八日—三十一日 大阪・高島屋

第二回扶桑會日本畫洋畫展

五月十八日—二十二日 銀座・交詢社

日佛畫堂の主催。大家の日本畫及び洋畫の小品を展覧した。

第一回白潮會人形美術展

五月十八日—二十二日 銀座・三味堂

ジュンヌオム第三回展(洋)

五月十九日—三十一日 銀座・紀伊國屋

新光會第一回展(日)

五月十九日—三十一日 銀座・紀伊國屋

五月十九日—二十一日 銀座・鳩居堂
青樹社第六回展

五月十九日—二十一日 名古屋市・縣立商工館
東西諸大家新作畫展

五月十九日—二十一日 大阪・高島屋
内藤環土個展

五月十九日—二十一日 京都粟田口・青蓮院
古川北華新作畫個展(日)

五月十九日—二十一日 芝・東京美術俱樂部
本山陶篋堂主催。文人畫風の花鳥畫十數點を陳べた。
柏黎會小品展

五月十九日—二十二日 大阪・そこう
五月會第八回展(洋)

五月十九日—二十二日 銀座・青樹社
東西大家新作畫展(日)

五月十九日—二十三日 大阪・三越
東西名家新作邦畫展

五月十九日—二十三日 日本橋・高島屋
高島屋主催。東京及び京都の、主として新人の作を展
觀した。出品者は吉岡堅二、福田豐四郎、福田平八郎、
木本大果、堅山南風、橋本明治、西山英雄、上村松篁、
島山錦成、坂口一草、前田荻邨、山本倉丘、板倉星光、
森戸國次、麻田辨次、奥村厚一、森守明、福田翠光、郷
倉千靱、新井勝利、加納三樂、奥田元宋、山本丘人、池
田遙村、勝田哲、三谷十糸子等。

「今度の高島屋展は新人本位の展覧であつただけに、時局下
畫人の心構へについて色々考へさせられた點があつた。落款を
かくしたら、まるで同一人の作としか思はれない畫面が、新人の
仕事としてその繪畫精神の低調を嘆息せしめたことは何として
も問題とすべきであつた。……」(塔影・一五ノ八評)

日本人形社第三回展

五月十九日—二十三日 大阪・三越
日本人形社同人の近作八十餘點を陳列した。

美術展覽會(五月)

川口吳川日本畫展
五月十九日—二十三日 大阪・松坂屋

京都工藝品展覽會
五月十九日—二十三日 日本橋・高島屋

久本弘一洋畫展覽會
五月十九日—二十三日 大阪美術新論社畫廊

福岡青嵐、加納三樂、山崎豐近作日本畫展
五月十九日—二十七日 大阪・そこう

九學會第五回展
五月二十日—二十二日 京野・岡崎公會堂

和光會日本畫展
五月二十日—二十二日 日本橋・東美俱樂部

相瀨社第五回展
五月二十日—二十二日 神奈川・鎌倉第一小學校

朱明會第七回展
五月二十日—二十二日 大牟田市・第二公會堂

靜岡縣美術第四回展
五月二十日—二十四日 靜岡・靜岡縣教育會館

郷土美術家を以て組織する協會の第四回公募展、審査
は和田三造、石川欽一郎、芹澤銈介に依頼、搬入數は繪
畫二百十三、彫刻十、工藝二十五、入選は繪畫六十六、
彫刻二、工藝八點、陳列總數二百二十點、別に戦線にあ
る杉山良雄のスケッチを特別出陳した。
授賞者略す。

松尾晃華個人展(日)
五月二十日—二十四日 福岡縣產業獎勵館

春陽會第十七同名古屋展(洋)
五月二十日—二十七日 名古屋・鶴前公園美術館

第一美術協會第十一回展(洋)
五月二十日—六月四日 東京府美術館

同會恆例の公募展で、陳列總數三百四十一點。高橋亮
御厨純一、三國久の會員が従軍畫を十餘點づつ、出品して

るた。河邊梅村の油繪「赤子(餘炭)」は獨自な畫風を見
せて、例年の如く注意された。其他故田中一及び田中進、
三木辰夫等のエッチング、水彩の室では漆畑廣作の出品
が挙げられる。

搬入總數 一、二一七點(五〇八名)
入選 二、三〇點(一六二名)

授賞 第一美術賞 大山麟太郎、漆畑廣作、栗原獎勵
賞 荒木菊次

新會員 松坂康、新會友 高橋賢一郎、山樹寅三郎、
長谷川富三郎、無鑑査推薦 木村捷司

高橋來潮個展
五月二十一日 京都・天性寺

九元社第五回小品展(彫)
五月二十一日—二十四日 銀座・資生堂

東京美術學校卒業の新進木彫家が組織する同人展。
石山太拍個人展(日)
五月二十一日—二十四日 京城・三越

愛染會展
五月二十一日—二十五日 日本橋・三越

自由美術家協會第三回展
五月二十一日—三十日 日本美術協會

長谷川三郎、村井正誠、山口薫等が組織する同會は公
募に依る第三回展を開催した。陳列種目は例年の如く繪
畫一般、立體、コラージュ、フォトプラスチック等で
ある。長谷川は繪畫を示さず、「郷土誌」と題する一聯の
印畫を出品した。自然の風物を捉へて、或る造形的意欲
の窺へるものはあつた。村井正誠は油繪の「Cite」其他
に依然プラン的構圖を繼續し、會の抽象繪畫の中で洗練
された感興を示した。新に加入した森芳雄の「農家」、「靜
物」等は若々しい情緒の認められるものがあり、山口薫
の「蝸壺など」、「南風」等の油繪諸作は近代的な或る意識
を盛るが、一面に感傷性、趣味性を脱し切らぬ憾みがあ

つた。矢橋六郎も「鏝」「新緑」等に構圖の配慮を示しつつも重さを缺く。寫眞では馬場顯三、北尾淳一郎等が特色を認められ、其の外では植木茂の石膏による彫塑的構成「作品」が一應試みとして目をひいた。其の他繪畫、カラージュエ等アブストラクションの構成作品が多數あつたが、獨創に成るものは少なかつた。

搬入總數六二二、入選數九五、陳列總數二二二點、授賞 協會賞 谷澤秀晃、山口正城、下郷羊雄、坂甲稔

新會員 小山昇、中村眞、森芳雄 新會友 文學洙、劉永國

全日本綜合クロツキ―素描展

五月二十一日―三十一日 東京府美術館

柳川清一郎の經營するクロツキ―研究所では創立滿七周年を記念して、洋畫家百二十余名及び少數の物故作家のデッサンを陳列した。

日高昌克個展 (日)

五月二十二日―二十四日 大連市・商工會議所

綠巻會第一回展 (洋)

五月二十二日―三十一日 東京府美術館

神津港人の發企で今春組織された會の公募による第一回展、神津は「初夏新緑」其他を出品、陳列總數百十六點。

準員推舉 久光茂、青木申四郎、本間勘次、授賞 久光茂、青木申四郎、本間勘次、中森放

代谷耕外從軍スケツ子展

五月二十三日 大阪・阪急百貨店

安宅安五郎日本畫、洋畫展

五月二十三日―二十六日 名古屋・松坂屋

眞道黎明日本畫展

五月二十三日―二十八日 大阪・大丸

並木哲男油繪個展

五月二十三日―二十九日 新宿・月光莊

丹阿彌岩第一回日本畫展

五月二十三日―二十九日 福岡・岩田屋

九皇會第五回展

五月二十四日―二十七日 大阪・そごう

煙雲會第一回日本畫展

五月二十四日―二十七日 銀座・三昧堂

川路柳紅、横尾翠田、高間惣七、武者小路實篤等を同人とする。

大澤海藏個展 (洋)

五月二十四日―二十八日 名古屋・丸善支店

七曜會第一回展 (日)

五月二十四日―二十八日 大阪・高島屋

小村雲岱・田坂相雲二人展 (日)

五月二十四日―二十八日 新宿・伊勢丹

山川秀峯個人展 (日)

五月二十四日―三十日 日本橋・三越

「古典舞踊」を主題とする三回目の個展で「娘道成寺五姿」の聯作五點をはじめ「お七」「藤娘」「晒女」等を出品した。胡粉を厚く用ひて、彩色はや、華美に過ぎる嫌ひを免れなかつた。

海洋美術第三回展

五月二十四日―三十日 日本橋・三越

主催海軍協會、海洋美術會。後援海軍省、贊助朝日新聞社。國民の海軍思想普及を目的として、毎年海軍記念日に開催する。石井柏亭、石川寅治、長谷川昇、田邊至中澤弘光、永地秀太、中村研一等を審査員とし、招待出品、海洋美術會員の作品、應募入選作等、併せて百二點を陳列した。大部分説明的な描寫の作品であつたが、中で石井柏亭の「寄する波」中村研一の「大西水道」石川欽一郎、高村眞夫、高橋亮、小早川篤四郎の出品が擧げられる。

應募數三百餘點、入選三十二點

授賞 海軍大臣賞 田原輝夫、海軍協會賞 藤本東一

良、朝日新聞賞 内堀勉

珊工會第一回展 (工)

五月二十四日―三十日 大阪・松坂屋

杉芽會第二回展 (洋)

五月二十五日―二十七日 銀座・紀伊國屋

龍駿介個展 (洋)

五月二十五日―二十七日 銀座・交詢社

久本弘一近作洋畫展

五月二十五日―二十七日 神戸・畫廊

權藤種男近作展 (洋)

五月二十五日―二十八日 京城・三越

工人社第十一回工藝展

五月二十五日―三十日 日本橋・高島屋

新時代意識の金工藝を標榜し、相當の技術を有する作家の集團であるだけに注意される會であるが、物瓷統制の影響をうけてか、今回はあまり振はなかつた。金工の外に各務鐵三、佐藤潤四郎の如きガラス作家もあつて、新鮮さを添へてゐるが、全體に新奇な試みに走つたものは皮相を免れてをらぬ。陳列數四十一點。

ラギーザ遺作展覽會 (洋)

五月二十五日―三十日 日本橋・高島屋

去る四月六月逝去したラギーザ女史の遺作展覽會が表記に於て行はれた。女史は若くして日本畫を學び、次でヴェンチエントオ・ラギーザに西洋畫法の初歩を授けられた。明治十五年伊太利亞パレルモに渡り、同地に於て正式に西洋畫法を學び、伊太利亞に於てその名を知られた。昭和八年五十餘年の伊太利亞滞在の後歸國した。歸朝後餘生を養ふといふよりは、寧ろ制作三昧に耽つて幾年かを過ごした。従つて、歸國後の作品には花、果實等を描いた靜物が最も多く、その他に稀に外出して描い

た輕井澤風景や東京近郊の風景畫があつた。此處には歸國後の作品の中から油繪百二點、水彩畫六十八點が展覧され、これに伊太利亞時代の作品「宵」(東京美術學校藏)や、その代表作たりしバレルモ市カルソウ家の天井畫稿、少女時代の習作等と工部美術學校彫刻學教師たりし夫君ラグーザの「日本の俳優」等の遺作が併せ陳列された。今玉女史の遺作を顧みるに、伊太利亞時代の作品は正統的な畫風を踏んだものであるが、歸朝後は平明、繊細な畫風より更に寫實的な傾向を示した作品を含んでゐる。又如何に制作を楽しみ、これを日課としたかは、その歸朝後の夥しい作品に依り知り得るのである。

長野新與家具第六回展

五月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

奥瀬英三個人展(洋)

五月二十五日—三十日 福岡・玉屋百貨店

尾張信貴山本堂新築協賛日本畫展

五月二十五日—三十日 大阪・松坂屋

白日莊現代大家新作畫展(日)

五月二十五日—三十日 大阪・三越

高野眞美渡瀧記念洋畫展

五月二十六日—二十八日 大阪・美交社

歷程京都展(日)

五月二十六日—二十八日 京都・朝日會館

八木岡春山新作畫展(日)

五月二十六日—二十八日 芝・東京美術俱樂部

近作の墨畫山水及び着彩の花鳥畫等、新作十八點を展覧した。

佐伯米子第四回個展(洋)

五月二十六日—三十日 銀座・資生堂

中尾彰洋畫展

五月二十六日—三十日 大阪・美術新論社

尺貫法存續聯盟畫展

五月二十六日—三十日 大阪・美術新論社

五月二十七日—二十八日 京都・華族會館
鹿兒島二橋個展

五月二十七日—二十九日 銀座・鳩居堂

中村松華個展

五月二十七日—二十九日 福岡縣公會堂

九大美術第二十四回展

五月二十七日—二十九日 福岡日日新聞社

川崎繪畫會展

五月二十七日—三十日 大森・白木屋

慶心堂新作畫展

五月二十八日—二十九日 名古屋美術俱樂部

檜崎鐵香新作畫展(日)

五月二十八日—三十日 萩・鳥屋

現代大家新作油繪展

五月二十八日—三十一日 大阪・高島屋

京都美術工藝第十回展

五月二十八日—六月一日 大禮記念京都美術館

橋本永邦日本畫作品展

五月二十九日—三十一日 名古屋・丸善

凌雲堂新作日本畫展

五月三十日—三十一日 芝・東京美術俱樂部

釜山造型美術協會工藝展

五月三十日—六月二日 京城・三越

貿易局輸出工藝圖案第一回展

五月三十日—六月三日 東京府商工獎勵館

商工省貿易局では輸出工藝振興の爲、新に輸出工藝品の意匠圖案を募集して輸出工藝圖案展を開設することとなり、本年四月その規程を制定、これに基いて第一回展を開いた。搬入總數一二四三點(七二三人)、鑑查合格數一三五點(一〇七人)、陳列されたものは服飾用品四四、家庭用品四二、室内調度品三七、趣味遊戯具七、其他の工藝品四、審査委員出品四、合計一三八點で、成績は概

して創意と意匠の貧困さが目立ち不振といふ外はなかつた。審査概評の中に今後に對する希望として、圖案が今少しく國産材料に對する認識を深めて、その工藝的利用を圖る必要がある。竹、和紙、漆等の固有材料に就て一層研究して、これらを海外の生活様式に當嵌めて行くならば一層面白いものが出来るであらうと述べてゐる。

授賞 商工大臣賞 一等賞(二千圓)「龜甲文七寶銀製飾壺」加藤清澄、二等賞(千圓)「果物鉢」小池岩太郎、「婦人服地」瀬尾徳司、三等賞(三百圓) 日根野作三、暮田延美、大橋正、原綠丸、豊口克平、稻森健吉、芳武茂介

堤錦江個展(日)

五月三十日—六月四日 大阪・大丸

造型版畫協會第三回展

五月三十日—六月九日 東京府美術館

小野忠重、水船六洲等が組織する版畫の新進團體で、公募による第三回展を開いた。陳列數七十餘點。中で、野崎新右衛門、太田耕士等の石版畫が注意されたが、全體として技術の點に就て今後の勉強に俟つべきものが多

い。外に特別展觀として、滿洲國、支那、朝鮮、臺灣等に於ける古版畫、民族版畫及び圖繪等諸家蒐藏のものを出陳したが、民族的な特色が示されて興味深い企てであつた。

新會員 太田耕士

授賞 新版畫家賞 佐藤章、東一雄、T氏獎勵賞 栗田周

留加會展(洋)

五月三十一日—六月九日 東京府美術館

文化學院美術部の出身者を以て組織する。會員の出品約八十點のほか石井柏亭、有島生馬等の賛助出品があつた。

六月

愛知社同人近作小品展 (綜合)

六月一日—三日 名古屋・丸善

ジャン十回展 (洋)

六月一日—四日 銀座・紀伊國屋

燦本社第十四回展 (日)

六月一日—四日 銀座・資生堂

東京美術學校師範科出の在京者有志が組織する同人展

若松維新能畫美人畫展

六月一日—四日 大阪・三越

沈享求洋畫個展

六月一日—四日 京城・和信ギヤラリー

竹原囃風個展 (日)

六月一日—五日 日本橋・白木屋

二六〇〇年會第一回展 (洋)

六月一日—五日 神田・東京堂

石井彌一郎第二回個展 (洋)

六月一日—五日 日本橋・白木屋

鈴木旭齋花籃展

六月一日—五日 大阪・三越

美女會第十五回工藝品展

六月一日—五日 大阪・三越

三越主催。

服部木爾個展 (洋)

六月一日—五日 銀座・青樹社

池澤青峰北九州畫會展 (日)

六月一日—五日 小倉市井筒屋

島貫義遺作展 (洋)

六月一日—五日 新宿・月光莊

珮々會第五回展 (日)

六月一日—六日 日本橋・高島屋

高島屋主催で東西の名家六名を集めた會、昨年西村五雲を失つたが、今回より新に小杉放庵を加へた。菊池契月と結城素明は出品未着、上村松園の「風」、錦木清方の「うき大盡」、小杉放庵の「春風馬堤曲」、西山翠嶂の「采婉」の四點を陳列した。放庵の作は蕪村の春風馬堤曲をそのまゝ、畫材に淡彩九圖の長卷としたもので、興趣横溢、頗る味ひに富み異彩を放つた。

青松會展 (日)

六月一日—六日 大阪・松坂屋

河野通記・永田禎彌・高須操洋畫三人展

六月一日—七日 大阪・阪急百貨店

橋本八百二夫妻近作展 (洋)

六月一日—七日 大阪・美術新論社畫廊

春陽會第十七回展 (洋)

六月一日—七日 大阪・朝日會館

宮永東山陶彫作品展

六月一日—七日 日本橋・三越

服裝美術第七回展

六月一日—七日 銀座・松屋

新美術人協會第二回展 (日)

六月一日—十一日 東京府美術館

福田豊四郎、吉岡堅二が主宰する同會の公募第二回展。洋畫の手法を自由に攝取して新分野の開拓に従ひつゝある點で青年日本畫壇の顯著な存在であり、現在注目のものとなつてゐる。然し乍ら技術的には未だ吟味の餘地を多く殘し、追求の程度が應用美術的な安價さに程遠からぬものが少くない。福田豊四郎の「松」は六曲一雙の金地に赤松を様式化を以て構成した大膽な作であつたが、尙構圖に疑問を殘すもの。吉岡堅二は「馬」にピカソ風の馬の群像構成を見せた。多分に工藝的な、裝飾的な効果

に傾いたもので、繪としての純粹な迫力にはまだ物足らぬものであつた。その他大石哲路の「空」、柴山光臺の「聖女」、米田莞爾の「甲冑室」、柴田安子の「叢林」、藤田隆治の「水上ホッケー」、恩田耕作の「おけさ連中」、田中草雨の「つる」等が比較的的特色を見せてゐるが、一般應募作品には福田、吉岡の様式化を安易に摸倣したものが多く見受けられた。陳列總數五十五點。

授賞 研究會員賞 「水上ホッケー」藤田隆治、「甲冑室」米田莞爾、推獎 「聖女」芝山光臺、「白芥子」藤田妙子、「樹液」工藤八甲

岸田文象茶器作陶展

六月二日—六日 大阪・松坂屋

麻生豐ゴルフ漫畫展

六月二日—七日 大阪・阪急百貨店

追悼山元春舉先生早苗會 (日)

六月三日—五日 大禮記念 京都美術館

故山元春舉の七回忌を迎へて門下の早苗會同人が新作展を開催。川村曼舟の「雨後山月」をはじめ勝田哲、貴道草衣、案本一洋、三宅風白等の出品があつた。陳列數八十餘點。

金仁承洋畫展

六月三日—五日 京城・三越

花と陶物展

六月三日—五日 大禮記念 京都美術館

伊藤廉近作展 (洋)

六月三日—七日 銀座・三味堂

兜屋西川武郎主催。二十五號から十二號までの油繪十點、「桃」の外はすべて風景で、新緑と紅葉の山を好んで描いたもの。いづれも感興に充ち、色彩感よく、裝飾的な形式化が多少氣になるとは云へ、十分描き込んだ畫面は重厚且つ新鮮さを失はず、見應へのある展觀であつた。

日本彫刻家協會第三回展

六月四日—十四日 東京府美術館

十六名の會員と八名の準會員よりなる會で、公募作品を合せて七十九點を陳列、謹直な寫實主義の作品が多いが、概して技術的水準は高からず、内容的に貧困で習作の域に止まるものが多かつた。早川巍一郎の「中井先生像」、「マドモアゼルン」等の諸作質實で生彩あり、畝村直久の「學藝會の少年」高橋さん等よい質を見せた。その他片山義郎の「脂胞の塊」、明石順吉の「Oさんの像」等が注意される。

授賞 K氏獎勵賞 坂東文夫、高澤七郎、L氏獎勵賞 明石順吉、櫻井祐一、第二獎勵賞 北地莞爾、小寺昌三、水野善次郎

準會員推薦 坂東文夫、明石順吉、高澤七郎

日本陶藝第一回展

六月四日—十四日 東京府美術館

東陶會解散後新に組織された日本陶藝研究會が公募の第一回展を開いた。會員等の努力も見え質の上でも相當見栄えのする成績をあげた。土肥刀泉の勉強は中で目立ち二十餘點の作品中「桃文皿」「水指」等見るべきもの多く、小倉雅道の諸作また個性的なよい味を示した。耳付「輪生」「扁壺」などを擧げる。加藤閑陸、松島一夫、河村喜太郎等それぞれの技を見せた。

搬入數二二三、入選數五〇、招待出品六〇、會員出品一三〇、陳列數二四〇點

授賞 陶藝賞 「桃文皿」土肥刀泉、「繡花花花瓶」武田蘭山、「八方染付水指」河村喜太郎、陶藝獎勵賞 「猫柳文陶器」鈴木静々、「繪變草花文果物皿」西川正信

朝鮮美術第十八回展(綜合)

六月四日—二十四日 京城・總督府美術館

朝鮮總督府主催の第十八回朝鮮展の審査員は矢澤鼓月、入江波光、中澤弘光、伊原宇三郎、高村豊周の五名で、

美術展覽會(六月)

鑑審査の成績は左の通りであつた。

部	搬入數	人員	入選數	人員
第一部 東洋畫	一三九	九四	七〇	六〇
第二部 西洋畫	八一〇	四二〇	一八〇	一六〇
第三部 工藝	一八八	一一二	七一	六二
第四部 彫塑	二六	一六	一一	七
合計	一六三	六五二	三三三	二八九

別に無鑑査出品は第一部一二點(一名)、第二部一四點(一四名)、第三部工藝七點(六名)、彫塑二點(二名)、計三五點。

授賞(第一部東洋畫) 昌德宮賜賞 鄭鐘汝、總督賞 李應魯、今田慶一郎、(第二部西洋畫) 昌德宮賜賞 藤澤俊一、總督賞 朴泳善、星野二彦、(第三部工藝、彫塑) 昌德宮賜賞 戸張幸男、總督賞 金景承、塚原庄太郎

斑社第三回展(日)

六月五日—七日 銀座・紀伊國屋

從軍作品展

六月六日—八日 大阪・高島屋

鈴木千久馬洋畫展

六月六日—十日 大阪・三角堂

五十號の「淡雪」をはじめ油繪三十三點を發表した。

鐵道省第十回洋畫展

六月六日—十一日 神田・鐵道博物館

中野うめよ油繪展

六月六日—十一日 大阪・大丸

大日美術院第三回展(日)

六月六日—十八日 東京府美術館

「新興日本畫の創造を主眼とする新人出現待望の機關」として新人獎勵の爲に催される展覽會で、この會共通の一つの色彩の下に青年作家等の努力が見られるが、ある形式の模倣か、徒らに洋畫的手法を追ふ程度の作品が多く、技術的水準の低さと共に主眼とする進歩性が内容の上に乏しいことは遺憾である。西山英雄、東山魁夷など類

似の傾向を示す山嶽畫があるが空疎を免れず、常岡文龜や加藤榮三等の植物畫は技巧的にある味を見せたものであつた。樋口富麻呂の「琉球の紅型」は場中ですぐれ、菖蒲大悦の「巖嶂」、寺田六華の「鷄」などもよい出来であつた。審査員結城素明は「櫻さく國」、川崎小虎は「サボテン」など、青木大乗は大作「瑞祥」を出品した。

搬入數二〇七點、入選數一一〇點

授賞 大日美術院賞 濱田清治、東山魁夷、菖蒲大悦 寺田六華、大毎東日賞 長嶺雅男

なほ同院では今回新に院僚制度を設け常岡文龜、加藤榮三その他合計十五名を院僚に推舉した。

京都昭和工藝協會第十一回美術工藝品展

六月七日—九日 丸ノ内・東京商工獎勵館

經緯工藝第三回展

六月七日—十日 銀座・資生堂

今春美術學校を卒業した吉田丈夫、田中芳郎等五名の組織する會。

新制作派小品展(洋)

六月七日—十日 神戸・畫廊

大山八大道人個展(日)

六月七日—十一日 日本橋・白木屋

川口軌外個展(洋)

六月七日—十一日 大阪・高島屋

レ・リラ第五回展(洋)

六月七日—十一日 銀座・青樹社

福岡縣工藝第五回展

六月七日—十一日 福岡縣産業獎勵館

主催者福岡縣工藝協會。第一部輸出向工藝品、第二部代用材料利用工藝品、第三部一般工藝品とし、搬入總數七百四十點、陳列總數五百二點。審査は商工省工藝指導所齋藤技師を長として行はれた。

二見利節作品發表第一回展(洋)

六月七日—十二日 數寄屋橋・日動畫廊

春陽會、文展の授賞作家で、茶褐色の基調を好み、特異性を示しつゝあるが、感覺に於て工藝的な要素を多分に持つ。二十五號「花」、六號「黄色いリボン」をはじめ計二十五點を出陳した。

卓月會第四回工藝品展

六月七日—十二日 日本橋・白木屋

境保博第一回個展

六月八日—九日 銀座・紀伊國屋

青土社彫塑展

六月九日—十一日 大禮記念京都美術館

京都在住の彫塑家松田尙之、岡本庄三等が組織する同人展、陳列總數三十九點。

丹辰社第一回展

六月九日—十一日 大森・白木屋

大森繪畫自由研究所第一回展(洋)

六月九日—十一日 大森・泉屋

春泥會展(日)

六月九日—十二日 大阪・十合

伊谷賢藏北支從重展(洋)

六月九日—十二日 京都・朝日會館

蒼原會第二回展(洋)

六月九日—十三日 銀座・三味堂

水彩専門の同人展で、中西利雄の「ピアノに倚る女」をはじめ計十八點を陳列した。

東郷青兒洋畫展

六月九日—十三日 日本橋・三越

近作の油繪二十八點を出陳した。

兒玉畫塾第三回展(日)

六月九日—十三日 日本橋・三越

指導者の兒玉希望は讚助出品として「淺間山」「山家五位」の二點を示し、門下生の作品三十餘點を陳列した。

授賞 蕨賞 森正元、長流賞 福田元子、無鑑査推舉 奥田元末

濱田庄司作陶展

六月九日—十三日 日本橋・三越

民藝に造詣の深い作者が今回琉球に渡つて作陶した新製品を多數展觀した。

石川縣工藝獎勵會主催第十八回美術工藝品展

六月九日—十三日 日本橋・高島屋

出品は陶器六十四人、漆器三十五人、木竹八人、金工八人、染織七人、外に工藝指導所作品を陳列した。

九室會第一回展(洋)

六月九日—十三日 大阪・朝日會館

美の國社日本畫展

六月九日—十四日 新宿・伊勢丹

海洋美術展

六月九日—十四日 名古屋・三星百貨店

松本富太郎油繪個展

六月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

尙陶會新作品陳列

六月九日—十七日 銀座・松屋

香蘭社有田燒陶器陳列

六月九日—十七日 淺草・松屋

蒼原會第一回展(日)

六月十日—十二日 名古屋・丸善

京都の各塾の新進作家十數名を以て組織し、磯田又一郎、濱田觀、加藤美代三、麻田辨次等の出品があつた。

横山葩生繪畫展(日)

六月十日—十二日 名古屋・松坂屋

壽山鈴木雪哉老師第六回作畫展(日)

六月十日—十三日 銀座・鳩居堂

小原流研美術會展

六月十日—十三日 新宿・月光莊

童林社第七回展(洋、彫)

六月十日—十九日 東京府美術館

東京美術學校の昭和十一年度卒業生が組織する會で、洋畫九十餘點、彫塑九點を出品、別に同人の共同制作に成る油繪壁畫三部作「科學主義工業」及び西洋名家の小品數點を特別出陳した。尙六名の同人が軍務に服してをり、その通信文等をも陳列してゐた。

遊戯三味會第三十一回作品展

六月十一日—十二日 上野・生池院

田崎早雲翁遺作鑑賞展

六月十一日—十三日 芝・東京美術俱樂部

本山豐實蒐集の田崎早雲遺作約五十點を陳列した。

坂口一草個展(日)

六月十一日—十四日 大阪・高島屋

三春會第六回展(洋)

六月十一日—十九日 東京府美術館

東京美術學校昭和三年度卒業生の同人展で、作品七十餘點を陳列した。

長谷川隣二郎油繪個展

六月十二日—十四日 數寄屋橋・日動畫廊

井上夏齋作陶展

六月十二日—十六日 大阪・三越

三橋武顯中支戰跡畫展(日)

六月十二日—十六日 大阪・三越

故山本芳翠素描、小品展(洋)

六月十三日—十七日 銀座・青樹社

嶽陽會の長尾一平が藤島武二、白瀧幾之助、北連藏の後援の下に故山本芳翠の傳記を編纂するに就て、その出版費に資すべく、所藏の素描、小品を展觀した。陳列數百二十六點。

京都名家新作日本畫展

六月十三日—十八日 大阪・大丸

天然社彫塑展

六月十三日—十八日 福岡・岩田屋

藤井浩祐の藝天然社の彫塑展。

京都十名匠陶藝展

六月十三日—十八日 大阪・大丸

新進作家の作を主として四十餘點を陳列した。

今右衛門焼陳列

六月十三日—十八日 大阪・大丸

岡本玉水、平田郷陽人形作品展

六月十四日—十七日 名古屋・松坂屋

石井柏亭水墨淡彩個展

六月十四日—十八日 大阪・高島屋

中村大三郎畫塾創立七周年記念展(日)

六月十四日—十九日 東京府美術館

中村大三郎畫塾の創立七周年を記念しての展観で作品五十六點の外傷病將士慰問獻納畫小品十九點を陳列。全體として眞面目な技術的研鑽の跡を見せて充實した展観であつた。中村大三郎の「弱法師」は相當の成功を収めた力作。野々内保太郎の「蕨雁」その他を擧ぐべく、加藤美代三の諸作は特色ある描寫を見せた。

兵庫縣美術協會第三十一回展

六月十五日—十七日 神戸・三越

朝見香城小品展(日)

六月十五日—十七日 名古屋・三星百貨店

小寺健吉近作油繪展

六月十五日—十八日 數寄屋橋・日動畫廊

近作の油繪小品二十六點を陳列した。

青桃會洋畫展

六月十五日—十八日 大阪市立美術館

森芳雄洋畫展

六月十五日—十九日 銀座・三味堂

作者は獨立の會友を辭し、最近自由美術家協會に入會

した。教養と感覺に新鮮さを示す點で注意される。「納屋」「ふきとめうが」等、油繪十六點を陳列した。

南畫鑑賞會第六回展

六月十五日—十九日 日本美術協會

南畫鑑賞會主催、會員の習畫二百五十四點を陳列。

伊藤藤近作展(洋)

六月十五日—十九日 名古屋・丸善

「武田尾」「寒霞溪」をはじめ油繪十七點を陳列。

北島淺一洋畫展

六月十五日—十九日 大阪・美術新論社畫廊

京都工藝美術協會第十回展

六月十五日—二十日 日本橋・三越

恆例の協會展で染織、陶磁、漆器、金工、木工品等を陳列した。

日本畫小品展

六月十五日—二十日 日本橋・三越

時的美術社展(日)

六月十五日—二十日 新宿・伊勢丹

自由美術家協會第三回關西展

六月十五日—二十一日 大阪市立美術館

陳列總數百五十九點。(本欄五五頁參照) 尙同月十八日

同美術館小講堂に會員の講演會を催した。

渡邊大虛第四回個展(日)

六月十六日—十九日 銀座・資生堂

山村耕花新作展(日)

六月十六日—十九日 大阪・高島屋

石井柏亭新作日本畫展

六月十六日—二十日 大阪・高島屋

田邊竹雲齋竹籠展

六月十六日—二十日 大阪・高島屋

荒井章雨日本畫個人展

六月十六日—二十二日 大阪・阪急百貨店

森英洋畫展

六月十七日—十九日 新宿・月光莊

烏同人第一回展(洋)

六月十七日—十九日 銀座・紀伊國屋

野口駿尾、南政善作品展(洋)

六月十七日—二十一日 大阪・三越

金澤芳美會第一回工藝品展

六月十七日—二十一日 大阪・三越

第三回各務クリスタル硝子器陳列會

六月十七日—二十二日 大阪・三越

文展第三部作家協會第一回展(彫)

六月十七日—二十三日 東京府美術館

青銅の配給を請願する關係から文展の出品者で他の團體に屬しない作家が新に結成した會。陳列數七十點。堀義二の「浴後」、長谷川義起の「K氏像」、藤井浩祐の「裸」等擧げられる。

瀧野川彫塑研究所第二回試作展

六月十七日—二十四日 東京府美術館

小倉右一郎塾の彫塑展、小倉は「大楠公」其他を贊助出品した。出品者二十五人。

清光會第六回展(日、洋)

六月十八日—二十一日 芝・東京美術俱樂部

後藤新太郎の主催で七名の代表的作家を會員とするが

佐藤朝山、高村高太郎の出品はなく、左記の通り日本畫

二點と洋畫八點を陳列した。

出品目録

薔薇 梅原龍三郎 飲馬 坂本繁二郎

秋櫻 同 白樺と燒岳 安井曾太郎

人形 小林 古徑 薔薇 同

駿馬 坂本繁二郎 觀音 安田 叔彦

「梅原龍三郎と安井曾太郎が「薔薇」に取材し期せずして觀演の形となつた、梅原は和紙に和洋の顔料を使用して新らしい効果を狙つたが完成された安逸さが付き纏ひ、安井には之に反し

て色調に苦心して未完成的な動搖がある、然し安井の「白樺と鵜岳」は遠景に不備があるが近代的知性に基く色彩の布置、獨自のデフォルマシヨンの活きも愈よ尖鋭化して佳作、梅原の「秋櫻」に見える安逸性には反省の餘地があらう。坂本繁二郎は「繫馬」よりも「飲馬」を取るが、氏の眞摯な探求は認められても稍々獨善的である、安田叔彦「観音」は舊來の佛畫解釋より抜き出ようとする意慾は觀取し得るが、内容的な美しさの表現は完全と云ひ難く、小林古徑は先づ平凡(乙)(都六・二二)

白御會第三回展(日)

六月十八日—二十四日 東京府美術館

關西の院展系作家を以て組織する同會は一昨年來、京都及び大阪に展覧會を開催してゐたが、今回最初の東京進出展を開いた。陳列數は賛助出品を併せて三十七點、何れも二曲半以上の大きさで、相當勉強を示したが、全體に研究試作的な感じは抜けきらなかつた。なかで中島菜刀の「雪舟林泉」「木下開」の二點が特質を見せた。小松均の「夕映の雲母坂」はや、單調に終り、その他館岡栗山の「朝市」、今井紫恍の「早春」、福井末義の「比叡山」、三宅淳の「梅の宮首夏」等の出品が擧げられる。賛助出品の横田仙草、石本光太郎、中島清、小島一谿等のものでは小島の「朝鮮所見」、中島の「山の湯」が持味を見せた。

授賞 白馬賞 第一賞「柴山」濱孤嘯、第二賞「春日」北澤映月

青松會第四回日本畫展

六月十九日—二十二日 上野・松坂屋

松坂屋の主催する東西の中堅作家二十餘名を集めた會で、伊東深水の「眞晝」、堅山南風の「朝輝」、中村貞以の「夕べ」、廣島光市の「閑寂」などが出品された。

鬼面社油繪小品展

六月十九日—二十三日 銀座・青樹社

大久保作次郎畫塾の作品展。

蒼穹會第一回新作畫展(日)

六月十九日—二十三日 大阪・松坂屋

現代諸大家新作畫京都表裝展

六月十九日—二十三日 大阪・三越

主催京都表具業組合。

吉田畫藏日本岳寫生バステル展

六月十九日—二十三日 大阪・松坂屋

松尾松濤作品展(洋)

六月十九日—二十五日 丸ノ内・東京會館

岩田藤七新作硝子器展

六月二十日—二十三日 日本橋・高島屋

高島屋主催。盛花器、一輪生其他近作八十餘點を陳列した。

橋本靜水繪畫展(日)

六月二十日—二十三日 名古屋・松坂屋

松坂屋美術部主催。

上野山清眞近作油繪展

六月二十日—二十三日 數寄屋橋・日動畫廊

鈴木清水洋畫展

六月二十日—二十四日 大阪・美術新論社畫廊

京都漆藝院第一回漆額及漆藝品展觀

六月二十日—二十五日 京都・大丸

戸島光阿彌の主宰する同會の第一回展。

五日會新作展(日)

六月二十日—二十五日 大阪・大丸

瑠派亞土第八回展(洋、工)

六月二十日—二十六日 新宿・月光莊

石井柏亭近作洋畫展

六月二十一日—二十三日 神戸・オリエンタルホテル

畫廊東言社的主催、油繪計二十四點を陳列。三十號「御嶽」、二十號「北京中海公園」、十二號「満ちくる潮」、八號「麗人」等が出品され、圓熟した近業を窺ひ得た。

故岩清水義見、故松尾隆成遺作展(洋)

六月二十一日—二十三日 銀座・紀伊國屋

昭和五年東京美術學校を卒業、今春相踵で逝去した故岩清水義見、松尾隆成の油繪遺作が巴人社の主催で展觀された。

杉浦佐助作品展(彫)

六月二十一日—二十四日 銀座・三味堂

藝苑社主催。

土肥刀泉作陶展

六月二十一日—二十四日 銀座・資生堂

九里俳畫展觀

六月二十一日—三十日 京都・芸艸堂畫廊

多聞洞展(日)

六月二十二日—二十四日 日本橋・東美俱樂部

多聞洞橋本秀二郎主催の展觀で東西の諸家四十名の新作を集めたが、堂本印象の「山邸初夏」、竹内栖鳳の兔を描いた「小暮」、前田青邨の「川の幸」等が面白い出来であつた。

榎井一夫第三回洋畫個展

六月二十二日—二十五日 神戸・畫廊

和田英作個展(洋)

六月二十二日—二十六日 大阪・阪急百貨店

近年個展みに發表する作者の新作約二十點を陳列した。琵琶湖畔及び富士の風景、薔薇、蘭などの花卉で、三十號の「富士」が代表的な作であつた。

河村臺太郎作陶展

六月二十二日—二十六日 京城・三越

PK人形クラブ創作人形第八回展

六月二十二日—二十七日 銀座・三越

六月會洋畫展

六月二十三日 大阪・阪急百貨店

三艸社第三回繪畫展(日)

六月二十三日—二十六日 大阪・三越

大阪女流畫家第六回展(日)

六月二十三日—二十七日 大阪・三越

大阪女人社主催。矢野橋村、北野恆富、菅橋彦を審査員として公募による第六回展を開いた。

元井三門里繪更紗展

六月二十三日—二十七日 大阪・三越

徳島縣工藝協會第一回展

六月二十三日—二十七日 徳島・丸新百貨店

野上大業從軍日本畫展

六月二十三日—三十日 新宿・伊勢丹

宇野三吾陶器展

六月二十三日—三十日 大阪・阪急百貨店

中村大三郎畫展(日)

六月二十四日—二十六日 大禮記念京都美術館

渡邊進第一回新作發表展(洋)

六月二十四日—二十六日 數寄屋橋・日動畫廊

山本鼎に師事する作者の初めての個展で、風景、靜物等油繪二十一點を陳列した。

寺坂正信個展(洋)

六月二十四日—二十六日 鳥取・商工會議所

美術往來社第六回日本畫新作展

六月二十四日—二十六日 芝・東京美術俱樂部

美術往來社主催、目錄によれば東西の諸家四十餘名を集めた。村上華岳の「佛畫」、菊池契月の「大伴旅人」、西山翠嶂の「首夏」、西澤笛畝「御所人形」、上村松園「母子」、鏑木清方「朝顔」、酒井三良「秋林小趣」、森白市「新秋」、福田豊四郎「山湖南情」等挙げられる。

貿易局第一回輸出工藝圖案展

六月二十四日—二十八日 大禮記念京都美術館

山田千秋洋畫展

六月二十四日—三十日 大阪・阪急百貨店

川端畫學校日本畫試作展

六月二十四日—三十日 大阪・阪急百貨店

六月二十五日—二十七日 同校

稻垣錦莊第二回繪畫展(日)

六月二十五日—二十九日 名古屋・松坂屋

一水會春期小品展(洋)

六月二十五日—二十九日 銀座・青樹社

會員の小品併せて十九點を陳列。石井柏亭の「武庫川」、山下新太郎の「神苑」は危なげのない技巧を見せ、木下義謙の「蒼空」は地味な面白さをもつ。安井曾太郎の「燒岳」は獨特のデフォルムになるが、細部描寫がやや煩はしく、明快さに乏しかった。小山敬三の「初夏海景」、木下孝則の「ピアノに倚る女」、有馬生馬の「池畔初夏」等が挙げられ、池部均の「町の子」には酒脱な味がみられた。

清技會第二回茶道具展

六月二十五日—二十九日 大阪・三越

第三回岩城硝子會社作品展

六月二十五日—二十九日 日本橋・三越

自育クラブ展(日)

六月二十五日—三十日 大阪・松坂屋

古城江觀海鳥スケツチ展(日)

六月二十五日—三十日 日本橋・白木屋

海軍省軍事普及部後援、海南島の風物を寫したスケッチ九十餘點及び蒐集の上俗品を發表した。

第六回鏈起研究会工藝展

六月二十五日—三十日 日本橋・白木屋

津田青楓日本畫展

六月二十五日—三十日 大阪・高島屋

木心舎彫刻展

六月二十五日—三十日 大阪・高島屋

小磯長平近作個展(洋)

六月二十六日—二十九日 銀座・養生堂

石原求龍堂主催、今回は主に踊り子、洋裁女等に取材

し、三十號、二十號大の油繪を十點發表した。スナップ

ショット的な興味で構圖され、繪としての深さは乏しいが、色彩も美しく、独自の暢達があり、注目された。「練習場の踊り子達」「踊り子二人」「裁縫する女」等を舉げる。

正宗得三郎洋畫鑑賞會

六月二十六日—三十日 大阪・三角堂

十號の「多々羅の濱」、八號「富嶽秋霽」、等油繪計十二點を陳列した。

清光會第六回展(日、洋)

六月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

黎々會第一回展(日)

六月二十七日—二十九日 銀座・鳩居堂

第三回三樹會展(日)

六月二十七日—二十九日 京都・大丸

岐阜社第四回美術展(日)

六月二十七日—二十九日 岐阜・丸物

田中佐一郎從軍前線風景展(洋)

六月二十七日—二十九日 京都・大丸

珮々會第五回展(日)

六月二十七日—二十九日 大阪・高島屋

伊勢正義第二回發表展(洋)

六月二十七日—三十日 數寄屋橋・日動畫廊

鈴木清一油繪展

六月二十七日—三十日 神戸・畫廊

宮尾光峰南支隊線從軍スケツチ展(日)

六月二十七日—三十日

西山翠嶂の門人で、昨年應召、廣東攻略戦に於て軍務の餘暇に作つたスケッチ約八十點を展覧した。

河井寛次郎新作陶磁食器展

六月二十七日—七月二日 日本橋・高島屋

近作の食器を主とし約百三十點を陳列した。

京都工藝院第三回作陶夏期小品展

六月二十七日—七月二日 京都・大丸

澤田宗山新作陶藝品展

六月二十七日—七月二日 大阪・大丸

東邦彫塑院第三回展 (彫)

六月二十七日—七月三日 東京府美術館

公募展で總數百十點を陳列、事變的取材が多い。之は繪畫に比して彫刻にとり易く、又題材貧困の彫刻家に作因を與へる點で好まれる故かと思はれる。これらは又同時に文學的、理想的になり易い傾向も見せてゐる。藤野舜正の白衣の傷兵が繪筆をもつ「更生」、長谷川榮作の群像小品「病舎にて」などその類である。これらは中で佳作に屬するものであらう。服部仁郎の木彫不動三尊すぐれ、安一の「南方を想ふ」の首もよい出来である。併し場中最も光彩を示したのは賛助出品の建昌大夢「恩師の顔」で、力強い寫實的な作品であつた。

現代女流作家展 (洋)

六月二十七日—七月三日 新宿・月光莊

表現第九回展 (洋)

六月二十八日—三十日 銀座・紀伊國屋

保田寛雨個展 (日)

六月二十八日—七月一日 京城・三越

南畫聯盟第三回展

六月二十八日—七月四日 日本美術協會

東京南畫聯盟主催で出品六十七點、外に繪卷數卷を陳列した。概して平凡低調な作品が多い。高須芝山の「燒嶽」「燕嶽」は技の巧者が見え、小川千麿の「四郊尋景」は感興に富む作、名所圖繪的な下川苔地の「西芳寺林泉」もある興趣をひいた。なほ小室翠雲の「清秋」、古川北華の「秋山」などがあつた。

奨励賞 伊東芳園、仙田菱畝

改井徳寛小品油繪個展

六月二十九日—三十日 麴町・日清ビル

第六回築前美術展 (綜合)

六月二十九日—七月二日 銀座・松坂屋

京都大家夏期新作畫展

六月三十日—七月二日 京都・大丸

東光會洋畫展

六月三十日—七月二日 大阪市立美術館

河野秋邨個展 (日)

六月三十日—七月二日 京都・大丸

七月

林雲鳳新作畫展 (日)

七月一日—二日 名古屋・十一屋

無聲會第五回南畫展

七月一日—三日 芝・東京美術俱樂部

動人會第一回展 (洋)

七月一日—三日 銀座・紀伊國屋

白御會第三回展 (日)

七月一日—三日 大禮記念京都美術館

早苗會小品展 (日)

七月一日—三日 神戸・大丸

橋本はな作品展 (洋)

七月一日—四日

中西利雄第二回水彩畫展

七月一日—五日 銀座・資生堂

近作水彩、人物風景等十八點を陳列、平明暢達の特徴をよく示し殊に描寫の自由さ適確さを加へて來たことが見られる。單純化の爲に奥行と強弱とを失ひ易く、滋味に缺ける點があるが、この快技に内容的な深さが加はつたならば、水繪に於ては一寸群を抜いたものにならうと期待される。

水彩畫三人展

七月一日—五日 大阪・美交社

美交社主催。石井柏亭、石川欽一郎、眞野紀太郎の水彩畫を陳列した。

宮崎井南居展 (日)

七月一日—五日 大阪・高島屋

榊原苔山繪畫展 (日)

七月一日—五日 名古屋・松坂屋

塊藝會第七回展 (彫)

七月一日—五日 名古屋・丸善

高木鳳子陶器置物陳列會

七月一日—五日 大阪・三越

二葉會第三回展

七月一日—六日 大阪・松坂屋

京都畫壇巨匠新作展 (日)

七月一日—六日 京都・丸物

大日美術院第三回展 (日)

七月一日—十日 大阪市立美術館

美術工藝學院作品展

七月一日—三十日 銀座・東寶劇場四階

美術工藝學院主催。

森守明近作展 (日)

七月二日—三日 京都・佐藤梅軒畫廊

上絨會油繪展

七月三日—七日 大阪・朝日會館

青樹社主催。岡田三郎助、和田英作、及び和田三造三名を出品者とする會で舊臘東京で開いたものの關西展。

大庭エツチングガラス展

七月三日—七日 日本橋・高島屋

大庭一晃の制作にかゝる彫刻硝子工藝品約百點を陳列して。

現代大家新作展(日)

七月三日—七日 大阪・朝日會館

物故作家油繪展

七月三日—七日 大阪・朝日會館

青樹社主催。陳列數二十餘點。黒田清輝、淺井忠、山本芳翠、長原孝太郎、滿谷國四郎、森田恆友等の遺作を集めた。

栗原忠二遺作展(洋)

七月三日—七日 大阪・朝日會館

青樹社主催。故栗原忠二の滯歐作其他五十點の遺作を陳列した。

藤田太郎支那風景油繪展

七月四日—九日 大阪・大丸

尚美堂展(日)

七月五日—七日 日本橋・東美俱樂部

關尚美堂主催。東西諸家の出品三十餘點を陳列。村上華岳「不動」、中村岳陵「花菖蒲」、酒井三良「山村夏趣」、坂口一草「爽夏」、吉岡堅三「山鳩」等舉げられ、又鏗木清方の歌舞伎狂言「朝顔日記」を描いた畫冊十帖が独自の興趣を盛つてゐた。

尙同時に、橋本明治、西山英雄、山本丘人等綵尙會同人の小品展を行った。

三宅克己、石川欽一郎、眞野紀太郎、武内鶴之助、水彩バステル展

七月五日—八日 銀座・日動畫廊

新更社第一回展

七月五日—九日 名古屋・松坂屋

國展新人展(洋)

七月五日—十日 新宿・月光莊

第一回クータム水彩展

七月六日—十日 銀座・三味堂

小山良修、富田通雄、丸山東美男の三名が組織した水

美術展覽會(七月)

彩の同人展。

吉向松月近作陶器展

七月六日—十一日 大阪・三越

聖戰美術展(綜合)

七月六日—二十三日 東京府美術館

支那事變勃發二周年を記念し、國民精神作興と軍事美術獎勵に資する目的を以て、陸軍美術協會と朝日新聞社の共同主催で開かれ、松井石根大將を名譽會長に、上野朝日新聞社長を會長に推し、陸軍省情報部長その他を委員に依嘱、審査員には橋本關雪、川端龍子、吉岡堅二、藤島武二、石井柏亭、伊原宇三郎、川島理一郎、鶴田吾郎、中村研一、栗原信、熊岡美彦、清水登之、長谷川榮作、日名子實三、坂崎坦の十五名が當り、開場式には竹田宮殿下の台臨を仰いだ外、開期中に宮殿下の台臨を初め、軍人その他多數の入場者を得て盛況を呈し、一般社會に與へた影響は大きかつた。美術の上からも今日の戰爭美術を知る上に興味をもたれるものであつた。

出品は陸軍美術協會員作品及び招待出品を無鑑査としその他公募作品中より入選作をとり、なほ別に出征軍人並に軍病院在院軍人の出品をもとり、總計三百七十點の多數を陳列した。第一室に並べられた陸軍省出品の支戰線畫十點は構圖せられた戰爭畫として最も注意されるものであり、全會場中の花形であつた。これは昨年五月上海軍報道部の依嘱を受けて、中村研一、向井潤吉、小磯良平、南政善、柏原覺太郎、朝井閑右衛門、脇田和、江藤純平、鈴木榮二郎、長坂春雄の十名が各分擔してそれと二百號の畫面を描き、最近完成した力作で、現代戰爭畫の水準を見せるといつてよい。中ですぐれた出来を示したのは小磯良平、中村研一らの作であつた。その他では清水登之の「愛馬と渡河」、伊原宇三郎の「歴倒」、藤島武二の「蘇州河激戦の後(未完成)」、石井柏亭の「隻脚懷江南」、鈴木亞夫の「五月の出征」など、日本畫

は極めて僅かであるが橋本關雪の「江上雨來る」、川端龍子の「螢」等、彫塑では日名子實三の「慰問袋」、中村直人の「建設班」などがあり、後者は尤作として注目された。搬入數一千二百餘點。入選數日本畫八、洋畫百二十八

彫塑二十、計百五十六點。出征並在院軍人作品八十九點無鑑査出品日本畫九、洋畫九十一、上海軍報道部依嘱作品十、彫塑二十、計百三十點。

授賞は左の如く、陸軍大臣賞は上海軍報道部依嘱作品を除く全作品、朝日新聞社賞は出征並在院軍人作品、陸軍美術協會賞は一般出品作中より選ばれた。

授賞(陸軍大臣賞)「建設班」中村直人(彫刻)、「叢中忘己」高光一也(洋畫)、「朝日新聞社賞」「突擊路」高澤圭一(洋畫)、「陸軍美術協會賞」「山嶽難行軍」井上幸(洋畫)、「皇軍來」宮島久七(彫刻)

尙東京展閉會後、横濱、静岡、名古屋、大阪、福岡等の各地で巡回開催された。

出品目録(無鑑査のみ)

西洋畫

招待出品

吳淞敵前上陸 長坂 春雄

蘇州平和來 佐藤 一章

渡洋爆擊行 鹽月 桃市

南方根據地 小早川篤四郎

デルタ地帯掃蕩 山崎 省三

(信號兵)

東洋平和の響 山崎 坤象

行軍 田村孝之介

看護婦 同

家庭防火團 内田 巖

敵機來襲 御厨 純一

江南の春(蘇州) 石川 寅治

上海戰跡(崇德 女子小學校) 田邊 至

占領直後の海軍 奥瀬 英三

航空隊〇〇基地 和田 香苗

三劉峯黃河堤防 決潰現場 同

1 星子にて2星 平通 武男

1 河北省大名城 同

1 河北(各)2北支 同

1 邱縣にて3望都 同

1 垣曲にて2安 同

1 慶にて3雪の大 同

別山 同

鐵路員の活躍 鈴木 良三

戰勝祈願 高橋虎之助

子供心 田口 省吾

五月の出征 鈴木 亞夫

進撃 高井 貞二

朝の斥候 服部正一郎

就後早朝の祈願 濱地 清松

嗚呼中野部隊長 等々力大吉

張鼓峰我が砲隊 同

張鼓峰敵前渡河 同

橋上歩哨(蘇州)	服部正一郎	愛馬と渡河	清水 登之
天津白河の景	神津 港人	進軍の跡	栗原 信
嵐山	片岡 銀藏	陥落直後の除州	同
漢口入城	同	敵機を求めて	鶴田 吾郎
北滿金廠警備	北島 淺一	占領即建設の廣	川島理一郎
廣武鎮夕景	宮田 重雄	東	伊原宇三郎
樹蔭大休止	同	壓倒	五味 清吉
無蓋貨車にて	同	宛平縣城の姿	皇軍庇護下にある
瀋陽湖石鍾山	同	蘇州獅子園	蘇州獅子園
瀨口孔廟	同	景山より見たる	紫金城
嵐山天地塔	同	蘇州河墩戦の跡	蘇州會見(圖稿)
戦後の少女	北川 民次	(未完成)	蘇州會見(圖稿)
樂土	水野 佳一	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
作品(その一)	難波架宏像	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
(撤回)	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
同(その二)	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
同(その三)	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
大東亜の建設	寺崎 武男	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
(開拓)	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
朝鮮志願兵	山田 新一	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
瀨口埠頭上陸の	橋本 徹郎	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
如最高指揮官	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
揚子江より黃河	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
口爆撃を望む	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
難民に恵む	三國 久	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
楓橋警備	佐々貴義雄	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
戦場の勇士	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
陸軍美術協會員出品	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
新木橋の激闘	向井 潤吉	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
光華門丁字路	中村 研一	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
吳淞鎮(敵前上	島田 和	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
陸)	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
白壁の家の突撃	柏原覺太郎	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
楊家宅邸樓上の	朝井 隆	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
松井最高指揮官	園右衛門	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
蘇州河墩前渡河	江藤 純平	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
戦	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
無錫追撃戦	南 政善	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
南京中華門の戦	小磯 良平	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
南京攻略戦	鈴木榮二郎	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
杭州灣上陸の朝	同	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)
砲兵陣地	清水 登之	蘇州會見(圖稿)	蘇州會見(圖稿)

瀋陽め撃ち	岡本金一郎	病舎の一隅	長谷川榮作
聖戦の地を想ふ	中島 東洋	たばこ	横江 嘉純
蒙原を睥睨	羽下 修三	工兵	中村 直人
初陣	大内 青圃	日本 畫	同
行軍(群像の一部)酒見	恒	招待出品	矢野 橋村
陸軍美術協會員出品	日名子實三	仕	福田 扇仙
慰問袋	吉田 三郎	盧澤曉色	同
軍犬兵	横江 嘉純	長江煙雨	同
先陣	吉田 三郎	陸軍美術協會員出品	小早川秋聲
治安恢復	一色 五郎	日本刀	橋本 關雪
從軍記者	吉田 三郎	江上雨來る	吉岡 堅二
偵察	中村 直人	爆撃用意	川端 龍子
工兵(戦争三部	同	同	同
作の一)建設班	同	同	同

清溪會第一回日本畫展
 七月七日—八日 銀座・交詢社

法隆寺上宮王院本尊大厨子建立奉贊美術展
 七月七日—九日 東京美術學校正木記念館

法隆寺夢殿修理を機會に同寺佐伯貫主及び正木直彦の發願により廣く有志の喜捨を得て同本尊大厨子を新調寄進することとなつたが、美術界からの作品寄贈が多數に上つたので、集つたものだけを第一回として展覧した。日本畫は横山大観の「不二靈峰」その他計六十八點、洋畫は利田英作の「琵琶湖畔の春」その他計二十點、彫刻工藝は北村西望の「銅造弘安之時宗」その他計二十八點であつた。

七月會第一回展(洋)
 七月七日—十日 大阪・美交社
 美交社主催。

東風會第三回日本畫展
 七月七日—十二日 日本橋・白木屋

平林清輝佛畫展
 七月七日—十二日 日本橋・白木屋

伊東深水木版畫展
 七月七日—十二日 日本橋・白木屋

七月七日—十三日 銀座・渡邊版畫店

根津香敵日本畫個展
 七月八日—十二日 銀座・養生堂
 作者は荒木寛敵の門人である。

東西大家新作畫展(日)
 七月八日—十三日 大阪・高島屋
 宮崎井南居主催。

歷程美術協會第二回展(日)
 七月八日—十四日 東京府美術館
 昨年馬場和夫、船田玉樹等が結成した新傾向の會で、公募による最初の展覽會を開いた。會員の一部は自由美術家協會にも關係してをり、最近の洋畫に於けると同様の抽象的作品も出品されてゐる。船田玉樹の四曲一雙「檸檬樹」は新感覺を見せ行筆も達者で、際立つた出來榮えを示してゐた。山岡良文の六曲一雙「飛翔」、馬場和夫の「竹取物語」は洗練に缺ける憾みがあり、又馬場の「白の轉調」、岩橋英逸の「樹幹」等の抽象的作品には獨創が乏しかつた。其他野原茂夫の「均衡の寓話」、村山東吳の「フォトプラスチック等が擧げられる。應募作は多く低調であつた。

搬入總數 二一八點、入選數 四四點、陳列總數 五七點

授賞(歷程美術協會賞) 山崎隆、(歷程美術研究賞) 野原茂夫、高津守

會員推舉 村山東吳、蒔田晴成
 會友推舉 矢部榮男、松本一穂、高津守、三ヶ尻正

獨立美術協會員小品展(洋)
 七月九日—十二日 數寄屋橋・日動畫廊
 日動畫廊主催。

尾關栗庵文人畫展
 七月九日—十二日 名古屋・松坂屋

檜崎鐵香日本畫個展
 七月九日—十二日 京城・三越

水田竹圃個展(日)

七月九日—十三日 大阪・松坂屋

京都大衆向工藝品第二回展

七月九日—十三日 福岡・岩田屋

原本虎雄洋畫展

七月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

九耀會第一回新作畫展(日)

七月九日—十七日 京都・丸物

龍駿介富士洋畫第十回展

七月十日—十二日 神田・如水會館

東西大家新作展(日)

七月十日—十三日 芝・東京美術俱樂部

大阪三野昭和堂及び東京萬恭堂主催。

淺原清隆個展(洋)

七月十日—十三日 神戸・畫廊

日本山岳畫協會第四回展(洋)

七月十日—十四日 日本橋・高島屋

山岳を愛好する洋畫家の集りで、足立源一郎の出品畫が技巧的に優れたものであつた。

新井謹也作陶展

七月十日—十四日 大阪・三越

山本芳翠遺作小品展(洋)

七月十日—十五日 大阪・三角堂

宮城三喜子第二回個展(洋)

七月十一日—十五日 銀座・紀伊國屋

早苗會小品展(日)

七月十一日—十五日 神戸・大丸

小早川篤四郎個展(洋)

七月十一日—十五日 銀座・交詢社

水繪十三人展

七月十一日—十六日 新宿・月光莊

月光莊ギヤラリー主催。望月省三、小山周次、小堀進

美術展覽會(七月)

中西利雄等十三名の水彩畫を陳列した。

東西名家夏掛畫幅展

七月十一日—十六日 大阪・大丸

夏期東都諸大家展

七月十一日—二十日 京都・芸艸堂畫廊

柴田毅夫第一回洋畫展

七月十二日—十六日 名古屋・丸善

春陽會賞を受けた新人で、油繪三十餘點を發表した。

境係博洋畫展

七月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

惟軌會二回展(洋)

七月十四日—十六日 銀座・資生堂

樹人社第二回展

七月十四日—十六日 京都・大丸

青柳社繪畫展(日)

七月十四日—十七日 名古屋・松坂屋

上絃會第一回展(日)

七月十四日—十七日 大阪・松坂屋

笹鹿彪洋畫展

七月十四日—十八日 京都・三越

彩尚會展(日)

七月十五日—十七日 大阪・十合

川西英近作版畫展

七月十五日—十八日 神戸・畫廊

花岡萬舟戰線報告丹心畫展(日、洋)

七月十五日—二十四日 京城・總督府美術館

「日本精神作興戰線報告丹心畫展」と題して作者主催國民精神總動員朝鮮聯盟、京城日報社其他の後援で開催された。北支、中支各地の戰線で得た題材を描いたもので、洋畫二百點、日本畫百點を陳列した。

木下五郎從軍小品展

七月十六日—二十一日 日本橋・白木屋

海軍省海軍々事普及部後援。中支方面の前線に約半歲從軍して得た作品を發表した。

支那事變二周年記念大陸風物洋畫展

七月十六日—二十一日 大阪・三越

三越主催。昨秋武漢攻略戰に従軍した橋本徹郎、酒見恆、高井貞二三名の從軍スケッチを展觀した。

手島實油繪展

七月十六日—二十一日 大阪・三越

海軍省軍事普及部、大阪地方海軍人事部の後援で、海軍の從軍スケッチ三十餘點を陳列した。

辻永邦風油彩花母展

七月十七日—二十一日 銀座・資生堂

京都輸出工藝品展

七月十八日—二十三日 大阪・高島屋

關西二科系美術家協會展

七月十八日—二十三日 大阪・大丸

白閃社第三回日本畫展

七月十九日—二十三日 銀座・松坂屋

舊南畫院の有志が組織する會、小室翠雲の贊助出品があつた。

福陽美術會第十回展(日)

七月十九日—二十三日 福陽美術會

福島縣出身の日本畫家有志が組織する同人展で、今回は故湯田玉水、坂内青嵐、渡邊農畝三名の遺作を併せ陳列した。

亞良邊第二回展(彫、工)

七月十九日—二十三日 銀座・松坂屋

朱北樵作陶展

七月十九日—二十三日 大阪・三越

長明個展(洋)

七月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

躍進代用品展

七月十九日—二十七日 日本橋・三越
代用品工業協會主催。

艸風會洋畫展

七月二十一日—二十三日 大阪淀屋橋・三角堂
商業ボスター展

七月二十一日—二十三日 京城・三越

池田逸邨「東海道五十三次展」(日)

七月二十一日—二十五日 京城・三中井

西山翠嶺塾青甲社小品畫展(日)

七月二十一日—二十六日 大阪・高島屋

丹丘會第一回展(日)

七月二十一日—二十七日 京都・丸物

現代日本畫展

七月二十二日—二十三日 大阪美術俱樂部
大阪時事主催。

商工省工藝指導所研究試作品展示會

七月二十二日—二十四日 大阪・朝日會館
主催商工省工藝指導所、後援大阪朝日新聞社。商工省

工藝指導所では今回大阪出張員室を昇格して關西支所を
設置するに當り、支所開設に先立つて同所の研究試作品
七百餘點を展示してその事業概要を一般に紹介し、且つ
業者との懇談會を催して同所研究の利用、工業化を促進
するに努めた。

伸人會同人第一回洋畫展

七月二十二日—二十六日 福岡縣產業獎勵館

第六回九州沖繩各縣聯合工藝試作品展

七月二十二日—二十九日 宮崎・宮崎縣公會堂

祇園會展(日)

七月二十三日—二十四日 京都・佐藤梅軒畫廊

佐藤梅軒主催。金鳥桂華、福田平八郎二名の作を陳列
した。

現代大家陶磁工藝逸品會

七月二十三日—二十七日 大阪・三越

野上大業揚子江と長城線從軍畫展(日)

七月二十三日—三十日 新宿・伊勢丹

東西名家新作日本畫展

七月二十四日—二十七日 大阪・松坂屋

竹工森田竹阿彌花籠と竹林工藝展

七月二十四日—三十日 大阪・三越

秋野不矩個展(日)

七月二十五日—三十日 大阪・大丸

童林社共同制作壁畫獻納記念展(洋)

七月二十六日—二十七日 東京美術學校大講堂

童林社では南京攻略戰に於て戰歿した同人城信義を追
悼して壁畫を共同製作したが、之を陸軍省に獻納するに
際し、一般に公開した。製作には小林萬吾が指導に當り、
日産自動車株式會社が後援した。

大森桃太郎富岳個展(洋)

七月二十六日—三十日 銀座・資生堂

松村小琴新作繪畫展(日)

七月二十六日—三十一日 大阪・阪急百貨店

小倉猛熊、山口義朗洋畫作品展

七月二十八日—二十九日 京城美術俱樂部

商工省工藝指導所研究試作品展示會

七月二十八日—二十九日 神戸・商工會議所

齋齋會第一回展(日)

七月二十九日—八月一日 銀座・松坂屋

美術と趣味社高山辰三の主催で、出品者は徳岡神泉、
奥村土牛、太田聰雨、中村岳陵、山口蓬春、福田平八郎
の六名。

八月

大垣泰治洋畫個展

八月一日—三日 神戸・畫廊

獨逸寄贈現代日本畫展觀

八月一日 芝・東京美術俱樂部

藤原銀次郎は今秋のナチ黨大會に民間側の代表使節と
して渡獨するに當り、獨逸政府に現代日本畫諸家の作品
六十二點、ヒットラー總統に川端龍子下繪の綴れ錦壁懸
「海洋の鷗」を個人として寄贈することとなり、携行す
るに先立つて之を一部に披露した。又井坂孝よりヒット
ラー總統に贈る今村紫紅筆金地六曲一双「獅子」も同時
に陳列された。(一四頁參照)

今西洋創作陶磁展

八月一日—六日 大阪・高島屋

菖菴社展(日)

八月一日—七日 京都・丸物

商工省工藝指導所研究試作品展示會

八月二日—三日 京都市商品陳列所

全國豐啞作家美術展

八月四日—八日 大阪市立美術館

日本聾啞協會主催。

東京美術學校第二回福岡縣人會展(綜合)

八月五日—九日 福岡日々新聞社

松田黎光個展(日)

八月五日—十日 京城・三越

島津製作所マネキン部新作品發表會

八月六日—八日 神田・島津製作所

同店の新作マネキンを陳列、尙今春逝去した顧問萩島
安二の遺作マネキン三十餘點を陳列した。

春日部たすく水彩畫展

八月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

静岡聖戰美術展(綜合)

八月九日—十六日 静岡・松坂屋
日本醫家美術協會第一回洋畫作品展

八月十日—十七日 銀座・三越
醫師の素人洋畫家が組織した同人展。
南紀美術協會展

八月十二日—十八日 北軽井澤・南紀クラブ
長野市工藝指導所主催家具木工展示即買會
八月十三日—十五日 輕井澤會館

羅青會一回展(日)
八月十五日—二十日 京都・大丸
横山春溪第二回近作個展(日)

八月十七日—二十日 柳ヶ瀬・百貨堂
資生堂廣告研究會第一回展
八月十九日—二十三日 銀座・資生堂

第六回關東府縣聯合工藝品展
八月二十二日—二十六日 東京府商工獎勵館
輸出向の工藝品振興を旨として關東六府縣及び山梨縣

の聯合工藝品展示會が商工省後援の下に開かれた。陳列
總數一千五百二十六點。作品は國産材及び代用材で作ら
れ、輸入材は全く使はれなかつた。

精動ボスター展
八月二十二日—二十七日 上野・松坂屋
金蘭會第十二回女子洋畫展

八月二十二日—二十七日 大阪・三越
陽光社同人展(日)
八月二十二日—二十七日 大阪・大丸

山中仁太郎、齋藤大近作朝鮮風物寫生展(洋)
八月二十三日—二十五日 京城・三越
白耳義ブラツセル國際人形展本邦參加展示會

八月二十三日—二十七日 日本橋・高島屋
國際文化振興會ではブラツセル市主催國際人形展に參
加出品すべく蒐集した古代人形及び現代作家の新作作品を

發送に先立ち、在京ベルギー大使館、外務省、文部省後
援の下に陳列公開した。新作品の出品者は牧俊高、畑正
吉、後藤良、桐竹門造をはじめ日本人形社會員、文展第
四部の作家等、七十餘名でその中十餘名は各地の郷土人
形を出陳した。

鹿島英二個展(染)
八月二十四日—三十一日 大阪・阪急百貨店
新廣告第一回展示會

八月二十五日—二十九日 銀座・資生堂
小松益喜近作油繪展
八月二十六日—三十日 大阪・美術新論社畫廊

東海四縣輸出工藝品見本展示會
八月二十七日—三十日 愛知縣商工館
日本彫塑藝術社大阪第一回木彫展

八月二十九日—九月六日 大阪・大丸
大阪工藝振興展
八月二十九日—九月三日 大阪・大丸

大阪府、大阪市、大阪商工會議所、堺市、大阪府工業
懇話會、大阪府工藝協會聯合主催。産業工藝品の圖案及
模型の公募入選作を陳列した。

重陽會日本畫展
八月二十九日—九月三日 大阪・松坂屋
西山翠嶂の門下が組織する同人展で、翠嶂は「瑞喜」
を贊助出品した。

九 月
根上富治新作畫展(日)
九月一日—三日 大阪・高島屋

澤人會第一回繪畫展(洋)
九月一日—三日 大阪心齋橋・丹平商會
貿易局海外市場調査團蒐集見本品展示會

九月一日—四日 東京商工會議所
東京府、市、東京商工會議所、東京府貿易組合協會の
共催。今回は昭和十三年度蒐集にかゝるもので、市場は
印度、メキシコ、バナマ、キューバ、コスタリカであつ
た。

早苗會同人新作畫展(日)
九月一日—四日 福岡市・岩田屋
大塚金吾第六回個展(洋)

九月一日—五日 銀座・資生堂
晨風會第二回繪畫展(日)
九月一日—五日 名古屋・松坂屋

同人の井上正晴、河合健二、要樹平、中川正次の作品
を陳列した。
朗峰畫塾第九回展(日)

九月一日—七日 日本橋・三越
伊東深水畫塾の展覽會で、遠藤燦可、濱倉清光、立石
春美等門人の作品三十一點を陳列、深水は贊助出品とし
て「爽涼」一點を示した。

金澤工匠會主催美術工藝品展
九月一日—七日 日本橋・三越
陶器、漆器、金工、木竹、染色等を陳列した。

鈴木誠個展(洋)
九月一日—七日 大阪・高島屋
齋藤勇個展(洋)

九月一日—七日 大阪・阪急百貨店
黃人社第一回展(日、工)
九月一日—十日 京都・大丸

聖戰從軍素描展(日、洋)
九月一日—十日 京都東山・靈山畫廊
出品者は鹿子木孟郎、小早川秋聲、田中佐一郎、小合
保一郎の四名。

紀元二千六百年奉賛展

九月一日—十五日 名古屋・松坂屋

第三部會第五回展 (彫)

九月一日—十八日 東京府美術館

在野唯一の彫塑團體を標榜する第三部會は例年の如く會員、會友作品の外公募の入選作品を加へて第五回展を開いた。在野展とはいへ藝術上の傾向から見れば進歩性に乏しく概して通俗的寫實主義を示し、團體としての運動方向は明瞭でない。事變の影響からであらうが、大作が少く一般に低調さを感じさせた。事變に關聯する取材のものは相當に多く、日名子實三の戦線におけるカメラマンを寫した「第一線」、濱本武男の「兵士(習作)」、大木芳朗の「征空の雄」、鈴木賢二の「新しき秩序の爲に」等をその目星しきものに數ふべく、池田勇八の板彫「愛馬行進曲譜」六點はむしろ繪畫に分類さるべき性質のものであつた。この作者のものでは「路傍」をとる。その他の作品では大野信藏の「犬(サモエド種)」、日名子實三の両面浮彫「座像」、永原廣の陶製浮彫「乙女」、入江弘の「小説家S氏像」、石塚祐康の木彫「空」などが注目される出来であつた。尙その他に會員會友等の實用彫塑と稱する小工藝品の類を陳列した。

搬入數 一九五點、入選數 六六點、陳列數一〇二點
實用彫塑二三點。

特選「空」石塚祐康、「潮風」名久井十九三、「光驅」小森田春雄

會員推舉 早乙女龜次、鈴木賢二

會友推舉 大木芳朗、永原廣、新關國臣

出品目錄 (〇會員、△會友)

彫塑 (一〇二點)

- 牛 ○大野 信藏 習作 (放)林 坤明
- 保田龍門氏像 尾崎 吳業 鷗 尾崎 青峯
- 小魚 居崎 青峯 男の首 伊藤五百龜
- Kの首 成田 政男 裸婦 二星 清光
- 山田竹治先生像 田村 一火 少年胸像 吉野 正孝

- 無題 山田 稼造
- 小説家S氏像 名久井十九三
- 土俵きわ(1) 入江 弘
- 同 〇畑 正吉
- 同 (2) 同
- K博士 〇石川 確治
- 犬(サモエド) 〇大野 信藏
- S子像 小向 克己
- 建設 △永原 廣
- 軍鶏(雛) 〇大野 信藏
- 具隆さん 〇鈴木 賢二
- 第一線 〇日名子實三
- 耕作 〇鈴木 賢二
- 首 名久井十九三
- 豫備將校 〇向山 陔路
- 不動 〇石川 確治
- 千人針 〇濱田 三郎
- 〇氏像 〇永原 廣
- 〇氏像 〇吉田 久繼
- テニス 〇畑 正吉
- 邀討 同
- 田村(後シテ) 同
- 銃後の朝 成田 政男
- 男と女 同
- 女のトルソ 福崎 日秀
- 女の首(A) 〇早乙女龜次
- 兵士(習作) 濱本 武男
- 春 同
- 青年の顔 小森田春雄
- 清流 瀧川藤一郎
- 軍鶏(雄) 〇日名子實三
- 光驅 〇大野 信藏
- 座像 小森田春雄
- 湖風 △永原 廣
- エスキス 名久井十九三
- 女の首(B) 〇早乙女龜次
- 馬と兵隊 館野 親光
- 胸像 〇濱田 三郎
- △永原 廣

- 新しき秩序の爲 〇鈴木 賢二
- に 杉浦 潔
- 男の首 〇石川 確治
- 歟 小森田春雄
- 想ふともなく 〇鈴木 賢二
- 荒野(習作) 〇早乙女龜次
- 車中スケッチ構 同
- モデルを用ひたる習作(構想) 同
- モデルを離れたる習作(構想) 同
- 構想 同
- 渡邊先生の像 石塚 祐康
- 女の首 山下 隆雄
- 征空の雄 △大下 芳朗
- 無題 同
- 二世歐川芳宗翁像 大塚 勝彦
- 傷兵 入江 弘
- 牧場の風景 〇池田 勇八
- 愛馬行進曲譜1 同
- 同 2 同
- 同 3 同
- 同 4 同
- 同 5 同
- 同 6 同
- 相撲 同
- 路傍 同
- 神氏の像 同
- 空 石塚 祐康
- 西湖畔 〇日名子實三
- 乙女 △永原 廣
- 立てる女 福崎 日秀
- 愛戀 △新關 國臣
- 受胎 林 玄海
- 首(試作) 依 久吉
- 首(習作) 安田 勳男
- Yの首 鍋谷 勝治
- 山羊 〇大野 信藏
- 虛榮を追ふ女 △大木 芳朗

- トルソ1 尾崎 吳業
- 裸婦座像 館野 親光
- 女の顔 〇早乙女龜次
- 勝利 濱谷 信行
- 魂 山田 稼造
- 護 △大木 芳朗
- 野澤 彰
- 黎明 異 一太
- 壺(習作) 同
- 座像 〇日名子實三
- 微風 〇池田 勇八
- 村の少女 半田 政衛
- 虚空藏菩薩 △新關 國臣
- N先生座像 〇鈴木 賢二
- 雷 〇日名子實三
- 裸婦 △新關 國臣
- 種蒔き 〇鈴木 賢二
- をんな △大木 芳朗
- 實用彫塑(二三點) 同
- 記念勝原型1 〇日名子實三
- 同 2 同
- 同 3 同
- 尾崎 吳業 記念勝原型4 日名子實三
- 斥候兵 〇鈴木 賢二
- 壺(魚紋) 〇石川 確治
- 同(金魚) 同
- 同(海老) 同
- 同(小鳥) 同
- 木彫帶止 龍紋△大木 芳朗
- 朝露 同
- 白鳥 同
- 呼雲 同
- 魚 同
- 青銅水滴(かわす) 宮 昌太郎
- 陶製帶止(花と乙女) △永原 廣
- 同(象) 同
- 同(エン) 同
- 同(ゼル) 同
- 同(エンゼ) 同
- 同(ル・フィッシュ) 同
- 同(雀) 同
- 翁面 小川由加里
- 木製小箱(甲虫) 吉原 良雄

青龍社第十一回展 (日)

九月一日—二十八日 東京府美術館

入選作も増加し又畫面の大きさを制限せぬ爲大作が多く、勇健なる筆技と相俟つて青龍社獨特の活氣に充ちた展覽會である。末技に拘泥せず只管明日の日本畫開拓を念願する所に特色があり、會場藝術に健剛の筆力を振はんとするあまり屢々企圖と技術との不一致を示す弱點がないとはいへぬが、これを認めつゝ、その主張を理解して支持を惜まぬ人々の増しつゝあることも事實で、主宰者川端龍子の一貫せる主張と行動力とは注目をひかすにはおかぬものがある。

龍子の「香爐峰」は「大陸策」四部作の第三作で、虛山の上を飛ぶ飛行機を縦八尺横二十四尺の畫面一杯に描き、その奇抜さに觀者を驚かせた。在來の繪畫上の約束

からは種々の難が指摘されるとはいへ、時局を最も強く認識し、日本畫に廣い領域を敢て開拓せんとする作者の旺盛な創作力から、この作あるは意外ではなく、その企圖と共に非凡の筆力は倅とされる所である。同じく龍子の「五鱗圖」は餌に集る五匹の鯉を放射状に描いて、主題技法共に前者と對蹠的な靜寂の好畫面をなし、佳品として頗る好評であつた。社人では坂口一草の二作は技法龍子に倣ひつゝ、又異なる個性を示し、「奔流」は力作として推すべく、水墨と胡粉による「涼宵」また好調を示す出来であつた。山崎豊の「天草」は三幅をなし、畫面や、粗大の觀があつたが、加納三樂の「星祭」と共に特有の氣質と情趣を持つて注目され、福岡青嵐の連作「明惠傳(續)」四圖も潤達の筆技を示した。

入選作品では雞群を描いた時田直善の「群冠圖」が出色の出来榮えを示し、安西啓明の「填輪」、小島鼎子の「清白圖」、市野亭の「檻」、谷野敬一郎の「珊瑚礁」、中川三郎の「朝」、須藤尙義の「凍田」、など、夫々に注目させる長所を見せた。一般に龍子の作風に從ふものが多いのは當然であらうが、中には「檻」、「珊瑚礁」などに見る如く、夫々の個性に從ひ獨自の表現に努めつゝ、ある作者を見ることは、將來を期待させる。

撥入數 一〇八點(九三名)、入選數 四三點、陳列數 五一點。

獎勵賞、青雲賞 「群冠圖」時田直善、獎勵賞「填輪」安西啓明、Y氏賞「錦欄頌」大塚榮治

社友推舉 利谷双樹、社子推舉 内池良男、鍛冶貫一

出品目録

- | | | | |
|---------|-------|--------|--------|
| 香燻峯 | 川端 龍子 | 明惠傳(續) | 福岡 青嵐 |
| 大辟策 第三作 | 同 | 天草 | 山崎 豊 |
| 五鱗圖 | 同 | 夕 風(右) | 聖十字(中) |
| 奔流 | 坂口 一草 | 朝 風(左) | |
| 涼宵 | 同 | 植輪 | |
| 星祭 | 加納 三樂 | 枕 | |
| 早那圖 | 同 | | |

美術展覽會(九月)

- | | | | |
|------|-------|----------|-------|
| 清白圖 | 小島 鼎子 | 待春 | 直江 義春 |
| 鬪牙圖 | 木村鹿之介 | 青秘 | 内池 良男 |
| 甲羅干し | 佐藤 木草 | 青蓮 | 鍛冶 貫一 |
| 檻 | 市野 亭 | 母子像 | 根本 進 |
| 群冠圖 | 時田 直善 | 青院 | 古野 大蔵 |
| 冬立つ | 演出 榮一 | 銀盤の華 | 森 省三 |
| 鮎の瀬 | 利谷 双樹 | 石坑 | 林 榮太郎 |
| 海廊 | 三好 光志 | カムラード | 沼野 匡志 |
| 新月 | 松宮 左京 | 珊瑚礁 | 谷野敬一郎 |
| 爽朝 | 坂 鏢一 | 空也溪 | 琴塚 英一 |
| 鷺鷥 | 奥田 正一 | 磯車 | 小川茂麻呂 |
| 晴鶯 | 結城 正雄 | 向日葵 | 佐藤 博 |
| 綠炎 | 岡部建一郎 | 船鈴 | 龜井藤兵衛 |
| 宵 | 依田 季夫 | 黃日 | 黒田貞次郎 |
| 錦欄頌 | 大塚 榮治 | 熊野海岸 | 山本 昌平 |
| 花庭 | 菱田 幾久 | 晚秋 | 佐々木邦彦 |
| 關冬 | 渡邊 龍三 | 朝 | 中川 三郎 |
| 爐邊閑日 | 佐藤 正一 | 凍田 | 須藤 尙義 |
| 露花譜 | 鈴木 茂子 | 春樹 | 高山 晴雄 |
| 慈園窓 | 里見 公起 | 泰山木 | 丸山 峻 |
| 土 | 上條 靜光 | 中支點描(八葉) | 川端 龍子 |

フィリッピン土俗工藝展觀

九月一日—十月二日 駒場・日本民藝館
 日本民藝館では宮武辰夫蒐集のフィリッピンの土俗工藝品を展觀し、併せて同館所藏の臺灣及びボルネオの着物類を陳列した。

日本美術院再興第二十六回展(日、彫)

九月二日—十月三日 東京府美術館
 日本美術院が新文展に参加することになつてから院展を守るか官展に力を注ぐべきかに若干の迷ひが見られ、いはゆる在野精神の喪失としてその態度が惜まれ、院展の不振が指摘されたなどしたが、本年は同人一同舉つて出品を申合せるなど緊張した努力を見せ、一二を除いて全部の同人作品を揃へて充實した展覽會を開いた。質に於て格段の飛躍を見せたといふ譯ではないが、院の中心をなす作家等は夫々に完成された境地を示し、進取的な中

堅作家達は成否はともかく研究的態度の尊重すべきものを見せるなど、院展の健在を認めさせるものがあつた。横山大観は水墨の「烟雨」、「湖聲」、紙本彩色の「麗日」の三點を出品、餘人の及び難き境地を示した。「烟雨」は細密な筆で雨にけぶる竹林を描いたもので獨創的な水墨の趣致が遺憾なく現はれ、「麗日」は筆に稚拙の觀を止めつゝ、作者の畫心の奥を覗かせてゐる。安田敦彦は天のやちまたに出會ふ「天鈿女命と爰田彦神」を描いて小品ながら技術的に至純といふべき美しい畫面をなした。こゝには素樸な漂渺たる神韻はないが、透徹した知性と高雅な品位とが備はつてゐる。小林古徑の「玉蜀黍」二曲一又はこの作者に珍しくのびやかに描かれ、一見大味の如く併し細心の用意を以て快い出来を示した。前田青邨の「朝鮮五題」は朝鮮風俗を白描體に獨特の線描を以て寫したもので、何の奇もなき民衆生活の斷片を捉へてよく藝術化してゐる。

日本畫に於ける在來の表現の範圍を破つて新道の開拓に腐心しつゝ、ある中村岳峻は「流紋」に一つの成功を示した。陽光の當る水流の一角を捉へ、水面の波紋と水底に映るその影とによつて清澄な水の感じを寫したもので、適度の様式化も表現の効果を助けてゐる。郷倉千靱の「渡り鳥」も新日本畫としてある共通性をもつが、之は裝飾畫として様式化が一層目立つもので、特有の色彩感が作者の個性を示してゐる。堅山南風は群青を主調とし豪壯な筆致で「千里壯心」を描き、大智勝觀は綠青を主調として松山を寫した「立夏」を描き、いづれも六曲一雙の大作に努力を示した。山村耕花の三幅對「皇紀萌芽」も亦力作として注意される。酒井三良の長卷「水郷の一日」は小川芋錢を想起させる境地で、素朴ななごやかさが觀者を楽しませる。その他同人では新鮮な研究的態度を示すものとして奥村土牛の「晴日」、小倉遊龜の「浴女その二」、太田聰雨の「悲田院」、中村貞以の「夏趣二題」等が注意されたが、出来榮は必しも成功とは稱し難

いものがあつた。「浴女」は昨年の連作と見られ、浴後の三人の女を三様に描いて構想、描寫共に大膽な仕事であつた。これらの作家が消極的な安住を求めず常に探求に努めつゝあることは、活氣と希望をもたせるものがある。

同人以外の作品では新井勝利の俊乗上人を描いた「大佛勸進」が力作として推される。この作者は昨年に引續き院賞の首席に擧げられ、注意される勉強ぶりである。中島清の「黄街」七點は支那風俗を描いて生彩に富み、頗る面白味のある作品であつた。その他佐野光穂の「柳塘春雨」、小島一谿の「北支那四景」、郷倉和子の「庭の春」、冬木大丙の「機女」、利高節二の「牛と村人」、加藤晨明の「齒科室」など夫々よい質を見せた佳作に擧げる。

彫塑には相變らず木彫が多く、又表面的な味を狙つた作風が一種の特色とも見られるが、それは院展彫塑の名人藝的な風趣にはなつても彫塑の本道の發達には積極的な意味をもたぬことを反省する必要がある。平楠田中の「試作鏡獅子」は昨年の裸體試作を基礎に衣裳をつけ彩色を施した一完成作で多年一つの主題に精進する作者の努力を示すと共に、及び難き技術的完好さをもつ力作であつた。新海竹藏の「朝鮮にて」(砧)は寫生的作品であるが作者の氣質をよく現し、造形的な弱さを藏するとはいへ一佳作をなす。中村直人の「征徒(防人ニヨル)」は力強い表現にある成功を示した大作で、注目された。石井鶴三の「シユミーズの女」その他は作者として普通の出来である。その他同人等あまり振はず、入選作では辻晋堂の「婦人像」、柏木康兵の「牛」などが注意をひいた。

繪人數 入選數 無鑑査 同人出品 陳列數
繪畫 六二一 七九 三 二六 一〇八
彫塑 一八九 五三 一 二三 七七
合計 八一〇 一三二 四 四九 一八五
日本美術院賞(繪畫) 第二賞「大佛勸進」新井勝利
第三賞「柳塘春雨」佐野光穂、「黄街」中島清、(彫塑)
第二賞「婦人像」辻晋堂、「鳳翁像」林是

院友推舉(繪畫部) 三村石邦、佐々木京林、鈴木摩古等、小松均、片岡球子、上垣候鳥、山本大慈、狗谷南名雄、酒井とし、郷倉和子、鹽田英雄(彫塑部) 武末與吉、小林貞五、森豐一

出品目録 (△同人)

青楓	顯出	英雄	天錫女命と覆田	△安田	叔彦	浴女 その二	△小倉	遊龜	庵室所見	栗山	弘圓	眞道	黎明
綠映	宮坂	一義	彦神			樹映	佐藤金一郎		南浦新春	太田	大仙子	花岡	朝生
春潮	増田	無相	烟雨	△横山	大觀	四十雀	△小山	大月	漆二題(白南風)	長谷川	朝風	笹沼	寛節
機女	冬木	大丙	麗日	同		千里肚心	△堅山	南風	風(黒南風)	長谷川	朝風	鍋島	古舟
和春	山口	靜惠	潮聲	同		春空	△佐々木	京林	トランブ	草木	栞雨	青空	雲兒
閑庭	中島	保	朝鮮 五題	△前田	青郎	鶯鶯	木の間		草劇 世の光	水鳥の池	機織	川合	白流
晴畫	佐藤	白鶴	清秋	酒井	とし	木の間	翠劇	世の光	立冬	綠蔭	綠蔭	上田	堯民
御瀧	鈴木	鳥心	眠	北支那四景	小島	一谿	立冬		綠雪	片岡	球子	我妻	翠宇
牛と村人	和高	節二	八月の港	吉田	欽之助	錦	七夕さま		殘雪	武藤	星乃	白山	春邦
早春	錦	光輝	鳥骨雞	△富取	風堂	上田	雪舟之庭		御垣守	老人の首	御垣守	板倉	白龍
丘の畑	上田	畦草	皇紀萌芽	△山村	耕花	花	山茶花		火夫	首	火夫	森	豊一
群	岩橋	英遠	新樹	加藤	洵毅	渡り鳥	熱帯植物と少女		關	首	鶴	吉田	瀧藏
鴛鴦	石塚	青莖	玉蟲	△長野	草風	温床	陽と幹		赤井	方正	野村	仙草	武末
夏夏	△大智	勝觀	庭の春	三村	石邦	淡雪	秋晨		田代	放生	野村	采翁	長野
雞舍	鈴木	麻古等	乳牛	鈴木	和子	御よそほひ	待月		田代	放生	野村	采翁	長野
暗香	山内	佑晃	朝霧	山内	佑晃	植込	霧雨		北澤	映月	鈴木	成欣	長谷川
水郷の一日	△酒井	三良	朝霧	中庭	煥華	夕空	夏越二題		△中村	貞以	出家	同人	晋堂
鷄と魚と猫	△橋本	靜水	鷄と魚と猫	宮内	雪江	唐蜀黍	(三味線)(讀畫)		朴生	光	湯川村	長像	同人
花苑	宮内	雪江	松下村藝	川崎	省三	佛手柑	午睡		吉岡	英秋子	少年力士	小倉	清吉
梅	植草	實	四季草花	半田	鶴一	伊勢海老	黃街		中島	清	朝鮮にて(老人)(砧)	△新海	竹藏
宮崎	東里	東里	宮崎	東里	東里	煙るいでの	(曲藝)(露臺)(門)		高橋	萬年	裸婦像	土井	要輔
宮崎	東里	東里	宮崎	東里	東里	煙るいでの	(室内)(歌手)		尾内	林	岸村	忠治	忠治

仔山羊	楳田 七郎	石井氏像	片野不空藏
日君像	△村田徳次郎	老翁頭部	△喜多武四郎
膝つける少女	同	少女立像	同
幼童菩提	△宮本 重良	女の顔	△山本 豊市
雪山行	加藤 泰三	鳳翁像	林 是
岳友像	同	裸婦	同
郷子像	小林 章	青年	△石井 鶴三
N氏母堂像	寺瀬 默山	佐藤教授像	同
土ノ子	松澤 作治	シユミーズの女	同
少女	門脇 滋子	女立像	小柳津三郎
少年	山口眞一郎	堀内夫人像	長濱 虎雄
鵝	△松原 松造	阪本氏像	同
婦人像	同	寫	池田 佳穂
馬	同	立正安國	矢崎 虎夫
老婆	多和多清志	少女	同
舞踏王濕婆	△大内 青圃	橋本統領の像	佐土 哲二
牛	柏木 康兵	童	吉川 政治
兎	同	裸婦座像	隠家 悦一
葵ノ上	入江 美法	工場のひととき	大橋 精一
蝦蟇仙	松村秀太郎	弟ノ顔	杵谷 精一
試作鏡獅子	△平橋 田中	天人	△中村 直人
幼児	宮本理三郎	征徒(防人ニヨル)	同
猿	同	同	同
特務兵	櫻井 祐一	仙太の顔	同
青年ノ首	田中 太郎	銀へ	花田 一男
花籃	廣野悦之輔	童女	大野 隆一
老大工ノ像	樋川 治之	天翔	同
鵝の野鼠	棟方 一	子供	同
黒潮	△関谷 充	老樵	小林 貞吾
石河氏母堂像	同	同	同

二科會第二十六回展(洋、彫)

九月二日—十月四日 東京府美術館

同會は事變下に第二十六回の公募展を開催し、從來に變らぬ諸傾向を見せた。會員の制作は概して好調を示し、特記すべき二三の佳品も挙げられる。然しながら一方に會の寛選方針は多數の低調なる作品を容れて、そのため全體の印象が害はれたことは甚だしく、退嬰的な零團氣

をさへ感ぜしめた。會の反省が要望される所以である。今回は外遊中の二會員藤田嗣治、宮本三郎及び坂本繁二郎の出品がなかつた。

第一室、向井潤吉の「難行」及び「甦民」の二作は昨年の「突撃」と併せて聖戰三聯作を成すもの、互細な叙述に技巧的特質を見せ、「甦民」はブリュッゲルを想起せしめた。田村孝之介は近來遠筆に任せて表面的な風俗畫を作る風があつたが、今度の時局を扱つた「武人静養」は良質の制作であらう。外に小出卓二、松下義晴、坂宗一等が目目された。第二室、栗原信の二作では「城外」が挙げられるが、技巧の持味に止まる感みはあつた。第三室、鈴木信太郎は独自の裝飾的様式化を續けてゐる。「奈良風景」其他は構圖に效果を得て注意をひいた。黒田重太郎の四點はこくめいな描寫に成るもの、田口省吾の人物畫は筆致が平坦に過ぎた。第四室、濱田葆光の日本畫風に描いた「白鹿」、古家新、柏原覺太郎の諸作が挙げられるが、柏原の「樹蔭」は無難な纏りを見せた。又大澤昌助の作品が例の單純化に據つてゐる。第五室、正宗得三郎の「浦上の雲」、「靜物」、人物畫の「紫菀」等は手法が懇切で落ち着いた美しさを持つ。鍋井克之の風景畫三點の中では「吉林松花江畔」が奥行きのある佳作であつたが、「時計屋のある街角」は情緒的な色彩と晦澁な描寫に作者の長所短所の両面を示してゐた。東郷青兒の二作は例の題材と様式化により、縦幅に構圖の工夫を見せた。「水波み」が注意される。野間仁根は「花と小鳥」

其他に感覺的な筆觸を示した。高岡徳太郎の「森」「竹」等はや、工夫が目立つが、色調は洒落れた味をもつ。外に國技金三、横井禮市、中川紀元は變化を見せず、熊谷守一の小品は即興的に過ぎた。第七室、岡田謙三は畫風に独自の感傷を有し、「母子」は或るこなれた手法を見せたが、群像を描いた大作の「高原」は單に頹廢的情緒を描いたに止り、繪畫的效果は深さを缺いてゐた。鳥崎鷄二の「竹」は手法が日本畫的で、明快な感覺を見せた

が、單調な嫌ひはあつた。外に福島金一郎を擧げる。第九室は例年所謂前衛作品を陳列する。抽象繪畫では山口長男、吉原治良等は或る情調を内容とし、山本敬輔、廣幡憲等は未知數に止る。其他伊藤久三郎の浪漫的な作も見られたが、總じて同室の作は效果が曖昧で甚しく迫力と深さに缺ける嫌ひがある。第十一室の服部正一郎、吉井淳二、錦義一郎は變らず、伊谷賢藏は事變を扱つた力作を出品したが、更に内容的なものが要求され、外に田邊三重松の「有珠岳」が擧げられる。第十二室、伊藤繼郎、酒井亮吉ともに時局に取材、技術は一應注意された。外に松本弘二の「高原にて」を擧げる。第十三室、北川民次の「大地」が特異なる構成を示して注目された。早川國彦の水繪では「夏苑の少女」が構圖に優れたものがある。外に寺田竹雄の「フェリーボート」、藤川菜子、田中忠雄の諸作を擧げる。

彫塑部では水野欣三郎の「興亞の聖火」、笠置季男の「抗日の末路」、長谷川八十の戦跡モニュマン「聖劍」等は時局に題材を採つたが、内容的に薄弱さを免れない。松村外次郎の「幼時の鹿之助」「犬」は常識的ではあるが、無難な出来であつた。上田曉のレリーフ「いくさの」には平凡、外に後藤一彦、小田定一、中村暉等が擧げられるが、概して技巧と意欲の不足が認められる。外に泉二勝磨の特別陳列十二點があつたが、「花寶娘」が無難な出来で、他は小品であつた。尙渡邊義知の出品がなかつた。

搬入數 繪畫三七〇九點、彫塑一四二點、入選數 繪畫四三九點、彫塑二九點、陳列總數 繪畫五五〇點、彫塑四九點。

推獎(繪畫) 吉原治良、福島金一郎、伊谷賢藏、松井正、服部正一郎、(彫塑) 泉二勝磨、小野欣三郎、土田實、會友推慮(繪畫) 橋本敬郎、伊藤久三郎、峰岸義一、田中忠雄、飯田清毅、(彫塑) 後藤一彦、河合芳男、特待(繪畫) 米良道博、桂ユキ子、佐野繁二郎、藪野

正雄、丹下富士男、井上覺造、(彫塑) 柳田昌、野水信吉、中堀正孝

出品目録 (○會員、△會友)

愛馬圖	△山本直治	アトリエの窓	ハーバート・ワグナー	種子島(鐵砲傳來)	日高健泰	柏木房太郎	カシナの花	下高原健治	哈爾濱埠頭公園	鍋井克之	祖母の像	木村敏一
アカシヤの花	橋本徹郎	猿廻し	佐藤吉五郎	北極	同	同	斜光	同	時計屋のある街	同	立像	後藤一彦
咲く窓	同	津輕の漁村	伊藤静尾	朝顔	同	同	室内	同	角(新京三笠町)	同	首	妹尾健太郎
まんざあと	同	食卓による子	伊藤静尾	花火を遊ぶ子供	中出とみ子	渡邊貴美子	紫	同	花と水鳥	同	首	竹下慶一
山	田中修	肉店	伊藤静尾	序説	松本俊介	中出とみ子	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
子供	田中修	星の契	伊藤静尾	港町の朝	鳥取充	松本俊介	紫	同	山尾薫明	同	首	顔
老兵士	田中修	秋時雨の曲	伊藤静尾	店頭の刺繍	鳥取充	松本俊介	紫	同	花と水鳥	同	首	顔
七夕	中園眞行	花と風景	伊藤静尾	裸婦と少女	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
雲崗の子供	林鶴雄	神苑の朝	伊藤静尾	少女座像	鳥取充	松本俊介	紫	同	山尾薫明	同	首	顔
雨	△小出卓二	ガート裏	伊藤静尾	花	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
立てる蕃女	兒玉幸雄	植輪土偶群	伊藤静尾	河邊	鳥取充	松本俊介	紫	同	山尾薫明	同	首	顔
月夜	同	大陸(黄色い瓦)	伊藤静尾	鹽屋風景	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
部屋の一隅	田中太郎	大陸(城外)	伊藤静尾	勤く女三題(機織り)	鳥取充	松本俊介	紫	同	山尾薫明	同	首	顔
魁民(聖戦三聯作ノ内右)	同	琉球圖	伊藤静尾	同(糸紡ぎ)	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
難行(同左)	同	朝の海	伊藤静尾	同(調理)	鳥取充	松本俊介	紫	同	山尾薫明	同	首	顔
彫刻家	同	大城 皓也	伊藤静尾	海と紫陽花	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
市	同	藤井 義晴	伊藤静尾	庭の子供	鳥取充	松本俊介	紫	同	山尾薫明	同	首	顔
畫	同	平川 要	伊藤静尾	椅子	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
店	同	奥日光の溪流	伊藤静尾	山羊と少女	鳥取充	松本俊介	紫	同	山尾薫明	同	首	顔
櫛の森	同	群峯雪	伊藤静尾	奈良の六月	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
蟹と蛤	同	静物	伊藤静尾	拓榴	鳥取充	松本俊介	紫	同	山尾薫明	同	首	顔
岩蔭	同	牡丹	伊藤静尾	桃	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
武人静養	同	桃のなる溪流	伊藤静尾	引揚げられた	鳥取充	松本俊介	紫	同	山尾薫明	同	首	顔
長田風景	同	水野 勝美	伊藤静尾	△古家 新	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
コンボジション	同	浅井 康男	伊藤静尾	岩つばめ	鳥取充	松本俊介	紫	同	山尾薫明	同	首	顔
犬(ホルゾイ)	同	朝(冬)	伊藤静尾	○樺井 禮一	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
母犬	同	夕(夏)	伊藤静尾	○國枝 金三	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
牛と人	同	畫(春)	伊藤静尾	同	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
海洋を制す	同	岩つばめ	伊藤静尾	同	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
蟲の音をきく	同	抗日の末路	伊藤静尾	同	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
農具の雨	同	産業戦士	伊藤静尾	同	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔
薄氷	同	ミサの顔	伊藤静尾	同	鳥取充	松本俊介	紫	同	尾澤辰夫	同	首	顔

街の掃除夫	氷屋	繪畫	午後の花晶	吉林省	哈爾濱	海邊遊戯	アトリエの一隅	ひるね	室内	窓際	二人の女性	白樺の林	母と子	高原	二人の女	ペーカリ	ツリ堀	犬は戯れる	静物	歴史なき花	あかるい夜	干場	ひととき	姑娘の部屋	弓	少女達	綠蔭	花と女	夏日	六月	山村	鹽屋風景	竹	海邊の庭	蟹	ヴェラング				
花と少女 肖像	花ある日一 二	新緑の頃 神苑風景	常田 健	常田 健	北川 實	山田 等	常田 健	宮城三喜子 坂本 益夫	赤松 俊子 ○岡田 謙三	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同				
西阪 修	神保 俊子	中野安治郎 中野 泰之	友田 利夫	友田 利夫	杉浦 三郎	中野 泰之	友田 利夫	今井 龍人	櫻井 三郎	長田 重男	和田 三郎	藤岡 弾一	御供 長夫	大野 宏	辻村 富藏	伊川 寛	△樵猪猪知雄	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同				
斜陽	自轉車	教會の朝	作品R	黄昏の上海	秋の頁	舞踊	相對	作品	ワルツの馬	検校	作品A・B	作品	擊攘	泥濘	歌手	槍と兜山	池中征馬	作品	僕の實驗室	渡邊の石の詩	蹄	作品1	同2	同3	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同			
△R-80.8 O.V-80.8	加藤 尙義	水澤 正一	今村 春吉	西原 照子	峠岸 義一	原田 直康	二宮榮一郎	鈴木 進平	藤田金の助	山口 長男	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同		
廣幡 憲	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
立秋	煙草と雄	露僧	卷(チマタ)	風景	室内	中野うめよ	飯島 貞子	中野うめよ	竹内 健	秋元 達三	玉井 安武	横山 義雄	松見 秀子	清水 ぶく	仲村 一男	野々口 重	角野 毅	森田 盛祿	内海 九郎	藤本かをり	濱野 長三	川有智良三	西山 閣二	鈴木 正郎	遠山 陽子	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
岡本 耕介	旭 亮弘	遠藤 了敬	山中 菊代	加賀美幸直	鶴田 宏	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
米倉 允	里見 常夫	澤田 哲郎	原 覺	南出 嘉章	△田邊三重松	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

美術展覽會（九月）

室内 残雪 川よつり 高原にて 崖の風景 勿来の海 支那の市場 室内婦人 八ヶ嶽遠望 つくろひ 興亞の糧 園内風景 三瀬（羽後） 初秋 城外 町へ 庭 花 ひるね 瀧と女 沼 花屋 碼頭の警戒兵 二つのホルン アントラクト 村市場 初夏 宵待草 浅春 雲梯 花と少女 夏と海濱 麦秋 庚申の猿 運ぶ人 五月の頃 庭 子等は戦ふ	近藤 歌子 森 由太郎 江崎鹿之助 米川 勝衛 丸樹長三郎 高井 貞二 佐藤眞紗子 瀬尾 暹 市野長之介 佐野 磯喜 鈴木 幸雄 高山 道雄 青山 勝 柳田孝次郎 小杉 勇一 八重垣逸郎 西村 功 津田 周平 同 今井 晃 上野 山充 三芳 悌吉 田中 忠雄 同 浅田 欣三 仲野 俊正 加藤 敏子 同 居相 常夫 早川 貞誠 我部 政達 △伊庭傳治郎 田邊榮次郎 △松井 正 上野與一郎 岡田 芳三 棟方 寅雄	紅葉するつた 支那曲藝 海邊にて 砂上 冬枯の瀧 夏と海邊 志摩風景 長崎風景 山里 水害のあつた山 路傍 土（尾張瀬戸） 小鳥 草原 大地 ゆあみ パラソル 二人 テラス 温泉 歸途 婦人像 朝霞 中庭 建設 子供 フエリーボート イギリスの焦躁 越境者 海濱 裸婦 舞踊家日 屋上の小鳥屋 大同の家族 外濱風景 小憩 風景 バラ園	堀澤 好一 小田島 義 敦野 正雄 同 君塚 三郎 中野 亨 細谷 重雄 木寺 敏 原 正治郎 細見 治逸 青山 龍水 百足 遠六 棒方アサエ 吉田 稻彦 ○北川 民次 同 中村三樹男 田村キミコ 大塚 直樹 船橋 治彦 濱田 正二 徳永 秀夫 吉田 一雄 同 尾崎悌之助 今田 勳 寺田 竹雄 伊藤 七郎 △藤川 榮子 同 土岐 國彦 伊藤市太郎 定方 希一 中野 雅晴 内山 泰一 二宮 二郎	繁る露路 慰問の少女 野球見物 白衣勇士招待會 夏と鶴沼風景 カラヂユームの ある室 襪野のめらほど 聖堂 女 関畫 手術 遺族 植物園の金魚 店頭 湖畔 夏苑の少女 札幌郊外 人形 遊覽船 盛夏 静か 海邊の墓原 あぢさる 夏の漁村 崖と路 壁の前 池畔投影 華果園の女 紀元前の朝 くろはへの海 朝まゐり 深流 踊子 土探り場 △園部 邦香 新樹 草紅葉	河合 敏雄 寶田 健一 財 保 東本 春水 進藤 清 藤江 しづ 濱田 英一 萩野 康兒 ○田村孝之介 古川 弘 石川 新一 三保 義一 井上 安男 藤田 薫 早川 守 △早川 國彦 同 同 小堀 進 市原 義夫 前林 章司 山本不二夫 石野 隆 二階堂晋子 桂 龍雄 福原 俊二 松浦嘉太郎 藤原 四郎 葛西 康 谷 益雄 興志美登野 伊勢田良作 出口 久一 同 山本 秀臣 △園部 邦香 藤田 隆世 櫻木 七次	夏の間 都會風景 二人 時 取入れ終りて そてつ 船ヲ曳ク 岳陽風景 夕焼け 大東亞博風景 野 綠庭 朝顔と子供 庭 繪を描く子供 花と果實 黒の着物 假縫 畫室壁面 那都の海邊 器を圍みて 漁村の女達 牧師の家 野良 嬉戲 戀ふ 黎明 岩蔭 卓上 姉と弟 雞小屋 征旅 鳥 店頭 巖壁 満月 二人 バン馬車のある 風景	安田 憲一 榎野 松惠 下高原龍巳 眞隅 太雄 酒見 敏雄 小西 光雄 近藤長三郎 山内 靖巳 宮川 仁 木村 二郎 △清水 刀根 同 周 襄吉 河口 正勝 松原 美佐 上島 悦三 有吉 立行 渡邊 澄子 多木 透哉 永丘 智行 安波 新吉 小島 詰治 三澤喜之助 山田 順治 同 船越かつ美 長谷 美道 飯田 清毅 同 増田 英一 下瀬 貞和 出口 實 寺田 榮枝 小川 末吉 早川 貞明 川原 隆夫 橋本 勝	樹の影 アトリエ 畫室の隅 室内 齋田 喬 岩下 資治 小谷 良徳 西田 静子 工場 小さき埋葬 阿部 合成 渡邊 幸恵 内藤 秀因 合
--	--	--	---	--	--	--	--	---

「小松義雄といふ人は近藤浩一路の紹介文によると、慶應の佛文科出身後渡佛して繪の勉強を始め、巴里ではサロンドートンヌやアンデパンダン等にも出品したさうだが、とにかく氏が八年間滞佛中の作品を掲げて、日本での初めての個展による発表なのである。

作品點數は全體で九十點ばかりだが、これが初期滞歐作十八點。第一期九點、第二期二十八點、第三期三十二點といふやうに、年代は明示されてゐないが、大體八年間に於ける氏の發展課程を窺ふことが出来る。……（江川和彦、みづゑ。四一八）

九夏會第二回展（洋）
 九月八日—十二日 銀座・青樹社
 春陽會の會友を以て組織する同人展で、陳列數三十七點。加山四郎の「芙蓉」、中谷泰の「綠蔭」、吉田達磨の「蓮の花」、其他津田正周、小栗哲郎、前田藤四郎等の諸作があつた。

鮮展特選作家展（綜合）
 九月八日—十五日 京城・利信ギヤラリー

津田青楓日本畫展
 九月五日—十日 大阪・松坂屋

舟木章沖繩風景と近作油繪展
 九月五日—十日 大阪・三越

西村青歸近作日本畫展
 九月六日—十一日 大阪・阪急百貨店

清水鍊徳作品展（洋）
 九月七日—九日 銀座・資生堂

滞佛作及び近作を併せて油繪十五點を發表した。

橋徹州南畫展
 九月七日—十二日 名古屋・松坂屋

小松義雄抽象繪畫展（洋）
 九月七日—十三日 銀座・三越

伊藤徳齋第二回個展(洋)

九月九日—十一日 銀座・紀伊國屋

小出三郎油繪個展

九月九日—十三日 大阪・美術新論社畫廊

瀬戸新作陶藝展

九月九日—十四日 京城・三越

長井雲坪遺作展(日)

九月十日—二十六日 恩賜京都博物館

明朗美術第六回展(日)

九月十日—二十九日 東京府美術館

明朗美術聯盟は落合朗風遊いて幾多の曲折を経たが、今回狩野晃行を先導として公募による第六回展を開いた。應募數八十六點、入選二十二點で、合計三十六點を陳列。狩野晃行の六曲半双「金鶏銀鶴」及び二曲半双の「日本武尊」は共に力作で好調を示した。木和村創爾郎の「鳴門の渦浪」は些か不振、其他鹽田好乃の「東北の人」、渡邊日向の「目黒の家」、山下昌風の「花嫁御寮」等が夫々特色を示し、松本晃養、小野竹牛、島田春水の出品も注意された。

新盟友 小野竹牛、新盟友 島田春水、吉田錦穂、松本晃養、東條平八郎

授賞 調花賞 渡邊日向、研究賞 山下昌風、小野竹牛

小川原脩第二回個展(洋)

九月十一日—十三日 銀座・資生堂

美術文化協會の會員で、超現實主義的な作品を發表した。

東北北海道工藝展

九月十一日—十七日 酒田市・琢成尋常高等小學校

日本畫新作展

九月十二日—十四日 丸之内・日清生命ビル

長谷秀雄「きりつば彫刻」個人展

永樂俱樂部

九月十二日—十四日 銀座・紀伊國屋

七曜會新作展(日)

九月十二日—十四日 名古屋・十一屋

大戦ボスター展 九月十二日—十六日 上野・松坂屋

ア・サフリードラング個展(洋) 九月十二日—十七日 大阪・大丸

妹背平三おもちゃ繪展(日) 九月十二日—十七日 大阪・阪急百貨店

日本畫八家展 九月十二日—十七日 大阪・松坂屋

和田三造藝術版畫展

九月十三日—十七日 日本橋・高島屋

林文塘版畫京洛所どころ展觀

九月十三日—二十二日 京都・芸艸堂

佐藤長生第二回作品發表展(洋)

九月十四日—十六日 銀座・資生堂

中谷泰、高木勇次二人展

九月十四日—十八日 銀座・三味堂

春陽會の新人として、夫々個性的な作風を示す兩名が近作の油繪小品九點づつ、を出品した。

近畿聯合工藝展

九月十四日—十九日 神戸市・淡川勸業館

出品の區域は京都、大阪、兵庫、和歌山、滋賀、奈良の二府四縣で他に十二ヶ所の指導機關よりの出品があつた。出品物は第一都輸出向工藝品、第二都代用材利用工藝品に分け、一部、二部合計出品數一千百三十五點、その中入選は一千八百點であつた。

京都作家新作日本畫工藝展

九月十五日—十六日 丸之内・日清生命ビル永樂俱樂部

縁真會第一回洋畫展 九月十五日—十七日 銀座・紀伊國屋

島雄健滿蒙支寫生展(洋) 九月十五日—十七日 神戸・畫廊

滿洲、蒙古、支那各地のスケッチを陳列した。

宇野三吾陶器展 九月十五日—十九日 大阪・美術新論社畫廊

東京美術學校圖案部展示會 九月十五日—十九日 銀座・三越

名古屋聖戰美術展 九月十五日—二十四日 名古屋市公會堂

正宗得三郎新作洋畫鑑賞會 九月十五日—二十四日 岡山市・金剛莊

第十二號の「花梨」をはじめ油繪二十二點を陳列した。

北海道美術第十五回展(綜合) 九月十五日—三十日 札幌市・機械館

第六回北信輸出工藝展 九月十六日—二十日 金澤・宮市大丸

主催北信工藝協會。後援商工省、長野、新潟、富山、福井、石川縣。出品總數は五百四十七點、別に指導試驗機關の參考品を陳列した。尙審査には商工省工藝指導所技師寺坂毅をはじめ、當該各縣指導官二十名が當り、輸出工藝賞、代用品賞計二十四名、褒狀計三十二名を決定した。

中村徳次郎洋畫展 九月十六日—二十三日 大阪・阪急百貨店

大阪市學童圖畫第三回展 九月十六日—二十六日 大阪市立美術館

鎌田登樞猛虎百態新作展(日) 九月十七日—二十二日 大阪・阪急百貨店

中國四國九縣聯合第六回工藝展 九月十七日—二十三日 松山市・縣公會堂

乾坤社第一回展(日) 九月十七日—二十六日 大阪市立美術館

矢野橋村を主宰として結成された南畫團體の公募第一回展で、應募作品百十二點の中より三十三點を選入とし、同人の作を併せて展覧した。

「同社が意圖するものとはや、距離を感ずる如き作品も二三見受けられるが、その多くが持つ眞摯な態度と大作主義による野心的な若々しさはこのグループに對する明日の期待を大きくし、第一回展としては所期以上の成績を上げたといふべきだらう。

主宰者橋村氏は「山紫水明」「乳」の二作を出品、ともに乾坤社のスタートにふさはしい逸作、殊に前者の示す高い精神の迸えは氏の近業の中でも特筆すべきものであらう、鐵山氏の「仙窟」は畫面を構成する多くの要素が、や、緊密な調和を缺いてゐるかに思はれるが従來の畫境からともかく一つの新しい動きをみせてをり、小松巖々人氏は「落葉の靈隱寺」に相變らず獨特の線をもつてユニークな効果を追求してゐる。たゞ畫面はもつと整理され省略されていゝのではないが、同氏の「海魚」は氏としては、比較的大人しく纏つたもの。

その他八百谷大樹氏の「魚陣」をはじめ受賞作品の清水石溪氏の「朝雲」河口樂土氏の「赤目懸泉」「大塔風帆」、直原放青氏の「黎明」などそれ／＼いろいろ／＼な意味で注目すべきもの（大毎九月十日）

大輪畫院第二回展（日）

九月十七日—二十七日 上野・日本美術協會

小林彦三郎を主宰とする同會の最初の公募展で、作品二十七點を陳列した。小林は桐の花を描いた六曲一雙の「彌榮」を出陳、其他樋口英雄、佐々木順、尾花保、廣井陵雲、大野晴司等の諸作が挙げられるが、此の會の色彩感覺には概して通俗的な傾きが見られる。

富田溪仙遺作小品及素描展（日）

九月十八日—二十日 銀座・資生堂

美術思潮社主催

岸浪百艸居近作畫展（日）

九月十九日—二十二日 日本橋・三越

花鳥、靜物を主とした横物十二點及び蛙を描いた「球戯圖卷」を陳列した。

石川欽一郎水彩畫新作展觀

九月十九日—二十二日 日本橋・三越

「富士拂雲」をはじめ水彩の風景十九點及び絹本掛軸六點を出品した。

鈴木旭齋花籠展

九月十九日—二十二日 日本橋・三越

藤田嗣治近作日本畫展

九月十九日—二十三日 名古屋・丸善

福田肩仙個展（日）

九月十九日—二十四日 大阪・松坂屋

荻谷巖油繪展

九月十九日—二十四日 大阪・三越

北斗會第一回新作日本畫展

九月十九日—二十四日 大阪・大丸

大丸主催。板倉星光、池田遙邨、生田花朝、其他の會員の作を陳列した。

林文塘日本畫展

九月十九日—二十四日 大阪・松坂屋

柏舟社小品展（日）

九月十九日—二十五日 京都・丸物

林倭衛新作油繪展

九月二十日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊

近作の油繪三十餘點、大部分房州の海濱風景を描いて、その構圖、色感には卓越した技巧的素養が窺はれ、頗る見應へがあつた。「鶴原風景」をはじめ「漁村遠望」「六月の頃」「山房牛耳洞」等。

山口長男近作展（洋）

九月二十日—二十四日 銀座・青樹社

二科會第九室の作家で、抽象的な色彩構成を行つたもの。陳列數油繪十五點。

朝倉彫塑藝第十二回彫塑展

九月二十日—三十日 東京府美術館

朝倉藝恆例の作品展で、陳列數百三十九點、朝倉文夫は「齋藤子肖像」「双葉山關」を出品した。

都筑眞琴第二回個展（日）
九月二十一日—二十四日 日本橋・高島屋

近作二十餘點を陳列。

岡田、堀、内田、岡田作品展

九月二十一日—二十四日 銀座・資生堂

岡田行一、堀忠義の油繪、内田富子の人形、岡田陽蘭の瓶華を陳列。

松田修坪南支景觀展

九月二十二日—二十三日 新橋・藏前工業會館

第十三回大阪學生美術展

九月二十二日—二十四日 大阪・朝日會館

長谷川自由日本畫展

九月二十二日—二十四日 福岡市・縣公會堂

野田半三野尻風景展

九月二十三日—二十四日 神田・基督教青年會館

清水六兵衛、清水正太郎作陶展

九月二十三日—二十八日 名古屋・松坂屋

第五回繪と帶の會

九月二十三日—二十八日 日本橋・三越

法隆寺上宮王院本尊大厨子建立奉贊美術展（綜合）

九月二十三日—二十八日 日本橋・三越

山口玲瀧新作畫展（日）

九月二十四日—二十五日 名古屋・柳橋慶心堂

開發芳光個展（彫）

九月二十四日—二十六日 銀座・鳩居堂

河村喜太郎新作陶磁展

九月二十四日—二十九日 大阪・高島屋

花瓶、水指、抹茶筥等計百餘點を陳列した。

坂井範一第二回作品展（洋）
九月二十五日—二十七日 數寄屋橋・日動畫廊

新制作派の作家で、「海邊風景」「船」等に構成的な勉強を見せたが、感覺の粗笨な點が惜しまれる。

神原浩洋畫個展

九月二十五日—二十九日 大阪・美術新論社畫廊

美術新論社畫廊主催

宮崎井南居士催東西大家新作畫展(日)
九月二十六日—二十九日 福岡市・玉屋

現代水墨畫展

九月二十六日—三十日 銀座・資生堂
日佛畫堂佐藤次郎主催。

名取明徳油繪個展

九月二十六日—三十日 日本橋・高島屋

幸松春浦繪畫展(日)

九月二十六日—三十日 大阪・三越

黒門會第一回展(洋)

九月二十六日—三十日 銀座・青樹社

有馬生馬に恩顧を受けた人々が組織した會で、有馬を中心に年一回展覽會を催すことになった。有馬は「青葡萄の肖像」を出品し、會員の林俊衛、碓伊之助、小山敬三等九名が小品を陳列した。

新制作派會員小品展(洋)

九月二十六日—十月一日 大阪・大丸

大丸美術部主催、油繪十五點、彫刻六點陳列。

村山小呂第一回個展

九月二十七日—二十九日 銀座・紀伊國屋

荻野康兒水彩畫個展(洋)

九月二十七日—二十九日 京城・三越

菊地雲章繪畫展(日)

九月二十七日—二十九日 廣島市・福屋

齋藤長三個人展(洋)

九月二十八日—三十日 數寄屋橋・日動畫廊
作者は獨立展の會友で油繪二十五點を出品。

「畫面の清純をはかり夢幻的な内容を持たせんとしたもので窓、机、等夜がからし出す雰囲気は相當に表現せられ。雪の鳥海山、川、海濱」が示す詩的な情趣等、かなり甘いものであるが異色ある存在である。(東朝)

早稲田大學廣告研究会主催國際文化ボスター展

九月二十九日—十月三日 銀座・三越

燕子小野賢一郎畫展(日)

九月三十日—十月二日 銀座・鳩居堂

十月

にしき木美術第五回展

十月一日—二日 大禮記念京都美術館

朱葉會第三回小品展(洋)

十月一日—三日 數寄屋橋・日動畫廊

大久保百合子、秋元松子、鳥あふひ等を同人とする會「眞ましく小ぢんまりした會だが、三回目といふ年輪が感じられぬ、素直に觀、描く、といふ事は必要だが單なる寫生であつてはなるまい、殊にかうした小品には女性としての獨特な感覺が盛られて欲しい、一般に色彩に就いては神經を働かせてゐるやうだが造形的要素が缺けてゐる。(Z・都)

互陽會第二回展(洋)

十月一日—四日 銀座・資生堂

春陽會の受賞級の新人が組織する同人展、八名が二三點づゝ出品した。

「まだ自分のものを持ちきれずに摸索してゐる所も見えるが若しい情熱に何よりも好感が持てる、揃つて厚塗の効果をねらつてゐるが、これも摸索的な手法と見るべきであらう……高木勇次は素直だが畫面が平板に流れ、中谷泰「アクロバット」は量感に缺け、二見利節は色彩が混濁してきたやうだが、いづれも今後に期待する、この他伊川藤治、土屋實、藤野龍、柴田恕夫、角南松生等がある。(Z・都)

伊太利學畫作品展

十月一日—五日 銀座・三越

全國聯合小學校教員會主催、日伊學會後援。
二階堂顯藏洋畫展
十月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

小島一谿、木下春繪畫展(日)

十月一日—六日 名古屋・松坂屋

清技會茶道具展

十月一日—六日 日本橋・三越

武者の小路主催

十月一日—六日 大阪・三越

東西大家日本畫展

十月一日—六日 大阪・松坂屋

中部日本陶器展

十月一日—七日 上野・松坂屋

愛知、岐阜、三重、石川、滋賀、奈良、京都の一府六縣の陶工の作を陳列した。

代用品工業振興第二回展

十月一日—十日 上野・東京科學博物館

戰時下代用品の發達を計るべく、商工省主催の下に開催された公募展で、出品總數一千七百五十六點、内入選は一千二百六十五點で、他は二十六ヶ所の研究試驗機關から參考品の出品があつた。尙同展は、引き續いて旭川新潟、京都、廣島、熊本の各都市で開催された。

貿易局朝鮮輸出工藝圖案展

十月一日—十五日 京城・南大門

聖戰美術大阪展(綜合)

十月一日—十七日 大阪市立美術館

島岡周助時代裂綜合合作品展

十月二日—五日 名古屋・丸善

石井柏亭近作油繪風景展

十月二日—六日 銀座・青樹社
青樹社主催。油繪十五點、甲斐、信濃、伊豆等各地の

風景を描いて、優れた技巧を見せた。二十號の「桂川」、十號「甲斐の山」、十二號「雲間漏る、光」「蘆の湖」等が主なものであつた。

東京美術學校生徒圖案展

十月二日—七日 大阪・堂ビル内商工相談所
主催大阪市産業部。

魯山人扇形小品畫展(日)

十月三日—五日 銀座・三昧堂

秋香會洋畫展

十月三日—五日 銀座・紀伊國屋
女子美術出身者の同人展。

後素會第二回展(日)

十月三日—八日 京城・和信

鈴木信太郎油繪個展

十月三日—七日 日本橋・高島屋

桃、ざくろ等の靜物、海邊風景、奈良公園の寫生等、油繪三十餘點を陳列した。様式化された構圖と甘美な色調を以て獨自の裝飾的な効果を收めてゐる。

棟方志功版畫展

十月三日—十一月十二日 駒場・日本民藝館

日本醫科大學第九回繪畫部展

十月四日—七日 神田・東京堂

乾坤社第一回展(日)

十月四日—八日 上野・松坂屋

同會の東京進出展で、三十九點を陳列した。(本欄七七頁参照)

淺井不見第二回個展

十月五日—十五日 名古屋・後藤版畫店

芬會第一回展(洋)

十月六日—八日 銀座・紀伊國屋

島田忠夫日本畫展

十月七日—九日 銀座・鳩居堂

小磯良平近作素描淡彩展(洋)

十月七日—十日 神戸・畫廊

青木大兼日本畫個展

十月七日—十一日 日本橋・三越

近作十數點を陳列した。

中西北嶺第二回個展(日)

十月七日—十一日 日本橋・白木屋

菅能由爲子第一回個展(洋)

十月七日—十一日 銀座・青樹社

新興美術院同人小品展(日)

十月七日—十一日 銀座・三昧堂

俳誌「陸月社」主催。

日本畫逸品展

十月七日—十二日 大阪・松坂屋

會宮一念淡彩畫展

十月七日—十二日 大阪・松坂屋

澤田宗山作陶展

十月七日—十二日 京城・三越

綠卷會洋畫小品展

十月七日—十二日 銀座・三越

讚岐工會第一回工藝品展

十月七日—十三日 大阪・三越

高松市の漆藝團體「工會」の作品展で、磯井如真をはじめ會員二十餘名の作品を陳列した。

鳩交會第四回展(洋)

十月七日—十三日 新宿・月光莊

大阪市立美術館第一回制作發表展

十月七日—十五日 大阪市立美術館

日本美術協會第百九回展(日)

十月七日—二十四日 上野・日本美術協會

協會展第百九回は日本畫を公募の上陳列した。搬入總數二百四十四點(二百二十三名)入選六十九點(六十八

名)、無鑑査の出品は三十三點(二十二名)、合計百二點を陳列した。尙参考品として、總裁高松宮御下品をはじめ帝室博物館、東京美術學校、其他諸名家の秘藏にかかる北畫の名蹟を陳列した。

授賞(銀賞)「黑部峽」稻川光風、「ふみ月ごろ」椎名櫻山、「銅貨」洛北の朝「石川美峰」、「威震八荒」南部春邦、「初夏清趣」西丸小園、「精舍機織」森田菁華、「鳶」大柴丹溪、「雄威」樋田五峰、「鯉」加藤香瀾、「褒狀」十五名

石川英鳳鑿第三回試作展(日)

十月八日—十一日 名古屋・松坂屋

石川英鳳の蓬萊畫塾の試作展。

人形すがた會第四回展(日)

十月八日—十三日 日本橋・三越

慶應義塾パレットクラブ展(洋)

十月九日—十日 銀座・紀伊國屋

青龍社第十一回展(日)

十月九日—二十日 大阪・阪急百貨店

安藤邦齋南洋畫展

十月十日—十二日 名古屋・十一屋

荒谷芳景作陶展

十月十日—十三日 京城・三越

湯川松堂繪畫展(日)

十月十日—十三日 大阪・三越

田邊至近作油繪展

十月十日—十四日 大阪・青樹社

三十號の「李花」「臥裸婦」をはじめ油繪二十點を陳列した。

恩地孝四郎支那風景畫展(洋)

十月十日—十五日 新宿・伊勢丹

みのや製京漆器展

十月十日—十五日 大阪・三越

故堀田半古遺作展觀(日)

十月十一日—十二日 芝・東京美術俱樂部

梶田半古の二十三回忌を迎へ、生前其の恩顧を受けた百和堂澤達三郎が諸家蒐蔵の遺作五十三點を集めて展覧した。三尺巾の「鶴越」等が比較的大きなもので、多くは尺五絹本の類であつた。

片野元彦服飾工藝展

十月十一日—十四日 名古屋・丸善

現代大家洋畫展

十月十一日—十五日 大阪・三角堂

京都市主催第三回圖案展

十月十一日—十五日 大禮記念京都美術館

貿易局工藝品輸出振興第一回展

十月十一日—十六日 東京府商工獎勵館

農商務省時代のいはゆる農展より昨年度即ち本年二月開催の展覧會まで二十五回の歴史を重ねた商工展と、第六回まで續いた輸出工藝展とは、時世の必要から趣旨を一つにして合併することとなり、商工省では別項の如く規定の改廢を行つて新に貿易局工藝品輸出振興展を創設その第一回を開いた。出品物總搬入数は四千五十一點、内陳列總數千六百四十一點、審査の結果授賞は左の如く合計百六十四點が選定發表された。

陶磁器、硝子 大匠賞一、一等賞一、二等賞一、三等賞一、褒狀一四

漆 器 一等賞一、二等賞一、三等賞一、褒狀一四

金屬製品 一等賞一、二等賞一、褒狀一八

染織製品 二等賞一、三等賞二、褒狀一八

木竹製品 二等賞一、三等賞一、褒狀三六

綜合品 二等賞一、三等賞三、褒狀一七

商工大臣賞、一等賞「七寶赤地桃模樸寶石宮」(陶)權田廣助、一等賞「盛器」(漆)大關華望、「花瓶」(金)寺田龍雄

美術展覧會 (十月)

二等賞「筐篋漆食器大揃」(陶) 名古屋製陶株式會社、「アルマイト果實鉢」(漆) 理化學研究所静岡工場、「住江カーベット」(染) 住江織物株式會社、「組小箱」(木) 田畑久作、「裝身具箱」(絲) 石川縣輸出工藝振興會

三等賞「八角形色硝子切子盛鉢」(陶) 中島祥晴、「草花繪變り果物皿」(陶) 森一正、「鉢」(漆) 紅房、「水差」(金) 渡邊茂男、「銀絲入光染ベットのフオードコート」(染) 十日町織物工業組合、「金華山織家具布」(染) 鐘紡サーピス株式會社、「果物盛」(木) 山内泉、「置時計」(絲) 宅間丈之助、「バスマット」(絲) 源川正盛、「工藝皮革」(絲) 日本紙工株式會社

尙今回の出品物の中六百五十七點が明年ブラジルに於て開催される陳列會出陳物として選定された。又同展は東京開會後つゞいて大阪、京都、名古屋に於て順次展示された。

日本美術院第二十六回展 (日、彫)

十月十一日—二十八日 大禮記念京都美術館

同院は數年振りに京都市に第二十六回展を開會、院賞主席の新井勝利作「大佛勸進」及び辻晋堂の「婦人像」が京都市の買上げになつた。

維新洋畫第二回展

十月十二日—十五日 銀座・資生堂

小林全鼎書畫展

十月十二日—十六日 大阪・十合

國策宣傳美術展

十月十三日—十四日 神戸・畫廊

兵庫縣商業美術聯盟主催

武者小路實篤近作展

十月十三日—十五日 吉祥寺・ナナン

滋賀縣輸出工產品見本展示會

十月十三日—十六日 大阪府立實業會館

田中繁吉個展 (洋)

十月十三日—十七日 小倉・井筒屋

三木朋太郎洋畫個展

十月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

前波松柏堂第一回日本畫表裝個人展

十月十三日—十七日 銀座・三味堂

大村廣陽作日本畫展

十月十三日—十八日 大阪・阪急百貨店

朝日洋畫會第二回作品展

十月十三日—十八日 大阪・朝日會館

京阪地方の素人畫家の會。大阪朝日新聞社會事業團の主催で、同人展を開催。

水田硯山個展 (日)

十月十三日—十九日 大阪・松坂屋

高須芝山南畫個展

十月十三日—十九日 新宿・伊勢丹

山澤松實作陶展

十月十三日—十九日 大阪・松坂屋

二科第二十六回名古屋展 (洋、彫)

十月十三日—二十二日 名古屋市公會堂

河合卯之助陶器展

十月十四日—十九日 日本橋・三越

京都向日窯河合卯之助の新作陶器二百點を陳列した。

村上華岳作品觀賞會 (日)

十月十五日—十七日 京都東山・靈山畫廊

深澤紅子第二回個展 (洋)

十月十六日—十九日 銀座・資生堂

船田玉樹、丸木位里第一回個展 (日)

十月十六日—二十日 銀座・紀伊國屋

兩人とも抽象的な日本畫を十數點宛陳列した。

玳軌畫廊開設記念第一回展 (洋)

十月十六日—二十日 青山・玳軌畫廊

第三回文部省美術展覽會（綜合）

十月十六日—十一月二十日 東京府美術館

文部省美術展覽會は昭和十二年新機構による第一回を開き、昨年は戦時下物資節約の強化その他の理由から危まれた開催も荒木文相の決断によつて實施され、本年は寸法の制限、無鑑査の人員等すべて昨年の例に倣つて第三回を開いた。前回に比し一般出品数は各部共若干減つて合計二五九點の減少であつたが、陳列数は大差なく一方入場者總数は九千餘名を増し、賣約も亦増加する現象を示した。内容の點では第一部に帝國藝術院會員その他有力な作家の出品少く、又日本美術院同人の出品は皆無であり、第二部では從來のいはゆる在野團體からは、昨年の通り國畫會及び春陽會が加はつたがその他は參加せず、各部を通じて問題作乃至新銳の力作に乏しく、一般に低調不振として世論の殆ど總ては不評であつた。その爲に現行制度に對する批判や文展廢止又は休止の論など再燃する有様であつた。現在新人を無鑑査に推す途がない爲第三部では審査員の申合せで、過去二回以上特選を得た者を事實上無鑑査として取扱ひ、審査からも除外することなどが行はれた。

第一部では帝國藝術院會員の出品が西山翠嶂、川村曼舟、小室翠雲、荒木十畝、松林桂月の五名のみであつたことは叙しかつた。第一室には常の如く新人の代表的な作品が集められ、いはゆる新日本畫の主潮を示した。洋畫の技法に負ふ所の多い色彩塗抹の作風が多く行はれるが、材料の性質はおのづから寫實的追求よりも様式化と裝飾的手法に向はしむるもの如く、清新な色彩、近代的感觉、情趣の表現等に長所を示すが、同時に造形的表現力の薄弱さを共通にもつてゐる。廣川多津の「モデル」は裸體を描いて暢達な技を示したが畫面は稀薄さを免れず、森田沙夷の「孫」は風變りの表現で一種のユーモアがあるに止まる。灰青調で月光の氣分を捉へた加藤榮三の「月夜」は新裝飾畫風で、この種の中で優作に數へら

れた。吉岡堅二の「濤」、福田豊四郎の「蒙疆」、共に新畫風開拓の努力を示すが成功せず、望月春江の「グリヤ」は切紙細工のやうになつた。立石春美の「獵人」、冬木清の「寄る鹿」、松久休光の「鹿苑」等舉ぐべく、山本丘人の「村道」も見落せぬ作であつた。

第二室、山川秀峰の「彼岸」、森白甫の「錦鱗」、徳岡神泉の「菖蒲」、中村大三郎の「三井寺」、川村曼舟の「信濃の秋」など夫々に優れた技術を見せた。「菖蒲」はくすんだ色調ですつきりと美しく、新な研究の成功を収めてゐる。外に中谷光炎の「工房の文答師」、三谷十糸子の「月の暈」など注意をひく。第三室では西山翠嶂の「馬」が寫生に基きつゝ、古典的な格調を保ち、堂々たる力作になつてゐる。兒玉希望の「鶴」も傳統的な手法に従ふ佳作で、山口蓬春の「秋影」はやゝ工藝的であるが、寫生と様式化とが適度に融和されて新鮮な美しさを見せた。石崎光瑠の「晨朝」も好ましい作である。

第四室以下では川崎小虎の「崖」、廣島晃甫の「蓮」等特色を見せ、鈴木朱雀の「星座」、挿繪的な市原壽一の「巨象來」共に面白く大矢道夫の「浴後」はすなをな佳作であつた。第七室に田中咄哉州の「東海天」、小野竹喬の「清輝」、矢野橋村の「山路」、岩田正巳の「木下藤吉郎」など見るべき作があり、上村松篁の「月夜」、西山英雄の「雪嶺」は新畫風のもので夫々長所を示す。荒木十畝の「怒濤」は作者として平凡の出来である。以下利高節二の「種播き」、東山魁夷の「慈光」、江崎孝坪の「兵」、西村卓三の「耕鋤」、宇田荻耶の「寒汀宿雁」、松林桂月の「閑籬」、横尾翠田の「鳥響煙深」など種々の意味で注意をひいた。

第二部では五十號の制限の爲、空疎な大作はなくなつたが同時に熱の籠つた仕事が見られず、又「構圖」もなくなつた観がある。裸體畫が減つて時局的取材が多く現れたことも注意された。第一室には新進の比較的佳作を多く集めた。石川滋彦の「迷彩する商船」、伊藤悌三の

「老軍曹」、南政善の「赤いちよつき」、井手坊也の「丘の子供達」、山下大五郎の「おもて」、二見利節の「横たはる女」、久本弘一の「ぢやんぎる踊」、村山巖の「阿蘇の夏」などである。「横たはる女」は色調と手法に工藝的な味を見せて異色がある。須田魁太の「讀書する男」は特異な感覺に成るがとげ／＼しく畫面は落つかない。

第二室の水彩版畫等の中では南薫造の「水邊彩屋」(水彩)が美しい色彩と確かな技術を以て光つた。尙水彩畫には春日都たすくの「五月の高原」、渡邊文雄の「軍馬徴集」等があり、版畫では織田一磨の「藏王山の精華」が技法的に異色ある面白さを見せ、平塚運一は「平壤大同門」に黑白調の精進を示した。第三室は審査員及び無鑑査のみで、中村研一の巧みな「初秋」、木村莊八の珍しい力作「朝顔」、田邊至の「湖上雲影」、中澤弘光の「野光虫ひかる」、青山義雄の「漁村」など夫々の畫風と技術を示すが特記する程の出来を見せず、第四室では庫田毅の「松」が特色ある感覺と構成を示して注意された。朝井剛右衛門の「良民救助」は事變畫の一つで大作の構圖を無理に縮めて窮窟さうであつた。

第五室では小絲源太郎の「散歩する松本先生」、佐竹徳次郎の「阿武隈の溪」、安宅安五郎の「姉妹」、鈴木千久馬の「瀧」、吉村芳松の「春」などが數へられた。中川一政の「樹の下の子供」は努力をみせてゐるが畫面は成功してゐない。第六室以下では高間惣七の「鳥」は常の如く、大貫松三の「老婆」は青白い色調がわざとらしいが優れた技術を示した。川合修二の「きつ、き」、李仁星の「桃」、窪田照三の「女と易者」、權藤種男の「京城仁王山麓」など注意される。特選された濱田羊の「遊童」、香月泰男の「兎」には賞讃の評も行はれたが、官展として表彰することは疑問とするとの意見は尤もである。

第三部は陳列多く量の上では頗る盛況を呈したが一般に平凡の境を多く出でず、殊に大家先輩作家等の不振が目立つた。時局的取材では將兵を取扱つたもの、大陸開

拓を主題としたもの、労働を寫したものなどいくつか現はれたが、記念碑的なものへの關心は殆ど見られない。

この種の作では單純に労働者などを寫した場合の方が成功し、旺な意氣を示さうとするものは空虚なやみに陥つてゐる。長谷川義起の大作「七生報國の南郷少佐」は人物弱く成功せず、藤野舜正の「大空」、古賀忠雄の「岬の男」などは誇張がすぎた。岡本金一郎の「野戦兵」、吉開伊喜藏の「大陸ニ播ク」、吉田敏示の「鐵夫」などが佳作として推される。

數多い裸女像の中では木下繁の「れいめい」、泉谷喜一郎の「立像」、倉持芳の「裸女」など無難の出來で、建昌大夢の「夢」は表面的技巧のみが目立ち、藤井浩祐の「浴女」は寫生を離れようとして姿態に許し難き缺陷を生じた。堀江越の「試作」は興味ある研究を示すが釣合はぬ頭部をのせて失敗してゐる。

圓鋸勝二の風俗的な群像「初夏」は優れた技術を示してゐるが通俗味が勝つた。宮本重良の「岡本翁像」は肖像の一作。院長同人ではなほ石井鶴三、大内青圃が出品したが石井の「相撲」は小品で物たらぬ。後藤清一の「絲」は愛すべく、安藤照の「胸像」も美しい小品であつた。山崎朝雲は「鹿の小春日」に名人的な技術を示しなほ小品で長谷川榮作の「桂翁」も佳作であつた。浮彫は極めて振はず、わづかに一色五郎が豫てよりの連作の「陸軍「從軍記者」」に独自の手法を以て一つの成功を示したのみである。

第四部は技巧過重の豪華趣味が目立つて減り、概して落つた又日本の滋味をもつ作品が多くなつた。金工では豊田勝秋の「鑄銅花瓶」進境を示し、香取正彦の「鑄錫魚文皿」は推賞すべき佳作。原直樹の「鑄銅花器」、内藤泰治の「鑄銅金魚花挿」など夫々に見るべく、山本自爐の「鑄銅扇壺」、渡邊紫鳳の「鑄銅素文花瓶」共に落つて品位もある。殊に後者の素文の美は魚住幸兵の「輪

花形砂張水指」と共に推してよい。香取秀眞の「鑄銅月に兎釣香爐」は純粹の日本的教養を示す美しい作である。増田三男の「銀鐵からたち文箱」は材料を面白く使つて意匠も優れ、介川芳秀の「彫金甕の圖二曲屏風」はすつきりした快作であつた。中野三郎の「銀水鳥香爐」は愛すべく、森田一靜の「鐵透長方形手箱」なども注意をひいた。總じて金工は最も振つた觀があつた。

陶磁では安原喜明の「炆器盒子」素材の美を生かして見るべく、楠部彌武の「染付三友扇壺」、八田蘇谷の「青華文花瓶」、宮永東山の「群鹿圖陶瓶掛」、宮之原謙の「釉欲渦文壺」、米澤蘇峰の「仙果文磁盆」など夫々の特色を示し、近藤悠三の「柘榴圖陶花瓶」は落つきあり、板谷波山の「彩磁水指」は品位高雅、さすがに及び難さを思はせる佳品であつた。しかし陶磁はもつと振ふべきではないであらうか。

漆器では磯谷阿伎良の「蒔繪文庫「花うつき」」個性を示し感興も豊で優品の中に擧げられる。本間舜華の「夕顔蒔繪手管」は豪華であつて品位を失はず、吉田源十郎の「漆三曲衝立屏風」は寫實的な軍雜を描いて俗に墮さぬ功を認める。山崎覺太郎の「蒔繪屏風「猿」」は圖柄面白く新味ある佳作であつた。これと對蹠的な松川權六の「蒔繪提盤」は技巧の粹を盡した貴族的なものであるがこの種の傳統的技藝はまた文展の尊重すべきものである。堆米楊成の「堆黃龍文飾盆」なども見るべく、その他彫漆、蒔繪、乾漆等に諸家の習練の技が見られた。

ガラス器では各務鐵三の「硝子花瓶」が材料の美を生かし大膽なカットを見せた快作で、竹工では飯塚小玗齋の「竹編風爐先屏風」がよい出來であつた。染では川崎武雄の「和染二曲屏風「飛躍」」がすつきりした圖案で氣のきいた出來であつたが、その他は好みの悪いいたづらに拘爛趣味のものが多かつた。廣川松五郎の「染壁掛「蓬萊圖」」は力作といふに止まる。木村雨山の「友禪染軸「木兎圖」」は美しい出來であるが、繪畫に近づきすぎ

ることは一考を要するであらう。

出品數

出品數	搬入數	入選數	無鑑査	陳列數
第一部	一一九六	一一三	九〇	二一三
第二部	二一五六	二一五	一四六	三六一
第三部	三二四	一一八	八五	二〇三
第四部	五九八	一二六	六二	一八八
合計	四三七四	五八二	三八三	九六五

特選(第一部)「月夜」加藤榮三、「モデル」廣田多津、「孫」森田沙夷(第二部)「迷彩する商船」石川滋彦、「丘の子供達」井手坊也、「遊童」濱田羊、「兎」香月泰男、「秋日」中谷泰、「松」庫田慶、「おもて」山下大五郎、「横たはる女」二見利節、「赤いちよつき」南政善、「讀書する男」須田剋太(第三部)「立像」泉谷喜一郎、「潮音」高橋英吉、「裸女」倉持芳、「みのり」山畑阿利一、「大陸の土」古川順三、「岬の男」古賀忠雄、「或る男」木村珪二、「れいめい」木下繁、「初夏」圓鋸勝二(第四部)「和染二曲屏風「飛躍」」川崎武雄、「炆器盒子」安原喜明、「夕顔蒔繪手管」本間舜華、「彫金甕の圖二曲屏風」介川芳秀、「鑄銅花器」原直樹、「銀鐵からたち文箱」増田三男、「柘榴圖陶花瓶」近藤悠三

政府買上(第一部)「菖蒲」徳岡神泉、「三井寺」中村大三郎(第二部)「平壤大同門(版畫)」平塚運一、「湖上雲影」田邊至、「阿武隈の溪」佐竹徳次郎、「瀧」鈴木千久馬(第三部)「母」横江嘉純、「鎮護」赤堀信平(第四部)「釉欲渦文壺」宮之原謙、「蒔繪屏風「猿」」山崎覺太郎

出品目録

出品目録	會審員	帝國藝術院會員
第一節	富士高原	三宅 星明
モデル	廣田 多津	瀧 壽
村道	山本 丘人	〇望月 春江
野田村鷺田	福田 元子	〇福田豊四郎
		森田 沙夷

鹿苑	松久	休光	土用浪	〇穴山	勝堂	山路	〇矢野	橋村	小懸	廣田	清治	鳥雲煙深	〇横尾	翠田	吉野原流	森	陽水
海女	澤	宏毅	『五月花』句ふ頃	磯田又一郎	花かけ	〇麻田	辨次	熊谷父子	〇磯田	長秋	王道樂土	〇西澤	九浦	みつ車	河瀬	恭一	葵
獵人	立石	春美	獅子	菊田 陸志	木下藤吉郎	〇岩田	正巳	蟲愛づる姫	〇飛田	周山	清秋	〇前田	賢	三原の茶所	森田	秀一	葵
寄る鹿	加藤	榮三	晴嵐朝浮	小堀 安雄	岩陰	〇加藤	美代三	降魔	〇山口	玲燕	銀河	〇會津	勝巳	熱帯魚	竹澤	吟泉	白帆
夏夜	濱倉	清光	祈願	〇八木	嗣春山	街	雪嶺	白雨	〇阿部	能入	龍腹虎振	〇小山	榮達	慰問	八幡	白帆	白帆
實と花	森村	宜永	廣島	〇川崎	小虎	耕作園	草蟲	雪のあした	〇池上	秀歌	威振	〇大村	廣陽	立秋	伊藤	悠紀子	伊藤
植輪	落洞	俊一	運	〇廣島	吳甫	狭霧	蝶の鷗	〇松元	道夫	〇福田	翠光	〇永田	春水	〇赤松	雲嶺	志摩	風景
鈴鹿峠	谷口	英雄	早春の天ヶ嶽	後藤貞之助	星座	〇鈴木	朱雀	〇福田	翠光	大藪	春篋	〇今村	豊信	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
彼岸	〇山川	秀峰	星座	〇鈴木	朱雀	〇上田	萬秋	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
麗春	平間	且陵	林間雪晴	〇奥村	厚一	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
錦鱗	〇森	白市	二人の女	〇渡邊	幾春	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
菖蒲	〇徳岡	神泉	海邊の道	〇秋山	利彦	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
三井寺	審中村	大三郎	とまり木	〇小宮	大宙	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
信濃の秋	會川村	曼舟	發哺の朝	〇野口	謙次郎	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
壇風	審案本	一洋	朝	〇武藤	草	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
秋池	野々内保	太郎	春日の巫女	〇生田	花朝女	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
魚調	〇前田	萩郎	臺灣風景	〇森	月城	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
工房の文答師	中谷	光交	七面鳥と花	〇三河	義太郎	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
葉煙草	〇島山	錦成	降魔の劍	〇太田	天洋	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
鴉	野島	清一	清香	〇石渡	風古	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
牡丹	濱田	觀	巨象來	〇市原	壽一	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
白日	青木	生冲	魚窓	〇榎本	千花俊	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
月の暈	〇三谷	十系子	浴後	〇大矢	道夫	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
漁村麗日	森	正元	洛北の秋	〇中野	草雲	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
初秋の頃	引野	松江	八仙花	〇齋藤	猪三夫	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
鶴	〇兒玉	希望	ゆく春	〇小早川	清	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
春雲	〇竹原	明風	木樞	〇小松	華影	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
清秋	審伊東	深水	裁ちもの	〇田中	久義	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
明鏡止水	會小室	翠雲	仔牛	〇勝田	蕪琴	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
晨朝	審石崎	光瑤	海	〇山田	申吾	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
横川の俗都	〇吉村	忠夫	神詣	〇伊藤	小坡	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
馬	會、審西山	翠峰	東海天	〇田中	剛哉州	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
秋影	審山口	蓬春	さすらひ	〇鄭末	朝	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
松菊猶存	〇白倉	二峰	清輝	〇小野	竹森	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
鏡の前	今尾津	屋子	山上	〇福田	惠一	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
瀧しぶき	齋藤	和秀	怒濤	〇會荒木	十畝	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり
夏の日	不二木	阿古	月夜	〇上村	松篋	〇上田	萬秋	〇鴨下	晃湖	〇細合	秀歌	〇幸松	春浦	〇幸松	春浦	畫	畫さがり

黒い服	小田 忠	新緑(版書)	○前川 千帆	窓	辻 利平	就後の牧場	安田 豊	母子	東坊城光長	高原秋聲(志賀)	加藤 静児
魚ふ海女	伊藤 清永	緑園(版書)	○川西 英	案山子のある風景	小林 邦報	春潮	○池田永一治	日本刀鍛錬園	○五味 清吉	遊童	濱田 羊
人物	伊藤 七郎	平壤大同門(版書)	○平塚 運一	斎	倉員 辰雄	海老網を繕ふ	田原 輝夫	白猫	山崎 隆夫	緑意紅	○清原重以知
海邊	伊藤 七郎	圓波(版書)	○恩地孝四郎	窓際	市川 勉	風景	○富田温一郎	静物	橋田 庫次	暫しの魚ひ	倉垣 辰夫
窓外風景(バス)	仰木ゲルト	月明(版書)	○德力富吉郎	厦門南普陀	審熊岡 美彦	燼邊	高宮 一榮	木かげ	○香山 勝太	大陸の子	松田 文雄
窓外風景(バス)	ルード	新秋(版書)	○琴塚 英一	讀書	青木 達彌	庭	○高野 重七	裁縫	○小川 智	蘇州留園の秋	○大野 隆徳
箱根の湖	黒田 強三	靈蹟守護(版書)	○松本 雅俊	童子	坂田 虎一	諸の母子	○久保保次郎	○大久保作次郎	○阿久田治修	初夏の吾妻連峰	○小野田元興
男鹿風景(水彩)	○三宅 克己	斥候(版書)	○長坂 春雄	初秋	景山 榮次	餘閑	○鳥 松	○鳥 松	○鳥 松	横向きの肖像	○塚本 茂
五月(高原)	五井 開一	水光る(テムベ)	○平澤 大暉	良民救助	柴田 恕夫	鳥	○高野 重七	○高野 重七	○高野 重七	ペリカメノコ	長原 坦
穂高朝晴(水彩)	春日部たすく	夏(水彩)	○相田 直彦	四人	朝井開右衛門	渚の母子	○久保保次郎	○阿久田治修	○阿久田治修	飛鳥の夏	大瀧斗良樹
水邊彩屋	○石川欽一郎	郊外(水彩)	○吉松 眞司	室内	橋詰英一郎	お茶時	○佐藤 一草	○佐藤 一草	○佐藤 一草	女と易者	○窪田 照三
八甲田の夏	○望月 省三	氣比池畔(水彩)	○川越 篤	水族館の魚類	三島 崇成	高原早春	○田邊 穰	○田邊 穰	○田邊 穰	夏の子供	○野口良一
軍馬徴集(水彩)	渡邊 文雄	初秋の庭(水彩)	○泉 松雄	はな	水船 三洋	草上	○松森 義	○松森 義	○松森 義	辻の百人(ハルビンにて)	○伊藤 應九
熱河喇嘛廟(六)	○大崎千代二	初秋の庭(水彩)	○上田 素山	雲中嶽人	鈴木榮二郎	マンドリンを持	○田中 實一	○田中 實一	○田中 實一	戦艦を洗ふ	○樋口 一郎
城山(水彩)	○赤城 泰舒	「むすめ」の像	○眞山 孝治	静物	吉川 正巳	軍犬	○關口 隆嗣	○關口 隆嗣	○關口 隆嗣	座秋	○松村 昌調
鯉(水彩)	林 義男	初秋	○有馬さとえ	群鶏	久保 守	母子像	○高橋真一郎	○高橋真一郎	○高橋真一郎	冬海	○渡邊 武夫
山村初夏(水彩)	福富 榮	長江遊帆(鎮江)	○中村 研一	散步する松本	○小糸源太郎	松	○石橋 武助	○石橋 武助	○石橋 武助	珠球の墳墓	○大嶺 政寛
室内(版書)	野崎新右衛門	裸體	○長谷川 昇	松樹岩石風景	○鬼頭斐二郎	老妻	○大貫 松三	○大貫 松三	○大貫 松三	金魚屋の徳さん	○野澤 寛
波止場(エツチ)	曾我尾武治	水郷の朝	○齋藤 與里	ハンガリーのプ	ラウス	キモノ少女	○山喜多二郎太	○山喜多二郎太	○山喜多二郎太	少女像	○石本 秀雄
奇礁(エツチ)	高羽 敏	新樹匂ふ(箱根)	○齋藤 與里	湖山暮朝圖	○柚木 久太	湖	○奥瀬 英三	○奥瀬 英三	○奥瀬 英三	孤島小景	○若山 爲三
西陣の織匠(エツチ)	中井平三郎	林泉	○審小林 萬吾	阿武隈の溪	○佐竹徳次郎	種物屋	○藤 彦衛門	○藤 彦衛門	○藤 彦衛門	薔薇	○池田治三郎
漁村(版書)	前田 政雄	湖上雲影	○審木村 莊八	姉妹	○鈴木千久馬	少女	○相馬 其一	○相馬 其一	○相馬 其一	潭	○大橋 孝吉
花二題(秋、冬)	勝平 得之	夜光虫ひかる	○會中澤 弘光	給筆をもつ娘の	○清水 良雄	二月の頃	○大河内信敬	○大河内信敬	○大河内信敬	家族	○木村 義男
藏王山の精華	○織田 一磨	斑鳩譜、上宮太子御版畫卷	○審青山 義雄	樂器を持てる女	○審寺内萬治郎	庭にて	○岩田 義夫	○岩田 義夫	○岩田 義夫	白い帽子	○関口 孝次
池に面せる人	常察 英雄	人(版書)	○池野卯三郎	志摩風景	○吉村 芳松	夏雲	○川合 修二	○川合 修二	○川合 修二	閑庭	○武藤 辰平
古城早春(版書)	橋本 興家	風景	○白瀧義之助	樹の下の子供	○審中川 一政	黒屏	○岩下 三四	○岩下 三四	○岩下 三四	紅い服	○寺門 幸藏
人形(版書)	松根 嘉夫	庭の一隅	○山崎 省三	濱木綿	○山木 道乘	本屋	○笹鹿 彪	○笹鹿 彪	○笹鹿 彪	夜店	○加賀孝一郎
焦土回春(戦蹟巡禮堅忍)	○三部作	公園	○大澤 海藏	杉ノ木ノアル深流上田	○清一	みりの	○田中 繁吉	○田中 繁吉	○田中 繁吉	鎮江所見	○佐々貴義雄
○旭	泰宏	静閑	○森田 元子	街に上にて	○藤澤 俊一	芍薬	○松郎 巽	○松郎 巽	○松郎 巽	室内	○中村 茂

美術展覧會 (十月)

水郷の朝	○北島 浅一	湖邊	○小寺 健吉	ヴァイオリンを持つ男	永田 精二	赤いジレ	山田 新一	眞畫	西田 明史	防火	柴田 佳石
水運と杜若	○森脇 忠	鯉鯉	江崎 寛友	露店市場(上海風景)	松林 義英	洋裁室の一隅	櫻井 悦	朝	工藤 敬三	夕しほ	門傳 正衛
閑日	○緒方 亮平	水邊	山野 正	漁夫と娘	高光 一也	赤い支那服	能見 三次	れいめい	木下 繁	我は海の子	村山 清光
車窓	○北 運藏	蒙古人	高田 武夫	三井 水一	高野 眞美	奇巖(笹川流)	○七田 文雄	立像	泉谷喜一郎	ラグビート	熊谷幸太郎
河鹿島	會中村 不折	群舞	三井 水一	池畔小憩	○桑重儀右衛門	土を撮る	家永默三郎	日々是好日會、密北村	西望	大陸三播ク	吉開伊喜藏
天高	○三上 知治	夜の室内	高野 眞美	鼓ヶ瀧	○油谷 達	雨齋る	園松 登	砂丘	○中島 東洋	母影像	尾崎 一草
K氏の像	○長屋 勇	少年と花	遠山 清	海女	橋本 正躬	海邊	黒田 實	或る噴水の一部	○澤田 晴廣	能委巴	○大西三四郎
海女	山崎 坤象	はなや	徳田 信保	ボナベの團扇	伴 庄兵衛	伐折羅大將	白川 一郎	或る男	木村 珪二	黄土	向 正三郎
紫陽花	○浅井 眞	吉次	篠井 茂雄	花賣り	林 テイコ	窓	山田 正	海鷲	有地 滋迪	若イ男	或る日の鳥村さ
裸婦	○角野判治郎	草上	森川 要	千代紙など	駐川 英雄	佳節書衣	菅 一郎	或る日の兄弟	山田 政義	或る日の鳥村さ	○長谷 秀雄
窓邊	柳瀬 彌生	窓外	松永敏太郎	ダンス練習	勝間田武夫	第三部	七生報國ノ南	三角錐をなす群像	○橋本 高昇	或る日の鳥村さ	○雨田 光平
静物	淵上 敏子	愛撫	名渡山愛順	砂丘	立石 鐵臣	郷少佐	空にかよふ心	龍王	○阿井 瑞岑	砲煙も晴れて	松浦 良
庭前少女圖	○河井 清一	ヤップ離島民	星野 正三	海上	金子 保	○河村 清司	○夏目 貞良	待機	○花里 金央	黒潮	安西 順一
常夏の國パラオ	○片岡 銀藏	七夕の窓	島崎政太郎	草上二童	杉村 惇	○須藤 素弘	○大塚 辰夫	岬の男	○古賀 忠雄	少年胸像	大屋 義昌
京城仁王山麓	○種藤 種男	江南翠路	光安 浩行	ガスタンクのある風景	石原 宏策	食堂二天	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○大島 駒藏	射力威力	射谷 英儀
松原湖	○山下 品藏	百合花	堀田 清治	早に凭る女等	篠崎貞五郎	大吉祥天女	○大内 青圃	或る日の鳥村さ	○古川 順三	スケート	山崎庄次郎
婦人像	和田 清	爛漫	石野 安親	休日	中尾 達	○大内 青圃	○大塚 辰夫	或る日の鳥村さ	○黒田 嘉治	岡本翁像	○宮本 重良
秋日	中谷 泰	ある日の戦友	由里 明	傷兵と笛	赤津 實	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○安達 貫一	開好	○中野 桂樹
緑陰	橋本 三郎	森の主	木戸 史郎	日本刀	櫻井 知足	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○水島 貞一	能樂八島	○牧 俊高
オイラセ溪流	齋藤 廣胖	母子像	○赤松 麟作	天草千潮	○坪井 一男	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○奥山 泰堂	編隊来る	○北村 正信
海峽の姉妹	河原 修平	玉蜀黍と子供	山口 亮一	響るる日	都鳥 英喜	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	長谷川樹藏	光を浴びて	○北村 正信
鐘煙	○橋本八百二	岩	齋藤 勢七	母親と姑娘	廣本季與丸	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	北村 治藏	○加藤 顯清	
花と少女	○河野 通勢	久能山東照宮	齋藤 勢七	立てる女	植原 正	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
友達	三崎 六郎	静物	齋藤 勢七	鐵鋸	○井口 喜夫	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
京城郊外風景	野村 千春	くにかかひ	齋藤 勢七	建築彫刻試作(淨)	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
室内の女	星野 二彦	セロをならす	齋藤 勢七	丹聖の廟	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
土器静物	飯島 一次	大同の子供等	齋藤 勢七	六月	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
浴後	○牧野 司郎	漁野閣日	齋藤 勢七	上野原風景	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
秋立つ	○佐野哲三郎	うどと玉葱	齋藤 勢七	○高橋虎之助	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
村娘	○鈴木 清一	中谷ミユキ	齋藤 勢七	○高橋虎之助	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
早春	○大久保百合子	中谷ミユキ	齋藤 勢七	○高橋虎之助	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
フランス刺繍	○和田 香苗	中谷ミユキ	齋藤 勢七	○高橋虎之助	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
裸婦	○寺松國太郎	中谷ミユキ	齋藤 勢七	○高橋虎之助	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
座像	○小林 眞二	中谷ミユキ	齋藤 勢七	○高橋虎之助	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
兔	○小林 眞二	中谷ミユキ	齋藤 勢七	○高橋虎之助	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
楳先	○小林 眞二	中谷ミユキ	齋藤 勢七	○高橋虎之助	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	
溪谷	○小林 眞二	中谷ミユキ	齋藤 勢七	○高橋虎之助	○岩崎 良平	○須藤 素弘	○須藤 素弘	或る日の鳥村さ	○小室 達	○小室 達	

浴女	會、審藤井	浩祐	カメラ・ファン	山崎	秀雄	總力	浦上	善次	堆黃小箱	富樫	光成	磁製廣口銀鬚文	寺池	旬焯	夏趣奈園時繪飾棚山田		
相撲	審石井	鶴三	裸婦	石渡	星座	無放逸力	橋本	朝秀	炳器盒子	安原	喜明	彩漆瓶莖文盆	佐藤	光甫	綴織掛		
鑲護	審赤城	信平	母と子	長田	平次	立像	岸崎落之助	炳器魚文皿	林	萬壽人	青銅瑞鳥文生	丸谷	瑞堂	螺鈿華文手箱	石田	玉英	
髮	○武井	直也	髪	審長谷川榮作	鳥	青年	○伊藤	鉦次	青銅錫魚文皿	○香取	正彦	青銅蓮花文生	北村	一則	青銅蓮花文器	山本	龍民
桂翁	○關野	聖雲	髪	○伊藤	鉦次	女立像	興亞に起つもの	久原	齋子	光春	彩填菱花文磁盤	伊東	翠壺	青銅蓮花センター二口志保子	河合	秀甫	
聖德太子	○關野	聖雲	髪	○伊藤	鉦次	女立像	興亞に起つもの	久原	齋子	光春	彩填菱花文磁盤	伊東	翠壺	青銅蓮花センター二口志保子	河合	秀甫	
幸	綿引	司郎	髪	○伊藤	鉦次	女立像	興亞に起つもの	久原	齋子	光春	彩填菱花文磁盤	伊東	翠壺	青銅蓮花センター二口志保子	河合	秀甫	
藤田中佐之像	○三國	慶一	空のこゝろ	○上田	直次	女人像	久原	齋子	光春	彩填菱花文磁盤	伊東	翠壺	青銅蓮花センター二口志保子	河合	秀甫		
御軍	○安	一	若き女性	○藤澤	古實	鏡前	福井	三幸	霜田	大次郎	杉本	三郎	春來	女	讀み耽ける男	若き女	
裸女	○國方	林三	立てる女	○山畑	阿利一	春來	杉本	三郎	遠藤	松吉	綿引	弘	龍川	美一	野	秀雄	
破邪顯正	○矩	幸成	試作	星野	直弘	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
仔猫	横田	七郎	希望に燃える若	榑谷	清太郎	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
井上通夫先生像	堀	進二	立てる女	進藤	武松	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
生喜	○後藤	清一	戦ひの前に	○服部	仁郎	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
裸女	倉持	芳	女性	中村	七十	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
小兒の像	○白井	保春	老農	○山根	八春	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
砲彈	丸山	震六郎	潮音	高橋	英吉	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
泉	○中野	五一	腰かけたる女	○松田	尚之	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
菖	太田	良平	初夏	○松田	尚之	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
水くむ少年	○山本	稚彦	荒みたま(習作)	○上條	俊介	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
アザイレン	○河村	龍興	勤勞奉仕	横山	五郎	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
献金	○飯島	台器	思ひ出	○杉本	宗一	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
能姿	横山	正三	空の護り	横山	文夫	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
芳潤	多田	瑞穂	高原に杖をと	○照田	稔	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
庭球	宮本	朝澁	工業戦ニ立ツ	○照田	稔	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
磯女	井戸	義夫	横臥裸婦	○照田	稔	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
想ひ	清水	禮四郎	立像	河内山	實祐	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
沐浴	川島	雄三	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
裸婦	梅田	修	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
汗	○柴田	正重	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
放心	○柴田	正重	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
髪	○柴田	正重	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
鱈投網	○柴田	正重	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
荒鷲の舞	○柴田	正重	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
興亞時代の女性	○柴田	正重	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
に就て	○柴田	正重	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
少女立像	○柴田	正重	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄
五段	○柴田	正重	飛行	○後藤	良	讀み耽ける男	若き女	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄	淵川	美一	野	秀雄

美術展覽會 (十月)

- 銀鏡からたち文箱増田 三男
- 銀製の花文壺 後藤 年産
- 柏文燭台 加藤忠三郎
- 銀製金魚文飾壺 〇四谷 正美
- 青銅及銀花瓶 〇杉田 禾堂
- 「八巻」字 〇河村 鯨山
- 鑄銀瑞鳥置物 審佐々木象堂
- 青瓷香爐 〇梅澤 隆真
- 蔴箱 〇鈴木 則司
- 黒箱花瓶 〇櫻井 霞洞
- 染二曲屏風「ざくろと金魚」 〇小原 覺三
- 鐵製ノックアー 楠田 撫泉
- 染屏風「琵琶湖の春」 八井 孝二
- 双鳥文漆手宮 入山 白翁
- アルマイト白熊 〇高野 三秋
- 蔴箱二曲屏風「森ノ道」 大庭 一見
- 硝子彫刻今昔武 〇高井 白陽
- 器の圖屏風 〇熊谷重太郎
- 蔴箱衛立 梅樹
- モザイク壁面裝飾板谷 織田 慎一
- 革アツブリケ衝 〇森村 西三
- 野草文銀果器 〇山本 壽
- 鑄銅蟹香爐 〇鹿兒島壽藏
- 紙製人形「山彦」 野呂 天潤
- 紙製人形「風」 〇木形御所人形
- 木彫所人形「清淨」 〇審宮之原 謙
- 木刀作人形 〇松原 南海
- 袖袂瀧文壺 〇渡邊 顯子
- 彫金四季花鳥文 〇彼谷 芳水
- 印籠筒 〇森田 一静
- 黄銅花さし 〇色給連池文庭飾皿北出塔次郎
- 花文漆手宮 〇森田 一静
- 鐵透長方形手箱 〇森田 一静
- 色給連池文庭飾皿北出塔次郎
- 黄銅花器 〇鴨 幸太郎

- 瑞鳥文陶箱 〇松本 松雲
- 玻璃黒耀瓶 〇岩田 藤七
- 抹金畫飾臺「塵」 〇六角 紫水
- 屏山水圖 〇海老彫刻磁花瓶 〇宮川 香山
- 柘榴圖陶花瓶 近藤 悠三
- 龍銀置物 〇山脇 洋二
- 置物「東亞の光り」 〇山室 百世
- 彫漆手箱 〇佐藤 陽雲
- 鑄銅扁壺 〇山本 自燭
- 硝子花瓶 〇各務 鏡三
- 漆給四曲屏風 〇松岡 大和
- 「紫雲閣」 〇渡邊 春男
- 染屏風「水禽」 〇米澤 蘇峰
- 「山湖の圖」 〇北原 千鹿
- 仙果文磁盆 〇北原 千鹿
- 銀及青銅置物 〇北原 千鹿
- 鑄銅月に兎 會、審香取 秀真
- 釣香爐 〇アマリ、ス文時給 佐治 正
- 鑄銅素文花瓶 渡邊 紫鳳
- 輸花形砂張水指 魚住 幸兵
- 黄銅布目地箱 〇福田 三佳
- 鑄銅鯉文水盤 〇二橋 美衛
- 眞鍮蝶文花瓶 〇中谷小太郎
- 魚畫陶花瓶 〇審森川 紫山
- 櫻蘭時給文庫 〇北堂 信春
- 蔴箱屏風「猿」 〇遠藤 虚寂
- 龍銀香爐「長春」 〇三井 義夫
- 綴錦蓮華のある 〇新村 撰吉
- 打敷 〇伊東 陶山
- 四分一象嵌花瓶 〇勝尾青龍洞
- 漆二面小屏風「征」 〇盛原 環珩
- 瑞雲透陶花瓶 〇藤本 長邦
- 斑魚文陶皿 〇藤本 長邦
- 盛原 環珩
- 銀打出し花瓶 〇審松田福六
- 蔴箱提盤
- 銀竹葉文宮 〇鹿島 一谷
- 花文グラビール 〇明道長次郎
- 硝子鉢 〇新金具付小兒用 會清水 龜藏
- 手提 〇小瀧 美治
- 黒味銅水盤 〇山本 安壘
- 青銅み、たちの 〇堆朱 楊成
- 堆朱 楊成
- 鑄銀壺 〇大須賀 喬
- 彫銀櫻子の鉢 〇宮坂 房衛
- 芙蓉文時給文庫 〇大下 雲香
- 手織錦神鳥圖 〇山鹿 清華
- 屏風 〇澤田 宗山
- 磁製花瓶「順風」 〇藍田うめゑ
- 染二曲屏風「人形と陶器」

- 自由美術秋季會員新作品展 (洋)
- 十月十七日—十九日 數寄屋橋・日動畫廊
- 玉置清油繪小品展
- 十月十七日—二十二日 大阪・大丸
- 寧樂美術工藝品展
- 十月十七日—二十二日 大阪・三越
- 羅青會第二回展 (日)
- 十月十七日—二十二日 京都・大丸
- 古屋盛壽洋畫個展
- 十月十七日—二十三日 福岡・松屋
- 溪仙李錢兩大家作品展
- 十月十八日—二十日 日本橋・白木屋
- 神谷飛佐至日本畫個人展
- 十月十八日—二十二日 日本橋・白木屋
- 福田憲一個展 (日)
- 十月十九日—二十二日 日本橋・高島屋
- 歴史畫を専門とする作者が新作二十一點を以て個展を開いた。六曲一雙の「頭八咫鳥(武津之身命)」をはじめ全部人物畫であつた。
- 六雲會第四回洋畫展
- 十月十九日—二十二日 大阪市立美術館
- 女婢會第七回展 (洋)
- 十月十九日—二十三日 銀座・青樹社
- 荒井龍男近作個展 (洋)
- 十月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊
- 鑄銀壺 〇大須賀 喬
- 十月十九日—二十四日 新宿・月光莊
- セクションダール第六回展 (洋)
- 十月十九日—二十五日 大阪市立美術館
- 會員の作品計百二十三點を陳列。
- 太田三郎洋畫展
- 十月二十日—二十四日 名古屋・丸善
- 丸善主催。風景畫を主とする油繪四十點を陳列した。
- 岡本玉水、平田郷陽新作人形展
- 十月二十日—二十五日 日本橋・三越
- 眞野紀太郎近作水彩畫展
- 十月二十日—二十五日 大阪・美交社
- 三橋武顯中支戰跡畫展 (日)
- 十月二十日—二十五日 名古屋・松坂屋
- 昨春陸軍省の囑託として中支の戰跡を訪ねて描いたもの五十餘點を陳列した。
- 聖戰美術展
- 十月二十日—二十八日 京都・大丸
- 四行會第九回展 (洋)
- 十月二十一日—二十三日 銀座・資生堂
- 橋本關聖戰記念畫内示展 (日)
- 十月二十一日—二十四日 日本橋・三越
- 橋本關雪は別項(本欄一七頁)の如く、聖戰記念畫を製作して適當の場所へ献納又は寄贈する計畫を立て、今春來製作に没頭してゐるが、完成したので献納に先ち内覽の意味で展觀した。陳列は「惠日東臨」(六曲一雙、未完成)、「軍馬二題」(六曲一雙)、「戰塵」(六曲一雙、未完成)、「殘照」の五點。「惠日東臨」は完成の上は宮内省に獻上されるもので、左半双に母子の路駄を、右半双に日輪を描く。「軍馬二題」も力作で、共に動物描寫の手腕を示し、品位も高い。その他では難民を描いた「戰塵」が面白い出来であつた。日本畫で事變を扱つた作品の稀なる

中にこの大家の努力は注目すべく、これらの作品は本年の異色ある收穫の中に數へられるであらう。尙十一月京都で開く内示展には未だ執筆中のもの、素描スケッチ等も併せ展覧することとなつた。

八木岡春山日本畫展

十月二十一日—二十五日 大阪・阪急百貨店

批軌畫廊開設記念第二回展(洋)

十月二十一日—二十五日 青山・批軌畫廊

高橋秋華繪畫展(日)

十月二十二日—二十九日 大阪・三越

清原重以知油繪展

十月二十二日—二十九日 大阪・三越

八木博秋季個人展(日)

十月二十三日—二十五日 丸之内・永樂俱樂部

東西諸大家名畫展

十月二十三日—二十五日 名古屋美術俱樂部

主催石黑雅友堂。

小林眞二近作洋畫個展

十月二十四日—二十七日 京城・三越

院展作家三十人展(日)

十月二十四日—二十八日 京城・丁字屋

新畫會新作展(日)

十月二十四日—二十九日 京都・大丸

日本陶藝展

十月二十四日—二十九日 大阪・阪急百貨店

日本陶藝研究会主催。

金澤六曜會展(工)

十月二十四日—二十九日 大阪・大丸

三越家具部室内裝飾展觀

十月二十四日—二十九日 日本橋・三越

一丹會洋畫展

十月二十四日—三十日 銀座・三味堂

美術展覽會(十月)

フアシスト伊太利大展覽會

十月二十四日—十一月五日 名古屋・十一屋

小川幸錢遺作カツバ百戲展(日)

十月二十五日—二十八日 日本橋・高島屋

作者生前に河童を題材として百圖を揮灑刊行したが、高島屋主催でその原畫の一部を展覧した。

吉田白嶺山鳥野禽彫刻展

十月二十五日—二十八日 日本橋・高島屋

「早春」「山幸彦」「翡翠」「快翽」など近作十五點を陳列した。櫻材を多く用ひ、槐材、乾漆の作をも數點見られ、いづれも格調の高い仕事であつた。

白日莊主催現代大家新作畫展

十月二十五日—二十九日 日本橋・三越

東西諸家の新作二十九點を陳列、橋本關雪の「後圓殘秋」、川合玉堂の「時雨」、吉岡堅二の「柿紅葉」、松林桂月の「暮秋」、菊池契月の「義家鳴弦」等があつた。

獨立美術協會秋季展(洋)

十月二十五日—二十九日 銀座・青樹社

會員、會友の作品を陳列した。

「十號以下といふ畫面制限のためか、春の展覧とちがつて會員連中が手なれた佳作を示してゐるのに對し、若干會友の作にはまつたく見るべきものがない。場中注目し得るものは林武の「ダリヤ」、川口軌外の「栢榴」、ラグビーのボールを赤くしたことに疑問はあるが中山嶺の「麗技」ぐらゐのところ、海老原、野口は同じやうにリングを輕い筆で描いてゐるが弱々しく、須田國太郎の「薔薇」は色感暗きに過ぎる(頭)。(東日)

明治大正諸大家遺墨小品展(日)

十月二十五日—二十九日 日本橋・白木屋

新井洞巖南宗畫展

十月二十五日—二十九日 日本橋・高島屋

南畫家新井洞巖の近作三十幀を陳列した。

東西諸大家新作日本畫展

十月二十五日—二十九日 大阪・松坂屋

小磯良平個人展(洋)

十月二十五日—三十一日 大阪・松坂屋

東洋土產品第二回博覽會

十月二十五日—十一月一日 新宿・伊勢丹

福岡聖戰美術展

十月二十五日—十一月三日 福岡・岩田屋

井上良齋作陶展

十月二十六日—三十一日 日本橋・三越

陶器二百點を陳列した。

水野蕪青日本畫展

十月二十六日—三十一日 大阪・阪急百貨店

晨鳥社近作展(日)

十月二十七日—二十九日 京都・大丸

改井德寛油繪展

十月二十七日—二十九日 大阪・美交社

新圖畫工作展示會

十月二十七日—二十九日 東京美術學校

學校美術協會主催。

南光美術會洋畫展

十月二十七日—三十日 長崎縣立圖書館

新世紀美術家同盟第二回洋畫展

十月二十七日—三十一日 銀座・資生堂

臺灣總督府主催第二回美術展(綜合)

十月二十七日—十一月五日 臺北市・教育會館

二科第二十六回美術展(洋、彫)

十月二十八日—十一月十四日 大阪市立美術館

二科會展第二十六回の大阪展は同市主催の下に、繪畫二百七點、彫刻十二點を陳列した。

泰西名畫第二回展

十月二十八日—十一月三十日 大阪市立美術館

大阪市主催で、京阪地方に所在する外國名家の繪畫を

展覧した、陳列數六十五點。左に目錄を掲載する。

所藏者名

- 筆者未詳
- 天童探果圖 京都入江 波光
- 裸女半身像 同 同
- 海濱之圖 大阪河田 嗣郎
- コンステイブル (英) 大阪河田 嗣郎
- 風景 大阪某 家
- コロ (佛) 兵庫小川清太郎
- ヴイル・グ ヴレール風景 同 同
- 風景 同 同
- 風景 シヤントルイユ (佛) 同 木代 陽三
- 風景 大阪某 家
- ミレー (佛) 京都西村 卓三
- 踊るアムール 素描 大阪某 家
- 人物 素描 大阪某 家
- ピユヴァンス・ド・ (佛) シヤヴァンス・ド・ 大阪某 家
- 人物 素描 大阪某 家
- レピン (露) 大阪住友本社
- 婦人像 パステル 大阪住友本社
- マコフスキー (露) 大阪住友本社
- 乞食の子 バスチアン・ルバージュ (佛) 大阪某 家
- 樵夫 フランク・ムーラ (英) 大阪某 家
- 農家 ボンナル (佛) 三重川喜田久太夫
- 港の女 ルバスク (佛) 大阪朝日新聞社
- テラスにて アンリ・ルソー (佛) 大阪柏原仁兵衛
- 牧場 マチス (佛) 三重川喜田久太夫
- 婦人像 ルオー (佛) 兵庫小川清太郎
- 裸婦 グワ シュ

- 女の顔 兵庫山本發次郎
- 女の胸像 同 同
- マルケ (佛) 大阪柏原仁兵衛
- 風景 ヴラマンク (佛) 京都上河源右衛門
- 欄のある家 水彩 兵庫小川清太郎
- 水彩 ラブラード (佛) 兵庫小川清太郎
- 薔薇を描む少女 同 同
- 風景と人物 同 同
- ブルターニ ユの教會堂 同 野田鏗五郎
- 水彩 ヴアン・ドンゲン (和) 三重川喜田久太夫
- 給を描く女 横臥せる裸婦 トールイユベール (佛) 大阪某 家
- 港 ビサロ (佛) 大阪柏原仁兵衛
- 種播き 素描 シスレー (佛) 大阪某 家
- 風景 セザンヌ (佛) 大阪柏原仁兵衛
- 水浴 ルノアール (佛) 兵庫小川清太郎
- 風景 トウルヤンスキー (露) 大阪柏原仁兵衛
- 花 田舎 ガンズ (白) 兵庫野田鏗五郎
- 信仰厚き女 素描 兵庫野田鏗五郎
- ロダン (佛) 大阪小池 善夫
- 裸體人物 素描 善夫
- 素描着彩 マリー・カサット (米) 京都住友吉左衛門
- 母と子 ステル 京都市友吉左衛門
- レールミット (佛)

- 牧羊 ゴーギヤン (佛) 大阪某 家
- ブルターニ ユの女 セガンチニ (伊) 兵庫山本發次郎
- 水を飲む馬 兵庫和田久左衛門
- フリーツ (佛) 大阪某 家
- カモアン (佛) 大阪河田 嗣郎
- 若い女 パステル 大阪河田 嗣郎
- ワロキエ (佛) 大阪河田 嗣郎
- 風景 水彩 モゼリヤニ (伊) 善夫
- 裸婦 素描 ロート (佛) 大阪河田 嗣郎
- 人物 デユフイ (佛) 大阪河田 嗣郎
- 風景 水彩 ドラン (佛) 大阪柏原仁兵衛
- 女の顔 素描 大阪小池 善夫
- 風景 同 柏原仁兵衛
- 裸婦 同 同

- ピカソ (西) 大阪小池 善夫
- 頭 素描 プラツク (佛) 京都神原 紫峰
- 静物 石版 ビツシエール (佛) 京都高等工藝學校
- 草上 女と男の子 同 内貴富三郎
- 静物 同 神原 紫峰
- 婦人像 素描 大阪河田 嗣郎
- 風景 アマンジャン (佛) 同 小池 善夫
- 賢い犬 大阪柏原仁兵衛
- 女の顔 同 久保田静一
- シニヤツク (佛) 橋畔 水彩 大阪河田 嗣郎
- 裸婦 パス テル (瑞西) 京都入江 波光
- 素描 素描 ラグランジュ (佛) 大阪河田 嗣郎
- 河畔 同 同

名作工藝品展

十一月一日—仙臺・商工省工藝指導所
 東北、北海道工藝協會の創立十周年を記念しての催し。
 新日本洋畫協會第六回展
 十一月一日—三日 大禮記念京都美術館
 獨立美術京都研究所の洋畫展で、須田國太郎、田中佐一郎の賛助出品があり、又兒童畫を參考陳列した。
 山田樂全遺作漆藝品展
 十一月一日—三日 大阪・高島屋
 今春逝去した京都の漆藝家山田樂全の遺作漆器六十餘點を陳列した。

多摩帝國美術學校第五回創立記念展
 十一月一日—三日 世田ヶ谷・同校
 三輪晃勢新作畫幅展 (日)
 十一月一日—三日 大阪・高島屋
 荒井草雨個人展 (日)
 十一月一日—三日 福岡日日新聞社講堂
 有岡一郎日本畫展
 十一月一日—四日 神戸畫廊
 水野勝美油繪個展
 十一月一日—四日 名古屋・丸善
 兒玉希望富士十題展 (日)
 十一月一日—五日 日本橋・三越

富士を主題とする近作十點を陳列した。最近技法的に目覺しい躍進を見せてゐる作者の勉強の課程を知る點で興味深いものがあつたが、全體の出來は必ずしも成功したものとは言へなかつた。

……若々しい意欲に燃えるこの作家にとつて富士の取材はうなづけるが、その意欲の激しさが畫面に溢れ出ぬ事を惜しむ、手に入つた技法がそれを妨げるのでなく、日本畫家としての枠がそれをさせるとすれば考ふべきものがあらう、「玉簪水簾」などに特にそれを感ずる、「清曠」「曙光一鏡」など素直な中に擴がりも見えて佳品 (Z・都評)

美商社第一回展 (洋)

十月三十日—三十一日 銀座・紀伊國屋

貿易局工藝品輸出振興第一回展

十月三十日—十一月三日 大阪・中央公會堂

日本山岳畫協會秋季展

十月三十一日—十一月五日 大阪・大丸

梶宗樹戰場スケツ子展 (日)

十月三十一日—十一月五日 京都・大丸

十一月

志水知治個展

十一月一日 丸ノ内・日本工業俱樂部

霜林會第一回展(洋)

十一月一日—五日 銀座・養生堂

石原求龍堂主催、會員は伊藤廉、林重義、曾宮一念、里見勝藏の四名で、いづれも日本の様式化に赴きつゝある點で共通なるものを示した。伊藤の「游峽」、曾宮の「岩礁」、村の「春」、里見の「佛畫」等が挙げられる。

白朝會洋畫展

十一月一日—五日 大阪・美交社

同會の關西に於ける最初の同人展。

麗松會第四回漆藝展

十一月一日—五日 大阪・松坂屋

東京、新潟、石川、香川等各地の漆藝家五十餘名を會員とする。

新浪漫派協會結成展(洋)

十一月一日—五日 青山・玳軌畫廊

野上大業從軍畫展(日)

十一月一日—五日 福岡・玉屋

蒼人會第二回展(洋)

十一月一日—五日 銀座・紀伊國屋

加藤俊子洋畫展

十一月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

蘆田秋双伴畫、止水繪更紗展

十一月一日—五日 大阪・三越

國風家具展並紫紅會指物展

十一月一日—五日 名古屋・松坂屋

伊東深水木版畫新作展

十一月一日—七日 京都・朝日會館

芸艸堂主催

堀實造洋畫個展

十一月一日—七日 神戸・神戸繪畫館

綜和工藝作品發表會

十一月一日—十日 新宿・伊勢丹

寶彩會第二回展(日、洋)

十一月一日—十五日 東寶グリル

第八回橫濱美術展(日、洋)

十一月二日—五日 橫濱・開港記念橫濱會館

主催橫濱美術協會、後援橫濱市社會教育課。公募展で搬入數は日本畫九十八、洋畫七百三十點、内入選日本畫三十五、洋畫七十八點。陳列總數日本畫四十一點、洋畫百十五點。

審査員 並木瑞穂、座間素賢、森正元、松島一郎、志村計介、加山四郎、櫻庭彦治、二見利節

山梨美術協會第三回展(綜合)

十一月二日—六日 甲府・松林軒

後援山梨日々新聞社。

福島美術協會第十回展(洋)

十一月二日—六日 福島・市公會堂

今回は審査に石井柏亭を迎へ、搬入總數三百四十八點より九十六點を入選、計百三十七點を陳列した。

堂本畫塾第六回如月會展(日)

十一月三日—五日 京都・大丸

堂本印象の贊助出品「觀世音菩薩」をはじめ若生三十四名の作品を陳列した。

甲友會第一回洋畫展

十一月三日—五日 大阪・青樹社

田村孝之介門下の同人展。

徳島美術工藝協會第九回展(日、洋、工)

十一月三日—五日 徳島市・一樂屋

遊戲三昧會第三十二回展

十一月三日—五日 上野・生池院

自由美術秋季會員新作品展(洋)

十一月三日—七日 大阪心齋橋・天賞堂畫廊

菁々繪畫展(洋)

十一月三日—七日 銀座・三昧堂

日本美術院第二十六回展

十一月三日—十二日 名古屋・市公會堂並商工會議所

名古屋新聞社主催。

文化學院繪畫工藝展

十一月四日—五日 神田・同學院

全國商業美術教育協會第六回展

十一月四日—六日 東京府商工獎勵館

後援文部省、日本商工會議所。

辻愛造油繪展

十一月五日—八日 神戸元町・畫廊

二科西人社展(洋、彫)

十一月五日—十日 福岡・岩田屋

西日本の二科會出品者を以て組織、二科の會員、會友の贊助出品があつた。

島根縣紹介京都畫壇新作日本畫展

十一月五日—十日 大阪・十合

薄拙太郎洋畫展

十一月五日—十日 福岡・岩田屋

啓衛派工藝集團第一回展

十一月六日—九日 銀座・紀伊國屋

東西大家新作日本畫展

十一月六日—十日 福岡・岩田屋

東京會日本畫新作展

十一月七日—九日 芝・東京美術俱樂部

株式會社東京會の主催で、東西の大家、新進約九十名の新作を集めた。

兵庫縣美術家聯盟第十八回展(日、洋)

十一月七日—九日 神戸・大丸

鱈利彦、中村新次郎油繪展

十一月七日—九日 大阪・高島屋

中野秀人洋畫個展

十一月七日—十一日 銀座・青樹社

中村岳陵個展 (日)

十一月七日—十一日 日本橋・三越

日本美術院同人中村岳陵は新作の花鳥畫十點を以て最初の個展を開いた。

「……中村岳陵氏は、日本畫の傳統を重んじる作家ではあるが、傳統に縛られた作家ではない、寧ろ、さうした舊い思想を輕視してゐる作家の一人ではないかと思ふ。それがあつた時には失敗に終つてもあるが、批評家群から愛せられて居る大きな理由であらう。此度の個展を見て、「青畫」「運日」「秋近」「雲野」「微風に吹く」「鯉」等みな舊套の「型」を追ふてゐるものではない。構圖の爲めの構想があり、よく、その配置を得て、ないがしろにされてない。ただ筆の運びに、人の性格とも云ふべき細かさを感じられるが、自分などの神經から云ふともう少し緩急があり、達人的であつて欲しい。」(アトリエ一六ノ一三)

丹阿彌若吉第四回個展 (日)

十一月七日—十一日 日本橋・白木屋

横井禮市新毛筆畫展 (日)

十一月七日—十一日 名古屋・丸善

東西大家日本畫展

十一月七日—十一日 大阪・松坂屋

綠卷會洋畫小品展

十一月七日—十二日 銀座・三越

珊瑚會第二回展 (日)

十一月七日—十二日 京都・大丸

回教團展覽會

十一月七日—十九日 上野・松坂屋

大日本回教協會及び東京イスラム教團では外務省其他諸官廳後援の下に、回教團の生活、文化一般に互る紹介展示を行つた。諸家に藏されるイスラム工藝品、ミニアチュールなども陳列された。

足立源一郎近作展 (洋)

十一月八日—十二日 大阪・高島屋

井高歸山第二回作陶展

十一月八日—十四日 日本橋・三越

中部日本陶器展

十一月八日—十五日 大阪・松坂屋

國風家具並紫紅繪指物展

十一月八日—十五日 大阪・松坂屋

昭華會新作日本畫展

十一月九日—十二日 日本橋・高島屋

高島屋美術部主催で、二十餘名の日本畫家の新作を展覽した。川合玉堂の「殘雪」、橋本關雪の「暖日」、楠木清方の對幅「磯つたひ」、小杉放庵の「秋晴」、等の外に木村莊八の「たけくらべ」の連作が出品され、又村上華岳の「佛畫」は絶筆と記されてゐた。

吉田白嶺木彫小品展

十一月九日—十二日 京城・三越

林文塘繪畫展 (日)

十一月九日—十二日 名古屋・松坂屋

臨田和第一回個展 (洋)

十一月九日—十三日 銀座・三味堂

石川龍一、西川武郎の主催で、近作を陳列した。

「臨田和の作品は若い甘美な情緒に覆はれてゐるが、畫面が薄つべらな抒情に終つてゐないのは、その情緒に一種の本能的な誠實さがあるからであらう。……形體のデフォルメも無意味な誇張が少く、筆觸も抑揚あつて柔かだ。畫面の觸覺的な要素に氣を配つてゐる點では、この畫家の資質は實に、神經を持つてゐる。併し花屋で魚を買ひたが意味ではないが——私はこの畫家にもつと畫面の厚みと造型の緊迫した表情が欲しいと思ふのである。作者の視覚が一貫して透徹してゐない爲に畫面に曖昧なふやけた部分のある作品「窓邊」があり、畫が緊らないで瘁せてゐるもの「初秋」が目立つ。「二人」「母子」など秀作。(今泉篤男、都)

金城畫壇展 (日、洋)

十一月九日—十四日 金澤・宮市大丸

大島大輔洋畫展

十一月九日—十五日 大阪・阪急百貨店

石山太拍個展 (日)

十一月十日—十二日 芝・東京美術俱樂部

主催尙美堂、靜香堂、高尙堂。近作三十五點、東京の郊外風景を多く寫生して、手法に創意を出すべく努めた點が窺はれた。

原生社第四回展 (洋)

十一月十日—十二日 銀座・紀伊國屋

成層繪畫集團第二回展 (日、洋)

十一月十日—十五日 青山・玳軌畫廊

朝鮮輸出工藝第一回展

十一月十日—十六日 京城・商工獎勵館

橋本關雪聖戰記念畫內示展

十一月十一日—十四日 大禮記念京都美術館

(本欄八頁參照)

丸山晚霞新作水彩畫展

十一月十一日—十五日 上野・松坂屋

松坂屋主催。山岳、高山植物等の作品四十點陳列。

東西大家新作日本畫展

十一月十一日—十五日 上野・松坂屋

松坂屋主催で、東西諸家四十餘名の新作小品を陳列、山村耕花の「祝日」、安田毅彦の「柿」、前田青郎の「靜物」、小室翠雲の「寒牡丹」、荒井寛方の「龍野觀音」等が挙げられる。

白亞會第十七回洋畫展

十一月十一日—十五日 大禮記念京都美術館

鳩文會第五回展 (洋)

十一月十一日—十五日 新宿・月光莊

植松包美遺作展 (工)

十一月十二日 築地・花月

(本欄一六頁參照)

東西大家日本畫展

十一月十二日—十三日 芝・東京美術俱樂部

石田貞吉主催。

平川晃生日本畫個展

十一月十二日—十六日 福岡・岩田屋

奥村土牛、金島桂華新作畫展

十一月十二日—十七日 日本橋・三越

奥村土牛の「静物」は未着で「貂」が一點、金島桂華は「秋晴」など三點を描いた。兩畫家を通じて淡墨の太く無器用な輪廓線で大まかにくゝる流行畫風の攝取が顯著である。「秋晴」には新日本畫的寫實主義が見られて「椿」には山口蓬春あたりと共通の新裝飾主義が見られる。

梶宗樹北支歴戰畫展(日)

十一月十二日—十七日 大阪・三越

故西村五雲の門下で、今事變に出征し、去る八月歸還した。

小島與一人形個展

十一月十二日—十七日 福岡・岩田屋

柴潤會展(日)

十一月十二日—十七日 福岡・岩田屋

木谷千種個展(日)

十一月十二日—十八日 神戸・オリエンタルホテル

東言社主催。

東西作家新作畫展(日)

十一月十三日—十五日 芝・東京美術俱樂部

栗田九品庵主催。

青柿社第八回展(日)

十一月十三日—十五日 銀座・紀伊國屋

高見澤版木版藝術展

十一月十三日—十六日 銀座・資生堂

關東府縣聯合輸出工藝品展示會

十一月十三日—十六日 横濱・商工獎勵館

手島實海南島風景畫展

十一月十三日—十七日 銀座・青樹社

忍景翠佳作畫展觀(日)

十一月十四日—十七日 大阪・阪急百貨店

貿易局第一回工藝品輸出振興展(洋)

十一月十四日—十八日 大禮記念京都美術館

獨立美術秋季展(洋)

十一月十四日—十八日 札幌・三越

吉田一篤木彫展

十一月十四日—十八日 京城・丁字屋

東西諸大家第二十九回新作畫展(日)

十一月十四日—十九日 大阪・大丸

大丸主催、出品者五十名。

瀧川洗風、高橋保、能畫彫刻展

十一月十四日—十九日 大阪・大丸

岡本爲治新作陶磁展

十一月十四日—十九日 京都・大丸

吉田博一水墨畫展

十一月十五日—十八日 神戸・畫廊

内野猛山の油繪小品展

十一月十五日—十九日 銀座・三味堂

「妙高山」をはじめ山岳を描いた小品二十餘點を陳列。

霧林會第一回展(洋)

十一月十五日—十九日 大阪・松坂屋

澤田宗山作陶展

十一月十五日—十九日 日本橋・三越

山脇敏男、佐伯量長新作木彫展

十一月十五日—十九日 大阪・高島屋

山下新太郎個展(洋)

十一月十五日—二十日 大阪・美交社

美交社主催、三十號「五月の庭」、二十五號「海棠」、二十號「嵐山」、同「神苑」、同「花壇」等油繪十九點を

展覧した。

青芽會女流畫家展

十一月十六日—十七日 銀座・紀伊國屋

第八回讚岐工藝品展

十一月十六日—十九日 高松・三越

東本春水南洋水彩畫個展

十一月十六日—二十一日 名古屋・松坂屋

川口軌外洋畫展

十一月十六日—二十二日 大阪・阪急百貨店

歷程美術協會第二回試作展(日)

十一月十七日—十九日 神田・東京堂

奈良美術家聯盟第五回展(洋、彫)

十一月十七日—十九日 奈良・奈良會館

後援大阪朝日新聞奈良通信局。

梶原緋佐子新作美人畫展

十一月十七日—二十一日 京城・三中井

堂本印象宗教美術及寺院襖繪展

十一月十七日—二十二日 大阪・高島屋

堂本印象は豫て關西諸寺院の障壁畫を多數製作してをり、尙最近に大阪四天王寺五重塔内の壁畫を執筆したが、近く其の落慶を迎へるに就て、高島屋が主催となり、以上の障壁畫を一堂に蒐めて陳列した。主なる作品は四天王寺五重塔の「四佛淨土壁畫」を始め、教王護國寺、醍醐三寶院、延曆寺、仁和寺、大徳寺内龍翔寺、知恩院、本派本願寺、信貴山成福寺、金剛峯寺、東福寺等の出陳による襖繪、杉戸繪及びその寫眞等で、外に個人所藏の佛畫の類が展覧された。

日本人形藝術家協會第一回展

十一月十七日—二十二日 上野・松坂屋

同會は昭和十二年の創立で、會員二十餘名の作を陳列した。

尾上柴舟贊白井剛夫新作日本畫展

十一月十七日—二十二日 上野・松坂屋

今右衛門陶器展

十一月十七日—二十二日 大阪・高島屋

菊山當年男伊賀芭蕉寫作品展

十一月十七日—二十二日 大阪・高島屋

大阪新美術家同盟第六回展(洋、彫)

十一月十七日—二十三日 大阪市立美術館

日本人形社第四回展

十一月十七日—二十六日 上野・日本美術協會

岡本玉水、平田郷陽等十餘名の組織する同會の公募展で、作品六十五點を陳列した。

眞垣武勝北支風物油繪展

十一月十八日—十九日 青山・坵帆畫廊

有吉正雄近作展(洋)

十一月十八日—十九日 神戸・神戸教會

烏同人第二回展(洋)

十一月十八日—二十日 銀座・紀伊國屋

能美會第二回作品展

十一月十八日—二十二日 日本橋・白木屋

能面、彫刻、繪畫を陳列。

山田新一油繪展

十一月十八日—二十二日 大阪・三越

七絃會第十回展(日)

十一月十八日—二十三日 日本橋・三越

例年期待される會であるが今回は殊に頗る充實した内容を示し、わづか六點(十二圖)の出品ながら、質の上で日本畫展中の最高位置を確保するに足るものと思はせた。菊池契月の「忠度」は傑出した出来で、陳腐に墮し易い鎧武者を描いて、色彩線描の末端に至る迄神經をこめ、優雅、質實、些かの街ひ奇巧なく、題意をよく現した。楠木清方の「お夏清十郎物語」(六圖)また頗る佳品で、作者の最もよき特質が發揮され、清麗、繊細、西鶴を挿繪したのではなく、全く清方の世界として描かれて

る。前田青邨の「豊公」は墨と金泥の巧妙な使用にやや工藝的技法の過多を思はせるが、表現卓抜、個性的なものをよく出してすぐれた出来であり、安田靉彦の「菊絃童」は謹恪の筆で、筆致賦彩とも洗練を極めた出来である。小林古徑の「赤繪」(二圖)は眞摯な寫生の研究作と見るべきものであらう。

喜壽記念河合瑞豐作陶展

十一月十八日—二十三日 大阪・三越

加陽陶漆會工藝品展

十一月十八日—二十四日 大阪・三越

東西名家日本畫新作展

十一月十九日—二十一日 芝・東京美術俱樂部

藝苑社主催。

古家新洋畫展

十一月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

田口省吾個展(洋)

十一月十九日—二十三日 銀座・青樹社

風景畫を主とする近作二十餘點を陳列。

古徑、青邨、土牛名作鑑賞會(日)

十一月十九日—二十三日 大阪・阪急百貨店

第八回名古屋美術展(綜合)

十一月十九日—二十六日 名古屋・市公會堂、公園圖書館

名古屋主催の日本畫、洋畫、彫塑、工藝及び書道の公募展で、今回の審査員は福田平八郎、川崎小虎、服部有恆、藤島武二、太田三郎、横井禮一、北村西望、加藤顯清、香取秀眞、板谷波山、長野埜志、尾上柴舟、田代秋鶴、佐分移山の十四名。鑑審査の成績は左の通りであった。

日本畫	應募數	入選數	陳列點數
洋畫	二四八	四七	五三
彫塑	七三五	一五〇	一七七
	九二	三八	四四

工藝	一五八	四〇	四五
書道	四三八	一〇八	一二〇
合計	一六七	三八三	四三九

授賞 市長賞 河原勇夫(日)、森新一(洋)、高藤鎮夫(彫)、佐分鐵(工)、高田竹風(書)

油谷重雄洋畫個展

十一月二十日—二十二日 神戸元町・畫廊

三宅克己新作水彩畫展

十一月二十日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊

箱根、伊豆等の風景を描いた水彩二十點を陳列。

瀬戸市第二回陶藝展

十一月二十日—二十四日 名古屋・市公會堂

東西大家新作畫第一回展(日)

十一月二十日—二十四日 神戸・朝日會堂

東京美術親交會主催。

稻香畫藝展(日)

十一月二十一日—二十三日 名古屋・松坂屋

故森村宜稻の畫藝では、師の一周忌を迎へてその遺作を展觀し、併せて門下の新作を発表した。

「……同展には徳川家所藏の『明治天皇收接叙覽圖』をはじめ訥言の名作を寫した『百草圖』(六曲一雙)、『惠齋の寫し、婚儀圖』(六曲一雙)の大作に『昨年』の文展出品の『颯風』(二曲一雙)その他の絶筆となつた『俊成卿』まで三十餘點出陳し名匠の畫業と人格を偲ばして居た。』(新愛知)

鑄金美術工藝展

十一月二十一日—二十四日 日本橋・三越

東京鑄金會員の作を陳列。

新興作家陶器展

十一月二十一日—二十四日 日本橋・高島屋

疎藪會第二回展

十一月二十一日—二十五日 大阪・阪急百貨店

若山爲三洋畫展

十一月二十一日—二十五日 名古屋・丸善

丸善主催で近作三十餘點を陳列した。

志知安太郎洋畫展

十一月二十一日—二十五日 大阪・美交社

小合友之助染類展觀

十一月二十一日—二十六日 京都・大丸

京陶園展

十一月二十一日—二十六日 日本橋・三越

京都の陶工約九十名の新作を陳列。

八木岡春山新作個展(日)

十一月二十一日—二十六日 大阪・阪急百貨店

長瀧阿貴羅染色工藝個展

十一月二十二日—二十四日 銀座・鳩居堂

佐伯祐三未發表遺作油繪展

十一月二十二日—二十四日 大阪・高島屋

高島屋主催。福井市郎の舊藏にかゝる故佐伯祐三の遺作六十餘點が展觀された。初期から再渡歐に及ぶ未發表のもので主なもの四十號「房州の海」、二十五號の「裸婦(横臥)」、「巴里郊外」、「郊外道と人」、二十號の「郊外道と堀」、「郊外の町ポスト」、「ガード風景」、「廣告燈」、十號「草花(ルビナス)」等。

中川一政扇面畫展

十一月二十二日—二十五日 銀座・三昧堂

石原求龍堂主催。扇面畫二十點を陳列した。

岡常次洋畫個展

十一月二十二日—二十五日 銀座・紀伊國屋

六藝會第一回展(洋)

十一月二十二日—二十五日 銀座・資生堂

中之島洋畫研究所十五周年記念展

十一月二十二日—二十六日 大阪・朝日會館

信濃橋洋畫研究所では創立十五周年を記念して、關係者の制作を陳列した。

福岡美術會展(日、洋、彫)

十一月二十二日—二十六日 福岡市記念館

山口玲潔近作個展(日)

十一月二十二日—二十八日 大阪・松坂屋

村井靜江洋畫個展

十一月二十三日—二十五日 新宿・月光莊

松野奏風能畫展(日)

十一月二十三日—二十六日 大阪・三越

九谷名家作陶展

十一月二十三日—二十六日 金澤・宮市大丸

佐賀美術協會第二十三回展(洋)

十一月二十三日—二十六日 佐賀・市公會堂

德島洋畫聯盟主催全德島洋畫展

十一月二十三日—二十六日 德島市・丸新百貨店

山口縣第十回美術展(日、洋、彫)

十一月二十三日—二十六日 宇部・市記念會館

赫社社第二回展(日)

十一月二十三日—二十六日 京城・三中井

大潮會第四回展(日、洋)

十一月二十三日—十二月四日 東京府美術館

美育關係者を出品者とする同會は文部省後援の下に第四回の公募展を開催、日本畫二十九點、洋畫四百七十八點を陳列した。今回の審査員は日本畫は堅山南風、島田墨仙、徳岡神泉、根上富治、案本一洋、森白甫、洋畫は安宅安五郎、伊原宇三郎、大久保作次郎、奥瀬英三、熊岡美彦、高間惣七、林俊衛、袖木久太、以上十四名。搬入數、日本畫四二點、洋畫一三六九點、入選數、日本畫二九點、洋畫四六一點。

授賞 大潮會賞 河井達海、特選(日本畫) 永山利男 渡邊重、石井進、伊藤昇、齋藤龍江(洋畫) 竹野谷仁重 石川新一、藤田爲衛、進藤清、太田黒幸、水野一好、山下忠平、祇園隆、樋口一郎、川口四郎、石野安親、妹尾壽信、高谷重夫、森桂一、川口雄男、葦名芳夫

無鑑査推薦 森桂一

新制作派協會第四回展(洋、彫)

十一月二十三日—二十五日 東京府美術館

本年國畫會の彫塑部を迎へた同會は作品公募の上最初の繪畫、彫刻の展覧會を開催、團體として再出發振りを示した。尙今回は本年逝去した故野田英夫の遺作室を設置した。

繪畫部では會員數名の克明な制作が注目を引いた。然し一般には未だ未熟の作家が多く、水準も低いと言はねばならぬ。内田巖の大幅「構想」は努力の點で一應注意された。奥行の表現に作者の文學的なものが盛られたが構圖の他の一面の缺陷を免れない。「崖」は無難な風景畫であつた。佐藤敬はキュービツクな解體的手法を試み「水災に就いて」が大幅であつたが、構圖は徒すりに煩鎖で、表面的な感興を出なかつた。寧ろ「人物」に作者の特質が示されてゐた。小磯良平の「兵馬」はいはば十九世紀の技法を發揮した制作で、群像の配置と雰囲気の描寫に珍しい練達が見られ、一面に近代的要求を缺くが独自の態度は尊重されてよい。其他脇田和の「窓邊」が色彩に特質を示し、注目をひく出来であつた。中西利雄の水繪は類型的となり、鈴木誠は一應努力が認められる。坂井範一は畫面が粗く伊勢正義は感傷の甘さを出ない。故野田英夫の遺作は何れも晩年のもので、米國の畫風を攝取した醇朴な寫實が人々の愛惜する處となつた。

彫刻部は最初の二室の中央に陳列された。顔觸れは本郷新、山内壯夫をはじめ何れも新進の作家で、若々しい感覺が漂ふと共に、技術的には今後の研究に俟つべき處が多い。ブルデルを學ぶもの、ギリシヤ彫刻に倣ふもの等が見られる。本郷新の記念彫刻「氷雪」は缺陷を示しつつも努力が認められ、其他山内壯夫の「荒野」、明川孝、伊勢孝志、舟越保武、柳原義達等の諸作を擧げ得る。

搬入總數 繪畫五九四、彫塑四六點、入選數 繪畫七

九、彫塑六點

新會員 三岸節子

新作家賞 内田武夫、小松益喜、坂井範一

出品目録(○會員)

冬	○伊勢 正義	地(彫)	○明田川 孝	天草久園村	中井惣之助	都會	室内	○三岸、節子	靜物	鈴木 新夫
早春	同	DIANE(彫)	三宅 常雄	旅の印象	村上 正夫	水上	同	同	午後	同
冬	同	ベレー帽の女	古茂田公雄	ひるさがり	今村 俊夫	子供	同	同	仲間(連作E)	東海林 廣
崖	○内田 巖	裸婦	同	支那服をきる	和田 知	黒衣	同	同	無時間的風景A	佐藤 長生
構想	同	ポーズする	同	輝を開ける	秋岡 元二	喫煙談笑	同	同	無題	山
岩	同	裸婦(五)	同	魚せる兒	鳥羽 宗雄	I嬢	同	同	小田 晴子	田村 鳳堂
静物	同	同(六)	同	白い家	○脇田 和	緑衣	同	同	小川 藤義	同
海(トルソ)(彫)○佐藤 忠良	同	無題	同	窓邊	西田 勝	T嬢	同	同	小林 三郎	同
空(トルソ)(彫)同	同	裸婦(四)	同	男の肖像	高島 千代	工房	同	同	○三田 康	同
少年(彫)	○舟越 保武	女	同	森の中	原安 佑	裸婦	同	同	萩 太郎	同
夜試作(彫)	同	置く	同	北野町風景	小菅 徳二	稽古場の一隅	同	同	松尾 絹子	同
トルソ(彫)	井上 信道	作る	同	神戸英三番館	小松 益喜	黎明	同	同	天野 三郎	同
シユミーズの女	里内 直次	群立	同	山本通風景	重倫	夜店	同	同	内田 武夫	同
裸婦(彫)	伊勢 典賢	森	同	看視燈の見える風景	青峰	氷雪の孤兒	同	同	同	同
氷雲(ホロカメ)	坂井 範一	四人の女	○中西 利雄	風景	野田英夫遺作室	コロンブス船出す同	同	同	小關 利雄	同
トルソ遺難記念○本郷 新	同	彫刻と女	同	バスガール	天王寺風景	海邊人物	同	同	工藤 正義	同
風景A(朝風)	同	人物	同	春	嚴	焰火	同	同	同	同
風景B(夕風)	同	人物	同	電車にて	三人	氷雪の孤兒	同	同	同	同
史観(聯想)1	田淵 巖	婦人の像	同	牛乳ワゴン	少女	水の生魅	同	同	同	同
同	同	水彩	同	バス内(二)	室内	夜店	同	同	同	同
椅子に寄る人物○佐藤 敏	同	A物B	同	メリーゴラウンド	立葵	夜店	同	同	同	同
水災に就いて	同	新しき朝鮮古き朝鮮(三寒)	同	アシヨカン貯水池の秋	風雨	夜店	同	同	同	同
人物	同	同(親子)	同	夏の省線ホーム	きもの	夜店	同	同	同	同
泉	手島守之輔	同(平和)	同	歩む人	浴女	夜店	同	同	同	同
風	同	同	同	風景	丘	夜店	同	同	同	同
演技者(彫)	○吉田 芳夫	汽車の見える風景太田 忠	同	習作(一、二)	暗室(A)	夜店	同	同	同	同
化石(彫)	○柳原 義達	鐵橋を走る汽車	同	二人朝	同(B)	夜店	同	同	同	同
母(彫)	同	兵馬	同	冬の朝	室内	夜店	同	同	同	同
男立像(彫)	伊勢 孝志	ストロブのある	同	バス内(一)	同	夜店	同	同	同	同
荒野(アイヌ民族への長恨碑其(一)(彫)	田畑 爲徳	室内B	同	サーカス	同	夜店	同	同	同	同
立像(彫)	同	廢墟	同	都會の冬	同	夜店	同	同	同	同
マグムG.B(彫)○明田川 孝	同	同	同	海に近い町	同	夜店	同	同	同	同

一水會第三回展(洋)

十一月二十三日—二十五日 東京府美術館

一水會展は三回を重ねて愈々その特色を明らかにした観がある。技術を重ねる高麗なる藝術を尊重しようといふ指導者達の意圖は、おのづから穩健な方向にこの會を導いて、一般にはゆる近代意識濃厚な野心的製作は見られず、概して平明な寫實的作品で充されてゐる。同時に綺麗で上品な表面的仕事に安住する傾きがあり、積極的な意欲と骨格を缺いた微温的作品が多い。會員の作品では石井柏亭の「豆滿江」「I博士」など練達の技術を示し、安井曾太郎の婦人の「肖像」及び「霞澤岳」はいづれも強い意力を示す力作であるが、前者は繪畫的追求に専らで藝術的純化を缺き、後者は部分的誇張がすぎて大きな力を失つた。山下新太郎の「北窗」「南窗」いづれも華麗の色彩を用ひて温雅であり、作者の長所を示した佳作である。有馬生馬、木下孝則、小山敬三、碓伊之助、中村善策等の會員夫々努力を示したが、特に擧ぐべき出来栄えを見せず、池部鈞の異色ある仕事もあり生彩を見せなかつた。入選作の中では近藤光紀の「白い手袋」が確かな技術を見せて優れ、鈴木良三の「手術」はすうりとした出来で、金子博信は同様な主題の繰返ししながら「窓から見た校庭」、水繪で荒谷直之介の「版畫家K氏の像」、版畫で武田由平の「中津祇園の夜」、など面白い出来であつた。

搬入數一〇九九點、入選數一五〇點、陳列數一八五點
 一水會賞 中村琢二、近藤光紀、北尾修一、具方賞 鈴木良三

出品目録(○會員)

臺灣的庭園(一)○有島 生馬	女	推肥を積む農夫	新海 覺雄	支那服の像	仲田 菊代	上越雪景	松田 晃八	座像	山川勇一郎
同(二)	川原風景	野良仕事前	同	山小屋の一隅	名取 明德	婦人像	源川 雪	觀徳亭(開城)	山中仁太郎
高原の夏	塔の岩	姉妹閑日	島 あふひ	山小屋の午後	同	いこひ	同	編物	八幡 久
オロマナ山	同	便り	同	街	中畑 幸夫	烏瓜	三浦 俊輔	いでの	矢田部穂栢
桃色セーター	安宅 虎雄	阿寒溪流	繁野 三郎	自畫像	永井 潔	盤梯山	三角嘉壽男	市場	蓋 蔭 鼎
雲雀と女	同	若き母	鈴木 良三	雨後の漁港	中田 恭一	山吹	宮田 熊雄	廟門	渡邊 正一
黄草	同	手術	同	興亞の母子	鍋谷傳一郎	葛飾	水野 義正	喇嘛廟	同
少女立像	同	静浦風景	須摩 總吉	自畫像	永見 讓治	調馬	村上鐵太郎	無花果と犬	渡邊 宗一
版畫家K氏の像	同	女の部屋	末松 勇	朝	中川郷一郎	窓際にて	森 寅雄	白衣夫人	○高野三三男
鯨波	同	夜の山	關戸伊三郎	池ノ風景	西脇マデヨリ	北窗	○山下新太郎	芍薬	同
夏の櫻島	赤城 泰舒	春のながめ	高田 誠	船	同	南窗	奈良公園藤	エチウド(一)	同
豆満江	○石井 柏亭	春のながめ	同	庭	同	肖像	○安井曾太郎	同(二)	同
I博士	同	春のながめ	同	夏雲	額田 扇子	霞澤岳	同	同(三)	同
石神井	同	山村の秋	同	青梅街道	納富 進	蟬	同	同	同
張鼓峯	同	松と朝顔	田崎 廣助	校庭閑日	能勢 眞美	養蠶	同	同	同
眠れる子	○池部 鈞	夜の草花	同	アラミドロの池	同	山中	同	同	同
港	同	春の仕事場	高森 捷三	爐邊	野村 房雄	青い扉の蔭	同	同	同
小妓	同	クワツキの練習	同	閨秀畫家	○碓 伊之助	梅雨時	同	同	同
東北の娘	同	果物のある静物	同	鷗釣り	同	三月の襟名山	同	同	同
煙草	同	満潮	田中 一純	磯崎	同	春雪	同	同	同
少女像	同	晩秋	田中 悌六	なの花	同	たけ	同	同	同
深山(祖谷)	同	椅子の女	田坂 乾	カーネーション	同	高橋暉山第三回日本畫個展	同	同	同
祖谷溪谷	同	或る乾燥室	田中 甚吉	カネーション	同	日本畫新作展	同	同	同
天使園春雪	池谷 寅一	中津祇園の夜	武田 由平	半コートの少女	同	十一月二十四日—二十六日	同	同	同
丘の風景	同	浮筋	高見秋太郎	高原秋色	同	十一月二十四日—二十五日	同	同	同
卓の居る風景	石橋美三郎	春	近岡善次郎	少女	同	日本畫新作展	同	同	同
卓上茶果圖	泉 治作	庄内の女	同	お道さん	同	十一月二十四日—二十六日	同	同	同
池畔清秋	板倉 國臣	カンナ	寺島 貞志	日向葵	同	池田淑人作品發表展(洋)	同	同	同
讀書する甥の像	井口 節三	野尻湖	出開美千子	喇嘛廟	同	十一月二十四日—二十六日	同	同	同
鴨と鶴	江田 誠郎	唱太鼓	等々力巳吉	風塵	同	龍子第九回個人展「南船行」	同	同	同
アファガニスタン	大橋 文子	室内	土岐 浩藏	山陰の農家	同	十一月二十四日—二十九日	同	同	同
トルコの少女	同	山湖のほとり	○中村 善策	水道橋附近	同	今夏四十餘日の中支那旅行によつて得た近作十二點を	同	同	同
石齋屋	同	母と子	中村 琢二	丘陵	同	「南船行」と題して發表した。	同	同	同
ニース風景	同	ボレロの女	同	天賦風景	同	「川端龍子は度々大陸を踏破しては手頃のスケッチを世に展示	同	同	同
カーニユ風景(一)同	同	同	同	ハルビン支那街	同	したが、此の度も「南船行」と題して十二點の小品個展を開い	同	同	同
新聞編輯室	同	同	同	冬海	同		同	同	同

美術展覽會(十一月)

た。一點と雖も期日に遅れず、一作品の解説までもつけるといふ手際はさすがに龍子でなければ見られぬ用意周到である。解説によると長江は平凡で繪になりかねたらしいが、それでも金山寺の晩景を望んだ「鐘韻渡江」は墨の浸潤に筆外の鐘の聲を利かせた好風景畫である。(讀實)

濱田庄司作陶展

十一月二十四日—二十九日 大阪・三越

廣田勝夫油繪展

十一月二十五日—二十七日 神戸元町・畫廊

新興美術協會第八回展(洋)

十一月二十五日—二十九日 大阪市立美術館

關西に於ける春陽會系の洋畫公募展。

津田雲鳳近作木彫展

十一月二十五日—二十九日 大阪・阪急百貨店

花と少女油繪展

十一月二十五日—二十九日 大阪・青樹社

青樹社主催

丹阿彌岩吉第二回個展(日)

十一月二十五日—二十九日 福岡・岩田屋

青木繁遺作展(洋)

十一月二十五日—三十日 銀座・青樹社

明治四十四年異色ある才能を惜しまれつゝ天逝した青木繁の遺作を展覧した。その全部は、青木の知友梅野滿雄の蒐集品であり、青木のために美術館建設を期して集められたものだけに、幾つかの力作から繪葉書、寫生帖斷片、扇面等に至るまで凡そ六十四點が出陳された。就中舉ぐべきは、彼の代表作として知らるゝ、「海の幸」(明治三十七年作)及び「わたつみのいるこの宮」(明治四十年作)をはじめ、「黄泉比良坂」、「自畫像」、「妙義山」等の油彩或は水彩の作品である。彼が好んで用ひたパステル畫にも、その潤香な快い色調を示してゐる。又百人一首に試みた獨想的な水彩畫や樂燒香盒の如き、彼の藝術の片鱗を示すものに過ぎないが、極めて愛すべきもので

ある。要するに、彼は明治三十年代後半に現れ、その浪漫的な作風を以て明治繪畫史上に一つの特色を與へたものであつたことを知り得る。

清原重以知個展(洋)

十一月二十五日—三十日 京城・三越

近藤浩一路第五回新作畫展(日)

十一月二十五日—三十日 日本橋・高島屋

高島屋主催で、近作の「柿若葉」外五點を陳列、いづれも此の作家独自の手法による水墨畫である。

みち會第一回展(洋)

十一月二十六日—二十八日 新宿・月光莊

葦原邦子個人展(洋)

十一月二十六日—二十九日 銀座・資生堂

中島樸僊佛畫展

十一月二十六日—三十日 大阪・阪急百貨店

瀧秋方第三回個展(日)

十一月二十七日—二十九日 大阪・野村ビル
有恆俱樂部

七絃會第十回大阪展(日)

十一月二十八日—三十日 大阪・三越

霜林會第一回展

十一月二十八日—三十日 神戸元町・畫廊

山中白水近作展(日)

十一月二十八日—三十日 大阪・松坂屋

東風會第四回新作畫展(日)

十一月二十八日—十二月二日 日本橋・白木屋

東都大家新作日本畫展

十一月二十八日—十二月三日 新宿・伊勢丹

回教團展覽會

十一月二十八日—十二月九日 大阪・松坂屋

青莊會洋畫彫刻展

十一月二十九日—十二月三日 福岡・玉屋

全關西洋畫協會小品展

十一月二十九日—十二月四日 大阪・天賞堂畫廊

貿易局工藝輸出振興第一回展

十一月三十日—十二月四日 名古屋・愛知縣商工館

十二月

森野嘉光作陶展

十二月一日—二日 大阪・有恆俱樂部

狩野梅齋個展(日)

十二月一日—三日 名古屋美術俱樂部

東丘社若草會第二回展(日)

十二月一日—三日 京都・大丸

小林かねよ個展(洋)

十二月一日—三日 新宿・月光莊

文展新人洋畫展

十二月一日—三日 大阪・大丸

ジュン・オム第四回展(洋)

十二月一日—三日 銀座・紀伊國屋

新井完洋畫展

十二月一日—五日 大阪・美術新論社畫廊

石井柏亭日本畫展

十二月一日—五日 京城・三越

山本倉丘新作畫展(日)

十二月一日—五日 大阪・大鐵百貨店

京都表裝業組合第二十九回表裝競技會展

十二月一日—五日 京都岡崎・市公會堂

石川欽一郎水彩畫近作展

十二月一日—五日 大阪・美交社

純作家小品展(日)

十二月一日—五日 京都東山・靈山畫廊

同畫廊主催。

石川確治第二回展

十二月一日—六日 日本橋・高島屋

近作の彫刻、油繪、墨繪、陶器等百五十點を陳列。

新燈社第十七回展(日、洋)

十二月一日—六日 大阪市立美術館

青木大乗を中心とする同會は作品公募の上同展を開催
入選作八十九點に同人、無鑑査等の出品を併せ計百七十
點を陳列した。同會の出品は油繪、日本畫等の材料的差
別を設けず自由である。

推薦(同人) 上田巳之助、(準同人) 清水古鑑、佐原公
明、高島登、仁田末次郎、阪岡大樹、湯川直春、(社友)
奈良谷喜美

矢野橋村繪付新作陶磁展

十二月一日—六日 上野・松坂屋

九谷窯の北出塔次郎の許で繪付をした陶器數十點を陳
列した。

長谷川白峰陶磁花器展

十二月一日—六日 日本橋・三越

平松豊彦龍に因む工藝彫刻展觀

十二月一日—六日 上野・松坂屋

第二回現代大家新作日本畫表裝展

十二月一日—六日 上野・松坂屋

日本彫金會第一回展

十二月一日—七日 日本橋・三越

清水龜藏を始め會員百十餘名の作を陳列した。

新作日本畫展

十二月一日—七日 日本橋・三越

三越主催、春掛用畫幅を陳列。

小川芋錢遺作展(日)

十二月一日—七日 上野・日本美術協會

昨年逝去した故小川芋錢の遺作展が日本美術院主催の

美術展覽會(十二月)

下に開催された。陳列品は約二百點に及び、十數點の畫
稿、十餘冊の寫生帖も添へられ、明治四十年前後より晚
年に及ぶ代表作品が殆んど網羅された。最初は戲畫の制
作に始まり、大正に入り珊瑚會同人、院展同人となるに
及び、獨自の南畫的境地を開拓した。大正期では「水國
圖卷」「陶土の丘」「樹下石人談」「若葉にむさる、木精」
「沼四題」「樹間如木人如魚」「蘆花淺水」「夢中夜千燈」
「月夜の道」等が佳作に入り、昭和に入つては「荒園清
秋」「太古香」「積雨收」が初期に於て擧げられるが、七
年の「海鳥秋來」、九年の「反照」に及んで、爾後の作
品には東洋的な悟道が感ぜられ、完成に到達した觀があ
る。「霞ヶ浦」、六曲一雙の「江村六月」「曉烟」、二曲一
雙「桃花源」「新笥の滋雲」等は晩年の傑作であらう。技
法は水墨若しくは水墨淡彩を以て終始一貫し、横圖が大
部分を占めてゐた。(略歴其の他に就ては十四年版參照)

出品目録

初秋夕心	明治三十八年作	東京	齋藤	三	木	精	同	同	大正十一年作	東京	中野	友	禮
田家四季草畫	明治四十年作	新瀉	林	真	雪	景	同	同	大正十二年作	東京	齋藤	一	彦
種井の邊	明治四十二年作	東京	齋藤	隆	曉	山	雲	同	同	同	同	同	同
午餐	明治四十五年作	同	同	同	水	魅	戲	同	同	同	同	同	同
太古の民	大正元年作	同	同	同	石	炭	と	椿	の	圓	光	同	同
木の子	大正三年作	同	同	同	觀	蘭	同	同	同	同	同	同	同
三三(畫帖)	同	同	同	同	藍	花	淺	水	同	同	同	同	同
謝恩桐	大正初年作	東京	萩	原	安	之	助	同	同	同	同	同	同
春の繪卷	同	同	同	同	四	季	山	水	同	同	同	同	同
花見	同	新瀉	篠	田	金	太	同	同	同	同	同	同	同
南泉新猶	大正六年作	關	谷	繁	太	郎	霧	と	木	の	芽	同	同
拾即牛	同	同	同	同	同	同	喜	都	彌	乃	與	女	い
乘風子	大正六年頃作	東京	澤	田	竹	次	郎	荒	園	清	宵	同	同
野分	大正六七年頃作	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三頭大笑	同	茨	城	菅	谷	庸	三	夢	中	夜	千	燈	同
水國圖卷	大正七年作、第 四回珊瑚會出品	兵	庫	西	山	亮	三	草	虫	(畫帖)	同	同	同
陶土の丘	大正七年作、第 五回院展出品	東京	横	地	信	輔	早	夏	清	朝	同	同	同
抱憂痴	大正八年作、第 五回珊瑚會出品	同	同	同	同	同	山	陰	の	霧	海	同	同

案山子、獺娘、草馬、魚化龍、草摺引

小町幻、蝶戀、鴛娘、鴉の浮巢、龍卷

駒 迎 昭和十二年作 古稀展出品

時 雨 同 同

蘆 荻 洲 同 同

尾花なみよる 同 同

小 六 月 同 同

七月清涼味 同 同

寒山拾得 同 同

黄葉團飛 同 同

生々存々 同 同

あははたけ 同 同

殘 月 同 同

頭上春 同 同

奥の細道 草の戸 同 同

同 那須野 同 同

同 佛五左衛門 同 同

草 稿

天南星 稿本

積雨收 同

雲の峯 同

蓬萊仙雲 同

長沙散步 同

七月清涼味 同

近江のおかね 同

桃壽星 同

夕 風 同

不 動 同

雪 景 同

芭蕉翁 同

丹陰霧海 同

卯月の芭蕉庵 同

十二橋 同

沈 鐘 稿本

不動明王 稿本

寫生帖 十四册

大正十五年作、第十三回院展出品

追 加

前赤壁 大正十四年作

老君像 大正十五年作

春日渡頭 大正初年作

細道繪日記(繪卷) 明治四十四年作

七 夕 昭和十二年作

一茶句意 古稀展出品

一茶句意 昭和六年作

月さへも 昭和六年作

おけさ節 大正六年頃作

一茶句意 昭和二年作

日本の雁 昭和十一年作

仙 果 昭和十二年作

桃仙子 古稀展出品

谷神園 昭和六年頃作

壽 老 大正七年

日待の人達 昭和十二年作

夕 風 昭和五年頃作

大正十三年作、第十一回院展出品

第三回文展京都陳列會

十二月一日—十五日 大禮記念京都美術館

京都市主催で例年の如く開催、日本畫二〇六、洋畫三五〇、彫塑七九、工藝一五〇、計七八五點を陳列した。

東西大家新作畫展(日)

十二月二日—五日 芝・東京美術俱樂部

井南居宮崎政近の主催、出品者約五十名。

土井撰美堂東西大家新作畫展(日)

十二月二日—五日 京都美術俱樂部

藤井芳子個展(洋)

十二月二日—六日 銀座・青樹社

根本霞外第三回個人展(日)

十二月二日—六日 銀座・三味堂

蔬菜の圖横物十二點を陳列した。

京都大衆向工藝品競技展

十二月二日—七日 日本橋・高島屋

十二月二日—七日 日本橋・高島屋

琉球新作工藝展

十二月二日—七日 日本橋・高島屋

主催日本民藝協會、後援日本文化協會。民藝協會の同人柳宗悅、河井寛次郎、濱田庄司、芹澤銈介、外村吉之介、柳悦孝等が今春琉球に赴き其の特種な工藝技法を調査の上、同地の工人達と共に製作した作品を陳列した。内容は織物、染物、陶器、漆器等約二千點に上つた。

小川芋銭、磯野鐵山遺作展(日)

十二月三日—五日 神田・東京堂

田中繁吉油繪展

十二月三日—六日 神戸・畫廊

和光會第六回展(工)

十二月三日—十二日 銀座・服部時計店

服部時計店の主催で、會員高村豊周、廣川松五郎等の作品を陳列した。

高橋白日子小品展(日)

十二月四日—六日 銀座・紀伊國屋

吉田喜藏バステル畫展

十二月四日—六日 大阪・大阪俱樂部

宮田重雄陣中小品展(洋)

十二月四日—八日 名古屋・丸善

出征中、小閑を得て作つた小品二十餘點、大同及び北京近郊のスケッチを陳列した。

松島畫秋秋季新作展(日)

十二月五日—七日 日本橋・東美俱樂部

松島勝之助の主催で、東西の諸家約四十名の新作を陳列した。

東西大家新作日本畫展

十二月五日—七日 大阪・高島屋

東西作家近作美術工藝展(日、洋、工)

十二月五日—八日 京都・朝日會館

飯田三郎、上田秀雄共催。

十二月五日—七日 日本橋・高島屋

十二月五日—八日 京都・朝日會館

十二月五日—七日 日本橋・高島屋

十二月五日—七日 日本橋・高島屋

美術展覽會(十二月)

濱田庄司第十四回近作陶器展

十二月五日—九日 銀座・鳩居堂

美術と趣味社主催日本畫新作展

十二月五日—九日 大阪・松坂屋

獨立美術秋季展(洋)

十二月五日—十日 京都・丸物

鳥居清忠畫新版畫展觀

十二月五日—十日 京都・芸艸堂畫廊

清水六兵衛作陶展

十二月五日—十日 京都・大丸

第五回京都大家日本畫最高展

十二月五日—十日 京都・大丸

新水彩第一回展

十二月五日—十日 銀座・三越

桑重清近作洋畫展

十二月六日—九日 大阪・三角堂

信樂燒高橋樂齋作陶展

十二月六日—十日 大阪・三越

小城基洋畫個展

十二月六日—十日 大阪・天賞堂畫廊

橋本邦助豆油繪と油繪色紙展

十二月七日—十日 神戸・畫廊

新井謹也作陶展

十二月七日—十日 京城・三越

栢森養個展(洋)

十二月七日—十一日 大阪・美術新論社畫廊

北信輸出工産品見本第一回展示會

十二月七日—十三日 金澤・宮市大丸

出品區域は石川、富山、福井、長野、新潟の五縣。

日本版畫協會第八回展

十二月七日—十四日 東京府美術館
同會では公募による第八回展を開催、會員三十名の出

品六十七點、應募作品七十三點を陳列、外に本年逝去した會員小林朝次の遺作十五點及び恩地孝四郎、永瀬義郎前川千帆の大陸視察作品計十一點を出陳した。尙昨年より「版畫發達史的展觀」と題する大家の舊作回顧陳列を始めたが、今回は南薰造及び富本憲吉の舊作が集められた。南のは明治四十三年より大正二月に及ぶ八點、富本は明治四十三年より大正十五年に至る計十九點で、いづれも時代を反映して興味深いもの示した。

新古典派協會第四回展(洋、彫、工)

十二月七日—十五日 東京府美術館

金子九平次を中心とする同會は公募の上第四回展を開催、繪畫五十一、彫刻十四、工藝二十一點の外に故岸田劉生の遺作十六點を陳列した。

新會員 土方久功、新會友 森川鏞

清溪會第二回鑑賞會(日)

十二月八日—九日 銀座・交詢社

清溪會長崎英造主催。

小川芋錢遺墨展

十二月八日—十日 大阪・高島屋

柏原覺太郎油繪展

十二月八日—十日 大阪・三越

荒井耕三洋畫展

十二月八日—十日 大阪・ガスビル内學士クラブ

大阪水彩畫三人展

十二月八日—十日 大阪・大丸

出品者は池島勘治郎、桂龍雄、青野馬佐奈の三名。

特異兒童作品展

十二月八日—十二日 銀座・青樹社

みづる・春鳥會が主催で千葉縣市川の八幡學園々兒の貼紙繪を陳列、特異な作品内容が一般注視の的となつた。

戸張孤雁遺作展(彫、素描、版畫)

十二月八日—十二日 銀座・三味堂

明治末期より大正年代にかけて活躍し、特異な美術家として知られた舊日本美術院同人戸張孤雁の十三回忌を記念する遺作展覽會が催され、改めて此の作家の香氣高き作品を回顧することを得た。展觀するところ彫刻十七點、素描十點、版畫三點、日本畫一點であつて、彼の全作品を網羅したものではないが、「男の胴」(大正三年作)をはじめ、「立てる女」(明治四十四年作)、「煌く嫉妬」(大正十三年)の如き又木版「千住大橋」や素描に其の鋭い感覺を窺ふことが出來た。

山村耕花繪畫展(日)

十二月八日—十二日 名古屋・松坂屋

松坂屋主催、近作三十餘點を陳列。

東西大家新作繪畫展(日)

十二月八日—十三日 大阪・三越

商工省主催第二回代用品工業振興展

十二月八日—十四日 京都・商品陳列館

新興美術家協會第五回展(綜合)

十二月八日—十八日 東京府美術館

同會は、恩地孝四郎、伊藤蕪朝、川村秀治、伊藤壽一等を本年度委員として公募による第五回展を開催した。

搬入總數一三六三點、入選數 日本畫二四、洋畫六七

版畫一四、彫刻二五、工藝一七、圖案七點

授賞 中村木恵、福島重旺、今井正、白井保春

岡田謙三第四回新作發表展(洋)

十二月九日—十三日 數寄屋橋・日動畫廊

四十號「山」「馬」、三十號「橋のある風景」「花賣」をはじめ油繪二十四點を陳列した。

「花賣」本、窓、等淡い夢を傳へるやうな依然たる作畫態度にはさしたる變轉も認め得ず、海岸、等に取材した風景數點は又作家の意圖は兎に角迫真力に乏しい。(東朝)

宋政勳從軍作品展

十二月九日—十三日 京城・和信ギヤラリー

現代名家新作畫展(日)

十二月九日—十四日 日本橋・高島屋

高島屋主催、春掛用の畫幅を陳列、東西の諸家約五十名の出品があり、竹内栖鳳の豎幅「老梅」が見られた。

新構造社第十三回展(綜合)

十二月九日—十八日 東京府美術館

同會恆例の公募展で搬入数は繪畫九百二十、彫刻二百二十三、工藝二百九點、入選数は繪畫七十三、彫刻二十工藝十六點、陳列数は繪畫百三十五、彫刻五十一、工藝十九點、尙故王一亭の遺作二十四點を特別陳列した。

授賞(研究賞)(繪畫) 高野直一、小田原龍生、村岡清(工藝) 井坂花子、大久保青更。

中部日本美術聯盟主催國策宣傳ポスター展

十二月十日—十三日 濱松市・商工陳列所

現代大家新作日本畫展

十二月十一日—十三日 名古屋美術俱樂部

棚橋慶心堂主催

渡邊大虛大阪第三回個展(日)

十二月十一日—十三日 大阪・大阪堂ビル清交社

尙美堂東西名家新作展(日)

十二月十二日—十四日 日本橋・東美俱樂部

關長次郎の主催、出品作家は目錄によれば東西の諸家五十九名。

全國中等學校商業美術作品第六回競技會大會ポスター展

十二月十二日—十四日 名古屋・松坂屋

河合寛次郎新作陶展

十二月十二日—十五日 大阪・高島屋

高岡徳太郎、島崎鶴二新作油繪展

十二月十二日—十五日 大阪・高島屋

岡崎桃乞第五回個展(洋)

十二月十二日—十六日 銀座・養生堂

室内社畫堂主催

大阪美術工藝品展

十二月十二日—十六日 大阪・三越

大阪府工藝協會主催

塙一雄油繪展

十二月十二日—十六日 大阪・三角堂

澤田宗山近作陶磁展

十二月十二日—十七日 京都・大丸

朝鮮千害救濟日本畫展

十二月十三日—京城・三越

京城日報社主催

現代名家新作展(日)

十二月十三日—十五日 銀座・鳩居堂

「繪畫」第三回展(洋)

十二月十三日—十五日 銀座・紀伊國屋

菊山當年男作伊賀燒展

十二月十二日—十七日 日本橋・高島屋

會宮一念洋畫個展

十二月十三日—十七日 大阪・美術新論社畫廊

現代彫塑家名作展

十二月十四日—十五日 丸ノ内・日本工業俱樂部

松尾松濤油繪展

十二月十四日—十六日 銀座・交詢社

渡瀬澄雲近作畫展(日)

十二月十四日—十七日 大阪・三越

中澤弘光新作油繪展

十二月十四日—十八日 數寄屋橋・日動畫廊

油繪二十二點、「岩手海岸大釜手造」、「猿澤池畔」等の外に「北京聽鴻樓」、「天境祈年殿」、「臺南法華寺々々」等北支臺灣の寫生もあり、屈託のない描寫を見せた。

八爽會第二回洋畫展

十二月十四日—十八日 銀座・三昧堂

石原龍一、西川武郎主催。國展、二科、新制作派、舊

獨立系等の人氣作家を會員とし、青山義雄「櫻島の朝」、

野口彌太郎「東北の港」、庫田毅「藤」、會宮一念「雨の

海」、伊藤廉「志賀高原」、其他兒島善三郎、里見勝藏、

向井潤吉等の作が見られた。

阿部清定個展(洋)

十二月十五日—十七日 新宿・月光莊

大塚巧藝社美術工藝品展

十二月十五日—十七日 大阪・十合

山内春靜堂主催東西大家新作畫展(日)

十二月十五日—十七日 日本橋・東美俱樂部

小松益喜油繪個展

十二月十五日—十七日 神戸・畫廊

熊谷重太郎工藝展

十二月十五日—十九日 日動畫廊

富士油繪展

十二月十五日—二十日 大阪・美交社

美交社主催

東京府工藝品第十六回展

十二月十五日—二十一日 東京府商工獎勵館

海外蒐集品見本展示會

十二月十五日—二十八日 大阪府貿易館

貿易局主催

甲戌會第七回人形展

十二月十六日—十八日 上野・梅川亭

李應畫個人展(日)

十二月十六日—二十日 京城・利信ギャラリー

美術新報社主催大家新作展(日)

十二月十七日—十九日 芝・東京美術俱樂部

齊々會第四回彫刻展

十二月十七日—十九日 銀座・養生堂

獨立美術秋季展(洋)

十二月十七日—二十一日 大阪・阪急百貨店

鶴翼會洋畫展

十二月十七日—二十一日 京城・三越

東都大家木彫刻展

十二月十七日—二十二日 大阪・三越

法隆寺上宮王院本尊大厨子建立奉讚美術展

十二月十七日—二十二日 大阪・三越

近藤乾年繪畫展(日)

十二月十八日—二十日 名古屋・後藤版畫店

藤尾龍四郎油繪展

十二月十八日—二十日 神戸・畫廊

新制作派の出品者で、滿洲旅行の作品を發表した。

熊田耕風繪畫展(日)

十二月十九日—二十二日 大阪・三越

矢野陶々百盃會

十二月十九日—二十三日 日本橋・三越

牧野克次(天平)水彩畫個展

十二月十九日—二十三日 日本橋・三越

作者は小山正太郎の門下で、嘗て文部省より在外研究を命ぜられ米國に滯留したことがある。平生畫境を遠ざかつてゐたが、今回初めて個展を開催、近作の水彩畫及び日本畫約五十點を展觀した。

島野重之個人展(洋)

十二月十九日—二十三日 大阪・美術新論社畫廊

東西大家新作展(日)

十二月十九日—二十三日 大阪・十合

東西大家新作展(日)

十二月十九日—二十三日 大阪・松坂屋

木芽會第四回展(日)

十二月二十日—二十三日 大阪・十合

武者小路實篤新作畫展

十二月二十日—二十三日 銀座・鳩居堂

天龍峽美術協會主催、東都大家日本畫洋畫彫刻展

十二月二十日—二十四日 日本橋・高島屋

中山鶴油繪展

十二月二十日—二十四日 數寄屋橋・日動畫廊

近作の油繪十六點、二十號の「岳麓雜草」「靜物蔬菜」子供を描いた二十號「ブランコ」「村童」等をはじめ十號大の「風景」が數點出品された。作者独自の簡約による描寫を見せた。

多聞洞展(日)

十二月二十一日—二十三日 日本橋・東美俱樂部

橋本多聞洞主催。

JAN第十一回展(洋)

十二月二十一日—二十四日 銀座・紀伊國屋

齊白石水墨畫展

十二月二十一日—二十四日 神戸・畫廊

小島善太郎個人展(洋)

十二月二十一日—二十四日 大阪・美交社

美交社の主催、室戸崎の風景寫生を主とし、油繪二十點を展觀した。

朔日會第三回展

十二月二十一日—二十五日 銀座・三味堂

晨潮會第二回洋畫展

十二月二十一日—三十日 新宿・三越

日本畫大家新作展

十二月二十二日—二十七日 京城・三越

青莊會洋畫彫刻展

十二月二十四日—二十八日 大分・一九

亞瓊社第一回油繪展

十二月二十五日—二十九日 銀座・紀伊國屋

吉田直方蒐集佐渡と越後けてもの展

十二月二十六日—三十日 日本橋・高島屋

展覽會以外の作品

日本畫

杉本哲郎作「ぶらじる丸壁畫」 杉本哲郎は大阪商船の依頼により新造船ぶらじる丸の讀書室の壁畫を執筆した。「嵐秋の春」及び「小倉山の秋」の二面、縦横五尺五寸、神代杉の一枚板(ベニヤ)に極彩色を以て仕上げたもの。但し同圖は最初の熱帯圏航行により畫面に若干の龜裂を生じたので、作者は技法改善の必要を認めらる。

島田墨仙筆「高田早苗博士像」 島田墨仙は高田早苗博士の日本畫肖像を執筆、二月に完成した。絹本で、丈四尺五寸、巾一尺八寸、黒のガウンを羽織り椅子に掛けた姿を寫したもので、水墨を基調とし、顔には淡彩を施した。博士は完成を待たずに逝去し、同作は其の百日祭に靈前に飾られた。

長谷川路可作「藤山工業圖書館壁畫」 長谷川路可は藤山工業圖書館の裝飾壁畫を執筆、三月に完成したが、歐洲に於けるフレスコ技法を採用したものである。

山本倉丘筆「あるぜんちな丸食堂壁畫」 山本倉丘は大阪商船會社の依頼により新造船あるぜんちな丸の一等食堂の壁畫「池畔妍艶」を製作した。大きさは縦三尺、横六尺、絹本極彩色で、水に歩む白鷺、初夏の花弁等を裝飾的に描いた。

横山大觀作「富士」 横山大觀は讀賣新聞社々長正力松太郎の依頼により、同社講堂の壁畫を執筆、九月完成した。紙本墨繪で、大きさは縦十尺、横十六尺の大作である。

樋口富麻呂作「明治天皇記念館壁畫」 樋口富麻呂

展覽會以外の作品

は大阪市の依頼により同市北區櫻之宮の明治天皇記念館の壁畫を執筆した。畫題は「明治十年大阪軍事病院臨幸之圖」で、明治天皇が軍事病院(現大阪衛戍病院)へ西南戦役傷病兵を御慰問遊ばされた光景を謹寫したもので、越後の渡し紙を用ひ、大きさは約七尺五寸四方で、十一月三日明治節に同館に奉掲された。

小川翠村作「明治天皇記念館壁畫」 小川翠村は大阪市の依頼により明治天皇記念館の壁畫を執筆した。畫題は「難波御堂ニ於テ學業天覽ノ圖」で、明治十年明治天皇が大阪難波御堂に於て小學生兒童の學業を天覽あらせられる光景を謹寫、紙本着色で大きさは縦八尺、横七尺である。

洋畫

藤田嗣治作「南昌飛行場打ちの圖」 藤田嗣治は海軍省の依頼により本圖を制作、六月十四日海軍館に陳列された。縦一、九四米、横は約五、一二米の油繪で、我が空軍の南昌飛行場攻撃を描いたもの、即ち詳細は「昭和十三年七月十八日未明、我が海軍航空隊は艦上戦闘機

〇〇機を以て南昌飛行場を制壓し、續いて南郷茂章大尉の戦闘機隊及び松本眞實少佐の爆撃機隊は所在敵飛行機の攻撃を行った。松本隊は南昌飛行場にあつた敵機に對し爆撃を行った上更に低空に降下して銃撃を加へ、その七機を炎上せしめたが、尙炎上しない敵機數機があるの

中村研一作「秋のにぎわい」 中村研一は「秋のにぎわい」と題する油繪の靜物を八月完成した。百號の力作で北支軍の依頼になり、杉山大將の官舎を飾るもの。

別車博資作「神戸市立圖書館壁畫」 別車博資は神戸市の依頼で、市立圖書館分館の玄関に水彩畫による壁畫を執筆、九月に完成した。横一丈七尺三寸、巾六尺三寸、圓形の畫面で、厚手の繪絹を使用し、黎明の神戸港の景觀を描いたものである。

荒井陸男作「日濠海軍協同作戰圖」 大阪商船會社より濠洲メルボルン美術館宛に寄贈する「日濠海軍協同作戰圖」が荒井陸男により製作された。約二百五十號の油繪で、前大戦中、軍艦伊吹が印度洋上で濠洲の輸送船を護送する光景を描いたものである。

橋田庫次作「高知城東中學講堂壁畫」 橋田庫次は大正六年度城東中學卒業生會の依頼により同校講堂に横二十五尺、縦十尺のカンバスによる油繪壁畫を執筆した。背景は土佐の風景を描き、男女二十人の人物を配し、學術の研鑽と青年の希望を象徴したものである。

建築美術協會作「ライオンビヤホール壁畫」 醫師嘉彦建築事務所設計の銀座ライオンビヤホールの二階ホールに今利次郎の組織する建築美術協會が壁畫を執筆した。建築家及び美術裝飾家の協力が見られ注意される。

彫刻

伊藤國男作「日支事變出征軍馬記念」 伊藤國男は今事變に於ける無言の戦士、軍馬の功績を記念するためブロンズの軍馬群像彫刻を製作、四月四日陸軍省へ献納した。高さは臺ともに六尺七寸、尙作品は陸軍大臣の官邸に置かれることとなつた。

朝倉文夫作「柏木司馬次郎近陽一郎像」 朝倉文夫は母校大分縣竹田中學校の恩師柏木司馬次郎及び田近陽一郎の和裝胸像を複製、母校に寄贈した。高さは共

に二尺八寸、ブロンズで、四月二十七日同抄で除幕式を
舉行した。

早乙女龜次作「東本願寺本堂向拜虹梁浮彫」 早乙
女龜次は淺草東本願寺の依頼により、本堂の向拜虹梁の
浮彫を作製、十月十日完成した。中央を鳳凰、左右を龍
虎とし、長さは中央が十二尺、左右十尺づつ、幅は各々
三尺である。

本山白雲作「大審院長兒鳥惟謙像」 本山白雲は裁
判所構成法施行五十年記念會の依頼で、大審院長兒鳥惟
謙の銅像を作製、除幕式が十一月一日、東京裁判所に於
て舉行された。高さは二尺三寸五分である。

朝倉文夫作「牧田清之助像」 依頼者は大日本騎道
會、青銅の胸像で、高さは三尺、十一月七日小石川の牧
田家に安置された。

清水三重三作「故小山内薫氏胸像」 清水三重三の
作になる故小山内薫のブロンズ胸像が築地小劇場の支關
廣間に据えられ、十一月二十二日除幕式が舉行された。
同作は義に構造社展第一回に出品されたものである。

武石弘三郎作「中村敬右衛門」 武石弘三郎は中村
敬右衛門の依頼により其の大隈右胸像を作製、十二月二
十日歌舞伎座の中庭に据えられた。高さ二尺八寸、尙臺
座は川邊泰の設計で高さ五尺六寸五分である。

武石弘三郎作「日蓮聖人」 日蓮聖人柏崎靈蹟顯揚
會東京後援會では柏崎市番神碑新公園に武石弘三郎作の
日蓮聖人の銅像を建立した。三丈の花崗岩の臺座の上に
立ち、身長は二丈一尺、臺座は早大教授今井兼次の設計
に係る。

工藝

山鹿清華作「ぶらじる丸壁張」 山鹿清華は依頼に
より大阪商船ぶらじる丸一等社交室用の「手織錦大八洲
圖壁張」を作製、半歳を要して十二月完成した。寸法は

縦約三米餘、横九米餘で入口の上に圓形に取りつけるも
ので、手織錦の技法に就ては種々の工夫が凝された。

挿畫

挿畫専門畫家は固より、一般畫家で新聞其他に挿繪を
執筆する者も少くないが、それ等の活動の概要を記録す
る爲、本年度主要新聞所載小説挿繪の一覽を左に掲げ
る。(新聞名五十音順)

大阪朝日新聞 東京朝日新聞

波 濤 (林芙美子)朝刊 小磯 良平 一四・五・八
光と影 (阿部知二)同 岩川専太郎 一四・五・九—一〇・六
泉 (岸田國士)同 松野 一夫 一四・〇・七
宮本武藏 (吉川英治)夕刊 石井 鶴三 一四・七・二
花と兵隊 (火野葦平)同 中村 研一 一四・六・四
新水滸傳 (村松梢風)同 河野 通勢 一四・七・二—一三・三

大阪毎日新聞 東京日日新聞

女の教室 (吉屋信子)朝刊 岩川専太郎 一四・二・一—一八・二
白蘭の歌 (久米正雄)同 小林 秀恆 一四・八・三—
海と兵隊 (火野葦平)夕刊 林 唯一 一四・三・五
喧嘩蕎 (那枝完二)同 小村 雪岱 一四・三・五
維新櫻 (白井喬二)同 林 唯一 一四・三・六—一〇・七
蛇姫様 (川口松太郎)同 岩川専太郎 一四・〇・八

河北新報

心の勝利 (徳田秋聲)朝刊 吉川貫三郎 一四・二・五
大都會 (武田麟太郎)同 高岡徳太郎 一四・二・六—一七・四
美しき蟲 (片岡鐵兵)同 田代 光 一四・二・五—一三・六
朱唇帖 (小島政二郎)同 岩田専太郎 一四・二・七—
坂本龍馬 (實本 浩)夕刊 志村 立美 一四・一・七—一六・三
日本振天 (山中峯太郎)同 伊勢 良夫 一四・一・七—一六・三
記(別巻) (さくら吹雪)川口松太郎同 小村 雪岱 一四・二・三—
大岡政談 (悟道軒圓玉)同 茅場 哲雄 一四・六・四—一三・三
後藤半四郎 京城日報

京城日報

南風の歌 (加藤武雄)朝刊 富田 千秋 一四・一—一四・六
空に残れる (尾崎士郎)同 高木 清 一四・六—一四・九
激 流 (久生十蘭)同 伊勢 良夫 一四・九—一五・一
開花三世相 (村松梢風)夕刊 中 一彌 一三・九—一四・三
魯西亞船 (土師清二)同 坪内節太郎 一四・三—一四・八
三國志 (吉川英治)同 矢野 橋村 一四・八—

國民新聞

花ひらく (北村透馬)朝刊 高木 清 一四・三・八
亞細亞 (乾信一郎)同 清水 昆 一四・三・九—一七・一〇
江見家手帖 (寺崎 浩)同 川瀬佐一郎 一四・七・二—一三・三〇
愛にほふ (寺崎 浩)同 武市半平太(田中實太郎)同 田代 光 一四・四・九—一〇・一
晝夜用心記 (三村伸太郎)夕刊 木下 大雅 一四・四・八
一劍立春 (城 昌幸)同 坪内節太郎 一四・〇・四—一五・五・三

新愛知

元祿忠臣藏 (壬生龍太郎)朝刊 木俣 清史 一四・三・九—一五・三
美しき蟲 (片岡鐵兵)同 田代 光 一四・六・三—一四・二
朱唇帖 (小島政二郎)同 岩川専太郎 一四・二・三—一四・二
心の勝利 (徳田秋聲)朝刊 吉川貫三郎 一四・一・一—一六・九
街の物語 (沖 通二)同 三船 成美 一四・二・八
坂本龍馬 (實本 浩)夕刊 志村 立美 一四・四・三〇
新篇 (中川雨之助)同 武田 瑞史 一三・八—
水戸黃門 (川口松太郎)同 小村 雪岱 一四・五・一—

中外商業新報

幸福の鏡 (井澤光治良)朝刊 小林 秀恆 一四・四・九
眞晝の旋律 (高見 順)同 田代 光 一四・四・三—一七・七
人生畫帖 (石川達三)同 伊東 顯 一四・二・八—
花の仇夢 (武田麟太郎)夕刊 神保 朋世 一四・三・八
女夫系圖 (子母澤寛)同 木下 大雅 一四・三・九—一八・五
三國志 (吉川英治)同 矢野 橋村 一四・八・三—

福岡日日新聞

心の勝利 (徳田秋聲)朝刊 吉川貫三郎 一四・三・七
大都會 (武田麟太郎)同 高岡徳太郎 一四・三・八—一六・三

美しき蟲 (片岡鐵兵)同 田代 光 一四・六・三—二・一

朱唇帖 (小島政二郎)同 岩田專太郎 一四・二・三—

坂本龍馬 (濱本 浩)夕刊 志村 立美 一四・五・四—

さくら吹雪 (川口松太郎)同 小村 雪岱 一四・五・五—三・三—

報知新聞

制服の街 (竹田敏彦)朝刊 富永謙太郎 一四・一・三—

東京の女性 (丹羽文雄)同 小池 巖 一四・一・三—六・二六

青春散華 (戸川貞雄)同 高木 清 一四・六・七—二・二・六

京漢線突破 (伊地知進)同 寺本 忠雄 一四・二・七—

忠臣藏 (矢田挿雲)同 小村 雪岱 二—一四・七・三九

忠臣藏 (矢田挿雲)夕刊 小村 雪岱 一四・七・三—

續八州 (子母澤寛)同 志村 立美 一四・七・九—

都新聞

現代の英雄 (開宮茂輔)朝刊 野口彌太郎 一四・五・三—

人生劇場 (尾崎士郎)朝刊 中川 一政 一四・五・三—二・二・八

〔風雲篇〕 水の階段 (大佛次郎)同 宮本 三郎 一四・二・二—九—

地階の處女 (廣津和郎)同 矢島 堅土 一四・一・三—

風のやうに (片岡鐵兵)同 樋口富麻呂 一四・二・三—一六・三

家庭の秘密 (丹羽文雄)同 志村 立美 一四・六・三—

兩國棍之助 (鈴木彦次郎)夕刊 小村 雪岱 一四・三・三—四

石井源藏 (長谷川伸)同 木村 莊八 一四・三・五—二・三

兄弟

西郷隆盛 (第一部) (林 房雄)同 海老原喜之助 一四・二・四—

早春篇

〔第一節〕 大陸の花嫁 (林 房雄)朝刊 志村 立美 一四・三・三—〇

青春學校 (竹田敏彦)同 富永謙太郎 一四・二・二—

郷愁 (大佛次郎)同 松野 一夫 一四・四・六—八・〇

女は泣かず (竹田敏彦)同 富永謙太郎 一四・八・二—

新篇 (川口松太郎)夕刊 岩田專太郎 一四・四・五—

丹下左膳 (角田喜久雄)同 小川 倩葎 一四・四・二—三・七

破魔弓傳奇 (土師清二)同 志村 立美 一四・三・九—

建築

本年度竣工建築物の詳細なる表は建築學會編建築年鑑に載せられてゐる。さうした表をこゝに載せる事は重複するのみならず、本年鑑の使命でもなく、建築年鑑だけの完璧も期し難いので、こゝには美術年鑑としての立場から、注目すべしと思はれる建築のみを、調査し得た範囲内で、参考の爲に記した。採録すべくして洩れたものもあるべく、本年鑑使用者に單に参考に供するだけのものである。

興亞院 麴町區準町、管轄管財局設計、竹田組施工、木造二階、總延面積五、三八七平方

電話局築地分局 京橋區入舟町、逓信局管轄課設計、錢高組施工、鐵筋コンクリート造地下一階地上四階、總延面積二、〇六一平方

栃木縣々廳並警察廳舎 宇都宮市、佐藤事務所設計、戸田組施工、鐵筋コンクリート造四階、總延面積四、六一五平方

東大綜合試驗所 本郷區本富士町、内田祥三設計、錢高組施工、鐵筋コンクリート造四階、八、三六七平方

帝大工學部三號館 本郷區大橋内、帝大管轄課設計、大倉組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造五階、總延面積二、四四〇坪

上宮中學校 大阪市天王寺區上ノ宮、宇賀一郎設計、木村組施工、鐵筋コンクリート造四階(一部地階及び五階、防空塔七階)、總延面積七、六一八、〇六平方

東星學園 世田ヶ谷區玉川、守屋哲之介設計、直營工事、鐵筋コンクリート造二階、總延面積四一八坪

三光尋常小學校 芝區白金三光町、東京市設計、安藤組施工、鐵筋コンクリート造三階、總延面積三、八八六平方

生駒山青年道場 大阪府生駒山上、石川純一郎設計、竹中工務店施工、木造二階一部三階(他ニテレス四〇、

〇坪、二階露臺二八、〇坪)、總延面積二、三二二、九四坪

保生園 東京府下、松本與助、大澤源之助設計、清水組施工、木造地下一階地上二階、總延面積一〇、七九一平方

日赤廣島病院 廣島市千田、佐藤功一設計、廣島藤田組施工、鐵筋コンクリート造地下一階地上四階、總延面積九、八九一平方

日赤仙臺病院 仙臺市北一番丁、宮城縣設計、石川雄三郎施工、木造二階、總延面積三、四六五平方

産業組合中央會 麴町區有樂町、同會設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造十階、總延面積九、三四六平方

糖業會館 麴町區有樂町、渡邊事務所設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造七階、總延面積五、八〇四平方

大正生命ビル 麴町區有樂町、大林組設計、施工、鐵骨鐵筋コンクリート造八階、總延面積一、三三二平方

板谷生命ビル 大阪府南區心齋橋、村野事務所設計、島藤施工、鐵筋コンクリート造五階、總延面積一、〇七三平方

東日別館 麴町區有樂町、大倉組設計、施工、木造二階、總延面積四、〇八四平方

神港ビル 神戸市海岸通、木下事務所設計、竹中工務店施工、鐵骨鐵筋コンクリート造九階、總延面積一四、三六七平方

都ホテル 京都市三條線上、村野藤吾設計、藤木工務店施工、鐵筋コンクリート造地下二階地上二階、總延面積(ホテル新館)三六〇坪、(宴會場)三〇〇坪

松島ニューパークホテル 宮城縣松島、吉田五十八設計、木田組施工、木骨コンクリート造三階(塔屋六階)總延面積一、四一一坪四六六

三星百貨店 名古屋市中區榮町、清水組設計、施工、鐵筋コンクリート造地下二階地上四階、總延面積一一、

三六五平方米

三越百貨店 神戸市神戸區元町、横河工務所設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造地下二階地上三階、總延面積一、八〇二坪

王置商店 日本橋區本町、平松義彦設計、清水組施工、鐵骨鐵筋コンクリート造四階、總延面積一、二〇〇坪

平野屋 銀座五丁目、店主設計、清水組施工、木造二階、總延面積七八坪

日本電力瀬戸第二發電所西村堰堤 同社及山口蚊象設計、大倉土木株式會社施工、コンクリート造重力式堰堤高さ一九、五〇米、頂長七八、七米

あるぜんちな丸 大阪商船、三菱・長崎造船所施工、全長一六六米、幅二二米、旅客定員九〇一名

紐育萬國博日本特設館 岸田日出刀原案、松井保生設計、パークラップ會社施工、木造一階神明造、總延面積四五〇坪

桑港金門萬國博日本特設館 内田祥三設計、大倉組施工、木造三階

糧原神宮 奈良縣畝傍、内務省設計、施工、木造、總延面積一、二一九坪

美術界彙報

一月

川島理一郎從軍 川島理一郎は陸軍省から從軍畫家として南支方面へ派遣され、一月六日出發した。

緋尚會結成 尙美堂關長次郎の主催により日本畫家の新人を集めた清尙會は昨秋解消したが、更めて十二名の作家を以て同様な緋尙會が結成された。

工藝指導所大阪出張員事務室 工藝指導所では、輸出工藝雜貨改善に關する調査研究並に關西支所設置準備事務取扱のため、大阪市西區江の子島大阪府工業獎勵館内に大阪出張員事務室を設置し、一月十日より事務を開始した。

福田豐四郎、吉岡堅二歸京 陸軍に從軍して滿洲、北支、中支等を三ヶ月半に亙つて巡つた兩畫家は、一月十二日歸京した。

朱弦會結成 革丙會に屬する安田毅彦その他の日本畫家によつて朱弦會が結成された。

鬼面社結成 大久保作次郎を中心とする洋畫家達によつて鬼面社が結成された。

大和實制定 日伊兩國間の文化的親善の爲イタリア中亞極東協會が設定した「レオナルド・ダ・ヴィンチ賞」に對應し、日伊學會ではイタリア人の日本及び

日本文化研究に對する表彰として大和賞（賞金一千圓）を制定し、研究論文を募ることとなつた。

現代美術幻燈板製作 國際文化振興會ではさきに古美術幻燈板を製作し、既に一萬三千餘枚を各國に配布して好評を得てゐるが、新にその姉妹篇として現代美術の幻燈板を製作することになつた。明治以降の繪畫、彫刻、工藝、建築の四部門に亙り名作約二百點を選定し、現代美術を通じて日本文化史の經移を現さうとするものである。

二月

紐育萬國博出品現代畫 四月三十日に開かれるニューヨーク萬國博覽會出品の現代畫は、帝國藝術院會員の作品中から日本畫九點、洋畫十點が選定され、發送に先ち二月一日から七日まで日本橋三越で内示會が開かれた。（本欄二五頁參照）

熊岡美彦從軍 熊岡美彦は海軍省及び陸軍省の囑託として南支方面に從軍、二月一日出發した。

議會における質問演說 二月六日衆議院豫算委員第二分科會で、委員川崎克は荒木文相に對し、美術行政、文部當局の指導精神等について質問し、美術學校展覽會、古美術保存の現狀等の不滿につき意見をのべた。

紐育萬國博出品寫眞壁畫 ニューヨーク萬國博覽會日本館日米國交參考部を飾る商工省、日米協會出品の日米親善大壁畫は、オリエンタル寫眞工業會社で製作完成、二月七日同社工場で内示した。

縦十尺横二十八尺五寸、襖張りとし、富士山と姫路城、ワシントン記念碑、日米の學童らをモンタージしたものである。

國畫會寫眞部新設 國畫會では今年から新に寫眞部を設け、藝術印畫及び應用印畫等の藝術的にみて優れたものを從來の繪畫規定によつて取扱ふこととなつた。

日本文化大觀編修會官制公布 紀元二千六百年奉祝會がその事業の一として計畫した日本文化大觀の編纂は、河原春作を委員長として事業を進めつゝ、あつたが、二月八日官報を以て左の如く日本文化大觀編修會官制が公布され、同日委員三十三名及び幹事五名の任命が發令された。委員の中美術關係の學者は帝室博物館鑑査官秋山光夫、東京帝國大學教授藤懸靜也、美術研究所員矢代幸雄である。

日本文化大觀編修會官制

第一條 日本文化大觀編修會ハ文部大臣ノ管
理ニ屬シ紀元二千六百年奉祝會ノ委屬ニ依
ル日本文化大觀ノ編修ヲ掌ル

第二條 日本文化大觀編修會ハ會長一人並ニ
顧問及委員若干人ヲ以テ之ヲ組織ス

第三條 會長ハ敎學局長官ヲ以テ之ニ充ツ
顧問及委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ
於テ之ヲ命ズ
(第四條以下略)

陸軍記念日ポスター及表はがき 陸軍省では三月十日の陸軍記念日を機會に

鶴田吾郎筆「興亞」のポスター四萬枚を印刷、又同畫、向井潤吉筆「突撃」及び日露、世界大戰、支那事變戰線比較圖を三枚一組のゑはがきとして二十萬組を印刷し現地及び内地各方面へ發送した。

戰爭畫海外に惡影響 昨年以來展覽會に現はれた戰爭畫の中、出版物等によつて海外に紹介され、陰慘不快等の印象を與へて惡影響を及ぼすもののある實例が、二月十四日アルゼンチン駐在の内山公使から外務省に報告されて注意をひいた。問題の作品は昨秋二科展出品の向井潤吉作「突撃」と阿部合成作「見送る人々」とで、國際寫眞情報の美術展號によつて紹介されたものである。同公使の報告によれば、これらの繪畫は正義の日本人の姿とは見えす悲壯な黒人の群又は無智な土人の集りの様な印象を外國人に與へ、ひいては聖戰の認識を甚だ誤るおそれがあるから即刻海外頒布を嚴禁されたいと要請してゐるもので、當局では早速調査の上取締を講ずることとなつた。

版畫を米國へ 米國百二十六校の美術科研究室から成る世界版畫研究會から吉田博宛に、今年度の研究を近代日本版畫と決定したからその代表として作品百二十六枚と製作過程を示す木版を送られたいとの依頼があつたので、之に應じて製作送附することとなつた。

桑港萬國博開會 三十五箇國參加の

下に五千萬ドルを投じて作られたサンフランシスコの金門萬國博覧會は、二月十八日華々しく開會された。日本特設館は昨秋十月以來工を急いでゐたが、二月十四日竣工し、同博覧會開會と同時に他の外國館に魁けて開館式を舉行、直ちに公開し人氣を集めた。

昭和三十二年 昭和三十二年 昭和三十二年
の成績による本年度の同賞授賞者は、二月十三日委員會に於て銓衡の結果、新制作派協會員内田巖及び二科會員岡田謙三の二名に決定、同二十日賞金各六百圓を贈つた。

大阪美術懇話會設立 大阪府情報部の幹旋によつて二月三日在阪の畫家、彫刻家ら約二十名が府廳に集り、府當局者と共に種々懇談協議を重ねた結果、大阪を中心とする美術家の團體として大阪美術懇話會を設立することとなり、委員を設けて規約の作製その他準備を重ねてゐたが、二月二十一日同會の設立を決定した。その趣旨は「會員相互の時局に處する信念を固くし美術の振興と文化の向上に努め以て美術報國の使命を全うせんとする」にある。

パリにおける日本舞踊展 パリの國際舞踊博物館で五月一日から二箇月間日本舞踊展覽會が開かれることになり、國際文化振興會では出品物の選定に協議を重ねた結果、舞臺模型、舞踊人形、舞臺圖、小道具、衣裳、面、レコード、樂譜、三味線、番組、筋書、ポスター、その他

日本舞踊を示す繪畫、寫眞、映畫に互つて選擇を完了、二月二十日同會で展示會を行ひ近く發送することになった。尙展覽會終了後右出品物は同館に寄贈されることとなつた。

平安朝風俗の聖母像 四月ローマで開かれる萬國カトリック婦人大會にわが國からも代表が出席するが、この大會に際して各國からローマ教皇に献上する聖母像を、わが國では日本畫家小關きみ子が選ばれて製作に當り、三尺に六尺の畫面に平安朝風俗の聖母像を描いた。

紐育萬國博出品物發送 四月開かれるニューヨーク萬國博覧會のわが國からの出品物はいづれも完成したので、最後の發送に先ち二月九日から四日間東京府美術館で國內展示會を開いた後、同二十日發送した。

乾坤社創社 大阪在住の南畫家矢野橋村は同志を集め、二月二十三日新團體乾坤社を創立した。南畫の基礎の上に立ち、將來日本畫の大道を拓き、新時代の藝術を建設せんとするものである。

麥德作「妓生の家」買上 土田麥德の絶筆として未完成に終つた大作「妓生の家」は下圖素描類と共に李王家美術館の買上となつた。
パリ、ポスター展出品 四月パリで國際觀光ポスター展が開かれるので、わが國からは國際觀光局出品の堂本印象作「春日神社」、新井康弘作「雲峰富士」、鐵道省運輸局出品の畠山錦成作「踏む大地

漲る力」、京都府觀光課出品の竹中良吉作「雪の平安宮」、木本繁堂作「新緑の京都」の五點を送ることとなつた。

三月

兒童繪本肅正 内務省圖書課が昨秋以來着手した兒童の讀物である漫畫、繪本等の肅正については、一月中發賣禁止としたもの九件、二月は皆無の好成績を示すに至つたが、製作者側では自肅のため東京大阪兩市の同業者を中心として日本文學繪本出版協會を設立し、非常時下兒童讀物の改善に努めることとなつた。

日獨文化の夕 ベルリンの日本古美術展覽會が二月二十八日から開かれたのに呼應して、日獨文化協會主催日獨文化の夕が三月四日明治生命館講堂で開かれ矢代美術研究所長、秋山帝室博物館鑑査官の講演等が行はれた。

朝鮮總督府美術館竣工 總督府では始政二十五周年記念事業として綜合博物館建設を計畫中の所、時局のため工事中止のやむなきに至つたが、その中着工中であつた美術館のみは引續き工を進め、この程竣工した。鐵筋コンクリート造、六五〇坪、工費十四萬圓で、本年から鮮展その他展覽會場として使用されることとなつた。

イタリヤ陸軍に油繪贈呈 三月十日の陸軍記念日を期してわが陸軍から、事變當初以來よせられたイタリヤ陸軍の好意を感謝する意味で、向井潤吉作の油繪

「突撃」(十二號)を贈ることとなり、三月九日參謀本部で樋口少將からイタリヤ大使官附武官に贈呈された。

橋本關雪渡支 皇軍の姿を日本畫に描かうとして橋本關雪は三月十三日神戸發中支に向つて旅立つた。

レオナルド・ダ・ヴィンチ賞 昨年イタリヤ中亞極東協會が設定し、その取扱ひを日伊學會に委嘱して募集した第一回レオナルド・ダ・ヴィンチ賞の懸賞論文は、年末の締切までに美術に關するもの三篇、その他合計十篇が集まり、爾來審査中であつたが、三月六日最終の審査員會で美術研究所囑託隈元謙次郎の「明治初期に來朝せるイタリヤ美術家とその功績」に授賞することを決定し、同十五日イタリヤ大使館で授賞式が行はれた。

ブルーノ・タウト追悼會 わが國の建築及び工藝界に多くの貢獻をのこし、舊臘イスタンブルで逝去したドイツ建築家ブルーノ・タウトを追悼するため、有志の發起により三月十六日一つ橋學士會館で晚餐會が開かれ五十餘名の出席があつた。

戦勇士の胸像製作 滿洲事變及び今事變に拔群の武勳をたて護國の華とちつた勇士達の胸像を刻んで後世に傳へようと、東京美術學校出身の石原昂等七名の彫刻家により昨年末報國藝術會が結成されたが、北村西望の指導、遊就館長渡邊少將その他の後援を得て製作に着手、倉永辰治少將、加納治雄少將、南郷茂章

少佐、梅林孝次大尉、西住小次郎大尉、大山勇夫大尉、荒木克業大尉の七名の胸像原型を完成し、三月十九日遺族らの内覧に供した上最後の仕上げをなし遊就館に献納することになった。

美術記者聯盟結成

美術雑誌の代表者十餘名は三月二十一日東京府美術館食堂に會合、協議の結果美術記者聯盟を結成し左の聲明書を發表した。

「皇國の藝術文化興隆發展のため適切な連絡と協力を目的とし美術記者聯盟を結成し新日本文化創造運動に寄與せんことを期す」

日本兒童漫畫家協會結成

宮尾しげを、田河水泡、横山隆一その他の兒童畫家を發起人として三月二十一日日本兒童漫畫家協會が結成された。

「八紘之基柱」建設の計畫

宮崎縣では紀元二千六百年記念事業として、皇祖發祥の聖地を記念する高塔「八紘之基柱」(あめつちのものはしら)を建設する計畫をたて、日名子實三に設計を委嘱中であつたが三月二十三日その模様が完成した。方十五間の基壇の上に高さ百二十尺の塔が建てられるものである。

ローマ萬國博に參加

昭和十七年四月に開かれる豫定のフアシスト施政二十周年記念ローマ萬國博覽會に參加招請をうけた政府では、舊臘來關係當局間で協議中であつたが、三月二十七日豫算約五百萬圓を以て正式參加することに決定した。

日伊文化協定公布

日伊兩國間の文

化的協力に關する協定が、三月二十三日東京で有田外相とアウリチ伊國大使とにより調印され、同二十八日附官報を以て公布された。協定は左の四條よりなる。

第一條 締約國ハ其ノ文化關係ヲ緊實ナル基礎ノ上ニ樹立スル爲努力カスベク且之ニ付最モ緊密ナル協力ヲ爲スベシ

第二條 締約國ハ前條ノ目的ヲ達成スル爲學術、美術、音樂、文學、演劇、映畫、寫眞、無線放送、青少年運動、運動競技等ヲ通ジ兩國間ノ文化關係ヲ常ニ増進スベシ

第三條 前條ノ規定ノ實施ニ必要ナル細目ハ締約國ノ權限ノ官憲間ノ合意ヲ以テ決定セラルベシ

第四條 本協定ハ署名ノ日ヨリ之ヲ實施スベク締約國ノ一方ハ十二月ノ豫告ヲ以テ本協定ヲ廢棄スルコトヲ得

なほ調印と同時に發表された外務省聲明によれば、本協定に即應し兩國の權限ある官憲は取あへず左の諸事項を協議決定することになつてゐる。

一、兩締約國の一により提案せらるべき文化協力に關する發議考究の爲の委員會の設置
二、兩國の文化的接近に資すべき新なる文化施設の設置及既存の此の種文化施設の維持並擴充、三、本協定の指導精神に連由し且追て協定せらるべき範圍に於て行はるべき兩國學校教科書の補正、四、政府派遣留學生に對する便宜供與、五、教授派に學生交換の増進、六、兩國の一に於て文化的活動に従事する者に對する相互推薦、七、青少年團による交際の増進、八、圖書、雜誌の交換、九、兩國の文化的接近に資すべき一般並專門的文獻翻譯の相互獎勵、一〇、藝術文化交換、一一、映畫交換、一二、交換放送、一三、運動競技並に厚生運動による交際、一四、觀光事業による交際

東陶會解散

東京在住の陶藝家によつて組織されてゐた同會は、創立滿十五年を機に三月三十一日次の宣言を發表して解散した。

「本會は創立以來茲に十有五年を閲したり。この間多大の努力を重ねたるの故を以て漸く所期の目的を達成したり。然れども本會員各位の成熟と多面的なる努力とは今後愈々華かなる發展を約するものたるや必せり、本會は茲に一段の發展を望まむがために會を解き以て諸賢の躍進に備へんとす。敢へて解散を宣言する所以なり。」

日本工藝品海外展示會

日本輸出工

藝聯合會の主催による第六回海外展示會は、アルゼンチン首府ブエノスアイレスで三月三十一日から二週間開かれた、展示品は漆器、陶器、木工、金工等約八百點で、南米における展示會は今回が最初である。

東京市記念事業計畫

東京市では紀

元二千六百年記念事業として左の三大計畫をたて、三月三十一日その要綱を發表した。その一は宮城外苑整備で、御親臨臺の設置、十萬人を容れる廣場の造營、肇國記念物の設置、和田倉門、渡櫓及び和田倉橋の復原、記念噴水の設置などを含み豫算二百五十萬圓。整地労働は市民の勤勞奉仕による計畫である。その二は新東亞建設大展覽會並に東京大會で、明年九月一日から十二月十日まで上野不忍池畔及び竹の臺を會場とし、肇國館、文化館、産業館、交通館、防共館、都市館、

陸軍館、海軍館、美術館その他を設け、又日滿支の諸團體代表一千名參加の新東亞建設東京大會を開く等である。その三は東京市民體力強化で、豫算千五百萬圓を以て綜合大競技場、中央體育館、綜合

厚生運動場、市民厚生道場、市民厚生體育研究道場、近隣厚生運動場、厚生運動公園の建設を五ヶ年計畫によつて完成せんとするものである。

四月

陶磁器試験所創立二十周年記念式

陶磁器試験所が創立されてから二十周年に當るので四月四日その記念式をあげ創立以來の勤績者瀬戸試験場長赤塚幹也、圖案技手田川基一、繪付技手井本半次郎の表彰を行った。

福澤一郎獨立展脱退

獨立美術協會

にあつて前衛派の代表的作家と見られてゐた福澤一郎は四月五日左の聲明書を發表して同會を脱退した。同會では協議の結果彼を除名處分にし、又同志に告ぐとの聲明を發してその立場を明かにした。

「畫壇は今日戰爭といふ大きな現實體驗や苦惱の間に、そして後に生ずるであらう我々の熾烈な繪畫精神の誕生に對して、餘りにも無關心であります。我々がこれに對する認識や熱情を持ち、そしてその爲に眞に在野性を主張出来る展覽會を遂行する事は、絕對に必要であります。これにはまた綜合的な藝術各部門の協力が望ましく、それによつて一層輝しい成果を収める事が出来るでせう。不幸にして小生は、現在の環境に在つて、以上の目的に適ふ何事も爲し能はぬことを痛感するに至

りました。そこで今回第九回展を最後として
獨立美術協會を脱會し、更に適切な組織の下
に、明日の繪畫を目指して倍舊の努力をした
と思ひます。脱會に際して一言聲明します
四月五日 福澤一郎

綠菴會結成 新構造社を脱退した神
津港人は、新に洋畫團體綠菴會を組織し
た。五月第一回公募展を開く豫定。

藤田嗣治外遊 藤田嗣治は四月六日
發渡米した。米國を経てパリに赴く筈。

創工社解散 大阪における工藝團體
創工社は三月二十五日總會を開いて解散
を決議し、四月七日左の聲明を發した。

「創立以來五星霜を重ね、この間數回のパン
フレットと三回の展覽會を開催し、一意研究
に邁進し來つた吾が創工社も、今や大衆の見
地と小乗の實功とに鑑み、玆に再出發を必要
とし、一旦その結成を解くこととした。右聲
明す。昭和十四年四月七日 創工社」

建築美術協會結成 建築家と美術家
とが合體して壁畫の活用などによる建築
美の創造を目ざし、建築美術協會が結成
された。今和次郎、國師嘉彦、内田巖、
福田豊四郎、本郷新、野口道方らが加は
つてゐる。

報道美術協會結成 東京高等工藝學
校工藝圖案科卒業の有志によつて、四月
八日報道美術協會が結成された。

彫漆手筈御贈進 イラン帝國皇太子
殿下御結婚奉祝のため、わが國から使節
を派遣し四月九日そよかぜ號による親善
飛行が行はれることになつたが、畏き邊
りではこの使節に托して磯井如眞作石楠
花岡彫漆手筈を御祝品として御贈進遊ば

されることとなつた。この作は昨秋文展
で特選となり宮内省御買上の榮を得たも
のである。

日本陶藝研究會結成 三月解散され
た東陶會所屬の作家らによつて四月十一
日日本陶藝研究會が結成され、左の宣言
が發表された。

「陶藝の道は廣く深い。が、而し粉骨砕心以
つて、その域に通ずれば、遂に道は成るもの
だと思はれるのである。日本陶藝研究會の意
圖は、この域に到りたいがために外ない。
(中略)今日の陶藝は、振ふべくして振ひ得な
い如き情勢にある。が、一にこれも眞實心の
不足と、研究の缺くるところがあるからだ
と信じたと思ふ。敢へて、我等は新東亞建設
の大業に即して一層の堅忍努力を致さねばな
らぬ決意を固め、以つて本會の目的達成に盡
さんとし、右、宣言する次第である。」

貿易局輸出工藝圖案展開設 商工省
では輸出工藝振興のため、賞金を定めて
工藝圖案を募集、展覽會を開催すること
となり、四月十四日官報を以て貿易局輸
出工藝圖案展覽會規程及び第一回展覽會
の要綱を告示した。

陸軍美術協會結成 事變開始以來美
術家の從軍するもの二百餘名に上り既に
幾多の戰爭畫を生んでゐるが、これらの
畫家の間で一層軍部との連絡を密にし、
美術家相互の親睦と國策への協力を圖る
ため、陸軍省情報部の賛同を得て四月十
四日陸軍美術協會が結成された。松井石
根大將を會長とし、藤島武二を副會長と
する。

萬谷龍岬筆塚建立 故萬谷龍岬の七

回忌に當り野田九浦揮毫の墓石が建立さ
れると同時に、正木直彦揮毫の筆塚が舊
門弟らによつて小石川區戸崎町喜運寺に
建設され、十月七日の忌日を繰上げ四月
十五日法要をかねて除幕式が行はれた。

日伊文化の夕 日伊文化協定の締結
を記念するため、日伊學會と國際文化振
興會との共同主催により四月十五日夜九
段軍人會館で日伊文化の夕が開かれ、美
術研究所長矢代幸雄の講演その他が行は
れた。

戊辰會解散 川合玉堂を顧問とし兒
玉希望を中心とする戊辰會は、第十回展
終了を機會に四月十五日左の聲明を發し
て解散した。

「昭和三年創立したる戊辰會は、同十年末擴
大強化を行ひ今日に至る。其の間展覽會を重
ぬること十回、概ね所期の目的を達成したる
ものとし、更に後日の伸展に備ふるため、玆
に解散す。右聲明す。」

米國大統領に水彩畫贈呈 故齋藤駐
米大使の遺骨が米國軍艦アストリア號に
よつて禮送されることになつたので、外
務省ではルーズヴェルト大統領の厚志に
感謝の意を表するため、瀧澤邦行に委嘱
して水彩畫全紙大の山櫻圖を作製、四月
十七日同艦入港迄に完成し大統領に贈呈
することとした。

主線美術協會繪畫部解散 繪畫彫刻
の兩部よりなる主線美術協會は、兩部の
圓滿なる協議の下に四月十八日繪畫部を
解散し、彫刻のみの團體として存続する
こととなつた。

荒木十畝渡支 荒木十畝は皇軍慰問
と美術による日滿支提携に貢獻せんとし

工藝美術輸出報國會結成 優れた工
藝品の輸出振興による報國を目的とし、
大阪の工藝作家らによつて工藝美術輸出
報國會が結成され、四月十七日創立總會
が行はれた。發起人は山本笙園、黒岩淡
哉、越田尾山、中島豊次、島野三秋、大
國壽郎、安原祥窓、入江來布、杉田禾堂
柴崎風岬の十名、會員約三十名である。

少年文學作家畫家協會結成 健全な
小國民文學の創造を目的として、少年文
學作家及び挿畫家らが同會を結成し、四
月二十日第一ホテルで發會式をあげた。

皇陶會結成 先頃解散された東陶會
所屬作家のうち宮之原謙、各務鑛三、安
原喜明、板谷梅樹の四名によつて新に皇
陶會が結成された。

佐分賞授賞 本年度佐分賞授賞者は
同賞委員會で銓衡の結果、國畫會同人倉
田葵及び二科會々員島崎鶴二の兩名に決
定四月二十二日佐分宅で授賞を行つた。

大阪工藝振興展開設 大阪府工藝協
會では府、市その他の聯合主催により
從來産業工藝展を開催し來つたが、時局
に鑑みてこれを革新充實せしめ、本年よ
り新に大阪工藝振興展覽會を開設するこ
ととなつた。この展覽會は春秋二回とし
春季には美術工藝展を、秋季には産業工
藝及び圖案展を開くこととするもので、
出品者は大阪府在住者及び大阪府工藝協
會々員に限つてゐる。

荒木十畝渡支 荒木十畝は皇軍慰問
と美術による日滿支提携に貢獻せんとし

荒木十畝渡支 荒木十畝は皇軍慰問
と美術による日滿支提携に貢獻せんとし

て、四月二十九日門司發渡支した。先年日支兩國間に展覽會を開いた東方繪畫協會の事業を再開する希望である。

五月

文展第三部作家協會結成

文展出品の彫塑家で所屬團體をもたぬ人々のために、藤井浩祐、吉田三郎らを幹事として文展第三部作家協會が組織され、六月東京で第一回展を開くこととなつた。

「海の荒鷲」像海軍館に寄贈 昨午國展に出品された清水多嘉示作「海の荒鷲」は、高さ八尺八寸の銅像として中村精七郎から海軍省に寄贈され、海軍館の芝生に建てられることとなつた。

形象工藝美術會結成

大阪工藝團體創工社は先月解散したが、その後これに代る新團體として五月六日形象工藝美術會が結成された。

紐育萬博日本館開館式

四月三十日開會されたニューヨーク萬國博覽會日本特設館の公式開館式は、五月六日關係者を招待して盛大に行はれた。

鍋井克之の渡支

二科會員鍋井克之は滿洲及び北支の繪畫教育調査を主な目的とし、約二ヶ月の豫定を以て五月七日出發した。

小堀靑香供養塔建立

小堀靑香の供養塔が門下の革丙會によつて府下北多摩郡神代村の深大寺に建立された。塔は臺石から高さ六尺の五輪塔で、中に門下生の寫經及び故人愛用の印章筆墨などを納

め、五月十日嗣子小堀安雄、門下安田毅彦、小山榮達ら十二名が列席埋葬式を営み、同十五日關係者集盛大な追善供養を營んだ。

美術文化協會結成

さきに獨立美術協會を脱退した福澤一郎は、同志三十九名と共に美術文化協會を結成し、五月十七日發會式をあげた。

ローマで日本畫個展

イタリア政府主催により、今秋十月ローマで園部香峰の作品四十點を展覧することになつた。

六月

日本諸學振興委員會藝術學部委員

文部省では諸學振興委員會内に藝術學部を設け六月一日附を以て左記十一名を昭和十四年度藝術學部臨時委員に任命又は囑託した。尙十月十八日から四日間第一回藝術學會を開き諸種の研究發表を行ふこととなつた。

文部書記官本田弘人、東京帝大教授齋藤勇、同藤懸靜也、同大西克禮、京都帝大教授成瀬清、東北帝大教授阿部次郎、九州帝大教授矢崎美盛、東京美術學校長芝田徹心、東京音樂學校長松森壽、美術研究所員矢代幸雄、鹽谷温、西脇順三郎

美術記者聯盟聲明

美術記者聯盟は六月五日例會を開き協議の結果左の聲明書を發表した。

「東京府美術館常議員及び常議員會は今日の美術界の諸情勢に鑑み不適任と認む、よつて我々は常議員の改選及常議員會機構の改革を要望す」

山元春舉七回忌追福茶會

山元春舉の七回忌に當り、生前主基風俗御屏風揮毫拜命の記念として設けられた茶席穩露に於て、六月十、十一日遺墨並に遺愛の餘技品を展列、同時に山元清秀により第一席大津市蘆花淺水莊、第二席山口家別邸、第三席土橋家別邸に於て追福茶會が催された。

東臺邦畫會名義解消

東京美術學校の同窓會の組織ができたため、同趣旨の東臺邦畫會はその名義を解消し同窓會日本畫分科會を設立することになつた。

事變記念繪はがき

事變二周年記念日の七月七日に際し陸軍省では各方面に配布すべく記念繪はがきを作製した。向井潤吉作「上海戦の想出」、吉田傳作「武漢空爆行」、福田豊四郎作「銃後の田園」の三枚一組である。

日獨文化聯絡協議會設置

昨秋締結された日獨文化協定に基き、東京及びベルリンに日獨文化聯絡協議會が設置され六月十七日兩國政府は東京協議會委員長として日本側外務省文化事業部長三谷隆信、ドイツ側日獨文化協會主事ワルター・ドーナート博士以下合計十名の常任委員を任命、外務次官々會で同協議會發會式をあげた。

新渡邊派協會結成

東京美術學校卒業の青年作家らによつて、六月十八日前衛派の團體新渡邊派協會が結成された。繪畫（日本畫・油畫）、立體、寫眞の諸部門を含み、福澤一郎、瀧口修造を顧問と

する。

日本醫家美術協會結成

繪筆をとる醫學博士二十七名によつて六月十八日日本醫家美術協會が結成された。八月第一回展を開く豫定。

巴里日本美術家展

パリ在住の日本美術家によつて巴里日本美術家協會が設立され、舊臘日本大使及び佛國文部大臣後援の下にベルネーム・ジュニスに於て第一回展を開いて多くの反響を得たが、その第二回展が六月二十七日から三週間ギャルリー・シャルパンティエで開催され、繪畫、彫刻、工藝に互り五十二名の出品があつた。

川端龍子渡支

川端龍子は大陸策連作の畫材を得るため、海軍囑託畫家として五月半以來中支各地を巡歴、六月二十七日歸着した。

國吉康雄授賞

開會中のサンフランシスコ萬國博覽會美術館現代世界の部で六月二十八日審査の結果、アメリカの部では二科會員國吉康雄の「ソファア上の風見その他」が繪畫彫刻を通じて第一位を獲得、賞金千ドルを授與された。

七月

ベルギー國際人形展出品計畫

今秋十一月ベルギーの首都ブルユクセルで國際人形展が開かれることとなつたので、國際文化振興會ではわが國の古代から現代に及ぶ人形を代表すべき出品物を選定出陣することとして準備に着手した。こ

の出品は八月二十三日から五日間展示されたが、後歐洲の急變せる事態によつて發送を中止した。

國畫會彫塑部同人脱退 國畫會彫塑部同人全員及び出品者有志計八名は、繪畫部と藝術上見解の相違を理由とし七月四日左の聲明を發して同會を脱退、その中清水多嘉示を除く全部は新制作派協會に参加した。その爲國畫會は彫刻部を解消し、又新制作派協會は新に彫刻部を加へたこととなつた。

「我國に於ける造型藝術の本格樹立のため、一致協力して参りました國展彫刻部の我々は、その藝術行動を更に鮮明にし、新しきジェネレーションの確立に邁進すべき段階に到達いたしました。この彫刻部の藝術意欲は國展繪畫部の趣味的藝術の没時代性と、既に相容れざるものであります。組織に於けるこの矛盾を清算すべく、茲に十三年の友誼を切つて彫刻部同人及び出品者有志一致して脱會する事になりました。右聲明いたします。」

なほ新制作派協會が同日發した聲明は左の通りである。

「新制作派協會は今日まで、新正なる純粹藝術の樹立と藝術行動の一元化に向つて一意邁進して來ましたが、更に明確なる意識を以て藝術の本質たる新しき空間に於けるモニュメンタル藝術の確立を期すべき段階に到達してゐると信じます。偶々國展の彫刻家有志としての藝術意欲を同じくし、協力一致せば其の成果の甚大なることを共に確信し、こゝに統合體となる事を證明する次第であります。」

中村不折作品寄贈 中村不折は過般開催した太平洋畫會展に回顧特別陳列した自作の中から「廓然無聖」「小雨の渡し」

「始制文字」「桂樹の井」「盧生の夢」「燒芋利尙」等十六點を文部省に寄贈した。

輸出工藝振興委員會設置 商工省では輸出工藝の振興に關する重要事項を調査審議する爲、新に輸出工藝振興委員會を設置することとなり、七月二十日の官報を以てその官制が公布され、又同日附で委員及び幹事が任命された。商工大臣を會長とし、松島外務省通商局長、村瀬商工次官、永田商工省化學局長、寺尾貿易局長官、堀貿易局第一部長、國井工藝指導所長、片岡國際觀光局長らの外、永井松三、岸田日出刀その他計二十名を委員とする。尙右に伴ひ從來の工藝審査委員會官制は廢止された。

童林社畫藝獻納 童林社同人の共同製作になる「城信義追悼聖戰壁畫」は陸軍へ獻納され、七月二十六日東京美術學校講堂で獻納式が行はれた。

長流畫藝慰問畫獻納 川合玉堂の長流畫藝では病床にある將兵慰問のため、玉堂初め各人一點づ、作品を製作、合計八十八點が完成したので、七月二十九日陸軍省に獻納した。

八月

工藝指導所關西支所設置 工藝指導所では大阪の出張員事務室を閉鎖し、八月一日より大阪市西區江の子島に關西支所を設置して輸出雜貨の積極的改善並に指導に當らしむることとなつた。

ドイツへ現代日本畫寄贈 今秋ドイ

ツのナチ黨大會に出席のため渡獨する藤原銀次郎は、現代日本畫の代表的作家の作品六十一點を携行、同國に寄贈することとなり、八月五日の出發に先ち同日東京美術俱樂部で展覧した。これらの作品はかねて岡部長景子爵の主宰する尺貫法存續聯盟に、同運動援助のため各作家から寄贈されたものである。なほその他に川端龍子原作「潮騒」を高島屋がつゝれ織に複製した壁かけをヒトラー總統に贈ることとなつた。

滿洲國美術展 第二回滿洲國美術展覽會は八月一日新京西廣場小學校（第二部西洋畫、第三部美術工藝及彫刻）、八島小學校（第一部東洋畫、第四部法書）を會場として開會された。審査の結果第一部大臣賞一、特選四、佳作九、第二部大臣賞一、特選四、佳作一二、第三部大臣賞一、特選四、佳作六、第四部大臣賞一、特選四、佳作九點が選ばれた。なほ本年度わが國から審査を依頼されて渡滿したのは野田九浦、梅原龍三郎の兩名で、大臣賞受賞者は左の通りである。

- 第一部 「作業」(新京) 栗山博
- 第二部 「祭の女」(新京) 白崎海紀
- 第三部 「銅製香爐」(奉天) 山田甲子

雄

第四部 「隸書」(新京) 王光烈
南湖社結成 京都在住の幸松春浦、水田硯山その他によつて南畫團體南湖社が結成された。
觀光ボスター募集 國際觀光局では

さきに海外宣傳用のボスター圖案と日本風景繪はがき用寫眞とを募集、七月末締切つたが、應募作品ボスター二八〇點、繪はがき七〇組につき審査の結果八月十六日入選者を決定した。ボスター入選者は一等大阪朋泰藏、二等一席名古屋坪井正男、二席福岡西本茂、三等一席福岡堀田光雄である。

松方コレクション海外で賣立 松方幸次郎蒐集の歐洲繪畫は千數百點の大蒐集を成し、大正十一年その中の千餘點を將來、一部を公開して以來わが國における西洋畫の貴重な蒐集として注目されたが、昭和二年金融恐慌のため十五銀行に擔保物件として藏されて來た。その間前後七回に互つて賣立られ、右の中約二百三十萬圓は散逸してゐるが、なほ約二百七十萬圓のものが残されてをり、その外ロンドンの某銀行倉庫に數百萬圓のものがあるといはれる。十五銀行ではこれらを外貨獲得のため一括して近く國外で賣立てることになつた。

忠靈塔設計圖案募集 支那事變二周年記念日の七月七日發會式をあげて創立された財團法人大日本忠靈顯彰會では、その事業として今次聖戰に護國の華と散つた將士の分骨を安置して忠靈の顯彰と國民の感謝を表徴するため、内國各地の市町村及び滿支兩國の戰跡に忠靈塔を建設することとなり、その設計圖案を廣く一般から募集することとして八月二十四日その懸賞募集規程を發表した。

設計は、第一種主要戦地に建設するもの、第二種内地大都市に建設するもの、第三種内地市町村に建設するものの三種に分ち、第一種は敷地約五萬平方米、塔建設費用約五十萬圓、第二種は塔建設費約百萬圓、第三種は概ね同一様式の大形中型、小型の三とし、大型は敷地約六千平方米、建設費約五萬圓、中型約三千平方米、約二萬圓、小型約一千平方米、約五千圓のものとする。應募圖案の締切は昭和十四年十一月三十日。賞金は全額朝日新聞社の提供により、三種を通じて各一等(各一名)總理大臣賞(賞牌)並に賞金一千圓、各二等(各二名)總理大臣賞(賞牌)並に賞金七百圓、各三等(各三名)總理大臣賞(賞牌)並に賞金五百圓、他に佳作約十名賞金各二百圓と定めた。なほ審査員は左の通り發表された。

工學博士伊東忠太、同内田祥三、同岸田日出刀、同小林政一、同佐藤功一、同佐野利器、正木直彦、陸軍技師柳井平八、海軍省建築局長吉田直、陸軍省兵務局長中村明人少將、海軍省人事局長伊藤整一少將、内務省警保局長安藤狂四郎

貿易局工藝品輸出振興展開設 商工省では昭和二年制定の工藝展覧會規程、及び昭和八年制定の貿易局輸出工藝展覧會規程を廢止し、新に貿易局工藝品輸出振興展覧會を開設することとなり、八月二十五日附官報でその規程を告示した。

吉住部隊戦争記念畫 武漢三鎮の攻略戦に赫々たる武功をたて歸還した吉住良輔部隊長は、七月五日参内して軍狀奏

上の際長くも拜受した御下賜金を最も有数ならしむるため、部下諸部隊の戦功を永久に記念すべく中支戦線における戦闘の場面十二を選び、陸軍美術協會に依頼して清水登之、向井潤吉、鶴田吾郎、瀨野覺藏、長坂春雄、高光一也の六畫家の人選を決定、三十號の油繪各二點の製作を依頼し、完成の上は各部隊に配布して永く保存することとなつた。

九月

造形藝術發刊 先般アトリエ社を退いた藤本留三により新に美術雜誌造形藝術が九月號を以て發刊された。

平福百穂記念碑建立 平福百穂の七周忌を迎へ、故人と親交のあつた錦木清方、結城素明、川端龍子、川合玉堂、田口桐汀の五名の發起で、故人の生地秋田縣角館町に記念碑が建設され、九月九日遺族、關係者ら參集、除幕式を行つた。碑は黒の水成岩で幅四尺、高さ十一尺、表面に田口省吾の描いた肖像素描と、川端龍子筆「百穂先生之碑」の文字を刻み裏面に略歴その他を刻んだものである。

兒童畫の慰問及はがき 恩賜財團軍人援護會東京支部では、市内各小學校、中等學校生徒の繪の中から、小學生作品二十點、女學生作品十一點、中學生作品一點計三十二點を選び、これをオフセット刷のゑはがきとして四十萬枚を複製、十月三日からの銃後援強化週間に際し兒童生徒などから前線への慰問文に使用

させることになつた。

池上秀敏入選 ニューヨーク萬國博覽會の美術館に出陳された池上秀敏作の「黎明」が、二十九ヶ國から出品された七十餘點の中四等に入選し、賞金三百ドルを贈られることとなつた旨、九月二十八日通知があつた。この作品は昨秋國際文化振興會の幹旋でニューヨークの國際商工會議所會頭T・J・ワットソンの畫廊に納めるため、八木岡春山の「暮靄」と共に送られたものである。

十月

岡田三郎助胸像建設 十月二日澁谷區伊達町の岡田家で故人の十日祭が知友門下等百五十餘名列席の下に執行されたが、この日故人の青銅胸像が庭前に建設された。この像は一昨年文化勳章拜受の榮を祝して門下生一同から贈つたもので同じ門下の吉田久繼の作である。

菱田春草記念公園計畫 菱田春草の生地飯田市では、その誕生の屋敷跡に記念公園を建設する爲春草生誕地保存會を作り、その計畫を決定した。

圖案關係技術官會議 第四回全國圖案關係技術官會議は十月十一日より四日間、麴町區三年町の特許局で開催され、全國各地方關係技術官百餘名並に商工省その他の關係官二十餘名出席、左の協議事項につき熱心な討議が行はれた。

一、輸出振興上地方特殊工藝技術の改善指導に關する件

二、海外市場別による工藝品の意匠圖案等の調査に關する件

三、東洋意匠に關する件

戦地で繪畫展開催 ○○部隊報道班及び大毎社主催で十月十一日から二十日まで安慶○兵站部で野戦繪畫展覧會が開かれた。出品者三十名、出品二百餘點、専門家を交へた將兵が陣中の餘暇に描いたスケッチで好評を博した。

日本建築模型海外へ寄贈 國際文化振興會では、印度パチアラ侯國マハラジャ・ヤグビンダー・ジン殿下へ日本風宮殿及び庭園二百分の一模型を贈進、又スエーデン首都ストックホルム王立民族博物館へ日本風現代住宅及庭園二百分の一模型を寄贈することとなり、製作中の所完成したので發送し先ち十月十三日丸の内明治生命館内同會で展示會を開いた。

石川縣美術協會創立 石川縣美術工藝界の健全なる發達を計る指導助成機關として石川縣美術協會が創立され、十月十六日縣廳内で關係者約三百名出席の下に盛大な發會式が行はれた。總裁に前田利爲侯、會長に成田知事を推し、來賓正木直彦、島田佳矣らの祝辭があつた。

ニューヨークに工藝品出張所設置 わが國工藝品の輸出振興を計るため、日本輸出工藝聯合會では商工省から本年度補助金十四萬圓、來年度十八萬圓を交付されることになり、ニューヨークのロックフエラー・センターにあるインターナショナル・ハウスに輸出工藝品海外出

張所を設置し、宣傳販賣の常設機關とする
ることになった。

藝術學會開催 文部省では十月十八
日から四日間、日本諸學振興委員會第一
回藝術學會を同省内で、又十月二十一
日

同公開講演會を日比谷公會堂で開いた。
同學會の趣旨は「國體、日本精神の本義
に基き藝術、藝術に關する諸學の内容、
方法並に教授の實際を研究討議して之が
創造發展に資せんとす」るにあり、研究
發表主題は「我が國家と藝術」である。

研究發表者は二十九名(二九頁參照)、毎
研究發表毎に十分づつの質問討議を行つ
た。參加者は諸大學及び學校の藝術關係
諸學科擔任教職員、教育關係官、民間研
究者等で、盛會であつた。なほこの機會
に同學會參加者の爲に、毛利公爵家、細
川侯爵家及び岩崎男爵家で所藏品の特別
展覧が行はれた。(一五九頁參照)

彫刻をニューヨーク市に寄贈 ニュ
ーヨーク萬國博覽會に出陳された藤野舜
正作塑像「銃後工場の護り」は、ニュー
ヨーク市の希望で永く同地に殘し寄贈さ
れることになった。この作は昨秋の第二
回文展で特選を得たものである。

藝術研究座談會 第一回藝術學會開
催を機とし、日本文化協會では十月二十
日夜日比谷法曹會館で同學會委員を中心
として藝術一般に互る研究座談會を開い
た。

日本畫家を大陸に招聘 華中鐵道會
社では中支各地の風物を繪にして銃後國
民に紹介するため、伊東深水、飛田周山、
酒井三良、上村松篁、三輪晁勢、池田遙
村の六畫家を招聘することとなり、一行
は十月二十五日神戸發、約一ヶ月の旅程
で出發した。

文展批評座談會 東京美術研究所で
は、十月二十六日午後銀座松風陳列所階
上で文展批評座談會を開いた。

興亞美術展覽會開設 中華民國新民
會中央指導部では、興亞精神に基き華北
美術振興を目的として興亞美術展覽會を
北京に開設することとなり、その第一回
を十月二十八日から十一月三日まで、北
京中央公園内新民堂、董事會、水樹亭の
三會場で開いた、わが國からは石井柏亭
その他洋畫家二十餘名の贊助出品があつ
た。同展覽會は名譽會長に湯爾和臨時政
府教育部總長、會長に繆斌新民會中央指
導部長、贊助員に臨時政府、日本大使館
關係者、北京、天津兩市長等を推すもの
で、審査員は第一部中國國畫學會長周肇
祥、溥儒、齊白石、黃賓虹、第二部天津
博物館院長嚴智淵、北京美術學校長服部
亮英、第三部國立北京藝術專科學校長王
石之、同教授鹿島英二らである。

市川市藝術家慰靈祭 市川市葛飾俱
樂部では十月二十九日午後同市眞間山弘
法寺書院で、太田南岳、桐谷洗鱗、同天
香、瀨川獨活等の慰靈祭をかねて遺墨展
を開催し、知人遺族らが集つて追憶談に
先輩を偲んだ。

桑港萬國博覽會 サンフランシスコ
金門萬國博覽會は十月二十九日閉會した
が、日本館は開場以來人氣をあつめ最終
日も入場者殺到の盛況を呈した。同日午
後五時佐藤總領事初め多数在留民參列、
嚴肅な日本館閉鎖式を行つた。

紐育萬國博日本館寄贈 ニューヨー
ク萬國博覽會は十月末を以て閉會、更に
來春再開される豫定であるが、ニューヨ
ーク市では同博覽會終了後その敷地に公
園を建設する計畫で、かねてより好評で
あつた日本館を庭園と共に同公園内に永
久保存したき旨申出があつたが、わが當
局では十月三十日右希望の通りこれらを
同市に寄贈する旨正式に通告した。

上海戰表忠塔 世界戦史に輝く上海
陸戰隊を記念するため、上海廣中路の戦
跡に海軍上海戰表忠塔が建設されること
になり、設計の委嘱を受けた日名子實三
は現地を視察中の所十月三十一日歸國し
た。

り朝倉は製作を辭退、北村、佐藤の原型
高さ六尺の雛形ができたので十月二十九
日帝國産金會社で關係者が内見した。細
川護立侯、正木直彦、清水澄、瀧精一、
矢代幸雄、兒島喜久雄、關係之助らが審
査を依頼されたが、審査は穩當ならずと
してその形式をとらず參考意見を提出
し、結局佐藤が宮城前、北村が護王神社
の分を夫々擔當することに決つた。然る
にこの結果には公正な藝術的批判以外の
ものが伏在するといふ理由で、その後北
村は製作を辭退し佐藤の製作のみが實現
されることとなつた。

天覽演習を謹寫 近衛師團の演習は
大元帥陛下天覽の下に十一月八日富士裾
野で行はれたが、同師團ではこの光榮を
傳ふるため清水良雄に依頼、その盛儀を
謹寫せしむることとなり、清水は從軍し
て寫生を行つた。

植松包美七周忌 蒔繪の名家植松包
美の七周忌を迎へ、十一月十一日門下生
參集四谷須賀町圓通寺で法要を營み、翌
十二月築地花月で遺作を展覧した。

美術問題協議會結成 荒木季夫、岩
佐新、大岡爲三等批評家、美術記者十九
名を發起人とし「我邦に於ける美術の正
常なる發展に寄與する爲、斯界に生起す
る諸問題を研究討議し、是に善處するを
以て目的とす」る美術問題協議會が結成
された。

献上畫依頼 南洋興發株式會社が畏
きあたりへ献上する南洋風景畫製作の依

十一月
清響公銅像競作 大日本護王會では
紀元二千六百年記念事業として和氣清磨
公銅像を宮城前、京都護王神社、宇佐八
幡宮の三ヶ所に建設する計畫をたて、清
磨公銅像建設期成會を組織して實現に努
めてゐるが、製作者として北村西望、朝
倉文夫、佐藤朝山の三名が推され何れと
も決しかねて右三名に原型を依頼、その
一を選出することとなり、競作問題とし
て美術界の注意をひいたが、十月末に至

嘴をうけた丸山晚霞は、十一月中旬南洋委任統治領へ出立した。

ラゲーザ玉追憶碑建設 今夏逝去したラゲーザ玉の追憶碑が玉交會によつて麻布區宮村町長玄寺の故人の墓側に建設され、十一月十八日關係者參集除幕式が行はれた。

失明作家の彫刻イタリアに寄贈 眼病のため失明した彫刻家和田垣良雄は、イタリアの失明軍人フイリツプ・パウゾラから今春大日本傷兵軍人會に贈られた愛兒を撫する盲人のブロンズ像に感激し、返禮の作品として群像「親陸」を製作、構造社に出品したが、齋藤素巖の援助を得てブロンズに仕上げイタリアの傷兵に贈ることとなつた。

長尾建吉記念館設立計畫 静岡縣美術協會では、昨年物故した長尾建吉の縣美術界に盡した功績に酬ゆるため記念美術會館設立を計畫中であつたが、紀元二千六百年を期し國策に沿ふべく案を改め静岡特産指導會館を建設することになつた。静岡市内に二階建の建物を作り、展覽會場、集會場、美術工藝指導研究室等を設ける計畫である。

山南會結成 土川麥僊逝去後その山南塾は解散されたが、新に門下の有志十四名は山南會を結成した。

現代日本畫贈呈式 藤原銀次郎によつて齎されたヒトラー總統に贈る綴れ錦壁掛竝にドイツ政府に贈る六十一點の現代日本畫の贈呈式が、十一月二十七日ド

イツ國立博物館で行はれた。

關雲聖戰記念畫獻納 橋本關雲は聖戰記念畫八點を製作したが、いづれも適當な所へ獻納又は寄贈することとなり、「惠日東臨」六曲一又は官内省へ、「戰塵」「殘照」は靖國神社へ、「軍馬二題」六曲一又は帝室博物館へ夫々獻納と決定、「燒土春かへる」外の草稿七點は大禮記念京都美術館へ寄贈、「江上雨來る」「河霧」は未定、未完成の「兩面愛染明王」は引續き執筆中で、これらの作品は「聖戰餘塵」と題して出版された。

十二月

伊勢神宮模型ヴァアカンに寄贈 三井高陽男の寄附により國際文化振興會の幹旋で、伊勢神宮の白木造りの模型をローマのヴァアチカン宮に贈ることになり、十二月初旬は完成、來春一月ローマ教皇使節館を通じて發送されることになつた。

淺井忠三十三回忌 淺井忠の三十三回忌が、門人達による黙語記念會の主催で、十二月十六日故人の畫室の現存する下谷區上根岸町三八河合勝夫宅で行はれた。遺族を圍んで舊友門下等四十餘名參集し盛會であつた。

朝日新聞挿繪コンクール 朝日新聞社では同紙創刊五十周年を記念して、現代小説當選作の挿繪擔當を約束する挿繪コンクールを募つたが、去る九月末の締切で應募千二百七十八點に達し、爾來審

査中の所第一次豫選（通過七十一點）及び第二次豫選の結果關東側三名、關西側四名を得たので、十二月三日この七名を東朝社に招き、席上試作、街頭スケッチ等に最後の審査を行つた。

現代美術館建設建議 東京市の紀元二千六百年記念事業として現代美術館を建設されたいとの建議が、東京美術學校長芝田徹心、正木直彦、川合玉堂、横山大觀、藤島武二、和田英作、山崎朝雲、朝倉文夫、香取秀真、板谷波山の署名で十二月二十一日頼母木市長宛に提出された。

宮城外苑整備事業奉贊會設立 東京市の紀元二千六百年記念事業として實施中の宮城外苑整備事業完成のため、市民各層の代表者を網羅し頼母木市長を會長とする宮城外苑整備事業奉贊會が設立された。

青衿會結成 伊東深水、山川秀峰を中心としてその門下達により青衿會が結成された。

塊人社復活 今春繪畫部を解消して彫刻のみの團體となつた主線美術協會は、舊稱に戻つて塊人社を復活させた。

「物故作家及美術関係者」 ページ (118~123 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.118-123)

Cut for protection of the personal information

美術行政

顧問會議開催

文部省では二月二日午前十時から省内會議室で文展開催に關する件その他美術行政の方針を審議するため顧問會議を開いた。細川護立侯、岡部長景子、松浦鎮次郎、正木直彦、清水帝國藝術院長、本省から石黒次官、山川専門學務局長、本田學藝課長等出席、本年度文展開催につき審議し、時局下物資節約等の趣旨から昨年度實施した作品の寸法制限、出品點數の制限などいづれもそのまま適用することとし、規定の通り開催することを決定した。

又かねて當局に於て計畫されてゐた、美術行政一般に關する根本方針樹立のための審議機關として美術調査會を設置する件は、なるべく速にこれを實現することに一致し、當局に於て更に具體案を練ることになつた。

第三回文部省美術展覽會

前記の方針に従ひ文部省では第三回文展を開くこととし、各部審査主任及び審査員の銓衡を進め、七月十三日その人選を内定發表し、又同展覽會開催の要綱を定め七月二十六日の官報で發表した。なほ審査員五十九名(第一部十五名、第二部十四名、第三部十五名、第四部十五名)は九月十三日附を以て正式に依嘱した。(附録四頁參照) 展覽會に關する日程は左の通り行はれた。

- 出品搬入受付 十月一日—十五日
- 鑑査打合せ 同 六日
- 入選發表 同 九日(第三部)、十日(第四部)、十一日(第二部)、十二日(第一部)
- 査 査 十月十五日
- 招待 日 同 十六日

一般公開 十月十七日—十一月二十日
出品及陳列數は左の通りであつた。

一 般 公 開	一 般		無鑑査		陳 列 數
	出品數	入選數	出品數	無鑑査	
第一部	一二九六	一二三	九〇	二一三	
第二部	二一五六	二一五	一四六	三六一	
第三部	三二四	一一八	八五	二〇三	
第四部	五九八	一二六	六二	一八八	
合 計	四三七四	五八二	三八三	九六五	

審査の結果、本年度は文部大臣賞はなく、特選は第一部三點、第二部十點、第三部九點、第四部七點を決定發表した。又政府買上用品は無鑑査作品中より選定、第一部二點、第二部四點、第三部二點、第四部二點、合計十點を十月二十四日決定發表した。

なほ展覽會の内容及び出品目録等は別に記す通りである。(八二頁參照)

同展覽會終了後例年の如く、京都市主催により第三回文展京都陳列會が十二月一日から十五日まで大禮記念京都美術館で開催された。

紀元二千六百年奉祝美術展覽會計畫

紀元二千六百年を奉祝して、明年秋政府主催の綜合的大美術展覽會を開催すべく、かねて内閣祝典事務局と文部省との間で打合中であつたが、例年の文展を中止し、紀元二千六百年奉祝會と文部省との共同主催でこれを開くこととなり、十二月二十七日正午帝國ホテルに關係者參集してその打合會を開いた。歌川内閣祝典事務局長、佐々木紀元二千六百年奉祝會副會長、岡田東京府知事、大村文部次官、關口専門學務局長、本田學藝課長、清水帝國藝術院長、細川護立侯、岡部長景子、正木直彦等參集、奉祝展開催の大綱を協議した、文部省では文展を中

止して奉祝展に合流し、全美術界の協力參加を得て大規模な綜合展とするため、明春早々美術家との懇談會を開き、同時に準備委員會を設けて具體案を練ることとなつた。

美術教育

日獨伊親善圖書展 森永製菓株式会社では昨年日獨伊親善のため三國の小學校児童及び中等學校生徒の圖書を募集、日本だけで四百萬點餘の應募を得、審査の結果を十月一日發表したが、その中優秀作品を選びドイツ及びイタリア兒童の作品と共に、本年一月二十一日から三十日迄東京府美術館で日獨伊親善圖書展覧會を開催、又二月四日から九日迄大阪市立美術館で同展を開いた。なほ日本側の作品は同展覧會後獨伊兩國へ贈ることとなつた。

大阪美育協會建議 大阪美育協會は小學校及び中等學校における圖書科の改革につき、二月十七日左の建議並にその理由書を文部省及び教育審議會に提出した。

建議

文部當局竝ニ教育審議會ニ於テハ過般來我カ國民教育制度ノ改革ニ銳意立案セラレツ、アリト傳承ス、我等ハ圖書教育ノ實務ニ有リテ年來ノ經驗ト信念ノ上ヨリ小、中等學校ニ於ケル圖書科ハ全年年之ヲ必須課目トナシ其ノ教授時數ヲ小學校ハ每週二時間、中等學校ハ每週二時間ヲ配當セラルベキ必要アリト認め、右建議候也

帝國美術學校卒業及入學者 帝國美術學校では三月十日第六回卒業證書授與式を舉行、同日より三日間卒業製作展覧會を開いた。同校本年度卒業業者及び入學者數は左の通りである。

日本畫科	卒業業者 六	入學志願者 七	入學者 五
西洋畫科	三三	四六	四〇
圖案工藝科	一	一二	一〇
彫刻科	二	五	五
師範科	二	五	五
合計	四四	七五	六五

美術教育

多摩帝國美術學校卒業式 同校では三月二十一日第百四回卒業證書授與式を舉行、十九日より同日まで卒業成績品展覧會を開いた。

東京美術學校卒業業者及入學者 東京美術學校では三月二十四日第四十八回卒業證書授與式を舉行、同日より三日間卒業製作展覧會を開いた。同校本年度卒業業者及び入學者數は左の通りである。

日本畫科	卒業業者 二一	入學志願者 四〇	入學者 二〇
油畫科	三四	一五七	三六
彫刻科	一六	三一	一五
同 木彫部	四	一二	八
同 工藝科圖案部	一〇	一一	一七
同 彫金部	五	八	五
同 鍛金部	二	四	四
同 鑄金部	七	一〇	七
同 漆工部	五	八	七
同 建築科	六	八一	八
同 圖畫師範科	一七	一五二	一五
合計	一二七	六一四	一四二

日本美術學校卒業業者及入學者 日本美術學校では三月二十五日第二十回卒業證書授與式を舉行、並に卒業生及び進級生徒の成績品を陳列した。同校本年度卒業業者及び入學者數は左の通りである。

日本畫科	卒業業者	入學志願者	入學者
西洋畫科	二	七	四
彫塑科	二	四	三
圖案科	五	五	二

選科			
西洋畫科	一五		
圖案科	三		
彫塑科	一		
豫科			
西洋畫科	五		
速修科			
日本畫科	八		
西洋畫科	一七		
圖案科	一三		

東京高等工藝學校入學者 東京高等工藝學校の本年度入學者數は左の通りであつた。

工業圖案科	入學志願者 五三	入學者 一九
造型工藝部	六〇	六
金屬工藝科	一五六	一九
精密機械科	五八四	七三
木材工藝科	一二三	二五
印刷工藝科	八四	一九
寫眞部	六二	八
木材工藝別科	二七	一五
工業學校指導員養成科	一八二	四一
機械技術員養成科	一三三一	二二五

京都高等工藝學校卒業業者及入學者 京都高等工藝學校の本年度卒業業者及び入學者數は左の通りである。尙同校では本年四月より精密機械科及び人造纖維科の二科を新設することとなつた。

色染科	卒業業者 二八	入學志願者 九七	入學者 二九
機織科	二七	一〇一	二九
圖案科	三六	一〇〇	三五

窯業科 一二二

精密機械科 一六八

人造纖維科 一一九

合計 一一四 七〇七 一九四

京都市立繪畫專門學校卒業生及入學者

京都市立繪畫專門學校の本年度本科卒業生は三〇名、選科修了者は五名で、入學者数は本科二名(志願者一五名)、豫科一名(志願者二九名)であつた。

美術工藝學院創立

日本婦人の生活美化と美的教化の向上を目的として、杉並區高圓寺四ノ五五五に女子の爲の美術工藝學院が創設され、本年度生徒、純粹美術部五十名、應用美術部五十名、研究部若干名を募集、四月新學期を開始した。學科は純粹美術部と應用美術部との二部に分ち、前者には繪畫、彫刻、建築、フォトプラスティックの四科、後者にはデコラティヴ、木材工藝、染物工藝、ガラス工藝、織物工藝、陶磁工藝、コスチューム金屬工藝の八科をおく。入學資格は高等女學校卒業程度修業年限は三年とする。なほ外廊機關として純粹美術研究所、應用美術製作所、美工會展覽會、同販賣所等をもち、單に家庭の教養に資するのみでなく社會との聯絡或は作家としての生活をもとげしむることが計畫されてゐる。學院長は桑原幹根、常任理事は外山卯三郎、名譽教授に野口米次郎を推し、教授及び講師には外山卯三郎、福澤一郎、長谷川三郎、川口軌外、村井正誠、北川民次、島海青兒、三岸節子、津田正周、山下鐵之輔、武井直也、入澤博愛、野口道方、岩田藤七、熊谷重太郎、フランシシ・フェロデイ、前田鐵之助、安原喜明がある。

日大藝術學園改革

日本大學藝術科は昭和六年設置以來総合的な藝術教育機關として獨特な存在を續けてゐるが、同科専門部に新に宣傳藝術科(産業、文化)、商工美術科(産業、都市計畫、觀光)、寫眞科(美術、商業)の三科(修業三ヶ年)を新設し、既設の創作、演劇、映

畫、音樂、美術の五科、新設された一年制豫科(音樂科美術科)及び既設の學部(二ヶ年)を加へて、綜合藝術大學の組織を完備せしむることとなつた。なほ板橋區江古田に新築中の校舎が完成し四月の新學期から移轉することとなつた。教育方針に就ても時局精神を考慮しつ、新な指導方針を確立し、近代的藝術教育を行ふべく諸般の改革を行つてゐる。改革された美術科講師の顔觸れは左の通りである。

(日本畫) 吉岡堅二、福田豊四郎、(洋畫) 山本鼎、寺内萬次郎、海老原喜之助、小磯良平、内田巖、朝井開右衛門、岡田謙三、三雲祥之助、猪熊弦一郎、宮本三郎、(版畫) 永瀬義郎、(フレスコ) 長谷川路可、(彫刻) 清水多嘉示、本郷新、(華道) 勅使河原若風、(書道) 小林全鼎(論理) 瀧口修造、植村應千代、田中一松、柳亮

中等學校圖畫科に關する意見書

東京高等師範學校教授板倉贊治、東京美術學校教授小林萬吾、同多賀谷健吉その他、並に全國中等學校圖畫教員等の連署を以て、六月一日中等諸學校圖畫科に關する意見書が文部大臣男爵荒木貞夫及び教育審議會總裁原嘉道宛に提出された。その要望する所は、從來圖畫科の教授時間数は低學年にあつては毎週一時間に過ぎず、高學年に於ては同科を課せざるを得る如き制度があつて、實際これを課せざるものも少くなかつたのを改めて、第一學年より第三學年迄は毎週二時間、第四學年以上は毎週一時間を基本課目とし、學校の種類により一時間乃至三時間を増課科目とせられたしといふものである。

文部省中等教員檢定

本年度施行された文部省師範學校、中學校及高等女學校教員試驗檢定中、圖畫及び手工に關しては、四月二十一日より二十八日の間に於て豫備試驗施行、合格者は日本畫用器畫なし、西洋畫用器畫五十名、手工十二名。七月五日より十八日迄の間に於て本試驗施行、合格者は圖畫一名、西洋畫用器畫二十名

手工二十名であつた。

日埃小學兒童圖畫交換展作品募集

エヂプト文部省から日埃兩國小學兒童圖畫作品の交換展を希望して來たので、國際文化振興會と教育美術振興會との共同主催で六月一日作品を募集、出品資格は尋常一年より高等二年迄とし、七月二十日締切つたが全國百六十校から約一萬點の應募出品があり、九月二十六日審査の結果百三十六點の入選を決定、その中三十六點はサンフランシスコ萬國博覽會に至急出品することとなり、他の百點をエヂプトに送ることとなつた。

圖畫手工訓練協議會

第五十三回全國訓導(圖畫手工)協議會が十月十四日から十八日迄五日間、東京高師附屬講堂に於て開かれた。今回は主として國民學校案による藝能科に關して種々の検討が加へられ、今迄別々に催された圖畫手工が一體となつて時代の造形教育の問題につき眞剣な協議を重ねた。

文部省圖畫教員講習會

本年度文部省中等學校教員圖畫科講習會は、十月二十三日から二十八日迄東京美術學校に於て開催、講義、講師及び實習擔當者は左の通りであつた。

日本精神と情操教育 東京美術學校長 芝田徹心

日本精神の昂揚と圖畫教育 同 教授 多賀谷健吉

新興獨逸國の青年教育と本邦教育界の動向 同 講師 小塚新一郎

現代に於ける日本畫の傾向 同 講師 川崎隆一

現代に於ける本邦洋畫の傾向 同 教授 小林萬吾

繪畫實習(日本畫)同講師矢澤弦月、同助教教授松垣龜雄、(水彩畫)同助教南薰造、(油畫)同助教伊原宇三郎

美術講演・講義

講演

一月

東京考古學會總會講演 一月八、九日
於日本橋俱樂部

「重弧文土器に就いて」高田素次

「北九州に於ける特異なる甕棺葬について」七田忠志

「南關東を中心とせる土師器」杉原莊介

「塔の心礎の二三の發見と其疑問」田中重久

「美濃國に遺存する古位牌」片野温

「碧瓦に就いて」木村捷三郎

「室町時代の馬具に就いて」(公開講演)後藤守一

浮世繪同好會講演會 一月十九日 於日本橋經濟俱樂部

「浮世繪の概念」檜崎宗重

「大衆版畫の現代より江戸へ」中村亮平

古美術自然科學研究會座談會 一月二十三日 於學士會館

「法隆寺壁畫保存法」瀧精一、外二十四名

日佛會館講演 一月二十四日 於同館

「極東の繪畫に接して」ベルナル・ルユカ

考古學會講演 一月二十八日 於東京美術學校

東京考古學會總會講演 一月八、九日 於日本橋俱樂部

「重弧文土器に就いて」高田素次

「北九州に於ける特異なる甕棺葬について」七田忠志

「南關東を中心とせる土師器」杉原莊介

「塔の心礎の二三の發見と其疑問」田中重久

「美濃國に遺存する古位牌」片野温

「碧瓦に就いて」木村捷三郎

「室町時代の馬具に就いて」(公開講演)後藤守一

浮世繪同好會講演會 一月十九日 於日本橋經濟俱樂部

「浮世繪の概念」檜崎宗重

「大衆版畫の現代より江戸へ」中村亮平

二月

奈良帝國博物館美術史連講 二月四日 於奈良帝國博物館

「日本建築史」足立康

東京考古學會大阪第一回例會 二月五日 於大阪中央電氣俱樂部

「攝河泉の梵鐘」坪井良平

「畝傍聖地に於ける考古學的調査」末永雅雄

奈良帝國博物館講演 二月十八日 於同館

「横井廢寺址の出土品」梅原末治

史蹟と美術大阪座談會 二月二十四日 於天王寺小學校

「板碑について」川勝政太郎

考古學會講演 二月二十五日 於東京帝室博物館小講堂

「北魏造像形式の成因に就て」野間清六

大阪市立美術館第二十二回美術講演會 二月二十八日 於大阪市立美術館

「滿洲國の美術」逸見梅棗

東方文化學院小講演 二月二十八日 於同院

「江戸時代の孔子廟」飯田須賀斯

東京美術青年會講演 三月三日 於東京

京美術俱樂部

「時局と美術」三尾邦三

考古學研究會東京講演會 三月四日

「國分寺について」角田文衛

「日本石器時代土器論」三森定男

奈良帝國博物館日本美術史連講 三月四日 於同館

「日本建築史」足立康

東方文化研究所講演 三月四日 於同所

「殷墟白色土器再考」梅原末治

伯林日本古美術展委員會主催 日獨文化の夕講演 三月四日 於明治生命館

「伯林日本美術展について」秋山光夫

三月

「獨逸に於ける日本美術の理解と鑑賞に就いて」矢代幸雄

美術懇話會講演 三月四日 於美術研究所

「櫻の寫生に就いて」瀧澤邦行

東方文化學院小講演 三月四日 於同院

「南宋初期の鑄錢について」中島敏

東京美術研究所春季美術講演 三月十八日 於東大文學部第三十六番教室

「雪舟の藝術」脇本十九郎

「陶工乾也の話」石井柏亭

東方文化研究所月例講演 三月二十二日 於同所

「龍門石窟」長廣敏雄、水野清一、塚本善隆

日曆本史地理學會例會講演 三月二十

四日 於東大山上會議所

「足立博士の法隆寺建築に關する新説を評す」喜田貞吉

考古學例會 三月二十五日 於帝室博物館小講演室

「極東民族の樂器」瀧遼一

大阪市立美術館第二十三回美術講演會 三月二十五日 於同館

「佐伯祐三の藝術に就いて」里見勝藏

四 月

奈良帝國博物館日本美術史連講 四月一日 於同館

「日本建築史」足立康

東京人類學會日本民族學會聯合講演 四月一日 於慶大醫學部北里記念醫學圖書館

「呂宋壺」三吉朋十

「元の上都の遺跡に就て」原田淑人

倉田白羊追悼講演會 四月七日 於上田市商工會議所樓上

「倉田白羊の技法」木村莊八

「硯墨談」小杉放庵

「倉田さんの印象」中川一政

四月

「信州の美術と倉田さん」石井鶴三

「倉田白羊君はA型」山本鼎

「冬景色」足立源一郎

東京美術研究所踏歌會講演 四月十日 於同所

「澁墨に就いて」脇本十九郎

國際文化振興會京都講演會 四月二十

二日 於京都樂友會館

一二七

「日本版畫の發達に就て」三原繁吉

恩賜京都博物館 後鳥羽天皇七百年

記念拜展講演 四月二十二日 於同館

「熊野懷紙について」猪熊信男

美術懇話會講演 四月二十二日 於美

術研究所

「彭城百川に就て」田中喜作

第九回東方文化講演 四月二十八日

於東大法學部第二十五番教室

「支那上代の繪畫思想」米澤嘉嗣

五月

考古學會第四十四回總會講演 五月六

日 於帝室博物館大講演場

「建築史學と考古學」伊東忠太

「非實用の做製器具に就いて」喜山貞吉

奈良帝室博物館美術史連講 五月六日

於同館

「日本建築史」足立康

大阪市立美術館支那美術史講習會 五

月八日—十二日 於大阪市立美術館

「支那上代陶磁」小林太市郎

「寒食詩卷に就いて」同

「宋元の繪畫」望月信成

「明清の繪畫」堂谷憲勇

「古銅器」前田泰次

東京美術研究所踏歌會講演 五月十日

於同所

「ヴェルブリンの様式論」大口理夫

東京美術青年會講演 五月十七日 於

東京美術俱樂部

「天神縁起繪卷に就て」梅津次郎

浮世繪同好會主催慶長寛永

風俗畫展講演 五月二十日、二十一日

於日本橋俱樂部

「安土の春」秋山光夫

「近世初期の風俗畫に就て」藤懸靜也

奈良帝室博物館美術史連講 五月二十

日 於同館

「日本繪畫史」望月信成

歷史地理學會例會講演 五月二十五日

於東大山上會議所

「本邦木綿史の諸問題」小野晃嗣

國際文化振興會主催朝鮮美術品展觀

講演 五月二十七日 於京都樂友會館

「朝鮮美術品展に就いて」柳宗悅

六月

第九十二回啓明會講演會 六月三日

於日本工業俱樂部

「滿支の文化工作」下村宏

奈良帝室博物館日本美術史連講 六月

三日 於同館

「日本彫刻史」源豐宗

品陶會講演 六月十四日 於廣田邸

「三島の系統に就て」山川萬吉郎

奈良帝室博物館日本美術史連講 六月

十七日 於同館

「日本繪畫史」望月信成

東京美術研究所踏歌會講演 六月二十

日 於同所

「指頭畫に就て」田中喜作

大阪市立美術館第二十四回講演會 六

月二十四日 於同館

「日本書道」吉澤義則

考古學會例會 六月二十四日於帝室博

物館小講演場

「西域の石窟寺と支那の石窟寺」松本榮

七月

一

奈良帝室博物館日本美術史連講 七月

一日 於同館

「日本彫刻史」源豐宗

東京美術學校文藝部講演會 七月一日

於同校

「日本畫と西洋畫」兒島喜久雄

日本輸出工藝事情講演會 七月七日

於藏前工業會館

「海外産業の工藝の項點」宮下孝雄

伯林日本古美術展覽會講演會 七月八

日 於帝室博物館

「伯林日本古美術展を顧みて」福非利吉

郎

京都帝大國史研究室創設三十五周年記

念講演 七月十日 於大阪朝日會館

「皇室と古代文化」東伏見邦英

東京府立工藝獎勵館講演 七月十一日

於同館

「時局下の海外工藝動向」宮下孝雄

奈良帝室博物館列品講座 七月十五日

於同館

「宸翰に就て」赤松俊秀

大阪市立美術館第三回夏季美術講習會

七月二十四日—同二十九日 於同館

「天平の美術」岡田敬男

「瀟湘八景」鳥田修二郎

「我が國書風の變遷」魚澄惣五郎

「運慶と快慶」源豐宗

「大同雲崗の石窟とその佛教」塚本善隆

九月

奈良帝室博物館美術史連講 九月二日

於同館

「日本彫刻史」源豐宗

東京人類學會講演 九月十六日 於東

大理學部人類學教室

「我國に於ける窠様式の變遷」小山富士

夫

東京美術研究所踏歌會講演 九月十六

日 於同所

「法隆寺百萬塔について」脇本十九郎

東京考古學會講演 九月十六日

「唐招提寺の建築について」岸熊吉

奈良帝室博物館日本美術史連講 九月

十六日 於同館

奈良帝室博物館美術史連講 九月十六

日 於同館

「日本繪畫史」望月信成

考古學會講演 九月二十四日 於帝室

博物館小講演場

「北魏の平城について」原川淑入

十月

聖戰美術講演會 十月五日 於大阪市

立美術館

「戰爭と美術」小磯良平

「從軍所感」小早川秋聲
「主として上海軍出品畫十點について」
中村研一
奈良帝室博物館日本美術史連講 十月

七日
「日本彫刻史」源豐宗
日本佛教協會第十二回大會講演 十月

十五日 於東京美術學校
「日支文化交流の眼睛」常盤大定
日本諸學振興委員會第一回藝術學會
十月十八日—二十一日 於文部省

第一日
「藝術學に就いて」兒島喜久雄
「日本藝能の特殊性」折口信夫
「日本美術の性質に就いて」金原省吾
「日本文様研究の方法に就いて」鼓常良
「圖書教育に就いて」多賀谷健吉
「明治以降日本美術の發達」隈元謙次郎

第二日
「正宗存在の確證と伎倆」本間順治
「日本南畫」田中豐藏
「日本彫刻に於ける立體性の展開」源豐宗
「蠟型鑄物に就いて」高村豊周
「神社建築と日本精神」藤原晋松
「書に於ける日本の特徴」伊東卓治

第三日
「我が國に於ける佛教圖像集の編纂」
特に「圖像鈔」に就いて 太田鐵男
「日本彫刻史の緯」丸尾彰三郎
「日本版畫の様式に就いて」檜崎宗重
「日本繪卷物の文化史的意義」梅津次

第四日
「漆塗裝法の内日本刀鞘塗に就いて」山崎覺太郎
「茶室の建築精神」堀口捨巳
「日本の水墨畫」脇本十九郎
同公開講演 十月二十一日 於日比谷公會堂

「日本建築の美」伊東忠太
「日本美術の特性」瀧精一
浮世繪同好會議講演 十月二十一日 於日本橋經濟俱樂部
「平野女史の清長研究」藤懸靜也
「廣重の江戸風景版畫に就いて」松木喜八郎
大阪市立美術館第二十五回美術講演會
十月二十一日 於同館

「唐の時世と人物畫」那波利貞
奈良帝室博物館美術史連講 十月二十一日 於同館
「日本繪畫史」望月信成
東京美術研究所踏歌會座談會 十月二十六日 於松風陳列所
「文展に對する批評」田中豐藏、脇本十九郎等
國際佛教協會講演 十月二十八日 於築地本願寺

「五重塔に就いて」田中藤華
日佛會館講演 十月二十八日 於京都關西日佛會館
「今日迄の築城に就いて」フロラン・ギラン

考古學會例會 十月二十八日 於帝室博物館小講演講
「銅鏃について」後藤守一
東方文化學院第十回講演 十月三十一日 於東大文學部第三十六番教室
「東亞古代の墳墓と其裝飾」駒井和愛

十一月
新愛知社主催古美術鑑定大會講演 十一月二日 於同社講堂
「古美術通俗鑑定講話」中村寒林
「日本刀の沿革」本阿彌光瞭
「豐太閤と茶道」平水清光
二條離宮御下賜記念講演會 十一月三日 於京都日出會館

「元離宮二條城御下賜について」市村慶
「二條城と近世日本」西田直二郎
奈良帝室博物館美術史連講 十一月四日 於同所
「日本彫刻史」源豐宗
史學研究會大會講演 十一月五日 於京都樂友會館
「醍醐三寶院について」中村直勝
美術懇話會講演 十一月十一日 於美術研究所
「阿部房次郎氏の蒐集に就いて」正木直彦

東京美術研究所例會講演 十一月十一日 於松風陳列所
「模寫の意義に就いて」脇本十九郎
東方文化研究所第十一回記念講演 十一月十一日 於同所

十一月十一日
「圖像學に見たる雲崗石窟」水野清一
「夾紵の像器に就いて」松本文三郎
全國博物館大會講演 十一月十一日 於帝室博物館
「聖戰下に於ける大陸文化施設の保護」清水盛明
「滿洲國內に於ける博物館事業の現況」藤山一雄

日佛文化協會講演 十一月十一日 於京都日佛會館
「佛蘭西の繪畫」コンラド・メリー
「巴里で識つた佛蘭西の作家たち」山田菊子
東京人類學會講演 十一月十八日 於東大理學部人類學教室
「綾邊省百靈廟附近遺蹟の調査」江上波夫
奈良帝室博物館日本美術史連講 十一月十八日 於同館
「日本繪畫史」望月信成
考古學會例會 十一月二十五日 於帝室博物館

「寛政年間集成石器圖卷數種に就いて」長谷部言人
大阪市立美術館第二十六回美術講演會 十一月二十七日 於同館
「現代の洋畫に就いて」兒島喜久雄
東洋文庫東洋學講座 十一月三十日及十二月七日 於東洋文庫
「日本美術と支那美術」矢代幸雄

十二月

國際文化振興會京都支部主催講演 十二月二日 於京都樂友會館

「日本繪畫に於ける風景畫史」(英語) 源豐宗

奈良帝國博物館日本美術連講 十二月二日 於同館

「日本建築史」足立康

美術懇話會講演 十二月六日 於上野精養軒

「熱河に於ける建築に就いて」伊東忠太 第九十六回啓明會講演會 十二月九日 於日本工業俱樂部

「道教思想と支那建築藝術」伊東忠太 斯文會研究發表講演 十二月十八日 於湯島聖堂構内公會堂

「支那建築より見たる我國各地の孔子廟」飯田須賀斯

ラジオ放送 (國內)

東京第二・連續講座 一月四日、六日 日本個々の科學の中「建築に關するもの」 藤島亥治郎

東京第二・特輯講座 一月五日 新日本の藝術を語るの中「美術」荒城季夫

東京第一・趣味講演 一月六日 「大和民族の體格と其特質」朝倉文夫

東京第二・講演 一月七日 「日本の農民建築」石原憲治

東京第一・趣味講演 一月十一日 「弓の話」石津重貞

東京第一・講演 一月十三日 「神社林の話」上原敬二 仙臺・講演 一月十四日

「時局と輸出工藝の振興」國井喜太郎 東京第一・講演 一月十八日

「事變と日本刀の偉力」蒔田宗次 東京第二・特輯講座 一月二十二日

「ドイッとイタリヤの新藝術運動の中」獨伊の美術」瀧口修造

東京第一・婦人の時間 二月十日 「日本服の變遷」中田虎一

大阪第二・店員の時間 二月十日 「商業美術のはなし」樋口富麻呂

東京第一・朝の修養 二月十六日 「名工の苦心(一)」藤井浩祐

東京第一・朝の修養 二月十七日 「名工の苦心(二)」六角紫水

東京第一・趣味講演 二月十七日 「契丹文化の遺跡をたづねて」鳥居龍藏

東京第一・朝の修養 二月十八日 「名工の苦心(三)」高村豊周

東京第二・講演 二月二十三日 「工藝品と日本文化の海外紹介」長島喜三

東京第二・講演 三月二日 「我が國の古活字版」川瀬一馬

東京第二・講演 三月十四日 「明治初年に來朝したイタリヤ美術家」隈元謙次郎

東京、大阪第二・特輯講座 四月三日 「日本の服裝と文化」

一、上代・奈良時代 江馬務 二、平安朝から室町時代中期迄 櫻井秀

三、室町時代末期から江戸時代 齋藤隆三

四、明治時代 石井研堂 五、大正、昭和時代 今和次郎

東京第二・講演 四月十二日 「ビルディングの今昔談」藤島亥治郎

東京第二・講演 五月二日 「日伊親善とフアシスト、イタリヤ展覽會」ガエターノ・アウリジオ

東京第一・講演 五月三日 「海外で見た日本の工藝品」宮下孝雄

大阪第二・講演 五月八日 「大同石佛の諸問題」水野清一

東京第二・特輯講座 五月十三日 「日本文化と大陸文化の交流の中」美術」金原省吾

大阪第一・小學生の時間 五月十六日 尋六「法隆寺見學」大阪學校放送研究會

東京第一・講演 七月十一日 「國寶の保存」松尾長造

東京第一・講演 七月十二日 「國寶保存の精神」瀧精一

東京第二・連續講座 七月十九日、二十日、二十一日、二十二日、二十四日、二十五日 「岡倉天心の東洋の理想」金原省吾

東京第一・婦人の時間 七月二十二日

「夏雲さま」中川一政 大阪第二・講演 八月四日 「鎌倉彫刻の人間性」源豐宗

東京第二・ラヂオ夜話 「贗物語」田中一松

東京第二・婦人の時間 九月二十三日 「衣服の構成美」宮下孝雄

長野・趣味講演 十月八日 「東洋畫と描線」金原省吾

東京第一・朝の修養 十月九日、十日 十一日 「藝術に現はれた日本精神」野口米次郎

東京第二・ラヂオ夜話 十月十一日 「銅像はいかなるものか」北村西望

東京第二・連續講座 十月十七日、二十日 「ブルノー・タウトの日本觀」藤島亥治郎

南京・座談會 十一月十日 「畫家の見た江南の秋」伊東深水、飛田周山他四名

東京第一、十一月十四日、十六日、十八日、二十一日、二十五日

物語支那文化史の内「支那繪畫の成立、支那繪畫の特質、支那工藝の特質」金原省吾

東京第二・ラヂオ夜話 十一月二十日 「輸出陶器と個人作家」富本憲吉

東京大阪・特輯趣味講座 十一月二十三日 「古社寺に藝術を尋ねて」

一、門 田邊 泰

二、塔 瀧澤真弓

三、鳥居 阪谷良之進

四、庭 重森三玲

大阪第二・ラヂオ夜話 十一月二十七日

日

「古陶器の味」河合卯之助

東京第一・十一月二十八日、三十日、十二月五日、七日

物語支那文化史の内「支那の風土と建築」

「民族性と支那建築」「支那の宮殿と住宅」「支那の宗教建築」「建築と支那文化」

藤島亥治郎

東京第二・特輯座談會 十二月十七日

「工藝品輸出振興を語る」水谷良一、長

島喜三、濱田庄司、堀口捨巳、柳宗悅、

山崎覺太郎、和田三造

ラヂオ放送 (海外向)

二月十七日・北米西部向

「東洋畫の鑑賞」金原省吾

六月二十八日・歐洲向

「現代日本に於ける版畫技術の傳承」忍

地孝四郎

七月十三日・歐洲向

「七月の母國便り」池部均

八月一日・歐洲向

「工藝日本」和田三造

八月四日・歐洲向

「我國近代繪畫と佛蘭西」森田龜之助

十一月十日・北米西部向 (大阪ヨリ中

繼)

「京都の秋から冬へ」中村大三郎

十二月十八日・歐洲向

「文展を見て」コンラッド・メイリ

各大學美學美術史講座

〔官立〕

東京帝國大學

〔文學部美學美術史學科〕(美學)「美學概論」「美的範疇論」「美學演習」教授大

西克禮、「日本音樂ノ理論ト歴史」講師田

邊尚雄、「美術史」「日本美術史概説」「近

世日本美術史」「美術史演習」教授藤懸靜

也、「西洋美術史概論」「西洋美術史各論」

助教兒島喜久雄、「支那美術史」講師

松本榮一

〔考古學〕「漢唐時代ノ文化(殊ニ東西

文化ノ交渉)」「考古學演習」「考古學講讀」

教授原田淑人、「滿洲考古學」講師駒井和

愛

京都帝國大學

〔文學部哲學科〕(美學美術史)「美學

序論」「墨繪の研究」「演習(藝術の諸問

題)」「教授植田壽藏、「大和繪の展開(鎌倉

時代以後)」講師源豐宗、「藝術史的類型

の成立」講師井島勉

〔文學部史學科〕(考古學)「考古學概

論」「日鮮考古學」「演習(近時考古學の

諸問題)」「考古學實習」助教梅原末治、

「支那考古學(六朝以降)」講師水野清一

「京都の文化史的研究・文化史實習」教授

西田直二郎、「春秋戰國時代の文化史考

察」教授那波利貞、「古代國家の構造とモ

ノ思想」講師井上智勇

東北帝國大學

〔法文學部〕(美學)「美學概論」「美學

特殊講義」「美學演習」教授阿部次郎、「西

洋藝術史特殊講義」「同演習」助教村田

潔、「音樂論及音樂史」講師加藤成之、「文

化史學第二)」「日本美術史概説」「同演習

「東洋藝術史特殊講義」教授福井利吉郎、

(史學第五)「考古學」(史學第五講座ノ一

部)講師伊東信雄

九州帝國大學

〔法文學部〕(美學美術史)「現代藝術

學演習」講師太田鐵男、「支那畫論史」「日

本美術史演習」教授矢崎美盛、「國史」「考

古學概論」

京城帝國大學

〔法文學部〕(美學美術史第一講座及

第二講座)「美學概論」「美學美術史演習」

教授上野直昭、「西洋美術史」「東洋美術

史」「日本美術史」「美術史籍講讀」教授

田中豐藏、「朝鮮考古學」教授藤田亮策

東京文理科大學

(美學概論) 講師大西克禮

〔私立〕

大谷大學 (美術史)「日本美術史」土

居次義

慶應義塾大學 (文學部) (美學)「藝

術本質論(Kant: Kritik der Urteilskra-

ft)守屋謙二(東洋美術史)「日本彫刻史」

丸尾彰三郎、「西洋美術史」「美術史の主

要問題」兒島喜久雄、「考古學」「東洋考

古學」柴田常惠

高野山大學 (佛教藝術學科)

「佛教藝術學概説」「繪ノ研究」「佛教建築

演習」岡直巳、「美學概論」「佛教藝術論」

「別尊像ノ研究」佐利隆研

國學院大學 (美術史)「日本美術史」

藤懸靜也、「考古學」「考古學」大場磐雄

駒澤大學 「佛教美術」逸見梅榮

大正大學 「東洋美術」脇本十九郎、「考

古學」八幡一郎

東洋大學 「美學」大西克禮、「美學」

山際清

同志社大學 (文學部)「美學」園頼

三

立正大學 (國史)「日本美術史(鎌倉

—江戸)」「藤懸靜也、「日本佛教文化史(佛

像ノ文化史的考究)」石田茂作、「美學及

美術史)」「美學概論」西宮藤朝、「佛教美

術史」逸見梅榮

龍谷大學 「美學」講師井島勉

早稻田大學 「文學部哲學科藝術學專

攻)」「東洋美術概論」「東洋美術史」教授

會津八一、「西洋美術概論」「西洋美術史」

講師坂崎坦、「美學」講師大西昇

「文學部史學科)」「東洋美術史研究」

教授會津八一、「考古學概論」教授西村

眞次

古美術展覽會・展觀

一月

室町時代江戸初期繪卷物陳列

一月二十二日 名古屋・新愛知新聞社講堂
名古屋在住の山田秋衛の主催による展観で、主として御伽草子の未だ世に多く知られてゐないものを陳列した點に注目される。左に目錄掲げる。

- 品目 所藏者 品目 所藏者
- 福富草子(一卷) 山田 秋衛 大江山繪卷(一卷) 市立名古屋圖書館
- 是寄坊繪卷(一卷)同 平治合戰繪卷(一卷) 摸本
- 七夕の本地(二卷)板津七三郎 榎原 莊二
- 雀の草子(二卷) 同 蒙古襲來繪詞(二卷) 摸本
- 天狗の内裏(二卷)吉川 翠溪 建 中寺
- 岩井ものがたり 板津七三郎
- 武家繁昌(二卷) 同

竹内四郎撮影山西雲岡、河南龍門石窟寫真展

一月二十五日—三十日 日本橋・三越
北支大洞雲岡竝に龍門の二大石窟の主要なものを半折形寫真を以て展示した。尙その他、同地の風物の寫真、造像銘記拓本を併せて陳列した。

蘆雲寺畫展

一月二日—二十五日 和歌山・草堂寺

東京帝室博物館繪畫陳列

一月、二月中 同館
東京帝室博物館一月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶、△印重要美術品)

平安・鎌倉時代

- 御物繪殿障子繪屏風 絹本着色 五隻/内
- 釋迦如來像 絹本着色 一 幅
- 孔雀明王像 同 同
- 普賢延命像 同 同

羅漢像

虛空藏菩薩像

文殊菩薩像

○法華曼荼羅

○十二天像

○十界圖

△阿佛尼像

△高野山水屏風

御物繪師草紙

天狗草紙

○俄鬼草紙

御物春日權現驗記繪卷

○法然上人行狀繪卷

聖德太子繪傳

北野天神緣起殘闕

狹衣物語繪卷殘闕

△狹衣物語繪卷殘闕

駿牛圖

山王靈驗記繪卷殘缺

宋・元・明時代

○孔雀明王像

○千手觀音像

○觀世音菩薩像

蓮花圖

琴棋書畫圖

葛玄仙人圖

雪中山水圖

室町時代

○泰山拾得圖

山水圖

桃鳩芙蓉叭々鳥圖

靈照女圖

△周茂叔圖

△山水圖

花鳥圖

△花鳥圖

○後醍醐天皇御像

○大燈國師像

清水寺緣起繪卷

△星光寺緣起繪卷

桃山・江戸時代

梅壺鳥圖

伯夷叔齊圖

老子過關圖

許由洗耳圖

反魂香圖

猿曳圖

山水圖

狩野探幽像

二 絹本着色 幅

四 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

一 絹本着色 幅

京都 本法寺

京都 龍長

東京 津經義孝

東京 伯爵 津經義孝

東京 保 阪 潤 治

東京 根 津 嘉 一 郎

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

東京 帝 室 博 物 館

△虎溪三笑圖	紙本墨畫	東京	馬越 恭一	山水圖	所立原杏	絹本著色	帝室博物館	文契く美人圖	鈴木春	錦繪一枚	東京	小石川松嗣
△福祿壽竹梅圖	紙本墨畫	東京	帝室博物館	深山探勝圖	高橋草	絹本著色	東京	六玉川圖	信	錦繪一枚	東京	小石川松嗣
△紅梅揚圖	紙本墨畫	東京	侯爵 細川護立	△四季花鳥圖	坪本秋	絹本著色	橋本辰二郎	美人圖	磯田胡	錦繪一枚	帝室博物館	帝室博物館
運營圖	同	帝室博物館	帝室博物館	四季花卉圖	山本梅	絹本著色	金光庸夫	龍形若菜初機標圖	龍齋	同	同	同
龍圖	同	同	同	御物牡丹孔雀圖	圓山應	絹本著色	同	金魚賣圖	鳥居清	同	東京	高橋誠一郎
楓圖	絹本著色	同	同	△月夜山水圖	長澤蘆	絹本墨畫	東京	芝居圖	長	同	同	同
△藤原信盈像	三幅ノ内	東京	青柳 瑞穂	猿圖	雪	絹本著色	帝室博物館	出語り圖	鳥居清	同	同	同
伊勢物語圖	絹本著色	東京	帝室博物館	花鳥圖	木下應	絹本著色	帝室博物館	高名三美人六家	喜多川	錦繪一枚	同	同
壽老圖	同	東京	男爵 團伊能	△小野小町圖	受	絹本著色	同	撰おきた圖	歌磨	同	同	同
獨照像	同	帝室博物館	帝室博物館	△貫之圖	松村景	絹本著色	同	燦拂圖	當時全盛美人揃	同	同	高橋誠一郎
淺妻船圖	同	東京	清野 暢一郎	婦女圖	文一鳳	絹本著色	同	青樓七小町扇屋内瀧川圖	同	同	同	同
野々宮圖	同	同	入江 相政	婦女圖	森	絹本著色	同	教訓視の目鑑・理	同	同	同	同
若水圖	紙本著色	同	平尾 贊平	小倉山莊圖	岩佐又	絹本著色	東京	口者	同	同	同	同
○高雄觀楓圖屏風	紙本著色	同	子爵 福岡孝昭	花車圖屏風	兵衛	絹本著色	男爵 山本達雄	玉屋内まどか圖	同	同	同	同
○雲龍圖屏風	同	京都	北野 神社	誰か袖圖屏風	同	絹本墨畫	兵庫	青樓美人名花合圖	同	同	同	同
△唐人人物圖屏風	紙本淡彩	東京	佐々木 昌興	西湖春景錢塘	宣川師	絹本著色	帝室博物館	扇屋内花扇外圖	勝川春	同	東京	小石川松嗣
△葛細道圖屏風	紙本著色	同	小坂 順造	觀潮圖	松野親	絹本著色	同	美人讀文圖	鳥文齋	同	同	同
大江山繪卷	紙本著色	同	帝室博物館	○雲龍圖屏風	信	絹本著色	同	美人讀文圖	榮之	同	同	同
八幡太郎繪詞	三卷ノ内	同	同	淺間山圖屏風	奧村政	絹本著色	同	傾城と禿圖	榮昌	同	同	同
山水圖	紙本墨畫	同	同	清時代	池大雅	絹本著色	東京	新吉原道中圖	長喜	同	同	同
柳塘圖	紙本著色	東京	藤瀬 新一郎	△山水花卉扇面帖	圓山應	絹本墨畫	帝室博物館	當世すがたのうし畫	泉	同	同	同
琵琶行圖	同	同	同	版畫	舉	絹本著色	帝室博物館	豐廣兩書十二侯、吹川豊四月圖	吹川豊	錦繪三枚	同	同
山水圖	紙本淡彩	同	石澤 豊	美人と禿圖	亞歌堂	絹本著色	同	市川八百藏、岩井余三郎圖	歌川豊	錦繪一枚	同	同
△西園雅集圖	絹本著色	東京	帝室博物館	美人と子供圖	田善	絹本著色	同	市川八百藏、岩井余三郎圖	國	同	同	同
蘇武圖	紙本淡彩	東京	男爵 團伊能	美人子供遊圖	亞歌堂	絹本著色	同	市川八百藏、岩井余三郎圖	國	同	同	同
山	紙本淡彩	東京	男爵 山本達雄	銀鞍白馬圖	田善	絹本著色	同	市川八百藏、岩井余三郎圖	國	同	同	同
古美術展覽會・展觀	同	同	同	同	田善	絹本著色	同	市川八百藏、岩井余三郎圖	國	同	同	同

古美術展覧會・展觀

奈良帝室博物館繪畫陳列

一月中 同館

奈良帝室博物館一月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

○山水圖	狩野元信筆	紙本墨畫	京都靈雲院	○舟形光背	飛鳥代	銅造浮彫面	奈良東大寺	○彌勒菩薩坐像	前原	木造漆箔	大阪觀心寺
○瀟湘八景圖	同	紙本墨畫	東海庵	○鳳凰及天人	飛鳥代	銅造鑲金基	法隆寺	○釋迦如來坐像	同	木造彩色	京都法觀寺
○嚴子陵及虎溪	桃山時	紙本著色	妙心寺	○八部衆立像	時奈代	乾漆造彩六	同	○釋迦如來立像	同	木造彩色	京都法觀寺
○三笑圖	代	紙本著色	長谷寺	○十六弟子立像	同	乾漆造彩四	同	○兜跋毘沙門天	同	木造彩色	京都法觀寺
○七賢人四皓圖	代	紙本著色	長谷寺	○十一面觀音菩薩	同	乾漆造彩四	同	○毘沙門天	同	木造彩色	京都法觀寺
○四季娛樂狩獵圖	代	金地著色	興福院	○大自在菩薩立像	同	乾漆造彩四	同	○釋迦如來坐像	同	木造彩色	京都法觀寺
○山水圖	狩野山	紙本著色	同	○空觀音菩薩立像	同	乾漆造彩四	同	○聖觀音菩薩立像	同	木造彩色	京都法觀寺
○源氏物語末	土佐光起筆	紙本著色	滋賀石山寺	○善薩形立像	同	乾漆造彩四	同	○阿彌陀如來坐像	同	木造漆箔	京都法觀寺
○摘花卷	住吉具慶筆	紙本著色	奈良興福院	○乾漆像骨柱	同	乾漆造彩四	同	○愛染明王坐像	同	木造漆箔	京都法觀寺
○都鄙繪卷	同	紙本著色	奈良興福院	○不空絹索菩薩	同	乾漆造彩四	同	○大日如來坐像	同	木造漆箔	京都法觀寺
○布袋圖	代	紙本淡彩	同	○立像	同	乾漆造彩四	同	○世親菩薩立像	同	木造漆箔	京都法觀寺
○蓮燕圖	同	紙本著色	同	○聖觀音菩薩立像	同	乾漆造彩四	同	○梵天立像	同	木造漆箔	京都法觀寺
○柿本人丸像	代	紙本著色	同	○四天王立像	同	乾漆造彩四	同	○地藏菩薩坐像	同	木造漆箔	京都法觀寺
○極樂院緣起繪卷	古潤筆	紙本著色	同	○四佛坐像	同	乾漆造彩四	同	○大日如來坐像	同	木造漆箔	京都法觀寺
奈良帝室博物館彫刻陳列											
一月一六月 同館											
奈良帝室博物館一月陳列替彫刻の品目は左の通りであつた。(○印國寶)											
○觀音菩薩立像	飛鳥代	木造彩色	奈良法輪寺	○十一面觀音菩薩	時真代	乾漆造彩四	奈良興福院	○多聞天立像	前原	木造彩色	京都淨瑠璃寺
○釋迦如來及脇侍	同	銅造鑲金	同	○日羅立像	同	乾漆造彩四	同	○金剛力士立像	前原	木造彩色	京都淨瑠璃寺
○菩薩像	同	同	同	○明星菩薩立像	同	乾漆造彩四	同	○維摩居士坐像	前原	木造彩色	京都淨瑠璃寺
○觀音菩薩立像	同	同	同	○十一面觀音菩薩	同	乾漆造彩四	同	○文殊菩薩坐像	前原	木造彩色	京都淨瑠璃寺
○彌勒菩薩半倚像	同	同	同	○妙幢菩薩立像	同	乾漆造彩四	同	○吉祥天立像	前原	木造彩色	京都淨瑠璃寺
○彌勒菩薩半倚像	同	同	同	○神功皇后御影	同	乾漆造彩四	同	○善膩師童子立像	前原	木造彩色	京都淨瑠璃寺
○彌勒菩薩半倚像	同	同	同	○僧形八幡神御影	同	乾漆造彩四	同	○天燈鬼立像	前原	木造彩色	京都淨瑠璃寺
○彌勒菩薩半倚像	同	同	同	○彌勒菩薩坐像	同	乾漆造彩四	同	○龍燈鬼立像	前原	木造彩色	京都淨瑠璃寺
○彌勒菩薩半倚像	同	同	同	○虛空藏菩薩半倚像	同	乾漆造彩四	同	○地藏菩薩立像	前原	木造彩色	京都淨瑠璃寺
○彌勒菩薩半倚像	同	同	同	○聖觀音菩薩立像	同	乾漆造彩四	同	○十二神將立像	前原	木造彩色	京都淨瑠璃寺
○法華說相像	同	銅造鑲金	同	○阿彌陀三尊佛像	時奈代	乾漆造彩四	奈良法隆寺	○馬頭觀音菩薩	同	木造彩色	京都淨瑠璃寺

○地藏菩薩立像 鎌倉 木造彩色 奈良 白毫寺
 ○善光寺如来像 同 銅造鍍金 三寶寺 奈良 帝室博物館
 ○藥師如来立像 同 銅造鍍金 奈良 般若寺

二月

大同石佛拓本展観

二月十一日—十四日 上野・松坂屋

皇軍の大同占據を期とし、在北京の安藤徳器によつて企てられたもので同窟石佛の拓本及び龍門その他の拓本千餘點を陳列した。

澁江清收藏歐人浮世繪研究文献展

二月十一日 慶應義塾圖書館

浮世繪は夙に佛、英、米等の歐米人に愛好され研究された爲、その研究文献の歐文によるものが尠くない。同展はこれ等の文献を蒐めて陳列したもので、これによつて、歐米に於ける浮世繪研究の推移傾向等が知られ、その他種々の意味に於て浮世繪研究上に意義深い展観であつた。

陶枕特別陳列

二月五日—四月十六日 大阪市立美術館

支那宋代に於ける陶枕の作品を主に陳列したもので、總點數七十八點である。その中唐代のもの二點、明代以後の遺品三點、朝鮮及日本に於ける作品六點である。

讀賣新聞社主催豐太閣展覧會

二月二十二日—三月十六日 日本橋・白木屋

皇軍の大陸出征の折に際し、かつての豐太閣の雄圖を偲ぶ爲に開催されたものである。陳列品は豐太閣及びそれに關聯ある當代の歴史及美術的の遺品約百五十點である。美術上主要のものとしては松浦伯爵家藏の朝鮮合戦屏風をはじめ衣裳裂、誰ヶ袖屏風等があつた。

東京帝室博物館繪畫陳列

二月中 同館

東京帝室博物館二月陳列替繪畫の品目は左の通りであ

つた。(○印國寶、△印重要美術品)

平安・鎌倉・室町時代

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

御物繪畫貼交屏風

△長圓源公像

豐太閣像

果實圖

人物圖

唐人入圖

維摩花鳥圖

雁圖

鷹圖

壽老圖

春興圖

△維摩居士圖

黃初平圖

牡丹左右菊稻圖

鳥瓜菴圖

定家俊成堯孝像

左慈得鱸圖

花使圖

蟬丸圖

○職人畫圖屏風

呂望商山四皓圖

牧馬圖屏風

山水圖屏風

花鳥圖屏風

新三十六歌仙圖

勤修寺練起

絹本著色 幅 東京 成瀬 澄

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

絹本著色 幅 東京 同

古美術展覽會・展観

異形加茂祭繪 光格天皇策命使 圖卷	田中訥 一紙本著色 卷	東京	子爵	内藤政光	△山水花卉扇面 版畫	波濤猛虎圖屏風 岸駒	紙本墨畫 一雙ノ内	帝室博物館	甲陽猿橋圖 廣重	錦繪一枚	東京	小石川松嗣
山水圖	池野大 一紙本墨畫 幅	帝室博物館	△山水花卉扇面 版畫	輝南田	紙本著色 内	橋本辰二郎	雪中富士川圖 同	同	同	同	同	同
竹林倒馬圖	與謝蕪 一紙本著色 幅	東京	七小町、雨乞 津晴嵐	西村重	漆繪一枚	帝室博物館	二月 同館	同	同	同	同	同
東山雨後圖	田能村 一紙本墨畫 幅	帝室博物館	不破名古屋圖 美人遊戯圖	長代鳥 西村重	紅摺繪 一枚	森村義行	奈良帝室博物館 二月陳列替繪畫の品目は左の通りであ つた。(○印國寶、△印重要美術品)	○多聞天像 (十二天) 像ノ内	貞観	絹本著色 幅	奈良	西大寺
秋山常齊圖	中林竹 一紙本著色 幅	同	美人遊戯圖	居清倍 鳥居清	同	同	○慧文禪師像 (天台高僧) 像ノ内	藤原	同	同	兵庫	一乘寺
雪中鴨圖	山本梅 同	同	戀慕圖	滿	同	帝室博物館	○聖德太子御像 (天宮高僧) 像ノ内	鎌倉	同	同	奈良	鶴林寺
烟波群鷗圖	谷文晁 一紙本淡彩 幅	東京	笠森お仙圖	信	錦繪一枚	森村義行	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	新薬師寺
△佐藤一齋像	渡邊華 一紙本著色 幅	同	市川團十郎圖	勝川春	同	帝室博物館	○五尊像 ○八相涅槃圖 ○小野篁像 ○水天像	同	同	同	奈良	法隆寺
高久雷屋像	椿椿山 同	靜岡	大谷廣次圖	文調	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
心越禪師像	同	同	雁金や圖	一筆齋	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
牡丹圖	宋紫石 一紙本著色 幅	同	坂田半五郎圖	勝川春	同	帝室博物館	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
喜報三元圖	正木江 同	同	市川高麗藏圖	英	同	帝室博物館	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
臥牛圖	雲山應 一紙本墨畫 幅	同	中村松江圖	好勝川春	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
蝦蟇仙人圖	長澤藍 同	同	出語圖	鳥居清	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
紫牡丹圖	松村景 一紙本著色 幅	東京	お染久松圖	喜多川	錦繪一枚	内田誠	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
風前美人圖	懷月堂 一紙本著色 幅	帝室博物館	青樓美人五雁金 圖	歌麿	同	帝室博物館	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
婦女圖	東川堂 同	同	美人五面相圖	同	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
乘鶴美人圖	宮川長 一紙本著色 幅	同	美人手業拾二工 圖	同	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
婦女聞香圖	宮川長 一紙本著色 幅	同	美人花見圖	鳥文齋	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
櫻下婦女圖	川又常 同	同	風流合十二葉圖	榮之齋	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
蘭亭曲水圖屏風	與謝蕪 一紙本著色 雙	同	藝子みすゑ圖	榮松齋	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
秋冬山水圖屏風	圓山應 一紙本墨畫 雙	同	郭中美入鏡圖	長喜齋	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺
四季花鳥圖屏風	圓本秋 一紙本著色 雙	同	富嶽三十六景ノ 内、日本橋	榮昌齋	同	同	○佛涅槃圖 持鉢釋迦如來像	同	同	同	奈良	法隆寺

一行阿闍梨像 室町時代 絹本着色 奈良靈山寺
 命蓮上人像 同 同 朝護孫子寺
恩賜京都博物館繪畫陳列
 二月中 同館

恩賜京都博物館二月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

日本畫

明惠上人坐禪像 一幅 高山寺
 觀經曼荼羅 同 西方寺
 山越阿彌陀地獄極樂圖 一面 金戒光明寺
 五髻文殊像 一幅 神光院
 仁王經曼荼羅 同 關聖寺
 地藏菩薩像 同 性海寺
 十一面梵天帝釋天像 一幀 觀智院
 僧源空像 一幅 金戒光明寺
 佐々木高氏像 同 勝樂寺
 達磨慧可僧孺像 三幅 孤蓬庵
 足利義持像 一幅 神護院
 山水圖 六幅 大仙院
 文殊圖 一幅 善慧院
 文殊圖 同 高山寺
 釋迦坐緣起 三卷 清涼寺
 山水圖 一雙 半井修一寺
 柏廬蓋轎圖 同 大徳寺
 千鳥水車圖 同 飯田新七寺
 藤花牧牛圖 同 盛安寺
 泣不動緣起 一卷 清淨華院
 佛鬼軍給傳 同 十念寺
 猿猴圖 一面 柿本神社
 十六羅漢像 六幅 海善寺
 神馬圖 一雙 六孫王神社
 四季花卉圖 三幅 三時智恩寺
 火車圖 一幅 本明王院
 普賢十羅刹圖 同 本明王院
 羅城門繪傳 二卷 本明王院
 支那畫 同 本明王院
 山水圖 一幅 戴文進
 長谷寺

夏冬山水圖 傳高然暉 二幅 金地院
 蝦蟇鏡扱圖 傳顔輝 同 知恩寺
 梅小舎圖 一幅 長崎太郎
 花鳥圖 同 同 同
 雪中山水花鳥圖 同 同 同
 普賢菩薩像 同 同 同
 觀音像 同 同 同
 僧慧開像 同 同 同
 魚樂圖 同 同 同
 山水圖 同 同 同
 釋迦元賀壽書畫卷 同 同 同
 布袋猿猴圖 同 同 同
 觀音人物圖 同 同 同
 地獄十王圖 同 同 同
 雙鹿圖 同 同 同
 山水圖 同 同 同
 玉蘭海棠小舎圖 同 同 同
 竹雀圖 同 同 同
 深山無盡湖庄讀易圖 同 同 同
 扇面畫 同 同 同

三月

國寶新指定品一部展観

三月三日 文部省
 新に國寶指定に決したものの中七十點を陳列、關係者の觀覽に供した。

夏寬和尚墨蹟茶掛展観

三月十一日—十四日 上野・松坂屋

山中商會主催東洋古美術展観

三月二十二日—二十六日 東京・日本美術協會
 山中商會に於ては二三年來より毎年この種支那及日本の古美術展観を開催して來たが今年は例年に比して特に大規模の展観を行つた。提示品は主として故山中定治郎が蒐集したもので、六朝、隋、唐、宋時代の石佛、周代の銅器、我が國上代より鎌倉に至る佛像、及び日支の古

畫、古赤繪と吳須、時代屏風、蒔繪、浮世繪等の各種美術品を網羅し、中に注目すべきものも尠くなく、「北魏正光二年」の銘ある小鍍金佛、隋製作と稱せられる高さ七尺六寸の金剛密迹の兩力士像、周代の銅器等を含んで數二百五十二點を數へた。

東京美術學校春季特別展観
 三月二十四日—二十六日 同校陳列館
 卒業製作陳列に際し同校所藏品の主要なものを特別陳列した。

東京帝室博物館繪畫陳列
 三月中 同館
 東京帝室博物館三月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶、△印重要美術品)

○吉祥天像 絹本着色 奈良藥師寺
 御物繪取障子繪屏風 紙本着色 雙 同
 ○寶樓閣曼荼羅 絹本着色 一幅 京都寶菩提院
 ○黃不動尊像 同 同 同
 ○地藏菩薩像 同 同 同
 ○佛涅槃圖 同 同 同
 ○最勝王經十界寶塔曼荼羅 紺紙金泥 十餘ノ内 岩手大長壽院
 ○五六尊像 絹本着色 一幅 東京鎌倉芳太郎

十六善神圖 同 同 同
 釋迦三尊圖 同 同 同
 ○二河白道圖 同 同 同
 淨土曼荼羅圖 同 同 同
 春日曼荼羅圖 同 同 同
 日吉曼荼羅圖 同 同 同
 ○鳥獸戲畫卷 同 同 同
 元時代 紙本墨畫 四卷ノ内 京都高山寺
 明時代 絹本着色 一雙 千葉法華經寺

○十六羅漢圖屏風 趙璜 絹本着色 一雙 千葉法華經寺

古美術展覧會・展観

古美術展覽會・展觀

寒山拾得蝦蟇 傳劉俊筆 絹本著色 四幅ノ内

鐵拐圖 同

室町時代・李朝時代

○惠可斷臂圖 雪舟筆 紙本淡彩 愛知齋 年 寺

祖師圖 元信筆 紙本著色 六幅 東京 岡崎 正也

△水月觀音圖 周林筆 紙本著色 一 東京 岡崎 正也

蜀葵圖 周林筆 紙本著色 一 東京 岡崎 正也

△梅花小禽圖 單菴筆 紙本墨畫 東京 澤田 牛曆

花鳥圖 文筆筆 紙本著色 一 東京 澤田 牛曆

鷄圖 性曉筆 紙本淡彩 二幅 東京 岸 偉 一

△猫狗圖 完山筆 紙本著色 二幅 東京 岸 偉 一

○佛國師像 同 同 同

○佛應禪師像 同 同 同

天狗草紙 紙本著色 卷 東京 子爵 内藤政光

源氏繪畫帖 傳土佐 米元筆 紙本著色 一 同 室 清次郎

桃山・江戸時代

唐人物圖 松北友 紙本墨畫 十幅ノ内 東京 神谷 傳兵衛

玄鶴蘆雁圖 雪筆 紙本淡彩 二幅 東京 神谷 傳兵衛

神農圖 狩野永 紙本墨畫 一 東京 神谷 傳兵衛

龍圖 狩野深 紙本墨畫 一 東京 神谷 傳兵衛

△猛虎圖 狩野尙 紙本墨畫 一 東京 子爵大河内正敏

維摩圖 信筆 紙本淡彩 一 東京 子爵大河内正敏

山水圖 久綱守 紙本著色 一 東京 男爵 團伊能

花鳥圖 英一蝶 紙本著色 二幅 東京 男爵 團伊能

仁王門圖 高崇谷 紙本著色 一 東京 男爵 團伊能

李廣射石圖 琳筆 同 同

獵々舞圖 鈴木其 紙本著色 二幅ノ内

梅鷺蓄圖 田中抱 紙本著色 二幅ノ内

三平二瀧圖 小川破 紙本著色 一 東京 清野 暢一郎

壽老騎鹿圖 宮崎友 同 東京 清野 暢一郎

葉平歌意圖 土佐光 同 東京 清野 暢一郎

嵐山春景圖 原在中 同 東京 前川 道平

扇面屏風 狩野直 紙本金地 著色一雙 京都 本能 寺

山水圖屏風 海北友 紙本墨畫 一 京都 本能 寺

犬追物圖屏風 松筆 紙本金地 著色一雙 京都 本能 寺

大原行幸圖屏風 長谷川 久藏筆 紙本金地 著色一雙 京都 本能 寺

○大公望圖屏風 琳筆 紙本著色 一隻 東京 小倉 房藏

金銀泥繪卷 畫野村 宗遠筆 紙本墨畫 及泥畫一卷 東京 美術學校

觀音堂緣起繪卷 立野々口 紙本著色 一 東京 美術學校

橋姬物語繪卷 傳住吉 具慶筆 同 東京 美術學校

石山寺緣起畫卷 谷文晁 紙本著色 二卷ノ内

竹圖 池野大 紙本墨畫 一 東京 長尾 欽彌

秋景山水圖 與謝蕪 紙本著色 一 東京 長尾 欽彌

吾汝同醉圖 竹田筆 同 東京 長尾 欽彌

△山水圖 賴山陽 紙本墨畫 一 東京 保阪 潤治

山水圖 象山筆 紙本墨畫 一 東京 保阪 潤治

青絲山水圖 岡田半 紙本著色 一 東京 保阪 潤治

花鳥圖 山本梅 紙本著色 二幅ノ内 東京 保阪 潤治

秋景山水圖 藤本鐵 紙本著色 一 東京 保阪 潤治

獅子圖 圓山應 紙本著色 一 東京 保阪 潤治

群盲圖 月倦筆 紙本著色 二幅ノ内 東京 佐々木 昌興

松一孔雀圖 森徹山 紙本著色 一 東京 佐々木 昌興

柳蟹圖 藤川文 同 東京 佐々木 昌興

南蠻人圖 亞歐堂 同 東京 佐々木 昌興

白百合圖 田野筆 同 東京 佐々木 昌興

白牡丹圖 直武筆 同 東京 佐々木 昌興

○自畫像 佐竹義 同 東京 佐々木 昌興

人形像 岩佐勝 同 兵庫 武岡 忠夫

梅下美人圖 古山師 同 兵庫 武岡 忠夫

人形遊圖 政筆 同 兵庫 武岡 忠夫

△沙干狩圖 稻垣つ 同 兵庫 武岡 忠夫

△京名所圖屏風 齋筆 紙本著色 一 兵庫 武岡 忠夫

歌舞伎遊樂圖 歌野村 宗遠筆 紙本著色 一 兵庫 武岡 忠夫

山野遊行圖屏風 與謝蕪 同 東京 大島 文義

風俗圖屏風 村筆 同 東京 大島 文義

清時代・江戸時代

牧馬圖卷 郎世寧 紙本著色 一 東京 大島 文義

秋山行路圖卷 肅雲從 紙本淡彩 卷 東京 大島 文義

△耶馬溪圖卷 高橋草 紙本著色 一 東京 高村 真夫

近世職人盡圖卷 歙形憲 紙本淡彩 三卷ノ内 東京 高村 真夫

版畫・江戸時代

七小町雨乞小町 居酒倍 漆繪一枚 東京 西村 總左衛門

近江八景、栗津晴嵐 西村重 同 東京 西村 總左衛門

美人遊戯圖 鳥居清 紅摺繪 東京 西村 總左衛門

瀨川菊次郎圖 石川豊 紅摺繪 東京 西村 總左衛門

信 一 東京 西村 總左衛門

強力女荒鷺岩尾 鳥居清 紅摺繪一
風俗四季歌仙 鈴木春 錦繪一枚 東京 内田 誠
水無月 信木 同 同 西村總左衛門 誠
祇園二軒茶屋 同 同 同 同
圓窓美人圖 同 同 同 同
市川團十郎圖 同 同 同 同
大谷廣次圖 同 同 同 同
おのへや前圖 一文齋 同 東京 内田 誠
坂田半五郎圖 勝川春 同 同 同
市川高麗藏圖 英川春 同 同 同
中村松江圖 勝川春 同 同 同
江戸夏十景なか 鳥居清 同 東京 西村總左衛門
酒宴圖 同 同 同 同
美南見十二侯 同 同 同 同
青樓美人五雁金 喜多川 同 同 同
圖 歌麿 同 同 同
美人五面相圖 同 同 同 同
男女圖 同 同 同 同
風俗美人時計圖 同 同 東京 小石川松嗣
風流合十二葉圖 鳥文齋 同 同 同
美人花見圖 同 同 同 同
富嶽卅六景甲州 齋藤北 同 東京 小石川松嗣
犬目時圖 同 同 同 同
諸國名橋奇覽 同 同 同 同
錦帶橋圖 同 同 同 同
江戶名所(細版) 安藤廣 同 同 内田 誠
繪本八千代草 鈴木春 同 同 同
狂月坊 喜多川 同 東京 小石川松嗣
東都名所一覽 齋藤北 同 同 同
岡田川兩岸一覽 同 三 册 同 同

奈良帝國博物館繪畫陳列

三月中 同館

奈良帝國博物館三月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶、△印重要美術品)

○梵天像(十二天)	貞觀時代	絹本着色	奈良西大寺
○持幡童子像	藤原時代	同	同
(阿彌陀)			
(三尊ノ内)			
○觀世音勢至善	同	同	同
○薩像(同)	同	同	同
○慧思禪師像	同	同	同
(天台高僧)			
(像ノ内)			
○聖觀音菩薩像	同	同	同
○明空法師像	鎌倉時代	同	同
○華嚴五十五箇所	同	同	同
○繪卷			
○般若多羅十六善	藤原時代	板漆繪	名古屋七寺
○神圖	同	同	同
○尊勝曼荼羅圖	鎌倉時代	絹本着色	大津園城寺
○山王本地佛像	同	同	同
○天台大師像	同	同	同
○法然上人行狀	同	紙本着色	奈良當麻寺奥院
○繪卷			
○夢窓國師像	無等周	絹本着色	京都妙智院
○閻魔王圖	鎌倉時代	同	堺長泉寺
○佛涅槃圖	同	同	堺賀石山寺
○愛染明王像	室町時代	同	奈良費山寺
○不動明王二童子	同	同	滋賀石山寺
○像			
○十王圖(十幅ノ内)	同	絹本着色	京都二尊院
○弘法大師行狀	鎌倉時代	絹本着色	同
○繪卷			
○月天像(十二天ノ内)	室町時代	絹本着色	滋賀西明寺
○觀音菩薩像	同	絹本着色	奈良南法華寺

受戒本尊三尊像 室町時代 絹本着色 奈良能満院

恩賜京都博物館繪畫陳列

三月四月 同館

恩賜京都博物館三月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた

日本畫	同	一	醍醐寺
阿彌陀三尊像	同	二	同
十二天像(毘沙門、月天)	同	一	同
十六羅漢像	同	一	同
二十五菩薩來迎圖	同	一	同
十體阿彌陀像	同	一	同
愛染明王像	同	一	同
麝香貓 仙人圖及花鳥圖	傳元信	雙幅	大德寺
四愛圖	同	一	同
人物圖	山雪	一	同
山水人物圖	生駒等壽	同	同
布袋圖	揚月	同	同
兩界曼荼羅	同	二	同
一遍上人繪傳	同	四	同
釋迦文殊普賢像	同	一	同
誓願寺緣起	同	一	同
梅竹圖	同	三	同
龍虎圖	木下塵段	四	同
淨阿上人繪傳	同	一	同
山水圖	同	一	同
歌舞伎圖	同	一	同
德壽院殿像	同	一	同
前田菊姬像	同	一	同
文殊大士像	同	一	同
白衣大士像	同	一	同
牛半圖	同	一	同
寒山拾得圖	同	一	同
花鳥圖	同	一	同
運轡圖	同	一	同
竹園	同	一	同
僧日蓮像	同	一	同
不動像	同	一	同
翻恩庵庭園圖	同	一	同

山水花鳥魚族圖 一卷 小谷時江
支那

蓮花圖 一幅 佐山傳右衛門
花鳥圖 二幅 高臺寺
赤衣釋迦十大弟子像 三幅 禪林寺
猿圖 一幅 曼殊院
牡丹圖 同 龍光院
十六羅漢圖 八幅 高山寺
藥山李翺問答圖 一幅 南禪寺
醉翁亭圖 一卷 桑名鐵城
雁圖 同 薛湘院
扇面 諸家 五面 須磨彌吉郎

四月

萩原井泉水鑑選俳諧古人眞蹟展覽會
四月一日—五日 日本橋・高島屋

芭蕉以後明治に至る迄の著名な俳人の書又は自畫贊等約百點を萩原井泉水の鑑選によつて陳列した。

充美會主催古美術大展開
四月六日—十一日 大阪・阪急百貨店

大日本古美術保存協會主催第一回古美術品展觀
四月十日—十四日 福岡・公會堂

高橋藏古軒將來東洋古陶器展覽會
四月十四日—十九日 大阪・三越

漢代の壺を初め、唐宋、遼金時代の古陶器約八十點を陳列した。

白木屋主催奈良古美術展
四月十五日—二十日 日本橋・白木屋

後鳥羽天皇七百年記念拜展
四月十六日—三十日 恩賜京都博物館

後鳥羽院が御配流の地隱岐に於て曆應元年二月二十二日崩御遊ばされてから今年は恰も七百年に當る。院を祭祀し奉る水無瀬宮に於ては四月三日から壯嚴な祭典が舉行された。恩賜京都博物館ではこれを期として後鳥羽院

に御縁由の深い遺物の數々を蒐めて記念拜展を催した。提示された品數百點を超え、就中御物後鳥羽天皇宸影、天子大臣攝關御影、新古今和歌集二種合せて四點の御貸下げがあつた。この御物は寔に貴重な御品で、美術史上には言ふまでもなく、一般史學及文學史上にも多大の參考が得られたことを謹記する次第である。就中今度始めて觸目の機を得た天子攝關大臣御影は三卷からなり第一卷は鳥羽天皇から御醍醐天皇まで御歴代の御尊像、第二卷は攝關影で法性寺關白から後圓光院關白に至るまで、第三卷は大臣影で家忠公から兼季公に至るまで、この三卷はもと洛北一乘寺の曼殊院門跡の什寶であつたが明治帝の御沙汰により明治十一年御府に獻納されたものである。

尙御物の外には水無瀬神宮藏の御鳥羽院の御衣冠姿の御影一幅、及び御法體の御影が注目された。筆蹟、文書類の中では熊野懷紙の七幅が注目され、又新古今和歌集は十三種も網羅され、鎌倉期から江戸時代に至るまでの傳寫本をその時代順に展示された。その他稀觀に屬する文書類には、御英邁の御資性に富ませられ、殊に藝術に對して御造詣深くあらせられた院の御遺業について學界は言ふを須ひず、一般にも甚深の啓示を與へたことは記念展として最も有意義の催しであつた。

螺鈿を中心とする髹漆工藝展覽會

四月二十日—五月十五日 奈良帝室博物館

本年度の特別展觀として奈良帝室博物館ではわが國上代から現代までの漆工藝品を系統的に陳列し、その發達變遷の展示を企てた。先づ上代工藝品の冠たる玉蟲厨子を第一室の中央に陳列し、四方より熟覽するに便を計つたことは特筆される。奈良時代の遺品としては御物の座蓐飾の箭及東大寺藏の花鳥彩繪油色箱、及花鳥形金平文太刀があり、平安時代に至つては延曆寺藏の寶相華蒔繪經箱をはじめ、各社寺所藏の國寶の經箱、唐櫃等が出品された。就中安田一氏藏の龍膽丸文蒔繪盤等は從來餘

り出陳されたことのないもので注目された。鎌倉時代遺品の例としては鶴岡八幡宮の硯箱、三島神社藏の手宮等の名品がある。以下各時代のそれ／＼代表的な遺品と共にはじめて紹介されたものもかなりあり、總數七十餘點であつた。この展示品を以て多種多様の様式技法を含んでゐるわが國漆工藝の全數を直ちに系統的に把握することは困難であらうが、各時代の代表的作品を一堂に蒐めたことは參考に資する所が少くなかつた。次に目錄を掲げる。(○印國寶、△印重要美術品)

飛鳥・奈良時代

- 玉蟲厨子 一基 奈良法隆寺
- 花鳥彩繪油色箱 一合 同 東大寺
- 御物、座蓐飾/箭 一隻 同 奈良法隆寺
- 座蓐飾/箭 四隻 同 奈良法隆寺
- 花鳥形金平文太刀 一口 同 東大寺
- 葛形金平文太刀 一雙 同 同 同
- 金銀繪漆皮箱殘闕 同 同 同

平安時代

- 寶相華銀平文箱 一合 東京根津嘉一郎
- 寶相華蒔繪經宮 同 滋賀延曆寺
- 海賦蒔繪袈裟宮 同 京都教王護國寺
- 蓮唐草蒔繪經宮 同 福井神宮寺
- 澤千鳥螺鈿蒔繪小唐櫃 同 和歌山金剛峰寺
- 俱利伽羅龍蒔繪經宮 一具 奈良當麻寺
- 蓮蒔繪經宮 一合 大阪金剛寺
- 大般若經唐櫃及經宮 同 京都勤修寺
- 松喰鶴蒔繪小唐宮 同 愛知七島神社
- 木目塗螺鈿劔太刀 一口 廣島嚴島神社
- 螺鈿蒔繪細太刀笄箱 二口 同 同
- 桐竹白鐵蒔繪瓶子 一口 奈良手向山神社
- 龍膽丸文蒔繪禮盤 一基 東京安田一
- 黑漆寶相華螺鈿卓 一脚 奈良法隆寺
- 寶相華螺鈿平慶卓 同 岩手大長壽院
- 寶相華螺鈿平慶燈臺 一基 同 同
- 丸寓生螺鈿盤 一杆 奈良手向山神社

鎌倉時代

○沃懸地藤菊螺鈿視箱 一合 神奈川 鶴岡八幡宮

沃懸地杏葉螺鈿平胡鉢 一口 同 同

○沃懸地杏葉螺鈿太刀 二口 同 同

○大圓相牡丹蒔繪經箱 一合 奈良 西大寺

○住吉蒔繪手箱 同 栃木 輪王寺

○沃懸地梅蒔繪手宮 同 静岡 三島神社

○洲濱千鳥蒔繪手宮 同 京都 野村徳七

○龜甲縹文蒔繪手宮 同 奈良 春日神社

沃懸地浮線綾螺鈿香合 同 京都 田中忠三郎

運池蒔繪厨子扉 同 奈良 當麻寺

○黑漆寶相華螺鈿卓 一脚 同 京都 東大寺

沃懸地螺鈿居箱 一口 同 京都 醍醐寺

黑漆波螺鈿設相箱 一口 同 同

黑漆櫻螺鈿靴 一背 同 同

沃懸地獅子螺鈿靴 同 同 同

室町時代

○忍菖蒔繪螺鈿手箱 一合 和歌山 金剛峯寺

○牡丹獅子蒔繪經箱 同 愛知 萬徳寺

扇散蒔繪手箱 同 同 同

○瀨蒔繪手箱 同 同 同

△橘蒔繪手箱 同 同 同

御物松螺鈿靴 一背 同 同

櫻螺鈿靴 同 同 同

松鶴蒔繪散米盆 一枚 同 同

○繪寶蒔繪經箱 一合 滋賀 百濟寺

梅蒔繪箱 同 同 同

莖菜蒔繪箱 三合 同 同

△花白河蒔繪視箱 一合 同 同

御物濱松蒔繪文臺 一合 同 同

△山蒔繪視箱 一合 同 同

○格子菊蒔繪手箱 同 同 同

男山蒔繪視箱 同 同 同

△春日山蒔繪視箱 同 同 同

△角田川蒔繪小視箱 同 同 同

紅葉蒔繪沈箱 同 同 同

○梅蒔繪文臺視箱 一具 同 同

桃山・江戸時代

○秋草蒔繪八足机 一具 同 同

○秋草蒔繪短刀宮 一具 同 同

○秋草蒔繪歌書置筒 一基 同 同

○秋草蒔繪角赤手箱 一合 同 同

○秋草蒔繪手箱 同 同 同

○花蒔繪唐櫃 同 同 同

○花蒔繪唐櫃 同 同 同

○菊蒔繪繪線 一口 同 同

○菊蒔繪繪線 一口 同 同

舟橋蒔繪視箱 同 同 同

八橋蒔繪視箱 同 同 同

支那美術大展覽會

四月二十二日—五月十四日 大阪市立美術館

支那事變が新東亞建設の段階に進んだのを機として、

日支親善と文化提携の目的のために催された展覧で、支

那美術諸部門に互る陳列が行はれた。

陶磁器は總數二百二十二點、特別陳列として住友男爵

家の鼻煙壺百三十七個を加へ、時代は上代から清に至る

までを網羅してゐる。金工及漆工は總數四十七點、その中

黒川福三郎所藏及び鹽原又策、武内金平、藤井善助、根

津嘉一郎等の重要美術品に認定されてゐる古銅器が注目

される。繪畫はおよそ百十四點。その主要なものは元か

ら清に至るまでの遺品で、鶴林寺藏彌陀三尊及び李公麟

筆と傳へる瀟湘臥遊圖卷、又著名な金地院藏の秋冬山水

鈴木正美藏風柳蟬蝶圖、及び吳叔明筆秋山蕭寺圖、住友

寛一藏の石濤筆山水、及び蘆山觀瀑圖、大恩寺藏王宮曼

茶羅、大光明寺藏の羅漢、大心院の羅漢、知恩寺藏の

蝦蟇鐵拐圖、傳王維筆智積院瀧圖、洞春寺の維摩居士、南

禪寺藏蔣三松筆江山漁舟圖、同寺馬公顯筆藥山李翔問答

圖、本願寺藏傳趙仲穆筆雪中柳鷺圖、林平造藏の九段錦

畫册、同じく王時敏筆江山蕭寺圖、本連寺藏傳馬遠山水

圖、原田悟郎藏沈石田筆層巒疊嶂圖、法然寺藏十王圖等

は國寶及び重要美術品であつて、中には未だ世に紹介さ

れたことのない珍品も見ることが出來た。

尙筆蹟は十六點の中王羲之の遊目帖をはじめとして米

芾筆元日帖、蘇東坡の寒食帖、林平造藏の大智度論卷第

八十三等の逸品が出陳されたことも特筆すべきであら

う。かやうに支那美術品の各種多數が出陳されたことは

珍しく、注目される展覧であつた。

佐々木昌興蒐藏彰城百川作品展覧

四月二十三日 美術研究所

美術懇話會の催して百川の作品蒐集に努める佐々木昌

興の藏品中約四十點を選んで展覧した。百川はわが國南

宗畫の祖として知られながら從來その遺品の紹介される

所少く、その畫蹟の發展を詳かにし難い憾みがあつたの

を、や、充すにたりたものといふべく、これらの遺品か

ら彼が明清の實蹟を參考としつゝ、自ら南宗を拓いた跡が

見られ、しかも未だ独自の畫風を立てる迄に至らなかつ

たことなどを推察させるものがあつた。尙彰城百川に就

いて田中喜作が講話を行つた。

梅林山水圖 紙本淡彩 畫菴小禽圖 紙本淡彩

赤壁圖 同 山水圖 紙本墨畫

梅花圖 紙本墨畫 雅遊圖 紙本著色

蓮花圖 紙本淡彩 西園雅集圖 同

梅花圖 紙本墨畫 鷄圖 紙本著色

松下人物圖 紙本著色 溪山隱居圖 紙本淡彩

蘭圖 紙本墨畫 山水圖 同

雪中山水圖 紙本淡彩 幽居讀書圖 同

菊花小禽圖 紙本著色 歸去來圖 紙本著色

陶淵明圖 紙本墨畫 反魂香圖 紙本淡彩

鷄圖 紙本著色 打棹圖 紙本著色

維摩圖 紙本墨畫 菊花小禽圖 紙本墨畫

一四一

古美術展覽會・展観

一四二

狸圖 紙本墨畫 蜀橋道圖 絹本著色 一 幅

大黒圖 紙本淡彩 紅梅小禽圖 同 同

芭蕉翁像 紙本墨畫 高士舟遊圖 同 同

曳船圖 同 山水圖 絹本墨畫 四幅對ノ内

宮筠圃筆 百川贊 同 梅花群禽圖 絹本著色 一 幅

竹園 絹本著色 老松鷺鳥圖 絹本墨畫 一 幅

蘭圖 紙本淡彩 高士觀瀑圖 絹本淡彩 一 幅

時代名石燈籠展観 四月三十日―五月三日 上野・松坂屋

全國名家古利より蒐めた鎌倉時代より江戸初期時代に至る迄の石燈籠及蹲踞、并筒、伽藍等三十餘點を陳列した。

東京帝室博物館繪畫陳列

四月中 同館

東京帝室博物館四月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶、△印重要美術品)

平安・鎌倉時代

御物繪殿障子繪屏風 絹本著色 五隻ノ内

○孔雀明王像 絹本著色 奈良法隆寺

○十二天像 絹本著色 奈良法隆寺

○十二天像 絹本著色 同 西大寺

○五大尊像 絹本著色 京都救王護國寺

○五大尊像 絹本著色 同 醍醐寺

○天台高僧像 絹本著色 兵庫一乘寺

○淨土曼荼羅圖 絹本著色 奈良極樂寺

○十六羅漢圖 絹本著色 滋賀來迎寺

○文殊渡海圖 絹本著色 京都光臺院

○普賢十羅刹女圖 絹本著色 鳥取常忍寺

○愛染明王像 絹本著色 京都寶善提院

○十二天像 絹本著色 滋賀來迎寺

聖德太子勝鬘經講讀圖 絹本著色 奈良法隆寺

淨土曼荼羅圖 同 同

當麻曼荼羅起繪卷 紙本著色 二卷ノ内 神奈川光明寺

北野天神緣起殘缺 紙本著色 一卷ノ内

隨身鹿騎圖卷 紙本淡彩 一卷ノ内 東京男爵大倉喜七郎

宋・元・明時代

○出山釋迦圖 梁楷筆 絹本淡彩 一 幅 東京伯爵酒井忠克

○雪景山水圖 同 同

○運池水禽圖 德謙筆 絹本著色 二 幅 同 三井合名會社

○蓮花圖 錢選筆 同 同 京都本法寺

○四季花鳥圖 呂紀筆 絹本著色 四 幅 東京公爵島津忠承

室町時代

△祭禮繪卷 紙本著色 一 卷 東京侯爵前田利爲

地藏緣起繪卷 同 同

四睡圖 默庵筆 絹本墨畫 一 幅 同 同

○觀音圖 良全筆 絹本淡彩 一 幅 東京男爵山本達雄

文殊像 靈彩筆 絹本墨畫 一 幅 同 子爵福岡孝紹

○天之橋立圖 傳雪舟 絹本淡彩 一 幅 同 侯爵山内豊景

鐘屠圖 周耕筆 同 同 東京美術學校

菅公像 菅公像 紙本著色 一 幅 同

猪頭親子像 揚月筆 紙本墨畫 一 幅 同

藍鷺圖 單菴筆 紙本墨畫 一 幅 同

花鳥圖 文筆筆 紙本著色 一 幅 同

鍾屠圖 山田道安筆 紙本淡彩 一 幅 京都寂光寺

靈照女像 主叱齋筆 紙本著色 一 幅 同

鶯圖 性曉筆 絹本墨畫 一 幅 同

○三光國師像 絹本著色 一 幅 同

○喜江輝師像 紙本墨畫 一 幅 同

清水寺緣起 信筆 紙本著色 三卷ノ内 神奈川建長寺

山水圖屏風 雪舟筆 紙本淡彩 二 幅 東京侯爵黑田長成

商山四皓圖屏風 狩野元信筆 絹本著色 一 幅 同

○秋草鶉圖屏風 日月光 同 同

扇面畫帖 傳狩野元信筆 紙本著色 一 幅 同

○秋草鶉圖屏風 扇面畫帖 同 同

○桃山時代 竹四季山水圖屏風 曾我直菴筆 紙本墨畫 一 幅 京都寂光寺

龍虎圖屏風 土佐一得筆 紙本著色 一 幅 同

源氏繪屏風 土佐一得筆 紙本著色 一 幅 同

官女圖屏風 扇面畫帖 同 同

扇面畫帖 土佐光則筆 紙本著色 一 幅 東京長谷川巳之吉

西行物語繪卷 野村宗達筆 絹本著色 四卷ノ内 同 公爵毛利元道

江戶時代 櫻山吹圖屏風 傳野村宗達筆 紙本著色 一 幅 同

△山水圖屏風 彰城百川筆 同 同

△茶廷酒宴圖屏風 與謝蕪村筆 紙本著色 一 幅 同

玉獨奏、雁來紅圖 屏風 紙本著色 一 幅 同

花鳥圖屏風 狩野常信筆 紙本著色 一 幅 同

雪中老松圖屏風 圓山應舉筆 紙本墨畫 一 幅 同

秋冬山水圖屏風 同 同

同 同

山水圖屏風 長澤蘆 金地墨畫 京都宮田兵三
 大井川遊覽雙子 浮田一 紙本著色 同 泉 涌 寺
 日遊圖屏風 蕙筆 紙本著色 雙 同 泉 涌 寺
 寫生圖卷 狩野探 紙本著色 同 泉 涌 寺
 寫生圖帖 圓山應 紙本著色 二 泉 涌 寺
 舉筆 二 泉 涌 寺
 洞庭赤壁圖卷 池大雅 一 泉 涌 寺
 筆本著色 泉 涌 寺
 宇治茶摘圖 橫山華 二 泉 涌 寺
 山筆 二 泉 涌 寺
 香取詣圖卷 渡邊華 一 泉 涌 寺
 山筆 一 泉 涌 寺
 羅漢畫帖 藤本鐵 一 泉 涌 寺
 石筆 一 泉 涌 寺
 山水畫帖 浦上玉 一 泉 涌 寺
 荳筆 一 泉 涌 寺

○洞庭赤壁圖卷 池大雅 一 泉 涌 寺
 筆本著色 泉 涌 寺
 宇治茶摘圖 橫山華 二 泉 涌 寺
 山筆 二 泉 涌 寺
 香取詣圖卷 渡邊華 一 泉 涌 寺
 山筆 一 泉 涌 寺
 羅漢畫帖 藤本鐵 一 泉 涌 寺
 石筆 一 泉 涌 寺
 山水畫帖 浦上玉 一 泉 涌 寺
 荳筆 一 泉 涌 寺

△坎々樓由良之助 鳥居清 錦繪三枚 東京三原繁吉
 遊戯圖 長 錦繪一枚 同 同
 官女圖 同 同 同
 美南見十二侯 同 同 同
 五月 同 同 同
 風俗東之錦 同 同 同
 三圍社頭遊散圖 同 同 同
 青櫻爾和菫鹿島 喜多川 同 同 同
 踊繪圖 歌麿筆 同 同 同
 二美人圖 同 同 同
 音曲戀の操梅川 同 同 同
 忠兵衛圖 同 同 同
 △歌撰戀之部思戀 同 同 同
 青櫻十二時續午 同 同 同
 之刻圖 同 同 同
 青櫻十二時續巳 同 同 同
 △橋下男女漁釣圖 同 同 同
 見立伊勢物語圖 同 同 同
 △風流略六歌仙圖 鳥文齋 錦繪一枚 三原繁吉
 △美人道中圖 同 同 同
 △青櫻美人六花仙 同 同 同
 △遊若和歌三神 鳥高齋 同 同 同
 △丁字屋籠籠圖 榮昌 同 同 同

難波屋店先圖 榮松齋 錦繪三枚 東京內田誠
 永壽堂店先圖 國筆 同 太田新吉
 尾上松助圖 東洲齋 錦繪一枚 同 同
 松本幸四郎の煙 同 同 山村耕花
 管持男圖 同 同 同
 坂田半五郎の惡 好筆 同 同 同
 市川八百藏の助 勝川春 同 同 同
 六圖 英筆 同 同 同
 市川高麗藏の助 水府登 同 同 同
 六圖 春筆 同 同 同

○退走德面 後期 同 同 手向山神社
 ○新鳥蘇面 元銘二 木造彩色 奈良春日神社
 ○拔頭面 承元五 同 一ノ宮眞清田神社
 ○還城樂面 建銘元 木造朱漆 一ノ宮眞清田神社
 ○還城樂面 天養元 塗一面 奈良法隆寺
 ○二舞面 治承二 同 名古屋熱田神社
 ○二舞面 後期 同 奈良法隆寺
 ○陵王面 鎌倉 同 福岡觀世音寺
 ○陵王面 時代 同 同 同
 御物伎樂面 同 同 同
 御物伎樂面 奈良 同 同 同
 御物伎樂面 時代 同 同 同
 舞樂面 同 同 同

○善薩面 後期 同 奈良法隆寺
 ○梵天面 應德三 同 京都敦王護國寺
 ○帝釋天面 同 同 同
 ○興昇面 同 同 奈良法隆寺
 ○興昇面 保延四 同 同 同
 ○興昇面 同 同 同
 ○龜拂面 同 同 同
 ○彌勒菩薩半跏像 飛鳥時 代 木造一軀 京都廣隆寺
 ○觀音菩薩像 同 同 本造漆箔 奈良法隆寺
 ○觀音菩薩像 同 同 同 同 同
 ○如來立像 同 同 銅造一軀 大分柞原八幡宮
 ○誕生釋迦佛立像 同 同 同 奈良眞隆寺
 ○觀音菩薩立像 奈良時 代 同 同 法隆寺
 ○彌勒菩薩立像 同 同 乾漆造漆 同 同
 ○釋迦如來坐像 同 同 箱一軀 同 同
 ○須菩提立像 同 同 木造漆箔 同 同
 ○乾漆造彩 同 同 一軀 同 同
 ○沙彌羅立像 同 同 同 同 同
 ○藥師如來立像 同 同 木造一軀 同 同
 ○聖觀音立像 同 同 木造彩色 同 同
 同 同 同 同 同

古美術展覽會・展觀

古美術展覽會・展觀

○聖觀音立像	平安前	木造彩色	大阪	觀心寺
○青面金剛立像	同	同	奈良	東大寺
○藥師如來坐像	同	木造一軀	靜岡	下河津村谷津區
○不動明王坐像	同	木造彩色	京都	般舟院
○維摩居士坐像	同	木造一軀	大津	石山寺
○阿彌陀如來及諸尊像	同	木造一基	靜岡	智滿寺
○如意輪觀音坐像	同	石造一軀	高知	最御崎寺
○阿彌陀如來立像	平安後	木造彩色	福岡	觀世音寺
○兜跋毘沙門天像	同	同	東京	侯爵井上三郎
○十一面觀音立像	同	同	奈良	當麻寺
○聖觀音立像	同	同	福岡	觀世音寺
○毘沙門天立像	同	同	高知	雪驥寺
○帝釋天立像	定慶作	同	奈良	興福寺
△持國天立像	鎌倉時	同	東京	男爵益田太郎
○阿彌陀如來立像	永仙作	同	京都	大報恩寺
○迦葉立像	快慶作	同	京都	大報恩寺
○空也上人立像	鎌倉時	同	滋賀	莊嚴寺
○愛染明王坐像	康國作	同	京都	神護寺
○北條時賴坐像	鎌倉時	同	滋賀	建長寺
○慈惠大師坐像	蓮妙作	同	滋賀	金剛輪寺
○惟仙和尚坐像	嘉曆四	同	長野	安樂寺
○御物四十八體佛像	飛鳥代	同	奈良	唐招提寺
○釋迦如來坐像	奈良時	木造一軀	奈良	唐招提寺
○十一面觀音立像	平安前	木造彩色	同	秋篠寺
○十一面觀音立像	同	同	滋賀	賀石馬寺
○廣目天立像	同	同	福岡	島藥師堂
○地藏菩薩立像	同	同	奈良	室生寺
○十一面觀音立像	同	同	岐阜	坂本照寺
○多聞天立像	平安後	同	奈良	藥師寺
○十二神將立像	長勢作	同	京都	廣隆寺
○千手觀音立像	平安後	木造漆箔	奈良	西院

○釋迦如來坐像	平安後	木造漆箔	奈良	興福寺
○阿彌陀如來立像	鎌倉時	木造彩色	奈良	興福寺
○飛天像	同	木造漆箔	奈良	興福寺
○波夷羅大將立像	海覺作	木造彩色	高知	雪溪寺
○赤童子立像	鎌倉時	同	山口	大照院
○韋駄天立像	同	同	岐阜	卓乙津寺
○惠仁和尙坐像	同	同	長野	安樂寺
○觀音菩薩立像	室町時	同	同	同
○釋迦如來坐像	平安前	木造漆繪	奈良	藥師寺
○女神坐像(仲津姫)	期	木造彩色	奈良	藥師寺
○伊豆山權現立像	鎌倉時	同	靜岡	般若院
○帝釋(十二天)天像(像ノ内)	貞觀時	絹本着色	奈良	西大寺
○兩界曼荼羅圖	藤原時	絹本着色	京都	教王護國寺
○阿彌陀如來像	同	絹本着色	奈良	法華寺
○龍樹(天台高僧ノ内)	同	同	兵庫	一乘寺
○增長天像	同	同	奈良	興福寺
○信貴山緣起繪卷	同	紙本着色	同	朝護孫子寺
○扇面法華經	同	紙本着色	同	法隆寺
○拳勝曼荼羅圖	鎌倉時	絹本着色	大津	園城寺
○十界圖	同	絹本着色	滋賀	賀來迎寺
○十六羅漢圖	同	絹本着色	同	寶嚴寺
○東征傳繪卷	同	紙本着色	奈良	唐招提寺

奈良帝室博物館繪畫陳列

四月 同館

奈良帝室博物館二月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

○佛涅槃圖	鎌倉時	絹本着色	京都	正暦寺
○十六善神像	同	同	京都	温泉寺
○聖德太子御像	同	同	京都	中村竹四郎
○不空罽索觀音像	同	同	兵庫	一乘寺
○鑑真和尚像	室町時	同	奈良	東大寺
○興正菩薩像	同	同	同	同
○聖德太子繪傳	同	絹本着色	同	同
○十六羅漢圖	宋時代	絹本着色	京都	高臺寺
○弘法大師行狀繪卷	鎌倉時	紙本着色	同	教王護國寺
○野子繪屏	同	黒漆板繪	奈良	唐招提寺
○慈惠大師像	室町時	絹本着色	同	藥師寺
○太元明王像	同	同	同	長谷寺

白鶴美術館春季展覽會

五月一日—二十日 兵庫縣住吉・白鶴美術館
主として同館の收藏になる形物香盒を特別陳列した。陶磁器は、交趾、形物、青磁、染付、吳須、祥瑞等、二十五點、漆器は和漢堆朱、堆黒、鎌倉彫、存星、蒔繪等十八點である。

香盒類(陶磁)	染附岡田川香盒	一合
交趾形物、青磁、染附、吳須、祥瑞等	染附形變り岡田川香盒	同
交趾菊蟹香盒	古染附莊子香盒	同
交趾黃獅子香盒	染附花莊子香盒	同
交趾石榴香盒	染附分銅蝶香盒	同
交趾石榴香盒	染附犬莊子香盒	同
青磁蜜柑香盒	染附櫻牛香盒	同
青磁桃香盒	染附蓮丁子香盒	同
青磁浮牡丹香盒	染附張甲牛香盒	同
古染附立螺香盒	染附水牛香盒	同
古染附橫螺香盒	吳洲周茂叔香盒	同

- 吳洲松嶽香盒 皮一合
 吳洲銀香盒 同
 薛瑞拍子木香盒 同
 染付拍子木香盒 同
 薛瑞筋甲香盒 同
 薛瑞豆牙香盒 同
 香盒類(漆器)
 和漢、堆朱、堆黑、鎌倉彫
 存星、蒔繪其の他
 堆朱風月三毘影香盒 一合
 玉楯象谷作
 地紅堆黑牡丹影香盒 同
 象谷作
 堆朱運寫影香盒 同
 逸見東洋作
 鈞留尾長島銀金貝人錫 同
 綠角香盒 同

日本美術社主催丹波と瀬戸古陶器展

五月一日—五日 日本橋・高島屋

大雅堂畫本類陳列

五月二日—二十五日 東京美術研究所陳列所

東京美術研究所では池大雅に關する畫譜、及び法帖類の希觀に屬するもの、又は主要なもの等を蒐めて特別展觀した。左に目錄を掲ぐ。

- | 品目 | 所藏者 |
|-------|-----------------|
| 大雅行書跋 | 大雅行書跋 (一) 三成重敬 |
| 若心經 | 大雅堂楷書 (一) 脇本樂之軒 |
| 千字文 | 大雅行書千 (一) 脇本樂之軒 |
| 大雅行書千 | 大雅行書千 (一) 脇本樂之軒 |
| 文字 | 大雅堂畫譜 (一) 脇本樂之軒 |
| 畫譜 | 大雅堂畫譜 (一) 脇本樂之軒 |
| 名花十二種 | 名花十二種 (一) 脇本樂之軒 |
| 池大雅畫譜 | 池大雅畫譜 (一) 脇本樂之軒 |
| 大雅堂山水 | 大雅堂山水 (一) 清川林之助 |
| 縮圖 | 大雅堂山水 (一) 清川林之助 |
| ひとよばな | ひとよばな (一) 三成重敬 |
| 便面瀟湘八 | 便面瀟湘八 (一) 香取秀眞 |

古美術展覧會・展觀

三浦眞介蒐集肉筆浮世繪展覽會

五月二日—七日 大阪・松坂屋

東京在住の三浦眞介の所藏の名品を陳列したものである。桃山時代の風俗畫屏風、初期浮世繪肉筆歌舞伎圖、逸樂圖、其の他肉筆及版畫等師宣以後の浮世繪畫家の作品が數百點並べられた。尙この他、桃山時代以來の擦漆品の蒐集も併せて陳列された。

寶雲舎主催正倉院御物拓本展

五月六日 芝・増上寺景光殿

寶雲舎發行「茶わん」の第百號發刊記念の爲蠶川式胤珍蒐の正倉院御物の拓本を陳列した。

第四十四回考古學會總會展觀

五月七日 横濱・長谷川龜樂邸

考古學會第四十四回の總會に際し、横濱磯子に陳列館を有する長谷川龜樂蒐藏の金工、考古品及漆工品等の展觀を行つた。品目を左に掲げる。

- | | |
|----------------------|-----------|
| 引手金具 | 四百個 |
| 腹巻 | 二百個 |
| 角杖(寛喜四年歲次壬辰三月廿一日在銘) | 阿古多香爐 三十個 |
| 佛供鏡(南都藥師寺嘉禎元年三月一日在銘) | 薛繪硯箱 十六合 |
| 瓦硯及瓦製水滴(九州出土) | 薛繪文箱 二百個 |
| 朝鮮出土金銅誕生佛 | 薛繪合子 十一合 |
| 吉野形笈 | 秀衡腕 五十三口 |
| | 色漆繪盆 二十五口 |

日本美術協會第百八回美術展(書、篆刻)

五月七日—十四日 日本美術協會

港屋主催九州古陶磁展

五月八日—十日 銀座・資生堂

史學會創立五十年記念第四十回大會展觀

五月十三日 鳥津公爵邸

史學會創立五十年記念の見學展觀である。鳥津公爵家

の秘藏にかゝる歴代總鑑をはじめ古文書、典籍類が陳列された。

時代硝子器展觀

五月十三日—十七日 日本橋・高島屋

元寇展覽會

五月十三日—二十一日 鎌倉國寶館

元寇の役に關する史料を蒐めて陳列したもので、美術品、文書、筆蹟等四十六點である。美術關係の主なものとしては、極樂寺藏釋迦十大弟子像、建長寺藏大覺禪師畫像、圓覺寺藏圓覺寺伽藍圖、及圓覺寺藏佛日庵公物目錄等である。

後醍醐天皇六百年御忌拜展

五月十五日—二十一日 高野山・靈寶館

後醍醐天皇六百年御國忌に當り高野山に於て法要嚴修に際し、これに因んで天皇の勅願文及各關係資料、古文書の當山各寺院に藏するものを特別陳列した。宸翰、勅額、經典、史料、緣起、肖像、靈名、位碑、碑拓等約八十餘點である。

長崎派寫生南宗畫展覽會

五月十六日—三十一日 恩賜京都博物館

恩賜京都博物館では東亞現下の趨勢に鑑み、日支文化關係研究に資する目的を以て、近世長崎に發達せる繪畫の遺品を特別陳列した。即ち沈南蘋、伊孚九以下の來舶支那畫人の代表作及びわが國の畫人でこれら支那畫家の畫風を繼承すると共に、他方には當時同じく長崎に渡來した西洋畫の影響によるいはゆる長崎派の代表作が網羅された。

その中には未だ世に知られない作者及作品が見られたこと、又このやうに多數の遺品の展示によつて、長崎派の様式の發展傾向等尙進んでは當時外來文化の吸收の動向などを辿る上に多大の參考が與へられた。

陳列目錄

百祿封侯圖	沈南蘋	絹本着色	京都	湯淺七左衛門	蜀葵鴉圖	江真村	絹本着色	長崎	吉村善三郎	桐鳳凰圖	大西圭	紙本墨畫	東京	相見香雨
松下双鹿圖	同	同	兵庫	山口謙四郎	松鷹圖	筆	同	同	大阪	博物場	齋筆	紙本墨畫	東京	相見香雨
柳雁圖	同	同	東京	侯爵細川護立	雨中鷄圖	同	同	東京	藤懸靜也	桃枝帶鳥圖	谷文晁	紙本墨畫	同	廣野茂
寒江遊鳧圖	同	同	京都	柴田哲之助	蜀葵圖	同	同	名古屋	大矢梅太郎	牡丹孔雀圖	岸駒筆	同	大阪	八代祐太郎
桃花双鶴圖	同	同	東京	岡崎正也	柳蔭野馬圖	同	同	東京	相見香雨	花鳥圖	圓本秋	同	東京	藤懸靜也
叢鹿圖	同	同	吳	松本勝太郎	芭蕉鶴圖	同	同	同	帝室博物館	岩上鷺鳥圖	圓筆	紙本着色	京都	廣瀨治兵衛
花鳥圖	高鈞筆	絹本着色	京都	野村正次	三千歲圖	同	同	長崎	敗村政次	春花群鳥圖	同	紙本着色	滋賀	西村重郎兵衛
梅竹白頭翁鳥圖	鄭培筆	紙本着色	和歌山	桑山嗣昌	花鳥圖	同	同	鳥根	絲原武太郎	蕃薇鷄圖	同	同	同	同
花鳥圖	同	紙本着色	大阪	田中宗一	海棠紋帶鳥圖	同	同	京都	湯淺七左衛門	牡丹孔雀圖	伊孚九	紙本着色	三重	長谷川治郎兵衛
三千歲圖	熊斐筆	絹本着色	長崎	德永喜一	美人圖	同	同	長崎	吉村善三郎	雜合山(重要美術品)	筆	同	同	同
騰鯉圖	同	同	同	吉村房子	群魚圖	同	同	同	同	山水圖	同	紙本墨畫	京都	森元宗美
鷹圖	同	絹本着色	同	帝室博物館	波濤騰圖	同	同	同	高島星次	唐子遊戲圖	費漢源	紙本着色	東京	高野辰之
藍雁圖	同	絹本着色	長崎	橋本辰二郎	牡丹貓圖	同	同	同	同	唐子遊戲圖	筆	紙本着色	和歌山	桑山嗣昌
藍蟹圖	同	絹本淡彩	同	敗村政次	羅漢圖	同	同	同	同	山水圖	筆	紙本墨畫	同	同
牡丹圖	同	紙本墨畫	同	吉村善三郎	蘭人馴象圖	同	同	神戶	池長孟	墨竹圖	筆	同	長崎	高島星次
菊雁來紅圖	同	絹本着色	三重	長谷川治郎兵衛	果虫圖	同	同	同	同	藍蟹圖	筆	同	同	同
竹石圖	同	絹本墨畫	和歌山	桑山嗣昌	牡丹貓圖畫稿	同	同	京都	富岡益太郎	梅花双禽圖	筆	紙本淡彩	大阪	高田源四郎
菊圖	同	紙本墨畫	同	桐山一雄	梅花群鳥圖	同	同	長崎	松田一三	竹圖	筆	紙本墨畫	兵庫	山本規矩三
牡丹小禽圖	鶴亭筆	絹本着色	長崎	敗村光次	畫帖	同	同	同	吉村善三郎	菊圖	同	同	同	山口謙四郎
萱草鴉圖	同	絹本着色	同	高島星次	芙蓉鴛鴦圖	同	同	同	橋本辰二郎	宜男多子圖	筆	紙本着色	長崎	吉村善三郎
菖子圖	同	同	同	敗村史郎	桃枝帶鳥圖	同	同	同	岩永關夫	蕃薇椿圖	同	同	同	橋本辰二郎
花卉小禽圖	同	絹本着色	同	松坂久兵衛	牡丹孔雀圖	同	同	鳥取	安富勳兵衛	藕花香雨圖	同	同	東京	吉田琢郎
富嶽圖	同	絹本墨畫	同	松木長兵衛	竹虎圖	同	同	大阪	田中宗一	梅花圖	筆	紙本墨畫	長野	松下多開
五壽圖	真村筆	絹本着色	同	佐山千世	林和瑞猿鹿圖	同	同	滋賀	西村敬一郎	山水圖	同	同	長崎	小曾根均治郎
菊花貓兒圖	同	一幅	和歌山	橋本辰二郎	孔雀圖	同	同	東京	子爵牧野一成	山水圖	筆	絹本着色	同	肥塚末二
虎圖	同	同	長崎	高島星次	松孔雀圖	同	同	同	同	山水圖	同	紙本墨畫	同	同
繪手本	同	紙本墨畫	同	敗村史郎	威振八荒圖	同	同	同	同	山水圖	同	紙本墨畫	同	同

雪景山水圖	王克三	絹本墨畫	長崎	高島	星次	風雨山水圖	木下逸	絹本墨畫	長崎	肥塚	末二
畫帖	金地墨畫	二帖	滋賀	西村	重郎兵衛	芙蓉小魚圖	同	絹本著色	同	敗村	政次
山水圖	徐雨亭	一本墨畫	京都	木佐德	之助	豆花虫圖	同	絹本著色	同	同	同
壽星圖	源逸筆	絹本著色	長崎	高島	星次	鐵翁狗露圖	同	絹本著色	同	同	同
柳燕圖	勝野范	絹本著色	同	吉村	房子	山水畫帖	三浦悟	絹本著色	同	原	萬里
墨竹圖	古筆	絹本墨畫	同	吉村	善三郎	松林山水圖	同	絹本墨畫	同	吉村	善三郎
風雨山水圖	打橋竹	絹本著色	同	竹下	佳隆	米點山水圖	同	絹本墨畫	同	橋本	辰二郎
蘭圖	打橋半	絹本墨畫	同	吉村	善三郎	江都風雨圖	同	絹本墨畫	同	同	同
絳中橋道圖	池大雅	絹本著色	和歌山	和	中金助	谿山深秀圖	同	絹本著色	同	河野	光次
山水圖	野呂介	絹本墨畫	同	同	同	白衣觀音圖	逸然筆	絹本著色	同	吉村	善三郎
竹圖	菅井梅	絹本墨畫	堺	古家	太郎兵衛	觀音大士圖	同	絹本墨畫	同	京都	萬福寺
松林山水圖	關筆	絹本著色	大阪	八田	兵次郎	牧牛圖	即非筆	絹本墨畫	長崎	興福	寺
山水圖	同	絹本著色	同	田中	宗一	竹圖	同	絹本墨畫	京都	萬壽	院
寒江獨釣圖	同	絹本著色	東京	相見	香雨	十八羅漢圖	同	絹本墨畫	長崎	小曾	根均治郎
李白醉態圖	同	同	佐世保	富田	等平	崖竹圖	大鵬筆	絹本墨畫	同	福濟	寺
大貞和尚像	同	同	同	大阪	博物館	觀蟹圖	同	絹本墨畫	和歌山	和	中金助
蘭竹圖	鐵翁筆	絹本墨畫	長崎	吉村	善三郎	桂花小禽圖	同	絹本著色	東京	帝室	博物館
青綠山水圖	同	絹本著色	同	橋本	辰二郎	布袋圖	同	絹本著色	長崎	吉村	善三郎
四君子圖	同	金地墨畫	同	同	同	壽老圖	渡邊秀	同	同	同	同
四君子圖	同	一雙	同	吉村	善三郎	布袋涉川圖	傳渡邊	同	京都	松隱	堂
山水圖	同	絹本墨畫	同	同	同	雪中梅花宿鳥圖	秀石筆	同	長崎	吉村	善三郎
牡丹圖	同	絹本著色	同	同	同	畫帖	小原慶	同	同	同	同
青綠山水圖	木下逸	絹本著色	同	同	同	ブロンホフ家族圖	石崎融	絹本著色	同	同	同
耶馬溪圖	雲筆	絹本著色	同	同	同	浮世繪同好會主催慶長寛永風俗畫展覽會	思筆	絹本著色	同	同	同
竹林白衣觀音大士圖	同	絹本墨畫	同	同	同	五月二十日—二十一日 日本橋俱樂部	同	絹本著色	同	同	同

飛躍時代と稱せられる慶長、寛永期の藝術を紹介する意圖のもとに開催された展覧である。

出品は風俗圖の屏風が主で、原邦造藏の繩暖簾圖をはじめ、同時代の代表的名作を含んでゐる。屏風外のものでは團男爵藏の湯女圖があり、今まで餘り出陳されなかつただけこのみでも見る者には大きな収穫であつた。出品数は十四點であるがこのやうに逸品のみが選ばれたことは觀賞、研究上頗る豊富な好展覧であつた。

尙この展覧に因んで「安土の春」秋山光夫、「近世初期の風俗畫に就て」藤懸靜也、の講演が行はれた。

品目 所藏者 品目 所藏者

繩暖簾圖 原 邦造 三十三間堂圖 長尾欽彌

年中行事圖 春不壽美吉 風俗圖 同

舞妓圖 早川猪太郎 露取物語繪卷 楠林安三郎

風俗圖 加藤郁二郎 職人盡圖 前川道平

湯女圖 團 伊能 祇園祭圖 平尾贊平

風俗三幅對 根津嘉一郎 風俗圖 同

機織圖 長尾欽彌 加茂觀馬圖 末次 喬

支那版畫特別展

五月三十一日—六月九日 東京府美術館

造型版畫協會第三回展の參考品として主として清朝前後期に互る支那版畫及び現代の西藏、滿洲國、朝鮮、臺灣のもの各一點づつを出陳した。その藝術的の價値はともかく、珍しい資料として注目されるものであつた。

東京帝室博物館繪畫陳列

五月中 同館

東京帝室博物館四月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶、△印重要美術品)

平安・鎌倉時代

○伊舍那天像(十二天ノ内) 絹本著色 奈良 西大寺

○不動明王像(五大尊ノ内) 同 京都 教王護國寺

古美術展覽會・展觀

古美術展覧會・展觀

○月天像(十二ノ内)

絹本着色 京 都 教 王 護 國 寺

○天台高僧像

絹本着色 兵 庫 一 乘 寺

○淨土曼荼羅圖

絹本着色 奈 良 極 樂 寺

○十六羅漢像

絹本着色 滋 賀 末 迎 寺

羅漢像

絹本着色 兵 庫 山 本 發 次 郎

△普賢十羅刹女像

同 東 京 根 津 嘉 一 郎

○普賢十羅刹女像

同 鳥 取 常 忍 寺

△文殊渡海圖

同 京 都 光 臺 院

○愛染明王像

同 同 寶 善 提 院

淨土曼荼羅圖

同 同 寶 善 提 院

雲中阿彌陀像

同 同 寶 善 提 院

○五字文殊像

同 兵 庫 山 本 發 次 郎

△釋迦經歷圖

同 東 京 根 津 嘉 一 郎

△聖德太子繪傳

絹本着色 同 川 合 玉 堂

眞言八祖像

絹本着色 同 同 川 合 玉 堂

十一王圖

絹本着色 十 幅ノ内 同 同 川 合 玉 堂

先德圖像

紙本着畫 一 幅ノ内 同 同 川 合 玉 堂

○地獄草紙繪卷

紙本着卷 一 幅ノ内 同 同 山 安 住 院

天神緣起繪卷殘缺

紙本着卷 一 幅ノ内 同 同 山 安 住 院

○東征繪傳

紙本着卷 五 卷ノ内 奈 良 唐 招 提 寺

○法然上人繪傳

紙本着卷 四 十 八 卷ノ内 同 當 麻 寺 奥 院

戲畫卷殘缺

紙本着畫 一 幅ノ内 同 當 麻 寺 奥 院

太宰大貳重家像

紙本着色 一 幅ノ内 同 當 麻 寺 奥 院

丹波守元眞像

同 同 當 麻 寺 奥 院

源順像

同 同 當 麻 寺 奥 院

室 町 時 代

堅田圖 傳土佐 光信筆 二 紙本着色 幅

打球圖

傳土佐 光信筆 二 紙本着色 幅ノ内

梅唐人物圖

土佐米 元筆 一 紙本着畫 幅

點圖

相阿彌 筆 同 東 京 清 水 揚 之 助

△壽老圖

雪舟筆 同 同 侯 爵 黒 田 長 成

蘆鷺圖

單庵筆 一 紙本淡彩 幅 同

鍾馗圖

道安筆 同 同

文殊圖

慧蘭筆 同 同

小鳥荒神像

絹本着色 一 幅ノ内 同

叱枳尼天像

同 同 同

長谷寺緣起

紙本着色 一 幅ノ内 同

鼠草子

紙本着卷 一 幅ノ内 同

長谷寺緣起

同 同 同

豐太閤像

絹本着色 一 幅ノ内 東 京 成 瀨 澄

池田信輝像

同 同 同

本田忠勝像

紙本着色 一 幅ノ内 同 保 阪 潤 治

榊原康政像

同 同 同

楠木正成圖

紙本着色 一 幅ノ内 同 榊 原 政 春

牟禮高松圖

信野益 筆 同 同

王昭君圖

信野常 筆 同 同

藤花圖

景筆 同 同

雪月花圖

本阿彌 筆 同 同

鶏圖

渡邊始 筆 三 紙本着色 幅 東 京 伯 爵 阿 部 正 直

△草花圖

中村芳 筆 一 紙本着色 幅 同

お伽新圖

酒井抱 筆 同 同

野菊藥圖

池田孤 筆 二 紙本着色 幅 東 京 笠 井 梅 野

人丸圖

田中訥 言筆 一 紙本着色 幅

鷹狩圖

住吉廣 同 同

源氏夕顔の圖

板谷廣 長筆 一 紙本着色 幅

勿來關圖

住吉慶 筆 一 紙本着色 幅

源公忠卿歌意圖

冷泉爲 筆 同 同

野路玉川圖

高久陸 古筆 一 紙本着色 幅

花鳥圖屏風

宮本武 藏筆 一 紙本着畫 雙

源平合戰圖屏風

金地著色 一 幅ノ内 雙

草花圖屏風

伊年筆 同 同

誰が袖圖屏風

金地著色 二 曲ノ内 一 隻

堀川夜討繪詞

紙本着色 二 卷ノ内 同

渡邊綱繪卷

紙本着色 一 幅ノ内 同

飛倉走獸畫卷

紙本着色 二 卷ノ内 同

百合若物語

紙本着色 一 幅ノ内 同

○白雲紅樹圖

紙本着色 一 幅ノ内 東 京 子 爵 松 平 直 亮

雪中窟圖

紙本着色 一 幅ノ内 新 潟 中 野 忠 太 郎

青絲山水圖

同 同 同

△稻川舟遊圖

同 同 同

山水圖

竹田筆 一 紙本淡彩 幅 東 京 林 莊 治

赤壁圖

高橋草 筆 二 紙本着色 幅 同

△魯生郭範夢裡圖

谷文晁 筆 三 紙本着色 幅ノ内 同

馬圖

渡邊華 筆 一 紙本着色 幅 同

△宜男清繪圖

同 同 同

花鳥圖

所筆 一 紙本着色 幅 同

暉筆

同 同 同

竹ニ双鶏圖 擧山應 一紙本著色 東京美術學校

龍虎圖 長澤蘆 雙本淡彩 東京林莊治

唐人圖 國本登 一紙本著色 同 平坂恭介

山水圖 亞歐堂 一紙本淡彩 同 佐々木昌興

本性坊怪力圖 岩佐又 一紙本著色 同

三女二童圖 田村水 一紙本著色 同

婦女圖 長陽堂 一紙本著色 同

婦女聞香圖 安和筆 一紙本著色 同

美人讀書圖 宮川長 一紙本著色 同

大名行列圖 春筆 一紙本著色 同

牛圖屏風 章筆 二紙本著色 同

△花見鷹狩屏風 安藤廣 一紙本著色 同

○風俗圖屏風 重筆 一紙本著色 同

犬追物圖屏風 森徹山 二曲一隻 同

明和南宗畫帖 金地著色 東京下村仙

風俗圖卷 宣筆 一紙本著色 同

四條派畫卷 宣筆 一紙本一帖 同

雜畫帖 紙二帖ノ内 同

四季花鳥圖卷 渡邊南 一紙本淡彩 東京美術學校

版 畫 畫 畫

吉原の體 泰川師 墨十二枚 同

美人圖 鳥居清 一丹 同

高尾像 懷月堂 一墨摺幅 同

美人圖 度繁 一紅摺幅 同

鍾冠圖 信村政 一墨摺幅 同

金澤八景圖 西村重 一墨摺幅 同

長 漆繪 同

古美術展覽會・展觀

四季の百姓圖 二代鳥居清信 一漆 奈良西大寺

美人照鏡圖 西川祐 同 奈良長谷寺

子供踊石橋圖 信石川 一紅摺幅 奈良長谷寺

市村龜藏、中村喜代三、市村羽左衛門圖 二代鳥居清信 同 奈良長谷寺

松本幸四郎、坂東三郎圖 廣筆 同 奈良長谷寺

市川雷藏、中村鳥居清瀨 同 奈良長谷寺

山下金作、大谷廣治圖 同 奈良長谷寺

市川高麗藏圖 鳥居清經 同 奈良長谷寺

中村松江の八百屋お七圖 鈴木春信 同 奈良長谷寺

銅版畫 亞歐堂 銅版摺摺 同 奈良長谷寺

奈良帝室博物館繪畫陳列 五月中 同館

○地天像(十二天) 貞觀時 一紙本著色 奈良西大寺

○阿彌陀來迎圖 藤原時 同 奈良長谷寺

○闍麗天曼荼羅圖 鎌倉時 同 奈良長谷寺

○諸神像 慶長筆 漆木板 奈良長谷寺

○勢至菩薩像 鎌倉時 一紙本著色 奈良長谷寺

○眷勝曼荼羅圖 藤原時 同 奈良長谷寺

○扇面法華經 藤原時 一紙本著色 奈良長谷寺

○普賢菩薩騎象像 鎌倉時 一紙本著色 奈良長谷寺

○醫王曼荼羅圖 同 同 奈良長谷寺

○十六羅漢圖 同 同 奈良長谷寺

○當麻曼荼羅圖 同 同 奈良長谷寺

○佛涅槃圖 同 同 奈良長谷寺

○譽田宗廟緣起 室町時 一紙本著色 大阪譽田神社

十六善神像 同 一紙本著色 奈良遠磨寺

釋迦三尊像 同 同 奈良千光寺

地藏菩薩來迎像 同 同 奈良能滿院

佛經、百丈、臨濟像 同 三紙本著色 奈良島根靈雲寺

○十六羅漢像 同 四紙本著色 奈良兵庫太山寺

長谷寺緣起繪卷 土佐光茂 一紙本著色 奈良長谷寺

佛涅槃圖 室町時 一紙本著色 奈良幸田彌太郎寺

虛空藏菩薩像 同 一紙本著色 奈良南法華寺

觀月觀音菩薩像 同 一紙本著色 奈良談山神社

十六羅漢像 宋時代 一紙本著色 奈良高臺寺

恩賜京都博物館繪畫陳列 五月中 同館

恩賜京都博物館五月中陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

日本畫 扇面古寫經 一幅 西教寺

釋迦三尊十六羅漢像 五幅 斑鳩寺

山越阿彌陀像 一幅 禪林寺

黃色不動明王像 同 觀音寺

僧寬空像 同 上品運臺寺

不空絹索觀音像 同 觀智院

山水圖 傳明光 一幅 金地院

四季耕作圖 傳元信 八幅 大仙院

因果經 一卷 報恩院

石山寺緣起 二卷 石山寺

觀音像 一卷 慈氏院

版圖 一雙 建多賀神社

風神雷神圖 宗達 同 長崎仁寺

花鳥圖 松榮 同 長崎仁寺

山水人物圖 等伯 同 長崎仁寺

桑實寺緣起 玉洲 二卷 桑實寺

花篋圖 一幅 和中金助

古美術展覽會・展觀

蘭亭曲水圖	山樂	一雙	禮心院
茶壺圖	光起	一隻	豐田岩吉
狩獵圖	等市	一雙	禪林寺
仙女圖	藍雪	一幅	大井とら
美人圖	葵之	同	佐山傳左衛門
白衣觀音	大雅	同	帝室博物館
吹田病癩圖	竹田	同	藤本木田
玉堂富貴圖	梅逸	同	藤本榮三郎
花卉果實圖	春琴	一卷	帝室博物館
四季繁昌圖	同	同	善峰寺
支那畫			
立花圖	牧溪	一幅	來迎寺
觀音猿鶴圖	徐熙	雙幅	大德寺
蓮鷺圖	同	同	知恩院
花籠圖	同	一幅	多屋謙吉
楊柳觀音像	同	同	長樂寺
不空・惠果・李真像	張平山	二幅	教王護國寺
東方朔奪桃圖	倉澹	同	春光院
花鳥圖	同	同	相國寺
五祖像	同	同	二尊院
山水圖	魏之碩	一卷	鹽見清右衛門
山水圖	藍茨	同	橋本關雪
山水圖	諸家筆	五面	須磨彌吉郎
扇面	同	同	東海庵
十六羅漢像	同	六幅	真正極樂寺
普賢菩薩像	同	一幅	觀智院
妙見菩薩像	同	一面	妙心寺
達磨、朝陽、對月圖	劉坦然	三幅	高臺寺
琴棋圖	傅馬遠	雙幅	兩足院
山水圖	傅孫君	一幅	養源院
山水圖	同	同	孤篷庵
竹圖	檀之瑞	雙幅	小幡西吉
枯木双鷹圖	陳應麟	一幅	同
碧春綠障圖	藍深	同	須磨彌吉郎
扇面	諸家	四面	同

六月一日—三十日 東京美術研究所
 東京美術研究所小陳列所の特別陳列として、主に蟲明燒の蒐集家として著名な杉下治夫所藏のものを中心に展観した。

高見澤版本藝術展
 六月十二日—十四日 資生堂

諸國民藝品と麻笥尺類展観
 六月十三日—八月十五日 駒場・日本民藝館
 日本内地及朝鮮各地の農民工藝品と、内地及琉球、支那の麻笥の古いものを陳列した。

東亞音樂文化展覽會
 六月十六日—二十五日 上野・科學博物館

東京帝室博物館繪畫陳列
 六月中 同館
 東京帝室博物館六月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶、△印重要美術品)

平安・鎌倉時代
 ○山水屏風
 ○風天像(十二天)
 ○風天像(十二天)
 ○天台高僧像
 ○普賢菩薩像

○彌勒曼荼羅圖
 ○佛勝曼荼羅圖
 ○兩界曼荼羅圖
 ○吉野曼荼羅圖
 ○愛染明王像

聖觀音像
 不動明王像
 諸雨曼荼羅圖
 ○佛涅槃圖
 十六羅漢圖
 十卷抄念怒部
 圖像集

○菅原曼荼羅緣起
 ○東征繪傳
 宋時代
 ○大鑑禪師像
 ○高峰斷崖中峯和尚像
 室町・桃山時代

渡唐天神圖
 △山水圖屏風
 花鳥圖屏風
 ○神馬圖額
 ○興正菩薩像
 ○武田信虎像

扇子
 寒山圖
 鐵拐圖
 虎溪三笑圖屏風
 江戶時代

○武田信虎像
 扇
 原田直
 治筆
 海北友
 松筆
 狩野山
 樂筆
 著色
 狩野探
 羽筆常
 信筆
 木村探
 元筆

壽老圖	六筆	紙本淡彩 二幅ノ内	森川許	西湖春景圖屏風	筆	池大雅	紙本淡彩 一隻
馬圖	岸駒筆	紙本著色 一幅	花鳥圖屏風	伏山筆	筆	紙本著色 一隻	雙
清少納言圖	土佐光	同	山水圖屏風	十時梅	筆	紙本淡彩 一隻	隻
壽老圖	貞筆	同	花鳥圖	呂紀筆	筆	紙本著色 一幅	
花鳥圖	渡邊華	同	樓閣山水圖	仇英筆	筆	同	
彦山眞景圖	山谷晁	紙本墨畫 一幅	蝸川積雨圖	謝時臣	筆	紙本墨畫 一幅	
人丸圖	圓山應	紙本著色 一幅	雪景山水圖	朱端筆	筆	紙本著色 一幅	
布袋圖	岩佐又	紙本墨畫 一幅	山水圖	沈石田	筆	紙本著色 一幅	
傘持美人圖	鳥居清	紙本著色 一幅	墨竹圖	夏仲昭	筆	紙本墨畫 一幅	
美人圖	懷月堂	同	墨梅圖	劉雪湖	筆	同	
雙六遊圖	傳梅祐軒	同	花鳥圖	舜弼筆	筆	紙本著色 一幅	
富嶽圖	安藤廣	紙本著色 一幅	松山鳥圖	陳子和	筆	同	
女人圖	傳小野	紙本著色 一幅	鴛鴦圖	王石谷	筆	同	
芙蓉圖	直武筆	同	山水圖	呂文英	筆	同	
松竹梅圖屏風	躬筆	同	△黃玩郎圖	筆	同		
富士山圖屏風	狩野常	紙本金地 著色一雙	雙松圖	姚公綬	筆	同	
風俗圖屏風	信筆	同	不老長春圖	草隆筆	筆	同	
飛禽走獸畫卷	狩野探	紙本著色 二卷ノ内	松鷹圖	高其佩	筆	紙本淡彩 一幅	
便面畫卷	玉瀾筆	紙本著色 一卷	郭子儀圖	陳清遠	筆	紙本著色 一幅	
十六羅漢圖	藤本鐵	紙本淡彩 一幅	蘆雁圖	黃慎筆	筆	紙本淡彩 一幅	
卅六歌仙圖帖	石筆	紙本著色 一幅	山水圖	修世晉	筆	同	
物語繪卷	傳岩佐又	一帖	鹿圖	沈南蘋	筆	紙本著色 一幅	
吉原漏刻圖卷	兵衛筆	同	山水圖	江稼圃	筆	紙本墨畫 一幅	
芭蕉圖屏風	細田榮	紙本著色 一卷	合歡多子圖	陳洪綬	筆	紙本著色 一幅	
	木下逸	紙本金地 著色一雙	水仙圖	陳書筆	筆	紙本墨畫 一卷	

明・清時代

清明上河圖卷	董其昌	筆	紙本著色 一卷	山水畫帖	王石谷	筆	紙本著色 一卷
江山無盡圖卷	王國筆	筆	同	四季花鳥圖	王雲筆	筆	紙本著色 一卷
山水人物畫帖	王雲筆	筆	紙本著色 一卷	版畫			
吉原の體	荻川師	筆	十二枚	美人圖	鳥居清	筆	丹繪一幅
美人圖	信	同		高尾圖	懷月堂	筆	墨摺繪 一幅
美人圖	奧村政	筆	同	美人圖	信	同	
鍾馗圖	同	同		鍾馗圖	同	同	
金澤八景圖	西村重	筆	漆繪一枚	四季の百姓圖	二代鳥	筆	同
美人照鏡圖	西川祐	筆	同	市村龜藏、中村	二代鳥	筆	紅摺繪 一枚
子供躰石橋圖	石川豊	筆	同	左衛門圖	居清信	筆	同
松本幸四郎、坂	廣	筆	同	市川雷藏、中村	鳥居清	筆	同
東彦三郎圖	廣	筆	同	傳九郎圖	瀧	筆	同
山下金作、大谷	同	同		廣治圖	同	同	
市川高麗藏圖	鳥居清	筆	同	中村松江の八百	鈴木春	筆	同
屋お七圖	同	同		銅版畫	田善	筆	銅版墨摺 及筆彩四枚

奈良帝室博物館繪畫陳列

六月 同館
奈良帝室博物館六月陳列替繪畫の品目は左の通りであ

つた。(○印國寶)

○日天像(十二天)	貞觀時	絹本着色	奈良	西大寺
○善無畏(天台高僧ノ内)	代平安時	同	兵庫	一乘寺
○三藏像(僧ノ内)	鎌倉時	絹本着色	奈良	法隆寺
聖德太子勝鬘經講讚圖	代	一面	岡山	久遠寺
○釋迦三尊像	同	絹本着色	徳島	邊久寺
○聖衆來迎圖	同	同	奈良	東大寺
淨影大師像	同	二幅	同	同
○法然上人行狀繪卷	同	紙本着色	同	菅麻寺奥院
○聖德太子二王子	同	絹本着色	滋賀	觀音寺
○禮侍像	同	同	奈良	寶山寺
如意輪觀音菩薩像	同	絹本着色	同	松尾寺
普賢菩薩十羅刹女圖	同	絹本着色	同	能滿院
淨土曼荼羅圖	同	同	同	同
法華曼荼羅圖	同	同	同	同
十二天圖屏風	室町時	絹本着色	同	下部神社
聖德太子繪傳	同	二幅	同	長谷寺
○十六羅漢圖	同	絹本着色	同	大藏寺
當麻寺緣起繪卷	土佐光茂筆	四幅	同	唐招提寺
藤原鎌足像	室町時	絹本着色	同	菅麻寺
不動明王像	同	同	同	談山神社
彌勒菩薩像	同	同	同	寶山寺
○火天像(十二天ノ内)	同	同	同	松尾寺
融通念佛緣起繪卷	同	紙本着色	同	滋賀西明寺
同	同	同	同	京都知恩院

七月 月

伯林日本古美術展覽會記念展觀

七月五日—十一日 東京帝室博物館
今春ベルリンで開かれた日本古美術展覽會閉會後、そ

の出品を持ち歸つた機會に東京帝室博物館でその中の繪畫を陳列し一般に公開した。日本繪畫を系統的に蒐集し特にわが國に發達した佛畫、倭繪、繪卷、裝飾屏風畫等の名品の充實されてゐることが特色として注目される。

藤原期佛畫の代表作である觀智院の閻摩天、上杉神社の毘沙門天をはじめ鎌倉期に至るまで佛畫垂跡畫の優品を三十三點、大和繪としては古因果經(久遠宮家藏)、御物北野天神緣起、原家の地獄草紙、岩崎家の駒籠行幸繪卷將軍塚物語繪卷、雪見御幸、長谷雄草子等の著名な遺品が網羅された。足利水墨畫系、又足利桃山の裝飾屏風、野村家藏雪村筆風濤、武藤家藏岸浪、相國寺藏等伯筆竹村猿猴圖屏風、金剛寺の日月屏風等の名品があり、又御物既圖及醍醐寺藏雪溪筆紅楓圖屏風の珍品が加へられて居る。光悅派及文人畫派では渡邊伯儕家の西行物語繪卷原家の禊圖、渡邊家の(小西家舊藏)光琳資料の内鳥類寫生帖及鳥獸類寫生帖、同じく光琳筆團家三十六歌仙圖屏風、小坂家藏白梅圖繪子小袖、抱一筆では細川侯爵家紅白梅圖屏風、岩崎男爵家藏の燕子花圖等があり、これらが一室中に宗達、光琳、抱一と順次に陳列されたことも頗る當を得て觀者を堪能させた。次に圓山四條派、浮世繪派の遺品もそれ／＼代表的なものが選ばれ、殊に浮世繪肉筆畫は春章の十二月風俗圖を十幅陳べ、それに歌麿の更衣美人、北齋の雪中美人等を加へ、絢爛たるものがあつた。

京都帝國大學國史研究室創立三十五周年記念史料展觀

七月十日 大阪・朝日會館
同研究室開設以來の蒐集にかゝる史料で、歴代の宸影宸翰をはじめ文書、典籍、筆蹟、又は大津京陸出土品以下各時代に互る文化史料並に對外資料等總計百點を陳列

した。同時に「皇室と文化」と題して講演會を開催し、「皇室と古代文化」東伏見邦英伯等の講演があつた。

扇と團扇名版畫展

七月十一日—二十日 京都・芸艸堂畫廊
鎌倉、江戸島、金澤、浮世繪名作展覽會

七月二十五日—八月十日 鎌倉國寶館
廣重、北齋をはじめその他文化、文政以後明治に至る迄の浮世繪畫家の名所繪の版畫を陳列した。總點數百六十餘點の中金澤八景に關するもの二十八點、鎌倉に關するもの六十二點であつた。

東京帝室博物館繪畫陳列

七、八月中 同館
東京帝室博物館七月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶、△印重要美術品)

平安・鎌倉・室町時代	絹本着色	奈良	法隆寺
○十六羅漢圖屏風	一雙ノ内	同	同
○普賢延命菩薩像	絹本着色	京都	松尾寺
○孔雀明王像	同	同	同
○羅漢圖	同	長野	教念寺
華嚴五十五所繪	絹本着色	奈良	東大寺
聖觀音像	二幅	同	同
○般若菩薩像	絹本着色	大阪	護國寺
熾盛光如來像	同	同	同
○阿彌陀如來像	同	兵庫	一乘寺
○如意輪觀音像	同	東京	金剛寺
地藏菩薩像	同	同	同
廿五菩薩來迎圖	同	同	同
維摩居士像	同	同	同
稚兒文殊像	同	同	同
十三佛種子曼荼羅	同	同	同
御物舍利殿障子繪屏風	絹本着色	東京	成瀬澄
同	六隻ノ内	同	同

眞言八祖像 絹本着色 八幅ノ内 兵庫 山本發次郎

北野天神像 絹本着色 一 東京 子爵武者小路公

人丸像 同 同 増上寺

○法然上人繪傳 紙本着色 二 奈良 當麻寺奥院

法然上人行狀繪卷 紙本着色 四十八卷ノ内 奈良 當麻寺奥院

東北院職人歌合 紙本着色 一 奈良 當麻寺奥院

維摩像 紙本淡彩 一 奈良 當麻寺奥院

出山釋迦圖 傳一之 紙本墨畫 一 奈良 當麻寺奥院

文殊像 楊錦筆 同 奈良 當麻寺奥院

花鳥圖 等禪筆 紙本着色 三幅ノ内 奈良 當麻寺奥院

寒山圖 良富筆 紙本墨畫 一 奈良 當麻寺奥院

山水圖 岳翁筆 同 奈良 當麻寺奥院

水牛圖 榮國筆 同 奈良 當麻寺奥院

山水圖 興俊筆 同 奈良 當麻寺奥院

萱草圖 相阿彌 紙本着色 一 東京 加護谷弟彦

野馬圖 同 同 清水揚之助

松鷹圖 文詮筆 紙本墨畫 一 同 長谷川巳之吉

牧童圖 崇竺筆 同 同 同

たけくらべ草紙 紙本着色 一 東京 室 清次郎

源氏繪帖 金泥地著 色一帖 東京 室 清次郎

桃山・江戸時代 絹本着色 一 後藤 末雄

後藤帖乘像 同 同 同

同 夫人像 同 同 同

△長圓源公像 同 同 同

定家・俊成・堯孝像 同 同 同

△佐久間將監像 傳狩野 同 同 小熊幸一郎

徳川家康・天海 探爾筆 紙本着色 一 同 青 龍 院

○狩野探爾像 傳桃田 柳榮筆 紙本着色 一 東京 狩野守久

今大路文淵像傳 狩野常 紙本着色 一 同 藤 浪 剛 一

英一蝶像 高崇谷 筆 同 東京 子爵松平定晴

松平樂翁像 川野晴 同 同 岸 穎 吾

奈良帝室博物館繪畫陳列

七月 同館

奈良帝室博物館七月陳列替繪畫の品目は左の通りであ

つた。(○印國寶)

○羅刹(十二天)天像ノ内 貞觀時 絹本着色 一 奈良 西 大 寺

○不動明王八大童子像 藤原時 同 同 大 津 園 城 寺

○淨土曼荼羅圖 鎌倉時 同 同 奈 良 長 谷 寺

○軍荼利明王像 隆三世明王像 同 同 滋 賀 觀 音 寺

○藤原武智曆像 同 同 一 絹本着色 一 奈良 榮 山 寺

○阿彌陀三尊像 同 同 三 絹本着色 三 和 歌 山 總 持 寺

○扇面法華經 藤原時 代 二 紙本著色 二 大 阪 四 天 王 寺

○愛染明王像 鎌倉時 代 一 絹本着色 一 奈 良 金 剛 寺

○不動明王像 同 同 一 同 大 津 園 城 寺

○闍摩天曼荼羅圖 同 同 一 木版著色 一 奈 良 法 隆 寺

繪 罪 同 同 一 同 同 唐 招 提 寺

阿彌陀如來像 同 同 一 絹本着色 一 同 兵 庫 一 乘 寺

普賢菩薩像 同 同 一 同 同 滋 賀 長 命 寺

釋迦三尊像 室町時 代 同 同 三 絹本着色 三 奈 良 法 隆 寺

十六羅漢像 同 同 一 絹本着色 一 同 同 南 法 華 寺

兩界曼荼羅圖 同 同 一 絹本着色 一 同 同 南 法 華 寺

○五百羅漢像 南宋時 代 四 絹本着色 四 京 都 大 德 寺

○五百羅漢像 南宋時 代 四 絹本着色 四 京 都 大 德 寺

○五百羅漢像 南宋時 代 四 絹本着色 四 京 都 大 德 寺

○五百羅漢像 南宋時 代 四 絹本着色 四 京 都 大 德 寺

○五百羅漢像 南宋時 代 四 絹本着色 四 京 都 大 德 寺

○五百羅漢像 南宋時 代 四 絹本着色 四 京 都 大 德 寺

古美術展覽會・展觀

長谷寺緣起繪卷

土佐光茂筆

紙本著色卷

奈良長谷寺

○八部衆立像

奈良時乾漆造彩四軀

○不動明王立像

藤原後木造彩軀

融通念佛緣起繪卷

室町時

同

京都知恩院

○金剛夜叉明王立像

同

奈良不退寺

○阿彌陀如來坐像

楊柳觀音像

同

一絹本著色幅

奈良圓生院

○阿彌陀如來坐像

運慶作

同

同

○十王圖

同

同

京都二尊院

○大自在菩薩立像

同

同

同

○女狹三藏像

同

同

滋賀寶嚴寺

○世親菩薩立像

同

同

同

○子鳥荒神像

同

同

奈良南法華寺

○無著菩薩立像

同

同

同

奈良帝室博物館彫刻陳列

七月—十二月 同館

奈良帝室博物館七月陳列替彫刻の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

○觀世音菩薩立像

飛鳥時

一木造彩色軀

奈良法輪寺

○四天王立像

同

同

同

○釋迦如來及脇侍菩薩像

同

二銅造鍍金軀

同

○四天王立像

同

同

同

○觀音菩薩立像

同

一木立彩色軀

同

○四天王立像

同

同

同

○御物釋迦如來立像

同

一銅造鍍金軀

同

○釋迦如來坐像

同

同

同

○御物觀音菩薩立像

同

同

同

○地藏菩薩立像

同

同

同

○觀音菩薩立像

同

同

同

○地藏菩薩立像

同

同

同

○彌勒菩薩半倚像

奈良時

同

同

○彌勒菩薩坐像

同

同

同

○彌勒菩薩半倚像

同

同

同

○虛空藏菩薩半倚像

同

同

同

○法華說相像

同

銅造浮彫鍍金一面

同

○十一面觀音立像

同

同

同

○阿彌陀三尊佛像

同

銅版押出佛一面

同

○兜跋毘沙門天立像

同

同

同

○三尊佛像

同

銅板押出面

同

○釋迦如來坐像

同

同

同

○十一面觀音立像

同

銅造浮彫軀

同

○准胝觀音菩薩立像

同

同

同

○舟形光背

同

銅造鍍金基

同

○十二神將立像

同

同

同

○鳳凰及天人

飛鳥時

一木造彩色軀

同

○帝釋天立像

同

同

同

○鳳凰及天人

代鎌倉時

同

同

○義淵僧正坐像

同

同

同

○鳳凰及天人

代鎌倉時

同

同

○聖觀音菩薩立像

同

同

同

○貴徳面 藤原時 木造彩色 奈良 東大寺
 ○新鳥蘇面 同 同 同 手向山神社
 ○皇仁鹿面 同 同 同 同
 ○地久面 同 同 同 同
 ○佛頭 奈良時 銅造鍍金 同 興福寺
 ○佛手 代 銀造一箇 同 同

八月

高野山靈寶館特別陳列

八月十五日—二十一日 高野山靈寶館

奈良帝室博物館繪畫陳列

八月 同館

奈良帝室博物館八月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶、△印重要美術品)

○炎摩(十二天) 貞觀時 絹本着色 奈良 西大寺
 ○天像(八内) 代 鎌倉時 同 同 同
 ○文殊菩薩像 同 同 同 同
 ○淨土曼荼羅圖 同 同 同 同
 ○淨土曼荼羅圖 同 同 同 同
 ○天台大師像 同 同 同 同
 ○行基菩薩行狀繪 同 同 同 同
 ○法然上人行狀繪 同 同 同 同
 ○十一面觀世音菩薩像 同 同 同 同
 ○佛涅槃圖 同 同 同 同
 ○十界圖 同 同 同 同
 唯識曼荼羅圖 同 同 同 同
 紅玻璃阿彌陀如來像 同 同 同 同
 引接曼荼羅 同 同 同 同
 十六羅漢圖 同 同 同 同

古美術展覽會・展觀

恩賜京都博物館繪畫陳列

八月中 同館

恩賜京都博物館八月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

日本畫
 孔雀明王像 一幅 智積院
 十六羅漢像 四幅 來迎寺
 五秘密曼荼羅 一幅 神護寺
 尊勝曼荼羅 同 神照寺
 八幡曼荼羅 同 八角院
 春日曼荼羅 同 高山寺
 熊野曼荼羅 同 同 同
 來迎佛圖 同 同 同
 花鳥圖 元信 八幅 三仙院
 一遍聖繪 元信 四卷 大仙院
 柳橋水車圖 元信 一幅 御影堂新善光寺
 樓閣山水圖 元信 一幅 本館
 猿猴圖 等伯 雙幅 金地院
 巖浪圖 等伯 十二幅 龍泉庵
 保元平治合戰圖 松花堂 一雙 神泉苑
 十六羅漢像 木庵 四幅 龍光院
 布袋蕙蘭水仙圖 木庵 三幅 萬福寺

千手觀世音曼荼羅圖 同 絹本着色 奈良 千光寺
 藤原鎌足像 同 同 同 談山神社
 △北野天神緣起 同 紙本着色 兵庫 津田天滿神社
 十六羅漢圖 室町時 絹本着色 奈良 北室院
 地藏曼荼羅圖 高麗時 麻布著色 名古屋 七寺
 花鳥圖 明時代 絹本着色 奈良 能滿院
 高野大前行狀繪 延德二 紙本着色 大藏寺
 卷 年 同 同 同
 善財童子像 室町時 絹本着色 東大寺
 聖德太子御像 代 絹本着色 同 同
 道慈律師像 同 絹本着色 額安寺
 傳教大師像 同 絹本着色 談山神社

九月

日本美術社主催支那金石拓本展覽會

九月一日—六日 日本橋・高島屋

周、秦、漢、六朝、隋、唐、宋等の造像碑帖の金石拓本の中、最も著名な代表的なもの二百種を展觀した。

蕙齋繪本展觀

九月五日—三十日 東京美術研究所

歙形蕙齋に關する繪本約三十種を蒐めて特別陳列した。

群鯉圖 黑田 一幅 金田定藏
 宇治川圖 稻泉 一隻 高山寺
 冷泉 爲恭 一幅 高森藏
 文齋 寬齋 同 同 同
 習畫帖 文晁 一卷 松井伊兵衛
 職人畫繪 支那畫 一帖 中島正文
 柿栗圖 牧溪 雙幅 龍光院
 秋冬山水圖 傳徵宗同 金地院
 傳王若同 傳王若同 相國寺
 錦鷄白鷺圖 傳錢選一幅 本法寺
 雞頭花圖 傳雪圃同 西源院
 繡衣文殊 張駿 一雙 河村隆治
 花鳥圖 薛湘 一卷 曼殊院
 百雁圖 諸家 四面 須磨彌吉郎
 扇面 十六羅漢圖 八幅 相國寺
 達磨豐干布袋圖 三幅 妙心寺
 觀音人物圖 同 同 同
 文殊・羅漢・寂葉圖 同 同 同
 花鳥圖 三幅 麟祥院
 釋迦文殊普賢像 金多心一帖 海住山寺
 山水圖 扇面 諸家 四面 橋本關雪
 扇面 諸家 四面 須磨彌吉郎

東京帝室博物館繪畫陳列

九月中 同館

東京帝室博物館九月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

平安・鎌倉・室町時代

○十六羅漢圖屏風

絹本着色 奈良法隆寺

○不動尊像

絹本着色 京都曼殊院

○地藏菩薩像

同 同 大知恩院

○五六虚空藏菩薩像

同 同 同 寺

釋迦六祖像

同 同 同 寺

浮土曼荼羅圖

同 同 同 寺

○來迎阿彌陀如來圖

同 同 同 寺

△阿彌陀三尊來迎圖

同 同 同 寺

十一佛圖

同 同 同 寺

愛染明王像

同 同 同 寺

彌勒菩薩像

同 同 同 寺

不動明王像

同 同 同 寺

文殊菩薩像

同 同 同 寺

鹿曼荼羅

同 同 同 寺

辨才天十五童子圖

同 同 同 寺

佛涅槃圖

同 同 同 寺

華嚴五十五所繪卷

同 同 同 寺

○俄鬼變紙

同 同 同 寺

○松ヶ崎天神緣起

同 同 同 寺

△道成寺緣起

同 同 同 寺

元・明時代

琴棋書畫圖

同 同 同 寺

花鳥圖

同 同 同 寺

松下彈琴圖

同 同 同 寺

山水圖

同 同 同 寺

室町・桃山時代

雲龍圖

同 同 同 寺

獅子圖

同 同 同 寺

△山越阿彌陀圖

同 同 同 寺

板谷廣常像

同 同 同 寺

住吉廣

同 同 同 寺

住吉廣

同 同 同 寺

行筆廣

同 同 同 寺

冷泉爲

同 同 同 寺

浮田一

同 同 同 寺

蕙筆宗

同 同 同 寺

達筆宗

同 同 同 寺

雲龍圖

同 同 同 寺

墨梅圖

同 同 同 寺

△達磨圖

明光筆 紙本着色 東京 後藤道明

山水圖

雪舟筆 紙本墨畫 東京 伯耆松平直亮

猛虎圖

紙本墨畫 東京 吳美人圖

大明國師像

紙本着色 東京 紫牡丹圖

○佛應禪師像

同 同 東京 杜若水禽圖

△星光寺緣起

紙本着色 東京 見返り美人圖

梅樞鳥圖

紙本墨畫 東京 石橋踊圖

許由洗耳圖

同 同 東京 扇面散圖屏風

山水圖屏風

同 同 東京 花鳥圖屏風

○呂望商山四皓圖

海北反 紙本金地 東京 幻夢物語繪卷

○屏風

松筆 紙本著色一雙 東京 山水圖卷

○車爭圖屏風

山樂筆 紙本著色 東京 蜀山行旅圖

大江山繪卷

信筆 紙本著色 東京 荳豉行圖

江戶時代

玄鶴蘆雁圖

狩野山 紙本淡彩 東京 密林草堂圖

鷗鷗草葺不合尊

狩野探 紙本淡彩 東京 池大雅

麒麟圖

狩野常 紙本著色 東京 與謝蕪

山水圖

信筆 三幅ノ内 東京 村筆

久隅守

紙本淡彩 東京 秋山蕭寺圖

英一蝶

紙本著色 東京 秋山蕭寺圖

△鳥居貫之社人圖

三幅ノ内 東京 青綠山水圖

秋郊鳴郭圖

土佐光起 紙本著色 東京 松泉石芝圖

源氏夕顏圖

住吉廣 紙本著色 東京 壽老圖

板谷廣常像

住吉廣 紙本著色 東京 雪景山水圖

△山越阿彌陀圖

行筆廣 紙本著色 東京 山水圖

冷泉爲

同 同 東京 青綠山水圖

浮田一

同 同 東京 廣瀨臺

蕙筆宗

紙本墨畫 東京 山筆

達筆宗

同 同 東京 管井梅

雲龍圖

同 同 東京 一紙本墨畫

吹田春阿圖 田能村 紙本墨畫 山口 藤本木田

瀑布圖 雲室筆 紙本淡彩 同 藤原 齋藤

秋景山水圖 蒲上春 同 同 藤原 齋藤

山水圖 立原杏 絹本淡彩 同 同 藤原 齋藤

雜花果圖 榛山 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

秋山霜霽圖 洞筆 同 同 藤原 齋藤

花鳥圖 山本梅 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

赤壁圖屏風 彰城百 紙本墨畫 同 同 藤原 齋藤

山水圖屏風 與謝燕 紙本著色 同 同 藤原 齋藤

山水圖屏風 十時梅 紙本淡彩 同 同 藤原 齋藤

蟲豸帖 增山雪 紙本著色 同 同 藤原 齋藤

草花虫魚帖 榛山 紙本著色 同 同 藤原 齋藤

伴畫卷 建部巢 紙本著色 同 同 藤原 齋藤

香取詣圖卷 渡邊輝 同 同 藤原 齋藤

扇面山水畫卷 玉瀾筆 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

山水圖畫帖 廣瀬臺 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

奈良帝國博物館繪畫陳列 九月中 同館

奈良帝國博物館九月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

○火天像(十二天) 貞觀時代 絹本著色 奈良 西大寺

○持國天像 藤原時代 同 同 藤原 齋藤

○蓮華水鳥圖 鎌倉時代 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

○慈恩大師像 同 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

○薬師三尊像 同 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

古美術展覽會・展觀

○當麻寺繪緣起 鎌倉時代 絹本著色 奈良 當麻寺

○扇面法華經 藤原時代 紙本著色 大阪 四天王寺

延命地藏像 鎌倉時代 絹本著色 奈良 海龍王寺

稚兒文殊菩薩像 同 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

阿彌陀如來觀音勢至像 同 同 同 同 藤原 齋藤

○十界圖 同 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

觀無量壽經曼荼羅圖 同 絹本著色 奈良 龍上寺

大威德明王像 同 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

金剛夜叉明王像 同 同 同 同 藤原 齋藤

持國天像 同 同 同 同 藤原 齋藤

多聞天像 同 同 同 同 藤原 齋藤

聖王羅漢曼荼羅圖 同 絹本著色 奈良 法隆寺

釋迦如來十六善神圖 室町時代 同 同 同 同 藤原 齋藤

文殊菩薩騎獅像 同 同 同 同 藤原 齋藤

觀經曼荼羅圖 同 同 同 同 藤原 齋藤

忍性菩薩像 同 同 同 同 藤原 齋藤

○東征繪傳 鎌倉時代 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

七曜曼荼羅圖 室町時代 絹本著色 同 同 藤原 齋藤

小野篁像 同 木版著色 奈良 金剛山寺

滿米上人像 同 紙本著色 同 同 藤原 齋藤

執金剛神像 同 紙本著色 京都 清涼寺

○融通念佛緣起 同 同 同 同 藤原 齋藤

十月

海北友松展覽會 十月一日—二十日 恩賜京都博物館

海北友松の代表作として著名な山水圖模のある京都建仁寺はかつて昭和九年九月の颱風の爲倒壊し、その障屏畫にも大破損を受けた。その後京都博物館に於てはこの修理の監督にあたりつゝ、あつたが今度これらをすべて掛幅に改装するに至つたので、これを機会に友松の遺作展が催された。出陳はこの建仁寺のもの外諸社寺所藏の友松の作品並に諸家に存する友松關係の資料等も加へて研究に資する所があつた。友松の作品は從來も屢々紹介される機があつたが、多くは妙心寺、建仁寺等の代表作に留められた觀があり、今回はこれらの外に禪居庵、大中院、靈洞院の模、又北野神社の雲龍圖六曲屏風一雙等これまであまり一般に展示されたことのないものが集められたことは頗る有益であつた。次に目錄を掲げる。

○琴棋書畫圖 十幅 京都 建仁寺

○山水圖 八幅 同 同

○竹林七賢圖 十六幅 同 同

○雲龍圖 八幅 同 同

○花鳥圖 八幅 同 同

○松竹梅圖 八幅 同 同

幅に改装するに至つたので、これを機会に友松の遺作展が催された。出陳はこの建仁寺のもの外諸社寺所藏の友松の作品並に諸家に存する友松關係の資料等も加へて研究に資する所があつた。友松の作品は從來も屢々紹介される機があつたが、多くは妙心寺、建仁寺等の代表作に留められた觀があり、今回はこれらの外に禪居庵、大中院、靈洞院の模、又北野神社の雲龍圖六曲屏風一雙等これまであまり一般に展示されたことのないものが集められたことは頗る有益であつた。次に目錄を掲げる。

○琴棋書畫圖 十幅 京都 建仁寺

○山水圖 八幅 同 同

○竹林七賢圖 十六幅 同 同

○雲龍圖 八幅 同 同

○花鳥圖 八幅 同 同

○松竹梅圖 八幅 同 同

○人物圖 同 同 同 同

○山水圖 同 同 同 同

○花卉(牡丹、梅花)圖 同 同 同 同

○琴棋書畫圖 同 同 同 同

○三殿、泰山拾得圖 同 同 同 同

○山水圖 同 同 同 同

○琴棋書畫圖 同 同 同 同

○雲龍圖 同 同 同 同

○文王呂尚、商山四皓圖 同 同 同 同

○嚴子陵、虎溪三笑圖 同 同 同 同

○龍虎圖 同 同 同 同

○海北友松夫妻像 同 同 同 同

○海北家系圖 同 同 同 同

○海北家由緒記 同 同 同 同

○朴大根書簡 同 同 同 同

瀬戸陶壺特別陳列

十月一日—十二月三日 大阪市立美術館

黄瀬戸、古瀬戸を中心として、その先驅としての奈良朝式藥壺から平安、鎌倉時代陶器の遺品及瀬戸の系統をひく志野、織部等合計二百三十點に互る多數の陶器を陳列した。時代的及び系統的に蒐めて鑑賞、研究上共に有益な展観であつた。

關西古陶會主催民藝古陶磁、壺と花瓶と茶碗の展覧會

十月七日—十日 銀座・資生堂

日本美術協會第百九回展 参考陳列

十月七日—二十四日 日本美術協會

同協會第百九回展は繪畫の展覧會として開催したが、恆例の如く参考品として古畫の特別陳列を行ひ、今回は北畫名蹟を蒐め、總裁高松宮家御貸下品を初め、諸家の秘藏品を左記目録の通り展観した。

櫻圖	幸仁親	一幅	高松宮家
中壽老左松鶴石竹圖	常信筆	三幅對	同
山水圖	雪舟筆	一幅	帝室博物館
雁圖	守景筆	同	同
山水圖	鑑貞筆	同	東京美術學校
鍾馗圖	周耕筆	同	同
四季山水圖(重要美術品)	周文筆	一雙	公爵毛利元道
山水圖	等顏筆	同	侯爵細川護立
牛圖	藝阿彌筆	一幅	侯爵山内豊景
中釋迦左右寒山拾得圖	元信筆	三幅對	同
鍾馗圖	雪山筆	一幅	侯爵前田利爲
寒山拾得圖(國寶)	周文筆	同	伯爵津輕義孝
富士清見寺圖	藝阿彌筆	同	伯爵徳川宗敬
瀟湘八景圖	相阿彌筆	同	同
雪景山水圖	宗丹筆	同	同
山水圖	相阿彌筆	雙幅	伯爵阿部正直

大黒天圖	雪舟筆	一幅	子爵牧野一成
雁圖	雪舟筆	同	同
山水圖	雪舟筆	同	子爵福岡孝紹
琴高仙人圖	友松筆	雙幅	同
中藩閩左鶴右叭々鳥圖	雪舟筆	三幅對	同
山水圖	周文筆	一幅	大橋新太郎
山水圖	雪舟筆	同	同
維摩居士圖	同	同	岡崎正也
龍頭觀音圖	啓書記	同	同
山水圖	筆	同	同
鍾馗圖	心叟筆	同	同
鷺圖	雪舟筆	同	井上辰九郎
五位鷺圖	等伯筆	同	同
雪景山水圖	周德筆	同	同
中子育觀音左右花鳥圖	探元筆	同	同
壽老圖	探元筆	三幅對	金光庸夫
山水圖	秋月筆	一幅	加藤正治
花鳥圖	啓書記	同	同
山水圖	雪舟筆	一幅	森岡年左衛門
山水圖	雪舟筆	雙幅	同
福祿壽圖	蕭白筆	同	馬越恭一
琴棋書畫圖	雪村筆	一幅	同
七賢人圖	永德筆	一雙	澤田牛磨
寒山拾得圖	同	三幅對	同
鷹圖	啓牧筆	一幅	西脇健治
眞山水圖	二直庵筆	同	同
連白鷺圖	了慶筆	同	同
花鳥圖	仙可筆	同	島田佳矣
山水圖	良筆	四幅	田邊協一
良筆	一溪重筆	一幅	相見香雨

中井敬之助蒐集古丹波木綿と時代裂展覧會

十月十日—十五日 日本橋・高島屋

第四回名畫展

一葉觀音像	室町時代	絹本着色	兵庫山岡千太郎
猛虎圖	同	絹本淡彩	同
鍾馗圖	同	紙本墨畫	岐阜坂井藍麴
瀧見觀音像	同	絹本墨畫	同
四睡圖	文清筆	紙本墨畫	堺今井千卷
山水圖	同	紙本墨畫	同
山水圖	周文筆	紙本淡彩	京都湯淺七左衛門
揚子江圖卷	秋月筆	紙本墨畫	大阪八代祐太郎
出山釋迦像	同	紙本墨畫	池戸宗三郎
竹林山水圖	藝阿彌筆	紙本墨畫	兵庫山岡千太郎
冷香齋圖	元信筆	紙本淡彩	大阪中井文雄
卷	同	紙本著色	同
向泉寺線起斷簡	元信筆	紙本著色	兵庫小西新右衛門
南蠻人渡來圖	桃山時代	金地著色	京都内貴富三郎
南蠻人上陸圖	同	六曲一雙	堺岡村平兵衛
誰ヶ袖圖	同	同	大阪笠原太三郎
大阪城風俗圖	同	同	高橋龍太郎
風俗屏風	同	同	京都福田重助
猪頭和尚像	等顏筆	紙本墨畫	和歌山山名春之助
維摩居士圖	探爾筆	紙本淡彩	兵庫山本發次郎
維摩居士圖	益信筆	紙本淡彩	岐阜今井千卷
維摩居士圖	同	紙本淡彩	兵庫曾根春子

陳列した。今回は特に室町時代以降の遺品で鑑賞畫としての意義を多く有するものを本位として蒐めてゐる。いはゆる一流の名品とは言ひ難いが、未だ世に多く紹介されないものに富んでゐる點は有意義な展観であつた。左に目録を掲げる。

茶湯釜特別陳列

十月十一日—十一月十五日 大阪市立美術館

石川縣美術協會發會記念古美術展覽會

十月十七日 金澤・成興閣

石川縣美術協會の發會式に際して同地方の所藏家の什寶を陳列した。出陳品は概ね、重要美術品等に認定された繪畫、工藝品等で從來門外不出のものが多かつた。尙同時に當地に於ける工藝家の新作品をも併せて陳列した。

寧樂美術工藝品展

十月十七日—二十二日 大阪・三越

日本諸學振興第一回藝術學會參觀 特別陳列

十月二十日、二十一日 東京・毛利公爵家、前田侯爵家、細川侯爵家、岩崎男爵家
同會が十八日より二十一日まで開催に伴ひ参加員の見學に資する爲、毛利公爵家、前田侯爵家、細川侯爵家、岩崎男爵家の什寶及書道博物館、帝室博物館、大倉集古館等をその縦覧に供した。毛利公爵家、その他各家に於ては特に製藏の名品を陳列された點、特記すべきであらう。参考として左にその品目を示す。

- 陳列目錄
- 公爵 毛利元道家所藏
 - 雪舟筆 山水圖(國寶)
 - 紙本淡彩一巻
 - 雪舟筆 山水圖(國寶)
 - 紙本著色六曲屏一雙
 - 黃松園(國寶)
 - 紙本著色四巻
 - 紙本墨畫三幅
 - 野村宗遠筆 西行法師行狀繪詞(國寶)
 - 紙本著色一具
 - 頼山陽筆 山水圖
 - 螺鈿花鳥文様文臺及視宮(重要美術品)
 - 一
 - 一邇上人繪傳(重要美術品)
 - 紙本著色七卷ノ内二卷
 - 豐明繪草紙(國寶)
 - 紙本墨畫一巻
 - 雪舟筆 四季花鳥圖
 - 紙本著色六曲屏一雙
 - 細川澄元像(國寶)
 - 紙本著色一巻
 - 岸駒筆 松下飲虎圖
 - 同
 - 後醍醐天皇宸翰御成狀
 - 紙本墨書一幅
 - 楠木正成證判軍忠狀
 - 同
 - 豐臣秀吉與高山國書
 - 金銀繪料紙墨書一巻

消防出仕圖卷	一蝶筆	紙本著色一巻	大阪某氏	白衣觀音圖	峯山筆	紙本墨畫一幅	京都木島春
寒山拾得圖	雪溪筆	紙本墨畫一幅	三重駒田龜太郎	軍鶏圖	文晁筆	紙本著色一幅	伯爵 大谷光照
唐山水圖	若冲筆	同	京都木島春	頼先生遊記帖	山陽筆	紙本淡彩一帖	大阪伊藤與三郎
孔雀圖	岸駒筆	紙本著色六曲屏一雙	大阪村井伊兵衛	善光寺圖	林谷筆	紙本淡彩一幅	某氏
群芳爭妍圖	柳里泰筆	紙本著色一幅	奈良中本與	琴客觀瀑圖	竹田筆	紙本淡彩一幅	奈良林平造
寒山拾得圖	蕭白筆	紙本墨畫二幅對	京都宮田兵三	雲仙山寫生圖	同	紙本墨畫一巻	京都宮田兵三
中壽老左右鶴鹿圖	同	紙本墨畫三幅對	三重駒田龜太郎	八百延年圖	棒山筆	紙本著色一幅	奈良中本與
富士山景筑波山秋景圖	其一筆	紙本著色二幅對	京都宮田兵三	魚類圖卷	春琴筆	紙本墨畫一幅	大津村田虎次郎
梅樹群禽圖	吳春筆	紙本著色一幅	東京野村權右衛門	琵琶行圖	同	紙本淡彩一幅	同
嵐山春色圖	同	同	兵庫大林義雄	劉季斬蛇圖	海儂筆	紙本著色一幅	大阪清海復三郎
孔雀圖	同	同	大阪清海復三郎	孔雀圖	同	紙本墨畫一幅	前野譽一
田植圖	同	同	京都湯淺七左衛門	山水圖	雪操筆	紙本墨畫一幅	中井文雄
竹林漁夫山水圖	景文筆	同	同	山水圖	鐵石筆	紙本淡彩一幅	某氏
林和躰圖	同	同	同	蘭石圖	棋堂筆	紙本墨畫一幅	兵庫山内新一
飲中八仙圖	義董筆	同	同	蒼山雲影圖	對山筆	同	岐阜坂井藍離
櫻花立美人圖	一鳳筆	同	大阪野村德七	赤壁圖	直人筆	同	兵庫谷口直之
富士山二美人圖	水鷗筆	同	岐阜坂井藍離	虎豹圖	竹堂筆	紙本著色一幅	京都飯田新七
風俗十二月月圖	師政筆	紙本著色額裝十二枚	京都某氏	歲寒三友圖	和亭筆	紙本著色二幅對	大阪某氏
孤拳三美圖	同	紙本著色一幅	兵庫山本發次郎	老松瀑布圖	芳崖筆	紙本墨畫一幅	兵庫大林義雄
住吉風景圖	同	同	京都某氏	龍圖	雅邦筆	紙本著色一幅	京都飯田新七
源氏物語藤原葉	廣疎筆	紙本著色二幅	大阪八代祐太郎	西域記意施鹿林圖	椹嶺筆	紙本著色一幅	大阪某氏
俊成卿參賀圖	一蕙筆	同	兵庫大林義雄	芦鶯鸞圖	椹嶺筆	同	京都野村權右衛門
聖觀音像	爲恭筆	紙本著色一幅	大阪八代祐太郎	秋草圖	半古筆	紙本淡彩一幅	岐阜坂井藍離
三條爲房卿拜袴圖	同	同	兵庫大林義雄	中山中塔左右金剛力士圖	櫻谷筆	紙本著色三幅	同
人物山水圖	大雅筆	紙本墨畫一巻	京都宮田兵三				
四季山水圖	薰村筆	紙本淡彩四幅	寺村助右衛門				
紫雲峯龍圖	米山人筆	紙本淡彩一幅	大阪某氏				
荔枝圖	同	紙本著色一幅	某氏				

古今集卷第十九殘卷(高野切)(國寶) 紙本墨書一卷
 廣田社二十九番歌合藤原俊成筆(國寶) 紙本墨書三卷
 藤原宗通家歌合 寬治五年 八月廿三日(國寶) 紙本墨書一卷

九條實實佛舍利奉納願文(國寶) 同
 與二壽永二年五月十九日トアリ

刀 無銘傳正宗(名物太郎作正宗)(國寶) 一口
 刀 無銘傳義弘(名物富田郎)(國寶) 同
 短刀 銘左安吉(名物一柳安吉)(國寶) 同
 短刀 銘藤原真景(重要美術品) 同
 刀劍小道具 同
 七寶裂釘隠 同

古九谷市松紋鉢 一
 古九谷中皿 一
 扇面流時繪手宮 一
 老松時繪祝宮 一
 伊豫箆織子 一
 紹紀裂 一

侯爵 細川護立家所藏
 長谷雄草紙(國寶) 紙本著色一卷
 宮本武藏筆 蕨雁圖(國寶) 紙本墨畫六曲屏一雙
 同 鶴圖(國寶) 紙本墨畫一幅
 横山大觀筆 生々流轉繪卷 紙本墨畫一卷
 菱田春草筆 落葉圖 紙本著色六曲屏一雙
 螺鈿時雨鞍(國寶) 一
 螺鈿木兔鞍(國寶) 一
 短刀 無銘傳正宗(名物冠丁正宗)(國寶) 一口
 短刀 銘則重(國寶) 一
 能樂而、翁面 一
 同 般若面 一
 石造浮彫三尊佛及十一面觀音經(國寶) 十九面

男爵 岩崎小彌太家所藏
 普賢菩薩像(重要美術品) 絹本著色一幅
 陀摩榮賀筆 不動明王像(重要美術品) 同
 熊野曼茶羅(重要美術品) 同
 春日鹿曼茶羅(重要美術品) 同
 春日十二所曼茶羅圖 同
 住吉物語繪卷(重要美術品) 紙本著色二卷

榮華物語繪卷(重要美術品) 紙本著色一卷
 周文筆三益齋圖(重要美術品) 紙本墨畫一幅
 聽松軒圖(重要美術品) 紙本淡彩一幅
 萬里橋圖(重要美術品) 同
 蜀山圖(重要美術品) 同
 宗祐筆 觀瀑圖(重要美術品) 紙本著色一幅
 野村宗達筆 源氏物語圖(重要美術品) 紙本著色六曲屏一雙
 足形光琳筆 鶴舟圖(重要美術品) 紙本淡彩一幅
 狩野探幽筆 波濤水禽圖(重要美術品) 紙本著色六曲屏一雙
 圓山應舉筆 江口君圖(重要美術品) 絹本著色一幅
 吳春筆 孤鶴圖 同
 渡邊華山筆 月下鳴鶴圖(重要美術品) 同
 同 磯田湖龍齋筆 雪中道行圖 同
 野村仁清作 色繪吉野山圖茶壺(國寶) 一口
 色繪桐風風德利(國寶) 同

目録
 繪因果經(國寶) 一卷
 小野雪見御幸繪詞卷(國寶) 同
 十一面觀音(國寶) 一幅
 花鳥圖 雪村 二幅
 臨濟或松圖 山田道安 一幅
 鳳凰及藍圖 狩野探幽 二幅
 寫生及縮圖 同 二卷
 卷 美人圖 葛飾北齋 一幅
 卷 悲母觀音像 狩野芳崖 一面
 卷 悲母觀音像 同 一卷
 縮圖卷 寫生帖 數具
 貞盡圖 同 同
 高雄山楓圖 英一 一 一幅
 駿馬山岱下之圖 同 同
 竹鷄圖 圓山應舉 同
 鷄圖 土佐一得 同

孔雀明王像 一幅
 彌勒來迎圖(國寶) 同
 中峰明本像 同
 山水圖扇面 同
 美人圖 狩野元信 同
 四季草花圖 勝川春草 二幅
 渡邊南岳 一卷
 美人圖 葛飾北齋 一幅
 狩野芳崖 一面
 悲母觀音像 同 一卷
 寫生帖 數具
 川端玉草 一幅
 橋本雅邦 同
 菱田春草 同
 水鏡圖 同
 天心先生像 同
 下繪 同
 銘四題 同
 寺崎廣業 四幅

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

京都市主催「皇室と京都」特別展觀
 十月三十一日—十一月三日 大禮記念京都美術館
 京都市史編纂創始記念として開催されたものである。
 皇室と京都の特別關係を明示する史料として、京都各古社寺及各家に藏せられる歴代天皇の御眞影、宸翰及び文書、筆蹟及洛中洛外等の名所圖繪等、約百五十點を陳列した。尙十一月一日、これに關する講演會が左の通り行はれた。

「皇室と京都」
 「御歴代宸翰」
 西田直二郎
 中村直勝

東京帝室博物館繪畫陳列
 十月 同館
 東京帝室博物館十月陳列繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶、△印重要美術品)

唐時代
 御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

御物十六羅漢圖 絹本著色 十六幀ノ内
 平安・鎌倉時代

△男山八幡曼荼羅 絹本着色 東京 大倉集古館

○觀音堂緣起 同 東京 東京美術學校

△羅漢圖 同 東京 永井如雲

△羅漢圖 同 東京 前川道平

○羅漢圖 絹本着色 賀來 迎 寺

羅漢圖 絹本着色 大阪 山本發次郎

羅漢圖 同 新瀨 岡村廣義

△羅漢圖 同 千葉 弘法寺

○紫式部日記繪卷 絹本着色 東京 侯爵蜂須賀正氏

天神緣起殘缺 紙本着色 山口 松崎神社

○松崎天神緣起 紙本着色 山口 松崎神社

宋時代 羅漢圖 絹本着色 東京 東京美術學校

室町時代 山水圖 絹本淡彩 東京 公爵近衛文曆

青爪螳螂圖 傳小栗 二 絹本着色 東京 公爵近衛文曆

○西湖圖 傳雪舟 紙本墨畫 島山 一清

○布袋圖 狩野正 紙本淡彩 栗山 善四郎

西湖圖 狩野元 同 島山 一清

山水圖 宗淵筆 紙本墨畫 田中 親美

花鳥圖 文笠筆 紙本着色 同

梅月圖 柴庵筆 紙本墨畫 同

栗鼠圖 宗休筆 同 同

蜀葵圖 周林筆 紙本着色 同

○一休禪師圖 紙本淡彩 東京 岡崎正也

○道宣律師像 絹本着色 東京 岡崎正也

佛應禪師像 絹本着色 朽木 雲巖寺

土蜘蛛草紙繪卷 紙本着色 同

地獄緣起繪卷 同 東京 子爵福岡孝紹

○高雄觀楓圖 狩野秀 紙本着色 東京 子爵福岡孝紹

○佛應禪師像 絹本着色 朽木 雲巖寺

○桃山・江戸時代 老子過關圖 紙本墨畫 木村長

柳小舎圖 狩野山 同

○佛應禪師像

○地獄緣起繪卷

○高雄觀楓圖

○桃山・江戸時代

○老子過關圖

○柳小舎圖

○立花圖屏風

○花下遊樂圖屏風

○職人畫圖屏風

○花鳥圖

○神農圖

○笛吹地藏圖

○松竹梅圖

○蓮鷺圖

○伊勢物語圖

○牡丹稻菊圖

○花鳥圖

○定家馬鶴圖

○鷹狩圖

○養老浦圖

○山水圖

○日金頂望富嶽圖

○風竹圖

○虎圖

○舉山圖

○松木兔圖

○狗子圖

絹本着色 朽木 雲巖寺

紙本着色 同

紙本着色 東京 子爵福岡孝紹

紙本墨畫 木村長

同 同

紙本着色 東京 邦造

紙本墨畫 雙

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

紙本墨畫 東京 邦造

松木兔圖 絹本着色 渡邊南

狗子圖 同 同

猿圖 同 同

四季樓閣山水屏 狩野探 紙本墨畫 著色一雙

○扇面散圖屏風 同 同

孔雀圖屏風 舉山 應 紙本墨畫 雙

傳野村 紙本着色 東京 邦造

宗達筆 紙本墨畫 東京 邦造

狩野探 紙本墨畫 東京 邦造

狩野興 紙本墨畫 東京 邦造

狩野興 紙本墨畫 東京 邦造

住吉具 紙本墨畫 東京 邦造

慶筆 紙本墨畫 東京 邦造

陽筆 紙本墨畫 東京 邦造

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

吉原の體圖 師宜 十二枚ノ	生島新五郎、喜世鳥居、團十郎、清信	一枚	東京	山村耕花	○善薩立像	銅造一軀	鳥取大山寺	○毘沙門天立像	瀧慶作	木造彩色一軀	高知雪蹊寺	
櫻山四郎三郎、市川助十郎、松本勘太郎、松本勘十郎、松本勘三郎	同	同	同	同	○聖觀音立像	同	兵庫鶴林寺	○梵天立像	定慶作	同	奈良興福寺	
市川門之助圖	倍鳥居	同	同	同	○觀世音菩薩立像	同	奈良法隆寺	○司祿半跏像	正元年間作	同	奈良白毫寺	
京、大阪、江戸	廣瀬重	同	同	同	○須菩提立像	乾漆造彩色一軀	同	○十二神將立像	同	二木造彩色一軀	同	同
澤村宗十郎、坂東彦三郎圖	信廣	同	東京	西村總左衛門	○彌勒菩薩坐像	乾漆造漆一軀	同	○化佛坐像	同	木造漆箔一軀	同	同
粟津晴嵐	西村重	同	東京	西村總左衛門	○釋迦如來坐像	木造漆箔一軀	奈良西大寺	○伊豆山權現立像	同	同	同	同
夢	長村重	同	東京	西村總左衛門	○十二神將立像	乾漆造彩色一軀	奈良西大寺	○愛染明王坐像	康圓作	同	同	同
近江八景	奧村政	八枚	東京	西村總左衛門	○維摩居士坐像	木造彩色一軀	奈良石山寺	○慈惠大師坐像	連妙作	同	同	同
中村富十郎、市川團十郎圖	信廣	一枚	東京	廣瀬喜之助	○十一面觀音立像	同	奈良石山寺	○興正菩薩坐像	同	木造浮彫彩色一面	高知金剛寺	
深爪圖	同	同	同	同	○地藏菩薩立像	同	奈良石山寺	○龍猛菩薩像	定審作	木造浮彫彩色一面	同	
市川雷藏の阿部清明圖	同	同	同	同	○廣目天立像	同	奈良石山寺	○善无畏三藏像	同	木造漆箔一軀	同	
坂東彦三郎圖	同	同	同	同	○聖觀音立像	同	奈良石山寺	○阿彌陀如來立像	快慶作	木造彩色一軀	京都大報恩寺	
市川雷藏の河津三郎圖	同	同	同	同	○女神坐像(仲津姫)	同	奈良石山寺	○優婆塞立像	同	木造漆箔一軀	同	
瀨川菊次郎圖	石川豊	同	同	同	○大黑天半跏像	同	奈良石山寺	○阿彌陀如來坐像	同	同	同	
中村野隱圖	信廣	同	同	同	○多聞天立像	同	奈良石山寺	○惟賢和尚坐像	ちやうけい作	木造彩色一軀	神奈川寶戒寺	
東京帝室博物館彫刻陳列	鳥居清	同	同	同	○十二神將立像	同	奈良石山寺	○印度難陀羅地方	同	同	同	
十月—十二月 同館	同	同	同	同	○持國天立像	同	奈良石山寺	○支那六朝時代	同	同	同	
東京帝室博物館十月陳列替彫刻の品目は左の通りであつた。(○印國寶)	同	同	同	同	○釋迦如來坐像	同	奈良石山寺	○支那唐朝時代	同	同	同	
飛鳥・奈良時代	同	同	同	同	○吉祥天立像	同	奈良石山寺	○支那宋時代	同	同	同	
御物四十八鉢佛	二十點	木造漆箔一軀	奈良法隆寺	持國天立像	木造彩色一軀	奈良石山寺	支那唐朝時代	支那宋時代	木造彩色一軀	東京入江貫一		
○觀音菩薩立像	一銅	同	同	持國天立像	木造彩色一軀	奈良石山寺	支那唐朝時代	支那宋時代	木造彩色一軀	東京入江貫一		
○勢至菩薩立像	同	同	同	持國天立像	木造彩色一軀	奈良石山寺	支那唐朝時代	支那宋時代	木造彩色一軀	東京入江貫一		
○如來立像	同	同	同	持國天立像	木造彩色一軀	奈良石山寺	支那唐朝時代	支那宋時代	木造彩色一軀	東京入江貫一		
○觀音菩薩立像	同	同	同	持國天立像	木造彩色一軀	奈良石山寺	支那唐朝時代	支那宋時代	木造彩色一軀	東京入江貫一		

鎌倉時代

支那宋時代

東京入江貫一

觀音菩薩立像 木造彩色 東京入江貫一
 奈良帝室博物館繪畫陳列 一 驅 東京入江貫一

十月 同館

○聖德太子御像 室町 絹本著色 滋賀成菩提院
 十王圖 同 絹本著色 京都二尊院

恩賜京都博物館繪畫陳列 十月十一日 同館

恩賜京都博物館十月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

○吉祥天像 奈良 麻布著色 奈良藥師寺
 ○月天像(十二天) 貞觀 絹本著色 同 西大寺
 ○俱舍曼荼羅圖 藤原 同 同 東大寺
 ○天台高僧像 同 二幅 兵庫一乘寺
 ○孔雀明王像 同 絹本著色 奈良法隆寺
 ○彌勒菩薩像 同 同 同 寶山寺
 ○信貴山緣起繪卷 同 紙本著色 同 朝護孫子寺
 ○鳥獸戲畫卷 同 紙本墨畫 京都高山寺
 ○一字金輪曼荼羅圖 鎌倉 絹本著色 奈良南法華寺
 ○十界圖 同 絹本著色 滋賀來迎寺
 ○來迎阿彌陀如來像 同 絹本著色 同 奈良寶嚴寺
 ○聖衆來迎圖 同 同 奈良阿日寺
 ○八大佛頂曼荼羅圖 同 同 大津園城寺
 ○香象大師像 同 同 奈良東大寺
 ○聖德太子繪傳 室町 同 同 奈良橘大寺
 ○施餓鬼圖 高麗 麻布著色 同 同 奈良藥師寺
 ○胎藏界曼荼羅圖 唐 紫綾金銀 奈良子島寺
 ○十六羅漢像 宋 絹本著色 京都高台寺
 ○釋迦八大菩薩像 元 絹本著色 奈良松尾寺
 ○扇面法華經 藤原 紙本著色 大阪天王寺
 ○地藏菩薩十王曼荼羅圖 室町 絹本著色 奈良能滿院

古美術展覽會・展覧

○聖德太子御像 室町 絹本著色 滋賀成菩提院
 十王圖 同 絹本著色 京都二尊院

恩賜京都博物館繪畫陳列 十月十一日 同館

恩賜京都博物館十月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。

○吉祥天像 奈良 麻布著色 奈良藥師寺
 ○月天像(十二天) 貞觀 絹本著色 同 西大寺
 ○俱舍曼荼羅圖 藤原 同 同 東大寺
 ○天台高僧像 同 二幅 兵庫一乘寺
 ○孔雀明王像 同 絹本著色 奈良法隆寺
 ○彌勒菩薩像 同 同 同 寶山寺
 ○信貴山緣起繪卷 同 紙本著色 同 朝護孫子寺
 ○鳥獸戲畫卷 同 紙本墨畫 京都高山寺
 ○一字金輪曼荼羅圖 鎌倉 絹本著色 奈良南法華寺
 ○十界圖 同 絹本著色 滋賀來迎寺
 ○來迎阿彌陀如來像 同 絹本著色 同 奈良寶嚴寺
 ○聖衆來迎圖 同 同 奈良阿日寺
 ○八大佛頂曼荼羅圖 同 同 大津園城寺
 ○香象大師像 同 同 奈良東大寺
 ○聖德太子繪傳 室町 同 同 奈良橘大寺
 ○施餓鬼圖 高麗 麻布著色 同 同 奈良藥師寺
 ○胎藏界曼荼羅圖 唐 紫綾金銀 奈良子島寺
 ○十六羅漢像 宋 絹本著色 京都高台寺
 ○釋迦八大菩薩像 元 絹本著色 奈良松尾寺
 ○扇面法華經 藤原 紙本著色 大阪天王寺
 ○地藏菩薩十王曼荼羅圖 室町 絹本著色 奈良能滿院

古美術展覽會・展覧

菊花圖 一幅 田原武重
 花鳥圖 同 守永彌惣次
 無準像 同 大光明寺
 十六羅漢像 六幅 清涼寺
 遠磨朝陽對月圖 三幅 妙心寺
 地藏菩薩十王像 六幅 誓願寺
 竹園 雙幅 孤蓬庵
 楓庭知秋圖 一幅 帝室博物館
 枯木双鷹圖 同 小幡西吉
 蘆汀月夜、溪山煙雨圖 楊晉 雙幅 同

十一月

寶雲舍古陶器展 十一月一日—四日 銀座・鳩居堂
 第五回朝鮮古美術展覽會 十一月一日—五日 日本橋・高島屋

朝鮮總督府後援、朝鮮工藝會主催で、李禧變蒐集の工藝品に朝鮮各家所藏品を併せ、東京、大阪に各一千點餘を展覧した。出陳品は主として高勾麗の遺品及び青磁、象嵌等の古陶磁で、樂浪青銅斜紋文豆、高勾麗彩色白虎文雲母埴、高麗青磁では陽刻鑿文香爐、象嵌牡丹柳禽文大丸壺、象嵌草花柳禽文梅瓶、李朝辰砂染付草花文扇壺など注目されるものがあつた。

尚大阪に於ても東京と同じ趣向のものが出陳された。

鎌倉圓覺寺寶物風入 十一月一日—五日 鎌倉・圓覺寺

同寺の恒例による寶物の曝涼に際し一般の觀覽を許した。國寶羅漢圖三十三幅をはじめ佛畫、頂相、文書、工藝品等の什寶が並べられた。

高野山靈寶館秋季特別展覧 十一月一日—七日 高野山・靈寶館
 秋期特別陳列として當時出陳されぬ當山諸寺の名寶を選んで展覧した。總點數百二十點餘り、その中國寶としては傳惠心僧都筆二十五菩薩來迎圖をはじめ、涅槃圖等

以下の名品、彫刻に於ては殆ど一山の藏品が網羅された。國寶のみの目録を左に掲載する。

阿彌陀二十五菩薩來迎圖	有志八幡講
兩界曼荼羅	金剛峯寺
大日如來圖 寬元三年銘アリ	同
丹生明神圖	同
狩場明神圖	同
八宗論大日如來圖	全集寺
愛染明王圖	金剛峯寺
釋迦涅槃圖 應德三年銘アリ	同
善女龍王圖 傳定智筆	同
藥師十二神將圖	同
雞花屏風 一雙 直庵筆	櫻池院
阿彌陀如來圖 傳張思恭筆	寶龜院
狛犬 四對ノ内二對	成福院
高野山古圖	丹生都比賣神社
弘法大師行狀圖繪 六卷ノ内二卷	金剛峯寺
源賴朝書狀	地藏院
源義經書狀	同
西行法師書狀	同
織田信長朱印狀	同
豐臣秀吉朱印狀	同
聲替指點	同
佛頂尊勝陀羅尼經	同
靈元天皇宸翰般若心經	正智院
增壹阿含經	金剛峯寺
太刀 二口 小野繁慶作	同
阿闍如來像	金剛三昧院
螺鈿蒔繪三衣宮	親王院
押出三尊佛	金剛峯寺
阿彌陀三尊像	不動院
成身會八葉春日厨子	金剛峯寺
胎藏界板曼荼羅	同
螺鈿蒔繪小唐櫃	同
五銖鈴 二個	同
獨銖鈴 一個	同
佛餉鉢	同
如意輪觀音像 藤原時代	同
阿彌陀三尊像 傳運慶作	親王院

不動八大童子 傳運慶作	金剛峯寺
十一面千手觀音像 鎌倉時代	金剛三昧院
不動明王像 同	高室院
大日如來像 藤原時代	高室院
藥師如來像 同	安養院
龍猛菩薩像 同	高室院
毘沙門天像 弘仁時代	龍泉院
毘沙門天像 鎌倉時代	普賢院
不動明王像 弘仁時代	正智院
增長天像 傳快慶作	同
毘沙門天像 弘仁時代	同
愛染明王像 鎌倉時代	金剛峯寺
阿彌陀如來像 藤原時代	親王院
阿彌陀如來像 同	地藏院
阿彌陀如來像 藤原時代	地藏院
持國天像 傳快慶作	金剛峯寺
釋迦如來像 同	同
大日如來像 同	同
阿彌陀如來像 藤原時代	同
釋迦如來像 同	同
毘沙門天像 弘仁時代	同
持國天像 同	同
增長天像 同	同
廣目天像 同	同
廣目天像 傳快慶作	同
銅鐘 承元四年十一月鑄造	金剛三昧院
銅鐘 弘安三年正月廿五日鑄造	同
銅鐘 永正元年卯月八日鑄造	金剛峯寺

白鶴美術館第十二回展覽會

十一月一日—二十日 兵庫・白鶴美術館
 白鶴美術館第十二回秋期特別陳列として同館所蔵の支那古陶磁及び金屬品が陳列された。陶磁器は、漢代より唐三彩、宋窯に互る十五點、金屬器は帶鈎類二十一點、その概ねは洛陽、金村出土のものである。

支那古陶磁器	唐三彩釉大枕 一個
唐薄黃釉獅子置物	唐三彩釉花陶枕 一個
漢綠釉博山爐	同
漢彩畫瓦壺	同
唐三彩鳳紋雜頸瓶	宋窯白磁花紋手附水注 一個
唐三彩花紋雜頸瓶	宋窯刻花紋大盤 一個
宋窯刻花紋大盤	同

宋白磁牡丹龍鳳刻花紋壺	一個	龍虎透影寶石嵌人帶鈎	一個
宋窯黑釉空華紋壺	同	銀鏤塗金寶石嵌裝帶鈎	同
宋窯飛龍紋梅瓶	同	金銀象嵌渦雲紋帶鈎	同
青白磁刻花紋鉢	三個	鎏金熊透影帶鈎	同
帶鈎類		銀鏤龍抱介帶鈎	同
鎏金嵌石龍虎形帶鈎	一個	唐鎏金雲鶴形帶鈎	一具
金村出土		洛陽近郊出土	
金象嵌真珠人怪獸形帶鈎	同	唐鎏金透影金具殘缺	六個
金村出土		洛陽近郊出土	
銀鏤規矩紋銀帶鈎	同	唐鎏金牙紋帶鈎金具殘片	三個
金 洛陽出土		洛陽近郊出土	
銀象嵌方格規矩紋帶鈎	一個	唐鎏金帶金具殘片	一個
金 洛陽出土		洛陽近郊出土	
金鏤塗猿熊鈕帶鈎	同	唐玉帶	一條
金 洛陽近郊出土		漢代裝壁	一個
鎏金玉石嵌人帶鈎	同		
金村出土			

松本圖書館武具展

十一月五日—九日 長野・松本圖書館

法隆寺夢殿本尊救世觀世音菩薩御厨子金具展觀

十一月八日 東京美術學校正木記念館

橿原御創祀關係展

十一月十日—十二日 橿原神宮

二千六百年皇紀の祝典を前にして大和史學會主催の下に開かれたものである。主として橿原神宮の御創祀に關する文獻、及び同神宮と、大和諸御陵に關する書籍、繪畫、尺牘、地圖、寫眞、拓本又は出土遺物等、地方舊家門外不出の貴重品約五百余點の陳列があつた。

能衣裳展覽會

十一月十日—二十日 恩賜京都博物館

恩賜京都博物館では往時の染織界の盛觀を顧み、わが國文化の認識を新にし併せて業界の將來に示唆を與へよとの意圖を以て足利末期から徳川末期に至る能衣裳百餘點を特別陳列した。

(附) 腰帶 貳拾條 京都市 金剛 嚴
腰帶 拾條 同 同

東方文化研究所第十一回記念講演並に展観

十一月十一日 京都・同所

同所創立第十回記念會の催として同所内を一般の縦覽に供すると共に、所藏の秦漢石刻の拓本、北京古地圖等を展観した。拓本は金石萃編所收中の秦漢碑四十八點北京古地圖は三十五點で主として森研究員が北京で蒐集したものである。

東京美術研究所十日會

十一月十一日 銀座・松風陳列所

阿部孝次郎氏所藏支那繪畫展観

十一月十一日―十二日 美術研究所

支那畫の所藏家として著名な故阿部房次郎の蒐集品の中最も代表的な逸品を三十四點選り美術懇話會及一般に公開した。陳列品は五星二十八宿眞形圖卷、伏生授經圖等現存支那畫中有數の遺品をはじめ、宋元明清各時代に於ける代表的な畫家の名品である。これら稀有の蒐集品を私藏せずとする故人の遺志がこの展観の機會を與へたことは、更めて蒐集者の功績の大なるを覺えさせるものがあつた。

陳列目錄

五星二十八宿眞形圖卷 張 僧 絛 絹本著色
伏生授經圖卷 王 維 絹本著色
讀碑窠石圖軸 李 成、王 曉 同
梨花黃鸞圖軸 吳 元 瑜 絹本著色
江山樓閣圖卷 燕 文 貴 紙本淡彩
明妃出塞圖卷 宮 素 然 紙本淡彩
送郎元明使秦書畫合璧卷 胡舜臣、蔡京 紙本淡彩
目黑達磨圖軸 牧 深 紙本墨畫
名賢贊繪集册 網 本 絹本淡彩
秋山瑞雲圖軸 絹本墨畫
濯足圖軸 紙本墨畫
臨廬鴻鈿堂十志圖卷 紙本墨畫

品茶圖軸
傲吳道子魚籃觀音像軸
松陰高士圖軸
江阜煙嵐圖卷
太白瀉淚圖軸
深雨初霽圖軸
高士觀瀑圖軸
拜孝陵詩畫圖軸
文石圖軸
竹院逢僧圖軸
靜居圖軸
仿巨然泉圖軸
山水圖軸

錢 道 選 絹本著色
管 昇 絹本著色
盛 蒙 紙本著色
王 從 龍 紙本墨畫
方 是 龍 紙本墨畫
莫 騰 蛟 同
何 騰 蛟 同
除 渭 同
刑 同 同
趙 左 同
卡 瑜 紙本淡彩
王 欒 紙本墨畫
王 欒 紙本墨畫
傅 山 同
邵 佳 同
道 濟 紙本淡彩
惲 平 紙本淡彩
高 佩 紙本淡彩
高 鳳 翰 紙本淡彩
金 農 紙本墨畫
秦 嘉 同
湯 胎 紙本淡彩

東坡時序詩意圖册
花卉圖册
天保九如圖軸
卿堂墨菊圖軸
達磨圖軸
仿倪山水圖軸
荻廬問字圖軸

東福寺寺寶曝涼展観
十一月十二日―十三日 京都・東福寺
本阿彌光悅遺愛品公開
十一月十三日 京都・光悅寺
十一月十四日―二十五日 駒場・日本民藝館

第十九回特別展観琉球織物古作品大展覽會

文祿戦役を中心とする展覧會

十一月十五日―三十日 名古屋・徳川美術館
豊臣秀吉が朝鮮征朝に赴いた折の史實の参考品を出陳した。主要なものは秀吉の書状をはじめその他武將の書簡等である。

國華社展観

十一月十八日 東京・國華社

千利休三百五十二年記念茶道具陳列會

十一月二十一日―二十九日 日本橋・三越

複製古九谷名陶展

十一月二十一日―二十三日 京都・高島屋

故實研究會主催第三回二千六百年歴史人形展

十一月二十三日―二十四日 京都・風俗博物館

朝鮮古美術工藝展

十一月二十四日―二十九日 大阪・高島屋

朝鮮總督府後援。

雲崗石窟資料展

十一月二十六日―二十七日 京都・東方文化研究所

三田史學會主催慶應義塾大學文學部考古室展覽會

十一月二十八日―二十九日 同大學考古室
同大學所藏の考古學遺物を一般に公開したもので日本石器時代、内地古墳時代、日本歴史時代遺物及朝鮮、滿洲、支那出土品の多數が出陳された。尙これと共に大山柏講師北支調査班將來品が展示されたことに注目された。

奈良帝室博物館繪畫陳列

十一月 同館

奈良帝室博物館十一月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)

○水天像(十二天) 貞觀時 代 絹本著色 一 幅 奈良西大寺
○慈悲大師像 藤原時 代 同 同 藥師寺
○大威徳明王像 同 同 同 唐招提寺
○天台高僧像 同 同 絹本著色 二 幅 兵庫一乘寺
○安鎮曼荼羅圖 鎌倉時 代 絹本著色 一 幅 下關國分寺
○不動明王二童子像 同 同 同 兵庫瑠璃寺
○信貴山縁起 藤原時 代 紙本著色 一卷 奈良朝護孫子寺

鳥獸戲畫卷	藤原時	紙本墨畫	京都高山寺	遊行緣起	五卷	眞光寺
○地藏菩薩像	鎌倉時	絹本着色	滋賀淨信寺	松櫻楓圖	一雙	眞護院
○十界圖	同	同	奈良末迎寺	草花圖	一枚	玉城家
○大威徳明王像	同	同	奈良談山神社	猿蓑竹林圖	一雙	相國寺
○天台大師像	同	同	大津園城寺	柏庵蘆管圖	同	大徳寺
○眞言八祖像	同	絹本着色	京都神護寺	茶壺圖	同	豊岡造
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	猿蓑圖	同	柿本神社
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	白衣觀音	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	莊子圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	神洲和尚像	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	花鳥圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	仙女圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	草花圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	牡丹孔雀圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	支那畫	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	立花園	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	眞言七祖圖(一行、李眞善無畏)二幅	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	東方朔圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	山水圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	馬祖問答圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	普賢菩薩像	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	萬岳松巖圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	白衣觀音圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	風凰竹石圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	牡丹圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	楊柳觀音像	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	十六羅漢像	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	釋迦文殊普賢像	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	阿難迦葉像	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	十六羅漢像	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	春冬山水圖	同	爾以三
○眞言八祖像	同	絹本着色	兵庫一乗寺	雪中花鳥圖	同	爾以三

十二月	東京大藏會第二十五回展觀	十二月三日 東京・三井高公男爵家 大藏會第二十五回の展觀として、三井高公家襲藏の燉 漆出土の古寫經三十數點を陳列した。 某名家鑑藏古工藝美術展覽會 十二月八日―十三日 日本橋・高島屋 陽明文庫創設記念展觀 十二月十六日―十八日 東京府立美術館 歷史上稀有の寶庫として夙に喧傳されてゐる陽明文庫 は、五攝家の隨一たる近衛公爵家に古來傳はる秘寶を藏 するものであるが、今度文曆公はこの絶大の寶庫を一家 に私するものならずとして財團法人の組織に移し、京都 宇多野に文庫を建造した機會に、その所藏品の一部を公 開展觀した。總數百七十三點の寶物いづれも瞭目の貴重 品のみであるが、就中歴代御宸翰をはじめ奉り御堂關白 記、後二條關白記、傳行成筆和漢抄、古語集、琴歌譜、 道風、佐理、行成等の筆蹟又は近衛家累代の筆蹟等、い づれも千古以來の幽玄さを湛えて、見る者を讚嘆させた。 史學上絶大の資料たることはいふまでもなく、光輝ある 國史及び文化の跡を今更しみるゝと感得させるものがあ つた。次に目錄を掲げる。(○印國寶、△印重要美術品)
-----	--------------	---

出 品 目 録	九曆記(古寫本)	一卷	後深心院(自筆)	四十九
	○御堂關白記(自筆本)	十四卷	關白記(本)	卷ノ内
	○御堂關白記(古寫本)	十二卷	後知足院關白記(自筆)	四卷
	○後二條殿記(自筆本)	一卷	後法興院關白記(自筆)	三卷
	○後二條殿記(古寫本)	二十九	後法成寺(本)	二十五册
	○後二條殿記(古寫本)	二十九	關白記(自筆)	ノ内
	知足院敗筆畫記目錄	一卷	三代記	ノ内
	猪熊關白記(自筆本)	三十九	應圓院關白記	ノ内
	關屋關白記(古寫本)	七卷	蠶雪餘聞	十四册
	深心院關白記(自筆本)	七卷	○御堂御記抄	ノ内
		ノ内	○藤原忠通公筆消息	同

古美術展覽會・展觀

東京大藏會第二十五回展觀

- 爲房記云々 一幅
- 内女房事云々 一幅
- 近衛政家公 一條兼良 公贈答消息 同
- 近衛通公筆詩懷紙 同
- 近衛種家公筆懷紙 同
- 近衛種家公筆消息 同
- 近衛前久公筆大懷紙 同
- 近衛信尹公筆大懷紙 同
- 近衛信尹公、前久公贈答消息 同
- 近衛信尋公筆大懷紙 同
- 近衛尙嗣公筆懷紙 同
- 近衛基熙公筆懷紙 同
- 近衛基熙公像 同
- 丹波頼庸筆絹本著色 同
- 近衛家熙公像 同
- 出山釋迦圖 同
- 近衛基熙公筆 同
- 鐘馗圖 同
- 近衛家熙公筆 同
- 竹圍 同
- 近衛家熙公筆 紙本墨畫 同
- 近衛家久公筆大懷紙 同
- 近衛内前公筆大懷紙 同
- 近衛經繼公筆大懷紙 同
- 近衛基熙公書蹟手鑑 一帖
- 近衛家熙公寫手鑑 同
- 竹壽 同
- 近衛家熙公筆 一卷
- 花木眞寫 三卷ノ内
- 近衛家熙公筆 紙本着色 一卷
- 重脩物外櫻記 一卷
- 近衛家熙公筆 四册
- 李崎百二十詠 四册
- 近衛家熙公筆 二卷
- 眞言七祖傳梵漢名號 二卷
- 近衛家熙公筆 二卷
- 後西天皇宸翰後成九十賀歌 一卷
- 櫻町天皇宸翰御消息 一卷
- 孝明天皇宸翰御記(糸櫻の宸翰) 一卷
- 神樂和琴秘譜 同
- 傳藤原道長公筆 同
- 五絃琴譜 同
- 琴歌譜 同
- 古謠集 同
- 和漢抄 同
- 傳行成卿筆 同
- 歌合卷第六 同
- 傳宗尊親王御筆 同
- 論春秋歌合 同
- 傳宗尊親王御筆 同
- 歌合序 同
- 四條宮歌合序 同
- 眞書千字文斷簡 同
- 孫過庭書譜斷簡 同
- 傳空海筆 同
- 白氏文集新樂府洞庭松 傳道風筆 同
- 白氏文集新樂府除山道 傳道風筆 同
- 正親町天皇宸翰御懷紙 後陽成天皇宸翰御懷紙 後水尾天皇宸翰御懷紙 後西天皇宸翰御懷紙 同
- 贊 繪 南都一乘院眞教法親王御筆 一幅
- 靈元天皇宸翰御懷紙 中御門天皇宸翰御懷紙 櫻町天皇宸翰御懷紙 後櫻町天皇宸翰御懷紙 仁孝天皇宸翰御懷紙 孝明天皇宸翰御懷紙 傳伏見天皇宸翰御製 後光嚴院宸翰三十六番歌合 同
- 後陽成天皇宸翰御詠 近衛前久公、同信 尹公筆書畫 同
- 後水尾天皇宸翰 御手鑑 一帖
- 靈元天皇宸翰 御手鑑 一帖
- 藤原師實家集斷簡 一幅
- 傳俊賴筆 一幅
- 藤原基俊筆御詠抄(多賀切) 同
- 古今集切 同
- 傳左京大夫顯輔筆 同
- 藤原定家卿筆詠草(泊瀨山) 同
- 藤原隆家卿筆熊野懷紙(同) 同
- 寂蓮法師筆熊野懷紙 同
- 春日鹿曼茶羅圖 同
- 平信範卿筆消息 同
- 源家長卿筆消息 同
- 慈鎮和尙筆消息 同
- 明惠上人筆消息 同
- 傳坊門局筆消息 同
- 藤原爲家卿筆消息 同
- 定家卿加筆 同
- 冷泉爲相卿、萬里小路同 宣房卿贈答消息 同
- 青蓮院圓法親王御筆 同
- 青蘆花瓶 一口
- 茶杓筆筒 一口
- 蒔繪香合 銘物かわ 一口
- 金跣壺 同
- 色紙張交屏風 一雙
- 近衛信尹公筆 一口
- 短刀 銘 吉光 一口
- 太刀 銘 秀近 同
- 太刀 銘 長光 同
- 太刀 銘 延年 同
- 太刀 銘 備前國宇甘 同
- 太刀 銘 鄉雲生 同
- 太刀 銘 備前國住雲 同
- 太刀 銘 備後州住正 同
- 太刀 銘 以下切 同
- 法曹至要抄 上中下 三卷
- 中右記(古寫本) 四十四卷ノ内
- 人車記 二十九卷ノ内
- 明惠上人筆夢記 一卷
- 建武年中行事 同
- 近衛政家公筆 同
- 傳青蓮院慈道法親王御一筆蹟 一卷
- 傳青蓮院圓法親王御一筆蹟(御手本) 同
- 近衛家實公初度上表 一通
- 傳世尊寺行能筆 一通
- 一條内經公大原野社告一卷 文 傳世尊寺行能筆 一卷
- 源氏物語 五十四帖ノ内
- 古今集(嘉祿本) 二帖
- 冷泉爲相卿筆 同
- 後拾遺和歌抄(清輔本)一帖 同
- 猿丸集 同
- 長秋詠草(俊成人同道集)(片假名本) 一册
- 伊勢物語 一册
- 近衛政家公筆 一卷
- 近衛前久公筆 一卷
- 土佐日記(延徳本) 一册
- 近衛信尹公筆 一册
- 住吉物語 同
- 近衛信尋公筆 同
- 枕草子 同
- 方丈記 同
- 徒然草 二册
- 吉田直方蒐集佐渡と越後けてもの展 十二月二十六日—三十日 日本橋・高島屋
- 浮世繪古代肉筆古版畫展 十二月二十六日—三十日 日本橋・高島屋
- 奈良帝室博物館繪畫陳列 十二月 同館
- 奈良帝室博物館十二月陳列替繪畫の品目は左の通りであつた。(○印國寶)
- 藤原 絹本着色 一幅
- 奈良 海 龍 王 寺
- 文正草子 一册
- 源氏林逸抄 四十六册ノ内
- 東常統秘歌抄 一册
- 澤菴和尙筆 同
- 伊語聽說 同
- 一寶抄 七十五册ノ内
- 近衛基熙公撰并書册ノ内 百人一首かるた上下二百枚
- 近衛家熙公筆 一冊
- 千載集かるた 上下 四百枚
- 歌歌大概かるた 二百四枚
- 夢窓國師墨蹟 一幅
- 三條西實隆公(道達院同内府)筆消息 同
- 近衛尙通公、三條西實隆公、同公條公筆元且三幅 詩懷紙
- 鶏頭二鱗鈴、青瓜二幅 蠅傳小栗具筆
- 近衛前久公筆十首和歌一幅
- 中御門久御筆御消息 同
- 近衛家熙公筆百壽字 同
- 草書座右銘 四幅
- 近衛家熙公筆 同
- 賢聖圖 一册
- 狩野常信筆 一幅
- 近衛基熙公筆忠孝二大字 同
- 近衛忠熙公筆懷紙 同

○聖德太子勝鬘經御講識圖	鎌倉時代	一絹本著色面	奈良法隆寺
○寶冠阿彌陀如來像	同	一絹本著色幅	滋賀長命寺
○不動明王二童子像	同	同	大津園城寺
阿彌陀如來十六尊像	同	同	奈良松尾寺
群勝佛頂圖	同	同	西大寺
○東征繪傳	同	一紙本著色卷	唐招提寺
△北野天神緣起	同	同	兵庫津田天滿神社
○如意輪觀世音菩薩像	同	一絹本著色幅	滋賀寶嚴寺
○十六羅漢像	同	同	同
淨土曼荼羅圖	同	一絹本著色面	奈良極樂院
千手觀音廿八部衆像	同	一絹本著色幅	法起寺
春日曼荼羅圖	同	同	興福寺
○春日淨土曼荼羅圖	室町時代	同	能滿院
東大寺曼荼羅圖	同	同	東大寺
春日宮曼荼羅圖	同	同	南市町春日講
春日神社社寺曼荼羅	同	同	興福寺
春日鹿曼荼羅圖	同	同	同
二月堂曼荼羅圖	同	同	稻垣祐義
生駒宮曼荼羅圖	江戸時代	同	比古神社
花鳥圖	明時代	雙絹本著色幅	長谷寺
巖田宗廟緣起	室町時代	一絹本著色卷	大坂巖田神社
南山大師像	同	一絹本著色幅	奈良西大寺
慈恩大師像	同	同	毛利喜右衛門寺
地藏菩薩像	同	同	金剛寺
文殊菩薩像	同	同	法華院

古美術關係彙報

一月

建築史研究會編輯「建築史」發刊

一昨年伊東忠太博士を中心とするその門下によつて組織され、古建築に關する諸項の基礎的調査、研究、及び建築に關係深い彫刻、繪畫、工藝、庭園史、歴史地理學、考古學に於ける種々の問題をも併せ研鑽することを目的とする建築史研究會は、その研究發表の機關として「建築史」を一月から發刊し、引續き隔月に發行することになつた。同委員は足立康大岡實、太田博太郎、關野克、竹島卓一、谷重雄、福山敏男の七名である。

二月

桑港萬國博覽會への特別出陳

フランススコに於て開催された金門萬國博覽會主催の日本古美術展覽會に七月中特別陳列に出品する美術品に就き重要美術品等調査委員會に於て二月一日根津嘉一郎藏北野天神緣起六卷の内一卷、保阪潤治藏駿牛繪斷簡一幅、輪王寺藏慈眼大師緣起三卷の中一卷、武藤金太藏一遍上人繪斷簡二幅、親王院藏星曼茶羅の五點が送付されることに決定した。以上の美術品は五月一日日本郵船會社の所屬船でサンフランシスコに直送された。

大阪市立美術館長更迭

大阪市立美

術館長今井貫一は病氣の爲め豫て辭表提出中の處、二月六日付退職し、後任として菅野利太郎が館長事務取扱となつた。キリシタン文化研究所の設立 日本

に於けるキリシタン布教史の研究は間接にはわが國の文化史の上にも大いなる意義を有するものであるが、未だその研究の十分でないのに鑑み、今度麴町區上智大學及び長崎市に當研究所が二月五日設立された。事業としては内外資料の蒐集及史料の研究、キリシタン研究年報の作成等を主要とし、その他隨時に研究發表會、講演會、展觀等が催される由である。

伯林日本古美術展覽會開會

ドイツ

政府の主催による日本古美術展覽會については、一昨年以來大久保利武侯を委員長とする伯林日本古美術展覽會が設置され、更に實行委員會が設けられて出品物の選定その他に當り積極的のわが古美術紹介の爲慎重な準備が進められ、選定された御物、國寶及び重要美術品を含む百二十六點の出品物は委員會の派遣員たる福井東北帝大教授及び丸尾國寶鑑査官等の附添の下に舊臘發送され、又政府派遣の文化使節井上三郎侯及び隨員として兒島東京帝大助教授、山田智三郎もや、連れて東京を出發渡獨、開會に關する準備中であつたが、二月二十八日ベルガモン

博物館を式場としてヒトラー總統以下の首腦部初め多數來賓、關係者參列の下に盛大な開會式が舉げられ、翌三月一日から同三十一日まで一般に公開された。同會場はキュンメル總長の英斷により、ドイツ博物館階上の二十五室を充てたもので、この建物は近年の設立になり、最も新しい設備を有し、平常はドイツに於ける最上級の名畫が陳列されてゐたものである。これらを一時全部はづし、キュンメル總長の招聘によりミュンヘンから來たウイーデルアンデルス教授が室内の改装にあつた。即ち元の壁面の前に又新に一つの壁を作るべく木で骨組みを施し、繪畫を掛ける部分は枠を造つて背後はベニヤ板を張り、前面にはガラスを嵌め込み、彫刻は支柱のない大きなガラスを貼り合せた箱に入れる等、明るく且落付いた日本の芬圍氣を醸し出すことに意が注がれた。

このやうに細心の好意あるドイツ側の設備によつて、その効果が十分に擧げられ、西歐に於ては未曾有とも稱すべき展覽會が展開された。

三月

學位授與

京都帝國大學教授梅原末

治は三月二十九日附、東京帝國大學講師松本榮一は四月十三日附を以ていづれも文學博士、内務省造神宮使廳囑託福山敏男は五月八日附工學博士の學位を授與せられた。各の提出論文は左の如くである。

梅原末治主論文「支那青銅器時代の研究」、同副論文「撻禁の考古學的考察」

「漢以前の古鏡の研究」
松本榮一「燉煌畫の研究、圖像篇」
福山敏男主論文「伊勢神宮の建築に關する史的的研究」、同副論文「上代建築史に關する基礎的研究」

國史館造營委員會職員決定

紀元二

千六百年奉祝記念事業として、昭和十二年勅令第五百九十六號に基く國史館造營に就て同會より文部省にその事務を委囑された。即ち昭和十四年三月勅令第四十二號を以て國史館造營委員會が設置された。趣旨は文部大臣の監督に屬し、其の諮問に應じて國史館の造營に關する重要な事項を調査審議する、會長一人委員二十人以内を以て之を組織し、特別の事項を調査審議する爲必要あるときは臨時委員を置くことを得る。現職員の氏名は左の通である。

(會長) 石黒英彦、(委員) 歌田千勝、田中重之、松尾長造、柴垣郡太郎、安井章一、正木直彦、内田祥三、西田直二郎、芝葛盛、宮池直一、平泉澄、大熊喜邦、伊東忠太、辻善之助、佐野利器、荻野伸三郎、森金次郎、佐藤功一、(幹事) 杉山俊郎、關口勳、青戸精一、増田八郎

四月

小學讀本修正

昭和十三年改訂版小

學國語讀本卷十一に「法隆寺」と題する一課が新に掲載せられるに及び、その内

容に不備誤謬のすくなくならざる點が工學博士足立康の注意するところとなつた。文部當局は調査の上、その注意を容れ本年度に於てその一課に根本的な改訂を行つた。

五月

世界印刷博へ日本よりの出品

世界印刷術發明の祖グーデンベルヒの五百年祭に當り、獨逸マインツ市、グーデンベルヒ博物館に於て明春世界印刷博覽會が開催されることになり、わが國に於て同博に古版等の遺品を出品することに五月二十日決定した。よつて國際文化振興會に於てはグ氏印刷術の影響を受けた豊臣時代以後の重要古書を全國から求めて選定にあつた。その主要なものは、豊臣版帝鑑圖說、光悅版伊勢物語、切支丹版どちりな、きりしたん等六十冊であり、尙其の他百萬塔に納入されて居る最古の木版陀羅尼經が陳列されることになつた。

朝鮮扶餘發掘

朝鮮古蹟研究會の事業による同志清道扶餘の發掘は帝室博物館鑑査官石川茂作を主査として四月下旬から五月十八日に亙つて行はれた。今般の發掘調査は主として東南里に就いて從事されたが、尙扶餘内に於ける佳塔里に於ては小規模の發掘が試みられた。東南廢寺址の發掘の地域は東西約二百五十尺、南北約四百尺の約一萬坪に亙る相當廣大な面積である。この推定寺址區域の南側には南大門と推される栗石の集積が

あり、これから更に北に六十尺進んだ所には西、東五十六尺、南北四十尺の廣さの中門址の基壇が存在する。そして柱址かと思はれる焼土の痕跡が二ヶ所認められる。この中門址の兩袖から東西に兩翼の廻廊が出て居り、その幅二十三尺東西に延びること約九十尺となり、いづれも北折して居る。尙この北折廻廊の約二百二十尺延長した所には經藏址、又は鐘樓址かと推定さるべき遺構が連續して居る。これらの基壇は兩方共に東西四十尺南北四十四尺の廣さである。この基壇は東西兩廻廊共に内側に屈折して僅かに延び講堂址の兩脇の最前部に連結して居る。而して講堂址はこの基壇東西百七十四尺南北七十尺まであつて、中門、東西兩廻廊鐘樓址、及び經藏址に擬すべき兩遺構と共に矩形の輪廓をなして中央に金堂がある。

金堂址はその基壇、東西百尺、南北七十尺で、その周圍に片磨をたて、基壇の土崩れを防いだ設備が発見された。この金堂址の東西兩側廻廊まで及び中門址、講堂址までの距離がいづれも七十尺に當る。その他發掘の結果としては石佛像首部の殘片三個、硝子珠數個、銅製帶金具殘片等の遺物を採取した。又扶餘に於ては從來會て見ない珍稀な九葉蓮花文の鍍瓦を始め、約十五種の鍍瓦が出土した。かく二十五日間亙る發掘調査によつて多大な收穫が擧げられた。(考古學雜誌二十九ノ七號報による)

五月

帝室博物館總長更迭

帝室博物館總長 帝室博物館總長 杉榮三郎は五月三日附願に依り本官を免ぜられ、後任として圖書頭兼諸陵頭渡部信が總長に任ぜられた。杉總長は昭和七年圖書頭より現職に轉じ、爾來帝室博物館復興の完成を見た今日迄同館の爲に盡瘁した功績は顯著であつた。なほ總長退官と同時に宮中顧問官に任ぜられ引續き宮廷に奉仕することとなつた。

當麻根本曼茶羅の撮影及研究

瀧精一博士を中心とする學者の團が大和當麻寺所藏當麻根本曼茶羅に就てその作製の時代及び其の物の正體を確めるため新に文部省内學術振興會の補助を得て、三箇年の計畫で聯合研究を實施することとなつた。研究者は文學博士瀧精一、理學博士柴田雄次、齋藤俊吉、理學博士仁田勇、理學博士大賀一郎、工學博士足立康文學博士松本榮一等である。調査の順序として、先づ原本の完全な實物大寫眞を撮影するの必要を認め、五月下旬京都便利堂に命じて撮影を行つた。撮影はパンクロマチック乾板使用のものと同赤外線寫眞との雙法に依り、何れも原寸大で、百二十餘枚の部分燒付を繼ぎ合せた完全なものである。(國華七月號による)

七月

小川晴暘雲崗石佛寫眞攝影

奈良飛鳥園主小川晴暘は陸軍從軍畫家として七

月支那に雲崗石窟の調査に赴き、同石佛の寫眞撮影及び寫生、拓本採取に約百日に亙つて従事した。撮影した寫眞は約千枚に達し、從來に見ない精細な資料であることに注目される。尙これと共に石佛の色彩を傳へる爲の寫生圖及び二百枚の拓本を製作した。

東方文化學院長の新任

同院長は服部宇之吉博士の逝去により缺員となつてゐたが、七月二十六日、豫てより同學院理事及研究員として盡瘁した瀧精一博士が新院長に就任した。

鑑眞和尚像摸刻

唐の名僧鑑眞和尚の高徳を敬慕するものが支那に多いため水野梅曉等の盡力で唐招提寺藏鑑眞和尚像の摸刻乾漆像三體を奈良美術院の吉田白幽に依頼製作し、上海、南京、北京三都の寺院に安置して佛敎上日支親善の一助とすることになつた。(大朝七・一七による)

北魏平城址の調査

東亞考古學會昭和十四年度調査旅行は、蒙疆地區大同附近に於て北魏平城址の究明を目的とし、原田淑人博士を團長とする一行十名により六月から七月に亙つてその發掘調査を行ひ、貴重な成果を得た。それに就いて大要を記せば左の如くである。大同は古來政治文化の中心地を成し、漢及び北魏時代には平城として著名であつた。この平城址は大同を中心とする東西南北各城外に於ける土器、瓦等の殘片の散布狀態の調査により、大略現在の大同の街から

稍北寄りに在つたことが分明した。而して尙これを裏書する有力な二つの發見が

今度行はれた。その一は「遼地理志」にも記載されて居る北魏宮垣の双關址の土壇の發見で、一は東寄りの御河を望む地點に宮殿址と推考される北魏の建築址の發見である。それによつて漢の平城址も亦これと同然であることが明證されるに至つた。即ち地下約一米程の個所に於て砂岩質の礎石、瓦、或は土器の殘片が多く採集された。尙この平城址の發見に伴ひ大同の北約十邦里に在る方山の頂上、文明皇太后及び孝文帝の御陵の存するところその南方には永固堂、思遠寺等の建築址と思はれる地固めの石積が相當明確に規模を示して遺存して居る。そして之等のある崖下には南北に連なる土壇があり、同じく地固めの石積がある。これは離宮として知られた靈泉宮址と推定されるに至つた。果してこの附近一帯に互つて、北魏時代の遺物である龜趺、礎石、佛像等の殘片が瓦や土器と共に發見された。又方面の近く現在寺兒山と稱されて居るところは、漢の高祖が匈奴に圍まれたといふ史上に有名な白登山であることが明かにされ、考古學的にも瓦、土器の殘片が數多發見された。以上平城址及び其の他遺蹟の究明は、文獻上、或は雲崗石窟の遺物によつてのみ想像されて居た北魏大同文化の跡づけを益々明かにすることが出来、學界に寄與するところ甚大なるものがある。

(考古學雜誌二九ノ八・一〇彙報による)

柏林日本古美術展覽會の閉會

ヒツ

トラー總統をはじめ全ドイツの望望を擔つて三月一日開催された同展覽會開期中は、各著名な新聞は競つて美術史専門家の解説、又は詩人の印象記等を度々掲載し、又美術雜誌等には論文及び詳細な解説を附した出陳品の寫眞を掲載するなどこれ等の紹介がいやが上にも一般の反響を呼び起し、毎日熱心な觀衆が詰めかけ用意の目錄等は午前中に賣切れとなる程で、會期中觀覽者は延人員六萬を超える盛況であつた。これが日本文化の宣揚に十分の効果を擧げ、且兩國の親善を深くしたことは言ふまでもない。

なほ出陳品は閉會後無事郵船鎌倉丸で日本に持ち歸られた。その中繪畫のみを七月五日から一週間東京帝室博物館に於て陳列公開し、同時に同委員會ではこの展覽會に關する報告講演會を帝室博物館講堂に於て開催し、井上侯爵、福井利吉郎教授の講演等があつた。

上智大學鳥居人類考古學會解散

上

智大學内の同會は創立以來三ヶ年を關したが、今回會長鳥居龍藏博士は北京燕京大學に客座教授として招聘を受け、彼地に研究の全生涯を捧げることになつたので、同會創立の動機に鑑み七月三十一日解散することになつた。

尙同會蒐集保存に係る遺物は日支學術提携の爲燕京大學に寄贈されることになつた。

蒙古ワリーマンハ帝陵壁畫調査並に撰寫

滿洲國興安西省ワリーマンハの墳墓及び城郭は近代の遺蹟で明治三十八年鳥居博士が發見以來故關野博士その他考古學者により度々調査が行はれて居た。その中東陵は遼盛代の帝王聖宗の陵墓と稱されて居る壁畫が現存して居る。今回滿洲國に於ては政府事業としてこの貴重な遺蹟の調査及び撰寫を企て、滿日文化協會の斡旋によつて、京都帝大羽田亨博士を主査として調査を、日本畫家杉本哲郎がその撰寫を擔當した。一行は七月二十九日奉天を出發、七月二十四日ワリーマンハに到着した。その調査の概要を記せば、東陵は地下三十三尺の處にあり、壁畫は主室四面に四季山水、前後側室、左右四側室及びその洪道に人物肖像畫(等身大)凡五十數圖(但し大部分は剝落して不明瞭)がある。又別に鴨居に相當する個所及びドーム天井一面に華麗な裝飾文様がある。尙今回洪道入口外部前方に幅八尺の完全な羨道のある事が發見されたが、その羨道の兩壁にも武人、軍馬等彫しき壁畫のあることが發見された。しかしこれは前者のものと描法の異なるもので恐らく時代的にも降下すると考へられる由である。尙之等の中、今度行はれた撰寫の壁畫は、前室及左右側室の人物畫十點(中素描七點、完成せしもの三點)羨道の軍馬(素描一點)いづれも實物大に紙本及び麻布に摸された。尙この他拓本數點が齎された。(これは人物畫の描線

が墨線の前に鐵筆の如きもので壁畫に線彫りが施されて居たので可能であつた。)地理的に頗る困難且つ寒冷を克服して調査、撰寫を敢行した當事者の勞苦とそれによつて齎された貢獻とは特筆されるべきであらう。

九月

大津京址調査並に唐三彩發掘

昭和

十三年五月勅旨を以て滋賀縣に天智天皇を祭祀し奉る近江神宮御創建のことを仰出された。よつて縣當局に於ては近江故宮址の發見に努めて居たが確證を得るところなかつたことを遺憾とし、今年同史蹟調査員柴田實にこの再調査を擔當させた。同人發掘調査の個所は先年東京文理大助教授肥後和男によつて天智天皇の御願による崇福寺址の堂塔址及び近江宮址に造營された梵釋寺址と推定されたところである。而してこの梵釋寺址の推定に就いては出土品遺物の年代觀によつて異説があり、未だ確定説を見るまでに至らなかつた。よつて今度はこの際の發掘の地域を再び精査すると共に又種々の障得の爲未調査の推定地の發掘に主力が注がれた。

即ち八月南滋賀字勸學院東方の竹藪から著手された。その結果遺蹟としては廻廊の礎石と推されるもの二個とその外方に當つて七十尺餘の石垣を發見した。而して出土品には白鳳期通有の複瓣蓮華文瓦又當遺蹟特有の巨大な箱瓦が多く採取

された。なほこれからや、時を隔て、九月には崇福寺小倉堂址附近に於て未発見の奈良朝様式の複瓣蓮華文瓦、天平或はその以前と推される塼佛の破片等を探取し、また基壇石組の見事なものが発見された。

なほこの遺物に就いて特筆されるのは唐三彩の盤のやうな形體で正倉院御物と同様なものが発見されたことである。唐三彩が發掘品として出たことは從來會て見ない處で他の遺品と共に、近江宮址推定に重要な資料として興味が深い。(史林二四ノ一號報による)

十月

若草塔心礎法隆寺に遷る

若草塔心礎は明治二十年前後までは現法隆寺普門院の裏手にあたる所にあつたが、その後原位置から北畠治房男爵邸内に運び移された。この心礎は表面の刻込みの異常な形と共に多年學界に注目されてゐたもので、大正十五年二月法隆寺五重塔の空洞が發見されるに及び、かねて若草塔心礎の手法の解釋に苦しんでゐた故關野貞博士は、これに關聯して考慮する所あり、同心礎の調査を思ひ立つて、北畠家に問合せた。しかるに同礎石は既に大正二年北畠家より住吉久原家別邸に讓渡され、その上には十三重塔が建てられて居た爲遂に實測の意を果さなかつた。近時法隆寺問題を繞り、若草伽藍址が重要な提示となり、同心礎の調査が計畫され、現品

は二三年前久原家より野村家に讓渡され十三重塔は移轉されて心礎の表面實測の可能が確められた爲、足立康博士らにより實測調査が行はれた。その後心礎の所有者野村徳七はその重要な價値を認めて法隆寺に返還することを快諾、十月末日野村邸から法隆寺へ無事返戻され、再び上代のまゝの位置に置かれることになつた。(建築史一ノ四による)

十二月

陽明文庫の設立

公爵近衛文麿は同家に傳世する什寶につきこれを天下の公寶として、永久に世に傳へんことを期しこのほど財團法人陽明文庫を設立した。總裁公爵近衛文麿、理事長河原田稼吉、常務理事男爵水谷川忠磨以下を役員とする。新に近衛家に由縁ある京都市右京區宇多野谷町に第一號書庫が建設されて從來宮内省圖書寮に移管されて居た文庫の内容を移すこととなつた。その各寶物類の點數はほゞ古文書四百五十點、圖書十萬點、美術品刀劍類數十點の由である。次に同文庫の目的及事業に就いて拔萃する。

一、本文庫ハ公爵近衛家ニ傳來セル史料古文書、典籍其ノ他歴史的美術的ニ重要ナル物品ヲ保存管理シ、學術上並ニ社會教育上ノ效用ニ供シ、併セテ我國史又ハ美術研究者ニ補助スルヲ以テ目的トス

一、本文庫ハ前條ノ目的ヲ達スルタメ左

ノ事業ヲ行フ。

1. 堅牢ナル文庫ヲ建設シテ前條記載ノ物品ヲ保存管理スルコト
2. 本文庫所藏物ヲ別ニ定ムル規程ニヨリ展覽ニ供スルコト
3. 本文庫所藏物ヲ複製シ無償、又ハ營利ニ涉ラザル方法ニヨリ頒布スルコト
4. 關係圖書ヲ刊行スルコト

法隆寺若草伽藍址の發掘

東京帝室博物館鑑査官石田茂作を主査として、十二月下旬若草伽藍址の發掘が行はれ、左のやうな結果が齎された。

法隆寺普門院の裏手の現場に於て方五十尺の塔址を發見し、次いでその塔址の北三十尺を隔てた處に間口七十尺、奥行六十尺の金堂址が發見された。尙これに伴つて講堂址は現在法隆寺伽藍の地と推定された居るが、この發掘は未完了の由であるといふ。而してその塔址及び金堂址が同じく南北の一直線の上にその中心があるといふことから推定して、若草伽藍址が四天王寺式伽藍配置によつたものであることの推定が可能にされた。尙現法隆寺の金堂の敷地が、若草伽藍址の金堂址の面積に相等しく、塔址も又法隆寺の五重塔とその廣さが相同じであるといふ、近時學界に喧傳されてゐる法隆寺再建非再建問題に關してこの若草伽藍址の發掘調査は極めて重要な意義をもつものとして注目される。(考古學雜誌三〇ノ三號報による)

樞原神宮御造營に於ける考古學調査

樞原神宮神域擴張造營に際し、是に併せて行つた考古學調査は本年度を以てその最高潮となす。前年より引續いて調査中の外苑グラウンド内に檢出した繩文式土器を主體とする石器時代遺蹟は漸くその地形的原状を知るを得、また出土遺物多數を加へて近畿に於ける繩文式土器の遺跡として特に注意すべき内容を現示するに至つた。

またこの外に彌生式土器の埋藏される遺跡を現在の神宮の東方に檢出したことにより、昔時この地に早くから先史文化の存續を知ることが出來たが、更に彌生式土器埋藏の地域は畝傍山の東南方で、彌生式土器時代に埋立たやうな現象があるのも特に注意を要する事柄であつた。即ちこれはかなり古い時代より樞原の土地に、このやうな土木工事が行はれたと見るべきものである。神域擴張に於ける今回の大土木事業は畝傍山東南方の地域三十萬坪の面積に互つたるが、右に記した以外の考古學的な事象は更に御陵の參道と兆域附近修造に當り、相當多數の彌生式土器、土師器、祝部の類を檢出して居る。この事もまた前述の資料と併せて見るべきものである。また上述先史時代遺物に次いで歴史時代に入つた資料としては、現在の樞原神宮驛の東方にある小丘の土を採取した時、そこに遺存する柱根を見た。これは法隆寺の東院等に檢出した柱根と同じやうに思はれる掘立柱の

根の部分が残存したのであつたことを示すに外ならない。併し柱根の明瞭な配置は知り得なかつた。尤も腐朽の爲に消滅したのもあるかも知れないが柱間の一定しない點に或は建築の種類に差違があるのではないかとも思はれる。即ち畝傍山の東に蘇我入鹿の要塞を作つたといふ日本書紀天智天皇紀の記事など關聯があるのではなからうか。

次いで特徴のある出土遺物は多數の古代井戸であつた。現在までには二十數個を検出したが、その中には個人用の小さい井戸と共同井戸と覺しき大形の井戸とがあつて、何れも奈良時代から平安時代の初めか藤原時代頃までの遺物を出土して居て、當時に於ける聚樂の状態を追想せしめる。ことに井戸にはいろ／＼井戸自體に對する信仰的な現はれを見ることが出来るのは、當代人が持つた井戸への信仰また現在土俗的な信仰と併せ考へて人間生活に最も必須な關係にある井戸を今回の調査によつて一層深く考へ得たことは特記に値する事柄であつた。以上は概原に知り得た文化的遺物と遺構であつて、この土地の永い歴史を現示し、古文獻の示す所また首肯すべきものあるを物語つて居るが、この外に發掘遺物中に多數の巨木の根があり、それは主に「イチヒガシ」であるのは、かつてこの附近にはかゝる檜の木が茂つて居たことが知られ、それがいつかの時代に伐採せられて根株のみが残つてゐたのである。その遺

存する状態や場所や他の出土遺物などと綜合して考へて見ると、先史時代に溯り得ることを知り得たのも今次調査に於ける重要な寄與であつた。

尙昭和十四年度の調査は十一月末日一應現地發掘調査を打切り、以後は出土遺物の整理に當つて居る。

藤原宮趾發掘

昭和九年以來日本古

文化研究所において實施中の藤原宮趾の調査は、昭和十四年度に於ては既發見の所謂十三堂趾の外廓をつゝむ廻廊趾の調査に主力を注いだ。先づ東面廻廊趾を探查せるに、東方殿堂趾群の東方に於て南北に並べる夥しき根石群を發見し、その三列に並ぶ配置よりこれが複廊形式（桁行十四尺梁行十尺）をとるものであることが判明した。廻廊趾は東方殿堂趾群の北部に於て西に打れ（この附近には根石上に固定せる多くの礎石があつた）大極殿趾たる大宮土壇の南方に達して居るが恰も大宮土壇の正南に當る地點に於て見事な石の基壇が發見せられたので茲に門のあつた事が判明した。

一方この廻廊趾は大極殿東方の殿堂趾の正南に當る地點に於て北に分岐し、該殿堂趾の南側面に接してゐるから、これらの廻廊趾は大極殿趾の外廓をなすわけである。斯くして十二堂趾及び大極殿趾と廻廊趾との關係も明瞭となり、ほゞ藤原宮朝堂院外廓の全貌を知ることが出来た。因に昭和十四年度までに於ける發見建築趾の見取圖を掲げる（圖版九九頁參照）

博物館・美術館新収品

帝室博物館並に公共博物館、美術館の昭和十四年度に於ける新収美術品(繪畫、彫刻、工藝、考古學資料)の目錄を左に掲載する。

東京帝室博物館

東京帝室博物館の新収品中主要なるものは左の通りであつた。

繪畫

- 室町時代扇面畫幅 一帖
- 花鳥圖屏風 一雙
- 京、大阪、江戸 三幅對 一雙
- 山水圖屏風 三枚
- 軍馬圖屏風 一雙
- 藤田東湖橋本左内圖 一雙

考古

- 四神四獸鏡 一面
- 眉庇付青銅鏡 一面
- 短甲 一領
- 以上兵庫縣加西郡在田村大字笹倉字龜山古墳出土
- 四獸鏡 一面
- 四神鏡 一面
- 管玉 二面
- 銅製經筒 十五個
- 以上兵庫縣加東郡大部村大字敷地字宮林一、四五二番地古墳出土
- 銅印「御笠團印」 一個
- 福岡縣筑紫郡水城村大字國分字堀田七五七番地出土
- 四神鏡「吾作明菟基大工……用青銅係子宜孫」 一面
- ノ銘アリ 島根縣能義郡荒島村大字荒島造山二〇四
- 二番地古墳出土
- 角(周代銅器) 一個

奈良帝室博物館

奈良帝室博物館の寄託品は左の通りであつた。(○)印國寶、△印重要美術品)

繪畫

博物館・美術館新収品

- 品目
- △長谷寺緣起繪卷 三卷
- 彫刻
- 五部淨半身像 一軀 (八部衆内)
- 降三世明王立像 一軀 (五大明王像)
- 金剛夜叉明王立像 一軀 (同)
- 日光、月光菩薩立像二軀 (本尊藥師如來坐像脇侍)
- 兜跋毘沙門天立像 一軀
- 僧形文殊坐像 一軀
- 毘沙門天立像 一軀 (永仁六年佛師法眼幸祐ノ銘アリ)

工藝品

- 四面器 一組 (正和五年西大寺眞言堂東壇佛具ノ内)
- 銅鏡 五面
- 金鼓 一口 (永和五年ノ云々ノ銘アリ)
- 十一面觀音懸佛 二面
- 横井慶寺陸出土品 一括 (金銅菩薩像唐鏡古鏡等)
- △船形埴輪斷片 一個

恩賜京都博物館

恩賜京都博物館の寄託品は左の通りであつた。

繪畫

- 品目
- 一逼上人繪傳(重要美術品) 四卷
- 一逼上人繪傳(卷第二)(國寶) 一卷
- 賢勝院殿像(筆者不詳) 一幅
- 花鳥圖(狩野松榮筆) 六曲一雙
- 山水人物圖(長谷川等伯筆) 六曲一雙
- 花鳥圖(張駿筆) 一雙

工藝品

- 瀨戸古窯四耳壺 一個
- 瀨戸羯輪印花牡丹文双耳花瓶 一個
- 瀨戸羯輪印花文瓶子 一個
- 黃瀬戸香爐 一個
- 志野松繪銅羅鉢 一個
- 信樂古窯文登 一個
- 信樂古窯文登 一個
- 斑唐津片口 一個
- 朝鮮唐津茶盤 一個
- 金鼓(秋篠寺鐘云々正安三年云々ノ銘アリ) 一個

日本畫

- 大禮記念京都美術館
- 大禮記念京都美術館の新収品は左の通りであつた。(○)印購入、△印寄贈)
- 畫題
- 平林草稿 故土田 麥僊
- △山上樂園 故土田 春舉
- △梅ヶ畑の麥秋 故落合 朗風
- △春雷 竹村 白鳳
- △林 冬木 清
- △藤椅子に依れる少女 玉城 末一
- △交歌(下圖) 菊池 契月
- △待機 故猪飼 晴谷
- △梁風子 故小村 大雲
- 大佛勸進 新井 勝利
- 馬 西山 翠嶂
- 清暉 小野 竹喬
- △機土春かへる 橋本 關雪
- △つのとぐ鹿 故木島 櫻谷
- △魚調 前田 萩郎
- 洋畫
- △畫室にて 安藤 信哉
- 樂器を持てる女 寺内萬治郎
- △赤いちよつき 南 政善
- 彫塑
- △若き日 清水禮四郎

- 婦人像 辻 晋堂 第二十六回院展
- 夢 建昌 大夢 第三回文展
- 初夏 圓錐 勝二 同
- △戦ひを前に 服部 仁郎 同

工藝

- 銀龍文の鑑置物 山脇 洋二 第二回文展

大阪市立美術館

大阪市立美術館の寄託品は左の通りであつた。(○印國寶)

- 繪畫
 - 聖德太子像 一幅 大阪府 安國寺
 - 十六羅漢像 二幅 滋賀縣 觀音寺
 - 毘沙門天像 一幅 同 同
 - 黃龍普覺禪師像 一幅 京都市 興聖寺
 - 尊圓親王像 一幅 同 青蓮院
 - 羅漢像 一幅 同 超覺院
 - 南山大師像 一幅 奈良市 東大寺
 - 花車圖 六曲一双 京都市 真正極樂寺

彫刻

- 聖德太子立像 一軀 廣島縣 淨土寺

朝鮮總督府博物館

朝鮮總督府博物館の新収品は左の通りであつた。

品目

- 陝川長興庫銘三島手鏡 李朝 一個 平壤附近
- 青銅龍虎の子 樂浪 一個 慶州瑞鳳塚
- 金製寶冠 古新羅 一個 同
- 金製冠垂飾 同 一對 同
- 金製鈔帶金具 同 一具 同
- 金製腰佩金具 同 一具 同
- 金製透彫大環耳飾 同 一對 同
- 金製大環瑠璃付耳飾 同 一對 同
- 金製大環瑠璃付耳飾 同 一對 同
- 金製大環小環瑠璃付耳飾 同 一對 同
- 金製大環小環瑠璃付耳飾 同 一對 同
- 金製心葉形垂下飾 同 一對 同
- 金製心葉形垂下飾 同 一對 同
- 金製細環耳飾 同 一對 同

發見地

- 金製半球形髻物頭部 古新羅 一個 慶州瑞鳳塚
- 金製指輪 同 十六個 同
- 金製胸輪 同 三個 同
- 玻璃製胸輪 同 一對 同
- 銀製胸輪 同 二對 同
- 各種小玉連繫胸輪 同 二連 同
- 金銀玻璃連繫首飾 同 一連 同
- 勾玉管玉切子玉連繫首飾 同 一連 同
- 各種小玉飾 同 一連 同
- 大形玻璃丸玉及勾玉 同 一連 同
- 玻璃小玉 同 一括 同
- 玻璃小玉 同 一連 同
- 玻璃小玉及勾玉 同 一連 同
- 金銅張角形鐵器 同 一個 同
- 金銅金具付角瓶 同 一個 同
- 連華文漆器附金銅環 同 一括 同
- 金製鏡 同 二個 同
- 延壽銘銀盒 同 一個 同
- 青銅羊頭注口鐏斗 同 一個 同
- 玻璃杯 同 一個 同
- 玻璃杯 同 一個 同
- 玻璃杯殘缺 同 一括 同
- 金銅誕生佛立像 三國 一軀 全北錦山郡珍山面三往里出土
- 青銅釋迦如來立像 新羅 一軀 慶南晉州郡二班城面坪村里出土
- 金銅釋迦如來立像 同 一軀 慶北安東郡南後面水下洞出土
- 金銅釋迦如來立像 同 一軀 江原道原州郡原州邑出土
- 金製大環耳飾 三國 一對 江原道洪州郡南面龍水里出土
- 金製大環耳飾 高句麗 一個 平南江東郡鳳津面漢玉里出土
- 彫三島扁壺 李朝 一個 全南滿州島
- 彫三島扁壺 同 一個 同
- 無地刷毛目瓶 同 一個 同

日本畫

- 品目
 - 花の旅 作 者 三木翠山
 - これにも月の入りたるや 同 同 同
 - 天馬奮迅圖 同 同 同
 - 明鏡止水 同 同 同
 - 鷄 同 同 同
 - 雪中美人の圖 同 同 同
 - 燕子花 同 同 同
 - 四睡 同 同 同
 - 水尾村の秋 同 同 同
 - 洋畫
 - 内金剛風景 同 同 同
 - 百濟舊都 同 同 同
 - 北窓 同 同 同
 - 上州水上ノ雪景 同 同 同
 - 彩衣と裸婦 同 同 同
 - 北京萬字廊 同 同 同
 - 少女 同 同 同
 - 彫刻
 - 晚鐘 同 同 同
 - 戀ふ女 同 同 同
 - 工藝品
 - 青銅メダル五種 同 同 同
 - 北海跳躍 同 同 同
 - 木兔圖 同 同 同
 - 彩壇菱花文磁盤 同 同 同
 - 輪花形水指 同 同 同
 - 華文三脚花器 同 同 同

李王家美術館

李王家美術館の新収品は左の通りであつた。

朝鮮古美術

金銅如意輪觀世音菩薩

三國時代一點

高村豐周

魚住幸兵衛

伊東翠壺

木村雨山

津田信夫

畑正吉

建島大夢

關野聖雲

田邊弘光

中澤弘光

伊原宇三郎

三宅克己

山下新太郎

同

平塚運一

案本一洋

筆谷等觀

山村耕花

伊東深水

兒玉希望

小室翠雲

山元春舉

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

古美術保存

保存關係彙報

一月

法隆寺國寶保存工事々務所長更迭

前所長工學博士武田五一は昭和十三年二月五日薨去したので、同主事今井文英が所長事務取扱を命ぜられてるが、十四年一月六日神戸高等工業學校長古宇田實が同所長を囑託された。

大山寺觀音堂燒失

鳥取縣の大山寺では一月十五日午後十時出火し、その觀音堂を全燒し、安置の左記國寶を毀損した。

- 一、銅造十一面觀音立像 一軀
- 一、銅造觀世音菩薩立像 一軀
- 一、鐵製厨子 一基

附祈願文鑄出ノ鐵板

鐵造地藏菩薩頭部

重要美術品等調査委員會開催

三十一日文部省に於て重要美術品等調査委員會を開催、北米合衆國サンフランシスコ市に於て開催の日本古美術展覽會に出陳の爲、東京府根津嘉一郎所有「紙本着色北野天神緣起繪卷六卷の内一卷」外四件(繪畫)の輸出許可の件並に繪畫十二件、建造物十二件、文書典籍書蹟七十六件、刀劍六十五件、工藝品及考古學資料四十五件、合計二百十件の重要美術品

等認定の件を夫々議決した。

二月

法隆寺國寶保存協議會開催

二月七日文部省に於て法隆寺國寶保存協議會を開催、昭和十三年度實施せる大講堂、夢殿、寶藏、東院廻廊、舍利殿、繪殿、傳法堂、東院南門、四脚門の修理工事並に寶藏建設工事等の計畫を審議可決した。

國寶保存會開催

二月二十八日文部省に國寶保存會を開催、東京府公府近衛文麿所有「絹本着色春日鹿曼茶羅圖一幅」外百四十八件の寶物類の國寶指定の件、國寶建造物「寶臺院大方丈及靈廟」外七件の維持修理費補助の件及國寶建造物京都府「吉田神社齋場所太元宮」外四件の現状變更許可の件を夫々議決した。

四月

法隆寺國寶保存協議會開催

四月十七日法隆寺に於て法隆寺國寶保存協議會を開催、大講堂の修理竣工状況、夢殿、東院廻廊、舍利殿、繪殿、傳法堂、東院南門、四脚門の修理状況、寶藏の工事状況及金堂壁畫保存状況を視察し壁畫保存に關する協議を行つた。

五月

史蹟名勝天然紀念物調査會

五月一日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會が開催され、史蹟明治天皇遊民行在所外二十一件の指定の件、天然紀念物新宮藺澤浮島植物群落指定地域追加及名勝向島百花園指定地域一部解除の件その他の事項が審議された。

荻野仲三郎辭任

國寶保存會委員文部省囑託荻野仲三郎は五月三十日文部省宗教局の公職を辭し、保存事業に多くの功績を残して引退した。

六月

法隆寺壁畫保存調査會の成立

法隆寺國寶保存事業の實施機關として、文部省内に設けられてる法隆寺國寶保存事業部に於ては法隆寺國寶の全體的保存計畫中の一重要事項たる壁畫保存方法に就て、慎重考慮中であつた處、保存事業の進捗に伴つて今回愈々壁畫の調査研究も促進せられることとなり、六月八日を以て法隆寺壁畫保存調査會の成立を見た。

本調査會は法隆寺國寶保存事業部に附置せられ、委員には史學、建築、美術、自然科學等の權威者が網羅され、壁畫保存に關する重要事項に付調査すると共に、具體的調査の指導にも當ることとなり、此の整備した組織と陣容とに依つて、今後の壁畫保存方法の調査研究に著しい飛躍を遂げることとなつた。委員及幹事の氏名は左の通りである。

委員長

東京帝大名譽教授工博 伊東 忠太
工博 天沼 俊一
委員 環博 今村 明恆

東京帝大教授工博 内田 祥三
江崎 政忠
荻野仲三郎
神戶高等工業學校長 古宇田 實
(法隆寺國寶保存工事々務所長)

東京帝大名譽教授工博 柴田 桂太
東京帝大教授工博 柴田 雄次
東京帝大名譽教授工博 瀧 精一
東京帝大教授工博 田中 芳雄
東京帝大名譽教授工博 中村 清二
京都帝大總長文博 羽田 亨
東京帝皇博物館鑿查官 溝口 頑次郎
文部省宗教局長 松尾 長造
(法隆寺國寶保存事業部理事)

帝國藝術院會員 安田新三郎
同 和田 英作
東京帝大教授文博 利辻 哲郎
東京帝大名譽教授文博 高楠順次郎
幹事 文部書記官 青戸 精一
(法隆寺國寶保存事業部幹事) 文部技師 阪谷良之進

法隆寺壁畫保存調査會開催

六月十四日文部省に法隆寺壁畫保存調査會第一回總會を開催、壁畫の調査事項、調査方法等に關し一般的に協議した。

七月

國寶保存會開催 七月四日文部省に國寶保存會を開催、三重縣猪田神社所有

決した。

八月

醍醐寺經藏の燒失

醍醐寺經藏(京都市伏見區醍醐東大路町醍醐寺境内所在明治三十一年十二月指定)は、昭和十四年八月二十九日醍醐山國有林から發火した山火事の爲類焼の厄に遭ひ、午後五時半燒失した。

經藏は建久年間重源上人が建立した桁行三間、梁間二間、(正面一間通り繩破風を附した外陣がついて居て三間とも見られる)寄棟造、柿葺の建物で、天竺様の遺構として、同じく重源の建立した天竺様の現存遺構たる東大寺の南大門及開山堂、播磨の淨土寺淨土堂と共に、夫々に特徴を持つ極めて重要なものであつた。

當日午前十時半醍醐寺使用人の岩淵某が山上伽藍境域から十數丁距つた醍醐山國有林内に於て火災の起りつゝ、あるのを發見し、早速本坊寺務所等に電話で急を報せ、寺より警林署、警察署、警防團等消防關係者に出勤を乞ひ應援方を依頼すると同時に山上伽藍住僧並に折柄登山中の信徒約五十名直に現場に出勤消火に努めた。折悪しく當日の山上は風烈しく、加ふるに稀な旱天續きで林地の乾燥甚だしかつたため、瞬く間に國有林十數町歩を燒き拂ひ、強烈なる火勢は東南の烈風に煽られて遂に境内林に燃え移らうとした。之よりさき急速各方面から駆けつけた京都府市警防團、第十六師團工兵

隊檀信徒等約一千名は一齊に活動し、多數の樹木を伐採して國有林と境内との間に防火陣を布きひたすら其の延焼を防いだが、力及ばず、午後一時半には約二十町歩の境内山林の各所に燒え擴がり、山上諸堂宇は四圍悉く猛烈な火焰に包まれ、同二時四十分消防隊必死の努力も空しく、經藏に延焼し同五時半本堂其の他の諸堂宇と共に遂に燒失した。

經藏のすぐ上にある國寶藥師堂や、近くの國寶清瀧堂拜殿は、必死の防火に依り辛うじて事無きを得たが、さきに昭和七年四月同じ上醍醐の國寶五大堂が烏有に歸し、今またかけがへの無い貴重な天竺様遺構を失つたことはまことに痛惜に堪へぬ次第である。

尙本經藏に收納せられてゐた宋版一切經は靈寶館に移してあつたので災厄を免れた。(圖版九九頁参照)

十月

舊二條離宮の御下賜と國寶史蹟名勝指

二條城は明治十七年七月以來、二條離宮として宮内省の管轄する所となつて居たが、昭和十四年七月其の世傳御料たることを解除せられ、思召を以て同年十月二十五日京都市に御下賜の御沙汰があり、この恩命に浴した京都市は、十一月三日明治節の佳辰を卜して拜受の式を擧げ、市民の光榮と感激を新にしたのである。文部省に於ては、十月二十七日、本省會議室に國寶保存會を開いて、會長

細川侯爵以下委員二十二名其の他關係官出席の上、文部大臣の諮問に依り、御下賜の御沙汰あらせられた舊二條離宮内の重要な建造物を、國寶に指定するの件を審議、其の貴重なる由緒及結構に鑑み歴史上、美術上重要な價值あるものとして、全會一致可決し、即日答申、文部省は直ちに指定の手續を採り、翌二十八日官報を以て其の旨告示した。同日史蹟名勝天然紀念物調査會開催、委員十五名、文部省側より河原田文部大臣、大村次官及其の他關係官出席し、舊二條離宮(二條城)を史蹟に、二之丸庭園を名勝に指定の件を議決、文部省に於ては十一月三十日の官報を以て右告示した。かくて二條城は國寶、史蹟及名勝として、夫々指定され、國法に依る保護及監督の下に、其の保存に萬全が期せらるゝこととなつた。

舊二條離宮は明治十七年七月もとの二條城を以てこれに充てられたものであつて、城は關ヶ原の役後、徳川家康が上洛の際の居館に充つる爲、關西の諸侯に賦課して造營したものに係る。爾後幕府は逐次其の規模を整へ、殊に寛永元年以降は、同三年を期して後水尾天皇の行幸を仰がんが爲に、特に意を用ひて、二之丸苑池の南に新に行幸御殿等を營み、以て儲御所と爲し、更に従前の殿閣を修め華麗を施し、又伏見城の再興の天守并に殿宇、長屋等を當城に移築して其の結構を整備した。

「猪田神社本殿」外一件の建造物、東京府和田助一所有「木造阿彌陀如來立像一軀」外二十一件の寶物類の國寶指定の件及國寶建造物「寶臺院大方丈及靈廟」(靜岡縣)外八件、國寶寶物類北野神社「紙本墨書日本書紀二十八册」(京都府)外二十一件の維持修理費補助の件並國寶建造物「諏訪神社社殿」(靜岡縣)外三件、國寶寶物類「紙本墨書達磨宗六祖師像一幅」(京都府高山寺)外一件の現狀變更許可の件、火災に罹り毀損せる國寶寶物類「銅造十一面觀音立像」(鳥取縣大山寺)外二件の國寶資格存續の件を夫々議決した。

法隆寺壁畫保存調査會開催

七月十四日法隆寺に於て法隆寺壁畫保存調査會を開催、金堂壁畫保存狀況を視察第一回總會に於て協議せる調査事項、調査方法等に關し具體的に協議した。

史蹟名勝天然紀念物調査會長更迭

前會長文學博士三上參次は六月六日薨去したため、七月二十五日男爵阪谷芳郎が右會長を仰せつけられた。

重要美術品等調査委員會開催

七月二十八日文部省に於て重要美術品等調査委員會を開催、繪畫三十件、建造物九件、文書典籍書蹟七十九件、刀劍七十六件、工藝品及考古學資料二件、合計百九十六件の重要美術品等認定の件を議決した。

國寶保存會常務委員會開催

七月三十一日文部省に國寶保存會常務委員會を開催、國寶建造物「天滿神社樓門」(和歌山縣)外一件の維持修理費補助の件を議

當時本丸は西南隅に五層の天守聳立し、隅櫓、多門、東西兩門其の四周を固め、本丸郭内には玄關、遠侍、廣間、書院、御座之間、臺所、御料理之間、老中部屋、祈筆部屋、藏等の殿宇廊廡棟を並べ、二之丸には現存御殿の背後に伺候之間、年寄衆部屋、役人衆部屋、長局、藏擊廊等櫓比し、白書院北方に御殿、大廣間南方に舞臺、樂屋等が建ち並び、更に又城の外郭には隅櫓、東北及西の各城門、番所、牆壁等が備はつてゐた。

寛永三年九月後水尾天皇行幸の盛儀のあつた後、同五年幕府は行幸御殿等を仙洞御所に移し奉つた。寛永十一年將軍家光上洛して此處に駐紮したが其の以後は、久しく將軍上洛のことも無かつた爲、主要建物を遺して、城内の殿宇を逐次他に分移又は撤廢した。加ふるに寛延三年八月雷火に因り天守は焼失し、天明八年正月の大火に、本丸の諸殿宇、櫓、多門等は、纔に東入口の櫓門（二階御門）のみを遺して悉く類焼し、隴濠及天守臺、圍郭、其の内周の石段のみは昔日の儘に存して、本丸郭内は其の後長く廢墟の如くであつた。

其の間幸にして二之丸御殿、唐門、築地、臺所、御清所、本丸二階御門、二之丸溜櫓及渡櫓並に東、北兩大手門、西櫓形の埋門、東南及西南の兩隅櫓、各接續躰、鳴子門、仕切門、各所の土藏等は、隴濠と共に、慶長寛永時の儘に遺存し、明治に至つたのである。

明治元年正月朝廷二條城を收められ太政官代と爲し、同四年六月京都府へ移管、同六年二月陸軍省の管轄となり、同十七年七月離宮と定められ宮内省の管轄する所となつた。當時諸殿宇の破損せるものがあつたので、大に修理を行ひ、輪奐の美を復し、又同廿六、七の兩年に互り、舊桂宮御殿（京都皇宮今出川御門内にあつた舊桂宮の御本邸で、弘化四年に造營されたものである。）を本丸に移建された。

大正四年大正天皇即位禮の際、大變妄を當城内に行はせらるゝに當り二之丸の一部に些少の模様替が施された。

二條城の現存建造物中、特に著名であるのは、二之丸御殿であつて、遠侍より白書院に至る數棟の大廈は、東南より西北に、雁行して配置せられ、其の坪數合せて約千坪、極めて宏壯雄大である。而して大廣間、黒書院、白書院及遠侍には孰れも上段之間あり、床欄を備へ、附書院を設け、御帳臺を構へ、格天井を張つてゐる。其の材質構造の完良なるは勿論雕鏤金碧孰れも豪華絢麗を極め、桃山及江戸初期最盛時の書院造遺構中、代表的の遺例たることを首肯せしめる。

次に遠侍北方に位置せる臺所、御清所の造構亦頗る壯大で、御殿東南の莊重なる築地、豊麗の唐門等と共に、よく當城盛時の舊規を存してゐる。而して内外の城門、隅櫓は、形態よく整ひ、隴濠と一體をなして渾然たる城郭美を形成し、前記各遺構と相俟つて、當城の古制を遺憾

なく傳へてゐる。

なほ二之丸庭園は、寛永三年後水尾天皇二條城行幸の際に於ける行幸御殿に對してゐたものであつて、現在は大廣間より鑑賞せられてゐる。池は變化に富む曲汀を有し、中に三つの中島を置き、自然石の四橋を架け、また西北隅に三段の瀧を落し、池汀池邊に多く石を組んでゐる。庭園の西部に、まつ、くろがねもち、あらがし、しひ、とべら、むく、さくらもみぢ等の樹林があつて、背景をなし、池の南方（行幸御殿址）は廣い芝生になつてゐて、多數の松を點綴してゐる。園内の石組には、通じて豪宕の趣あり、城郭の築山泉水庭として優秀である。

（圖版九八頁參照）

國寶保存會開催

十月二十七日文部省に國寶保存會を開催、同月二十五日京都市に對し御下賜の御沙汰あらせられた「元離宮二條城」國寶指定の件及國寶建造物「金剛寺鐘樓及塔婆」（大阪府）の維持修理費補助の件並同「吉田神社齋場所太元宮」（京都府）外一件の現状變更許可の件を夫々議決した。

史蹟名勝天然紀念物調査會開催

十月二十八日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會が開催され、史蹟、明治天皇葉原御小休所外二十件の指定の件、名勝堀切小高園指定地域一部解除その他の事項が審議された。

十二月

法隆寺壁畫保存調査會開催

十二月二十日帝國學士院に於て法隆寺壁畫保存調査會を開催、金堂の建物及壁體に關する具體的調査に着手すること及壁畫の模寫を作成すること等を協議し、壁畫模寫の執筆者として左の四名に委嘱することに決定した。

荒井寛方 橋本明治 中村岳陵 入江波光

昭和十四年度國寶指定

文部省告示第三百三十七號 昭和十四年五月二十七日

繪畫之部

品目	所有者
絹本着色一字金輪像	東京府東京市麴町區下二番町 男爵 大倉喜七郎
絹本着色三十六歌仙切 <small>(高光)</small> 佐竹家傳來	同水田町二丁目 小林 一三
絹本着色鴛鴦 經華室印ノ印アリ	同麻布區北日ヶ窪町 馬越 恭一
絹本着色傳名和長年像 長谷川信春筆	同小石川區金富町 子爵 福岡 孝紹
紙本墨畫維摩圖尾形光琳筆	同鶴岡谷町 保阪 潤治
紙本淡彩松巒古寺圖 <small>(田能村竹田筆 天保四年ノ自賛アリ)</small>	同世田谷區深澤町 長尾 欽彌
紙本淡彩山水圖 <small>(青木木米筆 類山陽ノ賛アリ)</small>	同 同
絹本淡彩山水圖李在筆	同澁谷區原宿三丁目 男爵 團 伊能
紙本着色馬醫草紙殘編	同金王町 小坂 順造
絹本着色蟲魚帖 <small>(渡邊蓬山筆 丁酉ノ年記アリ)</small>	同 同 人
絹本着色春日鹿曼茶羅圖	同從橋區下落合一丁目 公爵 近衛 文麿
紙本着色三十六歌仙切 <small>(住吉明神傳 佐竹家傳來)</small>	同 同 松永安左衛門
絹本着色羅漢圖 泰山筆	同 同 原 壽枝
紙本着色伊勢物語繪卷	同本牧町 原 富太郎
紙本着色婦女遊樂圖六面屏風	同新潟縣中蒲原郡金山村 中野 忠太郎
絹本着色白雲紅樹圖 <small>(過大雅筆 附紙本墨書池大雅書狀 一幅)</small>	同 同 人
絹本着色法然上人像	同京都府京都市右京區嵯峨二尊院門前長神町 二 尊院
紙本着色後宇多天皇宸影	同嵯峨大澤町 大 覺寺
絹本着色後宇多天皇宸影	同 同 同 寺
紙本着色後宇多天皇宸影	同 同 同 寺
絹本着色大明國師像	同左區區南禪寺前町 南 禪寺
文龜元年後柏原天皇宸翰アリ	同東山区宗町十五丁目 東 福寺
絹本着色藤原道家像	同 同 同 寺
康永二年乾家墨ノ賛アリ	同兵衛縣神戶市須磨區西須磨 武岡 忠夫
紙本着色岩佐勝以像	同 同 同 寺
附 <small>(紙本墨書岩佐勝以書狀 一幅)</small>	同 同 同 寺

品目	所有者
絹本淡彩夢遊桃源圖安堅筆	一 卷 應兒島縣應兒島市 園田 稔
李舜ノ題跋題二申叔舟等二十一人ノ跋アリ	同 同 同 寺

品目	所有者
木造藥師如來立像	一 軀 新潟縣刈羽郡高柳村 村山 龜一郎
銅造觀音菩薩立像	一 軀 大阪府南河内郡天野村 金 剛寺

品目	所有者
文書典籍書蹟之部	同 同 同 寺
紙本墨書古今集卷第五	一 卷 東京府東京市京橋區京橋一丁目 中 村 延代
藏手繪料紙墨書和漢朗詠抄藤原行重	二 卷 同 同 同 人
下卷ニ永曆元年四月書寫ノ奥書アリ	二 冊 同 同 同 人
紙本墨書佛法大明錄 <small>(卷第十、第十一、普門院「光明詠」ノ印記アリ)</small>	十 卷 同 同 同 人
紙本墨書九條殿御記 <small>(部類年中行事)</small>	三 卷 同 同 同 人
紙本墨書九條殿御記 <small>(部類年中行事)</small>	一 卷 同 同 同 人
紙本墨書九條良經消息 <small>(十通)</small>	一 幅 同 同 同 人
紙本墨書九條良經消息 <small>(十一月廿二日)</small>	一 幅 同 同 同 人
附寫シ一幅	一 幅 同 同 同 人
九條兼實ノ加筆アリ	一 幅 同 同 同 人
紙本墨書九條良經消息 <small>(道家裝束之事)</small>	一 幅 同 同 同 人
紙本墨書天福元年九條道家政道奏狀九條基家筆	一 幅 同 同 同 人
紙本墨書藤原定家自筆申文 <small>(藤任所望事)</small>	一 帖 同 同 同 人
紙本墨書大鏡殘卷	四 帖 同 同 同 人
紙本墨書枕草子	一 卷 同 同 同 人
紙本墨書藤原宗通朝臣家歌合寛治五年八月廿三日	一 卷 同 同 同 人
紙本墨書江談抄	一 卷 同 同 同 人
紙本墨書二中歴	十三 帖 同 同 同 人
紙本墨書新猿樂記	一 卷 同 同 同 人
弘安三年三月一日書寫ノ奥書アリ	一 卷 同 同 同 人
紙書二和漢朗詠集卷上ノ書寫アリ	一 卷 同 同 同 人
紙本墨書新猿樂記	一 卷 同 同 同 人
紙本墨書新猿樂記	一 卷 同 同 同 人
紙本墨書廣清涼傳 <small>(卷上中下)</small>	三 帖 同 同 同 人
中卷ニ永久五年二月十八日書寫ノ奥書アリ	三 帖 同 同 同 人
紙本墨書三寶感應錄 <small>(高山寺本)</small>	三 帖 同 同 同 人
各卷ニ壽永三年書寫ノ奥書アリ	同 同 同 人

宋刊本冲虚至德真經 (金澤文庫本)

宋刊本寶退錄遺與時務

紙本墨書神會語錄殘卷 (敦煌出土)

唐貞元八年十月廿一日校勘ノ奥書アリ

紙本墨書歷代法寶記殘卷 (敦煌出土)

紙本墨書太子刷護經

(天平十二年三月十五日藤原夫人顯經)

紙本墨書新編佛法大明錄 (自卷第一至第九、自第十卷第一至第十七、第十卷第一至第十七、第十卷第一至第十七)

卷第一、正嘉元年閏三月廿二日書寫ノ奥書アリ

卷第二、光明院ノ印記アリ

紙本墨書園悟克勤墨蹟 (建炎二年二月十二日)

紙本墨書大慧宗杲墨蹟 (四月八日)

蠟箋墨書虛堂智愚墨蹟

紙本墨書南堂清欲墨蹟 (至正丁亥年)

紙本墨書擬絕道冲墨蹟 (淳祐丁未六月庚子)

紙本墨書竺田悟心墨蹟 (至順元年佛成道日)

紙本墨書後朱雀天皇宸翰

紙本墨書不空羅索神呪心經

(元慶五年五月七日藤原高子顯經)

紙本墨書五絃琴譜

紙本墨書論春秋歌合

紙本墨書歌合卷第六

京極御息所歌合 延喜廿一年三月七日

陽成院一親王姫君送歌合 晚秋古歌返

麗景殿女御歌合 天曆十年

宣藏殿御息所歌合 聖妻 天曆十年五月廿九日

紙本墨書歌合序

紙本墨書古今集 (嘉祿本)

嘉元三年四月廿七日書寫校合ノ奥書並ニ冷泉爲和ノ跋アリ

附三條西公條條狀一通

後西天皇宸翰御極札 一葉

紙本墨書後拾遺抄上

紙本墨書慈圓僧正消息 (九品番事)

紙本墨書明惠上人消息 (二月六日)

紙本墨書平信範消息 (十二月十二日)

紙本墨書源家長消息 (二月十四日)

紙本墨書冷泉爲相消息並萬里小路宣房返狀

三册 東京府東京市日墨區俣爵 前田利爲

五册 駒場町 同 人

一卷 同上日墨一丁目 石井光雄

一卷 同上日墨一丁目 同 人

紙本墨書一山一室墨蹟 (正安三年秋寫)

紙本墨書寂室元光墨蹟 (鷗岩號)

大藏經 (和版五千一百五十七帖)

附寶德三年目錄二帖、目錄殘卷一卷

千賀重親筆書狀一通、智鋒筆修補大藏經圖文一通

紙本墨書後深草天皇宸翰御消息 (斷簡二通)

紙本墨書後光嚴院宸翰御消息 (何條事候哉云々)

紙本墨書伏見天皇宸翰法華經 (沈金箱入)

紙本墨書後深草天皇宸翰御消息 (正月朔日)

紙本墨書花園天皇宸翰御賀札 (正月朔日)

紙本墨書蘇悉地儀軌契印圖傳宗叔請來

紙本墨畫語尊圖像

紙本墨畫傳法正宗定祖圖

仁平四年書寫ノ奥書アリ

紙本墨畫胎藏曼荼羅略記

長承二年書寫ノ奥書アリ

紙本墨畫九曜星圖像

紙本著色仁王經法圖像

壽永二年書寫ノ奥書アリ

紙本墨畫天元明王圖像

紙本墨書龜山天皇宸翰禪林禪寺御起願文案

(永仁七年三月五日)

附南禪寺領護國所々紛失御判物一帖

紙本墨書法華經 (自卷第七)

壽永二年運慶顯經

紙本墨書慈圓僧正消息

紙本墨書花園天皇宸翰御消息 (普賢形像事云々)

紙本墨畫彌勒菩薩畫像集

仁安三年書寫ノ奥書アリ

紙本墨畫四天王圖像

紙本墨畫高僧像

長寛元年書寫ノ奥書アリ

紙本墨書孔雀經音義上中下

保延三年閏九月願西書寫ノ奥書アリ

紙本墨書花園天皇宸翰御消息

箱裏挿紙ニ貞和二年ノ記アリ

紙本墨書花園天皇宸翰阿彌陀經殘卷

紙本墨書花園天皇宸翰達磨像御贊 (曆嘉祿書云々)

滋賀縣大津市別所

同 圓 滿 院

同 妙 蓮 寺

同 本 能 寺

同 觀 智 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

新瀉縣刈羽郡高柳村 村山龜一郎

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

同 同 院

紙本墨書光嚴院宸翰假名御消息(二通)

紙本墨書後光嚴院宸翰御消息(三月七日)

紙本墨書普光大檀國師諡號勅書(延文三年三月日)

後光嚴院御書アリ

紙本墨書古林清茂筆月林道號(泰定四年三月望日)

紙本墨書左經記萬壽二年秋冬、長元七年秋冬、同八年春夏

紙本墨書一山一寧墨蹟(瑞巖空照禪師頌)

紙本墨書虎關師鍊消息(十二月十九日)

紙本墨書大唐西域記卷第一

天和四年四月三日書寫ノ奥書アリ

紙本墨書持心經卷第四

天平勝寶七年九月三日ノ追跋アリ

紙本墨書梵網經下卷

天平勝寶九歲二月廿五日僧塞春願經

紙本墨書浴像經(大石毛入筆)

天平寶字五年二月廿五日書寫校合ノ奥書アリ

紙本墨書華嚴經卷第四十

奥二南天竺王蓮梵本經願文並二層應三年卯月十八日ノ追記アリ

紺紙金字法華經卷第八斷簡

(寛治二年七月廿七日藤原師通願經)

紙本墨書毗尼母經卷第一

建久九年三月日成辨威得ノ記アリ

紙本墨書大覺禪師筆四十二章經守達註

「蘭語」遺蹟ノ朱印並「寶珠菴常住」ノ黒印アリ

紙本墨書東大寺新禪院地藏菩薩像内奉納法華經

各出正應元年結緣者ノ奥書アリ

紙本墨書小大君集

紙本墨書藤原師通願文(寛治二年七月廿七日)

紙本墨書中阿含經卷第九

天平寶字三年九月廿七日書寫ノ奥書アリ

紙本墨書花岡天皇宸翰御消息(八月廿五日)

紙本墨書金光明最勝王經卷第一(伏見天皇宸翰)

紙本墨書正應二年法印清奥書アリ

紙本墨書廣福寺文書(百八通)

一卷 京都府京都市右京區梅津中村町

一幅 同

一幅 同

三卷 同

一幅 同

一幅 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一卷 同

一幅 同

十帖 同

二卷 同

一口 同

一口 同

一口 同

一口 同

一口 同

一口 同

短刀 朱銘志津(花押)

短刀 銘備中國住次直作

短刀 銘左安吉

短刀 銘久國

刀 附打刀拵正宗

刀 無銘 傳義弘

太刀 御作

太刀 銘長光

太刀 銘助真

太刀 銘國資

太刀 銘正恆

太刀 御作

太刀 銘不明 傳期房

工藝之部

壽老圖六角皿尾形乾山作

色繪法螺貝香爐野村仁清作

色繪吉野山圖茶壺野村仁清作

色繪桐風德利

白長覆輪太刀

青磁砧形花生

著色畫扇面貼付手宮尾形光琳畫

木製彩畫亂宮尾形乾山畫

色繪雜香爐野村仁清作

金銅五銖鈴

大和國横井廢寺跡出土品

金銅菩薩立像、山雲雙龍鏡一、銅鏡八、銅鏡殘斷一箇分、刀裝具殘片若干等

經系威筋兜

出雲國玉作陸出土品

玉類及同末成品一五五、砥石一〇〇、硝子片七、埴塙殘片三等

石製經筒

如法勢運華經二部承徳三年九月廿八日供養ノ銘アリ

一口 同赤坂區福吉町

一口 同品川區五反田六丁目

一口 同大井林町

一口 同日黒區駒場町

一口 同澁谷區千駄ヶ谷一丁目

一口 同

一口 同

一口 同

一口 同

一口 同

一口 同

一口 同

一口 同

俣爵 黒田 長成

公爵 鳥津 忠重

伯爵 伊達 興宗

伯爵 前田 利爲

公爵 徳川 家達

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

玉作湯神社

許斐儀一郎

川上村

田万清臣

多度神社

山川庄太郎

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

同 人

文部省告示第四百十一號 昭和十四年九月八日

彫刻之部

品目	所有者	所
木造阿彌陀如來坐像 <small>像内ニ藤原行光ノ願文及名號等ヲ納ム</small>	一 軀	東京府東京市四谷區三光町
木造阿彌陀如來及兩脇侍像	三 軀	山梨縣北巨摩郡神山村
木造阿彌陀如來坐像	一 軀	京都府京都市東山區林下町
木造善導大師立像	一 軀	同
木造千手觀音立像	一 軀	同左京區墨谷町
木造十一面觀音立像	一 軀	同乙訓郡大山崎村
木造閻魔王坐像	一 軀	同
木造司命坐像	二 軀	同
木造十一面觀音立像	一 軀	奈良縣山邊郡二階堂村
木造十一面觀音立像	一 軀	同高市郡高取町
木造藥師如來坐像 <small>像内ニ應徳二年十一月日佛師僧勝口ノ銘アリ</small>	一 軀	同吉野郡川上村
木造千手觀音坐像	一 軀	和歌山縣海草郡巽和歌山
木造藥師如來及兩脇侍像	三 軀	同有田郡箕島町
木造十二神將立像	十二 軀	同島屋城村
木造阿彌陀如來坐像 <small>像内ニ嘉保三年二月佛師僧勢深ノ銘アリ</small>	一 軀	同

工藝之部

品目	所有者	所
上野國保渡山藥師塚古墳出土品	一 面	群馬縣群馬郡上野村
銅鏡	三 顆	西光寺
瑪瑙勾玉	三 顆	同
琉璃勾玉	二 顆	同
内一顆頭部缺損		
碧玉管玉	九 箇	同
琉璃丸玉	三百六十 箇	同
銅製馬鐙	三 口	同
銅製轡鏡板	一 對	同
銅製三葉形香葉	七 枚	同
銅製劍頭形香葉(六鈴飾付)	二 枚	同

古美術保存

品目	所有者	所
銅製劍頭形香葉(六鈴飾付)	一枚	愛知縣知多郡内海町
銅製花瓣形金具	二枚	岩屋寺
銅製十字形辻金具	一箇	同
銅製轡鏡板形辻金具	一箇	同
金銅法具類		
一 五鈎杵	一柄	同
一 五鈎鈴	一口	同
一 金剛盤	一枚	同
一 火舍	一口	同
一 花瓶	二口	同
一 澀水器	一口	同
一 塗香器	一口	同
一 飲食器	一口	同
一 六器	六口	同

文部省告示第四百三十二號 昭和十四年十月二十五日

建造物之部

名稱	構造形式	所在地
猪田神社本殿	一間社流造、屋根檜皮葺	三重縣名賀郡猪田村
猪田神社		猪田神社境内
英彦山神社銅鳥居	銅造明神鳥居、附額柱ニ寛永第十四丁丑年八月吉日ノ刻銘アリ	福岡縣田川郡彦山村
英彦山神社		英彦山神社境内

工藝之部

品目	所有者	所
銅鐘	一口	山口縣熊毛郡周南町
後防州三井村賀茂靈祠撞鐘貞治六年三月十五日ノ後銘アリ		
筑前國宮地嶽神社境内出土品		福岡縣宗像郡津屋崎町
一 琉璃骨藏器	一口	宮地嶽神社
一 銅壺	一口	同
一 陶壺	一口	同

文部省告示第四百三十五號 昭和十四年十月二十八日

二條城 名 稱

建造物之部

名稱	構造形式	所有者	所在地
本丸櫓門	櫓門、屋根人母屋造、本瓦葺	京都府京都市	京都府京都市 中京區五百四十一番地
附櫓袖	南方二十二尺七寸、北方二十三尺、屋根本瓦葺		
東大手門	櫓門、屋根人母屋造、本瓦葺		
附多門塙	外北方延長百二十三尺八寸、內北方延長七十八尺九寸、南方延長四十九尺七寸、屋根本瓦葺		
北大手門	櫓門、屋根人母屋造、本瓦葺		
附多門塙	外東方延長七十八尺五寸、內東方延長四十八尺九寸、西方延長八十四尺四寸、屋根本瓦葺		
西門	堀門、屋根本瓦葺		
附多門塙	折廻延長百七十五尺八寸、屋根本瓦葺		
東南隅櫓	二層櫓、屋根人母屋造、本瓦葺		
附多門塙	西方延長六十五尺五寸、屋根本瓦葺		
東南隅櫓	延長百三十八尺三寸、屋根本瓦葺		
西南隅櫓	二層櫓、屋根人母屋造、本瓦葺		
附多門塙	北方延長六十五尺、東方延長六十五尺七寸、屋根本瓦葺		
土藏(米藏)	土藏造、門、番所附、單層、屋根人母屋造、本瓦葺		
土藏(北)	土藏造、單層、屋根人母屋造、本瓦葺		
土藏(南)	土藏造、單層、屋根人母屋造、本瓦葺		
鳴子門	一間單層、屋根切妻造、本瓦葺		
附櫓	東方延長二十八尺二寸、西方延長十六尺二寸、屋根本瓦葺		
桃山門	正面五間一戸、側面三間、單層、屋根人母屋造、本瓦葺		
北中仕切門	單層、假屋根、本瓦葺		
南中仕切門	單層、假屋根、本瓦葺		
唐門	後唐破風附、屋根切妻造、前四脚唐門、檜皮葺		
築地	東築地折廻櫓行延長五十四間、西築地折廻櫓行延長十四間、南築地折廻櫓行延長十四間、北築地折廻櫓行延長十四間、屋根本瓦葺		
遠侍	櫓門八間、梁間八間、單層、屋根人母屋造、本瓦葺		
附車寄	櫓門五間、梁間三間、單層、屋根人母屋造、檜皮葺		
式臺	櫓門四間、梁間五間、單層、屋根人母屋造、本瓦葺		

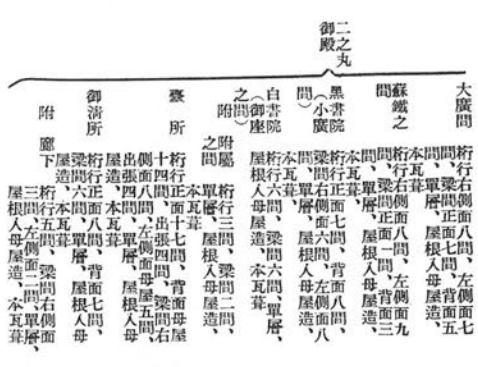
昭和十四年度國寶所在變更

文部省告示第三十三號 昭和十四年一月三十一日

昭和十一年文部省告示第二百三十三號中國寶東京府東京市麻布區今井町所在「如庵附露地」ハ昭和十三年十月十五日其ノ所在地ヲ神奈川縣中郡國府村ニ變更セリ

文部省告示第三百三十六號 昭和十四年五月二十七日

左記國寶ノ所有者「京都府京都市左京區淨土寺西田町内藤乾吉」ハ昭和十四年三月二十日其ノ住所ヲ「京都府京都市左京區北白川池田町」ニ變更セリ



指定告示	品目	冊数
昭和九年文部省告示第二十三號	紙本墨書木部殘卷 一卷	一册
昭和九年文部省告示第二十三號	紙本毛詩正義(昭興九年刊)	一帖
昭和九年文部省告示第二十三號	(金澤文庫本) 紙本史記集解(宋刊本)	十一册
昭和九年文部省告示第二十三號	仁治二年清原教隆書寫ノ奥書アリ 紙本墨書古文孝經	一卷
昭和十年文部省告示第百七十二號	紙本墨書性靈集(卷第二、三、五、六、七、八、十)	七卷
昭和十年文部省告示第百七十二號	紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳(卷七、九)	二卷
昭和十年文部省告示第百七十二號	各卷ニ大元元年三月癸卯移寫ノ奥書アリ 紙本墨書春秋經傳集解殘卷	四卷
昭和十年文部省告示第百七十二號	紙本墨書春秋經傳集解殘卷	四卷

昭和十四年度國寶所有者變更

文部省告示第三十八號 昭和十四年二月六日

左記國寶ハ昭和十三年九月二十四日其ノ所有者ヲ變更セリ

指定告示 品 新所有者 舊所有者

昭示第九號 紙本淡彩山水圖 卷一 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第六號 紙本墨書史記呂后本紀第九 卷一 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第三十三號 紙本墨書古今集卷第八 卷一 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第十五號 太刀銘備前國□□(傳友成) 一口 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第二十二號 紙本墨書後深草天皇宸翰御消息 一幅 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第二十五號 紙本著色西行法師行狀繪詞 四卷 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第二十七號 紙本著色大江山繪詞 二卷 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第三十二號 紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 卷一 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第三十四號 紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 卷二 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第三十五號 紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 卷三 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第三十六號 紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 卷四 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第三十七號 紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 卷五 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第三十八號 紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 卷六 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第三十九號 紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 卷七 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第四十號 紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 卷八 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第四十一號 紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 卷九 東京府東京市芝區高輪南町

昭示第四十二號 紙本墨書大慈恩寺三藏法師傳 卷十 東京府東京市芝區高輪南町

文部省告示第三百四號 昭和十四年五月二日

左記國寶ハ昭和十四年四月十日其ノ所有者ヲ變更セリ

指定告示 品 新所有者 舊所有者

昭示第二百五十六號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百五十七號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百五十八號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百五十九號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百六十號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百六十一號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百六十二號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百六十三號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百六十四號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百六十五號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百六十六號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百六十七號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百六十八號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百六十九號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百七十號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百七十一號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百七十二號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百七十三號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

昭示第二百七十四號 太刀銘備前長船住景光 一口 東京府東京市杉並區久我山二丁目

古美術保存

府縣 建造物之名

修理費豫算額

補助額

京都北野神社 紙本墨畫高僧像 一卷 八七八、〇〇 四三九、〇〇

長野 神明宮社殿 八、三九六、二六 五〇〇、〇〇

同 白山奥社本殿 一〇、五三〇、〇〇 五、二三〇、〇〇

同 教王護國寺金堂 一六三、九六九、四三 三七、〇〇〇、〇〇

同 御香宮神社表門 九、三五一、〇三 四、五〇〇、〇〇

同 萬福寺三門 二七、五八三、五四 七、〇〇〇、〇〇

同 金剛寺塔婆及鐘樓 三三、四八六、三一 一二、五九五、〇〇

同 鶴林寺常行堂 一九、六七六、二七 一五、〇八〇、〇〇

同 中島神社本殿 一二、五七八、〇〇 一、六四三、〇〇

奈良 興福寺東金堂 四八、四六二、八六 九、四六〇、〇〇

同 春日神社寶庫、車舍 三三、八二五、〇九 六、三〇〇、〇〇

同 祭器藏(元龜殿) 同攝社若宮神社水屋 六〇、三六四、六五 一三、八六四、〇〇

同 唐招提寺禮堂 一九、〇三四、〇〇 二、〇〇〇、〇〇

和歌山 天滿神社樓門 一七、四一四、七二 一、〇〇〇、〇〇

福岡 普門院本堂 四六、四七五、四七 二五、〇〇〇、〇〇

長崎 興福寺本堂 四五、一七六、二九 一四一、一七二、〇〇

靜岡 寶臺院大方丈及靈廟 一二、五七八、〇〇 五、三〇〇、〇〇

兵庫 中島神社本殿 昭和十四年度法隆寺國寶保存工事費(夢殿及東院廻廊、同院南門、同院四脚門、同院舍利殿及繪殿、同院傳法堂、金堂壁畫保存、伽藍保存施設、寶藏建設) 一四三、〇〇〇、〇〇 一三三、〇〇〇、〇〇

府縣 所有者 寶物類之部

修理費豫算額

補助額

同 仁和尚 紙本墨畫彌勒菩薩畫像集 一卷 八三五、四〇 五〇〇、〇〇

同 芳春院 紙本墨畫四天王圖像 一卷 三九三、八〇 三二三、〇〇

同 禪林寺 紙本墨畫達磨宗六祖師圖 一幅 四三三、五五 三〇〇、〇〇

同 高山寺 絹本著色華嚴海會諸聖衆墨畫 一幅 八八二、三〇 七五二、〇〇

同 本龍寺 紙本墨畫花園天皇宸翰御賀札 一幅 一二六、〇四 九一、〇〇

同 妙法院 木造千手觀音立像 五十二軀 二一、六六八、四〇 一一、二八〇、〇〇

同 西光寺 木造阿彌陀如來坐像 一軀 三七五、九六 三二五、〇〇

同 六波羅密寺 木造弘法大師坐像 一軀 三二六、二六 二五六、〇〇

同 金剛院 絹本著色藥師十二神將像 一幅 四三五、二〇 三三五、〇〇

同 禪定寺 紙本墨書禪定寺百二十五通文書 一軀 八八二、四〇 七五二、〇〇

同 若王寺 木造智證大師坐像 一軀 四二二、八八 三二二、〇〇

同 西尊寺 木造毘沙門天立像 一軀 一、一三四、六〇 九八四、〇〇

同 醍醐寺 木造藥師如來坐像 一軀 九七九、九九 八〇〇、〇〇

同 大念寺 木造十一面觀音立像 一軀 五八八、九五 四六八、〇〇

同 孝恩寺 木造阿彌陀如來立像 一軀 四、〇三五、三六 三、四三五、〇〇

同 長圓寺 木造十一面觀音立像 一軀 六九九、三一 五九九、〇〇

奈良 興福寺 木造大黑天立像 一軀 四一三、四一 三一三、〇〇

府縣 所有者 寶物類之部

修理費豫算額

補助額

同 唐招提寺 木造十一面觀音立像 一軀 五三三、三六 四五八、〇〇

同 八幡神社 紙本墨書廣福寺文書 二卷 八四二、九〇 六九二、〇〇

滋賀 西教寺 絹本著色阿彌陀如來像 一幅 一、一四八、六五 五七四、〇〇

同 安樂律院 絹本著色千手觀音像 一幅 二六一、六〇 一三一、〇〇

同 寶物類之部 二八五、一七二、〇〇

同 計 四、〇〇〇、〇〇

同 計 二八五、一七二、〇〇

同 計 四、〇〇〇、〇〇

同 計 二八五、一七二、〇〇

同 計 四、〇〇〇、〇〇

同 計 二八五、一七二、〇〇

同 計 四、〇〇〇、〇〇

同 計 二八五、一七二、〇〇

同 計 四、〇〇〇、〇〇

同 計 二八五、一七二、〇〇

同 計 四、〇〇〇、〇〇

同 計 二八五、一七二、〇〇

昭和十四年度國寶建造物維持修理實施狀況

十四年度維持修理竣成建造物 十四年度に於て維持修理竣成せる國寶建造物は左の通りである。(竣工順)

名稱	所在府縣	總工費
西明寺本堂及塔婆	滋賀	約三、五〇〇圓
宗像神社邊津宮拜殿	福岡	約四、四〇〇
姫路城イ、ロ、ハ、ニの各渡櫓及ホの櫓	兵庫	約六、〇〇〇
相國寺本堂(法堂)	京都	約八、〇〇〇
玄關廊	京都	約一、〇〇〇
高倉神社本殿、同境内社八幡神社々殿、同春日神社々殿	三重	約一、二〇〇
定光寺本堂(佛殿)	愛知	約元、〇〇〇
神明宮社殿	長野	約八、四〇〇
法隆寺東院夢殿	奈良	約七、一〇〇
法隆寺東院廻廊	奈良	約七、一〇〇
大傳法院多寶塔(大塔)	和歌山	約七、三〇〇
興福寺東金堂	奈良	約四八、五〇〇
妙成寺經堂	石川	約二、一〇〇
普門院本堂	福岡	約一七、五〇〇
天滿神社樓門	和歌山	約一五、三〇〇
弘前城二の丸辰巳櫓、同丑寅櫓、追手門	青森	約四三、〇〇〇

前表の各建造物は昭和十年より同十四年にわたり修理に着手し、同十四年一月から十二月迄の間に竣成を見たものであつて、破損の程度に應じ根本的或は部分的の維持修理が加へられたものである。

西明寺本堂及塔婆(三重塔)

古美術保存

滋賀縣大上郡東甲良村 西明寺、本堂明治三十年十二月二十八日指定、塔婆明治三十三年四月七日指定、構造形式・本堂 七間四方、向拜三間、屋根入母屋、檜皮葺、塔婆 方三間、三層、檜皮葺

西明寺は縁起に依ると人皇五十四代仁明天皇の承和元年に僧三修勅を奉じて開創し、同三年諸堂の落慶供養が行はれたといふ。爾後湖東三山の一として祭えたが、天正年中織田氏山門焼却の砌、佐々木氏等の兵變に會ひ、纔に本堂、塔婆、二天門を残して、堂社院中盡く烏有に歸したといふ。

現存本堂の建立年代に就ては徵すべき文獻を缺くが、修理に際して調査の結果、舊小屋組の一部及妻飾の残存、兩側入側及外際前方一間通擴張の痕跡、又後堂擴張の痕等が確認せられ、鎌倉時代初期に方五間の堂を再建し、其の後間も無く周圍を擴張し、現在見る如き方七間堂に改めた事が判明した。従つてその平面はいま外陣七間三間、内陣五間二間、後陣七間二間となつてゐる。純和様建築で、枡組の間に美しい藁股を用ひ、内陣の柱に佛像を畫き、又内外陣及廂の天井各手法を異にする等、内部に於てよく鎌倉時代の様式を現はした傑れた建築である。

三重塔の方は、形式手法より考へて鎌

倉末の建立にかゝるものと認められ、權衡よく安定の姿態を保ち、内部柱、廂、脇間壁等にすべて彩畫を描く。鎌倉時代三重塔婆中の傑作である。本堂は明治三十二年に塔は同四十一年古社寺保存法に依る修理が行はれたが、今回再び、屋根の修理が施された。(圖版九四頁参照)

相國寺本堂(法堂)玄關廊
京都市上京區相國寺門前町 相國寺、明治四十三年八月二十九日指定、構造形式・玄關廊 行四間、梁間一間、單層、屋根切妻造、本瓦葺

相國寺は永徳二年足利義滿が勅を奉じて創立し、明徳三年八月諸堂の落成を見た寺である。今の法堂は、慶長十年豊臣秀頼が再興せしものに係り、我が國現存最古のもので、純然たる禪宗様式より成り、權衡よく整ひ、手法雄健、側面に玄關廊を有する。

今回の修理は先年の颱風で倒潰したこの玄關廊の再建であつた。(圖版九四頁参照)

各渡櫓及ホの櫓

兵庫縣姫路市本町(國有)、昭和六年十二月十四日指定、構造形式・イ、ロ、ハ、ニの各渡櫓、單層渡櫓、屋根本瓦葺、ホの櫓 二層櫓、屋根本瓦葺

三重縣阿比郡新居村 高倉神社、大正十五年四月十九日指定、構造形式・高倉神社本殿、八幡社々殿、一間社流造、屋根檜皮葺、春日社々殿 一間社春日造、屋根檜皮葺

姫路城イ、ロ、ハ、ニ、の

姫路城本丸北郭の所謂鹽櫓一帯、すなはち、イ、ロ、ハ、ニの各渡櫓、ホの櫓及への渡櫓は、池田輝政造營以來すでに三百餘年を経過し、近年腐朽破損を加へ基礎石垣の一部亦弛緩し來つたため、昭和十三年四月根本的修理に着手した。其の修理經過は年鑑十四年版に所載したので茲には略する。十四年三月に、イよりにホに至る渡櫓の修理を了し、十四年度に於ては、其等につゞくへの渡櫓を修理中で、十五年三月にはこの一帯全部竣工する。尙本工事と共に、この門西南方土塀三十八間も、其の下方石垣と共に修理

棟札に依つて、社殿は孰も、天正二年十一月當國守護職仁木長政の再建せしものに係ること明瞭で、春日社背面虹梁内面に「……天正二年甲戌二月廿六日より仕り日枝うけ取にして千二百日也其時大工かわきの源十郎わき大工與三郎三社一度に立申候……棟をたて申候四月十一日……」云々の墨書銘があつて、一層はつきり建立の次第を知ることが出來た。

尙、社藏の棟札に依り、寛文、元祿、

寶永、享保、文化等數次に互り修理が行はれたことを知る。然し未だ根本的修理のこと無く、腐朽破損大であつたため、昭和十三年六月根本的修理に着手、十四年四月末其の工を竣つた。尙工事中正規の手續を経て高倉神社本殿に對しては、

濱縁を整備し、また八幡社々殿に關しては、縁が木口張であつたのを布張に改め濱縁を低下し、春日社々殿に關しても同様濱縁を低下し、三社、それ、勾欄、擬寶珠の形を改め、登勾欄の位置を變更した。(圖版解説)圖は竣工した高倉神社本殿(中央)で、向つて右が八幡社、左が春日社々殿である。(圖版九四頁參照)

定光寺本堂(佛殿)

愛知県東春日井郡品野町 定光寺、大正十五年四月十九日指定、構造形式、桁行五間、梁間五間、重層、屋根入母屋造、柿葺

本堂は寺藏の年代記に依ると、曆應三年創立、明應二年の再建にかゝり、永正七年八月地震のため大破し、天文三年再興同八年上棟したものと云ふ。純唐様に成るその構造形式は室町中期の優れた特質を表して居り、一部曆應のものを再 kullanarak 大體明應に再建したものと認められる。上層の斗拱以上は舊構を存せず、中古いつの頃から假屋根を架し現在に及び、辛うじて雨露を凌ぐ有様であつたため大に外觀を損してゐた。

今回の修理に當り、當局の許可を得て其の假屋根を撤去し、唐様三手先詰組を設け、軒を二重扇檼とし、屋根を入母屋造柿葺に改めた。また後方入側中央間に

在つた厨子及須彌壇は、明治三十五年後方に移したものであるため、之を舊位置の來迎柱間に復した。修理竣工は昭和十四年五月、其の工費は約三萬六千二百圓であつた。(圖版九五頁參照)

神明宮社殿

長野縣北安曇郡社村 神明宮、昭和十一年九月十八日指定、構造形式・本殿 桁行三間、梁間二間、神明造、屋根檜皮葺、中門(前殿) 四脚門、單層、屋根切妻造、檜皮葺、附釣屋、屋根兩下造、檜皮葺

神明宮は仁科御厨鎮護の爲め勸請創祀されたものに係るが、其の年代は審でない。現存する國寶棟札(自永和二年至安政三年計二十七枚)銘文に依り、永和二年以來二十年毎に式年造營の儀殿に行はれて今日に至つたことが判る。現在の社殿は寛永十三年、藩士池田吉久を奉行とし郡吏根岸本安これを助け、宮大工金原周防命を受けて造營したものにかゝる。爾來式年造營毎に大小の修理を受けてきたが、其の構造形式に於ては古來の形式を傳承してゐるものと思はれる。神明造の遺構中古いものは極めて尠く、唯信濃地方に比較的多く見るのであるが、その中にあつて本宮は代表的なものである。

今回の修理に當り、本殿は軒桁以上を解体し、中門、釣屋は根本的修理を施した。工事中古文書竝に發見の舊規に依り屋根の柿葺を檜皮葺に、中門前面柱位置の一尺後退したのを原位置に、中門樑木が三本であつたのを四本に復原した。(圖版九五頁參照)

法隆寺東院夢殿

奈良郡生駒郡法隆寺村 法隆寺、明治三十年十二月二十八日指定、構造形式・八角圓堂、單層、屋根本瓦葺

法隆寺東院は天平十一年行信僧都が斑鳩宮舊址の荒れたるを嘆き一院を創立したに始まり、貞觀年間道詮律師により大修理が行はれた。夢殿は即ち東院の正堂であつて文献によれば其後仁平二年屋根葺替、永萬元年修理、建久四年天井始造、寛喜二年修理等の修造を知り得るが、この内寛喜のものは最も大規模であつた。昭和十二年六月より根本修理に着手し、昭和十四年七月竣工を見たが、解体調査の結果、側廻り三斗及外陣繫虹梁は創建當時共に一重であつたものを寛喜に二重とし、(即ち別當記に「桁一重鴨居一重増す」とあるに相當す)側柱を切縮め、又軒出は平安時代一度之を深くし、寛喜修造の際更に深くしたことが認められた。尙當堂の柱は榮山寺圓堂と同じく内方に轉びを有することが明らかになつた。(圖版九五頁參照)

法隆寺東院回廊

奈良縣生駒郡法隆寺村 法隆寺、明治三十三年四月七日指定、構造形式、桁行延長四十二間、梁間一間、單層、屋根本瓦葺

回廊は東院創建に當り諸堂と共に建立されたのであるが、貞觀年間及久安三年の修造を経て、鎌倉時代に再建された。其後室町、桃山、江戸各時代の修理を経て今日に到つてゐるが、近年腐朽破損甚しく、支柱によつて辛うじて顛倒を免れて

ゐる状態であつた。昭和十二年六月よ夢殿と共に修理に着手し、昭和十四年七月竣工した。現在回廊の寸尺は資財帳のものと寸尺を異にし、古今目録抄記載のもの一致するから、鎌倉の規模になるものと考へられるが、形式手法より見れば一部に鎌倉時代の部材を存するも多くは室町の改造になるものと見られる。今回解体後礎石下より堀立柱根址空洞が發見されたが、それによると桁行は南回廊中門兩側各三間、東西回廊各十三間、北回廊十三間、梁間いづれも一間であつて、東西徑約百三十三尺南北徑約百三十七尺であり、これを天平尺に換算すると資財帳の十三丈六尺、十四丈と一致し天平創建時のものと考へられる。即ち創建當時にあつて回廊は中門兩側より起り夢殿の周圍を繞りほゞ正方形で、夢殿はその中央稍後寄りに立つてゐたのである。(現在のものは北回廊が舍利殿繪殿に續き、七間の中門は五間の禮堂となつてゐる。)尙修理の結果左記の如き現状變更が加へられた。

- 一、西回廊西側面中央一間の開放なるを扉裝置とす。
 - 一、西回廊南隅に於ける隅虹梁下方の實肘木を撤去し同所の大斗の形を整備す。
 - 一、東回廊南隅に於ける隅虹梁の形を改む。
- (圖版九五頁參照)
- 大傳法院多寶塔(大塔)

和歌山縣那賀郡根來村 大傳法院、明治三十二年四月五日指定、構造形式・二層塔婆、下層方五間、上層圓形、屋根本瓦葺

今次の修理に際し、所有の古材から建設當時の銘が續々と顯はれ、建立の事情が明らかになつた。すなはち文明十二年資材の蒐集に着手し、明應五年八月心柱を建て、永正十二年屋根瓦を葺き、續いて相輪を装置、天文十六年に至り始めて天井を架すると共に扉構を設けたものであつて、竣工までに起案以來實に六十有七の星霜を閲してゐることがわかつた。爾來慶長及び文化年間に多少改修を加へたやうであるがよく舊態を存し來つたものである。

塔は總高(自礎石上端至相輪頂上)百十八尺五寸あり、規模壯大で、古來根來の大塔又は多寶大塔と呼ばれ來つたものである。弘法大師が高野山金剛峯寺に創建した根本大塔を象つて建立したものと傳へられるやうに、普通の多寶塔とは稍其の趣を異にし、内陣の平面が圓形になつてゐて多寶塔の原形を傳へてゐる。なほ四天柱の間はいま開放しになつてゐるが、今回の修理に際し、もと後壁があつたことが判明した。

建立以後四百數十年、其の間完全な修理が行はれなかつたため、全面的に腐朽損傷を來たしてゐる上に、昭和九年の颱風のため、一層其の激しさを加へたので、昭和十二年八月以來根本的の修理が加へられ二期二年餘を以て十四年八月竣工した。(圖版九五頁參照)

興福寺東金堂

奈良市登大路町奈良公園地 興福寺、明治三十年十二月二十八日指定、構造形式・七間四面、單層、屋根四注造、本瓦葺

東金堂は神龜三年聖武天皇が元正太上天皇の御惱御平癒御祈願のため建立し給ふたもので、その起工は神龜三年七月頃、落成は神龜末年であつた。

現存の堂は應永二十二年の造立である。今回の根本的修理は昭和十二年九月に着手され、十四年八月末竣成した。

工事中、本尊臺座中から鑄銅佛頭一個並びに銀製佛腕を發見したこと、須彌壇下に松香石の敷居があつて、もと須彌壇が存在しなかつたことが明らかになつたこと、また須彌壇中から縁軸のある板瓦破片多數を發見したこと、北面石階下から當初の松香石の基壇を、また各面から地覆の一部を發見したこと等は、すでに年鑑十三年及十四年版に報告した。上記の他に萬延元年の部分的修理の棟札、墨書銘、小佛像等多數の發見があつたが、その詳細は省略する。(圖版九五頁參照)

妙成寺經堂

石川縣羽咋郡上甘田村澁谷 妙成寺、大正六年八月十三日指定、構造形式・正面三間、側面五間、單層、屋根四注造、極瓦葺

當經堂は藩主前田光高の遺願に依つて創建せしものと傳へられてゐるが、記録の徵するもの無く、明かでない。

今回の修理に際し解體の際、發見の墨書銘(東面後端間上地極上端の)に據つて、寛文十年の建立にかゝることがつきり

した。後元祿四年に葺修の行はれたことが、寺院の位牌に銘記してある。明治二十五年頃、軒を切縮めると共に、各部に大改修が加へられ、近年頗廢殊に大であつた。書院鎮守堂の修理竣成に續いて、昭和十三年十一月修理に着手され同十四年八月末竣成を見た。尙舊構が判明したので文部大臣の許可を得て、軒の一重であつたのを二重とし、屋根が寶形造であつたのを、四注造に改め、正面縁を舊規に、また一方縁を四方廻縁に復した。屋根は古く柿葺であることが明らかであつたが、保存上棧瓦葺のまゝとされた。

普門院本堂

福岡縣朝倉郡志波村

普門院、大正二年四月十四日指定、構造形式・方三間、單層、屋根寶形造、本瓦葺

普門院は今眞言宗大覺寺派に屬する。寺は天平十九年丁亥春三月僧行基が筑後河畔に創立したと傳へられる。

當堂は指定當時觀音寺本堂と稱したが、大正十一年寺號復舊の際現名稱に變更した。寺傳に依ると、この本堂はもと西南方筑後川畔中島(今浮羽郡千年村)にあつたのを、領主志波時勝の室禪尼が、水害を懼れ、亡夫の供養のため今の麻氏良山麓の地に移したといふ。其の建築様式は鎌倉時代末期の風をあらはしてゐる。

昭和十三年九月以降根本修理に着手したが、其の際發見の種々の資材に依て、元五間堂であつたものを側廻り一間を減じて三間堂に變へたことがわかつた。修理

に際し、敷地が低濕で保存上良好でなかつたため、四十八間後退させて高地に移建し、また内部佛壇後半が切縮められてゐたのを復舊し、來迎壁の華燈口を撤して板壁に復した。(圖版九六頁參照)

天滿神社樓門

和歌山市和歌浦 天滿神社、昭和十年五月十三日指定、構造形式・一間一戶樓門、屋根入母屋造、本瓦葺

社記に據ると、現樓門は慶長十一年領主淺野幸長が造營寄進したものに係るといふ。其の後寛文、延寶、元祿、安永、天保、明治等各時代の修理を経て今日に及んでゐる。地隅木上端に慶長十年卯月十六日の墨書銘があつた、また腰貫楔に寛文十三年八月吉日の墨書銘があつて建物の沿革が一層明らかになつた。

形態よく整ひ、斗拱及妻飾其の他細部の手法常型を脱し頗る勁拔の趣がある樓門である。破損が甚大であつたため、根本的修理を加へ、昭和十四年九月末竣成した。(圖版九六頁參照)

弘前城辰巳櫓、丑寅櫓、追手門

弘前市大字下白銀町一番地(弘前市有)、昭和十二年七月二十九日指定、構造形式・辰巳櫓、丑寅櫓、三層隅櫓、屋根銅板葺、追手門櫓門、屋根銅板葺

表記二櫓は二之丸の東南及東北に建つ白聖の三層櫓である。追手門は三之丸の南に建つ櫓門である。昭和十二年七月國寶に指定された弘前城の遺構八棟のうち上記三棟の破損が特に大であつたため、昭和十三年五月修理に着手し、十四年十

月末竣工を見たものである。

弘前城は、藩祖津輕爲信の嗣信牧が父の志を継ぎ、慶長十五年工を概め、同十六年五月竣工したもので、上記三棟孰もこの時の造営に係るものと認められる。

今次の修理に際し、發見の舊規に基き、辰巳櫓、丑寅櫓の各妻飾及び各出格子窓の塗籠であつたのを素木造に改め、追手門の番所内側面前方から第一間の板嵌であつたのを引戸付出入口に、番所内部が土間床であつたのを拭板敷に改め、こゝに登梯子及水平引戸を所要手續を履んで設けた。(圖版九六頁解説)圖は修理竣つた丑寅櫓及追手門外観である。時局柄櫓の屋根は假に葺葺のまゝとし、將來適當の機に銅板を葺く豫定である。

十四年度維持修理中建造物 十四年中に於て維持修理を續行し或は維持修理に着手した建造物は左表の通りである。

(着工順)

名稱	所在府縣
○唐招提寺禮堂	奈良
○教王護國寺金堂	京都
○法隆寺東院舍利殿繪殿	奈良
○法隆寺東院傳法堂	同
法隆寺東院南門(不明門)	同
法隆寺東院四脚門	同
○金剛寺塔婆及鐘樓	大阪
諏訪神社々殿	静岡
姫路城	兵庫
白山神社奥宮本殿	長野
鶴林寺常行堂	兵庫

御香宮神社表門 京都 奈良
○春日神社寶庫、車舎 奈良 崎
興福寺本堂 長崎

前表中○印を附したる建造物に關する解説、特に現状變更及發見物等のあつたものに付きその報道を以下に掲載する。

唐招提寺禮堂

奈良縣奈良市 唐招提寺、明治三十七年二月十八日指定、構造形式、桁行十九間、梁間前三間、後四間、單層、屋根人母屋造、本瓦葺

禮堂は舊東室で、建立の年代ははつきりしないが、現存のものは今回の解体調査の結果によると鎌倉時代の改造にかゝり、後方の部には創建當初と考へられる部分を残してゐる。今次の修理の進捗にともなうて判明した舊規に基く現状變更等に就いては年鑑十四年版に報告済であるから茲には省略するが大體に於て鎌倉時代の舊規に復したものである。現状變更の結果、修理前の平面と大分變つたので、平面圖を掲げて比較に便して置く。

解体の進捗に伴ひ昭和十三年三月から六月にかけて屋根の隨所の鬼瓦平瓦等から篋書銘が多數發見され、又構架材、化粧材等に墨書銘が發見された。例へば禮堂大棟南端鬼瓦の篋書銘には、「奉御舍利堂再興勸進沙門湯室院 奉行彌勒院 慶安四年九月吉日西在家村瓦屋重三郎」北端のものに「慶安四年辛卯曆九月吉日 招提寺舍利堂奉行長勸坊瓦屋西在家忠左衛門作」の如き、その他寛永、元祿、古くは應永三十二年等のものがあつた。また墨書銘には、延寶九年、元祿十一年等が

あり、前面大虹梁上端には「寶永四亥ノ十月四日大地震ニゆがみふ□取替同子ノ正月より修復三月上旬ニ修 門前大工喜多善右衛門」云々と記されてゐた。尙他に禮堂安置日供舍利寶座に元亨二年の紀年銘ある修理銘文、嘉吉元年の修理銘、舍利日供臺裏に寛正四年等々の銘が發見されたが、詳細は工事報告書に譲り、ここには省略する。

昭和十三年十一月、地盤を舊礎石面まで低下せしめるため、鋤取作業を行ひ、舊礎を徐々に掘起した所、この寺の藏松院庭園に在るものと一組をなす石臼、井戸側(深さ十六尺餘、内法二尺七寸)及四筋の遺構、古瓦多數(弘仁時代より鎌倉、室町に至る)を發見した。修理も十四年末には完成に近づいた。(圖版九七頁参照)

教王護國寺金堂

京都府京都市下京區九條町 教王護國寺、明治三十年十二月二十八日指定、構造形式、桁行七間、梁間五間、重層、屋根人母屋造、本瓦葺

豊臣秀頼が慶長四年勅を奉じて再建、同十一年九月落成供養が行はれたのが即ち今の金堂で、造構頗る雄大、桃山時代遺構中の一大傑作である。再建以後三百三十餘年を経、破損甚大であつたため、昭和十三年七月根本的修理に着手、十五年度末竣工の豫定を以て目下工事中であるが、十四年に於ては、主として、建物の解放、補足材料購入、軸部修補組立が行はれた。解体に際し、慶長七年の墨書

銘が隨所に發見せられ、他に同六年八月及び八年三月のものもあつた。以て再建工事の盛んに行はれた年次を知ることが出来る。

尙、内部四半瓦敷の床下から、布敷の舊敷石が、北側に於て殊に整然と發見されたことは舊規を知る上に頗る重要なことであつた。(圖版九七頁参照)

法隆寺東院舍利殿及繪殿

奈良縣生駒郡法隆寺村 法隆寺、明治三十三年四月七日指定、構造形式、桁行七間、梁間三間、單層、屋根切妻造、本瓦葺

當堂は昭和十三年十二月より三十二ヶ月の豫定を以て修理に着手された。十四年中に解体調査を終つたが、礎石を掘り起したところ、その直下よりさきに回廊禮堂に於て發見されたと同様の柱根址空洞が發見された。これによると舊建物は桁行七間梁間二間天平尺で七丈に二丈の大さのもので、資財帳に「屋一宇長七丈」とあるものに相當する。この建物は舍利及び聖德太子御所持の品を納めてあつたのであるが、貞觀年間に大修理を施された平安時代延久元年太子繪傳が描かれ、鎌倉時代に入つて東院全體の大修理に伴ひ、舍利殿繪殿もまた再建され、前面一間通りが補加されて桁行七間梁間三間のものとなつた。然して此の際夢殿を繞つて北面にも存在した廻廊を取除いて舍利殿の増築された部分に接続せしめ、現状の如き形態となつたものである。その改修の年代については棟木に「法隆寺御持堂建保七年歲次己卯三月廿九日長官權僧正

法印大和尚位範圍……大工土佐權守平末光、引頭大藤井國重、引頭大夫宇治國守、云々の墨書銘があり承久元年の上棟になることが知られる。其後の修理については屋根瓦には永享年間瓦大工橋吉重の刻銘あるもの多く、縁板に天正十年の墨書があつて、屋根替及び修理の年次を確め得た。その他繪殿太子繪傳の板の裏には建武、康暦、延寶の修理銘あり、現在の繪は天明七年の新寫になること、及び現在の如く中央を四まして佛壇を構へ夢違觀音を安置したのは寶永七年であることが判明した。また舍利殿須彌壇は再建當時設けられたのであるが、その時の厨子は現在のもの、中にある小さな厨子がそれで、貞和年間現在の如き大きな厨子が出来、須彌壇もそのとき擴張されたものであることを知り得た。

東外側には下見板が張られてゐるが裏に「永享二年庚戌十二月廿三日今此切懸新造云々」の墨書あり、下見張の遺物としては最も古いものであらう。

尙調査の結果左記の諸項は後世の變更になることが判明したので舊規に復原されることとなつた。

一、正面石階ノ大サヲ改メ之ニ件ヒ勾欄ヲ整フ。

二、繪殿内部ノ佛壇ヲ撤去シ内陣後壁ノ凹入セルヲ平面ニ改メ、且木部隨所ノ彩色ヲ廢ス。

三、繪殿西側後端ノ間ノ窓ナルヲ白壁ニ改ム。

法隆寺東院傳法堂

奈良縣生駒郡法隆寺村 法隆寺、明治三十三年四月七日指定、構造形式・桁行七間、梁間四間、單層、屋根切妻造、本瓦葺

傳法堂は東院の講堂として天平年間創建せられてより屢々修理を経て來たが、慶長年間に於けるものは最も大規模で、現在の細部にはこの時の改造になるものが多い。今回舍利殿と共に修理に着手され十四年中に解體を終つた。

傳法堂が橋夫人宅の遺構であるとする説は「奉納橋夫人宅」といふ資財帳の記事によるものであるが、この「宅」は同書中の他の用例より見れば「橋夫人家」が施入されたといふ意味であつて費用の施入かも知れず邸宅を移したといふ積極的根拠にはなり得ぬとの説が出て一應撤回されることとなつたが、今回解體の結果七間の中二間は同じ奈良時代のものながら手法を稍異にすることが發見され、五間の建物を七間に改造したことが判明した。しかるに資財帳の寸法と現在のものとその寸尺が一致すること、及び基礎發掘の結果、礎石を据えかへた形跡のなしいこと等より東院創建時他の建物を移建し、その時七間に擴張されたものと考へられる。しかもその建物は移建前から床が設けられてゐたことも解つた。尙解體の結果現在のものは平面、立面とも後世可成の變更が加へられてゐることが判明し、基壇中からも東院創建以前の掘立柱埋立のための壺堀と思はれる穴を發見したが、これ等の調査は十五年に引續き行

はれてゐるからその報告は全般的な調査が終つた後に譲ることとする。(圖版九七九八頁參照)

金剛寺塔婆及鐘樓

大阪府南河内郡天野村大字天野山 金剛寺、明治四十年五月二十七日指定、構造形式・塔婆 三間二層塔婆屋根柿葺、鐘樓 桁行三間梁間二間、重層、袴腰、屋根本瓦葺

當寺は承安年間阿觀上人に依つて中興の業が遂げられたものやうで、塔婆は寺傳に承和元年三月後白河法皇の勅建と稱する。慶長十一年豊臣秀頼が森長以を奉行として大いに修理を加へた。修理は昭和十三年十二月着手されたが、修理中檜に、慶長十年九月云々の墨書と、初層縁勾欄の寶珠に慶長十一年三月吉日の刻銘を見出したので、相俟つて大修理の年次を確かめることが出来る。

他面寺藏文書に依り、元祿十三年上重を組直したことが知られた。昭和十四年八月五日及七日、塔婆内陣須彌壇下、地下約七寸のところから寫經石、また地下一尺五寸の所から寶瓶及周圍玉石群中から瓦製土器等を發見した。先年石山寺多寶塔修理の際、地鎮壇具を發見したことに共に特筆すべきことである。(圖版九八頁參照)

鐘樓は吉野朝時代に屬するものの如くこれ亦慶長十一年三月秀頼之を再興、片桐市正を奉行として大いに修理せしめたものにかゝる。近年破損甚しく、塔婆と共に根本的修理が施され、十四年末には

軸部組立から屋根工事にとりかゝつた。塔婆の屋根は棧瓦葺であつたが、證據に依り柿葺に變更された。

春日神社寶庫車舎

奈良市春日野町 春日神社、寶庫明治三十四年八月二日、車舎同三十五年七月三十一日指定、構造形式・寶庫 板校倉造、屋根切妻造椽皮葺

寶庫は又神庫とも云ひ、大同二年の創立と傳へる。永徳二年焼燬、同三年正月再營、慶安二年改造、其の後式年造營の都度に修葺及補修を経て、現在に至つてゐる。車舎は一に檢非違使屋と稱する。社傳によれば貞觀元年の創立とあり、今の建物は寛永九年に造替、爾來本殿式年造營の際度々修補を施され、近くは大正十年の修理が加へられた。寶庫に對しては軸部重要部分は現状のまゝ、一旦持ち上げ、地形を施し、柱石の不陸沈下を正し木材腐朽の分を修補し、後者に對しては屋蓋全體に互り修理が施される豫定で、兩棟の工事は十四年九月に着手された。

尙引きつゞいて竈殿、酒殿、若宮手水舎が修理される豫定である。

尙十一月寶庫解體中、天井の上から、瑞花双鳳八稜鏡、在銘(春日御料寛弘八年正月八日)の圓鏡、藤花双鶴文、菊花双雀文圓鏡、無文圓鏡、小刀、大刀、懸佛、簾金具、鰐口、吊太鼓、經箱、鏡桶厨子等が發見された。

昭和十四年度重要美術品認定

文部省告示第五十八號 昭和十四年二月二十二日

品目 繪畫之部

所有者

絹本着色三十番神圖 一幅 山形縣酒田市本町 本間光正

絹本着色露殿物語 三卷 東京府東京市本郷區元町三丁目 楠林安三郎

絹本着色歸去來圖(谷文晁筆) 一幅 同定橋區西大久保一丁目 伯爵室町公藤

紙本墨畫中達磨左右鴨圖(宮本武整筆) 三幅 同中野區上原町 男爵松井明之

紙本墨畫一國師圖(傳明兆筆) 一幅 京都府京都市下京區本町通十五丁目 東福寺

絹本着色美人圖(藤川春章筆) 三幅 兵庫縣武庫郡住吉村 武藤金太

文書典籍書蹟之部

紺紙金銀字賢劫經(卷第四、卷第五、卷第九、卷第十、卷第十五、紺紙金銀字清淨毗尼方廣經) 四卷 東京府東京市麹町區水田町一丁目 小林一三

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡(伊豫切)(秋夜) 一幅 同平河町二丁目 金子政次郎

色紙墨書萬葉集卷第十八斷簡(藍紙本)(獨居帳裏) 一幅 同芝區芝公園五號地 本山豊實

紙本墨書後撰集卷第五斷簡(白河切)(むしのなに) 一幅 同日根區上日根八丁目 鈴木董

紙本墨書後拾遺集卷第八斷簡(中院切)(けるにむ) 一幅 同日根區上日根八丁目 鈴木董

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡(戊辰切)(権) 一幅 同日根區山王二丁目 徳富猪一郎

紙本墨書周易正義卷第八斷簡(紙背)(消息)別本周易正義斷簡アリ 一卷 同日根區谷下駄ヶ谷二丁目 子爵伊達宗起

紙本墨書後柏原天皇宸翰御色紙(今ははや)(御名アリ) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠月照菊花和歌) 一幅 同 同 上

紙本墨書後水尾天皇宸翰御色紙(ゆめかさは) 一幅 同 同 上

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙(咲にけり) 一幅 同 同 上

紙本墨書後柏原天皇宸翰御懷紙(秋衣離家、暮秋紅葉、對月懷舊) 一幅 同大和田町 小林正直

紙本墨書宸翰御短冊帖(後土御門天皇宸翰以下十三葉) 一帖 同 同 上

紙本墨書鎌倉大日記(自治承四年) 一卷 同從橋區西大久保一丁目 生田美喜藏

紙本墨書後土御門天皇宸翰(求若菜、袖紅) 一幅 東京府東京市下落合一丁目 公爵近衛文麿

御詠草五首 一幅 同 同 上

紙本墨書後柏原天皇宸翰(梅寒風、暮秋) 一幅 同 同 上

御詠草六首 一幅 同 同 上

紙本墨書後柏原天皇宸翰(聞虫、行客休庵) 一幅 同 同 上

紙本墨書後柏原天皇宸翰(初戀、神紙) 一卷 同 同 上

紙本墨書後天皇宸翰御詠草八首(鷺、夏月) 一幅 同 同 上

紙本墨書後天皇宸翰御懷紙(花色映月、無風) 一幅 同 同 上

紙本墨書後奈良天皇宸翰御懷紙(花散、忍經年戀) 一幅 同 同 上

紙本墨書後奈良天皇宸翰御詩懷紙(賦花中偏愛菊詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書正親町天皇宸翰御懷紙(詠竹不改色和哥) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠幸逢太平代後詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(五月雨、寄神祝) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠幸逢太平代後詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠幸逢太平代後詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠幸逢太平代後詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠幸逢太平代後詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠幸逢太平代後詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠幸逢太平代後詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠幸逢太平代後詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠幸逢太平代後詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠幸逢太平代後詩) 一幅 同 同 上

紙本墨書萬里小路宜房消息(八月十五日)	一幅	京都府京都市中京區大坂材木町	里見忠三郎	紙本墨書後撰集卷第五斷簡(自河切へうきののこ)	一葉	大阪府大阪市東區伏見町三丁目	阿部清太郎
紙本墨書大般若經卷第三百十九 天平七年四月十五日ノ奥書アリ	一卷	京都府三木木町	守屋孝藏	紙本墨書藤原俊成筆千載集(日野)たいしらす、卷第十六斷簡(切)法印慈圓	一葉	同	同
紙本墨書大般若經卷第三百九十五 寶龜三年山谷野中寫トアリ 西寺政府ノ朱印アリ	一卷	同	同	紙本墨書無學祖元尺牘(科想云々) 普門院ノ朱印アリ	一幅	熊本縣熊本市南千反畑町	山本義章
紙本墨書大般若經卷第四百七十七	二卷	同	同	紙本墨書光讚經卷第九(敦煌出土)	一卷	同	同
紙本墨書大般若經卷第四百七十七 卷第一百九十二 卷第四百九十五 (樂師寺經)	三卷	同	同	紙本墨書大般若經卷第五百廿八(樂師寺經)	一卷	同	同
紙本墨書大寶積經第四十六 「神護寺」朱印アリ	一卷	同	同	太刀銘 來國俊	一口	山形縣酒田市本町	本間光正
紙本墨書華嚴經自卷第四十一至卷第四十四 貞觀十九年元慶三年儀遠校點ノ奥書アリ	六卷	同	同	刀無銘 傳青江	一口	同北村山郡大石田町	佐藤茂兵衛
紙本墨書華嚴經卷第三	一卷	同	同	太刀銘 高綱	一口	東京府東京市麻布區鳥居坂町	男爵 岩崎小彌太
紺紙金字大般若經卷第二百卅七 軸木ニ仁平辛未四月福日乙益製トアリ	一卷	同	同	太刀銘 國繼	一口	同	同
紺紙金字阿彌陀經 見返ニ繪アリ	一卷	同	同	太刀銘 行光(古備前)	一口	同	同
紺紙金銀交書廣弘明集卷第十三(中尊寺經)	一卷	同	同	太刀銘 則重(古備前)	一口	同	同
紺紙金銀交書大悲分陀利經卷第六(中尊寺經)	一卷	同	同	太刀銘 宗吉作	一口	同	同
紺紙金字大智度論卷第十八(神護寺經) 卷第十七	三卷	同	同	太刀銘 五月六日友成	一口	同	同
紺紙金字大安般守意經(神護寺經) 卷第十八	一卷	同	同	刀無銘 傳國安	一口	同小石川區高田老松町	侯爵 細川護立
紺紙金字法華經卷第五 見返ニ繪アリ	一卷	同	同	太刀銘 長光	一口	同	同
紙本墨書大般若經卷第二百廿八 卷第二百廿七 承安五年書寫ノ奥書アリ	三卷	同	同	太刀銘 傳一文字	一口	同	同
紅紙墨書大般若經卷第廿 紙背ニ四十八圓ノ名次第アリ	一卷	同	同	太刀銘 備前國長船住人眞長 正安二年十一月以下切	一口	同	同
紙本墨書八名普賢陀羅尼經 貞應三年行遍書寫ノ奥書アリ 「方便智院」ノ朱印アリ	一卷	同	同	刀無銘 傳行光	一口	同	同
紙本墨書慈道法親王御消息竝(御名アリ) 後醍醐天皇宸翰御返狀	一幅	同鳥帽子屋町	堀部功太郎	刀金象嵌銘 兼光牌上光徳(花押)	一口	同	同
彩箋墨書古今集卷第五斷簡(傳俊雅筆×かは水の)	一幅	大阪府大阪市東區清水谷西之町	谷口作治郎	脇指銘 備前國長船兼光 貞和三年十二月日	一口	同	同
紙本墨書後拾遺集卷第八斷簡(中院)前大納言公任(切)あまのかは	一幅	同伏見町三丁目	阿部清太郎	刀無銘 傳長谷部國重	一口	同品川區五反田町	齋藤茂一郎
色紙墨書萬葉集卷第十八斷簡(藁紙本×大夫能)	一幅	同	同上	短刀銘 筑州住	一口	五丁目	同
				太刀銘 吉包	一口	同日黒區上目黒八丁目	子爵 松平康春
				太刀銘 國安	一口	同	同
				太刀銘 則房	一口	同	同
				太刀銘 有成(再及)	一口	同慶番町	原田耕三
				太刀銘 因州住景長	一口	同澁谷區千駄ヶ谷一丁目	公爵 徳川家達

刀 劍 之 部

短刀銘 安吉
刀銘 相模守政常人道

太刀銘 近村
太刀銘 助包

太刀銘 豐後國行平
重次
天文十年ノ摺上銘アリ

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備後國住
備後國住

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪

太刀銘 助長
大阪府大阪市東區
清水谷西之町

短刀銘 信國
同西成區千本通

刀銘 大隅孫原正弘
慶長十一年三月吉日
同中河内郡曙川村

太刀銘 信近
兵庫縣神戸市林田
區小松通五丁目

太刀銘 備後國住
香川縣綾歌郡坂出
町

太刀銘 備前國住義次號 南出刀
備前國住義次號 南出刀
附 文書一巻 人見竹葉林 山銘文及貝原益軒跋文
アリ 采配 雙扇 虎形 虎爪
福岡縣福岡市藥院
町

太刀銘 助吉
佐賀縣佐賀郡高木
瀬村

工藝及考古學資料之部
鍍金裝笈慶長六年筑波山快智上人ノ銘アリ
福岡縣西白河郡白
河町

木製鎌倉形牡丹桃實文笈
栃木縣足利市西宮
町

銅印文「鶴足寺印」
同足利郡小俣町

埴輪武裝男子像
群馬縣新田郡強戸村出土

埴輪男子像
群馬縣邑樂郡大川村出土

埴輪男子倚坐像
群馬縣勢多郡上川瀬村出土

埴輪男子像
群馬縣佐波郡蓮村出土

螺鈿蒔繪花鳥文檯櫃
附 藤編外筥 一合
東京府東京市麴町
區水田町二丁目

高麗青磁象嵌唐草文角形杯
同三番町

銅鐘 飯高郡上寺金「願主亥甘部子村」貞
元三年正月十一日ノ左文鑄出銘アリ
同芝區琴平町

磁製五彩鷄圖盃「大明成化年製」ノ銘アリ
同麻布區鳥居坂町

磁製青華胭脂紅龍鳳文花瓶「大清乾隆年製」ノ銘アリ
男爵岩崎小彌太

高麗青磁象嵌葡萄文胡蘆形水注
同

磁製桃花紅盒子「大清康熙年製」ノ銘アリ
同小石川區高田老
松町

鹿形裝飾附子持齋瓮
同品川區北品川二
丁目

鳥形鈕蓋附高脚罇
同

岸本貫之助

岡本元利

藤岡五作

同

同

加島勳

太田喜一

柏原仁兵衛

江口功

津島惣平

菅強助

德本勇三

龍藏寺

長林寺

鷄足寺

相川之賀

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

陶製井戸茶碗福島(大名物) 附屬品共

陶製茶室夜の雨 縹地金襴二重蔓小牡丹裏白地雲文綾蓋覆

銅鐘陳太建七年十一月十九日鐘一口供養 起口弟子沈文殊造稱廿斤ノ刻銘アリ

金小札絳威中白絲腹卷大袖喉輪付

伊豫札黑草威胸二段白絲朋丸及大袖

銀銅杏葉衝

クリス形磨石劍新潟縣中頸城郡湯町村出土

黑草威胸紫紅白朋丸鐵杏葉衝天下ノ明珍作ノ銘アリ

黑漆平胡篋方立ニ金銅魚子地牡丹紋唐文アリ

銅鐘三河國鹽津寺權鐘云々 寛寶二年庚寅卯月三日ノ鑄出銘アリ

銅鐘建長二年十一月十九日大工藤原 光延大勳造沙彌正圓ノ刻銘アリ

白磁水注小破アリ 滋賀縣大津市滋賀里町勸學堂附近出土

紺絲威朋丸皆具鐵形付前立物ニ案紋アリ 傳織田信長所用

木印印文「白雲」「隱谷」「惠曉」 佛照禪師所用

陶製黑花春夏秋冬文字餅

船形埴輪破片奈良縣奈良市法華寺出土

鹿形飾附子持齋瓮埴 和歌山縣日高郡東内原村古墳出土

名 稱 建造物之部

石造寶塔(頂部ヲ缺ク) 建治二年十二月廿五日ノ刻銘アリ

石造寶塔(傳泰澄大師供養塔) 石造燈籠

永和四年戊午卯月廿八日ノ刻銘アリ

古美術保存

一箇 東京府東京市目黒區駒場町

一箇 同杉並區成宗一丁目

一口 同大森區馬込町西四丁目

一領 同荏原區西大久保一丁目

一領 同荏原區横濱市鶴見區生野町

一箇 同新潟縣高田市本町二丁目

一領 同愛知縣名古屋市中區東魚町一丁目

一箇 同熱田區熱田新宮坂町

一口 同滋賀縣津市滋賀里町

一口 同同知多郡野間村

一領 同京都府京都市上京區紫野北船岡町

三顆 同同東山區本町通十

一箇 同大阪府豐中市新免

一箇 同奈良縣奈良市法華寺町

一口 同和歌山縣日高郡東内原村

侯爵前田利爲

今村力三郎

井上源太

生田美喜藏

前田廉造

同 上

森成麟造

三浦助市

同 上

熱田神宮

大塚寺

大御堂寺

塚本權右衛門

建勳神社

栗棘庵

沖原辨治

塚本宗太郎

森彦太郎

石造燈籠貞治五年正月十一日ノ刻銘アリ

石造寶篋印塔正和五年丙辰五月一日ノ刻銘アリ

石造九重塔(藤淨土寺石塔) 嘉元四年丙午ノ刻銘アリ

石造五輪塔元亨元年十月十七日ノ刻銘アリ

石造寶篋印塔

石造燈籠(正嘉元年ノ刻銘アリ)

石造寶塔(釜ヶ追國東塔) 建武二年乙亥二月十二日ノ刻銘アリ

石造寶塔(神宮寺國東塔) 建武三年八月日ノ刻銘アリ

文部省告示第三百八十號 昭和十四年七月十三日

品 目 繪 畫 之 部

一基 京都府相樂郡富尾村 淨瑠璃寺

一基 同 勝林院

一基 大阪府泉北郡高石町 山川七左衛門

一基 兵庫縣加西郡下里村 兵庫縣加西郡下里村坂本八

一基 同 同 同

一基 奈良縣奈良市芝新屋町 元興寺

一基 大分縣東國東郡朝來村 朝來寺

一基 同 同 同

二幅 東京府東京市日本橋區小舟町二丁目 小倉

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

一幅 同 同 同

京都府相樂郡富尾村 淨瑠璃寺境内

同 勝林院境内

大阪府泉北郡高石町北五百六十七番地ノ一

兵庫縣加西郡下里村坂本八

同 同 同

奈良縣奈良市芝新屋町 元興寺境内

大分縣東國東郡朝來村大字朝來寺宮原二千四百四十二番地

同 同 同

東京府東京市日本橋區小舟町二丁目 小倉

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

文書典籍書蹟之部

紙本墨畫興風集斷簡(傳貫之筆) 首ニ藤原興風集トアリ

紙本墨書伊勢集斷簡(石山切)(おなし女) 料紙ニ破綴アリ

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡(傳行成筆大字切)(鹿) 紙本墨書和漢朗詠集卷下斷簡(戊辰切)(山寺)

一九五

紙本墨書後撰集卷第八斷簡(白河切) (かみなつきかぎ) 一 幅 東京府東京市日本橋區小舟町二丁目

彩箋墨書古今集卷十八斷簡(本阿彌切) (かりのくる) 一 幅 同

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡(伊豫切) (納涼) 一 幅 同

彩箋墨書和漢朗詠集卷下斷簡(大内切) (花間畫友) 一 幅 同

紙本墨書古今集卷第一斷簡(高野切) (はるのよむめの) 一 幅 同通三丁目

彩箋墨書三寶繪斷簡(東大寺切) (たりの山のなかに) 一 幅 同四谷區南伊賀町

紙本墨書後柏原天皇宸翰御懷紙 (河霧未晴) (山家秋深) 一 幅 同王子區神谷町一丁目

刀無銘 傳富麻 一口 千葉縣船橋市上山

太刀銘 備前國和氣庄住重助 嘉曆三年正月日 一口 東京府東京市日本橋區室町三丁目

太刀銘 吉用 一口 同小石川區水道町

太刀銘 吉元 一口 京都市京都市上京區平野島居町

刀銘 於武州江戸越前藤繼 以兩鑿鐵末世寶二册本多五郎右衛門所持 一口 同中京區區尾町通姉小路下ル下白山町

刀無銘 傳次吉 一口 同東山區區林下町

短刀銘 廣光 一口 兵庫縣武庫郡赤山

短刀銘 藤原國廣 在京時打之 天正十九年八月日 一口 同

工藝品及考古學資料之部

硬玉製勾玉 群馬縣赤城山山腹隨石附近出土 一箇 群馬縣勢多郡宮城村

銅製饗食匙文向銘二字 傳河南省彰德府出土 一箇 東京府東京市赤坂區青山南町六丁目

銅製伯牙彈琴鏡小破アリ 福井縣今立郡上池田村大字常安出土 一面 福井縣今立郡上池田村

細形銅劍 長野縣更級郡更級村出土 一口 長野縣更級郡更級村

銅製車馬神人畫象鏡王氏作意云々ノ銘アリ 傳浙江省紹興古幕出土 一面 京都市京都市中京區東洞院通丸太町下ル三本木町

銅鏡 一口 同東山區區木町十五丁目

巴瓦 一箇 唐草瓦 一箇 綠釉巴瓦片 一箇 綠釉唐草瓦片 三箇 京都市京都市伏見區深草極樂寺町 三箇 瓦窯陸出土品 一箇 巴瓦 一箇 片木工ノ捺印アリ 一箇 平瓦片 一箇 綠釉皿片

銅製經筒 文治四年ノ毛彫銘アリ 一口 同與謝郡府中村 銅製經筒 文治四年ノ毛彫銘アリ 蓋及身ノ一部破損 一口 同與謝郡府中村 銅製菊花雙鳥文鏡 一面 銅製菊花雙鳥文鏡 一面ニ佛像ノ毛彫アリ 小破アリ 一面

銅製車馬神人畫象鏡東王公等ノ銘アリ 傳浙江省紹興古幕出土 一面 大阪府大阪市天王寺區小宮町 銅製轡首鐔文盤銘八字 傳河南省衛縣古幕出土 一箇 兵庫縣西宮市鞍掛町 銅製吳子胥畫象鏡吳尚里陌氏作意ノ銘アリ 傳浙江省紹興古幕出土 一面 同武庫郡精道村

烏根縣蘇川郡大社 一口 烏根縣蘇川郡大社 町 出雲大社 神境內出土品 硬玉製勾玉 一箇 同武庫郡精道村 香川縣小豆郡安田村出土品 平形銅劍 破損アリ 破損アリ 一口 香川縣小豆郡瀨崎村 藤原金一

石造燈籠 一基 京都市南桑田郡藤田野村 蔣田野神社 文部省告示第四百九號 昭和十四年九月六日 蔣田野神社境内

品目 繪畫之部 紙本著色雪嶺齋圖可筆 足利晴氏ノ題字、天文七年祖祥昌忠僧菊ノ賛アリ 一幅 東京府東京市牛込區白銀町 紙本著色牧童圖 長澤蘆雪筆 一雙 同小石川區水道端 紙本墨畫花鳥圖 宮本武藏筆 押繪貼六曲屏 一雙 同第六天町

所有者 所在地 稻澤清起智 片倉武雄 子爵松平保男

紙本着色山水圖青木米筆
文政十二年記アリ
附 紙本墨書米筆添狀 一通

紙本着色洛中洛外圖狩野永徳筆
六曲屏

紙本墨畫望海樓圖永享七年得巖ノ贊アリ

紙本着色北野天神緣起繪卷

紙本着色菅公像武田遺遠軒筆

紙本着色官女圖岩佐又兵衛筆

絹本着色一字金輪像

紙本着色赤壁舟遊圖池大雅筆
六曲屏

紙本着色仙洞燒丹圖出能村竹田筆
天保二年ノ年記アリ

紙本墨畫東雲節雪圖浦上玉堂筆

紙本墨畫山水圖歌子住筆
永曆五年ノ年記アリ

紙本着色弘法大師繪傳

紙本着色琴棋書畫圖海北友松筆
六曲屏

絹本着色地藏菩薩像

絹本着色石川正繼像文祿三年伯藩ノ贊アリ

絹本着色稻葉一鐵像天正十七年紹綜ノ贊アリ

絹本着色淨春信女像
慶長八年南化ノ贊アリ

紙本着色三十六歌仙圖歌元龜二年逸雅筆
宗帖筆
六曲屏

紙本着色柳橋水車圖六曲屏

紙本着色南蠻人來朝圖六曲屏

紙本着色網干圖六曲屏

絹本着色千手觀音二十八部衆圖

絹本着色釋迦十六善神圖

絹本着色尊勝曼荼羅圖

一幅 東京府東京市本郷區駒込西片町 黒川清

一雙 同品川區大井山中 伯爵上杉憲章

一幅 同澁谷區羽澤町 鹽原千代

三卷 同淀橋區柏木四丁目 菅原恆覽

一幅 同中野區城山町 渡邊溫行

一幀 同澁谷區蒲生町市邊 西村重郎兵衛

一雙 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

五卷 同 同 上

一雙 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一雙 同 同 上

一雙 同 同 上

一雙 同 同 上

一雙 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

紙本墨書大般若經卷第一百五十二(邊備寺經)

紙本墨書和漢朗詠集上卷斷簡(傳公任筆
下繪切)(春水)

紙本墨書佚名抄(卷首二代集トアリ)
紙背ニ假名消息アリ

紙本墨書瑜伽師地論卷第二

紙本墨書根本說一切有部毗奈耶卷第廿六
東大寺印ノ朱印アリ

紺紙金字不退轉法輪經卷第二(中尊寺經)

紙本墨書萬葉集卷第十斷簡(元曆校本ハはるさめハ)

紙本墨書後撰集卷第二斷簡(鳥丸切×さきさか)

紙本墨書新古今和歌集二條爲忠筆
正平十二年正月六日書寫ノ奥書アリ

紙本墨書藤原定家筆宴座圖

紙本墨書後水尾天皇宸翰御懷紙(詠寄鏡祝和哥)

紙本墨書靈元天皇宸翰御消息(十二月三日、御花押
持明院三位宛)

紙本墨書正親町天皇宸翰御懷紙(詠竹不改色和哥
御名アリ)

紙本墨書神皇正統記斷簡(二十四葉)

紙本墨書大鏡(遠長、雜々物語)

紙本墨書源氏物語(竹河)(古本)

紙本墨書源氏物語(紅葉實)(古本、册子改装本)
補寫三葉アリ

紙本墨書源氏物語(松風)(河内本)

紙本墨書源氏物語(松風)(青表紙本)

紙本墨書源氏物語(藤裏葉)(河内本、大型本)

紙本墨書源氏物語(鈴虫)(青表紙本)
卷首ニ系圖アリ

紙本墨書源氏物語(花宴)(青表紙本)
白紙アリ

紙本墨書源氏物語(柏木)(河内本、册子改装本)

紙本墨書大利物語

一卷 秋田縣秋田市大町二丁目 辻兵吉

一幅 東京府東京市麴町區麴町一丁目 加藤正治

一卷 同 同 上

一卷 同 同 上

一卷 同 同 上

一卷 同 同 上

一卷 同 同 上

二冊 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一幅 同 同 上

一綫 同 同 上

一帖 同 同 上

一帖 同 同 上

一帖 同 同 上

一帖 同 同 上

一帖 同 同 上

一帖 同 同 上

一帖 同 同 上

一卷 同 同 上

二帖 同 同 上

一帖 同 同 上

紙本墨書長秋詠藻上下	一帖	東京府東京市世田谷區北澤二丁目	大島雅太郎	紙本墨書白氏文集麗宮高傳行成筆	一卷	東京府東京市澁橋區下落合一丁目	公爵近衛文麿
紙本墨書八雲御抄 <small>(卷第三、四、五、六、內卷第五補寫)</small>	四帖	同	上	彩箋墨書古今集卷第十八斷簡 <small>(本阿(うためし)の刻るとき)</small>	一葉	同	同
紙本墨書中御門天皇宸翰御懷紙 <small>(詠離菊露芳和哥)</small>	一幅	同深澤町四丁目	長尾欽彌	彩箋墨書藤原師實家集斷簡 <small>(康平四年三月四日)</small>	一幅	同	同
紙本墨書和漢朗詠集斷簡 <small>(戊辰切)(立秋)</small>	一幅	同野澤町二丁目	安藤兵部	紙本墨書齋院歌合 <small>(題九月十三夜)(二條切)</small>	一幅	同	同
彩箋墨書三寶繪斷簡 <small>(東大寺切)(さすつきの)</small>	一幅	同	上	紙本墨書藤原基俊筆和漢朗詠集卷下斷簡 <small>(多賀切)</small>	一幅	同	同
紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙 <small>(秋淺き)</small>	一幅	同澁谷區千駄ヶ谷三丁目	和田壽次郎	紙本墨書千載集卷第十五斷簡 <small>(日野(月もい)まはの)</small>	一幅	同	同
紙本墨書後柏原天皇宸翰假名御消息 <small>(たはいま)</small>	一幅	同	男爵水谷川忠磨	紙本墨書藤原定家筆詠草 <small>(泊瀬山)</small>	一幅	同	同
紙本墨書後奈良天皇宸翰年賀御消息 <small>(誠新賜)(の佳光)</small>	一幅	同	上	紙本墨書猿丸集	一帖	同	同
紙本墨書正親町天皇宸翰御懷紙 <small>(九日詠新菊有餘)(芳和哥御名アリ)</small>	一幅	同	上	紙本墨書後奈良天皇宸翰御短冊 <small>(五十枚)</small>	一帖	同	同
紙本墨書後水尾天皇宸翰朗詠詩歌 <small>(嘉長令月)</small>	一幅	同	上	紙本墨書後西天皇宸翰藤原定家像御贊	一幅	同	同
紙本墨書後水尾天皇宸翰御消息 <small>(御書中)</small>	一幅	同	上	紙本墨書明正天皇宸翰御懷紙 <small>(つろはて)</small>	一幅	同	同
紙本墨書後水尾天皇宸翰御手鑑 <small>(三十二葉)</small>	一帖	同	上	紙本墨書靈元天皇宸翰御懷紙 <small>(詠園深菊淡菜和歌)</small>	一幅	同	同
紙本墨書後西天皇宸翰年賀御消息 <small>(御花押)</small>	一幅	同	上	紙本墨書朝忠集	一帖	同	同
紙本墨書後西天皇宸翰御消息 <small>(御花押)</small>	一卷	同	上	絹本着色後西天皇宸翰御贊定家雅經詠歌圖	二幅	同	同
紙本墨書後西天皇宸翰御消息 <small>(御花押)</small>	一卷	同	上	紙本墨書大般若經卷第五百卅二 <small>(藥師寺經)</small>	一卷	同	同
紙本墨書後西天皇宸翰御消息 <small>(御花押)</small>	一幅	同	上	紙本墨書法集經卷第四	一卷	同	同
紙本墨書後西天皇宸翰御消息 <small>(御花押)</small>	一卷	同	上	紙本墨書陀毗達磨品類足論卷第八	一卷	同	同
紙本墨書後西天皇宸翰御消息 <small>(御花押)</small>	一冊	同	上	紙本墨書根本說一切有部苾芻尼毗奈耶卷第四殘卷	一卷	同	同
紙本墨書靈元天皇宸翰御消息 <small>(二月五日)(御花押)</small>	一幅	同	上	<small>(天平十二年五月一日光明皇后御願經)</small>	一卷	同	同
紙本墨書靈元天皇宸翰御消息 <small>(御花押)</small>	一幅	同	上	紙本墨書後陽成天皇宸翰六字名號	一幅	同	同
紙本墨書靈元天皇宸翰御消息 <small>(御花押)</small>	一幅	同	上	紙本墨書朗詠題詩歌卷下	一卷	同	同
紙本墨書靈元天皇宸翰御消息 <small>(二月四日)(御花押)</small>	一幅	同	上	紙本墨書大般若經卷第一百九十一 <small>(藥師寺經)</small>	一卷	同	同
靈元天皇宸翰御贈答御消息 <small>(三月十三日)</small>	一幅	同	上	紙本墨書識廬庵詩並序跋 <small>(文明五年)(龍澤筆十五僧筆)</small>	一幅	同	同
紙本墨書千字文斷簡 <small>(葉珍李案ノ四字)(堅持雅操云々ノ二十字)</small>	二葉	同	上	紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙 <small>(海邊時雨、山家落葉、寄夢、檜都)(御花押アリ)</small>	一幅	同	同
紙本墨書孫過庭書譜斷簡 <small>(五十知命云々)</small>	一葉	同	上	紙本墨書著到懷紙 <small>(雪中興遊)</small>	一幅	同	同
紙本墨書白氏文集陰山道斷簡 <small>(傳道風筆)</small>	一葉	同	上	紙本墨書源氏物語 <small>(幻)(河内本、册子改装本)</small>	一卷	同	同
紙本墨書白氏文集湖底松斷簡 <small>(傳道風筆)</small>	一葉	同	上	紙本墨書後西天皇宸翰古歌御懷紙 <small>(淺茅生)</small>	一幅	同	同
絹本墨書白氏文集蠻子朝斷簡 <small>(傳佐理筆)</small>	一葉	同	上				

紙本墨書後西天皇宸翰古歌御懷紙(秋きりの)
一幅 大阪府大阪市天王寺區生玉町 竹田儀一

紙本墨書大般涅槃經卷第十六(敦煌本)
一卷 同 上 短刀銘 來國次

紙本墨書後土御門天皇宸翰御懷紙(雁似梅葉、菊花)
一葉 兵庫縣神戸市林田區東尻池町一丁目 伯爵 山科言泰

紙本墨書正親町天皇宸翰御懷紙(七夕迎夜)
一葉 同 上 短刀銘 貞治六年八月日

紙本墨書陽光院御筆御懷紙(初秋朝、行路菘、鹽屋燦)
一葉 同 上 短刀銘 貞治六年八月日

刀 劍 之 部

太刀銘 安綱
一口 山形縣鶴岡市家中新町 伯爵 酒井忠良

短刀銘 備中國住守次作
一口 同西村山郡大谷村 鈴木清助

太刀銘 備前助行
一口 同北村山郡摺岡町 原田敏雄

刀無銘 傳青江
一口 茨城縣新治郡土浦町 石川清晴

刀銘 繁慶
一口 東京府東京市芝區三田四國町 池貝庄太郎

太刀銘 信包
一口 同麻布町鳥居坂町 男爵 岩崎小彌太

太刀銘 重恆
一口 同 上 短刀銘 則重

太刀銘 備前國宗安
一口 同 上 太刀銘 則重

太刀銘 眞口(眞守)
一口 同 上 太刀銘 光忠

刀 金象嵌銘 一文字 木阿(花押)
一口 同 上 太刀無銘 傳一文字

太刀銘 雲生
一口 同 上 太刀銘 國宗

太刀銘 守家造
一口 同 上 太刀銘 來保太郎作

太刀銘 備州長船住景光
一口 同 上 太刀銘 (花押)正應五口辰八月十三日以下不明

太刀銘 爲次
一口 同 上 刀折返銘 備中國住次直

刀銘 肥後守藤原輝廣作
一口 同赤坂區青山北町一丁目 林田昭慶

刀銘 兼定 武田左京大夫信虎所持
一口 同四谷區大番町 末永一三

太刀銘 正恆
一口 同牛込區市谷仲ノ町 男爵 深尾隆太郎

太刀銘 正安二年八月六日吉光
一口 同矢來町 大橋不二雄

太刀銘 國吉
一口 同 上 太刀銘 爲清

短刀銘 相模國住人廣光
一口 同小石川區水道町 三井高修

太刀銘 國綱
一口 同第六天町 子爵 松平保男

太刀銘 國清
一口 東京府東京市品川區五反田五丁目 齋藤茂一郎

短刀銘 來國次
一口 同 上 同目黒區下目黒三丁目 内田かめ

短刀銘 豐州高田莊藤原友行作
貞治六年八月日
一口 同世田谷區上馬町二丁目 子爵 丹羽長徳

太刀銘 國行
一口 同澁谷區千駄ヶ谷一丁目 公爵 徳川家達

太刀銘 來國俊
一口 同 上 太刀銘 來國光

刀無銘 傳來國光
一口 同 上 刀無銘 傳來國光

太刀銘 國宗
一口 同原宿二丁目 同 上

太刀銘 包平
一口 同中野區本町通六丁目 子爵 稻葉順通

刀無銘 傳來國光
一口 同 上 刀無銘 傳來國光

太刀銘 景安
一口 同 上 太刀銘 備前國住人景安作

太刀銘 則重
一口 同 上 短刀銘 則重

太刀銘 光忠
一口 同 上 太刀銘 光忠

太刀無銘 傳一文字
一口 同 上 太刀銘 國宗

太刀銘 來保太郎作
一口 同 上 太刀銘 (花押)正應五口辰八月十三日以下不明

刀折返銘 備中國住次直
一口 同 上 刀折返銘 備中國住次直

太刀銘 包次
一口 同 上 太刀銘 光忠

太刀銘 光忠
一口 同 上 刀銘 本件長義天正十八年庚寅五月三日ニ九州日向住國廣刀銘行云々

太刀銘 備前國長船住景光造
一口 同 上 太刀銘 備前國長船住守家

太刀銘 爲清
一口 新潟縣新潟市本町通七番町 同 上

太刀銘 順慶
一口 石川縣金澤市十間町 石黒久呂

太刀銘 國安	山口縣南巨摩郡身延町	男爵 南部日實
刀折返銘 有國	愛知縣名古屋市中區南桑名町二丁目	中澤保三
太刀銘 行秀	同一宮本市町通七丁目	森傳吉
太刀銘 一助則	滋賀縣蒲生郡鏡掛村	岡直三郎
刀銘 以兩盤藏於武州江戸越前康繼二ツ册數度末世ノ劍是也本多飛騨守成重	京都府京都市中京區勸學院町	吉田由道
太刀銘 清綱	大阪府大阪市東區清水谷西之町	加島勳
太刀銘 國友造	同天王寺區小宮町	黒川福三郎
太刀銘 國光	同一	同上
太刀折返銘 建武二年四月二日實阿作	同一	同上
短刀銘 平安城住光長 元亨二年二月日	同一	同上
刀無銘 傳來國光	同一	同上
刀額銘 光忠	同浪速區岡町一丁目	花崎源次郎
刀銘 井上義政 延寶三年八月日	同東淀川區野中南通二丁目	住吉朝太郎
太刀銘 來國光	同旭區森小路町	岩崎信次
太刀銘 備州住正廣作	同住吉區天王寺町	太田精一
短刀無銘 傳貞宗 附 小脇指拵	同岸和田市野田町	山本賢三
刀銘 國安	同中河内郡曙川村	柏原仁兵衛
太刀銘 世安	同一	同上
刀無銘 志津系)	兵庫縣神戸市林田區小松通五丁目	江口功
太刀銘 眞長	同葦合區籠池通五丁目	木村岩五郎
刀折返銘 則房	同武庫郡御影町	嘉納健治
太刀銘 來國俊	同精道村	瀬戸保太郎
太刀銘 國繼	同赤穂郡相生町	濱本彌七郎
刀銘 長曾爾與里人道虎徹	香川縣綾歌郡坂出町	津島惣平
刀銘 津田越前守助廣 延寶七年二月日	熊本縣熊本市新屋敷町	長野友博
太刀銘 相模國住人佐衛 文和二年以下切	同大江町	川端正修

工藝品及考古學資料之部

銅製五銖鈴梵天帝釋天四天王ノ像アリ	一口	長野縣南佐久郡北牧村	諏訪社
伊豫札黒韋威胴丸及大袖 附十二間阿古陀形兜鉢一頭	一領	奈良縣奈良市春日野町	玉井久次郎
石造燈籠 火袋ニ天人ヲ刻ス	一基	大阪府大阪市東區今橋二丁目	大府大坂市東區今橋二丁目十七番地
石造燈籠 火袋ニ佛像ヲ刻ス	一基	男爵 鴻池善右衛門	同南區五里町三番町六十八番地
石造燈籠 中臺ニ獅子ヲ刻ス	一基	同	同上
石造寶塔(別宮社國東塔) 正應三季庚寅十二月一日ノ刻銘アリ	一基	大分縣國東郡伊美村別宮社	大分縣國東郡伊美村別宮社境内
石造寶塔(熊野墓地國東塔) 應安八天乙卯麥路上旬ノ刻銘アリ	一基	同西國東郡田染村	同西國東郡田染村大字野字近道四百十四番地
石造寶塔(財前墓地國東塔) 元應第三記歲次庚酉ノ刻銘アリ	一基	井堀才市外十二名	同出原丁大字小野字由原河内千六百九番地
石造寶塔(石丸區國東塔) 元徳二年庚午十月ノ刻銘アリ	一基	財前博總	同大字石丸字野田千三百七十番地

昭和十四年度重要美術品資格消滅

文部省告示第三百二十八號 昭和十四年五月二十七日

重要美術品等認定物件中左記ハ國寶保存法第一條ニ依リ本日國寶ニ指定セラレタルヲ以テ其ノ認定物件タル資格ハ消滅セリ

認定告示	同上	品目	同上	所有者
紙本著色松巒古田能村竹田筆 昭和八年文部省告示第二百七十四號 癸巳孟夏廿九日ノ年記アリ	一幅	寺圖	東京府東京市世田谷區深澤町四丁目	長尾欽彌
紙本著色山水圖李在筆	一幅	絹本墨畫山水圖李在筆	同滋谷區原宿三丁目	男爵 團伊能
紙本著色岩佐又岩佐又兵衛筆 附 系圖 手簡	一幅	兵衛畫像	兵庫縣神戸市須磨區西須磨	武岡忠夫
絹本著色夢遊桃安堅筆 李翁等廿二名ノ跋アリ	一卷	源圖	鹿兒島縣鹿兒島市下荒田町	園田才治
紙本墨畫大鏡殘卷	一帖	紙本墨書大鏡殘卷	東京府東京市四谷區南町	千葉胤明

昭和八年文部省告示
 昭示第二百七十四號
 短刀銘 備中國住次直作
 延文三年十二月日
 一口 東京府東京市麴町區水田町二丁目 伯爵 伊東巳代治

同
 短刀銘 備中國住次直作
 延文三年十一月日
 一口 同品川區大井林町 伯爵 伊達興宗

同
 短刀銘 左安吉(名物)柳安吉
 一口 同日黒區駒場町 侯爵 前田利爲

同
 太刀銘 助真
 一口 同淀橋區戸塚町二丁目 伯爵 南部利英

同
 太刀銘 正恆
 一口 同豐島區高田本町二丁目 子爵 有馬純尙

同
 樂燒壽老圖六角皿 尾形乾山作
 尾形光琳畫
 一枚 同麴町區下二番町 男爵 大倉喜七郎

同
 陶製色繪吉野山圖茶壺野村仁清作
 一口 同麻布區島居坂町 男爵 岩崎小彌太

同
 磁製繪鳳凰文樣德利右衛門作
 一箇 同 上

同
 紙本墨書古今和(高野切木)
 歌集卷第五
 一卷 同 富太郎

同
 蘆手繪料紙墨書和漢朗詠抄
 永應元年四月世尊寺住持筆
 二卷 同 上

昭示第八年文部省告示
 昭示第三百十二號
 太刀銘 國資
 一口 東京府東京市沈橋區下落合一丁目 井手 德一

昭示第九年文部省告示
 昭示第三百一號
 紙本著色遊樂圖六曲屏
 一雙 新潟縣中蒲原郡金津村 中野忠太郎

同
 太刀銘 吉家作
 一口 東京府東京市品川區五反田六丁目 公爵 島津忠重

同
 青磁砧形花生
 一箇 同上大崎三丁目 侯爵 徳川頼貞

昭示第九年文部省告示
 昭示第三百五號
 短刀 朱銘 志津(名物稻葉志津) 本阿花押
 一口 同赤坂區福吉町 侯爵 黒田長成

昭示第十年文部省告示
 昭示第九十一號
 紙本墨畫維摩居士圖尾形光琳筆
 一幅 同小石川區鎌司ヶ谷町 保 阪 潤 治

同
 紙本著色山水圖 青木米來筆 題山陽ノ贊アリ
 一幅 同世田谷區深澤町四丁目 長 尾 欽 彌

昭示第十年文部省告示
 昭示第二百六十九號
 太刀 菊御作
 一口 同澁谷區千駄ヶ谷二丁目 侯爵 松平 康 昌

同
 太刀銘 長光
 一口 同 上

同
 陶製色繪雄香爐仁清作
 一箇 石川縣金澤市堅町 山川 庄 太郎

昭示第十年文部省告示
 昭示第四百二十一號
 紙本著色伊勢物語繪卷
 一卷 同 區本牧町 原 富 太郎

同
 絹本著色羅漢圖 蔡山筆 奉三寶弟子石兵衛 督源直義拾人トア
 一幅 同 原 善 一郎

昭和十四年度史蹟指定

文部省告示第八十六號 昭和十四年三月七日

第一類 史蹟
 住吉行宮跡 大阪府大阪市住吉區千鉢町 一〇番内實測百二十四坪、一〇番ノ二ノ一、一〇番ノ一四

文部省告示第四百十號 昭和十四年九月七日

第一類 史蹟
 明治天皇皇華嚴瀑御親覽御野立所 栃木縣上都賀郡日光町大字中宮祠宇二荒山、二四八〇番 二荒山神社中宮祠壇内内實測八十二坪一合七勺
 明治天皇中茶屋御野立所 同 二四七八番 二荒山神社中宮祠壇内内實測六十七坪一合
 明治天皇大田原御小休所 同那須郡大田原町字南町 一九〇五番ノ二内實測五十六坪一合
 明治天皇遊民行在所 岩手縣岩手郡遊民村大字遊民第拾貳地割 五七番内實測百八十坪六合

文部省告示第四百五十一號 昭和十四年十一月三十日

四九番至一八〇番、一八〇番ノ一、
自一八一番至一八三番、一八九番、
二〇四番、二〇六番、二〇七番、
自二一三番至二三三番、二三四番
ノ一、二三九番、自二四九番至二
七〇番

名	第一類	史蹟	名	地	番	名	地	番
舊二條離宮 (二條城)	京都市中京區二 條通堀川西入二條城町	五四一番	城	二七八號	江陵烏竹軒	一棟	江原道江陵郡丁洞面竹軒里	江陵邑大和 瀧澤
二條城之二九庭園	京都市中京區二 條通堀川西入二條城町	五四一番內四千八百十五坪	城	第二七九號	信川明倫堂	一棟	黃海道信川郡信川文廟境內	信川郡學校財產
名	稱	地	名	番	名	地	番	名
名	稱	地	名	番	名	地	番	名

昭和十四年度朝鮮寶物及古蹟指定

朝鮮總督府告示第八百五十七號 昭和十四年十月十八日

寶物

指定番號	名	稱	品數	所在地	所有者	番號	名	地	番
第二九七號	京城社稷壇表門	一棟	京畿道京城府社稷町一番地ノ二七	國	傳燈寺	第三二七號	義城觀德洞石獅子	四軀	慶尚北道義城郡丹村面觀德洞八八九番地
第二九八號	傳燈寺大雄殿	一棟	京畿道江華郡吉祥面傳燈寺境內	國	傳燈寺	第三二八號	清道珀谷洞石造釋迦如來坐像	一軀	慶尚北道清道郡錦川面珀谷洞六五三番地
第二九九號	傳燈寺藥師殿	一棟	京畿道江華郡吉祥面傳燈寺境內	國	傳燈寺	第三二九號	松廣寺妙法蓮華經	一冊	全羅南道順天郡松光面松廣寺
第三〇〇號	神勒寺神師堂	一棟	京畿道驪州郡北面神勒寺境內	國	神勒寺	第三三〇號	觀世音菩薩普門品	一冊	全羅南道順天郡松光面松廣寺
第三〇一號	長谷寺下大雄殿	一棟	忠清南道青陽郡大峙面長谷寺境內	國	長谷寺	第三三一號	松廣寺大乘阿毘達磨雜論疏	一冊	全羅南道順天郡松光面松廣寺
第三〇二號	安東文廟	一七點	慶尚北道安東郡安東邑安寧里三四二番地ノ一	國	安東郡學校財產	第三三二號	松廣寺妙法蓮華經	一冊	全羅南道順天郡松光面松廣寺
第二六九號	安東柳氏文書	一棟	慶尚北道安東郡豐川面河回洞	國	柳承祐	第三三三號	疏開玄鈔	一冊	全羅南道順天郡松光面松廣寺
第二七〇號	淨水寺法堂	一棟	京畿道江華郡下道面淨水寺境內	國	淨水寺	第三三四號	青磁獅子鈕蓋香爐	一箇	京畿道開城府東本町五番地
第二七一號	法住寺捌相殿	一棟	忠清北道報恩郡俗離面法住寺境內	國	法住寺	第三三五號	雲門寺青銅壺	一箇	慶尚北道清道郡雲門面雲門寺境內
第二七二號	長谷寺上大雄殿	一棟	忠清南道青陽郡大峙面長谷寺境內	國	長谷寺	第三三〇三號	安東臨清閣	一棟	慶尚北道安東郡安東邑新世洞二十番地
第二七三號	觀音寺圓通殿	一棟	全羅南道合城郡火面觀音寺境內	國	觀音寺				
第二七四號	雙峯寺大雄殿	一棟	全羅南道和順郡梨陽面雙峯寺境內	國	雙峯寺				
第二七五號	松廣寺國師殿	一棟	全羅南道順天郡松光面松廣寺境內	國	松廣寺				
第二七六號	晉州蘆石樓	一郭	慶尚南道晉州邑木町	國	晉州寺				
第二七七號	清平寺廻轉門	一棟	江原道春川郡北山面清平寺境內	國	清平寺				

古美術保存

第三〇四號	海州芙蓉堂	一	黃海道海州府北本町一七三番地	國
第三〇五號	江陵海雲亭	一棟	江原道江陵郡丁洞面雲亭里	雲亭里一五六番地 沈相斗
第三〇六號	崇仁殿	一棟	平安南道平壤府下水口里一番地/二	國
第三〇七號	義州南門	一	平安北道義州郡義州邑三〇三番地/三	國
第三〇八號	扶餘長蝦里三層石塔	一基	忠清南道扶餘郡場岩面長蝦里五三六番地	國
第三〇九號	無量寺五層石塔	一基	忠清南道扶餘郡外面無量寺境內	無量寺
第三一〇號	慶州南山茸長寺谷三層石塔	一基	慶尙北道慶州郡內南面茸長里山一番	國
第三一一號	慶州南山茸長寺谷佛塔	一基	慶尙北道慶州郡內南面茸長里山一番	國
第三一二號	義城觀德洞三層石塔	一基	慶尙北道義城郡丹村面觀德洞八八九番地	國
第三一三號	松林寺五層石塔	一基	慶尙北道漆谷郡東面松林寺境內	松林寺
第三一四號	居頓寺圓空國師勝妙塔	一基	京畿道京城府南米倉町二〇二番地	京畿道京城府南米倉町二〇二番地 和正稔
第三一五號	法泉寺智光國師玄妙塔碑	一基	江原道原州郡富論面法泉里山七四番地/二	國
第三一六號	普賢寺朗圓大師悟眞塔	一基	江原道江陵郡城山面普賢寺境內	普賢寺
第三一七號	普賢寺朗圓大師悟眞塔碑	一基	江原道江陵郡城山面普賢寺境內	普賢寺
第三一八號	雲門寺金堂前石燈	一基	慶尙北道清道郡雲門面雲門寺境內	雲門寺
第三一九號	扶餘石槽	一箇	忠清南道扶餘郡扶餘面朝鮮總督府博物館扶餘分館	國

指定番號	名稱	古蹟指定	所在地	土地所有者
第八八號	幸州山城	京畿道高陽郡知道面幸洲內里	幸洲內山二六番林野五段四畝	幸洲內里張世永
			幸洲內里二七番林野四段六畝	金浦郡陽東面木洞里三八四番地大谷健介
			幸洲內里二八番林野五段三畝	幸洲內里張世永
			幸洲內里山二九番林野一町九段三畝	幸洲內里七〇張台鎮
			幸洲內里山三番林野七段八畝	坡州郡青石面多山里九九番地閔華植
			幸洲內里山三番林野九段一畝	京畿道府南米倉町九九番地林德秀
			幸洲內里山三四番地林野七段九畝	京城府中林町一三四番地李相哲
			幸洲內里山三四番地林野一段九畝	幸洲內里張烜
			幸洲內里山三五番林野二段四畝	幸洲內里一三八番地池成伯
			幸洲內里山三六番林野二畝	坡州郡青石面多山里九九番地閔華植
			幸洲內里山三七番林野二畝	坡州郡炭縣面吾令里金柱漢
			幸洲內里山三八番林野四段	幸洲內里徐成實

指定番號	名稱	古蹟追加指定	所在地	土地所有者
第二八號	公州公山城	忠清南道公州郡公州邑山城町玉龍里、錦城里	山城町一番林野三、一六〇坪/內二六八坪	忠清南道
			山城町二番林野一五三坪	公州邑本町
			山城町一六八番/一林野三、三六四坪	忠清南道
			玉龍里三六〇番林野六、〇五二坪/內一、〇四四坪	國
			玉龍里三八〇番林野八、一三七坪/內一、六四〇坪	公州邑本町三三九/二
			玉龍里三八一番林野三、二九坪	公州邑本町

指定番號	名稱	古蹟指定	所在地	土地所有者
			玉龍里三八二番田四二五坪	公州邑大和町六〇金震泰
			玉龍里三八三番田二六三坪/內五六坪	公州邑本町六八金永根
			玉龍里三八八番林野六六五坪/內八〇坪	公州邑本町金判吉
			玉龍里四〇八番林野八、六二〇坪	忠清南道
			錦城里一番林野三、三一〇坪	忠清南道
			錦城里三番田一八六坪	國
			錦城里四番林野七九〇坪	忠清南道
			錦城里五番林野八五坪	公州邑常盤町
			錦城里六番田二〇四坪	國

第八九號 南漢山城

京畿道廣州郡中
 南面、丹袋里、
 尾里、谷里、西
 面上、司倉里

幸洲內里山三九番 一町六段四畝	幸洲內里山四〇番 二段六畝	幸洲內里山四一 二町七段五畝	幸洲內里山四二番 三段九畝	幸洲內里山四三番 一段五畝	幸洲內里山四四番 一町四段九畝	幸洲內里山四五番 九畝	幸洲內里山四六番 一林野 一町一段九畝	幸洲內里山四六番 一林野 一町四段四畝	山城內里一 城 二町 八畝	山城內里二番 一林野 三町二段四畝	山城內里三番 二林野 七段六畝	山城內里四番 三林野 一段二畝	山城內里五番 一林野 町六段九畝	山城內里六番 二城 九段五畝	山城內里七番 三林野 町六段三畝	山城內里八番 一城 七段七畝	山城內里九番 二林野 五畝	山城內里一〇番 二城 町三段八畝	山城內里一〇番 三城 町一段二畝	山城內里一〇番 四城 町八段一畝	山城內里一〇番 五城 町二段二畝	山城內里一〇番 六城 町二段二畝	山城內里一〇番 七城 町二段二畝						
江華郡仙源面煙里七一三番 地權	朴寅善	京城府龍江町二五六番地 張敬一	幸洲內里七四番地 徐錫範	幸洲內里 金聖雲	幸洲內里四〇番地 金龍顏	幸洲內里二六九番地 李淳	幸洲內里二六九番地 李淳	幸洲內里二六九番地 李淳	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國	國

第九〇號 扶餘羅城

忠清南道扶餘郡
 石陵山、佳里、
 舊木里、雙北里、
 軍守里、東南里

山城內里八一五番 二一塔坪	黔伏里山一 城 六段	黔伏里山二 城 六段	黔伏里山一 二五番 城 二段一畝	黔伏里山一三三七 林野 一町四段六畝	黔伏里山一四二番 林野 七段七畝	黔伏里山一八八番 二林野 六段六畝	奎尼里山一七二番 一林野 一八町五段六畝	丹塗里山三番 城 三段三畝	上山谷里山二六八番 二城 四段 二町一段四畝	上谷里山九七番 林野 二町一段四畝	鹽倉里五六五番 林野 三五五二坪	鹽倉里山一 林野 一町五段三畝	鹽倉里山七 林野 四町四段五畝	鹽倉里山四 田 二二五坪	鹽倉里山四八番 田 六五五坪	鹽倉里山六六番 林野 一町三段一畝	鹽倉里山六七番 林野 四段一畝	佳塔里二 番 一、二 三九坪	佳塔里七 番 田 八二坪	佳塔里九 番 一、七 八六坪	佳塔里山五番 一林野 一町九段二畝	石木里八二番 田 五七坪
國	國	國	國	國	國	國	奎尼里 兪致駿 外七五人	國	國	國	鹽倉里	國	國	國	國	國	國	中井里 鄭南秀	中井里 崔相赫	中井里 閔泳	東南里 鄭在元	石木里二四五番地 鄭濟謨

山城內里五三二番地
 石瓊換外三〇二人

石木里八三番 田 三八	石木里一五七番地	藤野里一三〇番ノ二林	保寧郡大川而東袋里
石木里八四番 田 三三	石木里二四番地	藤野里一三一番 田 二	保寧郡大川而東袋里
石木里八五番ノ一林野	石木里二二四番地	藤野里一三五番 林野	保寧郡大川而東袋里
一〇四二坪	石木里二二四番地	二〇二〇坪	保寧郡大川而東袋里
石木里八八番 田 七八	石木里八六番地	藤野里一四五番 田 四	保寧郡大川而東袋里
六坪	石木里	二坪	齊賀一由藏
石木里二四一番 林野	石木里	藤野里一四六番 田 一	窺岩面窺岩里一五五番地
一一〇九二坪	石木里	八七坪	佐久間靜治
石木里二四六番 田 二	官北里四四番地	藤野里一八四番ノ一林野	窺岩里八六番地
〇六坪	金 圭 泰	四三七五坪	徐 炳 勳
石木里二四七番 田 一	東京市麴町區內幸町一丁目二番地	藤野里一九六番 幕 一	東南里
八七坪	東京市麴町區內幸町一丁目二番地	七六坪	金 光
石木里二五五番ノ一番	東京市麴町區內幸町一丁目二番地	藤野里一九七番 幕 九五	窺岩里八六番地
二〇四坪	東京市麴町區內幸町一丁目二番地	六坪	徐 炳 勳
石木里二五五番ノ二田	石木里	藤野里二五番ノ一林	牙山郡仁川面幸元里
九〇坪	石木里	藤野里二五番ノ一林	張 岐 煥
石木里二五七番 田	官北里六〇	藤野里二六番 田 二	扶餘面
一六八九坪	南 宮 權	六四二六坪	窺岩面外里一三五番地
石木里三一八番 田 六	南 宮 權	藤野里二三八番 林野	窺岩面外里一三五番地
二坪	石木里	藤野里二三八番 林野	峴田富三郎
石木里三三五番 田 二	中井里二六六番地	藤野里二五番ノ一林	窺岩面外里一三五番地
九五坪	任 三 成	野三、五八三坪	窺岩面外里一三五番地
雙北里三五三番 林野	雙北里	野守里二〇九番ノ三	窺岩面外里一三五番地
四〇八坪	李 象 容	野守里一、〇八三坪	窺岩面外里一三五番地
雙北里三五六番ノ一林	雙北里三六〇番地	野守里二四番ノ一林	窺岩面外里一三五番地
野一、〇九五坪	林 宅 洙	野守里四、四一坪	窺岩面外里一三五番地
雙北里三九〇番 田 二	全羅北道益山郡王宮而東龍里	野守里二五番ノ一林	窺岩面外里一三五番地
五九坪	全羅北道益山郡王宮而東龍里	野守里九九五坪	窺岩面外里一三五番地
雙北里三九五番 林野	宋 淳 泰	四九坪	窺岩面外里一三五番地
八六二坪	宋 東 植	軍守里三三七番 田 一	窺岩面外里一三五番地
雙北里三九六番ノ二林	雙北里	軍守里三三八番ノ一田	窺岩面外里一三五番地
野七一坪	金 鳳 益	一〇三八坪	窺岩面外里一三五番地
雙北里三九七番 林野	草村面松丁里	軍守里三三八番 林野	窺岩面外里一三五番地
一、六二三坪	李 敏 甲	軍守里三三七番 田 五	窺岩面外里一三五番地
雙北里一〇七番 幕 一	雙北里	軍守里三三七番 田 五	窺岩面外里一三五番地
七三坪	金 濤 培	軍守里三七三番 田 五	窺岩面外里一三五番地
藤野里一六番 林野	金	一五坪	窺岩面外里一三五番地
九〇二坪	國	軍守里三七四番 林野	窺岩面外里一三五番地
藤野里一九番 林野	藤野里	一五坪	窺岩面外里一三五番地
二四九坪	羅 先 鳳	軍守里三九九坪	窺岩面外里一三五番地

第九一號 扶餘青山城

忠清南道扶餘郡
扶餘面雙北里

軍守里三七七番林野
二五四坪

軍守里四一二番 林野
一三六五坪

軍守里四一三番ノ二田
八一九坪

軍守里四二三番 田三
三六坪

雙北里六番 林野 三五
五七坪

雙北里四〇九番ノ一林
野 四七〇八坪

雙北里四〇九番ノ二林
野 一五六〇坪

雙北里四二一番 林野
一四六五〇坪

芝嶺里山一〇番 林野
二町四段五畝

芝嶺里山一一番ノ一林
野 五町五段六畝ノ内四
段六畝

虎岩里山二番 林野 五町
八段六畝ノ内八段

虎岩里山三番 林野 七
段三畝

虎岩里山四番ノ一 林野
二町一段

虎岩里山四番ノ二 林野
二町九段二畝

虎岩里山五番 林野 七
段二畝

虎岩里山六番 林野 一
町四段七畝

虎岩里山七番 林野 一
町二段四畝

虎岩里一八七番 番 二
六坪

竹村里山一三番ノ林野
一五町六段八畝ノ内二町
三段

竹村里山一四番 林野
一段七畝

永嘉里山二番 林野 二三
町三段三畝ノ内三段

軍守里 鄭 在 夏

窺岩面外里一五番地 堀田 富三郎

軍守里 鄭 淳 根

窺岩面外里二五番地 堀田 富三郎

國 扶餘面宮北里八一番地 大東 亮太郎

國 國 國 國

國 國 國 國

國 國 國 國

國 國 國 國

舒川郡鄉校財産 韓山李氏宗中

京城市壽松町 李容植 外五名

虎岩里一九五番地 鳳 樓 寺

永嘉里一七番地 李 政 植

韓山面長橋里 李 範 珪

京城府壽松町九一番地 韓山李氏宗中

京城市龜町區内山下町一ノ
一 東洋拓殖株式會社

京城府壽松町九一番地 韓山李氏宗中

竹村里韓山李氏家中 韓山李氏宗中

竹村里韓山李氏家中 韓山李氏宗中

京城府壽松町九一番地 韓山李氏宗中

京城府壽松町九一番地 韓山李氏宗中

第九三號 高靈主山城

慶尙北道高靈郡
高靈面中化洞、
延詔洞、
池山洞

永嘉里山五番 林野 四
段九畝

永嘉里山六番 林野 三
段三畝

永嘉里山七番 林野 一
段三畝

中化洞山三番 林野 七
町五段二畝

中化洞山七番ノ一林
野 四町五畝一〇步ノ内七
町六段六畝一九步

快賓洞山三七番 林野
五段二畝

快賓洞山三八番 林野
三町六畝

快賓洞山三九番 林野
九町八畝

快賓洞山四三番 林野
三段二畝

延詔洞山一番 林野 四
段四畝

延詔洞山二番 林野 二
段

延詔洞山三番 林野 七
町二段四畝

延詔洞山四番 林野 一
四町五段六畝

延詔洞山八番 林野 二
町四段四畝

延詔洞山九番 林野 九
町三畝

延詔洞山一〇番 林野
八段八畝

延詔洞一五番 田 七四
二坪

延詔洞一六番 田 三〇
三坪

延詔洞二三番 林野 一
〇六坪

延詔洞二八番 田 二四
六坪

永嘉里一七 李 政 植

馬山面新橋里二〇八番地 李鏡洛 外三名

永嘉里一七番地 李 政 植

延詔洞 徐 再 禹

延詔洞 徐 點 模

古衙洞 俞 炳 泰

快賓洞 高靈學校組合

快賓洞 李 淳 桓

古衙洞二〇番地 俞 夢 龍

古衙洞二〇番地 俞 夢 龍

高靈面 高靈學校組合

快賓洞 俞 演 植

金泉郡釜項面下堂洞 高靈公立尋常小學校

延詔洞 李 正 烈

延詔洞二五九番地 徐 點 模

快賓洞五二番地 李 尙 淵

軒門洞 金 海 龍

快賓洞 李 鳳 周

快賓洞 李 鳳 周

快賓洞 李 鳳 周

快賓洞 李 鳳 周

延沼洞二九番 田五〇 軒門洞 趙且萬

延沼洞三〇番 田二四 軒門洞三〇九番地 朴琪柴

延沼洞五五六番 田五 延沼洞 高靈郡學校財產

延沼洞五五八番 林野 延沼洞 高靈郡學校財產

延沼洞六一〇番 林野 延沼洞 高靈郡學校財產

池洞山三五番 林野三町 軒門洞三〇九番地 朴榮甲

池洞山五四番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山五五番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山五六番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山五八番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山五九番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山六〇番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山七八番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山七九番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山八〇番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山八二番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山八四番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山八六番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山八八番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山九〇番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山九二番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山九四番 林野 池山洞 高靈郡學校費

池洞山九六番 林野 池山洞 高靈郡學校費

勿禁里山四〇番 林野 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山四四番 林野 金海郡右都面新明里 李武益

勿禁里山四六番 林野 勿禁里 劉輔網

勿禁里山四七番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山四八番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山四九番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山五〇番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山五一番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山五二番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山五三番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山五四番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山五五番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山五六番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山五七番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山五八番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山五九番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山六〇番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山六一番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山六二番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山六三番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山六四番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山六五番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山六六番 林野 勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

第九四號 大邱達城

慶尙北道大邱府 達城町

達城町二九四番 林野 大邱府市場北道七番地 戶倉貴一

達城町二九四番 林野 大邱府市場北道七番地 戶倉貴一

達城町二九四番 林野 大邱府市場北道七番地 戶倉貴一

達城町二九四番 林野 大邱府市場北道七番地 戶倉貴一

達城町二九四番 林野 大邱府市場北道七番地 戶倉貴一

達城町二九四番 林野 大邱府市場北道七番地 戶倉貴一

達城町二九四番 林野 大邱府市場北道七番地 戶倉貴一

達城町二九四番 林野 大邱府市場北道七番地 戶倉貴一

達城町二九四番 林野 大邱府市場北道七番地 戶倉貴一

第九五號 勿禁甌山城

慶尙南道梁山郡 勿禁面勿禁里住 村里會山里

勿禁里山三六番 林野 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山三七番 林野 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山三八番 林野 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山三九番 林野 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里山四〇番 林野 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

勿禁里三八三番地 朝鮮レヨン株式會社

慶尙南道昌寧郡
昌樂面玉泉里

玉泉里山三二番 林野
一八町七段六畝

國

濟岩里山一〇番ノ二
林野二段四畝

岡山市上下元町二四番地
佐藤健五

會山里七一五番 田二
一〇坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山四〇番
林野七段七畝

倉田山三五番地
金炳杰

會山里七一四番 田一
七二坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山四一番
林野一段六畝

上水口里五二番地
崔有煥

會山里七二三番 田三
三一坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山三九番
林野九段五畝

鏡拜里三〇五番地
方允德

會山里七二二番 田三
四九坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山三七番
林野九畝

清岩里
李孝淑

會山里七二一番 田一
三三坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山三六番
林野九段一畝

清岩里
李孝淑

會山里六九五番 田六
六坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二四番
林野一段七畝

新倉里
金晚奎

會山里六九四番 田三
〇六坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二二番
林野七段七畝

里門里三番地
康元杰

會山里六九三番 田一
八三坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山一九番
林野二段六畝

大同郡林原面魯聖里
康允範

會山里六九二番 墳墓地
九〇坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山一八番
林野一段四畝

大同郡林原面南口里
林文尙

會山里六八七二番ノ一 林
野一六八九坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山一七番
林野七段七畝

嶺山里
韓允泰

會山里六九一八番 田二
一七坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

會山里六九一七番ノ一 林
野一六八九坪

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

會山里六九一六番 墳墓地
二段二畝

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

會山里六九一五番 林野
四町七段一畝

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

會山里六九一四番 林野
四町七段一畝

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

會山里六九一三番 林野
四町七段一畝

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

會山里六九一二番 林野
四町七段一畝

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

會山里六九一一番 林野
四町七段一畝

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

會山里六九一〇番 林野
四町七段一畝

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

會山里六九〇九番 林野
四町七段一畝

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

會山里六九〇八番 林野
四町七段一畝

朝鮮レヨン株式會社
朝鮮レヨン株式會社

濟岩里山二番
林野一段三畝

國
李正輝

第九七號 牧馬山城

慶尙南道昌寧郡
昌寧面松峴洞

松峴洞山五番ノ二 林野
一町九段一畝

國
松峴洞 柳達永

第九八號 盆山城

慶尙南道金海郡
金海邑漁防里

漁防里山四〇番 林野
一畝

國
金海邑府院洞 齋藤與作

第九九號 咸安城山山城

慶尙南道咸安郡
伽耶面廣井里邑
內面槐山里

廣井里及槐山里所在城壁
廣井里山八番 林野 二
町二段二畝

國
上水口里五二番地 崔有煥

第一〇〇號 平壤清岩里城

慶尙南道平壤府
清岩里朔山里龍
興里、箕林里

濟岩里山一八番 林野
一段四畝

國
大同郡林原面魯聖里 康允範

第一〇〇號 平壤清岩里城

慶尙南道平壤府
清岩里朔山里龍
興里、箕林里

濟岩里山一九番 林野
二段六畝

國
大同郡林原面南口里 林文尙

第一〇〇號 平壤清岩里城

慶尙南道平壤府
清岩里朔山里龍
興里、箕林里

濟岩里山二番 林野
七段七畝

國
嶺山里 韓允泰

第一〇〇號 平壤清岩里城

慶尙南道平壤府
清岩里朔山里龍
興里、箕林里

濟岩里山二番 林野
一段三畝

國
李正輝

第一〇〇號 平壤清岩里城

慶尙南道平壤府
清岩里朔山里龍
興里、箕林里

濟岩里山二番 林野
一段三畝

國
李正輝

第一〇〇號 平壤清岩里城

慶尙南道平壤府
清岩里朔山里龍
興里、箕林里

濟岩里山二番 林野
一段三畝

國
李正輝

第一〇〇號 平壤清岩里城

慶尙南道平壤府
清岩里朔山里龍
興里、箕林里

濟岩里山二番 林野
一段三畝

國
李正輝

第一〇〇號 平壤清岩里城

慶尙南道平壤府
清岩里朔山里龍
興里、箕林里

濟岩里山二番 林野
一段三畝

國
李正輝

清岩里山一九番 林野 國
 一町五段四畝
 清岩里山二〇番 林野 清岩里
 一段七畝 許
 清岩里山二一番 林野 國
 七段五畝
 清岩里山二二番 林野 平壤府
 一町六段二畝 栢野里
 清岩里山二四番ノ一 林野 五段一畝 盧炳涉
 林野 五段九畝 平壤府
 清岩里山二五番 林野 平壤府
 五畝
 清岩里山二六番 林野 平壤府
 一段五畝
 清岩里山二七番 林野 平壤府
 四段九畝
 清岩里山二八番 林野 平壤府
 三段 景昌山一〇三番地
 清岩里山二九番 林野 ジエゼイモールカ文鈞翰
 二段五畝 國
 清岩里八〇番 田 八七 上需里一八三番地
 坪 李能實
 清岩里八一番 田 七〇 平壤府
 坪 平壤府
 清岩里八二番 田 九五 平壤府
 坪 平壤府
 清岩里二六番ノ一 林 崙山里
 野三三四坪 李允弘
 清岩里二六番ノ二 林 清岩里二七〇番地 朴正官
 野四三九三坪 京城府安國町六番地
 清岩里二六番ノ三 林 京城府安國町六番地 金裕平
 野七六三坪 平安南道大同郡林原面清湖
 清岩里二七番ノ四 林 里 韓應權
 野一二七二坪 清岩里二六九番地 金仁燧
 清岩里二六番ノ五 林 清岩里二七〇番地 朴基善
 野三四四九坪 野 野 新倉里八五番地 金素淡
 清岩里三四番ノ二 林 野 咸鏡南道三水郡邑館面中里
 野三四七坪 一七〇許吉得
 清岩里三五番 林野
 一八九坪 清岩里二七〇番地
 清岩里三九番 田 二 新倉里八五番地
 〇八三坪 金素淡
 清岩里一九一番 田 一 咸鏡南道三水郡邑館面中里
 七六坪 一七〇許吉得

清岩里一九二番 田 一 清岩里
 三五九坪 杏正輝
 清岩里一九三番 田 一 清岩里一九五番地 李正麟
 〇七坪 李正
 清岩里二六番 堡 二 新倉里八五番地 金素淡
 六七坪 金素
 清岩里三二番 堡 一 清岩里二二七番地 金鉉基
 七五坪 金鉉
 清岩里三七番 田 一 景昌里八三番地 財團法人朝鮮那羅政長
 二四八坪 老會平壤老會維持團 清岩里
 清岩里二五六番 田 三 金寬日
 三七坪 金寬日
 清岩里二五八番 田 三 清岩里 金寬日
 六三坪 金寬日
 清岩里二五九番 林野 清岩里 金寬日
 七八六坪 清岩里一七〇番地 館後里一七〇番地 張志結
 二二坪 張志
 清岩里二六九番 堡 二 清岩里二六九番地 金仁燧
 五五坪 金仁
 清岩里二八四番 堡 一 清岩里二八四番地 表尙疇
 九一坪 表尙
 清岩里二九七番 田 九 清岩里 金周媛
 〇五坪 金周
 清岩里二九九番 林野 清岩里 康泰俊
 一二七八坪 慶上里九二番地 松尾正枝
 清岩里三〇〇番ノ二 林 慶上里九二番地 康泰俊
 野一〇二六坪 清岩里二八七番地 草泰煥
 清岩里三〇〇番ノ三 林 清岩里二八七番地 草泰煥
 野二三三坪 清岩里二八七番地 草泰煥
 野二四坪 清岩里三〇〇番ノ四 林 清岩里二八七番地 草泰煥
 清岩里三〇〇番ノ五 林 南山町三五番地ノ一 草泰煥
 野九坪 洪淳徹 外二人
 清岩里三〇〇番ノ六 林 南山町三五番地ノ一 洪淳徹 外二人
 野一四坪 洪淳徹 外二人
 清岩里三〇〇番ノ七 林 南山町三五番地ノ一 洪淳徹 外二人
 野六八五坪 南山町三五番地ノ一 洪淳徹 外二人
 清岩里三〇〇番ノ八 林 南山町三五番地ノ一 洪淳徹 外二人
 野五七坪 洪淳徹 外二人
 清岩里三〇〇番 田 一 清岩里二八四番地 表尙疇
 四八四坪 表尙疇

清岩里三〇二番 田二
一〇六坪 金 景 厚
清岩里三〇四番 / 一 田 鹽店里一〇七番地
一四〇五坪 安 慶 烈
清岩里三〇五番 / 一 田 南山町三五 / 一
一五九坪 洪淳徹 外二人
清岩里三〇五番 / 三 田 清岩里二二番地
一一七坪 金 龍 祥
清岩里三〇六番 / 一 墳 平安南道大同郡秋乙美面美
草池 三四三坪 林里 裴 英 健
清岩里三〇七番 / 一 林 南山町三五 / 一
野 二六七坪 洪淳湜・洪淳五
清岩里三〇七番 / 二 田 南山町三五 / 一
一一八三坪 洪淳徹 外二人
清岩里三〇七番 / 三 林 倉出里四六番地
野 二六一坪 康 冕 俊
清岩里三〇八番 田 一 清岩里 表 龍 孫
四四三坪 鶴里二二番地
清岩里三〇九番 田 一 金 爽 應
四九九坪 清岩里二二番地
一三〇九坪 金 德 基
清岩里三一一番 / 一 田 清岩里二六九番地
四八二坪 金 允 弼
清岩里三一一番 / 二 田 清岩里 金 周 媛
四七坪 清岩里 金 周 媛
清岩里三一三番 田 一 新倉里二二番地
四七九坪 金 周 媛
清岩里三一四番 田 一 崔 基 勳
三七三坪 清岩里二六九番地
清岩里三一六番 田 二 金 仁 塔
三二四坪 清岩里 李 正 輝
清岩里四一四番 田 六 岡山市上下元町二四番地
三坪 李 正 輝
清岩里四一六番 田 二 岡山市上下元町二四番地
八八坪 佐 藤 健 五
清岩里四一六番 / 一 田 佐 藤 健 五
一〇三坪 南山町三五番地 / 一
清岩里四三四番 / 二 窪 洪淳徹 外二人
三三三坪 洪淳徹 外二人
堀山里三七番 林野 覆町二番地
一町六段四畝 大 西 捨 松

堀山里山三九番 / 三 林 東町一七番地
野 四町三段四畝 江 西 郡 兼 津 而 皮 陽 里 依 山 保 吉
堀山里山四七番 林野 一 黃海道平山郡平山山城里
町四段六畝 朴 昌 燁
堀山里山四八番 / 一 林 水玉里一五〇番地
野 一町三段五畝 林 成 德
堀山里山四八番 / 二 林 京城府新設町 崔 東 鎬
野 七畝 京城府新設町
堀山里山四九番 林野 新倉里一八番地
六段一畝 金 俊 鏞
堀山里山五一番 林野 黃海道殷栗郡殷栗面南川里
一町五段四畝 朴 南 季 外 十一 名
堀山里山五二番 / 二 林 京城府新設町 崔 東 鎬
野 二町一段九畝 國
堀山里山五三番 林野 倉出里二二番地
八畝 金 炳 健
堀山里山五四番 林野 二 南山町三五番地 / 一
段九畝 金 炳 健
堀山里山六七番 林野 一 洪淳徹 外二人
一町六段六畝 南山町三五番地 / 一
堀山里山六八番 林野 一 洪淳徹 外二人
一町三段一畝 洪淳徹 外二人
堀山里山七八番 林野 倉出里二三番地
二段畝九 朴 熙 斗
堀山里山八二番 / 三 林 倉出里二三番地
野 五段五畝 朴 熙 斗
堀山里山八二番 / 四 林 西城里四九番地
野 七段五畝 金 德 三
堀山里山八二番 / 六 林 倉出里二三番地
野 一町八段六畝 朴 熙 斗
堀山里山八三番 林野 平安南道江東郡江東面阿達
五畝 李 應 漢
堀山里 一三九番 田 八 清岩里 李 應 漢
堀山里 一四〇番 田 七 清岩里 徐 孝 俊
七坪 清岩里 徐 孝 俊
堀山里 四四一番 窪 洪淳徹 外二人
〇〇坪 上需里一四番地
堀山里 四六二番 山 三 南山町三五番地 / 一
八八坪 洪淳徹 外二人
堀山里 四六二番 / 一 田 南山町三五番地 / 一
一八八坪 洪淳徹 外二人

沙堂里二三番 田一 長興郡長興面海堂里二七九番地
 六三坪 姜允心
 沙堂里一三八番 田一 沙堂里一六六番地
 一三坪 洪性彦
 沙堂里一三九番 墳墓地 沙堂里
 三〇〇坪 洪淳燦
 水洞里
 沙堂里一五三番 田三 尹致明
 六二坪 沙堂里
 沙堂里二〇番 田二 金大之
 九九坪 沙堂里一六八番地
 沙堂里二五番 田八 曹乘厚
 八三坪 七良面長溪里一四四番地
 沙堂里一六八番 田三 金昌炫
 八一坪 沙堂里一六八番地
 沙堂里二六番 田九 曹乘厚
 四六坪 沙堂里二九番地
 沙堂里三三五番 田五 曹太龍
 三二坪 東京市麴町區内山下町一丁目番地
 沙堂里三六番 田一 東洋拓殖株式會社
 〇六五坪 康津邑南城里二八二番地
 沙堂里三七番 林野 劉理炫
 三三〇坪 康津邑校村里
 沙堂里二八九番 田一 黃宓奎
 一九坪 水洞里八三九番地
 沙堂里二九〇番 田七 東京市麴町區内山下町一丁目番地
 九坪 東洋拓殖株式會社
 沙堂里二九一番 田六 黃鐘旭
 七七坪 沙堂里四八二番地
 沙堂里二九二番 田四 沙堂里四九七番
 〇七坪 黃太洪
 沙堂里二九三番 田 沙堂里四九一番地
 六三坪 黃興奎
 沙堂里二九八番 田一 沙堂里四九一番地
 八〇六坪 張鉉表
 沙堂里三二三番 田六 沙堂里四九八番地
 〇四坪 張今年
 沙堂里五三三番 田九 沙堂里四九八番地
 〇八坪 徐乃鉉
 水洞里三三一番ノ二田 沙堂里四九八番地
 五六三坪 黃鳳旭

水洞里三三三番 林野 海南郡溪谷面新坪里
 三四六坪 曹東奎
 水洞里三六八番ノ一田 水洞里
 四五七坪 尹才鉉
 桂栗里山一五番 林野 寶城郡會泉面泉浦里
 四町五畝 鄭奉玉
 桂栗里山一六番 林野 桂栗里六八七番地
 三町一段九畝 曹義萬
 桂栗里山一九番 林野 七良面水洞里一〇二〇番地
 一町八段六畝 金洙岩
 桂栗里山二〇番 林野 七良面水洞里一〇三番地
 七段九畝 曹圭基
 桂栗里山二七番 林野 曹圭春
 一段九畝 桂栗里 曹南煥
 桂栗里山五三番 林野一畝一五步 大口面
 桂栗里山五七番 林野二町二段 垣浦里
 桂栗里山六五番 林野一町七段九畝 曹文煥
 桂栗里三九番 林野 一〇一坪 鄭炳璿
 桂栗里五五番 田四九六坪 桂栗里 金哲柱
 桂栗里八七番 田三一九坪 桂栗里 黃埤柱
 桂栗里三〇番 田七六三坪 曹權甲
 桂栗里三一番 田六一七坪 桂栗里 孔煥澤
 桂栗里三八番 田六〇三坪 桂栗里三四〇番地 黃埤珪
 桂栗里三九番 田二〇九坪 桂栗里三五一番地 金煥心
 桂栗里一五〇番 田五六八坪 桂栗里二四番地 孔行根
 桂栗里一八四番 田四三九坪 桂栗里 曹明七
 桂栗里八二五番 田三三二坪 桂栗里 曹安煥

柳川里二八七番 田 六	柳川里三三六番地	鎮西里一〇四六番 田 七六七坪	山內面大項里
柳川里二八九番 田 二	柳川里	鎮西里一、一三七番ノ 二田五坪、一六坪ノ内 三三六坪	鎮西里二番地
柳川里二九〇番 田 一	金 正 云	鎮西里二二番地	鎮西里二二番地
柳川里三二二番ノ一林 七六坪	辛 世 源	星州郡龍岩面上新洞八	鎮西里三三〇番地
柳川里三三四番 田 四	辛 世 源	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
柳川里三七七番 田 九	辛 世 源	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三〇番地
鎮西里山五六番 林野 六	崔 延 烈	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
町八段五畝	鎮西里	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里山二二番ノ二林 野四畝	金 大 榮	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里山二二三番 林野 六段四坪	鎮西里	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里山二二三番 林野 五町三段九畝ノ内三段三 畝一〇步	喪 成 三	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里山二二三番 林野 三段一畝	陳 鎭 洪	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里山二二三番 林野 鎮西里山二二三番 林野 六段六畝	鎮西里	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里山一三四番 林野 一町七段四畝ノ内八段	喪 成 三	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里山一三五番 林野 二町三段四畝ノ内一町	鎮西里	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里三一三番ノ二田 六	喪 成 三	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
〇五八坪ノ内三四四坪	入口岩 太郎	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里三三三番ノ二 林野 五二〇坪	鎮西里	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里三三六番 林野 五 〇七畝	金 學 善	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里三四番ノ二田一、 九〇〇坪ノ内二〇四坪	鎮西里	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
鎮西里七三一番 田 五 八〇坪ノ内一九六坪	鎮西里	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地
	崔 再 榮	慶尙北道高靈郡 星山面沙烏洞	鎮西里三三七〇番地

第一一 羅州新村里 全羅南道羅州郡 潘南面新村里

大安里二一八番 田七
 一六坪 大久保綱賀
 大安里二五四番 林野二、
 〇七七坪 大安里 羅 效 漢
 大安里二六一番 林野一、
 一三二坪 大安里 朴 水 贊
 大安里六〇九番 田 四
 八一坪 大安里二六八番地 羅 燾 善
 大安里三四九番地 大 安 里 一 三 九 番 地 鄭 斗 錫
 大安里山四五番 林野六
 段四畝 榮山面榮山里一九八番地 板 谷 省 吾
 新村里七一番 / 三 林野 五九五坪 羅州郡學校費
 新村里二二八番 / 二 林 野 三、二〇三坪 新村里三三二番地 金 正 模
 新村里二七一 番 林野一、 九四六坪 新村里 羅 京 文
 新村里山一七番 林野六 段八畝 新村里 國
 新村里山四一番 林野一 段三坪 新村里三一九番地 朴 寅 英
 德山里四七三番 林野二 四五二坪 新村里 朴 順 九
 德山里九三九番 / 一 林 野 一、九一四坪 新村里 羅 駿 集
 德山里九四二番 / 一 田 一七四坪 新村里四三二番地 羅 駿 集
 德山里九四二番 / 二 林 野 五五〇坪 新村里四三二番地 羅 駿 集
 德山里九四六番 林野三、 五九五坪 新村里二九六番地 朴 奉 錫
 德山里九七六番 田 五 一三坪 新村里三三二番地 金 正 模
 德山里山一七番 林野六 段五畝 新村里三三二番地 金 正 模
 德山里山六番 林野一 町三段一畝 德山里六三七番地 曹 判 德
 池山洞八番 林野一 池山洞 曹 在 元
 町四段八畝 池山洞 曹 在 元
 池山洞九番 林野一 池山洞 金 益 熙
 町五段六畝 池山洞 金 益 熙
 池山洞一〇番 / 一 林 野 二町七段二畝 池山洞 金 長 熙
 池山洞一一番 林野二 町一段二畝 雙林面梅村里一七四番地 金 在 龍

第一二 羅州德山里 全羅南道羅州郡 潘南面德山里

德山里九三九番 / 一 林 野 一、九一四坪 新村里 朴 順 九
 德山里九四二番 / 一 田 一七四坪 新村里四三二番地 羅 駿 集
 德山里九四二番 / 二 林 野 五五〇坪 新村里四三二番地 羅 駿 集
 德山里九四六番 林野三、 五九五坪 新村里二九六番地 朴 奉 錫
 德山里九七六番 田 五 一三坪 新村里三三二番地 金 正 模
 德山里山一七番 林野六 段五畝 新村里三三二番地 金 正 模
 德山里山六番 林野一 町三段一畝 德山里六三七番地 曹 判 德
 池山洞八番 林野一 池山洞 曹 在 元
 町四段八畝 池山洞 曹 在 元
 池山洞九番 林野一 池山洞 金 益 熙
 町五段六畝 池山洞 金 益 熙
 池山洞一〇番 / 一 林 野 二町七段二畝 池山洞 金 長 熙
 池山洞一一番 林野二 町一段二畝 雙林面梅村里一七四番地 金 在 龍

第一三 高靈池山洞 慶尙北道高靈郡 高靈面池山洞

池山洞一一番 林野二 町一段二畝 雙林面梅村里一七四番地 金 在 龍

第一四 昌寧校洞古 慶尙南道昌寧郡 昌寧面校洞

池山洞山二二番 林野八 段四畝 國 開津面吾士洞
 池山洞山一六番 林野六 段四畝 池山洞 丁 奎 福
 池山洞山一八番 林野七 段二畝 池山洞 金 判 述
 池山洞山二三番 林野一 九町八段四畝 國
 池山洞山二三番 林野二 六町一段六畝 國
 池山洞山二四番 林野八 段 池山洞 國
 池山洞山二五番 / 一 林 野 二町一段六畝 本館洞八七番地 鄭 在 烈
 池山洞山二五番 / 二 林 野 四塔 國
 池山洞山二六番 林野一 町四段八畝 快賓洞五二四番地 曹 永 玟
 池山洞山二七番 / 一 林 野 五段二畝 池山洞 櫻井 福次郎
 池山洞山二七番 / 二 林 野 五畝 國
 池山洞山二八番 林野七 畝 池山洞 池山洞 金 長 熙
 池山洞山二九番 林野四 段八畝 池山洞 金 在 龍
 池山洞山三〇番 林野五 段二畝 池山洞 金 在 龍
 池山洞山三二番 林野五 段六畝 快賓洞五〇六番地 文 永 健
 池山洞山三三番 林野八 段四畝 快賓洞五〇六番地 文 永 健
 池山洞山三三番 林野八 段四畝 快賓洞五〇六番地 文 永 健
 池山洞山六一番 林野四 町五段二畝 池山洞 文 永 健
 池山洞山六二番 林野一段 池山洞 文 永 健
 池山洞山六八番 林野八段 池山洞 文 永 健
 池山洞山七四番 林野三 段 池山洞 文 永 健
 池山洞山七五番 / 一 林 野 六町四段六畝 快賓洞 鄭 雲 河
 池山洞山七五番 / 二 林 野 六町五段 池山洞 金 永 出
 野六町五段 池山洞 金 永 出
 校洞七一 番 田 四三〇 坪 昌寧面末吃里 洪 淳 穆

校洞七三番	田 五七八	大邱府南町	徐 詰	圭
校洞七四番	田 三五九	松峴洞	柳 達	永
校洞七五番	田 三一九	昌寧面未屹里	洪 淳	穆
校洞七七番	田 六八六	松峴洞	李 末	用
校洞八二番	田 五九二	松峴洞	柳 達	永
校洞八四番	田 七四七	松峴洞	宋 永	壽
校洞八九番	林野 六七	昌寧面橋下洞	張 相	哲
校洞九〇番	田 七二三	校洞	鄭 判	成
校洞九一番	田 四七八	松峴洞	張 漢	相
校洞九二番	田 一五四	松峴洞	洪 用	伊
校洞九三番	一 田 七三三	密陽郡武安面古羅里	河 玉	永
校洞九七番	三 田 八〇四	松峴洞	宋 永	壽
校洞二四番	田 二二〇	大邱府南町	河 玉	珠
校洞二五番	田 一〇一	昌寧面未屹里	河 昌	玉
校洞二六番	田 三三六	松峴洞	柳 達	永
校洞二七番	田 六三三	松峴洞	崔 奉	石
校洞二八番	田 一、一九九	京城府南大門通一丁目	朝鮮信託株式會社	
校洞二九番	田 六四八	京城府南大門通一丁目	朝鮮信託株式會社	
校洞一三〇番	田 四四五	松峴洞	宋 點	大
校洞一三一番	田 八二二	松峴洞	柳 達	永
校洞三四六番	林野 一、〇一三	昌寧郡鄉校財產		

第一一五 昌寧松峴洞 古墳群 慶尙南道昌寧郡 昌寧面松峴洞

校洞四四二番	一 林野 三、三五五	昌寧郡鄉校財產		
校洞四五一番	二 林野 二、二四一	昌寧郡鄉校財產		
校洞四七二番	田 三三三	校洞	金 敬	洪
校洞四七五番	田 一、一七三	昌寧面逸亭里	車 己	俠
校洞四九二番	林野 一、一七〇	松峴洞	鄭 權	伊
校洞四九四番	田 一九五	松峴洞	柳 達	永
校洞四九九番	林野 三八三	昌寧面道也里	金 奇	占
校洞五六六番	田 八六二	京城府南大門通一丁目	朝鮮信託株式會社	
校洞六二三番	林野 三、八五二	昌寧面未屹里	金 仙	允
校洞六二五番	林野 一、一四三	昌寧面未屹里	河 命	夏
校洞山二番	林野 三町八段	松峴洞	金 斗	贊
校洞山三番	林野 三畝二畝	昌寧面橋上洞	鄭 介	伊
校洞山四番	林野 一畝二畝	松峴洞	洪 萬	伊
校洞山五番	林野 六畝九畝	國		
校洞一〇番	一 田 五七五	松峴洞	宋 慶	浩
校洞二四番	田 三七一	昌寧面未屹里	河 五	仁
校洞三五番	田 八二四	清道郡靈角面黑石洞	金 京	南
校洞二六番	田 四一	京城府南大門通一丁目	李 相	瑾
校洞九五番	林野 一七八	松峴洞	柳 達	永
校洞一〇一番	畝 九六六	松峴洞	柳 達	永
校洞一〇二番	畝 一三三	松峴洞	柳 達	永

第一六號 慶州千軍里 慶尙北道慶州郡 內東面千軍里

第一七號 京城先蠶境 京畿道京城市北町

松觀洞一〇三番ノ一番 五三坪	昌寧面
松觀洞一〇三番ノ二林 野二〇六坪	昌寧面
松觀洞一〇四番 番一 六二坪	大邱府京町
松觀洞一〇七番 野林 四三九坪	徐在均
昌寧面	
松觀洞一〇八番 番三 四〇坪	京城府南大門通二丁目
松觀洞山九番ノ二林野 四段五畝	朝鮮信託株式會社
千軍里五四八番ノ一田 八〇坪	川北面障城里二〇番地
千軍里五四八番ノ二田 三六五坪	赤澤晴治
千軍里五四九番 田二 八二坪	千軍里
千軍里五五〇番 田四 一五坪	韓達秀
千軍里五五一番 田三 五六坪	千軍里一番地
千軍里五五二番 田四 六二坪	姜仁德
千軍里五五三番 田三 九二坪	千軍里六六〇番地
千軍里五六六里 田三 五五坪	金仁泰
京城府鳳巖町二七番地	千軍里三九七番地
京城府鳳巖町一七番地	韓碩東
京城府鳳巖町一七番地	內東面遮峴里七四二番地
京城府鳳巖町一七番地	崔林宗
京城府鳳巖町一七番地	千軍里五三八番地
京城府鳳巖町一七番地	朴顯坤
京城府鳳巖町一七番地	千軍里三五五番地
京城府鳳巖町一七番地	韓柁源
京城府鳳巖町一七番地	京城府鳳巖町二七番地
京城府鳳巖町一七番地	李重翊
京城府鳳巖町一七番地	李重翊
京城府鳳巖町一七番地	李重翊

美術市場

東京美術俱樂部

竹莊居賣立 二月六日

美術商山本豐實の一部藏品の賣立である。展示品の多くは既見のものである。主要なものは伊東巳代治伯爵舊藏の若冲「梅花錦鶏鳥」、大雅の「猿猴掬鳥」、燕村「箒圖」をはじめ文晁の「松島日記」及「松島紀行畫冊」等文人畫の優秀なものが多し。尙新畫に於ても玉堂の「山家早春」、岳陵の「鯉」、華岳の「早春」等注目すべきものが二三數へられた。而して最も高値を呼んだのは「梨子地松櫻山水蒔繪書棚」であつた。總點數三百五點。

藤井家及中村歌右衛門賣立 二月二十七日

賣立總數三百點の中主要なものは新畫であつて其の他圓山四條派、文人畫派、書、及び茶器等である。新畫の著しいものは松岡「紅葉狩」を筆頭に百穂「宿雨」春草「秋汀」青樹「柘榴尾長鳥」等逸品が多い。就中松岡の「紅葉狩」が最高値であつた。

玄鶴園賣立 二月二十七日

暖邨莊賣立 三月十四日

柴田是真の作品がかなり多く蒐集されてゐて「中深布左右、懸想文賣花扇献上」の三幅對をはじめとして「漆繪雲龍染渡鼠嫁入」、「深山瀑布」など主要なものであつた。なほ古畫には相阿彌の「唐八景」、杏所の「孔子十哲等の外約十點を交へ、外は概ね新畫であつて、是真の他には寛齋の「松溪瀑布」、玉堂の「深山遊猿」、春舉の「深山の秋」等が逸品であつた。尙髹漆品及び茶器等にも注目すべきものがあつた。最高値は寛齋の松溪瀑布であつた。

某家賣立 三月二十日

五洲居、某家賣立 三月二十日

美術市場

總點數二百七十點は大略新畫が多く、その外陶磁器、髹漆品、金工品等を若干加へてゐる。而して新畫の中には雅邦の傑作と稱されてゐる「孔雀圖」をはじめ、玉堂「水郷首夏」、龍子「寛」、古徑「うさぎ」、御舟「淺春」等の注目すべきものが多い。

後藤眞太郎賣立 四月九日

同人の多年の蒐集に係る日本支那朝鮮の陶磁器、及び希臘テラコッタ等百餘點であつた。主要のものに「萬曆赤繪牡丹文大皿」、「古赤繪菊文壺」等がある。

橋本家賣立 四月十二日

美術蒐集家として著名な橋本辰二郎の所藏品の一部百三十九點を展示し、近來での大入札と稱される。古畫には重要美術品等に認定され夙に世に知られてゐる燕村書畫の「野ざらし紀行」、「奥の細道」の俳畫の名品があり、又文晁の「林和靖」も著名である、尙他にも文人畫の逸品が多い。新畫には春草「楊柳觀音」、雅邦「夏山訪友」、同「松林山水」等が著しかつた。尙工藝品若干をも加へた。

某家賣立 四月二十四日

對柳莊賣立 五月九日

當莊の藏品は、柴田是真在世時代直接作品を入手したものと稱されてゐる。即ち「養老孝子」双幅をはじめ二十餘點が展示された。尙雅邦、省亭等も經つた蒐集であり注目される。大體に於て新畫が多いが、圓山派、琳派等も多少交へ、工藝品等をも合せて總點數二百二十二點であつた。

井口家(長岡市)賣立 五月二十一日

入札品數二百十點中殆んど古畫を交へず、新畫と茶器及工藝品であつた。新畫では觀山のもの为主要となつてゐて三十餘點を數へ、逸品も又多し。即ち「釋迦十六羅漢双幅」、「中壽星左右樓閣」三幅對、「殘雪」等がある。

その他春草の「春夏花鳥」三幅對をはじめ、大觀、龍子等が比較的多い。

養軒翁賣立 五月二十九日

宮田魚軒賣立 六月四日

竹田の蒐集が主要なものとなつてゐて三十九點を數へ就中「碧山間居」、「歲寒遊禽」、「白梅小禽」等が注目される。その他南宗畫がその大部分を占めてゐて、大雅、玉堂、草坪等にも逸品が見られる。尙茶器、工藝品類を合せて百五十七點、總賣百五十一點であつた。

某家賣立 六月九日

入札品中古筆に著名なものがあり、重要美術品等に認定された「中院切」を筆頭として「小鳥切」、「戊辰切」、「白河切」、「利泉式部續集切」、「東大寺切」等がある、その他古畫新畫、茶器等合せて百八十七點であつた。

長松庵金子家賣立 六月二十日

入札總點數二百七十點の中、國寶に指定された文晁二點がある。「正嘉三年北山御幸御會歌卷」一卷と、「嚴島御幸記、高倉昇段記」でこの二文書は金澤文庫傳來のものとして稱されてゐる。その他筆蹟類が比較的多く、次いで新畫が多數であつた。尙甲冑、刀劍類も稍多い。就中紀州雜賀作の鉢兜は柳原家傳來と稱され近年重要美術品等に認定された逸品である。總點數二百七十點であつた。

千松庵、某家賣立 六月二十六日

故田中光顯伯爵の遺愛品であつて、主として明治元勳及志士等の筆蹟類が多い。その他刀劍類が廿餘口數へられた。總點數五百點であつた。

對黃軒某家賣立 十月三日

大體新畫が主要のものであつて、廣業「春山」、春草「湖上釣舟」、鐵齋「葛蓬暮秋」を始め約百餘點である。その他古畫、工藝品等總計百九十點であつた。

舊大名賣立 十月九日

晁南莊、某大家賣立 十月二十四日

新畫、刀劍類を主要なものとし、それに工藝品を若干交へて總計三百七十七點で、新畫では雅邦の「高砂」、玉堂の「陶溪晚秋」等をはじめ百餘點、刀劍類では重要美術品等認定の白鞘刀、備前包平、同じく備中國未眞、拵付刀廷壽國村等の逸品がある。

泰山莊賣立 十月二十八日

小野賢一郎の蒐集品であつて古畫、漆漆品、筆蹟、陶磁器等百七十八點が展示された。就中白天目、黃天目一對の茶碗、及び鼠志野筒茶碗等が注目されるものであつた。

伊藤平山堂賣立 十一月一日

法相曼茶羅を筆頭に古畫及び支那畫、筆蹟及び現代繪畫工藝品等合計四百七十八點であつた。

清元延壽太夫賣立 十一月六日

主として新畫が多く雅邦「蓬萊山水」、靛彦「良經卿初春歌」、古徑「柿をはじめ注目すべきものが多い。尙古畫では「如意輪觀音圖」、松方家傳來の錢舜舉の「菊蝶」がある。その他茶器、工藝品、殊に夏雄、勝珉等の作になる金工品類が多かつた。總數六百五點であつた。

舊大名、某舊家賣立 十一月十三日

某大家賣立 十一月二十日

大體古畫筆蹟類が多い。注目されるものに馬遠筆「林和靖」、一之筆「寒山拾得」對幅、筆蹟では「明恵上人消息」「夢窓國師墨蹟」等がある、總數六百六十三點であつた。

某舊大名賣立 十一月二十三日

有賀家、某大家賣立 十一月二十七日

總數二百七十八點の中百餘點は新畫でその他南宗畫若干と漆漆品であつた。新畫中には雅邦が日露戰爭凱旋共進會出品の「佛印泛湖圖」が展示された。

舊大名、某大家賣立 十二月七日

新畫及古畫各同數位であつてそれに能面、太刀、鎧等を合せて百二十點であつた。古畫では鎌倉時代と稱され

てゐる「地藏菩薩」、高山寺傳來「圖像」、亞歐堂田善「壽星像」等が主要と見られ、新畫には雅邦の「義家公」、同「三保松原」をはじめ五雲「鮮魚」、御舟「竹生」等がある。尙能面、能衣裳にも注目すべきものが多い。

河溪莊、某大家賣立 十二月十一日

新畫が最も多く、注目すべきものが多い。大觀の「朝陽映鳥」、靛彦「楠公」、龍子「梅花双鶴」、春舉「秋溪游淵」御舟「埃及土人の灌漑」等がある。尙古畫には狩野派が若干ある。總計百八十點であつた。

某大家(神奈川縣)、久留米家賣立 十二月十八日

新畫が主要となつてゐる雅邦の「郭汾陽福祿」の三幅對を筆頭に栖鳳の「瀑布」、青邨「陣中聞香」、關雪「郭巨」三幅對等見るべきものが多かつた。

名古屋美術俱樂部

村瀬庸庵賣立 三月九日

古畫が最も多く狩野派、南宗畫派、圓山四條派等を網羅してゐる。他は新畫若干及び茶器類があり、就中祥瑞、仁清、赤給、吳洲の香合、黃伊羅保茶碗等注目される。

聽雪庵賣立 三月二十七日

森田(西區)家並某家賣立 四月十一日

某家賣立 五月九日

故新庵賣立 十月二十一日

芭蕉、其角、嵐雪等の俳人の短冊をはじめ名家の筆蹟が最も多い。その他古畫新畫茶器等併せて百餘點が提示された。

心月庵賣立 十月二十四日

栖鳳「朝陽」、古徑「小猫」、松園「美人愛猫」等をはじめ新畫最も多く、外古畫若干茶器等百餘點であつた。

京都美術俱樂部

某家賣立 四月四日

新畫及茶器類が最も多く、新畫には栖鳳「城頭綠蔭靜松園」「楚蓮香」等が注目され、茶器は永樂保全の「仁清寫色繪尉姥香合」が著しいもの。總數二百八十點。

四時長明居、某家賣立 六月五日

御歴代宸筆及名家の筆蹟類が多い。その他古畫茶器等八十一點であつた。

某家賣立 六月十三日

藤澤松庵賣立 十月十六日

安井家、某家賣立 十一月十四日

佛畫及佛像彫刻及鏡鑑等注目すべきものがあり、就中「山水圖鏡」は重要美術品等認定の逸品である。

某家賣立 十一月二十七日

某家賣立 十二月十一日

古畫は應舉「雪汀鴨」を筆頭に圓山四條派、南宗畫派等が比較的多く、新畫には松園、春舉、曼舟等が若干纏つて提示された。その他茶器、漆漆品等總計三百七十點であつた。

大阪美術俱樂部

某家(當市)賣立 二月十五日

景年の作品が纏つてゐる逸品が多い。就中「仙鳥松鶴十二ヶ月扇子」等注目される。その他春舉「昔嘶」をはじめ大體新畫の大作が提示された。これに茶器、工藝品を併せて總數五百點餘であつた。

某家賣立 二月十九日

古筆類、古畫、新畫及び茶器類漆漆品を網羅して總數五百點、古筆は後鳥羽院筆と稱されてゐる「歌仙切業平像」の如き著名なものをはじめ御歴代宸筆及び光廣卿、松花堂等がある。古畫は圓山四條派が比較的多く見られ

景文の「秋七草」等の出色のものがある。新畫は景年が多く「老松壽帶鳥」が注目される。尙茶入では古瀬戸瓶子茶入を筆頭に古萩茶入、堅手茶盃古備前共蓋胴ノ水指等その外名品が多く提示された。

白水庵賣立 三月五日

某家賣立 四月九日

二月十九日に行はれた某家の第二回の賣立である。繪畫は支那、足利水墨畫、狩野派、南宗畫派、圓山四條派及新畫等があり、その他茶器類、髹漆工藝品等約數百點であつた。

某家賣立 四月二十日

某家賣立 四月二十八日

某家賣立 五月五日

靜和亭賣立 五月十日

某家賣立 五月十八日

提示品百五十六點の大半は新畫で景年が最も多く栖風松園これに次いでゐる。尙古畫には圓山四條派の吳春、景文等がある。その他茶器、蒔繪道具類が若干ある。

某家賣立 五月二十二日

白水庵第二回賣立 五月二十九日

新畫が最も多く就中景年の蒐集に注目すべきものが見られる。次いでは秋石、玉溪等が纏つてゐる。茶器には古伊羅保片身變内刷毛目茶碗が著しいものであつた。

某家賣立 六月四日

泉松庵賣立 六月八日

墨蹟、古畫、新畫、茶器等百六十二點で、墨蹟は大燈國師、西行、一休その他禪家の手筆等多く、古畫は足利水墨畫若干に徳川狩野派のものが多い。茶器には黄瀬戸筒茶碗、堆朱一文字鶴香合等出色である。

某家賣立 十月七日

某家賣立 十月十一日

某家賣立 十月十五日

某家賣立 十一月八日

古畫、茶器類比較的多く、古畫は佛畫、肖像畫、足利水墨畫、狩野派、圓山四條派等である。茶器には志野半筒茶碗を筆頭に各種を網羅してゐる。その他新畫蒔繪品等を併せて總數二百四十六點であつた。

某家賣立 十一月二十二日

新畫と茶器類のみで、新畫は雅邦の「春景山水」、松園「しぐれ」、古徑「馬郎婦」をはじめ秋石、玉溪等に注目すべきものが多い。總數百五十八點であつた。

某家賣立 十二月十七日

古畫、新畫、墨蹟、茶器、髹漆品類で就中新畫が最も多い。總數二百二十七點。

昭和十四年度美術文獻目錄

凡例

一、こゝに採録する美術文獻は我が國に於て昭和十四年中に發行された單行本、定期刊行物及び諸新聞掲載のものに限つた。

一、東洋古美術（西方アジアを除く）文獻採録の範圍は原則として美術關係のものに限つたが、考古學、歴史地理その他のものについても美術に關係あるものは適宜之を採録した。

一、現代美術文獻目錄は東洋古美術關係を除き、明治大正以後の現代美術及び美術一般に關するものを輯めた。

一、西洋美術に關する文獻は便宜上現代美術文獻目錄中に西洋現代美術及びその他外國美術の二項を設けて採録した。

一、建築に關しては、本書本文の凡例に記した範圍に限定した。竣工建築物報道の記事は工事概要のみを記したるもの、或は寫眞のみを載せたものは省略し、紹介批評の記事あるもののみを採録した。

一、物故作家及美術關係者の項は本年度中に歿した人々の記事に限つた。

一、現代美術文獻目錄に於て各項目内の配列は、單行本にあつては書名による五十音順、定期刊行物所載文獻にあつては所載雜誌名による五十音順とした。同一雜誌の配列はその發行順である。但し展覽會批評及昭和十四年度物故作家評傳は雜誌別によらずして題目別にまとめた。

一、本目錄に採録せる定期刊行物及び新聞紙は左の通りである。

現代美術關係

ア	アトリエ	浮世繪界	漆と工藝	畫	說
改	造	學校美術	教育美術	建築雜誌	華
建	築	世界	工藝ニュース	國	造
國	際	建築	思想	新	建築
茶	わ	ん	中央公論	圖畫と手工	塔

南	畫	鑑賞	日本建築士	汎	工	藝
美	術	殿	美術評論	美	之	國
美	術	評	論	美	術	之
み	づ	ゑ	美	術	之	國
同	新	聞				
大	阪	朝	日	大	阪	毎
中	外	商	業	東	京	朝
報	知	每	夕	都	京	日
古	美	術	關	係		
ア	ト	リ	エ	浮	世	繪
學	叢	學	鑛	畫	と	工
貨	幣	教	育	美	術	京
現	代	美	術	建	築	世
工	藝	ニ	ユ	イ	ス	好
國	際	建	築	國	史	學
史	述	と	美	術	史	蹟
書	畫	骨	董	雜	誌	書
大	正	大	學	々	報	丹
塔	影	陶	磁	青	丹	道
東	方	學	報	東	洋	學
日	本	の	茶	道	日	本
汎	工	藝	美	術	世	界
美	術	研	究	美	術	之
美	術	評	論	美	術	之
三	山	評	論	美	術	之
燒	もの	趣	味	夢	づ	ゑ
林	武	者	の	小	路	泉
歴	史	地	理	文	部	時

目次

現代美術關係文獻(定期刊行物所載)

論文及隨筆

總說	雜誌別五十音順	二二六
日本畫	雜誌別五十音順	二二六
洋畫	雜誌別五十音順	二二六
版畫	雜誌別五十音順	二二六
彫刻	雜誌別五十音順	二二六
工藝	雜誌別五十音順	二二七
建築	雜誌別五十音順	二二八
作家論	雜誌別五十音順	二三一
物故作家及美術關係者	人名別五十音順	二三一
時評	雜誌別五十音順	二三二
身邊雜記	雜誌別五十音順	二三三
雜	雜誌別五十音順	二三五
明治大正以降美術	雜誌別五十音順	二三五
外國現代美術	雜誌別五十音順	二三六

繪畫	雜誌別五十音順	二三六
彫刻	雜誌別五十音順	二三六
工藝	雜誌別五十音順	二三六
建築	雜誌別五十音順	二三六
其他外國美術	雜誌別五十音順	二三七

展覽會記事及批評

綜合展覽會	題目別五十音順	二三八
-------	---------	-----

昭和十四年度美術文獻目錄

日本畫展覽會	題目別五十音順	二四〇
洋畫展覽會	雜誌別五十音順	二四三
彫刻展覽會	雜誌別五十音順	二四四
工藝展覽會	雜誌別五十音順	二四四

行政及教育

行政	雜誌別五十音順	二四五
教育	雜誌別五十音順	二四五

現代美術關係單行圖書

總說	書名五十音順	二四八
日本畫	書名五十音順	二四八
洋畫	書名五十音順	二四八
版畫	書名五十音順	二四八
彫刻	書名五十音順	二四八
建築	書名五十音順	二四八
工藝及圖案	書名五十音順	二四八
教育	書名五十音順	二四九
外國美術	書名五十音順	二四九
雜	書名五十音順	二四九

古美術關係文獻(定期刊行物所載)

總說・綜錄	雜誌別五十音順	二五〇
繪畫	雜誌別五十音順	二五〇
彫刻	雜誌別五十音順	二五五
工藝	雜誌別五十音順	二五六
建築及庭園	雜誌別五十音順	二五八

書蹟、印章、文書	雜誌別五十音順	二六一
歷史・考古學	雜誌別五十音順	二六二
雜	雜誌別五十音順	二六二

古美術關係單行圖書

總記	書名五十音順	二六四
繪畫	書名五十音順	二六五
彫刻	書名五十音順	二六五
工藝	書名五十音順	二六五
建築及庭園	書名五十音順	二六六
書蹟・印章・文書	書名五十音順	二六七
歷史・考古學	書名五十音順	二六七
其他	書名五十音順	二六八

現代美術関係文献(定期刊行物所載)

論文及隨筆

總説

人體背面美の問題	西田 正秋	アトリエ	一六ノ五
政治と美術	土方 定一	同	一六ノ一一
「もの」と「こと」	柳 宗悦	工 藝	九三
他力門と美	同	同	九五
様式を創造する者	児島喜久雄	思 想	二〇九
塚空隨筆	同	同	二一一
現代繪畫の問題	福澤 一郎	中央公論	五四ノ九
線と象徴	金原 省吾	塔 影	一五ノ四
日本精神と日本畫	添田 達嶺	同	一五ノ四、五
健康なる文化の創造へ	石井 柏亭	同	一五ノ五
繪畫の時代性	川路 柳虹	同	同
畫壇への希望	岡部 長景	同	一五ノ七
日本の表現意欲	土方 定一	南畫鑑賞	八ノ八
美術と傳統	荒城 季夫	美 術	一四ノ七
歴史性へのめざめ	佐波 市	同	一四ノ八
生活文化と美術文化	長谷川如是閑	同	一四ノ一一
純粹造型藝術の性格	中村 眞	同	同
世界的な美術	藤島 武二	美之國	一五ノ四
藝術に於けるミニユマンタ	柳 亮	みづゑ	四一八
藝術批評論	北脇 昇	同	四二一
○			
戰爭畫の問題	荒城 季夫	東 朝	四〇三―三
時代と藝術	廣津 和郎	東 日	二・三―三
日本畫の精神	横山 大觀	改 造	二一ノ六
美術と新しき畫壇(座談會)	佐藤 敬	教育美術	五ノ六
東洋畫論	富永 徳一等	中央公論	五四ノ一二
荒木 十畝			

日本畫

洋 畫

本統の繪	安達 謙藏	塔 影	一五ノ一
肖像畫の苦心	島田 墨仙	同	一五ノ三
日本畫に於ける自然	本庄 可宗	同	同
茶道より見たる現代畫	長谷川如是閑	同	同
最近日本畫の傾向	吉田 堯文	美 術	一五ノ八
歴史畫私感	多賀谷健吉	美 術	一五ノ一〇
新編現代日本畫壇講話	服部 有恆	美 術	一四ノ一一
術と學問	豊田 豊	美 術	三ノ一―九
小林古徑素描特輯	荒木 十畝	美 術	七ノ三
福田平八郎素描特輯	同	美術評論	八ノ二
日本畫とは何か	同	同	八ノ四
○			
畫道當面の問答	児島喜久雄	同	八ノ五、六
この頃の事	安田 叔彦	同	同
直寫風景	菊池 契月等	美之國	一五ノ一
玉堂の「富士」について	川端 龍子	同	同
現代日本畫に現はれた病弊	中村 岳陵	同	一五ノ四
堂本印象界生の佛畫	石井 柏亭	同	一五ノ六
形式を廻る心	本間 久雄	同	一五ノ一〇
日本畫に於ける洋畫的なもの	川路 柳虹	同	同
現代日本畫の動向を衝く(座談會)	加藤 紫雲	同	一五ノ一一
東洋の繪畫と戰爭畫	郷倉 千靄	同	一五ノ一二
春花譜	神崎 憲一	文藝日本	一ノ五
現代の日本畫	大田 聰雨	同	一ノ六
○			
技術の新しい條件	田中 龍雄	同	同
繪畫に及ぼしたフロイド	牧野 吉晴	同	同
アカデミックに就て	橋本 關雪	大 朝	一・二、三、四
前衛繪畫の方向	菊池 契月	大 毎	三・一―四
リアリズム考	岡崎 義恵	東 朝	一・四―七
レイオン・ビヤホルの改造とその壁畫			
技法の性格に就て			
影響について			
新しき繪畫の風貌			
前衛繪畫を中心に			
肖像畫問答			
色彩について			
「アラン」繪畫論より			
アラン「繪畫論」より			
○			
行動する繪畫	福澤 一郎	中 商	四・五、七
關玄への復讐	植田 壽藏	帝大新聞	二・二七
明日の前衛繪畫	福澤 一郎	同	四・一七
繪畫は東洋より	山下新太郎	同	五・二九
畫壇の面貌	鈴木金之助	東 日	五・三―七
洋畫壇の課題	福澤 一郎	都 報	四・九、一〇
裸體畫の問題	相良 徳三	同	八・四―七
○			
版 畫			
版畫雜感	徳力富吉郎	浮世繪界	四ノ八
芥澤さんの法然上人の御影	村岡 景夫	工 藝	九五
新作法然上人像について	望月 信享	同	同
繪傳の中から	河井寛次郎	同	同
「芥澤銚介作法然上人像」			
○			
彫刻家への苦言	北村 西望	美術	七ノ三
彫塑隨感	早乙女龜次	美之國	一五ノ九
彫刻の課題	本郷 新	みづゑ	四一八

彫 刻

現代木彫界の趨勢

羽下 修三 讀 頁 二・六、七

輕金屬の廢材應用工藝品

工 藝

大衛立製作に就ての感想

都賀 幸哉 漆と工藝 四五一

大衛立製作後の感想

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

大衛立の成るを見て

岩瀧 尙美 同 同

大衛立の成るを見て

建築

感想抄	高村 豊周	汎工藝	一七〇八	建築設計資料集成		建築雜誌	六四七	忠靈塔設計圖案懸賞募集規定		建築雜誌	六五四
朝鮮の工藝を觀察して	谷内 治楠	同	同	建築關係資材統制法令一覽表		六四七	ラルフ・テイ・ウォーカ		同	同	六五六
工藝界今後の第一線に立つ人々	柴崎 風岬	同	一七〇〇	煉瓦造を再認識せよ	中村 綱	六四八	氏の建築觀		同	同	六五七
臺灣と輸出漆器の將來	生駒 弘	同	同	不燃都市の建設と共同建築に就て	關根要太郎	同	勞務者向集團住宅地計畫懸賞當選圖案		同	同	同
シュレーマン女史に聽く	張間 祐一	同	一七〇一	京都競馬場(安井武雄建築事務所設計)		同	糖業協會事務所(渡邊節建築事務所設計)		同	同	同
何故工藝批評は揮はぬか	柴崎 風岬	同	一七〇二	東京帝國大學柔剣道場(東大營繕課設計)		同	第十三回建築展覽會記事		同	同	同
初めての體驗	杉浦 非水	同	同	早稻田大學藥物研究所(早大營繕課設計)		同	建築行政展覽		同	同	同
圖案の主知性に就て	長谷川七郎	美 育	一五〇七	防空建築と土木の參考	佐竹保治郎	六四九	竹中工務店東京支店(竹中工務店設計)		同	同	三三〇一
産業美術の新しき動向	西澤 信敬	美 術	一四〇一	大島潤候所(堀口捨巳設計)		同	T・T・邸(吉田五十八建築事務所設計)		同	同	同
現代人形藝術批判座談會	大島 隆一	美術街	六〇二	鮎川家墓所(伊東忠太設計)		同	八新亭(佐々木孝之助建築事務所設計)		同	同	同
立上る大阪の工藝美術界	中島 豊次	同	六〇六	煉瓦造建築の再檢討	藁田 厚介	六五〇	三橋邸(石間桂造設計)		同	同	同
陶磁器私感	大森 光彦	美術眼	三〇三	煉瓦造建築の再檢討	室井 修	同	加滿田旅館(白木屋住宅部山口芳春設計)		同	同	同
智性の貧困	高村 豊周	美之園	一五〇二	新興木構造の話		同	新日本建築の待望		同	同	同
私の手記	杉浦 佐助	同	一五〇八	放送會館(山下壽郎建築事務所設計)		同	私典の住ひと時代		同	同	同
大陸土俗工藝に就て	高村 豊周	同	同	名古屋日本徴兵館(横河工務所設計)		同	大島潤候所(堀口捨巳設計)		同	同	三三〇二
新世代の建築	藤島亥治郎	改造	二一〇三	環研科學硯社株式會社ラポラトリ(藤井組設計)		六五一	海洋氣象臺改築廳舎(堀口捨巳設計)		同	同	同
防空上防火の重要性	小倉 尙	建築雜誌	六四六	神港ビルディング(木下建築事務所設計)		同	アイヌの選ぶ住宅	竹内芳太郎	同	同	三三〇三
長期建設と建築	小坂 秀雄	同	同	卒業計畫		同	大阪災害科學研究所(堀口捨巳設計)		同	同	三三〇二
文獻抄録		同	六四六	宮城外苑整備計畫に就て	岸田日出刀	六五二	岩城硝子株式會社大阪支店(高橋榮臺設計)		同	同	同
海外建築グラフィ		同	六四六	瀨賀縣新廳舎		同	木村邸(田中忠雄設計)		同	同	同
東日會館(大倉土木設計)		同	六四六	都市防空上より見たる防火の重要性と之が對策		同	事變と新建築の再吟味		同	同	同
日魯漁業・函館出張所社員俱樂部(岡野嘉彦設計)		同	同	代用建築資材		同	建築資材と其代用品に就て		同	同	同
京大醫學部附屬醫院外科整形外科病舎及講堂(京都帝大營繕課設計)		同	同	散居村	小倉 強	六五三	丹波山地の民家		同	同	同
大連市公會堂懸賞設計覽技審査報告	佐藤 武夫	同	同	ライオン・ビヤホール(岡野嘉彦建築事務所設計)		同	アイヌの住居	野崎 謙三	同	同	三三〇二
新ドイツ文化と日本	伊東 忠太	同	六四七	宮城外苑美化其他の私見	西村 好時	六五四	關西趣味・雜觀	酒井 勉	同	同	三三〇一
第一生命保險相互會社新館(渡邊仁・松本興作設計)		同	同	株式會社玉置商店(平松義彦設計)		同	東日會館(大倉土木株式會社設計)	山口 昭正	同	同	三三〇二
公衆衛生院(内田祥三設計)		同	同	産業組合中央會館(産業組合中央會臨時建築部設計)		同	滿洲中央銀行總行(西村好時建築事務所設計)	田村 富藏	同	同	七、九
愛育研究所(文部省建築課設計)		同	同			同	東洋殖産株式會社新京支店(池田忠治建築事務所設計)	柳橋 諒	同	同	三三〇三

菅原邸(吉田亨二建築事務所設計)	今和次郎	建築世界	三三ノ三	名古屋・日本徴兵館(横河工務所設計)	建築世界	三三ノ八	漁村の住居問題	竹内芳太郎	國際建築	一五ノ一
部分改善試驗農家家庭に就て	同	同	同	〇氏邸(大江透設計)	同	同	寮舎	板垣 麿	同	同
建築「美」雜感	三井 克	同	同	山崎邸(藏田周忠設計)	同	同	設計日誌の一節	谷口 吉郎	同	同
鄙陽平原の民家	河村 五朗	同	同	建築と兩極	同	同	慶應義塾寄宿舎設計概要	石橋 直	同	同
日本放送會館(山下壽郎建築事務所設計)	同	同	同	木造家屋防火改修模範街区造成に就て	同	同	大島測候所(堀口捨巳設計)	堀口 捨巳	同	一五ノ二
京都競馬場(安井武雄建築事務所設計)	同	同	同	滿洲に於ける民家の研究	阿部 繁雄	同	神戸海洋氣象臺新築廳舎(堀口捨巳設計)	同	同	同
日東紅茶ティーハウス(鈴木純設計)	同	同	同	民家保存私見	竹内芳太郎	同	大阪災害科學研究所(堀口捨巳設計)	同	同	同
荒木邸(竹村建築工務店設計)	同	同	同	我が家の記	山崎 幸雄	同	竹中工務店東京支店(竹中宏平設計)	同	同	同
防空建築規則解説	編輯部	同	同	滋賀縣廳舎(佐藤功一建築事務所)	同	三三ノ九	大島の工事を終つて	堀口 捨巳	同	同
吉住小三郎氏邸(吉田五十八設計)	同	同	三三ノ五	明治製菓販賣部現茶店(渡邊仁建築事務所設計)	同	同	新日本工作文化建設のために(座談會)	盟 日本文化	同	一五ノ二、
T・O・氏邸(吉田五十八設計)	同	同	同	M・O・邸(吉田五十八設計)	同	同	伯林便り	谷口 吉郎	同	一五ノ三
K・Y・氏邸(吉田五十八設計)	同	同	同	建築物の防空対策	鈴木 和夫	同	建築書叢誌	藏田 周忠	同	同
理研科學硯畫株式會社(藤井組建築部設計)	同	同	同	飛驒白川村の民家	竹内芳太郎	同	日邸(川島定雄設計)	同	同	同
保生會(大澤源之助事務所設計)	同	同	同	曹洞宗務院の建築に就て	野崎 謙三	三三ノ九	京都競馬場(安井武雄建築事務所設計)	同	同	同
昭和十四年度各學校卒業計畫案	同	同	同	新京郊外狼洞溝・李氏宅	阿部 繁雄	三三ノ一〇	生駒山青年道場(石川純一郎設計)	同	同	同
放送會館の演奏室に就て	今井 猛雄	同	三三ノ五、六	滿洲だより	中村琢治郎	三三ノ一〇	ノイトラ近作(圖版)	同	同	一五ノ四
滿洲民家見聞記	大矢 信雄	同	三三ノ五	居住習俗語彙に就て	竹内芳太郎	同	日本放送會館(山下壽郎建築事務所設計)	同	同	同
石本邸(石本喜久治建築事務所設計)	同	同	三三ノ六	新宿ビヤホール(佐藤茂次設計)	同	同	日本電力瀬戸第二發電所	同	同	同
ライオン・ビヤホール(圖師建築事務所設計)	同	同	同	後藤邸(後藤一雄設計)	同	同	西村堰堤(日本電力株式會社土木部及山口數象設計)	同	同	同
改造とその壁畫	圖師 嘉彦	同	同	某氏邸(江口義雄設計)	同	同	壁面寫眞の發達と米國萬博	板垣 麿	同	同
晚翠軒(白木屋住宅部木下唯親設計)	同	同	同	ニユーパークホテル(吉田五十八設計)	同	同	壁面寫眞の發達と米國萬博	同	同	同
住宅問題資料	小池 新二	同	三三ノ六、七	神港ビルディング(木下建築事務所設計)	今和次郎	同	壁面寫眞の發達と米國萬博	同	同	同
現地建築隨想	野村 一郎	同	三三ノ六	北支・茶淀の農家	同	同	壁面寫眞の發達と米國萬博	同	同	同
特輯日本住宅構成(グラフ)	同	同	同	松島ニユーパークホテル建築工事概要	同	同	壁面寫眞の發達と米國萬博	同	同	同
男鹿島の民家	酒井 勉	同	三三ノ七	中央産業組合會館(中央産業組合臨時設計部設計)	同	三三ノ一二	壁面寫眞の發達と米國萬博	同	同	同
日本赤十字社廣島支部病院(佐藤功一建築事務所設計)	同	同	三三ノ八	飯田屋(猪野勇一設計)	同	同	壁面寫眞の發達と米國萬博	同	同	同
				赤穂邸(石間桂造設計)	同	同	壁面寫眞の發達と米國萬博	同	同	同
				木造建物建築統制規則に就て	伊藤憲太郎	同	壁面寫眞の發達と米國萬博	同	同	同
				樺太「オグスの杜」の土人の住居	小寺 康吉	同	壁面寫眞の發達と米國萬博	同	同	同
				新年に際して	森田 茂介	國際建築 一五ノ一	壁面寫眞の發達と米國萬博	同	同	一五ノ七

東京女子高等師範の山の家(土浦龜城設計)	國際建築	一五ノ七	水泳競技場設計概要	新建築	一五ノ二	興亞院廳舎(大藏省營繕管財局設計)	新建築	一五ノ六
畫家の山莊(菅原榮藏設計)	同	同	東京市中央體育館建設計畫概要	同	同	萬年堂(川喜田建築能率事務所設計)	同	同
温泉地の隱居所・赤松別邸(關師嘉彦設計)	同	同	馬事公苑計畫概要	同	同	佐治愛犬病院(幸路英設計)	同	一五ノ七
伯林より	山脇 巖	同	皇紀二千六百年記念塔	同	同	戶越保育所(關師嘉彦設計)	同	同
玉置商店(平松義彦設計)	同	一五ノ八	主観技場	同	同	株式會社玉置商店(平松義彦設計)	同	同
上宮中學校(伊藤正文・宇賀一郎設計)	同	同	水泳競技場	同	同	あるせんちな丸(三妻長崎造船所設計)	同	同
戶越保育所(關師嘉彦設計)	同	同	オリムピック村	同	同	明治製菓喫茶店(渡邊仁建築事務所設計)	同	一五ノ八
託兒所建築に就て	關師 嘉彦	同	中央體育館	同	同	柏原洋紙店(松田建築事務所設計)	同	同
上宮中學校復興校舍に就て	板垣 鷹雄	同	馬事公苑(世田ヶ谷)	同	同	西堰亭(官休庵千宗守宗匠設計)	同	同
武藏高等工科學校移轉計劃	板垣 鷹雄	同	ボートコース(戸田)	同	同	新宿エビスビヤホール(佐藤茂次設計)	同	一五ノ九
新京阪雜考	板垣 鷹雄	同	ヨットコース(横濱)	同	同	三妻の非常時バラック事務所建築(三妻地所株式會社建築課設計)	同	同
日本文化の進出を期待す	牧野 正己	同	カスリーンコース(戸田)	同	同	糖業會館(渡邊節建築事務所設計)	同	同
強羅ホテルを主題とする感想	板垣 鷹雄	同	自轉車競技場(札幌)	同	同	K邸(青山)(山脇巖設計)	同	同
「國際建築」一九三九年建築隨筆	藏田 周忠	一五ノ一二	東京放送會館(山下壽郎建築事務所設計)	同	同	H邸(五反田)(山脇巖設計)	同	同
建築政策	板垣 鷹雄	同	森野商店(清水組設計部設計)	同	同	モニユマン特輯	柳 亮	一五ノ一〇
京都競馬場(安井武雄建築事務所設計)	板垣 鷹雄	同	月光莊(大澤謙吉設計)	同	同	建築に於けるモニユマンリズム	同	同
竹中工務店東京支店(竹中宏平設計)	同	同	縦育萬國博覽會カザードスペース(日本部)(山脇巖設計)	同	同	忠靈塔應墓圖案の設計について	佐藤 功一	同
東日會館(大倉土木株式會社建築部設計)	同	同	理研科學映畫株式會社(藤井組設計)	同	一五ノ四	ニューパークホテル(松島)(吉田五十八設計)	同	一五ノ一一
大陸經營と都市計畫の使命	吉村 辰夫	同	東京放送會館の防音構造	同	同	野村銀行品川支店(安井武雄設計)	同	同
日本の建築諸感	東山 一考	同	朝日映畫スタジオ(茂木清太郎設計)	同	同	野村銀行錦糸町支店(安井武雄設計)	同	同
第十二回オリムピック東京大會計畫案特許	同	同	東京市立築地産院(東京市建築部設計)	同	同	〇氏邸(山田昭設計)	同	同
東京オリムピック大會施設計畫と所感	小野 二郎	一五ノ二	平野屋	同	同	川崎市工員寮舎・労働宿泊所(川崎市役所營繕課設計)	同	同
念観技場計畫概要	同	同	東海堂別館(西谷健吉設計)	同	一五ノ五	東京市役所大手町廳舎(東京市役所建築部設計)	同	一五ノ一二
主観技場設計概要	同	同	石本氏邸(石本喜久治設計)	同	同			
オリムピック村建設計畫概要	同	同	都ホテル宴會場(村野建築事務所設計)	同	同			
			ライオンビヤホール(關師嘉彦設計)	同	同			
			三浦氏邸(土浦建築事務所設計)	同	同			
			洋畫家の住宅・山内氏邸(安田清設計)	同	一五ノ六			

U氏邸(大倉土木株式會社建築部設計)	新建築	一五〇/二二	建築時言
杉並區役所(東京市役所建築部設計)	同	同	日本銀行建築構造施工に就いて
建築立面と視覺的作用	同	同	大阪展を開催して
日本銀行増築工事(長野宇平治設計)	同	同	皇紀二千六百年奉讃事業と都市美
建築時言	同	同	巴里萬國博日本館について
荒木氏邸(野村茂治設計)	同	同	○
岩木氏邸(渡邊靜設計)	同	同	忠靈塔
一九三八年後期歐米新建築紹介(特輯)	同	同	忠靈塔
建築士の要義	同	同	工場と建築
朽木縣廳舎(佐藤功一設計)	同	同	忠靈塔と風景
大庄村役場(村野藤吾設計)	同	同	忠靈塔と文化
彌羅ホテル(土浦龜城設計)	同	同	二十一年後の東京
日魯漁業社員クラブ(醫師齋藤設計)	同	同	新緑
N邸(山脇嚴設計)	同	同	
新氏邸(松田軍平設計)	同	同	
防空建築規則の制定	同	同	
滿洲中央銀行總行(西村好時設計)	同	同	
神港ビルディング(木下益治郎設計)	同	同	
名古屋日本徵兵館(横河工務所設計)	同	同	
本會創立二十五周年を迎ふ	同	同	
工場建築の隆盛と建築士放送會館(山下壽郎設計)	同	同	
日本建築士會創立二十五周年を迎へて	同	同	
日本電力黑部川第二號堰堤及發電所(山口欽象設計)	同	同	
感想	同	同	
一九三九年前期歐米新建築紹介(特輯)	同	同	
新築・東京海上ビルディング(木下益治郎設計)	同	同	

編輯委員	水谷 武彦	圖畫と手	二四〇/一	編輯委員	尾崎 久助	日本建築	二五〇/五、六	新築(風岬論)	高村 豊周	沆工藝	一七〇/二一										
編輯委員	日本建築	二四〇/一	尾崎 久助	日本建築	二五〇/五、六	斷簡(風岬論)	高村 豊周	沆工藝	一七〇/二一	美	一四〇/一										
編輯委員	大阪展を開催して	皇紀二千六百年奉讃事業と都市美	巴里萬國博日本館について	忠靈塔	忠靈塔	工場と建築	忠靈塔と風景	忠靈塔と文化	二十一年後の東京	新緑											
編輯委員	忠靈塔	忠靈塔	工場と建築	忠靈塔と風景	忠靈塔と文化	二十一年後の東京	新緑	柳 亮	アトリエ	一六〇/二	伊東紅雲追悼	浮世繪界	四〇/二	工	藝	九六	柳 亮	アトリエ	一六〇/二	伊東紅雲追悼	
編輯委員	棟方志功論(特輯)	小宅二軒屋―加納部隊激戰の跡を偲んで―	奥村土牛論	南書鑑賞と翠雲先生	工藝と岡田先生	岡田さんと工芸美術	文展審査初舞臺の楠部彌次と清水正太郎	島野三秋樹(人物論)	自分を語る	柴崎風岬を語る	大島 豊一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
編輯委員	棟方志功論(特輯)	小宅二軒屋―加納部隊激戰の跡を偲んで―	奥村土牛論	南書鑑賞と翠雲先生	工藝と岡田先生	岡田さんと工芸美術	文展審査初舞臺の楠部彌次と清水正太郎	島野三秋樹(人物論)	自分を語る	柴崎風岬を語る	大島 豊一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
編輯委員	棟方志功論(特輯)	小宅二軒屋―加納部隊激戰の跡を偲んで―	奥村土牛論	南書鑑賞と翠雲先生	工藝と岡田先生	岡田さんと工芸美術	文展審査初舞臺の楠部彌次と清水正太郎	島野三秋樹(人物論)	自分を語る	柴崎風岬を語る	大島 豊一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
編輯委員	棟方志功論(特輯)	小宅二軒屋―加納部隊激戰の跡を偲んで―	奥村土牛論	南書鑑賞と翠雲先生	工藝と岡田先生	岡田さんと工芸美術	文展審査初舞臺の楠部彌次と清水正太郎	島野三秋樹(人物論)	自分を語る	柴崎風岬を語る	大島 豊一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

昭和十四年度美術文獻目録

季節を迎へて	佐波 市	みつゑ	四〇九	雑記帖	山本 鼎	教育美術	五ノ六、八、一一	この頃のこと	徳岡 神泉	塔影	一五ノ七
巴里日本人画家第一回展	瀧口 修造	同	四一〇	熱と力	辻 永	同	五ノ八	繪と心	榊原 紫峯	同	同
新しい時代について	荒城 季夫	同	四一四	風景畫	内田 巖	同	五ノ九	力の藝術	伊東 深水	同	同
理想と現實	同	同	同	斷章	伊藤 康	同	五ノ九	近時隨想	吉田 秋光	同	同
美術文化協會は何故に創立されたか	同	同	同	山莊日記	中村 善策	同	五ノ一一	日本畫の技法其他	杉浦 非水	同	同
戦争美術と身邊雜記	伊原宇三郎	同	四一六	自畫像	岩井彌一郎	現代美術	七ノ一	水の三題	菊地 松月	同	一五ノ八
第二次歐羅巴戰亂と日本の造形文化	横川毅一郎	同	四一八	東一の思ひ出	濱田 健一	同	同	蛇籠の記	上村 松園	同	同
關西日本畫壇展望	大	毎	五ノ六、七、三、四、七、八、九、一〇、一一、一二	醉後漫筆	牧野 虎雄	同	七ノ二	夏の景色	長野 草風	同	同
東京畫壇の展望	森口 多里	中	六〇・一七、一八、二〇	大島の話	堀口 捨巳	建築世界	三三ノ二	中支行あれこれ	川端 龍子	同	同
事變と畫壇	同	商	六〇・一七、一八、二〇	從軍日記	吉田 璋也	工 藝	九四	私の見た宮本武藏	石井 鶴三	同	同
伯林日本古美術展	柳 亮	東	七〇・八、九	琉球風物記	島海 青兒	造形藝術	一ノ二	阿蘇雜記	青木 大乗	同	同
萬國博への出品	藍田 均	東	七〇・七、六	畫家の關文字	正宗得三郎	同	同	思ふこと二三	宇田 荻郎	同	同
日伊文化協定を祝して	有島 生馬	同	三〇・五、一七	駱 駝	福田豊四郎	同	一ノ三	隨 想	山口 華楊	同	同
今年の美術界への回想	兒島喜久雄	同	三〇・六、七	半島所感	木村 莊八	同	一ノ四	私と動物	上村 松篁	同	同
日獨文化の交流	若山淳四郎	東	四〇・八、一〇、一一、一二	雲崗鎮の三日(繪と文)	堂本 印象	茶わん	一〇三	畫室偶語	山村 耕花	同	同
今年の美術界	相良 德三	同	一一・一七、一八	河郎の舎(芥川龍之介の遺稿と回想)	柳 瀨 正夢	中央公論	五四ノ三	上古土器を語る	荒井 寛方	同	同
從軍畫家は何を爲したか	柳 亮	都	六〇・三、三	其雜炊	津田 青楓	同	五四ノ五	佛畫に就て	松林 桂月	同	同
美術界の關取引—證券化した日本畫—	同	讀	一一・二二	繪事夜話	小 穴 隆一	同	五四ノ七	隨 感	梅原龍三郎	同	同
パリの日支人	松尾那之助	同	一〇・二七	雜 感	川 合 玉堂	同	五四ノ九	北京印象	田中昭哉州	同	同

身 邊 雜 記

愚 感	長谷川三郎	アトリエ	一六ノ二	えにし	八木岡春山	同	同	熱河の寫生	鳥羽 宗雄	美 育	七五ノ六
セザンヌ展その他	猪熊弦一郎	同	一六ノ六	娘の日本畫	望月 春江	同	同	問題の天津	同	同	一五ノ八
藝術精神について	長谷川三郎	同	一六ノ八	人の問に答ふ	朝倉 文夫	同	同	具體性	同	同	一五ノ九
安全週聞	瀧口 修造	同	一六ノ一〇	廣東から歸つて	兒玉 希望	同	同	詮索の興味	同	同	同
歸還報告	宮田 重雄	同	一六ノ一二	伊豆雜記	川島理一郎	同	同	畫室の言葉	同	同	同
都會の素描	小 熊 秀雄	同	一六ノ一三	中支行を前に	田中昭哉州	同	同	ものすき	同	同	同
兩國今昔(繪と文)	木村 莊八	改 造	二一ノ二	生のまゝに	川端 龍子	同	同	從軍日記の一節	同	同	同
女の智慧(繪と文)	桂 ゆき子	同	二一ノ五	畫室の中から	小 倉 遊龜	同	同	渡歐日記	同	同	同
デフォルマツション	中川 一政	同	二一ノ七	白牡丹を寫生して丈山を憶ふ	山 川 秀峯	同	同	同	同	同	同
四都競粧(繪と文)	小磯 良平	同	二一ノ九	山を描く	小室 翠雲	同	同	同	同	同	同
佛領印度支那紀行(繪と文)	長谷川春子	同	二一ノ一三	繚窓漫語	安井曾太郎	同	同	同	同	同	同
米國時代の想出	寺田 竹雄	教育美術	五ノ一	同	堅山 南風	同	一五ノ七	同	同	同	同

姫街道	鑓水 清方	東	朝	三〇元—三
私の相撲観	松林 桂月	同	五〇六—七	
藍の美しさ	竹内 栢風	同	六〇—一	
梅雨の感覺	郷倉 千毅	同	六〇六—六	
私の見た宮本武蔵	石井 鶴三	同	七三三—二	
新派と鏡花もの	鑓水 清方	同	九〇—九	
我が参戦記	野間 仁根	同	九二六—六	
私の参戦記	宮田 重雄	同	九二七—六	
かの子と和歌	岡本 一平	同	九二九—三	
化ケ物の出方	木村 莊八	東	三〇九—三、三	
名刺の肩書	島海 青兒	同	二〇二—三	
再び海外に出る私の心境	藤田 嗣治	同	四〇五—六	
四月の歌舞伎評	木村 莊八	同	四〇一—二	
六月の歌舞伎評	同	同	六〇一—四	
九月の劇壇評	同	同	九〇一—五	
十一月の劇壇評	中川 一政	同	一〇〇—一四	
怖がらない兄弟	木村 莊八	同	一一〇—一〇	
煙囪獨釣	中川 一政	同	一一〇—一〇	
不平いろいろ	野間 仁根	同	二二二—三	
畫人の言	木下 孝則	同	三三九—〇	
上田の町	榎山 大觀	報	知 三—二四	
漢口の風呂屋 (繪と文)	木村 莊八	每	夕 二〇—八—一〇	
從軍便り (繪・文)	山崎 坤象	同	二〇八—九	
	高橋英太郎	同	三三—五	
			二〇三、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	

病的繪畫斷想	式場隆三郎	美	術	一四〇—一
風景畫家の見た日本と北米	川島理一郎	美	術	街六〇—三
物故作家諸精霊の御出席による黄泉國美術院會議議事録	豊田 豊	美	術	眼三〇—四
鷗外の「獨逸日記」とエリウス・ユクステル	土方 定一	ア	ト	リエ 一六〇—一
同 想	藤本 韶三	同	同	一六〇—七
明治美術文献鈔	森口 多里	同	同	一一一—三
芳陣の諸作	檜崎 宗重	同	同	四〇二—二
清親筆源氏繪連幅	同	同	同	四〇二—四、
曉齋と末期浮世繪	吉野 建雄	同	同	七〇九—一、
夢二寶船の眞説を正す	永見徳太郎	同	同	四〇八—
ヴァインチェンツォ・ラグーザの回顧	隈元謙次郎	改	造	二一〇—五
續々反古の張り交ぜ—父を語る—	久保田金僊	畫	観	六〇一—、三
陶工乾也の話	石井 栢亭	畫	説	二八—
乾也問答	北原 大輔	同	同	同
「白樺」と「工藝」	藤本樂之軒	工	藝	九四—
岡倉天眞の生涯	柳 宗悅	造	形	藝術 一ノ一
青木繁の藝術	清見 陸郎	同	同	一ノ四—
國木田獨歩	正宗得三郎	同	同	一ノ四—
新聞美術記者今昔新	小杉 放庵	塔	影	一五〇—一〇
明治天皇と美術	田澤 田軒	同	同	三、五、七、八、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇

明治大正以降美術

佐伯祐三の藝術 山本發次郎 大 毎三、七、一六
 從軍畫家 村田 丹陵 東 朝四ノ九
 雅號の由来

川合玉堂、橋山大觀、安田寂彦
 石井柏亭、川端龍子、竹内栖鳳
 前田青郎、瀨木清方、結城素明
 小杉放庵、池上秀歌、小林古徑
 橋本關雪、六角紫水
 頼倫侯と史蹟名勝 伊東 忠太 同
 あゝ頃の美校 岡本 一平 同
 一〇・一四一六

外國現代美術

繪 畫

Picasso 1938 特輯
 ピカソの魔術的繪畫 クリスチヤン アトリエ 一六ノ三
 ゼルボス 同 同
 大島博光譯

自家言 デヨルデ・ 同
 ルオー 同
 古泉二郎譯

ピカソと現代繪畫の諸問 植村鷹千代 同
 一六ノ六

革新—新藝術時代 イラ・ルベイ 同
 一六ノ八

レオノオル・フィニの現 大森啓助譯 同
 同

實精神 山中 散生 同
 同

私の肖像 アムプロクーズ・ 同
 ゴアラール 同

ベルメユルの人形幻想 山中 散生 同
 一六ノ一

ナチス文化政策の一端 小塚新一郎 同
 一六ノ一三

現代支那美術の一断面 土方 定一 同
 同

フランシス・ドランの想ひ出 菅野 圭介 同
 同

オレギストンの想ひ出 梅原龍三郎 同
 改 造 二一ノ一三
 際して)
 北京の齊白石 綱井 克之 同
 フランス中堅作家の展望 中村 恒夫 同
 マチスに就て ジヤン・カスウ 同
 マチスあらべすく 林 達郎 同
 コルトオ街十二番地 大森 啓助 同
 ドランについて 佐波 甫 同

彫 刻

建設期に於ける獨逸彫刻の基調 加藤 顯清 同
 一六ノ四

マイヨールとブルデルに關する断片 本郷 新 同
 造形藝術 一ノ三

ザツキン訪問記 久保貞次郎 同
 みづゑ 四一九

北支の民藝 吉田 環也 同
 工 藝 九四

米國に於ける工藝事情 齋藤 信治 同
 工 藝 八ノ一

伊太利の新しい室内裝飾 伊藤 信治 同
 同

ベルリンに於ける國際手工業博覽會 同 同
 同

英國・博覽會の展示スタンド 同 同
 同

佛國・學校家具の問題 同 同
 同

米國・モダーン・プラスチック誌第三回商品コンクール授賞 同 同
 同

イタリアの工藝事情 宮下 孝雄 同
 八ノ三

南洋群島の工藝技術と材料 寺坂 毅 同
 八ノ四、五
 小川氏蒐集米國市場の電氣スタンド 同 同
 八ノ四
 ウイーン及びブダペストの工藝事情 宮下 孝雄 同
 八ノ五
 ドイツの工藝事情 同 同
 八ノ六
 ラウルデュファイ下給の椅子張 同 同
 八ノ七
 北歐工藝に關する断想 宮下 孝雄 同

建 築

佛國畫壇の現状 宮本 三郎 同
 讀 賣 一二・七

旅の記録 外山卯三郎 同
 同

フロイド主義と現代藝術 瀧口 修造 同
 同

米國のランプに就て 巴里の工藝事情 宮下 孝雄 同
 同

紐育萬博の展示と工藝 紐育の工藝事情 宮下 孝雄 同
 同

紐育の萬博を飾る「明日の材料」 同 同
 八ノ一〇

ラージュ・デ・ブラステク スイス博覽會 同 同
 八ノ一一

歐米構造界の近況(一九三七—三八年) 二見 秀雄 同
 建築雜誌 六四六

アフガニスタンに就て 近藤 正造 同
 同

滿洲國に於ける建築と研究 濱田 稔 同
 同

滿洲建築界の事情 笠原 敏郎 同
 同

滿洲國政府關係營繕に就て 桑原 英治 同
 同

桑港萬國博工事場の見聞 清水 一 同
 六五二
 北滿開拓地の建築 佐藤 武夫 同
 六五三
 北支視察談 佐野 利器 同
 六五四
 北支所感 武藤 清 同
 同

工 藝

マニラ視察談 本多 次郎 同
 同

紐育・桑港及羅馬萬博の會場計畫に就て 同 同
 同

桑港及紐育萬博見記 土岐 達人 同
 六五六、六

大同の都市計畫案に就て 内田 祥三 同
 同

紐育萬國博覽會 武基 雄 同
 同

北京の住宅 藏田 周忠 同
 建築世界 三三ノ一

北京郊外の民家 山本 祐弘 同
 同

北歐工作文化博覽會報告 小池 新二 同
 同

波蘭に於ける勞務者住居政策 同 同
 三三ノ七

近代圖書館の發達 笹川 正一 同
 同

メキシコ會議の報告書 同 同
 三三ノ一〇

ニューヨーク萬國博覽會 同 同
 同

一九三九年(特輯) 同 同
 同

工 藝

アメリカの問題 同 同
 三三ノ一一

ジュ・コルビエ 同 同
 同

支那に於ける都市防空緑化と防空建築理論の一般	東京市總務局 都市計畫課	建築世界	三三ノ一	一九四二年羅馬萬國博覽會場計畫に就いて	國際建築	一五ノ一〇	セザンヌの手紙	太田咲太郎	アトリエ	一六ノ四
紐育萬博プレビュー	ユース	建築世界	八ノ二	一九三九年紐育博と桑港金門博	同	同	ジェロム・ボオツシユ小論	瀧口 修造	同	一六ノ四
海外民家セクシオン	藏田 周忠	國際建築	二五ノ一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二	一九三九年羅馬萬國博覽會(圖版)	同	同	マネの手紙	富永 次郎	同	一六ノ五
國際情報	同	同	同	一九四二年羅馬萬國博覽會(圖版)	同	同	支那文化と支那藝術	シユエーラー	同	一六ノ五
グロビウスと建築教室	津路末治郎	同	一五ノ一	博覽會(圖版)	同	同	近代美術批評の變遷	荒城 季夫	同	一六ノ六
ハイゲートのアパートメント	松村 正恆	同	同	會(圖版)	同	同	ヴェネツィア繪畫の概観	摩壽意善郎	同	一六ノ六
ハイポイントアパート第二號	同	同	同	大洋に臨む二住宅設計概案	同	同	ラファエル論	植村鷹千代譯	同	一六ノ七
ストツクホルムのアパートメント	同	同	同	ライイトの四戶居住宅案	同	同	歐洲の不安とルーヴル	植村鷹千代譯	同	一六ノ七
借家人はアパートメントに何を要求するか	松村 正恆	同	同	パレスチナ建築の近代性	同	同	レムブラントの自畫像	勝木 喬	同	一六ノ八
新構法・ブライウツドの車輛	同	同	一五ノ三	ビータージョンズ百貨店セントダグスタンホーム(失明傷兵保養所)	同	同	現代美術の肉體性	村田 良策	同	一六ノ八
室内照明	同	同	同	新カジノのサーキュレーションと構造	同	同	セザンヌ私観	今泉 篤男	同	一六ノ一〇
計畫・明日の庭園	同	同	同	海外建築グラフ	同	同	二人の生誕百年祭—アルフレッド・シスレー、ハンス・トーマ	江川 和彦	同	一六ノ一一
Ladies Home Journal	同	同	同	コロビエ特輯	同	同	ドラクロアのパレット	三輪 福松	同	一六ノ一一
主催小住宅の懸賞設計	同	同	同	大上海計畫	同	同	ドガとロートレク	佐波 市	同	一六ノ一二
ノイトラ近作解説	同	同	一五ノ四	ローマ萬國博	同	同	東羅馬繪畫の傳播	何 初彦	同	一六ノ一二
建築のリーヂョナリズム	ノイトラ	同	同	山脇 巖	同	同	ヴァン・ゴッゴとゴッギヤンとルツソ	内山 義郎	同	一六ノ一三
瑞典に於ける現代建築の發達	松村 正恆	同	同	東 朝	同	同	オノレ・ドミエ	ルオ!	同	一六ノ一三
ストツクホルムの百貨店 Brudenberg	同	同	同	朝 八・四、云	同	同	ルーヴル立退き	武者小路實光譯	同	一六ノ一三
ストツクホルム建築者クラブ	同	同	同	朝 八・四、云	同	同	ローマ第一回「伊太利美術に現はれた飛行に關する」展覽會	大森 啓助	國際建築	一五ノ九
ヒンスプリーのヘルスセンター	同	同	一五ノ六	江川 和彦	同	同	希臘神像の發端—Xoanaに就て	村田 潔	思想	二〇五
新しい住宅の提案	同	同	同	大森 啓助	同	同	レオナルド・ダ・ヴィンチ展	兒島喜久雄	同	二〇六、二〇八
科學博物館計畫	同	同	同	コキヨ	同	同	レムブラントとその一派の筆技	エイ・ビー・ロウレイ	新建築	一五ノ一二
新提案「クライマトリウム」ナントの貯水所	同	同	同	横川 文雄譯	同	同	顯彰と慰靈のミニユマン	川口 雄男譯	同	一ノ一一三
Hollandの郊外住宅設計概要	同	同	一五ノ七	今泉 篤男	同	同	ウワイヂのチントレット素描集	森口 多里	同	一ノ三
ハリウツドのNBC放送局	同	同	同	山本 夏彦譯	同	同	マテイアス・グリユーネ	須田國太郎	同	一ノ三
MGMトーキースター	同	同	同	植村鷹千代	同	同	ワルトに就て	今泉 篤男	同	一ノ四
新託見所建築	松村 正恆	同	一五ノ九	同	同	同	同	同	同	一ノ四

其他外國美術

セザンヌへの感想	園見 富雄	美術	一四ノ一〇	中世紀の藝術	中井 あい	四一八、 四一九、 四二一	自由美術展	林 達郎	美之國 一五ノ六
セザンヌに就て	伊藤 廉	同	同	自由美術第三回展	江川 和彦	四二一	自由美術第三回展	江川 和彦	美之國 一五ノ六
不遇なる先驅者	有島 生馬	同	同	自由美術第三回展	大口 珪夫	四二一	自由美術第三回展	大口 珪夫	美之國 一五ノ六
セザンヌ	安井曾太郎	同	同	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
晩年のセザンヌ	荒城 季夫	同	同	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
アトリエに於けるセザンヌ	荒城 季夫	同	同	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
ス	ジョワキム	同	同	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
パリーの畫商	久保貞次郎	美之國	一五ノ八	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
現代佛國美術家の肖像	大森 啓助	同	四〇八	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
セザンヌ覚え書	中井 あい	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
夜たちの手帳	マリイ・ロ	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
レンブラントの製絨組合	石郷 幹子	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
レンブラントの人と作品	石郷 幹子	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
レンブラントの解剖學講	荒城 季夫	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
義	荒城 季夫	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
コンスタンタン・ムウニ	荒城 季夫	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
讀み易い手帳	カルト・セ	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
イタリア文藝復興期の繪	リグマン	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
畫	ジュルニエ	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
ボール・ゴーガン	摩壽意善郎	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
レオナルド・ダ・ヴィンチ	佐波 市	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
の素描	山中 散生	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
エツアール・マネ研究	荒城 季夫	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
ブリュッセル美術館のル	荒城 季夫	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
ーベンス	フロマンタン	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
ジョルジオネ訪ねるき	三輪 福松	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
美術の聞周	宇野 俊郎	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
吾輩の肖像畫	大久保 泰	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
セザンヌの美學	大久保 泰	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
藝術の原始様式の本質	大久保 泰	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
序説	大久保 泰	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
ロダンの豫言	大久保 泰	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
デッサンの近代的發展と	大久保 泰	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
ピサネロのデッサン	大久保 泰	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
ドラクロアの美學	大久保 泰	同	四〇九	自由美術第三回展	今泉 篤男	四二一	自由美術第三回展	今泉 篤男	美之國 一五ノ六

展覽會記事及批評

綜合展覽會

大阪新美術家同盟第六回展
 京都市美術展
 京都市展の日本畫
 京都市展
 第四回京都市美術展
 京都市展評

現代美術展
 現代美術第二回展
 現代美術展覽會の印象
 國畫會展
 國展評

國展の版畫
 國展彫刻の新人
 國展入選作品評
 國展の彫刻

國畫會展評
 國畫會展評
 作畫態度より見たる國
 自由美術展
 自由美術家第三回展

金門博の奇觀
 兒島喜久雄

東 朝九・云一七

美之國 一五ノ一二

井上 覺造

美之國 一五ノ一六

芝 清福

吉副 龍三

富田 啓子
 大口 珪夫
 尾川 多計
 柳川 仁一
 鈴木 新
 本郷 新一
 別府貫一郎
 大藏 雄夫
 荒城 季夫
 佐波 市
 福島繁太郎

自由美術展	林 達郎	美之國 一五ノ六
自由美術第三回展	江川 和彦	美之國 一五ノ六
自由美術第三回展評	大口 珪夫	美之國 一五ノ六
自由美術展を觀る	今泉 篤男	美之國 一五ノ六
主線美術協會展彫刻評	大藏 雄夫	美之國 一五ノ五
新興美術協會展(昭和十三年)	三輪 福松	美之國 一五ノ三
新美術家協會第四回展	三輪 福松	美之國 一五ノ三
新制作派展	嘉門 安雄	美之國 一五ノ三
新制作派展評	實田 新	美之國 一五ノ三
新制作派の彫刻	遠山 孝	美之國 一五ノ三
一水會、新制作派展評	尾川 多計	美之國 一五ノ三
一水會と新制作派	土方 定一	美之國 一五ノ三
新制作派と一水會	今泉 篤男	美之國 一五ノ三
新制作派展評	今泉 篤男	美之國 一五ノ三
清光會展	福吉 一郎	美之國 一五ノ三
清光會展	三輪 福松	美之國 一五ノ三
清光會第六回展	大山 廣光	美之國 一五ノ三
清光會第六回展	藤森 順三	美之國 一五ノ三
清光會展	須山 亮一	美之國 一五ノ三
清光會展	須山 亮一	美之國 一五ノ三
聖戰美術展	兒島喜久雄	美之國 一五ノ三
聖戰美術展洋畫評	齋田 素州	美之國 一五ノ三
聖戰美術展の日本畫	林 達郎	美之國 一五ノ三
聖戰美術展	大藏 雄夫	美之國 一五ノ三
聖戰美術展を觀る	中村 研一	美之國 一五ノ三
聖戰美術展	石井 柏亭	美之國 一五ノ三
聖戰美術展	兒島喜久雄	美之國 一五ノ三
太平洋畫會展	安田 豊	美之國 一五ノ三
太平洋畫會展	安田 豊	美之國 一五ノ三
太平洋第三十五回展	淺野 利真	美之國 一五ノ三
太平洋畫會第三十五回展	江川 和彦	美之國 一五ノ三
筑前美術展	三品 照子	美之國 一五ノ三
筑前美術第六回展	須山 亮一	美之國 一五ノ三
筑前美術第六回展	須山 亮一	美之國 一五ノ三

朝鮮美術展
朝鮮美術第十八回展の
検討
入江 波光
權藤 種男
藤村 彦四郎
矢澤 弦月
伊原 宇三郎
高村 豊周

畫 觀六ノ六
美術院と青龍社の繪を
語る
田中 治重子
三成 重敏
脇本 樂之軒
大口 理夫
水澤 澄夫
三輪 啓子
富田 啓子
神崎 憲一

畫 說三四
文展洋畫評
文展に現れた新人の傾
向
文展日本畫の新しい傾
向に就て(對談)
文展評(各部)

日本美術院展
畫 影一五ノ四
美之國 一五ノ七
塔 影一五ノ四
アトリエ 一六ノ一一
同 同
同 同

畫 觀六ノ六
美術院と青龍社の繪を
語る
田中 治重子
三成 重敏
脇本 樂之軒
大口 理夫
水澤 澄夫
三輪 啓子
富田 啓子
神崎 憲一

畫 觀六ノ六
美術院と青龍社の繪を
語る
田中 治重子
三成 重敏
脇本 樂之軒
大口 理夫
水澤 澄夫
三輪 啓子
富田 啓子
神崎 憲一

畫 觀六ノ六
美術院と青龍社の繪を
語る
田中 治重子
三成 重敏
脇本 樂之軒
大口 理夫
水澤 澄夫
三輪 啓子
富田 啓子
神崎 憲一

畫 觀六ノ六
美術院と青龍社の繪を
語る
田中 治重子
三成 重敏
脇本 樂之軒
大口 理夫
水澤 澄夫
三輪 啓子
富田 啓子
神崎 憲一

畫 觀六ノ六
美術院と青龍社の繪を
語る
田中 治重子
三成 重敏
脇本 樂之軒
大口 理夫
水澤 澄夫
三輪 啓子
富田 啓子
神崎 憲一

畫 觀六ノ六
美術院と青龍社の繪を
語る
田中 治重子
三成 重敏
脇本 樂之軒
大口 理夫
水澤 澄夫
三輪 啓子
富田 啓子
神崎 憲一

畫 觀六ノ六
美術院と青龍社の繪を
語る
田中 治重子
三成 重敏
脇本 樂之軒
大口 理夫
水澤 澄夫
三輪 啓子
富田 啓子
神崎 憲一

畫 觀六ノ六
美術院と青龍社の繪を
語る
田中 治重子
三成 重敏
脇本 樂之軒
大口 理夫
水澤 澄夫
三輪 啓子
富田 啓子
神崎 憲一

昭和十四年度美術文獻目錄

燐土社展	燐土社第五回展	多田 信一	アトリエ	一六ノ五	同	春虹會第五回展評	多田 信一	アトリエ	一六ノ四	青龍社展(春季)	青龍社第七回展	多田 信一	アトリエ	一六ノ五
同	同	豊田 豊	塔 影	一六ノ五	同	同	淺野 利真	美之國	一五ノ四	同	同	神崎 憲一	塔 影	一五ノ六
同	同	岩佐 新	美 術	一四ノ五	同	昭華會展	本田 純一	同	一五ノ二	同	同	鈴木 武久	美 術	街一四ノ五
同	同	須山 亮一	美之國	一五ノ五	同	如水游心畫第三回展	富田 啓子	塔 影	一五ノ八	同	同	大山 廣光	美 術	街六ノ四
近藤浩一路第五回個展	神崎 憲一	美之國	一五ノ二	二	新寬會大阪第二回展	新寬會展	神崎 憲一	同	一五ノ五	同	同	豊田 豊	美術眼	三ノ五
崑山堂五周年記念新作畫展	同	同	同	一五ノ八	新寬會第四回展	新寬會第四回展	吉副 頼三	アトリエ	一六ノ一三	青龍社展(秋季)	二科、美術院、青龍社評	諸 家	アトリエ	一六ノ一一
早苗會展	吉副 頼三	アトリエ	一六ノ七	同	同	同	神崎 憲一	塔 影	一五ノ一二	同	同	柳 亮	同	同
早苗會小品畫展	大森 富平	塔 影	一五ノ五	同	同	同	吉副 頼三	美之國	一五ノ一二	同	同	秋川 敏夫	同	同
早苗會展	吉副 頼三	美之國	一五ノ七	同	新興美術院展	新興美術院展	三輪 鄰	塔 影	一五ノ六	美術院と青龍社	美術院と青龍社の繪を語る	田中治瑠子	畫 說	三四
佐藤梅軒畫廊新作畫展	淺野 利真	美之國	一五ノ七	同	新興美術院第二回展	新興美術院第二回展	金井 紫雲	美 術	一四ノ五	青龍社第十一回展	青龍社第十一回展	豊田 豊	現代美術	七ノ一
彩交會第二回展	神崎 憲一	塔 影	一五ノ七	同	同	同	大山 廣光	美 術	街六ノ四	青龍社評	青龍社評	鈴木 進	造形藝術	一ノ二
綵尙會展	杉浦 冷石	同	一五ノ四	同	同	同	豊田 豊	美術眼	三ノ五	院展、青龍展、大輪展、	明助展評	神崎 憲一	塔 影	一五ノ一〇
綵尙會第一回展評	多田 信一	アトリエ	一六ノ四	同	新興美術院同人小品展	新興美術院同人小品展	江川 和彦	美之國	一五ノ五	青龍社第十一回展	青龍社第十一回展	三輪 鄰	同	同
同	富田 啓子	塔 影	一五ノ四	同	新美術人協會展	新美術人協會展	三輪 鄰	塔 影	一五ノ一二	青龍社第十一回展	青龍社第十一回展	富田 啓子	同	同
三樹會第三回展	辻本和兵衛	同	一五ノ九	同	同	同	大口 環夫	アトリエ	一六ノ七	院展と青龍社	院展と青龍社	大島 隆一	美術街	六ノ九
三樹會第三回展	富樫 木人	同	同	同	同	同	多田 信一	アトリエ	一六ノ七	青龍展評	青龍展評	諸 家	美術評論	八ノ五
同	同	同	同	同	同	同	淡 宇信	塔 影	一五ノ八	青龍展評	青龍展評	藤森 順三	同	同
同	同	同	同	同	同	同	今井繁三郎	美 術	街六ノ七	院展と青龍展	院展と青龍展	富田 啓子	同	同
同	同	同	同	同	同	同	三輪 鄰	美之國	一五ノ七	院展青龍社見物記	院展青龍社見物記	横川毅一郎	美之國	一五ノ九
同	同	同	同	同	同	同	吉副 頼三	みづゑ	四一五	〇	〇	富澤有為男	文藝日本	一ノ五
同	同	同	同	同	同	同	三品 照子	アトリエ	一六ノ一三	青龍社、院展評	青龍社、院展評	牧野 吉晴	同	同
燐木社展	燐木社第十四回展	三品 照子	塔 影	一五ノ八	同	同	三品 照子	塔 影	一五ノ六	青龍社、院展評	青龍社、院展評	木村 莊八	東 日	九・七、八
燐木社展	本田 純一	美之國	一五ノ七	同	同	同	神崎 憲一	同	一五ノ五	青龍社第十一回展評	青龍社第十一回展評	田澤 田軒	每 夕	九・一〇、一三、一四
七絃會展	藤森 順三	美術評論	八ノ七	同	同	同	淺野 利真	美之國	一五ノ四	關尙美堂新作畫展	關尙美堂新作畫展	富田 啓子	塔 影	一五ノ九
七絃會展	林 達郎	美之國	一五ノ一二	同	同	同	三品 照子	美之國	一五ノ九	疎約會第一回展	疎約會第一回展	大森 富平	同	同
七難會第二回展	大森 富平	塔 影	一五ノ九	同	同	同	吉副 頼三	アトリエ	一六ノ五	早春社展	早春社展	吉副 頼三	同	同
自有俱樂部第一回小品展	同	同	同	同	同	同	神崎 憲一	塔 影	一五ノ五	早春社第二回展	早春社第二回展	辻本和兵衛	同	同
朱弦會第一回展	三輪 鄰	同	一五ノ四	同	同	同	黒田憲一郎	アトリエ	一五ノ一〇	早春社展	早春社展	吉副 頼三	美之國	一五ノ四
同	本田 純一	美之國	一五ノ二	同	同	同	神崎 憲一	同	一五ノ一〇	早春社展	早春社展	富田 啓子	塔 影	一五ノ四
樹人社展	同	同	同	同	同	同	神崎 憲一	同	一五ノ四	早春社展	早春社展	三品 照子	同	同
樹人社第二回展	神崎 憲一	塔 影	一五ノ一〇	同	同	同	本田 純一	美之國	一五ノ四	早春社展	早春社展	神崎 憲一	同	同
同	吉副 頼三	美之國	一五ノ八	同	同	同	杉浦 冷石	塔 影	一五ノ八	早春社展	早春社展	大森 富平	同	同
春虹會展	同	同	同	同	同	同	豊田 豊	同	同	大日美術院展	大日美術院展	三輪 鄰	同	同
										大日美術院第三回展	大日美術院第三回展	同		一五ノ八

大日美術院第三回展	中村 恆雄	美術街六ノ七	讀畫會第三十二回展	大山 廣光	美術街六ノ六	白御會展	富田 時郎	美術評論 八ノ四
同	江川 和彦	美之園 一五ノ七	同	金井 紫雲	美術街三ノ七	同	須山 亮一	美之園 一五ノ七
大美第十二回展	大森 富平	塔 影 一五ノ七	巴會第三回展	本田 純一	美之園 一五ノ六	白閃社展	富田 啓子	塔 影 一五ノ一〇
大輪畫院展(春季)	多田 信一	アトリエ 一六ノ六	中尾白仲第四回個展	添田 達嶺	同 影 一五ノ八	柏舟社展	吉副 賴三	アトリエ 一六ノ二
大輪畫院第一回春季展	豊田 豊	塔 影 一五ノ七	中川一政扇面畫展	齋田 素州	同 一五ノ二	柏舟社第一回展	三輪 鄰	塔 影 一五ノ三
同	同	同	中村岳陵個展	齋田 素州	同 一五ノ二	橋本多聞洞新作畫展	豊田 豊	同 一五ノ九
大輪畫院展(秋季)	三輪 鄰	同	中村岳陵個人展	三輪 鄰	アトリエ 一六ノ一三	橋本關雪聖戰記念展	川路 柳虹	同 一五ノ一
大輪畫院第二回展	神崎 憲一	同	中村岳陵第一回個展	豊田 豊	塔 影 一五ノ一二	橋本關雪聖戰記念展	本田 純一	同 一五ノ一
院展、青龍展、大輪展、	明助展評	同	中村岳陵個展	林 達郎	美術殿七ノ一二	同	杉浦 冷石	塔 影 一五ノ九
高島屋東西名家新作邦畫	三輪 鄰	同	中村大三四郎畫東京展	三輪 鄰	美之園 一五ノ一二	橋本靜水個展	富田 啓子	同 一五ノ六
高島屋統合記念展(大阪)	大森 富平	同	中村大三郎畫東京展	田澤 田軒	同 一五ノ八	美之園社東西大家新人展	富田 啓子	同 一五ノ八
高須芝山個展	三品 照子	同	中村大三郎畫東京展	本田 純一	美術 一四ノ七	平林清輝第四回佛畫展	富田 啓子	同 一五ノ八
竹原囀風個展	豊田 豊	同	同	黒田憲一郎	美之園 一五ノ七	福井游神堂新作畫展	神崎 憲一	同 一五ノ五
同	本田 純一	同	同	黒田憲一郎	塔 影 一五ノ八	福陽美術展	豊田 豊	同 一五ノ二
谷口富美枝第一回個展	三輪 鄰	美之園 一五ノ七	南畫塾盟展	秋川 徹夫	アトリエ 一六ノ八	福陽美術第十回展	添田 達嶺	同 一五ノ一〇
丹阿彌岩吉個展	豊田 豊	同	南畫塾盟展	齋田 素州	塔 影 一五ノ九	同	本田 純一	美之園 一五ノ八
丹阿彌岩吉第四回展	富田 啓子	同	同	豊田 豊	美術殿三ノ八	二葉會第三回展	大森 富平	塔 影 一五ノ九
朝陽社第一回展	同	同	同	淺野 利真	美之園 一五ノ八	船田玉樹、丸木位里二人展	富田 啓子	同 一五ノ二
都筑眞琴第二回個展	同	同	南畫鑑賞會第六回展	三品 照子	塔 影 一五ノ九	船田・丸木個人展	今井繁三郎	美之園 一五ノ一
月岡玉壽能畫展	同	同	南潮社第一回展	加藤 紫雲	美之園 一五ノ一二	古川北華個展	藤森 成吉	アトリエ 一六ノ七
辻永油彩花卉展	同	同	日佛畫堂現代水墨畫展	豊田 豊	塔 影 一五ノ一二	古川北華個展	山口 玄珠	塔 影 一五ノ八
戸田觀美堂新作畫展	同	同	日本畫院展	多田 信一	アトリエ 一六ノ六	同	外狩素心庵	塔 影 一五ノ五
東丘社展	吉副 憲一	アトリエ 一六ノ五	日本畫院創立展	金井 紫雲	塔 影 一五ノ七	同	三輪 鄰	同
同	神崎 憲一	塔 影 一五ノ五	日本畫院第一回展	豊田 豊	美術 一四ノ六	同	多田 信一	アトリエ 一六ノ五
同	吉副 賴三	美之園 一五ノ五	日本畫院第一回展	吉村 忠夫	美術 一四ノ六	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五
東京會新作畫展	富田 啓子	塔 影 一五ノ七	日本畫院第一回展	今井繁三郎	美之園 一五ノ五	同	多田 信一	アトリエ 一六ノ五
東京會展	林 達郎	美之園 一五ノ一二	日本美術院々友展(松坂屋)	豊田 豊	同 一五ノ六	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五
融紅鸞個展	大森 富平	塔 影 一五ノ七	日本美術院同人展(松坂屋)	同	同 一五ノ六	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五
同調會第二回展	三品 照子	同	院展同人第六回展	富田 啓子	塔 影 一五ノ五	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五
堂本印象作畫展	富田 啓子	同	同	豊田 豊	美術殿三ノ五	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五
堂本印象作宗教美術及寺	豊田 豊	同	同	本田 純一	美之園 一五ノ四	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五
院模繪展	三品 照子	同	同	豊田 豊	塔 影 一五ノ二	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五
常盤會第一回展	同	同	日本美術協會第九回展	同	同 一五ノ二	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五
德來莊新作畫展	同	同	日本美術新報社新作畫展	三品 照子	塔 影 一五ノ九	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五
讀畫會展	同	同	白御會展	同	同 一五ノ九	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五
讀畫會第三十二回展	豊田 豊	同	白御會展	同	同 一五ノ九	同	三輪 鄰	塔 影 一五ノ五

陽春日本畫作品評(戊辰會、新興美術院展)

仁木 烈

美之園 一五ノ五
美術街六ノ四
美術街三ノ五

○

戊辰會の再出發	外狩素心庵	中	商四〇・一、二	山元春舉追悼早苗會展	神崎 憲一	塔	影	一五ノ八	一水會、新制作派展評	遠山 孝	帝大新聞	一・二七
芳美展	本田 純一	美之國	一五ノ二二	山本倉丘個展	同	同	同	一五ノ二二	一水會と新制作派	尾川 多計	東	一・二七
北斗會展	吉副 賴三	アトリエ	一六ノ二二	櫻木蒼花并展	吉副 賴三	アトリエ	影	一六ノ二二	新制作派と一水會	土方 定一	都	二・二六、二八
北斗會第一回展	大森 富平	塔	影	凌雲會新作展	杉浦 冷石	同	同	一五ノ九	一水會展評	今泉 篤男	讀	一・二八
斑社第三回展	三品 照子	同	同	歷程試作第一回展	三品 照子	同	同	一五ノ八	岩清水義見、松尾隆成遺作展	柳 亮	手	二四〇
松坂屋代表大家展(名古屋)	杉浦 冷石	同	同	歷程美術展	富田 啓子	同	同	一五ノ六	内田嚴個展	同	アトリエ	一六ノ七
松坂屋新作家展(同)	同	同	同	歷程美術寸感	荒城 季夫	アトリエ	影	一六ノ一〇	同	同	同	同
松坂屋新作畫展(上野)	同	同	同	歷程美術第二回展	富田 啓子	塔	影	一五ノ一〇	旺玄社展評	江藤 純平	美術眼	三ノ四
松島畫舫新作畫展	三輪 鄰	同	同	同	太田 眞一	美術眼	三ノ八	同	同	江川 和彦	みつゑ	四一
松林桂月個展	吉副 賴三	美之國	一五ノ四	同	馬場 和夫	同	同	北川民次個展	同	同	同	四一四
萬壽堂、昭和堂新作畫展	富田 啓子	塔	影	同	同	同	同	北島淺一個展	同	同	同	四一〇
三輪晃勢個展	神崎 憲一	同	同	助峰畫藝第九回展	金井 紫雲	塔	影	一五ノ一一	九室會第一回展	同	同	同
三越新進作家日本畫展	豐田 豐	同	同	同	大山 廣光	美術街	六ノ九	同	同	同	同	同
三越東都十大家展(神戸)	神崎 憲一	同	同	同	富田 時郎	美術評論	八ノ五	同	同	同	同	同
三越日本畫小品展	齋田 素州	同	同	六旺會第二回展	三品 照子	塔	影	一五ノ八	同	同	同	同
三越日本畫展	本田 純一	美之國	一五ノ九	渡邊大處第四回個展	同	同	同	一五ノ九	原生社第三回展	同	同	同
水田祝山個展	大森 富平	塔	影	雜	同	同	同	現代女流美術展	同	同	同	同
水田竹園第一回個展	瀧田 達嶺	同	同	五月の日本畫壇	今井繁三郎	美之國	一五ノ六	小磯良平個展	小磯良平個展	同	同	同
宮崎井南居新作畫展	神崎 憲一	同	同	春の中京畫壇	杉浦 冷石	塔	影	一五ノ五	小松義雄抽象繪畫展	同	同	同
明則美術展	豐田 豐	同	同	伊藤慶個展	同	同	同	光風會展	光風會展	同	同	同
明則美術第六回展	神崎 憲一	同	同	伊藤慶個展	同	同	同	光風會第二十六回展	光風會第二十六回展	同	同	同
院展、青龍展、大輪展、明則展評	藤森 順三	美術評論	八ノ五	伊藤慶個展	須山 亮一	美之國	一五ノ七	同	同	同	同	同
森守明個展	神崎 憲一	塔	影	同	荒城 季夫	みつゑ	四一五	光風會新人評	光風會新人評	同	同	同
森田沙夷第一回個展	吉副 賴三	美之國	一五ノ八	同	佐波 甫	美之國	一五ノ一一	國展新人展	國展新人展	同	同	同
八木博第二回個展	杉浦 冷石	塔	影	同	同	同	同	三春會展	三春會展	同	同	同
八木岡春山新作畫展	三品 照子	同	同	同	福吉 一郎	アトリエ	一六ノ八	四行會第八回展	四行會第八回展	同	同	同
八木岡春山新作畫展	豐田 豐	同	同	同	本田 純一	美之國	一五ノ八	朱葉會第二回展	朱葉會第二回展	同	同	同
同	須山 亮一	美之國	一五ノ六	一水會展(十三年度)	同	同	同	同	同	同	同	同
同	三輪 鄰	塔	影	一水會の入選畫に就て	石井 柏亭	教育美術	五ノ一	春陽會展	春陽會展	同	同	同
山口蕙春個展	同	同	同	新制作派協會展、一水會展合評	川端 信實	美術	一四ノ一	春陽會第十七回展	春陽會第十七回展	同	同	同
山口蕙春第二回個展	多田 信一	アトリエ	一六ノ六	同	朝井開右衛門	みつゑ	四〇八	無素描と偏屈趣味	無素描と偏屈趣味	同	同	同
同	横川毅一郎	美術	一四ノ六	一水會第二回展	荒城 季夫	みつゑ	四〇八	春陽會第十七回入選畫	春陽會第十七回入選畫	同	同	同
同	三輪 鄰	みつゑ	四一四	一水會展評	北川 桃雄	アトリエ	一六ノ一三	同	同	同	同	同

昭和十四年度美術文獻目錄

洋畫展覽會

○

上社會展

上社會第十二回展

伊井 太郎 アトリエ 一六ノ五
藤岡 一 美 術 一四ノ五
森 寅雄 美之國 一五ノ五

新制作派展(十三年度)

新制作派展の感想

新制作派第三回展

新制作派協會展、一水會展合評

新制作派第三回展

新美術家協會展を見る

新美術家協會第十一回展

セクシヨナダール洋畫展

全關西洋畫展評

創記美術展覽會

霜林會第一回展

高木勇次個展

東光會展

東郷青兒個展(三月)

東郷青兒個展(六月)

獨立美術協會展

獨立展評

獨立美術展を觀る

日本水彩畫會展
日本水彩畫會第廿六回展

日本彫塑協會第廿三回展

長谷川春子個展

長谷川春子個展

萩谷巖個展

麥陽會第四回展

三木辰夫、染木照、橋口康雄版畫三人展

森芳雄個展

森芳雄個展

留加會展

連袖會展

連袖會第二回展

脇田和個展

脇田和個人展

渡邊進個展

雜

五月の洋畫陣

展覽會月評會

日本彫影協會

福吉 一郎 同 一六ノ六
中川 紀元 教育美術 五ノ六
安田 豊 美 術 一四ノ六

本田 純一 美之國 一五ノ三

江川 和彦 みづゑ 四一〇

同 同 四一四

同 同 同

同 同 同

本所 虎夫 アトリエ 一六ノ八

今井繁三郎 美之國 一五ノ七

木下 義謙 美 術 一四ノ七

磯 伊之助 アトリエ 一六ノ五

福澤 一郎 美 術 一四ノ五

林 達郎 アトリエ 一六ノ一三

山崎 省三 美之國 一五ノ一二

今井繁三郎 美之國 一五ノ六

荒城 季夫 みづゑ 四一六

江川 和彦 同

福澤 一郎等 同

浦崎 永錫 美 術 一四ノ一二

本所 虎夫 アトリエ 一六ノ六

木彫會の彫刻

今秋の彫刻展評

三部會、二科、院展の彫刻

工藝展覽會

新井謙也作陶展

宇野三吾作陶展

大阪工藝振興展覽會

大阪工藝振興展(於大丸)

河井寛次郎作陶展

關東府縣聯合工藝品第六回展示會

九州沖繩各縣聯合工藝試作品第六回展覽會

近畿聯合工藝展覽會

工人社展

工人社展

同

同

同

同

同

大藏 雄夫 美之國 一五ノ五
中村 恆夫 造形藝術 一ノ二
大藏 雄夫 美之國 一五ノ九

富屋 木人 汎工藝 一七ノ八

同 同 一七ノ六

同 同 一七ノ一〇

同 同 一六ノ八

同 同 八ノ一〇

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

彫刻展覽會

朝倉彫塑藝第十二回展

構造社展

構造社第十二回展

日本彫刻家協會展

日本彫刻家協會展

商工省工藝指導所研究試
作品展示會(關西)
新興代用品展覽會(大阪)

創工社第三回展
代用品工業振興第二回展
概況

代用品巡回展覽會(東京)
中國、四國九縣聯合工藝
第六回展覽會

東北、北海道工藝第十回
展覽會

東北、北海道輸出向見本
展示會

日本陶藝研究會展
日本陶藝研究會第一回
展

同
同
同
同
同

日本陶彫協會第一回展
貿易局第一回工藝品輸出
振興展概況

貿易局輸出工藝圖案展
輸出工藝圖案第一回展
概況

輸出工藝圖案第一回展
入賞品試作
貿易局輸出工藝圖案第
一回展覽會

同
同
同
同
同

北信輸出工藝第六回展
三越家具展評
躍進セロイド展覽會

躍進代用品展覽會
輸出雜貨海外競争品展
示會

麗松會漆藝展

柴崎 風岬

汎工藝 一七〇四

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

紙上美術展
伊太利展を觀る

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

文藝日本 一ノ五、六
文展審査員の銓衡を見て
文展問題を中心として
(座談會)

田澤 田軒 美之國 一五ノ八

尾川 篤男 みつゑ 四一七

横川 毅一郎等

荒城 季夫 朝 一〇・三一

尾川 多計 東 日七・一九

川路 柳虹 報 知一〇・二四

正木 直彦 一八

柳 善郎 讀 六・九、一

長興 善郎 讀 〇・一二

柳 亮 讀 一・二三

戸川 行男 改 造 二一ノ二

芝田 徹心 同 學校美術 一三ノ一

赤津 隆助 同 同 一三ノ一、

多賀谷 健吉等 同 二

武井 勝雄 同 一三ノ一

森 壽正 同 一三ノ一、

三苫 正雄 同 一三ノ二

岡田 清 同 同 一三ノ二

學校美術研 究部 同 一三ノ二

和田 三造 同 一三ノ三、

和 同 四

本間 良助 同 一三ノ四

森田 龜之助 同 一三ノ五

松原 郁二 同 同 一三ノ六

滋賀多喜雄 同 同

品田 義雄 同 同

六郷 克二 同 同

藤本多賀喜 同 同 一三ノ七

同

同

行政及教育

行政關係

文展當局への希望
文展への希望
文展と美術家
商工省の機構改革
關西支所と輸出振興
關西支所の使命と方針
シュレマン夫人の來朝
と内地視察旅行
文展改革論
文展第四部審査員に就て
文展第四部審査員の一研
究
文展の工藝はどう進んで
来たか
文展無鑑査の制度に就て
第一回藝術學會及同公開
講演會
文展とはどんなものか、
官展は如何あるべきか
(座談會)

田澤 田軒 現代美術 七ノ一

遠山 孝 同 同

岩佐 新 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

教育

官展と在野展の問題

文展の審査員
文展・休止すべし

博物館に望む
文展審査への疑義

低能児の繪
國民學校案藝能科中圖書
及び作業に關する意見書
圖書手工教育家に望む
圖書手工教育刷新振興協
議會速記録
構作科に於ける美的情操
陶冶
高等教員圖書檢定試驗
造形教育の諸問題
構作科第二階程に入る
圖書手工教育具體案
圖書教師の修養
定見無き手工教育界
圖書力と圖書文化
美術家と圖書教育家
圖書教育への偶感
圖書教育の刷新に就て
造形教育の爲の科學的鍛
鍊
批判者の立場から
中等圖書教科書に對する
希望

柳 亮 讀 六・九、一

同 讀 〇・一二

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

同 讀 一・二三

雜

中等圖畫教育界健在なり 藝術的であると共に科學 的であれ	岡田 清	學校美術	一三ノ七	東京市圖畫教育の將來に 對する要望	佐藤平太郎	教育美術	五ノ二、三	追悼故松崎健藏君	武井 勝雄	工圖畫と手	二三九
圖案指導への反省	長谷部 清	同	同	對することの圖畫教育	篠原 助市	同	五ノ四、五	松崎健藏君を悼む	淺野 秀一	同	同
圖畫手工教育界の動向	佐藤 十蟻	同	同	篠原助市博士を圍むで	西田 秀雄	同	五ノ五	時局と圖畫教育	倉田 三郎	同	二四〇
美と機能の限界	室 靖	同	九一三ノ七	圖畫と民族性	三苦 正雄	同	五ノ七	時局と手工教育	光岡 始	同	同
文教機構強化運動	後藤福次郎	同	一三ノ八	藝能科私観	山本 健亮等	同	五ノ八	故松崎健藏追悼	真川 梧堂	同	同
新しい圖畫指導の試み	林 繁雄	同	同	新圖畫教育への發足	佐波 甫	同	五ノ九	平田先生の御講演感想	加賀山剛太郎	同	二四一
發表會記録	岩崎喜久雄	同	同	世界の兒童畫	杉森 武夫	同	五ノ九	鶴岡講演の寸感	佐藤 誠孝	同	同
構作主義圖畫手工研究	坂本 幹男	同	同	日埃圖畫交換展出品畫番 查發表	平井 善一	同	五ノ九	修養的態度に就いて	平田 榮二	同	同
構作科研究會の後に	岩崎喜久雄	同	一三ノ九	國策に順應せんとする圖 畫手工教育	久保貞次郎	同	五ノ一〇	第九回長野縣圖畫教育研 究會報告	芝田 徹心	同	同
技術的價値の問題	佐藤 光二	同	同	兒童作品の相互鑑賞	山本 鼎	同	五ノ一〇	鬼才井上新爾君	百瀬 瀧	同	同
構作會教材の立體的排列	山崎 壽郎	同	同	國民學校の作業科	湯川 尙文	同	五ノ一	三十周年記念に際す	山岸與三治	同	同
圖畫科の前進	松田 操	同	同	國民學校案に就て	伊藤好太郎	同	五ノ一	祝賀會記録	平田 榮二	同	二四二
手工教育界をめぐる動向	六郷 克二	同	一三ノ一〇	大國民と修養	内藤 秀因	同	五ノ一	錦卷會創立三十周年記念 回想錄	諸 家	同	同
新鑑賞教育の基點	岡田 清	同	同	小學圖畫に表れたる日 本畫的教材に就いて	淺野 秀一	同	五ノ一	愛知縣に於ける圖畫研究 會と作業科、手工、工業 研究會	細島 昇一	美	一五ノ一
色彩教育の重要性	那須田 茂	同	同	時局下、小學圖畫の實踐 形態	芝田 徹心	同	二二六	福岡縣圖畫部總會の記	佐藤 正巳	同	同
新圖畫教育の諸問題	松田 義之	同	同	圖畫科とひらめきの問題	平田 松堂	同	二二六	聖戰下美育界の態勢	杉山 司七	同	同
「作業」に對する補足意見	後藤福次郎	同	同	教育刷新と圖畫教育	瀧村 虎雄	同	二二六	造形陶冶への熱情	宮本 幸惠	同	一五ノ二
東ねたる棒の力	山形 寛	同	一三ノ一一	教育刷新と圖畫教育	常松 菅晴	同	二二七	京都府美育研究會第六回 總會	横田 仁郎	同	同
綴方教育と圖畫	室 靖	同	同	放答案に就て	岡田 清	同	二二七	中等教育改造論	安藤ひやく	同	同
造形教育の分野	三苦 正雄	同	一三ノ一二	深淵に於ける圖畫教育を語る	富田 民治	同	二二七	日本教育に於ける手工科 の經營	藤本多賀喜	同	一五ノ三
小學校、中學校新圖畫工 作展示會概況	後藤福次郎	同	同	深刻化する時局と教師の 立場	淺野 秀一	同	二二七	美育界の長老市川力藏氏 の經營	染川清一郎	同	一五ノ四
更に自信を持つて精勵さ れたい	紀 俊秀	同	同	圖畫科と共に歩む	山下 一雄	同	二二七	福岡縣圖畫教育研究會	原 貫之助	同	一五ノ四
近頃に於ける意義深き催 し	中田 俊造	同	同	兒童の描畫心理	三尾與喜藏	同	二二八	我が校の圖畫教育	佐藤 正巳	同	一五ノ五
興亞國策と構作教育	山崎 壽郎	同	同	新卒業生に對する訓示	大友 一三	同	二二八	圖畫教育と全體性	佐藤 義男	同	一五ノ五
日本精神と圖畫教育	多賀谷健吉	同	同	圖畫力は無形文化の基礎 ともなる	芝田 徹心	同	二二八	福岡縣圖畫教育研究會の 記	本間 良助	同	一五ノ六
藝術學會の結論	岡田 清	同	同	日本畫教育果して日本精 神の昂揚たり得るか	本間 良助	同	二二九	圖案に對する基本練習	佐藤 正巳	同	一五ノ七
構作科辯護論の破綻	湯川 尙文	同	五ノ一	動物物に見る形式と現代 圖案	岡田 清	同	二二九	德島縣圖畫科研究協議會 圖畫科の鑑賞教育に關す る參考畫集圖書の調査研 究	大智 浩	同	同
課外指導の實踐	近藤 廣治	同	同		水田 莊介	同	二二九		赤池 悟	同	一五ノ八
家庭圖畫	中西 良男	同	同		同	同	二二九		齋州 悟堂	同	一五ノ九
圖畫と時局	倉橋 惣三	同	同		同	同	二二九		同	同	同
知性の改造と自然への再 認識	水戸敬之助	同	同		同	同	二二九		同	同	同
圖畫・手工とその分野	松原 郁二	同	同		同	同	二二九		同	同	同
新時代の圖畫教育	笹島 眞	同	五ノ二一五		同	同	二二九		同	同	同

鶴岡市第廿五回教育繪畫展	酒井直次郎	美	育一五ノ一〇
集團勸勞作業と圖畫教育	板倉 贊治	同	同
文檢用器畫本試驗問題解説	森 壽正	同	同
美術家を志す生徒の指導に就て	多賀谷健吉	同	一五ノ一一
圖畫教育の日本調	松田 操	同	同
山形縣圖畫教育研究會	大宮司正一	同	同
故鶴川俊三郎氏の圖畫教育偉績を偲ぶ	本間 良助	同	一五ノ一二
學校教育の反省	秦泉寺正一	同	同
第十三回靜岡縣圖畫教育研究會	三澤 佐助	同	同
小中學校に於ける圖畫教育に就いて(座談會)	一原 五常 多賀谷健吉 中谷 健次外	美	術一四ノ六
繪畫及圖畫教育について	和田 英作	同	同
異常兒の作品	式場隆三郎	同	同
色紙の繪	戸川 行男	同	みづゑ四〇九
特異兒童の作品を見て	安井曾太郎	同	同

教育

構成手工教材と其實踐
 小學插繪の解説
 國史插繪の解説
 新手工指導書
 特異児童作品集(みづゑ臨時増刊)
 發達心理一年の圖畫教育
 大竹 拙三 賢文館
 及川 龜治 厚生閣
 那須田 茂 晃文社
 安井曾太郎編 春鳥會
 戸川行男解説
 小林 節藏 弘學社

外國美術

ヴァン・ゴッホ
 歐米新建築の紹介
 希臘彫刻(アトリエ臨時増刊)
 ゴシック彫刻(アトリエ臨時増刊)
 セザンヌ(みづゑ臨時増刊)
 西洋美術文庫
 式場隆三郎 美術發行所
 日本建築士會 同 會
 アトリエ社 同 社
 アトリエ社 同 社
 本文註解説 春鳥會
 荒城 季夫 同 會
 須田國太郎 アトリエ社
 坂崎 坦 同 會
 内田 巖 同 會
 森口 多里 同 會
 佐藤 敬 同 會
 柳 亮 同 會
 伊原宇三郎 同 會
 武者小路實篤 同 會
 佐波 市 同 會
 福澤 一郎 同 會
 高見澤木版社 同 社

第三卷 グレコ
 第七卷 シヤルダン
 第八卷 コロ
 第一〇卷 モネ
 第一三卷 ドガ
 第一五卷 ボナール
 第一九卷 ドラン
 第二〇卷 ルオー
 第二二卷 デュファイ
 第二三卷 エルンスト
 Picasso
 同 社

雜

岡倉天心論攷
 父天心 岡倉天心全集別卷
 芋鏡子文翰全集
 聖
 畫室の言葉
 工藝
 隨筆
 畫道と畫道
 唐詩及唐詩人
 夢二スケッチ帖抄
 淺野 晃 思潮社
 岡倉 一雄 聖文閣
 小川 芋鏡 中央公論社
 岸田日出刀 相模書房
 三輪 鄰 岡倉書房
 田邊 孝次 相模書房
 津田 青楓 小山書店
 小杉 放庵著 書物展望社
 恩地孝四郎 アオイ書房

古美術關係文獻(定期刊行物所載)

總説・綜録

美術史論に就て	孝橋 謙二	南畫鑑賞 八ノ九	近畿古美術巡禮 中宮寺	大河内定雄	工	圖畫と手 二三五	畫記(公刊)	田中 喜作	美術研究 八五
佛教美術への觀照	鈴木 進	茶わん 一〇二	近畿古美術巡禮 榮山寺	同	同	二三八	古畫の印記に就て	同	同
兜跋毘沙門攻	松本文三郎	東方學報 一〇ノ一	多武峰越え	同	同	二四〇	指畫雜説	同	同
眞言八祖像について	吉祥 眞雄	京都市	新藥師寺の印象	登見 忠夫	書	道 八ノ四	東洋畫の俯瞰描寫と視點の遊動性	大川 理夫	畫 說 三六
玉兔の話	足立 康	史述と美 一〇ノ五	奈良美術案内 一、二	原 杉太郎	三田評論	五〇二、五〇四	東洋畫の選擇	石井 柏亭	丹 青 二ノ一
古美術の保存に就て	正木 直彦	同 一〇ノ一	美術の京都 七	同	同	五〇〇	東洋の花鳥畫	佐藤 良	茶わん 九九
古美術の鑑賞と保存	萩野伸三郎	京都美術 一七	伊香保水澤觀音行	相川 龍雄	茶わん	九九	古畫鑑賞 花鳥畫に就て	田中 一松	塔 影 一五ノ四
國寶の保存	松尾 長造	青年會誌	野火止平林寺から朝霞大佛へ	平野 實	史蹟名勝 天然紀念物	一四ノ三	古畫鑑賞 蓮花の寫生に就て	同	同 一五ノ五
國寶保存の精神	瀧 精一	史蹟名勝 天然紀念物	法隆寺國寶保存事業に就て	法隆寺國寶保存部	同	一四ノ七	古畫鑑賞 牡丹と葵花	同	同 一五ノ六
國寶建築物の保存	伊東 忠太	茶わん 一〇四	伯林日本美術展覽會上・下	丸尾彰三郎	同	一四ノ九	古畫鑑賞 疏果畫に就て	同	同 一五ノ七
博物館の沿革と意義	増田 八郎	天然紀念物	伯林日本古美術展覽會記	山田智三郎	アトリエ	一六ノ八	古畫鑑賞 魚蟹圖に就いて	同	同 一五ノ八
皇室と上代文化	東伏見邦英	寶 雲 七ノ一	伯林に於ける「日本古美術展覽會」	ライデマイ スタア 嘉門安雄譯	畫 說 三一	本朝畫算に就きて	筆墨	金原 省吾	思想 二一一
日本美術の精神	横山 大觀	茶わん 一〇一	勝軍地鐵考	森末 義彰	美術研究 九一	本朝畫算(覆刊) 一―五	紙の事、墨のこと 上、下	窪田 五雲	南畫鑑賞 八ノ七、八
我觀日本美術史	孝橋 謙二	南畫鑑賞 八ノ七	笠置寺彌勒像と笠置曼荼羅	足立 康	建築史 一ノ一	日本繪畫に於ける支那的なるもの	墨の研究	佐藤 義男	美 育 一五ノ六
日本美術の史的考察	岡崎 義惠	塔 影 一五ノ二	支那文化と支那藝術 一、二	シユエトラム	アトリエ 一五ノ五、七	歐洲繪畫に於ける日本影響の端緒 三―五	日本畫の過去と將來	長谷川如是	塔 影 一五ノ三
日本の文化一般と美術	金原 省吾	教育美術 五ノ八	支那の美術を語る	土方定一譯	茶わん 一〇四	平安鎌倉時代の風景畫 下	日本畫の畫面形態	奥平 英雄	南畫鑑賞 八ノ九
日本の美術的特質	同	同 五ノ六	舌を出す饜饅	後藤朝太郎	瓜 茄 五	近世初期風俗畫中の一様式に就て	繪畫史書き直しの要上、外狩奉心菴	田中 喜作	美之國 一五ノ四
日本藝術に於ける指導精神	藤懸 静也	塔 影 一五ノ六	北魏の三角狀飾りの原流	村田 治郎	考古學雜 二九ノ六	近世初期の風俗畫に就て	本朝畫算(覆刊) 一―五	遠地 輝武	美術研究 八六
日本美術とその環境	奥平 英雄	茶わん 一〇五	鎮紋の展開	小杉 一雄	學 叢 八	近世初期の風俗畫に就て	支那思想の影響と日本繪畫	小林太市郎	美術世界 三ノ四
「美術」と「日本の繪と書」	益田 孝	漆と工藝 四五三	支那旅行記	柴田 常惠	史 同	白描畫異變	歐洲繪畫に於ける日本影響の端緒 三―五	野間 清六	國 華 五七八、五八〇、五八四
日本美術に現れた櫻	田中 一松	塔 影 一五ノ四	江南訪古記	松本 信廣	同	座敷繪に就て	考察 奈良時代の畫師に關する	藤懸 静也	國 華 五八五
古美術雜記	足立 康	建築史 一五ノ六	支那旅行記	同	同	浮世繪界 四ノ五	茶わん 一〇六	國 華 五八五	
十三松堂夜話 一、二	正木 直彦	書畫骨董 三七二	鎮紋の展開	同	同	下繪	近世初期の風俗畫に就て	橋崎 宗重	浮世繪界 四ノ五
凡愚開眼	井上 昇三	雜誌 三七二	支那旅行記	同	同	座敷繪に就て	近世初期の風俗畫に就て	松田福一郎	茶わん 一〇六
私考二題	相澤 春洋	茶わん 一〇二	江南訪古記	同	同	浮世繪界 四ノ五	近世初期の風俗畫に就て	小野實一郎	茶わん 一〇六
やまぐり抄 五	樂之軒生	畫 說 三六	江南訪古記	同	同	墨絲奇遇	近世初期の風俗畫に就て	谷 信一	建築史 一ノ三
			繪 畫				座敷繪に就て	古川 北華	アトリエ 一六ノ一
							浮世繪界 四ノ五	森 銑三	畫 說 二六

鏡繪 香畫と云ふもの 烏繪扇面吟味	古堀 榮 相見 香雨 緒方 梅歌	浮世繪界 四ノ六 好 古 二ノ一 武者の小 四ノ二	兩頭愛染明王像解説 油谷達氏藏	國 華 五八五	豐太閤畫像論 豊臣秀吉像解 侯爵伊達宗彰氏藏	谷 信一	美術研究 九二 華 五八〇
繪畫に於ける江戸名所の 變遷—淺草駒形を中心に—	梅澤彦太郎	茶わん 一〇六	淨瑠璃寺吉祥天厨子彫繪 解説 東京美術學校藏	美術研究 九四	淺井長政像解 高野山持明院藏	菅沼 貞三	美術研究 九五 五八四
雅談思ひ出草 十二	窪田 五雲	書畫骨董 三六七 雜誌	法道寺藏十六羅漢像につ いて	國 實 二ノ一〇	後藤祐乘畫像を中心とし て	堀口 捨巳	思想 二一一 美術研究 八八
海風と蛤	高野 辰之	茶わん 一〇〇	羅漢圖 解説 西村孝太郎氏藏	美術研究 九〇	小堀遠州の畫像について	堀口 捨巳	美術研究 八八
繪畫の鮎	藝術資料 四ノ一	藝術資料 四ノ一	現圖曼荼羅の表現形式に 就て	茶わん 一〇二	婦人像 解説 長尾欽彌氏藏	堀口 捨巳	美術研究 八八
鯉魚の名作	同	同	最勝王經十景寶塔曼荼羅 解説 大長壽院藏	國 實 二ノ二	孔子像解 安田敦彦氏藏	植村 和堂	國 華 五八七
熊の繪畫	同	同	昭慶天曼荼羅圖解 木崎正美氏藏	國 華 五八九	孔子像 解説 同氏藏	植村 和堂	美術研究 九一 實 二ノ一
羊と美術作品	同	同	佛眼曼荼羅 解説 品川寺藏	美術研究 八九	白樂天像圖 解説 武藤金太氏藏	植村 和堂	國 實 二ノ一
猪の名畫	同	同	品川寺藏 解説	美術研究 八九	平安末期から鎌倉初期へ かけての繪卷と詞書 一、二、三	植村 和堂	道 八ノ九、一〇、 三
鹿の名作	同	同	玉蟲厨子の漆畫に就て	國 實 二ノ九	繪卷物の詞書 上、下	相澤 春洋	同 八ノ九、一〇
鮎の藝術	同	同	給因果經に就て —田中光顯手繪—	書 道 八ノ九	繪詞の文學的價值—一—三	久曾神 昇	同 八ノ九、一〇、 三
獅子の名作	同	同	給因果經に就て	同 八ノ九	源氏物語繪卷に就て 上	源 豊宗	實 二ノ四
繪畫と象	同	同	莊嚴經について	茶わん 一〇三	信貴山練起について	上野 直照	畫 說 三〇
駱駝と藝術	同	同	本證寺の善光寺如來繪傳 と聖德太子繪傳	國 實 二ノ一	信貴山演義	田中倉環子	同
法隆寺金堂壁畫保存法歴 談會記事	國 華 八、五、一	國 實 二ノ八	密教圖像の研究	實 二ノ四	信貴山練起繪卷 (名品小解)	同	同
法隆寺壁畫の保存を語る	足立 康	國 實 二ノ八	證印本廿八宿圖に就て	雲 二四	信貴山練起の研究 —失はれたる山崎長者 の卷の詞について—	脇本十九郎	同
法隆寺金堂壁畫保存方法 私見	諸 家	畫 說 二八	似せ繪考	畫 說 二八	信貴山練起の「たい」と 描寫	脇本十九郎	同
法隆寺の壁畫その他	山下新太郎	造形藝術 一ノ一	似繪に就て	二九	信貴山練起に於ける正面 描寫	大口 環夫	同
富貴寺壁畫断片 解説 松永安左衛門氏藏	奥平 英雄	茶わん 一〇二	似繪漫考	三三	信貴山練起の「たい」と 描寫	大口 環夫	同
彌勒三尊圖解 栗栖 殖氏藏	美術研究 九五	美術研究 九五	傳藤原信實筆歌仙繪に就 て(齋宮女御)	同 三五	信貴山練起の「たい」と 描寫	脇本十九郎	同
彌勒來迎圖 解説 東京美術學校保管	國 華 五八四	國 實 二ノ一	隨身庭騎圖卷に就て	實 二四	信貴山練起の「たい」と 描寫	脇本十九郎	同
廿五菩薩來迎圖 解説 淨福寺藏	美術研究 八八	美術研究 八八	釋教卅六人歌仙圖考 (繪卷詞書集第十八)	雲 二四	信貴山練起の「たい」と 描寫	脇本十九郎	同
團男爵家所藏の觀音菩薩 像と千手觀音畫像解説 虛空藏菩薩畫像(博物館 本)について	國 實 二ノ四	國 實 二ノ四	國寶後鳥羽天皇宸影(名 品小解)	畫 說 二五	命蓮毘沙門化身說に就て	同	同
不動明王稚考 解説 不動明王二童子像 琉璃寺藏	美之國 一五ノ一	美之國 一五ノ一	御物聖德太子御像(名品 小解)	同 二九	風俗史より見たる信貴山 練起	同	同
	佐和 隆研	畫 說 二五	御物聖德太子御像(名品 小解)	同 二九	信貴山練起詞(校刊)	關 保之助	同
	美術研究 九三	美術研究 九三	明惠上人樹上坐禪圖解 高山寺藏	國 華 五七九	伴大納言繪詞に就て 上	源 豊宗	史 林 二四ノ二
			騎馬武者圖解 守屋孝藏氏藏	同 五八一	伴大納言繪詞に就て 下	脇本十九郎	畫 說 三四
					蛙の言葉	森 暢	日本美術 五一 協會報告
					狹衣物語繪卷殘闕 後三年合戦繪卷に現はれ たる武裝に就て—一—三	近藤市太郎 關 保之助	同 華 五七九、 五八一

馬醫繪卷殘闕圖解 河杉はつ子氏藏	國	華	五八五	いはゆる秋月筆揚子江圖 卷についで	加藤	繁	畫	說	三五	伯林東亞美術館所藏光悅 色紙帖	同	矢代	幸雄	美術研究	八五	
解説北野天神緣起 新津恒吉氏藏	國	寶	二ノ五	達磨圖解 某氏藏	同	同	國	華	五八七	伯林東亞美術館の光悅色 紙帖一、二	同	同	同	日本の茶	五ノ七八	
歡喜光寺藏一逼聖人繪傳 の發願者及筆者とに就て	望月	信成	一〇ノ三	東京美術學校藏 雪村筆高圖及群仙圖	同	同	國	寶	二ノ五	慶長十一年十一月十一日 鑄ある光悅色紙	同	同	同	美術研究	九三	
一遍聖繪の作者圓伊浦記 あしび繪卷	田中	喜作	二八	平安朝の障屏畫 原壽枝子氏藏	田中	一松	茶わん	一〇三	光悅翁の不二山	森川	勘一郎	同	同	美術研究	九三	
幻中草打畫	梅津	次郎	二八	最勝四天王院の障子繪 賢聖障子繪の製作年代	福山	敏男	建築史	一ノ六	宗達と類似宗達	谷	信一	同	同	造形藝術	一ノ一	
駿斗家本當麻寺緣起畫卷 に就て	望月	信成	二五	藤原光孝 土佐派研究の一節	同	同	同	同	宗達私論	内藤	堯寶	同	同	同	一ノ二	
當麻寺緣起畫卷長信筆の 一段	瀧	精一	五八〇	秋草圖圖解 伊達興宗氏藏	谷	信一	美術研究	八七	宗達筆風雷神圖 建仁寺藏	長谷川	三郎	同	同	美術研究	九〇	
歌舞伎草紙繪卷年代考 上、下	仲田勝之助	畫	三四—三五	狩野派の傳統	今井	爽邦	書畫骨董	三七一	蓮花水禽圖 馬越恭一氏藏	同	同	同	同	國	寶	二ノ一
三寶繪詞に就て	松下	太虛	八ノ九	狩野正信筆溪山幽居圖解 小西新右衛門氏藏	同	同	國	華	五八六	光琳筆燕子花圖 根津嘉一郎氏藏	同	同	同	美術研究	八五	
漢畫の成立とその發展 西山と石山	谷	信一	二ノ五	狩野元信筆馬圖 落書と年代	鈴木	進	茶わん	一〇四	乾山筆八橋圖 山口三郎氏藏	同	同	同	同	同	同	
默庵筆布袋圖解 加藤正治氏藏	笹川	臨風	五七七八	狩野元信の花押その他 落書と年代	同	同	同	一〇五	抱一筆風雷神圖 子曾澤敬三氏藏	同	同	同	同	畫	說	三二
宋拓六祖像と明兆の畫風 靈彩(東洋美術總目錄七)	森	克己	二六	傳元信筆奔瀟圖 原壽枝子氏藏	同	同	美術研究	八八	應舉筆寫生圖卷 西村總左衛門氏藏	同	同	同	同	アトリエ	一六ノ	
萬里橋圖 男爵岩崎小彌太氏藏	渡邊	一	八七	狩野永徳傳の一節	土居	次義	史述と美	一〇ノ九	應舉筆保津川圖 同氏藏	同	同	同	同	美術研究	九一	
雪舟入明の一つの畫 雪舟の師春林周藤に就て	田中倉根子	畫	二七	光信を稱へる 妙法院の繪馬と狩野山樂	澤田	牛磨	塔	影	一五ノ一	良寛筆應舉筆狗兒圖解 小倉のぶ子氏藏	同	同	同	國	華	五八四
雪舟の石見在往と終焉に 對する私見上、下	熊谷	宣夫	二八、二九	妙法院の繪馬に就て 賀茂藏馬圖解	土居	次義	畫	說	二六	駒井源琦筆動物圖解 同氏藏	同	同	同	國	華	五八一
雪舟と宋元畫	谷	信一	二七	大原忠隆氏藏 婦女遊樂圖解	足立	康	建築史	一ノ二	南紀の藍雪畫に就て 南畫起源の新研究	同	同	同	同	國	寶	二ノ一二
雪舟山水長卷 名品小解に代へて	脇本樂之軒	同	同	北村太三郎氏藏 探幽と歴史畫	瀧	精一	同	同	五七八	南畫の立場 伯林日本古美術展覽會 記念展觀を見て	井上	昇三	同	國	寶	二ノ一〇
雪舟の山水畫	佐藤	良	同	狩野探幽筆東照大權現線 起畫卷解 栃木東照宮藏	同	同	同	同	五七九	遠陽訪畫錄 其三	窪田	五雲	同	書畫骨董	三六八	
アメリカに在る雪舟畫	J・C・コヴェル	同	同	探幽筆楠公訣兒圖 侯爵前田利爲氏藏	同	同	國	寶	二ノ九	彭城家に就て	窪田	五雲	同	雜誌	同	
雪舟年譜	熊谷	宜夫	同	探幽筆不二景圖	瀧	同	同	同	五七八	彭百川の繪畫に就て	沖野岩三郎	同	同	南畫鑑賞	八ノ六	
單庵筆鷲圖圖解 帝宗博物館藏	熊谷	宜夫	二ノ九	守景の繪替山水屏風に就 て	瀧	同	國	寶	二ノ九	彭百川の繪畫に就て	田中	一松	同	同	同	
續蛇足畫錄の一考察 山水圖	裏辻	憲道	三	芳崖撰雪村筆竹虎圖 原貫之助氏藏	谷	信一	國	寶	二ノ三	彭百川の人物畫と花鳥畫	西村	南岳	同	同	同	
男爵岩崎小彌太氏藏 藝阿彌觀瀑僧圖(名品小 解)	裏辻	憲道	三	光悅及宗達新論	谷	信一	國	寶	二ノ三	彭百川特載號稱貂 百川の俳歷	窪田	五雲	同	同	同	
相阿彌に對する考察 秋月筆藍雁圖圖解 渡邊善十郎氏藏	笹川	臨風	二ノ七	同	同	同	國	寶	二ノ三	俳人としての百川	小笹	喜三	同	同	同	

百川畫漫記	田中 喜作	南畫鑑賞 八ノ四	介石畫話(校刊)上、下	樂之軒生	畫 說 二九、三一	酒井仲と其遺稿に就いて	相見 香雨	日本美術 五四
百川の俳書「本朝八倦集」	漆山又四郎	同	浦上玉堂傳の研究 上、下	森 銑三	美術研究 九五、九六	酒井仲遺稿隨筆に就いて	飯島 勇	同
百川雅考	相見 香雨	同	銅路雲泉 上、下	古川 北華	南畫鑑賞 八ノ九、一〇	立原杏所筆那珂港圖解	同	同
百川の畫「元明畫人考」と其序文	同	同	近江燕村一紀梅亭のこと	鈴木 進	茶わん 九九	川崎八右衛門氏藏	國 華 五八四	同
百川當時の南畫壇	人見 少華	同	竹石と和歌山	緒方 梅歌	書畫骨董 三六七	杏所筆向嶺花旬圖解	美術研究 九六	同
百川筆江山圖屏風	瀧 精一	同	青木夙夜筆紅樹映雪圖解	渡邊 知水	書畫骨董 三六九	守谷茂太郎氏藏	國 華 五八八	同
八倦堂瑣談	竹内 梅松	同	山崎種二氏藏	森 銑三	書畫骨董 三六九	立原春沙筆菊石圖解	國 華 五八八	同
印象趣味の發達と百川	植木 康	同	淵上旭江と田能村竹田	渡邊 知水	書畫骨董 三六九	川崎八右衛門氏藏	國 華 五八八	同
百川印譜	西村南岳編	同	文晁の描いた如意道人像	森 銑三	書畫骨董 三六九	た海仙畫譜	茶わん 九九	同
百川關係文獻略解	松谷 壘	同	二洲と文晁	二木 軒	書畫骨董 三七二	田崎草雲遺墨展感想	仲田勝之助	同
百川の流中山高陽	寺石 正路	同	華山餘錄	井上 昇三	書畫骨董 三六九	武人畫といふもの	鈴木 進	同
彭城百川と大雅堂	山本 辰一	同	戰時下の繪畫と華山の作	杉浦 冷石	美之國 一五〇一	武人畫の二三に就て	相見 香雨	同
池大雅評傳 六一九	人見 少華	同	畫精神	河野 桐谷	書畫骨董 三六八	宮本武藏の人物	添田 遠嶺	同
池大雅家譜の研究	森 銑三	同	渡邊華山の風景畫	河野 桐谷	書畫骨董 三六八	二天隨筆	相見 香雨	同
圓窓美人圖に就いて	外狩素心庵	同	特に香取詣紀行に就て	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏の襖繪	相見 香雨	同
大雅堂記聞	森 銑三	同	華山蠶魚帖(名品小解)	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏の襖繪	相見 香雨	同
池大雅筆江漁樂、山郡弄猿圖解 加藤正治氏藏	國 華 五八二	同	渡邊華山筆名花十友圖解	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆達磨水盆圖解	田中 一松	同
大雅筆五百羅漢圖 解説 萬福寺藏	美術研究 九四	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆野馬圖解	同	同
池大雅筆松下高士圖解	國 華 五八七	同	渡邊華山筆猶圖解	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
池大雅畫譜法帖陳列目錄	畫 說 二九	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
伊予九と池大雅	山本 辰一	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
祇園南海と池大雅	茶わん 一〇二	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
兼設堂舊藏「蕭尺木太平三山圖」に對する兩者の關係	同 九七	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
祇園南海 附朱漆水傳來の彩色法に就て	同 一〇三	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
蕪村の畫系を訪ねて	人見 少華	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
與謝蕪村筆奥の細道圖解説 長尾欽彌氏藏	國 華 二ノ六	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
宮崎筠園 上、下	森 銑三	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
宮崎筠園 上、下	森 銑三	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
宮崎洞窟尾	相見 香雨	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
廣瀬臺山筆坐遊海嶽圖卷解説 佐々木嘉太郎氏藏	同 五四	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
介石畫話	芝嶽吳克明	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同
介石畫話小引	相見 香雨	同	原富太郎氏藏	菅沼 貞三	書畫骨董 三六八	宮本武藏筆明之氏藏	同	同

信州邂逅の一蕙齋	鎌田 五雲	書畫骨董	三六九	豊重、國貞の二代目豊國	七戸 吉三	浮世繪界	四ノ六	維形本の成立と繪本の影	木村 捨三	浮世繪界	四ノ四
版畫論	柳 宗悅	工 藝	九八	豊名	鈴木 仁一	國 華	五八八	手遊繪史 一	津金巨摩雄	同	四ノ二
日本佛教版畫史考	平塚 運一	同	同	一つ家傳説の展開 上	同	同	同	朝鮮・支那	堂本 印象	美之國	一五ノ七
正和版法然上人像に就て	小川 龍彦	同	九五	主として遠草守藏一勇	古堀 榮	同	四ノ一	半島の古墳壁畫を見る	後藤朝太郎	好 古	二ノ一
浮世繪版畫と現代版畫	楢崎 宗重	アトリエ	一六ノ一	齋國芳の畫額に就て	森 銚三	畫 說	三三	北京で觀た支那畫	川崎 克	塔 影	一五ノ一
美術講座	同	茶わん	九八、九九	國芳の行狀探査書 上、下	三成 重敏	同	同	支那に於ける風景畫の觀	ローレンス	美 育	一五ノ二
浮世繪問答	古堀 榮	同	九七	鷹見安二郎	脇本榮之軒	同	同	念 一―五	石川欽一郎	同	六
浮世繪に於ける主題表示の形式	楢崎 宗重	浮世繪界	四ノ一〇	青山嵐元話	三村清三郎	同	同	歴代支那畫人の出生地に就いて 上、下	下店 靜市	畫 說	二八、三一
浮世繪雜論 其六	餅田 笑醒	同	四ノ七、一	蕙齋に關聯して	同	同	同	漢代の繪畫に於ける勅戒主義と畫家	米澤 嘉園	東京 學報	九
浮世繪本研究ノ提唱 上、下	永見徳太郎	同	四ノ一二	蕙齋筆長井兵助圖 (名品小辨)	玉林 晴明	浮世繪界	四ノ四	魏晉南北朝時代の尙方尙書故實に就て	小林太市郎	同	一〇ノ二
長崎版畫考點描	古堀 榮	同	四ノ七	蕙齋筆長井兵助圖	漆山又四郎	畫 說	三三	下筆有神論 一―三	今村 龍一	同	五七九
監摺に就て	浮世阿堵理	同	四ノ一〇	蕙齋筆長井兵助圖	松木喜八郎	浮世繪界	四ノ一二	歴代名畫記論攷 (其一 錯簡考)	堂谷 憲勇	美術研究	九〇
大首繪源流史考追考	古堀 榮	同	四ノ一二	蕙齋筆長井兵助圖	楢崎 宗重	同	四ノ四、五	唐宋諸家の繪畫史論に於ける時代論	今村 龍一	東京 學報	一〇ノ二
死繪	楢崎 宗重	同	四ノ九	蕙齋筆長井兵助圖	山下 光華	同	四ノ八	様式史書としての「圖畫見聞誌」	同	同	九
鎌倉と浮世繪	同	同	四ノ一一	蕙齋筆長井兵助圖	小島 鳥水	茶わん	一〇四	岡兩畫 下	島田修二郎	美術研究	八六
谷村町の浮世繪踏査記	野口 二郎	同	四ノ八	蕙齋筆長井兵助圖	石黒 敬七	同	一〇三	南嶺北漸	奥村伊九良	同	同
谷村町に残る屋臺の後幕	木村 捨三	同	四ノ三	蕙齋筆長井兵助圖	長瀬 武郎	浮世繪界	四ノ一二	山と山の繪	同	同	同
初期歌舞伎道外方の畫證	古堀 榮	同	四ノ三	蕙齋筆長井兵助圖	阿部佐太郎	同	四ノ一	立意補遺	田中倉根子	畫 說	三三
羽川和元	渡邊 護	同	四ノ六、八	蕙齋筆長井兵助圖	楢崎 宗重	同	四ノ二	墨梅讀語	島田修二郎	寶 雲	二五
鳥居清長論 上、下	玉林 晴明	同	四ノ七	蕙齋筆長井兵助圖	古堀 榮	同	四ノ一	花光仲仁の序 上	姚 鑒	考古學雜	二九ノ六
近藤清春	楢崎 宗重	同	四ノ三	蕙齋筆長井兵助圖	津金巨摩雄	同	四ノ二	管城子古墳の壁畫に就て	奥村伊九良	瓜 誌	五
一筆齋文調延命策	七戸 吉三	同	四ノ四	蕙齋筆長井兵助圖	白石 一	國 寶	二ノ六	鏡金孝子傳石棺の刻畫に就て	同	同	同
文調の歿年月日	玉林 晴明	同	四ノ五	蕙齋筆長井兵助圖	山本 辰一	史迹と美 術	一〇ノ八	吳道玄の山水畫の筆意	松本 榮一	國 同	同
文調歿年說雜考	古堀 榮	同	四ノ一	蕙齋筆長井兵助圖	森 銚三	畫 說	二九	吳道子の著色	奥村伊九良	瓜 同	同
寫樂に就て	木村 捨三	同	四ノ一	蕙齋筆長井兵助圖	藤原 退藏	國 寶	二五	王維江山雪霽圖に關する話のいろいろ	瀧 拙庵	瓜 同	同
寫樂に關する二三の問題	楢崎 宗重	國 寶	二ノ四	蕙齋筆長井兵助圖	鈴木 進	アトリエ	一六ノ一三	伏生授經圖に就て	瀧 精一	國 同	同
勝川春章と風俗十二月圖 竝に書額	同	同	四ノ一	蕙齋筆長井兵助圖	若沖小鏡	同	四ノ九	曹吳の二體	秋山 光夫	造形藝術	一ノ四
春徳研究前進多少	中村 亮平	浮世繪界	四ノ一	蕙齋筆長井兵助圖	芭蕉の書畫	同	四ノ三	禪月の夢	奥村伊九良	瓜 同	同
歌曆挿畫本繪本略年譜	ならさき	同	四ノ八	蕙齋筆長井兵助圖	南聲屏風研究	同	四ノ九	李成范寬の寫實	同	同	同
歌曆筆兩面撰	楢崎 宗重	同	四ノ二	蕙齋筆長井兵助圖	猿人奏樂圖 (故平福百穂氏藏)	同	四ノ一	同	同	同	同
國貞の豊國襲名披露宴	藤井 康夫	同	四ノ七	蕙齋筆長井兵助圖	古典解説四	同	四ノ一	同	同	同	同
國貞が豊國襲名の錦繪	古堀 榮	同	四ノ九	蕙齋筆長井兵助圖	川原慶賀筆西洋人圖に就て	同	四ノ一〇	同	同	同	同
歌川喜無	同	同	四ノ一〇	蕙齋筆長井兵助圖	奈良繪本と御伽草子	同	四ノ三	同	同	同	同
西川安信	小島 鳥水	同	四ノ五	蕙齋筆長井兵助圖	同	同	四ノ三	同	同	同	同
二代豊國襲名事情	同	同	四ノ五	蕙齋筆長井兵助圖	同	同	四ノ三	同	同	同	同

『大宋諸山圖』に就て 高士觀月圖 解説 侯爵黒田長成氏藏	白石 虎月	歴史地理 七四ノ四	美術研究 九二	羅南峰 憚南田略傳 憚南田筆花舟册 解説 阿部孝次郎氏藏	八幡關太郎 井上 寅軒	南畫鑑賞 八ノ九 美術研究 九二	日 本	我が國の佛像彫刻の美的表現 御衣木加持と木彫の交達 眞觀彫刻の本義	渡邊 護 金森 遼	畫 設 二五 同 三六
白桃小鳥圖 解説 原壽枝子氏藏	同	同	八七	憚南田筆古柏圖解 橋本辰二郎氏藏	同	國 華 五七八	眞觀彫刻の意義	同	同	史述と美 一〇ノ七
盧鶴草堂十景圖卷に就て 宋畫高士觀瀑圖解 阿部孝次郎氏藏	瀧 拙庵	國 華 五八五 同 五八九	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	小林 剛 毛利 久	同	同
宋畫牧牛圖解 阿部孝次郎氏藏	同	同	五八二	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
董草遊狗圖 解説 原富太郎氏藏	同	國 實 二ノ九	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
漢武會西母圖解 阿部孝次郎氏藏	同	國 華 五八一	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
牧溪ぬれ雀(名品小解) 西金居士筆瀟灑圖解 原邦造氏藏	畫 說 二六	國 華 五八〇	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
谿山行旅圖解 守屋孝藏氏藏	同	同	五八四	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
顔輝筆蝦蟇鐵拐圖解 知恩寺藏	國 實 二ノ九	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
方從義筆太白瀧液圖 解説 阿部孝次郎氏藏	美術研究 九六	國 華 五八八	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
方々壺太白瀧液圖解 阿部孝次郎氏藏	同	同	五七九	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
傳王若水筆執扇春景山水圖解 加藤正治氏藏	同	同	五八七	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
松陰高士圖解 阿部孝次郎氏藏	同	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
桔梗狗子圖に就て(元畫) 楚石の贊ある因陀羅畫	造形藝術 一ノ三	國 華 五八三	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
王叔筆溪水圖解 小林佐吉氏藏	同	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
呂紀筆四季花鳥圖解 公爵島津忠承氏藏	國 實 二ノ一	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
徐青藤 上	安藤 古香	東 美 五	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
石濤筆東坡時序詩意圖 解説 阿部孝次郎氏藏	美術研究 九五	國 華 五八九	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
晁殘筆秋江間渡圖解 阿部孝次郎氏藏	同	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
傅山筆斷崖飛帆圖解 阿部孝次郎氏藏	同	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
董邦達筆楓橋征帆圖解 磯村豊太郎氏藏	同	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同
袁江筆樓閣山水圖解 小林佐吉氏藏	同	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	眞觀彫刻の意義 眞觀彫刻に關する一二の問題 眞觀彫刻の背景	同	同	同

龍角寺まうで 田口 信行 畫 說 三六

藥師寺金堂本尊と七佛藥 足立 康 建築史 一ノ二

師光背 同 建築史 一ノ二

神護寺藥師像の造顯年代 同 考古學雜 二九ノ一二

善水寺藥師三尊像 小林 剛 國 寶 二ノ八

承安三年在銘佛像の發見 福島 宗緒 建築史 一ノ六

圓成寺大日如來像 解説 國 寶 二ノ一二

如來像 解説 美術研究 九三

東京美術學校藏 國 寶 二ノ七

慈眼寺聖觀音立像に就て 野間 清六 國 寶 二ノ一

藥師寺東院堂觀音菩薩像 同 國 寶 二ノ一

解説 同 國 寶 二ノ一

雨引山の觀音 田口 信行 畫 說 二五

空阿彌陀佛明暹と安倍の 若井 富藏 史迹と美 一〇ノ五

文殊像 同 史迹と美 一〇ノ五

鎌倉二階堂の黒地藏と堂 榎山半三郎 茶わん 一〇五

宇建立 同 茶わん 一〇五

飛天像 解説 美術研究 九一

瀨津伊之助氏藏 國 寶 二ノ六

秋篠寺伎藝天像 解説 國 寶 二ノ六

興福寺八部衆像 (名品小部) 畫 說 三二

執金剛神像 解説 美術研究 九六

東大寺藏 東大寺藏 畫 說 二六

東大寺南大門の仁王に就ての考察 西田 正秋 畫 說 二六

ポストン美術館の僧形像 小林 剛 同 三五

に就いて 同 同 三五

新國寶木彫善導像 赤松 俊秀 同 三四

豊臣兼九の木像に就て 田中 主水 同 三〇ノ一二

關東の鐵佛 八橋徳次郎 茶わん 一〇四

はめこみ佛 小野賢一郎 同 一〇二

願行上人に就いて 八橋徳次郎 同 一〇六

秘佛を撥ふ 金森 遼 畫 說 三二

運慶佛舍利を拾ふ 大口 珮夫 同 同

朝鮮・支那

朝鮮金銅佛二種 矢代 幸雄 美術研究 九〇

觀音菩薩像 市田次郎氏藏 同 同

大漢銘の觀音像に就て 宮川 次郎 好 古 二ノ二

北魏造像形式の成因に就て 野間 清六 考古學雜 二九ノ四

大同の石佛 村田 治郎 國 寶 二ノ一〇

玄中寺鐵佛 水平 讓 瓜 茄 五

奧村伊九良 同 瓜 茄 五

建水談義 佐々木三味 茶わん 一〇五

茶具を繞りて 中島利一郎 同 一〇七

支那工藝文化史概説 渡邊 素舟 學校美術 一三ノ一二

一、二 同 學校美術 一三ノ一二

滿支工藝觀察餘録 西川 友武 工藝ニユ 八ノ五一

一、六 同 工藝ニユ 八ノ五一

陶磁器 光藤 珠夫 茶わん 一〇一

陶磁雜談 竹中 久七 同 一〇四

民俗學的陶磁器研究の手續ともなる一書簡 小山富士夫 陶 磁 一ノ一

最近刊の歐文東洋陶磁器文獻に就て 同 陶 磁 一ノ一

陶磁器大年表 西堀 一三 茶わん 九六

茶陶研究覺書 一、八 同 五ノ一六

茶具講座 茶碗篇七、八 柴 田 東 美 五

初花 内藤 土狂 同 五ノ一六

うはぐすりの話 一、四 同 五ノ一六

うのふぐすり 無茶 法師 同 五ノ一六

めでたい陶器 梅澤彦太郎 同 五ノ一六

續々泥佛堂日録 一、四 無茶 法師 同 五ノ一六

家藏の陶磁 石井 柏亭 茶わん 九八

旅禪記 小田富士夫 陶 磁 一ノ四

「松屋茶會記」と日本陶器 杉本 捷雄 同 一ノ四

藤四郎景正の實在 藤田 力藏 書畫骨董 三六七

井戸・彫三島・黃瀬戸・樂・ちやわん 三井 泰山 同 五ノ九

樂茶壺鑑賞の急所 樂吉左衛門 同 五ノ一〇

仁清の遺作に就て 奥田 誠一 陶 磁 一ノ四

仁清及び其上繪に就て 内藤 堯寶 陶 磁 一ノ四

野村仁清作色繪法螺貝形香爐解 菅池貞夫氏藏 國 華 五七九

穎川に就て 立花 押尾 茶わん 九八

仁阿彌道八 藤本樂之軒 陶 磁 一ノ四

仁阿彌道八を語る 藤本樂之軒 畫 說 二六

初代道八(松風亭)に就て 小川 金三 同 五ノ一

瀬戸窯業文化と外來窯業文化との交流、上、下 竹中 久七 茶わん 一〇〇

瀬戸の名工 小田 冷御 同 一〇一

深喜亭燒―西三河五窯の内― 太田 一彩 同 九七

楠燒―西三河五窯の内― 同 同 九八

剛珍燒―西三河五窯の内― 同 同 九八

常滑 井上吉次郎 同 九八

津金胤臣父子頌徳之碑 藤田 力藏 陶 磁 一ノ二

信樂・伊賀窯業文化史抄―主として他國窯業文化上の交流に就て― 竹中 久七 茶わん 九六

紀州の陶瓷 石村賢次郎 同 一〇一

紀州陶磁史の一資料 同 同 一〇一

紀の國燒と古田織部正 鈴木智足堂 同 一〇一

古九谷史の研究 井上 銈次 同 一〇一

古九谷餘聞 上、中、完 同 同 一〇一

若杉窯と勇次郎 宮本 謙吾 同 一〇一

越中古陶窯要 郷倉 千靱 同 一〇一

小杉燒の鑑賞 同 同 一〇一

古丹波の茶陶磁 鈴木智足堂 同 一〇一

丹波の持味を語る 杉本 捷雄 同 一〇一

丹波茶人と古田織部正 鈴木智足堂 同 一〇一

丹波の茶陶に就て、上、下 杉本 捷雄 同 一〇一

織田有樂と丹波燒 滿岡 忠成 同 一〇一

小野原燒餘談 杉本 捷雄 同 一〇一

朝倉山樹のことゝも 同 同 一〇一

またまた朝倉山樹 大村 正夫 同 同 一〇一

備前焼の種々相鑑古余實	外狩素心庵	造形藝術	一ノ一	朝鮮の古陶	八田 實	茶わん	九九	毘沙門堂青磁鳳凰耳花瓶に就いて	神田松之助	史述と美	一〇ノ二	
備前燒窯印百種 上、下	桂、又三郎	茶わん	一〇〇一—一〇〇一—	朝鮮古窯址調査報告	八木獎三郎	陶 磁	一ノ一三	康照時代の陶磁	ワルテル・ボンデイ	茶わん	九九	
備前德利	同	同	一〇〇六	朝鮮の陶磁	久志 卓真	茶わん	一〇七	康照陶磁の色彩	同	同	九八	
備前蟲明焼に就いて	小山富士夫	畫 說	三一	旅の断片	徳富 蘇峰	同	一〇三	日本の風俗から見た染付	木村 捨三	同	九八	
蟲明窯の新資料に就て	池上千代鶴	やきもの	五ノ五	朝鮮の旅	小山富士夫	陶 磁	一ノ二	祥瑞論の變遷	鹽田 力藏	やきもの	五ノ一一	
備前蟲明の眞葛吉山と森香洲	同	趣味	五ノ一〇	消極的作品	鹽田 力藏	好 古	一二	景德鎮報告	井上吉次郎	茶わん	九九	
空趾磁片による備前燒の見方	宗田 克巳	同	五ノ二	粉引	笠井周一郎	茶わん	九九	宋胡録など	廣田 庄司	工 藝	九三	
姫谷燒めてたい盃	智 足 堂	同	同	高麗角花入	勝 藤 七	同	九八	銅器の見どころ	香取 秀真	畫 說	二八	
繪唐津水尾高麗窯發掘記	田代 盲陶	同	五ノ七	奥高麗茶碗考	瀧 田 忠成	同	一〇一	國寶鏡を中心として	後藤 守一	國 寶	二ノ一一	
繪唐津代表的古窯の一遺蹟	古川 合善	同	五ノ九	『大正名品鑑』を通じて見た高麗茶碗	多田 利吉	やきもの	五ノ八	東大寺の銅懸魚	中上川彦一郎	建 築 史	一ノ五	
有田白川古窯案内記	寺内半月生	同	五ノ七	養怡亭と香閣 上、下	山田萬吉助	茶わん	一〇六	尾張最古の在銘鐘	篠崎 四郎	史 述 と 美	一〇ノ五	
續有田案内記	同	同	五ノ九	扶安出土の磁片に就て	小田富士夫	同	一〇〇一—一〇〇一—	尾張八社神社の寶治在銘鐘に就て	伊東富太郎	同	一〇ノ六	
肥前有田の地名考	寺内 信一	同	五ノ七	朝鮮濟州島の陶磁 一—五	小田 三郎	考古學雜	二九ノ七	天文紀年銘の鎌倉鐘	伊東富太郎	考古學雜	二九ノ七	
小田志古窯跡發掘記	松尾 義一	同	五ノ七	義州窯跡と永興辰砂	吉村亥之吉	やきもの	五ノ二、四—七	愛知縣下の古鐘譚	篠崎 四郎	史 述 と 美	一〇ノ七	
色銅鳥窯大川内山の思ひ出	美和彌之助	趣味	五ノ七	平壤に於ける李朝陶磁	加藤茂三郎	茶わん	九九	一私案	牽牛花房主	考古學雜	二九ノ四	
色銅鳥郷大川内の陶片を懐ふ	同	同	五ノ九	李朝小威	今 春 應	好 古	一二	土佐寺山の古鐘に就ての	内藤 吹恒	誌	一〇ノ四	
べんざらんかけ(薩摩三島考)	前田幾千代	同	五ノ八	李朝染付の角瓶	梅澤彦太郎	趣味	五ノ二	私案	石田 茂作	茶わん	一〇ノ四	
薩摩花入十三題	同	同	一〇五	李朝壺 解説	後藤 登丸	美術研究	八六	經筒の話	石田 茂作	茶わん	一〇ノ四	
龍門司燒雜考 一	同	同	五ノ八	釜山窯跡の破片	奥平 武彦	茶わん	一〇四	周防桑山西峯の經筒と保延六年奥書銘法華經	弘津 史文	誌	二九ノ八	
筑前上畑古窯考	美和彌之助	趣味	五ノ八	朝鮮の陶活字	小林太市郎	同	九八	永祿在銘の風鐸	大岡 實	建 築 史	一ノ四	
五六七種現考 上	同	同	五ノ六	支那陶磁の理想に就て	渡邊 素舟	同	一〇二	古作茶釜の直段	香取 秀真	畫 說	三六	
豊前上野燒の研究 一—六	井上 圓藏	同	五ノ八—	支那陶磁に現れた東方文様文化の考察	同	同	一〇四	茶の湯釜の研究	三徳庵主人	道	日本の茶	五ノ七、八
豊後小宛燒	金原 陶片	茶わん	一〇一	從軍中に見た陶片	小早川秋聲	同	九八	家紋のある應仁鐘	馬渡八太郎	茶わん	一〇七	
鷹ヶ崎燒雜記	林 源吉	同	九八	陽羨名陶錄	藏原伸二郎	好 古	一四	尾張國の鐙口	伊東富太郎	誌	二九ノ一一	
龜山燒	渡邊 庫輔	同	九六	厦門大學文化陳列所の明器その他の標本に就て	宮本 延人	考古學雜	二九ノ五	鐙口	香取 秀真	茶わん	一〇二	
舟岡燒に就て	加藤 博揚	同	九八	學術調査班將來の陶磁片	小山富士夫	畫 說	二五	金銅裝大刀と金銅製柄頭	神林 淳雄	誌	二九ノ四	
源内燒の廢絶期と特色	入田 整三	同	一〇二	室町時代の船載陶磁	瀧 田 忠成	陶 磁	一ノ二	古名物の刀槍	漆山又四郎	好	古ノ二	
江戸高原燒に關する一資	高草 藍山	趣味	五ノ八	唐三彩を語る 上、中、下	中尾 萬三	やきもの	五ノ一、一三	備前刀の話	本阿彌光遜	畫 美	五	
鍛冶町燒	杉村松之助	茶わん	九九	支那汝窯に就てホブソン氏に與ふる書 一—七	同	趣味	五ノ一—七	鍋のいろいろ	香取 秀真	畫 說	二六	
琉球燒物考	比嘉 景常	工 藝	同			同		根付の語	同	茶わん	一〇四	
宋・高麗及び李朝の水指	梅澤彦太郎	日本の茶	五ノ七、八									

銅印鑄造法に就て 香取 秀眞 畫 說 二九
 金を大切にする猿 杉浦 冷石 茶わん 一〇〇
 樺井金谷傳話 林 源吾 同
 彫金家の墨戯 桑原 雙蛙 同
 斧行者法印金谷 杉浦 冷石 同
 函根より 香取 秀眞 畫 說 三三
 人馬彩畫鏡に就て 田澤 金吾 國 華 五八二
 八弧彩畫人物題龍文鏡解 柴田 雄次 同 五八二
 守屋孝藏氏藏 篠田 榮 同 五八九
 畫象鏡顏料の化學的鑑定 同 同 五八九
 再び彩畫鏡に古鏡二種 同 同 五八九
 の顔料金屬及銹の化學的 同 同 五八九
 鑑定 同 同 五八九
 紹興出土の畫象鏡に就い 三木 文雄 協會報告 五四
 て 同 同 五四
 漢委奴國王の金印につい 入田 整三 畫 說 三一
 て 同 同 三一
 天沼博士將來ネバル蓮華 大脇 正一 史述と美 一〇ノ四
 貨幣に就て 同 同 一〇ノ四

木 漆 器
 奈良朝工藝の二名品に就 吉野 富雄 漆と工藝 四五三
 て 同 同 四五三
 飛鳥時代の臺座と須彌壇 明珍 恒男 茶わん 一〇五
 に就て 同 同 一〇五
 法隆寺金堂の天蓋と須彌 福山 敏男 史述と美 一〇ノ三
 座 同 同 一〇ノ三
 福祥寺本堂の厨子と須彌 野地 修左 建築史 一ノ五
 壇 同 同 一ノ五
 御物 竹厨子 解説 同 同 二ノ三
 能面測定を試み 西田 正秋 畫 說 三二
 蒔繪の鑑賞 鶴澤 松月 好 古 二ノ二
 漆のいろは 三宅 莊六 同 一四
 と和歌と蒔繪の關係に就い 吉野 富雄 塔 影 一五ノ六
 て 同 同 一五ノ六
 和歌と蒔繪の關係に就て 同 同 四五四
 蒔繪と螺鈿の關係 同 同 九六
 奈良帝室博物館の漆藝品 同 同 四五二
 特別展覽會を見る 同 同 四五二

小倉氏所藏の國寶片輪車 吉野 富雄 國 寶 二ノ二
 蒔繪手箱を廻りて 同 同 二ノ二
 蒔繪花白河硯箱 解説 同 同 二ノ二
 根津嘉一郎氏藏 同 同 二ノ二
 博物館の黒漆栴檀螺鈿 吉野 富雄 畫 說 三二
 鞍 同 同 三二
 藍胎漆器 松田 楠六 茶わん 一〇四
 變浪彩匠塚出土彩畫漆匱 同 同 一〇四
 解説 同 同 一〇四
 染織及服飾品
 中宮寺縁起 萩野三七彦 畫 說 三二
 圖版解説 柴田 實 寶 雲 七ノ一
 近江兵主神社所藏三昧 同 同 七ノ一
 耶嚮に就て 同 同 七ノ一
 落漣津の御召に就て 日野西資孝 日本美術 五二
 文獻より見たる八丈織 同 同 五二
 紅毛往來瑣談 田中 俊雄 協會報告 九七
 もかすたら間道のことど 齋藤 正雄 工 藝 九七
 日本甲冑とその變遷 山上 八郎 國 寶 二ノ六
 猿投神社の大鏡 田中倉根子 畫 說 二六
 近世鯨帯考 遠藤 武 國 寶 二ノ三
 近世襦衣考 同 同 二ノ三
 戰國武將の南蠻風俗に關 同 同 二ノ三
 する二、三の考察 岡田 章雄 考古學雜 二九ノ七
 同 同 二九ノ七
 同 同 二九ノ九

石 工 品
 伊行末系の石大工に就い 川勝政太郎 史述と美 一〇ノ二
 て 同 同 一〇ノ二
 興正菩薩と浮島大石塔 同 同 一〇ノ一〇
 親の文永八年銘九重塔 新谷 素男 同 一〇ノ七
 同 同 一〇ノ七
 徳治三年銘十三重石塔 柴田 芳郎 同 一〇ノ一
 土橋氏藏 同 同 一〇ノ一
 廣島縣下の三石塔 織田三郎治 同 同 一〇ノ一
 西攝波豆の石塔と地藏 川邊 賢武 同 同 一〇ノ一〇
 古燈籠をたづねて 龍居松之助 史蹟名勝 一四ノ一
 同 同 一四ノ一
 同 天然紀念 同 同 一四ノ一

建築及庭園
 日本支那の長さの單位と 加藤 泰 建築世界 三三ノ一
 數詞に關し 同 同 三三ノ一
 1 2
 日本的建築と滿洲的建築 白石 博三 同 三三ノ一
 1 2
 民家から見た日本と支那 藤田 元春 建築雜誌 六五三

日本
 日本建築の美に就て 菅原又七郎 學 叢 八
 日本建築意匠に於ける特 大岡 實 國 華 五八六
 殊性 同 同 五八六
 日本建築屋蓋の反轉曲線 同 同 一ノ四
 について 同 同 一ノ四
 古建築の柱の内轉び 同 同 一ノ一
 平城京二條大路と東京極 大岡 實 同 同 一ノ一
 路 同 同 一ノ一
 恭仁京の東西京極に就い 田村 吉永 史述と美 一〇ノ六
 て 同 同 一〇ノ六
 信貴山縁起に見ゆる建築 福山 敏男 畫 說 三一
 平家納經に見える僧廬 關野 克 建築史 一ノ五

寶篋印塔笠四隅突起の一 天沼 俊一 史述と美 一〇ノ三
 考察 同 同 一〇ノ三
 西大寺奥院の廟塔 川勝政太郎 同 同 二ノ四
 中尊寺釋尊院五輪塔解説 同 同 二ノ二
 常樂寺石造多寶塔 同 同 二ノ二
 大宮寶神社の石燈籠に就 永濱 宇平 史述と美 一〇ノ二
 いて 同 同 一〇ノ二
 大悲菩薩覺盛の廟塔 黒田 昇義 同 同 一〇ノ一
 土佐に存する「埋葬石佛」 笠井 藍水 同 同 一〇ノ一
 に就て 同 同 一〇ノ一
 イエス・キリストの略記 前田多三郎 同 同 一〇ノ一
 雑 雜 前田多三郎 歷史地理 七三ノ三
 矢立の話 佐藤 碧 書畫骨董 三七〇
 根付の覺書 入江 新八 雜誌 二ノ二
 羽子板の變遷 山田德兵衛 好 古 二ノ二
 舞臺扇の珍品 古畑 榮 茶わん 九六
 同 同 九六
 浮世繪界 四ノ八

寶篋印塔笠四隅突起の一 天沼 俊一 史述と美 一〇ノ三
 考察 同 同 一〇ノ三
 西大寺奥院の廟塔 川勝政太郎 同 同 二ノ四
 中尊寺釋尊院五輪塔解説 同 同 二ノ二
 常樂寺石造多寶塔 同 同 二ノ二
 大宮寶神社の石燈籠に就 永濱 宇平 史述と美 一〇ノ二
 いて 同 同 一〇ノ二
 大悲菩薩覺盛の廟塔 黒田 昇義 同 同 一〇ノ一
 土佐に存する「埋葬石佛」 笠井 藍水 同 同 一〇ノ一
 に就て 同 同 一〇ノ一
 イエス・キリストの略記 前田多三郎 同 同 一〇ノ一
 雑 雜 前田多三郎 歷史地理 七三ノ三

寶篋印塔笠四隅突起の一 天沼 俊一 史述と美 一〇ノ三
 考察 同 同 一〇ノ三
 西大寺奥院の廟塔 川勝政太郎 同 同 二ノ四
 中尊寺釋尊院五輪塔解説 同 同 二ノ二
 常樂寺石造多寶塔 同 同 二ノ二
 大宮寶神社の石燈籠に就 永濱 宇平 史述と美 一〇ノ二
 いて 同 同 一〇ノ二
 大悲菩薩覺盛の廟塔 黒田 昇義 同 同 一〇ノ一
 土佐に存する「埋葬石佛」 笠井 藍水 同 同 一〇ノ一
 に就て 同 同 一〇ノ一
 イエス・キリストの略記 前田多三郎 同 同 一〇ノ一
 雑 雜 前田多三郎 歷史地理 七三ノ三

年中行事繪卷の所謂平野祭園について	福山 敏男	建築史	一ノ一	泉殿釣殿の研究	森 蘊	寶	雲七ノ一	今の法隆寺伽藍は焼失後の再建に足立博士の法隆寺新非再建論に對して	喜田 貞吉	歴史地理	七四ノ一
例 和様唐様折衷の最古の實例	大岡 實	同	一ノ五	江洲盛安寺の書院	藤岡 通夫	畫	説三六	法隆寺新非再建論に對して	田中 重久	史述と美	一〇ノ八
縁に就て	關野 克	國寶	二ノ一一	東求堂の四疊半同仁齋に就て	澤島英太郎	同	二六、二八	法隆寺新非再建論駁考	喜田 貞吉	歴史地理	七四ノ二
築地の於板について	同	建築史	一ノ六	尾張明倫堂聖堂の建築	城戸 久	建築雜誌	六五二	見損なつて居た故關野博士と法隆寺二寺説	足立 康	同	七四ノ三
源氏の貞觀建築論を讀む	足立 康	同	同	江戶時代の孔子廟	飯田須賀新	學	叢七	今の法隆寺伽藍は飛鳥時代の創建	同	同	七四ノ三
喜田博士追悼錄	同	歴史地理	七四ノ二	西濱御殿と養翠園	石村賢次郎	茶わん	九九	喜田博士及び源豐宗氏の反駁に對して	同	同	同
同	同	同	七四ノ三	民家(宮城縣に於ける江戸時代の民家構造)	小倉 強	建築世界	三三ノ一	再び源氏の法隆寺論に就て	同	同	同
大和紀行 乾、坤	伊東 忠太	建築史	一ノ一、二	臺灣の基督教建築	藤島玄治郎	國寶	二ノ四	太子傳補記に於ける「斑鳩寺被災」の記事について	板橋 倫行	史述と美	一〇ノ一一
旅泊餘論 14-15	關根要太郎	日本建築	二五ノ四、五	中世の天地根元造	關野 克	史述と美	一〇ノ二	法隆寺若草塔の心礎	足立 康	建築史	一ノ四
賀茂規清の防火建築編	小倉 強	同	二五ノ二	春日造の名稱に關聯して	谷 重雄	建築史	一ノ五	法隆寺論爭史話 一—四	大口 環夫	史述と美	一〇ノ八
貞觀儀式大嘗宮の建築	關野 克	建築史	一ノ一、二	日吉造考	河本 義雄	史述と美	一〇ノ九	喜田足立兩博士の法隆寺論爭	同	同	一〇ノ八
創建當時の平安宮紫宸殿に就て	關野 克	建築史	一ノ四	都那水分神社本殿の建築年代	黒田 昇義	建築史	一ノ五	喜田、足立兩博士法隆寺論爭	大岡 實	建築史	一ノ五
瓦葺宮殿の權輿	足立 康	同	一ノ五	石清水八幡宮社殿上、下	谷 重男	同	一ノ二、三	大官大寺の伽藍配置	大岡 實	建築史	一ノ五
皇室と二條城	芝 葛盛	史蹟名勝天然紀念	一四ノ一二	大崎八幡神社の建築裝飾に就て	藤岡 通夫	國寶	二ノ四	本薬師寺趾と大官大寺趾に關する疑	田中 重久	史述と美	一〇ノ一二
元離宮二條城の御下賜について	岩波 武信	同	同	東根若宮八幡の神座	川勝政太郎	史蹟名勝天然紀念	一四ノ四	海龍王寺五重小塔 解説	中上川彦一	國寶	二ノ一
國寶二條城	澤島英太郎	同	同	伊賀八幡宮神橋 解説	阪谷良之進	同	同	東大寺法華堂禮堂の造營年代	大岡 實	建築史	一ノ三
史蹟としての二條城	上田 三平	同	同	鳥居の話	阪谷良之進	史蹟名勝天然紀念	一四ノ四	奈良時代西大寺伽藍配置	大岡 實	建築史	一ノ三
二條城時代の規模と本丸二之丸の殿屋	大熊 喜邦	同	同	法隆寺	井上吉次郎	茶わん	一〇二	元興寺塔婆の復原に就て	太田 靜六	建築史	一ノ四
歴史上より見たる備中松山城 下	永山卯三郎	同	一四ノ一	法隆寺建築の様式に就て	足立 康	建築史	一ノ五	元興寺塔婆復原考	同	同	同
國寶松山城修理工事報告	同修理事務 所編	建築雜誌	六四九	考古學上よりしたる法隆寺天武朝再建説	田中 重久	歴史地理	七四ノ四	元興寺塔婆復原考私見	黒田 昇義	同	同
毛利輝元の廣島築城	野村 晋城	歴史地理	七三ノ五	法隆寺天武天皇朝再建説を讀む	足立 康	同	七四ノ五	元興寺塔婆江戸期の修理に就て	太田 靜六	史蹟名勝天然紀念	一四ノ四
豊臣時代の大阪城	桑田 忠親	同	七四ノ三	法隆寺持統天皇七年再建説に就て	同	同	同	國分寺の創建について	家永 三郎	建築史	一ノ四
長門國阿武郡萩松平千代熊丸居城の圖	大熊 喜邦	國寶	二ノ六	足立康氏の「法隆寺持統天皇七年再建説に就て」を駁す	源 豊宗	同	一〇ノ一〇	國分寺塔婆の一考察 上、下	太田 靜六	考古學雜誌	二九ノ九、一〇
松江城天守閣	同	同	二ノ二	法隆寺傳法堂に關する疑	若井 富藏	同	一〇ノ七	大安寺の建築に關し	加藤 泰	建築世界	三三ノ一
校倉に就て	足立 康	建築史	一ノ六	京都帝國大學講師源豐宗氏の法隆寺再建論	足立 康	史述と美	一〇ノ五	大安寺花嚴院と宇治花嚴院	福山 敏男	建築史	一ノ二
校倉にて維かれる日本	稻葉 君山	畫	三三	法隆寺新非再建論	同	建築史	一ノ三	興福院に就いて	同	史述と美	一〇ノ一二
稻葉博士の「校倉にて維かれる日本」に答ふ	關野 克	同	三四	法隆寺再建論と新非再建論	同	同	同				
帝室博物館の校倉を語る	秋山 光夫	同	三六								
	阪谷良之進										
	田中倉根子等										

平安時代に於ける奈良式
伽藍配置 大岡 實 建築史一ノ六

室生寺新説 永島福太郎 國史學 三九

清水寺長谷寺石山寺の禮
堂 福山 敏男 建築史一ノ三

播磨太山寺 魚澄惣五郎 國寶 二ノ一一

上醍醐の炎上 谷 重雄 建築史一ノ六

醍醐寺經藏の思出 八戸成龜樓 史述と美 一〇ノ一一

醍醐寺三寶院唐門 解説 千葉 眞幸 國寶 二ノ六

平泉無量光院址について 田口 信行 學叢 六

白水阿彌陀堂の印象 田口 環夫 畫說 三四

播磨の淨土寺 太田博太郎 同 三五

創立當時に於る天龍寺の
平面上、下 永濱 宇平 建築史一ノ一、四

天橋山智恩寺 乾 兼松 史述と美 一〇ノ五

金剛輪寺三重塔 乾 兼松 建築史一ノ三

雲樹寺四脚門(大門) 田邊 泰 國寶 二ノ七

安樂寺八角四重塔 森 蕙 同 二ノ三

金閣と法水院 大岡 實 同 二ノ一〇

藥師寺觀音堂 同 實 建築史一ノ三

藥師院本堂及び書院 同 實 同 一ノ二

金山天王寺雜記 川勝政太郎 同 實 史述と美 一〇ノ一

六角堂雜記 同 實 同 一〇ノ八

薪一休寺—禪宗の美術— 北川 桃雄 同 實 茶わん 一〇二

徳川崇源院御靈屋物語 坪谷 水哉 史蹟名勝 一四ノ三

國寶園城寺大門及新羅善
事務所 同 實 建築雜誌 六五一

國寶園城寺大門及新羅善
堂修理工事報告 同 實 同 六四六

國寶瑞壽寺總門佛殿及法
堂修理工事報告 同 實 同 六五〇

國寶石津寺本堂修理工事
報告 同 實 同 六五五

國寶大聖寺不動堂修理工
事報告 同 實 同 六五〇

本邦の古瓦に就いて 石田 茂作 同 實 夢殿論誌 一九

本邦上代の鬼瓦に就て 關根 龍雄 同 實 瓦研究(二) 考古學雜 二九ノ五

尾張、三河地方出土古瓦
の分布 田中 重久 夢殿論誌 一九

武相に於ける古刹と出土
古瓦に就いて 石野 英 瓦研究(二)

關東地方出土の文様瓦に
就いて 三輪善之助 同

東北地方出土の特異文様
古瓦に就いて 内藤 政恒 同

大和北部に於ける出土古
瓦の分布 岩井 孝次 同

北九州出土古瓦の様式に
就いて 鏡山 猛 同

播磨東部地方に於ける出
土古瓦に就いて 島田 清 同

和泉地方出土古瓦の種々
相 小谷 方明 同

瓦積及瓦積基礎の研究 田中 重久 同

再び木瓦葺に就いて 福山 敏男 同

歴史家の觀たる古瓦の研
究(遺稿) 故喜田貞吉 同

軒先瓦の名稱私見 村田 治郎 同

再び軒瓦の名稱に就て 足立 康 同

再び軒瓦の名稱に就いて 同 同

武藏國分寺の文字瓦に就
て、上、下 太田 静六 同

會津の古瓦 松本 源吉 同

飯盛山出土の經瓦 西御門良忠 同

道成寺本堂天授四年在銘
鬼瓦 入田 整三 同

繪のある鹽飽島の古瓦 藤原 義一 同

姫路城の諸相 島田 貞彦 同

瓦室雜考 夢殿論誌 一九

日本庭園史略考 瓦研究(二) 考古學雜 二九ノ五

古庭園の保存問題に就て 重森 三玲 同

古庭園の再吟味に就て 同 同

平安時代前期の庭園に關
する研究 同 同

平安鎌倉時代の造庭技術 同 同

室町時代に於ける「前栽
秘抄」の影響 森 蘊 建築史一ノ五

禪宗庭園の過去及將來 中野 楚溪 林 泉 五一、五二

蓬萊庭園の史的發達と様
式手法上の變遷 重森 三玲 同 四九

味ふ庭園 丹羽 鼎三 史蹟名勝 一四ノ一一

近代日本庭園への意圖 重森 三玲 林 泉 五〇

法金剛院の庭園に就て 下森 蘊 建築史一ノ二

龍安寺庭園の研究 森 蘊 畫說 三三

天龍寺庭園の變遷と様式
手法 重森 三玲 史述と美 一〇ノ六

天龍寺庭園築造の經緯 同 同

天龍寺庭園の自然的復原 吉永 義信 史蹟名勝 一四ノ七

慈照寺の錦鏡池 龍居松之助 國寶 二ノ七

西福寺庭園 鍋島 雄男 林 泉 六〇

瑞泉寺庭園(關東名園譜
二) 重森 三玲 同

永福寺址庭園(關東名園
譜一) 重森 三玲 同

二條城二之九庭園 吉永 義信 史蹟名勝 一四ノ二二

三秀亭庭園 小宮 山 林 泉 六〇

寺田氏南木莊庭園に就て 重森 三玲 同

蓬萊園 小宮山脩康 同

六義園の今昔 外山 英策 畫說 二五

尾崎氏庭園 龍居松之助 國寶 二ノ三

南越遺園 小池 秋草 茶わん 一〇七

表千家の茶席と茶庭 重森 三玲 林 泉 六〇

露地について 高橋 箒庵 茶わん 九八

日本庭園に於ける地方色 上原 敬二 同

石川縣の庭園 重森 三玲 林 泉 五九

福井縣の庭園 同 同

四國の庭園 同 同

朝鮮 同 同

佛國寺の造營計畫に就て 米田美代治 建築雜誌 六四八
 朝鮮古建築雜信 杉山 信三 史述と美 一〇ノ一二
 朝鮮の垂木瓦に就いて 村田 治郎 夢殿論誌 一九
 朝鮮瓦の製造法に就いて 藤島亥治郎 瓦(綜合古)研究(二) 同
 朝鮮の庭園 龍居松之助 史蹟名勝 一四ノ五
 天然紀念物

支那

北支古建築保存の近況 關野 克 考古學雜 二九ノ一
 支那建築に於ける柱の延びと内轉び 竹島 卓一 建築史 一ノ六
 大同石窟寺開鑿年代に就て 五十嵐牧太 建築世界 三三ノ五
 紫金城 正木 直彦 塔 影 一五ノ一
 應縣佛宮寺の大木塔 村田 治郎 建築雜誌 六四八
 天壇 内田 詳文 新建築 一五ノ一〇
 熱河普陀宗乘廟、永祚寺 藏田 周忠 同
 雙塔、慈恩寺大雁塔 村田 治郎 建築雜誌 六五五
 晉北懸縣の孔子廟 同 同 六五六
 蒙疆の回教寺 同 同 二一〇
 熱河 瀟湘日錄抄 谷川 徹三 思想 二一〇
 熱河瞥見 上、下 永見 健一 史蹟名勝 一四ノ二、
 天然紀念物
 秦漢瓦當文様に就いて 田邊 泰 夢殿論誌 一九
 瓦(綜合古)研究(二)

支那

漢代版磚序論 堂野前墨禪 茶わん 一〇一
 瀟湘國撫順の古瓦に就て 渡邊 三三 考古學雜 二九ノ二
 支那に於ける木瓦に就いて 齋藤 武一 夢殿論誌 一九
 支那に於ける木瓦に就いて 村田 治郎 瓦(綜合古)研究(二) 同
 支那上代の鴟尾に就いて 駒井 和愛 同 同
 瀟湘出土古瓦管見 島田 貞彦 同 同
 支那垂木瓦序説 村田 治郎 同 同

支那

墨流しの試み 關戸彌太郎 畫 說 三六
 宸翰に就いて 高柳 光壽 茶わん 一〇四
 我國上代の漢字に就て 相澤 春洋 書 道 八ノ二
 我國上代書道と張碑 同 同 八ノ四
 古筆の話 同 同 茶わん 一〇〇
 金剛場陀羅尼經と日本書紀 植村 和堂 書 道 八ノ二
 三願經と書風 田中 地堂 同 同
 天平期の寫經所 勝 雅胤 茶わん 一〇二
 奈良時代の寫經と寫經生 香取 良造 書 道 八ノ三、一六
 假名と大寶戶籍帳 加藤 醇 學 叢 六
 上代假名讀座 二、三 伊藤 壽一 武者の小 四ノ一、二
 高野切に就て 上、下 久曾神 昇 書 道 八ノ三
 變態平假名(ん)に就いて 赤松 俊秀 史 林 二四ノ二
 京都妙蓮寺藏後深草天皇宸翰御消息に就て 伏見天皇宸翰御集の研究 次田 香澄 文 學 七ノ六
 御手鑑目錄並代付(校刊) 近衛公爵家藏國寶六手鑑 藤田 經世 畫 說 三四
 手鑑のこと 上下二帖、目次 京都美術 一七
 古葉略類聚鈔に就て 伊部内親王願文と白樂天詩卷 神郡 晚秋 書 道 八ノ二
 傳紀貫之筆名家集切の内容 久曾神 昇 同 八ノ二

支那

名家集切 相澤 春洋 同 同
 名家集切釋文 植村 和堂 同 同
 名家集切の瞥見 松下 大處 同 同
 堤中納言集の書風に就て 花輪たね子 同 同
 雜洛狀 和田 山蘭 同 同
 傳行成筆假名消息 (名品小解) 藤田 經世 畫 說 二八
 藤原俊成本奉記並にその紙背文書の研究 萩野三七彦 史學雜誌 五〇ノ二
 藤原教長の筆蹟に就て 伊藤 壽一 畫 說 三二
 今城切を中心として 多賀 宗準 史學雜誌 五〇ノ四
 參議藤原教長傳

支那

三十六人集の書風に就いて 出雲路通次 京都美術 一七
 北條時宗書狀(解説) 國 寶 二ノ四
 大内盛見一切經供養願文 花見 朔己 茶わん 一〇六
 近衛兼光院と書道 田山 信郎 同 一〇三
 江戶幕府社寺領朱印狀の傳存に就いて 相田 二郎 歴史地理 七三ノ二、
 三、四
 不昧公の印譜に就て 桑原羊次郎 茶わん 一〇〇
 松平不昧公印譜 一、二、三 同 九六―九八

書蹟・印章・文書

署名と印章 楠瀬 日年 造形藝術 一ノ一

高貞碑と高氏の一族	須羽 水雅	道 八ノ五	金井澤碑と山ノ上碑	相川 龍雄	茶わん 九八	遼の慶州城址	竹島 卓一	東方學報 一〇ノ二
高貞碑釋文	金子 鶴亭	同	奈良朝古碑の一瞥	土岐 壽一	道 八ノ六	遼の中京城内に存在する石器時代の遺蹟	鳥居 龍藏	東方學報 九
權書と張猛龍碑	永田 鶴風	八ノ四	日光山碑の一考察	藤井萬喜太	同	金の上京址、白城に就て	園田 一龜	東方學報 二九ノ七
張猛龍清顯碑に就て	桑原 雅南	同	勝道の上野國講師補任説に就て	武田 宗久	同	金完顔希尹の墳墓に就て	瀧 遼一	同
張猛龍碑と泉甬誕碑	大澤 雅然	同	下總國香取郡椴林寺及び其附近の板碑	家永 三郎	同	築について	同	同
張猛龍清顯之碑の鑑賞	須川 樵谷	同	聖德太子御名號考	渡邊 澄夫	同	南北朝隋唐に於ける河西の音樂——西涼樂と胡部新聲とに就て——	岸邊 成雄	同
張猛龍碑の考究	須羽 水雅	同	興福寺大方乘に就いて	空華 日工集考 上、下	同	新聲とに就て——	同	同
張猛龍碑前後の方筆楷書に就て	三室 金羊	同	別抄本及略集異本に就て	玉村 竹二	同	筆及び筆についての一考察	同	同
張猛龍碑釋文	同	同	策彦和尚の入明の記錄に就て	久保田量遠	同	十二律管について	同	同
中岳嵩廟碑の古朴感	永田 鶴風	八ノ八	自筆本「見聞談叢」に就て	龜井 伸明	同	南熱河に於ける新石器時代遺物概観	兒玉 重雄	同
中岳嵩高靈廟碑の考察	須羽 源一	同	榑野里出土と推定せられる一群の遺物	梅原 末治	同	内蒙百靈廟附近に於ける景教の遺跡に就て	佐伯 好郎	同
靈廟碑の地位	恒川 樵谷	同	樂浪の青銅刀子	榑本 龜生	同	蒙疆發見の細形銅劍	駒井 和愛	同
靈廟碑雜話	中村 不折	同	高句麗の墓制に就て	梅原 末治	同	遼陽の一日	鷺淵 一	同
聖裔孔谷園と玉虹樓帖	馬場 春吉	八ノ一	鮮安高句麗墓に關する一考察	駒井 和愛	同	タイ國雲南省及び東京地方面出土の數種の青銅器について	山本 達郎	同

歴史・考古學

日本

朝鮮・支那

東京帝國大學人類學教室にあるモールス・クレクシヨン	小山富士夫	陶 磁 一ノ三	九都城及び國內城の新解	水島鋼太郎	史 觀 一九	安南の貿易港雲屯	同	同
讚岐我拜師山發見銅劍と善通寺町附近の上代文化	寺田 貞次	考古學雜 二九ノ一一	朝鮮扶餘に於ける發掘調査	藏 田 藏	同	古田織部重勝の年譜	中野 楚溪	林 泉 五六
植輪人形の眼	和辻 哲郎	思想 二〇〇	新羅東北境に於ける黒水鐵勒、達始等の諸族に就いて	三上 次男	同	『不白筆記』喀味齋へ贈る書 四八	玄妙齋註釋	日本の茶 五ノ八
植輪の武器と武裝	末永 雅雄	茶わん 九七	後岡の發掘に就いて	橋本 増吉	同	茶人としての安樂庵策傳と小堀遠州	山本 辰一	茶わん 一〇五
植輪の由来	相川 龍雄	同	河南省安陽郊外後岡、高樓莊兩遺跡發掘調査豫報	大給 尹	同	烏丸光廣卿の茶道	荒川 散步	東 美 五
植輪の美	柴田 常恵	同	安陽出土と傳へる二三の玉授の戈に就て	梅原 末治	同	不昧公逸話	石田 誠齋	武者の小 四ノ一
植輪について	小野賢一郎	同	殷墟發見の大盤石 承前	堂野前照禪	同	冗話西村鏡庵	高橋 梅園	茶わん 九六
隱岐の史蹟	後藤 守一	同	北魏建國時代の佛教政策と河北の佛教	塚本 善隆	同	慶翁閑話	三村清三郎	畫 說 三一
日本金石文挿話	佐藤 虎雄	同	東亞考古學會北魏平城址調査豫報	小林 知生	同	茶人つれづれ草抄	鳩谷 隠士	同
大分縣金石年表 一—四	野本 白雲	書 道 八ノ六	萬集二題	同	同	藏書家としての吉田篤敏と木村兼庵	丁 夢 生	同
飛鳥奈良時代の墓誌三種	植村 和堂	書 道 八ノ二	東亞考古學會北魏平城址調査豫報	小林 知生	同	同	同	同
上野國三碑考 上、下	井上 通泰	歴史地理 七三ノ一、二	同	同	同	同	同	同

雑

飛鳥奈良時代の墓誌三種	植村 和堂	書 道 八ノ二	東亞考古學會北魏平城址調査豫報	小林 知生	同	同	同	同
上野國三碑考 上、下	井上 通泰	歴史地理 七三ノ一、二	同	同	同	同	同	同
日本金石文挿話	野本 白雲	書 道 八ノ六	萬集二題	同	同	同	同	同
大分縣金石年表 一—四	日名子太郎	史蹟名勝 一四ノ三一	同	同	同	同	同	同
飛鳥奈良時代の墓誌三種	植村 和堂	書 道 八ノ二	東亞考古學會北魏平城址調査豫報	小林 知生	同	同	同	同
上野國三碑考 上、下	井上 通泰	歴史地理 七三ノ一、二	同	同	同	同	同	同

原三溪翁を憶ふ	田中	一松	塔	影	一五ノ一〇
田中青山翁の趣味	上	市島	春城	書畫骨董	三七二
古版地圖と民族性		栗田	元次	史學研究	一一ノ一
耶蘇會版持にその日本字印刷物について		幸田	成友	史學	一八ノ二、三
支那圖書彫版の發達		岩重	憲德	文部時報	六四六
國寶元版一切經閣藏記録		上村	眞肇	大正大學	二九
燉煌經卷の蒐集		安藤	德器	茶わん	九八
西夏大字大藏經の雕刊につきて		常盤	大定	東方學報	九
				東京	

古美術關係單行圖書

總記

東洋の理想

關倉天心全集 決定版

關倉天心論攻

東洋美術

東亞美術史綱 二、三、四

東洋美術研究文獻目錄 昭和十三年

畫圖佛敎美術講話

正倉院御物圖錄 十一、十二

帝室博物館圖錄 第四期

帝室博物館圖錄 第十二輯

東洋美術大展覽會圖錄 解説

東洋美術文庫

牧溪

雪舟

三阿彌

等伯

光悅

宗達

探幽

光琳

遠州

應舉

春信

清長

大雅

竹田

松花堂

關倉覺三著 淺野見譯 元社

關倉一雄 淺野見譯 元社

關倉久道 淺野見譯 元社

關倉久思 淺野見譯 元社

關倉今書 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

關倉雄譯 淺野見譯 元社

近世風俗圖 大禮記念美術館年報 昭和十三年

改稿 日本古代文化 關玄とあはれ

日本美術論 學生文庫 日本美術論 造形教育體系

日本美術論 造形教育體系 藝林逍遙

日本美術資料 第二輯 日本美術史資料

九、一〇 鎌倉時代解説 十一、一二 室町時代解説

藝苑聚芳 十五、二〇 古美術寫真集 二〇—二四

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

伯林日本古美術展覽會記念圖錄 伯林日本古美術展覽會記念圖錄

佐藤良 大禮記念京都市美術館

和辻哲郎 岩波書店

大西克禮 岩波書店

金原省吾 河出書房

金原省吾 河出書房

高野辰之 東京美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

美術研究所 美術研究所

支那風土記 支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

支那古美術聚英 大阪市立美術館展覽會圖錄 第九

米内山庸夫 改造社

大阪市立美術館 便利堂

常盤大定 關野貞 藏

美術研究所 尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

尾高鮮之助 江書院

目錄 五月 於大阪美術俱樂部 某家賣立
 於大阪美術俱樂部 當市白水庵賣立
 於東京美術俱樂部 養軒翁賣立
 六月 於大阪美術俱樂部 某家賣立
 於東京美術俱樂部 宮田魚軒氏愛藏品展觀圖錄
 於京都美術俱樂部 四時長明居他家賣立
 於大阪美術俱樂部 泉松庵賣立
 於東京美術俱樂部 某大家賣立
 於京都美術俱樂部 某家賣立
 於東京美術俱樂部 長松庵金子家某家賣立
 於東京美術俱樂部 千松軒某家賣立
 於東京美術俱樂部 某伯爵遺愛品賣立
 十月 於東京美術俱樂部 對黃軒野ニ某家賣立
 於大阪美術俱樂部 舊大名賣立
 於東京美術俱樂部 舊大名賣立
 於大阪美術俱樂部 養市某家賣立
 於大阪美術俱樂部 某家賣立
 於京都美術俱樂部 踏市藤澤松庵賣立
 於古屋美術俱樂部 故新庵賣立
 於東京美術俱樂部 吳南莊某大家賣立
 十一月 於東京美術俱樂部 伊藤平山洞賣立
 於大阪美術俱樂部 特別展觀目錄
 於山中石陳列所 石燈菴野外展
 於東京美術俱樂部 清元延壽太太愛玩品賣立
 於大阪美術俱樂部 某家賣出
 於東京美術俱樂部 舊大名某舊家賣立
 於京都美術俱樂部 安井家賣立
 於東京美術俱樂部 某大家賣立
 於大阪美術俱樂部 某家賣立
 十一月 於東京美術俱樂部 某舊大名賣立
 於古屋美術俱樂部 心月菴並ニ某舊家賣立
 於東京美術俱樂部 有賀家某大家賣立
 於東京美術俱樂部 藝大山莊愛什展觀
 十二月 於東京美術俱樂部 展觀入札目錄
 於東京美術俱樂部 舊大名某大家賣立
 於古屋美術俱樂部 吟姿庵並北勢某大家賣立
 於東京美術俱樂部 河深莊某大家賣立
 於大阪美術俱樂部 某家賣立

目錄 十二月 於東京美術俱樂部 某大家(神奈川縣)久留米齋
 賣立
 於京都美術俱樂部 某家賣立
 繪 畫
 日本名畫展覽會圖錄
 第三回名寶展覽會圖錄
 日本名畫譜 佛畫篇 一六一
 一八
 法隆寺壁畫保存方法調查報告
 圓城寺藏 五部心觀 付解説
 中尊寺經繪
 三寶繪詞 上
 日本肖像畫圖錄
 國文學名家肖像集
 紫式部日記繪卷(森川本)
 國寶 雲舟山水長卷(毛利公爵家藏)
 相阿彌四季山水畫册
 伯林東亞美術館藏光悅色紙帖
 美術研究資料第八輯
 光悅書 四季草花繪卷
 宗達畫 四季草花繪卷
 新撰宗達派畫集 一—二輯
 御物宗達筆扇面散屏風繪(帝室博物館藏)
 池大雅研究發表
 第三 大雅堂を中心に
 木米名畫譜
 渡邊華山
 華山全集
 渡邊華山と冷泉爲茶
 田中納言
 續蕉影餘韻
 長崎派生南宗名畫選
 日本版畫變遷史
 浮世繪讀本
 大阪市立 大阪市役所
 大阪市立 便利堂
 美 術 館 便利堂
 京都市立繪畫 便利堂
 專門學校 便利堂
 (再版)文部省 同 省
 圓城寺 刊行會
 園 城 寺 刊行會
 源 爲憲 大和繪同好會
 奈良帝室 古典保存會
 博物館 便利堂
 吉澤義則監 博 美 社
 永井如雲 東京美術書院
 秋山光夫 貴重圖書複製會
 美術研究所 便利堂
 美 術 研 究 所 便利堂
 澁谷哲吉 東京美術書院
 聚 樂 社 聚 樂 社
 聚 樂 社 聚 樂 社
 人見勇市 冷 陽 處
 聚 樂 社 聚 樂 社
 太田鏞太郎 華山叢書出版會
 鈴木清節 華 山 會
 藤森成吉 高見澤木版社
 山田秋衛 晉保津之舍
 伊藤松宇 菊本直次郎
 恩賜京 館 便利堂
 博 物 館 便利堂
 島屋政一 大阪出版社
 吉田 映 二

浮世繪精品畫帖 五—一五
 浮世繪稀帖
 浮世繪名作百版畫 一—二二
 廣重江戶風景版畫集
 初代廣重 東海道五十三次
 一—二—一四
 富嶽百景
 泥繪と大名屋敷
 相撲浮世繪複刻
 醫範提綱内象銅版圖
 支那繪畫史
 宋元名畫集 續輯一—六
 爽籟館欣賞 第二輯
 石濤名畫譜
 八大山人畫譜
 佛像の鑑賞 中(東雲文庫)
 佛像彫刻案内
 京都の彫刻
 深大寺金銅釋迦如來倚像
 中田の十一面觀音金銅像
 能面 解説付
 大同石佛案内記
 雲岡の石窟とその時代
 (支那歴史地理叢書一)
 日本古典全集 第六期
 古今名物類聚 下
 文部省認定重要美術品圖錄
 工藝編第二期 卷一
 金峰山經塚遺物の研究
 笹川一コレクション展觀目錄
 茶碗目利口傳書(茶道文庫)
 古陶窯集影
 高見澤木版社 同
 高見澤木版社 同
 高見澤木版社 同
 松木喜八郎 松木喜八郎
 高見澤木版社 同
 清水 綠 東方文化學會
 大熊 喜邦 兩國書房
 森下 澄 兩國書房
 市原 秀夫 同
 內藤 湖南 弘文堂書房
 聚 樂 社 同
 阿部 孝次郎 博文堂
 聚 樂 社 聚 樂 社
 聚 樂 社 聚 樂 社
 中村亮平 寶 雲 社
 奈良帝室 同
 博物館 同
 京都市觀光課 同
 堀口 蘇山 藝苑巡禮社
 同 右 同
 野上豊一郎 岩波書店
 安藤 徳器 寶 雲 舍
 水野 清一 富 山 房

昭和十四年度美術文獻目錄

やきもの陶 鑑	小野賢一郎	雲	舍	日本刀(岩波新書)	本間 順治	岩波書店
一問一答	竹中 久七	春俗寮美食會	舍	日本刀講座	桑原羊次郎	雄山閣
陶器を見る眼	加藤 春鼎	雲	舍	別圖 刀劍金工總覽	秋山 久作	雄山閣
茶入茶碗名器百圖	遠藤 敏夫	雲	舍	補遺 刀の差し方他五篇	山上 八郎	劍元社
陶磁往來	竹中 久七	同	上	日本の甲冑(劍元選書二二)	梅原 末治	桑名文星堂
茶碗鑑賞の話	加藤 春鼎	同	上	紹興古鏡聚英	吉野富雄解説	彩華社
陶磁大觀	小野賢一郎	雲	舍	時代詩繪採集集成三―六	關 宇一郎	松野 三
	正木直彦	アトリエ社		時代詩繪採集集成十四―十六	羽野 龍三	寶 雲 舍
	尾崎洵盛監修			時代繪大觀	徳力寅次郎	内田美術書肆
	富本憲吉			一ノ八 國寶高臺寺時繪碗他七圖	野村正治郎	芸 神 堂
第一卷 瀬戸				名作能衣裳	後藤 博山	萬葉延喜染裂鑑
第二卷 京都				時代帛紗 上、下	森 徳一郎	同 業 組 合
第三卷 九谷				萬葉延喜染裂鑑	尾 西 欣 二	上
第七卷 支那宋代				尾西織物史	日本民藝協會	同 業 組 合
第八卷 支那赤繪				琉球の織物	屋代 弘賢	林 欣 二
第十一卷 安南暹羅				名紙譜	川勝政太郎	スズカケ出版部
第十二卷 埃及波斯				石造美術		
陶器講座 二―二五	奥田誠一他三氏	雄 山 閣				
陶器圖録	雄 山 閣	雄 山 閣				
第五卷 中國四國篇						
第六卷 九州篇						
第十卷 外邦篇						
第十二卷 茶器篇(下)						
隨筆 泥佛堂日録	無茶法師	文 獻 書 房				
備前焼鑑定のコツ	桂 又三郎	文 獻 書 房				
信樂伊賀	大村 正夫	雲 舍				
日本古陶銘款集	陶器全集刊行會	雲 舍				
東海甲信篇	同	雲 舍				
關東・奥羽・北陸篇	山田萬吉郎	雲 舍				
朝鮮陶磁器の變遷	高 裕 變 寶	雲 舍				
朝鮮の青瓷(東雲文庫)	上田 恭 輔	雲 舍				
趣味の支那叢談	寂園叟原著					
陶說陶治圖說證解	鹽田力藏譯解					
旬雅支那陶器精鑑	恩 賜 京 都 博 物 館					
南蠻雅陶	伊藤庄兵衛	鈴木尙美社				
家藏癡佛と御正體	坪井 良平	東京考古學會				
慶長末年以前の梵鐘	大阪市立美術館	利 堂				
大阪市立美術館圖録 茶湯釜						

建築及庭園

日本美的再發見(建築學的考察)	ブルノ・タクウト著 篠田英雄譯	岩波書店	國寶建造物略説目録(昭和十五年版)	川上 邦基	古建築及庭園研究会
日本建築樣式(三次高等建築學)	大 岡 實	常 磐 書 房	改訂古建築入門講話 第五版	天沼 俊一	スズカケ出版部
過去の構成	岸田日出刀	相 模 書 房	聖	岸田日出刀	相 模 書 房
堂塔構成	中村亮平	雲 舍	京都の古建築	京 都 市 同 業 組 合	課
法隆寺建立年代の研究	源 中 重 久	東京考古學會	法隆寺國寶保存工事報告書 第五册	源 中 重 久	東京考古學會
國寶建造物法隆寺地蔵堂修理工事報告	法隆寺國寶保存事業部				
國寶神明宮社殿修理工事報告書	國寶神明宮社殿修理事務所				
國寶聖神社本殿修理工事報告	國寶聖神社本殿修理事務所				
國寶瑞龍寺總門佛殿及法堂修理工事報告	國寶瑞龍寺總門佛殿法堂修理事務所				
國寶大聖寺不動堂修理工事報告	國寶大聖寺不動堂修理事務所				
國寶園城寺大門及新羅善神堂修理工事報告書	國寶園城寺大門及新羅善神堂修理事務所				
國寶石津寺本堂修理工事報告	國寶石津寺本堂修理事務所				
國寶建造物東大寺大湯屋法華堂北門修理工事報告書	國寶建造物東大寺大湯屋法華堂北門修理工事事務所				
國寶妙成寺書院及鎮守堂修理工事報告	國寶妙成寺書院及鎮守堂修理事務所				
國寶西明寺本堂及塔婆修理工事報告	國寶西明寺本堂及塔婆修理事務所				
恩賜元雜宮二條城	恩賜元雜宮二條城				
國寶松山城(筒井門及同東續櫓同西續櫓隱門及同續櫓戸無門乾門及同東續櫓)修理工事報告書	國寶松山城修理事務所				
國寶成興閣	國寶成興閣				
九 本願寺飛雲閣、黒書院	育徳財團				
一〇 金閣、東求堂、銀閣	北尾 春道	洪 洋 社			
一一 願泉寺書院他二篇					
一二 淨土院客殿、知恩院方丈					
名席茶室寸法圖録	北尾 春道	洪 洋 社			
綜合古瓦研究 第二分册	佳 谷 修	鶴 故 郷 舍			
上野國分寺文字瓦譜	宮城縣利府村春日瓦焼場大澤瓦窯址研究調査報告	東 北 帝 大 法 文 學 部 東 北 帝 大 法 文 學 部 東 北 帝 大 法 文 學 部			
日本庭園史圖鑑 第二三卷 日本庭園史年表其他	重 森 三 玲	河 原 書 店			
圖録日本庭園小史	重 森 三 玲	河 原 書 店			
茶庭(茶道文庫七)	龍 居 松 之 助	寶 雲 舍			
庭園の見方(東雲文庫一)	伊藤庄兵衛	雲 舍			
朝鮮瓦塔譜	關 野 貞	岩 波 書 店			
支那の建築と藝術	伊藤清造	大阪屋敷書店			
支那及滿蒙の建築					

書蹟・印章・文書

書道文庫

五卷 龍門二十品

十一卷 褚遂良

十三卷 張旭、懷素

十四卷 李北海、徐浩

十五卷 蔡襄、蘇東坡、

黃山谷、米元章

十九卷 鄧完白、包世臣、吳

讓之、趙之謙、吳昌碩

二一卷 寂澄、橘速勢

二二卷 空海

二五卷 佐理

二九卷 俊成、良經、雅經

三六卷 池大雅

叢刊 入木秘書(解說付)

叢刊 入木秘書(解說付)

古筆の見方(東雲文庫)

印印 第三九集

上代様の研究

日本寫經全集

四 八吉祥經、般若心經

五 大般若波羅密多經

かな名蹟全集

四四 傳忠家 大貳齋通卿家歌合

四六 本願寺三十六人家集 貫之集上

四七 一條攝政集(傳西行法師筆)

四八 隆能源氏繪詞(藤原伊房筆)

四九 本願寺三十六人家集 遍昭集

五〇 本願寺三十六人家集 能宣集

下毛野國大明神菅神廟碑銘並序

倭漢副詠集(宮内省御藏版)

十句花月 賴氏遊記帖 複製

隨筆松花堂

外狩素心庵

手島石郷

高橋竹村

松岡殿雪

石橋犀水

楠瀬日年

山田菱花

上田榮鶴

桑原江南

相澤春洋

山中蘭徑

舟圓親王

相澤春洋

國風印社

雄山閣

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

武田墨彩堂

アトリエ社

法帖書論集 漢碑の研究 下

六朝書道論

魏崔敬邕墓誌銘

化度寺碑

王右軍十七帖(餘清齋本)

顏魯公 建中告身帖

最初拓 褚遂良千字文

枯樹賦(聽雨樓本)

乾隆 蘭亭八柱帖

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

御刻

歴史・考古學

考古學研究

東洋考古學 分册版

東京考古學會報 一、二

考古學年報 昭和十三年度

昭和十一年度東洋史研究文獻

昭和十二年度東洋史研究文獻

日本考古學原論

歴史考古學研究

昭和十三年の國史學界

植木博士遺曆記念國史學論集

東京帝國博物館講演集第十二

日本先史土器圖譜 二輯

彌生式土器集成圖録正編解説

奈良帝國博物館歴史圖録 五

日本古文化研究所報告 第九

近畿地方古墳墓の調査

静岡縣磨田郡松林山古墳發掘調

査報告

後藤守一

梅原末治

日本古文化

研究所

磨田郡御

野村郷土教育研

究會

究會

究會

究會

究會

中村 不折

康有為著

井上 雲山

歐陽詢書

王羲之書

廣田 耕作

江上 波夫

駒井 愛一

藤守 一

藤守 一

大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告 一〇

大阪府國寶四天王寺石鳥居附左右玉垣の調査

岡山縣史蹟名勝天然紀念物調

査報告 十一

京都府史蹟名勝天然紀念物調

京都府京

鹿兒島縣

香川縣

愛知縣

石黒文七

前田家編輯部

森 德一郎

福 縣

福 縣

福 縣

北海道帝國大

學室

北海道帝國大

學室

學室

東本願寺

宗學院

八坂神社

坂田良弘

室殿虎男

東方文化研究所

地理研究室

ウエ・バルト

リト著

外務省調査部

オレル・ス

風間太郎

小林高四郎

譯註

外務省調査課

劉村茂夫

杉村俊夫

共譯

南滿洲鐵道株式

會社

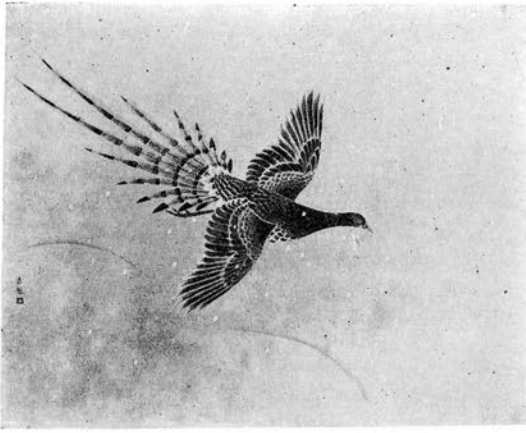
昭和十四年度美術文獻目錄

其他

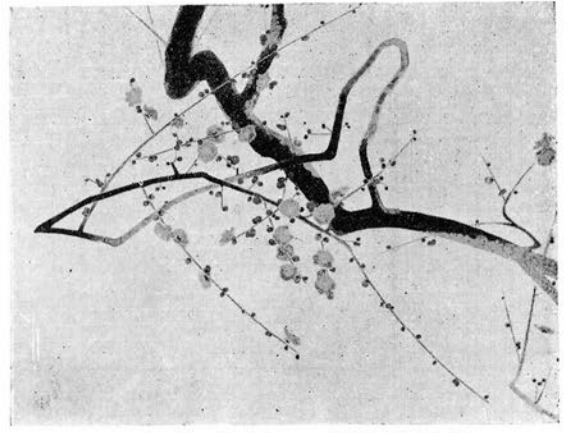
- | | | |
|----------------|--------|---------|
| 茶器仕覆の技術 | 勝村左右治 | 寶雲舍 |
| 不見齋會附見書(茶道文庫四) | 桂又三郎 | 文獻書房 |
| 大德寺系譜(茶道文庫六) | 佐藤虎雄 | スズカケ出版部 |
| 千利休(劍元叢書二八) | 竹内尉 | 劍元社 |
| 津田宗及茶湯日記 | 松山吟松庵 | 津田宗及茶湯 |
| 古織殿茶湯聞書 | 校又三郎 | 文獻書房 |
| 流祖古田織部正と其茶道 | 秋元瑞阿彌 | 學藝書院 |
| 茶道三年 | 粟田有聲庵 | 飯泉甚兵衛 |
| 父天心 | 岡倉一雄 | 聖文閣 |
| 濱田先生追悼錄 | 京都帝國大學 | |
| | 考古學教室 | |
| 山中定次郎傳 | 山中定次郎翁 | 同會 |

插

圖



四 雪 小 林 古 徑 (會 示 展 畫 品 出 博 萬 育 紙)



一 紅 梅 (朱 弦 會 展) 安 田 叔 彦



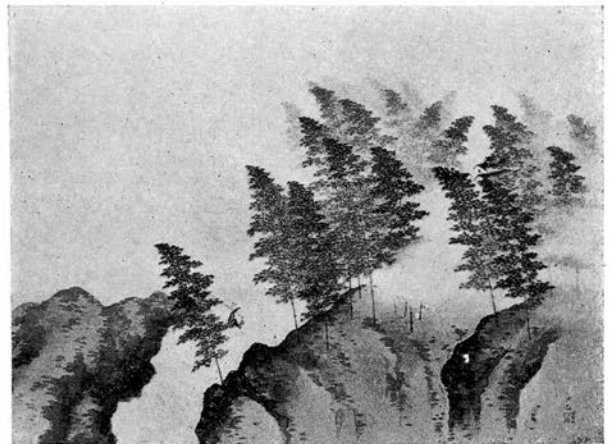
五 子 鏡 踊 舞 (會 示 展 畫 品 出 博 萬 育 紙) 方 清 木 鋼



二 時 雨 (朱 弦 會 展) 川 船 水 棹



六 風 京 大 (展 新 進 作 家 三) 哲 田 勝



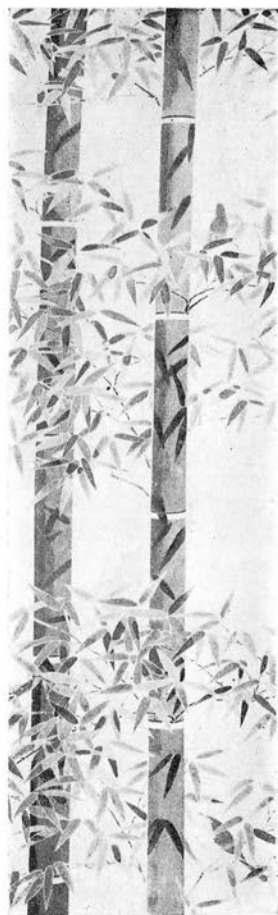
三 夕 月 (會 示 展 畫 品 出 博 萬 育 紙) 橫 山 大 觀



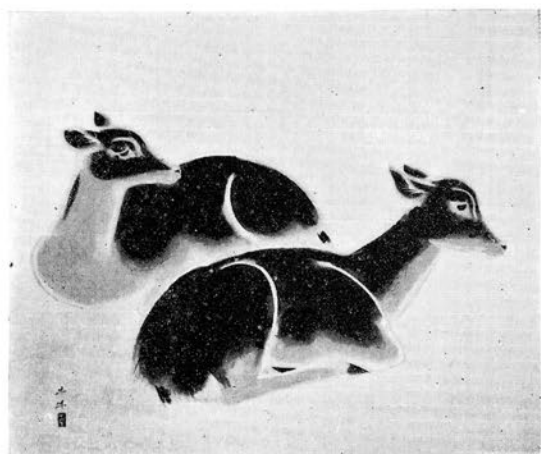
九 聖觀音（日本美術院同人展） 荒井寛方



八 春深（春虹會展） 菊池契月



七 陽春（春虹會展） 福田平八郎



牛土村奥（展人同院術美本日）光春 一一



花耕村山（展人同院術美本日）夜鷹 〇一

一二 銚後の春 (戊辰會展) 川合 玉堂



三一 河東節 (戊辰會展) 高田 那美

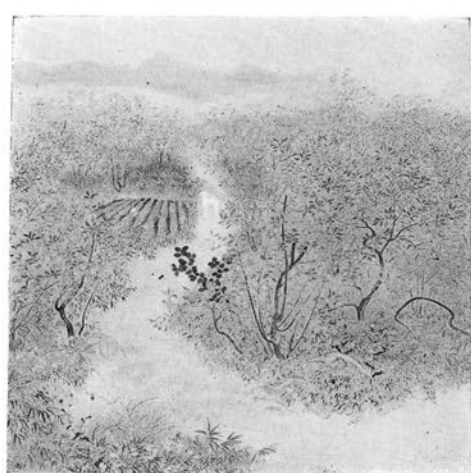
一四 日晴村漁 (戊辰會展) 望希 玉兒



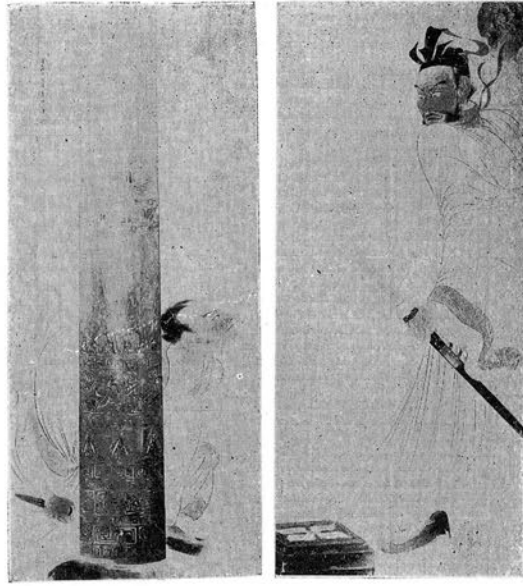
一五 望春淺 (戊辰會展) 水姿 本松



一六 秋の徑 (戊辰會展) 子樸 大靈村



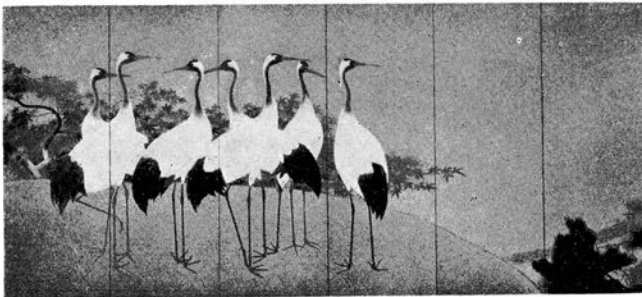
一七 荆軻 (戊辰會展) 兒玉希望



一八 雪に遊ぶ (東丘社展) 妹背平三

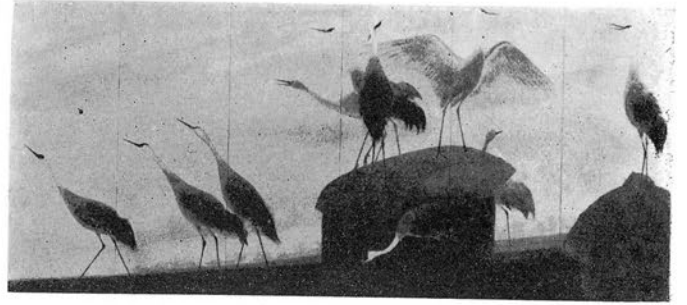


一九 松風和鶴 (東丘社展) 堂本印象





二〇 形霞 (東丘社展)
三輪 昆勢



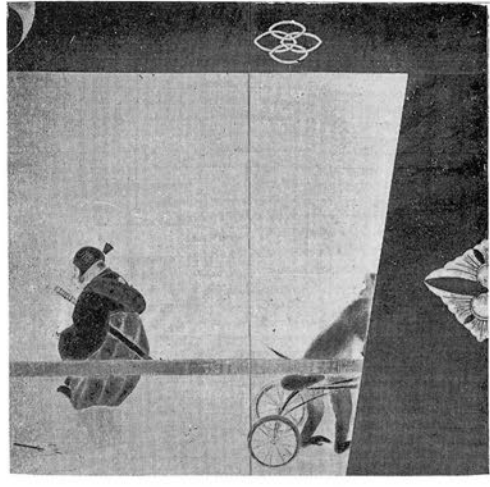
風 杉 木 茨 (展院術美興新) 山吹伊 二二



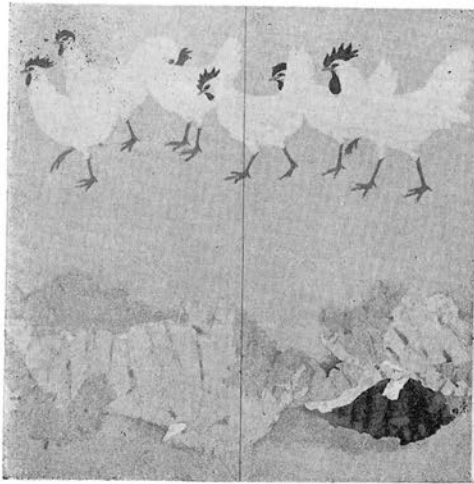
二一 臺北の美姐 (壇土社展)
野田 九浦



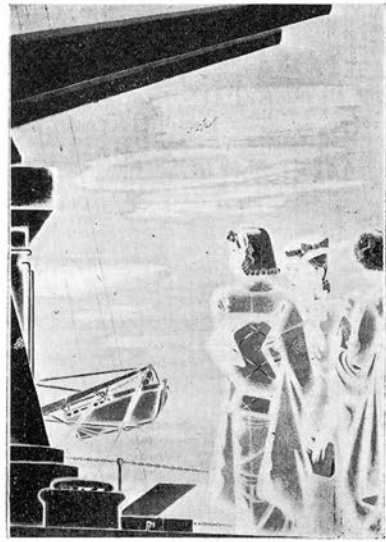
二三 江南の春 (新興美術院展)
田中 案山子



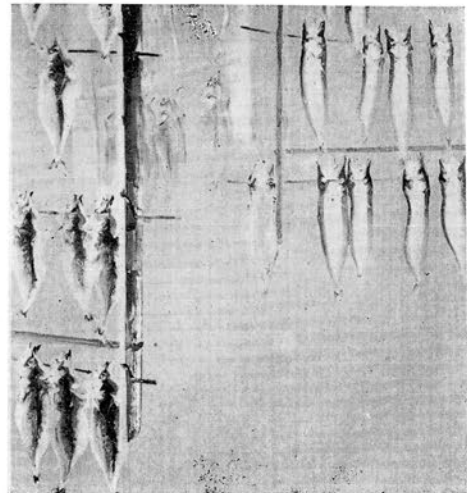
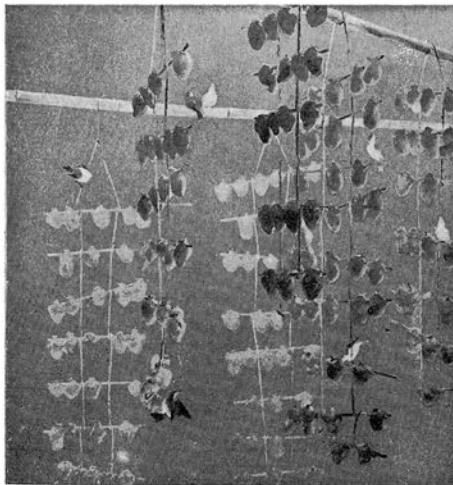
二四 猿芝居 (新興美術院展) 芝垣 興生



志光 好三 (展社龍青の春) 朝霜 六二



二五 観艦 (新興美術院展) 森山 夢笑



二七 陽の恩 (春の青龍社展) 時田 直善

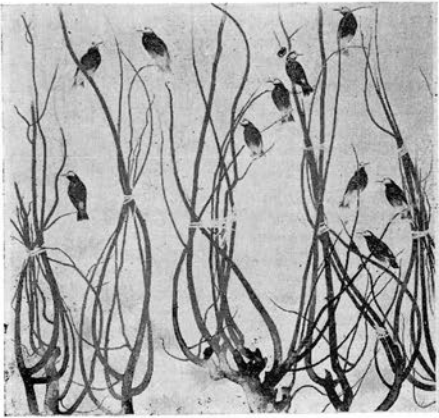
二八 長春花 (春の青龍社展) 川端 龍子



三〇 三枝圖 (春の青龍社展) 山崎 豊



三一 露 (春の青龍社展) 坂口 一草



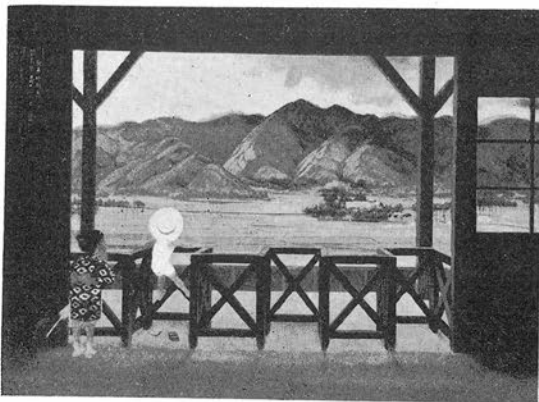
樂三 納加 (展社龍青の春) る到春 九二



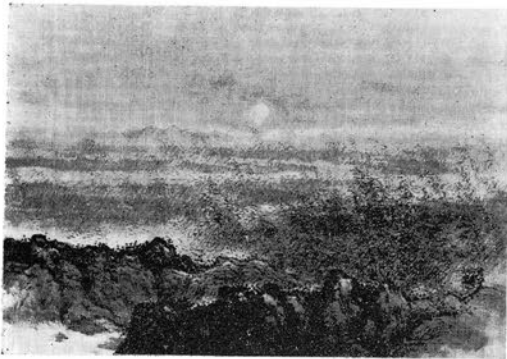
三三 冬日（日本畫院展）
東山 魁夷



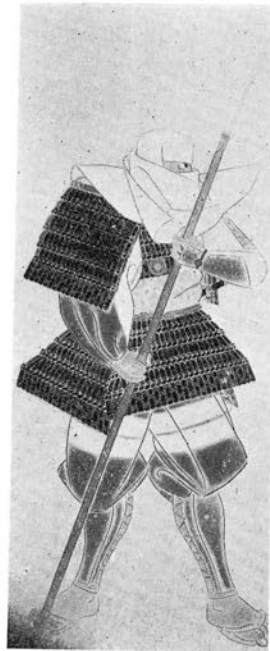
三二 泰山木（山口蓬春個展） 山口 蓬春



三四 近雷（日本畫院展）
淺野 正俊

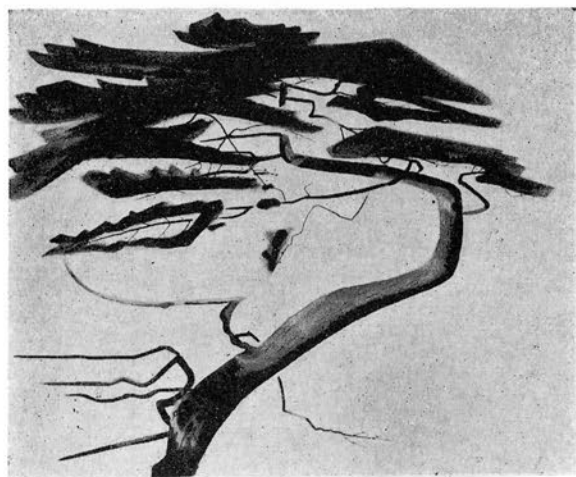


山周田飛（展院畫本日）（四其）趣六月破 大三

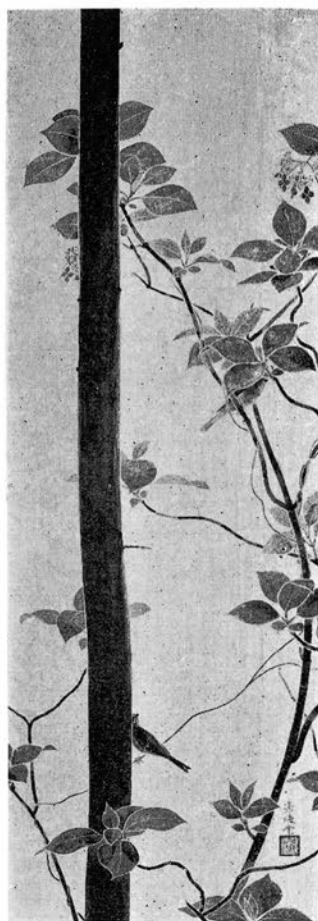


巳正田岩（展院畫本日）慶辨と若牛 五三

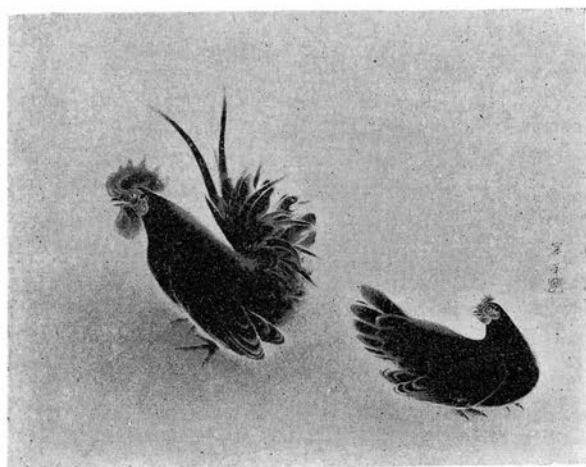




三八 松 (九阜會展) 福田豊四郎



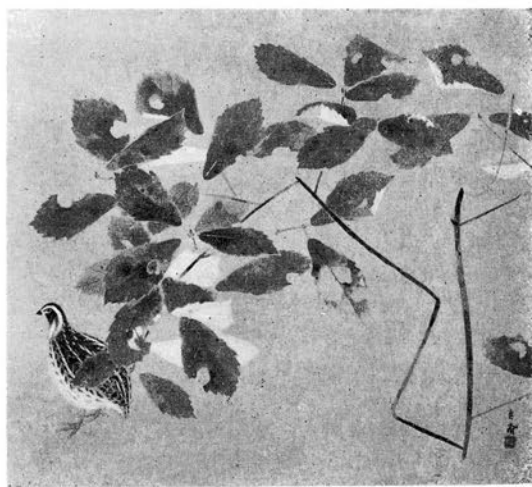
(展會潮六) 間溪 七三
陵岳 村中



三九 黒矮鶏 (九阜會展) 杉山 寧



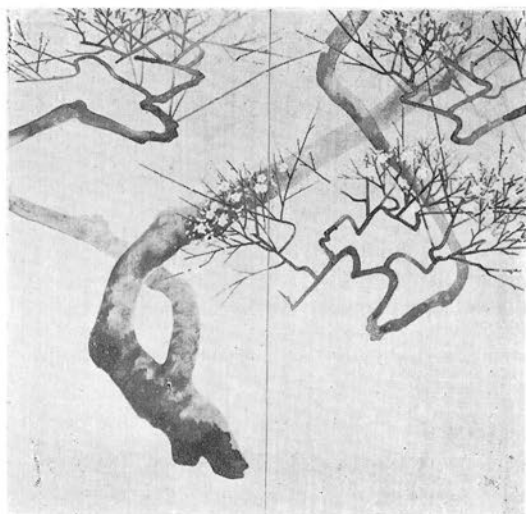
二 堅 岡 吉 (展會阜九) 月 一四



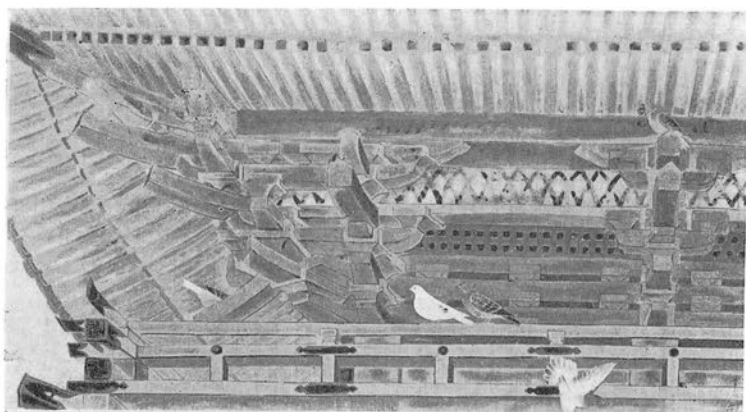
甫 白 森 (展會阜九) 日秋 ○四



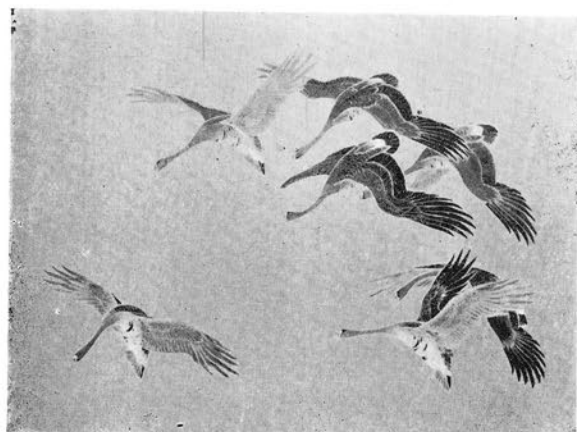
畝十木荒 (展會畫讀) 望遠の岳ヶ駒 三四



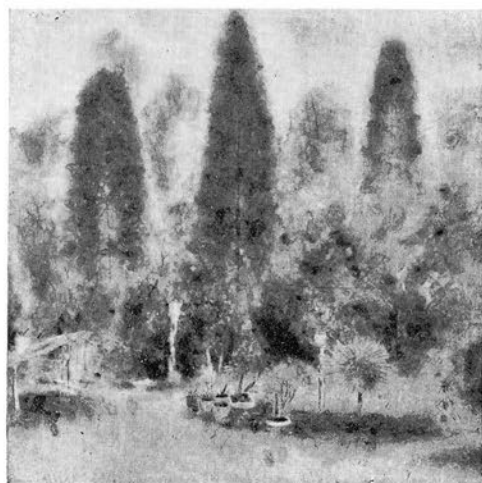
水春田永 (展會畫讀) 梅白 二四



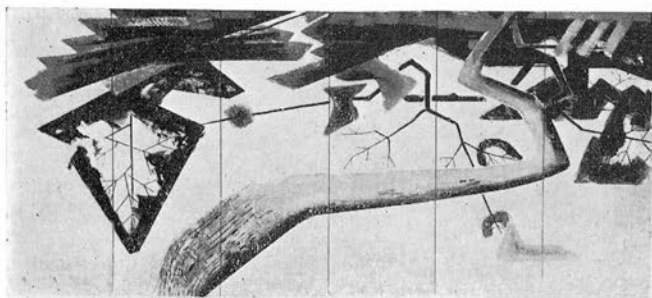
華見島中 (展會畫讀) 日閑 四四



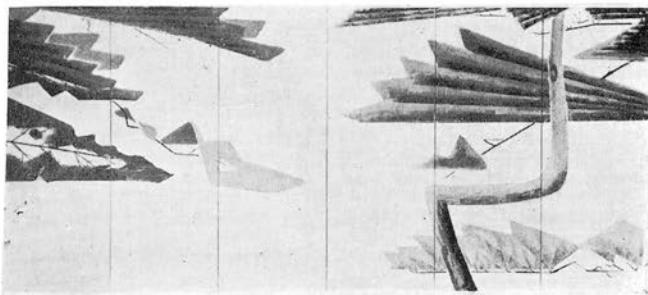
畝笛澤西 (展會畫讀) 雁 六四



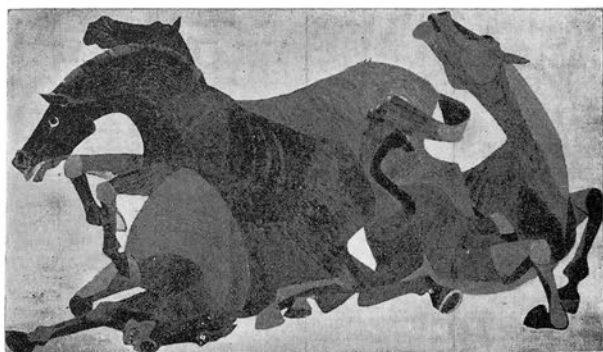
平武間岩 (展會畫讀) 隅一の庭 五四



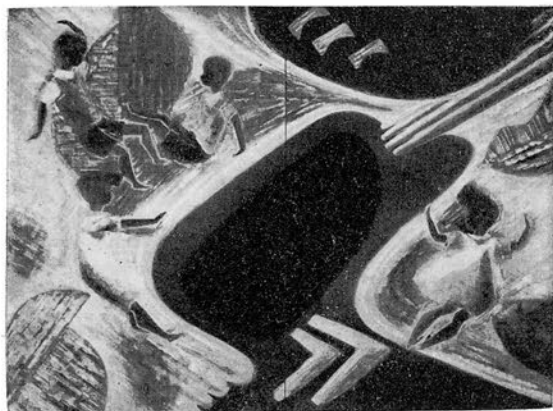
四七 松 (新美術人協會展)
福田豊四郎



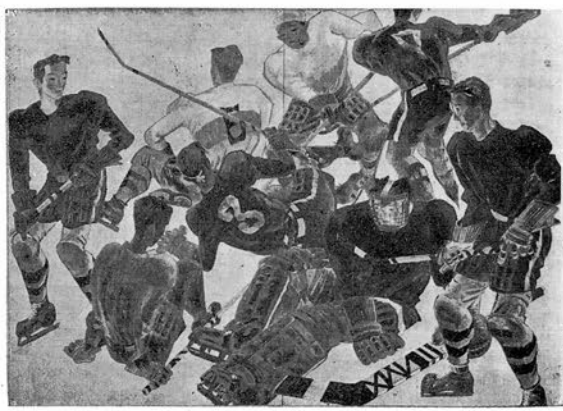
風白須三 (展會協人術美新) 日の焼んどんど 九四



二堅岡吉 (展會協人術美新) 馬 八四



路哲石大 (展會協人術美新) 空 一五



治隆田藤 (展會協人術美新) ーケツホ上氷 ○五



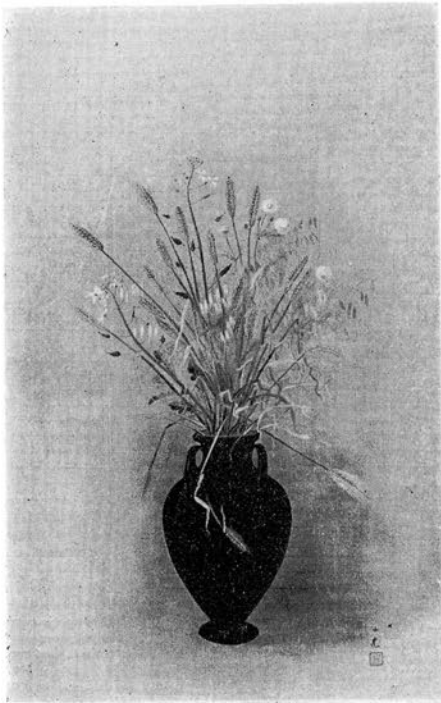
五五 芽と實 (大日美術院展) 常岡 文龜



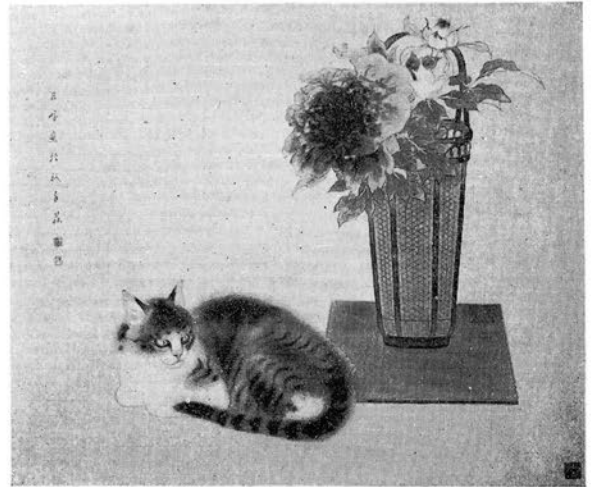
方清 木鏡 (展會々珊) 盡大きう 二五



庭放 杉小 (展會々珊) 曲堤馬風春 三五



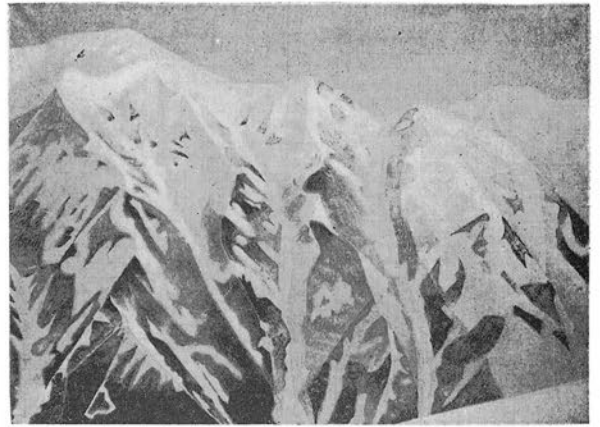
虎小 崎川 (展院術美日大) 麥 六五



輝翠 山西 (展會々珊) 碗采 四五



明素 城結 (展院術美日大) 國くさ櫻 八五



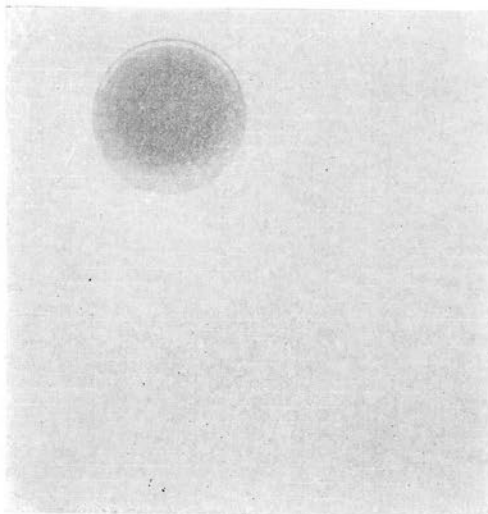
雄英 山西 (展院術美日大) 明嶺 七五



三代美藤加 (展藝畫郎三大村中) 蔭岩 〇六

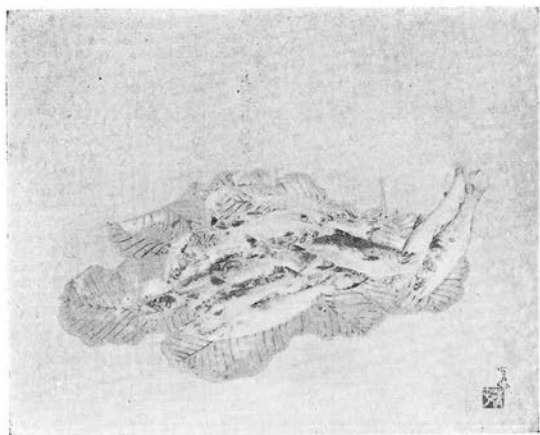


三榮 藤加 (展院術美日大) 夏晚 九五



郎三大村中 (展藝畫郎三大村中) 師法禪 一六

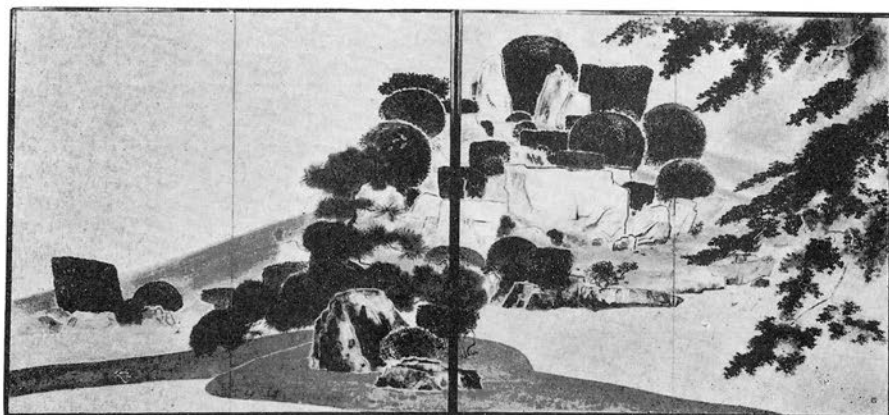




郵青田前 (展潤開多) 幸之川 三六



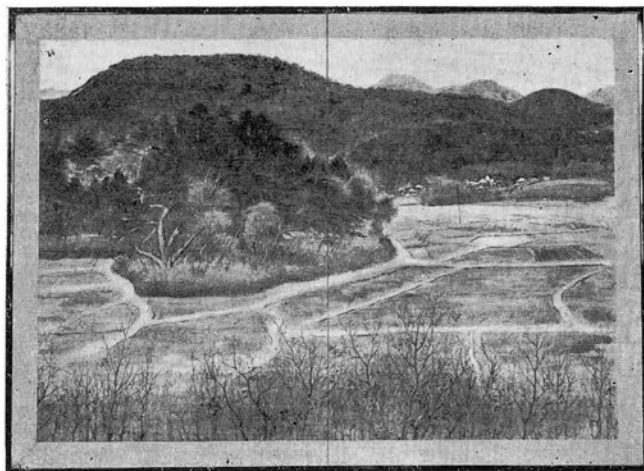
徑古林小 (展會光禧) 形人 二六



刀菜島中 (展會御白) 泉林舟雪 四六



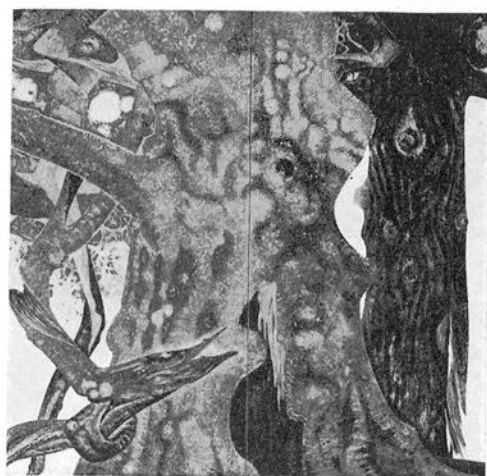
二堅岡吉 (展術美戰聖) 意用擊爆 六六



忱紫井今 (展會御白) 景風 五六



雪 關 本 橋 (展術美戰聖) の末雨上江 八六



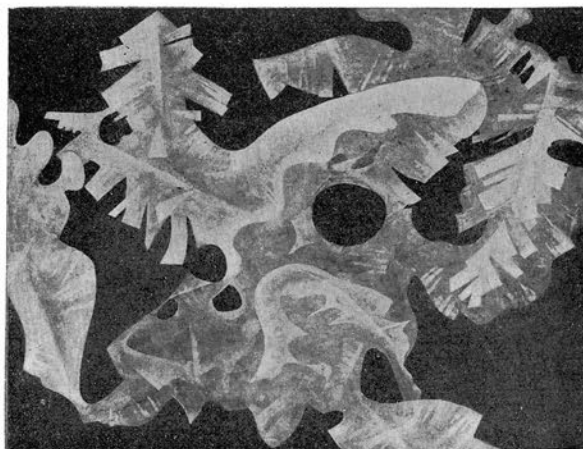
遠 英 橋 岩 (展會協術美程歴) 幹樹 七六



樹 玉 田 船 (展會協術美程歴) 椽椽 九六



七一 初年兵 (則峯畫藝展) 立石春美



夫 和 場 馬 (展會協術美程歴) 調轉の白 〇七



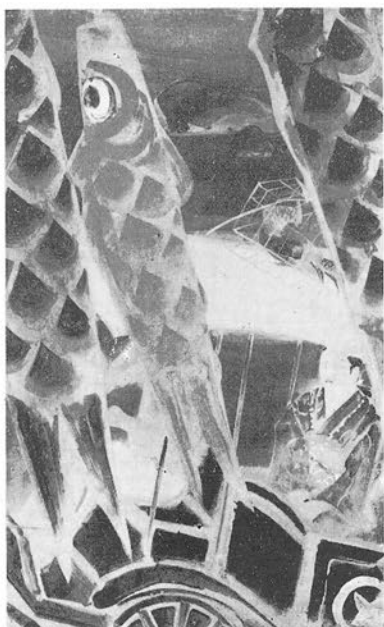
義尚藤須 (展社龍青) 田凍 三七



水深東伊 (展藝畫峯朗) 涼爽 二七



草一口坂 (展社龍青) 流奔 四七



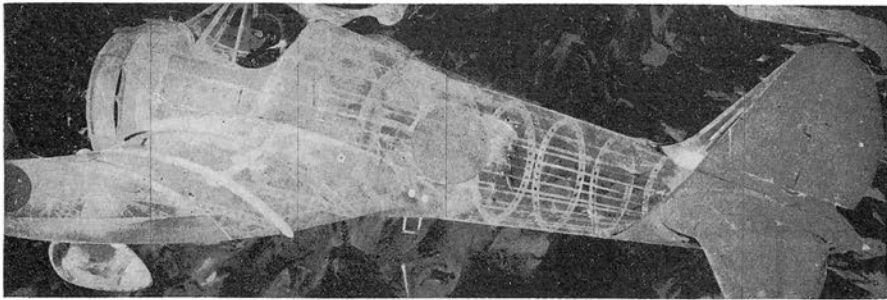
豊崎山 (展社龍青) 草天 五七



七七 群冠圖(青龍社展) 時田直善

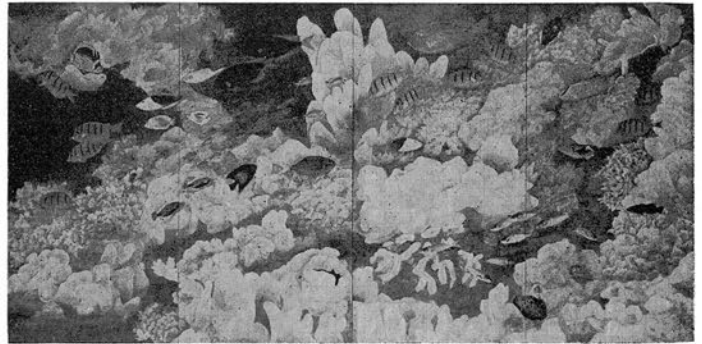


嵐 青 岡 福 (展社龍青) 傳惠明 六七



七八 香爐峰(青龍社展) 川端龍子

七九 珊瑚礁(青龍社展) 谷野教一郎



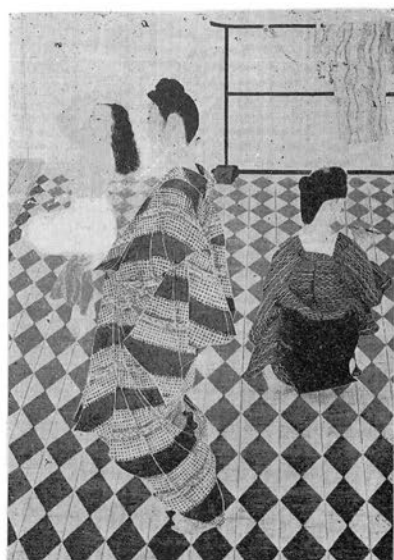
八〇 星祭(青龍社展) 加納三樂



方寬井荒 (展院) 耶利摩音觀 一八



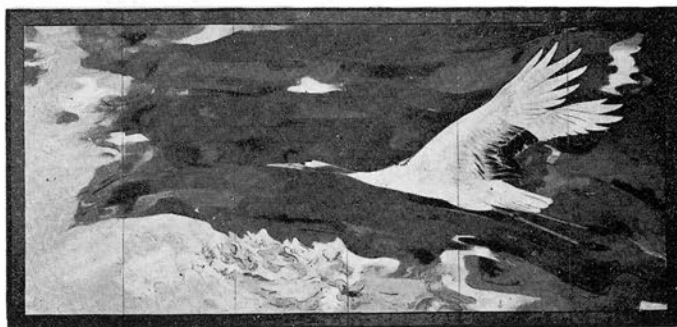
八三 流紋 (院展) 中村 岳陵

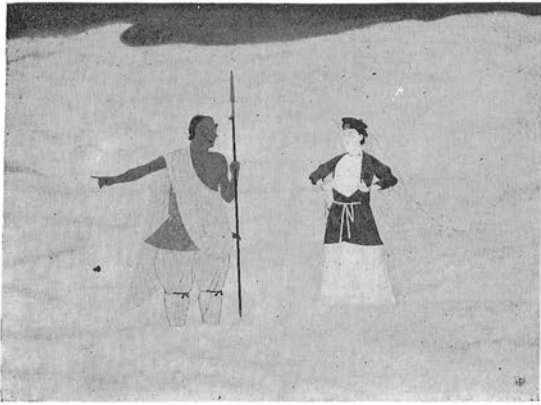


龜遊倉小 (展院) 後浴 二八

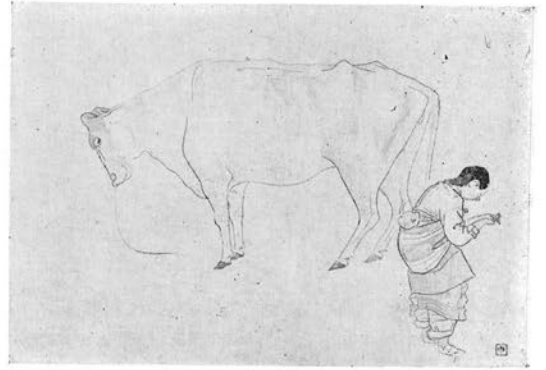


八四 千里壯心 (院展) 堅山南風





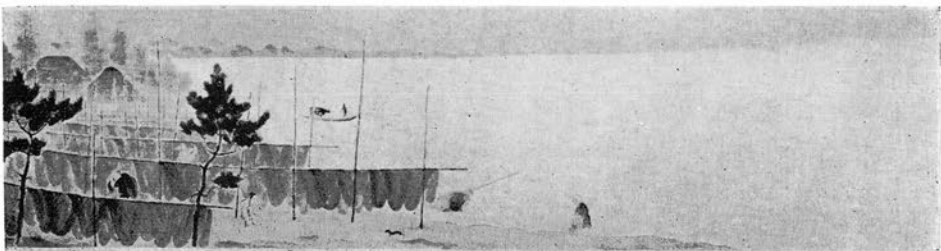
彦 叔 田 安 (展院) 神彦田媛と命女御天 六八



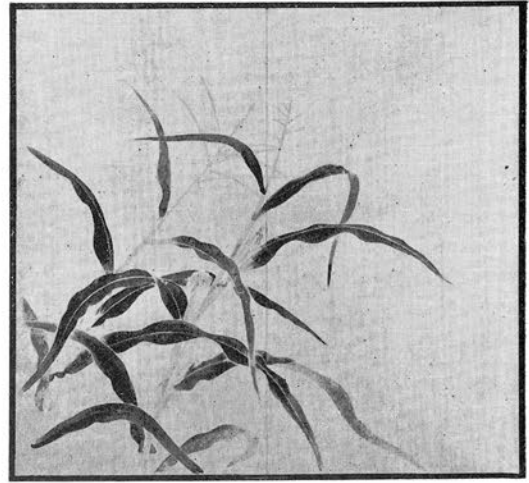
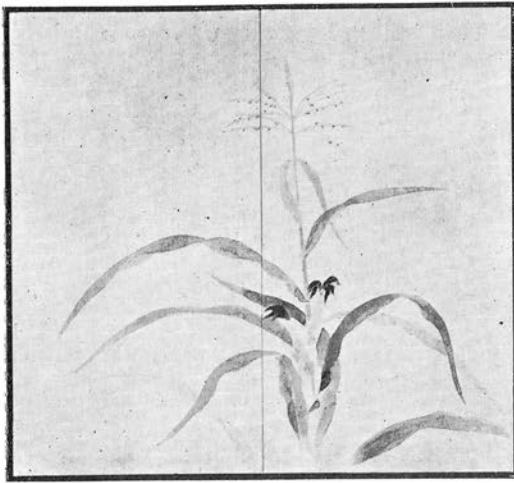
邨 青 田 前 (展院) (内ノ題五) 鮮朝 五八



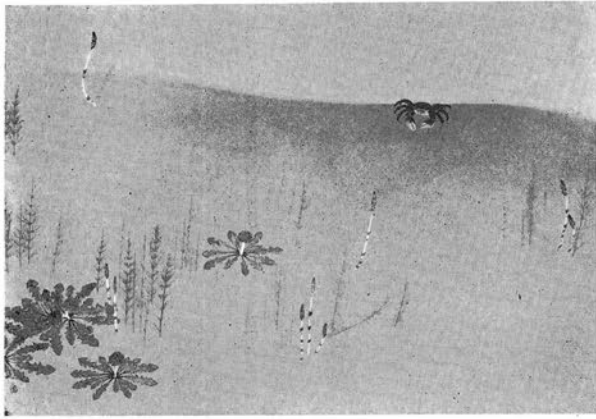
八七 夏趣二題(右三味線 左讀書)(院展) 中村 貞以



良 三 井 酒 (展院) 日一の郷水 八八



徑古林小 (展院) 黍蜀玉 九八



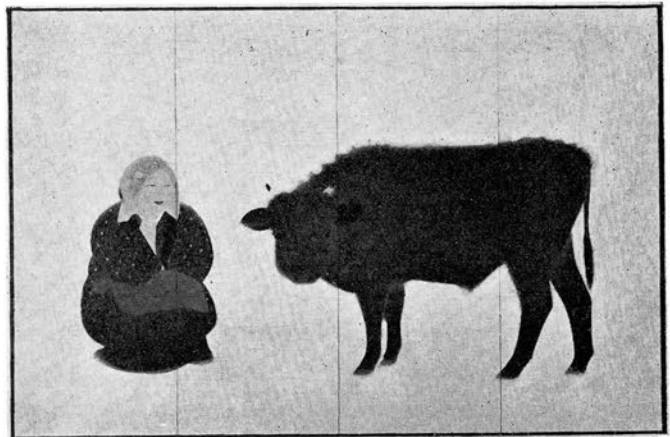
觀大山橫 (展院) 日麗 一九



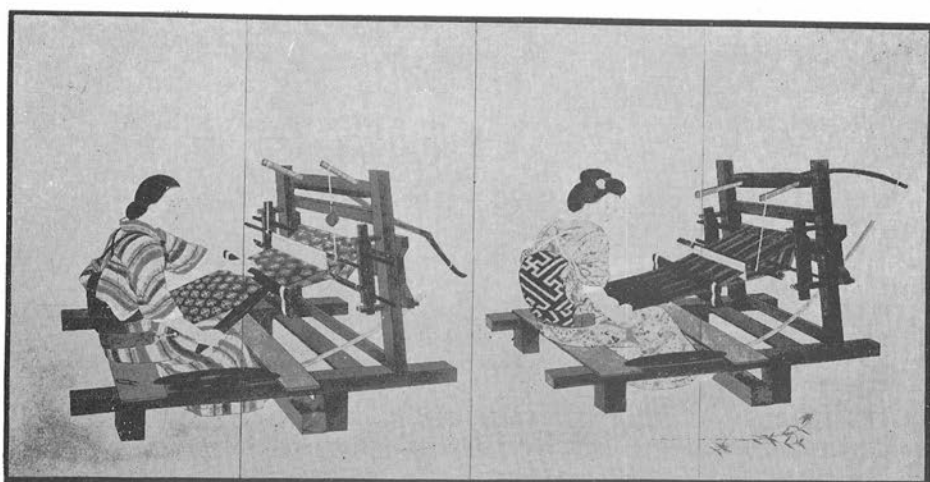
九〇 玉蟲 (院展) 長野草風



利勝井新 (展院) 進勸佛大 三九



二節高和 (展院) 人村と牛 二九



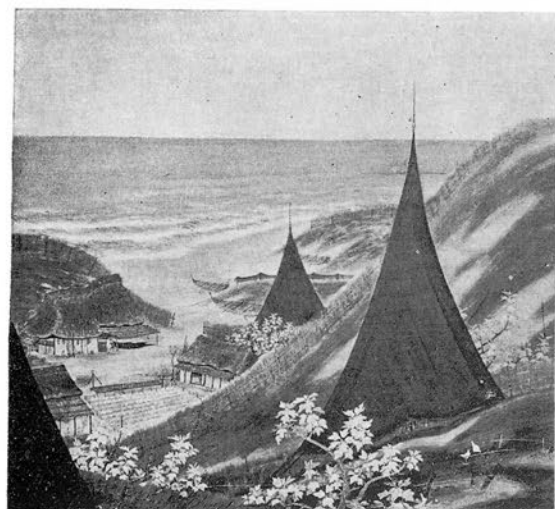
九四 機女(院展) 冬木大丙



九六 日本武尊(明助展) 狩野晃行



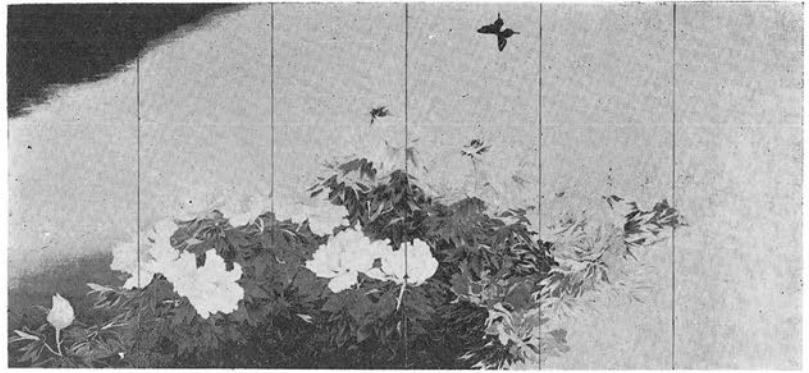
九五 晴日(院展) 奥村土牛



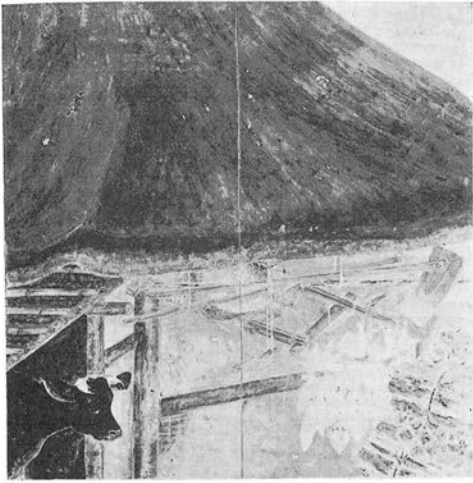
養晃本松 (展明明) り鳴海 八九



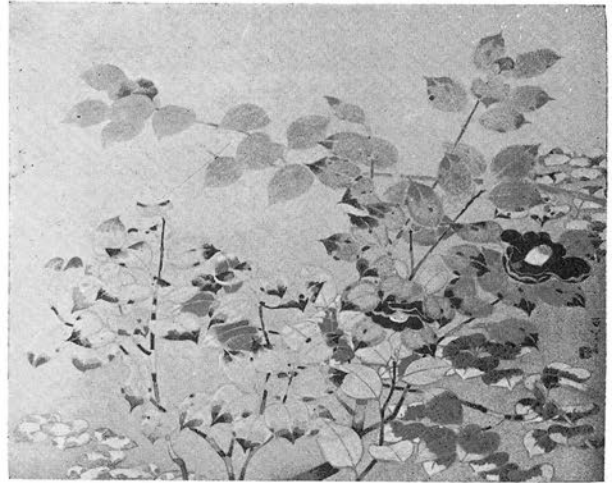
乃好田鹽 (展明明) 人の北東 七九



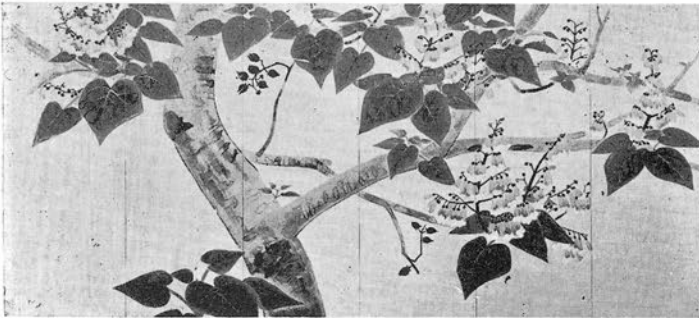
牛竹野小 (展即明) 圖丹牡 九九



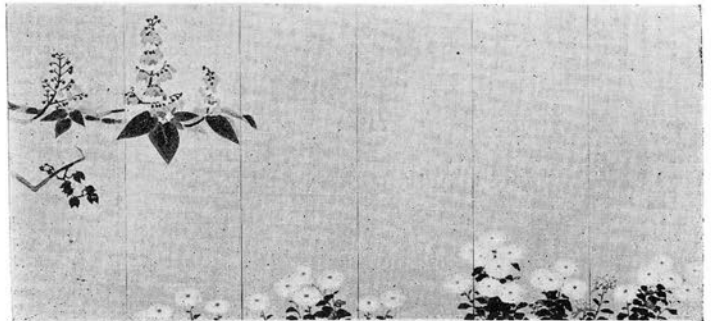
司喆野大 (展院畫輪六) 春待 一〇一



居艸百浪岸 (展個) 棒の久牛 〇〇一

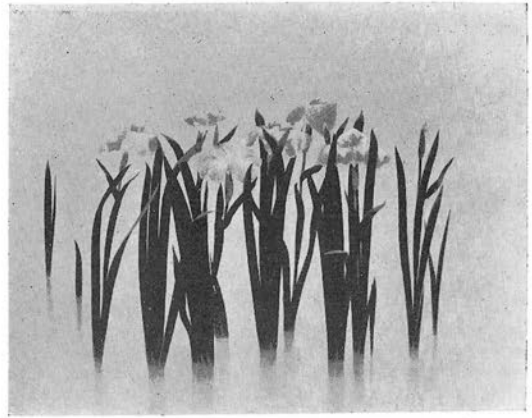


一〇二 彌榮 (大繪畫院展)
小林彦三郎

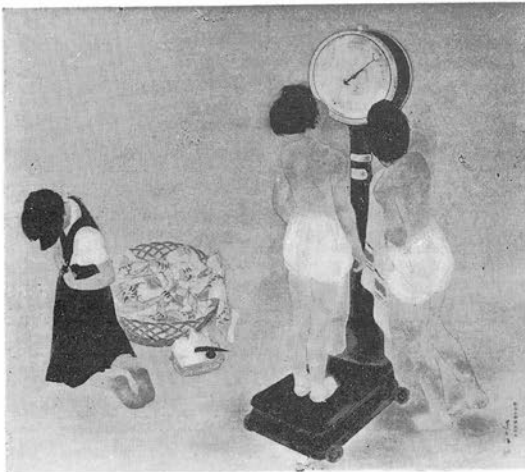




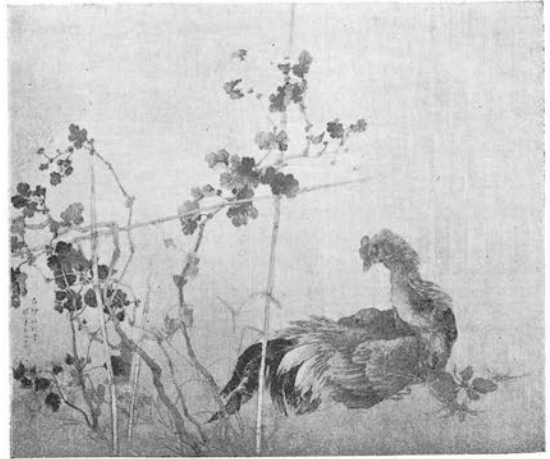
村橋野矢 (展文) 山路 六〇一



泉神岡徳 (展文) 蒲葦 三〇一



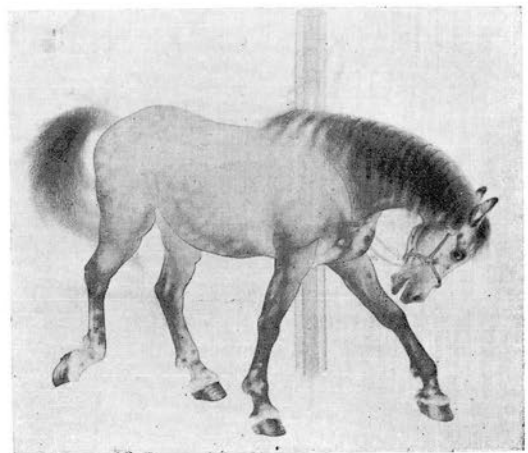
夫道野大 (展文) 後浴 七〇一



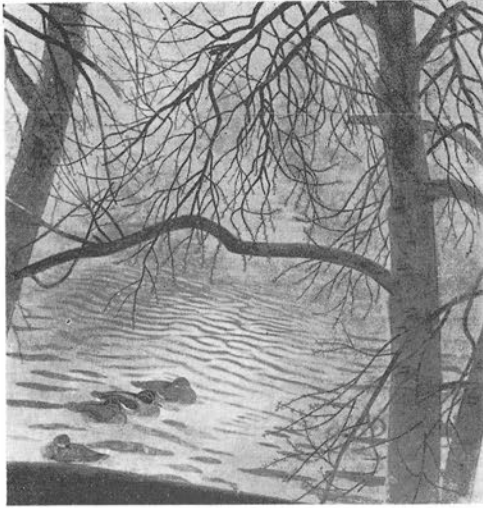
月桂林松 (展文) 鶏 四〇一



關竹田水 (展文) 鷗暮松 八〇一



嶸翠山西 (展文) 馬 五〇一



一一二 月影(文展) 小泉勝爾



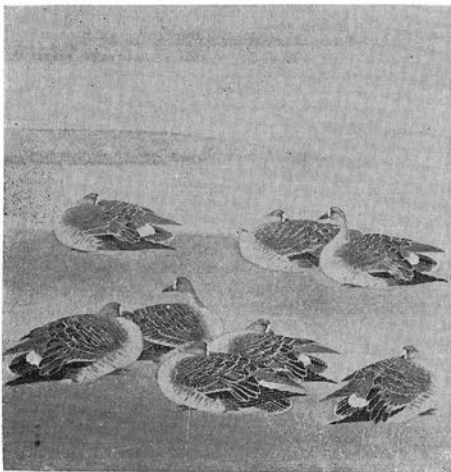
一〇九 清秋(文展) 伊東深水



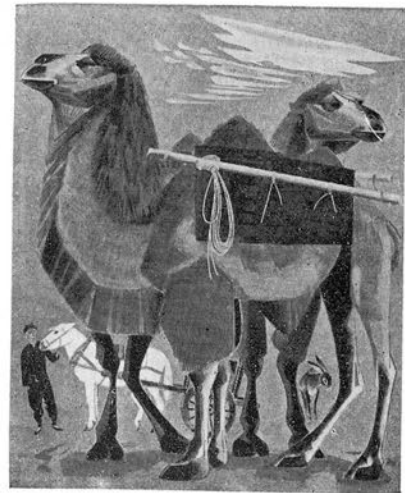
一一三 秋影(文展) 山口蓮春



一一〇 信濃の秋(文展) 川村曼舟



一二四 寒汀宿雁(文展) 宇田萩郎



一一一 蒙疆(文展) 福田豊四郎

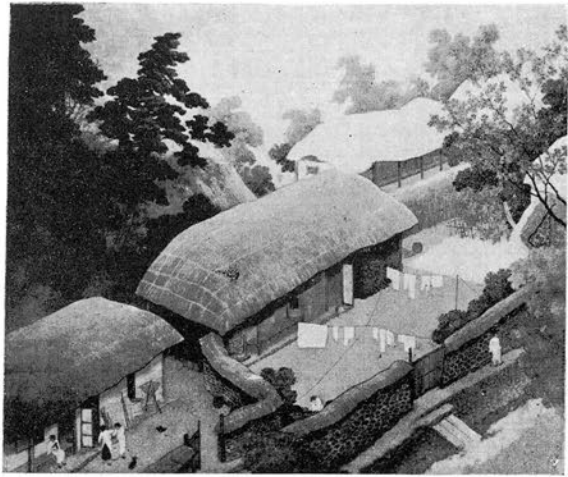
一一五 月の暈(文展) 三谷十糸子



一一八 明鏡止水(文展) 小室翠雲



一一六 皇化洽(文展) 池上秀畝



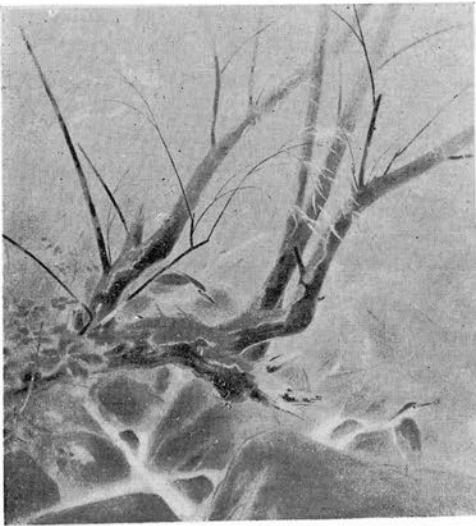
一一九 月夜(文展) 上村松篁



一一七 濤(文展) 吉岡堅二



一二〇 たにまの朝(文展) 森守明

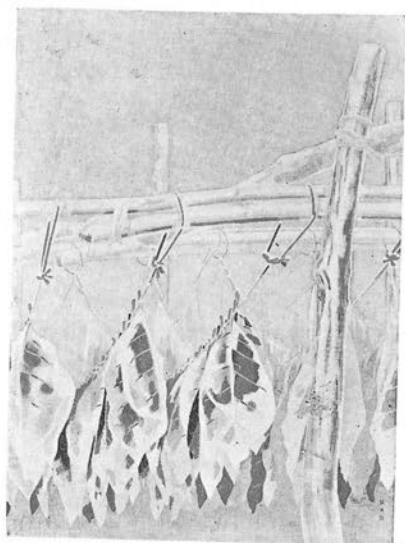




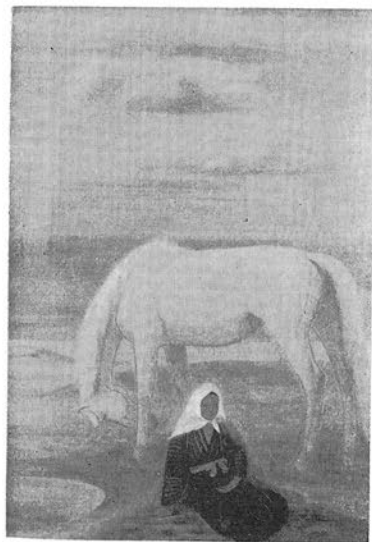
一二四 村道(文展) 山本 丘人



一二二 月夜(文展) 加藤 榮三



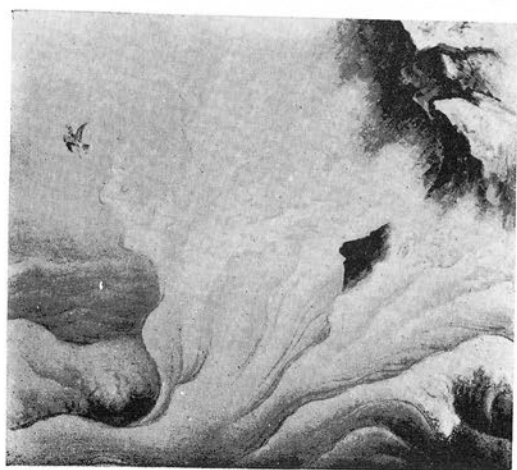
一二五 葉煙草(文展) 畠山 錦成



一二二 慈光(文展) 東山 魁夷

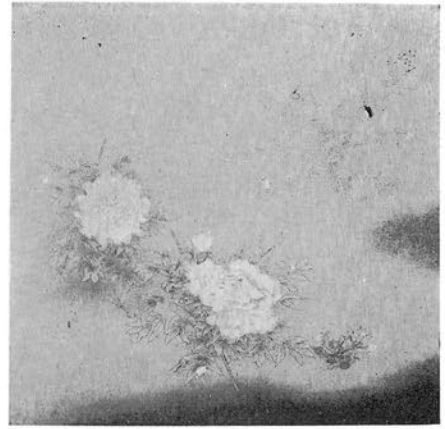


一二六 孫(文展) 森田 沙夷



一二三 怒濤(文展) 荒木 十畝

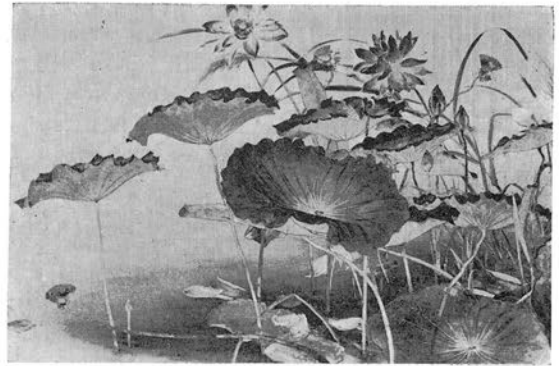
一二七 朝晨(文展) 石崎光瑤



一二八 關山牧牛(文展) 村島西一



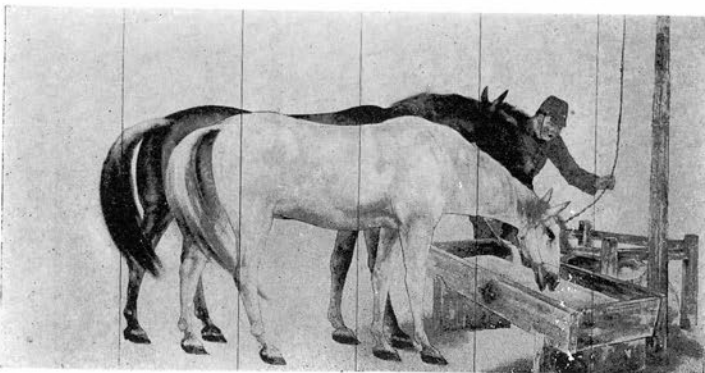
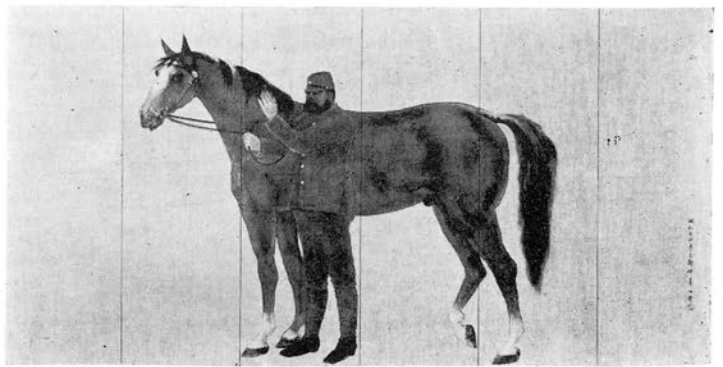
一二九 蓮(文展) 廣島晃市



一三〇 鳥響煙深(文展) 横尾翠田



一三一 軍馬二題(個展) 橋本關雪





方清木錦 (展會絃七) 語物郎十清夏お 五三一



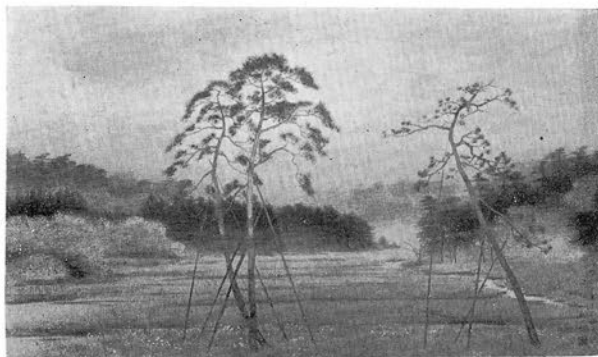
一三二 玉簪氷簾(個展) 兒玉希望



一三六 忠度(七絃會展) 菊池契月



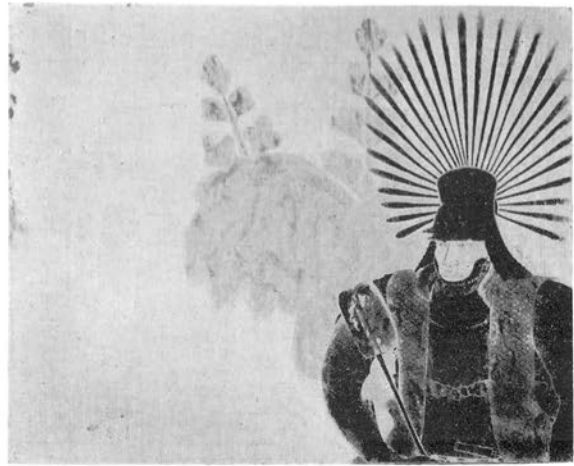
一三三 殘雪(昭華會展) 川合玉堂



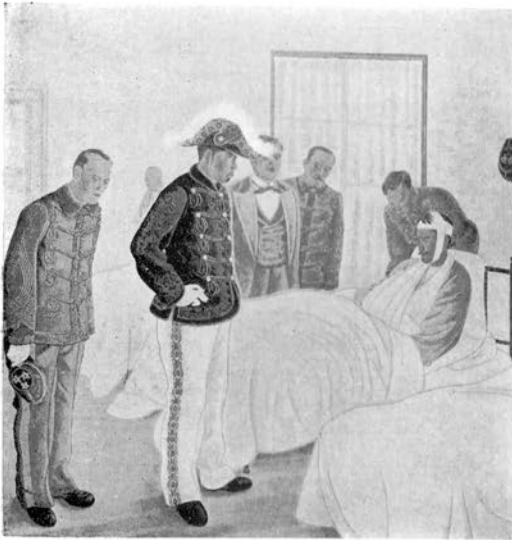
一三四 晚鐘(個展) 石山太柏



一三九 金山江天寺(個展) 川端龍子



一三七 豊公(七絃會展) 前田青都



一四〇 明治十年大阪軍事病院臨幸之圖 (明治天皇記念館壁畫) 樋口富麻呂



彦 安 (展會絃七) 童 菊 八三一



一四一 富士(讀賣新聞社講堂壁畫) 橋山大觀



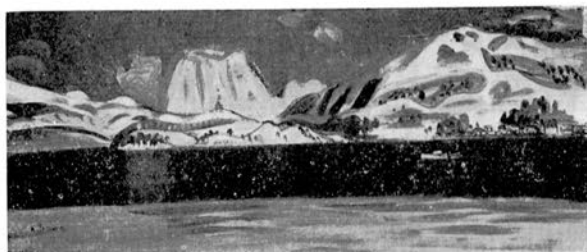
助郎三田岡 (會示展畫品出博萬育組) 畔湖口河 四



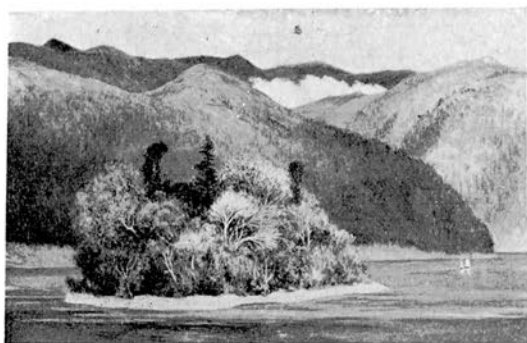
郎徹本橋 (展チツケス略攻口漢) 隊部進前の朝 一



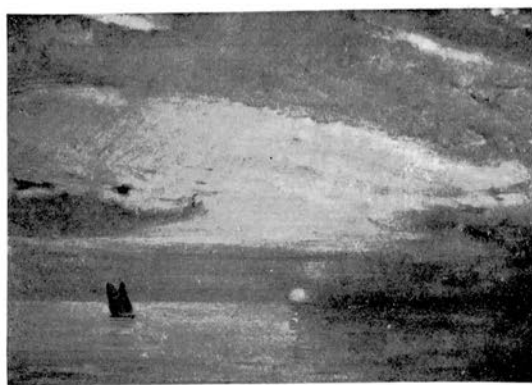
太勝田香 (展會日白) じつとらり 五



介之孝村田 (展會玄朱) 山根箱 二



助郎三田岡 (展臺春) 島ノ鶴湖口河 六



二武島藤 (會示展畫品出博萬育組) 光旭海東 三



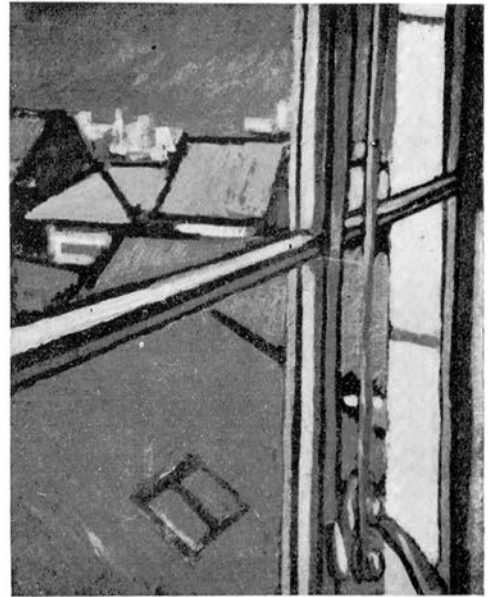
也坊手井 (展會風光) 供子ト鳥 ○一



郎三字伊 (展臺春) 廟喇河熱七



郎四藤伊 (展會風光) 春 一一



次勇木高 (展個) 望遠窓北 八



榮一宮高 (展會風光) 火焚 二一



郎太源絲小 (展會風光) 朝の地區遊 九



郎 治 猶 林 小 (展社玄旺) 召應の兄 六一



永 辻 (展會風光) 物靜 三一



郎 治 作 橘 (展社玄旺) 磯 七一



造 薰 南 (展會風光) 海 四一



城 橋 大 (展畫軍從戰聖) 街市州徐の日營城入 八一



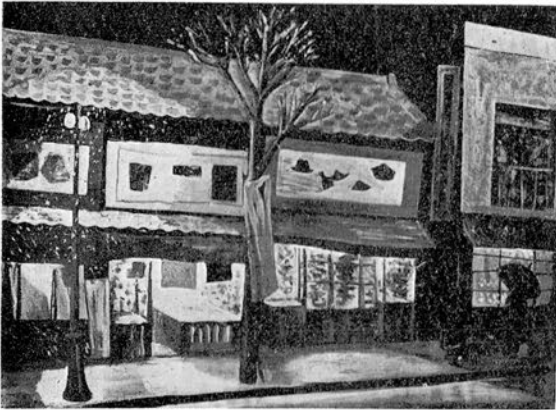
雄 虎 野 牧 (展社玄旺) 柿 五一



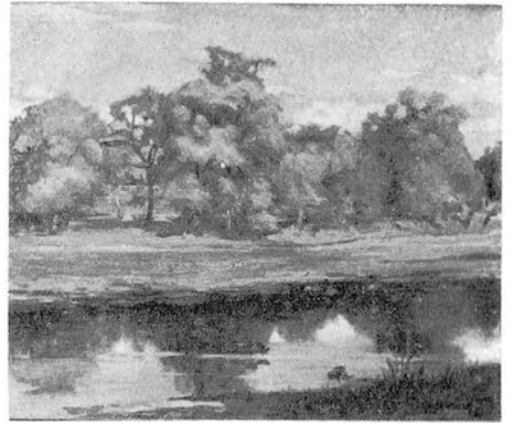
吉巴力々等 (展會畫洋平太) 軍進 二二



一 研村中 (展畫軍從戰聖) 隊部る週を江珠 九一



郎四達島高 (展立獨) 雪夜 三二



太秀地永 (展會畫洋平太) 園公海中京北 〇二



武林 (展立獨) 景風崎戸室 四二



雄義羅々多 (展會畫洋平太) 園花の夏 一二



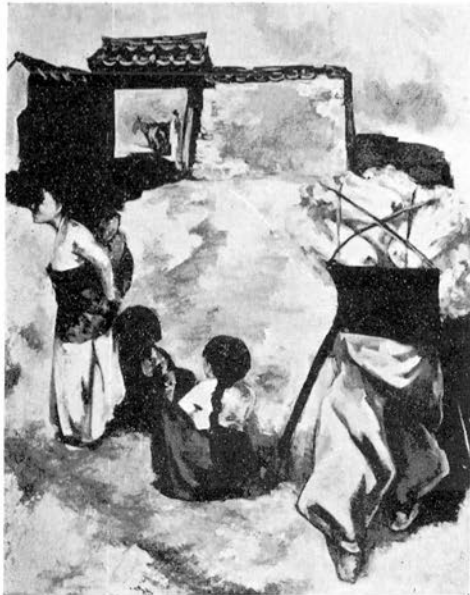
二五 秋山 (獨立展) 小林和作



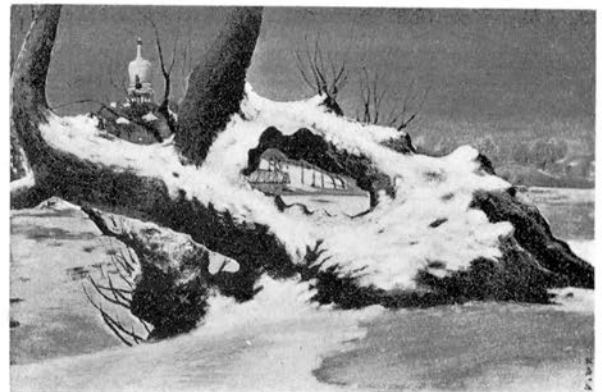
二八 静物 (獨立展) 菅野圭介



郎太善島小 (展立獨)里ルナ柿 六二



巍 山 中 (展立獨)(念記鮮朝)門 九二



郎 一 島 松 (展立獨)柳の海北 七二



三〇 南支風景 (獨立展) 田中 一 郎



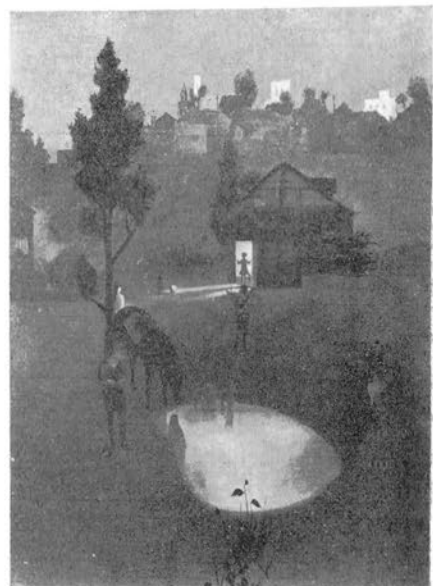
三三 集團 (獨立展) 海老原 喜之助



三三 原河 (獨立展) 須田 國太郎



三三 兒善三 (獨立展) 東風



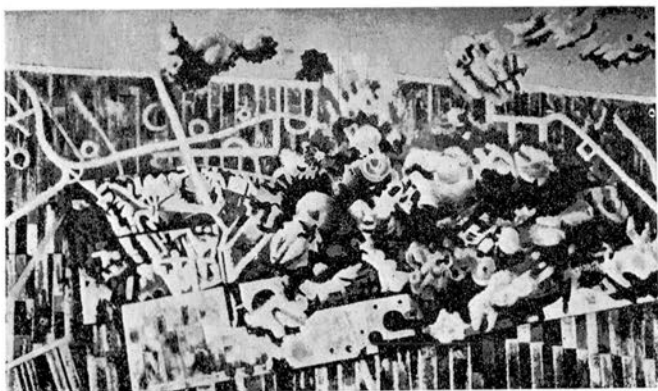
三三 齋藤 長三 (獨立展) かがさた



外 軌 口 川 (展立獨) 婦二 八三



夫 亞 木 鈴 (展立獨) 譜のひ脚 五三



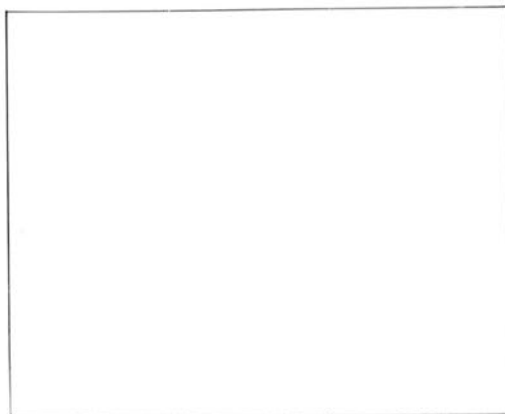
之 登 水 清 (展立獨) 豐館場汎南江 九三



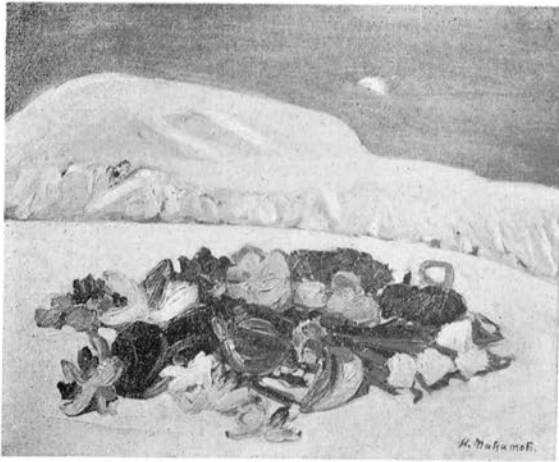
郎 太 彌 口 野 (展立獨) 々人の北東 六三



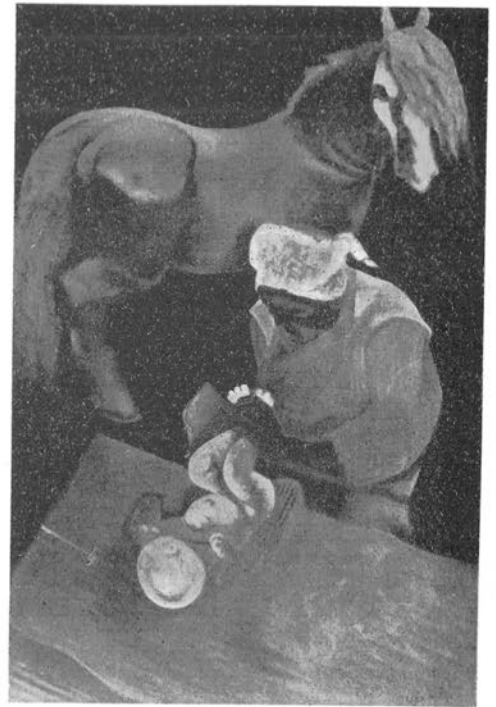
郎 一 澤 福 (展立獨)(B) 圖水洪 ○四



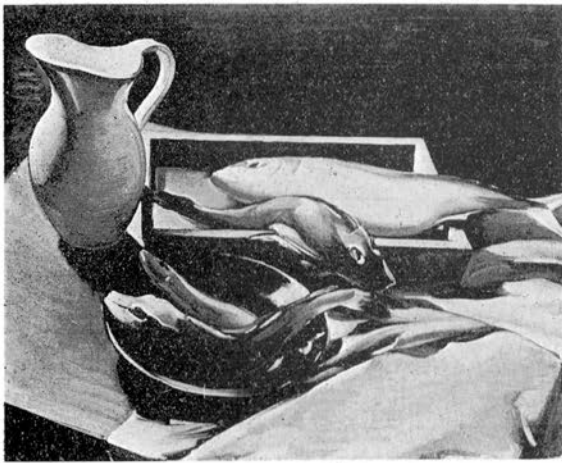
二精地菊 (展立獨) 牛野 七三



二 弘 本 松 (展會協家術美新) 蘭 三四



徳保木鈴 (展立長)(C)人展 一四



雄 覺 海 新 (展會協家術美新) 物静の魚 四四



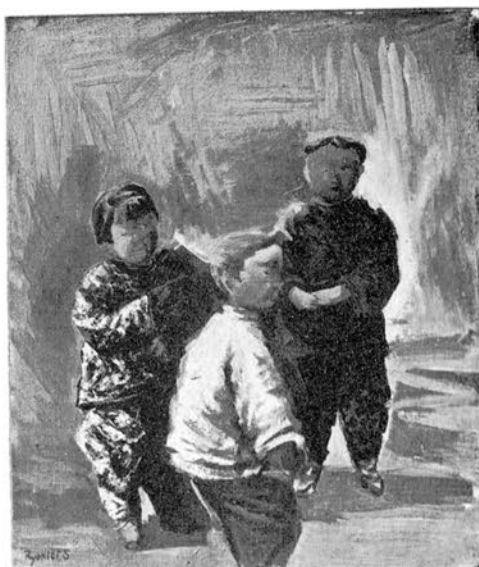
ムーユチスコ イ トツンガーマ 二四
雄 竹 田 寺 (展會協家術美新)



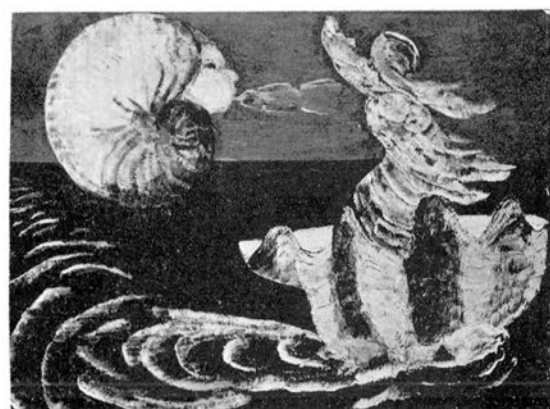
郎 三 久 藤 伊 (展會協家術美新) 森 五四



七 惣 間 高 (展會協術美線主) 朝 九四



吉 亮 井 酒 (展會協家術美新) 孩小 六四



一 岡 藤 (展會社上) 生誕のスナイツ 〇五



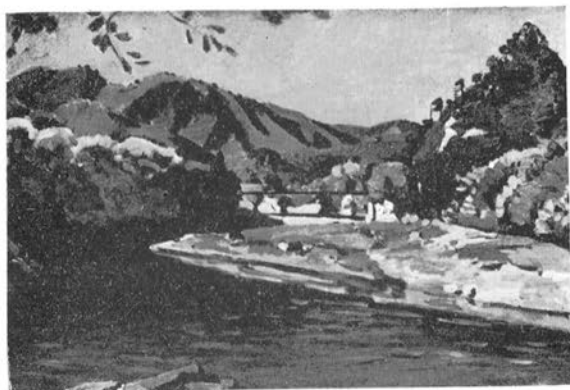
雄 義 山 青 (展個) 港の映夕 七四



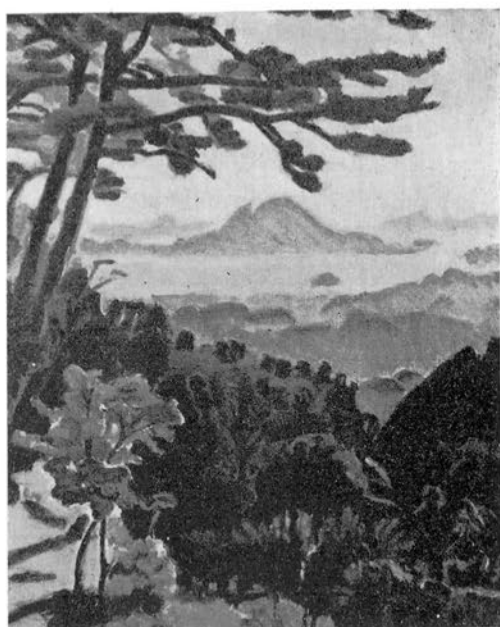
之 憲 島 牛 (展會社上) 春 一五



二 百 八 本 橋 (展會協術美線主) 地耕間山の生鯛 八四



雄文田土 (展會畫國) 景風四五



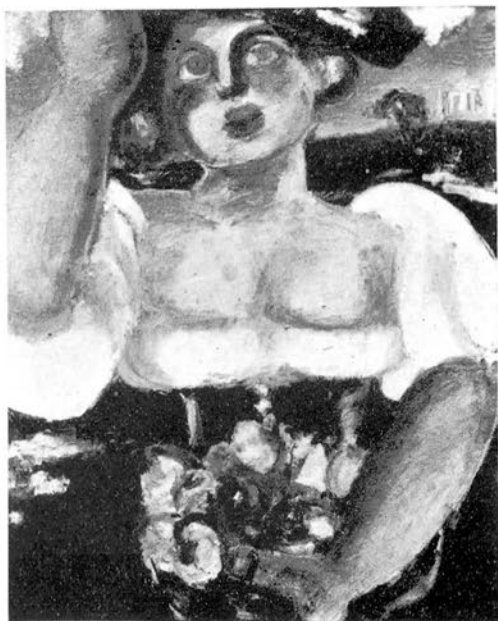
郎三龍原梅 (展會畫國) 景風薩南 二五



五五 花と少女 (國畫會展) 青山義雄



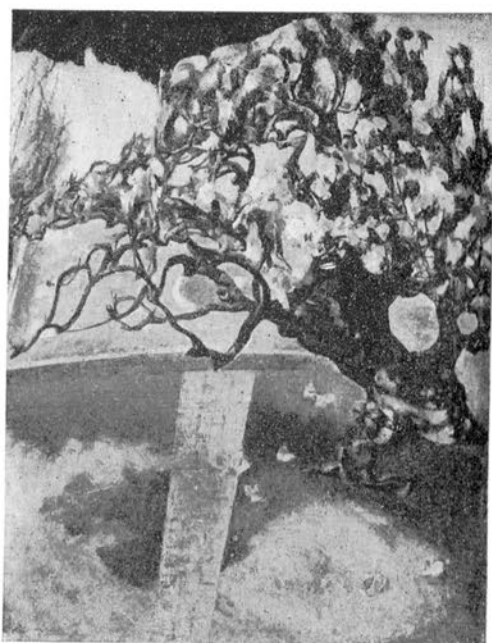
雄貞梅 (展會畫國) 葉紅と松 六五



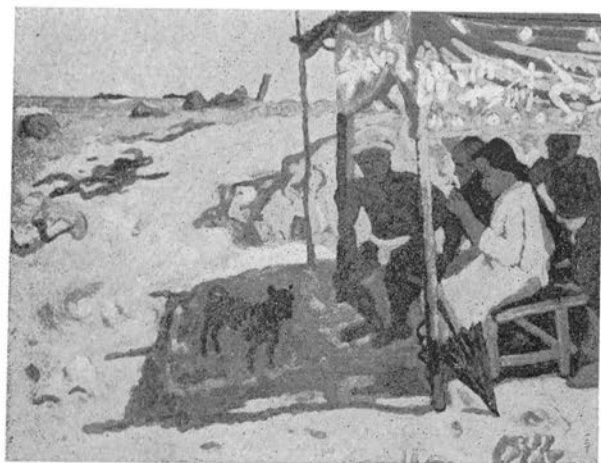
子春川谷長 (展會畫國) 亞利太伊の春 三五



里 興 藤 齋 (展會光東) (朝) 島天辨 九五



葵 田 庫 (展會畫國) 石礎と椿 七五



章 一 藤 佐 (展會光東) 蔭日 〇六



彦 美 國 熊 (展會光東) 地陣方南港雲連 一六



勢 通 野 河 (展會畫國) 代時娘 八五

六二 猫の居る庭 (東光會展) 江藤哲



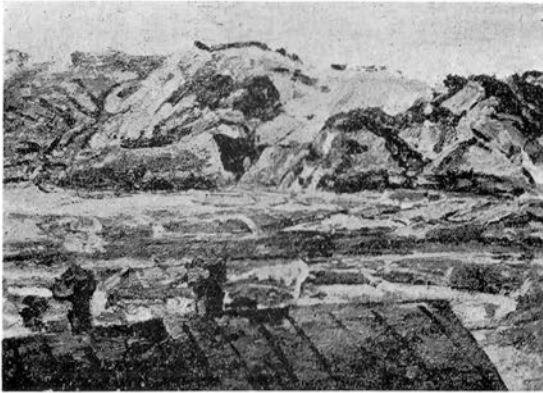
六五 横臥讀書 (春陽會展) 小林徳三郎



六三 静物 (東光會展) 渡邊浩三



六六 窓外山川 (春陽會展) 中川一政



六七 商談 (春陽會展) 石井鶴三



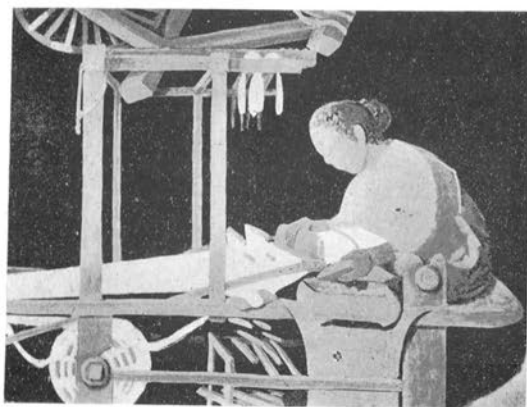
四六 白朝會展 (大久保作六郎)



七一 兵士の話 (春陽會展) 新沼杏一



助之善中田 (展會陽春) 日るあ 八六



七二 機 (春陽會展) 加山四郎



箭利見二 (展會陽春) 女の三人 九六



一隆穴小 (展會陽春) A 花 三七



兒青海鳥 (展會陽春) (クスレトビ) 景風州蘇 〇七



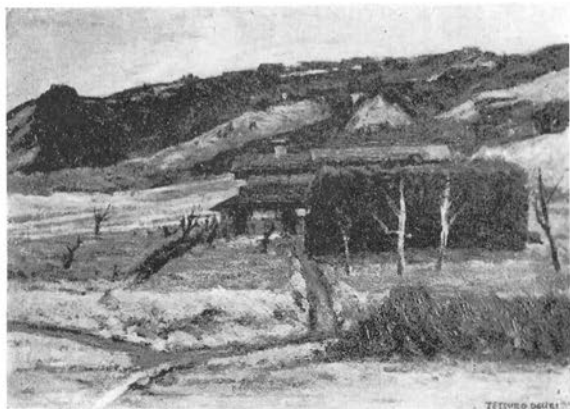
七七 初夏山海 (春陽會展) 今關 啓司



八 薔 村 木 (展會陽春) 椿 四七



七八 大同石佛一 (第二十龕) (春陽會展) 足立源一郎



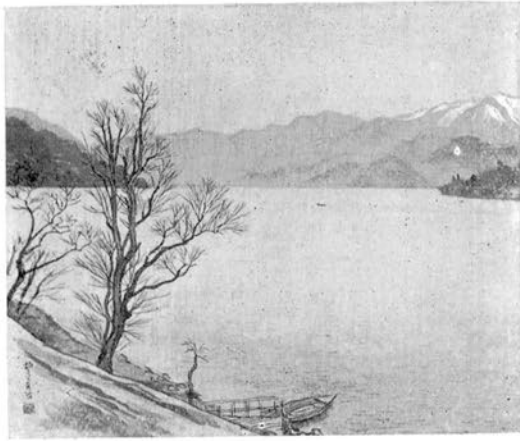
郎 哲 栗 小 (展會陽春) 空雪 五七



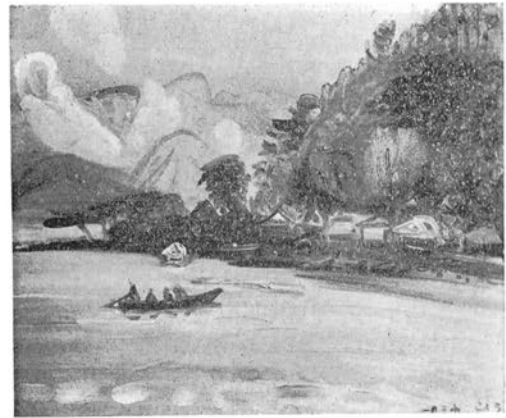
郎 二 喜 田 太 (張市都京) (後午) 山野吉 九七



清 谷 水 (展會陽春) 撲相 六七



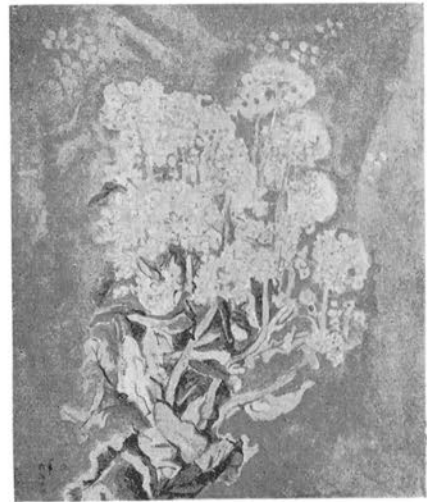
石井柏亭 (本日水彩畫會展) 白根遠望 三八



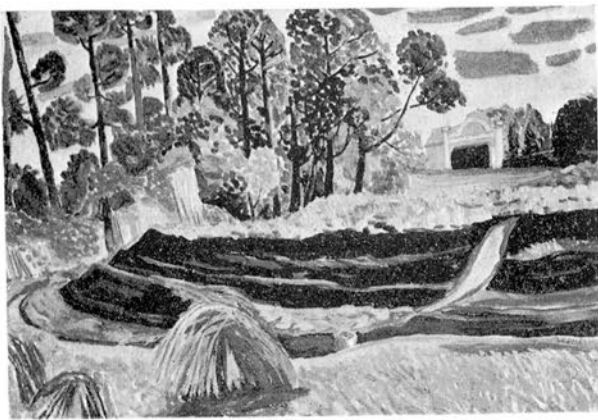
八〇 天藍望海 (六湖會展) 中川紀元



中西利雄 (本日水彩畫會展) 西風景 四八



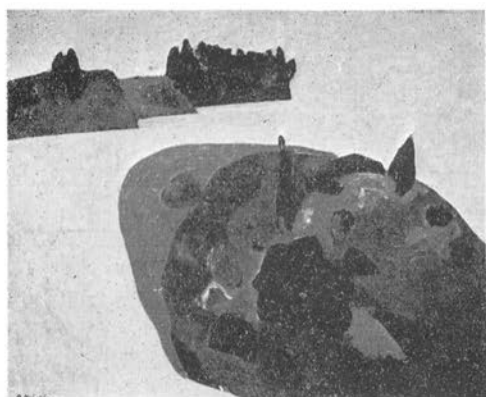
八一 菜の花 (六湖會展) 牧野虎雄



春日部くすた (本日水彩畫會展) 西風景 五八



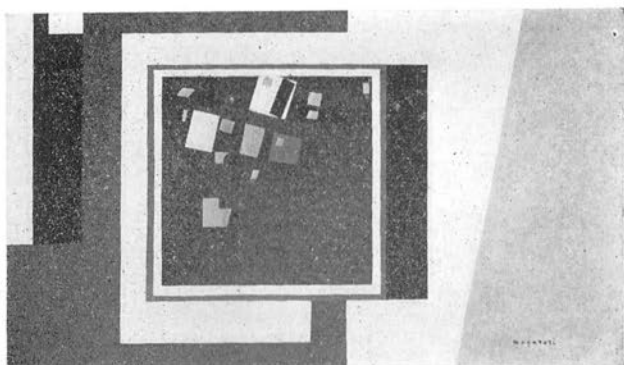
八二 夜椿 (六湖會展) 木村莊八



郎 六 橋 矢 (展會協家術美由自) 綠新 九八



郎 吾 田 鶴 (展會畫彩水本日) 營陣の蕩荒 六八



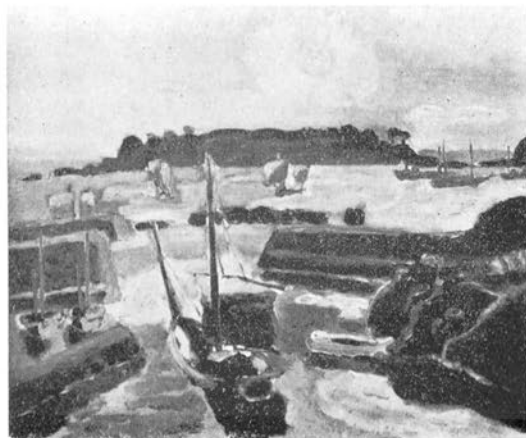
誠 正 井 村 (展會協家術美由自) Cité 〇九



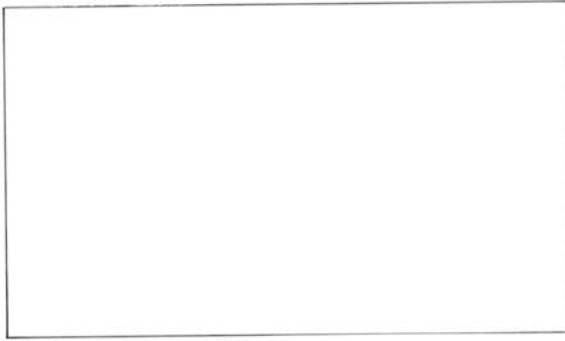
(展念記年周三派作制新) 像女少 七八
巖 田 内



薰 口 山 (展會協家術美由自) 壺蝸 一九



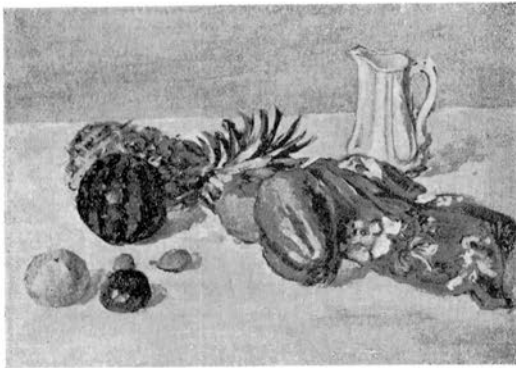
之 克 井 鍋 (展科二季春) 港 八八



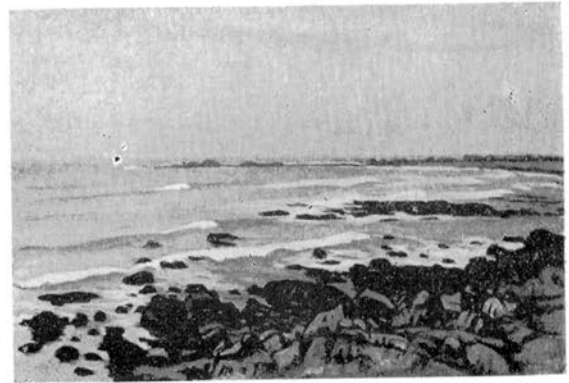
康 藤 伊 (展個) 出鶏金 五九



一 研 村 中 (展術美洋海) 道水西大 二九



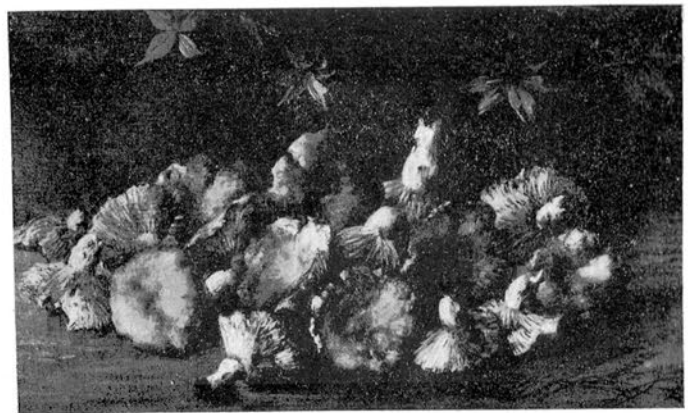
馬 久 千 木 鈴 (展個) 物 静 六九



亭 柏 井 石 (展術美洋海) 波るす寄 三九



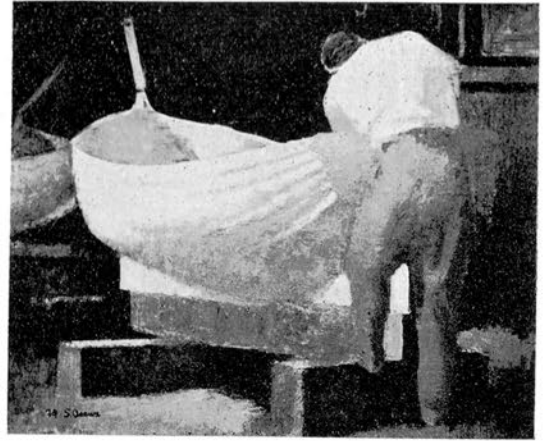
(展個) ンボリい色黄 七九
筋 利 見 二



玉 ザー グラ (展作 置玉 ザー グラ) 葺 初 四九



九九 薔薇 (清光會展) 梅原龍三郎



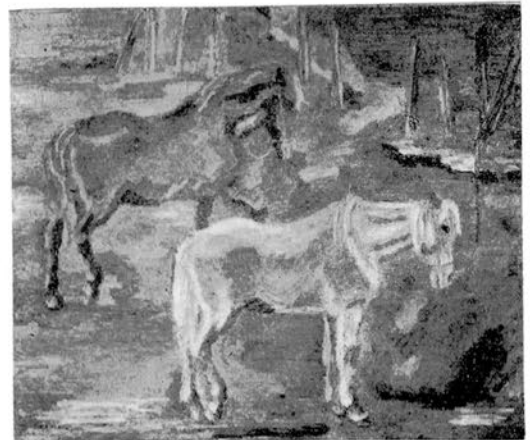
介昌 深大 (展會春三) り造舟小 八九



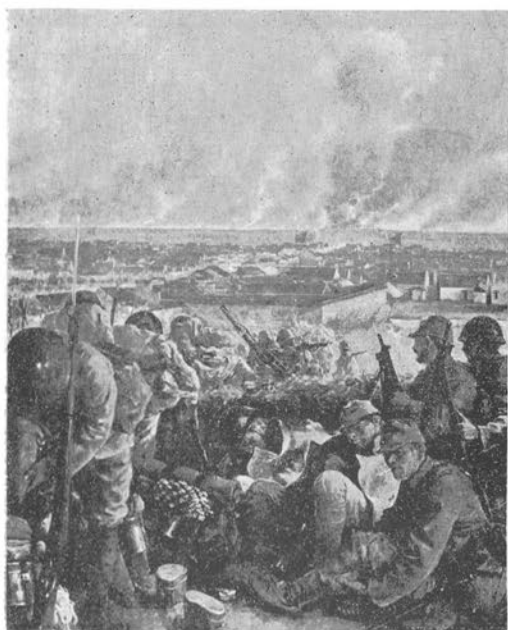
一〇〇 白樺と燒岳 (清光會展) 安井曾太郎



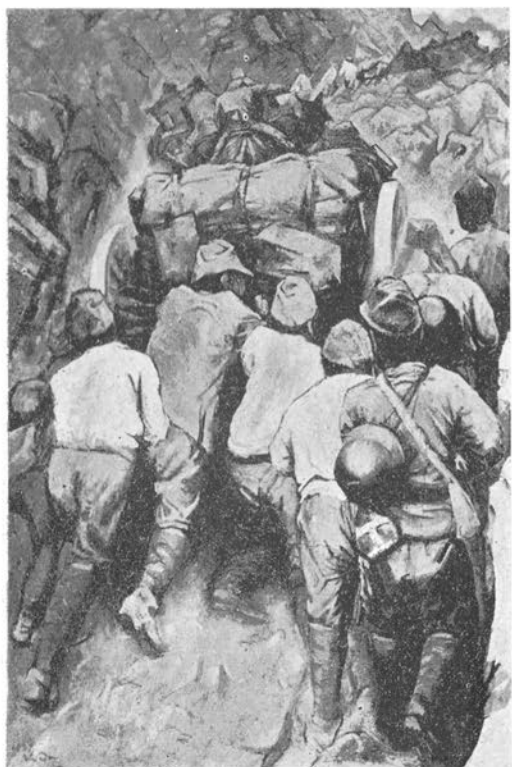
作英 田和 (展個) (森之間淺田吉) 士富 二〇一



郎二繁本坂 (展會光清) 馬繫 一〇一



(展術美戦聖) 翻戦の門華中京南 六〇一
平良 磯小



幸 上 井 (展術美戦聖) 軍行難岳山 七〇一



一〇三 ピアノに倚る少女 (一水會春季小品展)
木下 孝則



郎太新下山 (展品小季春會水一) 苑神 四〇一



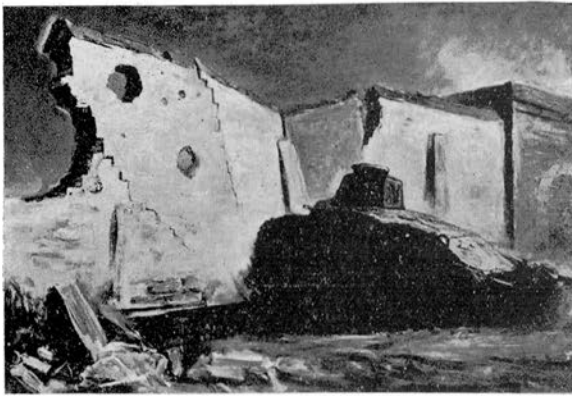
一〇五 裁縫する女 (個展) 小磯良平



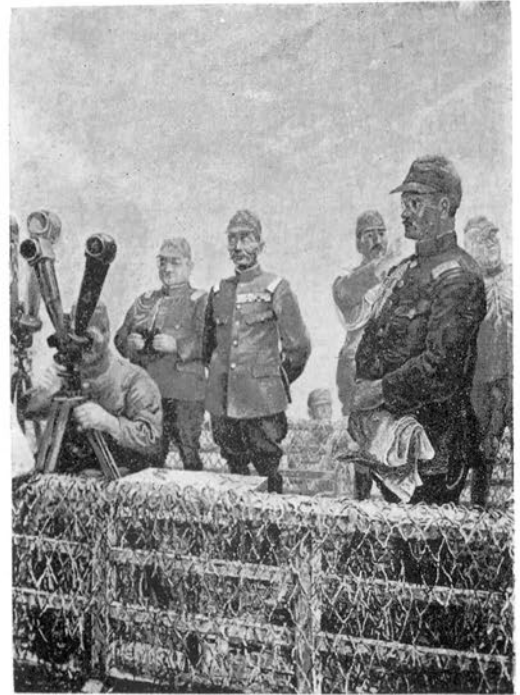
雄春坂長 (美術美戦聖) 陸上前敵松吳 〇一一



一研村中 (美術美戦聖) 路子丁門華光 八〇一



郎三字原伊 (美術美戦聖) 倒歴 一一一



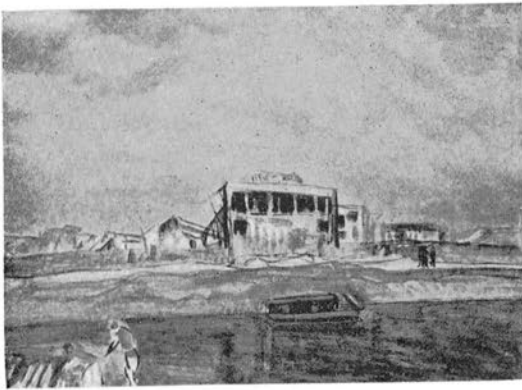
官揮指高最井松の上樓望宅家楊 九〇一
門衛右關井朝 (美術美戦聖)



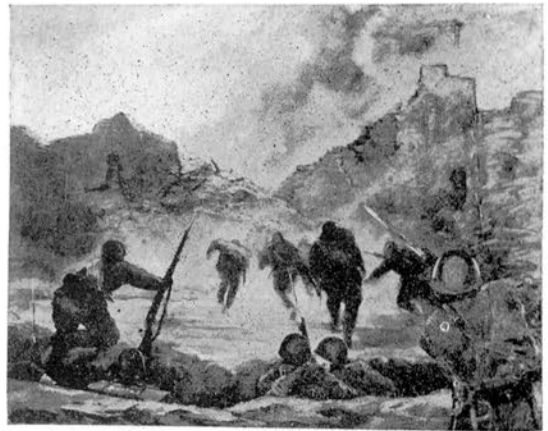
善政南 (美術美戦聖) 戦撃追錫無 二一一



郎 二 榮 木 鈴 (展術美戰聖) 戰略攻京南 三一



二 武 島 藤 (展術美戰聖) 跡の戦激河州蘇 六一



一 圭 澤 高 (展術美戰聖) 路襲突 四一



郎 太 覺 原 柏 (展術美戰聖) 撃突の家の壁白 七一



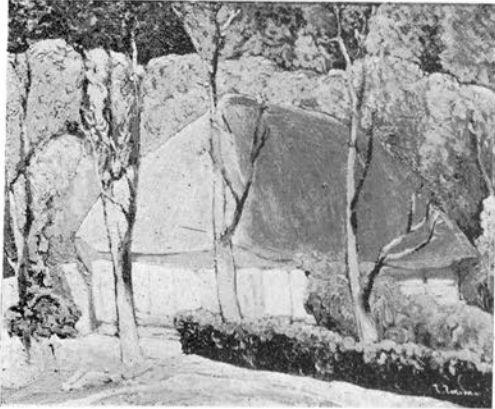
之 登 水 清 (展術美戰聖) 河渡と馬愛 五一



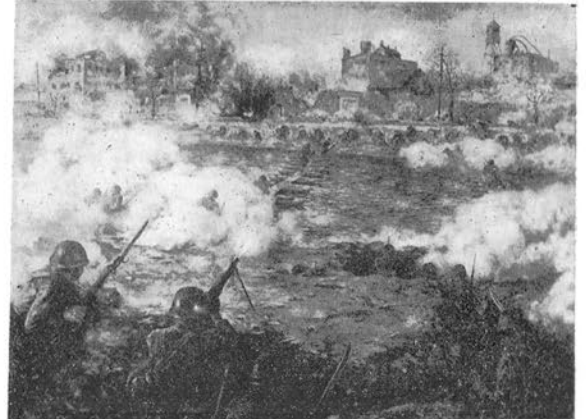
和田 颯 (展術美戦聖) (陸上前敵) 鑑添吳 一二一



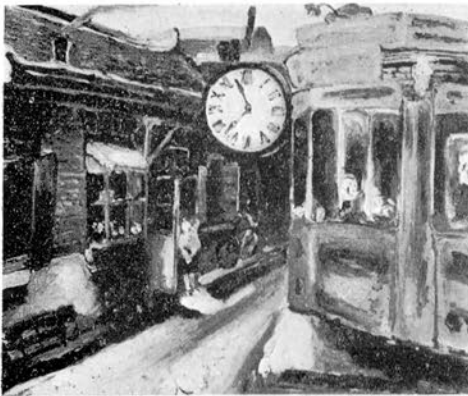
吉潤 井向 (展術美戦聖) 歸激の橋木新 八一一



郎太 徳岡高 (展會科二) 家 二二一



平純 藤江 (展術美戦聖) 戰河渡前敵河州蘇 九一一



(町笠三京新) 角街るあの屋計時 三二一
之克 井綱 (展會科二)



也一 光高 (展術美戦聖) 已忘中叢 〇二一



二 瀨 崎 島 (展會科二) 竹 七二一



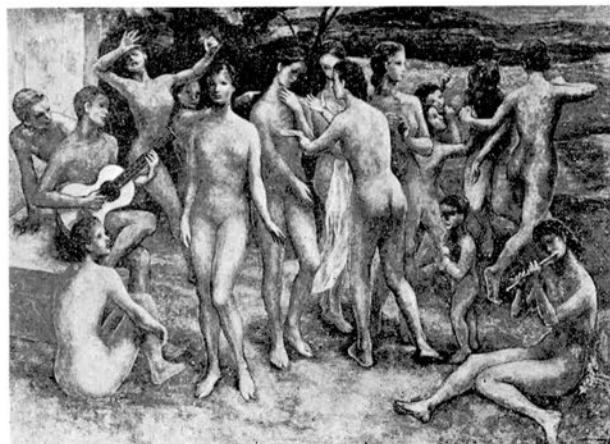
郎 太 重 田 黒 (展會科二) 雪 霽 峰 群 四二一



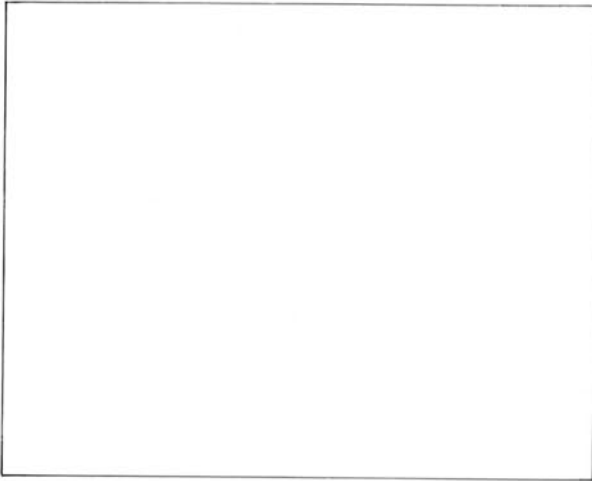
郎 太 信 木 鈴 (展會科二) 榴 栝 五二一



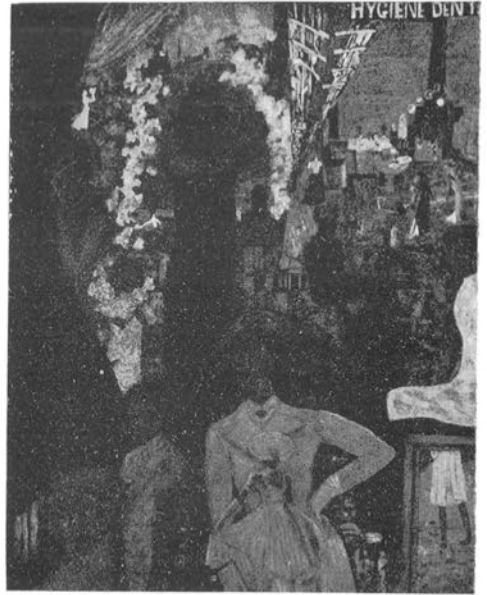
郎 三 得 宗 正 (展會科二) 薇 紫 八二一



三 謙 田 闕 (展會科二) 原 高 六二一



二 淳 井 吉 (展會科二) 家農 二二一



一 美 岸 峰 (展會科二) 海上の昏黄 九二一



一三三 作品B (二科會展) 山口長男



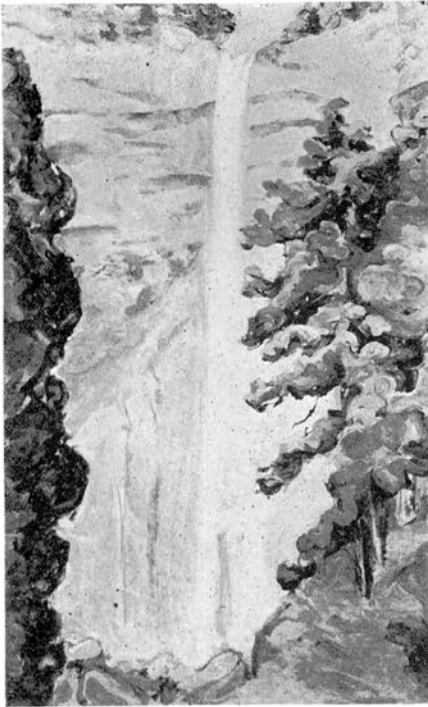
次 民 川 北 (展會科二) みあの 〇三一



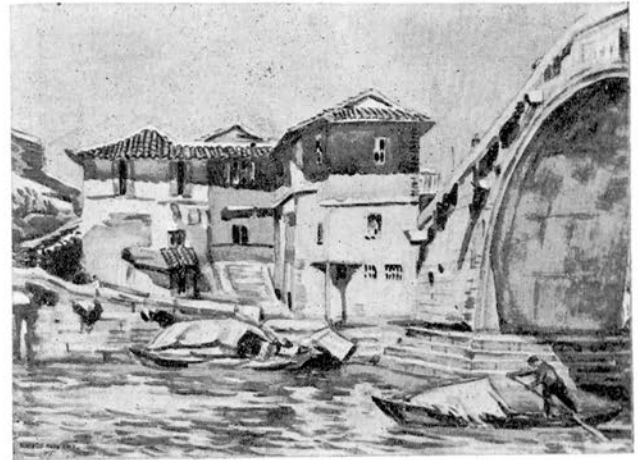
吉 潤 井 向 (展會科二) 民麩 四三一



根 仁 間 野 (展會科二) 步散の婦蓬看 一三一



馬久千木鈴 (展文) 滝 八三一



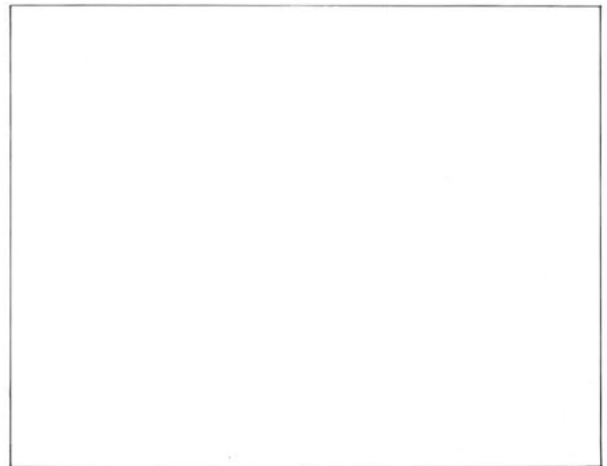
南 造 (展文) 屋彩 五三一



青山 義雄 (展文) 漁村 六三一



貫大 三松 (展文) 婆老 九三一



石川 彦滋 (展文) 彩船 七三一



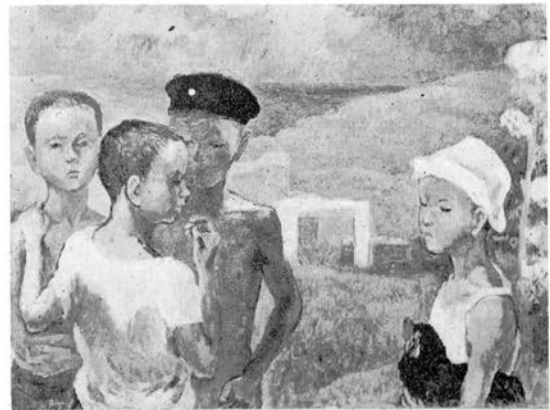
一四三 朝顔(文展) 木村 莊八



郎太源絲小 (展文) 生先本松るす歩散 ○四一



一四四 きつ、き(文展) 川合 修二



一四一 丘の子供達(文展) 井手 坊也



治 賓 川 石 (展文) (江鎮) 帆週江長 五四一



七 惣 間 高 (展文) 鳥 二四一



善 政 南 (展文) きつよちい赤 九四一



泰 谷 中 (展文) 日秋 六四一



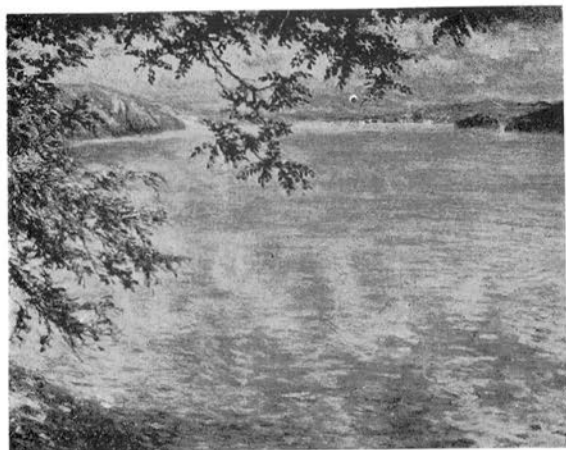
政 一 川 中 (展文) 供子の下の樹 七四一



太 剋 田 須 (展文) 男るす書讀 〇五一



修 治 田 以 阿 (展文) 闇絵 八四一



一五三 湖上雲影 (文展) 田邊至



一研村中 (展文) 秋初 一五一



一五四 松 (文展) 庫田毅



郎次作保久大 (展文) 子母の海 五五一



郎次徳竹佐 (展文) 溪の隈武阿 二五一



一五九 佛畫(霜林會展) 里見勝藏



一五六 姉妹(文展) 安宅安五郎



一六〇 春(霜林會展) 林重義



一五七 老曹長(文展) 伊藤悌三



念一宮會(展會林霜) 礪岩 一六一



一五八 京城仁王山(文展) 權藤種男



子 箭 岸 三 (展派作制新) 内室 四六一



誠 木 鈴 (展派作制新) のもき 二六一



和 田 脇 (展派作制新) 邊窓 五六一



康 田 三 (展派作制新) 房工 三六一



雄 利 西 中 (展派作制新) 女と彫彫 六六一



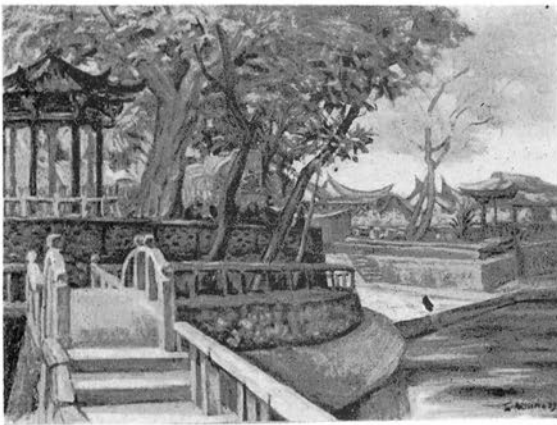
(展派作制新) 物入るよに子崎 〇七一
敬 藤 佐



一六七 兵馬 (新制作派展) 小磯良平



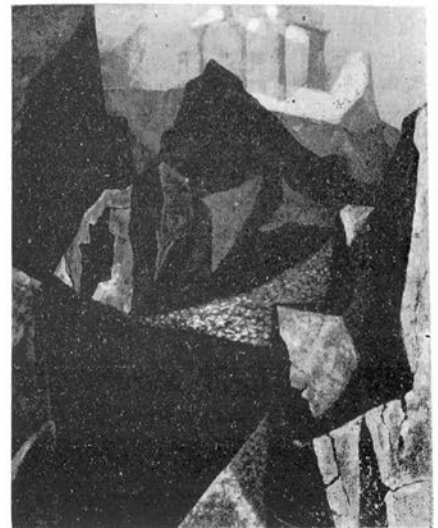
一六八 冬 (新制作派展) 伊勢正義



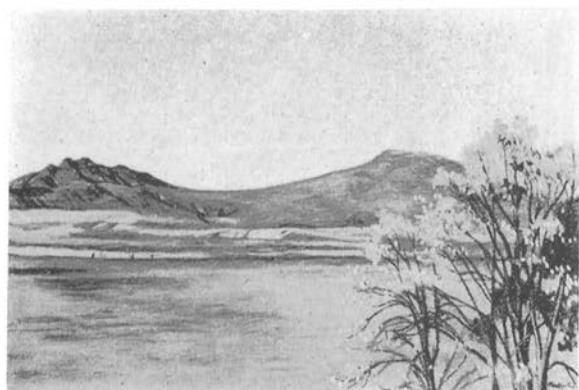
馬生島有 (展會水一) 園庭的澗臺 一七一



策善村中 (展會水一) 景海 二七一



巖田内 (展派作制新) 想構 九六一



石井の亭 (一風會展) 張鼓蜂 六七一



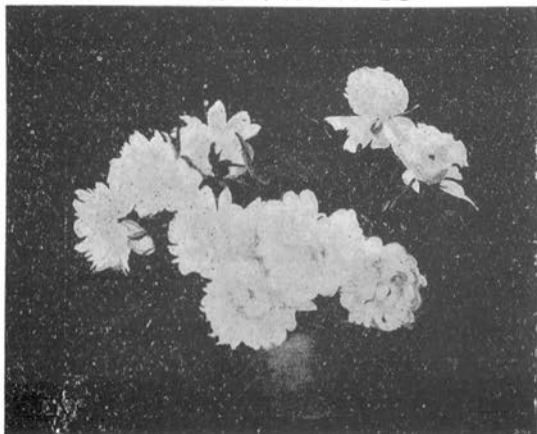
安曾の肖像 (一風會展) 三七一



近藤光紀 (一風會展) 白の手袋 七七一



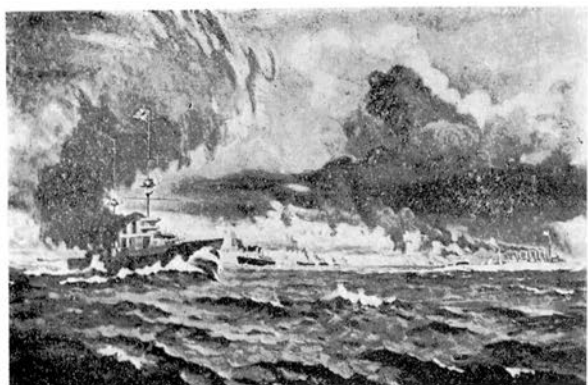
山田敬三 (一風會展) 松籟 四七一



高野三三 (一風會展) 白薬芍 八七一



木下謙義 (一風會展) 長椅子に女 五七一



男 陸 井 荒 吹伊艦軍 一八一



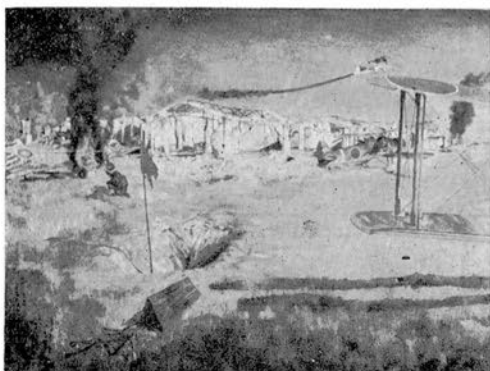
郎 太 新 下 山 (展會水一) 雷北 九七一



次 庫 田 橋 畫壇堂講校學中東城縣知高 二八一



則 孝 下 木 (展會水一) 像女少 〇八一



治 嗣 田 藤 (藏所館軍海) 圖のち打燒場行飛昌南 三八一



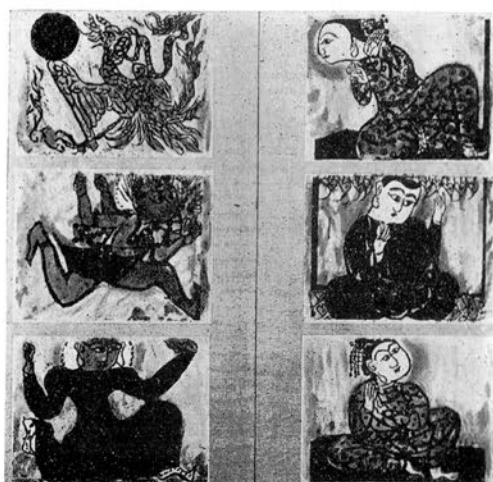
恩地孝四郎 (展會畫圖) 内の巖 四



一 運塚平 (展會畫圖) 淵深巖始 一



三 鶴井石 (展繪挿同一第) 藏武本宮 五



二 善提韻觀經版畫曼荼羅屏風一雙内 (展會畫圖) 棟方志功 二



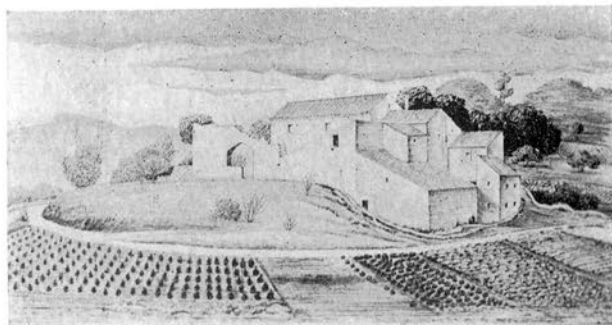
六 小村雪俗 (展繪挿同一第) べらくけた 六



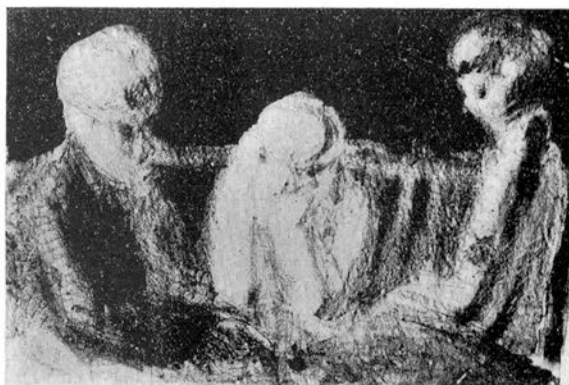
三 野島康三 (展會畫圖) 花いれんぎ 三



英西川 (展文) 園綠 〇一



潔川谷長 (展會陽春) 雲と園農 七



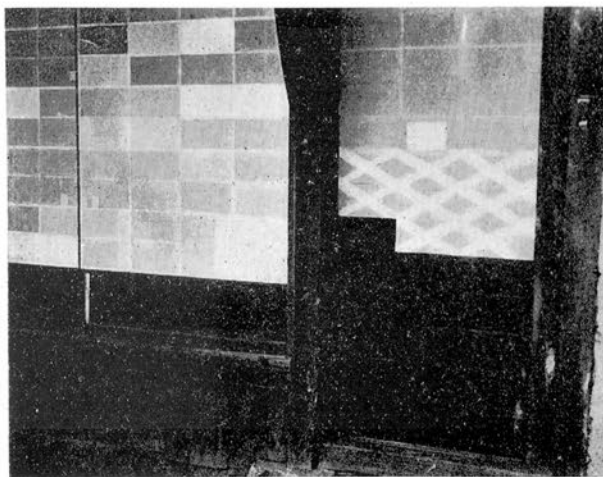
門衛右新崎野 (展會陽春) 内室 八



帆千川前 (展文) 綠新 一一



之得平勝 (展文) 冬秋 題二花 二一

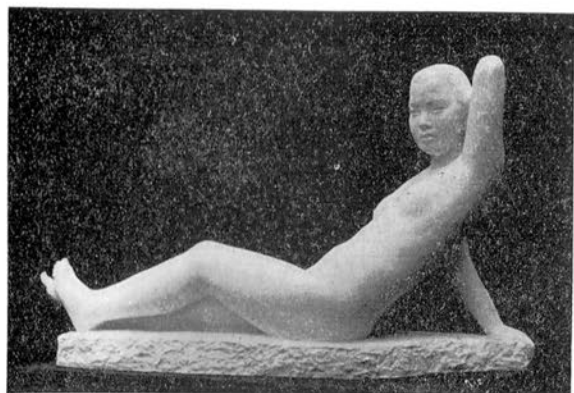


郎三川谷長 (展會協家術美由自) 子障 (一) 誌土鄉 九

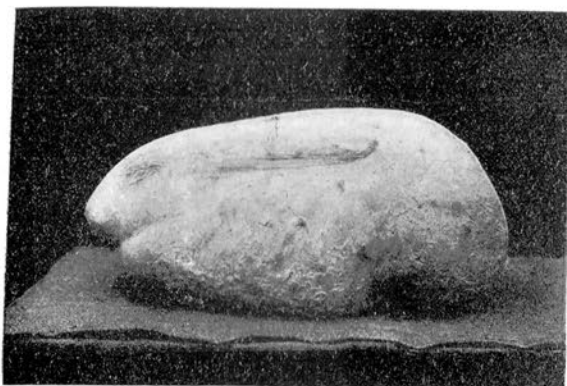
一 龍鷲(海)(白日會展) 永原 廣



二 肖像(太平洋畫會展) 堀 進二



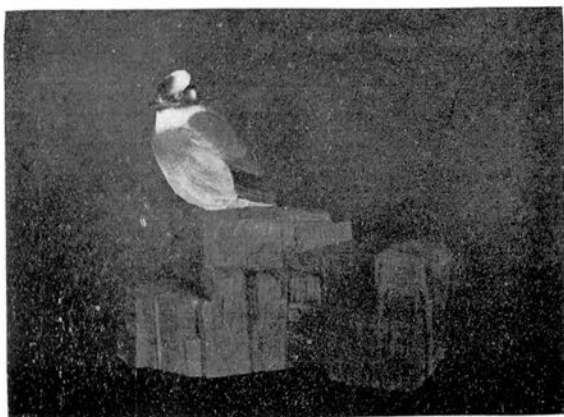
達 室 小 (展會協術美練主) 作習 四



寬 澤 三 (展會協術美練主) 兔 五



之 尚 田 松 (展會協術美練主) 女少 六



嶺 白 田 吉 (展人同展院) 光春 三

六五



一〇 哀愁の地 (國畫會展) 山内 壯夫



七 男の顔 (國畫會展) 本郷 新



一一 母 (構造社展) 齋藤 素巖



八 乳くばり (國畫會展) 明田川 孝



一二 愛撫 (構造社展) 山畑 阿利一



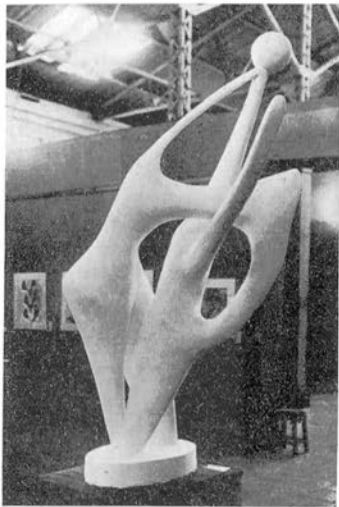
九 南昌制覇 (國畫會展) 清水多嘉志



一六 犬と女 (構造社展) 宮地 寅彦



一三 庭園裝飾コンポジション (構造社展) 安永 良徳



一七 作品 (自由美術家協會展) 植木 茂



一四 吉村先生像 (構造社展) 河村 龍興



一八 マドモアゼルZ (日本彫刻家協會展) 早川 謙一郎



一五 女兒彫像 (構造社展) 後藤 清一



(展會協家刻彫本日) 婦裸 一二
是 林



(展會協家刻彫本日) 像立女 〇二
也 直 井 武



(展會協家刻彫本日) 作習 九一
十七 村 中



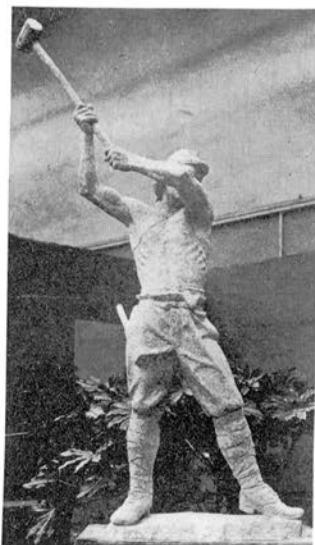
二三 恩師の顔 (東邦彫塑院展) 建昌 大夢



(展會協家刻彫本日) 年少の會藝學 二二
久 直 村 歌



(展院塑彫邦東) コバタ 六二
良 浦 松



(展術美戰聖) 班設建 八二
人 直 村 中



(展院塑彫邦東) 天門沙毘 四二
雲 聖 野 關



(曹軍井細) 柱人の昌瑞 七二
一 剛 川 梁 (展術美戰聖)



(展術美戰聖) 來軍皇 九二
七 久 島 宮



(展院塑彫邦東) 生更 五二
正 舜 野 藤



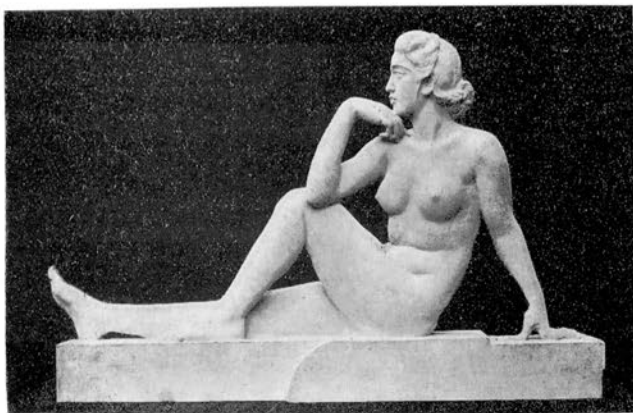
次龜女乙早 (展會部三第) 想構 二三



三實子名日 (展術美戰聖) 袋問慰 ○三



三三
サモエド(犬)(第三部會展)
大野 信藏



三實子名日 (展會部三第) 像座 四三



(二其) 譜進行馬愛 一三
八勇田池 (展會部三第)



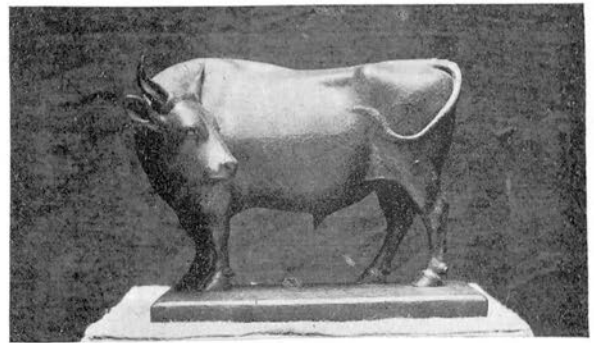
三八 征徒(防人ニヨル)(院展) 中村直人



三五 空(第三部會展) 石塚裕康



三九 膝つける少女(院展) 村田徳次郎



兵康木柏 (展院) 牛 六三



四〇 馬(院展) 松原松造



三七 朝鮮にて(橘)(院展) 新海竹藏



女のズーミュシ 三四
三鶴 井石 (展院)



堂 晋 辻 (展院) 像人婦 一四



良重 本宮 (展院) 提善童幼 二四



四五 湯川村長像 (院展) 保田 龍門



中田 櫛平 (展院) 子鏡鏡作試 四四



四九 戦跡モニユマン連作(聖観)(二科會展) 長谷川八十



四六 女の顔(院展) 山本豊市



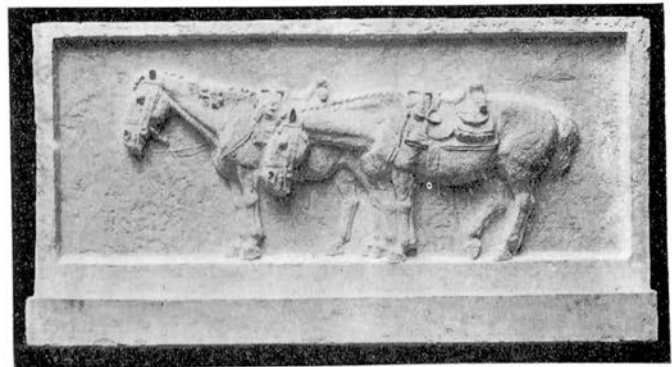
五〇 幼時の鹿之助(二科會展) 松村外次郎



四七 鳳翁像(院展) 林 是



(展會科二) 路末の日抗 一五 男 季 置 笠



曉 田 上 (展會科二) はにのさくい 八四



五四 初夏(文展) 圓錐勝



五二 父子(二科會展) 長野隆業



五五 母(文展) 横江嘉純



五三 彌亞の聖火(二科會展) 水野欣三郎



五六 鎮護(文展) 赤堀信平

五七 相撲(文展) 石井 鶴三



五八 胸像(文展) 安藤 照



五九 桂翁(文展) 長谷川 榮作



六〇 夢(文展) 建昌 大夢



六一 大陸の土(文展) 古川 順三

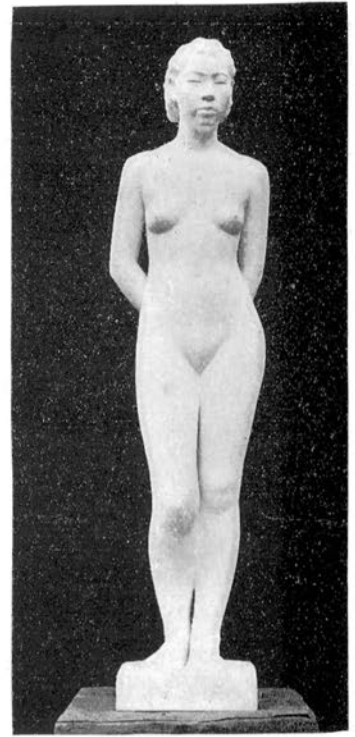




(展文) ク播=陸大 四六
藏喜伊開吉



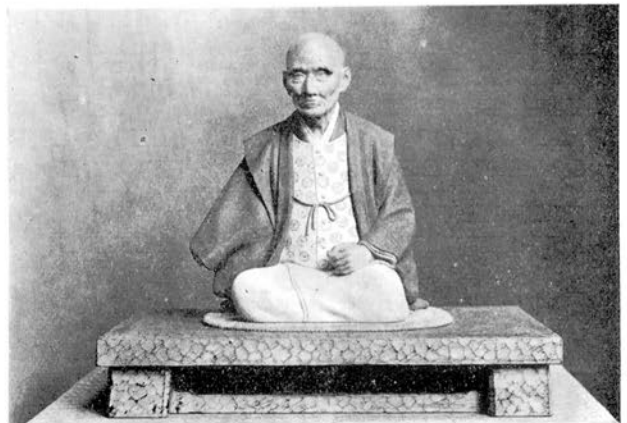
史明田西 (展文) 畫眞 三六



郎一喜谷泉 (展文) 像立 二六



赴江堀 (展文) 作試 六六



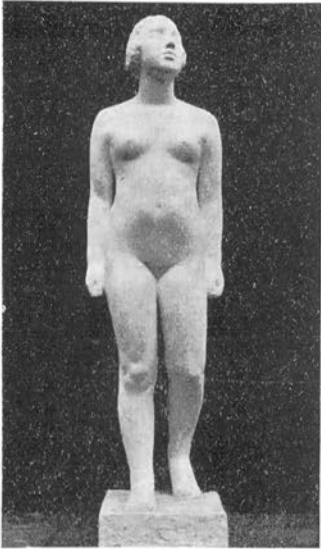
雲朝崎山 (展文) 日春小の庵 五六



七〇 湖音(文展) 高橋 英吉



六七 裸女(文展) 倉持 芳



七一 立像(文展) 河内山 賢祐



六八 鯉の男(文展) 古賀 忠雄



七二 或る男(文展) 木村 珪二

七七



六九 陸軍(従軍記者)(文展) 一色 五郎



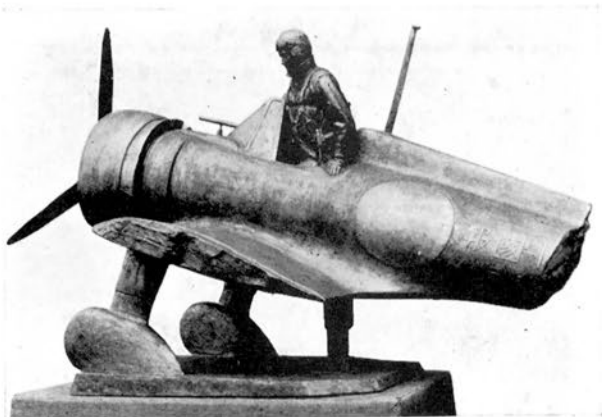
七六 荒野（アイヌ民族への長根碑）
（新制作派展） 山内 壯夫



七三 鑛夫（文展） 吉田 敏示



七七 少年（新制作派展） 舟越 保武



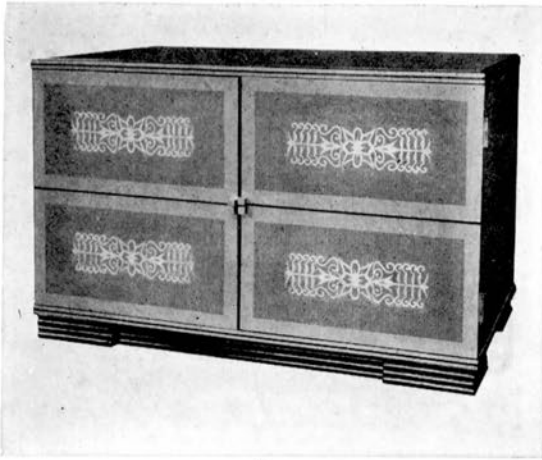
七四 七生報國の南郷少佐（文展）
長谷川 義起



七八 母（新制作派展） 柳原 義遠



七五 演技者（新制作派展） 吉田 芳夫



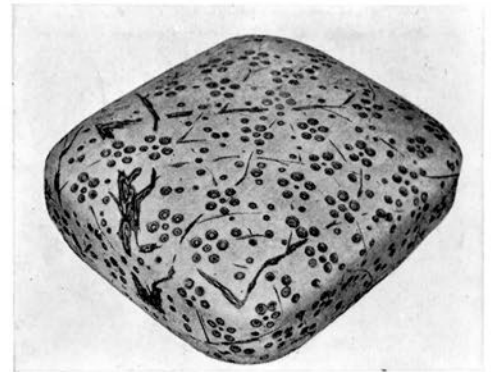
(展藝工省工商) 櫥飾樣文華銀 四
 作合 孝 義 野 牧 • 呂詩余 崎 野



衛 房 坂 宮 (展藝工省工商) 瓶花圖葡萄 一



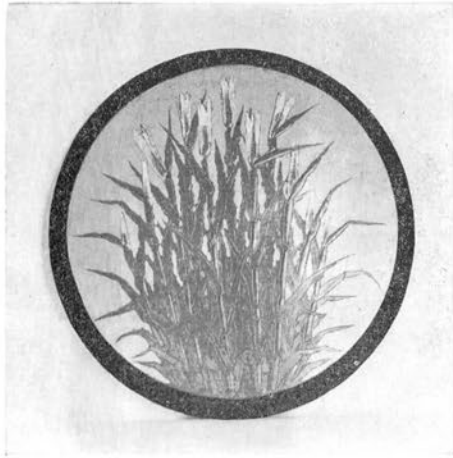
華 清 鹿 山 (展藝工省工商) 袖振錦織手圖礎瑞 五



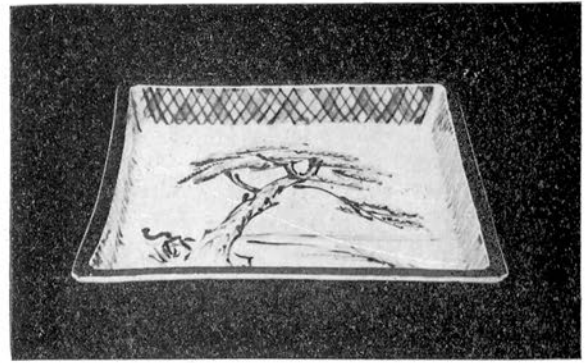
(展藝工省工商) 庫文手張闊一様模梅形判小 二
 行 經 繪 三



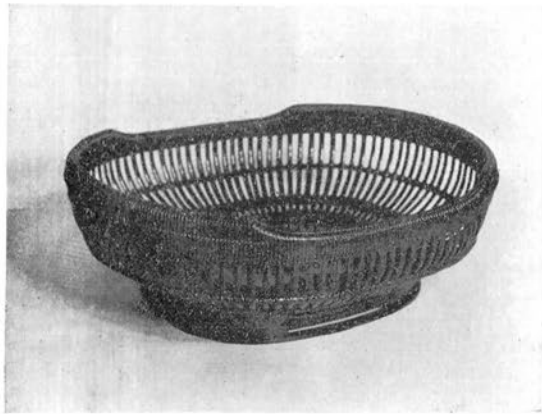
(展藝工省工商) 盤水銅鑄形丸様模梅 三
 康 富 田 會



九 草木染藪細「麥」パネル (大阪工藝振興展)
日比野近三



吉 蕙 本 富 (展會畫國)(松)皿角附染 六



一〇 古矢竹盛器 (大阪工藝振興展)
阪口宗雲齋



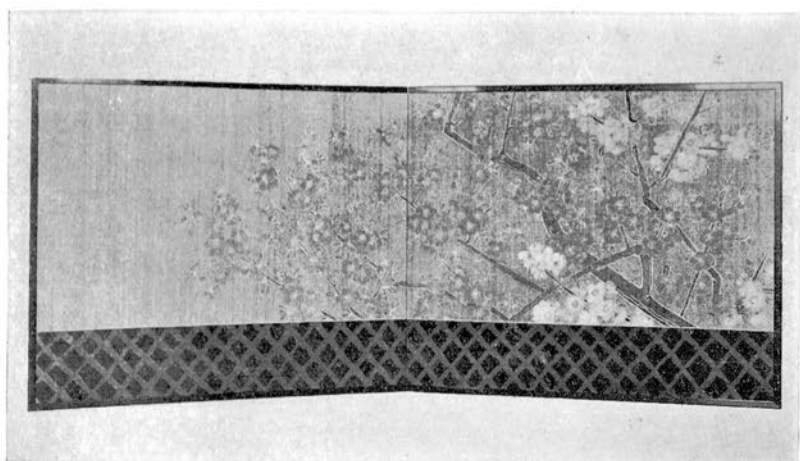
七 衝立獅子瑞花文 (日本漆藝院展) 六角 穎雄



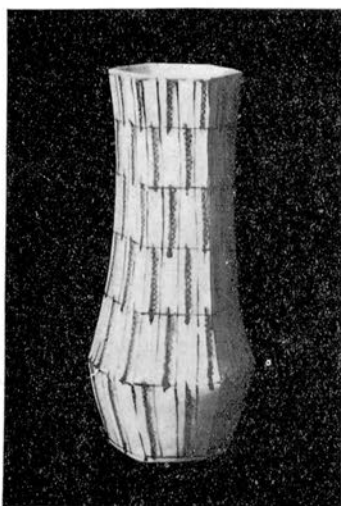
一一 御所人形小倉と小供 (實在工藝展) 野口光彦



成 楊 朱 堆 (展院藝漆本日) 盆子菓漆彫 八



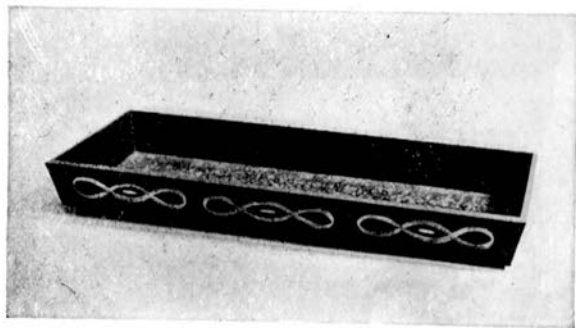
一二 風呂先屏風 (實在工藝展) 木村和一



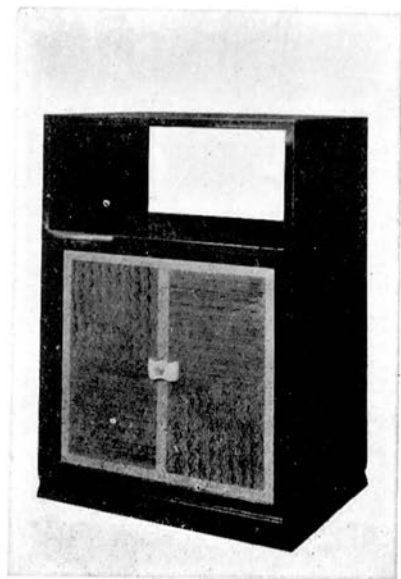
(展藝工在實) 瓶花付染 四一
郎太喜村河



山鎌橋三 (展藝工在實) 箱手光珠彫盒鎌三一



久山村 (展藝工在實) 盆聞新作舍圻 六一



雲陽藤佐 (展藝工在實) 局器 五一



二〇 耳付一輪生 (日本陶藝展) 小倉雅道



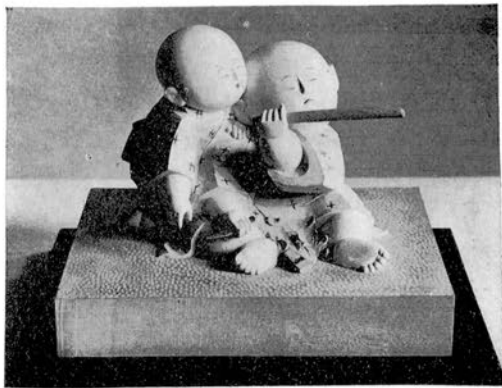
周豊村高 (展藝工在實) 壺銅青 七一



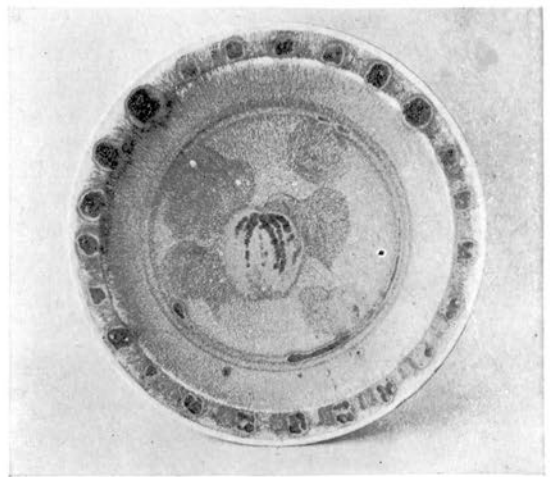
司庄田廣 (展個) (空子盆) 碗茶番繪鐵 一二



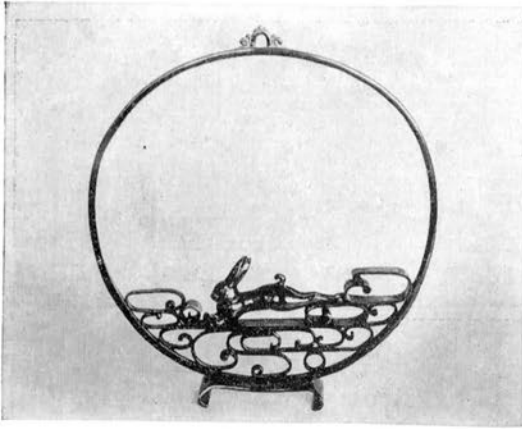
郎太覺崎山 (展藝工在實) 器盛花トイマルア 八一



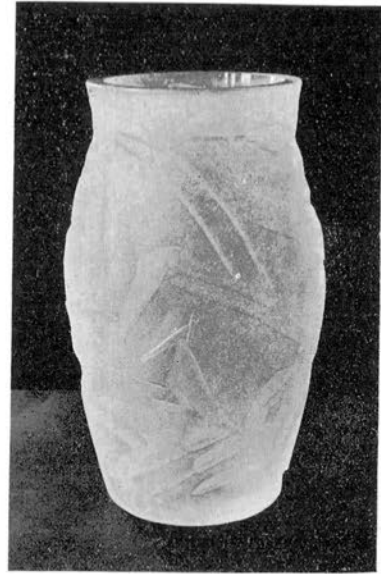
潤天呂野 (展文) 兒ル作刀木 二二



泉刀肥土 (展藝陶本日) 皿紋瓜 九一



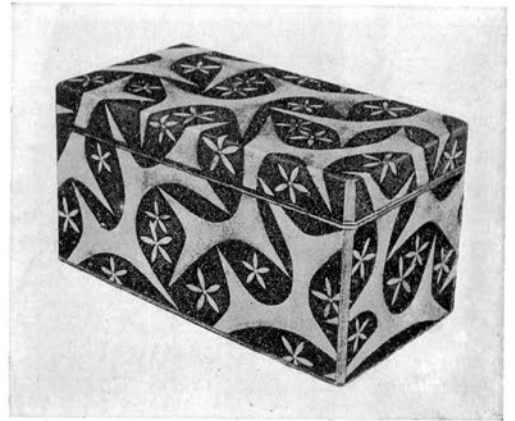
二四 鑄銅月に兎釣香爐(文展) 香取秀眞



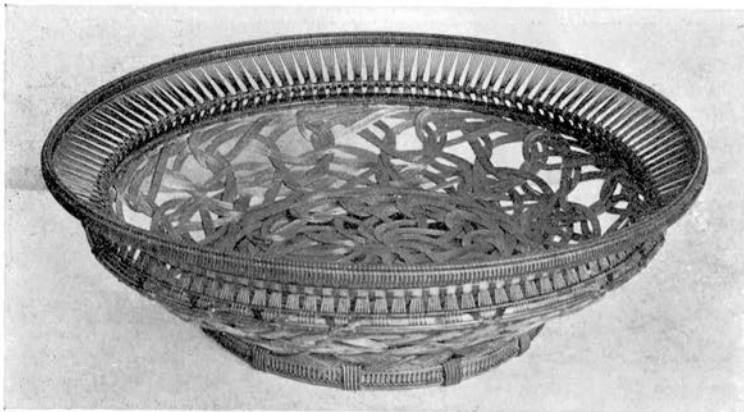
二三 硝子花瓶(文展) 各務敏三



二六 柿榴圖陶花瓶(文展) 近藤悠三



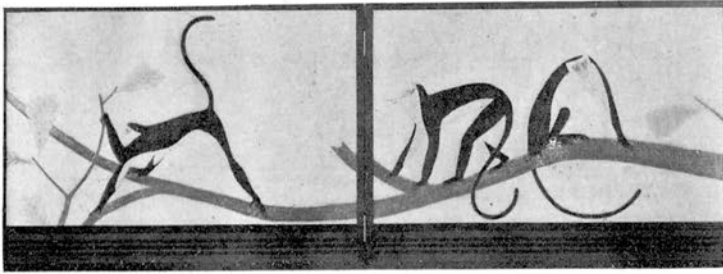
男三田増 (展文) 箱文ちたらか鐵銀 五二



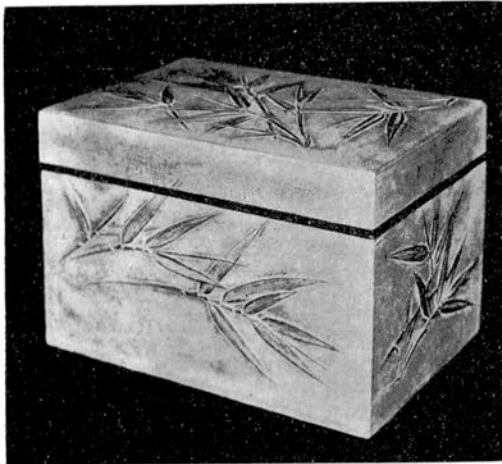
二七 盛籠(文展) 飯塚垣珩齋



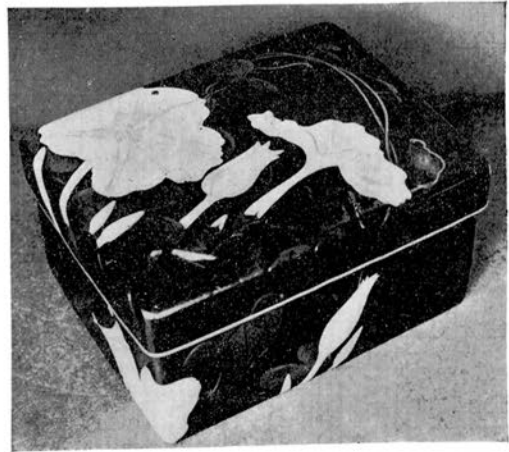
秀芳川介 (展文) 風屏曲二圖の鶯金鱗 八二



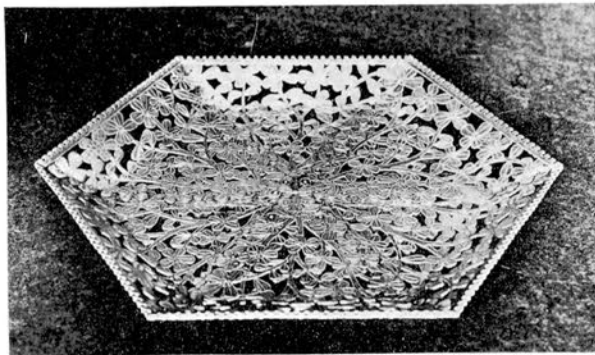
郎太覺崎山 (展文) (猿) 風屏繪蒔 九二



三一 銀竹葉文筥(文展) 鹿島一谷



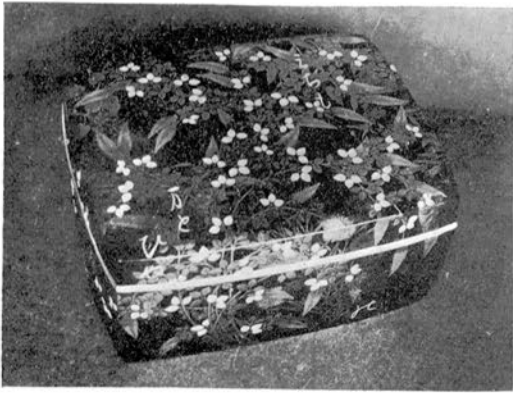
三〇 夕顔蒔繪手筥(文展) 本間舜華



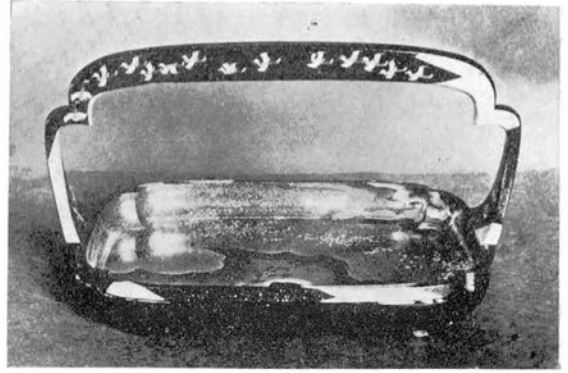
一賞田織 (展文) 器果銀文章野 三三



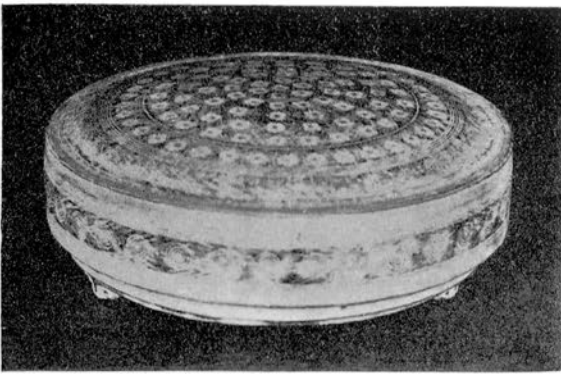
郎太駒形山 (展文) 圖の湖山掛壁染 二三



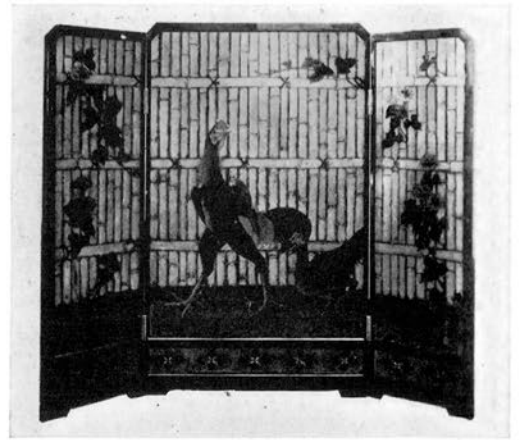
西館平 (展文) 笞手繪蒔繪歌 七三



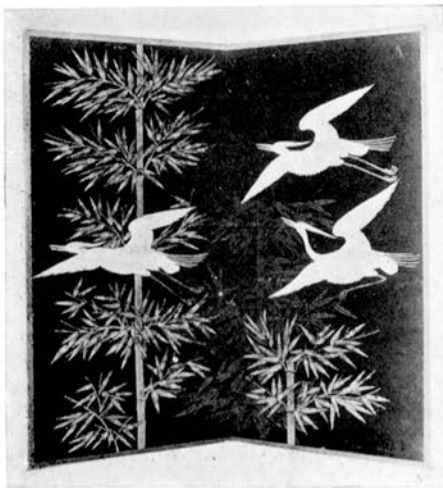
六權田松 (展文) 盤提繪蒔 四三



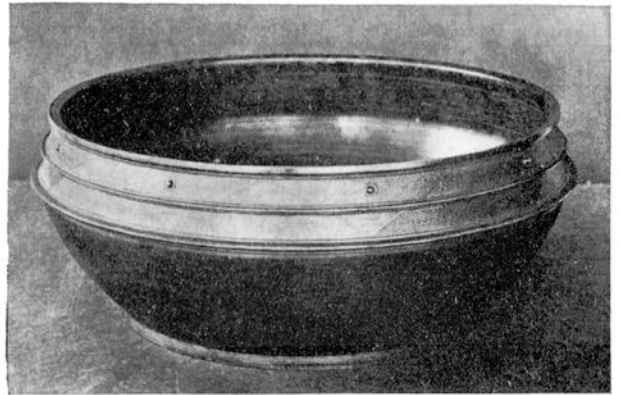
明喜原安 (展文) 子盒器妬 八三



郎十源田吉 (展文) 風屏立衝曲三染 五三



雄武崎川 (展文) 躍飛風屏曲二染和 九三



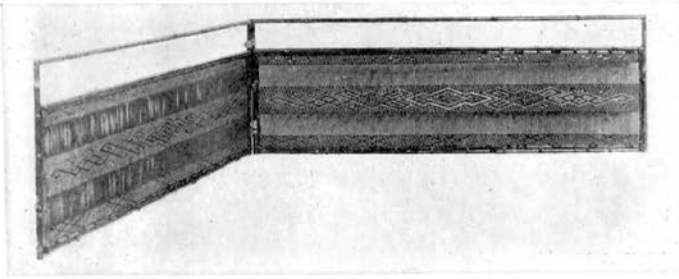
樹直原 (展文) 器花銅鑄 六三



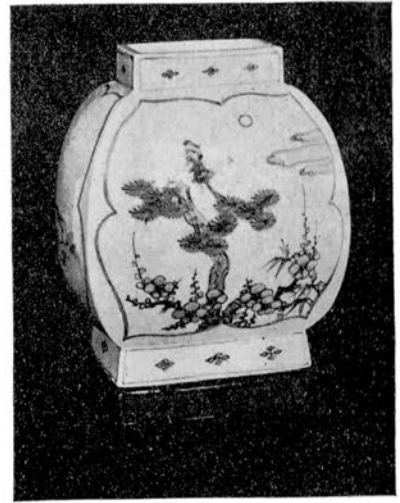
秋勝田豊 (展文) 瓶花銅鑄 三四



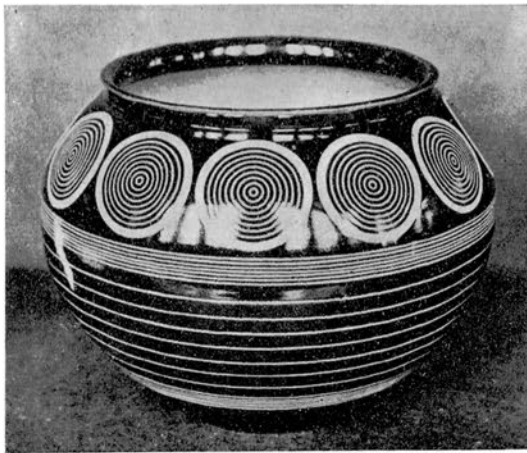
壽本山 (展文) 子童神雷風 〇四



齋玕小塚飯 (展文) 風屏先瀧風編竹 四四



弍彌部精 (展文) 壺扁友三付染 一四



叢原之宮 (展文) 壺文渦狀袖 五四



堂象木々佐 (展文) 物置鳥瑞銀鑄 二四



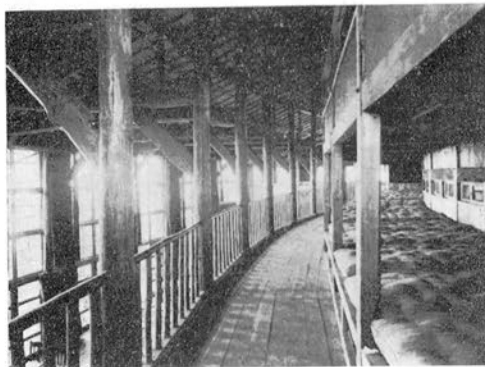
一 日本赤十字社廣島支部正面圖
佐藤功一建築事務所設計
建築世界社寫真



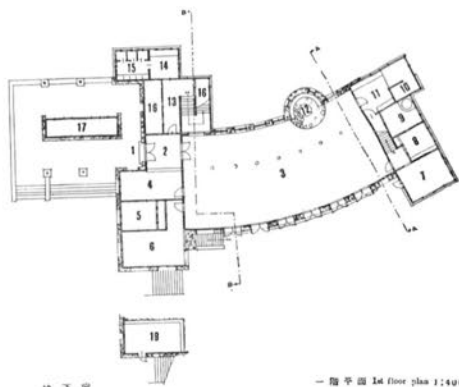
ルーホ大 場道年青山駒生 四



眞宮社築建際國 計設郎一純川石 場道年青山駒生 二



五 生駒山青年道場 Z型ベッド下段

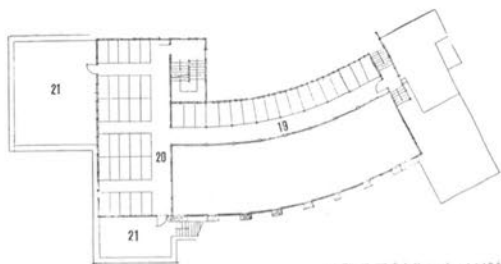


- 1 入口
- 2 玄関
- 3 ホール
- 4 調理室
- 5 調理室
- 6 調理室
- 7 休息室
- 8 浴室
- 9 浴室
- 10 浴室
- 11 浴室
- 12 浴室
- 13 浴室
- 14 浴室
- 15 浴室
- 16 浴室
- 17 浴室
- 18 浴室

地下室

一階平面 1st floor plan 1:400

圖面平階一場道年青山駒生 三

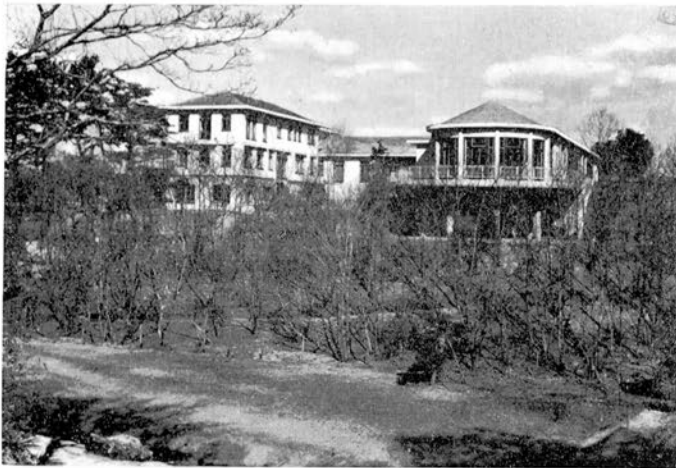


二階平面 2nd floor plan 1:400

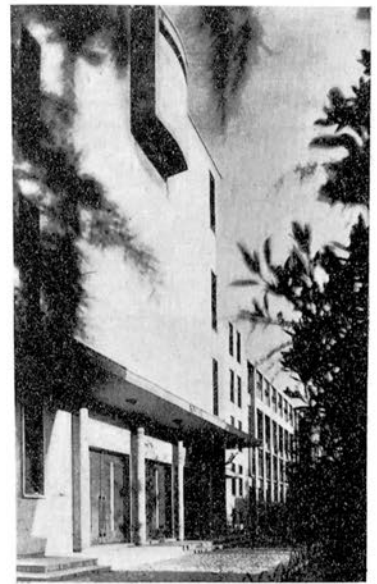
圖面平階二場道年青山駒生 六



眞窩社築建際國 計設郎一賀宇 景全校學中宮上 七



眞窩社築建新 計設助之哲屋守 面西園學星東 九



口人 上同 八



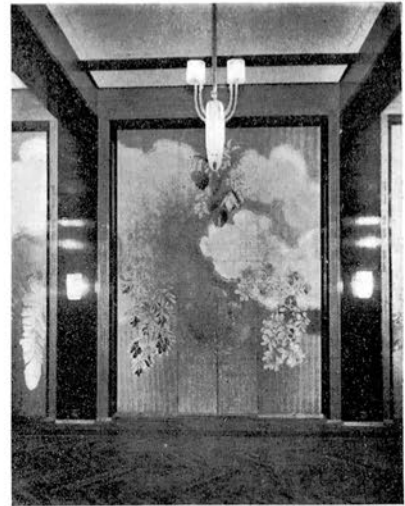
面平階一 上同 一一



面南園學星東 〇一



場會宴大ルテホ都 三一



口入場會宴ルテホ都 二一
眞寫社築建新 計設所務事築建野村



室煙喫ルテホクーバーユニ島松 五一



計設八十五田吉 面正ルテホクーバーユニ島松 四一
眞寫社築建新



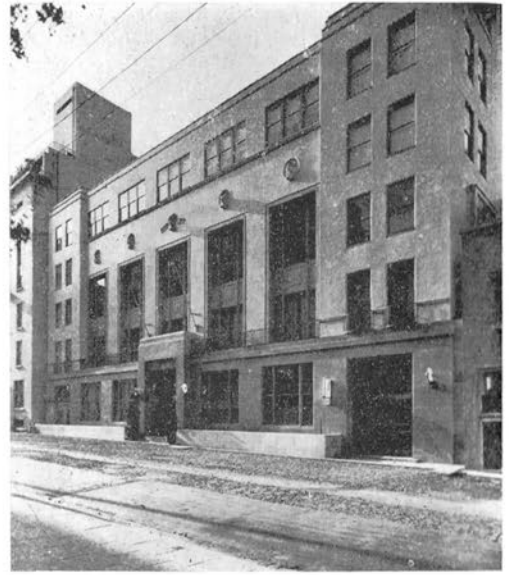
一七 同上 中央ロビー内部



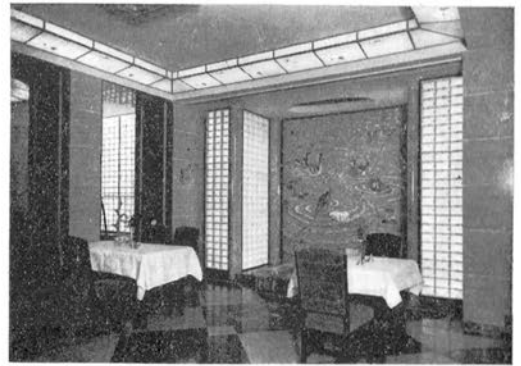
一六 同上 中央ロビー外観



眞寫會協築建際國 計設彥義松平 觀外面正店商置玉 一二



計設節邊渡 面正館會業糖 八一
眞寫社築建新



堂食般一階地 上同 九一



二二 平野屋正面 店主設計 新建築社寫眞



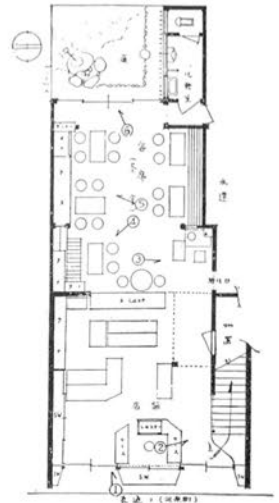
室憩休階地 上同 〇二



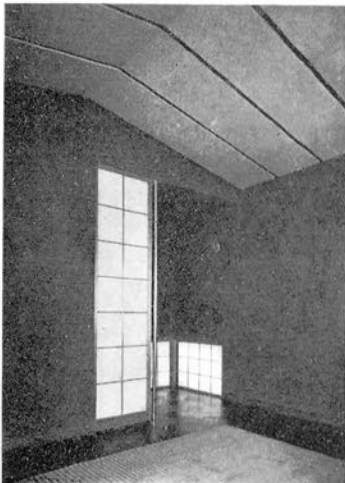
室茶喫上階寮茶の都京 五二



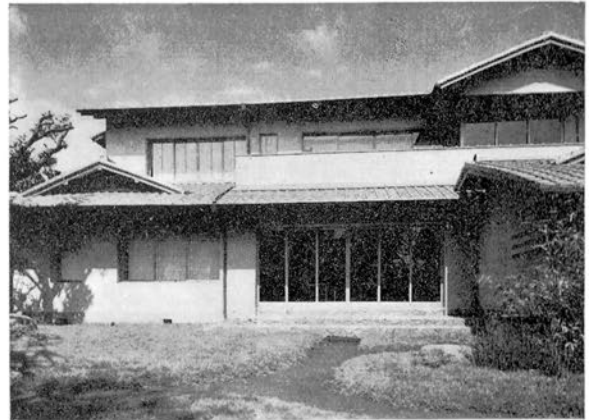
室茶喫下階寮茶の都京 四二
眞寫社築建新 計設郎一總田池



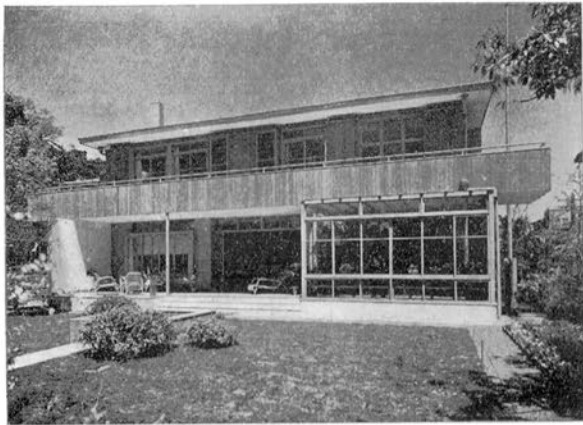
面平階一寮茶の都京 三二



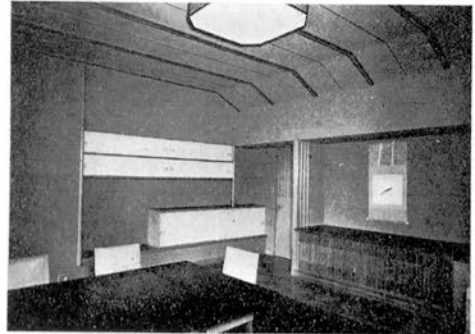
二七 東京M・O邸應接間



眞寫社世界築建 計設八十五田吉 觀外面庭廊O・M京東 六二



計設所務事築建治久喜本石 面南邸本石京東 九二
眞寫社世界築建



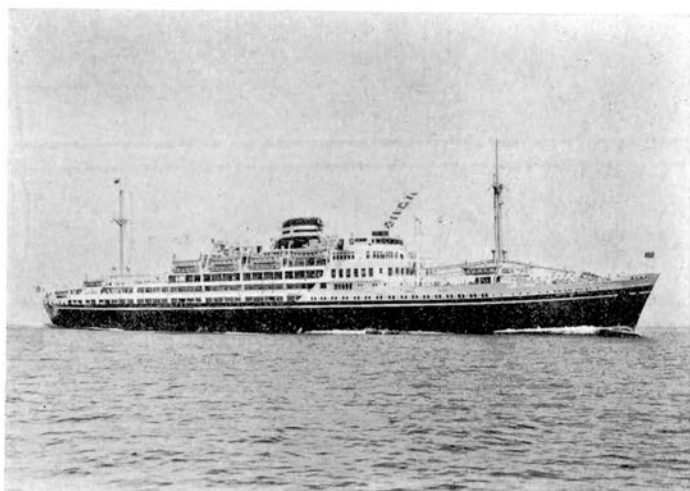
堂食兼間居 上同 八二



設計社會式株木土倉大 面庭邸N村鷹三 一三
眞寫社築建新



設計店務工中竹 銀外側東南邸O海熱 ○三
眞寫社築建新



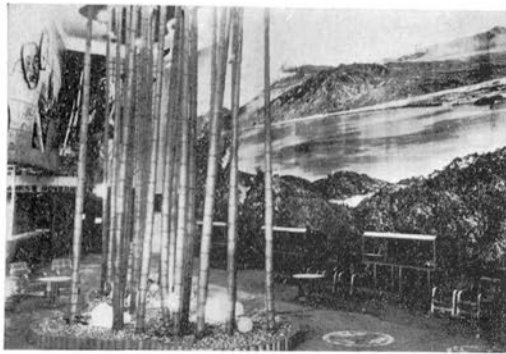
眞寫社築建新施所工船造崎長菱三 観全丸ならんぜるあ 二三



設計吾藤村中 堂食等一上同 四三



設計平順村中 室交社等一上同 三三



三八 同前 内部壁面



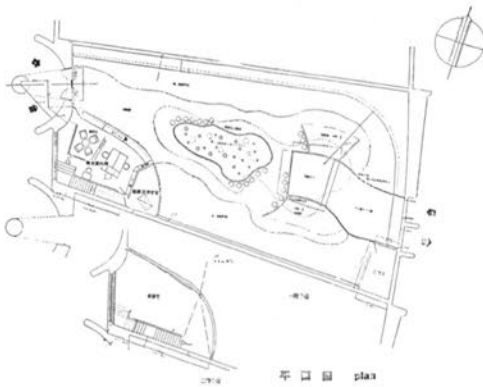
五三 日本電力第二所發電廠堰堤・堰堤村西と
日本電力株式會社土部及田口敷
調整門 國際建築協會寫眞 設計



三九 紐育萬國博日本特設館全景
岸田日出乃原案



三六 紐育萬國博カバード・スペース日本邸 内部
山協設計 新建築社寫眞



四〇 紐育萬國博カバード・スペース
日本邸平面圖 山協設計



三七 同上 正面出入口



四一 桑港金門博日本特設館全景
内田祥三設計



四 姫路城本丸北腰曲輪
ロノ渡櫓ヨリヘノ渡櫓ヲ望ム
(本欄一八七頁参照)



(照參頁七八一欄本) 堂本寺明西 一



五 同上ヘノ渡櫓内部



塔重三上同 二



六 相國寺本堂玄關
(本欄一八七頁参照)



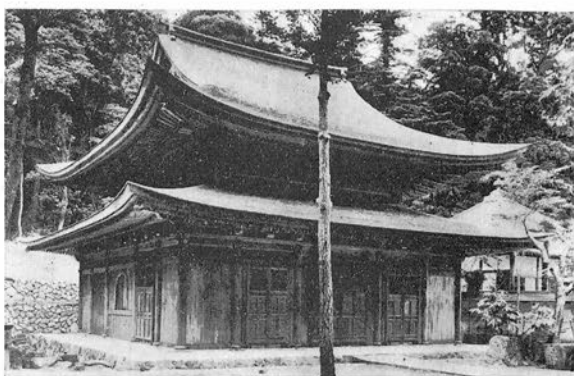
七 高倉神社本殿(本欄一八七頁参照)



(照參頁七八一欄本) 社神像宗 三



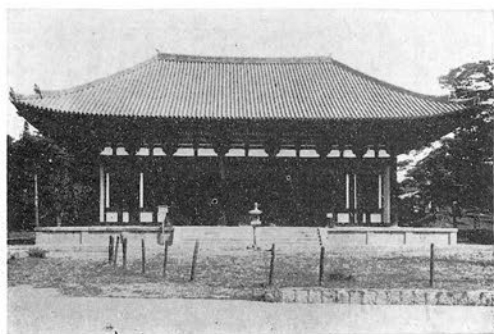
(照參頁八八一欄本) 塔寶多院法傳大 二一



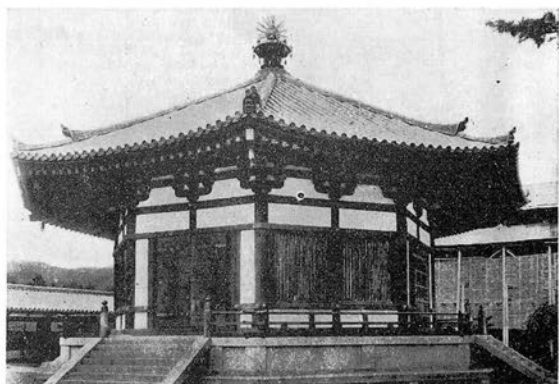
八 定光寺本堂 (本欄一八八頁參照)



九 神明宮 (本欄一八八頁參照)



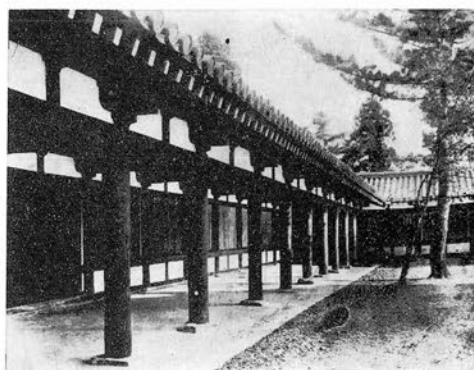
(照參頁九八一欄本) 堂金東寺福興 三一



一〇 法隆寺東院夢殿 (本欄一八八頁參照)



上同 四一



一一 法隆寺東院廻廊



(照參頁九八一欄本) 門樓社神滿天山歌和 八一



(照參頁九八一欄本) 堂經寺成妙 五一



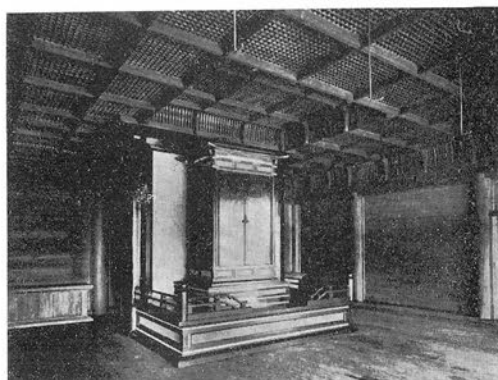
(照參頁九八一欄本) 櫓寅王城前弘 九一



(照參頁九八一欄本) 堂本院門普 六一



門手進上同 〇二



部内上同 七一

二二 唐招提寺禮堂（修理前）
（本欄一九〇頁参照）



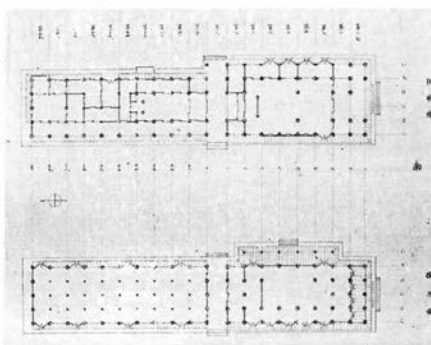
二二 同上工事中發見遺溝の一部



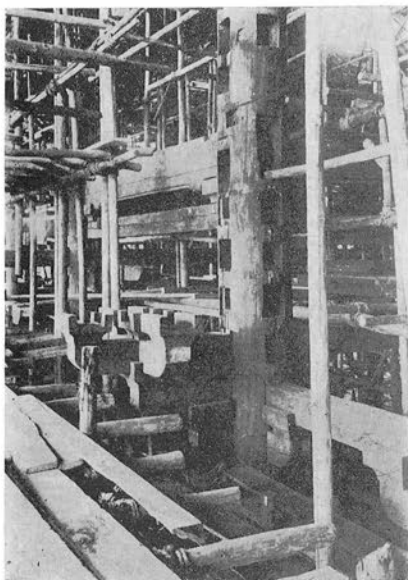
二三 同上工事中發見石白竝に九瓦による排水溝の發掘状態



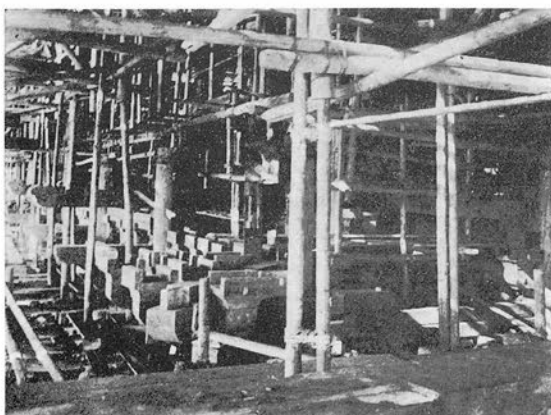
二四 同上平面圖



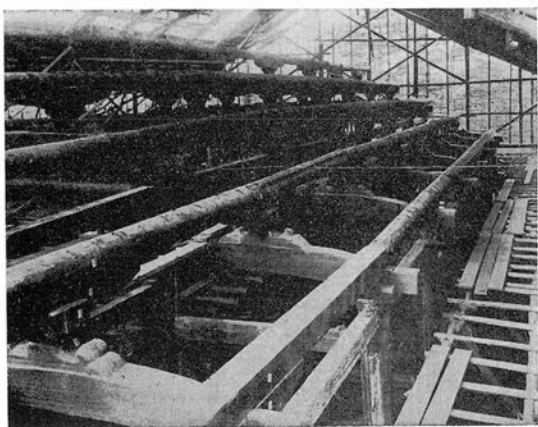
二五 教王護國寺金堂修理中の状況（本欄一九〇頁参照）



同上 六二

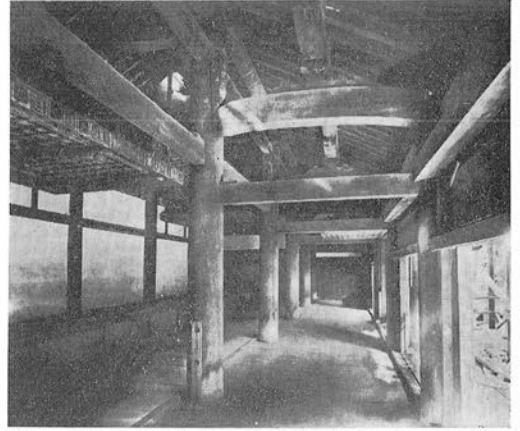


架構の中體解理修堂法傳院東寺隆法 七二
（照參頁一九一欄本）

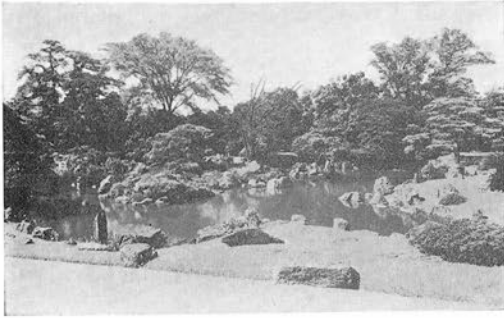




三一 二條城二之丸御殿池の西汀より大廣間式臺遠侍を望む
(本欄一七八頁参照)



(陣外) 部内前同 八二



三二 同上二の丸庭園



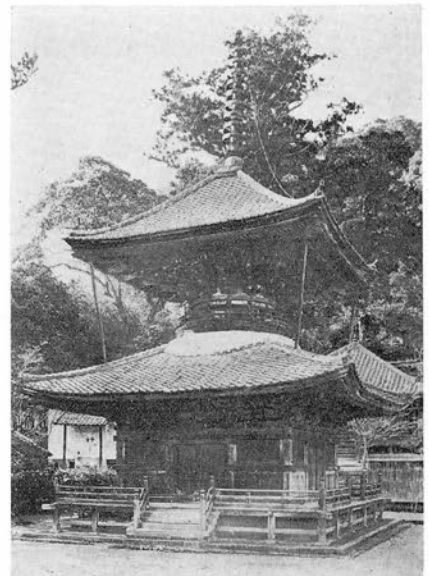
影全面側正上同 九二



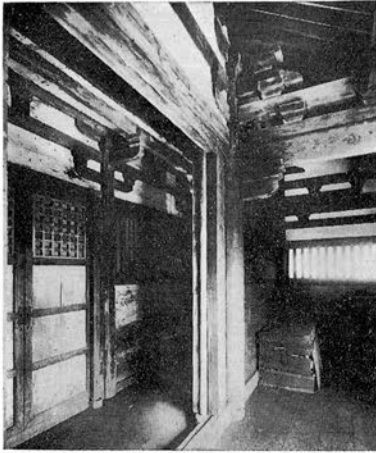
侍遠及寄車丸の二上同 三三



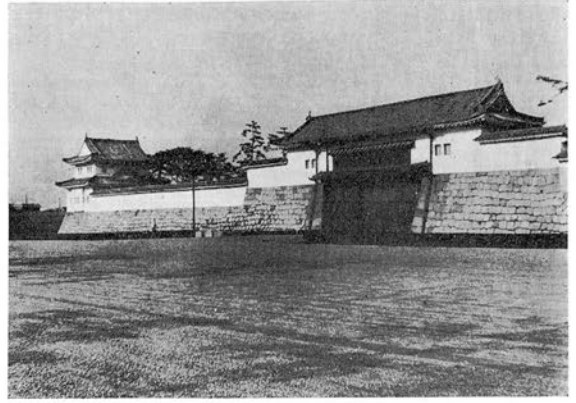
三四 同上本丸御殿



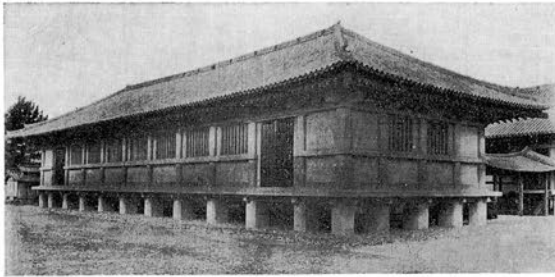
前理修婆塔寺剛金 ○三
(照參頁一九一欄本)



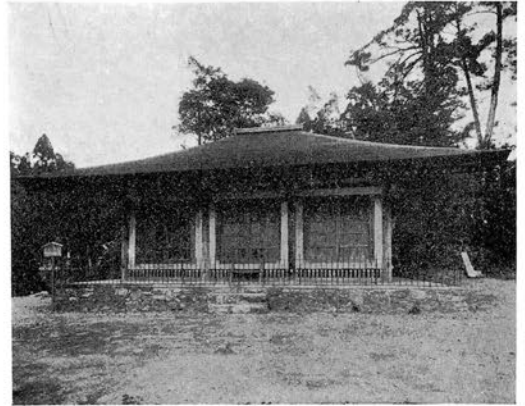
三八 同前内部



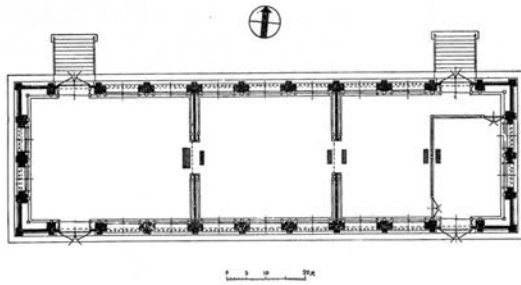
櫓南東と門手大東前同 五三



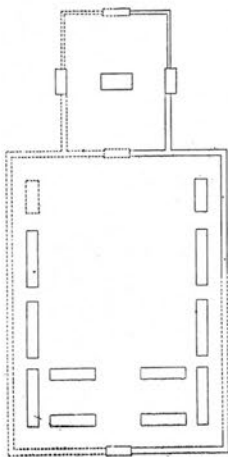
倉南藏寶新寺隆法 九三



(照參頁八七一欄本) 面正藏經寺關隆 六三



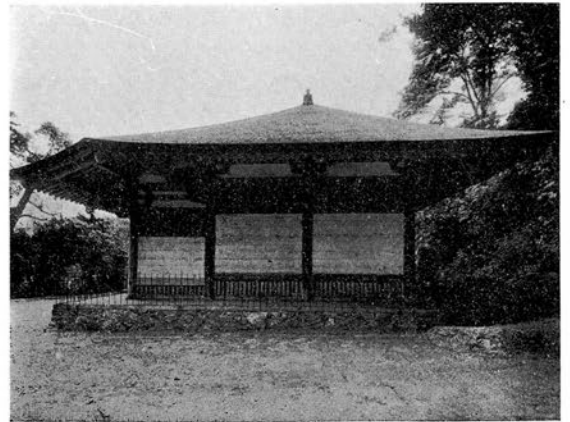
四〇 同上平面圖



發見建築跡見取圖
北方中央の大殿堂は大正院跡との南方の十二棟は十二堂院跡にありは南の門跡
回廊は既述跡である。箇中廊下の部分は遺跡跡又は本殿跡のともである。

四一 藤原宮發見建築跡見取圖

(本欄一七四頁參照)



面側上同 七三



去逝日五十月二年四十和昭 舟英藤加 四



一 彭城貞徳 昭和十四年一月四日逝去



五 萩島安二 昭和十四年三月二十一日逝去



二 佐崎健村 昭和十四年一月九日逝去



六 伊東紅雲 昭和十四年四月二日逝去



去逝日二十月一年四十和昭 夫英田野 三



去逝日七十二月六年四十和昭 妙玄野小 九



去逝日六月四年四十和昭 玉ザーグラ 七



一〇 岡田三郎助 昭和十四年九月二十三日逝去



一一 村上華岳 昭和十四年十一月十一日逝去



八 北村耕造 昭和十四年六月二十七日逝去

附

錄

國寶保存會

國寶保存會官制

昭和四年六月二十九日
勅令第二百一十一號

第一條 國寶保存會ハ文部大臣ノ監督ニ

屬シ其ノ諮問ニ應ジテ國寶保存法第一

條、第五條、第十一條、第十三條及第

十四條ニ規定スル事項其ノ他國寶保存

ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

國寶保存會ハ國寶保存ニ關スル事項ニ

付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 國寶保存會ハ會長一人、副會長

一人及委員三十人以内ヲ以テ之ヲ組織

ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アル

トキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、副會長、委員及臨時委員

ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之

ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議

ヲ文部大臣ニ具申ス

副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルト

キハ其ノ職務ヲ代理ス

會長及副會長共ニ事故アルトキハ文部

大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理

ス

第五條 會長及副會長ハ會議ニ於テ意見

ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 國寶保存會ニ常務委員會ヲ置ク

國寶保存會ノ委任ヲ受ケ其ノ權限ニ屬

スル事項ノ一部ヲ處理ス常務委員會ハ

國寶保存會ノ會長及副會長並ニ國寶保
存會ノ委員ニシテ文部大臣ノ指名シタ
ル者十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第七條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ國寶
保存會ノ要求アルトキハ文部省高等官

其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出
席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第八條 國寶保存會ノ議事ニ關スル規則
ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 國寶保存會ニ幹事ヲ置ク文部大
臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長及副會長ノ指揮ヲ受ケ庶務
ヲ整理ス

第十條 國寶保存會ニ書記ヲ置ク文部大
臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則
本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行
ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）

古社寺保存會規則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會職員

會長 細川 護立
委員 三矢 宮松

侯 福井利吉郎
奥田 誠一

德富猪一郎
田中 豐藏

伊東 忠太
香取秀治郎
山田準次郎

藤懸 靜也
渡部 信

山田 孝雄
瀧 精一

黒板 勝美
神津 伯

藤島亥治郎
武内 義雄

常盤 大定
新納忠之介

阿原 謙藏
士屋 純一

辻 善之助
芝 葛盛

石井 政一
新村 出

古字田 實
原田 淑人

青戸 精一
阪谷良之進

九尾彰三郎

重要美術品等調査委員會

重要美術品等調査委員會規程

昭和八年四月十一日
文部省訓令第九號

第一條 重要美術品等調査委員會ハ文部

大臣ノ監督ニ屬シ重要美術品等ノ保存

ニ關スル法律（以下單ニ法ト稱ス）第

一條ノ規定ニ依ル輸出及移出ノ許否並

ニ法第二條ノ規定ニ依ル認定（以下單

ニ認定ト稱ス）及其ノ取消ニ關スル事
項ヲ調査審議ス

第二條 重要美術品等調査委員會ハ會長
一人及委員二十五人以内ヲ以テ之ヲ組

織ス
特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アル
トキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大
臣之ヲ依屬シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議
ヲ文部大臣ニ具申ス

會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名シ
タル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ
可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ文部省高
等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議

ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第七條 重要美術品等調査委員會ノ議事
ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 重要美術品等調査委員會ニ幹事
若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第九條 重要美術品等調査委員會ニ書記
若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ
従事ス

第十條 文部大臣ニ於テ必要ト認ムルト
キハ會長、委員、臨時委員又ハ其ノ他

ノ者ヲシテ認定及其ノ取消其ノ他重要
美術品等ニ關スル調査ヲ爲サシムルコ
トヲ得

帝室技藝員・帝國藝術院

重要美術品等調査委員會職員

會長 菊池豊三郎
文部次官 伊東 忠太
委員 三矢 宮松
黒板 勝美
辻 善之助
溝口禎次郎
奥田 誠一
原田 淑人
藤懸 静也
神津 伯
香取秀治郎
佐佐木信綱
阪谷良之進

時の我が美術界振興の思召しから制定せられたもので、帝室技藝員には人格藝術共に後進の師表と仰がるべき大家を、特にその爲に選ばれたる委員をして銓衡せしめ任命せられるものである。

(帝室技藝員銓衡委員) 清水澄、大谷正男、瀧精一、侯廣幡忠隆、侯細川護立

帝室技藝員名簿

拜命年月

日本畫 竹内 栖鳳 大正二年十二月
川合 玉堂 同六年六月
横山 大觀 昭和六年六月
橋本 關雪 同九年十二月
安田 靱彦 同
菊池 契月 同
洋畫 藤島 武二 同
和刻 和田 英作 同
彫刻 山崎 朝雲 同
工藝 板谷 波山 同
香取 秀眞 同
清水 龜藏 同

帝國藝術院

帝國藝術院官制

昭和十二年六月二十三日
勅令第二百八十號

第一條 帝國藝術院ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ藝術ノ發達ヲ圖リ文化ノ向上ニ資スルヲ以テ目的トス

第二條 帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要ノ事項ヲ審議ス

帝國藝術院ハ藝術ノ發達ニ資スル爲必要ナル事業ヲ行フコトヲ得

帝國藝術院ハ藝術ニ關スル重要ノ事項ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 文部大臣ハ藝術ニ關スル重要ノ事項ニ付帝國藝術院ニ諮問スルコトヲ得

第四條 帝國藝術院ハ院長一人及會員八十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 院長及會員ハ藝術ニ關シ識見闊

歴卓越スル者ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第六條 院長ハ院務ヲ總理ス
院長及會員ハ勅任官ノ待遇ヲ受ク

第七條 院長ハ院務ヲ總理ス
院長事故アルトキハ文部大臣ノ指名スル會員其ノ職務ヲ代理ス

第八條 帝國藝術院ニ主事ヲ置ク文部部内ノ高等官ノ中ヨリ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

主事ハ院長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第九條 帝國藝術院ニ書記ヲ置ク文部部内ノ判任官ノ中ヨリ文部大臣ノ命ズ書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

帝國美術院官制ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ帝國美術院長又ハ帝國美術院會員タル者別ニ辭令ヲ發セラレザルトキハ夫々帝國藝術院長又ハ帝國藝術院會員ヲ命ゼラレタルモノトス

帝國藝術院職員

院長 清水 澄

(五十音順)

朝倉 文夫

荒木悌二郎(十畝)

有島壬生馬(生馬)

石井 滿吉(柏亭)

板谷 嘉七(波山)

伊東 忠太

井上 通泰

梅原龍三郎

梅若万三郎

多 忠龍

尾上 八郎(柴舟)

香取秀治郎(秀眞)

鍋木 健一(清方)

河井 又平(醉茗)

川合芳三郎(玉堂)

川端昇太郎(龍子)

川村 萬藏(曼舟)

菊池 寛

菊池 完爾(契月)

北村 西翠

清水六兵衛

幸田 成行(露伴)

幸田 延

國分 高胤(青崖)

小杉國太郎(放庵)

小林 茂(古徑)

小室貞次郎(翠雲)

齋藤 茂吉

齋藤 知雄(素巖)

佐藤 清藏

清水 龜藏

高濱 清(虚子)
竹内 恆吉(栖鳳)
建出彌一郎(大夢)
谷崎潤一郎
千葉 胤明
津田 信夫
徳田 末雄(秋聲)
徳富猪一郎(蘇峰)
富本 憲吉
内藤 伸
中澤 弘光
中村 不折
西山卯三郎(翠嶂)
橋本 關一(關雪)
平橋倬太郎(田中)
藤井 浩祐
藤島 武二
豊 時義
寶生朝太郎
前田 廉造(青邨)
松林 篤(桂月)
南 薫造
三宅雄二郎(雪嶺)
武者小路實篤
安井曾太郎
安田新三郎(靱彦)
山崎 朝雲
山下新太郎
結城 貞松(素明)
横山 秀磨(大觀)
和川 英作
和川 三造

主事 文部書記官 本田 弘人
美術振興調査會
美術振興調査會官制
昭和十五年四月十一日
勅令第二百五十九號

第一條 美術振興調査會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ美術振興ノ施設等ニ關スル重要事項ヲ調査審議ス

第二條 美術振興調査會ハ會長一人及委員二十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス
特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ總理ス
會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 美術振興調査會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第六條 美術振興調査會ニ書記ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ
書記ハ會長及幹事ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則
本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

美術振興調査會職員
會長 依辭 細川 護立
委員 審察博物館館長 渡部 信
文部次官 赤間 信義

文部省宗務局長 松尾 長造
美術研究所員 矢代 幸雄
東京帝國大學教授 藤懸 靜也
同 大西 克禮
東京帝國大學助教授 兒島喜久雄
京都帝國大學教授 植田 壽藏
東京美術學校長 芝田 徹心
京城帝國大學教授 田中 豐藏
衆議院議員 大口 喜六
同 川崎 克
清水 澄
杉 榮三郎
子爵 岡部 長景
文部書記官 本田 弘人

文部省美術展覽會
文部省美術展覽會は、明治四十年制定された美術審査委員會官制に基き同年第一回を開催、爾來毎年開催して十二回に及んだが、大正八年同官制を廢止して帝國美術院規程を制定、同年以後帝國美術院美術展覽會を開催し來り昭和九年第十五回に至つた。昭和十年帝國美術院を改組し新に帝國美術院官制を制定、同十一年春第一回帝國美術院展覽會を開催したが繼續されず、同年秋臨時に昭和十一年文部省美術展覽會を開催、同十二年六月帝國美術院を廢止して帝國藝術院官制が公布されるに及び、展覽會は舊の如く文部省の主催として同年第一回展覽會を開催、以後繼續することとなつた。

文部省美術展覽會規則

第一章 總 則
第一條 文部省美術展覽會ハ本規則ノ定ムル所ニ依リ毎年一回之ヲ開催ス會場、會期及事務所ハ其ノ都度之ヲ公告ス

第二條 本會ハ作品ノ種別ニ依リ之ヲ左ノ四部ニ分ツ
第一部 繪畫
第二部 繪畫(油繪、水彩畫、バステル畫、素描、創作版畫等)
第三部 彫塑
第四部 美術工藝

第三條 陳列スベキ作品ハ鑑査ヲ經ベキモノトス
前項ノ規定ニ拘ラズ出品人ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ専門技術ニ依ル作品ニ限リ無鑑査ニテ陳列スルモノトス但シ第四部ニ於ケル綜合製作ニ依ル作品ハ總テ鑑査ヲ經ベキモノトス

一 帝國藝術院會員
二 文部省美術展覽會審査員
三 無鑑査ト認メラレタル者
第四條 本會ハ各部ノ綜合展覽會トシ鑑査作品及無鑑査作品ヲ同時ニ陳列ス
第五條 鑑査、審査及陳列ノ事務ヲ處理スル爲審査員長及審査員ヲ置ク
審査員長ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ
審査員ハ文部大臣之ヲ依屬ス
第六條 鑑査ハ提出セル作品ニ付陳列スベキモノヲ定メ審査ハ陳列品ニ付優秀ナルモノヲ選定ス
第七條 審査員ハ審査員長ノ定ムル所ニ依リ第一部乃至第四部ノ各部ニ分屬ス
審査員長ハ各部ノ審査員主任ヲ任命ス
審査員ハ各部ニ付鑑査及審査ヲ行フ

第二章 出 品
三

美術振興調査會・文部省美術展覽會

文部省美術展覽會

第八條 出品スベキ作品ハ自己ノ製作シタルモノニ限ル

故人ノ製作ニ依ルモノハ其ノ相續人ニ於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第九條 第三部ノ作品ニシテ原型製作者ト實材製作者ト其ノ人ヲ異ニスルトキハ原型製作者ヲ以テ其ノ出品人ト爲ス

第四部ノ作品ニシテ綜合製作ナルトキハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト爲ス但シ代表製作者ノ共同製作者ノ氏名ヲ附記スルコトヲ得

第十條 出品スベキ作品ハ同一人ニ付各部共一點トス

第十一條 形狀表裝等ノ如何ニ拘ラズ同一意匠ニ依レル一箇ノ作品ト認メ得ベキモノハ二箇以上ニ分離セルモノト雖モ之ヲ一點ト看做ス

第十二條 同一意匠ニ依ラザル數箇ノ作品ト雖モ一箇ニ合裝セルモノハ之ヲ一點ト看做ス

第十三條 出品スベキ作品ノ大サハ左ノ各號ニ依ル

一 第一部ハ縱十尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス

二 第二部ハ五十號以内トス

三 第三部ハ制限ナシ

四 第四部ハ立體ニ在リテハ六尺平方以内ノ場所ニ陳列シ得ルモノトシ其ノ他ニ在リテハ縱六尺以内(裝飾設備ヲ含ム)トス

第十四條 作品ノ搬入受付期間ハ毎年展覽會開催ノ都度之ヲ公告ス

第十五條 左ニ掲グルモノハ之ヲ出品スルコトヲ得ズ

一 製作後五年以上ヲ經タルモノ

二 既に帝國美術院美術展覽會及文部省美術展覽會ニ陳列シタルコトアルモノ

三 風教ニ害アリト認ムルモノ

第十六條 鑑査ヲ受クベキ作品ヲ出品セントス

スル者ハ金一圓ノ手数料ヲ納入スベシ既納ノ手数料ハ如何ナル事由アルモ之ヲ還付セズ

第十七條 出品セントスル者ハ所定書式ノ申込書ト共ニ作品ヲ本會事務所ニ提出スベシ故人ノ作品ヲ出品セントスルトキハ申込書中解説書欄ニ製作者ノ氏名及履歷ヲ記入スベシ

作品ニハ命題及出品人氏名ヲ記シタル紙片ヲ裏面ニ貼附スベシ

第十八條 本會事務所ニ於テ作品ヲ受理シタルトキハ直チニ受領證ヲ交付ス

第十九條 受理シタル作品ハ撤回スルコトヲ得ズ但シ審査員長ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第二十條 第一部第二部ノ作品ハ額面ト爲シ梓録ヲ附ス等出品人ニ於テ適當ノ裝飾設備ヲ爲スベシ

第二十一條 出品人ハ陳列品ノ位置、配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十二條 作品ノ荷造及運送費ハ總テ出品人ノ負擔トス但シ遠隔ノ地ニ在ル出品團體ニ對シテハ文部省ヨリ特ニ其ノ費用ノ一部ヲ補助スルコトアルベシ

第二十三條 文部省ハ作品ノ保管ニ關シ充分ノ注意ヲ爲スト雖モ紛失、毀損、其ノ他ノ損害ニ對シ一切責任ニ任ゼズ

第二十四條 作品ノ撮影又ハ模寫ハ出品人ノ承諾ヲ得且文部省ノ許可ヲ受クルニ非ザレバ之ヲ爲スコトヲ得ズ

前項ノ許可ヲ受ケタル者會場ニ於テ作品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲サントスルトキハ許可證ヲ掛員ニ提示シ其ノ指揮ヲ受クベシ

文部省ハ作品ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第三章 鑑査及審査

第二十五條 鑑査及審査ノ方法ハ審査員長及各部ノ審査員ニ於テ之ヲ定ム

鑑査及審査ノ議事ハ之ヲ秘密トス

第二十六條 鑑査ヲ經タル陳列品ハ總テ特選ノ査定ヲ受クルモノトス

第二十七條 鑑査及審査ノ結果ハ審査員主任ヨリ之ヲ審査員長ニ報告スベシ

第二十八條 出品人ハ鑑査及審査ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及搬出

第二十九條 陳列品ハ本會事務所ニ於テ其ノ賣買契約ヲ取扱フモノトス但シ開會後五日間陳列品ノ賣買契約ヲ取扱ハズ

第三十條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ代金ヲ添ヘテ本會事務所ニ申出ヅベシ

第三十一條 即時ニ代金ヲ支拂ハザルトキハ手附ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ得手附ノ金額ハ代價ノ三分ノ一以上トス

前項ノ買主ガ會期中ニ殘餘代金ノ支拂ヲ爲サザルトキハ手附ハ之ヲ拋棄シタルモノト看做ス但シ拋棄シタル手附ハ當該出品人ノ所得トス

第三十二條 第三十條ニ依ル代金及第三十一條第二項ニ依ル手附ハ展覽會終了後拂渡ヲ爲スモノトス

第三十三條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ作品ニ其ノ旨ヲ貼紙ス

第三十四條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價ヲ變更セントスルトキハ本會事務所ニ届出ヅベシ

第三十五條 出品人ニ於テ作品及代金受領等ノ爲特ニ代理人ヲ置キタルトキハ其ノ住所及氏名ヲ本會事務所ニ届出ヅベシ

第三十六條 陳列品ハ展覽會終了後三日以内ニ出品人ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ文部省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十七條 陳列スルコトニ決定シタル作品以外ノモノハ展覽會開會後五日ヲ經過シタル後十日間以内ニ出品人ニ於テ之ヲ搬出スベシ

於テ相當ノ處置ヲ爲スベシ

第三十八條 陳列品中賣約済ノモノハ展覽會終了後買主ニ於テ之ヲ搬出スベシ

前項ノ場合ニ於テ之ヲ代金受領證ヲ提出シ自己ノ買主タルコトヲ證スルヲ要ス

第三十九條 展覽會終了後陳列品ノ搬出運送等ニ關シ買主ノ依頼アルトキハ本會事務所ハ買主ノ費用ヲ以テ之ニ應ズルコトアルベシ

第五章 觀覽

第四十條 觀覽時間ハ開會中毎日午前九時ヨリ午後五時迄トス但シ都合ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ觀覽ヲ停止スルコトアルベシ

第四十一條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ルルコトヲ得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且掛員ノ指揮ニ從フベシ

第四十二條 觀覽人ニシテ秩序風俗ヲ紊ルノ虞アリト認ムルモノハ入場ヲ禁止又ハ退場セシムルコトアルベシ

第三回展覽會審査員 ○印主任

第一部

○西山 翠嶺 伊東 深水 石崎 光瑤

大智 勝觀 常岡 文龜 中村大三郎

野田 九瀨 山口 蓬春 松林 桂月

前田 青邨 案本 一洋 小林 古徑

榊原 紫峰 菊池 契月 森 白甫

第二部

○南 齋造 石川 寅治 太田喜二郎

田邊 至 辻 永 中川 一政

中野 和高 梅原龍三郎 熊岡 美彦

小林 蕙吾 寺内萬治郎 青山 義雄

安宅安五郎 木村 莊八

第三部

○朝倉 文夫 石井 鶴三 羽下 修三

長谷川榮作 小倉右一郎 小笠原貞弘

横江 嘉純 吉田三郎 山崎 朝雲

藤井 浩祐 赤堀 信平 安藤 照

佐藤 清島 佐々木大樹 北村 西望

○香取 秀眞 飯塚珉珩齋 豊田 勝秋

村越 道守 楠部 彌次 山形駒太郎

山崎覺太郎 松田 樞六 佐々木象堂

北原 三佳 木村 雨山 清水正太郎

宮之原 謙 平館 晉 森川 紫山

輸出工藝振興委員會

輸出工藝振興委員會官制

昭和十四年七月十九日
勅令第四百八十七號

第一條 輸出工藝振興委員會ハ商工大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ輸出工藝ノ振興ニ關スル重要事項ヲ調査審議ス

委員會ハ前項ノ事項ニ付關係各大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 委員會ハ會長一人及委員二十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長ハ商工大臣ヲ以テ之ニ充ツ委員及臨時委員ハ商工大臣ノ奏請ニ依リ左ニ掲グル者ノ中ヨリ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

一 關係各廳高等官

二 學識經驗アル者

前項第二號ニ掲グル者ノ中ヨリ命ゼラレタル委員ノ任期ハ二年トス但シ特別ノ事由アル場合ニ於テハ任期中之ヲ解任スルコトヲ妨グズ

第四條 會長ハ會務ヲ總理ス
會長事故アルトキハ商工大臣ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 委員會ニ幹事ヲ置ク商工大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ
幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第六條 委員會ニ書記ヲ置ク商工大臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
工藝審査委員會官制ハ之ヲ廢止ス

輸出工藝振興委員會職員

會長	商工大臣	伍堂 卓雄
委員	外務省通商局長	松島 鹿夫
	商工次官	村瀬 直養
	商工省化學局長	永川彦太郎
	貿易局長	寺尾 進
	貿易局部長	堀 義臣
	工藝指導所技師	國井喜太郎
	國際觀光局長	片岡 諤郎
		永井 松三
		岸田日出刀
		有吉 忠一
		立石 信郎
		團 伊能
		津川 信夫
		矢代 幸雄
		和川 三造
		兒玉 謙次
		飯野 逸平

有島壬生馬 淺間 龍藏 末高興次郎 白井 義三

幹事 商工書記官 奧田 新三 貿易局書記官 齋藤 吉臣

貿易局工藝品輸出振興展覽會

從來開催され來つた商工省工藝展覽會ハ昭和十三年度第二十五回を重ね、又貿易局輸出工藝展覽會ハ第六回まで繼續されたが、本年度より兩者を合併し、新に貿易局工藝品輸出振興展覽會として第一回を開くことになつた。

貿易局工藝品輸出振興展覽會規程

昭和十四年八月二十五日
商工省告示第二百七號

第一章 總則

第一條 工藝品ノ輸出振興ヲ圖ル爲毎年一回貿易局工藝品輸出振興展覽會ヲ開ク
前項ノ展覽會ノ會期、會場其ノ他ノ事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第二條 出品物ハ工藝品ニシテ自己ノ製造若ハ加工シタルモノ又ハ自己ノ爲製造若ハ加工セシモノニ限ル

第三條 出品物ハ鑑定ニ合格シタルモノニ限リ之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノニ付テハ鑑定ヲ行ハズシテ之ヲ陳列ス

一 工藝ニ關スル官公立ノ指導又ハ研究ノ機關(學校ヲ除ク)ノ出品ニ係ルモノ
二 審査委員又ハ本會、工藝展覽會若ハ貿易局輸出工藝展覽會ノ審査委員タリシ者ノ出品ニ係ルモノ
三 本會ニ於テ商工大臣實ヲ授與セラレタ

ルコトアル者ノ出品ニシテ當該審査ヲ授與セラレタル出品ト同種ノモノ

四 貿易局輸出工藝圖案展覽會ニ於テ一等賞、二等賞又ハ三等賞ヲ授與セラレタル圖案ヲ試作シタルモノ

第四條 出品物ノ搬入及搬出ニ要スル費用ハ總テ出品人ノ負擔トス

第五條 出品物ノ亡失、毀損、汚染其ノ他ノ損害ニ對シテハ別ニ定ムルモノノ外ハ其ノ責ニ任ゼズ

第六條 出品人ノ承諾及貿易局ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ出品物ヲ撮影又ハ摸寫スルコトヲ得ズ
貿易局ハ出品物ヲ撮影若ハ摸寫シ又ハ之ヲ刊行スルコトアルベシ

第二章 出品

第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ出品スルコトヲ得ズ
一 本會、工藝展覽會、貿易局輸出工藝展覽會、其ノ他博覽會、共進會又ハ展覽會(本會ニ對シ出品ヲ豫選スル爲各地方ニ於テ開ク展覽會ヲ除ク)ニ陳列セラレタルコトアルモノ

二 風教ヲ害スル虞アルモノ
第八條 出品モントスル者ハ附屬様式ノ出品申込書ヲ貿易局ニ差出スベシ
出品申込書ノ差出期間及出品物ノ受理期間ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第九條 出品物ヲ受理シタルトキハ出品物受領證ヲ交付ス

第十條 鑑定ニ不合格ノ通知アリタルトキハ出品人ハ遲滞ナク其ノ出品物ヲ搬出スベシ通知ヲ發シタル日ヨリ十日ヲ經ルモ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第十一條 出品人ハ出品物ノ陳列ノ位置配列等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第十二條 陳列品ハ會期中之ヲ搬出スルコトヲ得ズ

第三章 鑑査及審査

第十三條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クベキモノトス但シ第三條各款ノ一ニ該當スルモノニ付テハ審査ヲ行ハズ

第十四條 鑑査及審査ハ商工大臣ノ任命又ハ囑託スル審査委員之ヲ行フ

第十五條 商工大臣ハ審査委員中ヨリ審査委員長一人ヲ命ズ

第十六條 審査委員長ハ鑑査及審査ノ事務ヲ統理シ其ノ成績ヲ貿易局長官ヲ經由シ商工大臣ニ報告ス

第十七條 出品物鑑査ノ結果ハ之ヲ出品人ニ通知ス

第十八條 鑑査又ハ審査ニ對シテハ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第十九條 審査ハ左ノ四等級トス

一等賞

二等賞

三等賞

褒狀

第二十條 第十八條ノ規定ニ依リ褒賞ヲ受ケタル者ニ對シ褒賞ノ外賞金ヲ授與スルコトアルベシ

第二十一條 前項ノ賞金ニ關シテハ其ノ都度之ヲ告示ス

第二十二條 受賞ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ

第五章 外國ニ於ケル陳列會

第二十三條 商工大臣ハ審査委員ニ諮リ陳列品ノ一部ヲ選定シ政府又ハ其ノ指定スル團體方外國ニ於テ開催シ又ハ參加スル陳列會展覽會又ハ博覽會ニ本會會期終了後出品人ヲシテ出陳セシムルモノトス

第二十四條 出品人ハ前條ノ出陳ヲ拒ムコトヲ得ズ

第二十五條 第二十三條ニ依リ選定セラレタル陳列品ハ本會會期終了後政府ニ於テ之ヲ保管スル場合ノ外政府ノ指定スル團體ニ之ヲ引渡スモノトス

第二十六條 第二十三條ノ陳列會展覽會又ハ博覽會ノ名稱、開催地其ノ他陳列會、展覽會又ハ博覽會ニ關シ必要ナル事項ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第二十七條 陳列品ハ非賣品及第二十三條ニ依リ選定セラレタルモノノ外購買ノ申込ニ應ズルモノトス

第二十八條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ其ノ旨ヲ本會ニ申出デ代金又ハ手附金ヲ支拂フベシ

第二十九條 出品人又ハ買主ハ陳列品ヲ本會ノ閉會後指定ノ期間内ニ搬出スベシ

第三十條 前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第三十一條 出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

第三十二條 前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第三十三條 出品人又ハ買主ハ陳列品ヲ本會ノ閉會後指定ノ期間内ニ搬出スベシ

第三十四條 前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第三十五條 出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

第三十六條 前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第三十七條 出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

第三十八條 前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第三十九條 出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

第四十條 前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第四十一條 出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

第四十二條 前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ

第四十三條 出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルトキハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出スベシ

イ 東京會場 東京市日本橋區通二丁目 株式會社高島屋東京支店內 自六月二十日 至六月二十七日(八日間)

ロ 大阪會場 大阪市中ノ島公園 大阪市中公會堂内 自七月十日 至七月十六日(中央日間)

ハ 京都會場 京都市岡崎公園 大禮記念京都美術館内 自七月二十六日 至八月一日(七日間)

ニ 名古屋會場 名古屋西區御幸本町通愛知縣工館内 自八月十三日 至八月十九日(七日間)

三 省略

四 出品物ノ種類

イ 陶磁器及硝子製品

ロ 漆器

ハ 金屬製品

ニ 染織物及其ノ製品(刺繍、編組物ヲ含ム)

ホ 木竹製品及其ノ他ノ工藝品

五 貿易局工藝品輸出振興展覽會規程第二十条ノ規定ニ依リ賞金ノ金額左ノ如シ

一等賞 參百圓 五人

二等賞 百圓 十人

三等賞 五十圓 十五人

六 出品人ハ出品物ノ種類毎ニ別紙ニ認メタル出品申込書ヲ五月十日ヨリ五月二十八日迄ニ貿易局第一施設課ニ差出スベシ

七 出品物受領期間ハ六月三日ヨリ六月六日迄トス

八 出品物ハ右期間内毎日午前九時ヨリ午後四時迄ニ東京市芝區海岸通一丁目東京府立工業獎勵館内本會事務所ニ搬入スベシ

九 出品申込書ヲ提出ナキ搬入物、驛留荷物及消費稅未納織物ハ之ヲ受理セズ

十 出品物及出品人ノ會場ヘノ往復ニ對シテハ官設鐵道ニ於テ運賃割引ノ特典アルヲ以テ必要ノ向ハ貿易局ニ對シ割引證ノ交付ヲ請求スベシ

十一 各會場ニ於ケル初日ハ招待日トス

十二 陳列品ノ購買申込ハ六月二十日ヨリ受付ケ賣約ハ申込順ニ依ル

十三 大阪會場、京都會場及名古屋會場ニ於テ展示スル爲移送スル場合ニ於テハ左ノ條件ニ依ルモノトス

イ 移送ノ荷造費及運搬費ハ貿易局之ヲ負擔ス

ロ 移送ノ爲生ジタル損害ニ付テハ貿易局之ヲ賠償ノ責ニ任ゼズ但シ事情酌量スベキモノアリト認メタル場合ニ於テハ貿易局ニ於テ相當ト認ムル程度ノ賠償ヲ爲スコトアルベシ

十四 出品物又ハ賣約品ハ會期終了後左ノ條件ニ依リ之ヲ發送シ又ハ直接引渡スモノトス

イ 發送スル場合ニ於テハ荷造費及運搬費ハ出品人又ハ買主ノ負擔トス

ロ 直接引取ヲ希望スル場合ニ於テハ東京又ハ名古屋ノ別ノ出品申込書又ハ購買申込書ニ記載スルモノトス

十五 貿易局工藝品輸出振興展覽會規程第二十三條ノ規定ニ依リ選定セラレタル陳列品ハ日本輸出工藝聯合會方海外ニ於テ開催スル日本工藝品陳列會ニ左ノ條件ニ依リ出陳セシムルモノトス

イ 移送ノ荷造費、運搬費其ノ他ノ經費ハ日本輸出工藝聯合會之ヲ負擔ス

ロ 出品物ノ亡失其ノ他ノ損害ニ付テハ日

一 會期 自 昭和十五年六月二十日 至 同 年八月十九日

二 會場及展期期間

三 會期 自 昭和十五年六月二十日 至 同 年八月十九日

四 會期 自 昭和十五年六月二十日 至 同 年八月十九日

五 會期 自 昭和十五年六月二十日 至 同 年八月十九日

六 會期 自 昭和十五年六月二十日 至 同 年八月十九日

七 會期 自 昭和十五年六月二十日 至 同 年八月十九日

本輸出工藝聯合會之方賠償ノ責ニ任ズ
ハ 出品物ハ購買ノ申込ニ應ズルモノトシ
購買申込ハ日本輸出工藝聯合會ニ於テ之ヲ
取扱フモノトス
陳列會終了後出陳物又ハ其ノ賣却代金ハ東
京ニ於テ出品人ニ發送シ又ハ直接引渡スモ
ノトス
發送スル場合ニ於テハ爲替料金、荷造費及
運搬費ハ出品人ノ負擔トス

第二回同展覽會審査員

〔委員長〕貿易局長官小島新一〔委員〕藤
島亥治郎、霜島正三郎、豊川勝秋、津川
信夫、六角注多良、清水龜藏、和田三造
廣川松五郎、山崎覺太郎、秋月透、國井
喜太郎、板谷嘉七、長島喜三、磯井雪枝
飯野逸平、岡田友次、河井寛次郎、川勝
堅一、各務鐵三、龍村平藏、坂倉準三

貿易局輸出工藝圖案展覽會

貿易局輸出工藝圖案展覽會規程

昭和十四年四月
商工省告示第八十二號

第一章 總則

第一條 輸出工藝圖案ノ改善進歩ヲ圖ル爲
毎年一回貿易局輸出工藝圖案展覽會ヲ開ク
前項ノ展覽會ノ會期會場其他ノ事項ハ其ノ
都度之ヲ告示ス

第二條 出品物ハ輸出工藝圖案ニシテ自己
ノ考案シタルモノ又ハ自己ノ爲考案セシメ
タルモノニ限ル

第三條 出品物ハ鑑定ニ合格シタルモノニ限
リ之ヲ陳列ス但シ左ノ各號ノ一ニ該當スル
モノニ付テハ鑑定ヲ行ハズシテ之ヲ陳列ス
一 工藝ニ關スル官立ノ指導又ハ研究機關
(學校ヲ除ク)ノ出品ニ係ルモノ

貿易局輸出工藝圖案展覽會

二 審査委員又ハ審査委員タリシ者ノ出品
ニ係ルモノ
第四條 出品物ノ搬入及搬出ニ要スル費用ハ
總テ出品人ノ負擔トス
第五條 出品物ノ亡失、毀損、汚染其ノ他ノ
損害ニ對シテハ其ノ責ニ任ゼズ
第六條 出品人ノ承諾及貿易局長官ノ許可ヲ
得ルニ非ザレバ出品物ヲ撮影又ハ模寫スル
コトヲ得ズ
貿易局ハ出品物ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之ヲ
刊行スルコトアルベシ

第二章 出品

第七條 左ノ各號ノ一ニ該當スルモノハ出品
スルコトヲ得ズ
一 本會其ノ他博覽會、共進會又ハ展覽會
ニ陳列セラレタルコトアルモノ(但シ本會
ニ對スル出品ヲ豫選スル爲各地方ニ於テ開
ク展覽會、品評會ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ)
二 風教ヲ害スル虞アルモノ
第八條 出品セントスル者ハ附屬様式ノ出品
申込書ヲ貿易局ニ差出スベシ
出品申込書ノ差出期間及出品物ノ受理期間
ハ其ノ都度之ヲ告示ス

第九條 出品物ヲ受理シタルトキハ出品物受
領證ヲ交付ス

第十條 鑑定不合格ノ通知アリタルトキハ出
品人ハ遲滞ナク其ノ出品物ヲ搬出スベシ通
知ヲ發シタル日ヨリ十日ヲ經ルモ搬出セザ
ルトキハ貿易局ニ於テ適宜之ヲ處分スルコ
トアルベシ

第十一條 出品人ハ出品物ノ陳列ノ位置配列
等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ
第十二條 陳列品ハ開會中ニ於テ搬出スルコト
ヲ得ズ

第三章 鑑定及審査

第十三條 陳列品ハ總テ審査ヲ受クベキモノ
トス但シ第三條各號ノ一ニ該當スルモノニ
付テハ審査ヲ行ハズ
第十四條 鑑定及審査ハ商工大臣ノ任命又ハ

囑託スル審査委員之ヲ行フ
第十五條 商工大臣ハ審査委員中ヨリ審査委
員長一名ヲ命ズ
審査委員長ハ鑑定及審査ノ事務ヲ統理シ其
ノ成績ヲ貿易局長官ヲ經由シ商工大臣ニ報
告ス

第十六條 出品物鑑定ノ結果ハ之ヲ出品人ニ
通知ス
第十七條 鑑定又ハ審査ニ對シテハ異議ヲ申
立ツルコトヲ得ズ

第十八條 審査ノ結果優等ト認メタル出品物
ノ考案者ニ對シ褒賞ヲ授與ス
前項ノ考案者ガ出品人ニ非ザル場合ニ於テ
ハ其ノ出品人ニ協贊賞ヲ授與ス

第十九條 褒賞ハ左ノ四等級トス
一 等賞
二 等賞
三 等賞
四 等賞

第二十條 第十八條第一項ノ規定ニ依リ褒賞
ヲ受ケタル者ニ對シ褒賞ノ外賞金ヲ授與ス
ルコトアルベシ

第二十一條 第十八條第一項ノ規定ニ依リ褒
賞ヲ受ケタル者ノ中特ニ優等ト認メタル出
品物ノ考案者一人ニ對シ褒賞又ハ賞金ノ外
商工大臣賞ヲ授與スルコトアルベシ

第二十二條 受賞ハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ
第二十三條 第十八條第一項ノ規定ニヨリ一
等賞、二等賞又ハ三等賞ヲ授與セラレタル
者ハ當該圖案ヲ試作シ之ヲ貿易局長官ノ指
定スル展覽會ニ出品スベシ

前項ノ考案者ニシテ前項ノ出品ヲ爲サザル
モノハ貿易局長官ニ其ノ指定スル期日迄ニ
事由ヲ具シ其ノ旨届出ツベシ

第二十四條 前條ノ場合ニ於テ考案者出品ヲ
爲サザルモノト認メタルトキハ貿易局ハ其
ノ指定スル者ニ當該圖案ヲ試作セシメ之ヲ

展覽會ニ出品セシムルコトアルベシ
前項ノ場合ニ於テハ考案者又ハ出品人ハ異
議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十五條 第二十三條及前條第一項ニ於テ
考案者タルハ考案者出品人ニ非ザル場合
ニ於テハ之ヲ當該圖案ノ出品人トス

第二十六條 陳列品ハ非賞品及第十八條ノ規
定ニ依リ受賞(一 等賞、二 等賞又ハ三 等賞
ニ限ル)ニ係ルモノノ外購買ノ申込ニ應ズ
ルモノトス

陳列品ノ購買申込ハ本會ニ於テ之ヲ取扱フ
第二十七條 陳列品ヲ購買セントスル者ハ其
ノ旨ヲ本會ニ申出デ代金又ハ手附金ヲ支拂
フベシ
前項ノ手附金ハ代價ノ三分ノ一以上トス
手附金ヲ納付シタル買主本會ノ閉會後十五
日以内ニ殘額代金ヲ支拂ハザルトキハ手附
金ハ之ヲ拋棄シタルモノト看做シ當該賣主
ノ所得トス

第二十八條 出品人又ハ買主ハ陳列品ヲ本會
ノ閉會後指定ノ期間内ニ搬出スベシ
前項ノ期間内ニ搬出セザルトキハ貿易局ニ
於テ適宜之ヲ處分スルコトアルベシ
出品人又ハ買主陳列品ヲ搬出セントスルト
キハ出品物受領證又ハ代金領收證ヲ差出す
ベシ

(附屬様式)以下省略
第二回貿易局輸出工藝圖案展覽會ノ
會期、會場、出品申込期間、賞金等
ニ關スル告示

昭和十五年七月商工省
告示第三百三十六號

一 會期 自昭和十五年十月一日
至同 年十一月十三日

二 會場及展示期間
イ 東京會場 東京市日本橋區通二丁目
株式會社高島屋東京支店內

貿易局輸出工藝圖案展覽會・美術研究所

- 自 十月一日
- 至 十月六日(六日間)
- 大阪會場 大阪市東區内本町橋詰町
- 大阪府立貿易館内
- 自 十月十六日
- 至 十月二十日(五日間)
- 京都會場 京都市岡崎公園 京都市勤業館内
- 自 十月二十六日
- 至 十月三十日(五日間)
- 名古屋會場 名古屋市西區御幸本町通
- 愛知縣商工館内
- 自 十一月九日
- 至 十一月十三日(五日間)

年九月十三日迄ニ貿易局第一部施設課ニ差出スベシ

七 出品物ノ受理期間ハ昭和十五年九月十六日ヨリ同年九月十八日迄トス

出品物ヲ搬入セントスル者ハ前項ノ期間内毎日午前九時ヨリ午後四時迄ニ東京市赤坂區溜池町一番地三會堂内本會事務所ニ搬入スベシ

出品申込書ノ差出ナキ搬入物、驛留荷物又ハ送料未納ノモノハ之ヲ受理セズ

八 出品物ニ對スル諸注意

イ 出品物ハ畫用紙又ハ強靱ナル紙ヲ使用シ其ノ大サハ日本標準規格A列零番(22x118mm)トシ額縁、表裝等ヲ要セズ但シ用紙ハA列零番ノ代リトシテ畫用紙菊判又ハ畫用紙全紙ヲ夫々使用スルモ妨ゲナシ

ロ 圖案ハ原寸又ハ適當ノ縮尺ヲ用ヒ描法及著色ハ自由トス

ハ 用材、仕上、加工法其ノ他ニ特記スベキ必要アルモノハ説明書其ノ他ヲ添附スル

コト

ニ 出品物ハ考案者一人ニ付五點以内トシ詳細圖ハ一點ニ付成ルベク五枚以内トス

ホ 圖案ハ正面圖、平面圖及見取圖ヲ要ス

ヘ 雛型、模型又ハ立體圖案ハ之ヲ受理セ

ズ 出品人ハ出品番號並ニ住所及氏名ヲ圖案ノ裏面ニ記載スベシ

九 出品人又ハ考案者ノ會場ヘノ往復ニ對シテハ官設鐵道ニ於テ運賃割引ノ特典アルヲ以テ必要ノ向ハ貿易局第一部施設課ニ對シ割引證ノ交付ヲ請求スベシ

一、現代美術に關する調査研究

現代美術及美術界に關する調査、日本美術年鑑の編纂

一、其他美術行政及教育並に美術の技法及材料に關する調査研究

一、刊行物頒布

「美術研究」月刊、「日本美術年鑑」日本美術資料」毎年一回刊行、其の他臨時「美術研究資料」、「研究報告」を刊行頒布する。

一、研究資料閲覧及展觀

研究者の爲に當所蒐集の圖書、寫眞、其の他の研究資料の閲覧を許可する、又隨時陳列室に於て特殊なる資料を展觀して一般に觀覽せしめる

一、黒田清輝作品陳列

所内に黒田子爵記念室を設け、其の作品を陳列して定時(毎週木曜日午後)に公開する。

〔所長〕矢代幸雄〔所員〕矢代幸雄、和田新、正木篤三〔助手〕中川千咲、豐岡益人、倉田平吉〔書記〕木下龍也〔囑託〕田中喜作、菅沼貞三、大給近清、丸尾彰三郎、富永愷一、堀井三友、田中豐藏、中根勝、岩淵幸左衛門、望月信成、渡邊一、隈元謙次郎、福井利吉郎、兒島喜久雄、山田智三郎、梅津次郎、小高根太郎、須賀利雄、筒崎謙齋、白畑よし、林貞彦、吉川逸治

美術研究所官制

昭和十年六月一日勅令第四百四十八號

改正昭和十二年勅令第二百八十一號

- 一 等賞 二千圓 一人
- 二 等賞 千圓 二人
- 三 等賞 三百圓 五人
- 優 狀 百圓 十人
- 一等賞ニ該當スベキ受賞者無キ場合ハ其ノ賞金ヲ二等賞ニ充當スルコトアルベシ
- 出品人ハ出品物ノ種類毎ニ別紙ニ認メタル出品申込書ヲ昭和十五年九月三日ヨリ同

豐成、木下勝次郎、日野厚、芹澤銈介

美術研究所

東京市下谷區上野公園

電下谷三四八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基きその遺産を以て開始されたもので、昭和五年開設の準備成ると共に同子爵遺言執行人より建物、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、同年六月政府は之を帝國美術院附屬として設置した。昭和十年六月帝國美術院改革に伴ひ新に美術研究所官制を制定、文部省所管、帝國美術院に附置され、次で昭和十二年六月官制改正を見、文部大臣直接監督の下に獨立して既定の事業を進めることとなつた。その目的は美術に關する事項の學術的調査研究に在り、傍ら美術に關する研究資料を蒐集して美術圖書館的な貢獻をなさんとし、又調査研究の結果を出版、展觀、講演等に依つて發表せんとするものである。現在著手しつゝある事業は大略次の如くである。

一、研究資料蒐集

美術品の寫眞其の他の複製、寫真模造等の標本、圖書雜誌其の他の資料

一、古美術に關する調査研究

東洋及日本美術に關する美術史的調査研究、東洋美術總目錄、落款印譜、東洋美術家辭典、美術關係史料、美術關係文獻目錄等の編纂

一、明治大正時代美術の調査研究

明治大正美術史の編纂

一、現代美術に關する調査研究

現代美術及美術界に關する調査、日本美術年鑑の編纂

一、其他美術行政及教育並に美術の技法及材料に關する調査研究

一、刊行物頒布

「美術研究」月刊、「日本美術年鑑」日本美術資料」毎年一回刊行、其の他臨時「美術研究資料」、「研究報告」を刊行頒布する。

一、研究資料閲覧及展觀

研究者の爲に當所蒐集の圖書、寫眞、其の他の研究資料の閲覧を許可する、又隨時陳列室に於て特殊なる資料を展觀して一般に觀覽せしめる

一、黒田清輝作品陳列

所内に黒田子爵記念室を設け、其の作品を陳列して定時(毎週木曜日午後)に公開する。

〔所長〕矢代幸雄〔所員〕矢代幸雄、和田新、正木篤三〔助手〕中川千咲、豐岡益人、倉田平吉〔書記〕木下龍也〔囑託〕田中喜作、菅沼貞三、大給近清、丸尾彰三郎、富永愷一、堀井三友、田中豐藏、中根勝、岩淵幸左衛門、望月信成、渡邊一、隈元謙次郎、福井利吉郎、兒島喜久雄、山田智三郎、梅津次郎、小高根太郎、須賀利雄、筒崎謙齋、白畑よし、林貞彦、吉川逸治

美術研究所官制

昭和十年六月一日勅令第四百四十八號

改正昭和十二年勅令第二百八十一號

第一條 美術研究所ハ文部大臣ノ管理ニ
屬シ美術ニ關スル事項ノ調査研究ヲ掌
ル

第二條 (削除)

第三條 美術研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

所員 專任三人 奏任

助手 專任三人 判任

書記 專任一人 判任

第四條 所長ハ所員ノ中ヨリ文部大臣之
ヲ補ス

所長ハ文部大臣ノ命ヲ受ケ所務ヲ掌
ル

第五條 所員ハ所長ノ命ヲ受ケ所務ヲ掌
ル

第六條 助手ハ上司ノ指揮ヲ承ケ所務ニ
從事ス

第七條 書記ハ上司ノ指揮ヲ受ケ庶務ニ
從事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

東京美術學校

東京市下谷區上野公園
電下谷八〇二〇一—二

東京美術學校は明治二十年十月勅令を
以て設置せられ、同二十二年二月授業を
開始した。翌年初代校長濱尾新に代つて
岡倉覺三學校長となつたが同三十一年退
官し、彼と共に教授橋本雅邦以下多數の
教授、助教授が辭職した。高嶺秀夫、久
保田鼎に次いで同三十四年正木直彦學校
長となり、昭和七年和田英作之に代り、

東京美術學校・東京高等工藝學校

次いで同十一年には芝田徹心學校長に任
ぜられ同十五年澤田源一學校長に任ぜら
る。

本校の學科を本科(豫科、研究科を置
く)と圖書師範科(研究科を置く)とに
分ける。尙選科、聽講生の設備あり。

(本科) 日本畫科、油畫科、彫刻科(塑
造部、木彫部)、工藝科(圖案部、彫金部
鍛金部、鑄金部、漆工部)及び建築科に
分つ。修業年限四年。入學資格豫科修了
者。授業料年額八十圓。在學中特定の學
科目を修了したる者に中等教員無試験檢
定の特典あり。

(豫科) 修業年限一年。入學資格中學校
四年修了者、高等學校尋常科修了者、高
等學校高等科入學資格試験合格者。授業
料年額八十圓。實技及學科の入學試験を
行ふ。檢定料五圓。

(圖書師範科) 修業年限三年。入學資格
中學卒業程度。授業料を徴收せず。入學
試験を行ふ。檢定料五圓。

(研究科) 實技、學術の二部に分つ。修
業年限二年以内。入學資格實技は本校卒
業後二年を経過せず且卒業成績八十點以
上の者、學術は本校卒業者。授業料年額
五十圓。

(選科) 本科入學資格を有せざる者にし
て本科各科の實技のみを學習せんとする
者を銓衡の上入學を許可す。近年募集せ
ず。授業料年額八十圓。

(聽講生) 聽講料一學年問一科目に付二
十圓、一科目を増す毎に十圓。

昭和十五年四月末に於ける各科豫科及
師範科一年の生徒數は左の如くである。

日本畫科

二一名

油繪科

三六名

彫刻科塑造部

一三名

同 木彫部

八名

工藝科圖案部

一八名

同 彫金部

五名

同 鍛金部

三名

同 鑄金部

五名

同 漆工部

七名

建築科

八名

圖書師範科

一七名

又本校には文庫があつて圖書標本を收
藏し、陳列館及正木記念館があつて諸種
の展觀を試み、何れも生徒學習の参考に
資する。

〔校長〕 澤田源一

〔名譽教授〕 和田英作

〔教授〕 藤島武二、森井健介、結城貞松

多賀谷健吉、六角注多良、佐々木卓、

小林萬吾、津田信夫、清水龜藏、矢代

幸雄、建昌彌一郎、朝倉文夫、北村西

望、南薰造、和田三造、香取秀治郎、

石田英一、田邊至、森田龜之助、小泉

勝爾、海野清、關野金太郎、高村豐周

廣川松五郎、松田義之

〔生徒主事〕 佐々木卓、森田龜之助

〔助教授〕 松垣龜雄、水谷武彦、松田權

六、山田廉、岡四郎、森田武、山崎覺

太郎、金澤庸治、常岡文龜、伊原宇三

郎、西田正秋、丸山義男、内藤春治、

羽下修三、深瀬嘉臣、八田辰之助、磯
矢陽

〔講師〕 杉田精二、大澤三之助、村田良

策、澤口悟一、小場恆吉、齋藤幸晴、

岡田捷五郎、鎌倉芳太郎、正木篤三、

小塚新一郎、白川一郎、鈴川信一、羽

野禎三、入谷昇、蒔田宗次、比田井元

子、石澤正男、矢澤貞則、川崎隆一、

沼田勇次郎、木村得三郎、富永愷一、

平野茂、關野克、加藤鬼頭太、大峽秀

榮、新規矩男、菊池白、豊田朝一郎、

石橋啓十郎、原田謹次郎、田邊孝次、

矢崎好幸

東京高等工藝學校

東京市芝區新芝町
電三田一一五六—八

本校は大正十年十二月の設立に係り、
松岡壽初代の校長に任せられ翌十一年開
校された。同十二年吉武榮之進代つて校
長となる。同十三年東京高等工業學校附
屬職工徒弟學校を本校に移管、附屬工藝
實業學校として設置した。同十四年松岡
壽再び校長となり、翌年東京美術學校寫
真科を本校に移管し寫真部として設置し
た。昭和三年安田祿造が校長に任せられ
て現在に及ぶ。

本校の學科を工藝圖案科、造型工藝部、
金屬工藝科、精密機械科、木材工藝科及
印刷工藝科(寫真部を含む)に分ち、他
に、研究生、選科生、聽講生、木材工藝
別科を設置す。

尙昭和十二年十月一日より工業學校實習指導員養成科を設置した。

(本科) 修業年限三年。入學資格中學卒又は専檢合格者。授業料年額八十圓。

(研究生) 修業年限二年以内。入學資格本校又は實業專門學校卒業生。授業料年額八十圓。

(選科生) 修業年限三年以内。入學資格中學校、工業學校卒業生は一年以上、學歷なき者は五年以上志望學科の工藝に従事せる者。授業料年額八十圓。

(聽講生) 聽講科一學課一學期十圓。
(木材工藝別科) 修業年限二年。入學資格中等程度工業學校卒業生、又は志望學科に關する經驗を有する者。授業料年額五十圓。

(工業學校實習指導員養成科) 修業年限六ヶ月。入學資格縣立工業學校機械科卒又は中等學校卒業後六ヶ月間以上實地經驗を有する者。學資は毎月金四十圓宛補給せられ授業料は徴收せず。
本科生徒數

- 工藝圖案科 七二名
- 造型工藝科 一七名
- 金屬工藝科 五三名
- 精密機械科 一八四名
- 木材工藝科 八一一名
- 印刷工藝科 六七名
- 寫眞部 二三名
- 木材工藝別科 三一名
- 工業學校實習指導員養成科 四〇名

〔校長〕安田祿造

〔生徒主事〕教授 江崎歡藏

〔工藝圖案科〕教授 宮下孝雄、永地秀太、築島棟吉、杉山豊祐、助教 渡邊春男、塚田敢、講師 日野厚、藏田周忠、渡邊素舟、中島清

〔造型工藝部〕教授畑正吉、寺畑助之丞、助教 中山保雄、囃託 西田正秋

〔金屬工藝科〕教授 豊田勝秋、益田森治、講師 大石鏡吉、瀨谷準造、諏訪常次郎、神矢敬親、富田久三郎

〔精密機械科〕教授 竹屋金太郎、永澤謙三、橋本宇一、長谷川一郎、講師 淺川權八、山内鎮一、山田幸五郎、佐々木達次郎、富田久三郎、原田幸夫

〔木材工藝科〕教授 木槍想一、西海幸一郎、野村茂治、助教 鈴木太郎、講師 廣瀨誠一、猪熊泰三、渡邊政徳 佐田辰夫

〔印刷工藝科〕教授 謙田彌壽治、伊東亮次、岡利亮、助教 畑保之、星野幸衛、講師 矢野道也、矢野矢、山上謙一、大江恆吉、村井資長、廣瀨義太郎

〔寫眞部〕教授 鎌田彌壽治、伊東亮次、岡利亮、助教 畑保之、講師 矢野道也、久米福衛、村井資長、廣瀨義太郎

〔木材工藝別科〕教授 木槍想一、築島棟吉、講師 佐田辰夫
〔共通學科〕教授 江崎歡藏、永地秀太、岡田楠次郎、和田香苗、馬場秋次郎、

助教 山本徳三、村尾力太郎、鈴木豊次郎、講師 三浦平吉、阿部三郎太郎、齋藤茂三郎、宇都宮俊彦、鹿島英二、三浦太郎、松野喜内、三橋逢吉

京都高等工藝學校

京都市左京區松ヶ崎御所海道町
電上五七、五〇〇三、五七七〇

明治三十五年三月設置。中澤岩太初代校長となり、大正七年七月鶴卷鶴一之に代り更に大正十五年四月、村上宇一校長に任せられ現在に至る。

〔學科〕 色染科、機械科、圖案科、窯業科を置く。尙昭和十四年四月より精密機械科、人造纖維科の二學科を新設した。
(本科) 修業年限三年。入學資格中學校卒、實業學校卒及其と同程度。授業料年額八十圓。

(研究生) 本校又は他の實業專門學校卒業生が既修の學科目を更に研究しようとする場合詮議の上二箇年以内在學を許可されるもの、授業料年額八十圓。

(選科生) 修業年限三年以内、授業料一科目に付年額十圓。

〔校長〕村上宇一〔名譽教授〕中澤岩太
〔教授〕村上宇一、本野精吾、會田龍雄、古城鴻一、霜島正三郎、小島幸三郎、目賀田廉一、山上操、藤野清久、向井寛三郎、都島英喜、田中隆吉、平岡尙、青武雄、荒木長治、湯淺南海男、山田隆、鳴智惠人、河村正義、青木一郎、淺尾健次、鹿野治助、菊池武勝、脇村利一郎、立入

明、實藤玄〔助教〕田邊武夫、飯田秀夫、端與之助、山崎實、美利正忠、平島剛、田中三郎、淺野耀雄、寺前皓介、白木小三郎、山本晃久

本科生徒數

- 色染科 九〇名
- 機械科 九〇名
- 圖案科 一二〇名
- 窯業科 九〇名
- 精密機械科 一一〇名
- 人造纖維科 七〇名

京都市立繪畫專門學校

京都市東山區今熊野日吉町 電祇園一五八

明治四十二年三月創立。同校は「專門學校令」據り日本畫及圖案ヲ研究セントスル者又ハ圖畫教員ヲラントスル者ニ必要ナル教育ヲ施ス」ことを目的とする。初め京都市立美術工藝學校の西隣に校舎を營んだが大正十五年六月現地に移轉した。創立以來多數の日本畫家を輩出して今日に及ぶ。

〔學科〕日本畫科、圖案科に分ち各科に豫科及本科を置き、別に研究科及選科を置く。

(豫科) 修業年限日本畫科二年。圖案科一年。入學資格中學卒。専檢合格者。授業料年額五十圓(京都市内に居住せざる者は六十七圓五十錢)

(本科) 修業年限日本畫科、圖案科共三年。入學資格同校豫科修了者。授業料

豫科に同じ。

(研究科) 在學期間五年。入學資格同校各學科又は他の専門學校卒業業者。授業料年額四十五圓(京都市内に居住せざる者は六十二圓五十錢)

(選科) 入學資格高等小學卒業業者及之と同等以上の學力を有する者。授業料年額四十圓(京都市内に居住せざる者は五十五圓五十錢)

(校長) 川村曼舟〔教授〕入江波光、堂本印象、宇田萩郎、案本一洋、中村大三郎、石崎光瑤、榊原紫峰、宇都谷誠太郎、中井宗太郎、原與作〔助教〕山口華楊上村松篁、松元道夫、池田遙村、三宅風白、大橋憲、加藤一雄〔講師〕太田喜二郎、猪熊茂磨、久世欽十郎、河野通一、清水光繁、千野光茂、藤原義一、岸田宗三郎

京都市立美術工藝學校

京都市東山區今熊野日吉町 電話一五八

明治十三年七月の創立で、元京都府畫學校と稱し本邦最初の畫學校である。初め普通畫學のみの教授をしたが、同二十一年應用畫學科を併置したのを初めに同二十七年には校則を改正、繪畫科、彫刻科、工藝圖案科を置くに至り、同三十四年には名稱を京都市立美術工藝學校と改めた。大正十五年現地に校舎を移轉した。同校は工業學校規程に據り、美術及び美術工藝に従事せんとする者に必要な技能を授くるを目的とし、學科を繪畫

科、圖案科、彫刻科の三科とし、修業年限を五箇年とす。入學資格は尋常小學卒とし、授業料は京都市内在住者は一箇年四十圓、其他の者は五十五圓五十錢である。

(校長) 川村曼舟〔實習科受持〕(繪畫科) 入江波光、勝田哲、登内微笑、西村卓三、多田孜一、小宮信一、辻字佐雄、前田萩郎、猪原大華(圖案科) 千熊宇平、山鹿清華、田村春曉、山田江秀、片山行雄、森守明、太田喜二郎(彫刻科) 松田尙之、矢野判三、建昌大夢、北村西望、太田喜二郎

工藝指導所

東京市豊島區一丁目 電話大塚七八六三—五
町電土佐堀六六八〇

(關西支所) 大阪市西區江ノ子島上ノ町 電話土佐堀六六八〇
(仙臺支所) 仙臺市廿八町通 電話三七六〇

「我國固有の工藝を改善し之が全國工業化を圖り現代民衆生活の要求を合致せしむる」目的を以て昭和三年政府により設置された。はじめ商工省内に假事務所を設けたが同年十一月仙臺市の廳舎竣工と共に事務所を移轉し事業を開始した。其の後事業の進展上東京に於ける調査研究の必要を認め昭和八年五月商工省内に工藝指導所出張員事務所を設け、當時所員を駐在せしむる事となつた。昭和十二年八月勅令を以て官制改正せられ「木工及金屬工品」を「工藝品」に改め、職員を増員し、必要と認められる地に工藝指導

所の支所を置き本所の事務を分掌せしむることとなつた。

尙輸出工藝雜貨改善に關する調査研究並に關西支所設置準備事務取扱の爲大阪府工業獎勵館内に當所出張員事務所を設け昭和十四年一月より事務を開始しつ、あつたが、同年八月勅令を以て出張所事務所を閉鎖し大阪府江の子島に關西支所を設置した。昭和十五年十一月勅令を以て増員、商工省告示を以て工藝指導所は東京市に移轉し、仙臺に同東北支所を設置せらる。東京本所は庶務課、企劃部、研究部、指導部の一課三部を置き、關西東北支所と共に三位一體となり一層本邦産業工藝の積極的改善指導に邁進することとなつた。

四 的原型を提供す
講習、講演、審鑑査その他の實地指導當所の指導方針、試験研究、調査の結果に基き、講習講演會を開催し又は申請により地方講習講演會又は審鑑査のため職員を派遣し、實地指導をなす

五 地方工業化促進
當所の研究、試作の成果が工藝品の改善發達に對し、基礎的一般的なる場合は全國的普及を圖り、又特種、又は地方的なるものを目標とせる場合は、當該指導機關に移讓實施を促し全國的指導及全國的的地方工業化を圖る。

業務一般

- 一 調査研究
主として輸出向工藝品に關する調査
代用原材料並代用品の基本的條件の調査
調査工藝品の原材料、技術、意匠、工具、機械に關する技術的調査、國內市場商品、生産、需要現況の調査
内外優良參考品の蒐集
- 二 試験研究
工藝品の基礎的改善のために必要なる一切の技術的研究、市販製品改善に必要な各種試験並びに實驗
試作研究
研究試驗實驗に必要な各種モデルの試作、その結果に基き各種工藝品を試作し、工業的生産のために規範
- 三 製作研究
研究試驗實驗に必要な各種モデルの試作、その結果に基き各種工藝品を試作し、工業的生産のために規範
- 四 講習、講演、審鑑査その他の實地指導當所の指導方針、試験研究、調査の結果に基き、講習講演會を開催し又は申請により地方講習講演會又は審鑑査のため職員を派遣し、實地指導をなす
- 五 地方工業化促進
當所の研究、試作の成果が工藝品の改善發達に對し、基礎的一般的なる場合は全國的普及を圖り、又特種、又は地方的なるものを目標とせる場合は、當該指導機關に移讓實施を促し全國的指導及全國的的地方工業化を圖る。
- 六 製作加工圖案調製應需
依頼により工藝品の製作加工、又は意匠圖案の調製に應じ、又當所の研究に基き試作品及圖案の配布をなす。
- 七 製品、圖案、參考品の貸與及展示、本所の研究、試作、設計圖案又は參考品は申請により之を貸與し、或は展覽會、博覽會等に出品す
- 八 傳習生及研究生の養成
全國斯業の發達向上、近代化を目的とし、工藝各方面の業者及び子弟並に工場従業者に對し實務に必要な技術及び智識を短期間に修得せしむ
- 九 質疑應答
工藝品の原材料、技術、工具、設備意匠、傾向その他工藝に關する質問

に對し、口答又は文書を以て應答、業者を啓發指導す。

一〇 設備貸與

當業者の試験研究又は製品加工のため申請あるときは當所作業に支障なき限り、設備を貸與、便宜を圖る。

一一 刊行物の頒布

本所の試験研究及び調査に基き月刊「工藝ニュース」を編輯す

一二 各方面との聯絡

地方各指導機關其他關係諸方面との聯絡を圖つて、研究試験其の他の重複、不統制を避けしめ、又各方面の力を集束して指導計畫の綜合的効果の立案を圖る

一三 一般指導啓發

適切なる方法に於て一般大衆の工藝への關心を鼓吹し、又工藝智識の普及、趣味、涵養を計り、以て工藝的水準の高揚を期すると同時に海外に我が工藝の特質、長所の宣傳啓蒙に當り、以て彼等の認識理解を深むるに努む。

工藝指導所官制

昭和十五年十一月十九日
勅令七百七十號改正

第一條 工藝指導所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ工藝ノ指導ヲ爲ス爲左ノ事務ヲ掌ル。

- 一 工藝品ニ關スル試験及研究
- 二 工藝品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定
- 三 工藝品製作ニ關スル傳習及講話

四 試験研究ノ爲製作シタル工藝品、加工シタル其ノ材料並ニ調製シタル其ノ意匠圖案ノ配付

第二條 工藝指導所ハ工藝ノ改善ニ必要アリト認ムル場合ニ限り工藝品ノ製作並ニ其ノ意匠圖案ノ調製ノ依頼ニ應スルコトヲ得

第三條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ケル所長

- 技師 專任 十一人 奏任
- 屬 專任 三人 判任
- 技手 專任 十六人 判任

所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 所長ハ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス

第五條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第六條 屬ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第七條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第八條 商工大臣ハ必要ト認ムル地ニ工藝指導所ノ支所ヲ置キ本所ノ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

附則 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

商工省内臨時職員設置制抜萃

昭和八年勅令第 三十六號改正

第二十條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

一、工藝振興ニ關スル事務ニ従事スルモノ

技師 專任 二人

技手 專任 三人

二、代用品工業ノ振興ニ關スル事務ニ従事スルモノ

技師 專任 二人

屬 專任 一人

技手 專任 三人

同所處務規程抜萃

第一條 工藝指導所ニ左ノ部課ヲ置ク

- 一、庶務課
- 一、企劃部
- 一、研究部

一、指導部

第二條 庶務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル(以下略)

第三條 企劃部ニ企劃課、調査課ヲ置キ左ノ事務ヲ掌ル

一、工藝技術改善ニ關スル計劃設定ニ關スル事項

二、工藝ニ關スル研究機關トノ聯絡保

三、内外工藝事情ノ調査並資料ノ蒐集ニ關スル事項

四、材料、技術、機械器具ノ調査ニ關スル事項

五、調査及研究事項ノ編纂ニ關スル事項

第四條 研究部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、工藝品ノ意匠並原理ニ關スル事項

第五條 指導部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、工藝ノ指導ニ關スル事項

二、講習講演、展示ニ關スル事項

三、傳習生ノ養成ニ關スル事項

第六條 工藝指導所支所ニ支所長ヲ置ク支所長ハ所長ノ指揮監督ヲ承ケ支所全般ノ事務ヲ處理ス

第七條 所長處務細則又ハ支所ノ處務規程ヲ設クルトキハ商工大臣ニ報告スベシ、之ヲ變更スルトキ又同ジ

第八條 所長試験又ハ鑑定ノ成績書ヲ作製スルトキハ其ノ擔任者ト共ニ之ニ署名又ハ捺印スヘシ

第九條 所長ハ毎年事業ノ成績ヲ商工大臣ニ報告スヘシ

職員

本所

技師 所長 國井喜太郎

技師 佐藤釜太郎

技師 中井武雄

技師 谷内治橋

技師 阿久津保太郎

技師 西川友武

技師 藤井左内

技師 福岡龍太郎

技師 劍持勇

技師 福岡和雄

技師 鈴木毅

技師 鹿取一男

技師 畑正夫

技師 關西支所

技師 支所長 齋藤信治

技師 杉本俊三

技師 豐口克平

屬

東海林 榮
八井 孝二

試驗所瀨戸試験場として當所に於て經營することに於つた。

陶磁器試験所官制

芳武 茂介
鍋谷外茂男
稻森 健吉
原直 陳

大正八年四月五日
勅令第八十三號

第一條 陶磁器試験所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

技師 支 所 長 奈坂 毅
技師 松崎福三郎
阿久津保太郎
屬 兼 安倍 郁二
鈴木清之介
大原 彰三
明石 一男
大場吉三郎
白井 正夫
中井太一郎

一 陶磁器ニ關スル試驗及研究

二 陶磁器ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三 陶磁器製作ニ關スル傳習及講話

四 試驗研究ノ爲製作シタル陶磁器及加工シタル其ノ材料ノ配付

第一條ノ二 陶磁器試験所ハ試驗研究成績ノ普及促進ニ必要アリト認ムル場合ニ限り陶磁器ノ製作ノ依頼ニ應スルコトヲ得

陶磁器試験所

京都市伏見區深草正覺町
電圖紙圖一四七八

當所は本邦陶磁器工業の改善進歩並にその輸出増進を圖る爲の國立研究指導機關である。大正八年京都市より、元京都市立陶磁器試験場の敷地、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、時の農商務省所管としたもので後に商工省の所管となり現在に至つて居る。而して昭和八年度、政府に於て國策として工藝振興に關する經費を新に支出することになつたが、この際偶々瀨戸市に計畫された市立窯業試験所の土地、建物その他諸設備一切を舉げて當所に移管し、同所を陶磁器

第二條 陶磁器試験所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

技師 專任七人 泰任

屬 專任二人 判任

技師 專任十人 判任

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス
(第四條以下略)

同所處務規程抜萃

一、陶磁器試験所ニ第一部、第二部、第三部及庶務課ヲ置ク

一、第一部ニ於テハ陶磁器ニ關スル基礎的研究並陶磁器ノ原料、材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事務ヲ掌ル

同所傳習生規程抜萃

一、第二部ニ於テハ陶磁器製作ニ關スル事務ヲ掌ル

一、第三部ニ於テハ陶磁器ノ意匠及圖案ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル

一、所長ハ必要ト認ムル地ニ試験場ヲ置キ陶磁器試験所ノ事務ノ一部ヲ分掌セシムル事ヲ得

同所製品配付及受託製作規則抜萃

一、陶磁器試験所ノ試驗研究ニ依リ製作シタル陶磁器及加工シタル陶磁器材料ノ配付ヲ受ケントスル者又ハ陶磁器ノ製作ヲ依頼セントスル者ハ別記所定様式(中略)ニ依リ陶磁器試験所長ニ出願スヘシ

一、前條ノ出願ヲ許可セントスル場合ニ於テハ陶磁器試験所長ハ左ニ掲クル事項ヲ定メ之ヲ出願人ニ通知スヘシ

一 品種及數量

二 代金又ハ製作費及其ノ納付期限

三 引渡豫定期日

出願人前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ五日以内ニ配付ヲ受ケヘキ旨又ハ製作ノ依頼ヲ爲スヘキ旨ヲ申出テサルトキハ出願ハ其ノ效力ヲ失フ

一、陶磁器試験所長必要アリト認ムルトキハ道府縣市立商品陳列所規程ニ依ル商品陳列所又ハ學校ニ對シ無償ヲ以テ製品ヲ配付スルコトヲ得

同所傳習生規程抜萃

附 瀨戸試験場

瀨戸市大學瀨戸
電瀨戸二四五六

京都本所の基礎的研究よりなる中間試験の結果を更に進んで實地的製作に移し以て陶業者と相互に聯絡を保ち、益々斯業の發展を圖らんとするものであつて、當場には技術科、圖案科、及び庶務係を置く。

技術科 研究品の試作、製造、技術上の改善、研究、指導及各種の調査を行

ひ、成形係、原型彫製係、着畫係、窯係、調査係があり相互に事務の聯絡を行ふ。

圖案科 意匠圖案研究、調査及依頼調製

陶磁器試験所職員

技師 所長 秋月 透

同 第一部長心得 磯松 嶺造

同 第二部長 小川新一郎

同 第三部長 水町和三郎

同 藤井 兼壽

同 淺山 哲二

同 滑川 正雄

同 井本米次郎

同 馬淵 利貞

同 川川 基一

同 宮崎 正治

同 保野福太郎

同 庶務課長

同 技師 工藝振興ニ關スル事務ニ従事スル臨時職員

同 瀨戸試験場長

同 赤塚 幹也

同 水野四郎兵衛

同 澤村 滋郎

同 日根野作藏

東京帝室博物館

東京市下谷區上野公園電下谷六、一九九〇、四六〇一

同館の創立は明治五年正院に於ける博覽會事務局の設置に始まり、其後同局を博物館と改稱し内務省の管轄に付したが、同十四年農商務省へ移管となり、事務所(當時博物館と稱す)を上野の舊寛永寺本坊跡に移轉し翌十五年同所に新築の本館を開いた。十九年宮内省管理とな

り、二十二年帝國博物館と改められ、歴史、美術、美術工藝、工藝、天産の五部を設け、三十三年現稱に改められた。天産部は大正十四年文部省に移管された。昭和十二年従来の歴史課、美術課を廢し列品課に改め、別に學藝課を新設した。陳列本館は震災に大破し、其の後表慶館を列品陳列に充てたが、今上陛下の御即位記念の事業たる帝室博物館復興費會の復興大工事が六年を閲して昭和十二年に竣工し、同年献上せられ、同十三年十一月開館された。建物は地上二階、地下二階、總面積六千五百二十二坪、鐵骨鐵筋コンクリート造りの東洋風大建築である。館内を約二十室に分ち陳列は概ね第一、二室考古、第三、四室染織、第五、六、七室金工、第八室陶器、第九、十室彫刻、第十一、十二、十三、十四及十八室繪畫、第十五、十六、十七室漆工、第十九、二十室書蹟等に區分し、尙特別第一室に考古、特別第二、五室に彫刻を陳列する。以上の中繪畫、書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙本館開館と共に従来の表慶館には明治以降の日本畫、洋畫、彫刻、工藝を陳列し、近代美術館の機能を果すことになつた。

又構内には公爵九條道秀及益田孝より夫々寄贈され、昭和十一年開館された九條公爵記念館及應舉館がある。前者はもと東京赤坂なる九條公爵邸内の前公爵道實の居室で昭和九年道秀が宮内省に先考の記念として獻納したもの、總坪凡そ四

十四坪、二室、廻廊下附で一の間、二の間を通じて床張付、襖、腰障子に傳山樂山雪筆の四季著色樓閣山水圖が描かれこれほもと京都御所内九條邸にあつたのを東京邸に應用したものである。後者はもと舊尾張國海部郡大治村明眼院の書院で寛保二年の建立、明治二十二年男爵益田孝により東京御殿山の邸内に移築され、昭和八年宮内省に獻納された。總坪凡四十三坪、書院造、二室、廻廊下附、一の間には松梅笹稚松が、二の間には蘆雁圖が共に墨畫で壁張付、襖、腰障子等に描かれ、何れも圓山應舉の筆である。

又構内の茶室六窓庵は金森宗和の建立にかかり、もと奈良興福寺の慈眼院に在つたものである。何れも毎週一同晴天の日に公開する。尙外に校倉があり、奈良十輪院から移した奈良時代の遺構で、扉に四天王を、内部壁板に般若十六善神を畫き、石室には十六善神の彫刻がある。

(總長) 溝口頑次郎、秋山光夫、三條西公正、石田茂作、伊藤越、矢島恭介、小林剛、野間清六、鷹巢豊治(御用掛) 都築誠(鑑査官補) 高橋勇、尾崎元春、田中作太郎、蓮實重康、金森遼、關根龍雄、堀江知彦、近藤市太郎、藤岡了一、岡田讓、伊東卓治、藏田藏、松下隆章、神林淳雄、澁江二郎、守田公夫(顧問) 郷誠之助、清水澄、澤田源一、羽田亨、池内宏、侯爵徳川義親、侯爵細川護立、侯爵前田利爲、加藤正治、子爵岡部長景

松本俊一、瀧精一、伊東忠太、黒板勝美 男爵大倉喜七郎、男爵團伊能、杉榮三郎 大橋新太郎、横河民輔(學藝委員) 奥田誠一、藤懸靜也、香取秀治郎、關係之助 入田整三、吉野富雄

(觀覽日) 一月三日より十二月廿五日迄 午前九時より午後四時迄、但し季節により多少伸縮す。(觀覽料) 大人十錢、小人五錢、廿人以上の團體は大人五錢、小人三錢、教員引率の學生生徒の團體は無料

帝室博物館官制

大正十年十月七日皇令第十四號 改正 大正十三年、十四年、昭和十三年第八號

第一條 帝室博物館ハ宮内大臣ノ管理ニ屬シ古今ノ美術品ヲ蒐集シテ公衆ノ觀覽ニ供シ美術ノ發達ニ資スル事業ヲ行フ所トス

第二條 帝室博物館ハ之ヲ東京及奈良ニ置ク

第三條 帝室博物館ニ左ノ職員ヲ置ク 總長、事務官、鑑査官、鑑査官補、屬

技師

第四條 總長ハ勅任トス各帝室博物館及正倉院ニ關スル事務ヲ掌理シ所部職員ヲ監督ス

第五條 事務官ハ專任二人奏任トス庶務ヲ分掌ス

第六條 鑑査官ハ專任九人奏任トス美術品ノ鑑査解説陳列及保存ノ事務ヲ分掌ス

第七條 鑑査官補ハ判任トス鑑査官ヲ助ク

第八條 屬ハ判任トス庶務ニ従事ス

第九條 技手ハ判任トス技術ニ従事ス

第十條 奈良帝室博物館ニ館長ヲ置ク
館長ハ事務官ヲ以テ之ニ充ツ館務ヲ掌
理シ所部職員ヲ監督ス

附 則

本令ハ昭和十三年十一月十日ヨリ之ヲ
施行ス

帝室博物館顧問

昭和十三年十一月七日
宮内省令第八號

宮内省ニ帝室博物館顧問ヲ置ク

顧問ハ帝室博物館ニ關スル重要ナル事項ニ
付宮内大臣ノ諮問ニ應ス

顧問ハ二十五人以内トシ宮内大臣ノ奏請ニ
依リ之ヲ命ス

附 則

本令ハ昭和十三年十一月十日ヨリ之ヲ施行ス

帝室博物館社寺寶物受託規程

昭和十一年十一月三十日
宮内省令第十二號

第一條 帝室博物館ニ於テ陳列ニ供スル爲社
寺寶物ノ寄託ヲ受クルハ本規程ノ定ムル所
ニ依ル

第二條 寺社其ノ寶物ヲ帝室博物館ニ寄託セ
ムトスルトキハ寄託期間ヲ定メ書面ヲ以テ
帝室博物館館長又ハ奈良帝室博物館長ニ申
出ツヘシ寄託期間ヲ更新セムトスルトキ亦
同シ

第三條 帝室博物館寄託ノ目的物ヲ受領シタ
ルトキハ附録様式ノ受託證書ヲ交付シ返還

恩賜京都博物館

スルトキハ之ト引換フヘシ
受託期間ヲ更新シタルトキハ受託證書ニ其
ノ期間ヲ明記シ繼續ノ印ヲ押印ス

第四條 受託物ハ受託期間内ト雖モ之ヲ返還
スルコトアルヘシ
受託物ハ祭典法要修理其ノ他ノ事由ニ因リ
寄託者ヨリ願出アリタルトキハ三十日ヲ限
リ之ヲ返還スルコトアルヘシ

前項ノ期間ハ修理其ノ他已ムコトヲ得サル
事由アルトキハ之ヲ延長スルコトヲ得

第五條 寄託社寺ニ對シテハ毎年十二月二日社
寺交附金ヲ交付ス

第六條 寄託又ハ受託物ノ返還ニ要スル荷造
費及運搬費ハ帝室博物館ニ於テ之ヲ負擔ス

第七條 寄託期間六年以上ニ互ル受託物ニ付
テハ特別ノ事情アル場合ニ限り寄託者ノ申
出ニ依リ帝室博物館ニ於テ其ノ修繕費ノ全
部又ハ一部ヲ負擔スルコトアルヘシ

第八條 前條ニ依リ費用ヲ負擔スル受託物ノ
修繕ハ帝室博物館内又ハ指定ノ場所ニ於テ
之ヲ行フモノトシ帝室博物館館長(奈良帝
室博物館ニ在リテハ同館長)之ヲ監督ス
前項ノ修繕方法及程度ニ付テハ當該社寺帝
室博物館館長(奈良帝室博物館ニ在リテハ
同館長)ト協議スヘシ

第九條 受託物ハ帝室博物館ニ於テ保管ノ責
ニ任ス但シ天災地變其ノ他不可抗力ニ因リ
滅失紛失又ハ毀損シタルトキハ此ノ限ニ在
ラス

第十條 本令施行ニ關スル細則ハ宮内大臣ノ
認可ヲ經テ帝室博物館館長之ヲ定ム

附 則

本令ハ昭和十一年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス
明治二十八年宮内省達乙第一號ハ之ヲ廢止ス
(附録様式) 省略

帝室博物館出品規程

第一條 所藏ノ物品ヲ本館ニ出陳センコトヲ

望ム者ハ口頭若ハ書面ヲ以テ申出ツヘシ、
但シ書面ヲ以テ申出ツルトキハ其ノ品名形
狀傳來等ヲ詳記シ且略圖ヲ添付スヘシ

第二條 物品ノ出品ヲ承認シタルトキハ物品
ト引換ニ預證書ヲ交付スヘシ

第三條 出品ハ本館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但
シ天災其ノ他不可抗力ニ因リ紛失毀損シタ
ルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條 出品ノ輸送費用ハ所有者ニ於テ支辨
スヘシ

第五條 出品ヲ模寫模造若ハ撮影センコトヲ
請フ者アルトキハ所有者ノ承諾ヲ得タル後
之ヲ許可スヘシ但シ各種列品集合全體ノ形
狀ヲ撮影スルハ此ノ限ニアラス

第六條 出品ニシテ常時手入ヲ要スルモノハ
本館ニ於テ之ヲ爲スヘシ但シ修繕ハ此ノ限
ニアラス

第七條 出品ノ預期間ハ三箇年トス
預期間ノ計算法ハ現品ノ領收六月以前ナ
ルトキハ其ノ年ノ一月ヨリ起算シ七月以後
ナルトキハ其ノ年ノ七月ヨリ起算ス

第八條 預期間満了シタルトキハ書面ヲ以テ
之ヲ所有者ニ通知ス 所有者前項ノ通知ヲ
受領シタルトキハ速ニ物品ヲ引渡ヲ受シヘ
シ

第九條 出陳ヲ繼續スル場合ニ於テハ本證書
ノ裏面ニ繼續ノ印ヲ押シ期限ヲ延長スルモ
ノトス

第十條 出品預期間内ト雖所有者ノ希望ニ因
リ物品ヲ返付スルコトアルヘシ

第十一條 返付スヘキ物品ハ執務時間中何時
ニテモ預證書ト引換ニ之ヲ引渡スヘシ

引渡ヲ受ケタルトキハ本人又ハ代理人ハ證
書ノ裏面ニ受領ノ旨ヲ記載シ記名捺印スヘ
シ

第十二條 出品預期間満了ノ場合ニ於テ所有
者ノ所在不明ナルトキハ官報及三種以上ノ
新聞紙ニ五日間之ヲ廣告スヘシ此ノ場合ニ
於テハ其ノ末日ニ於テ通知ヲ受ケタルモノ

ト看做ス
預期間満了ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三ヶ年
ヲ經過スルモ引渡ヲ申出サルトキハ預證書
ハ無効トシ現品ハ本館ニ於テ隨意ニ之ヲ處
分ス

第十三條 出品預證書ヲ紛失若ハ毀損シタル
トキハ速ニ本館ニ届出證書ノ再交付若ハ引
換ヲ請求スヘシ但シ紛失シタルトキハ官報
又ハ新聞紙ニ廣告シ三箇月ヲ經過スルモ發
見セザル場合ニ於テ再ヒ證書ヲ交付スヘシ

第十四條 紛失若ハ毀損ニヨリ再ヒ預證書ヲ
交付シ若ハ引換ヲ爲スルトキハ其ノ理由ヲ證
書ニ掲記ス

恩賜京都博物館

京都市東山區七條通大和
大路東入 電祇園五四

明治廿二年五月宮内省達を以て圖書寮
附屬博物館が廢止され、帝國博物館、帝
國奈良博物館と同時に帝國京都博物館が
設置された。廿五年四月本館の工事に着
手し廿八年竣工、三十年五月開館した。
卅三年官制の改革により京都帝室博物館
と改稱。大正十三年一月、今上陛下の御
成婚に際し思召を以て宮内省より京都市
に下賜せられ、同年二月一日より恩賜京
都博物館と改稱し、京都市の經營に屬す
ることとなつた。

本館は京都其他各地社寺の國寶什寶及
び個人所藏の優品を蒐集して之を受託陳
列し、一般の觀覽に供してゐる。陳列品
を大別して歴史部、美術部、美術工藝部
の三部とし、更に之を細分して左の如く
部門を別けて居る。歴史部(一、圖書二、

古代遺品 三、祭祀宗教關係品 四、武器
五、禮式風俗關係品 六、貨幣、度量衡、信
印、美術部 (一)、繪畫 二、書蹟 三、彫刻
四、建築、美術工藝部 (一)、金屬品 二、
窯製器 三、漆漆品 四、織績品 五、玉石甲
角竹工品 六、紙產品 七、寫真並圖繪。
現在の列品點數三千四百四十六點。繪畫、
文書、書蹟は毎月陳列替を行ひ、又年に
數度特別展覽會及夏季講演會等を開催す
る。

敷地坪數一萬六千二百坪餘を有し本館
は佛國ドリツク式建築にして建坪一千二
百一坪、内列品館坪數九百十二坪餘。館
内は十六の陳列室に區分され、他に中央
室あり、臨時陳列又は講演會場に充てて
る。

〔館長〕 川口知雄〔學藝委員〕 猪熊淺磨
小山源治、猪熊信男、加藤修、源豐宗、
水町和三郎、明石國助、植中直次郎、〔主
事〕 高市二、〔鑑査員〕 松木聰二郎、土居
次義、神田松之助、木越宏
〔觀覽日〕 一月五日より十二月二十五日
迄。一月、二月、三月、十月、十一月、
十二月(午前九時—午後四時)、四月、九月
(午前八時—午後五時)、五月、六月、七
月、八月(午前八時—午後五時半) (觀
覽料) 大人二十錢、子供十錢(特別觀覽
料) 一人一圓、團體(二十人以上) 大人一
人十錢、小人五錢

大禮記念京都美術館

京都市左京區岡崎公園
電上六七〇〇七〇二〇

今上陛下の御即位の大禮を慶祝記念し
奉るため京都市に於て建設せるもので、
昭和六年起工し、八年竣工。爾來同市並
に同館主催の美術展覽會を開催する他一
般美術團體に陳列室を貸與する。尙十五
年七月より明治以降の新美術品の陳列を
開始し、毎月陳列品替を行ふ。本館は二
階建鐵筋混凝土造にして建坪千四百八坪
延坪二千八百三十二坪。

〔館長事務取扱〕 瀨谷薫〔顧問〕 飯田新
七、〔評議員〕 西山卯三郎、竹内恆吉、
太田喜二郎、川村萬藏、鹿子木孟郎、
神坂吉隆、田中和一郎、植田壽藏、清
水六兵衛、菊池完爾、西村力、〔主事〕
西野嚴三

同館規則抜萃

第一條 本館ハ美術品及美術工藝品ヲ陳列シ
テ一般ノ觀覽ニ供シ其ノ他斯道獎勵ノ用ニ
供スルヲ以テ目的トス
第二條 新美術品及美術工藝品ノ常設陳列
ヲナス(茲ニ新美術品及美術工藝品トハ明
治四十年以後ノ製作品トス)
第三條 臨時ニ特別美術展覽會ヲ開催シ美
術品及美術工藝品ノ陳列ヲナス
第四條 一定ノ期間ニ限リ團體又ハ個人ニ
對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館陳列
室ノ使用ヲ許可ス
第五條 右ノ外美術獎勵ノタメ美術品及美
術工藝品ニ關スル參考資料ノ展覧ヲ爲シ美
術關係圖書ノ閱讀機關ヲ設ケ又講演會映寫
會等ヲ開ク

第二條 本館ハ前條ノ目的ヲ達スル爲本館ノ
所藏ニ係ルモノ及官廳團體又ハ個人等ヨリ
出品アリタルモノヲ陳列シテ一般ノ觀覽ニ

供ス本館ハ一定ノ期間ヲ限リ團體又ハ個人
ニ對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館ノ
全部又ハ一部ノ使用ヲ許可スルコトアルベ
シ
第七條 本館ニ評議員若干人ヲ置ク、評議員
ハ議見アル者ノ中ヨリ市長之ヲ委嘱ス
第八條 評議員ハ重要ナル館務ニ關シ館長ノ
諮問ニ應ジ又ハ意見ヲ開陳スルモノトス
第九條 本館ハ一月五日ヨリ十二月二十五日
迄毎日左ノ時間中間館スル但シ時宜ニ依リ
之ヲ伸縮シ又ハ閉館スルコトアルベシ
一月、二月、三月、十月、十一月、十二
月 午前九時ヨリ午後四時マデ
四月、九月、午前八時ヨリ午後四時マデ
五月、六月、七月、八月、午前八時ヨリ
午後五時三十分

大阪市立美術館

大阪市天王寺區茶臼山町天王寺公
園内電天王寺六〇〇、六一〇一

古美術品の常設展觀と一般美術展のギ
ヤラリーとしての設備を兼ね、大阪市が
工事に多年を費し昭和十一年五月落成し
た。同皇帝展作品の陳列を以て閉館し、
古美術の常設展觀は同年九月より正式に
閉館した。建物は鐵筋コンクリート造、
三階建て地階を加へ、建坪一二二二坪、
延坪三三五五坪。陳列室、展覽會室、講
堂、圖書閱覽室等より成り、陳列室は同
館の蒐集保存に係る古美術品—繪畫、彫
刻、美術工藝、書蹟、考古學資料等を常
設展觀し、展覽會室及講堂は一般美術展
並美術講演會、講習會等の開催希望者に
貸館し、又圖書閱覽室に於て同館所藏の
圖書を規定に従つて一般の閱覽に供す

〔館長〕 上野直昭〔主事〕 高津滿、望月
信成〔學藝員〕 小林太市郎、藤井源一
片山喜之、前田泰治〔囑託〕 廣瀨治兵
衛、上田令吉、堂谷憲男

奈良帝室博物館

奈良市奈良御料地

明治二十二年奈良帝國博物館設置せら
れ同二十八年四月開館。三十三年官制の
改革と共に現稱に改められた。陳列品は
古社寺所有の國寶にして政府の命令出陳
に依るもの、及社寺、個人その他よりの
寄託による古美術品を蒐めて居る。概し
て佛像、佛畫が多く、殊に彫刻は上古よ
り鎌倉期に至る優秀品が多數陳列されて
ゐる。出陳物を美術品、歴史品、美術工
藝品及書蹟の四部門に分ち、彫刻繪畫等
の美術品は各室別、時代參考順に陳列し
歴史品及美術工藝品は箱別とし、類聚陳
列をしてゐる。館内は十三室に分れ、第
一室より第三室まで彫刻、第四室より第
七室迄工藝品、第八室は歴史品、第九室
より第十二室迄繪畫、第十三室書蹟の順
に陳列し、この中第一室より第八室に至
る彫刻歴史及工藝品は六月、十二月の二
回に定期の陳列替を行ひ、第九室以降の
繪畫、書蹟は毎月陳列替を行ふ。尙、毎
月第一、第三土曜日の午後陳列品に即
しての解説的講座が開かれる。官制、社
寺寶物受託規程等は東京帝室博物館の項
参照。

〔館長〕矢島正昭〔御用掛〕大宮武麿〔鑑査官補〕龜田孜、松島順正〔學藝委員〕中村雅真、新納忠之介、梅原末治

〔觀覽日〕一月三日より十二月二十五日まで、午前九時より午後四時迄、但し季節により多少伸縮する〔觀覽料〕大人十錢、小人五錢

朝鮮總督府博物館

京城府 光化門通景福宮内 電光化門六六一

大正四年、施政五週年記念朝鮮物産共進會の開催に際し、京城舊王宮景福宮構内に新築した美術館を中心とし、同構内の舊宮殿をも併せ利用して同年十二月開館に及ぶ。本館陳列品は、朝鮮石器時代金石併用時代の遺物、樂浪帶方郡發掘品、三國時代、新羅統一時代の遺物、高句麗時代の古墳壁畫、高麗時代の陶器、李朝時代の書畫、陶器、漆器及び中央亞細亞の發掘品等で、朝鮮各時代に互る美術考古資料約一萬四千四百餘點が蒐集されてゐる。

〔主任〕藤田亮策〔觀覽日〕月曜日、大祭祝日の翌日、自十二月二十六日至一月三日期間を除き毎日開館〔觀覽料〕一人五錢、引率者を有する學校生徒並軍人は無料

李王家美術館

京城府貞洞町五 電光化門七五

朝鮮に於ける美術獎勵の思召を體し、

朝鮮總督府博物館・李王家美術館

昭和八年十月、德壽宮を公開し、宮内の石造殿を改装して日本近代美術の陳列館とし、日本畫、洋畫、彫刻、工藝の優秀作品を陳列するに至つたが、更に朝鮮の古美術をも一堂に陳列すべき美術館建設の適切なるを認め、昭和十一年八月新館の工事に着手、同十三年三月工を竣へた。新館は石造殿に接近し渡廊下を以て連絡する近世復興式の三階建て、從來昌慶苑内にあつた李王家博物館は之を廢し、同館の藏品中古美術品のみを移管陳列して同十三年六月五日開館し、茲に名稱を改めて李王家美術館と總稱するに至つた。新館は朝鮮の陶磁器、工藝品、繪畫、古瓦、彫像等を陳列し、石造殿は従來通り近代日本美術を陳列して居る。

〔館長〕葛城末治〔屬〕主任 平田武夫、李揆弼〔囑託〕李海善〔委員〕黑板勝美、和田英作、工藤壯平〔評議員〕上野直昭、田中豐藏、藤田亮策、鮎貝房之進、金容禎

美術家團體一覽 (五十音順)

愛知縣工藝協會 名古屋市西區御幸

本町一丁目愛知縣商工館内電本二一五六

愛知縣に於ける工藝の振興並にその産

業的進出を圖り、意匠圖案の調査研究、

講習會、展覽會の開催、宣傳等を行ふ。

工藝通報(月刊)、工藝叢書(年刊)刊行。

〔總裁〕愛知縣知事〔會長〕安積得也

〔理事長〕井澤新〔理事〕岩村新、木村

德壽、中川貞三、赤塚幹也、飯野逸平

愛知社(綜合) 東京市澁野川區田端

町六一二、朝蔭其明方

大正七年創立。愛知縣出身の在京美術

家を以て組織。毎年公募展開催。

〔會員〕日本畫)川崎小虎、服部有恆、清

水有聲、太田一彩、森田沙夷、森村稻門

(洋畫)山本鼎、加藤靜兒、渡邊正太郎、

水野義正(彫塑)毛利教武、加藤顯正、

朝蔭其明(工藝)藤井達吉、長野埜志

愛知商業美術協會 名古屋市西區御

幸本町一丁目愛知縣商工館内

昭和九年創立。商業美術に關する調査

研究、展覽會講習會の開催、紹介幹旋等

をなす、十二年五月第五回展覽會開催。

〔會長〕菅原省三〔理事長〕高橋信三

青丹會(洋) 東京市品川區大井庚塚

町四八三二田坂乾方 電大森二八五一

昭和七年創立。文化學院美術科卒業生

を以て組織。洋畫研究並發表をなす。

〔會員〕千葉明、千頭清策、井村義人、

小平鼎、並河弘、野中榮吉、大橋文子、

大石俊彦、大兼實、田坂乾、安井隆

青森縣工藝協會 弘前市百石町三六

電四七

縣下工藝の振興を圖り、弘前地方の工

藝品製作者、販賣者等を以て組織。年一

回競技展覽會開催。

〔會長〕橋本良雄〔理事〕奈良金一、八

木橋文平、木村勇藏、齋藤藤五郎

〔會員〕九十餘名

青森工藝協會 青森市榮町堤橋前倉

光木工所内 電一七〇一

青森市の工藝業者販賣者を以て組織。

展覽會、講習會の開催、他展への出品幹

旋等をなす。

秋田美術會(綜合) 東京市世田谷區

代田一ノ七六福田豊四郎方

昭和三年、故平福百穂を中心として、

秋田縣出身の在京在縣美術家有志を以て

組織した。年一回東京及秋田市に展覽會

開催。會員六十四名。

淺草美術家協會(洋) 東京市淺草區

千束町一ノ一六山田篤方

昭和十一年淺草區在住の洋畫家を以て

結成す。

アヴァン・ガルド藝術家クラブ 東

京市本郷區駒込林町一四六、四宮潤一方

昭和十一年四月結成。「アヴァン・ガル

ド藝術家の懇親と、それによる相互の啓

發」を目的とし、毎月度談會、講演會等

を開催する。會員は瀧口修造、四宮潤一、

植村鷹千代等の評論家及二科、獨立、飾

畫、一九四〇年協會、エコーロード・東京、

アニメ、ジャン、黒色、動向、フォルム、

リラ等諸團體の作家有志に詩人が加つて

組織してゐる。

池袋美術家クラブ 東京市豊島區池

袋四ノ四四五佐藤方 電大塚二五〇一

昭和十一年池袋及長崎町在住の美術家

が親睦を目的として結成。同年九月第一

回街頭展開催。

〔委員長〕田中佐一郎〔委員〕佐波甫、

佐藤英男、森繁、須藤清彦、葛見安治郎

寺田政明、桑原實

石川縣工藝獎勵會展覽會 石川縣廳

内經濟部商工水産課

縣下の美術工藝、生産工藝、輸出工藝

の發達を圖り、年一回金澤市に展覽會開

催。引續き東京、大阪其他樞要の地に陳

列會を開く。會員二百餘名。

〔會長〕石川縣知事

石川縣輸出工藝振興會 金澤市泉旭

町一丁目

昭和九年創立。縣下輸出工藝の振興を

目的とし輸出工藝品關係者に依り組織せ

らる。見本製作の獎勵、販路擴張等の事

業をなす。

〔會長〕石川縣知事〔副會長〕中川剛毅

〔幹事〕千田專平、高田利守、淺野廉、

能波清二

九四三桑原實方

舊スクラム社改稱。昭和八年度東美校

師範科卒業生により組織。同人相互の研

究機關。

〔會員〕林佐門、高田廣喜、小島勇、桑

原實、樺葉嘉一郎、森繁

一水會(洋) 東京市澁谷區千駄谷五

ノ九〇二木下孝則方

昭和十一年十二月、舊二科會員八名は

「會場藝術を非とし、技術を重んじ、高

雅なる藝術を尊重することに於て一致」

同會を創立した。同十二年十二月東京府

美術館に第一回公募展を開催し、爾後毎

年繼續してゐる。

〔會員〕有馬生馬、池部鈞、石井柏亭、

木下孝則、木下義謙、小山敬三、碓伊之

助、安井會太郎、山下新太郎、高野三三

男、中村善策、田崎廣助、安宅虎雄

同展規則抜萃

一、本展覽會は廣く繪畫の出品を公募す

一、出品は日本に於ける公的の展覽會に發表

されたることなきものに限る

一、一人の出品點數を五點以内とす

一、出品は鑑査を経て之を陳列す

一、出品の鑑査は會員之に當る

一、本會は陳列作品の賣約を取扱ふ。賣約成

立の場合には本會は手数料として賣價の一割

を徴す

英城美術展覽會(日、洋、工) 水戸市

南町いばらき新聞社内 電水戸五〇、三

〇四、三三二

大正十二年五月いばらき新聞社主催で

日本畫展を開催し、ついで昭和五年工藝

部を加へて、爾來交互隔年開催し、日本

畫展は七回、工藝展は四回に及ぶ。昭和十三年に洋畫部を増設した。會員、出品者共に茨城縣出身若くは同縣に縁故ある者なる事を資格とする。主なる會員、第一部(日本畫)横山大觀、飛田周山、第二部(洋畫)熊岡美彦、第三部(工藝)板谷波山、磯崎美亞、等。

〔會長〕いばらき新聞社長〔顧問〕茨城縣知事

岩手美術工藝協會 盛岡市岩手縣工業試驗場内 電五一
昭和八年創立。縣下美術工藝の振興を圖り研究の助成及展覽會指導を事業とし、特に郷土古民藝の現代的再生に努む。

〔總裁〕岩手縣知事〔會長〕同經濟部長 會員八十名

院友俱樂部(日) 東京市下谷區谷中三崎南町日本美術院内 電下谷二五〇

日本美術院繪畫部院友の全員を以て、昭和十二年三月結成。「最近美術界の情勢に顧みて自重を緯とし信念を經とし確固たる精神を以つて藝術の本體を高揚せんとする」もの。年一回院友展を開催する。尙昭和十二年九月會員十名が連袂退會した。

〔委員〕跡部白鳥、柴宗廣、松永成路、村田一橋、安孫子荻聲、柿沼宗居、岡田雄跡

上野會 東京市麻布區飯倉町三ノ一 九田澤良夫方 電赤坂四七八六

昭和十五年十一月創立、東京市内に於て發行する日刊新聞社に屬し多年美術記

事を擔當、又は擔當しつゝある記者を以て組織した。相互の親睦を圖る。

〔會員〕外狩素心菴、遠山孝、金子義男、高原四郎、竹田道太郎、高澤初風、田澤良夫、上島長健、青柳隆治、坂崎坦澤久次、三宅正太郎、宮澤謙一、廣瀬薫六、鈴木武久

烏城會(日、洋) 京都市岡崎法勝寺町一八柴原希祥方
昭和二年創立、岡山縣出身京都在住畫家を以て組織。毎月研究会を開く。

〔常任幹事〕柴原希祥、稻葉春、生戸田英次、會員三十餘名

愛媛美術工藝協會 松山市愛媛縣商品陣列所 電四四五

愛媛縣在住放出身の美術及工藝家を以て組織。縣下の美術及工藝の振興を圖り、綜合展を開催す。

〔總裁〕縣知事〔會長〕縣經濟部長

越後工藝美術會(工) 東京市澁野川區西ヶ原町三十三小澤天來方 電王子三三七一(呼)

舊來の越佐美術會を解消し、新に新潟縣出身の工藝家を以て結成した。昭和十五年一月創立。

大分縣工藝協會 大分市舞鶴町大分縣工業試驗場内 電三三一

昭和十年四月創立。翌年三月第一回展、十三年三月第二回展開催。研究会、講習會の開催、作品集刊行等を行ふ。

〔會長〕大分縣經濟部長

大分縣美術協會(綜合) 大分市荷揚町縣教育會館内 電三六一、一五五

昭和十二年五月創立。縣下美術の向上を圖り、春秋二回の展覽會、研究会の開催等を行ふ。同年十一月第一回展開催。以來十五年秋迄に第七回展開催。

〔會長〕石丸優三〔會員〕約二〇〇名

大阪繪畫會(洋、版) 大阪市南區大寶寺町東之町六〇 川島方

昭和十三年五月、同人の洋畫作品發表を目的として結成。同年大阪新美術家同盟に加盟、十一月第五回同盟展に参加す

〔會員〕谷福太郎、難波架空像、橋上菁兒、細川冬二(版畫)、川島昇太郎、赤松大祐、原田實、岡本誠、尾形海藏、田川覺三

大阪工藝振興展覽會 大阪市西區江之子島、大阪府工業獎勵館内 電土佐堀七九〇、七九一

昭和十四年三月、大阪府下の工藝關係諸團體の聯合により創設。毎年春季には美術工藝展を、秋季には産業工藝及圖案展を開催する。同年大阪府、大阪市、大阪商工會議所、堺市、大阪府工業懇話會大阪府工藝協會の聯合主催の下に第一回展開催

〔審査員〕津田信夫、廣川松五郎、松田權六、岩田藤七、杉田禾堂、中島豐次、黒岩淡哉、山本笙園、鳥野三秋、安原祥窓、根箭忠緣

同展出品規程抜萃

一、本會は昭和十四年五月五日より同月十四日まで十日間大阪市立美術館に於て美術工藝品の展覽會を開催す
一、出品物は創作工藝品とし出品點數は制限せず
一、出品者は大阪府下在住者及大阪府工藝協會員に限る
一、出品物は審査を経て陳列す(一部例外を除く)

一、審査の結查優秀なる出品には左の褒賞を授與す
一 等賞(賞金壹百圓)
二 等賞(賞金五十圓)
三 等賞(賞金貳拾圓)

大阪漆人會(工) 大阪市住吉區北畠東一ノ二四

昭和十五年秋大阪在住の漆藝家を以て組織す。年一回展覽會開催。

〔會員〕小澤裕、川合漆仙、川端近左、川口虛舟、橋外波、安原祥窓、越田尾山、三砂良哉、鳥野三秋、森田誠之助

〔顧問〕柴崎風岬

大阪女人社(日) 大阪市天王寺區上汐町六丁目藤枝春月方

大阪の婦人日本畫家により組織され、毎年大阪三越に於て「大阪女流畫家展」を公募により開催し、昭和十四年六月第六回展に及ぶ。

〔同人〕生田花朝、橋本花乃、星加雪乃

磯紅鸞、大江更剛、村岡小丘、矢島玉女、松本華洋、福田芳穂、小松華影、木谷千種、四夷星乃、嶋成剛

大阪新美術家同盟(洋、彫)

東成區深江中三丁目七田川寛一方

關西に於ける各美術團體の綜合展開催を趣旨とする。昭和八年四月大阪の洋畫團體、神岡會及ZIGZAGが合同して結成、次で彫塑團體クレイ(現在大阪彫塑會)が加盟、同年第一回展開催、同年セクシオン・ガールが加盟、同十二年一月、神岡會が脱會したが、同年四月ロボット洋畫協會及關西水彩畫協會が加盟した。同十三年、ZIGZAGは解散したが、新に六月會、新畫入集團、大阪繪畫會が加盟し、計洋畫六團體、彫塑一團體となつた。同年十一月第五回展を開催。

〔委員〕西阪修、川村譽志那、玉澤潤一、小島大輔、田川寛一、松本銳次、池島勘治郎、桂龍雄、木村孝三、藤田金之助、藤井光、寺田清四郎、川島昇太郎、難波架空像、白石正義、宮島久七

大阪彫塑會

大阪市北區新川崎町一宮島久七方

昭和六年洋畫團體ZIGZAGの彫刻部として成立。翌年獨立して大阪近郊の青年彫塑家を加へ帝展、二科、院展、國展、構造社各系の相互研究團體たる「クレイ」を結成。八年より大阪新美術家同盟展に加盟。十一年十月組織を擴大して大阪彫塑會と改名した。

〔會員〕菅原安男、保田龍門、白石正義、谷本整映、宮島久七、木下正彦、大栗和七、金森勝太郎、木下幹、日高政法、三澤賢三

大阪二科系美術家協會(洋、彫)

大阪市住吉區住吉町一三五桂龍雄方

昭和十四年一月、近畿在住の二科系美術家により組織。毎年一回作品發表展を行ふ。

〔會員〕米良道博、桂龍雄、日高政法外十六名

大阪美術懇話會

大阪市東區大手前之町大阪府情報部内

昭和十四年二月、大阪情報部の勸奨により阪神を中心とする美術家が相集り同會を結成した。趣旨は「會員相互の時局に處する信念を固くし美術の振興と文化の向上に努め以て美術報國の使命を全ふせんとする」にあり、之に必要な事業を行ふ。

〔評議員〕矢野橋村、北野恆富、菅橋彦庭山耕園、福岡青嵐、中村貞以、山口紳平、赤松雲嶺、幸松春浦、矢野鐵山、須磨對水、國枝金三、鍋井克之、赤松麟作

松本銳次、藤堂李三郎、永瀬義郎、岡部晋、青木大乗、小西謙三、古家新、齋藤清二郎、上田曉、保田龍門、中島豊次

〔監事〕庭山耕園、齋藤清二郎

大阪美術展覽會(日)

三越大阪支店內

大阪三越が主催となり、毎春一回開催する日本畫の公募展。昭和十四年三月第

二十五回展開催。

〔鑑査委員〕西山翠嶂、堂本印象、川村曼舟、中村大三郎、宇田萩郎、山口華楊、矢野橋村、福田平八郎、菊池契月、北野恆富、水田竹園、菅橋彦

大阪府工藝協會

大阪市西區江ノ子島大阪府工業獎勵館内

大正十三年十月創立。社団法人組織。各種の工藝家、意匠圖案家及斯道關係者を以て組織。工藝品及圖案の調査研究、展示會開催。月刊「大阪府工藝協會雜誌」を發行する。

〔名譽會長〕大阪府知事〔名譽副會長〕大阪府經濟部長〔理事長〕和田太郎、會員三百餘名。

旺玄社(洋)

東京市板橋區中新井四ノ一二四九小林方

牧野虎雄を主宰とする青年洋畫家の團體。昭和八年より毎春東京府美術館に公募展を開催、出品種目は油繪、水彩、素描、パステル、版畫等。又臨時小品展を開き、夏期講習會を東京及其他地に開催する。

〔同人〕牧野虎雄、市村雄造、岩井彌一郎、新野歡一、遠山陽子、千木良富士、甲斐仁代、川城國司、橋作治郎、田邊嘉重、中出三也、村瀬貞治、梅澤照司、牧野醇、松本茂雄、深澤省三、藤村はつる、小林喜代吉、小林榮、小林繪治郎、坂田虎一、佐藤文雄、樹下行雄、水戸範夫、宮部進、宮芳平、三好俊一、東久世秀雄、森由太郎、東久世小六、鈴木金平、野村

豐子、村尾榮、皆見鳴三、青山襄

〔社友〕二十名

岡崎工藝美術展覽會

岡崎市役所勸業課 電五四九

岡崎美術展の工藝部が昭和二年分離獨立したもの。同市の特産たる石製品、青銅器、木彫等の發達を計るを目的とし毎年同市並愛知縣工藝協會岡崎市支部の共催の下に開催する。十二年十一月第十六回展開催。

岡崎美術展覽會(日、洋) 岡崎市立圖書館内 電六五〇

岡崎市の美術の發達を圖り、大正十二年設立。同年第一回展開催、昭和二年繪畫部と工藝部が分離した。十三年五月第十七回展開催。

〔會長〕(岡崎市長) 菅野經三郎〔委員長〕柴田顯正〔委員〕(日本畫部)板倉晃邦、岡田撫琴、平岩三陽、和田青雨、松原耕嶺、山本一郎、早川菱香、西東采峰

(洋畫部)杉山新樹、山本欽太郎、花島龍雄、平山年(幹事)鈴木實、西尾勉雄 伊藤十一

佳都美村(工)

京都市上京區小山初音町 會見延藏方

明治四十二年神坂雪佳を中心に佳都美術會設立され、後佳都美村と改稱、大正十三年これを解散し殆ど舊同人を以て京都工藝美術會を組織し、同十五年美工院と改稱したが更に昭和十年佳都美村に還稱した。京都工藝美術會組織以後は公募展を開催したが、現在は同人の研究を目的

とする。隨時作品發表をなす。

〔村長〕神坂雪佳〔村員〕伊東陶山、伊東翠壺、岩村哲齋、岩村光眞、一瀬小兵衛、丹羽冬橋、神坂祐吉、神坂松壽、江馬長閑、鈴木表朔、三木表俊、魚野自醒、奥村霞城、山田樂全、清水六兵衛、宮永東山、溝口安太郎、古市垣太郎、皆川月華、山鹿清華〔専務理事〕會見延藏

香川縣工藝美術綜合展覽會〔綜合〕

香川縣商工獎勵館内
縣下の工藝並に美術の發達を圖るを目的とし、豫算の範圍内に於て毎年五月公募展を高松三越で開催す。昭和十三年第五回展に至る。

尙十三年度審査員は、洋畫小林萬吾、日本畫高田美一、西村平間、彫刻新田藤太郎、工藝大須賀喬、磯井如眞、三好眞長等である。

香川縣漆藝會 高松市花ノ宮町香川縣工業試驗場内 電三九〇二

昭和十年一月設立。香川縣工業試驗場の輸出向漆器講習修了者を以て組織。同試驗場指導の下に輸出向一般工藝品の研究をなす。同十二年八月第二回漆藝展開催。

〔會長〕香川縣工業試驗場長〔會員〕二十餘名

華敵會〔洋〕 大阪市天王寺區勝山通二ノ三八赤松麟作方

關西に於ける文展系作家を以て組織。昭和十五年六月京都美術館に一回展を開いた。

〔會員〕新井完、赤松麟作、安藤義茂、太田喜二郎、角野判治郎、伴庄兵衛、吉田苞〔會友〕十名

華陽會〔彫〕 東京市本郷區駒込神明町三四一後藤良方 電駒込一一五五

昭和八年後藤良社中により組織。彫塑研究を目的とし、年一回展覽會開催。

塊藝會〔彫〕 名古屋市西區豪所町三ノ一石川方

昭和八年一月創立。名古屋に於ける新進彫塑家の團體。年一回同市に展覽會開催。

〔會員〕石川清、大嶽茂樹、高藤鎮夫、曾我八代、野々村一男、穴吹義雄、安藤菊男、森本啓史、千木谿山、菅沼五郎

塊人社〔彫〕 澁谷區代々木初臺町五九四安藤照方

昭和十四年春、主線美術協會が解消したので、同會の彫刻部は舊稱「塊人社」に復歸した。展覽會を開催する。

〔同人〕泉谷喜一郎、長谷川塊記、堀江赴、小笠原貞弘、大屋義昌、渡邊徹、成瀬藤治、村田勝四郎、松田尙之、小室達、河内山賢祐、岸崎猪之助、安藤照荒居徳亮、三澤寛

〔社友〕十名

海洋美術會〔洋〕 東京市麴町區丸之内郵船ビル海軍協會内 電丸之内二七九八

昭和十二年五月海軍記念日を機として海軍協會主催、海軍省後援の下に在京洋畫家九十五名の出品を得て、日本橋三越

に海洋美術展が開催され、同六月、海洋美術會發會を決定、次いで同十一月會則の決定を見た。國民海事思想の普及を圖り、毎年海軍記念日を中心として、海軍協會と共同主催、海軍省後援の下に海洋に關係の深い洋畫展覽會を開催する。

〔常任幹事〕石井柏亭、石川寅治、中村研一〔會員〕石井柏亭、石川寅治、長谷川昇、奥瀨英三、田邊至、中澤弘光、中村研一、永地秀太、山下新太郎、小林萬吾、權藤種男、北蓮藏、南薰造、御厨純一、三上知治、三國久、清水良雄

各人社〔綜合〕 京都市押小路當小路角、岡本庄三方

昭和六年結成。藝術一般の研究及會員相互の向上を目的とす。毎年展覽會開催。

〔會員〕〔日本畫〕辻村宗太郎、中村敏郎、赤松稜一、芝正雄、白岩仇三郎〔洋畫〕仲千代二、安田謙、藤井勇、徳永玉樹〔版畫〕稻垣耕四郎〔彫塑〕岡本庄三、吉川常雄、吉田叡示、中村三郎〔工藝〕天野六郎助

董丙會〔日〕 東京市本郷區弓町一ノ二六棚田曉山方

明治四十年故小堀鞆音門下に依りて組織。大和繪系の國史畫研究並に創作を目的とす。大正十年第一回展を催し、爾來展覽會を繼續して昭和十二年三月、日本橋三越に第十六回展開催。

〔會員〕磯田長秋、岩田豊麿、太田天洋、川崎小虎、川船水棹、棚田曉山、山川永

雅、安田叡彦、小山榮達、小堀安雄、森戸果香〔幹事〕棚田曉山

學校美術協會 東京市荒川區日暮里町三ノ一九六 電根岸一〇三〇

昭和二年設立。我が國の小學校、中等學校に於ける圖書手工教育の發達を側面より助成するを以て目的とし、圖書の刊行、教材用具の研究製作供給、本邦圖書手工の海外紹介などの事業を行ふ。月刊「圖書工作」發行。

〔會長〕岸邊福雄〔常務理事〕後藤福次郎〔理事〕板倉賛治、山本鼎、霜田靜志、赤津隆助、石谷辰治郎

型會〔工〕 東京市瀧野川區田端一五五小杉二郎方 電駒込二三六五

東京美術學校昭和十三年度の工藝科出身者を以て組織。十三年銀座資生堂に於て第一回展を開催。

〔會員〕小杉二郎、高橋節郎、黒瀬英雄、金子徳次郎

關西水彩畫協會 大阪市住吉區住吉町一三五 桂龍雄方

昭和十年關西在住の水彩畫家十二名を以て組織。年一回大阪、神戸、京都に於て作品展開催。夏期講習會並に毎月研究会を催し、機關誌「水彩」發行。十二年二月大阪新美術家同盟に加盟。

〔會員〕池島勘治郎、別軍博資、桂龍雄、吉倉三郎、田中丘人、中谷武雄、福井逸郎、江本兼次、南右橋、青野馬左奈、會友六名、研究會員百三十名

鬼面社〔洋〕 東京市淀橋區下落合一

ノ五四〇大久保方 電大塚四〇三七
昭和十四年組織。大久保作次郎を中心とする會で、同人展を開く。

〔會員〕大久保作次郎、足立眞一郎、飯守好雄、石原政之、鹿島大治、小林泰山、長屋勇、大久保百合子、小野彦三郎、利光元代、齋藤廣胖、東海林廣、白井次郎、鱧利彦、鈴木善次郎、高橋弘二、田澤八

甲
岐阜社 (日) 岐阜市大宮町二杉山祥司方
岐阜縣下郷土美術の向上を目的とする公募展。昭和十四年六月岐阜市に第四回展を開催した。

〔同人〕長谷川朝風、川田虚舟、横山春溪、杉山祥司
九夏會 (洋) 東京市世田谷區赤堤町一ノ一五四土屋義郎方
昭和九年創立。春陽會々友の組織する洋畫發表團體。十一年第一回展開催。

〔會員〕岩田榮之助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大澤鉦一郎、鬼塚金華、川端彌之助、兼平英示、齋藤清二郎、眞田久吉、土屋義郎、藤堂奎三郎、久泉共三、森田勝、楊佐三郎、和田茂一、新沼杏一、原精一

九元社 (彫) 東京市世田谷區玉川奥澤町二ノ一四九 電田園調布三一八〇
昭和八年創立。昭和二年より八年までの東美校卒業生有志が結成せる木彫研究團體。毎月研究会を開き又年一回展覽會を開催する。

〔會員〕森大造、高橋泰藏、中野四郎、村井辰夫、鈴木三郎助、松本光史、長谷川宏、長沼孝三、紺谷英儀、齋藤誠一、田近政二、石塚貞男、奥山泰堂、江上正男、水島禎、矢野秀徳〔顧問〕關野聖雲、北村西望、建昌大夢、羽下修三
九阜會 (日) 東京市麴町區九段四ノ一五關尙美堂内
昭和九年關尙美堂に於て太田聽雨、奥村土牛、吉岡堅二、高橋周榮、田中青坪、常岡文龜、寺島紫明、小倉遊龜、森白甫の九名を以て組織。其後徳岡神泉、山口華楊、上村松篁、杉山寧、福田豊四郎加入、現在會員十四名。昭和十三年四月第四回展開催。

九室會 (洋) 東京事務所 板橋區中新井町二ノ六五三伊藤久三郎方、大阪事務所 兵庫縣武庫郡蘆屋樋ノ口新田七四三吉原方
昭和十三年九月創立。二科會の主として第九室を中心とする新傾向作家の親睦を圖り、併せて各自の研究に資する。毎年春季東京に展覽會開催。

〔幹事〕井上賞造、山本直武、北島達夫
〔會員〕青木壽、新井ふみ子、遠藤倫太郎、藤田金之助、原田直康、稻田徳生、稻垣志行、井上覺造、石丸一、伊藤久三郎、伊藤研之、桂ユキ子、川口四郎吉、峰岸義一、村田鏡史雄、中野淑子、浪江勘次郎、難波架空像、小川貞彦、岡田オカイン、高井貞二、高根澤政子、栃木宗三郎、山口長男、山路眞護、山本敬輔、

山本直武、吉原治良、松本俊介、松島スゞ子、村田耕、平松豊彦、戸川串田、山形稔三、西原照子
九州沖繩各縣聯合工藝試作品展覽會
別府市濱脇海岸大分縣殖産館内 電別府二五九
九州沖繩各縣聯合のもとに毎夏公募展を開催。昭和十三年第七回展を鹿兒島市に開催した。

九年會 (洋) 東京市豊島區駒込一ノ八六川端實方 電大塚五〇九六
昭和九年東京美術學校洋畫科卒業生を以て組織。相互の親睦、向上を目的とす。會員四十餘名。
玖窓會 (日) 東京市豊島區池袋町三ノ一四五菅澤幸司方
東京美術學校日本畫科の昭和九年度出身者を以て組織。十三年二月第一回展開催。

京都工藝院 京都市東山區五條坂五丁目 電祇園六九八
昭和十二年一月創立。京都に於ける工藝の八團體、五條會、陶藝協會、綵工會、伸更會、京都漆藝會、金工作家聯盟、若澗社、工友團が京都工藝の革新誕生を宣言して大同團結した工藝の綜合團體。其の結成に伴ひ右諸團體は解消された。同年京都美術館に第一回展を、十三年第二回展を、京都及東京の兩市に開催してゐる。

〔常任理事〕山鹿清華、清水正太郎、〔會員〕〔陶藝部〕伊東翠壺、井上憲吾、井上素明、八田蘇谷、堀岡道仙、中條昇、岡本爲治、桶谷定一、涌波蘇藏、小倉千尋、叶松谷、叶光夫、米澤蘇峰、瀧本蘇嶺、高木鳳子、谷口道仙、中村昌夫、中村幸節、村井瓶生、草加春陽、山澤松篁、國領素夫、寺池旬焔、福井榮印、淺見與志三、中谷小太郎、清水正太郎、北村祥鳳、清水祥次、北村陽山、宮下善壽、新開邦太郎、森野嘉光、清風與平、萬代正一、小華和忠雄、宮川香齋、菊地熊市、勝尾青龍洞、東野春生、高木岩華、杉本正、河原金吾、清水六兵衛、林沐爾、野本正光、林圓山、宮本香齋、諏訪蘇山、〔染織部〕石田玉英、今西良夫、今村冠峰、岩崎眞也、八田泰造、長谷川文平、馬場笛山、小合友之助、川瀬茂次、太田光嶺、龜山善博、横山天明、田中初雄、田中貞造、中村鷗生、長村華城、村田春綠、安武聖果、山崎茶平、山鹿清華、前田良三、福村健、佐野多景夫、岸本景春、皆川月華、島田勝四郎、服部好雅、加納白干、宇野善三、山田誠一、伊藤逸平、山本孝甫、〔漆藝部〕井上彦之助、岩村貞雄、井上金花、番浦省吾、戸島光阿彌、堂本漆軒、奥村究果、止原清、山田豊、迎田嘉亭、水田平一郎、鈴木貞路、山岸表壽、山田一哲、清水美象、板倉未到、尾關成章、山野井益四郎、森元伊造、平山閑水、平石孝、森富義典、松室重信、大藏甲子、竹中徹風、西澤玉舟、湯淺華曉〔金工、木竹部〕今大路長光、高瀬好山、關保美、永峰秀作、面屋庄三、野呂天潤、田中保

藤澤伸一、中野平一
京都工藝美術協會 京都府廳經濟部
内

京都工藝界の各部門、各流派の作家を網羅して相互の聯絡統制を圖り京都工藝界の全面的進出を圖るを目的とす。毎春京都市に工藝展を開催、勸奨を爲して新進作家を世に紹介し、又新興工藝の發達を助長する爲に必要な施設をなす。機關誌發行。

〔名譽顧問〕中澤岩太〔會長〕鈴木信太郎〔副會長〕淺山富之助、田中博、評議員四十一名、會員四百五十名

京都染織繡藝協會(工) 京都市左京區岡崎北御所町三七山鹿清華方

昭和十五年八月創立、京都の染織刺繡藝術の作家を以て組織した、展覽會を開催する。

〔會員〕石田玉英、今西良夫、岩崎眞也、稻垣稔次郎、箸尾清、箸尾昇、八田泰造、長谷川文平、馬場笛山、林雨染、服部好雅、太田光嶺、小合友之助、神坂松濤、龜山善博、加地文次郎、和田豊、横山英明、由井康陽、田中貞造、田中初雄、中村鶴生、中野一夫、村田春綠、村田彌藏、長村華城、野村蝶二、楠田撫泉、山鹿清華、山田江秀、山崎茶平、安武聖果、前田良三、牧野四子吉、福村健、古賀藤々、佐野多景夫、岸本景春、皆川月華、島田勝四郎、元井三門里〔會友〕十名
京都漆藝院(工) 大正十年創立の京都漆光園を昭和二年京都漆匠會と改稱し

たが、同十三年日本漆畫院と合流し、現稱に改めた。漆器部、漆畫部の二部を設け、昭和十四年第一回展を開催した。

〔院長〕戸島光阿彌〔幹事〕板倉未到、西村平市、大野龍之介、中井清隆、山野井藤四郎、冬木春翠、平山樂水〔會員〕五十五名

京都裝飾藝術協會 京都府伏見桃山宗和園

昭和二年七月設立。織染繡及其他の裝飾藝術の向上普及を圖るを目的とす。作品展覽會、互評會、講演及出版等の事業をなす。

〔總務〕澤田宗山〔理事〕箸尾清、狩野秀峰、岸本景春、山田江秀、井田宣秋、小林文齋、吉田玉城、椋田光可、其他會員三十八名、顧問六名

京都青年美術家クラブ(綜合) 京都市河原町二條下ル河原町ビル内

昭和十二年五月創立。京都在住青年作家日本畫六十八名、洋畫三十六名、彫刻四名、工藝二名に依り組織。相互批判を通して懇親裡に京都美術界の革新向上に資せんとするもの。月例研究會の他、講演會開催。

〔幹事〕樋口富麻呂、北脇昇、井上和雄、政田英三、奥村厚一、川口金作、西垣壽西田信、戸島孚雄、木村廣吉

京都彫塑家聯盟(彫) 京都市左京區修學院大林町一六松田尙之方、電山端一〇八

昭和十五年九月創立。京都府に居住す

る彫塑家を以て組織し、一、製作の自肅強制、二、製作に必要な物資の共同購入、三、鑄造部の設備、四、展覽會の開催を目的とする。

〔會員〕西川亨、徳力牧之助、大西三四助、岡本庄三、吉川常雄、田中源三、村井次郎、國安稻香、矢野判三、山本節郎、松田尙之、松尾薫、藤林重治、河野薫郎、芦田政一、島津良藏、柴田利彦

京都陶磁器工業組合 京都市東山區五條通東大路東入 電祇園一二五〇

昭和九年十二月設立認可。製作品検査共同販賣、金融統制等の事業をなし同地方美術陶磁器の産業化を計る。

〔理事長〕淺見五郎助〔副理事長〕藤岡幸二、宮永剛太郎、組合員五百八十五名
京都美術家クラブ 京都市河原町三條朝日新聞社京都支局内 電上七二〇〇

昭和十二年八月設立。京都在住の美術家並評論家の親睦團體。毎月例會を開催

〔理事〕石崎光瑤、宇田萩郎、山口華楊、案本一洋、森守明、黒田重太郎、須田國太郎、松田尙之、清水正太郎、皆川月華〔幹事〕櫻井義臣、佐久間義雄
郷土會(日) 東京市世田谷區松原町二ノ七三〇

大正六年六月錦木清方門下に依り創立昭和六年迄毎年展覽會を催したが以後休止、現在は月一回錦木宅に研究會開催。

〔顧問〕錦木清方〔幹事〕渡邊泰次〔會員〕伊東深水、石井滴水、西田西坡、島居言人、千島華洋、門井掬水、川瀬巴水

龜永吾朗、笠松紫浪、柿内青葉、山川秀峰、山田喜作、松田青風、小早川清、榎本千花俊、寺島紫明、櫻井霞洞
行人社(洋) 東京市淀橋區東大久保一ノ三五七岡田一馬方 電四谷九三七

昭和四年創立。年一回展覽會開催。〔會員〕金原五郎、齋藤二男、安達眞太郎、中村節也、白石隆一、倉員辰雄、新道繁、佐藤章、水船三洋、井上脩、福原達朗、岡田一馬、小林榮

金城畫壇(日、洋) 金澤市兼六公園内石川縣商品陣列所

大正十四年石川縣の畫家に依り組織。〔會長〕青木外吉〔同人〕市川昌徳、原田太致、八田一路、玉井敬泉、高光一也、田邊榮次郎、中村皓、武藤直信、安井雪光、山科杏亭、紺屋光俊、越田勝治、相川松瑞、淺川修三、澤村冬岳、新納琢川會友六十六名、特別會員四十六名

錦巻會 東京市麻布區東町四〇三尾方 電三田四〇七

東美校園畫師範科卒業生を以て組織。本部を東京に置き各地方に支部を設けて會員相互の親睦を圖ると共に技能教育の振興に資するを以て目的とす。毎月雜誌

「圖畫と手工」發行。〔會長〕伯爵平田榮二〔理事長〕三尾與喜藏〔理事〕松岡正雄、三浦直政、倉田三郎、山尾薫明、足代義郎〔幹事〕高橋重雄、橋本興家、岩瀬富士雄、榛葉嘉一郎

銀座美術協會(洋) 東京市京橋區銀

座四丁目三和ビル銀座聯合會事務所内

昭和十一年二月房野徳夫の發起にて發會。同年四月銀座聯合會後授の下に銀座通兩側商店ウィンドウに洋畫展開催。

〔會員〕井手坊也、房野徳夫、鳥津一郎

石川滋彦、木下幹一、川端實、富川潤一

三輪孝、沼田一郎、大貫松三、島崎政太郎、副島秀生、黒田頼綱、眞木小太郎、須田壽、千葉衛、笹岡了一

〔理事〕石川幸三郎、田口勝三郎〔會員〕小杉放庵、荒井寛方、松本委水、福田浩湖、關谷雲岬、阿田蘇水、小林草悦、武井晃陵、河内舟人、大貫鉞心

形家工藝美術會(工) 大阪市東成區勝山道八ノ四〇六

昭和十四年五月創立。工藝美術の向上を圖るを目的とし、工藝の作家及批評家を以て結成す。毎年展覽會開催の豫定。

〔會員〕(顧問) 白川朋吉、入江來布、

今井千尋、羽原秋芳、中條義典、小澤裕

大國壽郎、河合壽成、川口虛舟、橋外波

川邊竹雲齋、津田頑二、根箭忠縁、中島

豊次、黒岩淡哉、山本笙園、安原祥窓、

深田駒吉、越田尾山、古賀藤々、小林美

春、會田裕宣、坂口宗雲齋、柴崎風岬、

鳥野三秋、日比野近三、平松宏泰、杉田

禾堂、中島義夫、芳武茂介

經緯工藝美術會(工) 東京市中野區

昭和通り二ノ七辻方

工藝の研究團體。昭和十五年銀座資生

堂に第五回同人展開催。

〔會員〕伊藤豊、河内三郎、吉田丈夫、

田中芳郎、染川鐵之助、辻光典、篠井欽

治、美輪智一、田澤清美

乾埤社(日) 大阪府枚方町御殿山

電二六二

昭和十四年秋、大阪、東京に第一回の

公募展を開催した。(同人)矢野橋村、矢

野鐵山、小松均(社友)三十二名

園外社(日) 大阪府池田市滿壽美六

五二瀧秋方方

昭和十四年十月瀧秋方を責任者として

創立。あらゆる流派を超越し野逸性ある

作家と共に新日本畫の確立を期する。同

十五年三月大阪及び東京に公募展開催。

〔顧問〕小杉放庵〔會員〕瀧秋方、渡邊

大虚、八百谷大樹、等

建築學會 東京市京橋區銀座西三ノ

一 電京橋一二三二、一二三八

明治十九年四月創立、同三十八年社團

法人組織となる。建築に關する學術技藝

の攻究發達を圖るを目的とす、事業とし

て月刊「建築雜誌」、其他圖書の刊行、

建築に關する調査研究、講演會、展覽會

の開催等を行ふ。

〔會長〕内田祥三〔會員〕一萬三百名

現代工藝作家協會(工) 東京市品川

區上大崎長者九二六一大隅爲三方

昭和十五年創立。新人の發見、新素材

の研究獎勵、我が國固有技法の保存等を

趣旨とす。同年十一月、日本橋高島屋に

公募による第一回展開催。出品者は會員

の推薦によるもの、鑑査合格者等。

〔顧問〕侯爵細川護立、子爵岡部長景

〔會長〕川崎克(常任理事)大隅爲三、

森田龜之助、評議員二十五名、名譽會員

十三名、會員七十餘名

現代美術展覽會(日、洋) 東京市中

野區野方町二ノ一二六八現代美術社内

電中野三五一一

現代美術社主催の綜合展、純眞なる青

年美術家の遺場たらしむるを目的とす。

昭和十四年五月東京府美術館に第二回公

募展を開催。

〔同會第二回展査員〕(第一部) 奥村

土牛、金鳥桂華、中村岳陵、山口蓬春、

福田平八郎、宇田萩郎(第二部) 金山平

三、安井曾太郎、牧野虎雄

古伊賀復興會(工) 東京市品川區下

大崎一ノ九四川崎方 電大崎一〇五〇

大正十年三月發會。古伊賀樓の復興を

目的とす。三重縣上野町字野畑に古代式

登り窯を備へ、宮川香山指導の下に會員

組織に依り製品を分與す。又昭和十一年

武州金澤町野島に登り窯を築造し、克堂

伊賀を創作す。

〔會長〕川崎克

互陽會(洋) 東京市澁谷區若木町三

二土屋實方

昭和十三年創立。春陽會系作家を以て

組織し、毎秋同人展を開く。同年十二月

銀座資生堂に第一回展開催。

〔會員〕中谷泰、土屋實、二見利節、高

木勇次、藤野龍、角南松生、伊川鷹治

興亞美術聯盟(洋) 東京市目黒區原

町一三五一齋藤種臣方(中支事務所) 中

支那上海施高塔路四達路新四達邸一號田

代博方

昭和十四年結成。繪畫を通して善隣友

好の實を擧げることとす。

〔會員〕齋藤種臣、倉垣辰夫、小川智、

池邊一夫、清水七太郎、衛天霖(北支)、

深澤省三(蒙疆)、田代博(中支)

工華社(工) 東京市小石川區宮下町

六〇深瀬嘉臣方

昭和六年設立。工藝の研究並に發表の

團體。年一回展覽會開催。

〔會員〕長谷川昇、唐杉榮四、笠木敦次

郎、内藤四郎、山口寅男、深瀬嘉臣、小

柳今朝一、湯川豊、島崎正二郎、下暢

工畫會(工) 京都市中京區蛸藤師新

町西入梅原榮二路方 電本局一三二三

昭和九年創立。染織圖案家を以て組織

し、工畫の創作に努む。毎年一回以上展

覽會開催。

〔會員〕小合友之助、横山天明、中村鶴生、梅原榮二、山田泰三、麻田辨次、佐藤久吉、平尾周史

工藝技術官協會 商工省化學局内
昭和十三年五月、從來の圖案技術官協會と木漆金工技術官協會とを合併して、新に同協會を創立した。廣く我邦工藝産業の改善發達を企圖し、各方面の調査研究と會員相互の業務上の連絡並に親睦を圖る。會員百二十一名。

工藝濟々會(工) 東京市浦野川區田端町四三八番取方
大正十四年創立。東西文化合一の基礎の上に新しき工藝美術を創造せんとす。隨時展覽會開催。

〔會員〕板谷波山、石田英一、六角紫水飯塚瑛珩齋、保坂光山、仰木政齋、香取秀眞、鹿島英二、河而冬山、桂光春、堆朱楊成、海野清、梅澤隆眞、山本安藝、松田權六、佐々木象堂、都筑幸哉、北原千鹿、清水龜藏、森川紫山

工藝美術作家協會(工) 東京市下谷區谷中眞島町一
昭和十五年十月創立。
會員は「一、舊帝展又ハ文展第四部ニ一回以上入選シ且ツ現在ニ於テ各種工藝美術展覽會ニ自己ノ製作ヲ發表シツツアルモノ。二、前項ニ準スル作家ニシテ本會委員會ノ承認ヲ經タルモノ。」
下記の事業を行ふ。「一、國策ヲ基調トスル工藝美術ノ全般的研究並ニ實行。一、工藝美術各般ニ付當該官廳ヘ建議又ハ諮問ニ對スル答申。一、製作資材等ニ付關係官廳トノ連絡。一、研究事項ニ付各專門機關トノ連絡。一、官設展覽會ヘノ積極的參加。一、新人作家ヘノ援助育成。一、新材料及ヒ新技術ノ研究紹介指導。一、特殊技術保存ニ關スル調査及研究。一、輸出工藝面トノ折衝。一、工藝美術振興ニ關スル講演及出版。」

〔會長〕澤田源一〔顧問〕永井浩、本田弘人、牧橋楯、長谷川公一、香取秀眞、板谷波山、清水龜藏、津田信夫、富本憲吉、清水六兵衛、六角紫水、委員四十餘名

工藝美術批評家協會 東京市京橋區銀座西五ノ三大野法律事務所内 電銀座一三四七
昭和十三年十月創立。「嚴正なる工藝美術批評の確立を期して研究會を開き、シフレットを發行す」。

〔會員〕大山廣光、大島隆一、柴崎風脚
光風會(洋、工) 東京市杉並區西荻窪三ノ一二九太田三郎方 電荻窪二九二三
明治四十五年創立。舊帝展系洋畫家の團體。春季洋畫及び圖案工藝の公募展を開催、昭和十五年二月第二十七回展を東京府美術館に開いた。

〔會員〕石川欽一郎、石橋武助、池上浩石川滋彦、井手坊也、伊藤梯三、岩崎勝平、服部亮英、橋口康雄、遠山清、太田三郎、大野隆徳、岡野榮、緒方亮平、大澤海藏、小川智、和田香苗、和田清、加藤靜兒、梶原貫五、河井清一、川合修二、角野判治郎、花殿巖、栢森義、川端實、吉田苞、武内鶴之助、田中實一、相馬其一、辻永、中澤弘光、中村研一、長原坦上野正之助、黒田頼綱、山形駒太郎、山喜多二郎太、山崎坤象、山下忠平、牧野司郎、小林萬吾、小林鐘吉、小林眞二、小寺健吉、小絲源太郎、江藤純平、寺内萬治郎、跡見泰、赤城泰舒、安達眞太郎、朝井閑右衛門、鮫島利久、鬼頭鍋三郎、清原重以知、南薰造、南政善、三宅克己、耳野卯三郎、水上信雄、清水良雄、島野重之、新道繁、白川一郎、平岡權八郎、森山肇、杉浦非水、鈴木榮二郎、杉村悳

〔會友〕市ノ木慶治、伊藤四郎、池田快三、星野正三、土佐林豊夫、戸塚孝三郎、大河内信敬、數見定一、田村一男、反町博彦、高橋道雄、田中義夫、高宮一榮、高坂元三、中谷ミユキ、中田滿雄、中上川蝶子、山口猛彦、山中清一郎、益山雅衛、藤岡俊一郎、藤井芳子、藤彦右衛門、小林眞三、足立眞一郎、木村八郎、神保和幸、白井次郎、本儀信、森田元子、瀬戸千代三、須田烈太(昭和十四年三月現在)

神戸實用新美術協會 神戸市神戶區榮町通五ノ三〇關山金市方
昭和七年五月創立。舊稱神戸創作圖案協會。商業美術の向上と研究を目的とす。

〔會員〕渡邊正雄、梶原庄之助、土谷勇藤井郁博、青木宣二郎、南正光、樋口芳太郎、關山金市
高知市丸之内高知縣廳商工課
昭和十年三月從來の高知工藝協會を變じて現在の組織に改む。縣下工藝の發達を圖るを目的とし、意匠圖案の改善指導、展覽會、講演會の開催、他展への出品、輪旋販路擴張等を行ふ。會員は工藝作家及販賣者七十五名。

〔會長〕(縣經濟部) 菅野一郎〔副會長〕(商工課長) 寺川喜代治、山本輝美

浩然社(日) 東京市中野區榮町通二ノ二高橋慶伸方
荒井寛方門下に依り組織。毎月研究會を開く。昭和八年第一回展開催、十三年六月第六回に至る。

〔指導者〕荒井寛方〔幹事長〕高橋慶伸〔幹事〕笹沼寛祐、座間素賢、菊地公明、鈴木三朝、佐藤耕寛、廣原浩暉〔會員〕石澤孝輔、磯部白鳩、今田青宏、西木爲雄、常磐大空、大西郷島、渡邊明洋、神田好司、瀧澤直七、田中茂雄、深見月光塚本政子、中村春泥、山下浩榮、仙田青也、關口眞緒、木村光甫、井出岳水、中川博汀、佐藤一鳳、河内舟人、時田南風六川水聲、松本渡、赤松惠園女、田山正臣、黒崎慧美

紅日會(日) 東京市下谷區谷中眞島町七 横山孝行方
昭和十年故松岡映丘門下により創立。大和繪研究並發表機關。同年六月日本橋高島屋に第一回展開催。

〔會員〕渡邊正雄、梶原庄之助、土谷勇藤井郁博、青木宣二郎、南正光、樋口芳太郎、關山金市

高知市丸之内高知縣廳商工課

〔會員〕渡邊正雄、梶原庄之助、土谷勇藤井郁博、青木宣二郎、南正光、樋口芳太郎、關山金市

〔顧問〕服部有恆〔同人〕林雲鳳、橋本明治、河村東次郎、横山孝行、中村徳二、名古屋謙一、森村稻門

皇陶會(工) 東京市目黒區下目黒四ノ八四二安原喜明方

昭和十四年結成。窯業工藝の進展を期す。〔顧問〕板谷波山〔會員〕板谷梅樹、各務鏡三、安原喜明、宮之原謙

爐土社(日) 東京市杉並區上高井戸町五ノ一八九〇野田九浦方

野田九浦の業、居仁洞の改稱。昭和十四年四月日本美術協會列品館に於て第五回展を開催。

構造社(彫) 東京市豊島區池袋二ノ一〇九一安永方 電大塚一八四四(呼)

大正十五年九月立體藝術の研究及發表を目的として齋藤素巖、日名子實三の兩人を以て發會、昭和二年東京府美術館に第一回展を開いた。同年平井爲成の入會により洋畫部を設け、次で神津港人が入會した。三年構造社彫塑研究所を開設。

七年九月第六回展の終了後齋藤素巖退會を宣言、會内に紛擾あり、日名子實三、清水三重三が脱會し、一時同會解散を聲明したが、それを取消して事務所を神津方に移し、彫塑研究所を閉鎖した。八年齋藤素巖復歸し、九年會則を改め新會員彫塑部三十三名、繪畫部二十一名を加へた。十年五月齋藤素巖帝國美術院會員となる。六月齋藤、濱田、陽三名を残し彫刻部全會員が一時退會したが内十名は留任。同月神津港人退會、又構造社幹事會

の決議によつて繪畫部を解消した。十年九月寺畑助之丞退會。尙構造社彫塑研究所は十年より再會されてゐる。昭和十五年四月東京府美術館に於て第十三回展を開催した。

〔會員〕河村龍興、中野五一、野村公雄、安永良徳、後藤清一、齋藤素巖、進藤武松、袖月芳、宮地寅彦〔會友〕星野健一、淺沼俊雄、山畑阿利一、小口節二、森本清水、井手則雄

同展規定抜萃
一、本展覽會は毎年五月上野公園東京府美術館に於て之を開く
一、出品の種類は彫塑とし一般出品は點數に制限を附せず
一、一般出品は鑑査の上之を陳列す
一、鑑査及審査は本會々員中より之にあたる

一、一般出品中特に優秀なりと認めたる出品に構造賞を授與する事あるべし
一、陳列場の必要に基き出品物の臺等を本會に於て作成したる時はその費用は出品者の負擔とす
一、賣約せられたる出品に對し賣價の二割を手數料として本會に申受く

曠技會(彫) 東京市淀橋區十二社四二〇吉田宗齋方

東京彫工會が大正十三年解散して日本美術協會に合併後、第七部の牙彫家が大家會を組織、後曠技會と改稱したものである。象牙彫刻の向上に努め展覽會を開催する。

〔委員長〕吉田宗齋〔顧問〕中山昇民、森田藻己、藤田景雲、篠秀一、石錦一坂

〔代行委員〕竹内土生、菊地親章、吉田尙秋、内田祐康〔委員〕安藤文雅、安藤綠山、松田道直、田中秀行、堀志光、平賀明吟、小川流水、今井雅邦〔會員〕三十九名

國畫院(日) 東京市豊島區巢鴨五ノ一四一吉村忠夫方

昭和十年九月故松岡映丘盟首となつて設立。我が民族精神の精華たる古典の素養に基いた新興藝術の創造を目的とす。同十二年四月第一回展開催。同十三年三月松岡映丘逝去するに及び、國畫院研究會を結成以降は展覽會を休止し、研究團體として存続することとなつた。

〔同人〕岩田正巳、服部有恆、長谷川路可、狩野光雅、吉田秋光、吉村忠夫、高木保之助、小村雪岱、遠藤教三、穴山勝堂

國畫會(洋、工、寫眞) 東京市品川區北品川三ノ三一益田方 電大崎三〇三六

大正七年一月小野竹喬、土田麥徳、村上華岳、野長瀬晩花、榎原紫峰の五名は從來の文展にあきたらず、竹内栖鳳、中井宗太郎を顧問として國畫創作協會を設立、爾來毎秋東京及京都に於て協會展を開催し、又入江波光はじめ數名の若い作家を同人に推舉したが、同十五年梅原龍三郎、川島理一郎の兩名を迎へて第二部を新設し更に富本憲吉、金子九平次を加へて彫刻及工藝を同部に置いた。その後會の維持困難となり、昭和三年七月國畫

創作協會は解散となつたが、第二部は其儘存続して國畫會と改稱し、大橋幸吉、梅原龍三郎、川島理一郎、金子九平次、富本憲吉、山脇信徳の舊會員に新に高村光太郎、椿貞雄、河野通勢の三名が参加し、翌四年「第四回國畫會展」を公募の上開催した。爾來同展を繼續して同十五年第十五回に及ぶ。十年梅原龍三郎及富本憲吉は新帝院會員に任命、同年六月川島理一郎は同會を脱退した。同十二年四月從來の會員、會友制を同人制に改む。尙第十四回展には寫眞部を新設し、鑑査には福原信三、野島康三の兩名が當つた。同十四年七月、彫刻は會員總會を開き、繪畫部と「藝術上の見解」を異にする故を以て結束同會を離脱し、清水多嘉示を除いて他の全員が新制作派に合流した。依つて同會は彫刻部を解消した。

〔同人〕(繪畫部) 青山義雄、池邊真喜梅原龍三郎、大森啓助、大谷房吉、仰木茂、仰木ゲルトルード、大淵武夫、柏木俊一、河野通勢、久保守、庫田發、佐藤哲三、佐藤豊吾、清水多嘉示、立石鐵臣、土田文雄、辻愛造、椿貞雄、杉本健吉、中村博、野島照正、長谷川春子、平塚運一、藤田太郎、別府貫一郎、眞垣武勝、益田義信、宮田重雄、宮坂勝、村上巖、馬越樹太郎、山田正、山村誠、山脇信徳山下品藏、香月泰男、中村鐵(版畫部)恩地孝四郎、川西英、平塚運一、ブブノワ、棟方志功(工藝部)石井恆、仰木ゲルトルード、奥村博史、富本憲吉、北出

塔次郎、内藤四郎、福田力三郎、山永光

同會第十五回展出品規定抜萃

一、本展覽會は東京に於て左記の規定に據り開催す
一、本展覽會は何人と雖も自己の作製したる
繪畫、版畫、彫刻、美術工藝品、寫眞(新
設)を出品することを得

一、鑑査審査は本會審査員其の任に當る
一、陳列中の作品を鑑査し卓越せる製品に對
しては國畫會奨學金褒狀を贈る
一、繪畫部の鑑査細則左の如し
一、審査員の過半数に依り入選を決す。但過
半に達せざる時と雖も審査員中特にこれ
を支持するものある時は各員二點以内に
限り入選せしむることを得、此の場合に
於ては支持したる審査員の氏名を發表す
るものとす

一、出品作品に對しては左記の手數料を要す
一、點毎に金五十錢
一、出品作品賣約に對しては賣價の一割但し
工藝は二割を手數料として本會に收むべ
し

寫眞部

一、藝術印畫、應用印畫(裝飾、報道、宣
傳等)と雖も藝術的に見て優秀なるもの
は此れを認む
一、作品大きさは全紙以上とす
但し壁畫の場合は表裝共幅七尺以内とす
一、その他の出品規定は繪畫部規定に同じ

國畫工藝協會

東京市瀧野川區中里
町三三六矢部連兆方電駒込二二一一
正しき認識の上に、現下の情勢に順應
し、工藝本來の使命達成の目的を以て設
立された。

〔會長〕富本憲吉(役員)奥村博史、山

永光甫、内藤四郎、矢部連兆、福田力三
郎、徳力孫三郎、北出塔次郎

國際人形協會

東京市品川區南品川
三ノ一五一七 電高輪六四七〇
昭和十一年十一月發會。日本人形の國
際的進出、人形製作技術の指導、人形の
普及等を目的とす。

〔理事〕有坂與太郎、山村耕花、横山正
三、成舞平兵衛
〔國土會(洋、彫)〕 東京市牛込區若松
町一二三青木具也方

日本主義に立脚して、繪畫、彫塑の創
作に向ふ。同人展を開く。會員十名。
國風畫會(日) 東京市杉並區天沼二
丁目三一

昭和五年十一月創立。倭繪の進歩發達
を圖るを以て目的とす。創立後間もなく
同人一同の謹作に係る伊勢物語繪卷を
陛下に献上す。毎月研究会を開き又隨時
作品發表を爲す。
〔會頭〕子爵入江爲守(幹事)岩田豊磨
〔會員〕安田毅彦、伊東紅雲(昭和十四年
四月二日死去)、磯田長秋、大坪正義、棚
田曉山、川崎小虎、永井幾麻、前田氏實、
小山榮達、荻生天泉、公文蘆淵、兒玉輝
彦

國風彫塑會(彫)

東京市荒川區日暮
里渡邊町一〇四〇石川方 電駒込二六九
七
帝院改組を緒として結成された第三部
會を昭和十五年十一月改稱し、爾後「民
族彫塑の創造と建設」を目標として、公

募展を續行することとなつた。
〔會員〕石川確治、池田勇八、畑正吉、
濱田三郎、大野信藏、吉田久繼、向山峽
路、早乙女龜次、日名子實三、鈴木賢二
國民美術協會 東京市丸之内明治生
命館マーブル内
大正元年、第六回文展洋畫部の出品者
懇親會の席上「美術全部門を包容する協
會組織」の設立が發議され、翌二年三月
創立總會を開催、森林太郎、黒田清輝、
岩村透、松岡壽、和田英作の五名が理事
となつた。同會は作家並美術關係者を以
て組織し、繪畫(日本畫、洋畫)、彫塑、
建築、裝飾美術、學藝の五部を設置し、
藝術家共通の利益擁護並美術の社會的普
及を圖るを以て目的とする。既往に於け
る主要なる業績は大正年間に於ける美術
館建設、美術學校改革、裸體畫取締り、
文展工藝部増設等の美術行政上の諸問題
に關する政府當局への進言及數回に互る
佛蘭西及獨逸現代美術展覽會の開催等で
尙前後十二回に互り本會員の綜合展を開
催したが昭和三年以後中止となつた。
〔理事〕小倉右一郎、黒田鳴心、小寺健
吉、菅原榮藏、津田信夫、西澤笛畝
早苗會(日) 京都市釜座二條下ル
三宅風白方
故山元春泰の遺業を繼承す。年一回展
覽會を開催し、又月次研究会、講演會を
開く。
〔會長〕川村曼舟(參與)山元清秀(評
議員)庄田鶴友、山下竹齋、玉舎春輝、

久保田竹文、林文塘、高橋秋華、岡文壽
船川華州、伊藤溪水、植中直齋、山元櫻
月、中島春鳴、小早川秋聲、柴田晚葉、
古谷一晃(常議員)玉舎春輝、山下竹齋
古谷一晃、堀江春舞、塚本一洋、武田鼓
葉、齋藤紫山、三宅風白、中野草雲、佐
々木春華、藤田哲(幹事)貴道草衣(副
幹事)高木富三、齋藤利秀(會計)谷口
英雄

佐賀縣工藝協會

佐賀縣經濟部商工
課内
昭和十一年設立。縣特産工藝品の産業
化並その海外的進出を圖るを目的とし、
工藝資料の蒐集展示、作品展、競技會の
開催、宣傳等を行ふ。
〔會長〕佐賀縣經濟部長
佐賀美術協會(日、洋、彫) 佐賀市興
賀町精町山口亮一方
大正三年岡田三郎助、久米桂一郎を指
導者として、佐賀縣出身の美術同好者に
依り組織。郷土美術の啓培を趣旨とす。
年一回公募展開催。會員三十五名。
臯月會(工) 東京市豊島區駒込三ノ
三九九山本安曇方
昭和十一年五月第一回展開催。十四年
六月第四回展開催。會員の新作を發表す
る。

〔會員〕板谷波山、石田英一、飯塚琅玕
齋、六角紫水、保坂光山、仰木政齋、香
取秀眞、桂光春、鹿島英二、河面冬山、
堆朱楊成、都筑幸哉、海野清、梅澤隆眞
山本安曇、松田權六、佐々木象堂、北原

美術家團體一覽

千鹿、清水龜藏、森川紫山
彩交會(日) 名古屋市熱田區玉ノ井町八二石川英風方
大正十年創立。舊名愛土社。名古屋市在住及同市出身にして京都に在住する京都繪畫專門學校卒業生を以て組織。
〔會員〕(名古屋部) 織田杏逸、和田青雨、石川英風、大岩聚星、大竹敬康、喜多村光穂、山田政春、奥村華珪、小寺推古、青木草生、清水顯三、淺井正臣、塚本香湖、渡邊壽、松本竹根、鬼頭篁、臼杵香穂、山本光文、鶴崎熊太、安藤美靈、豊島司城、野倉棋仙、菅沼寛(京都部) 岩佐古香、佐藤空鳴、奥村紅稀、高井孤邨、廣本進、余語可山、新見虛舟、高木勇、服部文幸、大獄知弘、横江正義

埼玉縣工藝協會 埼玉縣廳商工課
昭和九年七月創立。縣下工藝的產業の發達を圖り業者約三十名を以て組織。展示會、講習會の開催、出品斡旋、意匠圖案の配布等をなす。
〔會長〕(經濟部長) 遠山信一郎
催青會 東京市品川區大井伊藤町五七七七 渡邊進方
昭和十三年二月創立。畫家、彫刻家の交遊團體。同年神戸市に小品展を開き、同十六年二月東京資生堂に於て第二回展を開催した。

〔會員〕 伊川鷹治、池田榮一、石井了介、渡邊進、谷とし子、津谷鹿市、中西義雄、奥田まち子、岡村進、山崎省三、山本鼎、政森敏男、湯尾留吉

綵交會(日) 東京市麴町區九段四ノ一五關尚美堂方 電九段二六〇二
清尙會の解散後關尙美堂が主催となり、結成した日本畫の新發表團體。
〔會員〕 磯田又一郎、橋本明治、西村卓三、西山英雄、奥田元宋、奥村厚一、加藤榮三、村田泥牛、山本丘人、新井勝利、三谷十糸子、菊池隆志
挿繪俱樂部 東京市澁野川區田端町四〇四岩田專太郎方 電駒込二八九〇
昭和十一年五月創立。挿繪の向上並挿繪畫家の權利擁護を以て目的とす。同月著作權審議會に著作權法中に挿繪に關する條文を加へられ度旨の決議書を提出した。

〔顧問〕 筒木清方、小杉放庵〔書記〕 吉田貫三郎
讀叢美術協會(日、洋) 高松市兵庫町古木堂本店内 電二七〇一
昭和四年創立。地方美術の向上發達を圖る。毎年一回公募展を開催し、講習會、寫生會等を行ふ。昭和十二年二月高松三越に第八回展開催。

〔會員〕 井川敬逸、小西光雄、高橋正三、谷口國介、神内正芳、岡田季雄、黒田純二、小川誠一、高木靜雄、高尾雄次、中村重幸、本多一郎、藤田四郎、河部基一、平井爲成
三春會(洋) 東京市本郷區森川町四二野崎方
昭和三年度東美校洋畫科卒業生を以て組織。十四年六月東京府美術館に第六回

展開催。
〔會員〕 岩田芳助、伊勢幸平、波多野勝好、二宮不二磨、和佐良顯、大澤昌助、奥村義雄、加藤顯清、飯島誠二郎、勝見謙信、田中致美、田中孝夫、田淵巖、竹田讓、中井惣之助、野崎龍雄、山村孝太郎、山口猛彦、安田岩次郎、丸山清六、松原勝、福島順之助、小松原義則、天野武吉郎、淺井景一、佐藤文雄、佐藤功、佐川源治、三木辰夫、加藤久幹、原田直康、關谷陽、杉山榮、鈴木重成、林清三都工美會(工) 大阪市住吉區北畠東一ノ二四汎工藝社内
昭和十五年四月創立。東京、京都、大阪の三大都市に在住する工藝家を以て組織し、汎工藝社主宰柴崎風岬が會の運用を計り、年一回展覽會を開く。
〔贊助員〕 板谷波山、香取秀眞、津田信夫、沼田一雅、清水六兵衛、山鹿清華、戸島光阿彌〔會員〕 五十餘名
山南會(日) 京都市右京區太秦組石町徳力方
故土田麥徳の門下が昭和十四年十一月結成した會で、研究並に發表を行ふ。
〔會員〕 稻田麥楓、徳力富吉郎、築地徹三、荻原涌石、恩田耕作、粥川伸二、川勝一止、松山政春、丸岡比呂史、福岡豊四郎、小松均、木村揚照、清水旬平、吹田草木

〔主事〕 上田儀一
産業美術振興運動廣告美術作品展覽會 大阪市北區堂島大阪毎日新聞社事業部内 電北五五〇〇
大每事業部の主催する産業美術振興を目的とする展覽會で、年一回新聞廣告圖案並にポスター圖案及び染織圖案の懸賞公募による展覽會を開催す。昭和十四年春東京大阪に第八回展を開催。
燦本社(日) 東京市板橋區中村町三ノ六二二東谷桃園方
大正十五年五月創立。東美校圖畫師範科出身の在京日本畫家有志を以て組織。年一回展覽會開催。

〔會員〕 穴山勝堂、山田義雄、東谷桃園、松垣露夫、小林澄心、福宿一穂、中居良次、藤原芳春、伊藤昇、山田武、石井進原竹男、志津輝雄、永山利男、大橋太郎、川合清
四元莊(洋) 東京市澁野川區東大久保一ノ三五七鈴木繪畫研究所内
昭和十一年十月鈴木千久馬門下に依り組織。

〔會員〕 西山翠嶂、筒木清方、菊池契月、結城素明、上村松園、小杉放庵
産業工藝社 大阪市浪速區惠美須町二ノ一四六 電戎一九四、七五二
京阪神地方を中心とし、産業工藝に關する調査、指導獎勵、海外紹介を行ふ。毎月研究会を開催し、機關誌「産業工藝」の編輯をなす。

〔主事〕 上田儀一
産業美術振興運動廣告美術作品展覽會 大阪市北區堂島大阪毎日新聞社事業部内 電北五五〇〇
大每事業部の主催する産業美術振興を目的とする展覽會で、年一回新聞廣告圖案並にポスター圖案及び染織圖案の懸賞公募による展覽會を開催す。昭和十四年春東京大阪に第八回展を開催。
燦本社(日) 東京市板橋區中村町三ノ六二二東谷桃園方
大正十五年五月創立。東美校圖畫師範科出身の在京日本畫家有志を以て組織。年一回展覽會開催。

〔會員〕 穴山勝堂、山田義雄、東谷桃園、松垣露夫、小林澄心、福宿一穂、中居良次、藤原芳春、伊藤昇、山田武、石井進原竹男、志津輝雄、永山利男、大橋太郎、川合清
四元莊(洋) 東京市澁野川區東大久保一ノ三五七鈴木繪畫研究所内
昭和十一年十月鈴木千久馬門下に依り組織。

〔會員〕 伊川鷹治、池田榮一、石井了介、渡邊進、谷とし子、津谷鹿市、中西義雄、奥田まち子、岡村進、山崎省三、山本鼎、政森敏男、湯尾留吉

〔會員〕 伊川鷹治、池田榮一、石井了介、渡邊進、谷とし子、津谷鹿市、中西義雄、奥田まち子、岡村進、山崎省三、山本鼎、政森敏男、湯尾留吉

〔會員〕 伊川鷹治、池田榮一、石井了介、渡邊進、谷とし子、津谷鹿市、中西義雄、奥田まち子、岡村進、山崎省三、山本鼎、政森敏男、湯尾留吉

〔莊首〕鈴木千久馬〔同人〕倉員辰雄、安藤信哉、新道繁、外十三名

四行會(洋) 東京市豊島區池袋四ノ四四五齋藤福藏方 電大塚二五〇一
獨立展所屬の作家四名を以て組織。展覽會を開催する。

〔會員〕竹中三郎、中尾彰、佐藤英男、富樫寅平

滋賀縣工藝協會 大津市東浦、縣物産陳列場 電大津一四五七

昭和十年六月設立。縣下工藝の振興、産業的進出を圖り作品展覽會、講演會等を行ふ。

〔會長〕滋賀縣商工水産課長、會員約六十名

滋賀圖案會 大津市東浦、縣物産陳列場 電大津一四五七

昭和三年創立。滋賀縣内各指導機關に於ける圖案關係技術者を以て組織。縣内の物産及工藝品の意匠圖案の向上を計るため展覽會、講演會の開催、現地指導視察旅行等をなす。

〔會員〕深澤和美、村瀬眞治、新井武治、廣瀬義景、坪井明、藤田幸助、松宮寛明、井口俊夫

自由學園工藝研究所 東京市豊島區雜司ヶ谷六丁目

自由學園卒業生を以て昭和五年創立。工藝品の創作並に發表をなし、同八年より、東京、大阪、其他に展覽會を開催し又巴里萬國博に手織物を出品、金、銀賞をうけた。つゞいて紐育萬國博に出品、

その後も工藝品の進出に盡力しつゝ、ある十三年五月以降自由學園北京生活學校に於て中國少女を指導し、工藝品の製作を行ひ一方國內重要都市に再生工藝講習會を催しその指導に當つてゐる。

時習園(工) 京都市東山區五條橋東四丁目淺見五郎助方

大正九年十一月創立。嶄新なる意匠圖案の創作並に其工藝品への應用を研究するを以て目的とし、年一回作品發表を行ふ。

〔顧問〕中澤岩太〔指導者〕霜島正三郎

〔會員〕澤田宗山、稻葉七穂、淺見五郎助、井本米泉、小川文齋、中谷小太郎、池田泰山、淺見隆三、米澤蘇峰、井田宣秋、平井香秋、樫田光可、平野泰三、西澤玉舟、楠田撫英

七絃會(日) 東京市日本橋、三越美術部内

昭和五年創立。毎年一回作品發表をなし、十四年十一月第十回展開催。

〔會員〕楠木清方、小林古徑、菊池契月、安田靉彦、前田青邨〔物故會員〕平福百穂、速水御舟、土田夢徳、西村五雲

七彩會(洋) 東京市大森區馬込町東三ノ八二二長谷川春子方

昭和十一年一月結成。各派七名の女流洋畫家の組織する會。毎年、東京、大阪に展覽會開催。

〔會員〕橋本はな、藤川榮子、三岸節子、佐伯米子、遠山陽子、鳥あふひ、長谷川春子

七人社(圖) 東京市牛込區東五軒町二岸秀雄方 電牛込四二七

大正十三年杉浦非水に師事する七名にて發企、昭和元年東京三越に第一回創作ボスター展開催。圖案、商業美術、挿繪等をなす。

〔會員〕岸秀雄、岸信男、野村昇、新井參夫、關口謙輔、小池巖、金丸重嶺、原萬助、須山浩、田中富吉、毛利滋、小川金重、金田徳郎、野依健、前島誠一

七洋美術會(洋) 東京市蒲田區仲蒲田三ノ九、三木辰夫方 電蒲田二七五六

文部省航海練習所の練習船に便乗した畫家を以て組織する。海洋美術の研究、普及を目的とする。

〔會員〕竹内英雄、内堀勉、北川民次、三木辰夫、中西次郎、松下義晴、宮下仁

靜岡縣工藝協會 靜岡市追手町靜岡縣商工課内

昭和九年設立。縣内工藝の發達を圖り工藝に關する調査研究、展覽會、講演會等を行ふ。

〔總裁〕靜岡縣知事〔會長〕靜岡縣内務部長

靜岡縣美術協會(綜合) 靜岡市綠町

一 地方美術の向上を圖る目的を以て昭和九年靜岡縣出身並在住美術家を以て組織年一回靜岡市に於て繪畫、彫刻、工藝の三部に互る綜合公募展を開催。昭和十四年五月第四回展を開いた。

〔總裁〕靜岡縣知事〔會長〕尾崎元次郎

〔常任幹事〕原川和雄
〔第四回展審査員〕和田三造、石川欽一郎、芹澤隼介

實在工藝美術會 東京市本郷區駒込林町一五五高村豐周方 電駒込一一八二

昭和十年十月創立。從來の帝展第四部の鑑賞本位にのみ向ふ傾向にあきたらず、「工藝の實在性」に新境地を開拓するを目的とす。十一年度より春季公募展、秋季同人展開催。尙十五年度は奉祝美術展參加のため恆例の公募展を臨時中止した。

〔會員〕豐田勝秋、河村喜太郎、吉田源十郎、高村豐周、内藤春治、山崎覺太郎、丸山不忘、新井謹也、佐藤陽雲、木村和一、廣川松五郎

〔會友〕磯矢阿伎良、西村敏彦、大坪重周、金丸重嶺、武穂貞波留、中村董一、山脇敏子、山脇道子、松崎福三郎、深瀬嘉臣、小畑雅吉、清水巖、森羅一郎、八井孝二、渡邊春男、山本壽、會田裕宣

同會第四回展規定拔萃

一、出品は一般より募集す
一、出品の種類は左の如し
一、A 一般工藝品 B 立體圖案 C 平面圖案
一、出品點數に制限を設けず、組合せ品はその全部を以て一點と見做す

一、鑑査は本會々員之に當る
一、優秀なる作品に對しては賞金又は賞を以て表彰することあるべし
一、陳列品は本會に於て賣約を取扱ふ本會は之に對し價格の百分の二十を手數料として徴收するものとす

一、本規則に就て尙不明の點あるときは東京

市本郷區駒込林町一五五 實在工藝美術會
電話駒込一八二 宛問合せらるべし

芝浦工藝會 東京市芝區西芝浦一
東京高等工藝學校内

東京高等工藝學校出身者及び同校關係者
を以て組織、會員相互の親睦を計り併せて
本邦工藝の發展に資するを目的とす
年六回會報發行。

〔會長〕安田祿造 〔副會長〕鎌田彌壽治
〔幹事長〕杉山豊祐、會員二、一〇〇名
支部二十ヶ所

島根縣工藝協會 松江市殿町島根縣
物産獎勵館内 電四四五

昭和九年七月創立。同縣の工藝振興を
計り縣内の工藝家、圖案家及販賣業者を
以て組織し、工藝品及意匠圖案の調査研
究、展覽會、競技會の開催又は助成、内
外展への出品幹旋等を行ふ。

〔總裁〕島根縣知事
下萌會(日) 東京市牛込區若宮町二
九川合玉堂方

明治三十二年川合玉堂門下長流畫塾々
生により組織、毎月一回定期研究会を開
催し、又臨時展覽會を催す。

〔理事〕長野草風、菊池華秋、松本泰水
佐々木尙文、今中素友、兒玉希望、大島
佳山、伊藤馨浦

朱玄會(洋) 東京府下武藏野町吉祥
寺本田南二四〇五栗原信方

會員の新作發表を目的とす、昭和十三
年一月日本橋三越に於て第一回展開催。
〔會員〕宮本三郎、田村孝之助、栗原信

朱弦會(日) 故小堀鞆音の門下が組
織する革丙會の會員の一部を以て結成す
る。大和繪の研究、國史畫の検討を目的
とし、展覽會を開く。

〔會員〕安田敦彦、川崎小虎、川船水棹
磯田長秋、小堀安雄、森戸果香

朱葉會(洋) 東京市淀橋區下落合一
ノ五四〇大久保方 電大塚四〇三七
大正七年創立。婦人の洋畫研究團體、
年一回公募展開催。昭和十四年五月日本
橋白木屋に第二十一回展開催。

〔會員〕飯守米子、長谷川春子、土肥正
枝、遠山陽子、小寺菊子、大久保百合子
大久保爲世、龜高みよ子、吉田ふじを、

谷島豐子、谷貞子、中川幸江、八星三代
秋元松子、木下壽々子、喜多春子、宮崎
美喜、鹽川時子、清水信子、平岩夏子、
伊佐エツ子、一木徵子、徳川禮子、高倉
孝子、仰木ゲルトルド、黒瀬雅子、山
口葉子、町田典子、櫻井その子、島田鉦
子、下田愛子

聚工會(工) 東京市豊島區雜司ヶ谷
町一ノ三四七磯矢阿伎良方 電牛込二三
一四

昭和八年解散の凸凹會々員を中心に昭
和十年六月結成。工藝各科作家の集團、
相互の研究並親睦機關。

〔會員〕磯矢阿伎良、武樋貞波留、田中
武雄、多田茂吉、宮井連平、三好弘、清
水巖、森羅一郎〔地方會員〕八井孝二、
大原彰、武田武文、松崎福三郎、小泉清

一、安部郁二、高見九藏、山本達次〔客
員〕安藤春治

十年社(日) 東京市淀橋區下落合四
ノ一六八石田桃秋方
大正十年度東美校日本畫科卒業生に依
り組織。昭和十年五月銀座紀伊國屋に第
一回展開催。

〔同人〕池田幸太郎、中井三介、石井喜
三郎、平岩三陽、石田桃秋、小野踏青、
畠山錦成、山崎良夫、長谷川路可、柳晴
一、花村晃歎、中村青以、榎本千花俊、
遠藤敦三

春光會(洋) 西宮市神樂町四一伊藤
慶之助方
春光會、新興美術展の出品者で、伊藤
慶之助の指導下にある洋畫家の集團、昭
和九年以降毎年大阪、神戸に展覽會開
催。會員四十五名。

春虹會(日) 東京市日本橋三越美術
部氣附
三越の主催で昭和十年京都在住の畫家
十餘名を以て組織。毎春東京、大阪の三
越に展覽會開催。同十四年第五回展開催。

〔會員〕板倉星光、石崎光瑤、西山翠嶸、
堂本印象、徳岡神泉、小野竹喬、川村曼
舟、金島桂華、竹内栖鳳、中村大三郎、
宇田萩郁、上村松園、山口華揚、窓本一
洋、福田平八郎、榊原紫峰、菊池契月、
三宅風白、三木翠山

春臺美術展(洋、工) 東京市麻布區網
代町一ノ十號内藤葉方、電三田四七八五
岡田三郎助を會長とし本郷繪畫研究所
關係者を以て組織する繪畫、工藝の展覽

會。大正十年同研究所有志に依り赤洵社
繪畫展が組織され同十三年迄四回の展覽
會を開いたが、同十四年之を解散し、改
めて本郷繪畫展を組織し、會長に岡田三
郎助を、副會長に片多徳郎を推して同年
より毎春一回展覽會を開催、昭和五年「春
臺美術展覽會」と改稱して今日に至る。
昭和十三年二月第十三回展開催。

〔副會長〕大隅爲三〔顧問〕和田三造、
辻永、太田三郎、齋藤五百枝〔鑑査委員〕
吉田久繼、中村研一、伊原宇三郎、關口
隆嗣、權藤種男、矢鳥堅土、有馬さとえ
江藤純平、岩田藤七、有岡一郎、鬼頭鍋
三郎、緒方亮平、笹鹿彪、和田清〔常務
委員〕笹鹿彪

春泥社(日) 京都市富小路二條南、
福村方
昭和十二年五月結成。關西の婦人日本
畫團體。同十三年九月京都大丸に第二回
展開催。

〔會員〕生田花朝、丹羽阿樹子、大日三
世子、梶原緋佐子、藤本園子、小松華影
秋野不矩、木谷千種、三谷十糸子、廣田
多津

春陽會(洋) 東京市杉並區和田本町
八三二木村莊八方 電中野四二四七
大正九年秋、藝術の自由を唱へて日本
美術院元洋畫部を脱退した小杉未醒、山
本鼎、倉田白羊、森田恆友、長谷川昇、
足立源一郎の六名は同十一年一月、新歸
朝の梅原龍三郎を加へ、更に九名の客員
を迎へて同會を創立した。發會に際し

會。大正十年同研究所有志に依り赤洵社
繪畫展が組織され同十三年迄四回の展覽
會を開いたが、同十四年之を解散し、改
めて本郷繪畫展を組織し、會長に岡田三
郎助を、副會長に片多徳郎を推して同年
より毎春一回展覽會を開催、昭和五年「春
臺美術展覽會」と改稱して今日に至る。
昭和十三年二月第十三回展開催。

「春陽會は從來屢々見たる如き既成會への社會的對抗として興らず、單なる藝術家の心を以て因縁相熟したるものです」と聲明した。翌年五月上野竹之臺陳列館に第一回展を開き、爾後毎年春季に公募展を開催し、又東京開催後大阪、名古屋等に地方展を催して居る。昭和四年春陽會研究所を開設し十二年迄続いた。昭和十年帝院改組に際し、同會はその試案を提出したが結局新帝展の機構は會の理想に一致せず、其の年不参加を聲明した。

尙山本鼎、山崎省三は離脱して官展に参加、翌年長谷川昇、岡本一平が之に續いた。同十三年當局より文展審査員参加の交渉あり、官展機構に關する豫ての會の意見である綜合案に近い故を以て、中川木村を審査員に送り、爾後協賛の方針を保持して居る。同會自營の春季展には變化はない。

〔會員〕足立源一郎、石井鶴三、伊藤慶之助、今關啓司、岡鹿之助、加山四郎、川端彌之助、木村莊八、國盛義篤、倉田三郎、栗田雄、小穴隆一、小林徳三郎、小杉放庵、田中善之助、高田力藏、鳥海青兒、中川一政、長谷川潔、水谷清、森田勝、横堀角次郎、若山爲三〔會友〕岩田榮之助、上野春香、遠藤典太、小栗哲郎、大澤鉦一郎、鬼塚金華、兼平英示、木下公男、齋藤清二郎、眞田久吉、柴田恕夫、高木勇次、田中壽太郎、田川勤次、土屋義郎、津田正周、藤堂奎三郎、永瀬義郎、中谷泰、新沼杏一、南條一夫、原

精一、二見利節、久泉共三、前田藤四郎、楊佐三郎、吉田達磨、和田歲一
同會第十九回展規定抜萃

一、出品畫ハ當會々員之ヲ鑑査ス
鑑査公開ノ意味ヲ以テ新聞及美術雜誌記者之ニ立會フ
一、陳列中ノ作品ヲ審査シ、春陽會賞金ヲ贈ルベシ
一、出品ハ一般繪畫(素描、版畫ヲ含ム)
一、鑑別手數料ハ一點ニ付五拾錢トス
一、賣約品價格ノ一割ヲ當會ニ收ム
一、東京開會後引續キ大阪及比名古屋ニ於テ開催スルコトアルベキモノトス出品者ハ豫メ是ヲ承認シ置カルベキモノトス但シ出品畫ノ關西往復費ハ當會之ヲ負擔ス

女性人形同人 東京市荏原區戸越一
二五五
昭和十一年發會。趣味涵養のための人形製作を目的とし、年一回作品展開催のほか懇談會、講習會を開く。
〔顧問〕今井邦子、長谷川時雨、與謝野品子、有坂與太郎、會員四十六名
如水南畫會 東京市神田區一ツ橋如水會館内
昭和七年六月創立。如水游心畫談會と稱し如水會員及其家族を以て組織。岸浪百艸居を講師として日本文人畫の創意に努める。同十年二月銀座伊東屋に第一回十二年三月日本橋白木屋に第二回、十四年三月銀座三越に第三回觀賞展開催。十一年四月如水南畫會と改稱、會員六十名

昭和二年創立、京都在住の各部門の工
市商品陳列館内
昭和二年創立、京都在住の各部門の工

藝術家三十八名を以て組織。毎年京都及東京に於て展覧會を開催。
〔會長〕村上宇一〔總務〕霜島之彦〔顧問〕中澤岩太

昭和工藝美術展覽會 東京市日本橋高島屋美術部内
昭和九年創立。舊帝展系作家の集團。作品發表、新古工藝美術の研究等をなす。同年高島屋に於て第一回展を開催、以後毎年展覽會を開く。

昭和みつゑ會 横濱市神奈川區岡野町一三一中央圖畫手工研究所内 電神奈川六二五
昭和十年創立。水彩畫の向上を目的とす。東京其他に於て臨時展覽會、講習會を開催し、全国各地に會員、會友併せて三百餘名を擁す。昭和十五年六月第三回〔春期〕展開催。
〔主なる會員〕山口敏男、桂龍雄、青野馬佐奈、東本春水、古川弘、藤田薰、石野隆
上社會(洋) 東京市豊島區駒込一ノ二八藤岡一方
昭和二年度東美校洋畫科卒業生に依り組織。年一回展覽會開催。

〔會員〕林炳東、張秋海、顔水龍、金貞探、譚連登、都相風、池田幸太郎、石井清夫、猪熊弦一郎、荻野咲彦、染木照、加山四郎、田村義夫、高橋弘二、大館健三、中西利雄、牛島憲之、矢田清四郎、深井修次、藤岡一、小堀四郎、近藤啓二、小磯良平、水上信雄、島野重之、白井次

郎、日高榮聰、森寅雄、森達雄、菱田武夫、橋口康雄、高野三三雄、岡田謙三、青山襄、高嶋功、瀧波恆雄、中川規矩磨、大月源二、杉浦俊雄、永田一脩、荻須高德、山口長男、太刀川英次郎

農鳥社(日) 京都市上京區北野紅梅町山口華楊方
明治四十五年創立の西村五雲、農鳥社は昭和十三年九月五雲の逝去により解散同年十一月六日舊塾生の總意に依り新たに農鳥社を結成し、山口華楊、前田荻郎、西村卓三の三名が總務となつた。研究會展覽會等を行ふ。同人七十五名。

新古典派協會(洋、彫) 東京市世田谷區玉川奥澤町一ノ一九 金子九平次
昭和十一年三月設立。「人間の高尚さと、秩序ある觀念、思想の美しさ」を宣揚する新古典主義藝術運動を起す。十四年より洋畫、彫刻、工藝の綜合展として公募す。同年十二月第五回展を開催す。
〔會員〕金子九平次、蜂須賀年子、片山健吉、土方久功、高橋貞一郎、今西洋、小泉勝世

新簗會(日) 京都市左京區銀閣寺前橋本關雪方 電上四六〇
大正八年橋本關雪門下に依り組織。其後一時解散したが、昭和十年橋本關雪の帝國美術院會員に任命を機とし、有志の發起に依り再興された。昭和十一年十一月、京都大丸に第一回展開催。以來引續き數回開催。

〔指導者〕橋本關雪〔會員〕檜崎鐵香、
 榎崎朱雀、三津川光胖、小笠原彌、川田
 虛舟、宮瀨泉城、竹林愛作、竹内貞親、
 高安龍雲、後藤香島、石塚仙堂、仙波久
 榮、稻垣錦莊、木村杏園、伊藤逸峰、櫻
 文峰、淺野鶴汀、小林直衛

〔幹事〕木村杏園、仙波久榮

新構造社〔洋、彫、工〕 東京府下小金
 井町四四八、三村英一方

昭和十年六月構造社有志幹事會は繪畫
 部の解消を決議したが同部は翌月構造社
 總會を招集、前記の解消宣言を「彫刻部の
 計畫的なる違犯行動と認め」彫刻部會員
 を退會者なりとして決議し、新に會規を
 制定して同年十一月第九回構造社繪畫展
 を公募の上開催した。同十一年七月寺畑
 助之丞を代表とする彫塑團體十七會の加
 盟により名を新構造社と改稱し、更に工
 藝部を新設した。同十四年第十三回展開
 催。同十五年十二月、會員寺畑助之丞外
 六名が退會した。

〔會員〕〔繪畫部〕足立重興、内田正男
 内島親晴、改井德寛、葛西康、倉本七郎
 神山恆、多比羅榮一、武田芳雄、上田重
 正、福崎精哉、三村英一〔彫刻部工藝部〕
 稻本弘之、大泉博一郎、中谷宏運、中森
 遊、スニタケ・タツ

〔會友〕〔繪畫部〕田代一郎、中田博三、
 山本好信、楠本繁、佐藤正也、村田鹿次
 郎、寺尾みづ子〔彫刻部工藝部〕山本博
 加藤春平、岡谷けい子、添田賢朗、鈴木
 勤

〔代表〕三村英一
 新興美術協會 東京市豊島區堀内町三
 ○ 電大塚二五一八

昭和九年二月創立。學校教育に於ける
 圖畫、手工及び作業科教育の擴充を圖る
 を目的とし、事業として月刊雜誌「新興
 美術」を發行し又全國各地に講習、講演、
 研究會等を催す。全國各府縣に支部二百
 三十あり。

〔理事長〕石野隆

新興美術院〔日〕 東京市下谷區竹町
 九五芝垣興生方

昭和十二年九月、日本美術院々友十二
 名が「自由拘束なき新興清新なる藝術を
 揚達する」目的を以て、同院を脱退、結
 成した。尙二名は其後日本美術院に復歸
 した。春季公募展、秋季同人展を開く。
 同十五年東京府美術館に第三回展開催。
 新興美術院賞及平野賞を制定す。

〔同人〕茨木杉風、保尊良朔、吉田澄舟
 田中案山子、小林三季、小林菓居、鬼原
 素俊、芝垣興生、森山麥笑
 〔準同人〕岡田魚降森、並木瑞穂
 〔同友〕淺香金四郎、長谷川優策、町田
 兼人、成田玉泉、渡邊正光、松岡さちふ
 子、平岩長四郎、箱山精一
 新興美術家協會〔綜合〕 東京市杉並
 區井荻町二ノ一

昭和十年七月、ホクト社の玉村方久斗
 笹川巴流夫、平川清藏、院展の大内青圃
 故木村五郎、國畫會の清水多嘉示、大乗
 美術の大内青坡等の八名が發起者となり

「新興精神に據る諸種の藝術運動」及作
 品發表を目的として同協會を創立。十五
 年現稱に改む。毎秋公募展を催す。尙同
 人はすべて會友と稱する。

〔會友〕清水多嘉示、恩地孝四郎、平川
 清藏、大内青坡、大内青圃、小野忠重、
 笹川巴流夫、玉村方久斗、坂井半甫、石
 井勉、鈴木貞、村井麗樹、村上柁夫、山
 崎外郷、五十嵐幸男、藤田悟、永井宏、
 多田正介、大貫悌二、小林良曹、石川清
 田邊徳三郎、二階堂顯藏、藤本美弘、野
 澤武美、濱谷二郎、山田稔、大久保實雄
 井上孟、杵谷精一、明田川孝、杉本幸一
 郎、安井喜一、山脇洋二、鴨幸太郎、伊
 藤喜朔、丹慶俊二、圓山信一、安部幸毅
 廣藤道明、山本衛、神谷万吉、野口慎太
 郎、宇治山哲平、白井保春、木下秀一郎
 松岡正雄、野口道方、横越自入、加藤正
 之、秋山正、陳春徳、松上茂、田中南窓
 清水正博、川村秀次

新興美術協會〔洋〕 大阪市旭區新森
 小路南一丁目一九藤堂全三郎方

昭和七年田中善之助、若山爲三、國盛
 義篤により設立。關西洋畫の發達を期
 し、一派に偏せず、特色ある作家を迎ふ
 るを趣旨とす。毎年一回公募展を大阪及
 其他に開催する。昭和十四年十一月大阪
 市立美術館に於て第八回展を開催。

〔會員〕田中善之助、足立源一郎、齋藤
 清二郎、岩崎又二郎、田川勤次、三木朋
 太郎、木下公男、若山爲三、藤堂全三郎
 西村鳳山、前田藤四郎、和田歳一、國盛

義篤、川端彌之助、伊藤慶之助、佐藤昌
 胤、山川清、飯田衛、加藤啓三、永瀨義
 郎、會友十三名。

新自然派協會〔洋〕 東京市目黒區中
 目黒四ノ一四四一

昭和十年七月小城基門下により創立。
 新自然主義派の研究發達を期す。年一回
 同人展開催。

〔主幹〕小城基〔顧問〕荒城季夫、川路
 柳虹、黒田鴨心、森口多里、田邊孝次、
 外山卯三郎〔會員〕半田丈夫、腰山實政
 金井巳年男、三上亨、小城基、成田廣、
 杉本謙、和田裕介、山内實、田村鳳堂、
 陳獻〔會友〕七名〔同人〕二十四名

新制作派協會〔洋、彫〕 東京市中野區
 桃岡町四八、中西利雄方

昭和十一年七月、第二部會總會は文展
 参加を決議するに及び、從來「帝院の獨
 立帝展の解消」説を主張し來つた猪熊弦
 一郎、内田巖、佐藤敬、中西利雄、小磯
 良平、三田康の六名は結束して同會を脱
 退、脇田和、伊勢正義、鈴木誠の三名を
 加へて七月二十五日新制作派協會を設立
 した。同會は爾後「反アカデミック」の
 藝術精神に於て官展に關與せざることを
 聲明して居る。同十四年七月國畫會の彫
 刻部は結束國畫會を離脱し、清水多嘉示
 を除く他の會員が同會に合流した。

同十四年十一月第四回公募展開催。
 〔會員〕〔繪畫部〕猪熊弦一郎、伊勢正
 義、脇田和、中西利雄、内田巖、小磯良
 平、佐藤敬、三田康、鈴木誠、三岸節子

(彫刻部) 本郷新、吉田芳夫、柳原義達
山内壯夫、舟越保武、明田川孝、佐藤忠
良

同會第四回展規定抜萃

一、出品は油繪水彩にして他の公開展に於て
陳列せざるものに限る。出品點數に制限な
し。

一、一點につき手數料五十錢搬入と同時に納
入の事。

一、賣約の場合は手數料として賣價の二割本
會に納入の事。

新挿畫家集團

東京市板橋區板橋一
ノ二五二七渡邊太刀雄方

昭和十四年冬創立、研究會を開催し、
春秋二回展覽會を開く。

(同人) 渡邊太刀雄、加藤一志、桂木謙
輔、筒井直衛、直木久蓉、木原芳樹、京
川敦美、結束菊彌

新造型美術協會(洋)

東京市本郷區
弓町一ノ二五内藤外次方

昭和九年四月「新傾向繪畫」を標榜し
て獨立美術協會と絶縁せる同志を以て設
立。「新超現實主義」の繪畫運動を起す。

十二年東京府美術館に第五回展開催。

(會員) 島津純一、池ノ内篤人、中野政
行、藤田峰英、内藤外次、瀧口綾子、下
郷羊雄、今井滋、宮城輝夫

新彫塑協會

東京市世田谷區野澤町
一ノ二四一元野木昇一方

昭和十年八月二科會彫塑部の故藤川勇
造門下、早川巍一郎(後に脱退)、太田三
郎、飯島三四二の三會友外九名は故藤川
勇造の藝術的主張を継ぎ新に同協會を組

織、二科會と訣別した。同會は年一回公
募展を開催し又海外作家の紹介につとめ
る。十一年六月第二回展開催。

(同人) 飯島三四二、岩田滿平、太田三
郎、小田定一、菊池一雄、酒見恆、元野
木昇一、中澤安雄、中村米藏、中島武、
岡本庄三

新燈社(日、洋)

大阪市天王寺區勝山
通一ノ五四 電天王寺八一九

大正十一年創立。「洋の東西を問はず、
そのよき處を取入れて我國の新美術とし
て價值ある新日本畫を創作」するを趣旨
とす。毎年東京及大阪に公募展を開催。

昭和十三年十二月第十六回展に及ぶ。

(主宰) 青木大乗(同人) 北村種三、三
井文二、山田皓齋、沖中陽明、上田巳之
助(準同人) 北村泰山、杉原正五、前田
來山、柿谷革王子、坂本正樹、高島登、
佐原公明、仁田末次郎、清水古鑑、湯川
直春

新日本美術會

岡山市中之町四四、
(金剛莊内) 電四二八八

岡山市の金剛莊の經營で、日本畫、洋
畫、彫刻等の作家を名譽會員に推し、展
覽會を開く。

新日本美術聯盟

京橋區木挽町五ノ
一オロン社内 電銀座四〇八八、五三
八四

昭和十五年十一月創立。「我國戦時下
の精神面を積極化し、皇國の風土、民族
の特質に由來する独自の新美術形態を確

立し、新體制の文化的一翼とならんとす
る」。展覽會、講演會の開催、機關誌發行
等を行ふ。

(理事長) 鱧利彦(常任理事) 河越虎之
進、中村新次郎、尾崎三郎、鶴丸昭彦、
葛見安治郎、兒玉徹、佐藤章、淺野薫、
芳賀俊、入江弘(理事) 坪井甚吉、赤塚
時雄、田澤八甲、笹野松夫、小室孝雄、
池田永一路、沼田城住、勝間田武夫、谷
口午二、新居廣治、福田左都夫、加賀山
啓二、村田元、喜入巖、渡邊八洲夫、井
口奈保江、加藤新(顧問) 武藤夜舟、中
井宗太郎

新日本畫研究會

昭和九年六月結成。

新美術協會の項参照。

新日本洋畫協會

京都市大宮通下長
者町下ル獨立美術京都研究所内

獨立美術京都研究所の研究生有志の組
織する作品發表機關。昭和十年九月京都
美術館に第一回展開催。毎秋展覽會を開
く。會員二十名

新版畫會(版)

東京市蒲田區速沼二
ノ二一旭方

版畫専門の團體として、昭和十五年十
一月創立。同月第一回の同人展を開催。

新美術家協會(洋)

東京市世田谷區
世田谷四ノ五〇四松本方 電世田谷三九
三一

昭和四年設立の鉦人社を同七年改稱せ
るもの。會員は二科會々友、二科展受賞
者及び一水會々員、出品者、受賞者等。

一年一回東京府美術館に同人展を開き、十
五年三月第十二回展開催。

(會員) 伊藤久三郎、伊藤繼郎、服部正
一郎、早川國彦、金子博信、柏原覺太郎
大澤昌助、吉井淳二、高田力藏、田中忠
雄、高橋庸男、田崎廣助、中村三樹男、
中村善策、山尾薫明、松本弘二、田邊三
重松、瀧川太郎、寺田竹雄、古家新、藤
井二郎、近藤光紀、荒井一郎、酒井亮吉
新海覺雄、清水刀根

新美術協會(日)

世田谷區喜多見
二藤田復生方 電祐一八

昭和九年六月東京、京都の同志十七名
により新日本畫研究會を結成し、新時代
の日本繪畫樹立を盟約した。展覽會を開
き、十二年五月第三回展に及ぶ。十三年
二月同會々員により新美術協會を結
成、「新時代と共に成長する作家の協力
を求むる意味に於て」新に公募制を採用
した。十五年五月第三回展開催。

(會員) (新日本畫研究會々員) 猪飼俊一
岩崎鐸、海老原南爽、大石哲路、恩田耕
作、神田禎之、久保田善太郎、酒井亞人
島田良祐、柴田安子、福田豊四郎、藤田
隆治、藤田復生、問宮正、柳文男、米田
莞爾、吉岡堅二、中江正美、青木崇美

同會第三回展出品規定抜萃

一、會場 上野公園東京府美術館

一、作品寸法及び點數に制限ありません

一、出品料一點に付金壹圓

一、出品賣約の場合は本會にその二割を手數
として受領いたします

一、本展覽會は公募作品並びに新日本畫研究

會員作品を選考の上陳列いたします。

一、選考責任者 吉岡堅二、福田豊四郎

新瀨邊漫美術協會

東京市荏原區戶越町四七〇佐田勝方

昭和十四年六月、日本畫、油繪、立體、寫眞等の青年作家を以て組織した。展覽會を開く。

〔顧問〕福澤一郎、瀧口修造〔同人〕三十餘名

水彩聯盟(洋)

豊島區池袋三ノ一三六六荒谷直之介方

水彩畫専門の會で、昭和十五年十二月第一回の同人展を開いた。

〔會員〕荒谷直之介、春日部たすく、小堀進、小山良修、荻野康兒、齋藤大、渡部菊二、山中仁太郎

翠紅會(日)

東京市中野區本町通り五ノ一九星野方

大正十四年星野錫、藤懸靜也兩名の幹旋により各畫塾を網羅して結成された女流日本畫家の團體。

〔會長〕星野錫

〔顧問〕藤懸靜也

〔會員〕上原桃畝、陸眞末、山下紅畝、杉本文英、保井正子、永井勝子、西郷松正、木村青畝、笠原冬子、阿久津一枝、宮内英子、江崎照、尾形奈美、山口高子

櫻村靜江、宮島やす子、今井壽々子、谷口侘紀子、小島孝子、安藤ふぢ枝、春日井いく代、青柳喜實子

寸土社(洋)

兵庫縣寶塚局區内米谷和田正節方

洋畫研究團體。昭和八年より略毎年大阪で作品發表を行つてゐる。

〔會員〕池永英夫、井上富三、原崎吾一

和田正節、鋪木順三、高岡義次、高岡徳太郎、竹中良吉、向井潤吉、須藤保、安藤金一郎、木下公男、樋口治、森島忠夫

鈴木總作〔顧問〕榊原一廣〔常任幹事〕和田正節

瀨戶作陶會(工)

瀨戶市大字瀨戶一五二七

昭和四年創立。瀨戶古來の特技、傳統的工藝の再興を趣旨とす。同十二年東京白木屋に第六回展を開催。

〔會長〕水野憲吾〔同人〕大江文象、加藤敏、瀧川七郎、栗本儀三雄、龜井清市、松原廣長、加藤壽郎、水野壽山、〔會友〕五名

瀨戶市陶藝協會(工)

瀨戶市役所産業課内 電二四〇〇

昭和十一年創立。同市の陶工並賛助者を以て組織。事業として陶藝に關する研究、郷土工藝資料の調査、展覽會、講演會の開催、他への出品幹旋、圖書刊行、工藝研究獎勵金の交付等を行ふ。

〔名譽會長〕水野憲吉〔理事長〕齋藤元男

正統木彫家協會(彫)

東京市世田谷區玉川田園調布二ノ七二六澤田晴廣方

昭和十五年五月結成した。木彫の藝術研究、公募展の開催を目的とす。

〔會員〕澤田晴廣、三木宗策、西村雅之

阿井瑞岑、橋本高昇、本田徳義、長澤幸次、圓錫勝二、西山如攝、和田金剛、宗

像庄一郎、佐藤靜司〔會友〕十餘名

世紀美術創作協會(日)

京都市東山區清水三丁目三二四大高爲山方

昭和十五年九月創立。東京及び京都に於て展覽會を開催す。

〔同人〕今尾景春、戸田北遊、大高爲山

奧村紅稀、寺田蘆秋、佐藤空鳴、宮尾光峯

井井會(日)

東京市麴町區六番町六ノ一宮崎政近方 電九段二七四七

井南居宮崎政近の主催する新作日本畫展。昭和十三年三月第一回展開催、以後每春開催ノ豫定。

生産意匠聯盟

大阪市浪速區惠美須町二ノ一四六上田儀一方 電戎一九四七

昭和十四年五月創立。「意匠的研究を中心として實用工藝の新しき展開を促しその科學的生産化と輸出商品化を圖るを以て目的とし研究製作及其の發表を事業の樞軸として活動す」

〔會員〕跡部勇、近藤桂二郎、加藤清澄

中山正人、須藤雅路、寺尾作次郎、上田儀一、柏崎榮助、小池岩太郎、松岡武夫

西村義男、須田幸治、上田健一、安永良徳、村井次郎、鈴木正道、小松榮、西野弘、久野久

成層美術集團

東京市目黒區下目黒三ノ五七六 電大崎三八三三

小林源太郎が主宰する日本畫、洋畫、商業美術等の研究並發表の團體。

〔構成員〕(主班)小林源太郎〔準會員〕

有田秀夫、猪飼俊一、池澤賢、石田一郎

川邊實、神田禎之、込山俊男、高柳博也

森哉一、山崎稜、渡邊修

青丘會(日)

東京市日本橋區通二丁目高島屋美術部内

昭和十一年創始の高島屋五人展を十三年に至り標記の如く改名。同十三年七月日本橋高島屋に第三回展開催。

〔會員〕徳岡神泉、山口華楊、奥村土牛

小倉遊龜、太田聽雨、吉岡堅二、福田豊四郎、山本丘人、上村松登

青松會(日)

大阪市南區日本橋三丁目大阪松坂屋内

東西の日本畫家十五名を以て創立。昭和十年大阪松坂屋に第一回展開催。

〔會員〕伊東深水、服部有恆、堂本印象

徳岡神泉、金島桂華、中村大三郎、中村岳陵、宇田荻郎、矢野橋村、山口蓬春、山口華楊、案本一洋、福田平八郎、兒玉希望、廣島晃市

青樹社(日)

名古屋市外守山町文化村横山方 電守山一一四

舊稱白曜會。毎月研究会を開き、初夏に大展覽會、秋に小品展開催。

〔同人〕横山葩生、安藤美雲、宮坂一義

鳥谷自然、我妻碧宇、加藤長明

青驪社(日)

豊島區要町一丁目三二ノ二小坂勝入方

昭和十三年四月創立。日本畫の研究團體。展覽會を開く。

〔會員〕石井了介、岩田秀雄、太山華環

大村雅祥、川村暢洋、山口實、前坂順三

郎、小坂勝人、淺野正俊、下田舜堂、森元三樹三

青土社(彫) 京都市左京區修學院大
林町一六松田尙之方

昭和三十二年創立。京都在住の彫塑家を以て組織し、毎年春秋二季に展覽會を開く。

〔會員〕松尾薫、松田尙之、徳力牧之助
田中源三、柴田和彦、山本節郎、岡本庄三、蘆田政一、伊勢保三、加藤春平、矢野判三、丸山政次、西川亨、吉川常雄、久保駒太郎

青龍社(日) 東京市大森區新井宿四ノ一〇五三 電大森三〇一二

昭和三十二年川端龍子日本美術院を脱退するに及び、龍子及び其御形染員の制作發表の機關として昭和三十二年六月青龍社を創立。同年東京府美術館に第一回展を開催八年より一般公募制に改め、又同年三月「春の青龍社」第一回を三越に催す。帝

院改組に際し龍子帝國美術院會員となるも社人は「畫業精進の過程の上から、決して二兎を追はず、只管に青龍社に依つて自己を發揮すると同時に、在野團體としての青龍社の主張を一層確立する事に努力する」との旨を聲明した。同社の主張として在來の所謂床の團藝術に對して「健剛なる會場藝術」の創建を唱ふ。

〔主宰〕川端龍子〔社人〕川端龍子、坂口一草、加納三樂、福岡青嵐、山崎豊

〔社友〕安西啓明、渡邊綱雄、小島鼎子、木村鹿之介、佐藤木草、市野亨、時田直

善〔社子〕濱出榮一、利谷双樹、松宮左京、坂籙一、奥田正一、結城正雄、岡部建一郎、大塚榮治、菱田幾久、渡邊龍三、佐藤正一、鈴木茂子、里見公起、上條靜光、直江義泰、内池良男、鍛冶貫一

同社第十二回展出品規則抜萃

- 一、秋期の本展覽會は、作品公募制に依つて一般搬入作品の内より、吾人の主張の健剛なる時代精神に合致するの畫業、或はその將來を期待し得る作品を鑑査採用の上陳列す。開催地は東京、名古屋及大阪。
- 一、入選作品に就ては審査の上薦賞―賞牌並に賞金を交付す
- 一、鑑別審査は社人川端龍子、坂口一草、加納三樂、福岡青嵐、山崎豊之に當る。
- 一、作品面積の制限は付せず。但し整十一尺〔飾枠共〕を超ゆるものは東京及び大阪會場に於て陳列なし得ず。
- 一、出品點數にも制限を置かず。
- 一、出品作品は他の展覽會(個展、藝展をも含む)に公表せざる新作品に限る。
- 一、出品作品にして買約されし場合、本展覽會に於てはその一割及び東京大阪の場合には百貨店の手數料二割を手數料として收納す。但し破約の場合は本展覽會に於てその責任を負はず。
- 一、地方出品者はその荷宛先を左記運送店に連絡するれば便宜あるべし。

青龍社荷扱 東京市芝區新橋二丁目二八
川長運送株式會社(電話銀座二七二三)
清光會(日、洋、彫) 東京市日本橋區
江戶橋二ノ八松慶ビル座右寶刊行會内
昭和三十二年四月創立。東京、大阪に展覽會を開催す。

〔會員〕小林古徑、安田鞆彦、梅原龍三郎、安井曾太郎、坂本繁二郎、佐藤朝山

高村光太郎〔責任者〕後藤眞太郎

清流會(日) 東京市澁谷區圓山町四
櫻井霞洞方

鑄木清の門下四名を以て組織、昭和三十五年六月第一回展開催。

〔會員〕門井掬水、榎本千花俊、寺島紫明、櫻井霞洞

誓我會(日) (會事務所) 京都市御幸町三條下ル(研究所) 京都市上賀茂坂口町蟻ヶ池畔

大正十年水田竹園門下を以て組織。毎月研究會を、年一回展覽會を開催。昭和三十年十一月研究所設立。

〔會長〕水田竹園〔評議員〕水田硯山、安田半圓、幸松春浦〔幹事〕渡邊凌雲〔副幹事〕小林柏陽、會員七十餘名
齊々會(彫) 東京市板橋區練馬南町一ノ三四七一眞鍋忠行方

東美校彫刻科の最近の卒業生を以て組織。昭和三十二年第三回展開催。
〔會員〕岩井藤吉、伊藤三子雄、井上信道、石橋史郎、堀田巖美、渡邊一八大、高橋英吉、山内皓臣、眞鍋忠行、佐伯留守夫

絕對象派協會(洋) 東京市中野區鷺ノ宮五ノ四〇七山本方
昭和三十二年一月二科會出品の新傾向作家五名にて創立。同年日動畫廊にて第一回展開催。

〔會員〕廣幡憲、齋藤義重、高橋迪章、鷹山宇一、山本教輔
染織技術官協會 商工省工務局内

昭和五年六月創立。各府縣主任染織技術官、地方染織關係試驗場並講習所の場長及所長並染織關係技術官を以て組織。染織工業の改良發達を圖る爲必要な調査研究をなし、併せて會員相互の業務上の連絡並に親睦を圖るを目的とす。會員百二十名。

染織作家東京會 東京市板橋區豐玉北四丁目三ノ二般若若弘方

昭和十五年十二月結成した。染織美術研究、公募展の開催を目的とす。

〔會員〕磯部陽、般若若弘、長安右衛門、渡邊春男、鷲田うめえ、鹿島英二、鹿島守久、金網和子、河合研二、河合隆三、川見ス、四田州宏、高久空木、武樋貞波留、田村千恵、巽勇、長濱重太郎、中村妙子、上野斌郎、大坪重周、大野玉枝、大富準男、熊谷重太郎、熊谷吉郎、山形駒太郎、山岸堅二、山脇道子、矢部連兆、山田文司、二口志保子、古戸忠、小卷英一、遠藤順治、櫻井霞洞、喜多村榮太郎、木村和一、木村康三、篠原淑子、廣川松五郎、平野利太郎、若澤銜介、鈴木福富

染織刺繡作家協會 東京市赤坂區青山南町四ノ一大槻一雄方
染色、織物、刺繡の研究を目的として昭和三十二年創立。展覽會を開く。

〔常務委員〕山形駒太郎、齋藤五百枝、木村和一、大槻一雄、遠藤順治
閃人社(日) 東京市品川區大井倉田町三四一九濱倉清光方

伊東深水の朗峯畫塾々生有志に依り組織、昭和十二年五月第一回展開催。

〔會員〕池田輝治、濱倉清光、津村新太郎、植草保二郎、福山美都夫、遠藤燦可佐伯春虹、澤井一三郎、鈴木康之

全關西洋畫協會 大阪市住吉區天王寺町三〇七三塚口方 電天王寺八二五九

〔特別會員〕濱田葆光、國枝金三、黒田重太郎、鍋井克之、横井禮市

〔會員〕藤井二郎、福島金一郎、古家新早川國彦、伊庭傳次郎、飯田清毅、伊谷賢藏、伊藤繼郎、石丸一、岩崎重雄、小出卓二、小出三郎、松本鏡次、米良道博

向井潤吉、中村眞、錦義一郎、西村五郎小野藤一郎、田川寛一、高岡徳太郎、山村孝之介、辻愛造、塚口正一、渡邊造酒三、山本直治

全國商業美術教育協會 東京市牛込區早稻田鶴巻町早稻田實業學校内 電牛込七五

昭和九年十月實業教育五十周年記念事業の一つとして東京府下商業學校聯合會の主催で上野松坂屋に於て第一回商美展を開催、翌年又開いたが、十一年四月全國商業學校百一校の聯合に依つて本協會を設立した。事業として年一回展覽會を開催、會報及圖録を發行し、又商業美術に關し各地と聯絡し教材の交換、頒布等

を行ふ。

〔委員〕下記九校の職員。早稻田實業學校、府立第一商業學校、府立第三商業學校、淺草女子商業學校、三重縣松阪商業學校、京北實業學校、市立京橋商業學校

昭和第一商業學校、宇都宮市商業學校 全日本産業美術聯盟 東京市牛込區東五軒町二 電牛込四四二七

昭和十一年十月創立。各種商業美術家の團體を以て結成す。

〔委員長〕杉浦非水〔常任委員〕多田北鳥、山名文雄、岸秀雄〔加盟團體〕H・L圖案研究會、N・Cデザイン研究會、

構圖社、七人社、資生堂廣告美術研究會新圖案協會、中央圖案家集團、實用版畫美術協會、東京廣告美術家俱樂部、東京印刷美術家集團、東京包裝美術協會、銀座産業美術研究會、北海道商業美術家協會、靜岡商業美術協會、大阪商業美術協會、關西廣告美術協會、商業美術聯盟、

新廣告美術作家同盟、日本新美術家協會神戸創作圖案協會、廣島商業美術家協會北九州商業美術家聯盟、長崎商業美術協會、熊本ボスター研究會

梳風會(日) 東京市荒川區日暮里町九ノ一二四

故鳥崎柳場の榻々亭塾門下一同により組織、大正二年以來隨時展覽會を開いた。

〔幹事〕清田柳莊、木鳥柳鶴、石川綠雨高橋樞場、仲村眞齋 疎約會(日) 大阪府豐中市新免北通四丁目瀧秋方

昭和十三年九月創立。毎年春秋二回展覽會を開催する。

〔會員〕生田花朝、内田稻葉、梶川眞人草刈樵谷、小松均、菅橋彦、菅江白華、園田柘二、立松玉泉、瀧秋方、津田青楓

西田逸堂、宮本頌、矢野鐵山 楚人社(洋) 札幌市北七條西五丁目能勢眞美方 電一六七六

昭和六年創立。主として札幌在住の洋畫家を以て組織する。同十二年五月第四回展開催。

〔同人〕今田敬一、繁野三郎、能勢眞美久保守、山田正、伊藤信夫、大森滋、齋藤尚、本間紹夫〔社友〕十六名 艸園會(洋) 大阪市浪速區西關谷町一ノ八黒田方 電戎三〇一八

大正十五年創立。當時の會員は伊藤慶之助、奥村正三郎、小西謙三、大石輝一

和田茂一、辻愛造等で展覽會、講習會を開催し、又研究所を經營したが昭和八年NIGANGと共に大阪新美術家同盟を創立、以後同展に参加したが、十二年一月同盟を脱退した。同十三年十一月第九回展開催。

〔會員〕抱康子、黒田繁成、松本鏡次、前田藤四郎、田川寛一、田川勤次、和田茂一、三崎孝雄、土岐流司、小西清太郎

西雅司、大石輝一、田中惣三郎、三崎六郎、六條篤、浦久保義信 草芽會(工) 京都市東山區山科竹花塚本方 電山科一一五

昭和五年創立。京都高等工藝學校圖案科卒業生有志を以て組織。工藝各種の研究團體。八年東京に於て第一回展開催。

〔同人〕川那部澄、塚本繁、赤澤鏡太郎峯親吉、加藤八洲男、宮永友雄 艸兒社(日) 京都市伏見區深草正覺町七ノ四西山英雄氣付

京都繪專學校の卒業生、在學生有志を以て組織。昭和十二年京都大丸に第二回展開催。

造形美術學會 東京市京橋區西八丁堀一ノ二 電京橋二三五九

横川毅一郎を主事として昭和十五年一月創立。現代美術研究部、美術史學研究部の二部を設け、美術文化諸般の研究發表を行ふ。

創元會(洋) 東京市神田區東松下町二小柴方 電浪花四〇六一

昭和十五年十二月創立。「美術本來の精神に徹し、我が國文化の向上發展に寄與する。」公募展覽會を開催する。

〔會員〕阿以田治修、安宅安五郎、大久保作次郎、金澤重治、小柴錦侍、佐竹徳次郎、鈴木千久馬、中野利高、矢鳥堅土、柿木久太、吉村芳松

創元美術協會(日、洋) 臺北市京町一ノ三八古川義光方

昭和十三年創立、文展、二科、獨立等各派の出品者を以て組織す。十五年第一回展開催。

〔會員〕古川義光、久保田明之、飯田實雄、蒲地薰、宮田彌一郎、横田太郎、吉見庄助、秋本好春、名島實、有川武夫、

小田部三平、大賀湘雲、宮田金彌、染浦三郎

創造美術協會(洋) 堺市甲斐町西四丁目一六玉澤方

昭和十年創立。舊稱セクション・ゲール。大阪新美術家同盟に加盟し、同盟展に参加のほかセクション・ゲール展及小品展を開いたが、十三年大阪新美術家同盟を脱退。爾來毎年秋期大阪市立美術館に於て會員の作品發表展を開催、十五年一月現稱に改め大阪松坂屋に記念小品展を開催した。

〔會員〕上島龍、河野通紀、小島大輔、小島詰治、小林武夫、下高原龍巳、高須操、高橋進、玉澤潤一、田村譽志那、永田禎彌、西坂修、長谷川初女、堀澤好一口久一

蒼原會(洋) 東京市神田區淡路町二ノ一水谷景房方 電神田一三二五

大正十一年日本水彩畫會研究所の小山良修、富田通雄、中西利雄等が創立した東京三脚會を同十三年改稱せるもので水彩畫専門の研究團體。

〔在京本部會員〕馬場重次郎、不破章、橋口竹夫、小山良修、水谷景房、丸山東美男、松田寅重、中西利雄、野口健司、岡田正二、齋藤大、富田通雄、山中仁太郎、山崎政太郎、荒谷直之介、岡田節男、野澤潤二郎、相澤光朗、藤江志津、本多信彦、福田建夫

菟膏社(日) 京都市左京區下鴨中河原町七一池田遙村方 電上六六六〇

昭和九年創立。竹杖會内の研究團體で月例研究會、展覽會等を開催する。昭和十二年大阪に第一回展開催。

〔會員〕池田遙村、稻葉春生、川口吳川、加藤清彬、川本參江、山本朝光、小松華影、小豆島甘兆、柴原希祥

造型彫刻家協會 東京市豊島區要町二六ノ一山内壯夫方

昭和十一年二月創立。科學的造型性に立脚した彫刻藝術の創作を目的とす。展覽會に際しては主題の美術性を強調し、又、毎回外國作家の作品を紹介する。昭和十四年第五回展開催。

〔會員〕芥川永、明田川孝、川口信彦、佐藤邦輔、清水要、武内收太、谷本整映、本郷新、峯孝、宮島久七、柳原義達、山内壯夫、山本常市、尾島禎二、佐藤忠良、舟越保武、吉田芳夫、昆野恆、稻田健四

造型版畫協會 東京市本郷區金助町七三柴秀夫方

昭和七年、新版畫集團の舊稱を以て創立。十一年第六回展を経て組織變更、十二年三月造型版畫協會と改稱、第一回展開催。十四年五月公募展により第三回展開催。版畫の純粹なる繪畫的造型性の確立を目的とす。

〔會員〕清水正博、柴秀夫、小野忠重、水船六洲、末木東留、矢田桂一、宇治山哲平、畑野織藏、齋藤清

同會第三回展規定抜萃
(作品)木版、石版、銅版、型紙版、デカルコ
マニ、フロッタージュ、其他版畫一般、寫

作品にあつても彫、摺に改變あるものは新
作と認む。其他複製的作品のうち製版技術
上参考とすべきもの、産業的用途のもの等
を含む

〔點數〕制限なし。組織的制作品は額縁表装等
陳列單位に含有可能の場合は一と數ふ。
〔手數料〕點數に拘らず一人に付一圓。
〔審査、授賞〕本協會員これを行ふ。結果は四
月二十九日午前中に發表す、尙優秀作品を
選出し造型版畫協會賞、新版畫家賞を授與
す。別に副賞を設定す。

霜林會(洋) 東京市澁谷區千駄ヶ谷
町五ノ九〇九石原龍一方

石原求龍堂主催の洋畫展で、伊藤廉、
林重義、曾宮一念、里見勝藏を會員とし
毎秋展覽會を開催す。

太平洋畫會(洋、彫) 東京市下谷區
谷中眞島町一 電下谷一七九二

明治二十二年創立の明治美術會を同三
十四年組織を一新し翌年一月太平洋畫會
と改稱、第一回展を上野公園第五號館に
開催した。同三十七年下谷區谷中清水町
に洋畫研究所を開設、翌三十八年研究所
を現在の下谷區眞島町一に移轉、洋畫、
彫刻の指導をしたが、昭和四年太平洋美
術學校と改稱し、同九年東京府の認可を
受けた。昭和七年四月上野松坂屋に創立
三十年記念展を開催した。昭和十五年三
月第三十六回公募展に至る。

〔會員〕淺井眞、相曾秀之助、江崎寛友
府川道徳、布施信太郎、藤坂太郎、布施
梯次郎、平澤定治、堀進二、星野二彦、
石川寅治、石井柏亭、池田永一治、伊藤

成一、石橋美三郎、飯田實、石井明、井
口勇、鹿子木孟郎、金子保、木原二郎、
香取正彦、北島吾次平、桑重儀右衛門、
小宮宗太郎、丸山晚霞、前田眞一、三上
知治、光安浩行、水戸敬之助、永地秀太
中村不折、中野桂樹、野田半三、中田恭
一、能見三次、岡精一、奥瀬英三、小野
田元興、大沼靜巖、佐々貴義雄、齋藤俊
雄、澤田晴廣、佐藤三郎、澁谷榮太郎、
清水敦次郎、菅谷元三郎、杉本宗一、高
村眞夫、高橋虎之助、多々羅義雄、田原
輝夫、鶴田吾郎、佃武昭、都島英喜、玉
井力藏、渡部春也、渡邊正太郎、内田象
水、吉田博、吉田ふじを、安田豊、吉原
甲藏(會友)有川武夫、福玉誠、畑本一
夫、堀潔、本郷悖、市原達夫、今里龍生
河本一夫、海洲正太郎、小泉秀松、小坂
健三、國澤和衛、小林森次、木原二郎、
久保進、三輪拾三郎、名島貢、小倉一雄
坂本不二、鳥添鶴雄、鈴木寛司、田村政
四郎、田原利一、等々力巳吉、戸津文雄
土屋穿石、恆石敬磨、平尾良秀、早川芳
彦

同會第三十六回展規定抜萃
一、出品の種類は油畫、水彩畫、素描、版畫
及彫塑とします。
一、同一人の出品數は五點以内とし手數料と
して金二圓を申受けます。
一、會員以外の出品はすべて鑑査の上陳列し
ます。

大潮會(日、洋) 東京市豊島區駒込
三ノ四〇三浦崎永錫方
昭和十年創立の大東會を廢止して十一

年七月設立。全國中等學校の圖畫教育關係者の作品的主張を明かにし、その中央畫壇への進出を計るを目的として、毎年秋季に文部省後援の公募展を開く。十四年十一月東京府美術館に第四回展を開催した。

〔會長〕小村捷治〔常任理事〕浦崎永錫〔理事〕阿部七五三吉、多賀谷健吉〔評議員〕岩佐新、大下正男、垣見宣修、松垣鸞雄、藤本韶三、杉山司七、三浦直政

同會展規定抜萃

〔資格〕出品人は在職教員並に美術關係者に限る

〔作品〕管て公展に發表したる作品は出品することを得ず

〔部分〕第一部 水彩、クレオン、パステル、クレパス、版畫、第二部 日本畫、第三部 油繪

〔點數〕一人の出品點數は五點迄とす

〔出品料〕一人に付金二圓とす

〔十四年度展審査員〕堅山南風、島田墨仙、徳岡神泉、根上富治、案本一洋、森白甫、安宅安五郎、伊原宇三郎、大久保作治郎、奥瀬英三、林俊衛、柚木久太

大光會〔洋〕 大阪市住吉區王子町一丁目三六胡桃澤方

東光會の大阪支部として昭和十五年一月結成。齋藤與里指導の下に洋畫の研究發表を行ふ。會員八十餘名。

大稻會〔日〕 名古屋市中區上前津五森村宜永方 電中二四八

昭和十五年創設。故森村宜稻の門下を以て創立。大和繪の研究を行ふ。

〔會員〕服部有恆、林雲鳳、小寺禮三、

喜多村光穂、森村宜永

大日美術院〔日〕 (東京事務所) 東京市本郷區西片町一〇結城素明方 電小石川一五七三(大阪事務所) 大阪市天王寺區勝山通一ノ五四 電天王寺八一九

昭和十二年三月創立。在來の流派系統を超越して眞の日本精神に活きた新しい日本繪畫の創作研究を趣旨とす。十二年初夏東京並大阪に於て第一回展を開催、以後毎年公募展を開く。

〔同人〕結城素明、川崎小虎、青木大乗〔院僚〕常岡文龜、加藤榮三、菅澤幸司 藤森青雲、山田申吾、加藤英純、平口勝男、是永伸一、西山英雄、樋口富麻呂、濱田清治、東山魁夷、菖蒲大悅、寺田六華、長嶺雅男

同展規定抜萃

一、本展覽會の出品は鑑査の上陳列す。但し一度他の展覽會に出品せしものは受付けず

一、出品畫の點數は一人三點以内とし、出品手數料として一人金壹圓納人の事とす

一、出品畫にして賣約せられたるときは手數料として賣價の二割を甲受くべし

大日本體育藝術協會 東京市麴町區有樂町一ノ一一東日會館内 電九ノ内二九〇二

體育運動に關する藝術の普及發達を圖り、國際オリンピック大會藝術競技の參加、明治神宮體育大會藝術競技の參加、體育運動に關する美術の調査研究等の事業を行ふ。昭和七年及十一年のオリンピック大會藝術競技に参加した。

〔會長〕森村市左衛門〔副會長〕澁秀澤

雄〔顧問〕伊東延吉、岩原拓、乘杉嘉壽、大島又彦、山川建、芝田徹心、平沼亮三〔常任理事〕吉村忠夫、中村岳陵

矢澤弦月、伊原宇三郎、伊藤廉、碓伊之助、齋藤素巖、高村豐周、成澤金兵衛、土浦龜城、小林政一、小森宗太郎、澤崎定之、諸井三郎、中島健藏、深田久彌、佐藤謙三

大日本鑿業協會 東京市京橋區銀座西四丁目五ノ六號銀座商會館第四階 電京橋五五一九

明治二十五年創立。社團法人。本邦鑿業の發達を圖り、雜誌圖書の發行、講演會、講習會の開催、調査、建議、公共事業の助長等をなす。京都、大阪、名古屋九州八幡等に支部を設く。

〔會頭〕伯爵金子堅太郎〔理事長〕山田清太郎〔理事〕和泉正光、熊澤治郎吉、近藤清治、佐々木源藏、芝田理八、高田安雄、永井彰一郎、不破政吉〔監事〕大野政吉、倉田昌修〔常議員〕八十八名

大日本陸軍從軍畫家協會 東京市日本橋區吳服橋二ノ五春秋ビル内 電日本橋一七七

昭和十三年六月發會。主として戰役事變に従軍せる畫家、彫刻家を以て組織す。作品を通じて陸軍軍事に關する思想普及を計り、又皇軍將士及び遺家族の慰恤をなすを目的とす。同年第一回展開催。

〔副會長〕藤島武二〔顧問〕川端龍子、鹿子木孟郎、中澤弘光〔委員長〕石井柏亭〔委員〕川島理一郎、五味清吉、鶴田

吾郎、大野隆徳、清水登之、中村研一、伊原宇三郎、小磯良平、向井潤吉、小早川秋聲、高島祥光、日名子實三〔常任幹事〕住喜代志〔會員〕(前出氏名ヲ除ク) 荒井陸男、青山龍水、麻生豐、伊藤鉦次、江藤純平、一色五郎、一氏義良、柏原覺太郎、河野鷹思、久保田金徳、古城江觀、小室孝雄、小林喜代吉、眞道黎明、鈴木榮二郎、鈴木良三、瀨野覺藏、田中比左良、千地秀弘、堤寒三、寺本忠雄、等々

力己吉、中村直人、直原放青、野上大業、長谷川榮作、長谷川春子、深澤省三、福田眉仙、三橋武顯、三迫星洲、南政善、宮澤鐵夫、山田正、矢野鐵山、行田泰英、朝井閉右衛門、栗原信、脇田和、藤田嗣治、酒見恆、福田豐四郎、吉岡堅二、山崎坤象、橋本徹郎、橫江嘉純、高井貞二、林唯一、深澤紅子、光安浩行、長谷川八十、矢橋橫廣、鈴木御水、高島勝馬、石井光楓、榎信太郎、武内英男、碓伊之助、和田香苗、永地秀太、吉田博、佐々貴義雄、島海青兒、熊岡美彦、倉垣辰夫、水平讓、今井滋、浦田正夫、笠置季男、小泉素彦、田中稻三、中田甚吉、小合保一郎、金井達三、坂井精一、内田矩吉、鮫島利久、竹内榮三郎、大橋城

大美展〔日、洋〕 大阪府北河内郡枚方町御殿山大阪美術學校内

大阪美術學校日本畫並西洋畫部卒業生全員を會員とす。昭和三年より毎年一回展覽會開催。

〔會長〕矢野橋村〔役員〕齋藤與里、福

岡青嵐

大輪畫院(日) 東京市目黒區上目黒

八ノ五三八 電澁谷三二四四

昭和十三年六月創立。小林彦三郎主宰

し、主として明朋美術聯盟の舊同人に依

り結成す。春秋二回展覽會を開催し、秋

季展は公募に依る。毎月研究会を開催。

〔同人〕小林彦三郎、樋口英雄、谷良治

楠奉白光、立脇泰山〔院友〕佐々木順、

穂坂光希〔準院友〕廣井陵雲、窪田玉穂

〔會員〕十九名

體漆工房(工) 東京市赤坂區福吉町

甲六號

昭和十三年五月創立。漆工、乾漆の立

體的工藝品製作研究を目的とす。

〔顧問〕和田英作、和田三造、畑正吉

〔主事〕大槻二雄〔漆工主任〕河面冬山

第一美術協會(洋) 東京市瀧野川區

田端町四五五、三國久方

昭和四年創立。毎年初夏、洋畫の公募

展を開く。十四年五月第十一回展開催。

〔會員〕濱地清松、石川重信、河邊梅村、

黒越正二、三國久、御厨純一、三木辰夫、

松見吉彦、松坂康、中原實、佐野忠吉、

鈴木巖、高橋亮、山田篤、吉澤廉三郎

〔會友〕袴田恆男、長谷川富三郎、小嶺

伸、川口精六、小島三郎、野村陸雄、照

木廣一、谷井喜三郎、高橋賢一郎、宇田

川榮三郎、山榊寅二郎

(客員省略)

第三部會(彫) 東京市荒川區日暮里

渡邊町一〇四〇石川確治方 電駒込二六

美術家團體一覽

九七

昭和十年六月、舊帝展第三部無鑑査級

有志は反帝展を標榜して七月同會を結成

した。同年十月公募に依る第一回展を開

催、同十五年國風彫塑會と改稱した。

〔會員〕石川確治、池田勇八、畑正吉、

吉田久繼、日名子實三、濱田三郎、大野

信藏、向山峽路、鈴木賢二、早乙女龜治

〔會友〕永原廣、新關國臣、大木芳郎

高松工藝協會 高松市市役所内

昭和七年五月創立。高松市の各工藝團

體を綜合せるもので、工藝の振興を計る

ため工藝品並意匠圖案の調査、展覽會、

研究会の開催、販路調査、他への出品幹

旋等を行ふ。

〔會長〕(高松市長)富家政一

鍛金協會(工) 東京市下谷區谷中眞島

町一

鍛金工藝作家を以て組織す。展覽會、

其他を開催す。

〔會長〕石田英一〔委員〕二十二名、正

會員九十一名。

千葉縣美術協會(綜合) 千葉市市場

町二千葉縣立圖書館内 電千葉八二四

昭和十一年創立。千葉縣出身及在住者

を以て組織。地方美術の振興並に普及を

圖る。十三年四月第五回展開催。

〔會長〕(千葉縣圖書館長)廿日出逸曉

筑前美術會(綜合) 東京市麻布區櫻田

町二八薄拙太郎方

筑前出身作家により昭和八年結成。帝

せ展及其他有力の展覽會に三回以上入選

タ―千

る者を以て會員とす。毎年展覽會開催。

〔顧問〕山崎朝雲、和田三造

竹立會(日) 京都市右京區嵯峨神明

町二一山本紅雲方 電嵯峨三六

竹内栖鳳門の竹杖會内の研究團體。昭

和十二年七月大阪三越に第一回展開催。

〔同人〕山本紅雲、青木生沖、岩周集、

中田晃陽、小森綠光、伊藤石華

中央美術會(日、洋) 東京市本郷區曙

町一田口掬汀方

大正四年以來雜誌「中央美術」を刊行

昭和四年休刊したが、同八年復興し、十

一年十二月迄續刊し以後廢刊した。年一

回同會の主催にて日本畫、洋畫の公募展

を開く。但し支那事變中は休展。

中部水彩畫會 名古屋市昭和區洲原

町六ノ二八東本春水方

昭和十二年創立。年に一回公募による

水彩展を開く。十三年十二月名古屋美術

館に第一回展開催。昭和十五年十一月紀

元二千六百年奉祝展開催。

〔公募展鑑査委員〕横井禮市、北川民治

早川國彦、石野隆、船橋治彦、藪野正雄

渡邊多平、東本春水

中部日本商業美術聯盟 名古屋市西

區御幸本町通一丁目愛知縣商工館内 電

本二一五六

昭和十一年創立。中部各縣に於ける商

業美術關係の諸機關を以て組織。商業美

術の發達を圖るため展覽會、講習會等を

開く。十二年十月愛知縣商工館に第二回

展開催。

〔加盟團體〕岐阜縣商業美術協會、滋賀

圖案會、富山商業美術協會、福井商業美

術協會、靜岡商業美術協會、愛知商業美

術協會、三重縣觀光協會、新潟商業美術

協會

朝鮮畫寶藝術院 京城府大和町一ノ

三五松田方

昭和十二年五月創立。朝鮮の人物發達

と人形を通じての日鮮融和並社會教育の

一助たらんとするもの。毎春朝鮮在住者

の出品による展覽會を開催。

〔顧問〕津田信夫、西澤信敬、大塚源二

郎〔會員〕松田黍光、宇野光惠、遠田運

雄其他十二名

朝鮮南畫院 京城府並木町二四 電

本局三三二二

大正三年創立。舊稱朝鮮木石南畫會。

朝鮮に於ける南畫道の振興を目的とす。

本部及支部を設置し之に加盟する者を院

友となし、年一回院友の出品による展覽

會を開催する。昭和十一年十九回展に至

り、十四年第二十回展開催。院友六百餘

名。

〔主幹〕久保田天南〔幹事〕江原如水、

伊藤天達、大森天壽、今井天澄、今澤天洲

直土會(彫) 瀧野川區田端町三六二

建昌研究所内、電駒込一四〇一

昭和十五年十一月創立。建昌大夢の門

下を以て組織する彫刻の研究團體で、公

募展を開催する。

〔會員〕建昌大夢、服部仁郎、林謙三、

大須賀力、渡邊弘行、黒田嘉治、倉澤興

三九

世、山根八春、山本稚彦、安達貫一、毛利敬武、杉浦藤太郎〔會友〕石渡清三郎、伊藤芳雄、長谷川正雄、富岡泰、分部順治、片岡環、古賀壽雄、中野昂、小田寛一、大石兼、安田周三郎、小松彌六、小林南龍、江川治、坂上正秋、酒見恆、木下繁、喜田三五、木内五郎、北地亮爾、三木凱歌、明珍勝友、宮本光庸、峯孝、白井謙二郎、廣井吉之助、杉本三郎、朝陽社〔日〕 東京市板橋區常盤臺一ノ六四九七西澤方

西澤笛畝の門下を以て結成する。展覽會を開く。

〔會員〕酒井白澄、梅岡玉葩、坂倉半經、井藤龍生、木村太虚、杉山笛美、櫻井春晃、牧野大成、杉原笛邨、邊幸木東洋、〔贊助〕西澤笛畝

沈瀟留〔彫〕 東京市目黒區自由ヶ丘二七二林是方

東美校彫刻科彫造部の卒業生に依り、昭和二年發會。毎春展覽會を開く。

〔同人〕長谷川正雄、林是、大須賀力、奥田勝、黒田嘉治、佐土哲二、喜田三五、三木凱歌

圖案家協會 京都市伏見區桃山町宗和園澤田宗山方 電伏見六〇二

大正十一年創立。京都在住の圖案家を以て結成。展覽會、研究會等を催す。

〔總務〕澤田宗山〔理事〕澤田宗山、山鹿清華、田村春曉、落合萬水、狩野秀峰、福岡玉礪。正會員百六十五名

圖書教育獎勵會 東京市下谷區櫻木町二 電根岸三五六三

財團法人。圖書教育の發達を圖り、事業として展覽會、講習會の開催、教育資料貸出等を行ふ。

〔理事長〕岩田僊太郎〔理事〕加藤賢鍾〔研究會(工)〕 東京市中野區江古田二ノ七四八 三井方

昭和七年八月結成。東美校鍛金部卒業生の研究親睦團體。(同十五年八月解散)

〔會員〕石田英一、河村清司、八田辰之助、品田慎一、寺田龍雄、鈴木孝次、三井安蘇夫、藤本長邦、柴田武次、加藤正之、松原春男、井尾敏雄、榎尾宗一、大西甚平、佐藤猛郎、小川正

帝國工藝會 東京市芝區西芝浦一丁目東京高等工藝學校内

大正十五年七月創立。本邦工藝の産業化並其の進歩發達を圖るを目的とし、事業として生産業者、販賣業者、美術工藝家並に科學者の聯絡提携に努め、産業工藝の狀況を調査研究し、又地方特産工藝品の改良並に販賣の紹介等をなす。毎月雜誌「帝國工藝」發行。(事變中休刊)

〔會長〕男爵 阪谷芳郎〔副會長〕鶴見左吉雄〔顧問〕伯爵金子堅太郎、伯爵牧野伸顯、伯爵清浦奎吾〔常務理事〕安田祿造、和田嘉衛

天地會(洋) 東京市世田谷區世田谷一ノ九一八岡常次方

葵橋洋畫研究所の末期の出身者を以て組織す。恩師黒田清輝の遺徳を追慕し、相互の研鑽に努む。同人展を開く。

富山縣工藝協會 高岡市中川、富山縣工業試驗場内 電七一九

昭和四年創立。縣内の工藝家、販賣業者其他を以て組織。工藝の發達、販路擴張を目的とし、毎年縣下及東京、大阪に展覽會を開催し、臨時講習會、講演會等を開く。

〔會長〕富山縣商工水産課長〔副會長〕縣工業試驗場長〔常務理事〕縣商工水産課主事、富山市商工獎勵館長、高岡市商工獎勵館長

東叡會 東京市麴町區中四番町八ノ一甫喜山義夫方 電九段三七五四

昭和八年東京府美術館借館料改正の運動起り同年五月美術團體及美術記者に依り、東京府美術館借館料改正期成會が結成された。同會は問題解決後同年十二月解散されたが、之が機縁となり將來借館團體共同の權益を保護しその便宜を圖るべき集團として九年一月設立されたものである。

〔加盟團體〕一水會、白日會、二科會、日本寫真會、日本美術院、日本水彩畫會、日本畫院、東光會、東京表装師組合、獨立美術協會、讀畫會、旺玄社、太平洋畫會、第一美術協會、第三部會、泰東書道院、南畫聯盟、構造社、光風會、國畫會、明朗美術聯盟、上社會、塊人社、春陽會、春臺美術會、新制作派協會、新構造社、新美術家協會、新美術人協會、實在工藝美術會、表裝同人會、青龍社

〔理事〕岩佐新、甫喜山義夫、垣見泰山

藤本昭三〔相談役〕坂井犀水〔評議員〕石井柏亭、富田温一郎、田口省吾、東根徳夫、吉田白嶺、望月省三、野田九浦、熊岡美彦、香取重吉、兒島善三郎、湯原柳誠、小林喜代治、石川寅治、濱地清松、石川確治、桑原彌太郎、福田浩湖、齋藤素巖、太田三郎、梅原龍三郎、狩野晃行、藤岡一、安藤照、木村莊八、笹鹿彪、内田巖、三村英一、酒井亮吉、福田豊四郎、高村豊周、栗山弘三郎、川端龍子

東海美術協會(綜合) 名古屋市中區御幸本町愛知縣商工館内

明治四十三年創立。美術及び美術工藝の振興をはかることを目的とし、會内に東洋畫、西洋畫、彫塑、工藝の四部を置く。毎年協會展を開催のかたはら、文展への出品の獎勵並にこれに關する各種の事務の取扱、研究會、講演會の開催等をなす。昭和十四年四月第二十八回展を開催した。

〔會頭〕伊藤次郎左衛門〔副會頭〕岡谷惣助、菅原省三〔評議員〕石河有鄰、渡邊秋谿、小林松仙、菊地香三、原田隆諦〔主事〕淺野甚七、岡田良右衛門、宮部鈴三郎〔正會員〕(東洋畫)六十一名(洋畫)十五名(彫塑)一名(工藝)一名

東京鑄金會(工) 東京市下谷區谷中眞島町一ノ一號

明治三十六年の創立に係り主として東京在住の鑄金家を以て組織し、毎秋展覽會を開催する。

〔顧問〕大島如雲(逝去)〔會長〕香取秀

眞〔副會長〕渡邊長男〔幹事〕山本安曇
香取正彦、北原三佳、山本純民、梅村豊
舟〔評議員〕丸谷端堂、小野田晴正、長
野埜志、山口淨雄、渡邊榮鳳、林萬壽人
山本自燼、根來實三、會田富康、佐々木
象堂、大峽武司、加藤龍雄、原直樹、川
和曉雲

東京表装師組合 東京市淺草區淺草
橋一ノ三香取重吉方 電淺草四七四一

東京市に於て營業をなす表装師を以て
組織。技術の向上及同業親睦を圖るため
種々の事業をなす。年一回東京府美術館
に表装展を開催。昭和十五年四月第十八
回展に及ぶ。

〔組合長〕香取重吉〔副組合長〕前波鐵
太郎、矢谷精宏、新井清吉

東京みつる會〔洋〕 東京市淀橋區下
落合三ノ一七二七佐藤平太郎方

昭和二年春創立。國民性に合致する水
彩畫の研究と同趣味の普及を目的とする
展覽會、講習會等を行ふ。十四年三月第
十回記念展開催。

〔總務〕佐藤平太郎〔會員〕飯島八郎、
恩田孝徳、小椋繁治、小川俊郎、大泉米
吉、片岡豊彦、香月照次、小堀進、小林
保司、齋藤大、佐々木正道、酒泉淳、柴
田善太郎、諏訪邦一、高田力藏、竹内梅
次郎、互井開一、佃政道、寺尾浩、内藤
秀因、野澤潤二郎、藤野盈雄、堀野秀雄
松田晃八、松本慎三、牧野正吉、山崎政
太郎〔會友〕七名

東光會〔洋〕 東京市淀橋區戸塚町二

美術家團體一覽

ノ一二 電牛込一四四一

昭和七年、舊帝展第二部出品者たる橋
本八百二、堀田清治、岡見富雄、高間惣
七、熊岡美彦、齋藤與里の六名に依り結
成。八年二月東京府美術館に第一回展を
開催、以來毎年春季に公募展を開き昭和
十六年三月第九回展に至る。尙十一年三
月會員橋本八百二、堀田清治、高間惣七
の三名は退會した。

〔會員〕齋藤與里、熊岡美彦、岡見富雄
渡邊浩三、野口謙藏、佐藤一章、小早川
篤四郎、水船三洋、岡部晋生、胡桃澤源
人、平通武男、岩下三四、正田二郎、森
田茂、石本秀雄、井上脩、江藤哲、田代
順七、松岡正直、辻利平、家永騏三郎、
〔會友〕山本清、松岡正、河原修平、大
和田富子、三田村築、小貫綾子、松本富
太郎、松居均、安達良雄、福井芳郎、河
井達海、西寺鐵舟

同會第九回展規定抜萃

一、會期昭和十六年三月十八日より三月三十
日まで

一、出品料一人に付き金三圓とす

一、出品畫は油畫、水彩、素描、バステル、
テンペラ、版畫とし、一人の出品數五點を
限りとし、百號以内とす〔特に力作小品を
歓迎す〕

一、他の展覽會に於て既に發表したる作品は
出品するを得ず

一、鑑査に審査は本會々員之を行ふ

一、賣却品に對しては其價格の二割を本會に
支拂ふものとす

一、四月下旬大阪府美術館に大阪展開催の際
定

東總會〔日〕 東京市澁谷區向山町一

〇二吉田方 電高輪三六五八

從來東美校出身有志の日本畫家が相互
の親睦の爲、毎月懇話會を開催し來つた
が、昭和十二年六月、新に東總會と命名、
結成した。邦畫壇の進展に寄與せんとす
るものである。

〔會員〕岩田正巳、服部有恆、畠山錦成
橋本明治、川崎小虎、狩野光雅、加藤榮
三、吉田秋光、吉村忠夫、高木保之助、
常岡文龜、根上富治、永田春水、村島西
一、野口謙次郎、矢澤弦月、山本丘人、
小泉勝爾、榎本千花俊、穴山勝堂、廣島
晃甫、望月春江、杉山寧

東臺會〔綜合〕 奈良市雜司町新納忠
之介方 電三七五

昭和五年四月發會。東美校出身奈良在
住者有志の懇親並研究團體。毎年春季同
人の展覽會を開催し、隔月集會を行ふ。

〔會員〕〔日本畫〕富田一昭、立野雪郷、
谷山介春〔洋畫〕西孝親、遠山八二、小
野藤一郎、谷山藤四郎、中村義夫、小松
原義則〔彫刻〕新納忠之介、細谷三郎、
吉川政治、奥田勝、明珍恆男〔昭和十五年
運志〕菅原安男〔金工〕後藤年彦〔漆工〕
幸王好太郎、北村久造〔圖案〕岸熊吉〔染
織〕井上清一

東臺邦畫會〔日〕 東京市芝區金杉濱

町六八狩野探道方 電三田二二三六

明治四十四年十二月東美校日本畫科出
身者に依り東臺畫會が創立され、大正四
年三月第三回展を開催するに至つたが、

同年十二月東美校出身者が新に東臺美術
會を結成、依つてこれと合流したところ

間もなく同會が瓦解したので再び日本畫
科出身者有志相寄り大正五年二月池畔俱
樂部を結成した。ついで大正十四年、池
畔俱樂部の組織を擴大し在京の日本畫科
出身者を網羅して東臺邦畫會と改稱し六
月第一回展を開き、引續き展覽會を開催
して昭和十二年六月第十二回展に及ん
だ。〔昭和十四年六月解散〕

〔會長〕結城素明

東土會〔彫〕 東京市本郷區駒込神明
町三四一後藤良方、電駒込一一五五

昭和六年創立。東京生れの東美校彫刻
科出身者にして舊帝展出品者を以て組
織。隨時作品展開催。

〔會員〕淺岡重治、安藤秀吉、大須賀力
大橋清、金田豊、木内五郎、黒田嘉治、
後藤光行、後藤良、杉浦藤太郎、杉本三
郎、明珍勝友、安一、安田周三郎、吉田
久繼、武田榮

東邦彫塑院〔彫〕 東京市杉並區永福
町四〇五雨宮治郎方

昭和十年六月帝院改組に際して舊帝展
審査員級の長谷川榮作、加藤顯清、吉田
久繼、國方林三、山根八春、後藤良、雨
宮治郎、北村正信、關野聖雲等の九名は
「帝國美術院改組の結果、吾人等主義を
同じくする者に於ては團結の必要を痛感
し、こゝに東邦彫塑院を結成して藝術權
威維持と後進誘掖に盡し、もつて吾人の
生命とする創作により主義主張の貫徹を

期するものなり」と聲明して、東邦彫塑院を結成、同年十一月東京府美術館に第一回公募展を開催した。昭和十五年五月第四回展に至る。

〔會員〕一色五郎、長谷川榮作、羽下修三、橋本朝秀、服部仁郎、花里金央、新田藤太郎、富永朝堂、岡本金一郎、奥山泰堂、分都順治、渡邊弘行、矩幸成、上條俊介、吉田敬示、吉開伊喜藏、山村審火、中島東洋、國方林三、倉澤興世、山根八春、梁川剛一、牧俊高、藤野舜正、後藤良、雨宮治郎、安達貫一、赤堀信平、安一、北村正信、木下繁、宮本朝壽、柴田正重、毛利教武、森大造、森山朝光、關野雲雲、杉浦藤太郎、古賀忠雄、古川順三

東北美術展覽會(日、洋) 仙臺市東三番丁河北新報社内 電四一〇〇

昭和五年創立の東北美術協會の主催展覽會を同八年より河北新報社が引き継いだもので、東北の美術思想普及並に發達を目的とし、仙臺市に年一回日本畫、洋畫の公募展を開催する。規則は毎年一月上旬發表。

〔會長〕(河北新報社長) 一力次郎〔副會長〕(同副社長) 一力五郎〔顧問〕 勝本正晃、國井喜太郎

東北北海道工藝協會 仙臺市二十人町通一〇商工省工藝指導所内 電三七六〇—三七六二

昭和四年設立。東北六縣及北海道に於ける工藝關係者相互の聯絡を保持し、東

北工藝の産業的發達を圖るを目的とし、事業として工藝品並意匠圖案の指導、販路擴張、競技會、展覽會の開催、各種工藝的副業の指導獎勵等をなす。

〔理事長〕 國井喜太郎〔常任理事〕 寺坂毅、松崎福三郎〔常任幹事〕 阿久津保太郎、西川友武、樋浦守治

等迎會(洋) 東京市淀橋區角管三ノ一七八長屋勇方

大正十一年度東美校洋畫科出身者を以て組織。隨時展覽會開催。

〔會員〕 飯守好雄、大海清三、小野藤一郎、長屋勇、窪田照三、松本銳次、三田康、三谷浩三、光石藤太、鈴木誠、鈴木啓二

稻花會(工) 東京市杉並區久我山三ノ一三、三田村自芳方

大正十一年故赤塚自得の社中を以て組織。相互の親睦並向上を目的とし、漆工藝をあらゆる方面より研究せんとす。隨時展覽會開催。

〔會員〕 三田村自芳、魚野自醒、太田自適、久慈自然、横越自入、岡本昇三、石川古堂、關聰雨、井澤靈山、辻喜一郎、月尾慶水、金井正文、村田義忠、吉岡郁三、南忠、池田自勝、小澤裕、工藤喜代志、山浦等

同人會 東京市神田區東神田二ノ四 栗山弘三郎方 電浪花一七一六

表裝師の團體で、毎年展覽會を開催。昭和十四年第十四回展に及んだ。

〔同人〕 稻本金次郎、石渡新五郎、萩原庸頼、星野常吉、中河仙太郎、栗山弘三郎、安見三郎、山越廉三、新井光雄

同調會(日) 東京市板橋區常盤臺一ノ一一〇號岩崎方

昭和十三年度東美校日本畫科卒業生を以て組織す。年一回展覽會開催。

〔會員〕 岩崎輝、池澤賢、石田一郎、河原丈夫、川本壽一、加藤英純、神田禎之米澤裕二、土田幸一郎、村尾博仁、野嶋清一、黒田哲二、山崎民士、小池平四郎、佐藤正衛、三浦眞一、宮川澄康、白尾殿理、澁谷保三

堂本畫塾東丘社(日) 京都市東山区八坂東大路西小松町二堂本印象方 電祇園一〇八八

堂本印象の主宰する畫塾。昭和十三年六月第一回東丘社展を京都美術館に開催す。塾員七十三名。

三回展開催。

〔會員〕 池田長三郎、妹背平三、岩田登司雄、都司群青、長田紅霞、河原悦人、高井誠、堤利彦、無憂樹、今野可啓、奈良榮一、長野正男、中川眞次、草野謙吉、安藤寛、澤野文臣、三原清安、下村正一、大嶽智弘、河原長一郎、平塚榮三、川口勤作

堂本畫塾東丘社春風會(日) 京都市中京區新橋木町竹屋町上ル、伊圭多洛中方

昭和九年十一月堂本印象畫塾生を以て組織、昭和十二年五月、京都大丸に第一回展開催。

〔贊助〕 三輪晃勢〔會員〕 井上和雄、井關雅夫、伊圭多洛中、戸島光雄、山口芳央、松尾冬青、曲子光男、古川雅司、阪本音彦

堂本畫塾東丘社如月會(日) 京都市東山区八坂東大路西小松町二堂本印象方 電祇園一〇八八

堂本印象畫塾生に依り組織。昭和九年二月京都大丸に第一回展を開き、以後毎春展覽會を開催す。

童心文化美術協會 東京市中野區野方町一ノ七三五和光莊西原方

昭和十六年一月創立。兒童のための繪本、玩具、演劇等に於ける美術文化の健全な進歩を圖る。

〔幹事〕 脇田和、大石哲路、齋藤長三、中尾彰、寺田竹雄、西原比呂志、山下大五郎、宇田川種治

童寶美術院 東京市淺草區淺草橋一ノ三 電淺草二四六九

昭和五年創立。人形藝術並に童心を表現し、童心を啓發し得るやうな藝術作品の向上普及を目的とし、毎春繪畫、彫刻工藝、人形玩具等の各科に互る公募展を開催する。十五年二月日本橋三越に第十回展を開いた。

〔同人〕石井柏亭、笹川臨風、豊泉益三 廻澤笛畝、山田徳兵衛、山本鼎、和田英作、倉橋惣三、津田信夫〔顧問〕子爵岡部長景

董林社(洋、彫) 東京市豊島區長崎東町三ノ二四三橋本方

昭和六年度東美校洋畫科及び彫刻科入學者により組織。毎年展覽會を開催す。

〔會員〕(繪畫部) 岩田榮、井上自助、伊藤彰、池田輝之、池田快造、橋本正躬 富山良治、沈亨求、李石樵、大山英夫、川田恆之輔、河口正喜、高木周平、根守悦夫、中西次郎、中村立行、永田精二、村田保三、上原誠、上島長健、野末恆三 野口徳次、藥師寺孝太郎、山中清一郎、船越達仁、藤岡俊一郎、江守龜男、寺田春一、赤津實、神克文、齋藤齋、里見明正、廣瀬正雄、須澤鴻、須藤清彦、杉山一正、杉山卓、鈴木貞三(彫刻部) 千村士乃武、吉田芳夫、瀧一夫、能美八重夫 黒川泰、柳原義達、古池恆雄、榎國吉、新田實、佐藤邦輔、清水勲、水船六洲、關長造

德島縣工藝協會 德島市前川町德島

縣工業試驗場内 電二八五三

昭和十二年創立。工藝品製造者、販賣者等を以て組織し、同縣の木材その他の工藝の發達を圖る。事業として各種の調査、指導、印刷物の刊行、展覽會、講演會の開催、助成等をなし、輸出工藝の振興に努む。同十四年六月第一回展開催。正會員六十餘名。

獨立美術協會(洋) 東京市淺草橋區下落合四ノ一九九五、川口軌外方

昭和五年十一月二科の兒島善三郎、里見勝藏及び會友七名は新なる藝術主張の下に結束して同會を脱退、三岸好太郎、高島達四郎、伊藤廉、清水登之を加へ、我々は既設の團體より絶縁し新時代の美術の確立を期す」と宣言、獨立美術協會を創立した。同六年より毎春東京府美術館に公募展を開催し又大阪、京都、名古屋神戸、福岡、熊本、鹿兒島、長崎、臺北等に地方展を催して居る。尙毎秋、會員の小品展を行ふ。其他事業として夏季講習會、出版等を行ひ、又自治制の研究所を東京、大阪、京都に設く。同十二年伊藤廉、里見勝藏、妹尾正彦、田中行一、會宮一念、林重義の六名退會。同十四年第九回展開催後、會員福澤一郎は、美術文化協會を結成、退會せるを以て同人を除名した。同年森芳雄、三岸節子退會。

〔會員〕井上長三郎、海老原喜之助、川口軌外、兒島善三郎、小島善太郎、小林和作、清水登之、鈴木亞夫、鈴木保徳、須田國太郎、高島達四郎、田中佐一郎、

中山巖、野口彌太郎、林武、中村節也、松島一郎、菊池精二、中間册夫(會友) 今西中通、藤岡一、水野佳一、森有村、樋口加六、池田金之助、富樫寅平、佐藤英雄、中尾彰(十五年度會友推薦) 青柳鳴夫、菅野奎介、鳥井敏

同會展出品規定抜萃

- 一、出品は洋畫(大々無制限)とし一人五點限りとする(未發表の作品に限る)
- 一、出品手數料は一人に付金三圓とす
- 一、陳列畫賣約は即時全價格を支拂ふか或は價格の三割を手附金として前納せらるべし(破約の場合は手附金を返却せず)
- 一、陳列畫賣約の届出品者は手數料として價格の一割を本會に納むるものとす

讀書會(日) 東京市本郷區動坂町三二七湯原方 電駒込五三一

明治四十年荒木寛政を主宰として設立寛政の歿後は十畝を會長とし、毎春展覽會を開催、昭和十四年五月第三十二回展に及ぶ。

同會第三十二回展規定抜萃

- 一、出品畫ハ荒木一門及其系統ニ屬スルモノトス
- 一、出品畫ハ鑑査ヲ經タルモノニ限リ陳列ス
- 一、無鑑査ノ出品ト雖モ陳列セザル事アルベシ
- 一、入選作品中優秀ナルモノニ對シ鑑査ノ上ニ授賞ス

栃木縣美術協會(洋) 栃木縣鹿沼町下材木町吉村勇方 東京市淺草區馬道町二ノ五 文挾勝方

栃木縣在住並出身者の結成する洋畫團體。昭和十年宇都宮市に於て第一回公募

展開會。 巴會(日) 東京市本郷區駒込東片町三〇鹽崎邊方 故寺崎廣業門下にして舊帝展所屬の十名を以て組織す。昭和十四年三月第三回展開催。

〔客員〕飛田周山(會員) 野田九浦、矢澤弦月、吉田秋光、水上泰生、菊澤武江 鹽崎邊方、伊藤龍涯、岡部光成、町田曲江、角田馨谷、登内微笑

七日會(工) 東京市豊島區駒込三ノ三九九山本方 工藝の研究團體で、昭和五年創立したが、十四年末事情により一先づ解散、十五年一月再組織した。

〔會員〕林萬壽人、渡邊紫風、香取正彦 高野松山、桂信春、長野延志、海野建夫 山本安曇、山本純民、山本自爐、丸谷端堂、藤本長邦、會田富康、北原三佳

名古屋工藝協會(工) 名古屋市役所産業部内

名古屋地方の工藝家及關係者を以て組織。工藝に關する種々の調査、出版、展覽會開催等を行ふ。昭和十二年名古屋及東京に於て第二回名古屋工藝品展開催。

〔會長〕神田純一〔顧問〕藤井達吉、板谷波山(理事長) 田中藏六

名古屋美術聯盟 名古屋市役所内 昭和十一年創立。愛知縣在住及出身の美術家を以て組織。郷土美術界の向上を圖り展覽會、講習會等開催の外美術獎勵に關する諸事業を行ふ。

〔會長〕(市長) 縣忍 〔評議員〕川崎小虎、服部有恆、太田三郎、伊藤廉、鬼頭鍋三郎、加藤靜兒、毛利敬武、長野埜志

狩野梅齋、朝蔭其明、小川鴻城、横山葩生、織田香逸、淺井正臣、石川英鳳、朝見香城、岩佐古香、井上安男、中野安治郎、船橋治彦、藪野正雄、渡邊多平、安藤邦衛、伊藤鎌、石井國義、杉本健吉、横井禮市、遠山清、市ノ木慶治、加藤忠三郎、原田隆諦、佐藤空鳴、加藤華仙、橋本良介、石田清、野水信吉、森本啓史

奈良美術家聯盟(洋) 奈良市大佛殿裏 田中修方

昭和十年創立。主として奈良在住の帝展、二科、獨立等の出品者を以て結成する洋畫研究團體。毎年春秋二回展覽會開催。研究所を設置。

〔會員〕今西春治、乾平三、岩本恆三、間瀬謙平、森島包光、岡島吉郎、六條篤下瀬貞和、田中修、辰巳義人、寺瀬信一、遠山八二、浦久保義信、吉田直之〔賛助員〕濱田葆光、中村義夫、山下繁雄

奈良洋畫會 奈良市法蓮佐保川町會根靖雅方

昭和七年設立。奈良縣美術家の指導養成を目的とす。例年五月に公募展、十月に同人展開催。夏期洋畫講習會を開く、昭和十三年度は事變の爲公募展開催を中止した。

〔同人〕若山爲三、飯田衛、笠松春彦、森永春雄、武若武作、辻操、小森重雄、廣瀬英男、岩井濱子、謙田史彦、吉澤健

二、曾根靖雅、御宮地保、庄司吉郎、保田貞治、顧問十二名

長野縣農美生産組合聯合會(工) 長野縣經濟部規畫課内 電長野四三〇一 縣下農村工藝品生産團體により組織。各團體の聯絡を圖り、生産の指導、販路擴張並斡旋、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕(經濟部規畫課長) 今井清武 〔副會長〕(經濟部副主任) 江島次郎、中村實

南畫鑑賞會(日) 東京市麹町區四番町四小室方 電九段六二〇

昭和七年三月創立。南畫道の普及を計るを目的とし、會員は臨時入會の便あり。會長の執筆指導を主とし、通信教授に依り修畫するを得。年一回會員展開催。

〔會長〕小室翠雲〔總務〕石塚彰吾

南畫聯盟(日) (東京事務所) 東京市麹町區四番町小室方 電九段六二〇 (京都事務所) 京都市新町北大路上小柳北通西入白倉二峰方 電西陣三二一四

昭和十一年九月日本南畫院及環堵畫塾の解散後、有志相謀り翌十月に結成した。南畫道の興隆を目的とし、研究会、公募展を開催する。

〔顧問〕小室翠雲〔幹事〕岡田晴峰、白倉二峰、人見少華、福田浩湖〔委員〕關谷雲峯、大栗旌旛、荒居翠湖、高須芝山、横内大明、村岡應東、小川千麿、須藤幽邨、降旗箕岳、鷹野樗亭、木内一榮、馬來山愛岳、峰村北山、宮原柳倦、渡邊黃華、松野自得、久保田王堂、小山居泉、

佐々木喜堂、高橋暉山、横山松雲、高島祥光、栗原大醒子〔會員〕七十七名

南紀美術會(日、洋、彫) 東京市荒川区日暮里渡邊町一〇四〇 建昌大夢方 電駒込一四〇一

大正八年紀州出身の美術家により結成。年一回東京或は郷里に展覽會を開く。

〔常任幹事〕建昌大夢〔幹事〕後藤光行 木下繁、三木凱歌、中川藤次郎、會員二十九名

南潮社(日) 京都市左京區下鴨中川原町六三水田方

昭和十四年創立。南畫の研究、發表を行ふ。同人二十二名。

二科會(洋、彫) 東京市四谷區愛住町七八 電四谷四九七八

大正三年文展第二部に二科設置運動が起つたが、當局に容れられず、同年十月つひに文展より分離して、上野竹之臺陳列館に二科美術展覽會が開催された。同展の開催に際して其の任に當りたる鑑査委員十一名は翌年そのまゝ、會員となり、二科會は茲に在野團體として獨立した。

(其の中柳敬助、田邊至の二名は直ちに脱會) 爾來同會は常に新進流派の作家を包容して我が洋畫史上に啓蒙的功績を擧げて居る。大正八年第六回展の開催に際し藤川勇造會員に推され初めて彫刻部加入を見た。昭和五年兒島善三郎、里見勝藏外會友七名は退會し、獨立美術協會を創立した。昭和十年會員石井柏亭、山下新太郎、安井會太郎、有馬生馬、藤川勇

造の五名新帝國美術院會員に任命さる、や同會は其の盟約に基いて右五名と訣別し、その功勞を謝して名譽會員に推薦し、同會は從來の通り飽くまで在野として行動する旨を聲明した。尙十二年石井柏亭、有馬生馬、山下新太郎、安井會太郎等は名譽會員を辭退した。毎秋東京に展覽會を開催し、引續き京都、大阪、福岡名古屋等に於て臨時地方展を開催する。

〔會員〕藤田嗣治、熊谷守一、北川民次、栗原信、正宗得三郎、宮本三郎、向井潤吉、中川紀元、野間仁根、岡田謙三、島崎鶴二、鈴木信太郎、東郷青兒、田口省吾、高岡徳太郎、笠置季男、松村外次郎、渡邊義知、横井禮市、黒田重太郎、鍋井克之、國枝金三、濱田葆光、田村孝之介、上田曉、坂本繁三郎、國吉康雄

〔會友〕松本弘二、柏原覺太郎、榎倉省吾、椎塚猪知雄、岡部邦香、酒井亮吉、吉井淳二、早川國彦、藤川榮子、伊藤久三郎、田中忠雄、橋本徹郎、峰岸義一、清水刀根、服部正一郎、飯田清毅、伊谷賢藏、伊庭傳治郎、錦義一郎、松井正、浪江勘次郎、山本直治、藤井二郎、小出卓二、伊藤繼郎、古家新、福島金一郎、吉原治良、小林喜一郎、田邊三重松、山口長男、長谷川八十、木内克、土田實、後藤一彦、河合芳男、水野欣三郎、川崎榮一、三浦舜太郎

同會第二十七回展規則抜萃

一、本展覽會は何人とも離意出品をする事を得但し鑑査の上陳列決定せられたる作品の

作者は他の對立的公募展覽會へ出品するを得ず

一、展覽會には繪畫彫塑の二部を設く

一、本年の出品點數は繪畫、彫塑とも各三點とす但し出品畫は一點の大き百號を限度とす

一、同一作者にして同時に兩部へ出品する事を得但し其場合は各々指定點數以内とす

一、既に本邦に於て發表したることある作品は受理せず

一、作品には出品目録及出品手数料として出品點數に關せず一人に付金三圓を添へ搬入せらるべし

一、陳列作品の買約は本會に於て之を取扱ひ價額の一割を申度くものとす

二科西入社(洋、彫) 福岡市大名町八七青木壽方

昭和九年十一月創立。九州出身の二科會出品者の組織する洋畫彫刻の研究團體一年一回展覽會開催。

廿四人會(洋) 東京市中野區櫻山一樋口加六方

昭和七年創立の十七人會の擴大せるもので獨立展出品者の親睦團體。臨時作品展開催。

〔會員〕樋口加六、岡部文之助、法充昌雄、小島圭一、長島榮吉、横山清治、熊谷登久平、久保田久一、今西忠通、池田金之助、中尾彰、佐藤英男、竹中三郎、清水鍊徳、坪内節太郎、森有村、浦久保義信、赤星孝、小原雄二、坂本善三、赤堀佐兵、綠川廣太郎、富樫寅平

兩歩美術協會(洋) 京都市烏丸通上立賣上ル 太田喜二郎方 電西陣五九六

○ 昭和十一年創立。年一回の公募展及洋畫講習會を開く。同年京都美術館に第一回展開催。

〔會員〕太田喜二郎、角野判治郎、吉田苞、赤松麟作、新井完(會友)、東坊城光長、天井陸三、伴庄兵衛

新潟縣輸出工藝振興會 新潟縣經濟部商工課内

舊來の新潟縣工藝協會を改組して昭和十四年四月設立した、工藝品の調査研究講習會、展覽會の開催、作品の宣傳、斡旋其他を行ふ。

〔總裁〕新潟縣知事、正會員三七〇名、賛助會員二二一名

西日本美術展覽會(洋、工) 福岡市烏警固九八四福岡日日新聞社内

福岡日日新聞社の主催する公募展で、洋畫部及美術工藝部の二部より成る。昭和十一年第四回展開催。(時局に鑑み當分休止する。)

西山畫塾菁甲社(日) 京都市五條坂東山線東入小川翠村方

大正十二年西山翠峰門下を以つて創立毎月研究会、年一回展覽會開催。

〔幹事〕福田翠光〔副幹事〕水野深樹、本庄陶苑〔研究会主事〕澤宏毅〔學藝部主事〕樋口富麻呂〔評議員〕山ノ内信一

外十四名〔常議員〕堂本印象外九名

日東美術院(日) 京都市神田區西神田二ノ一 同盟會館内

美術に於ける華國精神の發揚、日本畫

の海外進出等を目的として昭和十五年創立した。

〔會員〕園部香峰、川口春波〔院友〕西村南北、渡邊示光、鳥海龍海、山城象二郎、松野皓晨、大町幸世、竹下茂樹

日本アンデパンタン協會(洋) 神戸市神戶區元町一丁目プチギヤラー内

毎春神戸にて左記委員の主催により洋畫の無鑑査公募展を開催する。

〔委員〕今井朝路、井關昇、奥村一彦、吉田一夫、多田榮二、田中香苗、三好繁治、森川豊三、有吉正雄、木村五六

日本醫家美術協會(洋) 東京市日本橋區本町三丁目友田合資會社編輯課内

醫師にして美術を愛好する人々により組織。昭和十四年八月銀座三越に第一回展開催。

日本漆繪協會 東京市麻布區今井町二五、三木義榮方

昭和十一年設立。漆繪及漆工藝の新生面開拓を目的とす。毎年春季に會員展、臨時試作展を開催する。十二年四月第一回展開催。

〔會員〕片山住吉、横井弘三、太齋春夫、大村素峰、松岡素峯、三木義榮、森山珪秀

日本エツチング作家協會 東京市麴町區麴町一丁目三日本エツチング研究所内

電九段五一四

昭和十五年十二月西田武雄を中心に結成。エツチングの研究、普及を圖り同月第一回展を開催した。

〔會員〕田邊至、西田武雄、今純三、曾我尾武治、松田義之、關野準一郎、中井平三郎、神原浩、内田進久、田中進、高羽敏、武藤完一、中田幾久治

日本カトリック美術協會 東京市小石川區小日向臺町二ノ二七湯川方

昭和四年創立。カトリック信徒の美術家及び美術愛好者を以て組織。「日本精神による基督教美術の研究創作發表」及「海外同種團體との交渉機關」。昭和十二年マニラに於て展覽會を開催した。

〔會員〕長谷川路可、小倉和一郎、木村圭三、佐田好陽、小關君子、岡山聖徳、佐々木松次郎、古屋清

日本畫院(日) 東京市本郷區駒込千駄木町五九望月春江方 電駒込二六四七

昭和十三年四月東京の文展系日本畫壇有志に依り結成。「現下の日本畫壇の趨勢に鑑み、之を横斷的に結束するの要を痛感し茲に日本畫院の成立を見るに至る吾等は協力以て清澄なる畫壇の先驅者たらんとす。」と聲明した。十四年五月第一回公募展開催。

〔同人〕岩田正巳、服部有恆、畠山錦成、西澤笛欲、川崎小虎、吉田秋光、吉村忠夫、吉岡堅二、高木保之助、常岡文龜、根上富治、永田春水、野田九浦、矢澤弦月、松本凌水、福田豊四郎、小泉勝爾、兒玉希望、穴山勝堂、飛田周山、望月春江、森白甫、杉山寧

同會第一回展規定抜萃
一、應募出品は鑑査の上陳列す
一、應募出品にして審査上優秀と認めたるも

のに對し日本畫院賞並に奨勵賞として金五百圓を贈與す

- 一、鑑査及審査は同人之に當る
- 一、出品者は手數料として一人につき一圓を納入するものとす(出品點數は制限せず)
- 一、出品畫の大きさは任意とす
- 一、出品畫にして賣約せられたる時は手數料として賣價の二割を申受くべし

日本玩具協會 東京市世田ヶ谷區世田ヶ谷町二ノ一〇八〇

昭和三年設立。玩具産業の發達を圖り、玩具の研究調査並發明考案の助成に關する諸事業を行ふ。

〔常務理事〕畑正吉、西澤信敏、加納淳男、永澤謙三、氏家壽子、國井喜太郎、山根省三、山田義郎、木楡恕一、阿部七五三吉、鈴木豐次郎

日本建築士會 東京市京橋區銀座西三ノ一建築會館七階 電京橋六二〇(關西支部) 大阪市北區中之島三ノ三朝日ビル四階日本建築協會内 電北濱四〇五一
大正三年創立。昭和三年社團法人設立認可。建築士の業務の進歩發達を圖るを以て目的とす。月刊雜誌「日本建築士」を發行。

〔理事長〕櫻井小太郎
日本工藝美術會 (東京) 東京市下谷區谷中眞島町一ノ一號(關西) 大阪市住吉區住吉町一三〇〇柴崎方

大正十五年創立。流派の新奇、様式の東西を問はず、あらゆる工藝の作家、鑑賞家、評論家を以て組織せる綜合團體。毎年一回展覽會を開催する外、工藝美術

の社會的施設に關する建言をなし又その實現に努める。

〔常務委員〕岩田藤七、大島隆一、吉田源十郎、津田信夫、内藤春治
日本工作文化聯盟 東京市麴町區内幸町二ノ三幸ビル内 電銀座三三八三
昭和十一年十二月九日發會、本會は科學、藝術其他工作文化に關與する諸分野の専門家を糾合し、且つ産業上の諸機能と提携して「一、様式建築より生活建築へ二、有閑工藝より目的工藝へ三、低俗製品より價値製品へ」なる指標の下に建築を中心とする工作文化の健全なる發達を圖らんとするもので次の如き項目を事業課題とし、且つ出版、展覽會、講演會の開催、諮問應答等をなす。(イ)研究

(一)住の基本問題の研究 二、都市及農村計畫に關する研究 三、史的生活文化財の研究(ロ)指導(一)、住に關する工業製品の指導 二、建築生産の指導 三、工業の諸分野に關係し來る藝術的諸形式の批判檢討(ハ)普及(一)、生活文化に關する知識の普及 二、健全なる工作文化財の普及)

〔會長〕伯爵黒田清〔理事長〕岸田日出刀〔理事〕堀口捨巳、佐藤武夫、關重廣小池新二〔幹事〕市浦健、關野克〔特別會員〕澤島英太郎、鈴木道次、上野伊三郎、奥本新太郎、藏田周忠、坂倉準三、谷口吉郎、土浦龜城、中村彌三、服部勝吉、藤島亥治郎、前川國男、山越邦彦、山脇巖、吉田鐵郎

〔委員長〕岩田專太郎、井川洗厓、石井滴水、林唯一、細木原青起、田中良、武井武雄、海野精光、近藤紫雲、齋崎英朋〔會員〕井上猛夫、伊藤幾久造、今村寅士、馬場射地、保積稻夫、富田千秋、遠山陽子、布目敏行、岡本一平、大橋月皎小笠原寛三、太田稚光、岡田なみじ、渡部泰也、加東三郎、加藤まさを、河目悌二、川上四郎、河盛久夫、樺島勝一、高島章宵、橋小夢、名取春仙、中江正美、野水昌子、山六郎、山口將吉郎、柳田謙吉、松田青風、丸尾至陽、小村雪侍、大郷盛八郎、明石精一、淺野薫、新井芳宗佐川珍香、齋田喬、清原重以知、水島彌保布、道岡敏、清水對岳坊、代田牧一、神保朋世、新關青花、平澤文吉、須藤重須藤宗方、大石哲路、吉郷二郎、福與英

日本挿畫院 東京市小石川區久堅町八六加藤まさを方 電小石川四二八二
昭和十年創立。挿畫藝術の向上を目的とし、挿畫版權確立の運動、挿畫展の開催をなす。機關誌「畫ともだち」刊行。

〔同人〕鴨下晃湖、加藤まさを、清水三重三、鈴木朱雀、田中比佐良、細木原青起、嶺田弘
日本挿畫家協會 東京市世田ヶ谷區北澤三丁目九〇九海野方 電銀座四五二

昭和三年創立、挿畫界の向上發展を期し、會員の權利擁護、相互扶助、新人紹介、作品發表等を主なる目的とす。
〔委員〕岩田專太郎、井川洗厓、石井滴水、林唯一、細木原青起、田中良、武井武雄、海野精光、近藤紫雲、齋崎英朋〔會員〕井上猛夫、伊藤幾久造、今村寅士、馬場射地、保積稻夫、富田千秋、遠山陽子、布目敏行、岡本一平、大橋月皎小笠原寛三、太田稚光、岡田なみじ、渡部泰也、加東三郎、加藤まさを、河目悌二、川上四郎、河盛久夫、樺島勝一、高島章宵、橋小夢、名取春仙、中江正美、野水昌子、山六郎、山口將吉郎、柳田謙吉、松田青風、丸尾至陽、小村雪侍、大郷盛八郎、明石精一、淺野薫、新井芳宗佐川珍香、齋田喬、清原重以知、水島彌保布、道岡敏、清水對岳坊、代田牧一、神保朋世、新關青花、平澤文吉、須藤重須藤宗方、大石哲路、吉郷二郎、福與英

夫、伊勢良夫、淡路多茂彦
日本山岳畫協會(洋) 東京市品川區大井元芝町八七〇茨木猪之吉方
昭和十一年一月創立。山岳を崇敬愛好する畫家を以て組織し、山岳に關する繪畫の研究發表を行ふ。十五年七月東京高島屋に、同十月大阪大丸に第五回展開催
〔會員〕足立源一郎、中村清太郎、茨木猪之吉、石井鶴三、石川滋彦、丸山晚霞、染木照、武井眞澄、吉田博、末光績、内野猛、中村善策、山川勇一郎
〔顧問〕小島烏水、藤木九三、榎谷徹藏、宮田熊雄

日本自由畫壇(日) 京都市烏丸通出水上ル西、廣田方 電西陣三〇五六
大正八年京都の日本畫家に依り設立。
毎年秋季公募展開催。
〔同人〕上田萬秋、廣田百豐、玉舎春輝久保飛路史
日本刺繡院(工) 京都市東山區山科御陵原西町四〇
昭和十五年一月創立。刺繡工藝の發達を目的とす。展覽會を開催す。

〔會員〕長谷川文平、長村華城、岡村土佐生、由井康陽、村田春綠、山田誠一、福田健、酒井榮一〔參與〕箸尾清
日本漆藝院 東京市澁谷區常盤松町四八 電青山七二二九
昭和十一年五月結成。本邦独自の漆藝の發展を圖るため従来の漆藝家の小黨分離の弊を打破して協力邁進せんとす。毎年三越に公募展を開き、十四年第三回展

須藤宗方、大石哲路、吉郷二郎、福與英

開催。

〔同人〕石井吉士、本間華華、富樫光成、河面冬山、河合秀甫、勝田靜璋、吉田醇一郎、横越自入、高井白陽、高野松山、多畑宗哉、堆朱楊成、都築幸哉、梅澤隆真、太田自適、大村素峯、岡本昇三、山永光甫、松田權六、福澤健一、結城哲雄、三田村自芳、莊司芳真、森川紫山、守屋松亭〔賛助員〕六角紫水、渡邊素舟〔主事〕岩瀧尙美

同院第三回展規則抜萃

- 一、出品點數 一人二點以内とし管て公私の展覽會に於て鑑査を受けざるもの
- 一、手数料 出品に對し一點毎に金五十錢、賣約品は賣價の二割（三越會場費）及戰時特別税一割を出品者の負擔とす
- 一、授賞 日本漆藝院賞、推獎の二種とす

日本漆工會 東京市神田區鍛冶町一六ノ二

財團法人。明治二十三年小川松民、柴田是眞、川邊一朝、池田泰眞、白山松哉、田邊源助等二十四名の發企により設立。品川彌次郎子初代会頭となり、二代には田中光顯伯宮内大臣現職のま、就任最も力を會勢に致した。爾來略隔年に漆工藝技會を開催し、大正十一年迄に十六回を重ねた。而して十二年の震災後同展は一時期開催を休止したが、昭和九年三月より新に現代漆藝品展覽會の名稱の下に全國漆藝展を開催するに至つた。日本特有の蒔繪並に漆に關する傳統保存及進歩を圖り、事業として漆並に漆工業に關する諸般の施設調査及技術上の研究、漆樹栽

培の獎勵及其生産調査、圖書標本類の蒐集、展覽會講演會開催等をなす。月刊雜誌「漆と工藝」發行。

〔理事長〕手塚千代吉〔理事〕吉野富雄、都築幸哉、松田權六、山崎尙三郎、岩瀧尙美

日本商業美術協會 東京市京橋區銀座三ノ五古田達賢方

大正十五年設立の商業美術家協會を改組し、昭和九年現稱に改む。健實なる商業美術の發達普及を圖るを目的とす。新體制に應ずるため、舊來の商業主義との提携を解消し、再出發を期して十五年十月一應解散した

日本新興南畫院 大阪市天王寺區松ヶ鼻八一

昭和十二年十一月主として大阪並京都在住南畫家に依り結成。十三年五月大阪市立美術館に公募に依る第一回展開催。

〔會員〕稻村虹亭、池田十朗、西岡都久路、直原放青、廣瀬凌雲、片山秀陵、片桐白登、横山春溪、高須白雲、橋徹州、村上蘭田、福田青藤、福與悅夫、船井秋浦、衛藤晴村、秋吉玄圃、佐野蘆水、湯川三舟、平野長彦、須網雨亭、末藤米圃、杉本白象

日本水彩畫會 東京市本郷區駒込神明町七二望月省三方

故大下藤次郎、丸山晚霞、故河合新藏の三人の經營せる日本水彩畫會研究所を大正二年四月石井柏亭、石川欽一郎、故戸張孤雁等三十七名の發起に依り、改制

擴張して新に各派水彩畫家の綜合團體として設立、毎春公募展開催、昭和十五年五月第二十七回展に至る。

〔顧問〕石井柏亭、石川欽一郎、丸山晚霞、眞野紀太郎、南薫造、中澤弘光、相田直彦、赤城泰舒、平井武雄、小山周次、望月省三、富田温一郎、板倉贊治、水野以文

〔會員〕百二十名

同展規定抜萃

- 一、出品の種類は水彩、素描、版畫、グワツ、シユ、パステル、テンペラ等とす
- 一、出品は會員外は五點まで、出品手数料金二圓納入のこと
- 一、審査の上會員外出品中の優秀作者に對し日本水彩畫會賞其他の賞を附す
- 一、賣約の際は手数料（會員一割、會員外二割）を本會に徴收す

日本彫金會（工） 本郷區駒込込坂町三二七海野清方

明治中期に結成された日本金工協會が大正の末に解散され、その中の彫金家が金聲會を創立、其の後彫金會と改稱したが昭和九年會規を改め現在の日本彫金會となした。展覽會を開く。

〔會長〕清水龜藏〔委員長〕海野清

日本彫刻家協會（彫） 東京市淀橋區下落合四ノ二〇〇三

昭和十一年五月結成。彫刻の研究團體昭和十五年三月東京府美術館に第四回公募展を開催。

〔會員〕岩田滿平、林是、坂東文夫、大川逞一、大嶽茂樹、奥田勝、加藤顯清、

片山義郎、高澤七郎、武次郎、中村七十畝村直久、野々村一男、倉持芳、小柴利孝、明石順吉、雨田光平、三木凱歌、三坂耿一郎、白井謙二郎、菅沼五郎〔會友〕伊室正次、金谷與三郎、高田進吉、北地莞爾、來家末治、小寺昌三、北古賀一郎、川瀬永治、佛子泰夫

同會第二回展規定抜萃

- 一、手数料 出品ハ一點ニ付金五十錢ノ出品手数料ヲ搬入ト同時ニ納入ノ事
- 一、鑑査 本協會員之ヲ行フ
- 一、授賞 本會ハ卓越セル作品ニ對シ授賞スル事アルベシ
- 一、賣約 陳列作品賣約ノ場合は手数料トシテ賣價ノ一割ヲ本會之ヲ受ケ

日本彫塑家聯盟 東京市瀧野川區上中里一七二小倉右一郎方 電駒込一八九八

昭和十三年九月結成。物資動員に基く青銅使用制限に對する對策を講ずるため、新に彫刻十四團體により組織されたもので、同月當局に銅使用許可申請書を提出した。

〔加盟團體〕文展第三部作家協會、東邦彫塑院、構造社、日本美術院彫刻部、瀧野川彫塑研究所、主線美術協會、日本彫刻家協會、國展彫刻部、造型彫刻家協會、日本彫會、日本美術協會彫刻部、木心會、九元社、新構造社、朝倉塾、太平洋畫會彫刻部

日本圖書手工協會 東京市神田區駿河臺二ノ五伯野平田榮二方

昭和六年設立。主として中等學校の圖

畫手工科並作業科の教職員を以て組織。東京に本部を置き各府縣に支部を設く。

技能科教育の振興、同科教員地位擁護及び向上を目的とし、事業として同教育に關する研究調査、展覽會の開催、各地講習會展覽會等に於ける援助、同科教員の人事斡旋、圖書雜誌の出版等をなす。

〔會頭〕 伯耆平田榮二

日本陶藝研究會 東京市中野區川添町一 電中野五八三五

昭和十四年四月舊東陶會系の作家有志に依り組織。隔月研究會を開き、毎年公募展を開催す。

〔主催〕 大森光彦〔會員〕 長谷川怒、星野國太郎、土肥刀泉、塗師淡齋、小倉雅道、大森光彦、小川雄平、唐杉榮四、加藤閑陸、横山朝陽、竹内蘭山、松島一夫、小柳今朝一、湯山青崖、水野清一、鈴木不丈夫

同會第一回展出品規定抜萃

一、本展覽會ハ左ノ規定ニヨリ、昭和十四年六月三日ヨリ同月十四日マデ、東京府美術館ニ於テ開催ス

一、出品ハ自己ノ製作シタル陶磁器工藝品ニ限ル

一、出品ハ鑑査ヲ行フモノトス

一、優秀ナル作品ニ對シテハ陶藝賞並ニ陶藝獎勵賞ヲ贈ル

一、出品ハ一名五點以内トス

一、出品費約ニ對シテハ賣價ノ二割五分ヲ手數料トシテ本會ニ收ムルコト 但シ加税ノ場合ハ別ニ申受ク

日本陶磁彫刻作家協會 東京市世田谷區赤堤町二ノ四六九小川雄平方 電松

澤三八九七

陶磁彫刻藝術の向上發達、國家の文化的使命に協力することを目的として昭和十五年十二月に結成した。

〔會長〕 沼田一雄〔理事〕 加藤顯清、小川雄平、雨宮次郎、小室達、三澤寛、高山泰三

日本陶彫協會(工) 京都市東山區大和路五條下ル二丁目東入ル梅屋町六〇

高山泰造方、東京市世田谷區赤堤町二丁目四六九小川雄平方

昭和十一年創立。沼田一雅の指導の下に彫刻陶器に關する研究を行ふ。展覽會を開催す。

〔同人〕 沼田一雅、石田來之助、長谷川怒、土淵道禎、小川雄平、加藤顯清、吉川常雄、高山泰造、津田芳太郎、中村健治、武藤太郎、久保駒太郎、山本正年、山本一夫、八木一夫、眞鍋知道、船津英治、寺前皓介、淺見賢一、關本昇

日本童畫家協會 東京市豊島區池袋二ノ一〇二一武井武雄方

昭和二年創立。童畫の向上發達、著作權の擁護等を目的とし、展覽會、出版等をなす。

〔會員〕 初山滋、川上四郎、武井武雄、深澤省三、清水良雄〔會友〕 蕉谷元一、福與英夫、佐藤今朝治、木俣武

日本人形研究會 東京市神田區豐島町四ノ四 電浪花一五三六

昭和八年人形作家及研究家を以て組織日本人形の向上普及、作家の社會的地位

の向上を計るを目的とし、隨時講習、講演會を催し、又人形使節による國際親善に努む。

〔會長〕 山田徳兵衛〔副會長〕 太田徳久
日本人形藝術作家協會 東京市下谷區上根岸四五佐野方

昭和十二年創立。日本人形作家聯盟の結成と同時に解散。

日本人形作家聯盟 東京市小石川區久堅町二七野口方

昭和十五年九月創立、傳統的人形美術の發達を圖り、作品展講演會等の開催、調査出版、海外紹介、輸出斡旋等の事業を行ふ。

〔會員〕 鹿兒島壽藏、黒川多加詩、佐久間珣甫、佐野光輝、中川光一、野口光彦、山川亨造、山本壽、綿貫萌春、猪谷春峯

日本人形社 東京市下谷區上野櫻木町五十四 電下谷九二

昭和十年創立。我國人形藝術の向上發達を圖るを目的とす。十一年第一回公募展を開催した。

〔會員〕 岡本玉水、平田郷陽、久保勝太郎、平田陽光、吉田順光、磯貝勝之、平田玉陽、野田芳正、宇佐美弘業、川上南甫、平野鏡國〔會友〕 四名〔贊助員〕 吉田永光、久保佐四郎〔顧問〕 西澤留富、有坂與太郎、笹川臨風

日本版畫協會 東京市目黒區駒場八

九一 山口進方

大正七年創立の日本創作版畫協會が、昭和六年版畫家の大同團結をはかり改組

せるもの。毎年定期の公募展を開き版畫美術の振興と研究に努む。尙文部省外務省の後援で、歐米各地に國際的版畫展を開催した。

〔會長〕 岡田三郎助〔退去〕〔副會長〕 山本鼎〔會務委員〕 石井鶴三、前田千帆、恩地孝四郎、平塚運一、栗田雄、清宮彬逸見亨、山口進、旭泰宏、畦地梅太郎、柿原俊男、前田政雄、深澤素一、稻垣知雄、小泉癸巳男、下澤木鉢郎、田坂乾、關野準一郎、根本霞外、佐々木孔

日本美術院(日、彫) 東京市下谷區谷中上三崎南町五二 電下谷二五一〇

明治三十一年十月、當時東京美術學校長を退いた岡倉覺三を盟主とし、橋本雅邦以下二十六名を正員として結成。「新時代に於ける東洋美術の維持並開發」が創立に際しての二大主張であつた。同年十月第一回展を開催、且つ研究所を下谷谷中初音町に設置して後進の養成に努め雜誌「日本美術」を發刊。同三十九年十二月に至り一時東京の研究所を撤廢、同人四名は岡倉覺三と共に常陸の五浦に退去し専念研鑽に努めたが、大正二年岡倉覺三病歿するに及び、直に院の再興を劃し新に院舎を谷中上三崎南町に起し翌三年九月開院式を舉行、十月再興第一回展を開催した。再興に當りしは横山大觀、下村觀山、木村武山、安田靉彦、今村紫紅、小杉未醒、辰澤延次郎、笹川種郎、齋藤藤三等で其中實技者六名を以て同人とした。再興美術院には彫刻部並に洋

畫部を設けたが洋畫部は大正九年小杉未醒、山本鼎、倉田白羊等の脱退と共に消滅した。毎年秋期に公募展を開き、又春季には内部の試作展を開く。大正十年米國クリーブランド美術館の要請に應じ、同國主要都市六箇所に巡回展を開き、以降日本美術の海外紹介にも努む。昭和十年帝院改組に際して、同人合議の上新帝院への参加を聲明し、横山大觀、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、富田溪仙、平福田中、佐藤朝山、藤井浩祐の八名が會員に就任した。十一年二月第一回帝院に參加す。六月新任平生文相の試案提示されるに及び、同院出身の會員は（藤井浩祐を除く）他の八會員と共に、同試案を改組の趣旨を没却せるものとなし、當局不信任を聲明して會員を辭任した。同年近藤浩一路、藤井浩祐、武井直也の三名脱退、十二年三月院友の集團として院友俱樂部が結成されたが同年十二名の院友が脱退した。十五年第二十七回展開催。

〔經營者〕横山大觀、木村武山、安田靉彦、齋藤隆三、小林古徑、前田青邨、大智勝觀、平福田中

〔同人〕（繪畫部）横山大觀、木村武山、安田靉彦、小林古徑、前田青邨、大智勝觀、中村岳陵、荒井寛方、山村耕花、筆谷等觀、長野草風、橋本靜水、北野恆富、眞道黎明、小林柯白、橋本永邦、郷倉千靱、堅山南風、酒井三良、富取風堂、小山大月、奥村土牛、小倉遊龜、田中青坪、太田聽雨、中村貞以（彫刻部）平福田中、吉田白嶺、佐藤朝山、石井鶴三、保田龍門、喜多武四郎、新海竹藏、大内青圃、山本豐市、中村直人、宮本重良、松原松造、村田徳次郎、關谷充（院友）（繪畫部）西村青歸、牛田鶴村、兒玉素光、石原春秋、野生司香雪、奥村藻山、大塚晃陵、橋本秀邦、黒田古郷、木下春、四田觀水、加藤洵綾、歸山千若、奥村玲瓏、野田文雄、跡部白鳥、三石紅樹、中庭媛華、小島一谿、並木瑞穂、眞道秋皓、藤井白映、鈴木大藏、石本光太郎、柴宗廣、高橋萬年、中島清、小谷津任牛、村田泥牛、高橋周桑、上田畦草、高橋秀住、高橋都哉、中島榮刀、岡田壺中、川手青郷、鈴木鳥心、島田納郎、岡田雄鼓、松永成路、宮崎東里、河村良孝、半田鶴一、我妻碧宇、丸儀太郎、宮田隆子、鶴飼節夫、横田仙草、花岡朝生、佐藤耕寛、冬木大丙、小林草悅、八ッ井舜圭、中澤一僑、新井勝利、對馬安正、佐野光穂、岩橋英遠、河内舟人、小島丹藻、半田泰至、鈴木主子、里内久則、安孫子荻聲、久保清子、中島萬木、鈴木三朝、菊池公明、柿沼宗居、岩田光壺、岡本彌壽子、山口蒼輪、關暲明、岡茂以、長井亮、粥川伸二、三村石邦、佐々木京林、鈴木麻古等、小松均、片岡球子、上垣候鳥、山本大慈、狗卷南名雄、酒井とし、郷倉利子、鹽出英雄（彫塑部）大橋敏男、松村秀太郎、杵谷精一、寺瀬默山、入江美法、大野隆一、林是、矢崎虎夫、横田七郎、宮本理三郎、辻吉堂、長濱虎雄、長谷川豊雄、

岡村進、小林章、中平四郎、古藤正雄、土井要輔、河野正造、關長造、柏木康兵、加藤泰三、武林與吉、小林貞吾、森豊一〔研究會員〕百十六名

同展規則抜萃

- 一、出品ハ繪畫及彫塑ノ二種トス
- 一、本會ニ出品セントスルモノハ出品物ヲ東京府美術館内日本美術院出品受付事務所ニ差出サルベク本院ハ鑑査ノ上之ヲ本會ニ陳列ス
- 一、鑑査ハ本院同人之ヲ行フ
- 一、出品物ハ總ベテ新製作ニ限ル公私展覽會ニ一タビ公表シタルモノハ採ラズ
- 一、陳列サレタル作品中特ニ優秀ナルモノアル時ハ銚衛ノ上本院ハ之ニ賞ヲ附スルコトアルベシ
- 一、賣約サレタル出品ニ對シテハ手数料トシテ賣價ノ一割ヲ本院ニ申受クベシ
- 一、本會閉會後引續キ京都或ハ大阪名古屋等ニ於テ開會スルコトアルベキニツキ出品者ハ豫メ之ヲ承認シ置カレベシ

日本美術協會（綜合） 東京市下谷區上野公園櫻ヶ岡 電下谷一九一〇

明治十一年日本美術の衰頹を憂ひ河瀬秀治等の同志會して美術品評會を開き、翌十二年會名を選んで龍池會と命名し、佐野常民を會頭に推し明治十六年有栖川宮熾仁親王殿下を總裁に奉戴した。而して明治十三年内務省博物館の開設せる第一回觀古美術會を第二回より繼承して開催し明治二十年に至つた。此年十二月規則を改正し、會名をも亦日本美術協會と改め、其後毎年春季二回（彫刻、工藝及書、篆刻）秋季一回（日本畫）の三回に分ち展覽會を開催するを例とする。昭和十一年度は第百回に相當せるを以て記念の爲各部の綜合展覽會を春季に於て開催した。大正十四年組織を改めて財團法人とした。而して現在其組織は第一（繪畫）第二（書、篆刻）、第三（彫刻）、第四（建築圖案）、第五（玉、石、木、竹、牙、角介甲彫品、木象嵌）、第六（彫金、鍍起、鍍金）、第七（鑄金、鍛金）、第八（陶磁、七寶、玻璃）、第九（漆器、蒔繪）、第十（織物、刺繡）、第十一（寫眞、製版）の十一部より成る。

尙同會列品館は大正十年の竣工で平家建、延坪五百二坪、同會主催展覽會に使用するの外は希望者の依頼に應じ貸館する事がある。

〔總裁〕 高松宮宣仁親王殿下〔會頭〕 伯爵金子堅太郎〔副會頭〕 中田敬義〔專務理事〕 溝口禎次郎〔理事〕 男爵東郷安山崎朝雲、八木岡春山、香取秀眞、板谷波山、千葉胤明、大坪正義、今井爽邦、〔監事〕 杉山令吉〔主事〕 安井易市、評議員二十五名、委員顧問九名、委員九十九名、名譽會員二十七名、特別會員二名、通常會員一千四百四十七名

日本文人畫協會（日） 東京市小石川區小日向臺町二ノ二九渡邊雪峯方 電大塚六三三七

文人畫の振興を圖るを目的とし、隨時畫及詩文書等の研究會、講習會、展覽會等を開催す。昭和十一年上野公園日本美術協會に第一回公募展開催。

〔幹事〕 中村不折、渡邊雪峯、中田雲暉

大久保楓閣、西丸小園、柚木玉郎〔評議員〕磯部羽州、伊藤紫雪、島田鶴亭、藤本翠園、辻香場、松岡吳藍、海上龍子、本尾香園、木村棲雲、吉田苞竹、平原香雪、入澤華畦、寺山春龍、皆川桐蔭

日本壁畫會 (日、洋、彫) 東京市澁谷區幡ヶ谷原町八〇〇安田豊方 電四谷二九三二(呼)

昭和十年十一月結成。壁畫藝術の研究及作品發表、實際仕事の應需を目的とす。十五年五月銀座青樹社に第四回展開催。

〔會員〕鶴田吾郎、安田豊、布施信太郎、中村直人、島村三七雄、武野貞俊

日本漫畫會 東京市大森區南千束町四小峰三四郎方

大正二、三年頃當時の都下新聞社在勤畫家の紙上藝術に飽き足らず、展覽會開催を發企したのが同會結成の起源で、現在ではジャーナリスト以外の青年漫畫家を擁して年一回展覽會を開催する。

〔會員〕池田永一治、池部鈞、牛島一、江島初喜、岡本一平、小野佐世男、大森弓磨、帷子進、可東みの助、京屋金介、北澤樂天、寺内純一、小林克巳、小峰三郎、近藤日出造、阪本牙城、清水勘一、志村利和、杉浦幸雄、杉田三太郎、田中比左良、田邊路平、名越國三郎、中村圭助、服部亮英、代田收一、細木原青起、前川千帆、水島爾保布、宮尾しげを、三宅當也、村上鐵太郎、森火山、森島直造、森山三郎、安本亮山、山本李兵衛、矢崎茂四、和田邦坊、富山まもる、生澤期、

澁谷三止期

日本民藝協會 東京市小石川區丸山町六 電大塚二三七三

工藝の健全なる向上顯揚を計り、廣く文化に寄與する目的を以て大正十五年に創立した。工藝に關する種々の調査、出版、研究會、展覽會開催等を行ふ。昭和六年一月雜誌「工藝」發行。昭和十二年十月日本民藝館設立。昭和十四年四月雜誌「民藝」發行。以下現在に至る。

〔會長〕柳宗悅〔副會長〕河井寛次郎、濱田庄司〔常務理事〕淺野長量、式場隆三郎、田中俊雄〔理事〕芹澤銈介、柳宗悅、外村吉之介、武田洩眞、壽岳文章、村岡景夫、吉田璋也

日本木彫會 東京市淀橋區諏訪町二

内藤伸の主唱により大正十三年設立された木彫研究會と其の姉妹會たる木生會とを合併して昭和六年春結成。木彫藝術の研究、發表を目的とし、毎年東京乃至大阪に於て製作展を開く。

十五年五月正統木彫家協會の結成により二つに分裂す。同展は作品を公募せず會員にて互選の上陳列す。

〔幹部會務員〕内藤伸、佐々木大樹、中野桂樹、三國慶一〔會員〕森野圓象、山脇敏男、山口四郎、井口喜夫、大島駒藏、平澤信男、工藤敬三、西田明史、佐伯量良、外會友十三名、見學員二十名

日本輸出工藝聯合會 東京市麹町區丸ノ内二丁目九ビル二階 電丸ノ内五三

七二、六〇八五、六〇八六
社團法人。昭和八年創立。十三年七月社團法人に改組。同十四年二月紐育支所「日本工藝」を設立。日本工藝の傳統を表現して且つ海外の用に即せる工藝品の海外販路を開拓し一面以て本邦輸出貿易の伸張を圖ると共に他而世界文化の進展に寄與せんとするもの、内外に工藝的商標に關する陳列會を開催し、隨時輸出工藝に關する圖書を刊行する。

〔會長代理〕安田祿造〔顧問〕和田三造、鹽谷狩野吉、大島永明、奥田新三、齋藤吉臣〔常務理事〕帝國工藝會總務理事、大阪府工藝協會理事長〔理事〕京都工藝美術協會會長、愛知縣工藝協會會長、神奈川縣商工協會會長〔監事〕東北北海道工藝協會理事長〔參事〕水谷良一〔主事〕牧野桓

人形藝術院 東京市品川區南品川三ノ一五二 電高輪六四七〇

人形の藝術的向上を計るを目的とし、年一回公募展を開く。昭和十二年三月東京白木屋に第二回展開催。

〔同人〕建昌大夢、有坂與太郎、會員は定めず。

ねばつち社(彫) 東京市豊島區巢鴨一ノ二志田達三方電大塚八六二

昭和九年度東美校彫刻科塑造部出身者を以て組織。彫塑研究並發表をす。

〔同人〕井上信道、盤若一郎、片山義郎、富岡泰、吉田寛治、横田文男、鷹巢照久、志田達三、上田薫、畝村直久、酒見恆、中村三郎、中村七十、淺岡重治、大間知龍之助、眞鍋忠行、富田武雄、松田一郎〔贊助員〕北村西望、建昌大夢

農村工業協會 東京市神田區錦町一ノ六 電神田四六七二

昭和九年創立。社團法人組織。農村工業の發達を圖るを以て目的とし、これに關する調査研究、生産技術及經營の指導販賣連絡等の事業を行ふ。雜誌「農村工業」を發行し、展覽會、講演會の開催、講師の斡旋派遣等をなす。

〔會長〕子爵大河内正敏〔常務理事〕増田作太郎

巴人社(洋) 東京市下谷區上野櫻木町五〇 中山正義方

洋畫の研究團體。毎春同人展を開催する。會員十五名。

巴里東京新興美術同盟 東京市中野區江古田四ノ一五五四齋藤五百枝方 電中野四四一四

昭和五年創立。巴里に於けるアヴァンギャルド藝術を東京に招來し又東京の新興美術を巴里に紹介し一黨一派に偏せざる文化交流を行ふ。昭和七年第一回展開催。

〔講師〕西田正秋〔顧問〕太田徳久、西澤笛歌、花柳壽美、藤懸靜也、山田徳兵衛

〔同人〕西田正秋〔顧問〕太田徳久、西澤笛歌、花柳壽美、藤懸靜也、山田徳兵衛

〔同人〕西田正秋〔顧問〕太田徳久、西澤笛歌、花柳壽美、藤懸靜也、山田徳兵衛

〔同人〕西田正秋〔顧問〕太田徳久、西澤笛歌、花柳壽美、藤懸靜也、山田徳兵衛

〔同人〕西田正秋〔顧問〕太田徳久、西澤笛歌、花柳壽美、藤懸靜也、山田徳兵衛

葉隠美術協會(綜合) 東京市目黒區

原町一三五〇江島信一方

昭利十一年五月創立。佐賀縣出身美術家により組織。年一回展覽會開催。

〔副會長〕田雜五郎〔幹事〕江島信一

白壁會(洋) 京都市東山區神宮道堀池町山内善三郎方 電上二二五五

昭利二年九月關西美術院關係の同志を以て結成。昭利十三年十一月第十六回展開催。

〔會員〕柴田又太郎、藤井義晴、水清公子、戸島孚雄、井上賢三、山内善三郎、伊谷賢藏、岩崎金雄、錦義一郎、飯田清毅、伊庭傳治郎、尾崎悌之助、永井朔夫、松村綾子、津田周平、藤田輝世、中西侃太郎、竹内喜助、廣田延造、豊岡孝子

白御會(日) 京都市石京區嵯峨伊勢上町一〇 電嵯峨六七五

昭利十二年九月關西在住の日本美術院系作家に依り結成。毎月研究会を開き、春季に大阪、京都美術館に展覽會開催。

〔會員〕石九大象、岩永蘇香、今井紫悦、粥川伸二、川本聰音、館岡栗山、中島榮刀、永友綠樓、上田英二、山田唐徳、山本大慈、佐野光穂、三宅順風、持田卓二、北澤映月、中島啓朝、栗田騎歌、津田榮子、濱孤嘯、高崎興、中河忠夫

白日會(洋、彫) 東京市下谷區清水町六富田温一郎方

大正十三年春組織。同年六月東京三越本店に第一回展開催。爾來毎年春季に東京府美術館に公募展を開き昭利十四年第一

十六回展に及ぶ。

〔會員〕(繪畫部)中澤弘光、富田温一郎、大久保喜一、間部時雄、相田直彦、無縁寺心澄、村上鐵太郎、熊谷登久平、五島甚之介、山田説義、篠原董、伊東清

永、荻野康兒、竹林順一、永井武夫、小堀進、灰野管通、渡部菊二、長明、浮島弘行、川村精一郎、鴉川誠一、高畑正明、鈴木重成、島村三七雄、刑部人、廣本了

〔彫刻部〕吉田三郎、木村珪二、笹野惠三、田島龜彦、岩崎良平、星野直弘、兒島正典、富田匠美、〔客員〕三浦忠軒、三井高維、香山蒼、富岡東四郎、金子日

久連、高木背水、〔會友〕(繪畫部)渡邊柳次郎、柏木仁平、岡崎金藏、栗林丈、小坂立夫、兒玉道夫、朝田進、鈴木民次郎、南登志、小泉馨二、關口誠、山森茂、坂江重雄、飯

島八郎、渡邊百合子、古川陽子、佐藤龍雄、大石七風、萩原英一、青山龍水、川口榮、島田四郎、谷部正、古川弘、山口敏夫、山内邦義、高橋忠彌、門脇耕、川島實、結田信、松岡次賀、神田橋信夫、市原義夫、高橋隆比古、長澤昇、山道榮

助、山岸富五郎、小島眞佐吉、古田芳雄、宮崎精一、(彫刻部)西田信、荒卷茂

同會第十六回展規定抜萃
一、會場 上野公園 東京府美術館
一、出品點數一人五點迄
一、出品者は出品手数料として一人に付金二圓を出品物搬入と同時に納入の事
一、鑑査は會同人によりて之を行ふ

一、優秀なる作品に對しては白日賞並に獎勵

賞を贈與す、白日賞受賞者は翌年展覽會に二點以内を無鑑査出品する事を得

一、陳列品賞約となりたる時は手数料として賣價の二割を本會に申受くる事

白閃社(日) 東京市杉並區永福町四七〇渡部香堂方

昭利十一年十二月舊南畫院有志に依り結成。十四年七月銀座松坂屋に第三回展開催。

〔會員〕石原紫雲、大根田雄國、渡部香堂、田中蘭谷、田岡春徑、田能村竹莊、村上得明、高士幽篁、江川武村、須藤悟雲、鈴木石鷲

白朝會(洋) 東京市淀橋區下落合一ノ五四〇杉本貞一方 電大塚六七二六

昭利九年秋舊帝展第二部審査員級有志により組織、毎年秋二回東京及大阪に於て展覽會を開く、十四年三月銀座青樹社に第五回展開催。

〔同人〕金澤重治、金井文彦、吉村芳松、田邊至、大久保作次郎、安宅安五郎、柚木久太、杉本貞一

柏舟社(日) 京都市右京區御室小松野町二五梅原藤坡方 電西陣五二三
京都會立專門學校の同期出身者で、故土田麥徳に師事した者を以て組織す。會員は官展、他の團體展に出品せず。

〔會員〕伊藤仁三郎、梅原藤坡、要樹平、澤田石民、新見虛舟、林司馬
八獎會(洋) 東京市澁谷區千駄ヶ谷五ノ九〇九石原求龍堂内 電四谷六四八

三 求龍堂並に兜屋西川武郎主催の洋畫發表機關。昭利十二年十月銀座資生堂に第一回展開催。

〔會員〕青山義雄、林重義、猪熊弦一郎、伊藤廉、小磯良平、向井潤吉、野口彌太郎、會宮一念

原町權工藝研究會(工) 福島縣相馬郡原町吉井樗家具製作所内

昭利五年創立。同地方の特産たる樺材による工藝品の改善、販路開拓を圖る。年二回展覽會開催。

〔會長〕吉井佐吉、會員三十八名。
況美術協會(洋) 東京市麻布區霞町六小林茂方 電赤坂四四二二
昭利八年創立。舊稱新興獨立美術協會。「創作の自由と獨創」を尊重し、從來の有鑑査展制度を否定し、作品公募による無鑑査展を開催。

〔會員〕小林茂、丸野豊、鈴木清作、佐藤文彦、林靜子、八木秀晃、築比地正司、津田昇宏、輿水瑛、牧島省三
阪神彫塑家協會 兵庫縣武庫郡本山村小路一二三妹尾健太郎方 電御影五一三一

昭利十一年創立。二科出品の彫塑家を以て結成。十五年五月第二回展開催。
〔顧問〕上田曉〔會員〕織田久馬一、唐木政一、山根顯一、木村敏一、水野美恵子、妹尾健太郎、山本博一、河合芳男、大西金次郎、河野清治

斑丘社(工) 東京市下谷區上野元黒

門町六神戶屋内 電下谷九八一
昭和五年度東美校工藝科入學者を以て組織する。毎年十一月展覽會開催。

〔同人〕 井尾敏雄、井上周平、石橋貞治、橋本欣三、長谷川八十吉、近江晃、小川正、和田鴨江、涌波達雄、鹿取一男、金田諒三、柏崎榮助、芳武茂介、高田六藏、中川清一、中村保彦、内田邦夫、乗松巖山本光、松原春男、松川繁二、小池岩太郎、小林達雄、古代幸三、江波戸一郎、寺井直次、赤松義弘、淺田二郎、佐伯義雄、宮島昌男、島田陽次郎、下暢、廣瀬英五郎、末田利一、進來昇

萬華鏡社 東京市瀧野野川區西ヶ原五四三中郵便局
昭和五年創立。書、畫、篆刻、工藝等各作家の親睦團體。

〔會員〕 一噌青水、島海鶴洞、鹿兒島二橋、竹原明風、中郷蘭臺、山田正平、江川碧潭、相原大樹、西川祥益、小澤天來、横山善信、竹越眞三夫、村雲大樸子、小泉繁、荒木柳城、澤田篁齋、北村明道

美術工藝大阪巧藝社 大阪市北區河内町一ノ二三伊藤光秋方 電堀川二六八三
大正十四年創立の精美會を昭和八年會員を増加して現稱に改む。年一回同人の工藝展開催。

〔顧問〕 白川朋吉
美術公正會 東京市淀橋區西大久保二ノ二五三 電四谷六三二五
昭和十年美術記者に依て組織。美術行政並に美術に關する諸問題を研究し、時宜に應じて其主張を行ふ。パンフレットを發行す。

〔會員〕 岩佐新、垣見泰山、浦崎永錫
美術懇話會 東京市下谷區上野公園美術研究所内 電下谷三三八七
昭和六年十一月、美術研究所内に創立。「美術に關する趣味及理解を進め社會に於ける美術の健全なる發達に貢獻する」を以て目的となす。事業として一、美術に關する懇話會の開催。二、展覽會講演會等の美術に關する研究的集會の開催。三、美術に關する出版等を行ふ。昭和七年一月より十二年六月迄美術研究所の編輯にかゝる月刊「美術研究」を發行

美術記者聯盟 東京府美術館内

〔顧問〕 矢代幸雄〔幹事〕 飯田九一、石野隆、岩井藤吉、鈴木泰、友田昌政、杉浦忠一郎、川本敏郎

美術記者聯盟 東京府美術館内

〔顧問〕 矢代幸雄〔幹事〕 飯田九一、石野隆、岩井藤吉、鈴木泰、友田昌政、杉浦忠一郎、川本敏郎

美術記者聯盟 東京府美術館内

〔顧問〕 矢代幸雄〔幹事〕 飯田九一、石野隆、岩井藤吉、鈴木泰、友田昌政、杉浦忠一郎、川本敏郎

美術記者聯盟 東京府美術館内

美術記者聯盟 東京府美術館内

昭和十四年三月美術雜誌記者が相互の連絡協力を目的として結成。
〔會員〕 中川愛水、石川宰三郎、浦崎永錫、湯山昇、芳川越、佐久間善三郎、中山貞夫、大山廣光、菊池芳一郎、高木紀重、猪木卓爾、藤森順三、齋田元次郎

〔幹事〕 浦崎永錫、大山廣光
美術工藝大阪巧藝社 大阪市北區河内町一ノ二三伊藤光秋方 電堀川二六八三
大正十四年創立の精美會を昭和八年會員を増加して現稱に改む。年一回同人の工藝展開催。

〔顧問〕 白川朋吉
美術公正會 東京市淀橋區西大久保二ノ二五三 電四谷六三二五
昭和十年美術記者に依て組織。美術行政並に美術に關する諸問題を研究し、時宜に應じて其主張を行ふ。パンフレットを發行す。

〔會員〕 岩佐新、垣見泰山、浦崎永錫
美術懇話會 東京市下谷區上野公園美術研究所内 電下谷三三八七
昭和六年十一月、美術研究所内に創立。「美術に關する趣味及理解を進め社會に於ける美術の健全なる發達に貢獻する」を以て目的となす。事業として一、美術に關する懇話會の開催。二、展覽會講演會等の美術に關する研究的集會の開催。三、美術に關する出版等を行ふ。昭和七年一月より十二年六月迄美術研究所の編輯にかゝる月刊「美術研究」を發行

美術記者聯盟 東京府美術館内

〔顧問〕 矢代幸雄〔幹事〕 飯田九一、石野隆、岩井藤吉、鈴木泰、友田昌政、杉浦忠一郎、川本敏郎

美術記者聯盟 東京府美術館内

〔顧問〕 矢代幸雄〔幹事〕 飯田九一、石野隆、岩井藤吉、鈴木泰、友田昌政、杉浦忠一郎、川本敏郎

美術記者聯盟 東京府美術館内

〔顧問〕 矢代幸雄〔幹事〕 飯田九一、石野隆、岩井藤吉、鈴木泰、友田昌政、杉浦忠一郎、川本敏郎

美術記者聯盟 東京府美術館内

〔顧問〕 矢代幸雄〔幹事〕 飯田九一、石野隆、岩井藤吉、鈴木泰、友田昌政、杉浦忠一郎、川本敏郎

美術記者聯盟 東京府美術館内

〔顧問〕 矢代幸雄〔幹事〕 飯田九一、石野隆、岩井藤吉、鈴木泰、友田昌政、杉浦忠一郎、川本敏郎

美術記者聯盟 東京府美術館内

したるほか、美術研究資料(計四輯)、美術懇話會叢書(計二輯)等を出版してゐる。
〔理事長〕 藤原銀次郎〔理事〕 萩野仲三郎、川合玉堂、芝田徹心、原邦造、矢代幸雄、和田英作、渡部信〔會員〕 百四名
美術雜誌東臺俱樂部 東京府美術館内

美術雜誌編輯者の組織する親睦團體。
〔會員〕 藤本詔三、石川宰三郎(美之國) 岩佐新(美術)、浦崎永錫(美術界)、垣見宣修(美術時報)、大下正男(みつる)
美術創作家協會 東京市杉並區正保町一九三荒井龍男方
昭和十二年創立の自由美術家協會を十五年七月現稱に改め従来の藝術的主張に一層努めることとなつた。公募展開催。
〔會員〕 荒井龍男、濱口陽三、長谷川三郎、北尾淳一郎、小山昇、小松義雄、村井正誠、森芳雄、難波田龍起、中村眞、小野里利信、清水恒、植木茂、矢橋六郎、山口薫、山口光春

〔會友〕 朝妻金治郎、馬場顯三、文學洙英九、船田玉樹、平岡潤、岩橋英遠、金煥基、吉見庄助、野原隆平、大橋城、劉永國、富岡宏資、谷澤秀晃、山口正城
同展規則抜萃

一、本展覽會ニ出品シ得ル作品ノ種類ハ左記ノモノトス A 油繪、B 水彩、C 版畫、D 素描、E コラージュ、F オブジェ、G フォーグラム
一、本展覽會ニ出品シ得ル大キサハ左記ノ如シ

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

一、本會は美術團體聯盟と稱す
二、本會は美術團體を單位として組織す
三、本會は美術團體相互間の連絡を圖り時代の要求に依り成立せる職業團體としての交渉機關たることを主意とす
四、本會に會員團體の互選に依る役員團體若干を置き會務を處理せしむ
五、本會に加盟せんとする團體は役員團體一致の承認を受くるを要す
六、會員團體は維持費として金五拾圓也を入會と同時に納付するものとす
七、本會の事業年度は毎年十月一日に始まり九月末日に終るものとす

美術批評家協會 東京市麴町區麴町

四丁目五 電九段一三五三

昭和十一年十月設立。美術各部門の學者、批評家を會員とし、美術批評の確立進歩的なる文化運動の實踐を目的とす。その計畫する事業は左の通りである。

- (A)機關雜誌「美術批評」の發行、(B)美術圖書館設立、(C)美術行政に對する提案建築、(D)都市美術に對する美術的批評、(E)美術教育に對する指導機關の設立、(F)産業美術に對する指導機關の設立、(G)海外に於ける美術批評家團體との提携、(H)海外に於ける文化團體との資料の交換、(I)一般美術問題に關する講演、(J)美術著作權の制定、(K)國際的文化交換に對する批評、(L)美術コンクールの開催、(M)優秀作品の推薦

- 〔會長〕 子爵吉川元光〔書記長〕 柳亮〔事務長〕 外山卯三郎〔會員〕 (東洋美術) 小林剛、蓮實重康、土方定一(西洋美術) 外山卯三郎、柳亮、今泉篤男(建築) 佐藤武夫(工業美術) 安田清(裝飾美術) 藏田周忠(商業美術) 原弘(都市計畫美術) 石原憲治(舞臺美術) 園池公功(舞踊) 蘆原英了(映畫) 岩崎昶、三雲祥之助(寫眞) 仲田定之助、中原實(服飾) フランシオン・フェロレイ(裝幀) 庄司淺水(ジャーナル・グラフィック) 三浦逸雄

美術文化協會(綜合) 東京市本郷區動坂町三二七福澤方

主として獨立、二科の所謂前衛派の新進が、さきに獨立を脱退した福澤一郎を

中心に昭和十四年五月新に結成した。同會は繪畫、彫刻、寫眞、裝飾、圖案、文筆等各分野を網羅し、綜合的に前衛運動を爲さんとす。公募展を開催す。

- 〔同人〕 絲園和三郎、今井滋、板坂勇、濱松小源太、長谷川宏、濱谷次郎、土井俊夫、小川原脩、大塚耕二、大口登、柿手春三、吉井忠、采倉壽仁、高松甚二郎、高橋迪章、鷹山宇一、土屋幸夫、瀧口綾子、横地康行、塚原清一、永井東三郎、梨本紀美夫、藪内正直、福澤一郎、古澤岩美、小牧源太郎、寺田政明、淺原清隆、阿部芳文、巖光、荒木剛、淺利篤、麻生三郎、安孫子眞人、佐田勝、齋藤義重、北脇昇、森堯之、杉全直

美術問題協議會 東京市下谷區上野公園東京府美術館内

昭和十四年十一月創立。「本會は我邦に於ける美術の正常なる發展に寄與する爲斯界に生起する諸問題を研究討議し、是に善處するを以て目的とす。

- 〔發企人〕 荒木季夫、岩佐新、大隅爲三、大島隆一、大下正男、尾川多計、加藤謙垣見宣修、金井紫雲、金子義男、佐波市田澤田軒、外狩素心庵、廣瀬憲六、藤本留三、森田龜之助、森口多里、柳亮、横川毅一郎

美術問題研究会 東京市淀橋區下落合四ノ二〇七一尾川方

昭和十五年十二月美術に關する諸問題を檢討する目的を以て設立す。現在美術評論にたづさはる者により組織。

〔會員〕 今泉篤男、蓮實重康、富永惣一、外山卯三郎、千澤横治、大口理夫、奥平英雄、尾川多計、嘉門安雄、横川毅一郎、田中一松、瀧口修造、田近憲三、谷信一、田中信行、仲田勝之助、中井宗太郎、長島喜三、仲田定之助、村田良策、内山義郎、黒田鶴心、山際靖、山田智三郎、柳亮、摩壽意善郎、小池新二、江川和彦、相良徳三、荒城季夫、佐波市、北川桃雄、金原省吾、水澤澄夫、三輪福松、土方定一、森口多里、森田龜之助、鈴木進、鈴木道夫

兵庫縣美術家聯盟(日、洋) 神戸市元町驛下鯉川筋、畫廊内 電三宮三三五

昭和五年兵庫縣在住の美術家を以て結成。毎年春季に同人展を秋季に公募展を行ふ外機關誌を發行す。

- 〔評議員〕 (日本畫) 福田眉仙、牛尾桃里、山本大慈、中村久巳(洋畫) 鈴木清一、平松武清、山崎隆夫、櫻井政雄、杉浦三郎、小松益喜、元川嘉津美、大石輝一、宮下貞之助、福島金一郎
- 〔囑託〕 大塚銀次郎、會員百八名

兵庫縣美術協會(綜合) 神戸市須磨區離宮前町二番屋敷畫室社山本廣洋方 電須磨一〇二〇

大正十一年三月創立。同地方美術の獎勵を目的として毎年春秋二回公募綜合展を神戸三越に開く。昭和十四年十一月第三十一回展開催。機關雜誌「畫室」發行。〔會長〕 兵庫縣知事〔總務〕 山本廣洋

〔展覽會委員〕 飯塚風悅、土肥蒼樹、濱田觀、立勝泰山、中野草雲、山下摩耶、鐘ヶ江辰一、前田萩都、前田賢、葛浦大悦、佐野光穂、宮崎翠濤、伊川寛、中安保、唐木政一、丸毛小平、大串貞美、森月城、小山正雄

〔展覽會顧問〕 村上華岳(逝去)、濱田葆光、黒川重太郎、國枝金三、廣島晃甫、中村岳陵、金島桂華

廣島縣工藝協會 廣島市猿樂町、縣產業獎勵館内 電一八三八、二六三〇

昭和六年設立。縣下の工藝品製作者並關係者を以て組織。工藝産業の調査、意匠圖案の研究、販賣斡旋、展覽會開催等を行ふ。

〔會長〕 森村義信〔副會長〕 伊藤琢郎

廣島縣美術協會(日、洋、工) 廣島市猿樂町、縣產業獎勵館内 電一八三八、大正四年創立。美術及美術工藝の發達を圖るを目的とす。公募展を開催す。昭和十三年五月第二十四回展開催。〔會長〕 森村義信〔副會長〕 原貫之助、長尾富太郎〔主事〕 堀修

昭和十一年設立。和歌山縣下の洋畫の發達獎勵を目的とす。毎春和歌山市に公募展開催。十二年五月第二回展開催。

〔會長〕和歌山縣知事〔會員〕木下孝則 木下義謙、濱地清松、川口軌外、碓伊之助、岡部邦香、村井正誠

服飾美術會 京都市岡崎北御所町三 七山鹿清華方 電上八一二

昭和十年創立。舊綵工會同人により組織。毎月數回研究会を開き又各地の百貨店に展覽會を開催す。

〔會員〕石田玉英、井下阿木良、井口紀

岩崎眞也、長谷川文平、林雨染、馬場笛山、星流、小合友之助、太田光嶺、長村華城、横山芙明、田中貞造、田中初雄、田井修一、村田春祿、中村鵬生、山鹿清華、山崎茶平、安竹聖果、福村健、悟道卯一、駒井宗悅、皆川月華、島田勝四郎 平尾周史

福井縣漆藝會 福井縣今立郡河和田村小林作兵衛方

福井縣漆工藝の發達を目的とし、漆藝の研究並發表を行ふ。

〔名譽顧問〕根尾謙兒、山崎覺太郎〔會長〕小林作兵衛、會員七名

福井縣美術協會 福井市、福井縣商 品陳列所内

大正十五年創立。福井縣出身並在住の美術家を以て組織。縣下美術及工藝の發達を圖り、毎年展覽會、講習會、講演會等開催の外他展への出品斡旋を行ふ。

〔會長〕根尾謙兒

福岡縣工藝協會 福岡市天神町福岡縣產業獎勵館内

昭和十一年設立。縣下工藝產業の發達を圖り、工藝に關する調査、展覽會、講習會の開催、工藝功勞者の表彰等を行ふ。〔福岡縣工藝展覽會〕は同協會會員が主としてその中心となる。

〔會長〕福岡縣知事

福岡縣美術協會 福岡市天神町一七

〔東京事務所〕豊島區巢鴨町五ノ一一四 一吉村方

昭和十五年九月、福岡縣出身並に縣在住の美術家及同好者等を以て組織す。毎年福岡市に於て日本畫、洋畫、彫塑、工藝に互る作品展〔招待出品〕を開く。同年十一月第一回展開催。

〔會長〕本間精〔副會長〕畑山四男美

〔第一回委員〕〔第一部〕阿部春峰、今中素友、水上泰生、吉村忠夫〔第二部〕兒島善三郎、坂本繁二郎、辻永、中村研一、山喜多二郎太、吉田博、利田三造

〔第三部〕津上昌平、富永朝堂、早川朝洋、山崎朝雲、安永良徳〔第四部〕仰木政齊、岡部達男、豊田勝秋

福岡美術會〔綜合〕福岡市因幡町福岡市通俗博物館内 電一六七五

大正十二年創立。福岡縣出身並在住の美術家を以て組織。美術の向上に資する爲中央より二科、春陽、獨立等の諸美術展の誘致開催に努め、又毎年會員の綜合展を開催する。

〔會長〕〔市長〕畑山四男美〔幹事〕齋藤

鳴江、白石久三郎、安部勝三、富田賢四郎

〔會員〕八十三名

福島美術協會〔洋〕福島縣福島市役所内

昭和五年設立。縣下美術の發達を目的として年一回福島市に於て公募展開催の他隨時講習會講演會等を開く。

〔總裁〕福島縣知事〔會長〕佐藤澤

福陽美術會〔日〕東京市本郷區駒込 林町七六角田磐谷方

大正八年、福島縣出身の日本畫家を以て組織。會員の親睦、後進の誘掖に努め東京郷土に於て毎年展覽會を開催し、昭和十五年第十一回展に及ぶ。

〔會長〕勝田蕪琴〔理事〕荻生天泉、太田秋民、酒井三良〔幹事〕角田磐谷、石塚省三、渡部浩年、酒井白澄、鴻巣一善、須田善二、湯上珠、猪卷清明

文展第三部作家協會〔彫〕東京市荒川區日暮里町九ノ一〇九七藤井浩祐方

舊文、帝展、文展に出品の彫刻家に於て所屬團體を持たぬ人々が合同し昭和十四年六月東京府美術館に第一回展を開催した。會員五十名。

〔幹事〕藤井浩祐、吉田三郎、長谷川義起、中川清、木村桂二、白井保春、長田平次、小野田高節、中川爲延

壁畫藝術協會 東京市京橋區銀座一丁目皆川ビル圖師建築事務所内

昭和十四年六月創立、「建築と建築裝飾」主として壁畫の綜合的研究並びに

制作」を目的とする。

〔會員〕今和次郎、岡田哲郎、佐藤次夫 岡田嘉彦、福田平八郎、本郷新、内田巖 嘉門安雄

邦畫一如會〔日〕東京市品川區大井 康家四三七八鍋井克之方

昭和十五年十二月左記の會員により組織。同人展を開催す。

〔會員〕津田青楓、小杉放庵、石井柏亭 藤田嗣治、石井鶴三、鍋井克之、牧野虎雄、中川紀元、木村莊八、中川一政、東郷青兒

邦畫教育研究會 東京市赤坂區新坂 町四七大貫鏡心方

昭和十二年結成。東美校日本畫及び師範科出身の美育家により組織。研究会を開催す。

〔會長〕結城素明〔評議員〕川崎小虎、矢澤弦月、小泉勝爾、山田康、常岡文龜 多賀谷健吉、松田義之、松垣鶴夫、〔幹事〕狩野探道、大貫鏡心、大島正記、白井剛夫、石田粧秋、松垣鶴夫、淺野秀一、下田舜堂〔會員〕五十名

萌青會〔日〕東京市小石川區小日向 臺町三ノ五三長澤美枝方 電牛込二二二

女子美術專門學校の師範科高等科日本畫部の昭和九年度卒業生有志を以て組織

十三年六月第四回展開催。會員九名。

報道美術協會 東京市芝區西芝浦一 東京高等工藝學校内 電三田一一五六

昭和十四年四月設立。東京高等工藝學

校有志に依り組織。報道美術の研究並に實踐及び會員の自覺向上を目的とす。年一回以上展覽會開催、同十五年東京銀座三越及び大阪、京都、仙臺に於て「國家總力ポスター展」を開催す。年六回機關紙「報道美術」發行。

〔顧問〕安田祿造、鎌田彌壽治、宮下孝雄、伊東亮次、杉山豊祐、鈴木豊次郎〔委員長〕加藤晋二〔委員〕片野一男、江島五郎、大關至弘、大塚均、塚田敢、松本虎雄〔會員〕七十三名。

北海道美術協會〔綜合〕札幌市北四條西七丁目三

大正十四年創立。爾來每秋展覽會を開催、昭和十三年第十四回展に至る。毎夏講習會を開く。

〔會長〕〔北海道長官〕半井清〔副會長〕〔北海道帝國大學總長〕今祐〔理事〕荒瀧實、木下三四彦、小谷義雄、齋藤與一郎、鬼川俊藏、島崎貢、佐野四滿美、竹内武夫

北信工藝協會 各縣廳内

長野、新潟、富山、石川、福井の五縣を以て組織し各縣廳内に事務所を置く。毎年各縣の交代で、商工省輸出工藝展の出品を目的とする試作品展、一般工藝展の開催、其他の事業を行ふ。

北方美術協會〔洋、彫〕小樽市山ノ上町四四濠谷政雄方

昭和十年、小樽出身及在住の美術家〔主として洋畫彫塑〕に依り結成。毎年六月に公募展を、秋に試作展を開催する。

尙研究所を兼平英示方に設置し、又雜誌「北方美術」を刊行する。

〔會員〕兼平英示、樹田誠一、三浦鮮治、中野五一、中村善策、澁谷政雄、谷吉二郎、竹部武一、山崎省三

北陽會〔綜合〕東京市麴町區大手町二ノ二日清ビル六二一號 電丸之内一八七七

昭和八年創立。東美校卒の富山縣出身在京美術家を以て組織。同人展開催。

〔會長〕伯爵前田利男〔副會長〕高廣三郎〔世話人〕佐々木大樹、郷倉千靱、長谷川義起、山崎覺太郎、中谷宏運、五島甚之助、會員五十一名

墨雲社〔日〕大阪市西區南堀江通三ノ二二赤松雲嶺方

大正十一年、赤松雲嶺門下に依り組織。展覽會開催。

〔會員〕四十八名 墨人會俱樂部〔日〕東京市世田谷區三宿町七一 電世田谷三七〇九〔呼〕

昭和十二年二月創立。「日本民族の文化高揚の爲に東洋藝術の再認識と進展とを期するもの相集り、作家の個性を尙ぶが爲に各人主義を採る」。十三年東京、大阪に公募による第二回展を開催したが、十四年よりは公募をやめ、他よりの出品は會員の責任推薦に依ることにし、臨時展覽會を開催す。

〔會員〕生田花朝、渡邊大虚、瀧秋方、津田青楓、中川一政、草野蘆江、矢野橋村、八百谷大樹、小杉放庵、小松均、菅

栢彦〔代表者〕渡邊大虚 墨洋會〔日〕下谷區谷中真鳥町一、太平洋畫會内 電下谷一七九二

太平洋畫會の會員で、日本畫を描く有志を以て組織。展覽會を開く。〔會員〕二十名。

菫社〔日〕東京市澁橋區下落合三ノ一四七八藏原方

昭和十二年、川端畫學校出身者を以て組織せる日本畫研究團體、毎年一回同人展開催。

〔會員〕河村良孝、坊坂俊文明、佐々木越雲、藏原直人、内田浪平、兒玉徹、石井寅雄、土生勝宣、井波良則、長谷川一男、池田憲二、高野秀雄、遠藤章一、岡田明方

三重縣工藝協會 三重縣津市中茶屋町三重縣廳商工課内

昭和九年創立。縣下の工藝品製造業者販賣者並に工藝組合團體を以て組織。工藝品の改善並に輸出増進を圖り、展覽會講習會の開催、取引上の紹介斡旋等を行ふ。

〔會長〕〔三重縣經濟部長〕西岡廣吉、正會員百七十名 明朗美術聯盟〔日〕東京市板橋區練馬南町一ノ三四八五狩野晃行方

昭和九年一月青龍社舊同人落合朗風、川口春波等に依り結成。同年秋第一回展開催、同十二年四月盟首落合朗風急逝しよつて川口春波主宰となり同年九月第四回展を開催した。尙此會期中、同人盟友

八名が退會し、又十三年五月同人小林彦三郎他六名が退會した。年一回公募展を開催し、又明朗美術研究所を設置す。十三年九月第五回展開催。十四年落合朗風遺作展を開催。後川口春波退會す。十五年九月第七回展開催。

〔同人〕狩野晃行、木和村創爾郎、渡邊日向〔盟友〕東條光高、山下昌風、小野竹牛、島田晃州、吉田錦穂〔盟員〕城野三藏、松本晁葵、東條平八良、廣橋環齋、青柳定義、藤井小穂子

同會第七回展規定抜萃

一、作品受付は九月一日午前八時より午後五時迄に出品目録と手数料金二圓を添へ上野美術館内明朗美術展事務所へ搬入されたし

一、出品點數及び畫幅の面積は任意とす、但し出品作品は適當の裝飾をなすこと

一、作品は鑑査の上之を陳列す鑑査は同人之に當る

一、作品の賣約されたる場合は手数料として三割を本聯盟に申受く、但し破約の場合には本聯盟に於てその責任を負はす

木心舍〔彫〕東京市荒川區日暮里邊町一〇四〇吉田白嶺方 電駒込二六四〇

大正七年、吉田白嶺の指導により木心舍研究所が設立された。昭和十一年第一回展を開催、爾後毎年東京及び大阪に同人展を開く。

〔會員〕吉田白嶺〔指導者〕松村外次郎、林是、高山九羊、小林貞吾、中村竹男、松原岳南、中村直人、長谷川豊雄、岡村進、藤井隆義

木星會〔洋〕和歌山市和歌浦七八六

和傳太郎方

昭和三年創設。年一回展覽會開催。昭和十四年エトアル洋畫會を改稱す。會員六名。

八ツ手會(工) 東京市中野區鷺ノ宮木村章平方

昭和十一年創立。彫刻家による工藝品の製作並發表の團體。同年七月第一回展開催。

〔同人〕林是、長谷川豐雄、岡村進、中村直人、黒田嘉治、三枝古都、松村外次郎、木村章平

八木橋文平あけび工藝指導所 弘前市山道町一二 電六一八

昭和七年八木橋文平に依り設立。輸出向新あけび工藝品の研究創案並其販路増大に努む。

〔所長〕八木橋文平、所員三百名。

山梨美術協會(綜合) 東京市世田谷區赤堤町一ノ一五四土屋義郎方、甲府市百石町 山梨日日新聞社内

昭和十一年結成。山梨縣出身並在任の美術關係者を以て組織。展覽會、講演會を開く。昭和十四年十一月第三回展を甲府市に開催。

〔會長〕(山梨日々新聞社長)野口二郎〔會員〕六十一名

幽興會(日) 東京市淀橋區上落合二ノ六四〇古川北華方

昭和十一年創立。古川北華を中心とする集で、同人展を開く。十二年六月上野松坂屋に第二回展開催。

〔會員〕橋本關雪、古川北華、正宗得三郎、牧野虎雄、錢瘦鐵、近藤浩一路、中川紀元、藤田嗣治

羊和會(工) 東京市豊島區池袋三ノ一三五八大野光典方

昭和六年、舊帝展第四部入選者を以て組織。金工藝の發達を圖るを目的として毎年日本橋三越に同人展を開催す。

〔顧問〕磯崎美亞、伊藤正見、石田英一桂光春、海野清、船越春珉、北原千鹿、清水龜藏、鈴木美彦〔會員〕磯崎美夫、大關勝盛、大野光典、大木秀春、長島正親、梅垣景山、山下春興、府川一信、小杉芳盛、小林盛良、有田利章、宮本猛、森田一靜、鈴木春盛、鶴飼康次

洋風版畫會 東京市澗野川區西ヶ原町三六一渡邊光徳方

昭和四年十二月創立。主としてエツチング及石版畫の團體。毎年一回展覽會を開く。

〔會員〕田邊至、吉田久繼、織田一磨、中村研一、及川康雄、間部時雄、小磯良平、猪熊弦一郎、永坂春雄、大久保作次郎、寺崎武雄、渡邊光徳

横濱美術協會(日、洋、版) 横濱市中區弘明寺町三一〇志村計介方 電長者町一二五七

昭和七年創立。横濱在住の日本畫家及洋畫家を以て組織。年一回日本畫、洋畫版畫の公募展を開く。十三年第七回展を開催した。

〔會長〕横濱市長〔會員〕五十九名〔無鑑査〕三名

落葉會(工) 京都市伏見區桃山、宗和園内

昭和四年創立。澤田宗山の指導を仰ぐ京都陶磁器作家の團體。展覽會、研究會等を催す。

〔會長〕澤田宗山〔幹事〕松本石亭、鈴木則司、伊地知仁郎、横山瑞祥、堯部清里南會(洋) 東京市中野區江古田二ノ九三一鈴木良三方 電落合長崎二五六九(呼)

昭和十一年結成。嘗て巴里に於て共に修學せる人々。隨時作品展開催。

〔會員〕勝間田武夫、能勢龜太郎、大橋了介、鈴木良三、高林和作、田村憲、和田清

離騷社 東京市板橋區常盤臺一ノ六四九七西澤笛吹方 電板橋一二〇一

大正九年創立。會員の親睦を圖ると共に、研究會、見學旅行等を催して修養に資せんとする集である。

〔幹事〕西澤笛吹、金井紫雲、石川帛水飛田周山、田口黄葵、會員三十七名

陸軍美術協會(日、洋、彫) 東京市日本橋區吳服橋二ノ五春秋ビル三階 電日本橋一七七

昭和十四年四月創立。主として戦役、事變に従軍せる畫家及び彫刻家を以て組織す。〔會員〕の作品を通じ、適切なる方法により軍事美術に關する獎勵普及を計り陸軍と協力して興亞國策に貢獻す

〔會長〕松井石根〔副會長〕藤島武二

〔總務〕石井柏亭、橋本關雪、中澤弘光〔委員〕伊原宇三郎、栗原信、清水登之中村研一、日名子實三、向井潤吉、吉岡堅二〔監事〕大野隆徳、鶴田吾郎〔幹事〕住喜代志〔會員〕松井石根、朝井閣右衛門、荒井陸男、荒木十畝、石井柏亭、一色五郎、伊原宇三郎、井上幸、今村嘉吉江藤純平、榎倉省吾、大野隆徳、小野田元興、柏原覺太郎、鹿子木孟郎、川島理一郎、川崎小虎、川端龍子、熊岡美彦、栗原信、小磯良平、小早川秋聲、小林萬吾、五味清吉、佐々貴義雄、清水登之、清水良雄、眞道黎明、鈴木榮二郎、鈴木良三、關谷陽、高澤圭一、田中佐一郎、田村孝之介、高光一也、鶴田吾郎、手島貢、等々力巴吉、中澤弘光、長坂春雄、永地秀太、中村研一、中村直人、裕伊之助、橋本關雪、橋本八百二、長谷川榮作長谷川春子、日名子實三、福田豐四郎、藤島武二、深澤省三、福澤一郎、南薰造南政善、宮島久七、宮本三郎、宮田重雄三上知治、向井潤吉、矢野鐵山、吉岡堅二、横江嘉純、吉田三郎、吉田博、吉村忠夫、和田香苗、脇田和

柳美會(工) 京都市伏見區桃山、宗和園内 大正六年京都柳池校閉校五十年記念に同校關係の工藝家を以て創立。毎年展覽會開催。

〔理事長〕澤田宗山〔理事〕泰藏六、吉田長春、青木俊勝 聊娛會(洋) 東京市淀橋區下落合四

ノ一六二三大給近清方

大正八年創立。故黒田清輝子及南部利淳伯及び故小笠原長幹伯の發意に依り華族及び華族籍にありたる者を以て組織せる洋畫愛好者の團體で、毎年一回展覽會を開く。

〔代表者〕男爵徳川義恕〔幹事〕子爵織田信大、子爵松平定晴、大給近清、會員十九名、客員十五名。

綴巷會(洋) 東京市杉並區東荻町六九神津方 電荻窪二四四三

神津港人が主宰する洋畫團體。昭和十五年六月公募により東京府美術館に第二回展を開催した。

〔會員〕神津港人、村上誠、大澤佐一、佐藤利平、内堀一男、石黒義保、平井爲成、鳥羽宗雄、小林三郎、上田久之、小林剛、本間勘次

縁人社(彫) 東京市下谷區谷中上三崎南町六〇伊藤鉦次方

昭和八年度東美校彫刻科製造部卒業生を以て結成。毎年六月展覽會開催。

〔會員〕岩崎良平、伊藤鉦次、西田信、星野宣、小田寛一、川口信彦、漆原馬須雄、宇佐見庄一、新井喜惣治、青柳利男、明田川孝、北青史

縁輝彫刻會(彫) 東京市豊島區千川町一ノ三一七〇中野昂方

舊稱大東彫會。大正十二年以降の東美校本彫部卒業生有志を以て組織。關野聖雲の彫刻界に於ける主張を翼賛せんとす。會員六十名

留加會(洋) 東京市神田區駿河臺二ノ五文化學院内 電神田三三三九

昭和三年創立。文化學院美術部出身者有志を以て組織す。年一回展覽會を開催す。

〔會長〕石井柏亭〔名譽會員〕文化學院美術部現職職員〔普通會員〕文化學院美術部出身者有志

瓊奕畫社(日) 東京市豊島區池袋二ノ九七一浦田方

故松岡映丘の門下生有志を以て昭和九年結成。新日本畫の創作を目的とす。十三年六月銀座資生堂に第三回展を開いた。

〔會員〕岡田昇、高山辰雄、若海鯨一郎、浦田正夫、山本丘人、須田善二、杉山寧、麗交會(工) 京都市中京區富小路四條上ル龍文堂安之介方

昭和十一年三月、東京及び京都の工藝界の中堅作家十九名により結成。相互の研鑽を目的とす。

〔會員〕各務鏞三、香取正彦、吉田醇一郎、高野松山、田村泰三、海野建夫、信田洋、山本自煊、北原三佳、富之原謙、(以上東京) 伊東陶山、井田宣秋、龍文堂安之介、小川文齋、加藤宗巖、楠部彌式、淺見五郎助、道林俊正、平館會

歷程美術協會(日) 東京市世田谷區上馬町一ノ八六六山岡良文方、京都市東山區澁谷西入ル下梅谷町東出方、山崎隆方

昭和十三年六月創立。新日本畫の創作を趣旨とす。展覽會を開く。

〔會員〕岩橋永遠、田口壯、山岡良文、江崎孝坪、村山東吳、蒔田皓成〔會友〕小森龍太郎、小山浩子、佐々木勝磨、野原茂夫、山崎隆

連袖會(洋) 横濱市神奈川區三ツ澤下町二九久野方

昭和十二年二月安井會太郎門下生に依り組織。十四年三月銀座青樹社に第二回展開催。

〔會員〕奥山都太郎、小野末、笠置イヅ子、片多三吉、金子博信、狩野壽一、高田誠、仲田菊代、中村琢二、二宮雪夫、高見耿太郎、久野昌康、本郷惇、三浦俊輔、鷺田一太、渡邊正太郎、渡邊宗一

LES LILAS(リラ) 東京市王子區稻付町五ノ九八二宮川仁方

昭和十二年度の東美校油繪科卒業生を以て組織。毎年同人展開催。

〔會員〕高階重紀、高見澤藤治、成井弘文、松下義晴、宮川仁、推野修

朗峯畫塾(日) 東京市大森區池上本町一八六

はじめ深水畫塾と稱す。日本畫の指導達成を旨とし、月一回研究会を開く。

〔主宰〕伊東深水〔顧問〕渡邊泰次、小林源太郎〔幹事〕遠藤燦可、塾員約百名

藤和會(工) 東京市杉並區堀之内一ノ一一三

昭和十五年三月創立。漆藝家を以て組織す。

安右衛門、渡邊春男、高久空木、大坪周、山岸堅二、平野利太郎

六潮會(日、洋) 東京市目黒區大原町一六二横川毅一郎方

昭和五年七月成立。作家及び批評家の集で、交友を主とする研究團體。十三年五月日本橋區三越に第十回展を開いた。

〔會員〕中村岳俊、中川紀元、山口蓬春、牧野虎雄、木村莊八、福田平八郎、外狩素心菴、横川毅一郎

六萌會(洋) 横濱市鶴見區東寺尾町一六〇七鳥羽宗雄方

昭和八年度東京美術學校西洋畫科出身者有志を以て組織。展覽會を開く。

〔會員〕鳥羽宗雄、橋原健三、中村新次郎、上田久之、小林三郎、角浩、東山紗智子

祿明莊(工) 東京市中野區川添町一

大森光彦方 電中野五八三五

昭和七年創立。一藝一匠の工藝研究並製作發表團體。毎年初夏日本橋高島屋に展覽會開催。

〔同人〕飯塚瑠玕齋、池田美春、原田臺山、富樫光成、大森光彦、川島東洲、梅村豊舟、山口淨雄、安藤文雅、櫻井霞洞、木下春叢、篠秀一

和光會(工) 東京市京橋區銀座四丁目服部時計店內

昭和九年設立。十三年十二月第五回展開催。

〔會員〕岡山三郎助(逝去)、和田三造、津田信夫、沼田一雅、高村豊周、廣川松五郎、山崎覺太郎、河村蜻山、岩田藤七

定期刊行物一覽 (五十音順)

現代美術關係

一 般

ア トリ エ 月刊、福山城之助編輯、アトリエ社發行、牛込區西五軒町三四、電牛込四三六〇、一圓五〇錢

阿 々 土 四回、澤川薫編輯、阿々土社發行、板橋區中新井町三丁目一九三四、電練馬一六八、一圓

エ ツ チ ン グ 月刊、西田武雄編輯、日本エツチング研究所發行、麴町區麴町一ノ三、電九段五一四、二五錢

畫 室 觀 十回、高木紀重編輯、畫觀社發行、豐島區要町一ノ三一ノ八、五〇錢

畫 室 月刊、山本廣洋編輯、畫室社發行、神戸市須磨區雜宮前町二番屋敷、電須磨一〇二〇、一圓

藝 術 旬刊、中川愛水編輯、大日本藝術協會發行、本郷區湯島天神町二ノ二、電下谷一六〇八、月五〇錢

藝 術 日本 月刊、中村武平編輯、東京美術親交會藝術社發行、小石川區西江戸川町一八電小石川四三二〇、五〇錢

現 代 美 術 月刊、太田真一編輯、現代美術社發行、中野區野方町二ノ一二六八、電中野三五一七、五〇錢

造 形 藝 術 月刊、藤本韶三編輯、造形藝術社發行、世田谷區世田谷二ノ二〇七七、二圓

丹 青 四回、一水會編輯、教育美術振興會發行、神田區一ツ橋二ノ九、電九段二六六、二圓

塔 影 月刊、齋田元次郎編輯、塔影社發行、麴町區二番町一一番地ノ一、電九段三三四〇、一圓六〇錢

南 畫 鑑 賞 月刊、石塚彰吾編輯、南畫鑑賞會發行、麴町區四番町四番地、電九段六二〇、四〇錢

日 本 美 術 月刊、吉田久次郎編輯、日本美術社發行、名古屋市中村區西日置町七ノ一、電西二九三五(呼)、四〇錢

白 日 月刊、湯山昇編輯、白日社發行、澁谷區代々木上原町一二九五、電澁谷三四六、六〇錢

美 術 四回、岩佐新編輯、美術發行所發行、澁谷區代々木上原町一一四九、電澁谷九四〇、二圓五〇錢

日 本 美 術 新聞 週二回刊、猪木卓爾編輯、日本美術新報社發行、麴町區九段一ノ一四、電九

美 術 往 來 段二七一五、一ヶ月七五錢
月刊、猪木卓二編輯、資文堂發行、麴町區九段一ノ一四、電九段二七一五、五〇錢

美 術 界 月刊、浦崎永錫編輯、美術界社發行、豐島區駒込町三ノ四〇三、一〇錢

美 術 街 月刊、大山廣光編輯、美術街社發行、牛込區矢來町五九、電牛込七三二三、五〇錢

美 術 グ ラ フ 月刊、長谷川放心編輯、日本洋畫協會發行、麴町區飯田町一ノ一一、五〇錢

美 術 作 家 月刊、原田信造編輯、藝天社發行、神田區小川町一ノ一〇、東京銀座ビル一階、電神田四六七五、四九一八、二五錢

美 術 時 代 月刊、石田幸太郎編輯、美術時代社發行、本郷區元町一ノ一五、電小石川二六二一、一圓

美 術 時 報 月刊、垣見宣修編輯、美術時報社發行、澁谷區西大久保二ノ二五三、電四谷六三二五、月一圓

美 術 春 秋 月刊、芳川赴編輯、美術春秋社發行、豐島區西巢鴨二ノ二三五八、電大塚五七六三、三〇錢

美 術 世 界 月刊、木村重夫編輯、美術世界社發行、中野區千光前町二五、二〇錢

美 術 通 信 月刊、佐久間善三郎編輯、日本美術通信社發行、浦田區運沼町一〇八、月一圓五〇錢

美 術 展 月刊、繪畫教習改題、芳川赴編輯、繪畫教習會發行、小石川區小日向水道町五三、電大塚六〇六八、五〇錢

美 術 乃 日 本 年四回、小佐井清平編輯、美術乃日本社發行、澁谷區戸塚町四ノ五七五、三〇錢

美 術 日 本 月刊、鈴木善八編輯、美術日本社發行、下谷區谷中清水町五、電下谷五五三〇、一圓

美 術 評 論 月刊、藤森順三編輯、美術評論社發行、大森區馬込町東一丁目一三三、電大森二一九一

美 術 文 化 四回、美術文化協會發行、本郷區動坂町三二七、二五錢

美 之 國 月刊、石川幸三郎編輯、美之國社發行、豐島區雜司谷町七ノ九四七、電牛込七四二七、一圓五〇錢

文 藝 日 本 月刊、牧野吉晴編輯、文藝日本社發行、麴町區內幸町二ノ二幸新ビル、電九段六八四、五〇錢

み づ 糸 月刊、大下正男編輯、春鳥會發行、小石川區關口駒井町三、電牛込二〇四三一圓五〇錢

洛 陽 美 術 月刊、尾崎賢治編輯、洛陽美術社發行、京都市中京區河原町通三條上ル東入、電上一一四四、一五錢

工 藝

月刊民藝 月刊、日本民藝協會編、同所發行、芝區今人町一五玉屋ビル、電銀座七六三、四、五〇錢

工藝ニユース 月刊、日本民藝協會編輯發行、芝區今人町一五、玉屋ビル、電銀座七六三四、三、五錢

産業工藝 月刊、上田儀一編輯、産業工藝社發行、大阪市浪速區惠美須町二ノ一四六、電戎一九四、七五一、三〇錢

創作工藝 月刊、山田義郎編輯、創作工藝獎勵會發行、芝區田村町一ノ一二、電三田一、一〇錢

帝國工藝 月刊、宮下孝雄編輯、帝國工藝會發行、芝區西芝浦東京高等工藝學校内、電三田一五六一、一五八、五〇錢(休刊中)

況工藝 月刊、柴崎俊吉編輯、況工藝社發行、大阪市住吉區住吉町一三〇〇、三〇錢

輸出工藝 隔月、池田美明編輯、日本輸出工藝聯合會發行、麴町區丸ノ内二丁目九ビル内、電九ノ内五三七二、六〇八五、六〇八六、三〇錢

建築 月刊、菅原肇編輯、建築學會發行、京橋區西銀座三ノ一、電京橋一二三三、一、二三八、一圓

建築雜誌 月刊、鈴木增雄編輯、建築世界社發行、京橋區京橋二ノ二ノ四、電京橋一五七五、八〇錢

現代建築 季刊、日本工作文化聯盟編、麴町區九段四丁目山田ビル、電九段三九六四、二圓

國際建築 月刊、小山正和編輯、國際建築協會發行、麻布區市兵衛町二ノ四六、電赤坂四九四一、七〇錢

住宅 月刊、小林清編輯、住宅改良會發行、大阪市西區土佐堀船町八、電土佐堀二三二九、五〇錢

新建築 月刊、吉岡保五郎編輯、新建築社發行、京橋區實町一ノ六、電京橋四七五二、七〇錢

日本建築士 月刊、小瀧文七編輯、日本建築士會發行、京橋區銀座西三ノ一建築會館内、電京橋六二〇、四〇錢

學校美術 月刊、後藤福次郎編輯、學校美術協會發行、荒川區日暮里町三ノ一九六、電根岸一〇三〇、三〇錢

教育美術 月刊、佐竹林藏編輯、教育美術振興會發行、神田區一ツ橋二ノ九教育會館内、電九段一六六、三〇錢

定期刊行物一覽

新興美術 月刊、石野隆編輯、新興美術協會發行、豐島區堀ノ内三〇、電大塚二五一八、二〇錢

圖畫と手工 月刊、三浦直政編輯、錦峯會發行、世田谷區田園調布二ノ七〇九、三〇錢

美術 月刊、圖書教育獎勵會編輯、晚成處發行、下谷區櫻木町二、三〇錢

圖畫室通信 月刊、河合博編輯、圖書室通信社發行

報告書類

大日本窯業協會雜誌 月刊、大日本窯業協會編輯發行、京橋區銀座西四丁目銀座商館内、電京橋五五一九

東京美術 二回、高村豐周編輯、東京美術學校々友會發行、非賣

日本美術協會報告 年四回、安井易市編輯、日本美術協會發行、下谷區上野公園櫻ヶ岡、非賣

博物館研究 月刊、初瀬源太郎編輯、日本博物館協會發行、下谷區上野公園東京科學博物館、電下谷八二〇〇、八二〇一

古美術關係 年四回、佐伯啓造編輯、鵜沼會發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六八、電法隆寺四、每卷一圓五〇錢平均

以可留我 月刊、檜崎宗重編輯、浮世繪同好會發行、日本橋區通三丁目五、一圓

浮世繪界 月刊、日本漆工會編輯發行、神田區鍛冶町一六、七〇錢

漆と工藝 月刊、奧村伊九良編輯發行、京都市東山區今熊野南日吉町二三、一圓

瓜蒞 月刊、木曜會發行、牛込區二十騎町三二、非賣

學說 月刊、脇本十九郎編輯、東京美術研究所發行、本鄉區駒込千駄木町二三四、電駒込二四九五、五〇錢

京都美術青年會誌 中西勇太郎編輯、京都美術青年會發行、京都市御池寺町東入

藝術資料 月刊、金井紫雲編輯、芸岬堂發行、京都市中京區寺町二條南、一圓五〇錢

建築史 隔月、建築史研究會編輯、吉川弘文館發行、京橋區京橋二ノ一一、六〇錢

國華 月刊、瀧精一監修、村山長舉後援、名義人村山句吾、國華社發行、麻布區市兵衛町二ノ一、電赤坂八五二、五圓

好古 月刊、小原銀之助編輯、日本美術社發行、牛込區岩戸町一一、五〇錢

國寶 月刊、矢野國太郎編輯、國寶社發行、麴町區平河町二ノ一一、電九段一九、五〇錢

史蹟と古美術 十回、國史普及會編輯發行、京都市七條通堀川西入、田住界、電下一五七五(目下發行停止中)

五九

史迹と美術

月刊、川勝政太郎編輯、スズカケ出版部發行、京都市中京區寺町九太町南人四〇錢

書畫骨董雜誌

月刊、大岡純太郎編輯、書畫骨董雜誌社發行、牛込區南山伏町一二、電牛込二九〇五、三五錢

書道

月刊、鹽原光男編輯、泰東書道院出版部發行、日本橋區江戸橋三ノ三、六〇錢

清閑

隔月發行、安谷茂彦編輯、清閑會發行、大阪市東區道修町四丁目

茶わん

月刊、遠藤敏夫編輯、茶わん發行所、日本橋區江戸橋二ノ八松慶ビル、寶雲舎内、電日本橋二四五六、二〇八一、八〇錢

陶磁

隔月、東洋陶磁研究所編輯發行、日本橋區江戸橋二、松慶ビル二階、五〇錢

東洋美術

月刊、鈴木榮之亮編輯、東京美術青年會發行、芝區新橋七ノ一二、東京美術俱樂部内、非賣

東洋建築

月刊、相模書房發行、日本橋區通二丁目四、日本橋ビル(休刊中)

なつか

四回、小川晴陽編輯、飛鳥園發行、奈良市奈良帝室博物館、電八七二、二〇錢

寧樂

不定、香取正彦編輯、七日會發行、瀧野川區田端五〇〇

日本美術協會報告

不定、栗原武平編輯、寧樂發行所發行、奈良市東大寺能松院、二圓

美術研究

四回、安井易市編輯、日本美術協會發行、下谷區上野公園櫻ヶ岡、非賣

佛教美術

月刊、美術研究所編輯發行、下谷區上野公園美術研究所、電下谷三四八七、二圓五〇錢

瓶史

不定、源豐宗編輯、佛教美術社發行、京都市左京區北白川伊織町四五、電上二〇四七、不定

寶雲

四回、西川一鶴編輯、去風洞發行、京都市左京區淨土寺馬場町一五七、七〇錢

星岡

四回、森鴨編輯、寶雲刊行所發行、京都市左京區岡崎真如堂前町二、三圓三〇錢

燒もの趣味

月刊、林征木編輯、便利堂出張所發行、京橋區銀座西五丁目五、五〇錢

大和志

月刊、鈴木伸樹編輯、學藝書院發行、麴町區二番町六ノ六、六〇錢

夢殿

月刊、鈴木伸樹編輯、學藝書院發行、麴町區二番町六ノ六、六〇錢

林泉

月刊、島本一編輯、大和國史會發行、奈良縣郡山柳町一九八、三〇錢

考古學及歷史關係

年二回、佐伯啓造編輯、鶴故郷會發行、奈良縣法隆寺村法隆寺二六八、電法隆寺四、四圓平均

泉

月刊、重森三玲編輯、京都林泉協會發行、京都市左京區吉田下大路町四五、三〇錢

考古學雜誌

月刊、考古學會編輯、吉川弘文館發行、京橋區京橋二ノ一、五〇錢

考古學論叢

月刊、考古學會編輯、古今書院發行、京都市左京區百萬遍京都アパートメント内

國史

四回、國史學會編輯發行、澁谷區若木町九、國學院大學内、六〇錢

國史回顧會紀要

月刊、國史回顧會編輯發行、赤坂區青山南町六ノ一五大隈侯爵邸内

四天王寺

月刊、奥田慈應編輯、四天王寺事務局發行、大阪市天王寺區元町、三〇錢

史苑

四回、立教大學史學會編輯發行、豊島區池袋三、七五錢

史學研究

四回、三田史學會編輯發行、芝區三田慶應義塾大學文學部研究室内、一圓

史學雜誌

三回、廣島史學會編輯發行、中文館書店發行、牛込區辨天町一七四、六〇錢

史學雜誌

月刊、史學會編輯、富山房發行、神田區神保町、五五錢

史蹟名勝天然紀念物

月刊、早稻田大學文學部岸知久吉編輯、早稻田大學史學會發行、澁橋區戸塚町、五〇錢

史蹟名勝天然紀念物

月刊、矢吹活禪編輯、史蹟名勝天然紀念物保存協會發行、麴町區澁ヶ關三ノ四、文部省宗教局保存課内

史潮

三ノ四、大塚史學會編輯、刀江書院發行、神田區駿河臺三ノ六、八〇錢

史林

四回、京都帝國大學文學部内史學研究所編輯、内外出版印刷株式會社發行、京都市西洞院通七條南入、九〇錢

東方學報

(東京)三回、東方文化學院編輯發行、小石川區大塚町五六ノ一五

東方學報

(京都)四回、東方文化研究所編輯發行、京都市左京區北白川小倉町五〇

東洋史研究

四回、東洋協會學術調查部編輯發行、麴町區内幸町二ノ一、電銀座四〇三九

東洋史研究

一圓五〇錢

東洋史研究

六回、京大文學部陳列館内東洋史研究會編輯、彙文堂發行、京都市中京區寺町通九太町南入

鴨台史報

大正大學史學會編輯發行、豊島區西巢鴨四ノ五三〇大正大學史學研究室

立正史學

立正大學考古學研究會發行、品川區東大崎四丁目

龍谷史壇

龍谷大學史學、佛教史學會編輯發行、京都市七條、龍谷大學史學研究室

龍谷史壇

月刊、龍谷大學史學、佛教史學會編輯發行、京都市七條、龍谷大學史學研究室

歷史教育

月刊、龍谷大學史學、佛教史學會編輯發行、京都市七條、龍谷大學史學研究室

歷史地理

月刊、龍谷大學史學、佛教史學會編輯發行、京都市七條、龍谷大學史學研究室

其他

月刊、花見朔已編輯、日本歷史地理學會發行、神田區錦町三ノ二二、四五錢

思想

月刊、和辻哲郎、谷川徹三、林達夫、編輯、岩波書店發行、神田區一ツ橋二ノ三、五〇錢

文化

月刊、大藏出版株式會社編輯發行、本郷區本郷三丁目、二〇錢

文化

月刊、東北帝國大學文科會編輯、岩波書店發行、神田區一ツ橋二ノ三、五〇錢

貨幣

月刊、田中謙編輯、東洋貨幣協會發行、荏原區戸越町二九一、七五錢

考古學

東京考古學會編輯發行、大阪市住吉區阿倍野筋三ノ一〇坪井良平方

美術商一覽

(五十音順)

日本畫・其他

【ア】

阿部 克平 東京市淀橋區
淀橋六九

阿部 文吉 阿部文、東京
市本郷區湯島天神町一ノ〇七、電
下谷七四七九

秋田 盛太郎 大阪府東區平
野町五ノ三一

淺井 精七 大阪府東區道
修町五ノ一八、電北濱二七二四

淺井 清之助 京都市東山區
新門前通大和路東入西之町、電祇
園一三六

淺田 直太郎 京都市上京區
西堀川通一條角、電西陣四六九八

淺野 梅吉 合名會社竹石
山房淺野商店、大阪府東區平野町四
ノ五六、電北濱五〇八

淺野 萬藏 大阪府東區今
橋三ノ一五、電北濱六二一一

味岡 由兵衛 合名會社味岡
商店代表社員(植田)、名古屋市西區
袋町五ノ五、電本局一三三

荒尾 重吉 大阪府南區南
炭屋町二六、電南六二八四

【イ】

井上 熊太郎 合名會社井上
熊太郎商店、大阪府東區高麗橋二ノ
三九、電北濱一八〇九

伊丹 信太郎 東京市赤坂區
青山南町一ノ五五、電赤坂一〇五二
(店舖)東京市麴町區內幸町一ノ一〇
電銀座三二八九

伊藤 平藏 東京市世田谷
區國本町八〇五、電玉川五七

伊藤 高太郎 大好堂、東京
市日本橋區通三ノ一、電日本橋三九
〇九

伊藤 清治郎 東京市本郷區
湯島天神町一ノ四、電下谷四五九八

伊藤 信藏 推古堂、東京
市日本橋區通二ノ五、電日本橋四五
二三

伊藤 喜兵衛 合名會社萬喜
商店、名古屋市中區錦屋町一ノ二四
電東二八一

猪木 卓爾 美術往來社、
東京市麴町區九段一ノ一四ノ四、電
九段二七一五

池田 金太郎 合資會社銀座
美術園代表社員、東京市京橋區銀座
西五ノ五ノ一、電銀座三〇〇六

池戸 宗三郎 合名會社池戸
宗三郎商店、大阪府東區今橋三ノ一
二、電北濱六五、三二二

石井 柳助 合資會社石井
三柳堂代表社員、東京市京橋區京橋

一ノ四ノ一、電京橋四八
石田 貞吉 東京市小石川
區同心町二五、電小石川二五〇〇

石野 力藏 山澄商店、東
京市日本橋區濱町一ノ一五、電茅場
町四五七五

石橋 幸次郎 東京市日本橋
區通三丁目六ノ五

石黒 久呂 石川縣金澤市
十間町五三

磯上 青治郎 大阪府東區瓦
町一ノ五、電北濱一一二八

一色 利厚 松利商店、東
京市芝區南佐久間町二ノ一〇、電芝
四〇一九

泉 藤吉 合名會社泉藤
吉商店、大阪府東區高麗橋五ノ一九
電北濱五二二

泉 善三郎 大阪府南區豊
屋町一四、電南五一三

稻垣 一六 東京市日本橋
區箱崎町二ノ二五、電茅場町三五八
七

稻垣 利恭 萬泰堂、東京
市本郷區湯島天神町二ノ三〇、電下
谷七六〇六

今井 敬藏 合名會社今井
商店代表社員、京都市下京區四條鉄
屋町東入奈良物町三六三

今井 長兵衛 京都市中京區
六角通鉄屋町西入、電本局八〇二

今井 鐵藏 名古屋市中區
針屋町二丁目、電東二〇三八

入江 熊吉 春樹堂、大阪
市東區瓦町三ノ一、電北濱六〇八九

岩井 慶三郎 東京市麻布區
飯倉町四ノ一七、電赤坂四五

岩上 虎吉 大和屋、東京
市日本橋區兩國六ノ六、電浪花九五
八、五四八三

乾 益次郎 金澤市上今町
八、電金澤九七七

【ウ】

宇田川 照 東京市澁谷區
原宿一ノ二二八

白井 吉之助 大阪府東區伏
見町二ノ一九、電北濱三〇〇五

内山 豊男 揚骨、金澤市
中町三四、電金澤四八五

梅本 長太郎 宇治長、名古
屋市西區島田町三ノ五、電本局四〇
一〇

【オ】

小川 義一 東京市神田區
金澤町一、電下谷五四一六

小川 清一 東京市下谷區
西黒門町五、電下谷七二四一

小川 藤吉 東京市澁谷區
羽澤町八〇、電青山二二四五

小川 文吉 東京市小石川
區大塚窪町二四、電大塚五一七一

小高 眞藏 合資會社大勝

商店代表社員、東京市本郷區湯島切
通町一、電小石川五九〇四

小野 春吉 平野屋、東京
市京橋區銀座八ノ四、電銀座四四一
〇

大 川 源 東京市本郷區
春木町二ノ一五、電小石川四一〇八

大 久 保 健 二 合資會社川分
商店、東京市芝區芝公園第五號地一
三、電芝二六二〇

大 田 清 造 清眞堂、東京
市麻布區新網町一ノ六九、電赤坂一
九四八

大 坪 大 東京市江區神
谷町二八

大 沼 政 吉 靜觀堂美術店
東京市日本橋區茅場町一ノ六、電茅
場町五一六

大 田 龜 三 郎 東京市澁谷區
代々木富ヶ谷町一四六五

太 田 佐 七 合名會社太田
佐七商店、株式會社大阪美術俱樂部
取締役社長、大阪府東區伏見町三ノ
二三、電北濱一五七二

岡 田 祝 三 東京市下谷區
東黒門町五、電下谷七三〇八

岡 田 太 郎 大阪府東區伏
見町四ノ二九、電北濱八五八、八六
〇

岡 田 卓 爾 東京市目黒區
中目黒一ノ五、電大崎四三八

岡 村 藤 兵 衛 東京市麻布區
飯倉町三ノ一、電赤坂九七〇

六二

岡 本良 民 東京市芝區西久保明舟町一三、電芝一九〇七

長田捨三郎 大阪市東區今橋三ノ一五

治村竹次郎 大阪市東區淡路町一ノ二二、電北濱三二六九

恩田半之助 足利市通五丁目菱三四三三、電足利七三八

【カ】

加賀朝一 心齋橋美術館 大阪市南區心齋橋筋一ノ二九

加賀千代太郎 東京市日本橋區室町一ノ五、電日本橋四三三五

加藤小三郎 大阪市東區瓦町二ノ四〇

加藤善之助 愛知縣海部郡津島町大字津島字藤浪二ノ割イ三〇五

加藤松太郎 金澤市上今町一八

柿谷勘造 京都市中京區富小路通二條下ル、電上六五六

角谷憲一 二葉堂、東京市本郷區湯島同朋町六、電下谷三四七二

春日秀三郎 大阪市東區伏見町五ノ一九、電北濱五八八四

勝倉源三郎 東京市淺草區田原町一ノ八、電淺草一五三四

門垣爲作 靜觀堂、小倉市室町五〇、電小倉三四六

金子忠次郎 東京市淺草區

雷門二ノ一九、電淺草八九三

金澤治三郎 合名會社金澤治三郎商店、大阪市東區高麗橋一ノ一四、電北濱二七二

金森三郎 東京市芝區芝公園第五號地一三、電芝二五六七

上村環 東京市京橋區寶町一ノ八ノ一、電京橋六〇二八

【キ】

龜井貫二 東京市日本橋區觸野町二ノ二、電茅場町三七〇七

川合定治郎 川合尙雅堂、東京市京橋區銀座西六ノ四、電銀座五一六、京都市押小路通鉄屋町東人

川添寅藏 京都市中京區六角通御幸町西入、電本局六九

川部利吉 株式會社川部商會、東京市芝區芝公園第五號地一三、電芝三七〇一

木口金太郎 東京市下谷區竹町六五、電下谷三三〇八

木村幾五郎 東京市本郷區湯島天神町三ノ二、電下谷六六四一

木村錦太郎 名古屋市東區魚町九、電東一九八七

喜多村喜之助 合資會社九嘉商店代表社員、東京市京橋區銀座七ノ四、電銀座五八八、五八九

北岡東造 京都市中京區御幸町通御池南入、電本局五一六

北川堯英 大阪市東區今橋三ノ二一、電北濱五九一九

岸本正之助 京都市中京區柳馬場通御池南入、電本局二八〇五

九十歩京一 紫雲洞、東京市豊島區巢鴨町三ノ三〇、電大塚五五八〇

楠七兵衛 京都市東山區古門前通大和路東入

組田朝之助 東京市澁谷區豐澤町二五、電高輪八三二二

栗田直太郎 東京市日本橋區富澤町一、電浪速六六五

栗原芳太郎 東京市日本橋區通三ノ五ノ八、電日本橋一八四八

黒部正雄 東京市麻布區靈町二三、電赤坂四七七四

小出源三郎 大阪市東區伏見町五ノ一一

小鹽治之吉 大阪市東區今橋五ノ一二、電北濱一〇八八

小林彰夫 東洋堂、東京市麴町區九ノ内二ノ二、九ビル二階電九ノ内四六二七

小林一哉 東京市本郷區湯島天神町二ノ二七、電下谷五四〇七

小林喜代志 東京市芝區芝公園第九號地二、電芝八一九

小林信次郎 東京市芝區西久保櫻川町四、電芝二三〇

小林甚太郎 新潟市東區通十番町一七三九

小林鐵之助 京都市東山區大和路通四條南入大和町四

小松邦芳 東京市芝區新橋五ノ一二、電芝三三三九

小山常次郎 青龍堂、東京市下谷區池ノ端仲町一六、電下谷五四四九

古賀勝夫 大阪市東區伏見町三ノ五、電北濱二四五三

光明義一郎 合資會社光明商店代表社員、京都市東山區四條祇園町南側、電祇園一四四六

近藤鏡治 米近、名古屋市中區小林町五九、電中一八二

佐藤淺吉 大阪市天王寺區石ヶ辻町一一九

佐藤一郎 佐一、東京市本郷區湯島切通坂町一、電小石川五六七

佐藤梅吉 梅軒畫廊、京都市烏丸通り四條北入、電本局三五一〇

佐藤章太郎 京都市東山區繩手通辨財天町八

齋藤才次郎 紫翠堂、京都市鉄屋町御池上ル、電本局四八六五

齋藤豐三郎 東京市日本橋區腹町二ノ二

齋藤利助 合資會社平山堂代表社員、東京市四谷區尾張町一電四谷一〇〇、三〇〇〇

坂井準平 新潟市本町通七番丁一〇八五、電新潟三九九

坂田作治郎 株式會社坂田作治郎商店、大阪市東區高麗橋二ノ三〇、電北濱三七一、一七〇二

境定美 端泉堂、東京市澁谷區大和田町三〇

里見忠三郎 京都市堺町通三條上ル、電本局五四二二三

澤達三郎 百和堂、東京市日本橋區人形町一ノ一四、電茅場町六六三一

澤島太助 京都市中京區鉄屋町通三條上ル、電本局三五七〇

茂山宗吉 東京市牛込區津久土町一八

篠田實識 翠昇、東京市麴町區平河町二ノ二九ノ五、電九段四〇二〇

篠原卯平 大阪市南區八幡町一、電南三一四

柴田桂作 東京市麻布區靈町六、電赤坂三六五五

柴田又治 合名會社柴田又商店代表社員、京都市下京區萬壽寺通間ノ町角、電下三七五

上保福藏 東京市赤坂區新町一ノ二一、電青山七一八三

莊英達 那須屋、京都市神田區田代町九、電下谷一四七〇

神通傳二郎 東京市日本橋區通二ノ五ノ一〇、電日本橋四五六

七 神通豊次郎 富山市豊川町
五

【ス】

諏訪喜之松 東京市京橋區
京橋三ノ四、電京橋八一六

菅 松治郎 大阪市東區安
土町一ノ五、電本町一六七九

杉原仁三郎 東京市大森區
調布鶴ノ木町四三三、電田園調布二
六一八

鈴木政三 白鳳堂、東京
市澁谷區景丘町三三、電高輪六五六
九

砂 壽 治 合名會社砂文
商店代表社員、大阪市東區北濱五ノ
四五、電北濱一八五〇、一八五一

砂 元 吉 砂元、大阪市、
東區北濱五ノ三九、電北濱一四一八

【セ】

瀬津伊之助 雅陶堂、東京
市日本橋區通三ノ三、電日本橋三六
五〇

瀬 島 小一 東京市四谷區
南伊賀町一

關 長次郎 尙美堂、東京
市麹町區九段四ノ一五、電九段二六
〇二

關 喜三郎 東京市京橋區
京橋一ノ九ノ五、電京橋一九一七

關 口 定次 靜運堂、東京
市京橋區京橋二ノ二

善田喜一郎 昌運堂、京都
市中京區師小路通鳥丸東入、電本局
二八一七

【ソ】

宗 田 伴 藏 東京市芝區西
久保櫻川町二、電芝二〇三九

【タ】

田 口 ハ マ 東京市芝區新
橋六ノ六、電芝二七七二

田 谷 廣 吉 東京市淺草區
橋場町二ノ四、電淺草二二六七

田 中 源之助 合名會社田中
源商店代表社員、大阪市東區高麗橋
三ノ一六、電北濱一九五一

田 中 正次郎 東京市麹町區
麹町六ノ一ノ一、電九段三〇六五

田 中 平三郎 田中合名會社
代表社員、大阪市東區唐物町五ノ一

田 中 良 助 株式會社東京
會、東京市下谷區谷中清水町二〇、
電下谷一四四四

田 中 與 平 東京市牛込區
市ヶ谷田町二ノ三八

田 原 信次郎 合資會社田原
壽善堂代表社員、東京市本郷區湯島
天神町一ノ七一、電下谷三六一五

田 村 勝 清 東京市四谷區
荒木町二三

泰 文 社 東京市日本橋
區室町四ノ一、電日本橋一〇三七

高 橋 一 雄 文鳳堂、門司
市錦町三ノ一三二ノ一、電門司九
八六

高 橋 熊太郎 東京市芝區西
久保巴町二〇、電芝一一

高 橋 吉兵衛 合名會社高橋
梨花堂代表社員、京都市中京區三條
通麩屋町西入、電本局一四六五

高 橋 初五郎 東京市品川區
大井倉田町三二四九

高 山 開治郎 株式會社東京
美術館、東京市京橋區銀座一ノ三、
電京橋五四四五

竹 内 七郎 百華堂、名古
屋市東區蒲燒町四ノ八、電東七二二
〇

竹 内 善 次 近善、東京市
芝區西久保巴町四一、電芝一九六二

竹 内 秀太郎 竹秀、東京市
京橋區寶町一ノ六ノ二、電京橋三三
七四

竹 内 廣太郎 東京市目黒區
下目黒三ノ七七七、電高輪六六六三

武 田 德太郎 大阪市東區北
濱五ノ三三

武 田 茂 吉 大阪市東區南
本町五ノ一六、電船場四三九五

谷 村 庄 平 谷庄、金澤市
十間町四四、電金澤四七八

玉 井 久次郎 東京市芝區西
久保巴町一九、電芝一七三四

【ツ】

津 川 義 隆 大阪市南區西
清水町三三、電南二八一九

土 橋 嘉兵衛 合名會社土橋
永昌堂代表社員、京都市下京區四條
通堺町東入、電本局一二三、一二四

辻 梅 吉 詩夢堂、大阪
市東區平野町四丁目

鶴 來 義 松 京都市東山區
新門前通梅本町二九四

戸 田 榮 次 觀美堂、東京
市下谷區谷中町六、電下谷八三〇一

戸 田 政之助 大阪市東區伏
見町四ノ三八、電本局三二一

戸 田 彌 七 谷松屋、大阪
市東區伏見町三ノ一六、電北濱一七
二三、(營業所)大阪市東區伏見町四
ノ三九、(出張所)東京市芝區芝公園
五號地一三

土 井 久 吉 撰美堂、京都
市麩屋師鳥丸東入、電本局一四六七

東 條 清 治 東京市下谷區
上野元黒門町一五

豐 田 益之助 東京市日本橋
區通二ノ五、電日本橋二九〇一

柳 川 市 郎 東京市下谷區
御徒町二ノ三九

柳 川 善左衛門 大阪市南區豐
谷中之町二九、電南三二二一

中 川 清 壽 壽泉堂、東京
市本郷區湯島天神町一ノ八三、電下

谷 一八五
中 川 亨次郎 合名會社中川
亨次郎商店代表社員、京都市上京區
平野島居前町電本局三〇〇四

中 島 勝 也 廣榮堂、東京
市赤坂區青山南町二ノ三四、電青山
七一〇

中 島 鐵 雄 大阪市東區伏
見町四ノ六、電北濱四〇八四

中 島 庸 介 中藤、東京市
下谷區池ノ端茅町二ノ五、電下谷六
四〇一

中 西 房之助 大阪市東區高
麗橋五ノ三三、電北濱二〇六三

中 野 善 九郎 大阪市東區高
麗橋三ノ一五

中 野 利 助 京都市中京區
寺町通御池下ル、電上二六七六

中 村 嘉 十 東京市赤坂區
青山北町一ノ八

中 村 富次郎 中村好古堂、
東京市京橋區京橋一ノ一、電京橋五
二七、(自宅)澁谷區南平臺六、電澁
谷六三三

永 堀 政 利 東京市澁谷區
神泉町四、(自宅)神奇川懸鎌倉郡戶
塚町三八二二、電戶塚二二二二

永 山 賢 四郎 東京市芝區西
久保櫻川町六

長 尾 芳次郎 東京市京橋區
寶町一ノ四ノ四、電京橋一三七八

夏 目 吉 藏 東京市日本橋
區兩國二ノ二、電浪花四四二〇

濤川 蒸阿々土社、東京市板橋區中新井町三ノ一九三四、電線點一六八

成瀬信治郎 合資會社東方美術館代表社員、東京市本郷區湯島三組町八〇、電下谷六五六

丹羽忠一 東京市芝區西久保巴町一四

二本木 關太郎 東京市下谷區御徒町三ノ六九、電下谷二一六八

西浦 克昌 東京市澁谷區原宿町一ノ一六〇

西川 大六 東京市本郷區湯島三組町八一、電下谷七五一

西原幾之助 合名會社西原幾太郎商店代表社員、大阪市東區伏見町二ノ一五、電北濱三一九五

西村 彦太郎 合資會社西村彦太郎商店、大阪市東區道修町四ノ三一、電北濱四一二、二九七九

西村 吉次郎 大阪市東區伏見町二ノ一二、電北濱三三五九

野崎 久兵衛 宇治久合名會社代表社員、名古屋市中區東本町四ノ一、電東四七二七

野村 洋三 サムライ商會 橫濱市中區本町一ノ五、電本局九一五、四九二二

羽津 巳之吉 川定、大阪市

南區八幡町八、電南四三八六

橋崎 治三郎 大阪市東區高麗橋五ノ三一、電本局二八二四

橋本 元佑 壹屋、東京市日本橋區兩國二四ノ二、電浪花四五七

橋本 秀二郎 多聞堂、東京市麻布區我善坊町一、電赤坂一五九七

長谷友二郎 東京市芝區西久保巴町四一、電芝五一五

長谷川 貞八 東京市京橋區西八丁堀一ノ一三、電京橋九六六一

長谷川 竹次郎 長宜堂、名古屋市中區住吉町一ノ二七、電中一九五九

八田 富雄 東京市日本橋區通三ノ一、電日本橋四四七七

服部 多一郎 京都市下京區萬壽寺通島九東入、電下七五二

服部 政太郎 合名會社服部來々堂代表社員、京都市佛具屋通魚柳上錫屋町四番戶

林 新兵衛 分林(合名會社) 社林新兵衛商店代表社員、京都市東山區祇園町北側三一七、電祇園二〇〇八、二〇〇九

林 新助 合名會社林新助商店代表社員、京都市東山區新門前通梅本町二六五、電祇園一三、一四

林 朋之 萬林、京都市

中京區押小路通款屋町東入、電下四四

林 田等 東京市赤坂區青山北町一ノ一

原 田文 東京市本郷區切通坂町四五、電下谷二三五四

春海 謙二 合資會社春海商店代表社員、大阪市東區伏見町三ノ三、電本局一七一八、一九〇二

日野 雄太郎 東京市麴町區麴町五ノ四ノ六、電九段二五五四

平岡 英二 大阪市北區老松町一ノ二三、電北五一四九

平澤 駒四郎 金澤市下近江町五

平野 太郎 合名會社本山翫堂代表社員、東京市芝區芝公園第五號地一三、電芝二〇

廣田 照 寧中居、東京市日本橋區通三ノ五、電日本橋四五九三

廣田 松繁 東京市芝區芝公園第五號地一三、電芝三三四三

廣瀬 茂男 久茂、名古屋市中區東本町四ノ一一

福井 藤七 奈良市西御門町一二、電奈良一八五五

福田 淺次郎 元永堂、京都市中京區寺町通押小路上ル、電上二七一

福中 又次 丸ノ内美術俱

樂部、東京市麴町區九ノ内、九ビル内、電丸ノ内三六二八

伏原 羊次郎 春芳堂、東京市日本橋區室町一ノ一〇、電日本橋一四四四

藤岡 清雄 東京市芝區西久保櫻川町三

藤城 銀太郎 東京市本郷區湯島天神町二ノ三七、電下谷八三九八

藤原 伊兵衛 兵庫縣西宮市森具奧畑三二二、電西宮二五四六

二木 外二郎 二嘉、金澤市橋場町二七、電金澤七二九

古川 伊三郎 好美堂、東京市日本橋區人形町三ノ一二、電茅場町五七四〇

古木 常八 東京市小石川區大塚窪町一九

堀口 磯吉 九孝商店、東京市日本橋區室町三ノ四ノ二、電日本橋三九六一

堀越 震六 三昧堂、東京市京橋區銀座八ノ二、電銀座一八〇八、(自宅)麴町區六番町四ノ一、電九段二四四一

堀田 竹藏 大阪市東區今橋三ノ一五、電北濱三四〇二

堀本 佐助 京都市中京區柳馬場通御池上ル、電本局五五四三

眞鍋 株四郎 大阪市東區高

麗橋四ノ一三、電北濱五〇八二

前田 義一 大阪市東區高麗橋五ノ九、電北濱五八二〇

前田 捨次郎 大阪市南區玉屋町一二、電南三八七六

牧寺 三樹 東京市牛込區橋寺町四九、電牛込四七〇五

榎 忠雄 東京市下谷區上野町一ノ七、電下谷七六三八

松岡 丈吉 京都市中京區新町通二條南入、電上三一四八

松岡 六兵衛 合名會社松岡六兵衛商店代表社員、京都市中京區富小路通三條南入、電本局三四五八

松木 善右衛門 京都市東山區新門前中ノ町二三八、電祇園七五

松島 勝之助 松島畫舫、東京市日本橋區江戸橋二ノ三、電日本橋四八九八

松谷 豐次郎 東京市牛込區矢來町一〇二、電牛込二六八四

松平 吉太郎 松吉、金澤市上今町四七、電金澤三三八七

瀨山 順吉 合資會社瀨山龍泉堂代表社員、京橋區京橋二ノ一ノ四、電京橋三〇五八

圓井 德太郎 大阪市東區北濱三ノ二八、電北濱二二九一

三谷 勘四郎 三深洞、東京市日本橋區室町四ノ一、電日本橋一〇〇三

三野 道 夫 昭和堂、大阪
市天王寺區茶臼山町八〇、電天王寺
一〇五一

三村 利三郎 東京市本郷區
湯島切通坂町九、電小石川七一四六

三宅 利右衛門 海老屋、東京
市日本橋區室町三丁目四、電日本橋
一五四一

三輪 藤十郎 合資會社三輪
華陽堂代表社員、名古屋市東區蒲燒
町二丁目

水崎 信太郎 東京市下谷區
南稻荷町四六、電下谷一六二四、營
業所麴町區九ノ内二ノ二九ビル内、
電九ノ内一八一〇

水原 金兵衛 合名會社水原
商店、大阪市東區淡路町二ノ一四、
電北濱一四四〇

蕨 進 東京市麻布區
飯倉町二ノ一六

宮崎 政 近 井南居、東京
市麴町區六番町六ノ一、電九段二七
四七

宮地 甚吉郎 金澤市古寺町
一八、電金澤七五〇

宮部 鈴三郎 名古屋市東區
針屋町九二番戶、電東二五二三

村上 民二郎 大阪市東區高
麗橋五ノ三〇、電北濱一二二九

村上 甚三郎 大阪市東區平
野町四ノ四七、電北濱一〇七

村瀬 勇次郎 東京市芝區愛

宕町二ノ四、電芝三三九〇
村田 憲 司 香樹園、東京
市豐島區巢鴨町三ノ三〇、電大塚二
五七三

村松 幸右衛門 寫山堂、東京
市本郷區春木町三ノ一三、電小石川
一六九四、(自宅)東京市瀧野川區中
里町一〇六、電駒込二五三八

守口 一義 大阪市北區老
松町一ノ三

守口 三郎 有香堂、東京
市京橋區寶町一ノ四、電京橋七一五

森川 保 大阪市東區伏
見町五ノ一一

森本市 太郎 東京市麴町區
平河町二ノ一三、電九段一七〇一

矢尾 豐 東京市麻布區
三河臺町三

安井 彌三郎 合名會社安井
聚好山房、大阪市東區平野町四ノ四
八、電北濱二三〇五

山下 貞藏 大阪市東區北
久太郎町四ノ五八、電船場二〇八九

山下 伊兵衛 大阪市東區北
久太郎町四ノ四四、電船場二八六八

山崎 淨 忍 東京市下谷區
池ノ端仲町一九

山田 健太郎 玉鳳堂、東京
市日本橋區通三ノ一ノ六、電日本橋
三〇〇七

山田 保次郎 玉保、東京市
四谷區西信濃町一〇、電四谷八五四
山中 吉太郎 株式會社山中
商會代表取締役、大阪市東區高麗橋
一ノ一二、電北濱一九七〇、一九七
一

山中 吉郎兵衛 大阪市東區北
濱二ノ五二、電北濱二〇〇一

山中 松治郎 山中合名會社
業務執行社員、株式會社山中商會相
談役、京都市東山區粟田口三條坊町
一四、電祇園九三一、九三二

山内 孝 造 春靜堂、東京
市日本橋區吳服橋二ノ一ノ五、電日
本橋一九二九

山室 文 亮 東京市牛込區
橫寺町六八、電牛込二二五五

山本 西二 洪翠堂、東京
市芝區芝公園第七號地九、電芝三七
一〇

山本 豐次郎 東京市芝區西
久保巴町二〇

湯山 昇 白日莊、東京
市澁谷區代々木上原町一二九五、電
澁谷三四六

余田 喜一 東京市大森區
北千束町六九三

餘吾 藤兵衛 合名會社久藤
商店代表社員、名古屋市西區袋町二
八二番戶、電本一四五二

橫井 庄太郎 名古屋市南區
熱田市場町二八、電南一〇六九
橫井 新平 分米万、名古
屋市東區田代町坂上八二ノ八、電東
四八五

橫井 清三郎 合名會社米万
商店代表社員、名古屋市東區朝日町
二ノ一四、電東二〇四四

橫井 仲治郎 東京市牛込區
矢來町三一、電牛込四七三四
橫山 小八郎 京都市繩手通
新橋北入

橫山 保太郎 岐阜市中竹屋
町三三、電岐阜五九七

橫山 龍治 合名會社橫山
商會代表社員、名古屋市西區伏見町
二ノ八、電本局一五一〇

吉岡 班 嶺 帝國繪畫協會
帝國美術鑑定局、東京市下谷區谷中
清水町一、電下谷四一五〇

吉澤 丹治 東京市神田區
小川町三ノ一、電神田三六一四

吉田 吉之助 水戶幸、東京
市京橋區京橋一ノ五ノ九、電京橋三
三一六

吉田 武雄 分平、東京市
四谷區是張町三

吉田 忠一 東京市赤坂區
青山高樹町一二、電青山三〇九二

吉田 富子 赤坂水戶幸、
東京市赤坂區仲ノ町三、電赤坂二七
一〇

吉村 銳治 香風園、東京

市目黒區上目黒三ノ一七六八、電青
山七七四、玉川一六六
吉村 正雄 東京市目黒區
上目黒五ノ二三四〇、電澁谷三七九
六

米田 長之助 合名會社米田
長之助商店代表社員、大阪市南區玉
屋町四五、電南一四七六

米田 留治 松留、東京市
芝區西久保巴町四二、電芝二八六九
米田 久雄 大阪市東區清
水谷東ノ町四一七

若山 猪作 東京市麻布區
飯倉四ノ七、電赤坂二二三三
渡邊 政四郎 澁橋區諏訪町
二三一、電牛込六五八二

石原 龍一 求龍堂、東京
市澁谷區千駄ヶ谷五ノ九〇九、電四
谷六四八三

大塚 銀次郎 神戸畫廊、神
戶市元町驛下鯉川筋、電三宮三三五
一

佐藤 次郎 日佛畫堂、東
京市麴町區麴町一ノ一、電九段四〇
八七

鈴木 里一郎 青樹社、東京
市京橋區銀座四丁目、電京橋三六七
八、自宅澁谷區代々木大山園一〇七
九、電四谷七〇八四

薄田 晴彦 三角堂、大阪

市東區北濱五丁目、電北濱三二三三四
同京都府、京都市河原町三條南、電
本局三七四一

西川 武 郎 兜屋、東京市
澁谷區穩田三ノ一八九、電青山四五
〇二

西田 武 雄 室内社、東京
市麴町區麴町一ノ三、電九段五一四

長谷川 仁 日動畫廊、東
京市京橋區銀座西五ノ一日動ビル一
階、電銀座四四一八、上海畫廊（日
動畫廊上海支店）、上海南京路二一二
號、電上海一四二〇二、自宅麻布區
谷町五五、電赤坂二三九八

堀越 震 六 三味堂、東京
市京橋區銀座八ノ二、電銀座一八〇
八、自宅麴町區六番町四ノ一、電九
段二四四一

松村 健 兵庫縣西宮市
産所町二三

美津島 一 美交社、大阪
市淀屋橋御堂筋、電北濱二五四、

美術家及美術關係者名簿

凡例

一、本名簿にのせた美術家及美術関係者の数は二四九三名である。わが國において美術家として社會的地位を有する人々を一定の標準に従つて採録した。未だ人選洩れもあるべく不備の點は次年度に補ひたい。

一、建築家は美術的見地から見た建築の設計家のみに限つて採録した。

一、本名簿は電話番号簿の如く、氏名の頭文字の發音によつて五十音順に記載した。

發音の同じ場合は字畫の少いものを先にした。頭文字の同じものは二字目の發音により、その發音の同じ場合は字畫の少いものを先にした。但し使用上の便を考へて同字は訓音の異なるものもなるべく一箇所に集めた。安宅、安達、安西、安藤等を同一箇所に掲げた如くである。

一、本名簿に用ひた略語は大體左の通りである。

- (日)日本畫 (洋)西洋畫 (挿)挿畫 (版)版畫 (漫)漫畫 (彫)彫塑 (工)工藝
 (漆)漆工藝 (陶)陶磁 (金)金工藝 (染)染色 (織)織物 (繡)刺繡 (木)木工
 藝 (竹)竹工藝 (硝)硝子工藝 (圖)圖案 (建)建築 (學)學者 (文)文藝家
 (批)美術批評家 (教)美術教育家 (記)美術記者 (帝院)帝國美術院 (帝院賞)
 帝國美術院賞(舊帝展)舊帝國美術院美術展覽會及帝國美術院展覽會(舊文展)舊
 文部省美術展覽會(文展)昭和十一年文部省美術展覽會・第一回以降文部省美術
 展覽會(藝術院會員)帝國藝術院會員(學士院會員)帝國學士院會員(國寶委

員)國寶保存會委員(重要美術委員)重要美術品等調査委員會委員(史蹟名勝委
 員)史蹟名勝天然紀念物調査委員會委員(朝鮮寶物委員)朝鮮總督府寶物古蹟名
 勝天然紀念物保存會委員(輸出振興委員)輸出生産振興委員會委員(美術振興
 委員)美術振興調査會委員(東美校)東京美術學校(日美校)日本美術學校(女
 美校)女子美術學校・女子美術專門學校(東京高工藝校)東京高等工藝學校(東
 京高工校)東京高等工業學校(美術院)日本美術院或は同研究所(美術協會)日
 本美術協會(太平洋)太平洋畫會研究所或は太平洋美術學校(川端校)川端畫學
 校(水彩畫會)日本水彩畫會或は同研究所(本郷研)本郷繪畫研究所(南畫院)
 日本南畫院(葵橋研)葵橋研究所(京都美工校)京都市立美術工藝學校(京都
 繪專校)京都市立繪畫專門學校(京都高工藝校)京都高等工藝學校(大阪美校)
 大阪美術學校(信濃橋研)信濃橋洋畫研究所(自由畫壇)日本自由畫壇
 一、住所中東京市のみは市名を略して區名を以て始めた。

一、舊帝展出品者で特選を得た人々についてはその旨を記したが、その人が無鑑査の
 場合には特選のことは略した。又審査員であつた人々は新文展に互りすべて無鑑査
 なる故無鑑査のことは記さなかつた。

一、文展不参加の團體の作家については文展無鑑査のことは記さなかつた。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (69~125 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.69-125)

Cut for protection of the personal information

日本美術年鑑 昭和十五年版

昭和十六年三月二十五日印刷
昭和十六年三月三十日發行

定價六圓

著作權所有



著作
者兼
發行者

東京市下谷區上野公園
美術研究所

印刷者

東京市下谷區二長町一番地
井上源之丞

印刷所

東京市下谷區二長町一番地
凸版印刷株式會社

發賣所

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
岩波書

店

振替口座東京二六二四〇番